
魂/骸

ヒッツカラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂/骸

【Nコード】

N8349H

【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】

妖怪の魂を封印して操る少女、憑き姫。妖怪の骸から武具を造り出す黒衣の男、三外軒太郎。そしてふたりに魂と骸をせがまれる呪われた少年、五代昂輝。少年が不の苦悩を受け入れたとき、肉体を魔道サイボーグに改造していく。目指すは愛と正義のために。力と技、妖異と正義が飛び交う百鬼夜行ヒーローストーリースタート。

憑き姫と軒太郎（前書き）

注意事項

先ずは二つのお約束をしてからお読みください。

- 1・誤字が多々ありますので、
あまりお気にならない方へのみ、おすすめます。
- 2・楽しくお読みください。

以上をお約束してもらえた方だけお読みください^^

憑き姫と軒太郎

とても強い風が吹く晩だった。

台風のように突風が吹き荒れ、草木だけであらずあらゆる物を激しく揺らす。

町のあちらこちらで店の看板が軋みながら音を鳴らしていた。古い建物は、柱ごと揺れている。まさに眠れぬ晩が始まるうとしていた。

本来ならば、帰宅途中のサラリーマンたちで賑わっている筈の繁華街も、今晚ばかりは人氣が少ない。

多くの飲み屋が、いつもよりも早い時間帯に、店の暖簾を片付け閉店していく。

そして閉めた店先のシャッターが、嵐に煽られ新たな騒音をけたたましく奏でていた。

更に時間は進み、草木も眠る丑三つ時。

しかし風が吹き荒れ草木を揺らし、眠りを妨げ続ける。嵐は、今夜一晩は続きそうだった。

そこは何処だろうか。

昔ながらの小さな居酒屋、古い構えのスナックが並ぶ路地裏の飲み屋通り。

吹き荒れる強風が、店先に置かれた植木を揺らしていた。

そのような激しい風が吹き流れる路地を、三つの人影が楽しそうに踊りながら歩いていた。

踊る三つの影は、騒がしく歌い、両手を上げながら賑やかに踊っている。楽しそうな歌声が、荒れる風に混ざって賑わいを増す。三つの影たちが、幾ら騒いでも咎める者はひとりもない。

三つの影が叫ぶ言葉は、獣の鳴き声。

三つの影が躍る姿は、獣の姿。

その姿は、人であらず。

「アニキ、風が気持ちいいね」

「そうだな」

声と共に風が鋭く吹き荒れる。三つの影が踊る側にあつた植木が切り裂かれ、バサリと枝を落とす。そして突風に巻かれて飛んで行く。

「おにいちゃん、踊りつて楽しいね」

「おうよ、楽しいぞー、もっと踊れ、弟たちよ！」

声と共に再び激しく吹き荒れる風。今度は近くにあつた居酒屋の看板が、バツサリと切り落とされた。植木も看板も、まるで鋭利な刃物で切られたような綺麗な切り口を見せている。

吹き荒れる風が、まるで真空の刃物と化していた。

「踊れ！ 騒げ！ 歌ってしまえ！ 今日俺たち鎌鼬三兄弟のナイトステージだっぜー！」

そう、三つの影は、二足歩行で踊り暴れるイタチの姿。鋭い牙と瞳を光らせ、ベストと短パンを身に付けている。身長も百七十センチはあるだろうか、有り得ないサイズだった。

三匹の鼬たちは、吹き荒れる風を操り、目に付くものを真空の刃で切り裂きながら、その感触を楽しみ、はしゃぎ、踊っていた。

「随分と楽しそうだな、鎌鼬」

突如、獣三兄弟の眼前に現れたのは、人の姿がふたつ。

背の高い男と、背の低い少女だった。

三匹の獣を鎌鼬と呼んだ。

男は真っ黒なロングコートに、同じく真っ黒なデンガロンハットを被っている。

少女は赤い袴で、巫女のような姿であった。

二人とも髪が長い。

黒い男の髪は、灰色の針金を思わせる硬そうな直毛である。

巫女姿の少女は、艶のある美しい長髪だった。

二色の髪が強風に靡く。

「んん？ 何だ貴様ら!？」

踊りを止めた三匹の獣が、突如眼前に現れた二人に睨みを効かせ威嚇を現す。

野生の本能が、黒づくめの男を見て敵と悟る。

鼻に危険な香りが届いていた。

刹那、吹き荒れていた嵐がピタリと止んだ。

静けさが辺りに広がる。まるで時間が静止したかのようだ。

三匹と二人が向かい合う。軋轢が生じる。

「あら、辺りに結界を施したのね」

少女が、周りの景色を見回しながら呟いた。風で乱れた黒髪を、細く綺麗な指で撫でながら整え直す。

「ああ、案外と見事な出来だ」

男が少女に相槌を入れた。デンガロンハットと灰色の長い髪の隙間から見える顔が、怪しく微笑む。

「テメーら、人間じゃあねえな!？」

鎌鼬の長男が、牙を剥きながら言うと、兄の後ろで弟たちが援護をするように威嚇の表情を強く引き締める。

「私の名前は憑き姫。こつちが軒太郎。私の下僕ですわ」

「誰が下僕だ……」

紹介を語る憑き姫に対して隣の男は、凍てつくような眼差しで上から見下ろし冷静に否定を述べる。

しかし憑き姫は、睨む男に視線を向けずに鎌鼬たちから目を離さない。

「憑き姫……、軒太郎……?」

鎌鼬の長男は、僅かに聞き覚えが残るふたりの名前に首を傾げた。そこに背後から次男の声が飛ぶ。

「俺、こいつらを知ってるぜ！」

「なんだ？」

「軒太郎と憑き姫って、ここ最近、日本各地で妖怪狩りをしているって噂の二人組みだ！」

「妖怪狩りだと!？」

「よくご存知で」

次男の台詞に黒い男が怪しく笑って答えた。とても善人に見えない笑みだった。

全身から魔の気が垂れ流しになっていた。

「知っているなら話しが早いわ」

鋭い眼差しで言う少女の手の中に、一冊の分厚い書物が現れる。巫女の姿に合わない魔道の書。

その分厚い書物を左手に乗せた少女は、ページを右手の指でパラパラと巧みに捲る。

歳の頃は、十五六だろうか。しかし妖艶で美しい顔立ちをしていた。

「殺り合う積もりか！」

憑き姫が手にある魔道書を開くと、鎌鼬三兄弟も警戒の構えを攻防の構えに替える。

人と変わらない大きさの鼬たちが、獰猛な獣面に変わると同時に、両手が鋭い鋼色の刃物に変化する。まさに鎌鼬。

「いい感じの鎌だな。鋭さがとても良い。是非ともそれが欲しい」

怪しい笑みを見せたまま軒太郎が、黒いコートの中に手を入れる。コートの下も黒いスーツだった。首には白いマフラーを巻いている。履いているものも黒いカウボーイブーツである。

まるで西部劇の悪徳保安官のようだった。

見た目も醸し出す空気も怪しさがありありと感じられる。

この軒太郎と呼ばれる男は、明らかに善人には見えない。むしろ悪党の部類に見て取れた。

「ふふっ」

そして軒太郎は、鼻で笑い、黒コートの中から一丁のショットガンを取り出す。

M1100デイフェンダー！

長いサイズのショットガンを携帯しやすく可能な限り短めにカスタムマイズされた一丁。全長520mmのコンパクトボディだ。黒い銃が街灯に光り、威圧さをその身に映し出す。

「ショットシエルは、四発しか入らないが、獲物は三匹。狩るには十分な弾丸数だ」

軒太郎が黒いコートから抜いたショットガンを、腰元で低く構える。深い闇を映す銃口が、三匹の妖怪へと向けられた。

「こいつバカだ！ 妖怪に人間の兵器が効くわけないじゃん！」

薄く笑いながら言う鎌鼬の三男が、ひとり空へと素早く跳ねる。

高く飛んだ鎌鼬の三男は、建物の壁や電信柱を蹴りながら激しく空

中を飛び交い翻弄を狙うと、加速を増して天から両手の鎌を振り振りながら軒太郎へと襲い掛かった。

両手の鎌が鋭く光り、閃光の筋を闇夜に残す。

真空の斬激を思わせるふたつの鎌が、ショットガンを手にする男の首を狙い飛んで行く。動きはとても速かった。

「ふっ」

黒いバンガロンハットのつばが、男の表情を隠していた。しかし口元は、余裕を演出するかの如く薄笑いを続けている。

宙から迫る鎌鼬の三男に軒太郎は、銃口の角度だけを上へと向けて引き金を優しく引いた。

そして乾いた銃声が闇に轟き、火花が瞬く。

「うぎゃああ！」

「弟よ！」

散弾を全身に浴びた鎌鼬の三男が、空中で跳ね返るように飛び、兄たちの眼前に力無く落ちてきた。

二匹の表情が驚きに引きつる。

弾丸を喰らわせた軒太郎が素早くピストングリップを強く引くと、ガチャリと音を立てながら空になったシエルが飛び出て足元に転がる。

空のシエルからは火薬の煙が僅かに上がっていた。

「バカな……！」

足元に転がった三男を見て、鎌鼬の長男が言葉を漏らした。信じられないといった表情をしていた。

三男の顔や胸には小さな穴が複数開き、じわじわと血液が滲み出てくる。

血みどろと化した三男は、ピクリとも動かなくなっていた。

妖怪とは不思議なものである。

拳銃はもちろんのこと、刀や色々な武器を普通の人間が使用して妖怪を攻撃しても死にはしない。

霊力や妖力、または神力がないと、例えば傷ついたとしても直ぐに傷が治り死ぬことが無いのだ。ミンチからでも蘇る。

だが、黒ずくめの男が撃った散弾銃の一発は、妖怪鎌鼬を即死に追い込んだ。

しかも拳銃は、妖力や霊力が宿り難い。普通は、妖怪が銃で撃たれて死ぬことはない。

鎌鼬たちは、それを知っていて驚きを表にしているのだ。

「このショットガンの弾丸は、鉛玉を使用せずに、妖怪の髪の毛を針状に纏め鍛え上げたものをシエル内へ仕込んであったな。

それで妖怪相手でも絶命を誘えるんだぜ。

髪の毛針ショットガンって感じかな」

弾丸までもがカスタムマイズされたショットガン。

その能力を自慢げに語る軒太郎の表情は、優越感に浸りきっていた。

「よ、よくも弟を！」

二匹残った鎌鼬の兄弟が、更に凶暴な表情へと変わる。弟が殺められたのだ、当然と言えよう。

身内を殺された怒りが目に見て分かった。四つの鎌が憤怒に光る。

「行くぞ、弟の敵だ！」

「おうよ、アニキ！」

鎌鼬二匹が一斉に前へと走った。スピーディーにフェイントを狙ったジグザクの動き。混乱を招こうとしていた。

軒太郎が瞳だけを左右に振って二匹を追う。

「ちよこざいな」

余裕の表情でショットガンを撃ちまくる軒太郎。

火薬の発砲音が鳴り響く。

だが、ジグザクに走る鎌鼬たちには、散弾して飛んで行く毛針の玉は、一発も当たらない。

軒太郎は、あつという間に残り三発の弾を撃ちつくす。空シエルをアスファルトに散らばした。

「ちっ」

軒太郎の舌打ち。表情から余裕の色が薄らぎ苛立ちを晒していた。

「憑き姫、頼む！」

「分かってるわ」

軒太郎の言葉に少女が答えた。

開いた魔道書の中から一枚のカードを取り出す。サイズはトランプのものと変わらない。

書物だと思えた分厚いものは、どうやらトレーディングカード用のクリアファイルだった。

憑き姫は、取り出したカードを眼前に投げる。放たれたカードは、空中に浮きながら真っ直ぐ立つ。

「乳母が火　ザ・ファイアーブレス！」

クールな抑揚で唱える憑き姫の呪文。直後、浮いていたカードが光って消える。

そして消えたカードの代わりに、メラメラと音を立てて燃え上がる火の玉がひとつ現れた。

大きさは、人の頭部と同じぐらい。不気味な表情をした老婆の顔がある火の玉だった。

地を駆ける二匹の鎌鼬が、軒太郎と憑き姫に迫る直前に、カードの中から現れた老婆の之魂が、口から激しい炎を吹き出した。

炎は大きく路地を包み、迫る鎌鼬二人を丸ごと飲み込んだ。

軒太郎がコートを盾に、炎から顔を隠す。憑き姫は、その軒太郎の陰に回り込み身を守っていた。

軒太郎がずるいと感じる。

「うわわわ！」

「あちちち！」

鎌鼬二匹は、熱さに叫びながらも後方へと飛んで逃げた。

全身あちらこちらの体毛が焦げ上がり表情を火傷に苦めるが、すぐ

さま引火した炎を払い落とし、危ういところを脱する。
巨大な火炎だったが致命傷を与える程の火力がなかった様子だ。
炎の息を吐いた妖怪乳母が火は、炎を吐き終わると霧の様に消えていく。

「おのれ！」

火炎から逃れた鎌鼬の兄弟が、態勢を整え直そうとし、一言愚痴を溢した刹那だった。黒コートの中から二本の刀を引き剥いた軒太郎が突っ込んで来た。

「この二太刀は、アイヌの妖刀いべたむ。生き血を好む双子の妖刀よ！」

二刀流で鎌鼬の長男に襲い掛かる軒太郎。ロングコートを靡かせ嬉しそうに笑っている。怪しさが全身から滲み出ていた。

しかし剣技は本物。オシャレで二刀を振り回している様子ではない。その証拠に、ふたつの鎌で対抗している長男が、冷や汗を流しながら対戦していた。

「弟よ、お前は女を殺せ！」

「分かったぜ、アニキ！」

軒太郎の二刀と長男の鎌ふたつが鏝競り合いを繰り広げる中、次男が兄の支持に従い憑き姫に狙いを定める。ギロリと睨んで走り出した。

「こっちに来るのね……」

憑き姫は、獰猛に迫る鎌鼬を見ても冷静に対処を見せた。焦りのひとつも態度に出さない。

そして左手に乗せたカードファイルから再び一枚のカードを取り出すと、呪文と共に前へと投げる。

「いべたむ ザ・ダブルブレイド！」

宙に浮いたカードが光って消える。代わりに二本の妖刀が姿を現す。軒太郎が持っている二太刀と瓜二つの二本だった。

「ぬぬっ！」

突如現れた妖刀二本に、鎌鼬の速度が警戒のためか緩んだ。

そして、憑き姫の眼前に浮く二本の妖刀が、ひとりでに斬激を振るう。狙いは迫る鎌鼬の次男。

まるで見えない剣技の達人が振るったような素晴らしい太刀筋。クロスさせた光の斬弾がX字に飛び放たれ、次男鼬の体を見事に切り裂いた。

「ふぎゃあああー!!」

四つに切り裂かれた体が血飛沫を散らして無残にも転がった。

「弟よ！ おのれー！！！」

台詞とは裏腹に、戦力差から来る恐怖心に顔を青ざめる鎌鼬の長男。二人の弟を喪い、独りが心細そうだった。

そして軒太郎と交えていた刀を強く払うと、背を向け全力で逃走を始めた。

弟たちの敵討ちよりも我が身が大事なのだろう。逃げる背中に必死

さが伝わってくる。

「憑き姫！ 逃がすなよ！」

軒太郎の声に、更なるカードを取り出す憑き姫。クールな声で、カード名が唱えられる。

「ぬりかべ ザ・ウォール！」

「ぬりかべ〜」

己の名を登場の挨拶へと代え、大地を揺らして姿を現す妖怪の壁。

「な、なんだ！」

逃走を計ろうとした鎌鼬の前に、突如巨大な壁が競り上がり、道を塞ぐ。

鎌鼬が勢い余って壁に激突して止まった。両手の鎌が壁に突き刺さる。そして抜けなくなった。

「抜けない、なんでだ！」

両手が突き刺さった灰色の壁に、蹴りを入れながら踏ん張る鎌鼬。早く逃げなくてはと思う心が焦りを呼んで、必死を誘う。しかし両手が抜けない。

背後から体を揺らして迫る軒太郎の気配が伝わってくる。その気配は、明らかに殺気。

そう、殺人鬼と同じ種の殺意が溢れる殺気だった。

「すまん。このイベタムって妖刀は、生き血を吸わないと鞘の中に納まつちゃくれないんだよ。故に妖刀ってな」

「ひいいい、おたすけよー！」

両手を壁に囚われながら後ろを振り向く鎌鼬は、完全に戦意を喪失していた。

顔は怯え、体を震わせ、口からは命乞いをせがむ情け無い台詞しか出てこない。

恐怖のためか、履いた短パンの前は、哀れにも染みを作り広げている。

「お前の生き血で、こいつらの殺戮欲を静めさせて貰うぜ。ただ俺が、お前を殺したい訳じゃあないんだ。すまん」

嘘である。それが震える鎌鼬にも瞬時に分かった。

漆黒に全身を統一するカウボーイは、明らかに殺人鬼そのものに映った。

瞳はデングロンハットに隠れて見えないが、完全に口元が嗤っていた。殺意を妖刀に責任転嫁している。

逃れられない鎌鼬の背後に立つ軒太郎。怪しく光る刀身ふたつが、鎌鼬の背中を優しくなぞる。

まるで女性の肌に触れるように官能的な動きだった。鎌鼬が身を擦る。

畏怖する鎌鼬の体内から、ドロドロと恐怖が溢れ、流れ出ていた。歯茎が、ガタガタと小刻みに音を鳴らす。

「安心しろ、俺は案外慈悲深い。ひと思いに殺してやるぞ」

「ぐはっ！」

慰めにもならない一言の直後、ふたつの刀身が鎌鼬の背中に突き刺さる。

そして胸まで貫通して、紅く染まった切っ先ふたつを胸の前から覗かせた。

軒太郎の宣言どおり、直ぐに鎌鼬の双眸から光りが失われていく。ひと思いだった。

道を塞ぎ、鎌鼬を捕らえて離さなかった灰色の壁が霧と化して消えていく。すると鎌鼬の両手がダラリと下がる。既に絶命している様子だった。

鎌鼬を串刺しにしている二刀へと体重がのし掛かる。その重みに死を確認した軒太郎が、二刀を引き抜きコートの中にある鞘へと戻した。

「やったわね。これでカマイタチを頂だわ」

そう言いながら憑き姫が、クリアファイルの中から一枚のカードを取り出す。何も書かれていない白紙のカードだった。

僅かに俯きながら瞼を閉ざす憑き姫。可愛らしい口からは、何やら複雑な呪文が流れ出る。

その呪文に誘われ、三つの死体から浮き上がる白い塊。妖怪の霊魂だ。

それらは白い尾を引きながら自由に飛び回ると、やがて白紙のカードの中へ己から飛び込むように吸い込まれていく。

「よし、魂の捕獲完了。コンプリートにまたひとつ近づけたわ」

憑き姫が冷たく微笑む。

白紙だったカードには、三匹の鎌鼬が回る絵が描かれている。そしてカマイタチの名が刻まれていた。

憑き姫は、そのカードをファイルに入れると本を閉じた。やがて本自体も霧となつて消えていく。

一方、軒太郎は、鎌鼬たちの骸を掻き集めていた。

「ふふふ、良い素材を得られたぜ。こいつらの鎌は使えそうだな。面白い一品が出来そうだな。否、二品ぐらい創れるかな」

一箇所に集めた鎌鼬の死体。バラバラになった次男の鎌を手に取り黒くにやける軒太郎。怪しく奇怪だった。

「さあ、帰りましょう。軒太郎、もう私は眠いわ」

「ああ、分かった」

軒太郎に後ろから声を掛けた憑き姫の姿は、いつの間にか巫女の出で立ちから白のワンピース姿に替わっていた。いかにも貴賓があるお嬢様といった清楚さが伝わってくる。

だが、かなり気が強そうだった。高飛車ではないかと思える印象が強い。

しかし美人の部類だと区別できた。

あと10年も経てば、お嬢様から女王様に昇格しそうな美少女である。

「今日は荷物が多い。三匹分の収穫だからな」

軒太郎は、衣装が変わった憑き姫を見ても平然としていた。気づい

ていない訳でもなさそうだ。

「じゃあ私は、先に帰るわね」

「ああ、かまわん」

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

こうして今宵の二人は、妖怪狩りを解散させた。憑き姫は軒太郎を残して、長い黒髪と白いワンピースを揺らしながら去って行く。

辺りの結界は既に解除されていた。嵐のような突風も止んでいる。夜空に静けさが舞い戻っていた。

その闇夜の中でひとり軒太郎が、妖怪の死体を嬉しそうに漁っていた。

かわりだす少年

僕が生きた17年の年月を通して、今が一番、不幸の真つ最中なのかもしれない。

僕の住む町は、山と海に挟まれた小さな温泉街である。

町と呼ぶよりも村に近い人口だ。

町の殆どの人が、何らかの観光業に関わる仕事で暮らしている。僕の家もそうだった。

父は、町の旅館で観光バスの運転手や雑用の仕事をやっている。母は、同じ旅館で仲居をやっていた。

夏になれば海水浴の客で旅館はごったがえす。

冬は、ウィンタースポーツの若者が多く訪れ、また夏とは違う賑わいを増す。

山沿いにスキー場がひとつあるが、最近は雪不足で大変らしい。

温泉もあるので、季節に関わらず観光客は絶えない。

素朴で静かな良き街である。

しかし僕を包む環境が一転する事件が起きた。

一ヶ月前の話だ。

まだ梅雨が続く月の始まり、その頃の僕は、まだ普通と呼べる少年時代を送っていた。

高校も二年目、部活はサッカー部を真面目にこなしていた。

体力には人一倍自信があったのだが、技術が低く、レギュラーを狙うどころの話ではなかった。

どうも不器用なのだ。

ドリブルも下手糞で、シュートしてもオツペケペーな方向に飛んで行く。

そんな僕は、大会になると、いつも選手を励ます応援を飛ばす役目に専念していた。

そのような高校生活を日々繰り返す僕は、それでも青春に不満を持たず満喫していた。

それがずっと続くと思っていた。

そして事件が……、否、大事故が起きた。

大事故とは、この町にある唯一の高校のサッカー部が、県大会の試合に出た日の話。

その日は選手と応援団を乗せたマイクロバスが、市街のサッカー場を目指して走っていた。

僕もそのマイクロバスに乗っていた。

マイクロバスは旅館が貸し出してくれたもの。運転手は、僕の父だった。

そして市街を目指し山道を走るバス内は、サッカー部の生徒たちで騒がしく賑わっていた。同級生や先輩たちが試合前なのにワイワイとはしゃいでいる。

しかし次の瞬間世界が激しく回転した。

何が起きたのか理解すら出来ずに、回るバス内を僕は、激しい流れに身を任せるように舞った。

僕だけじゃない。他の生徒や皆の荷物が跳ね回っていた。

何度も視界が回り、その回数分だけ体のあちらこちらを何かにぶつけた。

どのぐらい回ったのかも分からない。

なんで回ったかも分からない。
そして僕の意識が途絶えた。

それからどのぐらいの時間が過ぎたのか。
周りから呻く声が聞こえて僕は目を覚ました。とても苦しそうな呻き声が多く聞こえる。

マイクロバスが逆さまになっている様子だった。
バスの外からは、マネージャーの女の子が叫ぶ声が響いていた。
「たすけてー、たすけてー」と。

何が何だか分からない。僕の上に誰かが覆いかぶさっていた。
一人じゃない。二人、否、三人ぐらい覆いかぶさっていた。重くて動けない。

その上から呻き声が聞こえる。
「痛い」「苦しい」と、聞こえてくる。
僕の肩や首筋に暖かいものが垂れてきていた。

真つ赤な鮮血。

僕に覆い被さっている誰かの血だ。
僕は、下敷きになって身動きが取れないが、重み以上の苦しみはない。大きな怪我はしていない様子だった。
しかし僕らは、4時間近くそのままの常態で放置された。

だが、僕に取って本当の苦しみは、救出されてからだった。

あとから知った話のだが、僕らの乗ったマイクロバスは、父の運転ミスでガードレールを突き破り20メートル近く土手を転げ落ちたらしい。

事故現場は市街に向かう山中。発見されて救出されるまで4時間掛

かった。

事故の原因は父の過失。

マイクロバスに乗っていたのは、顧問の男性教師と21人のサッカー部の生徒たち。

殆どの生徒が怪我をして、うち5人は骨折などをする重症。うち一人が頭を強打して死亡。

即死だったと診断された。

死んだのは、僕の上に覆い被さっていた一人だった。

ひとつ上の先輩だ。顔も良く覚えていた。仲も良かった。

救出された僕は、彼の血液で上半身を紅く染めていたが、幸運にも無傷だった。

それもまた切ない。

事故を起こした父は、軽症だったが検査のため入院した。しかし直ぐに退院することになった父に、警察から出頭願いが出された。

その日の父は、朝早くから警察署に出頭すると母に云って家を出て行った。

だが父は、その日を最期に家には帰ってこなかった。警察にも出頭していない。

町の人は、父が逃げたと噂した。

しかし父は、数日後、山中の神社で見つかった。

境内の木の枝で、首を括っていたのを発見された。

自殺である。

骨折などの傷を負った生徒たちは、今後サッカーどころか日常生活

に支障が出ると思われる者も居た。

それ以上に死者も出たのだ。

その罪の重みを父は、背負っていくことが出来なかったのだろう。

父は真面目な人物だった。

だが、息子の僕から見ても小心者であるのを否定出来ない程に、気の弱いところがあった。

それでも僕の父だ。17年間育ててくれた父なのだ。死んで悲しくないわけがない。

しかし父が死んでも悲しんでいる余裕は、僕に与えられなかった。

今度は母だ

父が自殺したのを知った母は、風呂場で手首を切ったのだ。

僕が見つけたとき既に母は、水が満ちている浴槽内で冷たくなっていた。

風呂の水は、ワインの様に紅く鮮やかに染まっていたのを今でも忘れられない。

あの紅い色が、記憶に焼きついて離れない

両親共に自殺だ。僕は、すべてが終わったと思えた。

その場に崩れ落ち、自分も自殺しようと考えた。

だが、僕にはそのような勇気がなかった。

父と母の子供なのに、自殺する勇気を持ち合わせていない。

臆病なまま生き続けることしか出来なかった。

その日からだ、町の色が違って見え始めたのは……。

そう僕には見えたが、町の人たちには、僕の姿が違って見えていた

筈だ。

僕は、人殺しの息子だ。

僕は、人殺し一家の生き残りだ。

町の人たちの視線が、冷たく突き刺さる。

学校に行っても、登校中の生徒たちの目が、僕を罪人のように見ていた。

冷たい視線、怒りの感情、噂する陰口、怨む思い、それらが全身に浴びせられ、孤独と恐怖が膨れ上がった。

僕は、教室に辿り着く前に、怯えながら学校を出た。逃げるように走り、全力で走り逃げた。

教室に入れば、もっと恐ろしい状況が待っているのではないかと想像してしまい、怯えの津波が押し寄せたからだ。

罪悪感が、僕をひたすらに苦しめた。

その日以来僕は、家に籠もった。

学校にも行かず、外に出るのも食品を買い込みに行くぐらいで、殆ど外に出なかった。

カーテンを閉め切った一軒家。僕は自縛霊の如く暮らした。

親戚からも連絡はなかった。学校からも、警察からも、市の役所からも、皆が僕を忘れようとしている。

町のすべてが、僕を、僕の一家を、記憶の中から葬り去ろうとしているように感じられた。

そんな日々が続くと、一ヶ月もしないうちに僕の中で、何か少しずつ壊れる音が聴こえ始めた。

殻が割れ落ち、心が流れ出す。

暗い家の中、独りぼっちの僕が変わっていく。徐々に闇へと溶けていく。

僕の心が、僕の身が、何かに変化していく。それが何かは分からない……。

「なんだ、これは……」

ふと自分の両手を見る。まるで獣のような剛毛が生えていた。硬そうな灰色の体毛。

信じられない。錯覚では、と、疑う。

だが、現実だ。僕の頭が可笑しくなった訳ではない。

体全身が痛い。メキメキと音を立てていた。

口の中が可笑的い。手を当ててみると牙が生えていた。

「僕は……」

僕が化け物に変わっていく。

僕が何かに変わっていく。僕の体が変わっていく。

僕は。

変わっていく。

退治の依頼・前（前書き）

すみません、タイトルが迷走しています。

「魑魅魍魎狩り師」から「魂ノ骸」に変更しました。

退治の依頼・前

梅雨があげた残暑厳しい季節。

太陽の日差しが砂浜を照らし、観光客たちに真夏のバカンスを楽しませていた。

砂浜は、観光客で溢れている。家族連れ、カップル、ナンパに励む若者、砂浜は真夏一色と見て取れた。

都会から離れた温泉街の浜辺。

地元の子供たちの姿は見えるが、大人たちは観光客相手に夏のボーンスを稼いでいた。今が稼ぎ時、遊んでは居られない。

蒼い海が続く海岸沿いの国道に、一台のバスが走る。

右手が海で、左手が険しい山の絶壁。海はキラキラと瑪瑙色に輝き、とても美しく澄んで見えた。

そのようなのかな景色が、窓の外に永い時間続いていた。

市街から、温泉街を目指す一台のバス。温泉街を目指すには電車もあるが、バスで向かって大差変わらない。

そのぐらいの時間と距離である。

バスの中には数人のお客が乗車していた。

殆どが観光客と同じように見えた。これから海で遊ぶといった格好をしている。楽しそうに連れと話して笑い、他人へと迷惑にならない程度で賑わっていた。

バスの車内は、節約のためなのかクーラーを掛けていない。

しかし窓の多くが開かれ爽やかな風が、車内に優しく飛び込んで来

ていた。それだけで暑さが気にならなくなる。

最後の席。

その横長の席にふたりは座っていた。

並ぶふたりは、些か違和感が見て取れる。

座っていても解る長身の男性と、小柄な美少女。

ふたりはバスに乗ってから会話ひとつしていない。しかし、ふたりの違和感が他の客の気分を阻害していることもなかった。

ただ、ふたりは空気のように座っている。

男性は、皺ひとつ無いパリッとした白いワイシャツに、グレイのビジネスズボンを履いている。

暑さにめげることなく地味なネクタイを、緩める事無くビシッと締めていた。

25、6歳だろうか、地味な黒縁眼鏡の下には、にやけた営業スマイルが保たれている。

真面目なセールスマンのようなイメージが強い。

その男性の隣に座る少女は、彼とは異なり涼しげな白いワンピースを着ている。

若干気の強そうな表情を覗かせる少女だったが、顔立ちは間違いなく可愛い。綺麗な黒髪が、窓から入る夏の風に時折靡く。

隣の男とは、10歳ほど歳が離れているように見えた。

親子というより兄弟に見える。

教師と生徒。そのようにも見えた。

恋人ではないだろう。恋人だとしたら犯罪かと思える歳の差だ。

バス内のお客たちが楽しそうにしているのは別に、ふたりは後部座席の真ん中を陣取って何も話さない。

少女と男は、真っ直ぐ正面を見ながらバスに揺られている。

運転手がたまに、ルームミラーを覗くとふたりと視線が合う。

外の景色が、大自然よりも人の営みが多くなり始めると、とあるバス停でふたりは降りた。

そして海を背にして歩き出す。

小さなお店が並ぶ、緩やかな登り坂の道。商店街と呼ぶほどの通りではない。

海の側だけあって、浮き袋やパラソルなどの海水浴用のアイテムを販売する古びた店が多い。

スナックや居酒屋のような店もあるが、まだ時刻は昼前、それらの店が開くには早い時間帯だった。

ふたりは、そのような町並みの道を歩いて進んだ。

緩やかな坂道を登るふたり。何度か家族連れの一向や若いカップルたちとすれ違う。

皆が海岸を目指していたが、ふたりが目指すのは、この温泉街で一番の大地主の屋敷だった。

バスを降りて20分ぐらい歩くと、目的の屋敷が見えてくる。

町の奥。山の斜面に造られた石垣の上。和風の大きな屋敷だった。

ふたりは、長く続く石畳の階段を登り屋敷の門前に立つ。

大塚と標識が目に入った。間違いなく、今回の依頼主の屋敷だ。

門をくぐるふたりは、そのまま玄関を目指して歩く。
玄関までが、また長い。とても広い敷地だった。この温泉街いちの
大地主というのは嘘ではなさそうだ。

玄関に到着すると、男がインターホンを鳴らす。

「どちら様でしょうか」と、お手伝いさんと思える女性の声が聴こ
えて来る。中高年の声だった。

男は軟らかい口調で返した。

「大塚剛三氏に呼ばれました、三外軒太郎と申します」

「少々お待ちください」

しばらくすると声の主と思われる女性が玄関を開けた。

そして、ふたりが中へと招かれる。

ふたりは、20畳ほどの広い客間に通された。

とても豪華な部屋だった。

高価な応接セット。西洋アンティークの家具。その上には骨董なの
か値段のはりそうな花瓶や大皿が飾られていた。

ふたりは、ソファアーに腰を下ろし寛ぎながら、今回の依頼主である
大塚剛三氏を待った。

そして間もなく、待ち人は現れる。

「やあ、お待たせしました」

軽い挨拶と共に姿を現したのは、痩せた70歳ぐらいの老人だった。
男だけが席を立ち、礼儀正しく頭を下げる。

少女は、座ったままだ。

「三外軒太郎です」

「大塚剛三です。まあ、おかけください」

ふたりは挨拶をそこそこに終える。

そして軒太郎は、再びソファに腰を下ろした。剛三もふたりの正面に座り向かい合う。

大塚剛三という人物は、顔に皺が多く、頭も白髪で薄くなった老人だった。

身形は普通。このような大きな屋敷の主とは思えない程に地味に見える。それだけに人の良さそうな表情をしている。

ひとつひとつの身振りに義が映っていた。

元々剛三は、この辺一帯を治めていた武家の眷族だ。

この温泉街の多くの土地が、大塚家の貸地である。

しかもこの大塚剛三、かなり出来た人格の持ち主ときている。

金欲よりも情に厚く、涙もろくて面倒見が良い。

この町の顔役を永く務めている。

善人の中の善人だ。

「こちらのお嬢さんは？」

剛三が、軒太郎の隣に座る可憐でクールな少女について訊いてくる。流石に無視が出来ない存在感を感じたからだ。

「これは憑き姫と申します。私の助手みたいなものです」

軒太郎がそう言うと、すぐさま憑き姫が反論の言葉を飛ばす。

「いいえ、私の方が軒太郎より上ですわ。むしろ私の方が本体といえましょう」

「本体……？」

剛三が、人の良さそうな表情に苦笑いを浮かべながら首を傾げる。最近の若者が考えていることは判らないと心で呟いていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいでしょう。さっそくですが仕事のお話をしませんか」

「そうですね……」

軒太郎の言葉に剛三の表情が濁る。客間の明かりが暗くなったように感じられた。

「いったい何があったのですか？」

「三外殿は、妖怪と言うものを信じますか？」

軒太郎の質問に、剛三はそう返した。

「私の仕事は、霊媒、祓い、退魔にUFOまで、オカルト専門のなんでも屋ですよ。

他人にインチキと呼ばれても、信じますかと訪われることは、あまりに愚問です」

「そ、そうですね」

剛三は、更に苦笑いを強める。この人たちは宇宙人までも相手にしているのか、と、思い、依頼したのを僅かに後悔していた。怪しい。

「もう一度訊くわ。何があったの？」

さらりとした口調で憑き姫が話しを急かす。冷静で、美しい眼差しだった。

剛三は、僅かな時間、憑き姫の瞳を見詰めた後、テーブルに視線を落として話はじめた。

「山に、妖怪が出るのですよ……」

老いた声は、確かに震えていた。ことに怯えている。

「どんな妖怪ですか？」

「牛のように大きな蛙の体に、鰐ワニのような口をした化け物です……。全身深い緑色でした……」

剛三は、自分で云っていることが信じてもらえないと思っていた。そう言う口調である。

退治の依頼・後

「貴方は、その妖怪を見たのですか？」

「はい、見ました……。だから、社会的地位も名誉もある私が、恥を考えずに退魔師なんかを呼んだのです……」

「はは、恥ずかしいですか」

今度は、軒太郎が苦笑いを作る。営業スマイルを崩さない口元が、ヒクヒクと引きつっていた。

「貴方が恥ずかしがるうとも、私に取って関係ないわ。妖怪を退治して、報酬をきちんと払ってもらえれば問題無しということ。」

恥ずかしいと、嘲笑おうとかまわらない。勝手に笑えばいい」

そう言い真つ直ぐに剛三を見詰める憑き姫。

氷の如く冷たい視線。

まだ15、6歳の少女が見せる双眸に、70歳の剛三が押されていた。

憑き姫は、剛三が言った「退魔師なんか」と、言う台詞に怒りを感じている様子である。

思わず剛三が憑き姫の脅迫的瞳に押されて背筋を伸ばす。

「すみません。口が過ぎました……」

このふたり本物なのは、と、剛三が信用しはじめた。

謝罪を述べる。

「私は気にしていませんから」

軒太郎が浅く微笑みながら言う。

「私は気にしていますわ」

憑き姫が浅く微笑みながら言う。

とても怖い。

「仕事の話が進まないですね。剛三氏、おねがいします」

「ああ、すみません……」

掛けた黒縁眼鏡のずれを直す軒太郎に促され、剛三氏がことの成り行きを話はじめた。

「初めて緑色の怪物を見たと言うのは、山中でバス事故が起きた時でした。

高校のサッカー部が試合のために、市街の会場に向かっている途中の事故で、死者が一名出た悲惨なものでした。

その事故の際、バスに乗っていたマネージャーの少女が初めて、その化け物を見たと言い出したのです。

最初は誰もが事故で混乱しているだけだと思い少女の話聞きませんでした。

何せ事故処理で大騒ぎでしたからね……」

語る剛三は、腰掛けた膝の上に両肘を置き、両手を組みながら指を世話しなく動かしていた。落ち着がない。

それを憑き姫は冷たく見詰め、軒太郎はネクタイのずれを直しながら聞き続ける。

ふたりには余裕が感じられた。

「事故が起き後です。バスの運転手が山の中の神社で首をくくり、奥さんが手首を切つて自殺しました。

その頃から山沿いの農家で、ニワトリなどが襲われるようになりました……」

「まずは家畜から、王道な話ね」

憑き姫が囁いた。その後、剛三が話を続ける。

「最初は熊の仕業かと思いました。しかし二週間前、山に山菜を取りに入った老婆が、帰ってこない事件が起きましてね。

生まれた頃からこの山で育った老婆です。とても道に迷ったとは思えず、きつと事故か何かで動けなくなったのでは、と、皆が考え、町の男を集めて捜索隊を結成して老婆を探しました。しかし……」

剛三の表情が緊張に曇る。

世話しなく動いていた指も止まり、固く両手を組み合わせさせて力が入っていた。

「しかし？」

軒太郎が訊きなます。まるで物語の続きをせがむ子供のような期待

感が満ちた笑みだった。
だが剛三は、テーブルに視線を落としており、そのような軒太郎の表情には気づいていなかった。
話を繋げる。

「しかし老婆は、遺体で発見されました。しかも腹を割かれ、内臓を食われた姿で……」

「人を食ったのね」

「はい、老婆の遺体には、動物の歯形に似たものが残っていました。鯨のような鋭く大きな歯形です。」

しかし警察では、熊か野犬に襲われたのではないかと判断されました。

その段階では、私もそう考えていましたし、それが普通の見方です」

「では、いつから妖怪の仕業だと？」

「熊であれ野犬であれ、人の肉を喰らったのです。ほっとく訳にもいきません。」

猟銃会の者たちに、山へと入ってもらいました。万が一にでも熊が、町に近づいているようなら危険ですからね。

観光客に被害が出たら、町全体の損害になります」

「しかし現れたのが、熊でなく化け物だったと？」

「はい、そのとおりで……」

「猟銃会にも被害が出たのかしら？」

他人を心配するような憑き姫の言葉に、軒太郎が視線だけで隣を見た。珍しいことなのだろう。

「はい、出ました。その緑色の妖怪と出くわし発砲した男性が、妖怪に腕を噛まれて負傷しました」

「なるほどね。やっこさんは、随分と大胆に姿を現しているようだな」

多くの妖怪が人間から姿を隠し、忍び、暮すことが多い。

そして気まぐれに姿を現しては、人を驚かせたりして楽しんでいるのだ。

しかし、話の妖怪は、明らかに食料を求めて忍ぶことなく動き回っている。

露骨に危険な存在であった。冬眠に失敗した罨よりも性質が悪い。

「照れ屋さんじゃなくて都合がいいじゃない。探す手間が随分と省けそうだわ」

「そうだな、憑き姫」

ふたりが笑っていた。

剛三には、ふたりとも怪しく見えた。寒気が身に走る。

「ところで貴方は、何処で妖怪を見たの？」

剛三に憑き姫が問う。

「私は家の窓からでした。二階の窓です……」

剛三の屋敷は、この町でも山沿いにある。窓から山肌ぐらいは、近くに見えるのであろう。

「それで危機迫り、我々に依頼を入れたのですね」

「はい……」

「だから社会的地位も名誉もある貴方が、恥を考えずに退魔師なんかを呼んだのですね」

憑き姫のしつこい嫌味が飛ぶ。

「すみません……」

祖父が孫娘に苛められているようだ。

憑き姫は、結構と根に持つタイプらしい。

しかし、自分の家の裏手に妖怪が迫ったのだ。ことを急がせる訳も理解できた。

暫し沈黙が流れる。

「分かりました」

そう言い軒太郎が立ち上がると、続いて憑き姫も立ち上がった。

「おお、では早速退治に向かっていただけますか!？」

腰を上げた二人を見て剛三が期待に顔を明るくさせる。希望を見出

した表情であった。

自然と剛三の腰も浮き上がる。

「バカを言わないで、お爺さん」

「え？」

少女がいきなり云った。

憑き姫の言葉に、剛三が目を点にさせながら動きを固める。

「まずは情報収集からですよ、剛三氏」

「情報収集……、ですか？」

軒太郎が言うが、剛三はキョトンとした表情を続けていた。

「相手がどんな妖怪か、どれだけ強いかがはっきりしていないので、まずは敵の戦力を悟り、作戦を立てるのが妥当。

それには情報を集めるのが最初の行動です」

営業スマイルで語る軒太郎のプランはもっとも聞こえ、剛三も納得した。

「敵を知り、己を知れば、百戦誤まらずってやつですわ」

憑き姫が言う。

「敵を知り、己を知れば、百戦危うからずが、正しい言い方かと…」

…」

剛三が言う。

「そうとも言うわね」

憑き姫の声には揺るぎない自信があった。彼女の中では、彼女が一番正しい存在のようだ。過ちを認めようともしていない。それが、自負として映る。

剛三には、何人かの孫が居る。

しかし、目の前に居る少女のような捻くれた孫はひとりも居ない。そんな自分にほっとする。

「剛三氏、お願いがあるのですが」

「なんででしょうか、三外殿？」

「まずは、バス事故の際に、初めて妖怪を見たと言うサッカー部のマネージャーに会いたいのですが、はからってもらえませんか？」

「分かりました。連絡を取って、私がお車で案内いたしましょう」

「かたじけない」

軒太郎の申し出を、剛三が容易く応じる。そして客間を出て行った。それからしばらく経つと三人は、剛三が運転する車で屋敷を後にした。

一向は、妖怪の情報を求めて温泉街に繰り出して行く。

化け物

ひとりの少女が自転車を走らせていた。夏の風に黒髪が靡く。白いワイシャツに赤いリボン、チエックのスカートからペダルを漕ぐ綺麗な脚が瑞々しい。夏用の学生服が精彩だった。活発なイメージが強い少女だったが、どこか影が見え、明るさを霞ませていた。心の影だ。

彼女は、先程まで同じ高校の友達と一緒に下校していた。ほんの10分ぐらい前に道を分けたばかりであった。今日の彼女は、いつもの帰り道から僅かに逸れて、家路と異なる通りを走りぬける。

ホテルや旅館が軒を連ねる通りから大きく外れた住宅街。人影もなく、観光客の姿は見えない。住宅の向こうには青く茂る山々が近くに聳えていた。

そして彼女は、とある一軒家の前で自転車を止める。何処にでもある普通の一軒家。ある程度手入れされた小さな庭があり、玄関までは数メートルある。彼女の自宅ではない。

路地から住宅を見上げる少女。窓という窓は閉め切れ、中からカーテンが閉じられている。それが何処となく寂しさを窺わせていた。少女の表情も険しい。

自転車を壁際に寄せて止めた少女は、肩まである髪を撫でると一度大きく深呼吸をした。心を沈め、落ち着こうとしている。

「よしっ！」
両頬を掌で叩く。気合が入った様子だった。顔を凜とさせ、玄関を
目指して突き進む。
だが彼女の表情には、何故か緊張に畏怖するようにも見えた。
彼女に取ってこの家への訪問は、それだけ勇気を要することなのだ
ろう。

玄関まで歩んだ彼女は、細身の指で呼び鈴を押す。室内からありふ
れたキンコーンといった音が聴こえてきた。

しばらく待つ。

中から応答はない。

しかし僅かに人の気配がある。家主は居そつだ。そう悟り彼女は再
び呼び鈴を鳴らした。

やはり応答はないが、確かに室内に人が居る気配が伝わって来る。
気のせいではない。

「こんにちは、素^{すそ}誼^ぎです。五代くんいらっしやいませんか」

呼び鈴を諦めた少女は、声を張り上げた。それに応じて、やっと中
からはつきりと分かる物音が聞こえて来る。

そして歩む気配が玄関に近づいて来た。

やがて玄関の鍵が音を立てて解除されると、扉が開かれる。

扉の隙間から顔を出す少年。少女の記憶に残る表情よりも少しやつ
れており、暗い影が見て取れた。

歳の頃は少女と変わらない少年。おそらく高校生。

「こんにちは、五代くん……」

「やあ、久しぶり素詛さん……」

挨拶を交わすと少女は俯いた。少年の顔を見て少し安堵している様子だったが、完全に不安が消えた表情ではない。

一ヶ月ぶりぐらいに再開したクラスメートは、やはり未だ不幸の真っ最中であるのが解った。

長く暗いトンネルの中を、今もまだ迷っている様子だ。

玄関から顔を覗かせた少年の名前は、五代昂輝。

彼の両親が自殺を行い、そろそろ一ヶ月が経とうとしていた。

「五代くん、少し話をしていいかな。時間いい？」

「うん、いいよ。なんの話？」

「何気ない話だよ……」

素詛律子は、そう言い顔を上げると、精一杯微笑んで見せた。

他人の笑顔を見るのも久しぶりのことだ。暗かった昂輝の表情が、彼女の笑顔を見て驚く。こんなにも笑顔が温かいものだと思いつく。

「解った、外に出る準備するから待ってて」

そう言って昂輝は家の奥へと一度消えた。

別に律子は、昂輝の家で話しても良かったのだが、流石に年頃の男女ふたりが一つ屋根の下は不味いと昂輝の方が気を使った。

しかも曰くつきの一家が住んでいた家だ。そこに彼女を招くのは忍びない。しかし昂輝と一緒に居るところすら人に見られれば、何を噂されるか分かったもんじやない。この町は狭い。注意しないと噂は直ぐに広がる。特に悪い噂は早い。そのことを、身を持って経験した昂輝は、彼女の為にならないと心配する。

しばらくして着替えを済ませた昂輝が、二階から降りてくる足音が聴こえてくる。

玄関先に舞い戻った昂輝は、黒いTシャツにGパン姿。そして赤いスニーカーを履く。

この少年の周りで起きた災いを知らなければ、何処にでも居る普通の高校生に見えた。ほんの一ヶ月前までは、そうだったのだ。だが、この町に暮す多くの人々が、彼を呪いそのものにはか見ていない。厄介者なのだ。

「近くの公園で話そうか。今の時間帯なら人も少ないとおもつから」

「うん」

律子が頷くと、ふたりは歩き出す。律子は自転車を押して行く。

「高校、辞めたんだってね……」

「ああ」

歩くふたり。昂輝は真っ直ぐ向きながら律子の言葉に小さく答えた。何処からともなく蝉の鳴き声が、ふたりの話に割り込んできていた。

その音に日差し以上の夏を感じる。

「これからどうするの？」

「町を出ようと思う」

「行っちゃうんだ……」

「ああ……」

ぶっきらぼうに答える昂輝の言葉に律子が寂しさを映す。

おそらくこの町で、昂輝を気遣いこのような態度を見せるのは、律子ぐらいだけだろう。

昂輝が町を出ようと決心するのも仕方がないと律子は理解していた。

しばらくしてふたりは、近所の公園に着いた。たいして歩いていない。

公園には幾つかの遊具が設置されていたが、それで遊ぶ子供の姿は見えない。ふたり以外に人は居ない。無人だ。

ふたりは、古いコンクリート造りのベンチに腰掛けた。

蝉に加えて草むらや植木の中から他の虫の音も聴こえてくる。

思い出せば一ヶ月前までふたりは、このような沈んだ空気では話をしたことがなかった。いつも笑顔だった。

クラスも一緒、部活も一緒。昂輝がサッカー部の補欠で、律子がマネージャーだった。

恋人同士ではなかったが、とても仲が良かった。

ふたりとも同姓の友達に、「お前ら、付き合ってるの？」と、よく訊かれたことがあった。何かきっかけがあったら、おそらく付き合い合っていたかもしれない。

「私ね、五代くんが死んじゃうんじゃないかと心配だったの。ご両親のように……」

顔を合わせないように俯きながら言う律子の瞳は、閑寂な涙に潤んでいた。心配そうな声が泣きそうに震えている。

「うん、考えたよ」

心を深い底に沈めてしまった昂輝は、律子の顔を見ずに答えた。確かに昂輝は、律子の言うとおり自殺しようと考えた。考えただけでは……。

「でも、ダメだった……」

「ダメだった？」

「ああ、死ねなかつたよ……」

「その方がいいよ……」

学校を辞めても、町を出ても、離れ離れになっても、彼には生きていてもらいたい。律子はそう思っていた。

きっと自分は、昂輝のことが好きなのかもしれないと、最近になって気づいた。楽しかった何気ない日常が不幸にも崩れ去り、取り戻すことも困難になってから気づいた。

気づいたからこそ彼の家を訪ねたのだ。

だが、自分の思いを告げるには、遅すぎだとも認識していた。

「僕なんか、死んだほうが……」

「そんなことないよ！」

弱気な昂輝の言葉に、急に大きな声を出す律子。速い素振りで恋心を抱く相手のほうをキリツと振り向いた。双眸が真剣に力付く。

ほつりと呟く昂輝。

「手首を切ったんだ……」

「え!？」

驚く律子。すぐさま視線が昂輝の両手首を確認した。しかしリストカットの傷は見えない。未遂なのかと安堵した。

「家の中で、首もくくってみたんだよ」

律子には、昂輝の云っている話の意味が判らなくなっていた。手首を切った痕跡も、首を括った痕跡も見当たらない。鬱なのか、ノイローゼなのか、それが原因で妄想に当てられているのかと思う。心を病んでしまったのかと心配を増す。律子の眉毛が、ハの字にラインを作って昂輝を見詰めていた。

「死ねなかったじゃなくて、死なないんだよ……」

昂輝が言葉の意味を正す。

「どう云うこと?」

「父を真似ても、母を真似ても死ねないんだよ」

「五代くん……?」

少年に対して律子が、色々な心配を混沌させる。かなり精神的に追い詰められているのではと考える。

「飛び降り自殺も試したけどダメだった……。化け物になった僕は、もう死ねないんだ」

「化け物……?」

昂輝の顔が怯えたように変わる。体も震えていた。

律子も同じだった。昂輝の口からこぼれ出た化け物と云う言葉。そのキーワードを耳にして彼女の表情も固まる。

「ねえ、五代くんは、化け物の存在を信じる……?」

「……え?」

問う律子は真剣な表情をしていた。昂輝がキョトンとして彼女を見詰める。

ふたりの視線が永く合う。

「私見たの……、化け物を」

瞳を逸らした昂輝の全身に振るえが走る。

「見られた!？」と心で叫ぶ。

「バス事故の時、私は転がるバス内から放り出されたの。運良く草や木の枝がクッションになって、たいした怪我をしなかったんだけど

ど……」

その話は事件後に昂輝も聞いていた。彼女が無事だったことは嬉しく感じた覚えがある。

「でもね、皆が横転したバス内に居る頃、私見たの……。化け物を……」

昂輝が少し安心した表情に戻る。律子が見た化け物は自分じゃないと。

しかし、別の化け物がいると疑問にも気づく。

律子が化け物の話を続ける。

「緑色で大きく、鰐みたいな大きな口で……。草むらの中から私を見ていたわ」

明らかに自分を指していない。ならば何なのだ？

「私が、たすけてって悲鳴を上げると、その緑色の怪物は、山の中に逃げていったわ……」

昂輝がバス内に閉じ込められている時、確かに彼女が車外で助けを求める声が聞こえていた。

あれは、事故が原因で助けを求めたものではなく、迫る化け物相手に向けられたものだったのかと昂輝は悟った。

「最初はね、町の人たちは、私の話なんて誰も信じてくれなかったの。でも、色々な事件が続いて、ついに怪我とか被害者まで出ると、やっと私の話を皆が信じ始めたわ……」

「そうなんだ……」

「私以外に化け物を見たって人も出てきてね」

律子が語るに連れて、ふたりは何故か落ち着きを取り戻していた。

「でも町の人の多くが、五代家の呪いだって噂を始めたの……」

濡れ衣だ。

律子の話かたは、昂輝に気を使った感じであった。しかし再び昂輝の顔が深く濁る。

当然だ。何でもかんでも家族のせいになれたら堪らない。災いのすべてが自分の責任なのかと転嫁されて沈み込む。

「私の話、五代くんは信じてくれる？」

「僕が信じる、信じないは別に、他にも目撃者が居るんだろ」

「うん……」

彼女が昂輝に、わざわざ話に来た理由。口実なのかもしれない。

ただ、昂輝に合いたかっただけなのかも。

ふたりが口を噤む。そのとき律子の鞆の中から携帯の着信音が鳴り響く。

彼女はベンチから腰を上げると、自転車の籠の中にある鞆から携帯を取り出し電話に出た。

母からだった。

昂輝に背を向け携帯で話す律子。

「うん、わかった……、うん……、直ぐ帰るね」

昂輝は、電話で会話する彼女の後姿を穏やかに見守る。とても愛おしい。

故に寂しさが込み上げる。

町を出る、故郷を捨てると誓った昂輝には、彼女へ思いを遂げる言葉はもう存在しない。

電話を終えた律子が踵を返した。

「ゴメンね、急いで帰らないと行けなくなったの」

「ああ、分ったよ」

名残惜しくも思えた。久しぶりに誰かと話したのだ。しかも密かに思いを寄せていた少女が相手だ。

しかし近いうちに町を出る積りだった昂輝には、それも定めだと直ぐに諦めがつく。

苦しくも優しく微笑んだ。

携帯を鞆にしまう律子。

「家の方に退魔師の方が、私の話を聞きたいって云って来ているらしいの」

「退魔師？」

「うん、化け物を退治してくれる人よ」

その退魔師たちが、人外であることを知るよしもなかった。

「じゃあ、行くね……」

「ああ」

分かれの言葉と共に微笑む律子。固さが違和感を残す。昂輝も同じく、無理やりの笑みを造った。

互いを気遣う不器用な笑みからは、それでも優しさが伝わって来る。

「町を出て行くときには云ってね。見送りに行くから」

「うん、分ったよ」

昂輝が返した言葉は嘘である。彼女に旅立つ日を告げる積りはなかった。

静かに、誰にも知られずに町から消える積りなのだ。

「落ち着いたら、連絡先も教えてね」

「うん、手紙を出すよ」

それも偽りの言葉。おそらく出さない。

「じゃあ、行くね……」

「ああ、さよなら」

「またね……」

律子が自転車に跨り公園を出て行く。ベンチに座ったまま昂輝は、彼女の姿が見えなくなるまで見送った。

昂輝は「さよなら」と云った。

自転車を漕ぎながら律子の瞳に涙が滲む。彼女は諦めきれずに「またね」と云った。

ふたりの言葉には、未来を担う差があった。

律子の姿が見えなくなると、昂輝がベンチから立ち上がる。その動きに空気が怪しく揺れた。何かに怯えた虫の音色が、一斉に止む。

サイレンス。

俯く昂輝の表情が、双眸が、殺気にも似た鋭さを宿す。

「父さん、母さん、この町から逃げ出す前に、呪いとのかかっている決着を付けに行くよ……」

少年の周りで空気が歪んで、緊張に鼓動が早くなる。

素詛律子が言った化け物の正体は判らない。

しかしその化け物が、我家に降りかかった災いの正体でないのかと昂輝が疑う。

疑いも当然。

緑色の怪物は、バス事故の現場に居たのだ。事故の元凶の可能性が高い。その怪物を見て、父がハンドル操作を誤った可能性も推測できた。

ならば……。

「ぐうううう……」

喉の奥が呻きを鳴らす。少年の体が張り詰め、僅かに大きさを変化させた。筋肉が膨らんでいく。

黒いTシャツから見える皮膚の色が灰色へ染まっていった。否、体毛。灰色の体毛が、芝生のように生えて色を変えたのだ。

「うおおお……」

口の中に痛みが発する。牙だ、鋭い獣の牙が伸びていた。頭蓋骨が形を変える。人から化け物に変わって行く。

獣の頭部。

それは、狼の面。

「ぜえ、ぜえ……」

息を切らして変化した昂輝の姿。それは狼男。

変身前の面影は零に等しい。

身に付けている衣類を記憶してなければ誰かも分からない。

狼男と化した五代昂輝は、視線を聳える山へと向ける。そして音もなく跳ねた。

僅かひとつ飛びで、公園の柵外へと跳躍して見せる。凄い脚力だ。

アニメに出てくる忍者の如く、家々の屋根を飛び交う狼男。目指すは緑色の化け物が出現する山中。その移動速度は速いだけならず静

かで不思議と目立たなかった。

そして変身した五代昂輝は、ケジメを付ける為に、険しい山中に消えていった。

化け物を探し出すために。

わいら

律子が自転車で、緩やかな坂道を降る。左に海が近い国道。多くの車が走り、歩道には水着にちよつとした着物を羽織った観光客とすれ違う。顔を見ただけで、地元の人でないことが律子に解つた。

そして律子は一軒の喫茶店の前で自転車を止めた。ここは母が経営している店である。

喫茶店の名前は「葵」。母の名前と同じである。

学生服姿の律子が店の扉を開けて中に入る。

店内は、南国風の観葉植物が多い落ち着いた感じの店である。有線からは、サザンやチューブの曲が流れていた。

客は疎らに居る。

地元の老人、家族サービスに疲れて浜から逃げてきた人、仕事をサボってやってきたタクシーの運転手。そんな面々だった。静かで落ち着くには良い店だろう。

律子が店内に入ると、カウンターの中から母が「おかえり」と云いながら、店奥のテーブル席を指差す。

律子もあどけない表情で、母が指差す先を追った。

そこにはテーブルに腰掛ける町の顔役、大塚剛三の姿があった。そして剛三と向かい合い腰掛けるふたりの背中。白いワイシャツの男性と、白いワンピースの少女。

電話で退魔師が話を聞きに来ていると聞いていた律子は、ふたりの

背中を見て、若干の拍子抜けを感じていた。

律子が描いた退魔師のイメージとは、修行僧やエクソシストのように、いかにも胡散臭い輩が来ているのだと思っていたからだ。

ふたりの背後から律子が迫ると、正面を向いていた剛三が気づき立ち上がる。老いた笑顔が軟らかい。

「やあ、律子ちゃん。おひさしぶりだね」

「こんにちは大塚さん」

剛三が立ち上がると律子も礼儀正しく頭を下げた。

ふたりの様子を見てワイシャツの男も立ち上がる。七三で黒縁眼鏡の男。

退魔師というよりもセールスマンのよう見えた。

60

「こんにちは。私は退治屋の三外軒太郎と申します。こちらが助手の憑き姫です。よろしく」

「いいえ、私が本体です」

「は、はあ……」

軒太郎は立ち上がって挨拶をしたが、少女は立ち上がりもせず、座ったまま律子を見上げた。思わず律子が戸惑う。

「まあ、律子ちゃん座って」

「は、はい」

戸惑いを見せた律子を剛三が誘導して、自分の隣に座らせた。

剛三と軒太郎が、アイスコーヒーを飲んでおり、律子の正面に座る憑き姫は、チョコレートパフェを食べていた。

幼さが解る表情に大人びた目元、それにパフェ。何かがズレていた。母が気を使い、注文もしていないのに律子の分のアイステイーを運んでくる。

そして剛三の進行で話が始まった。妖怪の件だ。

律子はバス事故の現場で見た話をありのまま話した。

律子の話で軒太郎は、黒縁眼鏡の向こうで浅い笑みを保ちながら聞いていた。

憑き姫は、結露したパフェの器から垂れた雫で、何やらテーブルに落書きを作っていた。冷たく美しい眼差しが下を向いている。

律子が一通り話しを終える。すると両手を組む軒太郎が「なるほど」と一言だけ溢した。

店内に夏の曲が、小波のように打ち寄せる。

軒太郎が続いて口を開く。

「おそらくその妖怪は、『わいら』ですね。

「『わいら?』」

軒太郎の言った妖怪の名を、律子と剛三のふたりが同時に繰り返す。声が完全に重なっていた。

ふたりが聞いた事もない妖怪の名前。それに付いて軒太郎がうんち

くを語り始める。

「色々な説があったり、不明な点が多い妖怪なのですよ」

「そうね、私も見たことがないわ。今回の仕事は幸運かもしれないわね」

水滴をテーブルに伸ばす憑き姫は、俯いたまま言った。言葉の通りに嬉しいのか、口元が僅かに釣り上がる。

それを見て律子が、「この子、怖い……」と心で念ずる。それが憑き姫に届いたのか、一度だけ憑き姫が律子に視線を上げた。

心臓を叩かれたように律子が驚き背筋を伸ばす。憑き姫の視線は、怯えた律子を数秒眺めるとまた、テーブルへと落ちる。

軒太郎が、そのようなふたりの素振りに気づいていながらも、無視して話を続けて行く。

「わいらって妖怪は、牛のような体に前足が一本ずつの鉤爪を持った姿で良く絵巻などに描かれることがある妖怪なんですよ」

「緑色じゃあないのですか？」

律子も疑問に思ったが、先に訊いたのは剛三のほうだった。彼もまたわいらを見ている人物。己が見たものと若干の異なりが存在した話に疑問を抱いたのであろう。

「それが、色々な妖怪の話を纏めたものだと、おふたりが見たように、緑色で蛙のようだったとか鰐のようだったといった書物も多くてね」

「妖怪の多くが曖昧な存在。所詮は恐怖や畏怖する人の心が想像した形なの」

誰とも目を合わせない憑き姫が言う。

「そうですね。しかもわいらの語源は、畏らい（わいらい）とも言われており、畏らいとは、かしこまる、その場に畏る、って感じの意味なんだよ。

わいらを見たとき、奴は這いつくばるように頭を低くしてなかったかい？」

「はい……」

律子が思い出し答えた。確かにどっしりとした体を低くして、這いつくばるように頭が低い位置にあった。

てつきり律子は、草むらに隠れて飛び掛ろうとしているのかと思っていた。

「他に『おどろおどろ』と言う妖怪がいてね。どちらの姿も這いつくばったような姿をしているんだよ。同一の妖怪だといった説もある妖怪なんだ」

「そうなんですか……」

「畏とは恐れや怖れ。怖いが、わいら。恐ろしいが、おどろしい。二体で一匹の妖怪にあるとか、一体の妖怪が二体に分かれたって説もあるのよ」

今度は憑き姫が自慢げに解説を演じる。軒太郎ひとりに良い格好を

させたくない様子だ。彼女も博学なところを見せびらかす。

「でも、そこまで行くと、マンガよね。ふっ」

そう言うと憑き姫は視線を横に流し鼻で笑いを溢す。とても小生意気に見えた。

「お話、有り難うございました」

軒太郎が、律子に話の礼を述べると席を立つ。

「では、次にバスの事故現場を調べてみましょうか。大塚氏、案内願います」

「はい」

剛三と憑き姫も席を立ちあがると、先に進む軒太郎の背中を追った。

「すみません」

店を出ようとした三人に、律子が声を掛ける。何事かと三人が振り返った。

律子は真剣な表情をしており、なんらかの決意が双眸に映る。

「皆さん、私も一緒に行ってもいいですか……」

小首を傾げながら僅かに考える軒太郎。その様子を剛三が見守る。判断を一任している様子だ。憑き姫は何も言わない。

「危険があるかも知れませんが」

軒太郎の言うとおりで。山には今まで話していた妖怪が巣くっているのだから。

四人の話をカウンター内から聞いていた律子の母は、心配そうに顔を曇らせていた。しかし、娘の行動を止めようとしていなかった。横目に剛三が、それを確認していた。

「責任、取らないわよ」

「ええ、いいわ」

憑き姫の言葉に律子があきりとした意思を込めて答えた。

「葵さんもいいですか？」

剛三がカウンター内に念のためなのか質問を飛ばす。その声に店主が笑顔で頷いた。娘の意思を尊重している。

「お母さん、ありがとう」

律子も母に笑顔で答えた。夏空の如く清々しい親子だと剛三は思う。話がまとまり、皆が店を出ようとした。

その時。

「ですが皆さん……」

四人が店を出ようとした時、葵が再び声をかけた。

「ですが皆さん、最後にお願ひがあります……」

葵は何やら云いにくそうな表情をしていた。

「なんでしょう?」

「お会計を済ましてから行つてください……」

確かに誰も会計を済まさずに店を出ようとしていた。
それだけは、流石に葵も許せない。

笑顔に青筋が浮かんでいた。

事故現場の夕日

喫茶店『葵』を出た四人は、剛三が運転する車で山中のバス事故現場を目指した。

幾つものカーブが続く山沿いの道。二車線の道は綺麗に舗装されている。

温泉街から市街に通じる国道の一本道。海沿いの道のほうが眺めも良く人気も高い。こちらの道は、擦れ違う対向車も少なかった。

「もう少しで到着します」

ハンドルを握る剛三は、助手席に向かって言うと、ルームミラーで一度だけ後部座席に座る少女ふたりをチラ見する。

助手席に座るのが軒太郎で、後部座席に憑き姫と律子が座っていた。

車内にこれと言った会話は無い。剛三が、新鮮な空気を裂いて車を走らせるだけだった。

山林の隙間から時折見える絶景を、目を細めて憑き姫がガラス越しに眺めている。

「わいらと言う妖怪。倒せますか？」

唐突に訊く剛三が、隣の席に座る男を見た。

問われた軒太郎が、黒縁眼鏡を外すとハンカチでレンズの汚れを丁寧に拭く。

「まあ、倒せないレベルでないでしょうね」

「そうね。おどろおどろと同等の強さと計れば、問題ないでしょうね」

後部座席の憑き姫が、窓の外を眺めながら会話に参加してきた。軒太郎が、拭いた眼鏡を掛け直す。

「こちらはふたり、あつちは一匹。戦力的にも上。逃げられることはあっても、遅れは取らないでしょう」

「そうですか」

剛三が話を聞いて安堵する。最近ごたごたが続いている為、今回の妖怪騒動も早く決着を付けたいのだ。

正直なところ、安心できる夏を過ごしたい。

「ですが、まずは調査が先決。戦力的に優勢でも迂闊は禁物です。万全を期して挑まなくては痛い目をみますからね」

「相手の弱点を調べ上げる。 戦略的に知っていて損はないわ」

「徹底してますな……」

「プロですから」

そのような会話を車内で行なっていると、間もなくバス事故の現場に到着した。

景色の良いカーブの一角。数メートルほど綺麗にガードレールがなくなり、即席の三角ポールが立っていた。

「到着です」

事故現場のカーブから少し離れた直線道路に、剛三は車を横付させて停車した。追突されなかったためにだ。

車が止まると皆が降りて行く。律子の表情は、辛く恐ろしい記憶が残る現場を再び目の当たりにして、表情を厳しく強張らせる。歩む足取りも重い。

そんな律子を余所に三人は、ツカツカとガードレールがなくなったカーブを目指して歩いて行った。

山の下から吹き上がる風が、憑き姫の長い黒髪と白いワンピースの裾を揺らしていた。

失われたガードレールの外は、かなり急角度の斜面だった。既に転落したバスの姿はないが、未だ事故の傷跡が残っていた。小さな草木を薙ぎ倒した痕跡がはつきりと残っている。

20メートルほど下で、横向きにバスが激突したのか、傷を付けた杉の木が、数本横を向きながら生皮を剥がされ事故の悲惨さを告げていた。

事故現場は、随分と踏み荒らされている。怪我人の救出や、事故処理の作業の為に大勢の人が、この急斜面を降りて行ったのだろう。

下を見る三人に追いつき並ぶ律子が、荒れた藪を見てわいらの姿を思い出し、目撃した辺りを指差す。

「あの辺です。私かわいらと呼ばれる妖怪を見たのは……」

指差す場所は、斜面の底。踏み固められた雑草と並ぶ山の木々との間だった。

「じゃあ我々は降りてみますから、お二人は此処で待っていてください」

そう言つて急斜面を降りようとする軒太郎。その軒太郎に憑き姫が手を振っていた。

こんな時ばかり可愛らしい笑顔を作っている。ずるい。

「行つてらっしゃい」

「お前も来いよ！」

「エー……」

「えー、言つな！」

「ぶう〜」

「頬を膨らませて可愛子ぶつてもダメ！」

「ちっ」

「急にやさぐれるなよ……」

「分かったわよ、行けばいいんでしょ」

「自を出すな……」

そのような会話を繰り返して斜面を下るふたり。律子と剛三が呆れて苦笑いを見せていた。

それにしても器用だった。崖ともいえる角度の斜面をふたりはロープもなしに降ったのだ。斜面に生えた草木のみを掴んでだ。軒太郎だけならともかく、華奢に見えた憑き姫も同じようしにて下まで降りて行った。

斜面を降りたふたりが辺りを見回す。

「どうだ、憑き姫？」

「うん、微かに妖気が残留しているわ。微々たるものだけど……、ん？」

軒太郎の質問に答えながら憑き姫が、押しつぶされた草むらの陰に何かを見つける。そっと手で草を退けた。

「ねえ、軒太郎、これ」

「なんだ？」

憑き姫に呼ばれ、軒太郎が側に近づく。憑き姫が草むらの陰に見つけたものは、大きな岩だった。一人二人で動かせそうなサイズではない。

「こいつは、祠かな？」

草の束を掃うと、岩の全体図が現れる。

卵型の平べったい岩だった。かなり古そうな代物。

表面に何か梵字のようなものが掘り込まれているが、随分と雨風に晒されて削げ落ちており、何が彫られていたか判らない。

「此処にわいらが封印されていたのか？」

「そうね。妥当に推測したのならば、それが一番濃厚だわ」

ふたりの意見が一致した。

他に目立った手がかりは見つからない。しばらく辺りを探索したふたりは、律子と剛三が待つ路上へとよじ登って行く。思ったより成果は少ない。期待が外れた。

「下に祠らしきものがありました。崩れて役割は果たしていませんでしたがね。

大塚氏、何か心当たりはありませんか？ 地元の昔話とかでも良いですから？」

「いいえ、昔話どころか妖怪が出ると言った話すら聞いたことがありません……」

「そうなの、役に立たないわね」

「えっ！」

ツンつと横を向き言い放った憑き姫の言葉が、老人のピュアな心を惨く突き刺す。

「祠ってなんですか？」

青ざめる剛三を余所に律子が訊いた。それに軒太郎が丁寧に説明する。

「基本的には神様を祭る神社と役割は代わらない物だよ。妖怪を封印したり、悪霊を鎮めたりとかにも使うが、大体が壊せば罰が当たる代物かな」

横を向いていた憑き姫が、軒太郎の言葉に続く。

「私たちの仕事の中に、建設現場にある祠を取り壊す代行業もあるのよ」

「そうなんですか」

「ええ、祠壊しや御神木倒しの代行は儲かるの。癖になるわよ」

「嫌な癖ですね……あはは……」

乙女たちふたりの会話を無視して剛三が軒太郎に話しかける。

「祠の下に、わいらが埋まっていたってことですか？」

「はい、そんなところです」

腰を45度に曲げた軒太郎が、スポンの裾に付いた泥を掃いながら答える。

「おそらくバスが転げ落ちた際に巻き込んだのか、別の理由で崩れた祠から飛び出したわいらに驚いて運転手がハンドルを謝ったか……」

推測した軒太郎の顔を、律子が大きく目を広げながら直視した。話の後半に、思ひ人の呪いを解く鍵を見つけたようだ。これで町の

人たちが抱く昂輝への誤解を消せるのではないかと考えていた。後者であれと強く願う。

「でも、真相を知るのは、わいらとバスの運転手のみ。片方は死んでるわ。死人に口なしよね」

律子の眉間に皺が寄る。

憑き姫は語り続けた。

「わいらに聞くにもめんどくさいわ。どうせ今更真相なんて私たちに関係ないこと。わいらを殺して一件落着ね」

「そうだな」

「そんな!？」

ふたりの話に律子が怖い顔で詰め寄る。しかし、何故にといった表情で軒太郎と憑き姫が、少女の憤怒を眺めていた。

律子も気づく。このふたりの退魔師は、真相解明が勤めではない。あくまで妖怪退治だけが役目なのだ。

この町には、御神木を倒す代行役のように、町の人々に代わって、妖怪変化を倒しに来ただけなのだ。もっと明確な話、町の人たちに見れば、妖怪の脅威から身が守られればいいのだ。五代家への誤解を解く必要すらないのだ。

周りの状況を悟った律子が寂しく肩を落とす。その姿を夕日が照らし始めると、軒太郎が空を見上げた。夜が忍び寄って来ようとしている。

「そろそろ町に戻りましょうか。日が暮れます」

「そうね」

「今日はわいらを退治しないのですか？」

訊く剛三に、首だけ振り向く軒太郎。

「夜は妖怪の時間です。昼の弱い時間帯に寝首を狩るのが最善。それに今は民間人がふたり居ます。調査に同行を許しても、戦闘時となれば大きな荷物でしかありません。ご理解してください」

「そ、そうですね」

軒太郎の言う事にぐうーの音も出ない剛三は、言われるままに車へ戻った。

四人が車に乗り込むと、町を目指して引き返して行く。

赤い夕日の明かりが差し込む車内。

後部座席に座る律子の表情は俯き沈んでいた。

結局、五代昂輝の父への誤解は、解けそうにない。それが心残りだった。

現れる怪物

剛三が運転する車で、町へと引き返し始めた四人。バスの事故現場を離れて僅か10分たらずしか経っていないが、辺りの景色から夕焼けの赤が抜け落ちて薄暗くなっていた。

剛三が、車のライトを照らす。

軒太郎曰く、わいらと思われる妖怪の探索は、明日の朝から開始するそうだ。

今晩は町のホテルに泊まり、温泉に浸かり、美味しい料理を食べて、少しだけ旅行気分を満喫してから妖怪退治を頑張るらしい。実に暢気なものだと剛三は、浅い溜息をこぼしていた。

走る車は薄暗い峠を緩やかにくだり続けていた。

ふと、ハンドルを握る剛三の前方に、奇怪な何かが飛び込んでくる。ヘッドライトに照らされながら、道路の進行側斜線を塞ぐように寝そべる何か。

剛三が叫んだ。

「わいら!」

道路の真ん中に寝そべるのは、紛れもなく家の窓から見かけた化物と同一。

牛のように大きな体、緑色の皮膚。

四つんばいにしゃがみ込んでいるような姿勢で、鰐の如く大きな口を持った頭は、何故か低い位置にあった。ベッドライトに目が光る。

剛三は驚きハンドルを切ろうとした。だが動かない。脇から軒太郎が手を伸ばし、ハンドルを掴んでいた。まるで万力で固定されたかと勘違いするほどの力である。

「止まるな、引いちなえ！」

呟く軒太郎の声色に、思わず剛三は全快までアクセルを踏み込む。車のエンジンが獣の如く咆哮を吠えた。そのままわいら目掛けて突っ込んで行く。

「うわわわー！！」

老人の口から混乱した声が叫ばれた。ハンドルを両手で強く握り締め、瞼を閉じる。

突進してきた車に対してわいらは、上へと跳躍して車体を飛び越えた。

「ちっ」

軒太郎の舌打ち。

目を強く閉じた剛三は、額をハンドルに近づけ俯き前を見ていない。ブレーキを踏みながらガードレールに車体の脇を擦りつけると車は止まった。

タイヤの焦げた臭いが辺りに広がる。

軒太郎と憑き姫が車外に飛び出す。

「そっちからお出ましか、手間が省ける！」

「いい覚悟よね。私たちを襲うなんて」

薄暗い国道の上で睨み合う三人。

わいらの双眸が怪しい色に輝きふたりの退魔師を睨みつけていた。

「何ヤラ、妖気ヲ感ジテ追ッテ来テミレバ、普通ノ人間ナノカ？

マアイイ、普通ノ人間ノ肉ハ、美味クナイウエ、妖気モ少ナク生モツカナイ。

貴様ラフタリヲ喰ラツテ、妖気ヲ蓄エルカ」

「かたごとの日本語しかしゃべれないのに、大きなことを言うわね。殺してあげるわ」

自分たちを喰らうと言うわいらに、憑き姫が鋭い眼光を向ける。すると彼女の左手の上に、魔道書にも似たカードファイルが一冊現れた。

「大塚氏、一旦お逃げなさい。終わったら携帯で連絡しますから」

「ダメです三外さん。ガードレールにぶつかったショックでタイヤがパンクしています！」

「じゃあ、早くスペアに変えなさい！」

「は、はい！」

軒太郎がイラつきを見せる。

そして黒縁の眼鏡を外した軒太郎が、怪しい瞳をわいらに向けた。

律子は車内からふたりの背中を見ていた。此処に来て初めてふたりから、人でない気配を強く感じ取った。何かが怖い。

律子が見守る中、軒太郎の足元に、タールのような真っ黒な影が広がっていく。そして生き物の如く波打つ漆黒は、軒太郎の脚を染め替えるように登り全身を包み込むと、黒い衣類に変わって行く。

軒太郎の風貌が一身する。

黒いバンガロンハット、黒いロングコート、黒い上下のスーツ、黒のカウボーイブーツ。

黒、黒、黒、黒。

ワイシャツと首に巻くマフラー以外は、真っ黒な姿だった。おそらく心も黒い。そんな表情だ。

髪の毛も灰色の長髪に変わり、先程までのセールスマンのような風貌は、欠片も残っていない。別人である。

一方、憑き姫が、クリアファイルの中から一枚のカードを取り出すと、カード名を唱える。

「茨巫女 ザ・ホーリーコスチューム」

唱えた憑き姫がカードを宙に投げると、突然カードが輝き巫女の姿をした少女がひとり現れた。

まるで幽霊の如く両脚が地面から離れており、プカプカと浮いている。憑き姫と同じくらい長い黒髪と赤い袴が、風もないのに揺れて

いた。

そして巫女服の少女が風に流されるように後ろに下がり背中から、前を向いた憑き姫と重なり合っていく。

すると憑き姫のワンピース姿が、巫女の衣装へと変わった。

「変身したわ……」

変わるふたりを見ていた律子が呆然としている。

衣装が変わったふたりが、一步前に出た。威圧に空気が重たくなる。わいらも相手が発する妖気の大きさを感じ取っていた。

「貴方の魂を、私のコレクションに加えてあげるわ」

「お前の骸は、俺様が頂くぜ！」

「ヤハリ妖怪力、貴様ラモ！」

憑き姫がクスリと笑う。

「いいえ、ほんのちょっとだけ、人間の粹をはみ出しただけよ」

軒太郎が怪しく笑う。

「元々は人間。ただ独自の妖術と、独自の科学を極めてしまっただけだ。一種の天才なんだよ」

「御託ハイライナイ。イイカラワレニ喰ワレロ！」

大蜘蛛は、奇怪な声を上げると、わいら目掛けて粘着糸を、投網のように広げて吹きかけた。

だが、いち早くわいらが気づく。後方に跳躍して蜘蛛糸の網を回避した。巨体のわりに意外と俊敏である。的を外したネットがアスファルトにへばりつく。

鬼々蜘蛛の姿が霧となってかき消えると憑き姫は、次なるカードを取り出した。

「鎌鼬 ザ・ブラザーズカッター」

投げたカードの中から鎌鼬三兄弟が現れ、両手の鎌を鋭く構えた。憑き姫の前方に並ぶ三匹が、鋭い瞳で口元をニヤリとさせると、鎌と牙がキラリと輝く。

「ナンナンド、妖怪ヲ操ルノカ、コノ小娘ハ!？」

声を抗えるわいらに向けて、三匹の鎌鼬が真空の刃を放った。

鋭い空気の斬激が、景色を切り裂きながら飛んで行く。その数六激。

「コレハ不味イ!」

わいらが逃げる。

しかし鎌鼬たちが放った斬激の幾つかは、わいらの体を傷付ける。緑色の体から赤い飛沫が鮮やかに散った。わいらの口から苦痛が呻く。

逃げるわいらに軒太郎もショットガンを二発乱射した。発射した軒太郎の毛針弾丸が、ガードレールに当たり火花を散らす。

二発とも外れた。

わいらはガードレールを飛び越え、急斜面に並ぶ山林の中へと逃げ込んで行く。

「ちっ!」

舌打ちをこぼす軒太郎が、わいらの逃げた先をカードレール越しに覗き込む。逃げるわいらの姿が山林を降って行くのが見えた。木々が邪魔でショットガンでは狙いがつかない。しかし、残りの一発を、この際だから撃ってみる。

「ちっ」

やっぱり当たらない。舌打ちを繰り返す軒太郎であった。

「追っ?」

背後から憑き姫が訊く。

「まあ、今日のところはいいさ。民間人も居るし深追いは禁物だ」

「そうね。そうしましょうか」

「相手の力量も解ったことだしな。たいした奴ではない」

軒太郎に憑き姫が答えると、軒太郎がわいらの逃げた先を信じられないといった表情で覗き込む。

「なんだ!？」

「どうしたの?」

驚く軒太郎の横に憑き姫も並んで下を見る。

「あら、どうなってるの?」

「さあ?」

憑き姫もキョトンとしていた。逃げた筈のわいらが引き返してくる。形相も必死だ。

ふたりがガードレールから後退り身構えた。するとわいらが道路へ飛び出してきた。

「ヒイヒイヒイ……!!」

悲鳴を上げるわいらは、軒太郎たちとは別の方へと走り続ける。そして、わいらを追って何者かが、斜面から飛び出してきた。

「なんだ!？」

パンクしたタイヤの交換をしていた剛三も気づき声を上げた。

飛び出して来たもの、それは人型。

狼の頭部を持った獣人であった。

わいらを追って現れた獣人は、後太郎や憑き姫に気づき足を止める。今度は蜘蛛のように反対側の岩肌を登り始めたわいらは、半分ぐらい登ったところで向きを変え、下の様子を確認していた。

「あの服！」

ことを車内から窺っていた律子が、狼の頭部をもった獣人が身に付けている洋服を見てあることに気づく。

黒いTシャツに、Gパン。

間違いない。あれは、此処に来る前に会っていた元クラスメイトが着ていた服と一緒にだった。

「何者です、この狼男は!？」

剛三が問うように叫ぶ。

「ライカンスロープだ」

軒太郎が答える。

「ウルフチェンジャーよ」

憑き姫が訂正する。

「あれは五代くん！」

律子が名を呼んだ。

全員正解！

軒太郎 & amp; 憑き姫、それにわいらと狼男。
三つ巴の睨み合いが始まった。

山中の戦い

灰色狼の口元が、狂犬病の如く牙を剥いて威嚇を露にしていた。太く硬そうな灰色の髪が殺気に揺れて、伸びた鋭い爪が両手の先で鋭く輝く。

突然現れた新たな怪物の登場に驚く剛三が、パンクタイヤの交換作業の手を休めてしまう。

その横に車内から出てきた律子が、祈るような表情で立っていた。

「あれが、五代の息子なのか……？」

「……………」

律子に剛三が問うが、少女は答えない。呆然と狼男を見ていた。だが、確信している。あれは間違いなく五代昂輝だと、獣に変わっても律子には悟れた。

「何者？」

冷めた鷹揚で憑き姫が訊いた。その言葉に狼男が視線を彼女に向ける。

獣の瞳は、思ったよりも優しい。

『あなた方が、妖怪退治に呼ばれた退魔師さんたちですか？』

「テレパシーか」

しゃべる狼男の口は動いていなかった。軒太郎の言うとおり、テレ

パシーで皆の心に直接語り掛けてきている。

『すみません。あの化け物に訊きたいことがあるので、退治する前に暫し私に時間をくれませんか？』

「ほほう、まっとうな話し合いが出来る知能を持っているか」

軒太郎の言葉は、目の前の狼男を対象にしていた。怪しく舐めるような視線で狼男を観察している。

それは、彼の骸を欲する眼差しだった。

憑き姫もコレクションに狼男を加えたいのか、欲に満ちた甘い表情で見ている。

狼男と化した五代昂輝は、わいらから事故の真相を訊きだしたかった。

父が事故を起こした理由が、わいらに驚きハンドルを誤ったのか？

それとも父が事故を起こした為に、わいらの封印が解けたのか？

そして、自分がこのような姿に変化してしまったのは、事故に関係しているのか？

わいらならば、何かを知っているのではないかと探しに来たのだ。

「好キカツテヲ、又カシオツテ！！」

岩肌の斜面にへばり付くわいらが威迫を吠える。

その言葉が癩に触ったのか、軒太郎が黒コートの中から煌く刃を持った武器をふたつ取り出した。

「新しい作品だ。是非とも君らに見てほしい！」

軒太郎が取り出した武器は、先日倒した鎌鼬三兄弟の鎌から作り出した三身刃の大型手裏剣ふたつ。

「切れ味はいいぜ！」

三匹片手ずつの鎌三枚を組み合わせ造ったふたつの手裏剣を、両手の人差し指で皿回しの如く器用に回す軒太郎は、完全に殺る気満々の形相だ。

そして昂輝の話も聞かずに、回転を極める三身手裏剣を投げ放つ。

『ちよ！』

「ナナナナナッ！」

狼男とわいらを狙った軒太郎の攻撃。

軒太郎は、完全にふたりを狩り取る積りのようだ。

投げた手裏剣が、緩いカーブを描きながら二体の妖怪に迫る。

『待ってください！』

狼男は、回転しながら飛んでくる三身手裏剣を、真上に飛んで回避した。

人とは思えない跳躍。地面と足の距離が、優に2メートルは離れていた。

その下を投げた手裏剣が過ぎて行く。

「キャンー！」

一方、わいらのほうは、飛んできた手裏剣の刃に肩を刻まれ悲鳴を上げると、赤い血飛沫を散らしながら斜面を転げ落ちて行く。

ふたりを狙った三身手裏剣が、薄暗くなつた空を回り軒太郎の両手に帰ってきた。

軒太郎が体を回転させながら手裏剣の勢いを殺すようにしてふたつを次々キャッチする。

その表情は、自信作の出来に満足した優越感を溢れさせていた。

そしてキャッチした双子の大型手裏剣を再び振り投げる。今度はわいら目掛けてふたつ同時だった。

鋭く回転を増す三身手裏剣が、わいらの顔面にザクザクと突き刺さる。

手裏剣は、突き刺さつたまま尚も車輪の如く縦に回転していた。

わいらには、悲鳴を上げる余裕すらない。顔面から悲鳴に代わって鮮血が飛び散った。

『なにを！』

昂輝の叫びと共に、顔面を三等分にされたわいらの巨体が、力無く地面に崩れ落ちた。絶命の合図だ。

そこまで来て手裏剣の回転も止まる。

「何もへつたくれもないわ。これが私たちのお仕事だもの」

憑き姫がそう言いながら空のカードを取り出す。

彼女の台詞は、何ひとつ間違っていない。軒太郎は真面目に仕事をこなしたただけだ。

血塗れで動かないわいらの死体から、ユラユラと白い塊が浮き上がってくる。わいらの靈魂だ。

白い尾を引き飛び交う靈魂は、やがて憑き姫が持つ白紙のカードの中へと自ら飛び込んで行く。

それを見て憑き姫が、満足そうに微笑んでいた。

そして残されたわいらの亡骸が、軒太郎の足元から伸びた漆黒の影に沈んで行く。まるでタールのプール内に沈み行く様だった。

「ふふふ、牙や鉤爪は武器に使えるそうだな。革も多く取れそうだ」

顎をしゃくり笑みを造る軒太郎。影の中に亡骸を回収すると、更なる獲物を狙うように狼と化している昴輝を見た。

軒太郎と憑き姫の視線は、明らかに獲物を見る目だった。口元が笑っている。

「今度はお前さんだぜ」

そう言い漆黒のロングコート内から、シルバーに輝くハンドガンを一丁取り出す軒太郎。

右手にあるのは、コルト・バイソン、357マグナム。

様々な映画やアニメで使用されるシーンが多い拳銃。リボルバー式の中でもエリートと呼べる一品である。

そして軒太郎が取り出した拳銃は、M1100ディフェンダー同様

に普通でないカスタムマイズが施されている。

キラリと輝くシルバーのボディは、西洋の古い教会から失敬してきた銀の十字架を溶かし出して表面コーティングに使用している。弾丸も普通の鉛ではなく、人型妖怪の骸から指先を切り落とし代わりに詰め込んだ、退妖怪用の特殊弾丸である。まさに指鉄砲だ。

妖怪はもちろんのこと、神や悪魔にも有効な代物である。

握られた拳銃をゆつくりとした動きで構える軒太郎。眼前の狼男に銃口を向ける。

真っ直ぐに伸ばされた右手の先から引き金を引く音がカチャリと鳴った。

火薬の炸裂音が響く。

刹那、昂輝の胸に風穴がひとつ開き、鮮血が背中から飛び散る。貫通した弾丸が、後方にあつた杉の木の枝を揺らした。

『ううう！』

昂輝が獣の顔を歪めて胸を押さえた。

「五代くん！」

車の側に立っていた律子が、撃たれる昂輝を見て飛び出した。その足で軒太郎に迫る。

「何するんですか三外さん。彼は人間です！」

怒鳴り散らす律子の顔を軒太郎が上から覗き込む。

「何を言っているんですか、お嬢さん。どう見ても怪物じゃないですか？」

軒太郎の言うとおりで。律子が反論の言葉を一瞬失い怯む。そこに軒太郎が、追い討ちの言葉を掛ける。

「それにね、お嬢さん。我々の仕事はわいらの退治。ここからは私たちのプライベートです」

更に憑き姫が続く。

「そうよ。私たちの趣味は妖怪を退治して、その魂と骸を集めること。今は貴方にどうこう言われるタイミングじゃあないわ」

「でも……」

軒太郎と憑き姫の言葉に戸惑いを見せる律子。

確かにふたりの言うとおりで。しかし納得がいかない。

ふたりの言うことが正しくとも、密かに恋心を抱いた相手が殺されそうになっているのを黙って見ていられる訳がない。

例え怪物に変わり果てても律子にとって昂輝は、人間だった五代昂輝と代わらない。ほんの数時間前に公園で話をしたばかりなのだ。そう容易く心が変わる筈もない。

『つうつう………』

胸を撃たれた昂輝がテレパシーで呻く。その声を聴いて、化け物と化していようと心配が消えない相手を見た律子が、昂輝の元へ走り出そうとした。

その瞬間である。

己の脇を通り過ぎようとした律子の首筋を狙って軒太郎の左手が伸び進む。

律子の喉元に忍び込んだ軒太郎の左手は、人差し指と親指だけを立てた田舎チヨキの形。

まるで自然の微風のように入り込み、彼女の首筋に流れる左右の頰動脈を、優しく二本の指で押さえ込む。

「え……」

異常は直ぐに現れた。抵抗を見せる暇もなく律子が白目を剥いて崩れだす。

それを軒太郎が片腕で受け止めた。

「大塚氏、この子をお願いします」

「はい！」

直ぐに剛三が駆け寄り律子の体を受け取った。

『な、なんてことを！』

気を失う律子を見て気が動転した昂輝が牙を剥いた途端、彼はアスファルトを蹴って軒太郎に飛びかかる。

「胸の傷が、治っているのか？」

軒太郎は、怒りのままに走り出した狼男の脅威よりも、その胸を見詰めていた。

先程撃ち込んだ弾丸での一撃。その傷が消えていた。

弾痕だけではない。飛び散り、流れ落ちた筈の血痕も見当たらない。

あれは普通の弾丸でないのだ。自己治癒に優れた妖怪でも一日そこらで治る筈のない攻撃。それを喰らい一分も待たずに回復している。軒太郎の造った指鉄砲は、ヴァンパイアでも殺せるのだ。この狼男の回復力は、異常と呼べる早さである。

「あら、リジエネレーターよ」

他人事のように言う憑き姫。しかし新たな獲物に嬉しそうな顔をしていた。そしてカードを取り出し彼女も戦闘態勢を取り直す。

迫る狼男に向けて、軒太郎も再びコルト・パイソンを構えた。銀色の銃身がキラリと輝き銃口が昂輝を狙う。

リジエネレーター

「妖力で回復しているのか？　ならば、この魔道弾丸で妖力の総てを削り取ってやる」

走る昂輝に銃口を向けながら呟く軒太郎の黒い姿が、闇に重なり合い奇怪さを増して行く。

「死ぬまで殺し続ければいいのよ」

憑き姫の冷酷なまでの言葉が飛ぶなか黄昏が陰に隠れ、薄暗かった空が闇へと移り変わる。気づけば立ち木の枝が隠す空に、鮮やかに星が煌き、魅惑的に月が潤んでいた。

山中の峠道。

この世のものとは思えない異様な戦いが勃発してから10分近くの時間が過ぎたが、幸いにも通行する車の姿は一台もない。ことは大袈裟を免れていた。

狼男へと変化した少年が速いダッシュを見せると、銀色の銃口が二度火を放つ。

轟音と共に二発の弾丸が狼少年の胸を捕らえて穴を開ける。

一発目で少年の走る足が止まり、二発目で前に進んでいた体が後ろに下がる。

火薬の香りが煙の層となって空気を染めていた。

日本人では嗅ぎ慣れない香りが、流れる微風と一緒に剛三の嗅管ま

で届く。

狼少年の面容が苦痛に耐えながら力を強めて、下半身が力少なく揺れていた。

普通なら倒れるダメージ。しかし少年は倒れない。

「ちっ」

火花を散らした軒太郎が少年の様子を見て舌打ちをこぼす。

暗闇と化していく視界の中、妖力で鍛え上げられた軒太郎や憑き姫の視界には、はっきりとそれらが窺えた。

「血が、傷口に戻って行くわ」

憑き姫の言葉どおりであった。

黒いTシャツに開いた小さな穴から飛び散った血痕が、奇怪にも巻き戻り弾痕の中へと吸い込まれて行く。黒いTシャツを赤く濡らした染みが、引き潮の如く戻って行く。

それらは一瞬の間に行なわれた。

胸を押さえた狼少年が、痛みから精神の回復を遂げると、怒り心頭なのか牙を剥き、涎を垂らして威嚇を強める。

刃物や銃での負傷。親しかった女の子への攻撃。それらが憤怒に変貌し、冷静な感情を少年から奪い去って行く。

そしてまた少年が進行を再開した。諦めず軒太郎に向かって行く。

「おもしろくな、少年ボーイよ」

黒に包まれる軒太郎がロングコートの袖を陰に、不気味な微笑みを作る。怪しい眼差しが余裕のままに嘲笑う。

その顔面を狙い狼少年が喉を鳴らして拳を繰り出す。真つ直ぐなストレートパンチ。

しかし、激昂に握られた拳は容易く避けられ不覚に闇中を空振る。熱い拳が、顎を引いた軒太郎の失笑する眼前で止まる。届かない。

「ガールルルルウウウ!!」

更に振るう二発目のパンチは、横からの大振りのフック。

素人丸出しの予備動作が大きい攻撃だった。扇風機のように風を仰ぎながら振るわれたが、狙われた軒太郎は、頭を低くして難なくかわす。

「化け物君は、ケンカの素人かな」

しゃがんだ軒太郎が笑いながら言うと、下から狼少年の顎へと銀色の銃口を付き当てる。

暖かい銃口の感触が、少年の背中にゾクリと冷たい戦慄を走らせる。

そして引き金が引かれた。

鳴り響く銃声と共に少年の体が仰け反り飛んで行く。

顎下から撃ち込まれた弾丸が、脳天を貫き火山のように血肉を噴火させた。

よろめく少年が、一步二歩と後ろに下がる。しかし頭部の傷が素早く回復して、倒れる事無く前を睨み返した。

「ちっ」

「凄いリジエネだね。これじゃあ軒太郎の武器も玩具同然ね」

連れを嘲る憑き姫の台詞が、舌打ちをこぼした軒太郎を更に苛立たせていた。

余裕の笑みを消した軒太郎がパイソンを真っ直ぐ構え、狙いを定めて発砲した。シリンダーに残ったふたつの弾丸を撃ちつくす。

二発の弾丸は、連続して狼少年の頭部を撃ち貫いた。一発は額、一発は右目。後頭部が肉片を散らす。

『うが！』

少年の両膝が、力無くガクリと曲がった。しかし直ぐにバランスを取り戻す。撃たれた顔面も既に回復を遂げていた。

軒太郎の攻撃は、完全に効いていない。

妖怪の指を弾丸に使用して靈力を高めた自慢の指鉄砲を、六発全弾喰らいながらも狼少年は、絶命を僅かにも見せずに立っていた。

「憑き姫！」

軒太郎が相棒に援護を求めた。すると憑き姫は、手にあるカードを投げて呪文を唱える。

「わいら ザ・ボディーアタック！」

投げられたカードが輝くと、さきほど軒太郎に倒されたばかりの妖怪わいらが姿を現す。

既にわいらは、自分が殺されたことを忘れてしまった様子で、憑き姫の命令のままにアスファルトを蹴ると、真っ直ぐ昂輝に向かって突進して行く。

操られている魂には、記憶が残留していない模様だ。

『うわぁ！』

横から不意打ちのようにわいらの体当たりを喰らった昂輝が、そのままわいらの巨体に押されて、岩肌の斜面に叩きつけられる。

それでもわいらの突進は止まらない。足を踏ん張り昂輝を押しつぶそうと体を押し込む。

まるでブルドーザーの如く猛突なパワーだった。

『ぐうううう………』

岩肌とわいらに体を挟まれ動けなくなった少年が、苦しい思いをテレパシーで切なく表現していた。

挟まれた体を捻つてもがく。

「そのまま固定している！」

憑き姫に向かって叫んだ軒太郎が、黒コートの中から三身手裏剣を再び取り出すと、右、左と順に投げた。

体を挟まれ動けない昂輝にふたつの手裏剣が、闇を切り裂きながら迫る。狙われた昂輝は、わいらによって避けられないために、両手を眼前に立ててガードを築いた。

しかし、それも無駄な抵抗となつる。

軒太郎の三身手裏剣ふたつは、両手のガードごと昂輝の首を切り落とす、背後の岩肌に音を立てて突き刺さる。

切断された昂輝の両手と生首が、ゴロリとわいらの背中に落ちて転がった。わいらの背中が、昂輝の首から飛び散ったもので鮮やかに赤く染まる。

「首を落とされたら流石に死ぬだろうさ」

軒太郎がそう言うと、憑き姫も同じことを考えていたのか口元が笑う。これで狼少年の魂と骸が手に入ると。

だが、ふたりの期待は思いのほか早くに裏切られた。

わいらの背中に転がった昂輝のパーツが、流れを巻き戻す血液に引かれて、元の位置に戻って行く。

「おいおい、いい加減に死ねよ……」

軒太郎がそう言い愚痴り終わる頃には、昂輝の首が繋がり、傷口が綺麗に消えて行く。わいらの背中が、元の色を取り戻していた。

闇夜の山道、狼の双眸に光が蘇る。化け物に似合わない正義感が満ちていた。

術の効果が切れたのか、少年を力任せに束縛していたわいらの巨体も幻のように消えて行くと、岩肌に背を付けていた昂輝が一步前に出た。

ズシリと威圧に闇と空気が押されて揺れる。

狼少年は、首を撥ねられたことで少し冷静を取り戻した表情をして

いた。だが、威嚇の態度と視線は続けて止まない。

三人の間で牽制に似た空気が流れる。

「欲しいな」

不死身の骸を欲する軒太郎が呟くと、その声が静かな山の寝息に混ざり合う。

「まったくだわ。あの狼男のリジエネレートは、普通のレベルじゃないしね。

あれ程の回復スピードなんか見たこと無いもの。心が躍るレアリティーだわ。

どのようなカードになるか楽しみ」

憑き姫の台詞に、狼少年が宿す魂への期待が見えた。

剛三が車の側に律子を寝かせると、三人のやり取りを眺めていた。しかし暗くて良く見えない。車のヘッドライトは、戦う三人とは逆の方を向いている。

ほとんど剛三は、シルエットだけで三人の動きを追っていた。

「頭を撃つてもダメ、首を切り落としてもダメ。 並大抵じゃあ、

死んでくれないようだな」

「だからこそレアリティーが高いのよ」

獲物の価値を正確に評価した二人は、珍しい存在に歓喜していた。子供のように笑顔がはしゃいで花咲く。

この獲物は逃がせないと瞳がランランと輝く。

絶対不死

バンガロンハットのつば陰に双眸を隠しながら、変り行く山中の闇夜と同化する程の深さを持つ黒コート裾を揺らして抜き出されたアイヌの双子刀いべなむ二本。

それぞれの掌に握られた刀の切っ先が青白く妖気を溢し山中に踊る。

「これで斬り刻む！」

軒太郎が攻め出る。

二刀を構える軒太郎のダツシユは疾風の如く速かった。あつと言う間に昂輝を剣術の間合いに捕らえて逃がさない。

身体能力の成せる速度とは思えない動きである。何か鍛錬に鍛錬を積み重ねた特殊な歩法の術のように感じられた。

三外軒太郎。ただ妖力と威力が高い武具に頼り戦っている男ではない様子だ。

何やら武芸武術を心得ている動作である。

そして幾つの武具が収納されているかが不明な黒コートから抜き出された妖刀が、妖力に輝きふたつの閃光が暗夜を切り裂き昂輝に迫る。

『うがあっ！』

昂輝が苦痛に対して素直な声を上げた。ふたつの切っ先が、狼の胸と腹を二の字に斬り裂く。

しかし軒太郎の剣技は止まらない。まるで踊る仕草にも似た剣術で狼少年を連激のままに斬り続ける。

胸を斬り、喉を裂き、腹を突き、頭を割る。

だが、全身を何度も何度も刻まれる狼の血飛沫は、飛び散り地面に鮮血の花を散らすよりも早く傷口に戻り、二刀によって更なる傷が刻まれる頃には痕跡を恐ろしい速さで消して行く。

「なんて奴だ!？」

斬り続ける軒太郎が腹ただしいのか嬉しいのか判り難い苦笑を表す。

「ならば、ぜいっ!」

妖刀二本が上と下に振られる。

気合の入った降り切りと登り切りの剣激が昂輝の両腕を、肘の上辺りから鮮やかに斬り落とす。毛むくじやらの両腕がアスファルトに転がった。それを軒太郎が、逆手に持ち替えた刀で串刺しに捕らえる。

これで動く血液に引かれて腕が体に帰ることは出来ないだろう。

「未だ、憑き姫。頭を吹き飛ばせ!」

「ええ、わかったわ」

新たな妖怪カード。描かれている絵は、波打つ海の上で靡く炎の列。

霊現象 『不知火』

透き通った声が呪文を奏でる。

「不知火 ザ・ファイアーボルト」

憑き姫が投げたカードが輝くと、衝撃的な炎のラインが鋭く裂光を残して飛んで行く。

まるで戦車砲の一撃。

呻る轟音と共に炎の弾丸が、真っ直ぐ空気を抉りながら飛んで行く。それは昂輝の頭をスイカの如く木っ端微塵に吹き飛ばした。

そして炎の弾丸は、後方の岩肌に炸裂して減り込みグラグラと地を揺らしすと、岩肌から小石がころげ落ちて来る。

昂輝の首から上が綺麗になくなっていった。

「うし、これで死んだな」

憑き姫の超激を見て軒太郎が言うと、彼の持つ刀で串刺にされている両腕が赤い霧と変って地に流れ這う。

「なんだ？」

消え行く両腕を見ながら、赤く変った霧の進む先を目で追う軒太郎。そこには首を失っても立ち尽くす狼男の遺体があった。

アスファルトの上を這う赤い霧が、両腕の傷口に登り、入り込んで行くと、生え変わるように腕を再生させて行く。

「馬鹿な……」

流石に軒太郎と憑き姫も呆れ顔で見っていた。何処まで不死身なのかと思いつつ。

腕の再生が随分と終わると、少年の首にも赤い霧が集結をはじめた。今度は頭部が超再生を見せる。

失われても再生を開始する不死の体。軒太郎と憑き姫が人間の常識から外れ、魔道の世界に身を投じてどのくらい経つだろうか？

しかしこれ程の不死は見たことも聞いたこともなかった。

驚異的な存在。まさに軌跡に近いが、相手にしていて呆れてくる。

再生が終了を遂げて、少年が蘇る。

「ならば死ぬまで刻み続けて、死んでも殺し続けてやる！」

再び斬りかかる軒太郎が、妖刀を二本ふりまわし昂輝を刻む作業を再開した。一太刀一太刀が致命傷と成る斬激であった。

「憑き姫！ こいつの残り妖力数を計つてくれ！」

「ええ、任せて」

自己治癒が可能な妖怪の多くが、妖術を使用したり、自然と妖力や体力を自己治癒のエネルギー源として変換することで傷を癒す。

その為、多くのリジエネレーターの回復には限界回数や制限時間が存在する。

ヴァンパイアの類は、他人の生き血や生命力を吸い取ることで治癒に回す。

軒太郎から見て狼少年のリジエネレートは、明らかに自分の内にある何らかのエネルギーを媒体に超回復を繰り返している様に見えた。ならば攻撃を受け続ければ、いずれエネルギーが尽きる筈だ。

そこまで追い詰め、斬り続ければ不死とて殺せると目論んでいた。

残りの妖力残量を計る為に憑き姫が、新たな妖怪カード取り出した。

「手の目 ザ・エグザミネーションアイズ」

カードの中から光と共に姿を現したのは、盲目で禿頭の座頭が独り。座頭は顎をしゃくらせながら両掌を軒太郎の妖刀に攻め立てられる狼少年に向けた。

すると掌から瞼が開きギョロリと眼球を剥き出す。怪しい瞳が青白く瞳孔を絞り見る。

現れたのは、妖怪手の目だ。

手の目が双掌の瞳で昂輝の妖力量を計り見ると、僅か後方で憑き姫も同じポーズを決めながら瞼を閉じ、手の目が見る映像をリンクしながら窺っている様子だった。

「おかしいわ……」

手の目の能力を使い狼少年の妖力数を計る憑き姫。緩い風が赤い袴と長い黒髪を揺らすと、憑き姫が可愛く小首を傾げる。

「彼、妖力が無いわ。 零よ」

「ゼロ？」

憑き姫の話聞いて軒太郎が、少年を甚振る攻めを休めて後ろに飛んだ。

ふたりの間合いが広がり、苦痛に少年が肩を揺らして息を切らす。着ていたTシャツは八つ裂きに切り刻まれ、履いていたGパンもザ

クザクに切られタンパンのように変っていた。
狼少年の姿は、傷も血痕もないのにボロボロである。

「魔力も霊力もないのか、こいつは!？」

「ええ、そうよ。この少年、自分の力で傷を癒している訳じゃないわ。別の何か、別のものによって無理やり傷が癒されているのよ。」

回復エネルギーは、別の何処かから無線のように受け取っている様子だわ」

「そのエネルギーは、何処から飛んできているんだ？」

「わからない。彼の周囲で空間が歪みながら窓を開かせ、そこから送り込まれているわ」

手の目を翳す憑き姫には、そのように見えていた。

狼少年の周囲1メートル弱の空間に穴が開き、おどろおどろしい不の塊が悪霊の様に現れては少年の体内に無理やり流れ込んで行く。そして傷を癒すと同時に、少年の運命を奈落へと引き寄せ引きずり込もうと纏わり付いていた。

「彼、呪われているわ」

「呪いだと？」

『の……呪い？』

憑き姫の言葉に軒太郎だけならず昂輝も不思議な顔をした。

自分は呪われているのかと今までのことを思い出す。

目に映る真実を語って見せる憑き姫の言葉を、もっとはつきりと全貌を知りたいのか昂輝が、警戒にも似た殺気を緩め、友好的な姿勢を態度に表す。

澱む軋轢と牽制が解かれて行くのが、三人には感じ取れた。軒太郎も妖刀二本を黒コートの中に納め、戦意を闇に隠した。

呪い

『どういう事ですか、呪いって？』

テレパシーで問う昂輝。

「あら、それが人にものを尋ねる態度かしら？」

見下すような視線と言葉で恥辱する憑き姫に合わせて昂輝が、誠意を見せるが為に狼の姿から人間の姿へと戻る。それだけは自分でもコントロール出来た。人に返った昂輝が、深々と頭を下げる。

「お願いです。僕に何が起きているのか教えてください」

「へえ、結構いい男」

憑き姫は、昂輝の素顔を見て何かを期待したかのような、はにかむ仕草を見せた。タイプの容姿らしい。

「僕に何が起きているのか教えてください。お願いします。」

父と母が亡くなった理由も、僕に掛けられた呪いが原因なのですか！？」

昂輝の双眸は凜々しかった。真剣さが男前に映る。

「まあ、いいわ。此処で私が調査出来る限界もあるけど、貴方が頭を下げてまでお願いするのなら、少しぐらい付き合っただけあげるわ」

下手な台詞を繰り返す昂輝に、そっぱを向いて承諾する憑き姫。
そしてツンデレ風に彼女が語ると、未だ召還を続ける手の目と再び
リンクを始め、青白く朧げに光る双掌の瞳で昂輝の呪われし体をス
キャンしていく。

双掌の魔眼から探り出す昂輝の運命。呪いの力は、かなり強い。強
大と解る。魔眼を凝らし集中を高める憑き姫の額に玉の汗が浮き上
がり、困難である作業だと知らしめた。可愛い顔の眉間に力が入る。

「苦戦している様子だな」

「ええ、この呪い、並みの代物でないわ。相当の術者が永い年月と
怨み辛みを重ね上げて作り出した凶悪な妙手よ。

呪いを解くどころか、仕組みを完全に暴くのすら私では難しいわね」

「おやおや、珍しく弱気な発言だな」

「これは、呪いの専念家じゃないと無理だわ。しかも相当のスペシ
ヤリストじゃないねと。でも、ひとつ解ったことがあるわ」

「なんですか!？」

自分に降りかかる不幸の原因を少しでも理解しようと昂輝が身を乗
り出し憑き姫に訊く。

一言に力がこもり、必死さが伝わる。

「貴方が狼に変化する理由も、死なない体を得たのも、貴方自身の
能力でも何でもないわ。貴方に掛けられた呪いが原因よ。

彼は、狼男でありながら、狼男ではないの」

そこまで言うと軒太郎が、がっかりとした表情を見せる。憑き姫の言葉の中から、何かに気づいた様子だ。

「憑き姫。即ち、彼を殺せたとしても、その体は生身の人間と変わらないってことか？」

「ええ、そうよ。魂も並みの人間と変わらないわ……。呪いの効果が、彼をそうさせているだけだから」

昂輝を見るふたりの眼差しから、昂輝本人への興味が失せて行く。魂と骸の価値が低下して行く。

「つまらんな……」

呟く軒太郎が変身を解除した。身に纏われていた黒い装束が熔けるように流れ落ち、足元の中へと消えて行く。

憑き姫の清楚な巫女コスチュームも、霧と化して夜空に舞い上がり、塵となって闇へと混ざり合う。下から白いワンピース姿の憑き姫が現れた。

ふたりの欲から生じた戦意が、完全に途絶えた様子である。

「じゃあ、帰ろうか」

「ええ、そうね」

退魔師たちが、踵を返して後方へと進む。

「ちょっと待ってください！ 僕はどうしたらいいのですか!?!?」

「それは自分で考えなさい。私たちの仕事は、わいらの退治。キミの呪いは依頼の対象外だ。ましてや、不死の肉体が手に入らないと分かれ、プライベートでキミと関わりあう理由すらない」

軒太郎の言葉は、そのとおりだった。

立ち尽くす昂輝は、表情を曇らせ俯くと、独り今後を迷走する。

「大塚さん、パンクの修理は済みましたか？」

「あ、はい、もう少しです……」

「そうですか」

パンクタイヤをスペアに付け替える作業を再開させた剛三が、近くに立ち様子を窺っている軒太郎に問う。

「三外さん、彼の、昂輝君の呪いを解いて貰えないのでしょうか？」

「それは依頼として、ですか？ 仕事としてなら料金が発生しますよ？」

ボルトを回す作業を行ないながら考え込む剛三。

ここは小さな町である。

昂輝の父親は、自殺したとはいえ小さな頃から良く知っている友人だった。昂輝もそうだ。幼いころから成長を見続けてきた町の子供の一人である。

祭りになれば一緒に神輿やぐらを引き、お盆になれば一緒に盆踊りを踊った思い出があり、その思い出のどのシーンにも彼らの一家が映りこんでいる。

剛三にとって町の子供は、全員が自分の息子と代わらない。

今や町の厄介者と化した少年であっても、救ってやりたい気持ちがまだまだ高い。どうにかしてやりたい気持ちが残っていた。

だが、今回の妖怪退治の依頼料も安くは無い。成功報酬で100万。しかし、わいらが退治される瞬間を見ている以上、インチキでもなんでもない。これは正当な報酬だと思えた。

彼らふたりに少年の呪いを解いてもらうという依頼を頼むとなると、同じだけの報酬を求められるであろう。

この町で一番の資産家である剛三は、お金で少年の運命を救えるのなら安いのでは、と、考えた。

そして町の顔役として、親心のままに話を切り出す。

「三外さん、いかほど掛かりますか？」

「そうですねー。呪いの根深さによりますが、ざっと500万程度で、どうでしょうか？」

「500万!」

驚きの声を上げたのは、昂輝の方だった。

わいらの退治が100万なのは、目撃証言からして相手が予想できただからだ。

しかし、昂輝の件に関しては、呪いの力が強いにも関わらず、正体も原意も判らない未知数の依頼だ。相場も跳ね上がるのは、仕方がないこと。

丁度、タイヤ交換が終わった剛三が立ち上がり、昂輝を見ながら言う。

「お金は私が立て替えます。どうですか、昂輝君、彼らの世話になつてみては？」

「大塚さん……」

「呪いが解けたら仕事に精を出せばいい。お金に関しては気にしないでいいから、地道に返してくればいいから、今は呪いを解いて貰うべきだ。」

そうでもないと言君の人生は、不幸のままだと思つよ」

優しく父親のような剛三の微笑に畏敬を感じ取った昂輝は、少し悩んだ末に答えた。

「お言葉に甘えていいのですか？」

「ああ、構わん」

パンツ！

昂輝と剛三が話していると、軒太郎が両手を合わせて音を響かす。ふたりが、ハツとして軒太郎を見た。

「では、交渉成立だ」

邪悪さが失せて、普通のサラリーマンの様相を見せる軒太郎が、優雅な笑顔で、勝手に話を纏め上げ、見事に仕切った。

「よろしく願います」

剛三が軒太郎に頭を下げると、遅れて昂輝が礼儀を真似た。

「じゃあ決まりね。でも、彼は持ち帰るわよ」

そう言った憑き姫に、理由を求めて三人の視線が集まる。

「彼の呪いは、土地に縛られたものとは異なる代物。

呪いを解くヒントは、この地にあるかもしれないけど、まずは呪いのスペシャリストに見てもらった方がいいわ」

「なるほど、お砂姉さんか」

「そう、専門家に見て貰ってから算段を立てましょう」

退魔師の話に、第三者の名前が浮かび上がる。

「大塚氏、聞いてのとおりです。彼の身柄は、しばらく私たちがお預かりします。問題は、ありませんよね？」

「はい、私に異論は御座いません」

「助っ人の報酬は、依頼料の中から賄います。少年、キミもいいよね？」

「よろしく願います」

また、頭を下げる剛三と昂輝。

「呪いを解くのに相当の月日が掛かる可能性があるわよ。その間、彼の生活費とかはどうするの？ おじさんが、そこまで面倒を見るのかしら？」

「僕が働きながらお支払いします。バイトでも何でもこなして、どうにかします」

「ほほ」

軒太郎が片手で自分の顎を撫でながら言う。

「じゃあ、僕らのアシスタントをやらないか？ バイト代を払うし寝床も用意しよう。」

呪いを解くにしろ、直ぐ手元に置いといたほうがいいだろうしね」

「そうね、それがいいわ」

退魔師のアシスタントと聞き、少し怖気付く昂輝だったが、直ぐに覚悟が固まる。

「よろしければ、それでお願いします」

軒太郎の提案に、昂輝が頭を下げる。憑き姫にも反対の意見はない様子だった。僅かに笑みを見せていた。

「では、私からもお願いします」

最後に剛三が念を入れてお願いすると、軒太郎が意識を失っている少女の背中から湯を入れて目覚めさせた。目覚めた律子が混乱を表して取り乱す。

その律子に昂輝が駆け寄り、今までの話を聞かせながら落ち着かせようと優しく気を使う。

徐々に少女も落ち着きを取り戻すと、帰りは昂輝も車に乗りなさいと剛三が誘う。そして五人が車に乗り込み、帰りの山中を揺られながら町へと目指した。

後部座席には、右から憑き姫、昂輝、律子と並んでいる。昂輝が真ん中だ。両手に花であるが、今の昂輝に扇情を感じている精神的な余裕がなかった。

呪われた身のまま、じっと前を見つめている。

そう、車外の闇と同じような深いものが、少年の心の中で蠢き続けていた……。

つづく

予告

律 「そうか……、五代君、町を出ちゃうのね」

憑 「そうよ、私が持ち帰るの」

律 「えっ、何故！ しかもなんで貴方が出てくるの!？」

憑 「決まっているじゃない、可愛いからよ。それに彼は私のペットにするの」

律 「ペットって！ 貴方、何様!？」

憑 「絶世の美少女、マジ狩るカードキャプチャー憑き姫15歳よ」

律 「つわ！ 真顔で言っただわ。この娘、痛い!！」

憑 「何か問題でも？ そもそも今回しか出てこない脇役が、私に意見するなんて小生意気だわ」

律 「えっ！ そうなの、私今回限りなの!？」

憑 「だって私たち温泉街を離れて、空想上の存在しない町で物語を再スタートするのよ」

律 「そんなことばらしていいの、怒られるわよ……」

憑 「直ぐに皆が気付くからいいのよ」

律 「じゃあ、私も五代君を追っかけて、その町に行こうかな。うふ」

憑 「無理ね。その町は次元の挟間に漂う摩訶不思議な国だから、脇役如きには辿りつけないわよ」

律 「登場方法は、作者が無理矢理考えてくれるわよ。　　きつと」

憑 「他力本願ね」

律 「なんとも言いなさい。私は強い子なの!」

憑 「ところで次回予告じゃあなかったの?」

律 「あ、わすれてた」

憑 「いい加減な娘ね」

律 「貴方に言われたくないわ!」

憑 「じゃあ、代わりに私がやってあげるわ」

律 「勝手に仕事を取らないでよ!　最後の出番かも知れないのに!」

憑 「次回予告。呪いの正体を暴くために旅立った少年、五代昂輝。そして可愛らしい娘、憑き姫。ふたりは徐々に姿を現す悪の秘密結社と死闘を繰り広げながらも、何故かメキメキと愛を深めて行く」

律 「何故かって……。それに三外さん消えているわ」

憑 「そして愛し合うふたりの前に立ちはだかる悪の元凶、殺人秘
密結社のドン、素詛律子」

律 「なんで私が!？」

憑 「次回、魂ノ骸、第二話。五色鬼。キミは刻の涙を見る」

律 「最後は、モロパクリね」

五色鬼

山中。

遠く離れた海岸沿いに、背の高いホテルの白い頭や、温泉街が噴出す蒸気の霧が、真夏の青空に向かって伸びていた。

そこは人里から離れ、峠道からも大きく外れた場所に聳える山のてっぺん。

道と呼べる道もなく、ここ数百年、人が目的も持たずに踏み込むこともなかった静かな山である。

かつてこの山の頂上に古い山寺があった。

数百年も昔の話だ。

当時からボロ寺だった為、今では跡形も乏しい。

山寺が建っていた場所は、現在、木々が多い茂り、そこに建物があつた痕跡すら分かりにくくなっていた。

そして古寺があつたことすら人々の記憶からも消えていた。

寺の名前は『五色寺』。正式の名前ではない。

正しい名前は、当時の人々が受けた恐怖から忘れられ、そう呼ばれるようになった。

何故に？

そこには五匹の鬼が住んでいたからだ。

赤、青、緑、紫、黒。

肌の色の違う五匹の鬼。

人々は、五色寺の鬼衆と呼び、更に五色鬼と呼ぶように変わった。

その五色鬼たちは、五色寺を拠点に、妖術で作り出した黒雲の天馬で飛び交いながら近隣の町や村を襲い、恐怖と暴力のままに強奪と略奪を繰り返したと云われている。

それも遠い昔の話。古の記憶。今では誰も覚えていない。

「何が起きたのだ……？」

「オラにも判らねえすら……」

「何百年ぶりだろうか」

山の頂上。

かつて五色寺があった場所。

草木に囲まれた寂しげな風景。そこに大きな岩がひとつ。3メートル以上の高さがある卵型の大岩である。

岩肌は年月を感じさせる程に粗く削れ、緑色の苔が粗さを所々覆い隠している。

しかし、その大岩は、惨くも生々しい大きな亀裂が一本走っていた。まだ新しい亀裂だ。

「どちらにしろ、もうけもの」

「そうだ、そうだ!」

「さあ、全員の力を合わせて忌々しい大岩の結界を破壊しましょうぞ!」

不気味な声が、大岩の隙間から漏れてくる。声の数は、ひとつふたつではない。

亀裂の隙間から外を覗き見る眼光が、自由を求めて力付く。

「テメーら、一気に行くぞ!」

「おーーーー!」

「おおりやややややややああああ!」

亀裂から気合の咆哮が吹き出ると、大岩が地鳴りを響かせ大きく揺れた。周囲の草木が獰猛な気に揺れて、羽を休めていた鳥たちが怯えて一斉に飛び立った。

振動を繰り返す大岩から緑の苔が、卵の殻を剥がすようにポロポロと落ちて行く。亀裂の隙間がどんどんと大きく広がっていった。

そして広がった亀裂から、何かを掴み取るうとしていたのか、一本の太い剛腕が伸び出た。

腕の色は、余す事無く真っ赤な色を見せていた。

人の腕ではない。

徐々に広がる大岩の亀裂。赤い腕を出していた者は、次に上半身を岩の中から引つ張りだし形相を露にする。

その顔は、まさに鬼。額には、立派な角がふたつある。

体付きはボディビルダーのように合金のマツチヨで、脂肪の少ない引き締まった筋肉の塊を自慢げに晒していた。鬼が無理矢理岩の内部から片足を抜き出し大地を踏みつける。

「あつはつはつはつ！ やったぞ、封印から抜け出せたぞ！」

赤鬼は、全身を大岩の外に引き出すと、木の枝の隙間から見える青空を見上げながら歡喜の哄笑を続ける。数百年ぶりの日差しが、木漏れ日と成り赤い肌を照らし上げ祝福していた。

「おやびんぐ、オラたちも出してくれよ〜」

「おお、今出してやる、待ってる！」

亀裂の中から求める声に赤鬼が踵を返すと、木漏れ日を背に浴びながら、両手を大岩の亀裂に差し込む。そして左右に引き裂くように力を込めて喉の奥から声を震わした。

「おおりやややあああああ！」

鬼の強力な腕力と共に大岩の亀裂が更に広がり傷口から小石をボロボロと落とす。そしてついに大岩が真っ二つに割れて左右に倒れる様に崩れた。

「どっぴでいー！」

「やったー、外に出れたぞー！」

「ふっふっふっふっ」

割れた大岩から姿を現したのは、色鮮やかな四匹の鬼。

一匹は、頭のとっぺんに一角を持ち、身長2メートル程の高さにプロレスラーのような立派な体格を有し、顔がゴリラを思わせる醜い面の緑鬼。

更に一匹は、スラリとした体格に冷酷で残忍そうな表情を見せる青い肌の鬼。男なのに肩まで伸ばした長い髪の間隙から覗かせる額の真ん中に、弧を描く一角が生えている。

その隣、紫色の皮膚を持った輩は、女だった。紫色の肌に紫色の唇ボリユームある丰满な胸を両手で抱えるように組む怪しげな女郎の鬼は、切れ長の妖艶な瞳を色っぽく潤ませていた。膝まである長い黒髪の間隙からは、鬼を示す角の姿は見えないが、明らかに鬼女だと分かる。

そして三匹の後方に聳えるが如く立つ巨大な黒鬼。身長が2メートルある緑色の鬼よりも更に巨漢で、3メートルはありそうだ。

黒い肌が鋼に映り、動かなければ金剛像に見間違いそうな姿をしていた。

「よし、テメーら。何百年ぶりが判らねえが、また五人で暴れまくるぞー！」

五匹のリーダー格なのか、赤鬼が気合の激を飛ばす。

「おおー！ー！」

「うふふふ」

鬼たちが歓喜の声を山中に響かせ威勢を轟かせると、どつと妖気が広がり満ちて行く。

その妖気まじりの空気が、山肌を滑り落ちる霧の津波の如く温泉街へと静かに少しずつ流れ込むと、目に見えない不穏な災いが、人々へ知らず知らずに忍び寄る。

「んん……？」

憑き姫が、大気中に混ざった妖気を感じ取る。

「どつした憑き姫？」

隣に居た軒太郎が訊くが、空の匂いを嗅ぐ様に鼻を上に向けてクンクンする憑き姫は、しばらくしてから軒太郎に返事を返す。

「いや、気のせい」

「気のせい？」

「うん……」

まだ、五色鬼の復活に、気付く者は居なかった。

夏の浜辺

青く澄んだ海。

眩しく情熱的な日差し。

焼けた砂浜に、咲き誇る水着ギャルと、楽しく弾け合うはやしぐ声。

海岸沿いに吹く爽やかな風が、若き扇情を煽り、一夏の記憶を色鮮やかなパステルカラーで描き上げて行く。

「絶景だね、昂輝君。そうは思わないかね？」

「そうですか……」

温泉街に面した砂浜で、夏の日々、忙しそうに営業を続けている海の家の一軒。

海岸で戯れる人々が眺められる座敷の上で、まるで景色の良いベランダで寛ぐ休日の若旦那の風情で、真っ昼間からビールを呷り、茹でた枝豆を摘む軒太郎の姿があった。

暢気なものだ。

この町に妖怪退治の依頼で訪れた際とは異なり、プライベートの為に、着ている服は、堅苦しくも暑苦しいビジネススーツでは有らず、観光客や海水浴に来ている人々と変らない、トロピカルで涼しげなアロハにタンパンを履いていた。

バカンスを満喫するような軒太郎とテーブルを挟んで向かいには、不死身に呪われた狼少年の五代昂輝少年が、暇そうに両手をテーブル

ルの上で組んで座っていた。
彼もまたラフな格好をしている。二人とも、浜辺の景色に馴染んでいた。

妖怪わいらを退治してから二日が過ぎていた。

憑き姫曰く、昂輝を二人が住む町へと連れて帰り、呪いの専門家に診断してもらおう予定だったが、何故か直ぐには実行に移さず、彼ら二人は夏の休暇を楽しむ様に、この町にとどまって居た。まだ二人は、自分たちが住む町へは帰らない様子である。

そして現在、そう述べた筈の憑き姫は、海の家から少し離れた浜辺にパラソルを建てて水着姿で日光浴にまどろんで居る。

此方も暢気なものだ。

昂輝たちが居る場所からも、憑き姫の幼い水着姿が窺えた。
フリルの付いた白のビキニが、華奢で小柄な少女をロリロリしく着飾っている。

クールで大人びた態度を見せる憑き姫だが、やはり少女だ。スレンダーな水着姿が、かなり可愛い。

その手の趣味ある者たちには、歓喜の余り、ブルツと震いが全身と脳裏に走る程の美少女であった。目の保養になる。

その小さな美顔にサングラスを掛けて、カラフルなビニールシートの上で浮き輪を枕に、のんびり横になっている憑き姫。先程から眺めていても動く気配は殆ど見せない。どうやら寝ている様子だ。

時折、憑き姫の周りをナンパな輩がうろつき、声を掛けようか悩んで見せるが、やや幼さが残る憑き姫の年齢を推測して、低く見積も

ったのか諦めて去って行く光景が、何度か見られた。

その度、何故か昂輝は、若干の安堵を感じる。

この二日間、昂輝は二人に引っ張られ、町の案内や小間使いのよう
なことをしていた。

「軒太郎さん、僕を連れて、町を出るんじゃないんですか？」

昂輝が、ビールを飲む軒太郎に問う。この二日間で、同じ質問をす
るのは何回目だろうか。

判っていないながらも、ついつい繰り返す昂輝。そしていつも同じよう
な答えしか返ってこない。

「焦るなよ、少年。呪いは、逃げ出したりしないから」

出来れば逃げ出してもらいたい。

そう思いながら諦め顔を作る昂輝。

だが、軒太郎の言うことも一理ある。昂輝に掛けられた呪いは、直
ぐにどうこうなる代物ではないと憑き姫も述べていた。急かし、焦
っても解決しない。

一日二日ぐらいの無駄も対した問題にならないだろう。

気長に解決を目指すべきかと、昂輝も黙考にふける。

そして夏の塩風が、降り注ぐ日光と交差しながら温もりを混ざり合
わせると、海の家の中に涼しく吹き込む。

その風に爽快な笑みで軒太郎が、皿に盛られた枝豆をひとつ摘み上げた瞬間、テーブルに置かれた彼の携帯電話が賑やかに昭和の名曲を奏で始めた。

携帯の着信音。

軒太郎は、摘んだ枝豆を皿に投げ戻し、すぐさま携帯に出た。昂輝は、ただその様を見守る。

「もしもし、お砂姉さんですか？」

着信音の違いから直ぐに電話の相手を何者か悟った軒太郎が、電話にも関わらず営業スマイルを眼鏡の下に作り出し応対した。おそろく笑顔を作るのは、癖なのだろう。

此処数日の付き合いの昂輝だが、黒衣に変身していないときの軒太郎は、誰かと話す際、必ずと言っていいほど笑顔に変わる。

笑顔は悪いものではない。
良いものだ。

人生の最悪を迎えている昂輝にとっては、まがい物にも映る軒太郎の笑顔すら、心を癒す微少な薬となっていた。

独り薄暗い家に籠もって居るよりも、無理矢理引っ張り出され小間使いとして、こき使われているはいえ、軒太郎や憑き姫に付き合い、外に出ていたほうが精神的に宥められていた。

少なくとも死にたい、自殺をしたいと絶望的衝動に駆られる間が減っていた。夏の日差しが、心の憂き目を少しずつ焼くように。

軒太郎が言った『お砂姉さん』と呼ぶ名前。向かえで聞いていた昂輝にも聞き覚えがあった。

確か、憑き姫が昂輝の呪いを見てもらおうと告げていた人物の呼び名である。

その人物が、電話の相手のようだ。

「ええ、はい、はい、判りました。では、今に迎えに行きます。そこでお待ちを」

軒太郎が会話を終えて電話を切る。そして携帯をふたつ折に畳みながら昂輝に言った。

「昂輝君、すまないが、駅までお砂姉さんを迎えに行ってくれないか」

「はああ？」

思わず間の抜けた声を溢す昂輝。どうやら軒太郎たちは、呪いの専門家と言われる人物を、この町に呼び出したらしい。それを昂輝は、話の流れから推測して何となく悟る。

「ええ、いいですよ。で、どんな人なんですか？」

迎えに行くべき人物の特徴を問う。

「白い服に、つばの大きな白い帽子を被った、清楚で気品のあるエロっぽいが貞操の固い女性だよ。見かければ一目で分かるぞ」

「はあ……」

一部失礼な表現があつたが、おそらく外出の時は、いつも同じような服装を選ぶ女性なのか、軒太郎は特徴を簡単に予想して昂輝に伝える。

昂輝も、ならば直ぐに分かるだろうと安易に考え席を立つ。

こんな小さな町の駅だ、観光客が多いとはいえ、そのような目立つ帽子を被っている女性も少ないだろう。直ぐに気付くだろうと考えた。

「じゃあ、行つてきます」

「ああ、おねがいね。私は此処でのんびり待っているから」

気の無い言い方で少年を見送る軒太郎。昂輝が海の家からサンダルを履いて出て行く。

そして熱く焼けた砂を踏みしめ浜から出ようとしたとき、後ろから憑き姫が追つて来た。

「どこいくの？」

彼女の声に向け向く昂輝は、少し驚いた表情を見せてから、気持ちが悪く言葉が返す。

「お砂姉さんって方が、駅に到着したらしいから、迎えに行くんですよ」

「へー……」

憑き姫に敬語で答える昂輝。

昂輝の年齢は17歳。もうじき18歳になる。

憑き姫の年齢は、見た目15歳。本人曰く15歳。

彼女の話が本当ならば、昂輝よりもふたつ年下であるが、何故か昂輝は彼女に敬語を使っています。

憑き姫の凜とした存在感が、昂輝にプレッシャーのようなものを掛けてそうさせていた。

嫌いとか、苦手とか、付き合い難いとかでない。ただ、彼女と居ると昂輝は、よく判らないものを意識してしまうだけだ。

本人も、次期に慣れるだろうとたかをくくっている。元々昂輝は、人付き合いが、苦手なほうではなかった。

あの事故が、なければ……。

両親の自殺が、なければ……。

未だに明るく普通の高校生だったのだから……。

憑き姫が、まだ眠たそうな瞳で昂輝を見上げる。

「じゃあ、私も行くわ」

可愛らしい水着姿に、肩から大きな目の白いタオルを羽織る彼女はそう言った。

「ひとりでも大丈夫ですよ」

笑顔で答える昂輝。

「貴方、お砂姉さんの顔、知らないでしょ？」

「いつも白い服と、白い帽子を被っているって軒太郎さんから聞きました。駅で待っているそうなので直ぐに分かりますよ」

「いつもとまでは言っていない。」

「でも、独りで寂しくない？」

「え………？」

思わず言葉に悩む昂輝。

「まあ、詰まらないかも知れないけど、寂しくはないと思うよ………」

「きつと帰りは、お砂姉さんと二人で、気まずい空気になると思うわよ」

「気まずくなるのか？」

「でも、行きは行きで、憑き姫と二人で気まずくなりそうだと思う。」

「いいから行きましょう」

そう言いながら、砂浜の出口に向かう憑き姫。昂輝がその後ろ姿を追った。

砂浜を出て直ぐの国道を横断した憑き姫が振り返り、昂輝の顔を見上げる。切れ長の瞳が透き通り、真夏の太陽を反射させながら潤んでいた。

目と目が合う。

綺麗な瞳だと、昂輝が照れて視線を外した。
初心である。

「ねえ、駅ってどっち？」

「あっち……」

昂輝が指差して言うと、憑き姫はスチャスチャとサンダルの裏側を地面に擦りながら、目的地の場所も判らず先行して行く。

「次、どっち？」

「こっち」

このような調子で何度か同じことを繰り返しながら二人は温泉街の駅へと目指していった。

初々しさも感じられるが、やはり気まずい結果となる。

お砂姉さん

緩く長い登りの坂道。

右手には白いガードレールが連なり、温泉街に住む人々の住宅が屋根を並べ景色を作り、その向こうに青い海が水平線の果てまで絶景を広げていた。

灼熱の太陽が、真夏のままにアスファルトを照らし上げている。

五代昂輝と憑き姫の二人が、履いたビーチサンダルを踏ん張りながら坂道を、テクテクと登っていく。一時、海水浴に訪れたと思われる家族やカップルと擦れ違うが、今の二人も似たような感じで見られているのであろう。

昂輝は、灰色のタンパンに白いワイシャツ。そして頭に被った青いキャップが、何処にでも居る夏の少年を現していた。

憑き染めは、フリルが飾る白いビキニに大きなタオルを羽織っているだけだ。小さな両肩と、薄い胸板を、そのタオルが隠していた。ぱっと見た目で、海岸からそのまま来たのが良く分かる。

二人が坂道を登りきると、木造建ての古風な駅が見えて来る。

白い板張りの外壁に、赤い瓦屋根。建物の周りには花壇があり、色鮮やかな夏の花々が植えられている。五十歳ぐらいの夫婦が駅員として住み込んでおり、手入れが日頃から丁寧に行き届いている。真新しく、とても綺麗で、落ち着いた田舎の空気が流れる駅だった。

この駅も数年ほど前まで、とても古く老朽化が激しく見られた駅だ

つたが、流石に建て替え時だと相談されて、新たなるデザインで建て替えられた。
新しい駅でも味わいを、歴史ある温泉街にそぐう駅にしたいと、町の偉いさんたちが勝手に決めて、このような駅へと建て替えられたのである。

駅の入り口の直ぐ側、花が咲き誇る花壇の前に設置された緑色で横長のベンチに、その人は座って居た。

白い服の女性。

シルクの風通しの良さそうな気品溢れるブラウスに、膝下まで長けがある白いスカート。ヒールの低いパンプスも白い。そして八十年代を連想させるプリムの帽子に、白いレースの日傘と手袋。白い身形が精練された清楚さを醸し出す。

歳の頃は二十代後半から三十代前半といったところだろうか。
彼女を一目見て昂輝は、迎えに行ってくれと言った軒太郎の言葉を思い出す。

「白い服に、つばの大きな白い帽子を被った、清楚で気品のあるエロっぱいが貞操の固い女性だよ。見かければ一目で分かるさ」

その言葉通りだった。

清楚で気品があり、上品なまでに優雅だった。

身に付けた洋服だけの意味じゃない。おっとりとした垂れ目に、長い睫毛。優しそうな眉毛のライン。とどめに右目の下に泣き黒子。完璧なまでの未亡人キャラだが、旦那さんが居るのか居ないのかも判らなければ、居たとしても亡くなっているか否かも判らない。

ついでに貞操が固いかどうかもた……。

しかし、故に大人のエロスが伝わって、想像だけが先走る。

「あれがお砂姉さんよ」

無表情で、憑き姫が言う。

しかし言われなくとも直ぐに分かった。駅前に居る人物は、ベンチに座る彼女のみ。軒太郎が表現した言葉と外見がピッタリ重なっている。

ベンチに腰を下ろしていた白い女性が、優雅にゆっくりとした物腰で立ち上がる。昂輝と憑き姫の二人に気付いた様子だ。ベンチに旅行鞆を残して前に出る。

「こんにちは。貴方がお砂さんですね。五代昂輝です」

「こんにちは、そうですわ」

白い女性は、にこやかに微笑みながら答えた。

尋ねてから昂輝も気付く。名前をお砂姉さんとしか聞いていない。本名なのかも判らない。咄嗟にお砂さんと呼んでみた。とりあえずそれでも良かったらしい。

「お砂と申します」

お辞儀をしてから礼儀正しく言った。

そして。

「あら、憑き姫ちゃんも一緒にお出迎えに来てくれるなんて珍しいわね」

「そうかしら」

「ええ、本当に珍しいわ」

微笑みながら軟らかい口調で言うお砂姉さんだが、視線だけを横に逸らしながら憑き姫がいつも通り、クールに答える。僅かにその仕草から昂輝は、何やら気まずい空気を即座に感じ取り、苦笑に小首を傾げた。

もしかしてこの二人、実は仲が良くないのではと勘ぐる。

「じゃあ、貴方が話した呪いの少年ね」

「はい……」

「狼に変身できるんですって?」

「はい、そうです」

「まあ、怖いわ」

微笑みながら述べる言葉は、狼男の昂輝を僅かながらも恐れた様子ではない。むしろ幼い子犬を愛でる口調。童貞をからかう様である。

「それにしても凄い呪いの束ね」

お砂が、美しい顔を昂輝の顔に近づかせ、いきなり呪いの診断を始める。突如近づいた異性の顔に、昂輝が照れ驚き一歩たじろぐが、化粧の匂いが鼻に届くと顔を赤らめた。

ここまで一緒に歩いてきた憑き姫からは感じなかった異性の香りだった。

これが大人の女性が放つ、フェロモンのひとつなのかと昂輝が小さな経験を積む。悪くない匂いだった。

「お砂姉さん、何かわかったの？」

いつの間にかお砂の背後へ回り込んだ憑き姫が、質問しながら彼女の服を強く引く。お砂の体が、憑き姫の引き手によって昂輝から顔を離す。

「まあ、初見だけで呪いの強さと深さは幾許か鑑みれたわ。これはじっくり腰を据えて取り組まないと、逆に呪いに飲み込まれそうね」

「そんなに酷い呪いですか」

「酷いと言うより、素晴らしい呪いよ」

「素晴らしい……」

「ええ、参考になるわ」

「参考にしちゃいますか……？」

「ええ」

悪意の欠片も微塵もない笑みで答えるお砂。所詮は他人事なのか、

自分が極めんとしている呪いの研究対象にしか昂輝を見ていない様子だ。

垂涎が、ありありと垂れ目に映る。

それでも泣き黒子はエロかった。

さて置き……。

憑き姫は、魂のコレクション。

軒太郎は、屍の収集と武器製作。

このお砂は、呪いの研究が目的なのである。

ハイレベルな呪術師なのだろうが、所詮は狂気の研究の末に、学界を追放されて悪の秘密結社に就職してしまうマッドサイエンティストの博士たちと同じように、自分の研究の為に善も悪も関係無く盲目の如く外道な実験に全力で人生を費やすタイプなのである。故に、格ジャンルの天才として生きて行けるのかもしれない。

「まあ、呪い解くも解かないも、後ね。まずは、軒太郎ちゃんと合流しましょう」

「はい、分かりました。荷物は僕がもちます」

「あら、有り難う」

「当然よね」

ベンチに置いてあった旅行鞆を昂輝が取りに行くと、お砂が礼を述べ、憑き姫が嘲弄を発する。何故にと思う昂輝だったが、無駄な反論は返さなかった。軒太郎に頼まれた、お砂を迎えに行くという任

務を忠実に遂行しようと努力を示す。

一応、現在もアシスタントのバイト中なのだ、時給が発生している。朝8時から17時までの実労8時間で時給650円。残業は1・25倍。深夜22時以降の労働も1・25倍。向こうの町に行ったら宿付きだ。

電気、ガス、水道に、トイレ付き。風呂だけがないが、代わりに幽霊が付いてくるらしい。

軒太郎が一緒の時は、飯もおごってくれるそうだ。今日の昼飯も、海の家焼きソバをおごって貰った。

まあ、当ても無く、何も考えずに町を離れようと思っていた昂輝にとつて、とりあえずは悪い話でなかった。切っ掛けに丁度良い。

「じゃあ、案内しますので行きましょうか」

「あ、ちょっとまってください」

先導しようとして昂輝が言い、踵を返すと、お砂が止める。再び昂輝が踵を返す。

「ほおーらー、イゴールちゃん、行くわよー」

「はあーい、ちょっと待ってくださいです」

暢気な呼び声に、駅の待合室から幼い声が返ってくる。憑き姫よりも幼さが残る少女の声だった。どうやら連れが一人居るらしい。

「あら、あの子も来ていたの？」

「ええ、最初は留守番を頼んだのけれど、如何しても付いて来たいって、駄々を捏ねちゃって。困った子よね」

「ふうーん」

詰まらなそうな憑き姫の返事。

「奥にワンちゃんがいたのです、可愛いワンちゃんでしたー」

確かに駅員夫婦がマルチーズを飼って居ることは、昂輝も知っていた。そう言いながら可愛い言葉を響かせ少女の姿が、駅の入り口から元気良く、否、のしのしと……、そう、巨漢を重々しく現した。

「!?!」

怪物。

一言で第一印象を語るならば、もっとも正解に近い言葉がそれだった。

身長が2メートルはあると推測され、ごっつい筋肉質の体にオレンジ色の作業用つなぎを上半身だけ脱ぎ、ぐるりと腰に巻いていた。

そしてタンクトップ越しに見える筋肉と筋肉、皮膚と皮膚、パーツとパーツを繋げ合わせたかのような縫い目が目立つ幾つもの傷が全身に刻まれ、顔面も傷だらけだった。しかも両耳の上あたり、金髪の短い髪の中から中途半端に捻じ込まれたド太いボルトが一本ずつハンドルの様に刺さっている。

「フ、フランケン……」

驚愕に表情を強張らせながら言う昂輝が、お砂から預かった旅行鞆を地に落とし、身を硬直させて居た。

「フランケンではありません、イゴールちゃんです。

そもそもフランケンシュタインは、怪物を作った博士の名前で、怪物の名前がフランケンではありません。勘違いです。

エクソシスソを、悪魔に取り付かれたホラーな少女の名前と間違えているぐらいの勘違いです。エクソシストは、悪魔祓いしの神父たちの呼び名です」

「は、はあ……」

傷だらけな2メートルの怪物の口から、少女の可愛らしいで説明が飛んでくる。不思議と物語る以前に有り得ないほど奇怪な音質。

声だけ吹き替えの声優を間違えたかのようなチョイス。

強烈な冗談か、ただの出落ちキャラに思えたが、インパクトだけは衝撃的だった。

「私、イゴールちゃん、よろしくです」

元気で無邪気な大男だった。

お砂姉さん（後書き）

何処に向かっているか判らなくなってきた>w</p>

ヴァルハラ

四人が駅前の坂道をユルユル降る。高台のこの場所まで、離れた海の香りが、鼻を凝らせば僅かに届く。海と山と温泉の町だと、五感に自覚を促す。

我先に先頭を歩く憑き姫の矮躯に細い腰元を過ぎて可憐な小尻の前で、長く可憐に切りそろえられた黒髪がユラユラと揺れていた。

坂道から見える町並みの景色よりも、ロリコンならばこちらの方が絶景と言えるキュートな後姿である。

憑き姫の直ぐ後ろに続く昂輝とお砂。巨漢の怪人、自称イゴールちゃんは、更に二人の後ろをのしのと大きな歩幅で付いて来ていた。昂輝の耳に、重量感溢れるジャングルブーツの足音が届いていた。

「お砂さん。僕の呪いを解くのにどのぐらい時間が掛かりますか？」

落ち着きの感じられる大人の女性お砂に対して昂輝が、我が身の不安要素を尋ねる。するとほぼ同時に、坂道の下から強い風が登って吹いてくる。

気持ちいい風が憑き姫の髪を靡かせると、皆の肌を灼熱から冷やしてくれた。

お砂が差す日傘がパラシュートの様に風を抱え込み後ろに仰け反ると、被る白い帽子が飛びそうになったが、慌ててお砂がレースの白手袋越しに帽子を押さえる。

その仕草が昂輝の目には、清楚な令嬢の様に映る。不意な風から身形を戻したお砂が、軟らかい垂れ目を細め笑顔を作ると、優しい口調で昂輝の質問に答えた。

「時間が掛かると言うよりも、年月が掛かると言ったほうがいいかしらね。」

「年月ですか……」

気の永い見積もりだった。

時を数える単語を替えられると昂輝が苦笑いを見せる。

最低限、一年二年は覚悟が執拗の様子だ。まさか十年二十年までとは、言わないだろうかと心配になる。

「年月って、どのくらいですか？」

不安なので念の為に訊いてみる昂輝。

「それは、これからの調査と診断しだいよ。詳しいことを調べ上げるだけで何日か掛かると思うわ。」

「そうですか……」

気が重たくなる。

家族に訪れた不幸。町に降り注いだ災い。

それらの原因が、自分の体内に無理矢理詰め込まれている昂輝としては、ことを急ぎたいのが本音であるが、封印が解けて表れた妖怪変化を退治するオカルト的な問題よりも難しい話のようだ。

まず、呪いを解く話に関しては、今頃海の家でのうのうと生ビールを飲みながら、茹でた枝豆を摘んでいる軒太郎と合流してからだろ
う。

この一時間余りを、急かしたとしても仕方が無さそうだと、昂輝も素直に諦める。

そして何も話さないのは、それはそれで空気が濁り、居た堪れないので昂輝は、何気なく自然な素振りで話題を変えてお砂に話しかける。

「呪いとは別の話なのですが、質問をしてもいいですか、お砂さん？」

「何かしら？」

チラリと横を見ると、微風に煽られお砂のソバージュヘアが、艶光しながら、ふつくらとした胸の前で揺れていた。

ぺったんこな憑き姫と比べたら失礼に思えたが、結構なサイズに窺える。

Dか、Eか。

身長174センチある昂輝と並んで比べてみれば、160センチちよつとに見える身長。そんなところから感想を述べれば、立派な物を揃えているのが賛嘆できた。ナイスである。

洋服の胸元に称賛の膨らみを携えるお砂のそれを眺めながら、昂輝が質問を続ける。

お砂は前方に降る坂道の先を眺めながら歩いており、少年の好奇心に気付いていない様子だ。しかし笑顔を崩さない。もしかしたら、少年が向ける好奇心に気付いているのかも知れないが、その定かは不明だった。

「お砂さんは、普段は何をやっている方なのですか？ 憑き姫と軒太郎さんは退魔師ですよ、お砂さんも同業者なのですか？」

「あらら、軒太郎ちゃんから何も聞いてないの？」

「はい、何も……」

何もと言えば、何も聞いていない。

「私たちはひとつの会社の社員よ」

「会社？」

「貴方もバイトで会社に雇われたのでしょ？」

てつきり昂輝は、三外軒太郎が個人的に自分をバイトとして雇ったと思っていたが、違ったらしい。あの人は社員であるのも意外だった。

退魔師と言うからに、フリーか何かの仕事だと思っていたのだ。

「会社の名前は、有限会社 ヴアルハラ探偵事務所よ」

「探偵事務所だったんですか!？」

ちよっとビックリだ。

そしてハードボイルド系な探偵家業かと思わせてオカルト業。妖怪、悪魔、幽霊からUFOまで何でもお任せみたいなことも言っていた人物が探偵とは……、意外を五十歩ほど通り過ぎて、名乗るべき業種名を明らかに間違えているのではと、首を傾げる昂輝。

そもそもオカルトチックな仕事を探偵事務所が受けるべき内容なの

か、それすらよく判らない。
しかも事務所の名前が北欧神話に登場するオーディンの宮殿から取ったとはつきり解るネーミング。
凄い会社名だ。

あの人が勤めている会社らしいと言えば、あの人らしい内容だと思う。

「イゴールちゃんも社員なのです」

明るく可愛らしい声が、昂輝たちの後ろからそう言った。かなり高い位置からだ。

しかし昂輝は、振り返るのに躊躇してしまふ。

「社員は社員でも貴方は、契約社員でしょ」

憑き姫が振り返らずイゴールの言葉に、抑揚を低くさげながら揶揄する。どうやら大男は、正社員でないらしい。

まさか暴言にも取れる今の言葉にイゴールが、機嫌を損ねていないか気になった昂輝が、恐る恐る振り返り大きな強面を見上げると、怪物の表情は、明るくニコニコ微笑んでいた。気にもしていない。胸を撫でおろしながら、前を向きなおす昂輝。

そして彼に、疑問がひとつ浮かぶと口に出す。

「じゃあ、憑き姫は？」

昂輝が憑き姫に訊きながら、はじめて彼女の名前を呼び捨てに呼んだ。

思わずであった。

本来なら年下なのだ、気に止めることではないはず。

勢いのまま言葉。

このまま憑き姫が気にしていなければ、これが切っ掛けになって、彼女とも少しは仲良くなれるかもしれない。まあいいかと、憑き姫の反応を窺う。

憑き姫が、僅かに振り返ると呟く声で言った。

「私は、バイトよ。未成年だから」

憑き姫は、呼び捨てになったことに、何も触れない。そもそも「さん」付けのほうが可笑的なのだ。これが正常なのだと言輝が安堵した。

「バイトなのか、僕と一緒になんだね」

微笑みながら返す言輝。

年齢15歳は、本当のようだ。

妖怪の年齢は、見た目以上だと聞く。子供の姿でも数百歳だと聞く。

年齢よりも人間であることに、言輝がホットした。

思い出される怪奇な記憶。

魂を操り、妖怪が封印されたカードで戦う美少女。摩訶不思議な彼女の全容を見てしまえば、そう思っても仕方がないかも知れない。本人は、少し人間の枠から外れただけと言うが、完全に妖怪変化同様だ。

そう言輝が思いながら歩いていると、また憑き姫が軽く後ろを振り

向き、ボソリと述べる。

「時給1500円だけどね」

「たか！」

憑き姫の時給、1500円。

昂輝の時給、650円。

この差は、いったい何の差だろうか？

戦闘力？ 経験？ 可愛さ？

まあ、比べても仕方がないことだ。直ぐに昂輝は、気を取り直す。

今度は、お砂から昂輝に語る。

「軒太郎ちゃんは、その事務所の二代目なのよ」

「跡取りってことですか？」

「ええ」

「なるほど」

前を歩く憑き姫が、振り向かず話し始めた。

「軒太郎の父が社長で、私もお砂姉さんも、その子も皆が同じ会社の従業員よ。驚いた？」

驚いた。

憑き姫の言葉の中には、一度聞いた情報しか入ってなかった。何故二度言う？

イゴールが話を引き継ぐ。

「イゴールちゃんとお砂姉さん、憑き姫ちゃんと軒太郎さん。それと社長さん。あと二人社員がいるのです。」

全員で従業員七人の小さな可愛い会社なんですよ」

明るく説明するイゴール。

従業員七人の会社が、可愛いと表現されて正しいかは何とも判断に困るところもあるが、会社全体がフレンドリーなのだろう。

「イゴールさんも、探偵なんですね」

振り返り顎を上げて、目線を登らす昴輝は、傷だらけの怪物の顔を拝みながら言う。

だが、怖い顔は怖い。今日一日では慣れそうになかった。

「うんうん、私は探偵じゃないです。普段はお茶汲みとか電話番号をしています」

「そ、そうなんですか」

電話番号は声だけだから問題ないが、この強面の図体でお茶を運ばれて来たら、口から心臓が飛び出し、仕事の依頼を忘れて事務所から逃げて行きそうな話である。

今思えば、駅前でイゴールを見たとき、よく自分は逃げなかったと感心してしまう。

そして『普段は』と言ったイゴールの台詞が気になった。では、それ以外の時は、プライベートの時はいったい何をしているのだろうか？

その疑問が、つい口からこぼれた。

「普段は？」

「解体師です」

こぼれ出た言葉に、素直に答えるイゴール。

一体全体何を解体するかは不明だが、乙女のを発する剛腕怪物のボディーならば、乗用車の一台二台、牛の一头や二頭、道具を持たずに難無く解体してしまいそう思えた。

叩き潰し、捻り潰し、引き千切る。

激しいイメージが音を鳴らして脳裏に思い浮かぶ。やはり怖い。

「お砂さんは？」

怖い妄想を掻き消すために昂輝が、純白の女性に話を振り戻す。

「私は呪いの調査や処理が専門だから、今回みたいに呪い関係の依頼が舞い込んだときが出番ね。」

普段のように、力任せに終わる仕事の際は、殆ど用無しよ」

探偵なのに普段は力任せに仕事が終わるのかと疑問に思う。探偵とは、推理してなんぼの家業じゃないのかと思案する。

そのような探偵事務所に、訳有りながらもバイトで雇われたのだ、不安も咲くし、今後の心配も膨らむ。

そしてしばらく昂輝が質問を投げかけながら歩く四人。

殆どの質問が、探偵事務所の仕事内容が中心だった。どんな事件があったのか、どんな妖怪と戦ったのか、そのようなことばかりだっ

だが、聞けば聞くほど眉唾でオカルトチックな内容だった。まさにマンガの世界である。

自分が呪われ、狼男に替わり、リジエネレーターで、妖怪わいらを見ていなければ、とてもとても信じがたい話の内容ばかりだった。一年前の昂輝なら、きっと笑って信じなかっただろう。

やがて道の向こうに、昂輝にとって見慣れた海と、見慣れない人々が群がる浜辺が見えて来る。

「海ですー」

澁刺とした口調でイゴールが言う。

巨体の動きが、オカマ、否、少女の素振りではしゃいでいた。

そのまま四人は、軒太郎が待つ海の家へと目指す。

いろいろな意味で、人々の視線が四人に集まる。

なんだか恥ずかしく感じる昂輝であった。

システム

昂輝と憑き姫の二人が並んで砂浜を歩き、案内されるままにお砂とイゴールが後ろに付いて行く。

ジャングルブーツのイゴールは、焼けた砂の上でも平然と後に続くが、ヒールが低いとはいえパンプスを履いているお砂は、浜の砂に足を取られて歩きにくそうにしていた。時折、よろめく。

そして軒太郎が待つ海の家に到着した四人は、靴を脱ぐと座敷にぞろぞろ登っていく。軒太郎は、海の家の方角で独り、未だ生ビールを暢気に飲んでいた。

昂輝が駅まで二人を迎えに行つて帰ってくるのまで約一時間。その間ずっとビールを飲んでいたのであるが、顔は陽気に赤く染まっていた。いつも以上の笑顔が溢れている。

機嫌もすこぶる良さそうだ。

四人の姿を見つけると、飲んでいたビールのジョッキをテーブル置き、無邪気に手を振って仲間たちを呼ぶ。他の客たちの視線が一斉に集まるが、気付いても居ないのか気にも留めない。

「おーい、こっちだよー」

黒衣のときとは、まったくの別人だ。凄みも緊張勘も感じられない。欠片もだ。

四人が軒太郎とテーブルを共にするため近寄る。

昂輝が人数からして何処に座ろうか一瞬の迷いを躊躇すると、憑き姫がいち早く軒太郎の向かい側の奥へと席を陣取った。

じゃあ、昂輝は軒太郎の隣に座ろうかと思つた瞬間、憑き姫が「ね

え」と、昂輝の顔を見上げながら一言だけ言った。
何かと思う。

憑き姫の一言に、つい動作を停止して視線を落とす昂輝。その隙にお砂が、何気なく軒太郎の隣に腰を下ろした。

あら？ と、心で囁く昂輝。

憑き姫が、昂輝に対して隣に座れと言いたいのか、じっと彼の顔を見上げていた。昂輝が憑き姫の無言の要求を叶えるために、畏まりながら隣に座った。

なんだか照れくさい。

イゴールは誕生日席に巨漢を下ろす。大きすぎる図体のため、そこが低位置なのを自覚しているのか、何も言わない。
さぞ当たり前の如く腰を下ろし怖い顔をニコニコさせていた。

五人が席に付くと昂輝が、ふと、気付く。

この四人、憑き姫以外は、いつもスマイルだ。軒太郎も、お砂も、イゴールですら愛想良く笑顔を見せていた。

まあ、どうでもいい発見でしかない。

「お砂姉さん、わざわざ出向いてもらってすみません」

「いいわよ、お仕事ですもの」

笑顔の軒太郎に、笑顔で返すお砂。付き合いが長いのか、大人だからなのか、それとも笑顔同士だからなのか、そのへんの理由は不明であるが丁寧な口調の中にも友好的な空気が感じられた。

にこやかな軒太郎は、続いて視線を大男に替える。

「イコールちゃんも来たんだね」

「はい、なんでも面白いことになっているとか言う連絡が入ったと聞きましたので、これは逃せないと思い、無理言っつけて付けてきちゃいましたです」

強面の笑顔で可愛らしく語るイゴール。

面白いこととは昂輝の呪いのことなのか、不死のことなのか、それとも両方なのかは判らないが、電話でお砂に連絡を入れた際、どのような言い方を軒太郎が述べたのかが気になるところだった。

しかし訊くだけ無駄と悟る昂輝は、全員が揃ったことで話の本筋を思い出させるために自ら切り出す。

「僕に掛けられた呪いの話なのですが……」

「まあ、そう急かすな、昂輝君」

焦る昂輝を宥める軒太郎。そこに横からお砂が、具体的なスケジュールを話し出す。

「昂輝君、焦らないでね。まずは貴方の体を調べて、記憶を調べるの。これは静かな場所なら何処でも出来るわ」

「本当ですか!？」

直ぐにでも調べてもらいたい口調で、昂輝がテーブルに上半身を乗り出した。

真剣な眼差し。

深刻な辛さがジリジリと伝わる。

「落ち着きなさい」

隣の憑き姫が、昂輝のＴシャツの袖を引きながら言うと、昂輝が振り向く。

憑き姫の表情は、いつもの様に無表情だった。

ただ、いつもとは違う無表情だった。

昂輝を心配げに見る無表情だった。

まだ長い付き合いでない。出会ったばかりだが、昂輝にも不思議と悟れた。

本当に不思議なことに　だ。

がっかりと肩を落とし、腰を下ろす昂輝が「すみません」と一言だけ呟いた。

皆に詫びる謝罪の言葉が暗かった。

「気にするな、ドンマイです」

イゴールが可愛く言うが、怖い。やっぱり怖い。

「でもね、昂輝君」

優しい口調でお砂が続ける。

「診察も調査もね、治療ではないのよ」

確かに　。

「呪いを解くには原因を調査して、呪いの仕組みを解き明かしてから、精密機械の部品を一つ一つ取り外して分解するように、機能を封じないと行けないの。」

殆どの呪いが、掛けた呪術師を倒したり殺したりしても、呪いだけが残り、永きに渡り効果を継続するパターンが多いのよ」「

「なるほど、そうなんですか……」

俯く昂輝。

まだ憑き姫が、Tシャツの袖を摘んでいることにすら気付いていない。

呪いが、部活の仲間を傷つけ、殺したのだ。

呪いが、両親を自殺に追い込んだのだ。

呪いが、昂輝からすべてを奪ったのだ。

呪いが、己を怪物に変えたのだ。

深刻を露出して、忌々しさに必死さを晒すことすら忘れていた。

「まずは診断、それで呪いの原因が判らなかつたら次は自宅の調査ね。そこでも判らなかつた、町の歴史やらを調べないと……」

語るお砂の表情が難しくなり、眉間に皺をよせながら眉毛を八の字に曲げる。同情である。

お砂の困り顔を見て、説明を噛み砕き話し始める軒太郎。

「原因が判らず、調査の範囲が広がれば広がる程に厄介なんだよ。呪いって奴はね、昂輝君。呪い本体を掛けられた側から解体するよりも、呪いを掛けた人物と同じ位置から解体するほうが、作業も簡単なのだよ。」

例えるなら、一方通行の道を逆そうするのは危険だろ、入り口から入って、出口から出る。

スキーも雪山を降るもの、スキーを履いたまま雪山を登るのは、難儀だろ。

呪いも一緒なんだよ。掛けた側に回りこみ、そこから解除作業に取り組むほうが手軽に、安全に、難無く作業が行なえる」

「なるほど」

分かりやすくなった説明に、納得する昂輝。

そして、どちらにしても時間が掛かることも理解した。

「とりあえず昂輝君の診断は、夜になってからね。基本は丑三つ時よ」

それっぽい時間である。

少しでも有利なポジションを取るための演出なのだろう。

「軒太郎さん、広い場所を用意できるかしら？」

「ええ、町の顔役、大塚氏の屋敷を借りることになっています。」

玄関前に、芝生の丁度いい庭があるのですよ」

いつの間に話を付けたのかと昂輝が、やや驚く。とても段取りが良
い。

ただ昼間から枝豆を摘みにビールを呷っていただけでは、なかったらしい。やるべき仕事は、ちゃんとこなしていたのだ。大人であると感心する昴輝であった。

「じゃあ、それまでは自由時間ですね！」

「ええ、かまいません」

可愛らしい声を上げるイゴールに答える軒太郎は、続いて大きく手を上げ生ビールの追加を注文した。

まだ飲む積りらしい。

大人であると感じた思いを訂正する昴輝であった。

そしてイゴールが席を立つ。

「私、水着に着替えてきます！」

「えっ!?!」

イゴールの台詞に驚く昴輝。

そういえば確かにイゴールは、小さく見える大きな靴を持っていた。巨漢のため靴が目立たなかったが、駅からずっと持っていた。

「じゃあ、私も水着に着替えようかしら」

「えっ!?!」

今度はお砂もそう言いながら席を立ち、イゴールの巨漢を追って、更衣室を目指す。

驚く昴輝の声は、期待に溢れる声だった。

スレンダーな憑き姫の水着姿もいいが、大人の魅力溢れるお砂さんの豊富なスタイルが魅惑する水着姿も見てみたい年頃であった。でも、マツチヨで傷だらけのイゴールの水着姿は、出来れば見たくない……。それに砂浜が恐怖に染まり凍りつく光景も予想できた。

昂輝の隣で憑き姫が、じと目でＴシャツの袖を引き続けていたが、若き好奇心に惑わされた昂輝は、それに気付いていなかった。

それにしても昂輝少年は、何だか女性と一緒に居るだけで災いの苦悩すら忘れられる体質のようだ。

単純と言うか、若いと言うか、煩惱が多すぎるのか、節操の無い昂輝であった。

さあ！ 水着だ！ カモーン！！

昂輝の心の声である。

トンネル（上）

日が沈み、濁る灰色雲が夜空を漂流しながら月光を隠しては過ぎて行く。再び濡れた顔を露にする月面には、幻想的に美しい女性の姿が映って見えた。

風が暖かくも温い空気を流す夜。温泉街に面した砂浜は、昼の暑さと活気を失い、代わりに祭りの会場をホテルや旅館の一室や広間へと移り変わり、まだまだ楽しき時間を繰り返す。夏の盛り上がりは、夜に替わっても収まる素振りを見せずに猛り続けていた。

場所は異なり、山中の山道。

鬱蒼と生い茂る藪の間に踏み固められた畦道のような一本道。車が進み固めた二本のそこには雑草すら生えず、双子の大蛇の様に見えていた。

ゆっくりと慎重に走る一台のスカイライン。白いボディから伸びるヘッドライトの光に、前方の荒れた道が窺える。

四つのタイヤで跨いだ雑草が、車体の腹を擦るザラザラとした音が車内にも聴こえて来る。

「まだ着かないのお〜」

「もうちょっとだって」

「ここ薄気味悪いね。なんだか寒気がしてきたわ。クーラー効きすぎじゃないの」

「そんなことねえよ。クーラーは25度だぜ」

「じゃあ、気のせいかな」

「なんだ加奈子、ビビッてるのか」

「バカ、わけないでしょうが」

車内には、カップルが二組。運転している男と、助手席にその恋人そして後ろにもう一組のカップルが居た。

寒いとぼやいたのは、後部座席の女だった。

年の頃は17から20ぐらいの男女だろうか。四人が四人、今時の若者らしくチャラチャラとした身形で騒いでいる。

山中を進むスカイラインは、人気の無い荒れた道を只管走る。

ツーリングコースからも大きく外れた道と呼ぶにはお粗末な山道。

過ぎる車に怯えて虫の音も止まるが、そもそも虫が鳴いていたか否かは、車内の四人にはエンジン音で分かっている。

このような夜更けに四人が目指す先は、雑誌で見た心霊スポット。

幽霊が目撃されると載っていたトンネル。

そのインチキ臭い雑誌を、助手席の女が丸めて持っている。

霊界トンネル。

まあ、似たようなスポットは全国と言わず、世界各国いたるところに多く存在するが、どれが本物でどれが偽物が区別する方法は少ないだろう。

この温泉街の山中にあるこのトンネルは、霊界トンネルと昔から噂され、心霊スポットとしても有名な場所だった。雑誌に載るのも一

度や二度の話でない。

未だ年に一度は間違いなく、テレビや雑誌の取材が訪れる。

故にこうして様々な場所から、車などに乗りたい年の若者たちが、からかう様に訪れ、はしゃいでは夏の会談を楽しみ帰って行く。この四人も、そんな輩たちと一緒にだった。

「お、あれか？ 見えてきたぞ」

「うわ、薄気味わる〜」

フロントガラスに顔を近づけ目を凝らすカップル。その二人の座席を掴んで、後部座席のカップルも、座席の隙間から顔を出して前方を興味深げに覗き込む。

おどろおどろしいトンネルだった。

山の斜面に口を空け、赤茶色のレンガ造りの壁には、山肌から垂れた草木や蔓が、不気味な表情を隠そうとする前髪の如く垂れ下がり、より一層の奇怪さを満点に演出していた。

本当に幽霊が出るが否かを置いといても、心霊スポットとしての役目は十分に果たしている。

これなら幽霊が出なくても満足だ。

一夏の楽しい思い出が出来るだろう。

「雑誌に載っていた通りだ。本物が拝めそうだぞ……」

後部座席の男が期待を抱きながらそう言うと、脇に置いてあった鞆からデジカメを取り出し、車から降りて行く。

残りの三人も、それに続いた。

車のエンジンは切ったが、ヘッドライトは消していない。車の明かりがトンネルの入り口から闇を照らし上げる。トンネルの長さは、差ほどでも無い様子だ。車のライトが正面から出口まで貫通する。奥行き50メートル程だろうか。

二組のカップルが、それぞれの組み合わせとは異なり寄り添い進む。女性同士が縋り合う様に腕を組む。

運転手の男が懐中電灯を片手に、もう一人の男がデジカメを構えていた。

明らかに怯えを示す女性人に比べ男二人は、ここぞとばかりに彼女たちへとカツコイイところを見せようと、怪異の慄然を押し殺し、凜と男を振舞う。

「よし、行こうぜ」

「おう」

男同士で確認しあうと二人は、一度だけ彼女たちの怯える様子を見てからトンネルの中へと踏み込んで行く。

気合が入る。

女たちは、その背中に遅れまえと駆け足で追った。

四人は、付かず離れず先を目指す。

その四人を背後からスカイラインの光が照らして長い影法師を真っ直ぐ伸ばしていた。

己の影を踏みしめながら進む四人。足音が、カツリカツリと響く。

デジカメを持った男が、手当たり次第にシャッターを指で押し、フラッシュの瞬きを放っていた。壁、天井、床、仲間、入り口、出口と一瞬の光が映る。

「なんか、スゲーの写りこまねーかなー」

「あとで画像確認したら、ヤバイものが映っていたりして」

シャッターを繰り返す男が言うと、女がふざけた口調で会話を返す。そんなやり取りが、彼女たちの恐怖心を少しずつ払い取り、強張っていた顔に笑顔も戻る。

一人の男が懐中電灯で辺りを照らし、もう一人の男がデジカメを取り続け、女たちが、その後ろに付いて行く。

随分と長いトンネルに感じた。

最初にトンネル内を覗き見たときは、そんなに長いトンネルに見えなかったが、いざ中に入り歩いてみると、割と長く感じられる。ただの恐怖心がそうさせているのかは不明だが、進む四人は、そう思うことを口には出さなかった。詰まらない意地からだ。

そしてしばらく経つと、デジカメを持つ男が撮影を中断した。フラッシュの輝きが収まる。

撮影を止めた理由を彼女たちは、ただ厭きたのか、ただメモリーが一杯になったのかと思った。

だが、違うようだ。

デジカメを持った男は、踵を返すとヘッドライトで手元を窺う。

「良く見えないな。おい、ちょっと手元に光をくれ」

「ん、どうした？」

先程まで撮影に夢中になっていた男が、手元でデジカメを弄繰り回していた。懐中電灯を持った男は、手元に光を当てる。ヘッドライトと懐中電灯に照らされるデジカメは、電源が入っていなかった。男が電源を、ON、OFFを繰り返す。しかしデジカメが復活することはなかった。

「バッテリー切れか？」

「壊れたんじゃない？」

「あいあい、今週買ったばかりだぜ！」

「じゃあ、返品とか利くんじゃない？」

手元のデジカメを囲み四人がそのような会話していると、今度は懐中電灯の明かりがゆっくりと力を失い、役目を果たさなくなる。

「あれ？」

男が、力尽きた懐中電灯を掌で叩く。

「今度は、そっちが電池切れ？」

言った最中である。

トンネルの入り口から照らしていたスカイラインの光に人影が映り込む。

それに直ぐ気付く四人。ハツとして入り口のほうを向く。

長く大きな影が映っていた。

否、影が長く大きい訳ではなかった。ヘッドライトの前方に立つ何者かが大きかった。

巨人。

遠目にも理解できる大きさ。

明らかに人のサイズではない。

2メートル、否、3メートルはあるだろうか……。

トンネル（下）

四人は驚きの余り声も上げない。悲鳴も出ない。呆然の表情で入り口に立つ巨人を見ている。驚愕が、沈黙と化していた。

「ドッキリ……？」

そのような訳がない。

一般市民の若造に、こんなところで、こんな風に誰がドッキリを仕掛けるというのだ？

「おいしそうなお肉ズラー」

声が聞こえた。

四人が一斉に、その声の聞こえて来た方向を見上げる。

そう、見上げたのだ。

わざとらしくキャラ設定を立てようとしている方言の訛り声を落とした者が、天井に張り付いていた。

「ひい！」

四人の視界に入った光景は、巨漢の男が蜥蜴の様に張り付いている姿であった。女の口から小さな悲鳴を漏らすと、空気が震えて冷え上がる。

大気までもが怯えていた。

天井に張り付くそれは、入り口に立つ巨人ほどではないが、かなり

の巨漢で肌の色が深い緑色だった。
どちらも人間には見えない。
そう、化け物。

「うわああああ！」

女の悲鳴よりもワントンポ遅れて一人の男が持っていたデジカメを
落とし、腰を抜かすように尻餅を付いた。
男の声に続いて女性二人が、

「きゃあああああ！」と、悲鳴を響かせる。

まず四人は、うろたえた。

身を守る。

彼女を守る。

仲間を守る。

それとも逃げる。

それらよりも最初に行った行動は『うろたえる』だった。
そして次に取った行動も『うろたえる』だった。

愚かにも判断を忘れ、哀れにも混乱を選んでしまう。

そもそも心霊スポットなんぞに来るだけの根性は、備えていなかったのだ。

少しずつ本能が状況を飲み込みはじめる。

怖いときは逃げる。

それが純粹な反応。

逃げおおせる先は、車がある反対側の出口。

本能に促され彼ら四人が、恐怖のまま逃げようと行動を起こす。

しかし車があるのとは別の出入り口にも人影が見えた。しかも三人。

カップルたちは、その三つの影に助けを求めようとは考えなかった。

何故なら理由は簡単明快。

マッチョな男、髪の毛の長いスマートな男、そしてグラマーな女。それから三人は、時代劇のエキストラかと思う、古めかしい町民や女郎の姿をしていたからだ。

しかも髪の毛の長い男は、右手に長めの合口をもっていた。銀色の刀身が、ベッドライトの光に輝き殺意をチラ付かせている。

「な、なによ、こいつら……」

「知るかよ……」

ただ、うろたえ続ける四人。

「封印が解けたばかりで、妖力が殆ど残ってなくてよ。実のところ困っていたんだよ、俺たち」

着物を膨らませる大きな筋肉は、全身赤かった。額には二本の角。形相が鬼そのもの。

「そうそう、空飛ぶ黒雲馬の術も使えず、歩いて山中を彷徨っていたの」

女郎のような女が言う。

肌は紫色。人とは思えない肌色だが魅惑的な大人の女だった。

「これで、妖力も回復できますわ」

「ああ、そうですね。これで腹が満たせます。妖力も回復できますな」

合口を手にした髪の長い男が、薄ら笑いで紫の女に言葉を返す。長いワンレンの髪から覗く笑みは、青く奇怪だった。

赤い肌、青い肌、紫の肌。

三人が四人を目指して歩き出す。

四人が怯えて逃げ出そうとしたが、入り口からヘッドライトを隠すように巨人が、猫背でトンネルへと入って来て居た。

それを見て四人が足を止めた。前を向き、後ろを向き、クルクルまわり、逃げ場のない状況に危機感を急上昇させて行く。

「鬼だ！」

一人が気付き、口に出す。

突如現れた者たちは、女以外は角が見えた。

一本二本と角がある色取り取りの鬼たち。

「一匹足りないズラ！」

天井に張り付く緑の鬼が言う。

鬼は五匹、若者は四人。

その言葉から自分たちが食われるのかと連想を進めるカップルたち。恐怖のあまり一人の女性が、粗相した。しかし仲間たちは誰も気付かない。そんな余裕は欠片もない。

「大丈夫よ、心配しないで」

紫色の女が言う。

「全部刻んで集めてから、私が料理してあげる。そうすれば、皆に均等に行き渡るわ」

「おお、名案ズラ！」

「生きたまま捌いてあげるわ」

怪しい口紅で微笑む紫色の女。その女の言葉に恐怖心が臨界点に到達したのか、一人の女が我武者羅に走りだした。

三匹の鬼たちの間をすり抜けようと試みる。

無謀なチャレンジだった。

しかし彼女は、三匹の間に存在している僅かな隙間に、淡い期待を見出し突き進む。

仲間の三人は、彼女を止めない。追わない。続かない。

その行動に希望を見出せないからだ。

彼らは試みることよりも、諦めることを選んだのだ。

運が良ければやり過ごせる。誰かが助けに来てくれる。これはただ

のドッキリだ。夢だ。嘘っぱちだ。

彼らは淡い希望を、そちらに向けたのだ。走り出した彼女のように、自分で希望を勝ち取ることよりも、運を天に任せただのだ。

三匹の鬼に向かった彼女の前に、長髪の青鬼が走り出る。

彼女は前をふさがれ走りを止めた。すると目の前で合口が振られ、上から下へと輝く剣筋を煌かせた。

「加奈子！」

男が彼女の名前を読んだ、が、彼女は真つ二つに割れて左右に体を開いて倒れて行く。

綺麗に割れた器から、血や臓物が床に散らばり青鬼がうつすらと笑うと、その光景を見ていた女が悲鳴を上げた。

「いいあああああ！」

「嘘……だろ……」

しかしトンネル内に響き渡る女の悲鳴は、直ぐに止まった。

悲鳴が止まると同時に彼女が後ろへ倒れこむ。何が彼女に起きたのかを、直ぐに男たちが視線だけで確認を求めた。

女は、顔面から血を流していた。水道管が破けたように顔面から血が吹き出ている。

穴が開いていた。ひとつふたつではない。拳銃か何かで撃たれたような穴だ。そこから血が吹き出していた。止まる事無く。

男が悟る。

もうこれは、ドッキリではない。

助けもこない。

自分は、死ぬのだと。自分は、運が無かったのだと……。

そう絶望に浸るなか、ゴキゴキつと、嫌な音が隣から聞こえた。

いつの間にか天井から降りてきていた緑の鬼が、仲間の頭を両手で掴み、可笑しな方向へと捻っていた。

仲間の首が変形して鼻血を垂れ流し、口から赤い泡を出している。

男は思った。

自分の運は、完全に尽きたのだと……。

そして。

五色の鬼たちに囲まれながら。

仲間の後を追う……。

鬼対退魔師（一）

辰、巳、牛と時は流れ、深夜を刻む時計の針が2時半を過ぎた頃、温泉街の山沿いに屋敷を構える大塚邸の庭先、そこに五つの来客の姿があつた。

一流の庭師によつて組作られ手入れされて来た、和を極めし日本庭園が、古い作りの日本家屋平屋建てとマッチして、気品の中に夏の四季を映し出し、わびさびの嗜好を魅い出して居た。屋敷の広さよりも拘りの庭園のほうが大きく感じる。

その庭園を見渡せる芝の上、敷き詰められた青い芝生の面積は、小さな公園以上の広さは十分にあつた。

敷地内に立てられた幾つかの外灯と、空から注がれる月明かりが混ざり合い、人口物と天然の合成された違和感のある光で辺りを照らす。時折空を流れる灰色雲が月と地上の間に割って入っては、意地悪く光の交わりを妨げている。

湿り気を感じさせる芝生の上に、四方5メートル間隔で立てられた細い棒。高さは1.5メートル程だろうが、その棒を繋ぎ合わせるように引かれた注連縄には、紙で折られた白い注連飾りの数々が、微風に煽られ神秘的に揺れていた。

「さてさて、我々は見学だな」

「そうね」

軒太郎の言葉に憑き姫が答える。二人の後ろにイゴールが、ブロッ

ケン山の如く聳えていた。注連縄に囲まれた空間の真ん中には、昂輝が座禅を組んで居る。精神を統一する為か、瞼を塞ぎ静かな鷹揚を見せていた。

静かで新鮮な空気が、月光に照らされ夢が如く透き通る中、昂輝に注連縄の外から両手を翳すのは、呪術師のお砂。

いつもの白い洋服に白いツバの広い帽子を被り、純白の様で呪いの診断を始めて居た。

清楚な奥様の……もとい お嬢様のようなイメージが強いお砂の表情は、おっとりとしたいつもの表情から真剣な眼差しに替わっており、随分と引き締まっていた。

昂輝の呪いについての診断が始まって、まだ10分程度の時間しか経っていない。

「イゴールちゃん、つまんなーい、厭きたです」

まだ10分程度しか……。

「早いわよ、イゴール。貴方はもっと我慢を覚えなさい」

「えー、私は憑き姫ちゃん見たいに辛抱強くないですもの。ぶー」

小さな憑き姫に説教を受けて、大きな図体のイゴールが可愛い声で愚痴を返す。

少し離れた位置からそれを窺っていた剛三が、老いた顔に苦笑を浮かべて滑稽な光景を眺めていた。

イゴールの可愛い声が、どこから出ているのだろうか、如何してあのような声が出るのかを疑問に抱きながら。

そして時間は、静かな夜に流れて行く。

注連縄の中で座禅を組み動かない昂輝。

診断を続けるお砂。

外野は気ままに過ごす。

剛三の姿は屋敷内に消えて、憑き姫はお砂の背後を離れた場所からずっと眺めていた。

イゴールは体育座りで両膝を抱え、庭園に幾つか見える置石の様に丸まる。その横に立つ軒太郎は、先程から一人で黒い山の方角を眺めていた。

既に一時間が過ぎただろうか。

お砂と昂輝の様子は変わらない。呪いの診断を始めたときから動きひとつ見せないで、じっと同じポーズを保ったままだ。もう一時間は過ぎている。

憑き姫が軒太郎のほうを見ると、軒太郎もまたずっと、夜空に被る山肌を眺めていた。

何か気になることがあるようだ。

「気付いた、軒太郎？」

闇夜に映る山の姿を眺め続けていた軒太郎に、白いワンピースの裾を膝の高さで揺らす憑き姫が話かけた。

問う憑き姫の声は、夜の闇のように感情の薄い声だった。

「ああ、小さかった妖気が大きくなったな」

「ええ　そうなのよ」

「何がですか？」

二人の会話にイゴールだけが付いて行けてなかった。傷だらけの強面を、体育座りのまま横に傾げる。

「数は四か　五つてところか」

「ええ、そうね。おそらく鬼の類　」

「俺もそのへんは同意見だ」

「おやおや、妖怪の出現ですか？　二人は本当に感度が敏感ですね。私にはさっぱり判りませんです」

「どうする、軒太郎。行く？」

「ああ、ここに居ても何の役にも立たないし、行けば何かしら使えるパーツはゲット出来るだろう」

「そうね、レアリティーが低くても鬼は鬼、それなりの魂よね。無いよりはましなカードになる、かな」

「はい、はい、イゴールちゃんも行きまーす」

イゴールは立ち上がると幼稚園児にも負けない元気さで、手を上げながら跳ね回る。

まるで遠足にでも行く寸前のテンションだ。

「お三方、行ってらっしゃい。ここは私一人で十分だから。寧ろ付

き合せて悪いですし、楽しんでらっしゃって」

初めてお砂が口を開くと、横顔をだけで振り返り言う。その横顔は、にっこりと微笑んでいた。

家事手伝いを台所でこなしている年の離れた長女が、小学生の弟たちに、ここはいいから遊びに行きなさいと言っているような仄々とした光景だった。

お砂には、そのような温もりも感じられる。

「では、お砂姉さん。昂輝君をお願いします」

「しまーす」

「ええ、いつてらっしゃい」

最後にそう言うとお砂は、微笑む横顔を正面に戻すと、直ぐに呪いの解読作業を再開させる。

笑顔が厳しくなって眉の間に皺を寄せた。

「じゃあ、二人とも私に乗って行きますか？」

「ええ、お願い」

憑き姫の返事とほぼ同時にイゴールが蟹股で深く腰を落とす。

相撲取りが四股を踏み終わった直後のようなどっしりとした姿勢。

太股の筋肉がはち切れんばかりに膨らみオレンジ色の繫ぎを膨らませる。

凄い筋肉量だ。

「それ、どっぞです」

にこやかに誘うイゴール。

その太い筋肉の塊を踏み台に、後ろから軒太郎と憑き姫がイゴールの肩へと登りはじめると、左右の肩に腰を下ろす。

右の肩に軒太郎が座り、左の肩に憑き姫が座った。

筋肉のソファアは、余り座り心地が良くない様子だ。憑き姫が、小さなお尻をムズムズさせていた。

「うんちよ」

可愛らしい掛け声が強面の口から出すとイゴールは、両肩に座る二人を担いで、しゃがんだ常態から軽々と立ち上がった。

難無くだ。

人間二人分の重みにバランスを崩すどころか、筋肉のひとつも震わせていない。

見せるは人外のパワー。余裕なのか怖い顔は、幼く笑ったままだった。

イゴールが、膝関節を軽く曲げて勢いを屈伸に貯める。
移動開始だ。

「いきますよー。落ちないでくださいです」

「落とさないでね」

イゴールの肩に座る憑き姫が言う。まるで落とされた経験があるかのような言い方だった。

「今度は気を付けまーす」

落としたことがあるようだ。

「イゴールちゃん、飛びまーす」

そして飛ぶ。

素晴らしい跳躍だった。

人間二人を担ぎ運ぶイゴールのひとつ飛びは、一度目のジャンプで大塚邸の広い庭を飛び越え、更に塀を飛び越えていた。そして二度目のジャンプで闇夜に消えて行く。

たった二回の跳躍で見えなくなるイゴールの脚力。人間二人を背負って居る居ないは、こうなると関係ない世界だ。まさに怪人の領域。

そして三人は、凄いスピードで黒い山へと消えて行く。

鬼 対 退魔師 (一) (後書き)

このあとアクションが続くかな？ ^^

鬼対 退魔師 (二)

山中。

「それにしても摩訶不思議な術だな。夜にも関わらず月より輝き光を放つとは」

「これは凄いズラ……」

ヘッドライトを煌々と照らし続ける白いスカイラインの前で胡坐を掻いた三匹の鬼たちが、まるでマンガ肉を喰らうかのように人間の手足を片手に持って、豪快な仕草でかぶりつき鋭い牙で人肉を引き千切る。

皮が破け、筋が千切れ、肉が裂ける音が暗夜の虫の音に重なり合う。人を食らう鬼の姿は、極々残忍な光景だった。

血生臭さが辺りに充満して、車の光と死臭に誘われた蟲が多く舞う。

鬼の数が二匹少なかった。

ここに居るのは、赤鬼、青鬼、緑鬼の三匹。

黒く巨大な鬼と、紫色の鬼女の姿が見当たらない。

三匹の鬼は、自分たちに分配された人肉を美味しそうに食べながら、数百年ぶりの自由を和んでいた。

「龍鬼の兄貴。これで随分と妖力も回復しましたね」

「いいや、まだ足りね〜な〜」

「そうズラ。オラは蛇鬼のように細くないから、これじゃあぜんぜ

ん足りないズラ」

「本当に鈍鬼は、食いしん坊ですな。しかし妖力が全快になった訳ではありませんからね。鈍鬼の言葉も一理あります。これでは足りません」

ロンゲに青い肌の鬼は、そう言いながら優雅な動きでスカイラインのボンネットの上に腰を下ろすと、赤い口を腕で拭う。

赤鬼の龍鬼と緑鬼の鈍鬼は、口元を真つ赤に染めながら未だ人の残骸を食らっている。

大柄な鈍鬼の方は、肉をすべて食べ終わり、骨に付いた粕を名残惜しそうにしゃぶっていた。まだ味が楽しめる様子だ。

「とにかく黒雲馬の術が使える程度に妖力が回復しなければ移動もままならねえ。今は町を目指した蘭鬼と鉾鬼が帰るのを待とうや」

そう言いながら蛇鬼の横を過ぎ、スカイラインの天井へ登る龍鬼は、そのまま大の字になって寝そべる。

龍鬼の太く厚い筋肉の重みで白い天井が窪み、車体とタイヤが更に沈む。

筋肉とは脂肪に比べて重い肉だと言われているが、この赤鬼の体は殆どが筋肉だった。その赤身の密度は豪く引き締まり、普通人の筋肉よりも重みを増している様子だ。

ローンを残したまま主人を失った白いスカイラインが、赤鬼の重みに悲鳴を歪むスプリング音に変えて鳴らしていた。

鬼たちが動く僅かな動きに限界に近いことを、金属疲労の泣き声でアピールしているが、その悲鳴の意味を鬼たちが悟り、気を使うことは有り得なかった。

心霊スポットとして雑誌によく載る霊界トンネルの前。

そこは車がUターン出来る程度の広さはある。

何台かの車がUターンしたタイヤの痕跡も残っていた。

しかし余り広くはない。

右は草木が多い茂る藪の斜面が壁と化している。左は逆に急斜面だ。ガードレールが無いので、万一車で来た人物がタイヤを踏み外せば面倒なことになりかねない場所であった。

タイヤに因って踏み固められた二本のラインが緩やかなカーブを描き山肌に隠れていく。

「ん……」

虫の音を聴きながら車の天井で寝て居た龍鬼が、喉を唸らせながら立ち上がる。

直立不動。

車体に踵を減り込ませながら龍鬼は、鋭い豪傑の眼差しを夜空へと向けた。

鬼の厚顔が真剣さを研ぎ澄まし睨みを利かせる。

「兄貴、どうしたスラ」

「……」

いきなり立ち上がった兄貴分に鈍鬼が訊く。

しかし龍鬼は何も答えない。空を睨む様に見たままだ。

鈍鬼も緑の顔を夜空に向けたが目に映るのは、鮮やかに散らばる無

数の星々のみ。とても綺麗な星の数々が、新星の気鋭に煌いている。しかし、それ以外、気になるものは見えなかった。鈍鬼が何を見ているのだろうかと首を傾げる。

「龍鬼兄貴……これは……」

蛇鬼の言葉に見上げた視線を彼に向ける鈍鬼だが、一人事情を理解していない。

青い鬼は、俯きながらもロンゲの隙間から氷のような眼差しで、暗い道の向こうを睨んでいた。

龍鬼と蛇鬼は、何かに感じている。

三匹の鬼が視線を向ける暗闇の先は、緩いカーブ。

鬼である鈍鬼にとって闇が視力の障害には成らない。カーブの先まではつきりと見えていた。

だが、誰も居ない。何もない。

「どうしたズラ、兄貴も蛇鬼も……」

「……来るぞ！ 蛇鬼！！」

「はい！」

「え！？」

赤鬼が声を掛けたのは青鬼のほうだけ。緑鬼は無視されていた。理由は不明。

「不知火 ザ・ファイアーボルト！」

幼い少女の音がカーブの先から聞こえて来る。

鬼対退魔師（三）

その直後、カーブの陰から熱風唸らせ飛び迫る炎の弾丸。道の角度に合わせて滑空する火炎の軌道は、そのままスカイラインを後方から直撃すると、トランクを貫き車内に飛び込み、更に貫通してエンジン部分に炸裂する。

「何ズラ!？」

奇襲の火炎弾は、エンジンを破壊してガソリンに引火すると、バズーカ並みの威力に車は炎を噴出し爆発した。

爆音が轟き、爆熱が波打つ。

スカイラインの体内を潤滑するエネルギー源が、更なる大爆発を起こすと、ふたつ目の爆破に車体から爆炎を舞い上げながら跳ね上がる。

燃え盛る車体が、1メートルほど跳ねていた。辺りの景色が赤く照らされる。

真つ赤に。

赤鬼、青鬼は逃げたが、緑鬼はその爆炎に巻き込まれ、大きな体躯が炎に包まれた。

炎を上げながら舞った車体が、ワンバウンドしながら地に落ちると、鉄の軋む音と炎が燃え盛る音が、騒々しく辺りに轟く。すると回避していた二匹の鬼が、上空から着地した。

「何者でい!？」

龍鬼が大声で問う。その形相は怒りの鬼そのもの。

隣で蛇鬼が、いつの間にか長身の合口を手にしていた。刀身と瞳が蛇の鱗のように冷たく輝く。冷酷に。

曲がり角の藪に隠れた場所から姿を現したのは、三人の退魔師であり、探偵事務所の方々。

ヴァルハラ社員。

フランケンシュタインが作り出した怪物を連想させる体躯の化け物は、軽々両肩に男と少女を背負っていた。

そして継ぎ接ぎだらけのソファァーに腰を下ろす少女が言った。

「私の不意打ちを避けるなんて、生意気だわ」

イゴールの左肩に乗る憑き姫は巫女の成りでカードファイルを開き、カードを投げたままの構えを決めていた。

今攻撃を加えたのは、私だと主張するが様に　不意打ち行為に悪びれた様子はない。

卑劣への罪悪感を欠片も抱いていない相貌だった。

その隣、イゴールの右肩に乗っている軒太郎も黒衣に変身している。

黒いデングロンハットに黒いロングコート。下に着る上下のスーツもカウボーイブーツも黒かった。

漆黒から悪意が滲んでいる。

唯一、色が異なるのは首に掛けられた白いマフラーのみ。その白いマフラーが熱風に煽られ揺れていた。

「鬼が三匹か……」

怪しい声色で言う軒太郎がイゴールの肩から前へと飛び降りる。それに憑き姫も続いた。

黒いコートと赤い袴が、ふわりと空気を孕む。

「数が合いませんよ、五匹とか言ってますでしたか？」

「ああ、そうなんだが」

鋭い眼光で二匹の鬼を睨む軒太郎が、後ろのイゴールに答えた。

闇に混ざりかけた黒衣の軒太郎は、鋭い視線だけを左右に走らせ辺りを探る。

残りの二匹が何処かに潜んで居ないかを警戒していた。

「ん？」

右の斜面に生い茂る藪の中、何か走る音と波打つ草木が、軒太郎たち三人に向かって突き進んでくる。

憑き姫が行なった挨拶への仕返しだろうか、手洗い歓迎が予想できた。何か迫る。

「イゴール。それはお前にくれてやる」

「わーいです」

素直に喜ぶイゴールは、右の斜面から草木に隠れて攻めてくる者に

身構える。
構えるといつても両拳を握り締め、軽く腰を落としただけのもの。
本格的な格闘技の構えとは、程遠い素人のポーズ。
素晴らしい程の体躯を有しているイゴールだが、武術の心得は零の
様子だ。

藪の中を走っていた者が飛び出すと、怒鳴り声を上げる。

「よくもやってくれたズラ！」

飛び出して来たのは、先ほど爆炎に包まれた筈の緑鬼、鈍鬼だった。
衣類は焼け焦げボロボロだったが、巨漢の皮膚に火傷の痕ひとつな
い。

「うがああああ！」

緑の鬼が獰猛に飛び掛る先は、黒衣の男。赤と青の鬼を睨む軒太郎
を目掛けて真横から鈍鬼が突っ込んで来る。

そして両手の爪を獣の様に突き立て、大きく口を開けて牙を光らせ
る鈍鬼が、軒太郎の首筋に喰らいつこうとしていた。

しかしイゴールに、この鬼を任せた軒太郎は、避けるどころか鈍鬼
の方に視線すら向けない。

「パーンチ！」

飛び掛る鈍鬼の脇腹へ、可愛らしい声と共に放たれたイゴールの拳
が炸裂する。

「ぶいおー！」

下から突き上げるようなボディブローが、力任せに振り切られると、古タイヤをバットで殴ったような音が響く。剛拳を命中させたイゴールは、楽しそうな笑顔のまま、飛び行く鈍鬼を見送った。

「何いいっ!？」

鈍鬼の飛ぶ軌道がイゴールに殴られ直角に曲がり飛んで行く。そして地面を転がり二人の鬼仲間の足元に到着した。

「普通の人間じゃあねえなあ、あらあ」

「そのようすな、兄貴」

赤と青の鬼が、足元に転がってきた仲間を見ずに話す。視線は、二人の退魔探偵に向けられている。

「だが、あいつらを食らえば、当分の妖力が蓄えられそうだぜえ」

「ええ、そうですな」

猛る熱い瞳の龍鬼。

残忍で冷め切った瞳の蛇鬼。

二人の視線が鋭く伸びる。

その先は、軒太郎と憑き姫。

龍鬼が軒太郎を睨み、蛇鬼が憑き姫を睨んでいた。

緊張勘が更に増す。

四つの視線が火花散らすなか、その間に立ち上がる鈍鬼。顔面には、怒りの青筋が無数に浮き出ていた。

「それはイゴールちゃんの玩具です」

イゴールが軒太郎たちの頭の上を飛び越え前に出る。跳躍の着地に重い体重が地鳴り波立たせた。

につこりと強面を微笑ますイゴールの仕草は子供同然の無邪気。無垢な思考が残忍な天使へと見えはじめた。

「引き千切ってやるズラ！」

「わーいです」

巨漢の二人が、真っ直ぐに走り出す。

互いの仲間二人は動かない。

軒太郎と龍鬼の二人は、先ずこの二人で相手の力量を計る積りだ。

体のいい捨て駒が、互いに全体重を掛けて体ごとぶつかり合う。まるでアメリカンフットボール。

ぶつかり合った肉体が空気を揺らし振動を響かせた。未だ燃え続ける車の炎を大きく摩かす。

体当たりの激突に、二体の巨漢が弾け合う。

ぶつかり合った反動で、2メートルほど後方に飛んだ。

「当たりは五分五分だな」

軒太郎が言う。

「あの傷男、鈍鬼と互角か」

龍鬼が言う。

二人の見た目は、突進力を引き分けと述べる。

更に体軀を唸らせ二人が踏み込む。震脚が地面に減り込み、振動と一緒に砂埃を上げると、握り締められた二つの拳が力任せに発射された。

気合の拳が狙った先は、互い共に相手の顔面。

緑の顔と、傷だらけの顔に、鉄球のような拳が突き進む。

二人とも攻撃に専念するあまり、回避も防御も考えていない。故に正面から拳激をお見舞いし合い、鉄拳を喰らい合う。

「！」「」

二体の化け物の口から声にならない声が漏れると、体を仰け反らせながら後ろに倒れ込む。

ドスンッと、敷布団でも二階のベランダから落としたような音が、ふたつ鳴った。

その音の中に混ざって空中に何かが舞っている。

「お？」

眩く軒太郎の視界に、白い歯が数本飛んでいるのが見えた。

龍鬼の視界に、尖った牙が一本飛ぶ様子が見えた。
化け物の歯が地面に転がるとほぼ同時に、二体の怪物が素早く立ち
上がる。

「オラの牙が！」

「わはは、楽しーです」

鬼 対 退魔師 (三) (後書き)

イゴールVS鈍鬼、まだまだ続くよ^^

鬼対 退魔師 (四)

破損した牙の痛みに頬を押さえ怒鳴り声を吐く鈍鬼と対照的に、へらへらと笑うイゴール。

「おお、にゃんだにゃんだ？」

楽しそうに言ったイゴールが、台詞の後に表情をキョトンとさせる。そして首を右に傾げると視線も右に移動させ、続いて反対側に首を返すと視線も同じく左に向ける。

飴玉を舐めるように、何やら口の中で舌を転がしていた。

「ペツ、ペツ、ペツ！」

突如イゴールが、口の中に溜まった血と唾の粘り気を、口を尖らせ三度に分けて吐き出す。

土の上に吐かれた濁る液体には、白い歯が数本混ざっていた。

イゴールは、その歯を見てニツコリと笑った。

満面の笑みだ。

「あははは、歯が折れちゃってます」

口を広げ無垢に微笑むイゴールの前歯が、上下共に無くなり、暗く、黒く、慘く見えた。

前歯があつた隙間から赤くくすみかかった舌が見え、その口の隙間からは赤い鮮血がこぼれ顎を伝って落ちて行く。それでも笑うイゴールの様が怪異の如く怖い。

「な、なんズラ、こいつ……」

レスラーの様に腰を落とし、低い構えを見せる鈍鬼が、イゴールの態度を見て戸惑いを威嚇に隠していた。鬼が怪物に気後れを表す。

微笑む強面に、屈強な体躯。そして物騒な全身の傷跡の数々。その化け物が、自信に溢れた足取りで構えらしい構えも見せず歩き出す。どんと。 。 隙だらけのイゴールが鈍鬼に近づく。

「鈍鬼、何してやがる！ ぶちかましてやれ！！」

鈍鬼の背中に向かって、兄貴分の龍鬼が一喝を浴びせる。その激に答えるかの如く鈍鬼が、太い両腕を前に突き出した。掌は開いている。

その掌内で、妖術の影響だろう嵐が誕生しようとしていた。

「喰らいやがれズラ！」

鈍鬼が意気込むと、突き出された掌前が陽炎の様に揺れながら歪む。掌内から風切り音が吹きすさぶ。

空間が熱を帯びて、不自然なままに屈折していた。強い妖気の流れを感じる。

それは濃縮された妖気だった。

「ん？」

何が起きているのかと不思議に眺めるイゴール。揺れる景色に好奇心を示すと、車の前に飛び出した猫のように動か

ない。

ただ、両手の前に現れた歪みをあどけない表情で黙って見ている。

鈍鬼が、目の前の歪みを突き出した両手で握り締めるように集める。歪む空間が見る見るうちに鬼の掌内に集結して、透明な球体を作る。弾丸だ。

弾丸を作っている。

「鬼門咆哮！」

近寄る為に歩き、好奇心に動きを静止させたイゴールに向けて、鈍鬼が鬼道の術を撃ち放つ。

「にやにやにやです！！」

鈍鬼の両掌から発射された見えない弾丸が、空気を巻き込み、風を孕み、妖気を凄めて飛んで行くと、二発の剛速球がイゴールの両胸に炸裂して、渦巻きながら服を切り裂き、革を抉り、大胸筋を八つ裂きにして行く。

その衝撃にイゴールの巨体が、発泡スチロールで作られた像の如く軽々と後方に吹っ飛ぶ。

飛ぶイゴールの巨体を窺えば、鈍鬼の使った術の破壊力が鑑みれた。威力は上等な純度である。

イゴールの巨大な図体が、後方に居た軒太郎と憑き姫に飛び迫るが、二人は左右に一歩動いて仲間を避ける。

まるで両開きの自動ドアように動くタイミングがピッタリだった。

二人の間をイゴールの巨体が越えて、更に飛んで行く。ずっとずっと後方へ。10メートルほど後方へ。

二人の間に、イゴールが飛んだ証の如く、赤い血が舞い散る。

軒太郎と憑き姫は、イゴールの巨漢を弾き飛ばした鈍鬼の術を目の当たりにしても臆する事無く真っ直ぐ前を見ていた。

その憑き姫の肩に、舞っていたイゴールの鮮血が僅かに掛かる。肩に出来た数滴の血痕。

憑き姫が始めて蛇鬼から視線を外し、己の汚された巫女服の肩を見る。

露骨に嫌な顔だった。

整った顔の眉間に不機嫌な皺を深く入れる。純白を汚された怒りの眼差しを、八つ当たりのように青鬼へと戻す憑き姫。

先ほどよりも凄みを増していた。

再び四人の視線がぶつかり合う。

軒太郎と憑き姫が威嚇を放つ先は 鈍鬼で有らず。

睨む双眸の先は、龍鬼と蛇鬼。

二人には、鈍鬼なんぞ眼中に入っていなかった。

鈍鬼が走る。

軒太郎と憑き姫の間を駆け向け、倒れるイゴール目指してだ。

サシの勝負を繰り広げるなか、敵の仲間が野暮な手出しをしないことが悟れているのか、何の警戒もなく鈍鬼は、敵二人の間を走り抜けた。

「うらあああ！」

そして鈍鬼が高く飛ぶ。

太い脚で加速のままに跳ねた鈍鬼が、爪を立てる様に開いた両掌内で、妖術にぶれる空間の塊を握り締める。

鬼門咆哮。

妖力で風を渦巻かせながら圧縮した魔弾の飛び道具。威力も命中精度も上等な鬼の妖術。

その術を両手に握りながら宙に跳ねた鈍鬼は、右、左と順々に鬼術の弾球を投げ落とす。

投擲された二発の弾丸が、唸りを鳴らして迫るとイゴールは、両拳を顎に添えながら「いもむしさん、ゴロゴロー」と、楽しそうに歌いながら横に転がった。

ふたつの弾球が、地面を激しく抉って消える。そこに遅れて鈍鬼が着地した。

転がったイゴールは、既に立ち上がっていたが、反撃に転じられるほどの体制でなかった。

「なめるでねえズラ……」

鈍鬼は侮蔑されているかのように嘆息を吐いた。

勿論イゴールには、そのような気はない。ただ、無邪気に振舞っているだけなのだ。この戦いを楽しんでいるだけなのだ。故にたちが悪い。

しかし初弾の拳は合い撃ちだったが、現在、攻めに転じているのは緑の鈍鬼であった。妖術を交えた攻防に、イゴールが押され始めている。

鈍鬼が放った妖術の砲撃を直撃して、分厚い胸の筋肉は、無残にも抉られ傷つき、破れた血管から血液を垂れ流していた。

痛々しい。

致命傷と見えた。

しかし痛々しい傷跡だが、イゴールの表情は満面の笑みを絶やすことがなかった。

苦痛に顔を歪めるところか、冷や汗すら流していない。

その表情は、痛みを我慢しているものとは異なって見えた。痛くないのだ。

そもそもイゴールには、痛覚が欠落しているように見える。

「梃子摺っているな、イゴールのやつ」

「ええ、そうね。情けないわ」

後方の戦いを見ずに、前方の鬼たちを睨む二人が、そう話す。

「そもそも装備が少なすぎるのだろう」

「ええ、そうね。あれはバカンス気分だから」

二人の会話を無視して、イゴールと鈍鬼が組み合う。

両手と両手を高い位置で合わせ、ガツチリと力強く繋ぎ合う。

右手を相手の左手に、左手を相手の右手に、握り合う。

『手四つ』だ。

プロレスラーを真似た力比べ。

十本の太い指と指が絡み合い、しっかりとつかみ合う。

そして押す。ひたすら力む。

しかし。

どちらか優勢、どちらか不利、そのように均衡が偏ることがなかった。

「ふうがあああああ！」

「わははははあああ！」

声を唸らせるが 互角。

やはりパワーだけでは勝敗は付かない。

「ならば、これでどうズラ！」

力みながら鈍鬼の鬼面があざとい笑みを浮かべる。その途端、繋ぎ組み合っている両手の中で妖気が渦巻き、手と手の隙間から危機迫る音が唸りを上げて出て行く。

接触状態で、鈍鬼が鬼門咆哮を撃とうとしていた。

両手の隙間から渦巻く風圧を吹き漏らす勢いが、どんどんと増して行く。

流石に不味いと感じたイゴールが、鈍鬼の腕を振りほどこうとした。しかしガツシリと組まれた鈍鬼の指が、それを善しとしない。蛇の如く絡みつき、ゴリラの如く力強い。

結果、逃がさない。

故に、逃げれない。

「喰らえズラ！」

パツーンっと、乾いた破裂音が夜空に響く。

シンプルな音の後、辺りに何かが飛び散った。

肉。

骨。

それは指。

イゴールが、組み合っていた筈の右手を見た。

掌の半分が　なくなっている。

赤い肉と、白い骨が見えていた。指は、親指以外がなくなっている。血管が細いチューブの様に肉の中から頭を出し、鼓動の律動に合わせて、ピュッピュと温血を噴出す。

その光景を、イゴールがキョトンと不思議な物と初めて出会ったかのように見詰めていた。

「あらら、どうしましょ……」

困った顔で言うイゴール。

どうしましょもこうしましょもない。無いのは右手だ。右手が木っ端微塵に吹っ飛んだのだ。

更に　　パァーンっと破裂音が、また響く。

左手。

鈍鬼と繋ぎ続けていたイゴールの左手が吹き飛ぶ。辺りに肉片が無残にもまた飛び散った。

今度は、手首から綺麗に無くなっている。

残った手首の先、目に見て解る血管の先、その千切れた生管の先から血液が、右手と同じように飛び出していた。

両手を失ったイゴールは、ただただ自分の両手を呆然と眺めていた。

「呆けている暇は、ないズラよ！」

鈍鬼の拳がイゴールの顎をアッパーカットでカチ上げ、豪快なまま大胆に振り切ると、再びイゴールの巨体が後方へと飛んだ。

また、軒太郎と憑き姫の間を飛行してイゴールの巨体が、元居たステージに舞い戻る。

顎を強打された口と、傷ついた胸と、失われた両手の傷口から出血を派手に散らすイゴールだったが、今回は倒れなかった。

飛んだ脚から着地して、仰け反りながらも力強く踏み止まった。足元から砂塵が舞う。

そしてイゴールは、消失した両手を軒太郎と憑き姫に見せびらかすように前へとだすと、痛々しい姿のままこりずに微笑み、楽しげに言った。

「あははは、両手が壊れちゃった」

壊れた、と、言う。

失った、ではなかった。

イゴールにとって両手が粉々に破壊されることは、その程度の損失らしい。

「まあ、いいです。帰ったら新しいのに交換しようと思っていたんですよ。ちよっと古くなっていたから」

相変わらずイゴールは、微笑みながら、そう言う。

壊れたのならば、修理を行なえば良いだけだ。

部品を交換してしまえば直るのだ。

イゴールは、消失した両手を、修理する積りなのだ。新しいパーツに替える積りなのだ。

まさにフランケンシュタイン博士が作り出した人造人間のようだった。

そう、化け物。

全身が傷だらけ、繋ぎ目だらけのイゴールは、間違いなく化け物だと、鬼たちも理解した。

鬼対 退魔師 (五)

イゴールは、右手に残った親指を器用に胸元の服にひっかけ、敵の術に胸を抉られ破けた邪魔な服を、更に破いて剥ぎ取って行く。血糊に赤く染まった布切れが、完全に破け落ちずにイゴールの腰にぶら下がっていた。

そして己の傷ついたバストを見るイゴール。

「ん〜、これだと腕力が30%ほどダウンしてますね」

服の下から現れた継ぎ接ぎだらけの青い肌を見てイゴールが渋い表情を見せる。

胸に抉りとられた生傷があり、無残な大胸筋の下から肋骨が白い姿を露出させていた。

自分が受けた傷に対して、痛みでダメージを感じることなく、代わりに視覚でダメージと運動能力の低下を計っていた。

腕力30%ダウンと述べているが、イゴールの表情は、まだ余裕の色が褪せていない。

「よし、私もちよっぴり本気を出します!」

「ふざけるでねえズラ!」

イゴールの言葉に癩癩を起こした鈍鬼が両掌を突き出す。また鬼門咆哮の術だ。

両手の中で妖気が風を孕み発射準備を整える。

それを見てイゴールが、我先にと走り出した。ジャングルブーツが土を抉りながら表面を蹴ると、踏み込みに削られた土の塊が後方に飛ぶ。軒太郎と憑き姫の間を駆け向け二人の背後に居る鈍鬼を目指す。一蹴りのステップが、走ったと表現するよりも低空で飛んだといったほうが正しく映る。まさに肉のロケットだった。

「吹き飛ぶズラ！」

二発同時に放たれる鈍鬼の砲激。唸る術が空気を巻き込み飛んで行くが、イゴールは体制を低く下げて、地面に顎先を擦らせながら走り続けた。イゴールの背中に空気の弾撃が僅かに触れて掠り傷を刻むが、二発の直撃を免れた。

狙いを外した鬼門咆哮は、軒太郎と憑き姫の間を抜けて龍鬼と蛇鬼の前へと迫る。

「ふんっ！」

横一線に振られた蛇鬼の合口が、打ち払うように鬼門咆哮の二発を弾き、真上へと軌道を変える。コースを変えた真空の玉は、上空で破裂音を鳴らし消えて行くと、残響だけが虚しく響き渡る。

一方イゴールは、鈍鬼の足元に低空ダッシュで潜り込むと、下から上へ、手首が無くなった腕を力強く振り上げる。

「ぬぬ！」

真下から迫るイゴールの攻撃に、鈍鬼が先ほどまでと違う異変を素早く見つける。

それは煌く鉄の輝き。刃物の鋭さだった。

「刀ズラ！」

イゴールの消失した手首の根元から、生え出るように30センチほどの刃物が伸び出していた。

痛みを感じないことを利用して、両腕の中にナイフを仕込んでいた様子だ。

どう操作して手首から飛び出て来たのか仕組みは不明だが、そのナイフの斬撃が鈍鬼の眼前を過ぎる。

刃物の一撃は躲された。

「何故にドスがズラ!？」

しかしイゴールの一手目は、見事に回避されたが、直ぐに続くイゴールの二手目のナイフ攻撃。

右の次に左の手首から生え出た刃物が、腹筋に割れたマッチョな鈍鬼の腹部を突き刺すように狙う。

「そうは、行くか!!」

刃物に狙われた腹部を引っ込め後ろに跳ねのく鈍鬼は、素早く鬼門咆哮を左手で投げた。

投擲された無色の弾撃が、イゴールのスカーフェイスを狙う。

しかし透明な破壊術が見えているかのようにイゴールは、眼前で両手に生えた刃物でX字を切ると、見事に弾球を切り裂き消滅させる。嵐の様な疾風が辺りに飛び散り、この場に居る者たちの髪や衣類を

激しく揺らすと、続いて燃え盛る車の炎と周りの草木をけたたましく煽った。

突風に騒がしい音が鳴り響く。

「いい切れ味でしょ。去年のクリスマスプレゼントに、サンタさんから貰ったんだよ！」

「サンタって誰ズラ!?!」

数百年前に封印された鬼たちは、残念ながらサンタを知らない。おそらくサンタよりも年を取っている筈だ。

それと、サンタからプレゼントされたと言うイゴールの話は、本当に本当である。

クリスマスの次の日、イゴールが朝起きると、ベッドの横にぶら下げて置いた靴下の中に、チタン合金製の刃物が一本入っていたのだ。しかも妖術で鍛え上げられた特別な一品だった。

二本あるのは、一昨年のクリスマスプレゼントである。

子供の様にイゴールは、未だサンタを信じていた。

ちなみにサンタの正体は、軒太郎である。

軒太郎がクリスマスの晩に、こっそりとイゴールが用意した靴下の中へとプレゼントのチタン合金製のナイフを入れたのだ。

まあ、この話は、イゴールちゃんに対して秘密の話である。

サンタの正体とクリスマス真相を知るには、イゴールの脳内年齢はピーターパンの如く幼すぎであった。

「さつき、私を引き裂くとか言っていましたよね。私は貴方を切り刻んであげます」

そう言っただけでイゴールは、クリスマスのプレゼントで鈍鬼に襲い掛かる。

無造作に夜風を切り裂きながら、鈍鬼を狙って振り回されるふたつの刀身に、燃え盛る炎の赤が映りこむ。

だがイゴールは、殴り合いも素人だったように、剣技もまた同様だった。

子供のチャンバラの如く刃物を振り回すだけで、何度攻め立てても鈍鬼の緑色の肌に傷ひとつ付けられない。

「くつくつく、笑わせてくれるズラ。その程度の腕前で、オラに敵うと思ったズラか！」

失笑の後に揶揄する鈍鬼。

相手を侮辱しているのか、それとも己の実力を侮っているのかと言いたげな台詞回しだった。

そして連続で振られたイゴールの刃を容易く躲すと鈍鬼は、3メートルほど間合いを作り、再び鬼門咆哮で狙いを定める。

超接近の間合い。

躲すには困難な距離数だった。

「これなら躲せないズラ！」

鈍鬼の言う通りだった。間合いが近すぎる。

鬼門咆哮の発射速度を鑑みるに、躲すのに3メートルの距離は狭すぎだ。

その時、何か金属が弾けるような音が響いた。

鬼門咆哮の発射音ではない。

更に続く鈍い音。それは肉を貫く生々しい音だった。

「ぐはっ！」

鈍鬼が痛みを漏らす。

激痛に表情が厳しく歪んでいた。

見れば右肩に、いつの間にか刃物が突き刺さっている。

ナイフだ。

クリスマスプレゼントのナイフだった。

その刀身が一本、鈍鬼の肩に突き刺さっていた。

見ればイゴールの左手首のナイフが一本なくなっている。

「ぐぐぐぐう、何ズラ、これは!？」

「スペツナズ・ナイフです」

につこり微笑みイゴールが答える。

スペツナズ・ナイフとは、スプリングに因って刀身を発射させる特殊な仕掛けが仕込まれたナイフの愛称である。

欧米では主にバリステイク・ナイフと呼ばれ、内蔵しているスプリングの品質にもよるが、グリップ内のスプリングが30センチ程あれば、10メートル前後を射程に収めることが出来るとされている、一発限りの発射式の飛び道具である。

スペツナズ・ナイフの主な使い方は、ナイフ戦での意表を付いた攻撃が目的。

ナイフの間合い外から意表を付かれ刀身が発射されると、実に回避

も難しいのだ。

先ほど聴こえた金属の弾ける音は、スプリングが伸びきり刀身を発射させた音。

イゴールは、スペツナズ・ナイフの如くスプリングを腕の中に仕込んであったのだ。

鬼 対 退魔師 (六)

「畜生！ 小賢しい術を使うズラ」

苦痛に牙を剥き出す鈍鬼は、右肩に刺さった刀身を鷲掴みにして、荒々しく吼えながら引っこ抜く。

「ういややあああ！」

刃先が抜けると傷口から新鮮な血潮が吹き出るが、気にもせず鈍鬼は、抜いた刀身をイゴールに対して狂ったように投げ返す。クリスマスプレゼントの刀身が炎の色を映しながら飛んで行く。だがイゴールは避けない。そしてイゴールの胸にズブリと刀身が突き刺さる。

相変わらず痛みを感じないイゴールは平然と微笑んでいた。

「わーい、ナイフを返してくれて有り難う」

元気良く言うイゴール。

流石にこの返しには鈍鬼も呆れた。

やはり痛みを感じない怪物なのだ。羨ましい程の鈍感力。

しかしイゴールは、自分のナイフの刀身を発射させた左手首に戻すどころか、突き刺さったままの胸から抜こうともしない。

両手がない故に、抜くことも出来ないのだ。まあ、自分の体に刺さっていれば、手が使えなくとも持ち帰れるからOKなのだろう。

「えい、じれったい！」

声を立てたのは青い肌の蛇鬼。

冷酷な顔付きで、右手にぶら下げた長身の合口を揺らしながら前に走り出す。

ついに鈍鬼以外の鬼が仕掛けて来た。疾風の如く速い動き。

駆ける足取りは風を真似てイゴールの後方を過ぎ、素早く元いた赤鬼の横に帰って行った。

着物と長い髪を揺らした残像が、送れて蛇鬼の姿と重なり合う。

「ふによ、あれね！」

イゴールが可笑しな声を上げながら体制を崩す。片膝が力なく地に付いた。

青鬼に何かをされた、それは間違いない。何らかの攻撃を喰らった様子だ。

しかし何をされたか直ぐには理解出来ずにいた。

「臆を切られたな」

軒太郎の言葉の通りイゴールは、蛇鬼に背後を取られた瞬間、左足のアキレス腱を合口で切られたのだ。

流れるような風の歩みに秘めた合口の剣技は、見事な腕前であった。

「嫌な攻撃です……」

左足首の後ろ側がパツクリと割れており傷口からは、破けた水道管の如く鮮血を飛び散らしていた。

アキレス腱と一緒に、大きな頸動脈も切られた様子だ。

足元に赤い水溜りが出来ている。

痛覚がないイゴールとて健や筋肉、それに靭帯を切断されれば、当然と戦うどころか移動の機能すら失う。それは並みの人間と変らない人体の仕組み。

それに出血も問題だ。

体内を潤滑する血液が失われれば、脳への供給が尽きる。さすれば意識を失う。

怪物にも弱点は、存在するのだ。

イゴールが青鬼に攻撃された瞬間、憑き姫が手にあるクリアファイルからカードを抜いていた。

憑き姫は、タイマンに水を差した青鬼同様、乱入する積りらしい。

「鵂　ザ・ミリオンボルト！」

呪文と共に憑き姫の横に姿を現す巨体の獣は、奇怪な成りをしていった。狸の胴に虎の手足、そして蛇の尻尾。

突風に稲妻を混ぜて吼える顔は、怒りを露にする猿のものだった。

登場直後から咆哮に口を開ける鵂は、喉の奥の更に奥から雷撃砲を激しい稲妻音と共に発射させる。

夜を照らす雷撃が、一光一線、空を走った。

雷雲内で轟くのと同じ激音が、間近から聴こえると皆が顔を歪め、目を細める。

「シューーーー！」

その音に、鳥のような鶉の鳴き声が混ざっていた。

「えがあああああ！」

一瞬の放電光が鈍鬼を捕らえると、雷撃に火花を散らしながら巨漢が勢いよく後方へ弾け飛ぶ。

鈍鬼の体躯からは、焦げ臭い煙がモクモクと上がっていた。完全に皮膚が炭化している鈍鬼が、龍鬼と蛇鬼の頭上を越えて飛んで行くと、暗く薄気味悪いトンネルの中へと転がって止まる。

鈍鬼はトンネル内でうつ伏せに倒れたまま動かない。燻る煙を上げ、肉の焼ける酷い香りを漂わせていた。

「イゴール。お遊びは終わりだ」

「うん、軒太郎」

片膝のイゴールが、素直な笑みで軒太郎の言葉を受け入れた。脚力が残る右脚一本で高い跳躍を見せると、軒太郎と憑き姫の後方に退避するかのように着地する。

それと同時に憑き姫が召還した鶉の姿も霧となって消え失せた。

イゴールと鈍鬼の二人が戦いの舞台を明け渡す。

軒太郎と憑き姫。

龍鬼と鈍鬼。

四者の視線が威嚇のままにぶつかり凄みを増して行く。

いよいよメインイベント。

「面倒臭え、一気に捻り潰すぞ、蛇鬼！」

「へい、兄貴！」

二匹の鬼が、やる気を漲らせ前に出た。

龍鬼が赤い拳を握り締め、蛇鬼が青い手で合口を握り締める。

ユラユラと揺れる赤い熱気と青い冷気が、対極にある二匹の個性だとオーラに宿って感じさせていた。

軒太郎と憑き姫も負けていない。

人間のものとは思えない禍々しい妖気を、傲慢に、貪欲に、威圧的に全身から放出している。

威嚇そのものが空気を汚染する猛毒攻撃のようだった。

四者が放つ殺気は、霊力の低い人間ならば近くに居るだけで魂が口から出て行きそうな程に、嗜虐を極めていた。

鬼対退魔師（七）

ちっ
」

睨み合いの牽制が続く中、黒衣の軒太郎が舌打ちを零すと、口元が不機嫌そうな形に変化する。

「失敗したわね、私たち……」

「そのようだな」

動き出した鬼を見ながら言った憑き姫の言葉に軒太郎が、鋭い眼光で同感の意を言葉に変えて返した。

二人の後ろに控えるイゴールは「何が？」といった顔である。太い首を可愛い仕草で傾げていた。

「ツーマンセルを守るべきだったわ。イゴールを移動の足に使ったのが失敗ね」

「ああ、お砂姉さんを一人にしたのがミスだな。せめてイゴールを置いてくるべきだった」

イゴールには、二人の会話の意味が分からない。鬼たちにもだ。

「私が戻るわ」

そう言い憑き姫が、カードを取り出し発動させる。

「蝙蝠猫 ザ・キャットウイング」

眩しく輝くカードから飛び出してきたのは、蝙蝠の翼を背中に生やした黒猫が一匹。

黒猫は、憑き姫の巫女服を飛ばすように駆け上って行くと、憑き姫と重なり融合していく。

すると憑き姫の背中に、巨大な蝙蝠の羽が飛び出す。

巫女服の背中に生えた黒い蝙蝠の羽は、黒い産毛のような毛並みが綺麗な光沢を潤ませていた。その大きさは、片羽で2メートルほどある。

おまけに憑き姫の赤い袴からは、黒猫の尻尾が生えていた。

それだけではない！

黒髪からは、お約束を守るように、黒い猫耳が生えていた。

殺気立つこの場に相応しくないが、可愛らしい事実は覆せない。反則である。

憑き姫は、このような時ほどお約束を守るいい子であった。

オプシヨンが追加された憑き姫は、黒い羽を煽り宙に舞い上がる。巫女服にカードファイルを持ち、蝙蝠の羽と黒猫の耳と尻尾。どれもこれも統一感がないが、気にするような問題ではなからう。元が可愛い憑き姫だ、何を纏っても可愛く見えた。

「私が引き返すわ」

「ああ、頼む、憑き姫」

上空に羽ばたいた憑き姫に視線も向けずに答える軒太郎。

「おいおい、娘は逃げるのか？　もしかして野郎一人で俺ら二人を相手に頑張る積りか？」

「ああ、もちろんだ」

黒衣を夜風に揺らしながら嘲笑う軒太郎。その表情にある笑みは、馬鹿にしているようで、自信に満ちた余裕そのもの。

「いけすかねー面だな」

龍鬼が呟いた。

軒太郎は本気で二匹の鬼を、一人で相手にする積りらしい。傲慢な笑みから自信が感じられた。

しかし上空の憑き姫が、見下す角度で鬼たちに言う。

「軒太郎は強いわよ。冗談抜きでね」

暗夜に浮かぶ憑き姫を背景に、黒いバンガロンハットで目線を隠しながらニツタリと奇怪に笑う軒太郎。

目線が見えないが、その不気味に笑う口元は、鬼より邪悪な存在に見える。

これから二匹の鬼を相手に一人で立ち向かおうというのに、完璧なまでの勝算があるようだ。自信が目に見て解る。

その軒太郎の態度を鬼たちは、ただの傲慢だと考えていた。所詮は人間だと。

「でも、念の為に戦力を置いていくわ」

「ふ、余計な真似を」

三枚目のカード。

憑き姫は上空からヒラヒラとカードを落とすと、呪文を唱える。

「骸骨兵 ザ・スケルトンアーミー！」

光を放つカードの中から現れる複数の人影。それは人の残骸、武器を手にした骨の兵士たち。

肉がない、内臓器官が一つもない、人骨のみの存在だった。

サーベルやソードに丸いシールド。スピアにハルバード、メイスにアックスなど様々な武器を手にしている。

そしてローマ兵なのかモヒカンの飾りが付いたヘルムや鋼鱗のスケイルアーマーに赤いポロポロのマントを靡かせ立っていた。

その数10体のスケルトン。骸骨の兵士たち。

かつての戦士たちが、骨と鎧を鳴らしながら軒太郎の周りで身構えを取る。

眼球がなくなり暗い眼底の最奥で、殺伐と光る魂の光が恨めしそうに揺らいでいた。

その光が求め訴えるもの、それは殺戮と殺害の数々であるのが明らかに解る。魂が屍の形で保たれても、敵と対面した兵士のすべき任務を弁えていた。

二匹の鬼を敵と認識して、各自が武器を構え威嚇を見せる。

「じゃあ、あとは任せるわよ、軒太郎」

「ああ、そっちはお前に任せる」

そう言っつて憑き姫が、蝙蝠の羽で夜空に飛び去って行く。

華奢な矮躯は直ぐに夜空の闇へと溶け込むように消えて行った。

「あさ、今度は俺と遊ぼうか」

「上等だ、黒尽くめ！」

軒太郎の挑発に軋轢を濃くする鬼二匹。

トンネル前で燃え盛る車体を祭りの灯りに、二匹の鬼と十体の骸骨兵、それに外道に進んだ男が身構える。

「いくぞ！」

軒太郎と龍鬼が吼えた瞬間、全員が走り出した。

その場が、決戦の場と変貌して猛りが唸る。

大将気取りの軒太郎と龍鬼の走りは緩い。

十体の骸骨兵が甲冑を鳴らし全速力で突っ走ると、蛇鬼が疾風の速度で走り出た。

そして蛇鬼が自慢の素早い歩法術で弧を描き、右から左へとスケルトンたちの前方を横切り長身の合口を振るうと、スケルトンたちが盾や武器で攻撃を受け止める。

激しい金属音が刹那の間に鳴り響くが、蛇鬼の剣技に倒れる骸骨兵

の姿は一体もない。

以外にも骨身に剣撃を受ける骸骨兵は居なかった。

「むむ、雑魚が私の剣を受けるとは!？」

木偶と思われた複数の兵隊は、予想を反して腕が立つ。迅速に攻め入った蛇鬼が、若干の驚きを表していた。

今の攻防で、最低でも二体か三体は激破する積りだったのだ。

「どけい、蛇鬼！」

後ろから駆け寄る龍鬼が怒鳴ると蛇鬼が跳ねて宙を回る。

龍鬼の両拳には、赤い炎が燃えていた。妖気がたつぷり注入された地獄の業火だ。

「食らいやがれ、火炎鬼砲！」

龍鬼が術を叫びながら強い踏み込みで繰り出す右のストレートパンチ。

気合に唸る拳の炎が、激音を響かせ眼前で爆発する。

まるで爆弾が爆発したというよりも、ガソリンに火が引火したような炎の広がりだった。

熱風と爆風が破壊の温度となつて骸骨兵を数体包んで焦がす。業火の中で、骸骨たちが炭に変わって崩れ落ちて行く。

龍鬼の気迫がそのまま灼熱地獄の業火と化している様子だった。

「おっと！」

軒太郎は黒いロングコートを盾に爆炎を凌ぐが、たった一発の拳術に四体の戦力が焼け落ちた。

まさに骨の欠片すら残さない火葬の高温。続いて剣や鎧が燃えながら床に落ちると魔力が失われ消えて行く。

「やるな、赤鬼！」

「どうでえい！」

自慢げに胸を張る龍鬼。

その後ろで宙から着地した蛇鬼が冷たく笑っていた。

龍鬼が爆発させたポイントの足元が、爆熱に溶かされ小さなクレーターを作っていた。

プスプスと溶岩の様に溶けた土が泡立っている。

そこから龍鬼の操る炎の温度が900度以上だと鑑みれた。

全員がそのクレーターを挟んで足を止めていた。

再び隙を狙い睨み合う。

「さてさて、面白くなってきたぜ」

言うは軒太郎。

その表情には、高温の妖術を目の当たりにしても余裕の表情は続いていた。

呪いのシステム (前) (前書き)

アクションは、少しお休みね^^

呪いのシステム（前）

温泉街の山沿い。

町が見渡せる高台に屋敷を構える大塚剛三底の中庭。

そろそろお砂による昂輝に掛けられた呪いの調査が終わろうとしていた。

芝生の上で座禅を組んで居た昂輝が目覚ます。

呪いの診断中に昂輝は、思わず眠ってしまったようだ。

昂輝が目覚ますと、自分を中心にして四方の地面に刺された細い竹棒に結ばれた注連縄で、白い紙飾りが揺れていた。

「……うう」

目を覚ました昂輝は、何故か頭が重いと感じる。

多少の頭痛を感じながらも眠気眼で空を見る昂輝。夜空には綺麗な星々が輝いていた。

この辺は都会と比べるとかなりの田舎だ。夜になると町の明かりが激減するため、夜空の鮮やかさも濁りが少なく澄んでいる。

風はない。

無風。

不思議だった。

自分を囲む注連縄の紙飾りは、それでも風に煽られるように靡いている。

左右を見れば、その紙飾りは、別々の方向に靡いていた。

摩く先は自分の方へ。

吸い寄せられている？

四方の紙飾りが、昂輝に吸い寄せられるように靡いていた。

「僕は眠っていたのか……」

そう言いながら昂輝は、確かお砂に呪いの診断を受けていた筈だと、眠気の残る記憶をなぞって思い出す。

「そうよ、眠って居たわ」

お砂の声だ。

「すみません」

よく見れば昂輝の前方には、純白の洋服に身を包んだお砂が立っている。白くツバの大きな帽子の下で懇篤の笑みを見せていた。

そのお砂に昂輝が返した言葉は詫びるものだった。お砂が呪いの診断に精を出しているのに居眠りをしてしまったことを謝罪しているのだ。

「いいのよ、私が眠らせたのだから」

お砂は、軟らかく微笑みながら言うと、ゆっくりとした足取りで注連縄内の昂輝に近寄ってくる。

どうやらお砂が、何かの術で昂輝を眠らせたようだ。

「ラリホーってね」

お砂がお茶目に言った。

ドラクエのスリーブ呪文を。

「そうだったのですか」

受け流す昂輝。

「ええ」

お砂は受け流されても気に止めてない様子だ。

「もう、呪いの診断は終わったのですか？」

「ええ、大体は終わったわよ、今日はここまでにしましょう。そこから出ていいわよ。もう片付けをするから、昂輝君は休んでなさい」

「あ、はい。僕も手伝います」

そう言っつて昂輝は、芝生から立ち上がる。

「昂輝君、手伝いはいいから先ずは上着を着てらっしゃい。風を引くわよ」

「あ……」

自分の姿を見直す昂輝。そつえば上半身は裸だった。

少し恥ずかしそうな表情で昂輝は、大塚邸宅のベランダに置いてあ

る上着を取りに走った。

そして服を着ながら軒太郎や憑き姫たちが居ないことに気付く。

「お砂さん。憑き姫や軒太郎さんたちは、どうしたのですか？」

「夜遊びにでちゃったわよ」

微笑みを崩さないまま注連縄で結ばれた竹棒を芝生から引っこ抜くお砂が、そう答えた。

四本全部を抜き終わると注連縄で竹棒を巻き束ねながらお砂が、昂輝の居る場所へと歩いてくる。

「夜遊びですか……」

「ええ」

軒太郎はともかく、子供の憑き姫まで夜遊びとは、少々感心できなかった。そのことに厳しい表情を見せる昂輝。

案外と生真面目な性分のようにだ。

憑き姫は、まだ15歳の筈だ。今から夜遊びなんかに出ていたら、ろくでもない大人になってしまおうと怪訝していた。

「ところで、呪いの診断結果なんだけど」

「あ、はい！」

憑き姫の将来に不安を巡らせていたところに話しかけられた昂輝は、思わず一驚に背筋を伸ばしながらお砂を見る。

「貴方に掛けられた呪いの仕組みが、大雑把だけど解ったわよ」

「本当ですか!？」

深夜にも拘らずテンションが上がる昂輝は、期待に愉悦な表情を見せていた。

呪いの仕組みが解れば、呪いが解けたものと一緒に考えている笑みである。

だが、そんなに世の中は、甘くない。

「まず、はつきりと解ったことは、昂輝君に掛けられた呪いの数が、ひとつふたつじゃあないのよ」

「僕には、複数の呪いが掛かっているのですか……?」

「そうなのよ。50ぐらいまで数えたのですが……。途中から面倒臭くなって、数えるのをやめてしまいましたわ。ゴメンなさいね」

「50ぐらいまでって……、そんなに……」

愕然と顔を青ざめる昂輝の体から、見る見る力が抜けて行く。

「おそらく100近くだと思っのよ。重複呪いね」

「重複呪い……」

「狼男に変身する呪いがあるでしょ、あの呪いが中心となって細かい呪いを制御しているの。」

狼男の呪いが大きな袋となって、細かい複数の呪いを包んでいるって感じかしら」

「細かい呪いって、どのような呪いなのですか？」

「残念だけど、袋が透明じゃないのよ。中身がどんなものかはよく判らないの」

「じゃあ、まずは狼男の呪いを解かないといけないんですね」

「ええ、そうなるわ。でもね、その呪いが一番の曲者なのよ」

「曲者って、もしかして一番強いつてことですか？」

「その通り、100近くある呪いの中で、一番手が込んでいて、一番セキユリティーが嚴重な呪いなの」

すまなそうな表情でお砂が話すのを、昂輝は不安に満ちた表情で聞いていた。

会話を続けてもあまり良い回答が帰ってこないことを悟っている様子だ。

「狼男の呪いは、相当の呪術師が10人近くで組上げた至高の業物よ。一人一人の実力が私と代わらないレベルで……とっても強大なの」

そこまで言っ言葉詰まらせるお砂は、上品な笑顔を曇らせた。

「お砂さんと同レベルの呪術師……」

同じ実力の呪術師が10人で呪ったのだ、お砂一人では呪いの解除も厳しいのかと落胆した昂輝が力無く俯いた。

そして俯いた昂輝に追い討ちのような事実が、お砂の口から述べら

れる。

「私と同レベルの呪術師が、自分たちの命を生贄に捧げ作り上げているのよ」

それ即ち、お砂レベルの呪術師10人が生贄になって初めて呪いに対抗できると言っていた。

お砂一人では、到底太刀打ち出来ない壮絶な呪いなのだ。

「しかもね……」

更に続くお砂の追い討ちの言葉。

「人を呪えば穴ふたつ。」

呪いを解くのに簡単な方法のひとつが、掛けた側から解除するって教えましたよね。

しかし、それも呪った相手が死んでいる場合は不可能なの、入り口が閉鎖されているのと同じなのよ。

それともうひとつ、出口側を塞ぐ方法、呪い返しって言う方法もあるのですが、入り口も塞がっているからこれも無理なの。呪いを掛けた人物が生きているのが前提の話です。

呪い返しってね、呪いを掛けた相手に呪いを返す方法なのですが、これも相手が生きていての手段です」

「人を呪えば穴ふたつ……ですか」

「そのとおりです　　が、この呪いを掛けた術師たちは、皆が呪いの完成の為に、自ら己の命を捧げています」

「じゃあ、どうやって呪いを解けば……」

「ごめんなさいね……」

お砂が謝った。

被っていた帽子を脱いで、臍の前で両手を組んで、腰を曲げて、頭を下げた。

昂輝に　。

依頼人に　。

礼儀正しく己の無力さを詫びる。

呪いのシステム（中）

「解けないのですか……」

昂輝が咳きながら、ベランダの上に腰を下ろして俯いた。青い芝生を悲しげに見詰める昂輝の全身からは、未来への絶望感が揺らいでいるのが、お砂には解った。

その様子を見てお砂が、励ましたいと言葉を連ねる。

「でも、昂輝君。慰めじゃないけどアドバイスなら出来るわ。的確に呪いを解除して行く方法が、あるにはあるのよ」

俯く昂輝が素早く頭を上げて、お砂の上品な顔を見上げた。まだ手段が、呪いを解除する手段が存在する。希望が存在するのかといった顔色だった。

歡喜が瞳に映っている。

藁でも何でも縫れるものになら何でも縫ろうとしている必死な眼差しだった。

「すべての呪いを包んだ狼男の呪いは解けないけれど、中身の呪いは解く方法があるわ」

「本当ですか!？」

落ちた昂輝のテンションが、徐々に回復して行く。希望が再び輝きはじめる。

「解くというより、解除と述べたほうが正しいかしらね」

「解除？」

「そう、解除。私が解除するのではなくてね。昂輝君自信が解除するの」

「僕自身で？」

「袋の中の呪いは、鍵みたいなものなのよ」

「鍵？ ですか……」

「そう、袋の中の呪いは、鍵なのよ。システムの言つと、袋の中の呪いが、すべて呪いの入り口側なのよ」

「ええ？」

昂輝には、お砂の語る意味がはつきりと理解しきれていなかった。よく判らないものが思考の中で絡み合う。そんな感じだ。

「うーんとね、何ていいでしょうか……」。

袋の中の呪いが発動すると、出口側で呪いの効果が発揮されるって言えばいいのかしら……」

「新しい呪いが発動して、呪いの効果が現れるってことですか？」

「そんな感じかしら」

昂輝の表情が引きつる。
呪いの発動とは、不幸の到来。
何かしら悪いことが起きるということだ。

今、お砂が言っていることは、呪われなければ呪いが解けないと述べているように聞こえた。

それでは、呪いを解くではなく、呪いの消化ではないかと昂輝には思えた。

何かがずれている。本末転倒のようにも感じた。

「僕の中で新しい呪いが、また発動するのですか……」

驚愕のまま再び俯く昂輝。

「それがね、出口が昂輝君の中だけとは限らないのよ。昂輝君の中にある呪いの出口が、昂輝君の中には、少ないのよ。圧倒的にね」

「少ない？」

「そう、昂輝君の中で呪いが発動すると、何処か別の場所で呪いの効果が現れるはずよ。」

だから鍵って例えたの」

そう例えられると、鍵だと理解できた。

だが発動した呪いは、何処でどういった災いを呼ぶのか、どういった形で自分に関わってくるのか　それが心配だった。

そして何よりも発動した呪いが、何も関係ない人々を巻き込むのが怖かった。

バス事故の様に……。

関係ない部活の仲間を死なせたり重症を負わせるのが、何よりも耐え難い。

自分はどうなってもいいが、関係ない人まで呪いに巻き込みたくなかった。

「……」

顔を上げた昂輝は、完全に混乱していた。

しかしまだ、呪いのスペシャリストであるお砂に訊かなくてはならないことがある。

確かめなくてはならないことがある。

「の、呪いはいつ発動するのですか？」

「不明よ……、私にも判らないし、呪いの効果も判らない。発動する条件も、出口がどこかも判らないわ」「なんなんだよ、それ……」

呪いの専門家でも判らない尽くしで、判らないだらけのオンパレードのようだ。

「呪いですわ！」

「それは 解っています……」

何故か自信げに言うお砂に、力無くつつこむ昂輝。

そして昂輝が、ふと気付く。

「もしかして、山中に居た妖怪わいらの封印が解けたのも、僕の呪いが原因ですか!？」

昂輝の予想が正しければ、わいらに驚き父がバスの運転を誤ったことになる。

自分が呪われたから父は、母は、二人は、自殺したことに繋がる。そう思った瞬間に、昂輝の全身に罪の意識が覆い被さって来るのが感じられた。

とてもとても重い罪が、大罪が……。

だが、昂輝の推測をお砂が否定する。

「それは、違うわ。貴方のせいじゃないですよ」

「慰めですか」

「いいえ、私は先人としてアドバイスしているのじゃあないのよ。

私は占い師じゃないんですもの、私は呪術師です。呪術師として今、貴方を依頼人として接しているのよ」

そう、これはビジネス。

お砂は職務遂行中。

500万円の依頼なのだ。

「貴方に掛けられた最大の呪い、狼男の呪いは、昂輝君のお母さんが亡くなられてから発動したのですもの」

「母が死んでから?」

昂輝が本日一番の驚きを表す。ブランダに腰を下ろしていた体が跳

ね上がる。

そして昂輝は、一気にお砂に詰め寄った。
お砂の気品溢れる顔に、昂輝の真剣な顔が近寄る。若干、お砂が身を引いた。

「そう、貴方のお母様側の一族に掛けられた呪いなよ、その狼の呪いわね」

「どういふことなんですか？」

興奮した昂輝の両手が、お砂の肩を掴もうと伸びると、お砂の純白が闇夜に流れるように逃げた。笑顔のお砂が、後ろに一步下がら昂輝の手から逃れる。
触れられたくないようだ。

「貴方のお母様側の血族が、末代までの呪いを掛けられているの。その呪いは、一族へ生き地獄を永遠に味遭わせる為の陰険なシステムと言えるわ。一族に渡り歩く呪いなよ」

「移動するってことですか、呪いが？」

「その通りよ。一族の誰かに呪いが移り、その人物を呪い殺す。そしてその人物が死ぬと、別の血族に移動して、また呪い殺すの。その繰り返し」

「でも、僕は何があっても死なない……？」

確かに死なない。

今の昂輝は、刀で切られても、銃で心臓を射抜かれても、首を切り落とされても、頭を吹き飛ばされても絶命しない。呪いの効果で死なない。呪い殺す筈の呪いが、昂輝を生かしているのだ。矛盾している。

「狼の呪いは、幾つかの役割を備えているのよ。

一つ目は、複数の呪いを守る為の袋。

二つ目は、その宿主を死なせないように守ること……」

「何故、呪い殺したい僕を守るのですか!？」

「最後まで聞いて、昂輝君」

ことに焦りを露にする昂輝。それをお砂が諭す。

「は、はい……」

諭すお砂に、興奮を昂輝が緩める。

つつい興奮してしまう昂輝に、仕方あるまいとお砂も思う。このような状況なのだ。

お砂は、呪術師だ。

本来は呪う側の立場だが、呪われる側の気持ちも良くわかる。

人を呪うならば穴ふたつ。

それが呪い。

呪う側も、呪われる側も、一歩間違えば同じ境涯になるからだ。

お砂も他人に呪われた経験があるし、己の呪いがリバーズして呪い返しを受けた経験もあった。

話を続けるお砂。

「二つ目はね、一族に生き地獄を遭わせる為に、一族の滅亡を防ぐための能力なの」

呪いのシステム（後）

「はあ？ め、滅亡させないって……」

「呪いが呪い殺し続けた結果、一族の滅亡を防ぐ為に、最後の一人を無理矢理にも生き残らせるのよ。そうやって生き地獄って呪いを継続し続ける呪いな」

「そんな、デタラメな……」

デタラメと言うより、陰険過ぎる。

「呪い殺し続ける為に、生かし続ける。流石の呪術師の私でも、そこまではないわ。」

この呪いを熟慮した呪術師は、呪術師の中の呪術師ね。ステキなまでに非道で外道よ」

お砂は、呪いの発案者を笑顔で褒め称えていた。

同じ呪術の道を進む者として、その異端で素晴らしい才能に思慕しているのだろう。

「それをお母さんが抱えていたんですか、この呪いを……」

「そう、貴方のお母様と昴輝君が血族の最後の生き残り。」

お父様は、お母様の呪いに巻き込まれたのよ。

そして最後の独りとなった昴輝君は、死ぬことすら許されず、呪われ続けるのです。

そして誰かと結ばれ子を宿したら、一旦呪いは静止するけど、次期が訪れたら、また呪いが再発動するわ」

眷族を苦しめる為に。

すべての幸せを不幸に変えるために。

家族を築き、幸せになればなるほど、呪いの再発は、残酷さを増すはずだ。

それを昂輝は経験済み。身をもって体験済みだ。

このような感懷を、自分が愛した子供たちにも味遭わせることになると考えただけで、女性を愛する行為が怖くなる。

「な、なんて呪いだ……」

愕然とする昂輝。このまま独りで生き地獄を背負い続けるか、家族を築き、幸せに暮らした後、再び地獄へ突き落とされるか……。

どちらも地獄。

生き地獄だ。

ふざけた呪いだ。

「古い呪いなのですか？」

「ええ、かなり古いわ。何代前から呪いに犯されているか不明な程にね」

昂輝には理解が出来なかった。

何の為に、こんな呪いが自分の一家に……。
古来からだとなると、検討も付かない。

何よりも自分に流れる血には、それだけの罰を受ける程の罪深き事情があるのだろう。

怨まれるだけの、呪われるだけの理由があるのだろう。

理由が存在するから、呪われたのだろう。

末代まで、これ程に手の込んだ仕返しを受けるだけの大罪を犯しているのだろう。

過去に何があったのか？

ご先祖は、いったい何を仕出かしたのか……？

考えても答えが出るような問題ではないが、昂輝は深く艱苦を続けた。

「僕にどうしろと……」

まったくだ。

峻烈な呪いを掛けられたのは、先祖が故の理由。

現代に生きる昂輝には、ことの始まりすら判らない。

ただ呪いを無理矢理に受け継いだだけだ。

お砂は、相当レベルの呪術師と聞く。

そのお砂が解除出来ないのだ。

もう昂輝には、お砂のアドバイス通りに行動を取るしか思いつかない。

この罪を、この呪いを独りで背負って行くしかない。

既に凶悪至極な呪いのシステムを理解してしまった昂輝には、自分の子孫たちに、子供たちに、自分と同じ定めを譲るといふ酷なまねは、とてもじゃあないが選べなかった。

少年は、優しすぎた。

そして決意を固める。

その道しかないと判断する。

すべてを背負うと。

この呪いの数々を、自分独りで解決して行く。

他人への被害を極力回避して、自分独りで、己の身ひとつで受け止めようと。

そう少年は決意を固めた。

少年の顔付きが、凜々しく引き締まる。

覚悟が決まった男の面構えだった。

「昂輝君。 休憩は終わりよ」

微笑みながら言ったお砂の顔を見る昂輝は、突然の台詞に疑問を抱く。

話の流れが、別の方向に変わったのだけは悟れた。

呪いの診断は終わったはず。

よく考えれば診断が終わった時にも言われていた。
『休憩して』と、可笑しな言い回をお砂が言っていた。

昂輝が不思議そうな顔をしていると、微かに感じる足への振動。
その振動は徐々に震度を上げて、両脚から登り体に伝わる体感を増して行く。

響く地鳴りが、足の裏側の神経を刺激して更に心臓へと伝わると、
緊張感へと変貌して行く。

まるで振動は、人が走るようなテンポだ。
ドシン、ドシンと、スタンピートが聞こえていた。

「お砂さん……いったい、これは？」

「来るわよ」

お砂の表情は、厳しい鷹揚を見せていた。瞳に冷めた光を紫水晶の
如く潤ませている。

大人の女性特有の魅惑が椿のようだが、薔薇以上の棘を持っている
ように見えた。

その棘は、恐らく毒針。

猛毒の針だろう。

今まで見たお砂の表情の中で、一番厳しく険しい。

地鳴る振動は更に増して行く。

「ななななな、何事ですか!？」

屋敷の奥から剛三が慌てながら走って来た。

そして目に付いた昂輝とお砂に叫んで問うが、二人は何も答えない。

答えるも答えないも昂輝にも事情が分からないのだ。恐らく事情を理解しているのはお砂一人。

剛三ほどでないが、昂輝もつろたえて居た。

「お砂さん……」

昂輝がお砂の名を問うように呟いた瞬間、地鳴りがやんだ。ピタリと振動が止まる。

「なんだったんだ……？」

一瞬の静けさの中で慌てる剛三が、そう囁く。

その刹那、大塚邸宅の中庭の芝生の上に、突如、巨大な魔人が蟹股で落ちてきた。否、蟹股で着地したのだ。

いままでの中で一番激しい地鳴りが轟き、振動で辺りの小物が浮き上がる。

盆栽の鉢が浮き、室内の花瓶が花を啜えたまま倒れ、屋敷の瓦がずれて音を立てる。剛三が腰を抜かして尻餅を付いた。

音が止んだのは、この巨人が走りながら跳躍して、屋敷の上を飛び越えたからであろう。

「なんですか、あれは!？」

腰を抜かした剛三が、震える腕を突き伸ばしながら指を向けていた。中庭に現れた大きな人型は、いったい何かと問いかける。

3メートル。

否。

3.5メートルはあるだろうか身長。
黒い肌にボサボサの髪。
額に二本の角。

「おおおお、おにいいいい!?!」

震える声で剛三が答えを述べる。

正解、鬼である。

五色鬼の一匹。黒鬼の鉷鬼。

それに。

「町へと人間を浚いに行こうと思ったが、もっと良き匂いに釣られて覗いて見れば、随分と美味そうな若者が居るではないか。たまらぬのおう」

巨大な鬼の肩に、もう一匹なにかが居る。

それは女郎のような魅惑的な女性。

黒鬼の肩に、優雅な素振りで腰掛けて居た。
しかし肌の色が紫、普通の女でないのが一目で解る。

恐らくは、妖怪の類。

恐らくは、鬼女。

恐らくは、敵。

「何者ですか？」

冷静な抑揚でお砂が問うと、女郎はもったいぶらずに素直に答えた。狂気な笑顔で見下ろすしながら。

「我らは、泣く子も黙る恐怖の鬼衆、五色鬼が二人。紫鬼女の蘭鬼と、こつちが巨大黒鬼の鉦鬼」

色的に見たまんまだ。

「先ずはお前たちを食らってから、その後村の連中を捕まえて、龍鬼親分に届けるとしましょうか。ねえ、鉦鬼」

巨大黒鬼に話しかける蘭鬼。しかし黒鬼は答えも返さず屋敷の三人を見詰めていた。

凜猛そうな顔は鬼らしくて恐ろしい。

「鬼が、なんで……」

驚愕の表情で昂輝が、声を震わせながら漏らす。

人里に降りてきた異形の鬼二匹。

狙いはどうやら昂輝。

不死身の呪いが醸し出す妖気に釣られて来たのだらう。

その後は、町に下りて人を襲う積りらしい。

それは許せないと昂輝が凄み、呪いが齎す災いの効果だと責任を抱く。

呪いのシステム (後) (後書き)

次からアクション予定です！w

鬼と狼（巻）

宝石のような星々に月光を潤ませる夜空の下で、その怪異は大きな巨躯の筋肉に青筋を走らせ、白い眼光だけをギラ付かせていた。

夜露に濡れた芝生に立つ大きな黒影。

黒鬼の鉞鬼と、その肩に座る紫鬼女の蘭鬼。

恋人同士が、互いの小指に結ばれた赤い糸で、運命を繋がれているといわれる恋愛話の元となったミノス王国の地下ダンジョンに住む、巨漢で牛の頭部を持った怪物の伝説。

その魔獣ミノタウロスよりも目の前の黒鬼は、遙かに大きく威圧的で荒々しく映っていた。

伝説に出てくるミノタウロスの身長は、2.5メートルと語られている。しかし眼前の黒鬼の鉞鬼は、3.5メートル近く身長があった。

伝説の魔獣ミノタウロウより更に1メートル高い。

その巨大な鬼の肩に腰を下ろす怪しい紫肌の遊女は、人として有り得ない顔色を見せているが、奇怪な肌色を差し引いても誘惑的に美しいフェロモンを濃く放っていた。

やたらとエロイ仕草やしやべりかたを態度に見せる。

昂輝の隣に立つ純白のお砂とは異なり危険な魅力であった。

「ぐるるるるるるうううう！」

黒鬼の鉞鬼が、獣の如く喉の奥から野生的な狂声を唸りに変えて鳴らす。

その唸り声を耳にしたのならば、百獣の王である獅子たちですら群れを成して逃げ出して行くだろう恐ろしい響きだった。

威嚇された空気が軋轢を増して冷めていく。

強く噛み締められた歯と牙の隙間から威嚇の振動が空気を揺らすと、屋敷側に居る三人へと届く。

昂輝とお砂が睨み返す視撃を放つ。

しかし一人無力な一般人である剛三が、女々しい悲鳴を溢していた。

「ひいひいひいひい！！」

剛三が老いた顔に刻まれた皺の深さを寄せながら恐怖に声を震わせる。

一度は、妖怪わいらを目の当たりに行っている怪異の経験者も、突如現れた巨大な黒鬼に対して恐怖心が対応できずに混乱へと飲み込まれていく。

完全に取り乱し、恐怖の中に沈んで呼吸を乱すと、戦慄に冷たい汗を流して居た。

剛三の見せる反応こそが、正しい人間の反応だろう。

冷静な態度を保つお砂は、いつもと変わらない。

しかし若干の動揺を見せる昂輝の方は、気後れを隠すように気合を張り詰め目力を強める。

若い双眸に熱い定めが宿って燃えていた。

お砂の笑みに鷹揚が掠れていくなか、白い帽子のツバと純白のロングスカートが揺れて、軟らかく靡いていた。周りに肌で感じられる風は、僅かにもない。

またしても無風

そのような中で揺れているのは、お砂の衣類や黒い髪だけだった。不自然にもお砂の周りだけ、空気が乾燥しながら流れ動いていた。

鬼たちとの間に軋轢が、夏の気温にも負けないスピードで上昇していく。夜だというのにだ。

大きな白い帽子のツバで視線を隠すお砂が、小さく呟くと、抑揚の無い声が昂輝に届く。

「私が彼らを掃除するわ」

お砂は、「掃除」と言った。

一人で二匹の鬼を片付ける気だ。

3メートル以上の巨大な大鬼を目の当たりにしてまで、己の戦闘力に自信があるようだ。

呪いの専門家というが、彼女もまたヴァルハラ探偵事務所の凄腕エンジニアント。

憑き姫や軒太郎のように戦闘力に長けている。それに自信もある様子だ。

見えない空気の流れが、更に激しくお砂の衣類を揺らし靡かす。ざらつき乾燥した空気だ。

絹が煽られバタバタと音を鳴らし騒ぎだす。

だが、お砂よりも昂輝が先に前へと歩む。

「いいえ、僕が戦います」

「でも、昂輝君？」

「此処は僕の町です。僕が守ります」

そう言いながら昂輝が、凜と表情を引き締め、全身に脱力を揺るがしながら、一步一步、確かに、芝生を踏みしめながら一人で前進を続けた。

昂輝の周りで、空気に気迫が溶け込んで行くのがお砂には感じられた。

少年の背中に、男を見る。

昂輝は、先程の言葉を思い出す。

紫鬼女の蘭鬼は、確かにこう言った。

昂輝を食らった後に、町の人間を浚うと。

この鬼たちは、自分を襲い、町の人々を襲う積りなのだ。

この鬼たちは、恐らく自分の内に存在する呪いの効果で呼び寄せられた災いそのもの。

不幸の元凶。

災害の塊。

呪いは、昂輝を苦しめる為だけに機能している筈だ。

自分が襲われ苦しむのは構わない。

だが、自分を苦しめる為に他人が襲われ傷つけられることは、とて

もじやないが我慢ならない。

寧ろ呪いの目的は、そこにあるのかも知れないが、それだけは避けたい。

そうだ、絶対に避けなければならぬと考える。

それだけは、耐え難いのだ。

夜露を葉に蓄えられた青い芝生が踏みしめられ、微かに草の音を立てる。

巨大な鬼に、ゆっくりと歩む昂輝の両拳が強く固く握り締められ、拳の内部に決意が圧縮されていた。

熱い魂の思いだ。

表情に勇気が、双眸に炎が、心に正義が宿る。

此处で鬼たちを食い止める。

町には下ろさない。

自分に掛けられた呪い。

一族に掛けられた呪いのケジメは、自分で背負う。これ以上、町の人々には迷惑を掛けられない。

サッカー部の仲間たち。

死んだ仲間。

怪我でサッカーを諦めた仲間。

もう、自分が背負った災いの数々の為に、他人が傷つく姿は見たく

ない。見せたくない。見せられない。

だから。

だから。

だから自分で戦わなくてはいけない。

自分の中の呪いと、災いと、不幸と、責任を持って。

そう、戦うのだ！

「おつぎやややああああああ！！」

吼えたのは鉾鬼。

蟹股で腰を落とし、胸をはりながら分厚い大胸筋をヒクつかせ、両手を握り、両腕を左右に荒々しく開いて力む。

二角を持つ鬼面が、星空を見上げるように仰け反ると、狂った魔物が咆哮するように吼えた。

夜空の果てまで雄叫びが広がり、眩い星々すべてを脅迫するように轟いた。

その雄叫びの咆哮で、夜の闇が一瞬のもとに砕けて落ちてきそうな程、強烈に空気が振動して激しく震えた。

「ちよつと！」

そして鉾鬼の乱暴な行動で、肩に座っていた蘭鬼が振り落とされる。

3メートルの高さから振り下ろされた蘭鬼は、猫のような柔軟な動きで可憐に着地すると、黒鬼に睥睨しながら愚痴を怒鳴った。しかし鉷鬼は、その蘭鬼の言葉を無視して走り出す。

ダッシュ。

一瞬の踏み込みで、芝生が抉れて後方に飛んで行く。

鉷鬼の黒い巨体が、大型ダンプの如く昂輝に突進していった。しかも速い。猛スピードだ。

疾走する鉷鬼の両手が、小動物でも捕まえようかと伸びるが、その隙間を昂輝がすり抜け逃げ延びる。

横にまわる昂輝。

小回りの敏捷性では、小さな昂輝のほうが、機動的に上であった。

突進にブレーキを掛けながら顔だけで逃げた獲物を追う鉷鬼の踏ん張った足元が、ベリベリと芝生を抉り取り、踏ん張りのラインを傷跡として深々と残した。

鉷鬼が濁った眼球で、即座に獲物を探す。

しかし昂輝の姿が視界から消えた。

見失った。

また昂輝も速かった。

並みの人間が見せられるスピードを、遙かに凌駕している。

まさにライカンの見せる身体能力は、超人的だった。

何故に一族を苦しめる為だけの呪いのシステムに、このような利点が組み込まれているかは疑問であるが、今はそれどころでない。

「鉦鬼、後ろよ！」

蘭鬼のアドバイスが飛ぶ。

鉦鬼が更に体を捻りながら黒太い腕を闇雲に振り回した。

片や運が良かった。

片や運が悪かった。

超腕に空間が薙ぎ払われると、ダンツと車が人を轢き、轢かれた人物がボンネットの上を転がったような音が聞こえた。

後に鉦鬼の腕に直撃した昂輝の体が、地面擦れ擦れの低空飛行で飛んで行く。

人間が滑空するには有り得ない軌道と高さ　否、低さだった。

芝生が抱えていた雫の玉が、跳ね飛ばされた昂輝の飛行の後に舞い上がり、激しい波を上げる。

飛んで行った昂輝が庭の隅に建っていた木造の物置小屋に激突して、板張りの壁を突き破り物置内に消えて行く。
物置小屋が崩れ落ちそうなほど揺れていた。

凄い音が響くと、物置の窓ガラスが砕け飛び散り、扉が外れて倒れこむ。

室内からは金物や何やらが崩れ落ちるものものしい音が何度か聞こえ、昂輝が激突して開けた穴から空気を吸い込み、割れた窓や外れた入り口から誇りが波の如く吐き出された。

音が止み、皆が昂輝の消えた穴の奥を見ていた。鉦鬼が物置に向かって進む。

その時である。

自分が激突して開けた穴から昂輝が姿を現す。

ゆっくりとした歩みで、舞う誇りと静かな夜の暗さに混じってシルエットを映し出した。

鉦鬼の歩みが止まった。

物置小屋から出てきた昂輝の外見が変わっていたからだ。

誇りまみれでTシャツやGパンが、所々破けている。みすばらしい。

だが、そんな事よりも 昂輝の頭部が……。

「なに、あいつ？」

離れた場所から見ていた蘭鬼が、容姿を変貌させた少年を見て驚愕に言葉を漏らす。

鬼すら驚く昂輝の変身。

物置から出てきた昂輝の頭部が、灰色の髪を持つ狼へと変わっていた。

獣人。

狼男。

ライカンスロープ。

ウルフチェンジャー。

昂輝がどれに当てはまる種か不明だが、言えるのは一言。

化け物である。

鬼と狼（貳）

狼の牙を剥く昂輝が、威嚇に喉を鳴らす。

「がるるるるううう」

『この姿には、変身したくなかった……』

テレパシーと喉の唸りが同時に聞こえるダブルボイス。

刹那の動揺を収め、悠然を取り戻す蘭鬼が言った。

「あの若者は、妖怪だったのね」

口は人間よりも遙かに突き出し、骨格が完全に獣のものだ。犬や狼に近い。

しかし、凜とした表情と熱い双眸からは、生まれただばかりの正義の炎が翳りもなく燃え盛り、より一層の全貌を力強く増していった。

「あれが昂輝君の最大の呪いね。永遠の苦しみを味あわせる為の生き地獄システム。無限地獄のカラクリ」

呪いの姿を見たお砂の表情は、憐憫な台詞と異なり、うつとりとした眼差しに変わり緩んでいた。

おぞましい程に芸術的で、完璧なシステムに恋焦がれ扇情を映す乙女のように、蕩けそうな目じりを垂らしている。

物置の中から出てきた狼面の昂輝の両手には、先の丸いスコープと、先が四角いスコープが一本ずつ握られている。

「ぐるぐるううう」

不満に喉を鳴らす鉾鬼。

剛腕で叩きのめした筈の獲物が、二本足で立ち、未だ歩いていることに不思議そうな表情で首を傾げていた。

当然だ。今まで鉾鬼が本気で殴りつけたものが絶命せず、破壊されなかったことがない。

岩を殴ればパツクリと割れ、大木を蹴飛ばせば容易く薙ぎ倒せた。牛や馬の頭を撫でれば首が脆くもへし折れるのだ。3・5メートルの巨体ならば、それが当然の質量だった。

仲間の鬼たちですら鉾鬼に触られることを嫌っている。力加減が難しいのだ。

だが、目の前の小動物は、鉾鬼が振り回した腕に跳ね飛ばされても死ななかった。壊れなかった。

このようなことは、初めての体験である。

鉾鬼の腕には、昂輝を殴り殺した感触が確に残っていた。

昂輝の骨が、全身の骨が、確かに粉碎する感触が残っていた。

絶命したはず。

だが、立っている。

疑問に首を傾げる鉾鬼。

しかし真実は、鉾鬼が感じた感触どおりのものであった。勘違いなどではない。

物置小屋の壁を突き破る前から昂輝の全身の骨という骨は、怪物の怪力を浴びて複雑に骨折しており、壁を突き破って中に飛び込んだ時には、既に完全なミンチになっていた。

普通の人間ならば、絶命すらも通り越していたるダメージだ。

頭蓋骨は砕け、折れた手足の骨が皮膚を突き破り、粉碎された肋骨が様々な臓器に突き刺さっていた。
頸椎も脊髄もバラバラになっている。

しかし、即死といえるダメージを受けても、死という自由を剥奪された昂輝の全身は、一瞬にも近い僅かな時間の中で、不幸なまでの軌跡と呼べる呪術機能のまま全快の回復を瞬時に見せたのである。
残ったのは衝撃に覚えた激痛の記憶のみ。

昂輝が、前に出た。

速い足取りで、一步二歩と助走を付ける。

勢いを身に乘せると、右手に持っていた先が丸いスコップを、まるで槍投げの選手の如く投げ放つ。

投擲ホームに狼頭から伸びた灰色の髪が荒々しく乱れた。

スコップの先が空を切り裂き飛んで行く。

即席の弾丸だ。

その軌道は、弧を描く事無く真っ直ぐに直線のラインで鉦鬼を狙う。

「ふんがー！ー！」

瞬時に振り上げた拳を真っ直ぐ下に振り落とし鉦鬼が、見事に飛んできたスコップを叩き落した。

タイミングはパーフェクト。

スコップが地面に叩きつけられ、ワンバウンドしてから空中に跳ね上がりクルクルと風車の如く回りながら登って行く。回転するスコップが、五月蠅そうに鉋鬼の眼前で踊った。

『でえええあああ！』

垂れ流しのテレパシーで気合を叫ぶ昂輝が、回転しながら跳ね上がったスコップの下をくぐり攻め込んできた。

踏み込みの左足が、芝生にスタンプされると、昂輝が先の四角いスコップをバットの如く横に構えてから振り回す。

狙いは、鉋鬼の右の脛だった。

鉄が生肉と、その下の骨を叩く音が響く。刹那、スコップの柄が折れて、四角い先が飛んで行った。

「うがぁ！」

鉋鬼が脛への激痛に悲痛を叫ぶと、横振りの強打に黒い巨体が崩れて膝を付く。

弁慶の泣き所だ。

巨漢相手に小さな戦士でも有効打を狙える苦痛のポイント。

しかし昂輝の行動は、策を練つての攻撃で有らず。ただ攻撃が届く手頃なところを狙ったに過ぎない。

偶然の攻撃が、秘策へと重なる。

たまたまの産物に、有効なダメージを生み出し与えられた。

殴られた脛を両手で押さえる鉋鬼の鬼面が、痛みに力み、歯を見せながら食いしばっていた。

「鉾鬼！ なにやっているのよ!？」

蘭鬼が怒鳴った。

その表情に情けなさど苛立ちが焦げ付いている。

紫鬼女の表情が怖い。

巨大鬼の鉾鬼が、戦闘で片方とはいえ膝を地に付ける姿を見るのは、久々のことであった。

鉾鬼は、完全武装した侍の騎馬兵100人を相手に出来るのだ。それだけの戦力が見た目通りある。

例え僅かであろうと蘭鬼が、このような情けない鉾鬼の姿を見るのは、赤鬼の龍鬼が鉾鬼を仲間に取り入れる為に戦った時くらいであった。

蘭鬼が怒鳴ると同時に、空中で回転していたスコップが昂輝の横に落ちてきて芝生に突き刺さる。

それを素早く引っこ抜いた昂輝が狼面で牙を剥く。

そして片膝を付いて打点が低くなった鉾鬼の顔面を狙って、確りと両手で構えたスコップの先を、容赦なく矛先に真似て突きたてた。

立て続けに攻め立てる昂輝の攻撃。

しかし何度もうまくはいかない。

顔面を狙ったスコップの一撃を、歯と歯で鉾鬼が銜え込み受け止めた。

鉾鬼の鋭い牙が、スコップの鉄を貫いている。

そして両サイドから迫る鉾鬼の手のひらが、包む様にガツシリと昂輝の体を捕まえた。

「ぐうるるるるる！」

唸り声と共に鉋鬼は、啜え込んだスコップを、筋だらけの肉でも食い千切る仕草で昂輝から奪い取る。

そして口にあるスコップを、ぺっと、爪楊枝でも吐き捨てるように横へと飛ばした。

『うううううう』

テレパシーで呻く昂輝。

凄い力で体を握り締められ肋骨が砕けては再生を繰り返し、ただ只管に苦痛を昂輝に与え続けていた。

鉋鬼の両手から逃れるどころの騒ぎではなかった。

これが呪いの目的なのだとは自覚しながら昂輝は、先祖が犯した罪の罰を、激痛に変換して受けとめ続けた。

「あ~~~~ん」

昂輝を両手で捕まえている鉋鬼が、大きく口を開く。

それは両手で持った食べ物に食らい付くモーションだった。

昂輝が見上げれば、鉋鬼が大きく口を開き、鋭い牙の奥に喉チンコが揺れているのが見えた。

それを見て昂輝が戦慄を感じながらも、あることを悟る。

それは。

「食べる積りか!？」

そうである。

食事だ。

鬼と狼（参）

元々鉦鬼の目的は、昂輝が醸し出していた不死身の妖気を食らうことなのだ。

此処には美味そうな妖気の香りに釣られ、垂涎の食欲そのままに足を向けたのである。

鉦鬼は昂輝に対して戦いを挑んだ積りは、さらさらなのだ。

登場時に蘭鬼が述べた通り、食事の為なのだ。

そう、これは狩りと表現したほうが正しいだろう。

「がああああ」

昂輝の頭部に鉦鬼の大口が迫る。

踊り食い、される。。

まるかじり、される。。

嫌な想像が脳裏に過ぎる中、昂輝の頬に、ねっとりとした鉦鬼の涎が垂れて来る。

昂輝の表情が青く変り、恐怖に染まって行く。これは不味いと……。

「ばあくう〜う」

そして食われた。

頭から。。

ガリガリと。

ボリボリと。

頭蓋骨が噛み砕かれる惨たらしい音が、辺りに鳴り響いた。

残酷な光景を目撃することとなってしまった剛三が、そのまま白目を見せながら気を失い、後ろに倒れこむ。

まさかこの歳で悶絶しながら気絶をするとは、意識を失った剛三も流石に予想すらしていなかった。

人間が頭をまるかじりされるシーンは、それ程にまでショッキングな場面で、テレビのアニメやスクリーンの映画内で見える作りものは、比べ物にならない衝撃的な光景だった。

リアリティーが半端でない

人間の頭と述べても、今は狼の頭部だが、その存在が剛三から見ても五代昂輝であることは代らない。

知人が食われる光景とは、無常にも非情すぎる。気絶したとしても無理はない。

しかし昂輝の味方である筈のお砂は、それ程までに凄惨な光景を目の当たりにしても、笑顔を崩さず焦りのない微笑みを見せていた。

食われるといった行為に、お砂が出した呪いの診断結果を鑑みるかぎり、この程度では昂輝が安らぎを得られないと考えている様子だった。

それだけお砂が惚れ込んだ呪いのシステムとは、強大な不のエネルギーを秘めているのだ。

お砂の自信と呪いの凶悪さが、昂輝の頭部をかじり取った鉦鬼に、悪い形で表れる。

黒鬼の表情が深く曇りだした。

黒い顔に玉のような汗が浮かび上がり、両手で捕まえていた昂輝の体を投げ捨てると、首の無くなった死体が、力無く芝生に転がった。鉦鬼が呻きながら両手で口を押さえる。

「ぬぬぬうううう……」

両手で押さえた顔の頬が、木の実を溜め込んだリスのように膨らんでいく。

背を丸め、悶える黒鬼。

飲み込んだものが逆流して口から飛び出してきそうだった。

鉦鬼は嘔吐を堪えるように全身を震わせ悶えている。その黒い皮膚に玉の汗が浮かび上がり、ダラダラと流れ落ちていく。

「なに、なによ？」

戸惑いを表しているのは、蘭鬼も同じ様子だった。

昂輝が呪いの為に、生き地獄の絶対不死と知らないのだ。状況が飲み込めずにいた。

蘭鬼は、鉦鬼の苦しむ姿を見ても、理由が把握できずに戸惑っている。

そしてついに鉦鬼の口の隙間から、両手の隙間から、赤い霧のようなものが漏れ出るように噴出を始めた。

限界であつた。

鉾鬼は、口を押さえていた両手を開放して、ゲロを吐き出す酔っ払いいにも劣らない勢いで、激しく嘔吐を撒き散らす。

赤雲が、鉾鬼の口から流れ出る。

大氣中に散らばつた赤い嘔吐は、不自然な動きで流れると昂輝のなくなつた首元へと帰還していく。

そして見る見るうちに塊と化し固まり、食いちぎられ噛み砕かれた筈の頭部へと形を戻していった。

頭部が修復すると昂輝の睨みが、刹那に大きく開いた。そして何事も無かつたように起き上がる。

再生を完成させた昂輝が、自分を食らつた鉾鬼を睨み付けた。

復活の威嚇が、眼光の鋭さ以上に鬼を動揺させる。

明らかに動揺を見せる鉾鬼が、巨大な体格に似合わずつろたえる。一歩後ろに足が下がった。

「なにやっているのさ鉾鬼！」

再び蘭鬼の怒号が甲高く飛ぶ。

「そんな獣妖怪、我らが五人衆の敵じゃないでしょうが、さっさと殺してしまいなさい。

引き千切つて、磨り潰して、死んでから皆で美味しくいただければ良いのよ！」

蘭鬼の言う通りだと考えた鉦鬼が気を取り戻し走り出した。鉦鬼の歩幅に合わせて地鳴りが屋敷を揺らす。大きな黒い塊が、狼少年に再び襲い掛かった。

そして飛んだ。

跳躍。

夜空に向かって黒い巨躯が跳ねると、鮮やかな星々を覆い隠す。すると重力に引かれた巨大鬼の体が落ちて来る。その勢いに握られた拳が威力を強めると、急降下攻撃と化す。拳の爆撃が投下された。

狼少年が横に飛んで、大岩のような拳の下敷きから逃れると、鉦鬼の拳が芝生を叩き、ズシリと威力に任せて減り込んで行く。まるで地震の発生源の真ん中だった。拳が大地を苛めると、辺りを激しく揺らし衝撃の強さを主張していた。

「ふぐううつう！」

地面に突き刺さった拳を引っこ抜くと同時に、避けた昂輝を視線で追う鉦鬼に向かって、今度は昂輝の方から牙を剥いて飛び掛る。

しゃがんでいても鉦鬼の顔面は、2メートルぐらいの高さにあった。その高さまで軽々と跳ね上がった昂輝が、熱さを込めて右拳を振り上げ打突を狙っていた。

跳躍の高さは、もう人が行なえる運動能力を明らかに超えている。しゃがんでいる鉦鬼の頭よりも高く飛んでいた。

『せえややあああ！』

振り上げた拳に気合を練り上げるテレパシーの叫び。

しかし。

「あらあら、軒太郎ちゃんが言っていた通り、子犬ちゃんは、ケンの素人なのですね」

お砂が浅い微笑みを見せながら言った。

その直後、鉾鬼に殴りかかった昂輝の体が、血飛沫を散らしながら横に吹っ飛び攻撃を失敗させる。

何が起きたか判らないまま、昂輝が芝生の上に転がった。

「ほら、こつなっちゃう」

墜落して転がる昂輝を見てお砂が、情け無さそうに呟いた。

攻撃に転じた昂輝に対して横槍を加えたのは、少し距離のある場所に立っていた蘭鬼だった。

敵は複数。

仲間への援護。

お砂は手を出さなかったが、敵の鬼が手を出さないとはいかぎらない。案の定、手を出してきた。

蘭鬼が両手を突き出し何かを発射した様子だ。

何かは判らない。

武器を使ったのか、それとも何らかの妖術を唱えたのかは、不明で

ある。

立ち上がる昂輝の体に弾痕のような穴が数箇所開き、そこに飛び散った筈の血液が這い登りながら帰還して行く。

ご主人に「ハウス！」と指示された忠犬のようだった。

「凄いわね、傷が見る見るうちに治っていくは……」

負傷の逆回転に気付いた蘭鬼が驚きの言葉を溢している間に、昂輝の傷が完全に塞がり、衣類に赤々とこびり付いていた血痕も消えて無くなっていた。

「なるほど、香しい妖気の原因は、これだったのね」

蘭鬼の口元がおぞましくも魅惑的に微笑む。

ぞっとする程の怪しい笑みの下に食欲そのものが蠢いて、超回復の狼少年を絶品のご馳走の如く見んでいた。

蘭鬼が魅力的な唇を、艶めかしいく赤い舌で舐めまわす。

鬼と狼（四）

昂輝が自分を攻撃した鬼女を睨む。

何をするのかと。

横槍への抗議の眼差しが鋭く向けられた。

猫と窮鼠ほどのサイズの違いだといえ男同士の戦いに、チャチャを入れられたことが気に食わない様子である。

昂輝が蘭鬼に対して威圧の視線で抗議中、地面を擦る音と、空気を掻き混ぜる音が聞こえながら迫ってくる。

重圧の音に昂輝は、自分が戦っていることを思い出す。

音の主は、鉾鬼の蹴り。

しゃがんだ常態から地面に爪先を擦りながら横に振られた下段のキックだった。

黒く巨大な右脚が、砂埃を上げながらドリフトを見せるスポーツカーの如く迫ってくる。

「もう、昂輝君は、余所見が多いわね」

お砂が困った顔を見せる。

その辺がお砂曰く、いや、軒太郎も言う通り、昂輝が戦いどころか喧嘩の素人と言わしめる要因なのだ。

戦闘中だという緊張勘が、自覚が足りなすぎる。

そして素人ゆえに、鉾鬼の振られた蹴りを、真横からもろに全身で浴びてしまう。

蹴りの直撃に人狼が弾かれる。

『ぐうっはあああ!』

悶絶のテレパシーと共に、昂輝の全身から本日三回目の複雑骨折の音が鳴り響く。

昂輝の手足が関節をなくしグニャグニャに変形して飛んで行くと地面に跳ねて、ワンバウンド、ツウバウンド、スリーバウンドして再び物置小屋に飛び込んで行く。

二度目のナイスインである。

どんがらがっしょんと派手な物音が騒がしく鳴り響くと、誇りと騒音が一緒に物置から吹き出た。

暫しの沈黙。

蹴飛ばした鉋鬼も、蘭鬼も、味方のお砂も物置小屋の風穴を直視していた。

そして大差時間をあけずに衣類だけがボロボロに変わった昂輝が、確りとした足取りで穴から出てくる。

全身の複雑骨折は、30秒もせずに完治していた。

しかも物置から出てきた昂輝の両手には、新たなる武器が担がれている。

先程は、ふたつのスコップ。

今回、物置内から昂輝が引っ張り出した農作業用のアイテムは。

草刈機の刃。

丸い円状の刈刃を、両手いっぱいには持っていた。片手に5枚から7

枚は握っているだろうか。

『でえあああああ！』

昂輝のテレパシーが叫ばれると体を深く捻り、攻撃態勢を見せた。そして右手にある鷲掴みの刈刃を、フリスビーの如く逆水平で一気に入げ放つ。

飛び行く複数のギザギザ円盤。

狙いは鉋鬼の巨躯。

束ねてあった鉄の刃が空中でバラけると、風切り音を鳴らしながら複数飛んで行く。

しかし鉋鬼が素早く回避を見せた。真上に跳ね飛び膝を抱えて、複数刈刃の攻撃を躲わした。飛んだ鉋鬼の足元を、刈刃が過ぎて空気を刻んで行くと、後方にあった庭園の松ノ木を無残にも八つ裂きにしていく。松の木が、バラバラになって崩れた。

鉋鬼が地を響かせて着地すると、昂輝が反対の手に持った刈刃の束を投げようと振り被る。

だが、今度は鉋鬼も動きを見せる。

左右にジグザクに飛びながら昂輝に向かって進行を開始した。

右、左、右、左、たまに右、右と、フェイントを見せる鉋鬼の幻惑な動き。

巨体の敵は、大きいにも関わらず昂輝を素早い動きで惑わし、狙いを定めさせずに迫り来る。

昂輝は、その鬼の動きに余裕を失い、ならばと刈刃を闇雲に投げた。

幅広く投げられた鉄の円盤が、けたたましく風切り音を共鳴させる。しかし更に素早く横へ疾走した鉦鬼が、刈刃の範囲を猛ダツシユで駆け抜けて出て行く。

そして刈刃の攻撃は、庭園内に散らばり後方に居た蘭鬼の元へと飛んで行った。たまたまとはいえ、攻撃の範囲内に蘭鬼が居たのだ。

「ちっ！」

舌打ちを溢した蘭鬼が右手を翳すと、彼女に向かって飛んで行った数枚の刈刃が、空中で火花を散らして弾かれる。

蘭鬼の口元が不敵に釣りあがり微笑んでいた。

また何かを掌内から飛ばした蘭鬼の周りに、撃墜された円盤が突き刺さる。蘭鬼に刈刃が命中することはなかった。

「鉦鬼、一気に殺しなさいよ！」

怒鳴る蘭鬼に急かされて、鉦鬼が昂輝に接近した。

放たれる攻撃は、野球のアンダースローのようなスイングアッパーカット。

芝生の先を撫でながら、地面ぎりぎりを進む巨大な拳が昂輝を捉える。

『ぐはっ！』

鉦鬼のアッパーを昂輝は、両手をクロスさせてガードに成功していた。

だが、200キロ越える巨漢で肥満の相撲取りが頭から突進して来

たよつな衝撃に、クロスさせた両手から骨が碎ける音が聞こえ、その下の胸郭からも更に肋骨が碎ける音が無残に鳴り響く。

重量感溢れる衝撃に、両腕のガードは無駄に等しかった。

剛拳で昂輝の全身を吹き飛ばす鉾鬼が、ライカンスロープの体を強烈に弾き飛ばす。

昂輝の見る景色に、蜘蛛の巣に似た輝が走ると眩暈に変わる。眼球までもが拳の激突だけで飛びだしていた。

『なんの！』

しかし10メートル後方まで昂輝は飛んだが、すぐさま視力を回復させ気合で踏ん張るように着地すると、転倒を免れる。

着地と同時に、折れた両手が再生して真っ直ぐに戻って行く。

両手の再生を数秒まつた後に、今度は昂輝が前に走った。

10メートルの距離が一瞬でなくなると、間合いを詰めた昂輝が鉾鬼に迫る。そこに鉾鬼が、カウンターの攻撃を合わせた。

巨人のキックが跳ねる。掬い上げるような前蹴りだ。

素足で大きな爪先が、走り寄った昂輝の水月を捕らえた。

だが当たりが浅い。

浅いが確実に命中している。

鉾鬼の爪先を腹部に喰らった昂輝の体が、くの字に曲がり、柔らかくふわりと浮いた。

「ふんがー！ー！」

唸り声を上げて鉾鬼が両手を振り上げる。そして握られた双拳がハンマーの如く浮いている昂輝の背を目掛けて、同時に落とされた。

『げはあっー！』

ダブルハンマーの直撃。

双槌の拳を食らった昂輝の体が地面に叩きつけられ、更に弾んで浮き上がり、クルクルと回転している。

先程のスコップに似ていた。

その回転する昂輝の体を鉾鬼が両手で捕まえると、全力で真上に放り投げた。

高い。

昂輝の体が、50メートル以上上空に舞って回転していた。

「とどめは私がさしてあげる！」

そう言いながら両手を空中にいる昂輝に向ける蘭鬼が、目を見開き楽しそうに微笑みながら狙いを定めていた。

また、謎の飛び道具を発射する積りだ。

「あらあら、先程からおいたばかり」

「えっ!？」

いつの間にか蘭鬼の横に、純白のお砂が立っていた。

静かな抑揚に穏やかな鷹揚を重ねる彼女が、両手を昂輝に翳す蘭鬼の横から右手の掌を向けて、意地悪そうな涼しい笑みを見せる。

そのお砂の黒髪が見る見る白く　　否、灰色に染まってく。

「空気が読めない女は、美人でも嫌われますよ」

そう言ったお砂の右掌から乾いた砂埃が、蝶の如く羽ばたき舞い出ると、蘭鬼の眼前で炎を上げて炸裂した。

辺りにダイナマイトが爆発したような乾燥した爆音が轟いた。

「うぎゃあああ!？」

爆炎が混ざった埃っぽい爆破。炸裂した掌から砂埃が舞い、空気をざらつかせて濁し、空中で焦げ臭い香りを漂わせる。

顔面から煙を上げて転倒した蘭鬼が、両手で紫美面を押さえながらのた打ち回って居る。

お砂の掌から炸裂した砂埃は、その後も彼女の周りを、浮遊するよ
うに飛びながら舞っていた。

蝶の姿で　　。

砂で造られた蝶々だ。

鬼と狼（五）

「お、の、れええええ！」

指の隙間から怒りの眼差しを覗かせる蘭鬼が立ち上がり自ら後ろに跳のくと、迅速に間合いを広げる。

紫色の顔が傷付き赤い流血が、手の下から流れ落ちていた。

余裕の仕草を見せるお砂の周りに、灰色の蝶がヒラヒラと数十匹飛んでいる。

とても怪しい蝶の群れだった。

蘭鬼の眼前で爆発したのは、この蝶々の群れに居た一匹。

ならば、現在お砂の周辺を舞う蝶すべてが、同様に爆発する飛び交う爆弾であろう。そう予想した蘭鬼が灰色蝶の動きに警戒を強める。

一方、空中に投げた昂輝を追って鉦鬼が、膝を屈伸させると全身のバネを利用して真上に飛んだ。

まるでロケットのような垂直ジャンプ。

一っ飛びで50メートル程上空に居た昂輝と並ぶ。

そして、またもやダブルハンマーパンチ。

鉦鬼を昂輝を真下に叩き落とす。

殴りつけられた昂輝の体が急降下して地面に叩きつけられた。

地面にはつきりと分かる人型の大の字を残すと跳ね上がる。そこに鉦鬼が膝から落ちて来た。

片膝でのニードロップ。

二ードロップが昂輝の胴体を捕らえると、地面と膝に挟まれた昂輝が呻きを漏らす。

『ううああああ！』

昂輝の狼口からピンク色の内臓と、真っ赤な吐血が飛び出たが、直ぐに再生力で体内に引っ込んで行く。

しかし立ち上がった鉦鬼が、尚も続いて倒れている昂輝に踵を落とす。

一発二発でなかった。ドスンドスンと重低音が大地に響く。

鉦鬼は、再生を繰り返す昂輝に、これでもかと連続で踵を落とし続けた。

再生力が尽きるまで、ペしゃんこにする積りだ。

昂輝が苦痛を訴えるテレパスと、鉦鬼のストンピング音が絶え間なく響き続ける。

「おのれ、糞女が！」

下品な言葉で罵倒する蘭鬼が、両手を前に突き出してお砂を狙う。その手のひら内には、一本ずつの突起物が生えていた。

「あら、そんなところに角が生えていらっしやるのね」

「これが私の鬼の角！ 喰らいなさい、鬼刻弾丸！」

両掌に生えた角が発射された。

しかも次から次へと生えかわり、サブマシンガンの如く連射を繰り返す。

蘭鬼の乱射にお砂は、灰色蝶たちを操り、自分の前に群がる蝶の壁を築いた。

「なんと!？」

灰色蝶の壁が、蘭鬼の乱射をもとせずに、鈍い音を立てて弾いていた。

蘭鬼が馬鹿な、と、驚きながらも角の乱射を続けて止めない。紙のように薄っぺらな蝶たちが、鉛以上の硬さを有する角の弾丸を弾くのだ、驚きたくもなる。

「そんな薄い壁で、私の鬼刻弾丸を防ぎきれれると思うなよ！」

そう言いながら蘭鬼が、眉間に皺を寄せ術の勢いを強めた。意地である。

力で押し切る積りだ。

「りいああああ！」

だが、一向に蘭鬼の角が灰色蝶々の盾を、打ち破れないでいた。壁が角を弾く音だけが虚しく鳴り響く。

「こちらからも行きますよ」

蝶の壁を間にお砂が述べると、盾を築く蝶の一匹が、ひらひらと優雅に蘭鬼を目指す。

「ひいつ！」

乱射の隙間を縫って飛来した一匹の蝶に、血に染まる紫顔を引きつらせる蘭鬼が、両手の砲撃を慌てて蝶に集中させる。しかし狙いを外した角の弾丸が、空や地面を抉るのみで、飛来した蝶を撃墜できない。

蘭鬼は、一度受けた爆破のダメージを思い出している様子だ。爆破の煤と血に汚れた紫美面に、冷や汗が流れた。

だが遅かった。すでに接近を成功させている蝶は、何の躊躇いもなく倒い姿を自爆させる。

「ふうぎやややー!」

蘭鬼が二発目の爆発を、その身に浴びて飛んで行く。上半身から燻る煙が上がっていた。

「ふんが!？」

再生を繰り返す昂輝を只管に踏み潰していた鉾鬼が、蝶々の爆発音に気付いて女性たちの戦いを見た。

煙を上げながら蘭鬼が、よろよろと立ち上がる。

そこに三匹の灰色蝶が、自爆攻撃を果たす為に舞い迫って行く。

追い討ちを仕掛けられる蘭鬼を見て鉾鬼が、昂輝に続けていた踏み付け攻撃をやめて走り出した。

蘭鬼を守るように、大きな巨体を使って彼女に覆い被さると、鉾鬼の背中で三匹の蝶が連続で自爆した。

三度の爆発音が順々に轟く。

「まあ、結構義理堅いのね。身を挺して仲間を庇うなんて」

灰色に染め替わった髪を、蝶が巻き起こした爆風で揺らすお砂が、
鉾鬼の行動に感心していた。

だが、無情にも追撃の手を休めない。更に爆弾蝶々を差し向けるお砂。

彼女の翳した腕の仕草に合わせて数匹の蝶々が飛んで行く。

「ふっんがー！」

鉾鬼が身を起こして、お砂に向かって走り出した。

黒鬼の猛突進に、差し向けられた蝶々たちが自爆を繰り返し、その突進を食い止めようとする。

しかし爆破の数々を身に受けながらも鉾鬼の突進は止まらなかった。
爆風を蹴散らしながらお砂の前に詰め寄った。

「あらら、接近は不味いわね……」

お砂の笑顔に冷や汗が流れると、彼女の目の前で鉾鬼が踏み込みの足をスピンさせる。

芝生が踵で渦を巻きながら抉れた。

ローキック。

鉾鬼が灰髪のお砂を狙って、下段の蹴りを放った。

お砂は戦っているとは思えない無防備な立ち方で、怒涛の蹴りを正面から待ち構える。避けようとしていない。

「お砂さん!!」

殆ど体の再生が終わった昂輝が、正面からローキックを受け止めようとしていたお砂を見て、慌てた声を上げる。
それとほぼ同時に、鉦鬼の蹴りがお砂を蹴り付けた。

「!?!」

お砂の上半身が蹴りを受けて、木っ端微塵に吹き飛んだ。

「砕けた!?!」

叫ぶ昂輝には、そう見えた。

しかし砕け散った肉片が、色をなくし塵と化して崩れ落ちて行く。
砂に変わる。

「代わり身の術か!?!」

未だダメージに横たわる蘭鬼が、砕け崩れた砂の塊を見て悔しそうに怒鳴った。

長い爪を芝生に食い込ませる。

「その通りですわ」

お砂の声は、まったく別の場所から聞こえてきた。

大塚底の一階ベランダ。隣には悶絶しながら気を失い続ける家主の剛三が居り、そのよこにお砂がのんびりと腰を下ろして居た。まるで日向ぼっこをしながら、お茶を啜っていたかのように和んでいる。

「最初から私は、此処から一步も動いていませんでしたのよ」

その台詞の通り、本当に一步も動いていない。ずっと、のんびりと昂輝の戦いっぷりを、此处で眺めていた。

そして砂で造った傀儡を差し向け、遠隔操作で攻撃を行っていたのだ。

偽お砂の碎けた砂屑が蝶々に替わり地面から舞い上がると、鉦鬼の周辺を、ひらひらと優雅に飛び回る。

蝶の数は、ゆうに100匹を越えていた。

周りを飛び回ると言うよりも、群がると表現できた。

「鉦鬼！！」

仲間の鬼が自爆蝶々に囲まれるのを見て、思わず声を荒立てる蘭鬼。自分が受けた爆破の威力を思い出し、困惑に声を大きく鉦鬼の名を呼んだ。

あれだけの蝶の数が、一斉に爆発してしまつたらと戦慄を想像する。

鉦鬼は、ただ蝶に囲まれきよるきよるしているばかりだ。

蝶に触れれば爆発するのではないかと思い、派手に動けないでいた。

「これで、終わりです」

ベランダに腰を下ろしたまま笑顔で言うお砂が、自分の首を親指でカツ斬り、その後に親指を下に突き向ける。

なんとアメリカンなポーズがお砂のイメージと異なり違和感を強く感じるが、親指で地を指すワイルドなモーションと同時に、鉦鬼を取り囲んでいた蝶々の群れが一斉に自爆を開始した。

次々と続く爆発音。空気が小刻みに震え、連続の衝撃をあたりに散らす。

途轍もなくダイナミックだった。

鉱鬼の巨躯が無数の爆破で飛び散った噴煙で包まれると、まったく見えなくなる。

「凄い、やったか！」

派手な爆破作業に、昂輝が驚きながらも感心していた。

流石の巨大黒鬼だろうとも、これだけの火力を全方向から一斉に浴びれば絶命は免れまいと予想していた。

万一、生きていたとしても、まず動けないだろうと思う。

暫くして、爆発で立ち込めた煙や埃が静まり、視界が鮮明になっていく。

そこに姿を現す黒い巨躯。

「バカな……」

昂輝が驚きの声を漏らす。

無数の爆破を全身に浴びた筈の鉱鬼は、それでも立っていた。

昂輝が、己の不死身を柵に上げながら鉱鬼のタフネスを驚いた表情で見ている。驚愕に動きを止めていた。

「あらあら」

お砂が笑顔のまま眉毛の角度だけで困った表情を見せていた。その声色には、まだまだ余裕が感じられた。

「ぐるるうううう」

一斉爆破攻撃を受けた鉦鬼は、ところどころ火傷程度の負傷を受けている。だが致命傷と呼べるほどのダメージは、何処にも受けていない様子だった。

続く戦闘の妨げになる大きなダメージは、零に見える。

「ううううががあああああ！！！」

煙の中から姿を現した鉦鬼が、気合を入れるための雄叫びを天に向かって吠え立てた。
咆哮が天の星々を脅す。

「あらら、なんて丈夫な造りをしているのかしら……」

笑顔に呆れを浮かべるお砂が、ゆったりと立ち上がる。

傀儡の分身ではなく、ついに自らが鬼と対する様子だ。

彼女の周りにザラ付いた砂嵐が巻き起こると、純白の衣装と灰色髪が彼女の笑みとは裏腹に激しく靡き威嚇を強める。

『お砂さんが、本気に……』

巻き起こる砂嵐の規模が彼女の本気を、眩く昂輝に悟らせていた。
竜巻の勢いに、昂輝の心までもが飲み込まれていく。

鬼と狼（六）

お砂と鉦鬼が睨み合う。

お砂が巻き起こす砂嵐の中、彼女の頭上で何かが砂によって形作られて行く。

「大きい、あれは大きすぎる！」

火傷に身形を焦がした蘭鬼が、砂嵐の中で作り上げられる物を見て、怖気付いた表情で声を出しながら立ち上がる。

そしてダメージに震える足取りで、ジリジリと後退りを始めた。

砂嵐の中で作られる物。

その姿は、巨大な灰色蝶が一匹。

左右の翅を広げたのならば、4メートル程あるだろう。

『あれが、先程の蝶たちと同じ攻撃方法を取るのなら……』

昂輝にも予想できた。

あれは、巨大な蝶型爆弾。

ならば、先程の小型蝶爆弾と比較して、その破壊力は、何倍、何十倍、何百倍に相当するのだろうと見当も付かず肝を冷やす。

あの砂には、ニトログリセリンを染み込ませた珪藻土と同じ破壊力が、ダイナマイトと同じ威力があるであろう。

現在作られている巨大蝶が自爆したのならば、敵の大鬼どころかこの屋敷ごと吹き飛ばすのではないかと想像できた。

『お砂さん、それはダメです！』

危険を予想した昂輝が、砂嵐の突風に耐えながら、気を失っている剛三の元へ走り出す。

万が一に備えて、剛三を避難させる積りだ。老人の体を軽々と抱え上げ、素早く遠くへ退避する。

「私にもヴァルハラ探偵事務所のプライドがあるのよ。鬼や妖怪に、遅れを取ってはいただけません」

砂嵐が止むと、巨大自爆蝶が完成を遂げていた。お砂の頭上で翅を羽ばたかせる巨大自爆蝶。しかし煽る翅から風は感じられない。

「まるごと吹き飛ばしてあげるわ」

お砂が微笑むと巨大自爆蝶が鉦鬼を目指して飛んで行く。

待ち構える鉦鬼が、大きく右拳を振りかぶる。拳で対抗する様子だ。黒い筋肉に血管を浮かべ攻撃に体が捻られると、鬼面に気合と気迫が溢れ、全身に流れこんでいく。

「うううがー！ー！」

黒拳を放つ鉦鬼。

巨大自爆蝶と鬼の拳が激突しながら接触した。それが点火の合図となる。

巨大自爆蝶が、大爆発をした。

『お砂さん！』

昂輝がテレパスで叫ぶ。

だが、爆破の爆風が押し寄せ、それすら微塵も残さず掻き消していた。

周囲に広がる爆音。

まずは音速の壁を突き破りながらショックウェーブが広がり、後にワントンポ遅れて衝撃波が辺りの物を薙ぎ倒さす。

そして荒くれる爆風がバラバラと小さな物から大きな物へと順々に吹き飛ばしていった。

植木が倒れ、屋根瓦が剥ぎ取られ、崩れかけていた物置小屋を完全に倒壊する。

更に爆風は大塚邸全体を激しく揺らし、ガラスというガラスを吹き割り、古風な土壁に無数の亀裂を走らせる。

古い造りの屋敷が悲鳴を上げながら、ぐらりと傾く。

剛三を抱えた昂輝が、爆破の衝撃から逃れるように屋敷の敷地外へと飛んで避難する。その昂輝の体を更に爆風が煽り遠くへ弾いた。

『くうっ！』

全身に浴びた衝撃波の振動は、凄いものだった。

発声をテレパスへと替えて昂輝が、僅かな言葉を漏らして飛んで行く。

大塚邸の敷地内に巨大な入道雲のような噴煙が舞い上がりお砂の視界を隠した。

昂輝は、近くの路上に着地すると、その景色を見上げて啞然と動きを静止させていた。辺りにバラバラと吹き飛ばされた瓦礫や小石が降って来る。

お砂は噴煙の中から再び砂嵐を巻き起こすと、視界を奪っていた砂埃を掻き消す。

直ぐに視界が復活するが、そこには巨大な黒鬼の姿は無かった。紫鬼女の姿も見えない。

木っ端微塵に吹き飛んだ訳ではないだろうと思ひ、お砂が不機嫌そうに笑みを現す。

「逃げられましたか」

姿を消した二匹の鬼。

戦闘機に爆撃を受けた民家のように荒れ果てた大塚邸をお砂が見回すが、既に鬼たちの姿は見えなくなっていた。

何時、何処に逃げたのすら分からない。

彼女の述べたとおり、巨大蝶の自爆と同時に逃げ去った様子だった。

しかしながら相当量の自爆ダメージは受けている筈。今使った術に對して、それだけの威力があると、お砂も自信があった。

剛三を避難させた昂輝が、崩れた正門を通って庭園ないに入ってくる。

昂輝も荒れ果てた辺りを見回しながらお砂の元へと近寄って行った。剛三が目を覚まして、この状況を見たのならば絶句するだろうと想像しながら。

『鬼たちは……？』

「逃げた様子ね」

『そうですか……』

「でも、かなりの痛手を与えた筈。幾ら鬼の類でも数日はまともに動けなくなるでしょうね」

お砂の言葉を聞きながら昂輝が、牙を悔しそうに噛締める。出来ることならば、あの鬼たちを今のうちに討ち取りたかった。間違っても町へ降ろしたくないのだ。

被害者の一人も出したくないのだ。

昂輝が狼面に悔しさを見せていると、統一感のない可笑しい姿へと変身している憑き姫が、いつものように薄い表情で空から舞い降りて来た。

「あら、憑き姫ちゃん、おかえり」

「ただいま」

『ネコミミ！？』

いつもの戦闘衣装である巫女服に加え、猫耳に尻尾、それに蝙蝠の羽を生やした憑き姫を見た昂輝が、興奮を隠さずに声を上げた。鼻息が荒い。

「やっぱりこっちにも鬼が来ていたのね」

「ええ、そうなの、逃げちゃったけどね」

「逃げた……？」

「ええ、仕留められなかったわ」

「ふーん」

笑顔で会話するお砂に対して、憑き姫は鬼が逃げたことに詰まらな
そうな言葉を返した。

「じゃあ、私は軒太郎のところに戻るわ。向こうも別の鬼と交戦中
なの」

『別の鬼！？』

昂輝が憑き姫の話に反応を見せた。

「ええ、どうやら鬼の数は、全部で五匹いるようすね」

『あの大きな鬼と鬼女のほかに、まだ三匹いるのですか！』

「ええ、だから魂を狩に戻るは、私」

そう言い蝙蝠の羽で舞い上がる憑き姫。それを追う様に昂輝が声を
飛ばす。

『憑き姫、僕も行く。連れてってくれ！？』

「断るわ」

『えーーーーー……………』

「重いし、邪魔だし、埃っぽいから私一人で戻るわ」

『そ、そうですか……………』

上空に舞う憑き姫の言葉に、昂輝が見上げていた顔を下げた。しかし俯いた昂輝の顔が、何故か赤く照れくさそうにしていた。上から見下ろしている憑き姫にはそれも分からず、ただ落胆に頂垂れている様子にしか見えなかった。

そして再び戦いの場に帰還する為に憑き姫が、蝙蝠の羽をバタつかせ闇夜に飛び去って行く。

昂輝とお砂の二人が憑き姫を見送った。

そしてお砂が、俯いた顔を赤らめる昂輝に言った。

「昂輝君、見たわね」

『な、何を、何をですか！』

赤面させたままの顔を上げる昂輝は、テレパシーをどもらせ照れを隠すように狼狽を見せていた。

しかしお砂には、見事に感づかれている。

「仕方ないわよね。無防備な憑き姫ちゃんが悪いんだから。でも覗きは良くないわよ、昂輝君。

相手はまだ幼い乙女なんだから」

『の、覗いていませんよ、お砂さん！』

上空に舞う憑き姫を見上げていた昂輝には、彼女が身につけていた巫女服の袴から、内部がはっきりと見えていた。

狼男の能力で、闇夜に視力が強化された影響だ。袴の中の闇すら見通せる。

『の、覗いた訳じゃあないんですよ、見えちゃったただけなんですよ
』

お砂にからかうよう誘われた昂輝が、狼狽を続けながら言い訳を繰り返すと、狼男の姿から人間の姿に戻る。

人間に戻った昂輝の成熟しきっていない表情は、真っ赤に変わり頭から湯気が出そうであった。

その初々しい仕草の昂輝に、お砂が垂れ目で軟らかく微笑んでいた。

しばらく経つと、大塚邸の敷地外から物々しい声が聞こえてきた。

爆発音を聞きつけた町の人々が集まってきた様子である。

そのざわめきを耳にした昂輝は、少々厄介なことになりそうだと辺りの荒れ果てた光景を眺めながら思う。

これでまた自分は、町の厄介者と言われるのであろうと……。

軒太郎 vs 龍鬼 (前編)

戦いのシーンは、山中の廃道トンネル前に戻る。

軒太郎と鬼二匹、それにスケルトンファイターズが激しく攻防を繰り広げていた。

炎が燃え上がり、武器と武器が弾け合う甲高い音が、薄気味悪いトンネル前で鳴り響く。

未だに燃え盛る車が辺りをオレンジ色に照らし上げていた。

「しゃややああああー！」

威嚇を見せる毒蛇のような声を上げる蛇鬼が、真っ直ぐに突き立てた合口の切っ先は、骸骨兵の眉間を無残にも貫く。

刀身が髑髏の顔面を砕き散らすと、バランスを失い骸骨兵が骨と鎧の音を立てながら崩れ落ちて行く。

そして崩れた骨も武器も霧となって消えていった。

「あと二匹ー！」

八体目を打ち砕いた蛇鬼が、雑兵の残りを数えながら次の骸骨兵と剣を交える。

「じゃっー！」

蛇鬼の合口と骸骨兵のショートソードが、耳障りな金属音を響かせ交じり合うと、刀と剣が火花を散らす。

「喰らえ、足軽！」

一方、敵を嘲りながら赤鬼の龍鬼が、炎を纏う拳を骸骨兵の一体に振るった。

大振りの右フックが力任せに打ち込まれ、骸骨兵が持つカイトシールドを叩くと、業火を膨らませながら骸骨の全身を包む。

業火の灼熱を横から浴びた骸骨兵は、構えた盾の意味もなく上半身を焼き払われ蒸発していく。

炎拳が盾を溶かし、陰に隠れていた骸骨兵を鎧ごと襲ったのだ。

龍鬼に焼かれた骸骨兵の下半身が霧となって消えて行くとほぼ同時に、最後の骸骨兵の首を蛇鬼が、横一文字に斬り落とすところだった。

転がった髑髏の頭部と鱗鎧を着た胴体が魔力を失い消えて行く。

これで憑き姫が残っていた十体の骸骨兵スケルトンアーミーが全滅した。

残るは大将、三外軒太郎一人。

「おいおい、随分と時間が掛かりすぎじゃあないか？」

暗夜と同じ黒衣の軒太郎が、忌々しく嘲る。実にふてぶてしい。

「なんだとお！」

「たかが雑魚の歩兵十体相手に、時間が掛かりすぎだって言ってるんだよ」

鬼たちを誇る軒太郎。黒衣に包まれた表情が、余裕の狂気を見せな

がら笑っていた。邪悪さに空気が濁っていく。

そして黒コートの懐から両手で引き抜かれるシルバーメッタリックのホルト・バイソンが二丁。

今宵の軒太郎は、トゥーハンズを気取っている。

両手に輝く銀色のフレームと口元の白い歯が、漆黒の黒衣に栄えていた。

軒太郎の瞳が、二匹の獲物を前に強欲のままランランと煌く。

鬼の屍を欲していた。

「二対一、文句はねえ〜わな〜、大将よ」

両手に赤い炎を燃やす龍鬼が言う。

戦闘不能に近いイゴールは、少し離れたところで片膝を付いて見ているだけだった。加戦する気配はない。完全に観戦気分が伝わって来る。

ゆっくりとした動きで軒太郎が、両手のリボルバーを構えると、力チャリと僅かな音が鳴った。

「御託はいいから、掛かって来いよ、小鬼ども」

狂気の笑みで鬼たちの誇りを嘲り煽る言葉が、わざとらしく放たれた。

罵倒を浴びた蛇鬼の額に冷静な感情を崩壊させる青筋が稲光の如く浮かび上がる。

「蛇走り、しゃあああああー!」

軒太郎の挑発に乗って、我先に蛇鬼が動いた。

己の残像を引き連れながら移動する蛇鬼の歩方術。素早く幻惑な動きだった。

蛇が体を左右に唸らせながら前進するような不思議な移動。あつという間に軒太郎に接近を成功させ、合口を振り上げた刹那、二丁拳銃が火を噴いた。

「なに！？」

残念なことに蛇鬼は、拳銃という武器を知らない時代の妖怪だ。大岩に封印されて、人間が進化させた武具の歴史を知らないのだ。火縄銃すら見たことがない。

蛇鬼は、眼前で火を噴いた二丁拳銃に驚きながらもギリギリのところで身を擦じらせ弾丸を回避した。しかし指弾丸の一発が額を掠めて皮膚を抉る。

「きいえええええ！」

悲鳴を上げながらも蛇走りを使用して後退する蛇鬼は、指弾丸で抉られた額を押さえていた。額から流れ落ちた鮮血が目元から頬に流れ落ちると、血の涙を流しているように見える。顔は怒りに満ちていた。

「どけい、蛇鬼！」

龍鬼の怒鳴り声に蛇鬼が横へと逸れた。

右手の炎を更に膨らませる龍鬼。

「喰らえ、火炎鬼砲！」

軒太郎との距離は、10メートルはあった。

龍鬼の燃え盛る炎拳が、正拳突きで虚空を殴る。すると正拳から放たれた炎の塊が、弾丸と化して飛んで行く。

まさに火球、ファイヤーボールといえた。業火の攻撃が、軒太郎を狙う。

「おっと」

軒太郎は身を横に向けると、黒コートの襟を立てて顔を隠す。

その軒太郎に龍鬼が放った火球が命中して爆炎をキノコ雲のように舞い上げた。

しかしガードを行なった鉄の盾ごと骸骨兵を蒸発させる程の火力を持った龍鬼の炎に包まれた軒太郎は、それでも燃え盛る炎の中に蒸発することなく立っていた。

「馬鹿な!?!」

蛇鬼が驚き声を漏らした。

龍鬼は、ただ業火内のシルエットを凜と睨んでいる。

900度の業火内で、涼しそうに振舞い余裕の薄ら笑いを見せていた軒太郎が、ゆっくりと前に歩き出して燃え盛る火炎の中から歩み出る。

「何故、消し炭にならない！」

龍鬼が疑問を怒鳴る。

己の作り出した火力に龍鬼は、絶対的な自信を持っていた。その炎を容易く耐え凌がれたことが信じられなかった。

「この黒いロングコートは、絶滅した幽霊族の生娘たちの髪を結って造られた代物でな。

その妖気の量は、900度ぐらいで焼くことも焦がすことも不可能だ」

「なんだとお！」

「ならば、斬る！」

合口を構え蛇走りで再挑戦する蛇鬼が、ジグザクに走り込む。

「そうは行くか」

軒太郎の二丁拳銃が、右、左と交互に火を噴く。

しかし指鉄砲の弾丸は、一発も命中しない。蛇走りが映し出す残像を貫くばかりだった。

「今度こそ、斬っ！」

接近に成功した蛇鬼の合口が軒太郎に迫る。軒太郎は右腕を曲げて肘で刀身を受け止めた。

軒太郎と腕と蛇鬼の合口が接触すると、トマトでもスライスするように合口が振りきられる。

「何故だ！」

合口の刃を伝わり手に届く不自然な感触に、蛇鬼が不審を言葉に代えて声を出す。

手応えの違和感に蛇鬼は、斬り付けた筈の軒太郎の腕を見た。しかし軒太郎の腕は、斬れてなかった。腕どころでない。黒コートの袖すら切れていない。

確かに斬ったと驚いている蛇鬼に、二丁の銃口が向けられ火を放つ。銃口は、目と鼻の先だった。

轟く発砲音。

回避を試みる蛇鬼。しかし躲しきれない。

一発は右頬を掠め、一発は左肩を貫いた。

「きゃっ！」

苦痛を漏らす蛇鬼へ、更に軒太郎の蹴りが跳ねる。爪先が蛇鬼の顎を蹴り上げ細身の体を弾き飛ばした。

顔や肩から鮮血を散らす蛇鬼が、ゴロゴロと廃道に転がった。

「このコートは耐火性だけじゃなく、ありとあらゆる攻撃に対して有効だね。

炎、冷気、電撃、衝撃、斬激、すべてに絶対的な防御力を有している。

凄いだろっ」

確かに鬼共は、驚きを見せていた。

語る軒太郎の表情は、何とも自慢そうだった。

この世のすべてを見下すように嘲笑っている。シルバーメッキのコ

ルト・パイソンが、銃口から硝煙を漂わせながら、その不敵な軒太郎を飾っていた。
火薬の香りすら邪悪に感じる。

額と右頬から血を流し、撃ち貫かれた肩を手で押さえる蛇鬼が、ふらふらと立ち上がる。

受けた傷の痛みか、流血によるせいかわ、霞む眼差しで蛇鬼は、黒衣の敵を睨んでいた。

明らかに軒太郎の指鉄砲が効果を発揮していた。弾丸よるダメージのほかに、鬼の妖気を削り取っている様子である。

指鉄砲には、そのような効果もあるのだ。

伊達に妖怪変化の指から作り出された弾丸ではない。コルト・パイソンの輝きも礼拝堂から失敬してきた銀のロザリオで加工したものだ。

地獄出身の鬼たちには、酷で厳しい武器である。

「蛇鬼、オメーはもういい、引っ込んでいろ！」

「ですがあ！？」

「蛇鬼！！！」

「くろう……。へい、兄貴、承知しました……」

龍鬼の一喝に、蛇鬼が渋々従う。蛇鬼にとって兄貴分の命令は絶対だった。

悔しそうな表情を血に染めながら蛇鬼が後退して、龍鬼の背後に大

人しく回る。

「なるほど、黒いの。一人で戦うって言う自信は、嘘じゃあなかったんだな」

「私は嘘を平気で付く人間だが、先程述べたことは嘘じゃない。本気の本気だ。

お前らのような時代遅れの小鬼を二匹相手にするぐらい、一人で十分すぎて御釣りが貰えるぐらいだぜ」

龍鬼のこめかみに、血管が浮かび上がる。

言わせておけばと心が憤怒に震えて、燃える拳が誇る口を塞いでやるうと力強く握り締められた。

「自信過剰も限度を知れよ、人間！」

怒りを爆発させた龍鬼が、感情的に大地を蹴り前へと跳ねた。

猛る思いに握り締められた双拳は、灼熱の炎を更に強めている。

近くで燃え続けるスカイラインよりも熱気は、激しくも強く感じられた。

「自信があつてこそ人間だ！ 傲慢こそ欲のひとつだ！！」

よく分からない自論を唱えながら両手のパイゾンを乱射する為に軒太郎が、容赦なく銀色のトリガーを引きまくる。

シリンダーに残るすべての指弾丸を発砲した。

しかし魔道の指弾丸は、龍鬼が翳す火炎の双拳が受け止め蒸発させていった。

ジュツ、ジュツ、と、熱しられたフライパンに水滴を垂らしたよう

な音が軒太郎の耳にも届く。

「ほう、やるな」

「この炎が俺様の自慢でなあ！」

飛び掛る龍鬼に弾丸を防がれた軒太郎は、両手にある拳銃を手放して地面に落とす。

すると銀色の拳銃は、地面に跳ねることなく軒太郎の影に突き刺さり、ゆっくりと地面の中に沈むように消えて行く。

そして軒太郎は、空になった手を握り締めて拳を作るとボクサーを真似たファイティングポーズを構えた。

脇を締め、両拳が顔の前である。コンパクトな構えと帽子の隙間から、鋭い眼光が飛び来る龍鬼を窺う。

隙がない。

油断の欠片もない構えだった。

黒衣に攻め込む隙間が見当たらない。

「おらあ！」

それでも飛び掛った龍鬼が、打ち下ろしのファイヤーパンチを繰り出してきた。

隙が無ければ無理矢理にも作り出す積りだ。

軒太郎はその燃え盛る拳を横振りの肘鉄で受け止める。

肘と拳が激突して、生身とは思えない音を鳴らし、炎を火の粉に変えて鮮やかに散らす。

美しい炎の花が、刹那に咲き誇り舞い散るようだった。

しかし、その花は男の魂が宿った塊。散りゆく瞬間、二人の前進に衝撃が走って轟く。

更に続く二手目の攻防。

龍鬼が、着地と同時に逆の炎拳をアッパーで繰り出す。その炎拳に軒太郎は、打ち下ろしのエルボーを合わせた。気合が声となる。

「ぜえあああ！」

「ふうん！」

ぶつかり合い、弾き合う二人の一撃。

またしても肉体が激突したとは思えない音が激しく響くと龍鬼の体が後ろによろめき下がり、軒太郎の体が仰け反り跳ねる。

弾き、弾かれた二人が間合いを離す。

二度にわたる二人の激突に、両者が崩れた体制を取り直すと、構えも取らず脱力が見える素振りの立ちかたで、余裕の笑みを見せていた。

爽快な相打ちに龍鬼の憤怒が消えて薄い笑みを見せている。

たった二手の攻防で龍鬼は、外道の様に見える軒太郎の中に、雄の猛りを見出した。

その雄度に魅入られる。

「ちつとはやるな、人間」

「お前こそな、鬼野郎」

軒太郎もまた、小鬼から鬼野郎へと龍鬼の評価を訂正していた。ただの獲物から、狩るだけの価値があると思ひ直す。

あの角も、赤い生皮も、太そうな骨も、きつと良い武器の材料になると、それだけの妖力を秘めていると心の中で垂涎していた。

離れた場所から二人の攻防を窺っていたイゴールが呟いた。

「あの二人は、高校生の不良ですか？ 殴り合いに臭い青春の香りが漂っています。」

でも、おーもーしーろーそー」

軒太郎 vs 龍鬼 (中編)

軒太郎が黒コートの内ポケットから皮手袋を取り出す。乾いてくすんだ血痕のような赤い皮手袋だった。その深みの有る赤が険悪に映る。

「火取り魔って妖怪を知っているかい？」

赤い手袋を嵌めながら軒太郎が、唐突に言った。龍鬼は、何を言い出すのかと顔を顰める。

「知らねえな」

「ふっ、無知だ」

「余計なお世話だ！」

皮手袋を嵌めた軒太郎が、両手を開いたり閉じたりして装着した手袋のフィット感を確認しながら話を続けた。

「この手袋は、その火取り魔って妖怪の脛の皮を剥ぎ取って作ってあってな お前さんには酷な武器だぜ」

軒太郎がニヤリと頬を釣り上げて笑う。白い歯と鋭い瞳がキラキラと怪しく輝いていた。

「……どんな風に酷だっって言っんだい？」

「これから味わって確かめな」

ギユツと音が鳴るほど強く赤い皮手袋を握り締めた軒太郎が、闘争心溢れるボクシングの構えを取った。僅かに背を丸めて腰を落としたインファイターの構え。赤い皮手袋がボクシングのグローブよりも殺伐と見えた。

「おもしれーや！ やってやるぜ！！」

両手を広げ、胸を張りながら吼える龍鬼が、掌内に炎を揺らめかせる。軒太郎の赤い皮手袋よりも赤さを際立たせていた。赤いと言うテーマで、赤鬼の龍鬼が遅れを取るわけには行かないようだ。

鬼面に青筋が走り、全身の筋肉が膨れ上がると、内側に秘めていた妖気が熱風と共に放出された。

真っ赤なフライドも一緒に燃え上がる。

「うがああああ！」

獣の如く叫んだ龍鬼が仕掛けた。

両手の炎を巨大な弾丸に変えて発射する。

唸る炎の球体が軒太郎に迫るが、軒太郎は両掌を前に広げて火球を受け止める。

すると火球はうねりを弱め徐々に小さくなって消えていった。

否、消えたと表現するよりも、まるで赤い皮手袋に吸い込まれるように見えた。

炎を飲み込み軒太郎が自慢げに失笑していた。

「火取り魔ってのは、石川県加賀市に在るこおろぎ橋の周辺に現れ

る妖怪でな、提灯の火を吸い取るって言われているんだ。この皮手袋は、その火取り魔の骸から作られている。ちなみに新潟県の三条市にも火取り魔の言い伝えが残るが、そっちの正体は砂撒きイタチらしい。機会があったらそいつも狩りたいもんだぜ」

「うんちくが無駄に長いです。そんなの誰も聞いてないのに」

イゴールが笑顔で囁く言葉は、幸いにも軒太郎の耳には届いていない。

軒太郎は、気分を害す事無く戦闘を続ける。

「なるほど、その手袋が俺様の炎を吸い取ったってわけか。だが、俺様の業火を提灯の灯りと一緒にするんじゃないぞ！」

「俺にとっては同じだ」

龍鬼の表情が凄みを増す。

両手の炎の勢いも音を立てて増していた。

火炎そのものが、荒々しい心中の猛りを表現している。

「しかし――！」

龍鬼が拳を握り前に攻め出た。炎を固めて突き進む。

「皮手とコート、そのふたつで俺様の業火を無効化したと自惚れるなよ！ むき出しの顔面をぶん殴って焼き殺してやるぞお！！」

「できるかな！？」

軒太郎も前にダッシュした。強い震脚から右ストレートパンチが、突進してくる龍鬼の顔面を狙って繰り出される。カウンターを狙っていた。赤い皮手袋が螺旋を渦巻きながら真っ直ぐ伸びると、赤と黒が混ざり合う。

しかし、龍鬼が素早く回避を行い、ストレートの下をくぐり抜け軒太郎の懐に潜り込んだ。

180センチある筋肉質の巨体が、軒太郎の懐の前で丸まりながら、スピーディーにスピンを始める。

躲かれた！

攻撃が来る！

畜生！

「ちっ！」

ストレートパンチを躲された軒太郎が舌打ちを溢した刹那、スピンをさせる筋肉ダルマから右のボディーフックが打ちこまれた。重い衝撃が軒太郎を襲った。

燃え盛る拳が黒コートの上から軒太郎の脇腹を攻める。

「ぐふっ！」

舌打ちの直後に呻きを漏らす軒太郎に対して、更に左の炎拳がボディーフックとなり容赦無く打ち込まれた。

「うぐっ！」

またもやボディーへのフックが決まった。
臓物が左右に揺れて横隔膜をせり上げる。

呼吸が出来ない！

苦しい！

むかつく！

酸素の補給という、寝ていても自動的に行なわれる作業が出来なかった。

苦しい表情を見せる軒太郎。

二発のブローは、確実に効いていた。

しかし直ぐに軒太郎も反撃に移る。

上からのエルボースタンプ。

振り落とされた肘鉄の先が牙の如く、屈んでいる龍鬼の後頭部を狙い襲い掛かる。

「うおっ！」

急降下してきた肘鉄が、骨でも粉碎するような音を立てながら龍鬼の延髄を激しく叩いた。

背を丸めて超接近戦を試みていた龍鬼の膝が、衝撃に耐え切れずに僅かに曲ると、攻撃の手も止まった。

明らかに効いている様子だ。

そこに軒太郎が後方まで振り被っていた赤い拳を、全力の一撃に変えて打ち込んでいった。

フックとアッパーの中間ぐらいの位置を、拳が弧を描いて飛んで行

く。

「ぜえっいー！」

軒太郎の気合が声となり、赤い皮手袋を嵌めた拳が龍鬼の顔面を叩く。

拳の直撃を受けた龍鬼が、鼻血を撒き散らしながら後方に下がた。強く瞑った瞼には、激痛の為に涙が滲んでいる。

逃がすまいと直ぐに追う軒太郎。その追跡をよしとしない龍鬼が燃える拳を前に突き放つ。

バックステップからのストレートパンチが、追いかけて来た軒太郎の顔を狙う。

しかし今度は軒太郎がストレートの下をくぐり抜けて、龍鬼の右に回りこむ。

「畜生！」

ストレートを繰り出したモーションのまま愚痴る龍鬼の右側から、肉団子のような筋肉質な肩を越えて軒太郎の拳が滑り込んできた。そして龍鬼のこめかみに重く減り込む。

鉄のハンマーで殴り付けられたような衝撃が、赤い拳から流し込まれると、龍鬼の視界がグラリと大きく横に揺れて、屈辱的な眩暈を呼び寄せる。

続いてアッパーカット。

今度はストレートに伸ばしていた太い右腕の下を抜けて拳が顎を叩

く。

龍鬼の下顎が上顎に激突して、視界が縦に激しく揺らした。

「うううがあああ……」

左右の衝撃と上下の衝撃が、龍鬼を窮地に追い込むだけのダメージを与えていた。

回転する視線が虚空を泳ぐ。

龍鬼は、何を見ているのかも判らないまま、小さな呻きを漏らしていた。

軒太郎の右フックと左アッパーのコンビネーションが炸裂して、龍鬼は世界を縦横に揺らされた効果で、酔いどれの如く足元をふらつかせていた。

その様子を見て軒太郎が、意地悪く再び嘲る言葉を掛ける。

「どつした鬼野郎、こんなものか!？」

更に飛んで行く軒太郎の蹴り。

黒い革靴の先が、引き締まった龍鬼の腹筋に突き刺さった。

「ぐうあああ!」

溜まらずに声を漏らしながら大きく後退する龍鬼が、両手の炎を闇雲に撒き散らす。

弾幕の積りなのだろう。

だが、軒太郎が火取り魔の皮手袋を使い、炎の弾幕を掻き消しながら更に追い、逃がすまいと攻め立てる。

「いくぜ！」

軒太郎の一方的な猛攻がスタートした。

素早いジャブが鼻を潰し、ローキックが脛を鞭の如く叩く。

フックが頬を捉え、膝蹴りが脇腹に減り込む。

肘鉄が胸に突き刺さり、掌底が顎を突き上げる。

スナップを利かせた裏拳がこめかみに炸裂して、大きく振るわれた上段廻し蹴りが頭を跳ね飛ばす。

軒太郎の打撃技は、まだまだ続いた。止まらない。

「おらおらおらおらおら！！！」

滅多打ちと言えた。

軒太郎 vs 龍鬼 (後編)

龍鬼の赤い鬼面が、どんどんと繰り出される攻撃に腫れ上がっていき。

血と汗が苦悶の声に混ざり合いながら打撃に弾ける。

「ぐうう……」

軒太郎の拳による打撃技は、龍鬼にダメージを蓄積させ体力を消耗させるだけであらず、熱い炎の妖気すらも削り取るように吸い取っていた。

火取り魔の能力だ。

軒太郎が述べた通り、炎属性の妖気を持つ龍鬼には、酷な武器である。

軒太郎の猛攻が続く中、一瞬だが攻撃が緩んだ。打たれながらも龍鬼は、それを見逃さなかった。

反撃のチャンス。

「おのれえええ！」

隙を見逃さずに龍鬼が拳を返そうとした刹那、眼前に見えたものは黒いコートの背中。

灰色の長い髪がサラリと揺れていた。

龍鬼の拳が一瞬の戸惑いに制止する。

何故に背中を向けているのかと躊躇いを見せた。

しかし龍鬼の戸惑いを誘った軒太郎の行動は、ただの罠。トラップである。背を向けた軒太郎の後ろ蹴りが真下から跳ね上がり、呆けている龍鬼の股間に滑り込む。

金的。

もしもテレビの編集で効果音を付けるとしたのならば、間違いなくこの場に「キーン」といった効果音が組み込まれるだろう。

「あああああああああううう!!」

軒太郎の踵が龍鬼の股間を蹴り上げると、龍鬼が切ない絶叫を上げながら跳ね上がる。

そして股間を両手で押さえながら地面に倒れこむ。なんとも無様だった。

「鬼でもタマタマはちゃんと付いているんだな」

肩越しに後ろを見る軒太郎が、背後の地面でのた打ち回る龍鬼を嘲る。

男性特有の痛みに悶絶を打つ龍鬼は、声にならない声を漏らしながら大きく口を開き、眉間に複数の皺を寄せていた。

「遊びは終わりだ」

そう言いながら踵を振り上げる軒太郎。

蹴りで止めを刺す積りらしい。

ブーツの裏が、龍鬼の頭部を狙っていた。

「兄貴！！」

軒太郎の様子を見て蛇鬼が飛び出した。もう見てもらえない。

蛇走りが一瞬で間合いを縮める。しかし軒太郎が素早い横蹴りを繰り出しカウンターを合わせた。

軒太郎の足刀が蛇鬼の顎先を綺麗に捉え、激しく蛇鬼の頭部を揺らした。

横蹴りの衝撃に脳が激しくシェイクされる。

蛇鬼の左右に揺れた脳が、頭蓋骨の内側に何度も激突して脳震盪を誘うと、蛇鬼が紐を切られた操り人形のように力無く崩れ落ちた。完全に白目を向いている。

鬼とて体の基本的な造りは、人間と大差なく変わらない様子だ。

金玉を蹴り上げられれば絶叫してのた打ち回るし、脳を揺すられれば脳震盪も起こす。

「おのれええ……」

股間を押さえながら未だに立ち上がることにすら出来ない龍鬼が、赤い顔に脂汗を流しながら悔しさを呟く。

完全に二匹の鬼たちは、手玉に取られていた。

現代の退魔師にとって普通の鬼なんぞ、当の昔に対策が打たれていない。

対鬼用の研究は、とっくの昔に終わっているのだ。

今回現れた五色鬼は、遙か昔の地方で暴れていた小者にしか過ぎない。
大きな都でブイブイ言わせていた一流の妖怪変化ならまだ知らず、一線で活躍できずに地方に下った鬼なんぞ、正直なところ軒太郎のレベルなら、たかが知れているのだ。

「さて、息の根を止めようか」

気を取り直し軒太郎が、改めて止めを刺そうと脚を振り上げる。ストッピングで踏み殺す積りだ。

だが、またしても邪魔が近づいて来る気配を感じ取った。黒いデンガロンハットのつば越しに空を見上げる。闇夜に紛れて殺気が近づいて来ていた。

「ん？」

暗夜を背後に黒く大きな人影が飛んできた。

「デカイな、なんだ？」

「これでも喰らいなさい！」

巨躯の首にしがみ付く女の影が、片手を向けて何かを乱射してきた。軒太郎は素早く跳ねのき弾丸を躲す。鋭い銃弾のような物が、跳ねのいた地面を抉り複数の穴を開けていた。

突然割って入って来たのは、先程お砂に撃退させられた黒鬼の鉾鬼と紫鬼女の蘭鬼だった。

鉾鬼が龍鬼の直ぐ近くに着地すると、巨漢の体重にドスンと地鳴り

が響いた。

「ほほう、こいつらが残りの鬼二匹か」

最初に感じた邪気は五つだった。二匹の鬼の登場に、これで合点がいくと軒太郎は顎を手で撫でる。

「それにしても随分とボロボロだな。憑き姫かお砂姉さんと遣り合つて逃げてきたつてところか」

リーダーの龍鬼と殴り合ったことから察するに、憑き姫やお砂の実力なら万が一にも子分たちに遅れは取らないと予想した。

ヴァルハラ探偵事務所のエージェントならば、それが妥当の筈。

現在、肩膝を付いて観戦に転じて居るイゴールとて、戦闘用の装備を整えてあれば、あの緑鬼の鈍鬼と五分五分に渡り合うことは有り得なかつた筈である。

本来のイゴールは、あの戦いで披露した力量よりも遥かに強いモンスターなのだ。

そのことを軒太郎は理解していた。

「さてさて、鬼が五匹揃ったが　それでも俺には敵わないぜ」

自信を漲らせながら軒太郎が笑った。

その不敵な笑みを見て鉾鬼の首にしがみ付いていた蘭鬼が耳打ちを囁く。

「鉾鬼、ここは一旦逃げるわよ。親分と蛇鬼を抱えて飛んでおくれ」

「があるる」

鉦鬼は蘭鬼の囁きに喉を鳴らしながら頷くと、素早く龍鬼と蛇鬼を抱えあげ、山中に向かってジャンプした。

「あ！ 逃げちゃいますよ！」

「ちっ！」

イゴールの言葉に遅れて、軒太郎が舌打ちを零す。

軒太郎は、鬼たちを抱えて跳躍した鉦鬼を追おうとしたが、巨人の移動距離は並みの人間から見ても遙かに大きなものだった。あっという間にその姿は山中に消えて行く。

追いつけるとしたらイゴール程度の移動能力が必要となりそうだが、しかしイゴールは、片足の腱を切られて使えない。軒太郎は、仕方がないと直ぐに諦める。

ふと思い出す。

憑き姫の召還した鶴に攻撃を喰らい、トンネル内に転げた筈の緑鬼の方を覗いてみた。

だが、そこにゴリラ面の鬼は居らず、いつの間にか逃走を計ったようすであった。

「ちっ、あいつも逃げたか……」

薄気味悪いトンネル内を睨みながら愚痴ると、軒太郎は踵を返す。

「イゴール、帰るぞ。動けるか？」

「もうちょっと待って下さい。今、メディカルスパイダーが足の腱を、緊急で修復作業を行なっていますから」

イゴールの切られたアキレス腱に、小さな蜘蛛が数匹蠢いていた。それは針金のような細く長い金属の足を持ったロボットスパイダー。尻から糸を出し、長い足を器用に動かし切り傷内の腱や血管を繋ぎ合せていた。

まるで顕微鏡を覗きながら手術を行なう現代医師のような見事な手際。その修復作業は、八割程終わっているようすだ。

「傷の修理が済んだら大塚邸に帰還するぞ、鬼共は後回しだ」

「はい」

薄気味悪い心霊スポットの前に、可愛らしい乙女の声を真似た、大男の声が元気良く響き渡った。

暗かった空が徐々に明るくなり始める。

鬼たちとの戯れのような戦いが一旦終了して、朝日が昇り始めた。

再び温泉街に朝が戻ろうとしている。

イゴールの修理を待つ軒太郎は、黒衣のままに明るくなり始めた空を眺めていた。

怪しい笑みを絶やす事無く。

改造

ホテル天海、最上階スイートルームの一室。
そこに男女五人の姿があった。

三外軒太郎。

憑き姫。

お砂。

イゴール。

そして五代昂輝の五名だ。

昨晚、五匹の鬼と戦った五人である。

一人ベランダから外の景色を眺める男が、独り言のように話し出した。

「まだ、大騒ぎしているな」

一泊7万円する一室のベランダから山沿いに見える古風な屋敷を眺める軒太郎が言った。

軒太郎は、昨晚の戦いで見せていた邪悪な笑みも消え、黒衣からグレイのビジネススーツに戻っていた。

黒縁の眼鏡を掛けた彼が眺めているのは、お砂が巨大自爆蝶で吹き飛ばした大塚邸の景色である。

爆発の中心である庭は抉れ、屋敷は崩れてこそいないが廃墟の様に荒れ果てていた。

もう時間は昼の12時。未だに多くの警察や消防関係者が屋敷内へと出入りを繰り返している。

「爆発の原因は、ガス爆発ってことで誤魔化すそうです」

豪華な室内の中央に立つ五代昂輝が、ベランダに居る軒太郎の背中に向かって言った。

ヴァルハラ探偵事務所その他の面々は、昂輝同様にエアコンの効いた室内に居た。各自それぞれに寛いでいる。

「へえ」

ベランダの手摺り上で腕を組む軒太郎が、詰まらなそうな声を返す。爆発の張本人であるお砂は、ソファで暢気に紅茶を啜って居た。騒ぎになっていることに対しての責任感、気品ある鷹揚から僅かにも感じられない。お砂は清楚なままに堂々としていた。

イゴールは、自分で持ってきた鞆から取り出したスピアの両手をメデイカルスパイダーによって交換を終えており、新品の手の感触を確かめるようにルームサービスの料理を、フォークやナイフを使わずに素手で食べて居た。

手だけでなく口の周りもソースで汚れ、箸の使えない幼児の如く汚い食べ方であったが、口いっぱいに料理を頬張る笑顔は、何処か憎めない無邪気さが満ちている。

不思議と憎めない強面であると、昂輝は思った。

そして憑き姫は、白いワンピースから膝小僧を覗かせる女の子座りで、何故か切れ長の美しい眼差しで昂輝の動きを追い続けている。その視線に昂輝が気付き、視線を彼女に向けると憑き姫は、瞬時に視線を逸らすといった仕草を繰り返していた。

その憑き姫の前には、温泉街の観光マップと折りたたみの地図が広げられている。

イゴールがワイルドな食事に励むはしたない音が聴こえる豪華な室内、ベランダから侵入する暖かい夏の空気が冷房の温度と交じり合う。

幾度目だろうか、少年と目と目が合った憑き姫が、昂輝から視線を無表情のままに逃がすと暫くして昂輝もベランダに居る軒太郎の背中へと視線を替える。

「あの爆発は、流石に問題ですね、お砂姉さん」

ベランダから室内に戻る軒太郎がそう言いながら、黒縁の眼鏡越しに営業スマイルを見せていた。

お砂が啜っていたティーカップをテーブルに置くと、おっとりとした口調で言い訳を語る。

「だって、ついつい力が入りすぎてしまいました」

眉毛を八の字に苦笑いを零すお砂は、言い訳のような反省を述べるが、実のところ罪の意識は殆ど感じていない。

あの巨大な蝶の爆弾は、ただの力みすぎが原因の誤爆らしい。なんとも嘘っぱい。

「まあ、いいでしょう。大塚氏がうまいこと誤魔化すでしょうし、良くない。」

「警察も消防もどうせ地元の出身者でしょう、ねえ、昂輝君？」

「ええ、まあ……」

「ならばこの町の権力者である大塚氏がうまいことやりますよ。我々は、今回の借りを返すことに専念しましょうか」

「そうですね」

室内に戻った軒太郎は、お砂が腰掛けるソファ―セットの向かえに座ると、お砂が言葉を返しながら軒太郎の分の紅茶をカップに注ぐ。

今回の五色鬼の登場から始まった騒動の流れは、こうだった。

気絶から目が醒めた剛三が、爆撃された自分の屋敷を見て途方に暮れていると、爆音を聴きつけた町の人々が集まって来て大騒ぎになる。

そんな中、鬼の出現を思い出した剛三は、更に鬼が語っていた町の人間を浚って喰らうと言う言葉も思い出す。

そして軒太郎たちに新たな依頼を持ちかけたのだ。

もちろん五色鬼たちの討伐である。

報酬は、屋敷の修理代を請求しないことで纏まった。

もともと通りすがりの鬼と勝手にお砂が喧嘩を始めたようにも取れて、言い訳も出来なかった。

それに憑き姫や軒太郎にしてみれば、鬼を狩り、魂と骸を収穫する積りでいたため、殆ど問題が無く交渉は纏まったのだ。

「で、皆さん。あの鬼たちを何時狩るのですか？」

部屋の中に立つ昂輝が、四人を見回した後質問。

昂輝の表情は、凜と引き締まり真剣な表情を映していた。

しかし誰も昂輝の問いには答えない。黙ったままだった。暫く昂輝が、部屋の中央から四人の様子を窺っていると、暖かい湯気が昇るティーカップを片手に軒太郎が話し出す。穏やか視線は、その湯気を眺めている。

「まあ、焦らない、昂輝君。あの鬼共は雑魚も同然だ。騒ぐ程の相手ではないよ」

気楽な台詞を返す軒太郎に、怪訝な視線を向ける昂輝。顔色に不安が浮かび上がっていた。

彼もまた五色鬼の一匹、黒鬼の鉋鬼と戦っている。

決着は、つかなかった。

その戦いの中で昂輝は、何度も殺されては生き返った。3メートルを超える身長に、幾度もミンチにされたのだ。今でも衝撃に込められた苦痛と激痛が、はつきりと思い出せる。

その巨体から繰り出された攻撃力を軒太郎は、簡単なまでに雑魚と表現して侮っているのが、とても心配の要因であった。

「なあ、憑き姫。奴らは今どこら辺に居る？」

「ここよ」

軒太郎の質問に憑き姫は、ベットのの上に広げた地図の一箇所を指差す。

細く可愛い指が示すポイントを、軒太郎と昂輝の二人が覗き込んだ。彼女には、鬼たちが放つ妖気だけで居場所が感知できる様子だ。しかもリーダーの範囲が広い。

「昂輝君、ここに何かあるかな？」

「ここは……」

憑き姫が指差した場所は、町から外れた海岸沿いの一箇所だった。話し出そうとしている昂輝の顔を二人が直視する。

「ここには確か、古い研究所の建物が在ったはず」

「研究所？」

呟く憑き姫が可愛らしく小首を傾げた。切りそろえられた長い黒髪が艶やかにサラリと揺れると、シャンプーの良い香りが昂輝の鼻に届き魅了する。

一瞬、乙女の香りに気を取られた昂輝は、憑き姫のチャームから逃れるように話を続けた。

「ええ、昔ここには破棄された製薬会社の研究所が在って、今でも四階建ての施設が残っています。もう十年以上経つ無人の廃墟ですが……」

「周りに民家は？」

「在りません。絶壁の海岸と険しい山に挟まれた国道が走っており、そこから外れた寂しい悪路を進むと、廃墟に近いコンクリートの建物が見えてきます。」

僕が此処に行つたのも小学生の頃で、この町の子供なら肝試しに一度は足を運ぶ場所です」

「なるほどね、鬼たちも隠れ家がいい場所を見つけたってことか」

地図から目線を外した軒太郎がベットから離れて行くと、今度は憑き姫が昂輝に質問を始めた。

「じゃあ、子供たちが肝試しに行く以外、人の出入りはないのね？」

「ええ、たぶん町の大人や観光客が近づくことは無いです」

訊く憑き姫に昂輝が答える。

今は夏だ。

肝試しに子供が出向き、鬼と遭遇する可能性が無い訳ではない。心配が残る。

鬼たちの脅威は低いですが、被害者が出ては困りますわね」

お砂の言う通りだった。昂輝も早々に討伐を決したいと思っている。退治が梃子摺り、回復した鬼たちが町に降りるといった最悪の事態は避けたい。

あの巨大な黒鬼が町に降りたら、どれ程の被害が発生するか想像もつかないし、そのような想像を行ないたくもなかった。

悪い方向に連想を走らせたくないのだ。

応接セットのソファに戻った軒太郎が、ティーカップを手に取りながら唐突なことを言い出した。

「どうです昂輝君。ここは君一人で鬼共五匹を退治してみないか？」

「ええっ!？」

いきなりの話に声を裏返す昂輝。何を言い出すのかと目を丸くしていた。

少年の力量を知るお砂も、ティーカップを手にしたままキョトンとしている。

イゴールも呆けるように食事の手を止めていた。

昂輝の実力は、巨躯の黒鬼と五分。

否、戦いを継続していたが、一方的に殺されまくっていた。呪いによる無限の回復が無ければとつくに食われており、すんなりと決着がついていただろう。

お砂はそれを思い出しながら無理な話だと無言で状況を見守った。

「そ、そんな無理ですよ!」

両掌を見せながら胸の前で十指を左右に振る昂輝が、当然の意見を必死に述べる。

一匹の鬼相手に押されていたのに、五匹となると不可能と決め付けていた。

同意権なのか、憑き姫もベットのうえで昂輝の言葉に頷いている。

「鬼共五匹を一人で狩って見せたら、ヴァルハラ探偵事務所のバイトじゃなくて、正社員として雇ってもいいと私は考えているのだがね」

「そ、それは嬉しい申し出ですが、鬼五匹は……」

町を出てヴァルハラ探偵事務所へとお世話になりながら呪いの解決を目指そうと考えている昂輝に取っては、バイトよりも正社員の方が確かに生活面で楽になるやもと思う。しかし、これとそれでは話が別のところにある。

「ヴァルハラ探偵のエージェントなら、そのぐらいの戦力は当然の話だよ」

満面の笑みで述べる軒太郎に対して昂輝は、かなり困った表情を見せていた。狼狽に近い。

その様子を見かねてイゴールが助け舟のような言葉を掛ける。

「軒太郎さん、流石に無理ですよ。昂輝君は不死身と聞きますが、攻撃力はモヤシ同然ですし。モグモグ」

ルームサービスの食べ物を頬張りながらイゴールが可愛い声で述べる通りだった。

確かにHPは無限だが、攻撃力と防御力が乏しいのが昂輝の特徴である。

「もやしって……」

しかしモヤシとは言いすぎだと、若干傷つく昂輝であった。

まあ、筋肉モリモリのイゴールに比べれば昂輝の体型は、ハムとソーセイジぐらいの差があるのも事実だ。

そして軒太郎が傷つく昂輝を察する事無く、意味深なことを言い出した。

「だが、私やイゴールが手を加えたらどうなると思っつ？」

「はにゅ？」

何を言いたいのかわからずイゴールが首を傾げた。昂輝も意味が理解できずに動きを止めている。

その状況下で軒太郎が、黒縁眼鏡の下に怪しい光を放ちながら口元を笑わせていた。

何やら怪しいことを思いついた笑顔であった。

「また、不吉なぐらい楽しいことを思いついたのですね。何を考えついたのです？」

そう悟ったお砂が軒太郎に訊く。すると全員の視線を集めている軒太郎は、わくわくした口調で話した。

「幸いにも私が面白くも良い武具を沢山有している だろう」

変身したさいの黒コートに隠している武器のことだろう。
更につく軒太郎の言葉。

「そして人体改造のスペシャリストもこの場に居て、手術道具も有る。助手も居る」

弾む声で語る軒太郎の視線が、イゴールの持ってきた鞆に向けられた。あの中には確かにメスなどの手術道具が入っていた。その道具を使いイゴールは、胸の傷などの治療を済ませている。

助手と言うのは、メディカルスパイダーのことであろう。

「それってもしかして」

イゴールも軒太郎が何を思いついたかを理解した。傷だらけの面容が、天使の声と共に無邪気に微笑む。

軒太郎は、自分が持っている武器をイゴールの手術によって、昂輝に埋め込み武装をしようとしているのだ。

「ぼ、僕を改造する積りですか！」

「「イエース」」

腰の引ける昂輝の台詞に、軒太郎とイゴールの声がハイテンションで重なり合う。

二人の目が笑い、楽しそうな表情を咲かせていた。

後退りを見せる昂輝。

その昂輝に軒太郎とイゴールが、今にも襲い掛かるストロングスタイルのプロレスラーのような構えを見せていた。

「観念しなさい。お手軽に強さを得られるかも知れないのだから」

抑揚の少ない憑き姫の言葉に昂輝が「そんなあゝ……」と、情けない声を溢していた。

直ぐに昂輝は、スイートルームの隅っこに追い詰められる。

こうして五代昂輝の強化改造手術が始まることになった。

少年は、悪の秘密結社によって人を超えた怪人へと生まれ変わるのである。

半強制的に……。

贅（前）

水着姿で賑わう観光客が多い砂浜。

太陽に向かつて花開くひまわりのように幾つものビーチパラソルが浜辺に咲き誇り、若い声はしゃぎながら押し寄せては引いて行く海の波と戯れている。

温泉街の砂浜は、いつものように活気が溢れていた。

その側の国道沿いに店を構える喫茶店 葵。

昂輝が高校を中退するまで入部して居たサッカー部のマネージャー素詛律子の母親が経営している喫茶店である。

店の名前『葵』は、母の名前から取ったものだ。

「ちょっとお父さん、大塚さんのところに様子を見に行ってくるね」
店内で時を刻む壁時計の針は、午後三時に近づいていた。店内のお客足も昼食時が過ぎて落ち着いた和やかさへと色を変えている。

旅行代理店に勤める素詛英二は、休みになると妻が経営している喫茶店を手伝うのが日課であった。今日も仕事が休みで、店を手伝っていたところだ。
強制されて手伝っている訳でなく、自分から進んで手伝いを行っている。元々、労働威力が耐えない働き者の父親である。働くことが好きなのだ。

そんな父を律子は尊敬に近い思いを持っていた。良い父である。

「行ってらっしゃい、車に気を付けてね」

「ああ、行ってきます」

「お父さん、いつてらしゃい」

エプロンを外した英二は、笑顔の妻と娘に見送られて店を出て行く。その様は、店に来店中のお客たちにも暖かい家族の理想系に映る。そして店の裏に止めてあったスクーターに跨ると、軽いエンジン音を奏でながら国道へと走り出して行った。

素詛英二は、今年で三十九歳になる。もうじき四十に手が届く。最近は目じりに皺も増え、髪にも白い物が混じり始めていたが、病气一つしない健康体だ。小さな頃から健康には何の根拠もないが自信があった。

英二はこの町に生まれて、小、中、高と、娘の律子と同じ学校を卒業した。大学は県外だった。

大学卒業後は、大手観光代理店の東京本社に就職。その後、地元が観光名所の温泉街と言うことで、地元の支店に転勤となった。生まれ故郷に転勤するとは面白い運命である。

今では副店長にまで出世している。と、言っても支店には店長を含めて四人の社員しか居ない小さな支店である。

そして本社時代に知り会った現在の妻と結婚。葵も東京本社の社員だったが、英二と結婚すると寿退社を行い家庭に収まった。

その頃からのラブラブ度は、今でも冷めていない。

夫の転勤で、夫の故郷について来た妻の葵は、娘の律子が小学校五年生になると喫茶店経営を始めた。

英二は葵のすることに反対をしなかった。

この夫婦はとても仲が良い。娘の律子から見ても、絵に描いたような鴛鴦夫婦である。喧嘩らしい喧嘩を見た事がない。互いの文句を

愚痴ることすら聴いたことがなかった。
いつも笑顔である。

律子も両親のような家庭を築きたいと小さな頃から理想にしていた。夏清々しい風を浴びながらスクーターを走らせる英二は、大塚邸に向かうと言って店を出たが、何故か別の方角へと向かって走っていた。大塚邸とは、まったくの逆方向である。そのまま十五分ほど海岸沿いの国道をスクーターで飛ばして行くと郊外に出て行った。

辺りの景色は切り立った岩場の海岸に、反対側は険しい山。たまに対向車とすれ違うが、民家すら見当たらない。

そして英二が走らせるスクーターは、暫く独りで走ると、山沿いに覗かせる脇道へと曲がった。アスファルトで舗装は施されているが古びて罅割れた乱道。両脇にはガードレールもなく雑草が覆い木々の枝で空は隠されている。まるでトンネルネである。

英二は、荒れる道を穏やかな表情で走り向けて行く。スクーターの排気音が梢を揺らし、こもれみを鮮やかに散らす。暫くすると、金網のフェンスが見えてくる。英二はその前でスクーターを停車させた。エンジンを切る。

緑色の金網で組まれたフェンスの上には、鉄条網が張り巡らせてある。しかし放置されてかなりの年月が経っているのか、フェンスは穴だらけで鉄条網も多くか錆付き腐敗して朽ち果てている。そこに夏の日差しに成長した多くの蔓が巻きついていていた。

そのフェンスの向こう50メートルほど先に、四階建てコンクリート造りの廃墟が見える。元製薬会社の研究所だ。

横には大きな倉庫がひとつ建っている。大型トラックで荷物の搬入

が出来る大きな倉庫だ。両開きの鉄扉が、人が一人通れる程度に開いていた。

「ここか」

一言呟いた英二は、フェンスに開いた穴をくぐると敷地内に入っていく。

四階建ての建物ではなく、大型倉庫の入り口を目指して歩いて行く英二は、Gパンのポケット内から真っ黒な風呂敷サイズの布切れを取り出す。

そして黒い布を無造作に広げると頭から被る。

頭部と胸の辺りまで、黒い布が隠すと一気に英二の身形が怪しさを増して、只ならぬ妖気を放ち始めた。

並みの人間が放つ妖気でなかった。

贅（後）

GパンとYシャツは普通だが、頭を隠す黒い布切れと禍々しいまでの妖気が異常だった。まるで怪人である。

変貌した英二が、倉庫の厚い大きな鉄扉の隙間を抜けて中に入っていく。

広い倉庫の窓ガラスはすべて粉碎されたように割れており、そこから日差しが入ってきていた。日の光に映し出された空気中の埃の姿が、澱む空気の流れを示していた。

「て、てめえ……何者だ……」

薄暗い倉庫の奥から太い声が聴こえて来た。

英二は黒い布切れに隠れた視線をそちらに向けると立ち止まる。倉庫の奥には鬼が居た。

五色鬼たちだ。

声を飛ばしたのは赤鬼の龍鬼。

「て、てめえも、あの黒尽くめの仲間か……」

龍鬼の声に震えが聞き取れる。

五色鬼全員が一塊になって英二を睨んでいた。まるで寒さに凍える子供のように一箇所に集まり身を寄せ合って居る。

明らかに怯えていた。

黒い布を被った怪しい男に、只ならぬ妖気を放つ男に　　畏怖していた。残酷無比の鬼たちがだ。

鬼たちは傷だらけだった。

巨大な黒鬼は全身火傷だらけ、緑の鬼も同じだ。青鬼は頬を紫に腫らせている。紫鬼女は、顔面に痛々しい傷を刻んでおり、赤鬼は打撲に顔を膨らませていた。

殆どの鬼たちが大きなダメージを背負っているのが一目で分かる。そのダメージ量が、謎の男の登場に慄く理由でもあった。戦える状況ではない。

「いいえ、私はそのような人物をぞんじません」

「じゃあ、何者！」

ヒステリックな甲高い声で蘭鬼が訊く。それに英二は素直に答えた。

「味方です。あなた方の味方です」

「証拠は……」

「大岩に封印されていたあなた方を助けたのは、いったい誰だとお考えですか？ まさか今頃になって、自力で結界から抜け出せたと考えていませんよね、五色鬼の皆さん？」

「てめえが、俺たちの封印を解いただと？」

「そんなところです」

そう返答した英二が前に歩き出す。それに鬼たちが警戒を強めた。まだ、信用は出来ない。怯えを隠すように残された僅かな力を双眸へと注ぎ込み威嚇する鬼たち。

しかし謎の怪人は、その程度で歩みを止めない。ゆっくりだが前に

進み続けて行く。

五色鬼たちが哀れな姿で警戒と緊張を更に強める。蛇鬼、鈍鬼、蘭鬼だけであらず、巨大な鉋鬼までもが身を丸めて龍鬼の背後に隠れようとして居た。

それ程までに英二の妖気が、尋常でないのだ。かなりの大物レベルだと、容易く悟れる。

声の振るえを必死に隠そうとする龍鬼が問う。勇気を搾り出すように会話を繋いでいた。

「……で、何しに来た？」

歩みを止めない英二が、両腕を左右に広げて言う。

その動きに、龍鬼の背後に隠れる鬼たちがピクリと肩を縮める。

こうなると鬼とは思えない。まるで臆病な小動物と変らなく見えた。情けなさが引き立つ。

「今回は貢物を持ってきました」

「貢物？」

「ええ、生贄です」

「食い物か！？」

今の鬼たちには妖力が足り無すぎる。自己回復に妖気を回す余裕すらない。妖力が満ちているのならば、このような傷は、一日もたらずに完治するだろう。

だが今の五色鬼たちには、そのような余裕の欠片すら残っていない。黒い布を被った男の台詞に、驚きの表情を見せていた。

「ええ、食べ物です。あつと言う間に全員の妖力を全快できるだけの生贄です」

「何!！」

歓喜にも近い声が龍鬼の口から出た。表情も期待に満ちている。

謎の男の話が本当ならば、願ってもないことだ。

妖力さえ全快ならば、軒太郎に負けなと思うっていたからだ。一気に勝負を付けられる。

「生贄とは、私です。私の肉を喰らいなさい」

「!？」

黒い布切れで表情は見えないが、己を食って良いと平然と述べる英二。

歩みを止めて、両腕を開いたまま立ち止まる。「さあ、この胸に飛び込んできなさい」と、言いたげなポーズであった。

「なんなんだ、貴様!？」

「私はこの日のために生きてきて、この日のために死んでいく傀儡の運命。気に咎めることはない、この日のために溜め込んだ妖気ごと喰らいなさい。遠慮は無用です」

流石の鬼たちも戸惑いを見せていた。

状況が把握できない。畏ではないかと警戒する。

しかし、どちらに転んでも、妖力と体力が零に近いぐらい消費している鬼たちには、戦うだけの力なんぞ残っていない。今、対魔師た

ちに見つかれば逃げることも難しいだろう。
理由は理解できないが、この申し出を受けることにした。選択肢は無いに等しい。

「頭が可笑しいズラ、こいつ……」

鈍鬼が呟く。他の者も同じように思った。

しかし、この男の体内に秘めた妖気の量は、確かに鬼たち五匹分の妖力を全快させられるだけの妖気が蓄えられていた。否、十匹分はあるだろうか。

この男を喰らうと心に決めた鬼たちの口元から垂涎の汁が流れ落ちる。

「だが、喰らうだけの価値は……ある」

滾々と溢れる泉のような妖気が、甘美なまでに食欲を誘う。

「さあ、私を喰らい、性を付けなさい！　そして町に降りなさい！」

謎の男が、黒い布切れの下で笑っているのが感じ取れた。

「何を企んでいるか知らんが、その体を喰らわせてもらっぞー！」

「どうぞ、召し上げなれ！」

己から喰われることを歓迎する言葉。その声に釣られて鬼たちが動いた。龍鬼を先頭に鬼たちが英二に飛び掛かる。

英二を囲んだ四人の鬼たちが、その体に次々と牙を立てた。鋭い牙の数々が肉に喰らいつく。最後に大きな鉋鬼が、頭上から大口を開

けて迫った。そして一口のもとに黒い布切れを被った頭部を齧り取る。

鉋鬼がボリボリと音を響かせながら英二の頭部を味わう中、四色の鬼たちが飢えた餓鬼の如く群がりながら新鮮な肉を喰らっていた。生肉を体から食いちぎる惨い音が倉庫内に響く。目を塞ぎたくなる程の惨い光景であった。

「凄い、なんて美味な肉なんだ！」

「妖気が満ちていくわ、力が漲っていくわ！」

「うめーズラ、うめーズラ！」

「妖気が回復する！ 最高の肉だ！！」

歓喜の声を上げながら生贄を喰らう鬼たち。もちろん英二は絶命を遂げている。

何故に彼がこのような行動を取ったかは不明であるが、彼の人肉を喰らった鬼たちの体に刻まれていた傷が見る見るうちに癒えていく。英二の屍が骨だけになる頃には、鬼全員の傷は綺麗に消え、体からは五色の妖気をオーラの如く揺らしながら形相を本来の鬼面へと変えていた。

地獄の鬼が復活を遂げる。兎の如く怯えていた姿が嘘のようだ。力強さ取り戻す。

最後に残った骨だけの遺体を鉋鬼が摘み上げると口に含み噛み砕きながら飲み込んだ。残ったのは、剥ぎ取られた英二の衣類と血痕だけだった。

己から生贄になることを望んだ男の姿は、鬼たちによって跡形もな

くたいらげられた。

「ふはははは、これならもう、あの対魔師に遅れは取らん。今度は此方から攻め込んで、きたんぎたんにぶっ殺してやるぜ！」

「そうズラ、今度はこっちの番ズラ！」

「がははははははー！ー！ー！ー！」

完全復活を遂げ、自信に満ちた龍鬼の笑い声が倉庫内に高らかに響き渡った。その笑い声に倉庫全体が揺れている。

五匹の鬼たち全員が、無敵の五色鬼に戻ったと確信していた。

体内暗器 その1

「どうだね昂輝くん。体の調子は？」

昂輝とヴァルハラ探偵の四人は、タクシーを二台に分けて元製薬会社の研究所跡地を目指していた。

先頭を走るタクシーに軒太郎と憑き姫、それに昂輝が乗車して居る。お砂とイゴールし、後方のタクシーに乗っていた。

助手席に座る軒太郎の言葉に昂輝は、両掌を見ながら答えた。

「違和感を強く感じます。それに武装を埋め込んだ場所が痛いです」

「まあ、お砂姉さんの催眠術で痛みを抑えているにしろ、体内にワイヤーや配線だけじゃなく鉄棒や刃物も仕込んでいます、痛くないわけが無い か」

助手席からの言葉を聴きながら肘の裏側を摩る昂輝は、つい先程まで強制されていた改造手術の内容を思い出していた。

泣いても喚いても続けられる改造手術は、凄絶な程に過酷なものだった。

最初の一時間は、瞬時に再生を繰り返す昂輝の回復力に梃子摺っていたイゴールだったが、直ぐに呪いの回復システムのパターンを悟り。それを逆手に取って、美味いぐあいに昂輝の手足に武装を埋め込んでいった。

その手術の内容は、骨を残して肉を削げ落とし離れた場所に置く。すると肉片は磁石に引かれる金属のように肉体に戻ろうとする。そ

れを妨げると肉片は、己から形を霧に変えて帰還を試みる。

そのプロセスの間に僅かな時間が生じる。その隙に残した骨格にボルトやワイヤーで武装を固定するのだ。すると武装の上から肉片が再生して武装を体内に残す。骨に固定していないと、再生能力が異物を吐き出そうとするのだ。

そして配線などは、針に通した糸のように、肉へと突き刺し縫い付ける。

こうして四肢に武装を埋め込み、操作系の器具を胴体内にも植えつけた。

もちろん昂輝には、尋常じゃない激痛を与えている筈だが、そこはお砂の催眠術で激痛を消していた。

本当はかなり痛い筈なのだ。ほつといても傷は回復するので、痛みの問題さえ解決してしまえば、無理矢理の体内武装にも耐えられた。

催眠術を麻酔代わりに使用する方法は、呪いの診断中にお砂が気付いたことから取り入れた。

不死身の昂輝でも弱点があったのだ。

昂輝は催眠術などの精神攻撃に対してのプロテクションがない。

呪いの診断中に、催眠術で眠ったことから気付いたのだ。

肉体ダメージは無効と言えたが、精神攻撃は普通に受ける。だが、極度の人格破壊を起こす精神攻撃にたいしては呪いのプロテクトが働くように出来ていた。

軒太郎の魔道武器、イゴールの手術、お砂の催眠術によって、昂輝の改造手術が成功を遂げた。

それも一時間前に終了したばかりだ。

「で、どんな武装を施したの？」

「それは、ですね……」

「おっと昂輝君、まだ喋っちゃダメだよ」

憑き姫が訊いた言葉に昂輝が答えようとした途端、軒太郎が楽しそうに声で制止に割り込む。

タクシーの運転手が、三人の会話を横目に怪訝な表情を露骨に見せながらハンドルを握っていた。しかし、一般人の存在を無視して軒太郎が話しを続ける。

「昂輝君、それよりもだ。携帯の操作は、ちゃんと覚えたいかい？」

「ええ、はい」

答える昂輝は、ポケットに入れてあった新しい形態を取り出す。ゴツゴツとしたSFタッチの形態電話。

強度と防水性に長けた物を選んで買ってきた。この携帯で体内に仕込まれた武装を起動させるのだ。

「良いかい昂輝君。何度も言うけど、敵の攻撃は出来るだけ回避するのだよ。キミは無敵でも装備品が壊れてしまう。キミの攻撃力を支える武装の方が、キミの命よりも高価だということを忘れるんじゃないよ」

「……はい、解っています」

昂輝は苦笑いで答えた。顔が力無く引きつる。

切り立った岩場の海岸沿いに在る国道を走る二台のタクシーは、元製薬会社の研究所に通じる脇道へと入ったところで、並んで停車し

た。客たちだけが、そろそろと降りてくる。

それぞれのタクシーに軒太郎が支払いを済ませると、帰りも乗って帰ると告げて待たせることにした。

そして廃墟に向かって歩き始める。

五人が夏の日差しに覆い茂った木々のトンネルを進んで行くと、廃道の先に古いフェンスが見えてくる。フェンスに近づくと、その向こうの廃墟も見えてきた。

「このスクーター……」

朽ち果てかけたフェンスの側に、一台のスクーターが止まっていた。昂輝には、見覚えがあるスクーターだった。

「これは、確か素詛のおじさんが乗っていたバイク……、なんで此処に……」

昂輝の脳裏に不吉な予感が駆け巡る。

「これが、さっき言っていたのは？」

「ええ、おそらく」

軒太郎の言葉に憑き姫が頷きながら返答した。

タクシーで出発する直前の話だ。憑き姫がこんなことを言い出した。

「大きな気が表れて直ぐに消えたわ。その後すぐに鬼たちの気が大きく蘇った」と。

その時、昂輝には、二人が何を言い出したのかさっぱり理解できない

かった。そしてスクーターを見て話を掘り返した二人を見ていても、やはり意味が理解できなかった。それよりも何故に素詔のおじさんが、こんなところに足を運んだのか解らずに悩みを深める。疑問だけが昂輝の中に積み重なっていく。

「このバイクの運転手は、もう死んでるわ」

混乱を顔に出す昂輝に向かって、平然とした表情で憑き姫が言った。その言葉に狼狽を静止してキョトンと表情を固める少年。暫しの間を空けて、素早く廃墟に視線を移す。

恐らく素詔のおじさんは、中に向かった筈だと考えながら……。

「どう言うことですか!？」

「さあ、我々にも理由は解らないよ」

軒太郎が外人のようなジェスチャーを加えて答えると、昂輝が跳躍を試みてフェンスを軽々と飛び越えていく。

錆び付いた鉄条網を飛び越える軽やかなジャンプは、既に人間の身体能力を余裕で凌駕していた。

昂輝が敷地内に着地すると、軒太郎とイゴールが同じようにフェンスを飛び越えてくる。

憑き姫とお砂は、フェンスの穴を上品な足取りでぐり抜けて来る。そして四人が歩き出した昂輝の両サイドに並んだ。

右からお砂、憑き姫、昂輝、軒太郎、イゴールの順で横一列に並んで進む姿は、どこことなく勇ましく映る。

「奴らは、鬼たちは何処に？」

「倉庫の方ね」

昂輝の問いに、倉庫を指で示す憑き姫。その回答を聞いて方向を定めた昂輝の頭部が、人間から狼へと変身して行く。

獣人モードの開始だ。

改造手術の際に解ったことのひとつで、獣人化している時の方が、身体能力がアップするだけでなく再生能力の速さもアップしていた。人前でなければ、獣人化に問題はない。

『ぐうるるるううう』

狼男と化した昂輝がテレパスで喉を鳴らす。
その鼻に生臭い血の臭いが届く。

体内暗器 その2

僅か十五秒程度で昂輝の頭部は狼面に替わり、爪は鋭く尖り、全身に灰色の剛毛が生え揃う。

変身を遂げた昂輝を見て軒太郎が言った。

「昂輝君、イヤホンを嵌めときなさい」

「はい」

テレパシーで返答を返す昂輝が、ジーンズのポケットからワイヤレスのイヤホンを取り出すと、尖った狼の片耳にしっかりと差し込む。

「なんなの、それ？」

不思議そうな眼差しで憑き姫が訊いた。何故に変身した昂輝にイヤホンを装着させるのかと疑問に思っている様子だった。

「私やイゴール、それにお砂姉さんの協力で、強化手術に成功していようとも、昂輝君が戦闘の素人であることは変らない。だから万が一に備えて私が指示を出すのですよ」

そう言いながら軒太郎が、携帯電話を取り出して、ちらつかせる。

「なるほど……」

憑き姫が小さな声で納得した。

昂輝に足りない戦闘経験は、即効のアドバイスでカバーする様子だ。

今回ばかりは美味しいことを考えるな、と、憑き姫が感心していた。

「我々三名の手で昂輝君に攻撃力を与えた。だが良い武器を持っても使えこなせなければ意味がない。事務所に残る極道コンビが昂輝君に格闘術を仕込んだら、どれだけ楽しくなることやら」

黒縁眼鏡の下で笑みを浮かべる軒太郎。それを聴きながら昂輝が歩き始めた。他の四人も横一列のまま続く。

憑き姫が赤いカードファイルを手元に召還すると、中から茨巫女のカードを取り出した。

「茨巫女 ザ・ホーリーコスチューム」

歩きながら茨巫女と融合する憑き姫が、巫女服に変る。

微風に揺れるお砂の黒髪が灰色に変化を始め、軒太郎も足元から這い上がるタールのような漆黒の影に身形を黒衣に変えていく。

イゴールだけがいつものままだったが、これで全員が怪しげな外見に変わり、奇妙な一団と化して倉庫の前へと目指す。

「来るわ」

憑き姫が囁く。その途端、眼前の倉庫の扉が吹き飛んだ。

大型トラックが荷物を搬入するための巨大な出入り口を塞いでいた二枚の鉄扉が、勢い良く音を唸らせ飛んでくる。

中央の昂輝以外が片膝を付いて屈むと、昂輝の両脇を二枚の厚い鉄板が飛んで行く。

そして後方の古びたフェンスを薙ぎ倒しながら地面に倒れこむんだ。けたたましい音が昂輝の後方で轟く。

「よお〜う、人間共。出迎えご苦労〜」

倉庫の中から太い声に続いて、横に並び出てくる奇異な陰が五つ。

五色鬼再登場。

鬼たちは、不敵に微笑んでいた。

直ぐに気付いた。

「おや、もう傷が癒えているのか？」

「おやおや、予想外ですね」

バンガロンハットのツバに鋭い双眸を重ねる軒太郎が、黒衣に包まれながら鬼共の完全回復に気付く。それにイゴールが、天使の声を明るく賑わせながら相槌を入れた。

予想外と言いながらもヴァルハラ探偵たちには、余裕がはつきりと見て取れた。

「ふっ、これで人間なんぞに後れを取らないぜ！」

龍鬼の言葉には、自信以上の猛りが感じ取れた。他の四匹の鬼からも、同様の気配を感じられた。

鬼たちの双眸に、ランランとした邪悪な光が見える。

龍鬼が一步前に出た。

「さてさて、人間共。各自色々な因縁があるようだから、ここは五

対五で遣り合わないか？」

ヴアルハラ探偵サイドの人間たちは、龍鬼の語りに表情ひとつ変えずに睨むだけである。返事を返す者はいない。そこに龍鬼が話を続けた。

「俺と黒いの、鈍鬼と継ぎ接ぎ野郎、蛇鬼と小娘、鉾鬼と狼野郎、蘭鬼と白い女。この面子で遣り合わねえか？ 面白そうたる」

妖力体力が全快した龍鬼は、自信に満ちすぎて娯楽に走っている。戦いを、殺し合いを楽しもうとしている。

調子に乗りすぎた提案に軒太郎が鼻で笑いながら言い返す。

「すまん、赤いの」

「んう？」

軒太郎の嘲が見える言葉に首を傾げた。すると解り易い言葉を軒太郎が選んで返す。

「断ると言ってるんだよ、赤いのさんよ」

「なんだと!？」

一瞬で声の温度が上昇する龍鬼。パンパンに引き締まった筋肉の上に怒りの青筋が走って行く。肩の辺りが灼熱のような妖気が燃え上がる。つた。

「舐めやがって!」

龍鬼の斜め後ろに控えていた蛇鬼も一步前に出た。手には長めの合口が揺れている。

「お前たち雑魚鬼の相手は、うちのホープ、五代昂輝君がお相手するよ」

軒太郎が人狼の肩に手を添える。ポンっと軽い音が鳴ると、言葉を繋ぐ。

「五匹全員だ。お前ら全員を彼が一人で倒す。皆殺しだよ！」

鬼たちに負けない邪悪な笑みで述べる軒太郎の言葉は、明らかに鬼たちを挑発していた。

それが龍鬼は理解できていた。それでも腸が煮えくり返る。我慢にも限界があった。

「ふざけるなズラ!!」

単純な思考の持ち主から挑発に乗っていく。

緑鬼の鈍鬼が、辛抱たまらずに飛び出した。拳を握り絞めて、諷る軒太郎を目指す。

「うががあがあがあー!!」

雄叫びと共に鈍鬼が振るう拳に気迫が増していく。怒りが宿る。

「昂輝君」

『はい』

軒太郎の囁きに答えた昂輝が、彼の前に移動する。突き進む鈍鬼の前に立ちふさがった。

「どくズラ！」

邪魔者を退かそうと鈍鬼の剛拳が横振りで弧を描き飛んでくる。有り余る気合と怒りを込めた一撃。力強さも速さも瞬時に解る十分な極上の攻撃だった。

「しゃがむ」

『はい』

軒太郎の支持に従い素早く昂輝がしゃがんだ。頭上を鈍鬼の太い腕がスイングして越えていく。昂輝の真後ろにいた軒太郎の鼻先を拳が過ぎていくが、冷静な軒太郎はピクリとも動かなかった。

「攻撃だ」

『はい』

「ぐっ！」

苦痛の声を溢した鈍鬼が後ろに跳ねのく。ゴリラのような鬼面が歪み、脇腹を片手で押さえている。そこから赤い物が流れ落ちてきた。

「武器ズラか！？」

しゃがんでいた昂輝が立ち上がる。その右手に太陽光を弾く鋭い刃があった。

昂輝の右手の拳の間、人差し指と中指の間、中指と薬指の間、そして薬指と小指の間、四つの拳の間から伸びる半月のブレード。鎌鼬の鎌が二本。

あの鋭い切れ味を秘めた刃が昂輝の右手に、鍵爪の如く生えていた。

「わざわざ手裏剣型に組んだ物をばらして作った体内暗器だ。出来れば今の一撃で決めてもらいたかったな」

「すみません……」

テレパシーで詫びる昂輝が、左手に持っていた携帯のボタンをひとつ押す。すると右手のカマイタチブレードと同じ二本セットが、左拳の間からの肉を突き破りながら生え出る。

両手に六本の鎌。

今亡き鎌鼬三兄弟、三匹分の鎌を両手に装備した贅沢な武装だった。

両腕に伸びるカマイタチブレードを光らせながら腰を落とす昂輝が浅い構えを見せる。

睨む先は、脇腹を押さえる緑の鬼、鈍鬼。

「鈍鬼！　いてまえ！！」

力強い太い声だった。

先走り飛び出した上に反撃を受けた子分へと龍鬼が、そのまま行けと喝を飛ばす。

鈍鬼も一喝を貰い気合を引き締めと、両手を前に突き出した。全身の筋肉が力む。

「喰らえ、鬼門咆哮！」

両手から妖気が噴出すと、眼前の空気が渦巻きながら歪みを造る。空気が妖気に圧縮されて、透明な弾丸を造り出す。弾丸と言っても巨大な弾丸だ。運動会の大玉送り級の球体。

イゴールとの戦いで見せたサイズとは桁が違っていた。これが妖力を全快させた鬼の実力。本気の実力。

大玉の向こうに見える鈍鬼の姿が歪んで見えた。

「大丈夫だ、真つ直ぐ進め。切り裂け」

「はい」

軒太郎の支持を疑わず丸呑みに信じた昂輝が、瞬時に前へと張跳ねる。真空の球体目掛けてダッシュした。

「これで死ぬズラ！」

全力の鬼門咆哮が、突き進む昂輝に向かって発射された。渦巻く破壊の烈風体が地を削りながら飛び行き、カマイタチブレードを構える昂輝と正面から激突した。

刃物を振るう閃光が二度走る。

すると真空の球体が、割れた風船のように突風を散らしながら弾けた。

「なぜズラ！？」

自分が術の容易く破られたことに信じがたいと声を零す鈍鬼が、突風を耐えるように腕で顔を隠す。

「まあ、涼しい風なこと」

直ぐ後で窺うお砂が、ゆつたりとした口調で言った。

「可笑しいズラ！ 直撃したはずズラ、何故にズラ！！」

信じられないと言い続ける鈍鬼。本来の破壊力を取り戻した鬼門咆哮の破壊力は、この程度ではない。

例え正面からぶつかり合っても、弾けた真空の衝撃が前方に飛び散り、扇形に被害を及ぼすはずなのだ。昂輝はもちろんのこと、真後ろで見ていた四人を巻き込んでしまう筈なのだ。

それが全員無傷。

あまつさえ、お砂に涼しい風とまで言われてしまっていた。

何かが可笑的い。

信じがたい疑問に表情を固める鈍鬼に、軒太郎が自慢げに語りはじめる。

「その腕のブレードの鎌は、妖怪鎌鼬の鎌を使用している一品だ。風系トップクラスの妖怪の武器だぜ。しかも三匹分の鎌だ。二流の鬼が操る風の術程度、刻むだけじゃなく吸収だって難はないさ」

鎌鼬の鎌が、鬼門咆哮の破壊力を吸収して無効化したようだ。

語り終えた軒太郎が失笑する。

「なむむうう！」

いつものように自慢げにうんちくを語る軒太郎の台詞を聞いて鈍鬼が、齒軋りを鳴らしながら悔しさを喉の奥から迫り上げていた。

「ならば男の拳で決着を付けてやるズラ！」

再び双拳を固めて飛び掛る鈍鬼。真っ直ぐに繰り出した右拳が、狼面を狙う。

その攻撃に合わせて昂輝が独自に動く。今回は軒太郎から支持が出なかった。

鈍鬼が繰り出したストレートをくぐり左側に体を捌くと同時に、三本のブレードがキラリ輝き光芒を描く。

脇をくぐりぬけられた鉾鬼が、狼の姿を視線だけで追いかける。

「美味しい体捌きじゃないか」

褒める言葉を語る軒太郎。その彼の足元に何かが転がってくる。丸いメロンサイズの球体。それは手首から切断された鈍鬼の右拳だった。

手首を切られた本人は、まだ気付いていない。

横に回られた昂輝を負って右手を振り上げる。そこで初めて己の異変に気が付いた。

「あれえ、手が、拳がないズラ……？」

呆気にとられる鈍鬼。

無くなった手首から火山のように吹き出る鮮血を見ながら動きを止めていた。

『隙あり！』

昂輝がカマイタチブレードを横に振るう。鈍鬼が、過ぎる閃光に我を取り戻した時には遅かった。

切り落とされた右手首を押さえようとした左掌が三本の爪にスライ
スされる。眼前で細切れとなって落ちた。

「ああ……」

鈍鬼が寂しそうな声を囁く。両手を失った手首からは、止め処なく
血が吹き出していた。

「どうですか、両手を無くしちゃう気分は？」

イゴールが楽しそうに述べる。自分が味わった思いを味わっている
鈍鬼を面白そうに誇っていた。

イゴールは修理できるだろうが、鈍鬼は修理不能。もう二度と両手
は戻ってこない筈だ。

『終わりにしましょう』

左から右へ、下から上に連続して振るわれる刃の閃光。真空に近い
斬激の鋭さが鈍鬼を襲い、顔面を暮盤の目のように切り裂いた。
鬼面の表情が、切り目から崩れて行く。

「鈍鬼！！」

思わず声を上げる鬼たち。

細切れにされた鈍鬼の頭部が地面に落ちると、角切りになった脳味
噌が、肉片と共に飛び散る。その頭部の上に逞しい体躯が重々しく
倒れこむ。

「鈍鬼……が」

仲間を失いショックを受けたのか、情けない声を蘭鬼が溢した。龍鬼や蛇鬼が悔しそうに奥歯を強く噛む。

「まずは一匹ね」

そう述べた憑き姫が、カードファイルから空のカードを五枚とりだす。すると鈍鬼の体から白い尾を引く魂が浮かび上がり、空のカードへと飛び込んで行った。

カードに鈍鬼のイラストと名前が刻み込まれる。

「うふふ、プレゼント有り難う」

鷹揚の少ない浅い笑みで憑き姫が笑った。

体内暗器 その3

手に入れた新鮮な妖怪カードを眺める憑き姫の顔は冷徹な笑みを作っていた。

それでも巫女の服に切りそろえられた長い黒髪が、妖艶に少女を可憐に見せている。

憑き姫の細い手にあるカードは五枚。あと四枚が白紙だ。その白い部分を埋めたそんな視線で、昂輝の背中に視線を向けた。

「おのれ……、鈍鬼を……」

子分の一人を失った龍鬼が屈辱に言葉を濁す。

拳を強く握り、ボディービルダーのような引き締まった筋肉に青筋を走らせる姿から、怒りと屈辱の度合いがはつきり回りに伝わって来る。

その煮えたぎる雰囲気を感じた蛇鬼が、兄貴分の赤鬼に後ろから近づき囁いた。

「兄貴、あつしに任せてくれませんか」

凍てつくような寒空の風、そんな囁きだった。龍鬼が首を僅かに曲げて蛇鬼へと言葉を返す。

「あいつをバラバラに刻む自身は、あるかい？」

既に龍鬼の温度は下がっていた。

まるで蛇鬼の冷酷なまでの気が、熱い男の魂を冷凍してしまったかのようにだった。

「もちろんです。バラバラどころか微塵切りにして見せますよ」

「鈍鬼はあれでも俺の可愛い子分だったんだ。あの狼小僧を、出来るだけ苦しめながら殺してやれ」

「へい、承知しました」

「出来るだけネチネチと殺してやれ」

「へい、そこらへんは得意です」

「生皮を生きたまま剥がすように殺してやれ」

「へい、生き地獄を見せてやります」

「出来るだけ……」

「も~~~~いいでしょう、兄貴!!」

「……任せた、蛇鬼」

「いってまいりやす」

しつこい兄貴分にツッコミを入れた蛇鬼が、片手に合口の刀身を揺らしながら前に出る。細い背中を残りの鬼たちが見送った。

人狼昂輝の前に、青鬼蛇鬼が立つ。

その間には、細切れに頭部を刻まれた鈍鬼の巨体が横たわっていた。生臭い鉄分の臭いが鼻に付く。

「その肉片は邪魔だな。私が丁寧に処理しよう」

そう言う軒太郎の足元から漆黒の影が、まるで生きている絨毯の如く伸びて行く。

そして影が死体の下に滑り込むと、ゆっくりと鈍鬼の亡骸を地面に沈めていった。

死体はタールのプールに似た影の中に消えると、回収が済んだ影はそそくさと軒太郎の足元に帰還していく。

ゆるりと蛇鬼の体が揺れた。軟らかい風に煽られる梢のように。そして攻め出る蛇鬼。

「蛇走り、まいる！」

蛇鬼の瞳が大きく開くと、青白い悪鬼が右に走った。敵の視界から出ようとすする蛇鬼の走りを昂輝は素早く追った。

人間では不可能な猛スピードで右に動いた蛇鬼の進行方向が瞬時に替わる。今度は左に走った。その変化に動きの追う昂輝が遅れる。刹那、まるで昂輝の視界から蛇鬼が消えたように見えた。

「以前より速いな……」

軒太郎が呟く。

昨晚に見た蛇鬼の歩方術より、その速度は数段アップしていた。尾を引く残像の姿も多くなっていた。

「じゃー！」

昂輝の右側に回りこみ接近した蛇鬼が、手にある合口を突きたてた。

ザクリと音を立てて突き刺さる合口が、昂輝の頬から脳天に向かって減り込んでいた。

突き刺した合口を手首で捻りながらニヤリと頬を釣り上げる蛇鬼。傷口が惨くも抉れる。

しかし、この程度で不死身の昂輝が絶命を遂げる訳がない。すぐさま昂輝は鍵爪を振り回す。

「この程度では駄目か！ 不死身とは聞いていたが、頭部を串刺しにしても駄目とは、実に愉快！！」

顔面に突き刺した合口を引き剥くと蛇鬼は、三刃の鍵爪から逃れるように間合いを離す。

『逃がさない！』

テレパシーを飛ばす昂輝の傷口は既に回復を始めている。しかし右目の神経を切断されたのか、可笑しな方向を向いていた。

昂輝は左目一つで下がる蛇鬼を追う。

低い大勢の狼がダツシュしたが、蛇走りで後退を行なう蛇鬼に追いつくことは出来ない。

二人の移動速度は、差が大きい。蛇鬼の使う蛇走りが速すぎるのだ。

「どうした狼、足が遅いぞ！」

右や左へと動きを替える蛇鬼の蛇走り。敵や仲間たちが観戦する場所から離れて、戦い易い広い場所へと移る。

誘われるように昂輝は、蛇鬼を追った。

「良いの？ 釣られているわよ」

「構わないさ。あの青鬼では、昂輝君を狩れはしない」

敵に誘われる昂輝を見て憑き姫が訊くが、軒太郎は携帯電話を片手に余裕を語っていた。

そして携帯を口元に当てる。

「昂輝君、しばらく好きに戦いなさい。これも経験だ」

『わかりました』

軒太郎にテレパシーを返す昂輝の周りを、大きな円を描くように蛇鬼が回っていた。幻惑の残像が幾つも残り、アニメやマンガなどで見られる忍者の分身の術の様だった。

すべての残像の視線が、中央の昂輝に向かって襲い掛かるタイミンを狙っている。

「しししゃっ!」

円を描き走っていた蛇鬼が仕掛けた。昂輝の背後からである。

殺気に気付いた昂輝が振り向くが、それよりも早く蛇鬼の合口が斜めに振られた。

刀身が閃光を煌かせる。

『くっ!』

昂輝の背中に激痛が刻まれた。狼面が苦痛に歪む中、攻撃を仕掛けた蛇鬼は再び昂輝の周りを回りはじめる。

「まだまだ行くぞ!」

円を描く蛇鬼が、隙を突いては攻撃を仕掛けてくる。そして昂輝に切り傷を負わせると円に戻る。その繰り返しだった。ヒットアンドウエーである。

ただ只管に攻撃を喰らう昂輝だったが、受けた傷は直ぐに回復して行く。この攻撃では勝負は決しられない。

合口で顔を抉った筈の蛇鬼にも、それは理解できていた。

「これは仲間の恨みだ。いびつてやる！」

どうやら勝負を決める為に攻撃を仕掛けている様子でないらしい。

蛇鬼は、仲間の恨みを嫌がらせの如く刻み込んでいる様子だ。

まさに陰険なまでの蛇の思想。正念が程良く腐っている。

残像が走る円の中央で苦痛の表情を見せている昂輝を眺めながらイゴールが、分厚い胸の前で小さく拍手をしながら言う。

「昂輝君は凄いですね」

「何が？」

憑き姫がイゴールの顔を見上げて言葉の真意を訊いた。

一方的に攻められているのに凄いと理由は解らない。

「一見、青鬼が振るう合口の攻撃を受けまくっている様子に見えますが、私が埋め込んだ装備品の配線や脆い部分だけは避けて攻撃を喰らっているのですよ。反撃するのに大事な武器だけはちゃんと守っているのです」

「へえ」

イゴールの話を聞いた憑き姫は、視線を昂輝に戻した。未だに昂輝は、蛇鬼の蛇走りに翻弄されながら攻撃を受けている。

「まずは相手の足を止めなくてはな」

見かねた軒太郎が携帯で戦法のヒントを飛ばす。

『分かっています』

そう言う昂輝だが、解っていても蛇走りのスピードに対して反射神経が付いていけない。イゴールが述べていたように、全身の武器を守るのに精一杯の様子であった。

幾ら自分の肉体は刻まれても構わない。しかし体内に仕込まれた仕掛けは別だ。壊れたら治らない。

己の肉体よりも、己の命よりも大事なものが武器というのも切ない話だ。

今現在、昂輝の肉体ほど格安な使い捨てアイテムはない。

体内暗器 その4

「遊びは終わりだ！ その忌々しい野獣の首を斬り飛ばしてやる！」
止めに狙い蛇鬼が今まで以上に合口を大きく振り被って飛び込んできた。スピードと助走が乗っている。

その攻撃を防ごうと昂輝が、片手の鍵爪を盾にしようと翳した。そこに蛇鬼の合口が振り下ろされる。鋭い鋼と鋭い鋼の音が響く。

「がつ！？」

蛇鬼の合口と昂輝の鍵爪が重なり合う刹那、蛇鬼が苦痛の声を上げた。

鍵爪の背と合口の刃が触れたった部分から、青白い閃光が迸る。電撃だ。

全身の筋肉を引きつらせた蛇鬼が後方へと弾き飛んだ。

「なに！？」

何が起こったのか憑き姫にも判らず疑問の声を上げると、イゴールが無邪気な声で説明を始める。

「ただの電気です。三本ある鍵爪のうち二本に、プラス極とマイナス極の電流を流せるように仕掛けがされているのです。携帯でON OFFが可能で、昂輝君に放電しないよう刃物の付け根には保護が施されていますから安心です。敵が鍵爪の二本に触れて始めてビリビリって電流がながれちゃうのです。」

イゴールちゃんは、電気の仕掛けが大得意ですの。」

「楽しそうね」

「はあ〜い、楽しい仕掛けですよ〜」

イゴールが楽しげに説明した仕掛けに触れた蛇鬼が、放電のショックで吹き飛んだのだ。

その蛇鬼を昂輝が爪を立てながら追う。

「畜生が！ せこい術を！」

不意を疲れた電気ショックから立ち直った蛇鬼が昂輝を返り討ちにしようとする足を踏ん張る。合口を顔の横に並べて構えを築いた。

だが、昂輝も追う足を止めた。

途端、昂輝の腹が大きく瞬時に膨らんだ。

「今度は何だ!？」

胸を張りながら腹を膨らませる昂輝の様は、出産寸前の妊婦よりも大きかった。七つ後でも産み落とそうとするサイズ。

他の鬼たちも呆気にとられるように時を止めていた。

刹那、腹の中に膨れ上がった何かを昂輝が吐き出した。

大きく開けた口の中から真っ白な霧が放射された。その勢いが蛇鬼を包む。

「ヤバイ、毒霧か!？」

すぐさま口を手で押さえて危機感を察する蛇鬼は、再び蛇走りで霧の外へと逃げ出した。

全身に纏いつく白い霧を振り払いながら後方に逃げ出す蛇鬼を追っ

て今度は霧の中から昂輝が飛び出して来る。

「何だ、何だ、可笑しい!？」

逃げる蛇鬼には、霧の中から出てきた昂輝の姿が三つに見えた。重なり合う三つの姿。それは己の目が霞んで揺れているのが原因だと直ぐに気付く。昂輝が吐き出した毒霧を吸ってしまったが為の現象。たった一呼吸、否、もっと少ない量を吸っただけで、全身の機能が異常を示していた。吐きたいぐらいに気分も悪くなる。

「このぐらいなんだ!」

後方へと進む蛇走りとはいえ、自慢の移動力が格段に低下していた。じれったい程に遅い。直ぐに昂輝に追いつかれる。

「昂輝君は不死身の回復力で毒素を直ぐに分解してしまうが、吐き出された物を吸い込んだ奴は酷いぜ。

人間が戦争で使う代物とは異なり、『ぶるぶる』って呼ばれる妖怪の吐息から作られた神経毒よ。

人間ならば毒霧に触れただけで体が震えだし、吸い込んでしまえば筋肉が硬直してショック死するほどよ。

妖怪や鬼の類でも、吸っちまえば全身に麻痺がのこっちまう」

どうやら妖怪の骸から武器を造り出す軒太郎お手製の毒物のようだ。その毒素を圧縮して小型ポンベに入れた物を、胃袋の中に仕込んでいたのである。

それを蛇鬼は、僅かだが吸い込んでいた。

「眩暈が……!」

双眸を細める蛇鬼の方膝が力なくまかり立ち止まる。そこに昂輝が跳躍して飛び掛った。

『どりやああああ！』

昂輝の飛び蹴りが蛇鬼の顔面を狙う。

靴底の踵が鼻っ面を指して飛んで行く。

「蹴りか!？」

霞む瞳を凝らして身構えていた蛇鬼が、背を逸らして蹴りの間合いから逃れる。狙われた鼻の先で昂輝の飛び蹴りが伸びきり止まる。届かない。

しかし、けたたましい金属音と共に昂輝の踵から何かが飛び出してきた。

その音を聞いて蛇鬼の脳裏に、鈍鬼とイゴールの戦いで聞いた音を思い出す。スペツナズナイフのスプリング音だ。

足の裏から発射された物が、目標まで足りなかった距離を埋める。

「そうは、行くか!」

スプリング音に反射的に反応した蛇鬼が、無理矢理にも体を捻り、顔を横に逸らす。そこに昂輝の足の裏から靴底を突き破り、尖った鉄棒が飛び出てくる。

「ぐあああ!」

スプリングで発射された鉄棒を必死で躲す蛇鬼の頬を掠め、鉄棒が右耳を貫き後方の地面に突き刺さった。

痛みに歪む蛇鬼の右面から鮮血が飛び散る。

「きいいさああまあああ!!」

半面を真紅に染める蛇鬼の顔が憤怒を滾らす。それでも昂輝は構わず攻撃を続けた。

右手の鍵爪が掬い上げるように下から襲い掛かる。鎌鼬の爪々が、空気を三等分に刻む音が聴こえた。

「舐めるな!」

目は霞む、体も痺れる、脚に力が入らない。

しかし、スピードに自信がある蛇鬼には、回避出来ない攻撃速度でなかった。

毒に当てられていても、まだまだ昂輝と大差無いスピードで立ち回れる。

そしてアッパー気味に迫る昂輝の切っ先を、蛇鬼が回避しようとした瞬間のことだった。

ポッン!

と、音がした。

まるでシャンパンのコルクを抜いた時の音だった。

その音に若干遅れ、蛇鬼の背中に激痛が走る。

刺すような痛みだ。

「ッ!」

蛇鬼の背中に走る激痛の正体は、長細い鉄の針。

先ほどスプリングで発射された鉄棒よりも一回り細く短い物だった。

それが背中の左肩口に刺さっていた。

このダメージで勝負に影響を受ける程ではない。しかし、一瞬の混乱が蛇鬼の脳裏に走り回る。

他の敵からの攻撃？

そんな疑問までも考えられたが、敵の一団が居るのは後方でなく前方。

ならば他にも敵が潜んでいた？

瞬間の狭間に、そんな事を考えながら下から迫る鍵爪を躲す。

三つの爪が顎をかすめると、小さな傷を残した。

更に後ろに逃げる蛇鬼が、床に刺さる鉄棒の尻から煙が上がっているのに気付く。鉄棒の尻は、パイプのように空洞になっていた。

恐らくそこから何かが発射されたのだと蛇鬼は悟った。

仕掛けはイゴールが作った二段式のトラップ兵器である。

スプリングで発射されたパイプの矢の中に、もう一つ心棒が仕込まれており、鉄棒が発射されたショックで仕込まれていた心棒の尻で二つのカプセルが割れる。カプセルの中には二つの薬品が入っており、混ざり合うことで数秒後に爆発を起こし、そのショックで心棒を鉄棒の尻から発射したのであった。

わざわざ昂輝が、飛び蹴りから鉄棒を発射したのは地面に突き刺す為である。角度を作るためだ。

だが狙いも定められず、タイミングも計り難い。二発目の鉄心を命

中させるのは、博打性が高く難しいことだが、今回は都合よく成功した。

「ちまちまと！」

逃げに転じていた蛇鬼が、蛇走りを行おうとした。しかしその途端、大きく蛇鬼の両膝が崩れて転倒する。

「なななな！？」

蛇鬼が戸惑いを見せる。

「蛇鬼！？」

尻餅を付いて倒れた蛇鬼を見て、蘭鬼が声を上げた。

青鬼の表情が更に青くなり、当惑に震える。

脚に力が入らない。脚だけではない、全身に力が入らない。

合口を落とし、崩れた身を立て直そうとするが、体が思うように動かなかった。

危機迫る表情で蛇鬼が、一心不乱に身を起こそうとしている。そこに昂輝がゆっくりと歩み寄って来た。

既に勝負が決しられたかのような余裕が、歩みの中にかいま見れた。

「毒です。二発目の鉄針にも、毒が塗ってあります」

毒の使用に恥ずかしげも無く語る狼の少年を見上げる蛇鬼が、力が入らない表情に冷や汗を大漁に流す。

マズイ、これはマズイと思いつつながら。

昂輝が左足を上げた。

蛇鬼の視界に昂輝のスニーカーの裏が見える。

右足のスプリングは使用したが、左足のスプリングは残っている。それで蛇鬼に止めを発射する積りらしい。

狙われる蛇鬼の表情に敗北の色が、脂汗と共に青白く浮かび上がる。

「蘭鬼！ 撃て！ 俺の炎では蛇鬼を巻き込む！」

「ハッ！」

追い詰められる子分を見かねた龍鬼が、溜まらずに加戦を指示する。その指示に素早く蘭鬼が両掌を前に突き出した。

そして発射される鬼刻弾丸。

しかし蛇鬼を追い詰めた昂輝と鬼たちの間に、灰色の蝶々の群れが割って入った。さながら灰色のカーテンである。

否。

それは刑務所の高い壁のようだった。

その壁が蘭鬼の放った弾丸を食い止め、向こう側の出来事を鬼たちから隠した。

「もう、横槍は駄目って、昨晚もいったでしょう」

灰色の髪を僅かに揺らすお砂が、威嚇的に微笑みながら言った。

笑顔に殺気が籠もっている。

そして蝶の壁の向こう側から、ガシャン！ と、スプリングが弾かれる音だけが鬼たちに届く。

あとは何も聞こえなかった。

暫くして灰色蝶の群れがお砂の元に返って行く。
蝶々たちは、ずらずらと白いスカートの中に入り込んで行った。ど
うやらそこは、神秘の空間と化している様子だ。

視界を妨げていた蝶々の壁が消えると、その向こうには狼の双眸を
光らせる昂輝一人が立っていた。

既に蛇鬼の遺体すらなかった。軒太郎の影で回収されたのだ。
五枚のカードを持った憑き姫が、たった今さっきプリントされた二
枚目のカードを眺めながら冷たい笑みを溢していた。

鬼神との戦い (一)

「ちっ、畜生めが……」

龍鬼の口から舌打ちの後に愚痴が零れる。

予想外の展開だった。

鈍鬼に続いて蛇鬼までが、青二才の狼小僧に討ち取られるとは、予想だにもしていなかった。大幅に予定が狂う。

蛇鬼が軽く狼少年を討ち取り、四対四の五分五分に持ち込むのが、龍鬼の中のシナリオだった。

蛇鬼の見せる蛇走りを、あのような姑息な術で怯ますとは、まさに意表をつかれたと言えた。

もしも龍鬼が、あの状況だったとするならば、同じ罠に引っかかっていたやもしれない。

いや、引っかかっていたらさう。

それを思うと、今亡き蛇鬼の屈辱的な無念さも察しられた。

もしも自分ならば、死人でも死にきれずに鬼だということも忘れて、怨み辛みの溢れた幽霊となって化けて出るところだろう。

死して地獄に落ちていられない。

「これは侮りすぎだな、我々は……」

「はい、私も同感です……。もう、あの小僧を、雑魚と認識していいは、また罠にはまるやもしれません」

真剣な眼差しで話し合う龍鬼と蘭鬼の二人。その背後で四メートル

以上ある体躯を猫背に丸めながら鉋鬼が、黒い肌に象牙のように白い牙を剥き出しながら喉を唸らせていた。

流石の鬼たちも仲間二人の敗北で余裕の態度を改め、気を引き締め直す。

三色の肌に地獄から噴出す業火にも似た燃え上がる殺気が蘇る。煮えたぎる怒りが、鬼らしさを一段と高めていく。煮もう隙も油断もない。

「さてさて、次に昂輝君と戦うのは誰かな？」

鬼たちと違い、余裕に余裕を重ねる声色で軒太郎が問う。黒衣に嘲りの気配が漂っていた。屈辱に似た空気が臭う。その軒太郎を怖い眼光で睨みながら龍鬼が太い声で答えた。

「今度は俺たち三人で相手をしてやるぜ」

「おいおい、一对三かい？ 随分と風流心がないことを言い出すな。もつと誇り高い鬼と思っていたが 詰まらんな」

「ふっ」

軒太郎の言葉を鼻で笑う龍鬼が、開き直った態度で言葉を続ける。

「いいや、一対一は変わらないぜ！」

「ほほう？ 何を言いたいのか続きを聞こうじゃないか」

龍鬼の憤怒が鬼面から緩むと、隣に立つ蘭鬼の美面も色っぽく微笑みを見せた。二人の頭上で鉋鬼だけが、鬼らしい獰猛な顔で牙を剥

いている。

そして龍鬼が仲間の顔を一度見回すと、吼えるように声を飛ばす。

「蘭鬼、鉾鬼、あれで行くぞ！」

「がるるるる！」

「久しぶりにあれで行くのね！」

龍鬼の激に答える二匹の鬼。

何かただならないことを企んでいるようすだ。

太く大きな声に昂輝が六本の爪を光らせながら身構える。一方、ヴァルハラ探偵の四人は、何が始まるのかと期待に満ちた瞳でことを見守っていた。

叫ぶ龍鬼。

「行くぞ！ 地獄の三鬼合体だ！！」

「ハッ！」

「がるッ！」

「くくくとうおっくくく」

三匹の鬼たちが背筋を伸ばし、両脚を拾えた綺麗なホームで上空へと跳躍を見せる。

そして眩しい光を放ち重なり合う。激しい閃光に三鬼の姿が霞んで消えると、光に空気が吸い込まれ圧縮されていく。

冗談でなく、本当に合体をする様子だ。

『バカな……』

昂輝が呆れた思いをテレパシーに乗せていた。

しかし、上空に飛んだ鬼たちを見上げる他の四人は、何やら嬉しそうだった。特に軒太郎とイゴールの瞳は、正義のロボットアニメを見るような純粋な輝きを煌かせている。

時の流れに大人へと成長した男性たちの心の底から、スーパーヒーローに憧れ夢見た少年時代を掘り起こされたような瞳だった。とてもピュアな童顔に映る。

上空の光から何がどんな形で登場するかを、かなり期待している様子だ。

「……がああああおおおおおおおおおおん！！」「……」

眩い閃光内から咆哮が吼えられた。高音と低音が混沌の様に渦を巻きながら混ざり合い、破壊者としての意思を周囲に轟かせる。

黒鬼鉦鬼の声にも似ていたが、それよりも凶暴な雄叫びだった。まるで新たな鬼神の誕生を告げる鐘の音にも聞こえた。そして光の中から巨大な影が落ちて来る。

サイズは黒鬼鉦鬼と替わらない。4・5メートル程はあるだろう。その巨躯が二本の脚で地面に着地した。重量感溢れる振動と地鳴りが周囲に轟く。

元製薬会社の白いコンクリート造りの建物が激しく揺れて、あちらこちらの壁に亀裂を走らす。

古びた大型倉庫の天井が、一部崩れて落ちて行く。

その振動が昂輝には、地獄を発信源した大地震に思えた。もしくは閻魔様の怒り。それほどまでに振動は激しく感じられたのだ。

面白すぎて笑いが堪えられないのだ。この際だから思いっきり笑い散らしている。

「……まずは狼小僧、お前から地獄に送ってやるぞ。仲間の仇討ちだ。次は黒い男だ、覚悟して待っていやがれ！」「」

「あははははッ。期待しないで待ってるぞ！」

自称、阿修羅入道には六本の腕が付いていた。

左右の肩、通常的位置に一本ずつ。その脇の下、縦に並んで二本ずつである。

その六本の腕を左右に大きく広げると、股を開きながら腰を落ととして深い構えを見せる阿修羅入道。

鉾鬼の鬼面が凶暴な双眸を昂輝に向けていた。

六方向に広げられた腕が、一段と阿修羅入道の巨軀を大きく見せ、威嚇に花を添えている。

視覚的錯覚がプレッシャーを生み出し昂輝を襲う。

やっていることは冗談だと思える程に愉快だが、舐めてはかかれな。そんな威圧を、ひしひしと昂輝は感じ取った。

此処からが本番。

これが鬼たちとの最終ラウンド。

判定勝ちや、引き分けは存在しない。

KO勝ちすらない。

これは殺し合い。

鬼を滅して、罪なき人々への被害を未然に防ぐための戦い。
正義の戦いなのだ。

下品に語れば、害虫駆除　。

狼顔を引き締め直す昂輝。

やるべきことは、ただ一つ。

『鬼退治、参る！』

無限の呪いに人生を蝕まれる狼少年の決意が、テレパシーに乗って響き奏でられる。

そしていつでも巨大な敵に対して飛び掛れるよう、鋭い獣の爪を勇ましく身構えた。

鈍鬼と戦っていた時よりも、その構えが少しずつ様になり始めている。

戦うスキルの成長が早い。

「「「生意気な瞳だ　、気にくわねえなあ……」」」

見下すような目線で合成鬼が囁く。正義に満ちた狼の瞳に、生理的な拒否感を抱いている様子だ。

重なり合う三つの声すべてに不快感が聞き取れた。

「「「鉦鬼、俺に替われ」」」

「「「がるるる」」」

三つの鬼面が言い、三つの鬼面が答えた。

「『交代、阿修羅面、龍鬼！』」

その言葉と共に、阿修羅入道の頭部が左に回る。正面にあった黒い鬼面が右に動き、右後頭部に在った赤い鬼面が正面に回ってきた。交代を終えた龍鬼の瞳が赤々と業火の如く光った。

「『狼小僧！ これでも喰らえ』」

ついに戦闘開始。

五代昂輝。鬼との三連戦目がスタートした。

先手は鬼が取る。

巨漢の腰を捻りながら阿修羅入道が、右腕三本を後ろに振り被った。そして力を溜めると、三本同時に一気に振るう。

「『地獄の竜巻攻撃』」

巨大な三本の腕が振られると、それに煽られ突風が巻き起こり竜巻へと変る。

砂埃を舞い上げながら渦を巻く烈風の龍が、狙いを定めたように昂輝へと迫っていた。

うねる渦が地面を抉っている。

それはドリル。

この竜巻は普通ではない。触れば肉が裂かれるだろう。昂輝には、そう見えた。

「あはははは。昂輝君、カマイタチブレードを盾に使いなさい」

軒太郎が持つ携帯電話から昂輝の耳に嵌められたイヤホンへと指示が送られて来た。

しかしその声は、未だに失笑を続けている。腹の筋肉が引き千切れるほどの笑い声が混ざっていた。

鬼たちの合体が軒太郎には、かなりツボだったのだろう。

鬼神との戦い (二)

昂輝は軒太郎の笑い声を無視して魔力を秘めた竜巻に立ち向かう。胸を張るように両手を振りかざしながら力を溜めると、迫る地獄の竜巻に両手の爪を同時に突きたてた。

「どおおりやっ！」

鎌鼬三兄弟の忘れ形見が揃って竜巻に突き刺さる。しかし激しく回るベイゴマが、飛び込んできた相手のベイゴマを弾き飛ばすように昂輝を吹き飛ばした。

音の変わりに突風が周辺に広がると、昂輝の体が高く飛んで行く。軽々とだ。

「にいいいいいい！」

上空を舞う昂輝の口からくぐもった声が零れた。

高さ五メートル、距離にして二十メートルは飛ばされたらう。昂輝が背中から地面に叩きつけられ転がると、更に苦痛の声を漏らした。

「「「とうだ！」「」」

しかし昂輝は直ぐに立ち上がる。苦痛を強く感じたが、ダメージは残らない。さすが不死身といえた。

「「「なるほど、流石は鎌鼬三匹分の鎌だな。地獄の竜巻を正面から食らっても木っ端微塵になりやしねえ。いい武器持っていやがるぜ！」「」」

そう言いながら阿修羅入道は、背を逸らしながら六本の腕を二本ずつ正面でクロスさせた。

正中腺にそって三つのX字が造られる。

どうやら大きく息を吸い込んでいる様子だ。

「……これならどうか。地獄の焼けつく息だ！」「」

三組の腕が開かれると、頬を膨らませた龍鬼の鬼面が突き出され、ひよつとこのように尖らせた口先から炎が噴出された。

激しい業火だ。

炎は扇型に放射され前方を灼熱の地獄絵図に変えていく。

生えた雑草を一瞬で焼き払い、更に地面を黒々と焼き焦がす。

空気自体が燃え上がり、赤い炎を揺らしていた。

しかし。

『炎は無駄だよ』

燃え盛る炎の中から飛ばされたテレパシー。その先には何事も無いように立つ昂輝の姿があった。

衣類は燃え落ちている。

だが、灰色の獣毛は、業火の中にあっても焼けもせず、焦げもせず、に、陽炎の温度で揺れていた。

「わぁ……」

衣類を失ってもワイルドに凜々しく立つ昂輝の姿を、憑き姫が食い入るように見ていた。少女は、ある一点から目を離そうとしない。

「『また火取り魔か！』」

悔しそうに三つの声が重なり合う。軒太郎と龍鬼の戦いで使用された赤い皮手袋を思い出しているの台詞だった。龍鬼には嫌な記憶が残っているのが声色から察しられた。鬼面のひとつが奥歯を強く噛んでいる。

「ああ、そうとも。昂輝君の体に、火取り魔の皮を縫い付けてある。地獄の業火であろうと火炎系の攻撃は無効だ」

軒太郎の言葉の通り、昂輝の左肩にお札のような茶色い皮が、灰色の体毛の上から太い糸で縫い付けてある。お札には「対火」と赤い文字がひかれていた。その二文字がオレンジ色の空気に揺れていた。

実際のところ昂輝の体は、火取り魔の能力だけでは炎の攻撃を防ぎきれていなかった。しかし昂輝自信の再生能力が、防ぎきれずに焼かれた傷を、目で分かるまえに超再生を行なっているのだ。

もしもつこく火炎攻撃を続けられた、昂輝の肉は焼け落ち幾つかの装備品を失っていたかもしれない。

龍鬼は軒太郎のはつたりに騙されたのだ。火炎攻撃の手を休めたのは、鬼たちの失敗と言った。

『今度は僕から行きます！』

そうテレハシーを飛ばす昂輝の体には、火取り魔のお札の他にも複数枚のお札が縫い付けてある。

札だけではない。背中や胸にはレンズのようなクリスタルや瑪瑙色の勾玉、ルビーと思われる赤石なども移植されていた。

その姿は、痛々しくも異様だった。

「あれ、なに？」

今まで衣類を纏っていたために、これ程までのアイテムが移植されていることに憑き姫も気付いていなかった。
全貌を現し始めた魔導の成りに質問を投げかける。

「あれは軒太郎さんのコレクションに手を加えて作り出した魔導器
ですの」

「魔導器？」

答えたイゴールの言葉に小首を傾げる憑き姫。

召還系の妖術に長けた憑き姫も聞きなれない言葉があった。

うんちくならば俺だろうと言わんばかりに軒太郎が説明を始める。

「魔導器ってのは、マナや妖気に溢れた素材をもとに魔導科学的な
技術を注ぎ込み作り出した一品だ。科学と妖術の間に存在する技術」

「私のカードと似ている技術なのね」

「まあ、似ているって言えば似ているかも。もともと昂輝君の体は
術を受け易い体質だね。良き術も悪い術もね」

「へえ」

そのような話をヴァルハラサイドのメンバーが繰り広げるなか、昂
輝が阿修羅の巨人めがけて走り出した。

狼面に凜とした凄みを力ませ攻めめる不幸な少年。両手の鍵爪が燃
える大気の中で光芒を靡かせながらダッシュの速さを映し出す。疾

風迅雷に陽炎が裂けていく。

「……来るか!」

阿修羅入道が声を重ねながら右足を後方に振り上げた。そこからサツカーのシュートホームに良く似た似たキックが放たれる。振るわれる大きな足の甲が攻め入る昂輝を蹴り返そうと迫って行く。煽られた風の量が違う。

「昂輝君、右へ!」

『はい!』

携帯電話からイヤホンに届く軒太郎の指示。昂輝は前に走っていた進行方向を右に替えて跳ねた。

横に飛んだ昂輝の側を、鉄色の蹴りが過ぎていく。

地面を掬い上げるような軌道の蹴り脚に、激しく空気が唸っていた。直撃していたのならば、今頃昂輝の体は遙か遠くへ飛ばされていただろう勢い空振りだった。

一方、昂輝は蹴りを避けると、軒太郎の指示を待たずに再び進行方向を敵へと戻す。

今度はジャンプ。

右手の拳に生えだたブレードを突き出しながら、阿修羅の顔面目掛けて飛んで行く。三つの鋭い切っ先が、阿修羅入道の頭部にある龍鬼の右目を狙っていた。

龍鬼の瞳に映る昂輝の姿がズームされていく。

「……何糞!」

阿修羅入道の反応は早かった。

蹴りは躲されたが、すぐさま肘が出る。

三本の左腕がし字に曲げられ、文字道理のエルボーを繰り出した。

三つ並んだ肘鉄が、飛び来る昂輝にタイミング良く命中した。

三つの鬼面が、してやったりと同時に笑う。

だ
が
。

「何！」「」

その笑みは瞬時に消えた。

トリプルエルボーを直撃した筈の昂輝の体が、撃墜されずにすり抜ける。

攻撃を当てた感覚が、手応えがなかった。

まるで幻術。

驚きを三面に表す阿修羅入道が、僅かな音と殺気に気付き、己の足元を見た。

そこには爪を振り被る人狼の姿があった。

やはり先ほど戦い物は幻覚。目くらましだ。

「はばかられたか！？」

まるでではない。それはまごうことなく幻術だった。

昂輝の背中に移植された勾玉の一つが青白く光っている。

淡く輝く勾玉は、皮膚の上に埋め込まれ、体内にある小さなコントローラーに配線で結ばれているのだ。他の勾玉や水晶レンズ、それに妖石の類も一緒である。携帯から電波を受けたコントローラーが、それぞれのアイテムを起動させている様子だ。

今、青く淡い光を輝かせている勾玉が、昂輝の幻影を作り出している。
不思議な石だった。

鬼神との戦い (三)

ドイツの中部にあるハリツ山地。そこにブロッケン山と呼ばれる世界的にも有名な山がある。

年の2/3は雪を被った山で、年間の平均温度が2.9度と寒く、ほぼ毎日と言える程に霧が立ち込めている神秘的な山である。

その山でよく見られることから呼ばれるようになった光の屈折現象が、ブロッケンの虹。

太陽光などが山の背後から差し込むことで見られる虹のような光輪が映し出す幻惑な光景から、山にはブロッケンの怪物が住んでおり、人々を惑わしていると昔は言われていた。

今では科学的に現象のメカニズムも解明されており観光名所として人気のスポットとなっている。

ドイツの代表的文豪ヨハン・ブルフガングの小説『ファウスト』内でも語られるこの山には、年に一回、ドイツ中の魔女たちが集まって宴を開くとも言われていた。

昂輝の背中に埋め込まれた勾玉のひとつは、その魔女の骸から採取された胆石を磨き上げ作られたアイテムであった。その胆石の勾玉が、昂輝の幻覚を作り出し阿修羅入道の眼を欺いたのだ。

「「「痛つつつつ！」「」」

昂輝の爪が、阿修羅の右脚を切りつける。黒い脛に三本の傷が刻まれた。

しかし阿修羅は怯まない。苦痛の声を上げたが直ぐ様に反撃の拳を繰り出した。三つの右拳が隕石の如く昂輝の脳天めがけて落ちて行く。

「昂輝君、四番のギミックを使いなさい！」

『はい!』

軒太郎の指示に、携帯を左手に操作する昂輝。

その昂輝の右腕。肘から手首にかけて皮膚が小山のように盛り上がった。複数である。

そして盛り上がった小山の先を突き破り生えでる幾つかの白い角。大きさは様々だったが数にして八本。角と見るより獣の牙に窺えた。しかも大型の獣のそれである。

その複数の牙の先から黄色い光が迸った。電撃のスパーク、雷光である。

雷光の走り行く先は、腕先の爪。三つの切っ先で雷光は、更に激しい音を響かせていた。

「雷撃発射!」

振り落とされた三つの拳骨に、牙の生えた腕を向ける昂輝が叫ぶと、凄まじい放電音を轟かせながら昂輝の腕から雷撃は発射された。背中に埋め込まれていた勾玉の一つが昂輝の怒号と同時に砕け散る。すると普段は上空の雨雲から落ちて来る筈の稲妻が、大地より天へと逆に登っていく。

三本の腕を縫うように稲妻が貫き、雷音と共に天へと消える。直後、地獄の阿修羅が悲鳴を上げた。

「「「うぎゃああああ!」」」

阿修羅の巨体が稲妻に力負けして吹き飛ぶ。三本の腕は黒々と焦げていた。

素晴らしい電撃砲だったが、撃った昂輝も肉体にダメージを受けている様子だった。体から薄っすらと焦げ臭い煙を上げている。しかしながら吹き飛んだ敵の光景を見て、冷や汗を灰色体毛の下に流しながらも満足げに微笑んでいた。会心の一撃だったのだろう。

「今度のあれは何？」

「妖怪『雷獣』の牙だよ」

雷獣とは、六十センチぐらいの狸や鼬に似た獣で長いキツネのような尻尾を持つ妖怪で、東日本に広く、多くの伝説を残している。

その雷獣とは、名前の通り雷を操る獣の妖怪のため、しばし鵜と同じ妖怪ではないかと言われるが、江戸時代に描かれた多くの文献や絵巻から別の妖怪だと今では区別されている。

文献の中には、雷獣の大きさが虎や獅子なみのサイズも語られており、現在昂輝が使用した雷獣の牙は、それらの大きな雷獣の物だ。

「……畜生め、腕が……」

雷撃を受けた阿修羅の右腕三本が、痛々しい火傷に染まっていた。だが機能を完全に失った様子ではない。表面は焼け爛れているが、動かせないレベルではないようだ。右腕を摩りながら昂輝と距離を保つ。

『この雷撃は、打つのにかなりの激痛が伴いますが、素晴らしい使えますね。気に入りましたよ』

右腕を眺めながら述べる昂輝。

己にダメージを残しながらも発射する雷獣の砲撃。昂輝にとってダメージと呼べるリスクは無いに等しいため、破壊力の大きい遠距離兵器を気に入った様子である。そして再び右腕を敵に向けた。鎌鼬の爪と雷獣の牙が阿修羅入道の体躯に砲身を向けた。

「すまんな昂輝君……」

『何がですか、軒太郎さん？』

「その武器は一発しか撃てない」

『あらら……』

軒太郎の言葉に昂輝が肩を落としながら顔を向けた。凜とした狼の表情が期待はずれに曇りを浮かべる。

「その武器の弾薬は、勾玉に封じた妖気を使用しているね。残念なことにイカツチの勾玉が、ひとつしか持ち合わせがなかったんだよ」

所詮は即席のアイテムで急遽武装手術を行なった程度である。万全の武装状況ではない。

僅かに気落ちした表情で昂輝が腕を下げた。

「安心しなさい、まだまだ武器はあります」

『はい、そうですね』

そう答え昂輝が顔を敵に戻す。

「「「舐めくさりやがって!」「」」

憤怒を言葉で表現しながら阿修羅入道が六本の剛腕を前に突き出した。掌が開かれている。その表面から迫り出してくる突起物。

それは蘭鬼の角だった。

繰り出そうとしているのは、あの術だろう。

昂輝も見たことがある。喰らったことがある。

「「「ならば此方も遠距離攻撃。喰らえ六砲鬼刻弾丸!」「」」

蘭鬼の妖術が、六本の腕から発射される。

大塚邸で見た鬼女の術が三倍の量で、しかも蘭鬼の体格から鉦鬼の体格に代わって繰り出された。一個一個の弾丸が大きくなっている。もう弾丸ではなく砲弾と呼ばれた。

その砲弾六発が、昂輝を狙って同時に飛んでくる。

「昂輝君に武装させた魔導器は何も武器や防具だけではないぞ。七番の赤石を使いなさい!」

『了解!』

昂輝が携帯を操作すると、左胸に埋め込まれた親指サイズのゴロリとしたルビーが妖光に輝く。

赤い燐光がぼんやりと昂輝の全身を包んだ。

そこに阿修羅入道が発射した砲弾のような蘭鬼の角が突っ込んで来る。

まさに巨大なドリルミサイルだった。

鬼女である蘭鬼の得意する術だが、その螺旋の回転に男のロマンを感じ取れる。

これわはこれで素敵な術だ。男が使えばより一層、男らしい術に変わるだろう。

発射された六本の角が大地に突き刺さり回転しながら抉り上げる刹那、土煙を噴射しながら辺りの景色を覆い隠して行く。

粉塵の中から削岩機が岩を砕き進む音が暫く響いた。

少なくとも発射した角の一発は、昂輝に直撃しているのは間違いないだろう。憑き姫が若干の狼狽を無表情のなかに隠そうとしていたが、隣に立つ黒衣の男は、にんまりと口元を釣り上げていた。

「大丈夫。術は発動している」

黒衣の男がバンガロンハットの下でそう言った。軽くツバを摘まんで角度を直す。

やがて舞い上がった煙幕のような砂埃が落ち着きを見せていく。攻撃の爆心地が露になると、そこには抉り取られた地面の傷跡が、痛々しいクレーターとなって残っていた。

しかしクレーターは歪な形で、幾つもの隕石が同じ場所に落ちたような光景だった。

そして、そこには昂輝の姿はない。

「……跡形もなく吹き飛んだか!?」

重なる鬼たちの声に歓喜の色が見えた。しかし今の攻撃で勝負がついたとは思えない。今まで昂輝を見ていれば分かることだ。

考えを一瞬で改め油断を打ち消す。

鈍鬼も蛇鬼も油断で足元を救われた。

同じミスは三度も繰り返せない。

鬼神との戦い (四)

次に備える阿修羅入道の瞳が引き締まり、不意を付こうと何処かに潜む昂輝を探した。

「攻撃で砕け散ったんじゃあねえな」

「私も同感ですわ」

「がるるるうう」

大きな体が、ずっしりと腰を落として身構える。三面が三方向を警戒しながら見回していた。

討ち取ったと油断させてあの狼は、間違いなく攻撃してくる。

そう、不意打ちを試みる筈だ。そういう小僧だと龍鬼は思っていた。蘭鬼も鉾鬼も同感している。

案の定であった。

蘭鬼の六砲鬼刻弾丸が抉った大地の上、先ほど昂輝が臆げに赤く燐光を見せた場所に、同じ妖光が灯り出る。

まるで赤い靈魂のような光は大きく膨れ上がり中から昂輝が姿を現した。

「狭間に潜んでいたか！」

「正解だ。赤石の妖力を利用して、一時的に昂輝君の体を別次元に回避させた」

『原理は良く解りませんが、やはりこれも一回ですか？』

「正解だ、昂輝君。素晴らしい装備程に一回しか使えない。まあ、今はそれでも十分だろう」

軒太郎の言葉通り、胸のルビーが曇り色あせている。ただの石ころに変わっていた。

昂輝は鬼を見上げると、軒太郎に質問のテレパシーを飛ばした。

『では、この装備品も一回こつきりですか？』

そう言いながら何やら携帯で電波を飛ばす昂輝の体が大幅に変化を始めた。

人間とかわらなかつた昂輝の両脚が、犬や猫と同じような獣の骨格に替わっていく。しかも大きい。鋭く長い爪が半月の形に伸びて地面に食い込む。それは天然のスパイクだった。

「肉体が、変化しているわ……」

憑き姫がそう言う中、更に昂輝の変形が進む。

左胸から肩に掛けての筋肉が膨れ上がり、やがては筋肉の形を無視して瘤のように塊と化していく。その塊の数は二つ。昂輝の狼頭と同サイズ。灰色の毛並みが、その部分だけ漆黒に染まっている。

『融合に違和感がありますね』

独り言を囁くようなテレパシーを昂輝が零すと、片の瘤二つが更に変化を進める。

瘤が獣の頭部と化していく。

「あれは、ヘルハウンド？」

膨れ上がった肩の瘤が狂犬の頭部に形を変えるのを見て憑き姫が言う。

真っ黒な犬の頭部だった。

それが二つ昂輝の右肩から腕にかけて生えている。尻尾を持たない狼男の昂輝の尻には、黒い棒のような犬の尻尾がチヨコンと生えていた。ドーベルマンの尻尾だ。それを思えば、生え出た狂犬の頭部もドーベルマンに似ていないことはない。

「「がるるるうううう」

双頭が唸る。

狼の頭部に並ぶ双頭犬の頭部。

憑き姫はヘルハウンドと言ったが、獣の頭部が三つ並んで唸る姿は、まるで地獄の番犬ケルベロスの方に良く似ていた。

「「この珍獣めが！」

阿修羅の鬼面が愚痴を述べる。すると軒太郎が得意げに解説を始めた。

「一時的な魔界生物の移植だよ。本来なら一瞬で移植先の肉体を汚染して飲み込んでいく凶悪なヘルハウンドの細胞組織をクリスタルの中に封印しておいたのだ。それを解除したのさ。」

昂輝君ならヘルハウンドの細胞に飲み込まれるよりも先に異物を排除しようとする再生能力が働くから、あの中途半端な状況で停止しているように見える。

しかし実のところ現在の昂輝君は、体を汚染してのつとろうとしている細胞と、呪いの再生能力が闘ぎあっている最中なのさ。しかもヘルハウンド二匹分の細胞と再生能力が闘ぎ合っている。すごい呪いだよね、本当に」

「なんでそんなことするの？」

「なに、あれで昂輝君の運動神経が倍増するからさ。ヘルハウンドの細胞の力だね。

しかしタイムリミットがある。いずれ彼の再生能力が完全にヘルハウンドの細胞を淘汰してしまう。凄い排除能力だよ」

「ケルベロスモードとでも名づけちゃいましょうか」

軒太郎の解説の後に、イゴールが強面を微笑ませながら命名する。

『行きますすー！』

そう言った途端、昂輝が跳ねた。真っ直ぐ阿修羅の鬼面を目掛けてだ。

しかも速い。

今までの昂輝とは比べ物にならない程のスピードだった。阿修羅入道も昂輝が跳ねたのには気付いたが、次の瞬間には目の前に居た。まさに目と鼻の先にいた。

そして阿修羅入道も反応が出来ない瞬速から繰り出される狼の膝蹴り。昂輝の右膝が龍鬼の顎を蹴り上げる。

龍鬼の下顎と昂輝の膝の皿が激突すると三つの鬼面が啞然と表情を

揺らす。

「くくはッ！」「」

体格にして半分以下の昂輝の膝蹴りが、三鬼には同格の巨人が繰り出し一撃に感じられた。

思わずダメージの重さに戸惑う。

「速いな……」

顎を蹴り上げられた巨体が、一発の衝撃に浮き上がる。

ヘルハウンド二匹分の細胞を昂輝に埋め込んだ張本人である軒太郎も、そのスピードとパワーのアップに驚いていた。軒太郎もこれ程にまで変貌するとは思っていなかった様子だ。

皆が驚愕すると同時に阿修羅の巨体が背から倒れこみ大地を揺らした。元製薬会社の建物に更なる亀裂が広がって行く。

「くくば、馬鹿なあ！？」「」

戸惑いながらも俊敏に立ち上がる阿修羅入道が、地に着地した昂輝を睨むと、三つの獣面が野生的に睨み返してきた。

三つの鬼面を有する阿修羅が、一瞬だが気迫に押される。

「くくくうっ！ 舐めるなよ。六砲鬼刻弾丸！」「」

肩膝の体制からすべての腕を突き出し術を唱える阿修羅入道。今度は単発ではなく連射で角を乱射してくる。

だが昂輝は砲撃を縫うように真っ直ぐに前進してきた。連続で発射される砲撃の弾丸は、昂輝に掠りもせず背後の地面を無駄に削り上げるだけだった。

「「「当たらない。速すぎる!!」「」」

砲身も増えて、威力も増して、連射能力も向上している筈の六砲鬼刻弾丸が当たらない。掠りもしない。牽制にすらなっていない。瞬く間に昂輝が足元に到達して爪を立てた。

「「「ぎいあああ!!」「」」

昂輝の一振りに阿修羅入道が悲鳴を上げる。

斬られた。

指だ。

左足の小指を鍵爪で斬られた。

血飛沫を散らしながらゴロリと切断された小指が転がった。肩膝立ちだった昂輝がバランスを崩して片方の腕三本を地に付ける。

観戦している全員に判った。

昂輝 vs 五色鬼。

ケロベロスモード vs 阿修羅入道。

獣 vs 鬼。

どの構図を取っても明白であった。押しているのは昂輝。

押されているのは地獄の鬼たち。

幾ら軒太郎とイゴールの手を借りて強化手術されているとはいえ、昂輝の戦闘能力の方が完全に増していた。

ここまでとは軒太郎も予想外である。ちょっと嬉しい。

更に続く昂輝の攻撃。

三本の鍵爪が阿修羅の黒肌を傷つけた。

脛脛を切り、太股を切り、腕を切り、背中を切り、胸を切る。

見る見る間に阿修羅入道の体に爪の傷跡が刻まれて行く。

まるで蜂の群れに襲われているように阿修羅は六本の腕をバタつかせながら抵抗を試みるが、昂輝は素早く動き腕の間を美味しく躲して攻撃を続けた。

「「「うわあああああ！」「」」

情けない鬼の慟哭が上がった。

鬼神との戦い (五)

三体の鬼が融合して登場した鬼神の阿修羅入道であったが、三頭の我狼と変貌した昂輝に対して、圧倒的といえる勢いで押されていた。

強さの比較は、体格の大きさでない。六本の腕の数でも、六つの瞳が映す視界の広さでもなかった。

それは、動きの速度が戦闘能力の優越を決めていた。ケルベロスモードの昂輝は、巨大な阿修羅をスピードで圧倒していたる。

だが、不意に阿修羅の拳の一つが、跳ね回る昂輝の体を空中で捕らえた。

無造作に振られた裏拳の一振り、飛び交う昂輝の肩を叩く。大きな衝撃を肩に受けた昂輝が体を回転させながら落ちて行くと、危うい感じで地面に着地した。ヘルハウンド細胞で発達した昂輝の両足が、スパイクのような爪跡をニメートルほど引きずって残す。

「くっ……」

狼の視線が敵を睨むように凄み、鋭く見上げる。

しかし左肩に黒々と並ぶ二頭の狂犬は、苦しそくに首を振りながら粘液度の濃い涎を吐き散らしていた。

苦しんでいる。

昂輝の再生能力に押され始めている様子だ。

外野で窺っていた軒太郎もそれに気付き新たな指示を昂輝に送る。耳に刺さすイヤホンへと声が届いた。

「昂輝君、ヘルハウンドたちが君の生命力に推され始めた、新たなサンプルを打ち込みなさい。バランスを取るのです」

『了解しました。では、一番二番に続いて三番のサンプルを注入します。』

そうテレバシーを軒太郎に返した昂輝は、左手の携帯で次なるギミックを操作する。

途端、胸に埋め込まれていた紫水晶のレンズが小さな音を鳴らして砕け散る。水晶の中には、何やら怪しげな肉片が入っていたらしく、水晶の中から開放されるとすぐさまに昂輝の体内目掛けて寄生を始めた。

『うづううツ！』

狼が牙を強く噛む。体に力みが入る。

砕けた紫水晶がボロリと胸から落ちると、その下から侵食はじめる真っ赤な血管細胞が地割れの如く昂輝の右半身に広がって行く。

真っ赤な血管が昂輝の右腕を網タイツのように包むと、徐々に腕が膨らんでいく。

灰色の剛毛が疎らになり、ピンク色の皮膚を膨らませる右腕に、太い血管が鼓動に合わせて波打つ。

異様な光景。

露骨にグロテスクな光景だった。

『くあああああ！』

昂輝は、膨れ上がる自分の右腕を見ながら苦痛の声をテレバシーに代えていた。

体を小刻みに震わせている。敵に攻撃を受けたときよりも辛そうな形相だ。

やがて膨れ上がった肉を突き破り鮮血を噴出しながら白い骨のようなものが飛び出してきた。

白い外見が赤い血を帯びて生々しい。

その骨は更に大きく成長していった。まるで植物を観察していたVIRを早送りして見ているようだった。細かった骨は太く大きく成長して、鋭い物と化していく。

肘から先が、それに変わっていた。

ティラノザウルスの肋骨のように。

マンモスの牙のように。

長く、太かった。

しかし、それらとも違う。

なによりも断面が鋭利だった。

刃物のようだった。

剣だ。

白い骨で出来た斬馬刀だ。

鎌鼬の爪や昂輝の指が、飾りの様に斬馬刀にくっついている。

大きく長い斬馬刀は、昂輝の身長よりも長い。二メートルは間違いなくある。

『これは良い武器かも』

激痛が晴れ、和やかな顔に戻った昂輝が、骨の斬馬刀を軽々振るう。見た目より軽い武器に見えるが、実際はそうでもない。斬馬刀を搭載した昂輝の体重は、百キロ近く増量されている。

斬馬刀を生み出したサンプルの細胞が、昂輝のパワーを全体的に底上げしているのだ。

「あれは何の細胞なの？」

「さ〜……」

憑き姫の問いに軒太郎が無責任な回答を一言で述べる。憑き姫がキョトンと可愛らしい表情を見せていた。

「いやね、何年か前にフランスで退治した名も無きレッサーデーモンの肉片なのだよ。とりあえず昂輝君に装備させてみたけど、案外と面白い武器に変貌したね。」

まあ、結果オーライだよ」

更なる悪魔の寄生により昂輝の再生能力が抑えられると、苦しんでいた黒犬二匹も落ち着きを取り戻す。

ヘルハウンドの双眸に、狂気の燐光が蘇る。

斬馬刀と悪魔のパワー、それにヘルハウンドのスピードを体に宿した昂輝が阿修羅入道へと攻撃を再開した。

大地にしっかりと食い込むスパイクの爪が全力で蹴りを放つと、斬馬刀を突き出した昂輝が飛んで行く。

更にスピードは増していた。

斬馬刀の切っ先が、敵意を示す。

ヘルハウンド細胞に左半身を黒く変え、レッサーデーモン細胞が張り巡らせる赤々とした血管の網に右半身を染めた昂輝は、赤黒い弾丸とかしていた。

野生のままに猛スピードで突進して行く。

「「「ぎいあああああ！」「」「」

昂輝が阿修羅入道の横を過ぎた途端、鬼の口から悲鳴が上がる。

六本ある太い腕の一つが地面に転がった。

ボトリと落ちた腕は、左二段目の腕。肘の辺りから綺麗に切断され、極太のハムのように無造作に転がっていた。

更に昂輝が迫る。

地を蹴り進み、後ろから阿修羅の股座をくぐり向け、白い骨の斬馬刀を振るって過ぎていく。

硬い物を斬った音が鳴った。

骨を斬った音だ。

「「「きいいい、畜生おおおおお！」「」「」

今度は足を斬られた。右足首から切断された。

愚痴を怒鳴りながら阿修羅入道が横倒しに倒れるが、斬られた足首だけがそのままに地に足裏を付けたままだった。

切断された足首の傷口から大漁の血液が溢れている以外、土足厳禁の乗用車へと乗るために脱いだ靴が、駐車場に取り残されている光景に似ていた。

足首だけが靴の様に、ポツリと置いてある。

「「「ぎいいいいいい……」」」

屈辱と激痛に鬼面が歪む。

「勝負あつたかな」

軒太郎が呟く。

そして先を予想した。

足首を切断されて機動力を失った鬼たちには、あの巨大合体も価値がなくなるだろう。

おそらく巨大鬼の鉾鬼をベースに唱えられた融合の術。龍鬼が次に取る行動は、合体の術を解いてくると思えた。それが妥当な策だ。

「「「すまぬ、鉾鬼。合体を解いてお前を捨てる。悪く思っなよ！」」」

やはりである。

重なり合う三つの声だったが、その台詞は龍鬼の意思だろう。鉾鬼の黒い鬼面だけが悲しげな表情で声を合わせていた。

「やはりか……」

予想は出来ていたが失望感を呟きに乗せる軒太郎。ふざけた笑みが気落ちに曇る。楽しい時間が終わったといった感じだろうか。

合体を解除した鬼たちの戦力は、余りにも乏しい。逃走に背を見せるしかない。昨晚の様に。

その時だった。

「五色鬼諸君。まだ諦めるもんじゃないよ」

男の声だった。

それは鬼たちが出てきた大型倉庫の薄暗い陰から聞こえてきた。

分厚い扉を失い誇りっぽい空気が漂っている倉庫内に、皆の視線が台詞に釣られたように集まる。

「誰？」

呟く大きさを声を溢した憑き姫が倉庫の影を窺う。他のヴァルハラメンバーも同じように窺っていた。

倒れこんでいる阿修羅も昂輝も倉庫内に視線を向ける。昂輝の右肩に並ぶ黒犬も睨んでいた。

声の主は、すべての注目を集めていた。

鬼神との戦い (六)

陰から影が、ゆらりと出てきた。

「五色鬼諸君、もう少し私が力を貸してあげよう」

そう言いながら薄暗い倉庫内から出てきたのは、真っ黒な風呂敷を頭から被った人影だった。

否、影そのものだった。

宙に浮いた黒い風呂敷の下に、濃い影が出来ているようにも見える。

「まだ妖怪変化が潜んでいたのですね」

お砂の声色に真剣な音が感じられる。

述べるお砂の言葉と同じように、ヴァルハラ探偵全員が真剣な気を放つ。ヘラヘラした態度が微塵も残さずに消え去っていた。

あの無邪気なイゴールすら、本来の強面に似合った双眸を見せている。

皆が真剣さを増していた。

周囲の空気が、風呂敷を被った影男の登場で一変している。

『その声、素詛のおじさん!?!』

影男の声を聞いた昂輝が、フェンスの向こうに止められたスクーターを思い出す。そのヒントから声の主が、同級生の素詛律子の父、素詛英二だと気付けた。

声の深さや、長い付き合いから聞き覚えたしゃべり方のイントネーションが、僅かな台詞からでも一致した。

あの影男は、素詛英二だと。

「やあ、昂輝君。久しぶりだね。いつも娘と仲良くしてくれて嬉しいよ」

何気ない言葉に疑問が溢れ出る。何故にと昂輝の心が戸惑った。その思いは直ぐに言葉と替わる。

『なんですか、その姿は!?!』

「ああ、これね。ちよつと五色鬼諸君の傷を癒す為に奉げたのだよ。おかげで影だけになってはしまったよ。あはははは」

照れくさそうに笑う影男に昂輝は、更なる困惑を深めていく。戦いを忘れて立ち尽くしていた。混乱した考えが混沌に飲まれて、どうしたら良いのか、何を述べれば良いのかも判らない。

「あれが此処に来る前に現れた妖気の正体か……」
言う軒太郎の表情は真剣だった。クールの中に熱い気が燻っている。

「ええ、そうね。間違いないわ。かなり出来るわよ」

憑き姫もまた、いつも以上に冷静な双眸に冷気を深めていた。手にある赤い本が真紅のオーラを上げている。

「何ですか、あの影法師は？ 鬼たちよりも面白そうじゃないですか」

強面だが声の色は可愛いイゴールが、新手の登場に対して評価を述べる。隣に立つお砂も同意権なのか、白いスカートの中から灰色自爆蝶の群れを発進させる。

彼女の周りを守るように蝶々が舞っていた。

この影男は、五色鬼よりも強いのだと、ヴァルハラメンバーが態度で示す。

影だけとなり黒い風呂敷を被る素詛英二の頭部がヴァルハラメンバーの方向を見る。そして漂うような薄い色合いの腕が動くと、空中を鷲掴みにするように掌が握られた。

「何!？」

その光景に何かを感じた軒太郎が、驚愕の態度を見せ俯く。途端、軒太郎の足元にあつたタールのような影が泡立ちはじめる。

影男が軒太郎の収納術に割り込みを掛けている様子であった。

自分の身に纏った服の中に、他人が腕を突っ込んできた感覚を軒太郎は味わっていた。

まるで通勤電車内の痴漢だ。実に不快である。軒太郎の顔が、威嚇を強めていく。

「とりあえず、それは返して貰うよ」

そう言いながら素詛英二の影は、掴み取った物を引き寄せるように腕を動かす。すると軒太郎の影が穴を大きくするように広がると、二つの肉片を引っ張り出した。

「貴様！ それは私のものだ!!」

軒太郎の影から引き上げられた物は、頭部を刻まれた鈍鬼の遺体と、

顔面に風穴が開いた蛇鬼の遺体だった。

つい先ほど昂輝の暗器に敗れ去った二匹の鬼が、ダラリと力無く宙を舞いながら、影男の腕の動きに合わせて阿修羅入道の側へと落ちる。

「さあ、地獄の阿修羅よ。その鬼たちも取り込みなさい。完成された五色鬼の力を見せてやるのです」

「……き、貴様、何奴……」

倒れながら言う鬼たちも、影男の存在に戸惑っている。

あれは先ほど五匹で喰らった筈の男。何故に肉体を失っても存在しているのが不思議だった。

それだけではない。

何故に我々に味方するのも分からない。

己の肉体を生贄に奉げることで鬼たちの傷を癒したり、死しても思念の影と化して力を貸してくる。

疑問が多すぎだ。

その存在、その行動、その能力。すべてが疑問の塊である。

しかし。

「……迷っている立場じゃあねえな……」

己等の立場を弁えた阿修羅入道は、近くに転がる仲間の遺体に腕を伸ばす。

そして掴んだ二体を、龍鬼と鉦鬼の口二つに運ぶ。迷いも無く食べるつもりだ。

鬼と鬼との共食いである。

『何をやっているんだ!?!』

仲間の死体を喰らう阿修羅の鬼を見て、思わず大きなテレパスで叫ぶ昂輝に、軒太郎が答えをイヤホンに返す。

「五匹で融合する積りだよ。あいつら」

『更に変化を見せるのか!?!』

「……お前だって、二段階に変貌したじゃあねえかよ。はぐはぐはぐ……」

昂輝のテレハシーに言葉を返すと阿修羅は、二匹の遺体を骨ごと噛み砕きながら飲み込んでいく。惨い音だったが、だれも阿修羅から顔を逸らさない。どうなるのかと窺っていた。

「……満ちるぞ! 分かるぞ! 体が完成体へと近づいていく!」

切断された筈の腕が、竹の子のように傷口から生え始めた。右足もだ。失った部位が生え変わる。それと同時に、弱りきっていた阿修羅の妖気が復活して行く。以前よりも強くなって行く。

「……カーカッカッカッ!」

高笑いを上げながら阿修羅入道が立ち上がる。全身に刻まれた鍵爪の傷も消えていた。

三組の双眸に力強い眼力が蘇った阿修羅が、分厚い胸板を張りなが

ら昂輝を見下ろして笑っていた。
その一つ一つの仕草に自信が溢れかえっている。

「もう、この巨体も不要だ！」

「親分さん、あれを召還しますわよ」

「頼むぜ、蘭鬼。我ら五色鬼の器。銀鎧を此処へ招きだせ！」

「がるるるるるるッ！！」

最後に鉦鬼が喉を唸らせると、六個の掌が胸の前で印を組み、何やら呪文を唱えはじめる。

それに合わせて上空に黒雲が広がり始め、やがて黒雲は渦を巻き始めた。

「なんだ、何かを召還するつもりか？」

見上げる軒太郎が言う。

渦巻く黒雲の中央が、ブラックホールの穴のように奇怪だった。明らかに別の空間と繋がっているだろうと予想できた。

あそこから何か召還されようとしている。

「六道輪廻の障害無し。地獄と空間接続終了。きます、銀鎧！」

蘭鬼のオペレートが終了すると、黒雲のトンネル内から、眩しく輝く球体が落ちて来る。

神々しい物の光臨。

その眩い光球の中には、人型のシルエットが見えた。
二メートルぐらいの影だろうか。阿修羅入道よりも小さい。

「カーカツカツカ。久しぶりに銀鎧に入るぞ」

「はい！」

「がるるッ」

そう叫ぶと阿修羅が光に手を伸ばす。刹那、阿修羅の巨体が光の中に飲み込まれていく。

一瞬でだ。

巨躯を飲み込んだ光は、より一層、光を膨らませた。目が痛くなるほどに輝く。

様子を窺っていた全員が、閃光に目を細めながらも事を見守る。

しかし、次の瞬間には、一瞬の間に光が消えた。

あれ程の発光体が消えうせる。

静かな空間が本来の色彩を取り戻すと、新たな姿に替わった五色鬼が一体立っていた。

「これが融合鬼・鬼結びの龍鬼様、最大の合体術。地獄將軍の銀甲冑だ」

光が消えた場所に凜々しく立つのは、銀色の艶やかな鎧を身に付けた龍鬼の姿だった。

日本の武者が、戦で身に付ける物だ。

甲冑の兜には二本の角があり、未だ鬼だと主張している。銀色の鎧武者の隙間からは、龍鬼の炎が噴出していた。腰には大小の太刀がぶら下がっている。

「いいな、いいな、あれ欲しい！」

軒太郎がシルバーサムライを見て、そわそわしている。何処からとも無く召還された銀の鎧が欲しくてたまらない様子だ。新作ゲームの情報を雑誌で眺めながら発売日を期待して待つ小学生のようだった。

扇情の涎を心中で流す。

「まだ、未完成の術だが、鬼二匹分の遺体を媒体に無理矢理の補助をした。狼小僧如きならば、この術で圧倒だ！」

銀鎧の中から聞こえて来る怒号は龍鬼一人のものだけ。死んでいるはずの鈍鬼や蛇鬼はともかく、蘭鬼か鉾鬼の声は聞こえてこない。意識が在るのかも不明である。

「二人とも、後は俺に任せてもらっせー」

おそらく銀鎧の中にいるはずの仲間への言葉だろう。返事は無い。しかし龍鬼の言葉の後に、キラリと夏の日差しを跳ね返す鏡のような鎧の表面に、何かが映り込む。蘭鬼と鉾鬼の顔だった。

二匹の鬼が、ガラス越しに外を見ている様子である。

「それが、貴方の全力ですか？」

「おうよ、狼小僧。これが五色鬼最大最高の術だ。」

今までの屈辱の数々、利子をたんまり乗せて返してやるぜ。覚悟しやがれよ！」

銀鎧をまとった龍鬼が感情を露に述べると、鎧の隙間から燃え出る炎が多くなる。

メラメラと火力を増していた。

昂輝にも感じ取れていた。

この銀鎧を身に纏った龍鬼の実力を。

確実に強くなっている。

間違いなく、今までのようには行かないと思えた。

だが、昂輝には時間が無い。

己の再生能力が、サンプル細胞三つを上回り淘汰するのも長い時間のことではないだろう。事実、双頭の黒犬が、またもや元気を失い始めている。

鬼神との戦い (七) (前書き)

メリークリスマスですなw

鬼神との戦い (七)

「メルとギブソンの元気が無くなってきてますね……、もう長くないです」

二匹のヘルハウンドにイゴールが勝手な名前を付けていた。どっちがメルで、どっちがキブソンかは分からない。だが、何となく世紀末ばい名前であった。

「もしもメルとギブソンが消えたら、右腕の骨格魔人・大斬刀も再生力に負けて直ぐに形を崩してしまいますよ」

更にイゴールが、骨の斬馬刀にまで、それっぽい名前を付けていた。しかし、命名された名前がどうあれ、イゴールの言っていることに間違いはない。時間が無いのは真である。軒太郎が携帯を口元に運ぶ。

「昂輝君、攻めなさい」

携帯から伝わる指示に昂輝が動いた。兎に角、軒太郎の言う通り攻撃を敢行する。

砂埃を上げながら走り出した狼の双眸が、キラリと鋭く凄む。殺気が滲んでいた。

若干、鬼畜二頭の覇気は落ちているが、まだまだ狂犬の様は獰猛だ。敵を食い殺さんと昂輝に従う。

『覚悟！』

吼えるようなテレパシーに、灰色の獣毛が逆立つ。まるで、一本一本が針金だ。

凜とした狼面に気合が引き締まる。

その成りから、鍵爪で八つ裂きにしてやろうと、斬馬刀と真つ二つにしてやろうと、黒犬たちで噛み殺してやろうと、そんな攻撃的感情が伝わって来た。

野獣のような感情を漲らせる昂輝を、銀鎧の龍鬼が直立不動で待ち受けた。

立つ姿に自信が窺える。

ギイギイ。

緊張に奥歯を噛む昂輝。

立場が逆転しているように見えた。

攻め込んだ昂輝のほうが、いつの間にか余裕が少ない。銀鎧を纏った龍鬼に飲まれている。

走る昂輝が、今度は跳ねた。

イゴールが命名した骨格魔人・大斬刀が、宙で振り上げられた。

「こいや、小僧！」

吼える龍鬼の兜を狙い、大斬刀が真つ直ぐに振り下ろされる。

助走、跳躍、重み、腕力、切れ味、それらが骨の大太刀に斬力と化して宿っていた。

空気を裂きながら銀兜に迫り行く。

龍鬼は直立のまま動かない。

直撃。

そう思えた瞬間、大斬刀の一撃は空ぶる。骨の刃を銀鎧に触れも掠りもしなかった。焼けた地面を力ち割るように減り込む。

『なにッ！？』

攻撃を躲された昂輝が、思わず驚きを露にした。龍鬼が右の踵を捻り、半身分よこに向けて躲したのだ。僅かな最小の動作で巨大な斬激を回避する。見事なぐらい紙一重の回避術だった。繊細な距離での回避に、ヴァルハラの方も感心している。

更に続く昂輝の前蹴り。

シルバーの顔面を狙い下から登る狼の大足には、肉キュウが可愛らしく見た。しかし、その蹴りには鋭い爪が付いている。その爪で顔面の皮を削ぎ落とす積りだ。

『でえい！』

気合の念と共に右足が飛んで行く。鋭い爪先で閃光が走る。格闘技の経験どころか、喧嘩の経験も無いに等しい好青年にしては、上等な前蹴りだった。バネもある。柔軟性もある。力強さもある。勢いもある。若さまでもある。

しかしだ。

「そうは、いかねえーよ」

『ぬう！』

昂輝の足先に生えた鋭い爪が届くよりも先に、龍鬼の中段廻し蹴りが昂輝の脇腹を捉えていた。

肉を叩く音と肋骨が響く音が肺の中で重複して行くと、昂輝の体に衝撃が轟く。

苦しい。

苦痛の塊が、喉の奥から吐き出される。

三頭の獣面がダメージに歪む。

犬たちは涎を吐いていた。

速い蹴りだった。

先に放った昂輝の蹴りよりも遅く動いたにも関わらず、先に龍鬼の蹴りが命中したのだ。重い蹴りの衝撃に、片足で支えていた昂輝の体が耐えきれず横に飛んでいた。

『なんの！』

三メートルほど飛ばされたが、昂輝は転倒しない。両脚の爪を立てて耐えてみせる。そして直ぐに攻撃に戻った。根性を見せる。

バランスを取り戻した昂輝が大きく息を吸い込む。腹が引っ込み、胸が膨らむ。

すると左肩の黒犬二匹が大きく口を開き、炎の息を吹き放つ。昂輝と黒犬二頭の肺は繋がっている様子だ。

二つの火炎は交じり合い扇型に広がると龍鬼を激しく包む。だが、当然の如くファイヤーブレスは龍鬼に通じない。兜の下で馬鹿馬鹿しいと龍鬼が笑っていた。

龍鬼の炎が火取り魔の生皮に防がれるように、ヘルハウンドの炎が龍鬼に通じる訳がない。

どちらの炎も地獄の業火なのだ。

ならば何故に　。

「地獄の業火を操る俺様に、炎の攻撃が利くか！」

嘲る龍鬼の視界が炎の息から腫れると、そこには昂輝の姿がなかった。

炎の攻撃は、目くらましである。

「ちっ、小賢しい！」

舌打ちを鳴らしながら辺りを見回す龍鬼。されど昂輝の姿は見当たらない。見事に姿を消している。

龍鬼の愚痴る通りだ。やはり昂輝は小賢しい。

鈍鬼や蛇鬼との戦いで見せた暗器の使いようといい、姑息な戦術の実行力は、軒太郎の指示なくしても器用にこなしている。

真っ直ぐに戦おうとする思いと、与えられた暗器、それに姑息な戦術が、昂輝の微妙な戦闘スタイルなのかも知れない。

信念と技術が対極に位置している。

「上か！」

僅かな空気の揺らぎから昂輝の居場所を探り当てた龍鬼が上を見る。そこには昂輝が居た。

だが昂輝は、太陽を背にして居る。太陽光の眩しさに更なる目くらましを作っていた。

作戦の内容は、軒太郎の指示である。

「またかよ!？」

龍鬼は臉に力を込めながら顔を逸らす。太陽光がそうさせた。

仕掛けに仕掛けを重ね、隙に隙を誘った昂輝が天から攻める。

白い骨の角が真下を向いていた。全体重を乗せたまま加速を増して行く。

『喰らえ!』

そう叫びながら急降下を続ける昂輝が、大斬刀を龍鬼の胸に突き立てる。

全体重が、刃の威力と代わる。

鋼が甲高く響いた。

凄い音だ。

鼓膜に鉛の杭を打ち込んだような音であった。

重く硬い手応えが骨の刀身を伝わり昂輝の全身に帰ってくる。己の体重が下へと沈む。

だが、この感触は貫けていない。

感触を確かめるまでもない。眼前の切っ先が、一ミリも銀の鎧に刺さっていないのだ。

斬馬刀を突きたてたまま昂輝の体が止まっていた。

仮面の下で龍鬼の口元が笑っているのが見えた。白い歯に二本の牙

をちらつかせながら失笑している。

「どうだ、硬いだろ、すげーだろー」

胸元で止まった斬馬刀を龍鬼が、両掌で挟むように捕まえた。そして力任せに振り回した。昂輝の体が玩具のように振り回されている。なすがままだった。

阿修羅入道から銀鎧へとサイズが変わり、身長も体重も半分以下になっただけが、その腕力は六本腕の巨人と同格だった。寧ろパワーアップしているかも知れない。

「はっはっはっ。随分と弱くなつてないか、小僧!？」

振り回した斬馬刀ごと力任せに地面に叩きつけた。

昂輝の体が地に弾む。視界が激しく揺れていた。

黒犬たちが涎を散らす。昂輝もだ。

鈍い音が幾つか聞こえた。骨が数本いかれた音だろう。

しかし、問題は無い。

だが、骨の斬馬刀に亀裂が入る。これは大問題だ。

双頭の黒犬が、また涎を散らす。

今度は昂輝も一緒に涎を散らしていた。

鬼神との戦い (八) (前書き)

年末だね。今年は寝正月の予定だよw

鬼神との戦い (八)

『つ、強い……』

昂輝がワンバウンドしながら呟いた。テレパシーでなければ衝撃に呟くことすら出来なかっただろう。舌を噛む。

跳ね上がる振動が全身から飛び散ると、大きな苦痛に変わった。

そんな中、視界に映る銀色の閃光。一瞬、流れ星かと思ったが、今は昼だ。有り得ないと直ぐに気付く。

昂輝の跳ねた体は、まだ宙にあった。そこに龍鬼の拳が、キラキラと日差しを弾きながら飛んで来たのだ。

ストレートなのかフックなのか、はたまたアッパーなのかも判らない。右の拳なのか左の拳なのかも判らなかつた。

もしかしたら拳でなく蹴りだったのかもしれない。

その一撃が空中を跳ねながら回る昂輝の顔面にヒットした。下顎が碎ける音が鼓膜に届く。

鈍い音だつた。

だが、ここ数日の間に、幾度となく聞いた音である。

骨が碎ける音。

永遠の呪いが発動したとはいえ、今年十八歳になろうとしている少年が、幾度も耳にするような音ではない。聞きなれるには惨すぎる音であつた。

その音を聞きながら、再び浴びせられた攻撃の衝撃に昂輝は、眩暈を感じながら一撃を受け止めていた。

『くはああああ！』

揺れる視界が半分だけ真っ白に変わった。右目が飛び出した様子だ。世界の半分ぐらい白く染まるさ。

次に昂輝が気付いた時には、かなり上空に飛んでいるのが分かった。

景色が良い。

大地が下に見える。

森の木々が下に見える。

遠くに住み慣れた町が見える。その向こうに在る水平線まで見えた。

もう次期、あの町とも別れがやってくる。

あの海とも。

こんな時に、そんな事を考えてしまう。

やはり、名残惜しいのか。

近くに元製薬会社屋上が見えた。

四階建ての廃墟と同じぐらいの高さまで飛んだらしい。

否、それよりも高く飛んでいる。屋上の床が見えていた。

ヴァルハラ仲間たちが小さく見える。

軒太郎、イゴール、お砂。

それに憑き姫。

憑き姫の可愛くも美しい顔が見えた。表情は薄い。いつものことだ。

昂輝は、そこがたらない。

「おらッ！」

背後から無粋な声が聞こえた。龍鬼の声だ。

しかし銀色の姿は見えなかった。

背中に攻撃を喰らい、衝撃に視界がずれると、体が真横に飛んで行く。

一発で背骨が折れた。

間違いない。

手足の先まで痺れるような電気が走った。

普通の人間ならば、これで全身麻痺が後遺症として残るだろう。

それだけの強打だった。

横に飛び行く昂輝の体が、薄汚れた白い廃墟の壁に激突して、コンクリートの壁を突き破る。

厚い壁が、発泡スチロールの如く容易く砕けた。

灰色のコンクリート片が散らばるように転がり、昂輝も転がる。そして二つ目の壁に激突して止まった。

激突した壁にも輝が走る。刹那、亀裂へと変り上へと伸びていく。廃墟が激しく震えていた。

『ぐううう………』

そこは荒れ果てた廊下だった。

割れた窓ガラスの破片が散らばり、木の葉や瓦礫も転がっている。舞い上がった古びた埃が空気を濁していた。

昂輝は立ち上がるうと力を混めた。すると脇腹に激痛が走る。瓦礫が杭のように刺さっていた。

そこから鮮血が雫となって垂れている。

しかし昂輝が傷に気付いた途端、落ちた紅い雫が上へと登る。刺さった木片の先から傷口に帰っていく。

可笑しな光景だが、もう見慣れた奇跡である。不思議にも感じない。

「畜生……。ぐうぐうぐう……」

脇腹の瓦礫を、寝そべったまま昂輝が引き剥く。食いしばった牙の隙間から呻きが漏れた。そして気付くと、右肩のヘルハウンド二匹が頂垂れるように気絶をしている。

二匹とも長い舌をダラリと口の中からぶら下げていた。一匹は泡まで出している。

『斬馬刀も折れているじゃないか……』

言う通りだった。

右手の骨刀もポッキリと真ん中から折れている。

これでは刀ではなく、良くても斧か鉞であった。しかも刃毀れが酷い。まともな物が切れるか怪しいほどだ。

その折れた骨の武器を杖代わりに立ち上がる。

その間にも、全身に出来た打身や生傷が呪いの再生力に消えて行く。体力も回復して行くのが解った。

昂輝は、冷静さを取り戻して行く。

ゆらゆらと歩き、己が突き破った穴の前に立つ昂輝。そして先ほど

まで戦っていた広場を見下ろす。
どうやら自分は廃墟の四階にいる様子だと気付く。
見下ろす先に、昂輝を圧倒した銀鎧の武者が堂々と立って居た。
見上げている。余裕なのか龍鬼は、昂輝がステージに戻るのを黙って待って居た。

「そろそろサンプル細胞も時間いっぱいかな……」

廃墟の四階から姿を見せた昂輝を窺い、軒太郎が言った。その言葉から僅かに間を空けて昂輝の姿に異変が訪れる。

『あっ……』

斬馬刀は灰の様に崩れて零れ落ち、骨粉のパウダーとがして廊下の床に山となっていく。
てんこ盛りだ。

籠もった空気を汚し、床に溜まる埃と比べて骨粉は、白く美しくかった。とても、昂輝の生命力を媒体に成長した悪魔の骨と思えないほどに純白で清純だった。

零れ落ちた骨の武器を見ていた昂輝の左肩に、ドロリと気味の悪い感触が流れる。

昂輝が違和感に眼をやると、黒犬たちの形がグロテスクに崩れていく。

『腐っていやがる……』

酷い有様だった。

「ああ……、メルとギブソンが……」

イゴールが、勝手に付けた名前を悲しげに呼んだ。

気絶しているヘルハウンド二匹の肉が腐乱して爛れ落ちていく。腐肉が削げ落ち髑髏だけと化すと、二匹の頭部は古びた模型が壊れるように左肩から滑り落ちていった。

短い付き合いだったが、可愛いペットを同時に失った昂輝は、若干の寂しさを感じていた。

本来ならば、数百年生きる筈であろう地獄の番犬たちにしては、短すぎる一生であった。

メルとギブソンは、安らかに地獄へ帰る。

そして昂輝が元の姿に戻った。

普通の人狼に。

軒太郎が携帯電話を口元に動かす。

「昂輝君、まだあれは使うなよ。タイミングではない」

昂輝の体内に残る暗器の数は、もう殆ど無い。しかし、タイミングを間違えてはいけない装備が一つ残っていた。

勝負を決するだろう武器。取っておきつつやつである。

軒太郎は、その暗器の使用について注意したのだろう。

だが四階に見える昂輝からは返答のテレパシーが帰ってこない。昂輝は一連の攻撃で、耳に嵌めていたイヤホンを何処かに落とした様子だ。

しかも戦闘に必死な昂輝は、それに気付いていない。指示があったことも、イヤホンが外れていることも気付いていないのだ。

「返事が無い。聞こえていないのか？」

軒太郎は気付いた様子だ。これは不味いかと思う。

『よし、あれを使ってみよう』

何を考え付いたのか、昂輝のテレパシーが皆に届いた。

軒太郎の声は昂輝に届いていないが、昂輝のテレパシーは容易く皆に届く。

攻撃を決意した昂輝の双眸に、男らしい気合が満ちる。大胆な行動を取ろうとしているのが熱い瞳から鑑みれた。

鬼神との戦い (九) (前書き)

2009年もラストだね

今年は辛い年だったけど、来年は良い年にしたいです^^

鬼神との戦い (九)

「いかな、まだ早いだろ……」

そう言うが、軒太郎に焦りはない。

昂輝が何をしようとしているのか、大体の予想は付く。それが失敗しようが成功しようが、関係ない。昂輝が負けても自分たちが戦えば良い。それだけだ。

四階の廊下に出来た壁の穴から昂輝が外を見下ろす。その先には銀鎧を纏った龍鬼が堂々とした態度で映っていた。ふてぶてしい。

「さつさと降りて来いよ、狼小僧。地獄の鬼を待たせるなんて、ふてい野郎だぜ！」

小馬鹿にする龍鬼の威喝が、銀色の鎧内から飛んで行く。昂輝を挑発していた。

しかし、その程度の挑発に昂輝は乗らない。冷静さを保つ。

妖怪わいらを追って、初めて憑き姫や軒太郎とであった時よりも、確実に昂輝の成長が窺えた。

戦闘という環境が、急速に少年の精神力を高めさせている。

昂輝は己の眼前へ、両手に生えた六本の鎌を並べる。かつて鎌鼬三兄弟の両手に在った鋭い鎌から妖気が怪しく光って揺らめく。サンプルのヘルハウンドや骨の斬馬刀は失ったが、まだ暗器の武具はそのままだ。主武器とも言える鎌鼬の鎌がまだ健在である。

『これならば、どうだ!』

そして昂輝は、四階の高さから、地上の龍鬼目指して飛んだ。両手の爪を頭上に腕ごと伸ばし、頭から突っ込んで行く。水泳選手がプールに飛び込むように 龍鬼を目指して。

「ほほう、正面から来るか!」

急降下する昂輝が腰を捻り、全身に回転を加える。

両手両脚を真っ直ぐに伸ばした昂輝が、スクリューの如く回り、トルネードの如く勢いを増す。まさに回転するマグナム弾と化す。全身がドリルだ。

それだけではない。

「スイッチON!」

更に携帯のボタンを押すと、昂輝の足の裏からジェット噴射の炎が轟音と共に吹き出る。高鳴りに昂輝の体が加速と回転力を増して突き進んで行った。

空中での瞬間ダッシュに攻撃力が倍増していく。

「なんと!」

昂輝の体が刹那の加速に、光速のレベルに達したのか輝き始めた。閃光の砲弾に見える。

「光った、凄い!?!」

思わす声を上げる龍鬼。鬼もビツクリであった。

「凄い早さだ、光速に達したか!？」

輝きながら唸る昂輝を見て軒太郎が歓喜していた。これは面白い技だと感心している。

「あれ、鎌が太陽光を反射して光っているの？」

「多分そうです」

冷静な憑き姫の意見にイゴールが答える。
そう容易く光速には、達しない。残念。

「ちっ。ロマンがねえ〜な〜……」

否定された軒太郎が、すねた声でぼやく。
詰まらない奴らだとガツカリしている様子だ。
人力で光速に達する攻撃とは、何となくロマンを感じる軒太郎だった。男の子ならば、この思いがわかってくれる筈だと、世界の半分に訴える。

『爪の数は、鎌鼬三匹分。ビル四階分の高さからダイブに、全身を捻り回転力で攻撃力を増す。更に暗器のジェット噴射で加速を加えたスクリューアタック。これならどうだ!』

銀鎧に包まれた龍鬼を指しダイビングした昂輝が、回転しながら突っ込んで行く。

テレパシーでなければ舌を噛む程の台詞を並べながら。

「おもしれえ！ 威力に自信があるのなら、正面から受けて立つてやるぜ。この地獄將軍の鎧でな！！」

鎧の耐久力に自信が有るのか龍鬼は、昂輝の攻撃を正面から受け止める様子だった。

骨の斬馬刀を受け止めた時と同じように、逞しい胸を凜々しく張り出した。

その中心を目掛けて昂輝が落ちて来る。

『うりやあああああああ！』

「こいややあああああ！」

放たれたドリルの如く、飛び込む昂輝。

眩しく光を弾く銀鎧を纏った龍鬼が、それを受け止める。

攻は、昂輝。

防は、龍鬼。

攻防を闘ぎあう様に二匹の怪物がぶつかり合った。

激しい金属音が銀鎧の胸から甲高く響いた。否、鎌鼬の爪から響いたのかもしれない。

回転する爪と、受け止めた鎧の狭間から、激しい火花が飛び散っていた。銀鎧の表面に、オレンジ色の光が鮮やかに映り込む。

衝撃に耐える龍鬼の踵が鳴動と共に地面に減り込んだ。

昂輝が奥歯を強く噛む中、伸びきった昂輝の全身にも強い衝撃が押し潰すように押し掛かって来ていた。

攻防に、激しさが轟き続ける。

男の意地が、厚い気迫が、負けたくない思いが、互いに押し合う。正面衝突に男を映す。

引かない。

どちらも引く訳が無い。

「その程度か、狼小僧!？」

臆する事無く正面から若い勢いを受け止めた龍鬼が、自信に満ちた罵声を浴びせる。

昂輝の攻撃は、利いていない。

押し切れない。

耐え凌がれた。

それでも回転を続けて、銀の胸元を抉り続ける。

火花が悲しくも切なく散る。まるで線香花火だった。

「今度は、こっちから行くぜ」

ゆうや否や、龍鬼の蹴りが跳ね上がると、胸元で回転を続けている昂輝を、スピーディーに蹴り上げた。銀の爪先が、昂輝の腹に突き刺さり真上に飛ばす。蹴り飛ばされた昂輝の体は、未だ回っていた。

「おらっ!」

宙に舞う昂輝に、今度は大振りのフックを放つ龍鬼。

豪快なスイングパンチが狼の頭部を殴りつけると、スクリューの如く回っていた昂輝の体が今度は、円盤のように横回転になって飛んで行く。

今日の昂輝は、本当に良く回る日だった。

そして昂輝は、地面に体を擦らせながら滑るように回り転がって止まった。

乾いた砂埃が舞い上がり、横たわる昂輝が朦朧とした意識の中で全身を小刻みに痙攣させている。

その光景から今の拳が、相当な強打だと窺えた。

銀鎧を身に纏った龍鬼の実力は、まごうことなく本物である。あの鎧の中には、巨大黒鬼の鉋鬼も宿っているのだ。

融合鬼・鬼結びの龍鬼が見せる合体術は、効率良く他の鬼たちの能力を取り込んでいた。

「いいぞ、鬼諸君。もつと昂輝君を痛めつけなさい。身も心もズタズタにして、不幸を堪能させて上げなさい。それが私の目的。願いです」

ゆらゆらと頭に被った黒い布切れを揺らしながら語る素詛英二の残留思念。

影と化した呪いの権化は、圧倒実力差に押され苦しむ姿を眺めながら、微笑んでいるように見えた。

「いつまで寝そべっていやがる。さっさと起きやがれ！」

そう言い片手の掌を前に出した龍鬼が、紫鬼女の蘭鬼が使った妖術、鬼刻弾丸を発射させた。

『つあッ』

マシンガンの如く連射された角の弾丸が倒れている昂輝を捕らえる

と、その痛みに急かされるように跳ね起きる。

寝た子を起こすには、暴力的行為だった。しかし効果覿面である。

『畜生……』

無理矢理にヤル気を引き出された昂輝が愚痴ると走り出す。

「それにしても、両脚に仕組んだ火力をジェットエンジンのように使うとなんて面白いことを考えましたね、イゴール感激です」

「まったくだ。切羽詰った昂輝君がタイミングを誤って、あれを使うかと思っただよ」

続いて軒太郎が言った。

鬼神との戦い (九) (後書き)

では、良い年を

また2010年に、お会いしましょう^^

鬼神との戦い (十) (前書き)

あけおめー、ことよろー^^

鬼神との戦い (十)

走る昂輝に対して龍鬼も走り出した。

互いに向かつて走る二人。真っ直ぐな突進に躊躇いが無い。一踏み一踏みに熱気が上昇していく。

迫り合う互いが、魂を音に変えて吐き出した。雄のボイスが唸って吼える。

『ぜえあ!』

「どおりや!」

放たれる二人の拳。

情熱のストレートパンチが両者の顔面を強打した。

音が鳴る。

鉄鍋の底を叩くような金物の音と、吊るされた牛肉をサンドバック代わりに叩くような生っぽい音。

両者の顔面から、それらの音が響いた。

『ッが!』

しかし、弾き飛んだのは昂輝一人だった。

龍鬼は仮面に狼の爪を喰らいながら拳を振りきり昂輝を力任せに突き飛ばす。

銀の仮面には傷一つ無いが、狼の鼻が潰れ、上顎が減り込んでいた。抜けた牙の数々が、無限の治癒力に引つ張られ昂輝を追いかけ飛んで行く。

しかし昂輝は倒れない。踵に気合を込めて踏み止まる。

『糞!』

飛んできた己の牙が口の中に帰還する中、露骨な愚痴を吐く昂輝。強烈な一撃に朦朧とした視界。軽く頭をこずきながら首を左右に振り、意識を覚ます。

そして強く瞑った瞼を開くと、自分に向かって龍鬼が迫って来ているのに気付く。

「昂輝君、ディフェンスだ!」

軒太郎の指示が、携帯電話を使わずに飛んできた。昂輝は咄嗟に構えてから気が付いた。

イヤホンが無いことに。

龍鬼が走り寄ると、二人が再び制空権を重ね合う。

軒太郎の指示に構えを作った昂輝に龍鬼が拳を繰り出す。鎧の隙間から炎が噴出す厚い拳だった。

「腕ごと首を、へし折ってやるぞ!」

大外いっぱいぱいぱいに弧を描きながら炎の尾を引く魔人の拳が、眼前に構えた昂輝の両腕を叩いた。

ゴギッ、と鈍い骨折音。

やはり昂輝の防御は無意味だった。龍鬼の言う通り、ガードした腕をへし折り頭部を殴る。

首の骨が軋む音はつきり聞こえた。そして昂輝の体は風車の如く

その場で回る。
回転する手足が遠心力に振られて、時折地面にかすっていた。
時折砂埃を弾く。

「また、回った」

「そうね……」

イゴールの言葉に、情けないと言った感じで憑き姫が応えていた。
鷹揚の薄い眉間に、ふがないと皺を寄せる。

拳の一振りに回転していた昂輝が地に落ちる。頭からだ。
どんつ、と、地面に弾む狼体か音がした。

『ぐうううう……』

「おら、立てよ」

四つんばいで立ち上がるうとしていた昂輝の首根っこを鷲掴みにする龍鬼。そのまま昂輝を引きずり起こす。

昂輝が無理矢理にも立ち上がる。

龍鬼が仮面の下で優越感に浸るような笑みを見せていた。

刹那、引きずり起こされた昂輝が、首根っこを掴む銀の籠手を払う。
素早い動きだった。

そして、ゴキゴキと不自然な音が鳴り響いた。

「あ」

キョトンする龍鬼。

先程まで狼の首根っこを掴んでいた腕が、肘の辺りから可笑しな方向に捻じれるように曲がっていた。己の曲がった腕を見ながら龍鬼は、一瞬の間、時間が止まったかのように呆然としていた。

そして、重力に負けた肘が、曲がらない方向に倒れると龍鬼は、激痛に我を取り戻し悲鳴を上げた。

「うぎゃゃゃゃゃ！ 俺の腕が！..！」

「昂輝は、何をしたの？」

「サブミッションだよ」

「サブミッション？」

「そう、関節技のことだ。打撃、斬激が鎧の強度で通じなくても、関節部分への攻撃は別だ。

この土壇場で、それに気付くとは昂輝君も捨てたもんじゃないね」

「へ〜」

軒太郎の説明に、ことの次第を理解した憑き姫が、女々しく悲鳴を散らす龍鬼を見ながら感心していた。

確かに腕が捻じれた龍鬼は、銀鎧を召還していらいの狼狽を見せている。

『とっっ！』

昂輝の軽いジャンプ。そこからの低空ドロップキックが龍鬼の左足の膝を正面から蹴り飛ばす。

ドロップキックの衝撃に膝関節が伸びきり筋がつると、龍鬼の体軀が背中からバタリと倒れた。

銀鎧を纏ってから初のダウンに、倒れた龍鬼も驚いていた。鉄々が五月蠅く鳴る。

「こん畜生！」

無事な右手を地に着いて、背を起こす龍鬼。しかし尻を付く龍鬼の左肘に、昂輝が容赦無くローキックを打ち込む。

『せい、せい、せい！』

「うぎゃぎゃぎゃ！」

負傷した腕に攻撃が集中した。

一発、二発、三発と続くローキックの脛が、痛めた左肘を蹴りつけるたびに鬼が泣くような声を漏らす。

更にローキックの乱打が続くな、九発目が逆の右腕を狙う。尻餅のまま体を支えていた右腕を払い飛ばしたのだ。体が後ろに倒れ、両脚がシーソーのように浮き上がる。

『キャッチ！』

浮き上がった銀の両足首を昂輝が、がっちりと掴む。己の両脇の下に龍鬼の両脚を抱え込むと、腹の前でクラッチを組んだ。

このまま振り回せばプロレス技のジャイアントスイング。相手の体をひっくり返せばポストンクラブ（逆エビ固め）だ。

だが、昂輝はどちらの技にも移らず、自分の片膝を持ち上げ蹴りの

体制を見せた。

狙いは股間。

金的へのストンピング。

『でえあああ！』

一喝と共に繰り出された昂輝の踵が龍鬼の股間に打ち込まれた。しかし、股間にもプロテクターが万全である。股間への蹴りは堅い物に阻まれた。利いていない。

だが、それでも諦めない昂輝は、股間に押し当てた踵を小刻みに揺らして攻め立てる。

「ふもももおおおお！！」

電気あんま攻撃である。

小刻みな振動が、快楽と苦痛の境目にありながら龍鬼を襲った。悲鳴なのか歓喜の声なのか判らない声を上げてのたうち回る。

小学生レベルの攻撃だったが、確実に龍鬼の体力を削り取っていた。

龍鬼が可笑しな声を上げる中、昂輝が右の足だけを脇の下から開放した。そして己の両脚を龍鬼の左脚に巻きつけると、背中から後方に倒れて行く。

「おお、アキレス腱固めか！」

昂輝が仕掛けた技の名を、軒太郎が微笑みながら述べた。

その言葉と同時に、昂輝の背が地面に付いた。

梃子の原理で龍鬼の足首を攻め立てる。強制的に折り曲げられた足

首から、ブチブチと筋が切れて行く痛々しい音が聞こえてきた。龍鬼の脳には、初体験の痛みが伝わっていった。かつて龍鬼が暴れまわった時代には有り得なかった攻撃に、痛み以上の困惑を見せている。

「きいいいあああああああ！」

アキレス腱が切れる音を脇の下から確認した昂輝は、技を解いて立ち上がる。

足元では慟哭に浸る銀鎧が、足首を押さえながら震えていた。それを見下ろす昂輝も、中学生時代に友達とじゃれ合うように遊んだプロレス技が、こつも完璧に決まるとは驚いていた。アキレス腱の切れる音も始めて聞いたが、正直なところ心地良くないと鳥肌を立てていた。

狼でも鳥肌は立つ。

鬼神との戦い（決着）

「うあああああ、いてええええよよおおお」

「親分しっかりして！」

背を丸め震える銀鎧の中から蘭鬼の艶々した声が、心配そうに聞こえてくる。

その銀鎧が水銀の波のように揺らめいていた。形を崩し始めている。龍鬼の合体術が痛みの余り集中を乱している様子だ。

このままでは術が解けてしまうと蘭鬼は心配しているのであろう。

『ん？　もしかして……』

昂輝も気付いた。

片足を後ろに振り被ると、サッカーボールでも蹴り飛ばすような蹴りを銀鎧の背中に打ち込んだ。

ドンス、と音が鳴る。

金や鉄を蹴った堅い音でなかった。間違いなく軟らかい肉を攻めた音である。しかし筋肉というより贅肉を蹴りつけたような感触。銀の鎧が今までの強度を失い、ナマコのようになっている。

「やばい、やばいわ。親分融合をといてくださいまし！」

「がるるるるー！」

「うあああいてえええよよよおおお」

鎧に異変が見え始めたことに危機感を感じた蘭鬼と鉾鬼が焦りを言葉にした。

このままでは自分たち二人は、何も出来ないまま巻き添えのように殺されてしまう。

しかし慟哭に浸る龍鬼には、その声が届いていない。四匹の鬼を取り込んだまま離そうとしない。

『さあ、立つてください』

昂輝が龍鬼の首根っこを鷲掴みにして引きずり起こす。そして無理矢理引きずり起こした銀鎧に、気合を入れるとボディブローを一発撃った。

「ぶっっ！」

更に首筋へと袈裟切りのチョップ。

「ぐぐッ！」

更に膝蹴りを顎へ。

「がごー！」

今打ち込んだ三つの攻撃に、昂輝が感じた攻撃の感触は、やはり軟らかいもの。明らかにどの攻撃も効いている。

「これは勝機だな。あれを使うなら今しかない」

イヤホンを失った昂輝には、軒太郎の言葉は届いていない。だが、

昂輝も軒太郎と同じことを考えていた。

ヴアルハラメンバーから体内に仕込まれた暗器の数々。その中でも決め技と位置づけられ、最後の最後のみを使用を注意されていた仕掛けがある。

それを使うなら今しかないと考えていた。

昂輝がふら付きながらもやっと立つ龍鬼に背を見せながら走り出した。

助走の為の距離を作る。

『軒太郎さん、あれを使います!』

「ああ、かまわんが、他の装備を解除しなさい。それだけは忘れるなよ。キミの体には、貴重な武具も装備させているのだからね。なくしたら弁償物だよ」

『はい!』

元気にテレパシーで返事を返すと昂輝は、携帯のボタンを操作した。すると昂輝の体外体内から色々な音が聞こえてくる。その音に合わせて昂輝の体に貼り付けてあった火取り魔の御札や鎌鼬の鎌が外れていった。地面に落ちる。

それだけではなく、体内に仕込まれていた仕掛けの部品も拘束を解かれて、呪いの生命力に異物と判断されると体の外へ排除されていく。

昂輝の狼肌を突き破り、様々な器具が吐き出されて落ちていった。

「おおお〜。ついに超必殺技、ファイナルダイナマイトキックを使

うのですね！」

これから昂輝が敢行しようとしている攻撃に、勝手な命名を付けるイゴールが嬉しそうに飛び跳ねていた。

分厚い大胸筋の前でごっつい両掌を小刻みに叩いて拍手をしている。

その横で軒太郎が、憑き姫とお砂に声を掛けた。

「憑き姫、ぬりかべを出す準備をしてくれ。お砂ねえさんも、蝶のカーテンを準備してください」

「え、どうして？」

憑き姫が軒太郎の顔を見上げながら聞きなおす。

しかし、それに対して声を返したのはお砂だった。

「いいじゃない憑き姫ちゃん。ここは殿方の娯楽に付き合っただけ
ましよう」

「……」

そう言いお砂が優しく微笑んだ。その笑みを見上げた憑き姫は、仕方ないと言った表情で、カードファイルからぬりかべのカードを取り出した。

一方、距離を置いた両者が向かい合っていた。

凜として銀鎧を睨む昂輝。

ふら付きながらも片足だけで体を支える龍鬼。

そろりとクライマックスを迎えようとしていることは、両者に悟れた。

「く、糞餓鬼めが……」

此処に来て始めて龍鬼が腰に在る刀の柄に手を伸ばす。居合いで太刀を抜く気だ。傷ついた姿勢がそれを示していた。

だが、集中力と妖力を削られた銀鎧は脂肪のように垂れ下がっていた。遠目にも強度の不甲斐無さが見て取れる。あれはもう鎧の役目を果たしていない。

それを悟った龍鬼は、残されたすべての妖力を太刀に移して一撃必殺を狙っている様子だ。

握る柄に炎が燃え上がる。

歪んだ銀の鏡面で、うろたえる蘭鬼と鉋鬼の顔が映っていた。だが意地を貫く龍鬼は、それを無視する。氣勢を張っていた。

『行くぞ！』

昂輝が叫んだ。途端に走り出す。低い大勢で疾風の如し勢いであった。

狼の脚が砂埃をかき上げ加速していく。居合いに太刀の柄を握った銀鎧の敵目掛けて臆する事無く特攻を仕掛ける。

「これで決めてやるぞっ！」

龍鬼が柄縄を握る手に力を込めながら更に深く構えた。満身創痕の体から、最後の―撃を繰り出そうとしている。

龍鬼の魂が燃え上がる。

その業火は魂から噴出し、体から噴出し、全身から噴出し、鎧から噴出す。

この一太刀を最後に決める積りだ。

この一太刀が最後の攻撃だと悟っていた。

もしも外したら負け。

もしも当てても、これで勝利しても、まだ四人のヴァルハラメンバ―が控えている。

どちらに転んでも敗北は決まっていた。

だからこそ、この一太刀に全身全霊を籠められる。

覚悟は決まっていた。

「こいや！　があきやあああ！！」

走る昂輝よりも先に、互いが発する殺気が二人の中間でぶつかり合い押し合っていた。

空間が気迫に歪んで歪む。空気が威圧に轟き唸る。

距離はまだあった。しかし先に龍鬼が動いた。

「食らえ、鬼一文字斬り！」

一瞬の動作に鞘から太刀が引き抜かれる。居合いの刹那に斬激が真空の刃に変わり飛んで行った。

一の字の閃光が昂輝に飛び迫る。

鬼の執念が感じられた。

『とっつ！』

だが昂輝は、その一撃を跳躍で躲す。そのまま飛んで龍鬼を目指す。龍鬼が放った斬激は、遙か後方の藪に飛び込み草木を薙ぎ倒した。

「畜生！」

心からの愚痴と同時に振り切った刃を返して、太刀を上段に構え直す龍鬼の顔面に、飛び来る昂輝の蹴りが迫る。

二太刀目は間に合わない。

昂輝の飛び蹴りが龍鬼の顔面を捉えた。しかし龍鬼が最後の意地を見せる。

顔面に昂輝を乗せたまま踏み止まったのだ。

「畜生、畜生、畜生！」

昂輝の体重を顔面で受け止めたまま龍鬼が、振り被った太刀を振り下ろそうとした。

「せめて最後の一太刀！　せめてその蹴り脚でも斬り落としてやる
！！」

しかし　その時である。

『共に碎け散れ！　五色鬼！！』

「なにを！」

そう叫んだ昂輝が、手の中にある携帯のボタンを一つ押す。その途端に昂輝の体が内側から青白く光る。刹那、昂輝の体が大爆発を起こした。

「憑き姫！」

「ぬりかべ ザ・ウォール！」

「蝶よ壁となれ！」

昂輝の爆発を見た憑き姫が、慌ててぬりかべを召還した。お砂も周囲を蝶で囲む。

ヴァルハラメンバーは、ぬりかべと蝶の壁に守られた。

嵐のような凄い爆発だった。

何トンの爆薬が爆破したのに相当するのかわからない。だが、激しい爆発なのは、此処に居る全員が身をもって体験していた。

ぬりかべや蝶の壁で守られているはずのヴァルハラメンバーの全身に、重い振動が圧力のように覆い被さって来る。

後方では幾つもの木々が倒れ、枝が折れ飛んで行く。元製薬会社の廃墟も衝撃に崩れそうだった。大型倉庫の天井が剥がれていく物々しい音が聞こえてきた。

「なにをしたの！」

ぬりかべの陰で身を丸める憑き姫が、怒鳴るような声で聞いてきた。

爆音轟く中、それに軒太郎が笑いながら応える。

「あはははは、お砂ねえさんの爆薬ですよ」

「爆弾？」

「そう、お砂ねえさんの爆薬を更に妖気で圧縮加工させて昂輝君の胃の中に仕込んだのですよ。私たちは爆弾のスペシャリストじゃあないから、どの程度の威力になるか検討がつかないのですがね。これは派手でいいや！」

「そんな大雑把な……」

「ですが成功です。なかなかいい感じのようです。あははははははは」爆風が止むまで軒太郎は笑っていた。イゴールもだ。お砂までもが笑みに遊び心が見えていた。

そして爆風が収まる。

嵐が過ぎ去ったかのように静まり返ると、憑き姫がぬりかべを消した。お砂の蝶も消えて行く。

辺りはアメリカ軍の戦闘機がスラスタ―爆弾で爆撃を行なった後のようだった。

無残にも荒れ果てている。

空き地を囲んでいた古びたフェンスはメタメタに倒れ、周囲の草木も薙ぎ倒されていた。

元製薬会社の建物は、更にボロボロになり薄気味悪い外見に一段と

磨きを掛けている。

その空き地のと真ん中には大きなクレーターが刻まれ、中央には銀鎧の龍鬼が一人立っていた。

昂輝の姿が無い。

当然だろう。体内に仕込んだ爆薬が大爆破したのだ。間違いなく木っ端微塵だ。

そして、その爆破を眼前で浴びた龍鬼もただでは済んでいない。銀鎧の全身が歪にへこみ、輝が幾つも走っていた。鏡のように美しくった表面も濁るように曇っている。

その曇りの奥で、ピクリとも動かない蘭鬼と鉾鬼の表情が写っている。息絶えているようにも見えた。

「そ……そんな、馬鹿な……」

龍鬼の両膝が、荒れ果てた地に落ちた。力無く崩れるようにだ。銀鎧の表面が、卵の殻が剥けていくように零れ落ちていく。無敵の強度を誇っていた鎧が見るも無残に朽ちていく。

すると綻びた鎧の隙間から、鈍鬼と蛇鬼の遺体が心太のように押し出されて出てくる。

緑と青い鬼だけではない。続いて蘭鬼、最後に鉾鬼の巨軀と出てくる。

蘭鬼と鉾鬼も既に絶命している様子だった。

すべての銀鎧が崩れ落ちると、中から赤鬼の姿が露になった。龍鬼

もまた絶命寸前である。赤い姿が鮮血で更に紅くなっていた。

死に行く寸前の龍鬼の前に、赤い霧が集まってきた。集結を始めた霧の中から昂輝の声が聞こえてくる。

『勝負ありですね』

やがて赤い霧は、狼の少年に形作られる。

両膝を付いた龍鬼は、仲間の屍に囲まれるなか、悲痛の表情で昂輝を睨んだ。その瞳は怨念に満ち、恨めしい視線だったが、どこか憎めない眼差しである。

「畜生、この借りは、お前が地獄に落ちたときに返してもらおうぜ…

…」

そう皮肉を述べたのを最後に、龍鬼は前のめりに倒れこむと、ピクリとも動かなくなった。

完全に事切れた。

『……………』

昂輝が死した五匹の鬼を見下ろす。すると龍鬼、蘭鬼、鉦鬼の遺体から白い靈魂が浮き上がるように飛び出した。

三つの靈魂は、暫し空中で戯れるように飛び回ると、憑き姫が手に持つ空のカーへと飛び込んでいく。憑き姫の手に在る五つのカード、五匹の鬼の名で埋められた。

そして軒太郎の足元から伸びた漆黒の影が、一度奪われた二匹の鬼の遺体を回収して、続いて更なる三匹の鬼の遺体を回収して行く。

五匹の鬼たちの魂も骸も、憑き姫と軒太郎が手中に収めた。二人が満足げに微笑んでいる。

五色鬼 vs 五代昂輝。

五代昂輝の見事な連勝であった。

「さてさて、残るは」

そう呟き軒太郎が黒いバンガロンハット越しに、最後の怪異を睨みつける。

それは、呪いの権化。

それは、悪意の思念。

それは、素詛英一。

昂輝を始めとしてヴァルハラメンバーの視線が、黒い風呂敷を被った異形の人影に集まっていた。

五色鬼が消えても、緊張勘は消えていない。

佇む影は、笑うように揺れていた

爆音を無視（前書き）

小説書き始めて2年が過ぎました。ちょっとは上達しているのかな
^^

爆音を無視

温泉街から離れた断崖絶壁の海岸沿い。

切り立った岩に、荒々しい祭り好きな男の様な波が、幾度と無くぶつかっては白い泡を立てていた。

その海岸沿いに蛇のようにくねらせながらひかれた国道が走っている。

近くには民家も無く、人通りどころか車の往来も見当たらない。普段から静かで寂しい道であった。

温泉街から車を走らせば、右手が海、左手が山である。山には夏の日差しに青々と伸びた大自然の恵みが蹂躪するように茂っていた。背高い杉の木が真っ直ぐ伸びている。

「……なんだ、今の爆発音は？」

「廃墟の方だ……」

背高い杉に囲まれた小さな広場。脇には国道が走り、その向こうに馴染みの海が見える。

二人のタクシー運転手は、突如聞こえた爆発音に身を丸めながら、轟いた先に視線を向けていた。銜えた煙草から灰が落ちる。

二人が見るのは薄気味悪い道の向こう。爆音が轟いたのは、そちらの方向であった。

「あの客……、奥で何やっていやがるんだ……？」

「しるもんか……。どうする、なんかやばくないか？」

「警察に通報したほうがいいじゃねえか？」

先程までタクシーに寄りかかりながら、何気ない会話をしていたタクシートの運転手たちは、山を轟かせた出来事に、怪しげな緊張勘を深めていた。

ただでさえ怪しげな客に、町の厄介者である少年が一緒に、こんな不気味な場所にやってきたのだ。警察に通報されても可笑しくはないのかもしれない。

タクシーの運転手は、ポケットから携帯電話を取り出すと、少し悩んでいた。

「もしもよ……」

「もしも、なんだ？」

「もしも、あいつらがパクられたら。帰りの料金、もらえないよな

……」

「恐らくあいつら、帰りはパトカーになるだろうからな……」

「……」

「……」

「なあ、お前、さっき何か聞こえたか？」

「何かって、なんだよ？」

「爆発音とか聞こえたか？」

「何言つてんだ、そんな爆発音は、聞こえてないよ。ここは人も寄り付かない山奥だぜ。爆発があるわけないだろ」

「そうだよな」

「今は不景気だ。お客さんは神様だよな」

「ああ、神様だ」

二人の運転手は、そのような会話で己を正当化すると、新しい煙草を銜えて火を付けた。
和むようにいつぶくすると、何事も無かったように現実逃避を謀る。

「海が蒼いな」

「そうだな」

二人のタクシー運転手は、自分の愛車に寄りかかりながら、煙草を吹かす。

お客の帰りを待ちながら。

呪いの影 (一)

その風情は奇怪そのものだった。

シルエットのような影の体に、頭から被った黒い風呂敷に似た布切れが、温く埃っぽい風邪に靡いていた。

怪異そのものと言えた。

「今度は私が遊ぼうか」

ヴァルハラ探偵事務所の若頭、漆黒に身を包んだ三外軒太郎が、そう言いながらユラリと前へ出た。

歩みに揺れた黒いロングコートから抜き出した特製のショットガンが、ガチャリと金属音を鳴らして攻撃的な意思を主張する。

軒太郎の双眸に、冷めた殺意が快樂殺人犯の如く映っていた。デイフェンダーの銃口が、怪異の人影に向けられる。

『ちよつと待つてください、軒太郎さん』

やる気を漲らせ、腰元でショットガンを小さく構えた軒太郎が、狼少年のテレパスに動きを止めた。

漆黒の風呂敷を被った素詛英二の視線も、昂輝に向けられるように角度を変える。

「何かね、昂輝君？」

『少し、質問をしたくて』

「質問？」

『素詛のおじさんに、聞きたいことがあります』

昂輝は怪異の人影を、未だ「素詛のおじさん」と呼んだ。己の人生を呪われ、狼男に変わり、化け物、畜生に落ちようとも自分が五代昂輝であるように、目の前の人型の影男を少年は、今も素詛英二その人と認識したかった。

自分たちは、怪物ではない。人間なのだと思いたかった。だから怪異の人影を「素詛のおじさん」と呼び続けることにした。

『素詛のおじさん、何でこんなことを……』

当然の疑問を当然の如く訊く昂輝に素詛英二は、影と化した体を霞ませながら悠長な喋りで答えた。
黒い布の口元が、僅かに動く。

「こんなことは、こうして此处でキミに苦痛を齎していることかね？」

『はい、そうです。何故ですか！？』

黒い影が頭のとっぺんを掻きながら答えた。
何だか照れくさそうな素振りである。

「何故だろうね。今日の朝にね、目覚めたら、そんな気分になっていたのだよ」

『朝……って……』

「朝起きて、歯を磨きながら鏡に映った自分の顔を見ていたらね。こうすることが己の宿命だと悟れたのだよ。」

遙か昔から決められていたこと。この運命の為に自分が存在して、この運命の為に生きて来たのだと思えてね。解るだろ、キミにも？」

『……いえ、わかりません』

「そっけないな、キミは」

そう言つて影男は、項垂れるように肩を落とした。

軒太郎も他のメンバーも黙って聞いていた。この影男が何者なのかを探るには丁度良かったからだ。

しかし昂輝と英二の会話を聞きながらも軒太郎が持つショットガンの黒い銃口は、隙を見せる事無く影男に向けられていた。引き金を引く準備は万端だ。

軒太郎の持つショットガンの弾丸は、妖怪の髪を束ねて作った髪の毛針である。妖力と怨念に満ちており、人間はもちろんのこと、妖怪だろつと化け物だろつと有効な武器である。

例えば影であるつと怪物の類ならば傷つける自信は十分にあった。

「昂輝君、僕はね、呪いなのだよ。キミの中に潜む呪いの数々の一つに過ぎないのだよ」

『……』

英二の言葉に昂輝の心が僅かに乱れる。その戸惑いが、言葉にならない波長となつて漂つた。

その感情の当惑が嬉しいのか、英二が口調を弾ませて会話を続ける。

「僕の人生はね、時限爆弾のようなものだよ。キミたち五代家の末裔に不幸を注ぐ為に、今の今まで順番をまっていたのさ。そんな運命が自分の運命だとも知らずにね」

『じゃあ、娘さんも……』

昂輝は言葉途中で素詛律子の顔を思い出して、テレパシーを詰まらせる。

狼面が曇もつたのを憑き姫は見逃さない。

「さあね、妻の葵や娘の律子が私のように呪いの一つかどうかは私には解らないよ。僕だって今日の朝、はじめて自分の運命を知ったのだから」

『そんな人生で納得できるのですか!』

昂輝が吼えるように怒鳴った。灰色の体毛が鋭く逆立つ。怒りが全身から飛び出て弾ける。

だが、その一喝に竦む者は誰もいない。遠くの草むらから僅かに聞こえていた夏虫の音色だけが、一瞬止んだ。

『自分を犠牲にしてまで、他人を不幸にして楽しいですか!?!』

「違うよ、昂輝君。楽しい楽しくないでやっている訳じゃないんだ。定めとしてやっているんだよ。」

今日の朝、自分の運命に気付いたときから、キミを苦しめ不幸にすることだけが僕の存在理由になったのさ。

それは、無意識に呼吸をして、腹が減ったら食事を取り、眠たくなったら寝るように、当然の行為に変わったのだよ。

それが僕の中ですべての理になったのだよ。生きることよりも死ぬことよりも優先される本能になったのだよ」

理解しがたい。訳が解らない。

『何かが……、何かがズレてしまったのですね……』

「そうだよ。他人から見たら、ズレと認識されても言いぐらい変ってしまったのだよ、僕はね。」

『狂っている……』

「ああ、それだね。それが一番しっくりくるかな。

僕は狂ってしまったんだ。でもね、狂った張本人は、狂った自分が心地良いのだよ」

そこまで言って人影は拳を振り上げる。

黒い風呂敷のしたで、表情が笑っているように感じられた。

「さあ、おしゃべりはお終いだよ。昂輝君、もっと苦痛を味わってくれ！」

人影が、昂輝に向かって拳を振るう。昂輝との間には十メートル以上の距離があった。その為が届くわけが無いと高を括っていた昂輝は、英二の攻撃を胸元に直撃してしまった。

薄黒い影の腕が伸び、拳が昂輝の胸に減り込んだのだ。

『ぐはっ！』

半透明な影拳が、まるで鉄の丸太のように重かった。攻撃に昂輝の

体が飛んで行き、後方に聳えていた廃墟の壁に激突して止まった。一撃の拳に三十メートル以上飛ばされただろうか。

刹那、軒太郎のショットガンが火を噴いた。乾いた銃声が轟くと、銃口から散らばった髪の毛針を躲すように影男が空中に跳ね飛んだ。伸ばした腕が尻尾のように靡いていた。

「ほう、避けたか」

避けるということは、攻撃を受けたくないと言うことであろう。そう悟った軒太郎は、更にショットガンを乱射した。

空中に居た影男は、自分を狙って飛んでくる鋭い針の弾丸を、右へ左へと素早く動いて躲した。空を飛べる様子だ。しかも速い上に小回りも効いている。当たりやしない。

これは厄介だと軒太郎が、不機嫌な表情を見せていた。

四発すべての弾丸を撃ち尽くしたショットガンを軒太郎が足元に落とすと、黒いロングコート内から奇怪な妖気を放つ日本刀を二本取り出した。

双子妖刀イベナムだ。

空飛ぶ相手に軒太郎は、接近戦を挑む様子であった。足元に落ちたショットガンが影の中に沈んで行くと、宙に舞う影男に向かって軒太郎が一步踏み出す。

漆黒の全身から突風のような威圧感が妖力と共に吹き出した。

未だ空中に浮いている影男が、当てられた気の波に押され、今度は

自分から攻撃を繰り出す。離れた距離からの足刀を繰り出した。右の蹴り脚が伸びて槍と化すと軒太郎の顔面を狙う。

だが、狙われた軒太郎は横に回避した。微量に近い僅かな動きに狙いを外した足刀が、音を立てて大地を抉る。

紙一重の回避が可憐に決まった。

呪いの影 (二)

「ちょございな！」

軒太郎が自分の横で伸びきっていた影の脚を叩き斬った。イベナムの双刀身が一太刀ずつ影の脚を斬り落とす。

何とも薄い手応えだった。

無いに等しかった。

影を斬るとはこの程度の感触しか無いのかと軒太郎は若干の期待はずれを感じていた。

しかし斬られた影男はダメージに悲鳴の一つも上げていない。利いているのか利いていないのかも解らない素振りで斬られた片脚をちじめる。

軒太郎は、詰まらないといった表情をしていた。

『軒太郎さん、ちょっと待ってください！』

廃墟の壁に叩きつけられた筈の昂輝が、いつの間にか黒い二人の側に戻ってきていた。

両拳を強く握り、双眸に何やら決意が燃えていた。

『軒太郎さん、その人は 素詛のおじさんは、僕の呪いです。僕の敵です。僕に、僕に決着を付けさせてください！』

横から声を掛けてきた昂輝に二人の黒衣が動きを止めていた。

どちらと戦っても良いと考えている怪異の人影は、様子を窺う。彼の目的は、昂輝の不幸度を上昇させることである。軒太郎を殺害できれば昂輝が悲しむやも知れないし、本人を直接痛めつけてもかま

わない。

時間は幾らでもある。

ゆっくりじっくり確実に祟るつもりであった。

軒太郎の冷めた眼差しが昂輝の瞳を見詰めていた。両手に握られた妖刀イベナムが殺気を宿した赤いオーラを臙気に揺らしている。

「昂輝君、あの影はそれなりの妖力が無いと、攻撃どころか触れることも叶わないよ」

「……………」

軒太郎の言葉に黙り込む昂輝。

確かにそうだ。

狼狽を隠そうとする狼少年を見ながら軒太郎が話を続ける。

「キミは呪いの力で狼男に変化して、不死の肉体を得てはいるが、攻撃に転じられる程の妖力も妖術も持っていない。だから私とイゴールで武器を体内に装備させたのだよ」

そうである。

軒太郎の言う通り、昂輝は受けに回ったときは天下一品である。幾ら攻撃を食らっても死なないのだ。痛みさえ我慢を続けられれば敗北が有り得ない。しかし勝利を齎すほどの攻撃力を備えていないのだ。

どんな物でも貫く最強の矛と、どんな攻撃も耐え抜く最強の盾。残念ながら昂輝は、どちらでもない。

もしも「死」が、最大の敗北だと位置するのならば、負けなだけで、一人では勝てない存在なのだ。

体内暗器を使用して戦い、鬼たちから得た勝利が、自力でないこと

を思い出す。自分本来の不甲斐無さを思い出す。勝利の実感が溶けていく。

そして五色鬼たちとの戦いですべての武器を排除して、最後の特技を炸裂させた昂輝には、武器の一つも残っていない。また武器を仕込む暇は無いだらう。

丸腰であった。

その時である。

「じゃあ、今度は私が力を貸してあげましょうか？」

赤い袴を揺らしながら、巫女服の美少女が前に歩き出す。

少なくとも本人は、自分を美少女だと思っている。

自分たちよりも背の低い少女の黒髪を、お砂とイゴールが見下ろしながら見送った。

切れ長の美しい瞳に冷めた潤みを光らせる憑き姫が、小さな口元を悪戯っぽく微笑ませていた。

左手に広げられた赤いカードファイルが怪しい妖気を上げている。

あのファイルケースには、無数の魂が収納されているのだ。しかも魑魅魍魎の魂だ。禍々しい色を放つても当然であらう。

此処に来て初めてと言えるほどに己を出してきた憑き姫へ、昂輝が期待に満ちた声を掛けて訊いた。

『憑き姫、力を貸してくれるって どうやって？』

「これよ」

そう言い憑き姫が、右手のカードを見せる。

『それは……』

見せたカードの枚数は五枚。

そうである。

つい先程、昂輝が倒したばかりの五匹の鬼の名が刻まれたカードだった。

新鮮な魂が封印されたカードを団扇のようにして美顔を仰ぐ憑き姫が、小首を少し曲げて視線を逸らしながら語りはじめる。

「この五色鬼のカード、封印して気が付いたことがあるよ」

皆が巫女服の少女を見守りながら話を聞いていた。影男まで、空気を呼んで攻撃を仕掛けない。

憑き姫が、クイツと視線を昂輝に戻す。

「この五色鬼のうち四匹の鬼は、ただ赤鬼の子分になった訳でもないのよね。赤鬼に選ばれて子分として従っていたのよ」

昂輝には、憑き姫が何を言いたいのかいまいち理解できなかった。狼の頭部を横に傾げる。

「カードに書かれた赤鬼の名前が、こうなのよ」

そう言ってガードの表を見せながら憑き姫が、赤鬼龍鬼のカード名を呼んで聞かせた。

「融合鬼・鬼結びの龍鬼ってね」

憑き姫のジョークに一度腰を折られた昂輝だが、少女の申し出に藁をも掴む思いで飛びついた。自分には武器が必要なのだ。

呪いを滅するためなら、手に取れる武器は選んでいられない。

「なるほど、そう言うことかね。ならば邪魔をしよう」

そう言い影男が空中に漂いながら腕を伸ばして憑き姫を狙う。

しかし伸び行く影の手が憑き姫に届くよりも早く軒太郎がイベナムで腕を断ち斬る。

斬られた影の腕が、陸に上げられたナマズのようにのたうちまわる。

更にイゴールが影男に飛び掛った。人間の跳躍を遙かに勝る脚力で、十メートル近くの距離を飛び越える。鈍器のような拳には青白いイナズマが迸っていた。それがイゴールの妖力の形である。

「なんの！」

空中に浮かぶ影男が片腕を盾にイゴールの拳を受け止めた。しかし怪力夢想の腕力が、影男の体を吹き飛ばす。

二十メートルほど飛ばされた影男の体が地面に着地する。斬られたはずの足も腕も元の形に戻っていた。

「さあ、お二人さん、今のうちに愛の合体をして！」

影男を叩き飛ばした後にガッツポーズを取ったイゴールが、首だけで後ろを見て言った。

『愛があるかどうかは別として、憑き姫頼む！』

「私と貴方が合体するわけじゃあないわよ！」

珍しく憑き姫が感情を露にする。その怒った表情を見た昂輝は、心の中で『怒った憑き姫の表情も可愛いな』と呟いた。

するとイゴールが「ヒューヒュー」と小学生の様に冷やかしの声を飛ばす。

昂輝の心の呟きは、テレパシーとなってダダ漏れだった。憑き姫は顔を赤らめながらモジモジと照れている。

呪いの影 (三)

「どけい！」

「ふにゃー！」

初心な二人を冷やかしていたイゴールが、カ一杯隙をつかれて飛んで行く。影男の裏拳を頭に喰らい、回転しながら荒れ果てた近くの藪につっこんだ。

「もう、あの子は何をやっているのかしら」

溜息まじりのお砂が灰色自爆蝶を発進させた。数十匹の蝶々の群れが津波の如く影男に進行して行く。

迫る蝶々の一団に影男は両手を突き出す。広げられた掌内から無数の影針は発射される。掌からだけじゃない、胸や腹からも発射していた。

そして次々と蝶を打ち落としては爆発させた。爆発音がけたたましく連続で轟き続ける。

「いまよ！」

自爆蝶と影針が鬨ぎ合うなか、お砂が憑き姫と昂輝に向かって叫んだ。お砂の表情は、微笑んでいる。

きつとこの大人っぽい女性は、どんな時でも笑顔を絶やさない人なんだと昂輝は思った。

「行くわよ！」

憑き姫の可愛い声に気合がこもっていた。その声に昂輝は、気合を
引き締めなおし頭を縦に振った。

憑き姫がガードの名前を唱える。

「融合鬼・鬼結びの龍鬼　ザ・オーガコントローラー」

術を唱えた憑き姫がカードを投げると、昂輝の眼前に先程絶命した
筈の龍鬼が姿を現す。筋肉質の赤い背中を昂輝に向けていた。
龍鬼は一度首だけで振り返ると、何も言わずに前を向き直す。
更に憑き姫の呪文が続いた。

「狙撃鬼・奈落鬼女の蘭鬼　ザ・オーガマシンガン」

蘭鬼が現れた。

「起動鬼・蛇走りの蛇鬼　ザ・スピードランナー」

続いて蛇鬼。

「機関鬼・風力の鈍器　ザ・オーガエンジン」

そして鈍鬼。

「土台鬼・地獄資源の鉋鬼　ザ・オーガパワー」

更に唱える憑き姫の術に、巨躯の黒鬼が姿を現す。鉋鬼が鈍鬼の前
に立つ。

憑き姫のカードの中から姿を現した五色鬼が、昂輝に背を向け対角線上一列に睨んでいた。その先にお砂と撃ち合う素詛英二の魔影が見える。

「そのまま突き進んで」

鬼たちの背中を見る昂輝に憑き姫が言った。

そのまま鬼たちの背中に体当たりでもしろと言うのか、そう思い憑き姫の顔を見る昂輝。

狼の眼差しを受けた憑き姫は、コクリと頷く。

背中に向かって走れと瞳が言っていた。

昂輝は双眸に力を込めて、五色鬼の背中を見つめなおす。そして憑き姫を信じて走り出した。

まずは龍鬼の背中に突っ込んだ。

体当たりの感触は、僅かにも無い。五色鬼との戦いで感じた鬼たちの重みは、まったくなかった。

昂輝が龍鬼の背中に重なると、赤鬼の姿が掻き消えた。まるで昂輝の体内に消えるようにだ。

一瞬のことに戸惑う昂輝だったが、走る勢いを緩めない。次に立つ蘭鬼の背中を指す。

昂輝は気付いていない。

走る昂輝の右腕が、赤い炎を上げて燃えていることに。

『りいやああああ！』

やけくそのような叫びを上げて蘭鬼の華奢な背中を押し倒す昂輝。しかし昂輝が押し掛かった蘭鬼の体は、狼の体に吸い込まれ消えて

行く。

今度は左腕に、紫色の濃いオーラが噴出した。そこで昂輝も両腕の異変に気が付いた。だが、止まっている暇はない。走り続ける。

更に昂輝は、蛇鬼、鈍鬼と轢き倒すように取り込んで走り続けた。左脚が青く輝き、右脚に緑色の旋風が巻き起こる。

最後は鉾鬼である。

昂輝は巨大な鬼の背中に向かってジャンプした。昂輝の体が鉾鬼を貫くと、黒鬼の巨躯が消えて胸元から黒煙を噴出す昂輝が、影男目掛けて飛び込んでいく。緑色の突風が蹴り脚として突き出した昂輝の右足でドリルの如く唸っていた。

「鬼共を取り込んだか！」

そう叫んだ影男は、色とりどりの妖気を放ち飛来する昂輝に気付き、後方に跳ねのいた。

昂輝の蹴りが地面を抉りながら突き刺さる。

ガリガリと鈍い音が鳴り響いて蹴りが止まった。

『これが、五色鬼の力』

着地した昂輝が、己の身に宿る鬼たちの妖力を感じ取り、想像以上の存在感に身を震わせていた。

軒太郎とイゴールによって改造された時とは、まったく別の力を感じ取る。

『凄い』

蹴りを外し、膝立ちだった昂輝が、ゆつくりと立ち上がる。全身で揺らめいていた五色の妖気が徐々に治まり、その下に隠れていた新たな外見を露にした。

それは五色のプロテクター。

狼男の頭部に、五色に染まった禍々しい鎧が威圧的に纏われていた。鬼の鎧である。

体内暗器を授けた軒太郎の装備が、「骸武装バージョン」だとするならば、憑き姫が五色鬼のカードを使い昂輝に与えた力は、「魂武装バージョン」と区別できた。

昂輝は己の全身を眺めた後に、地に降りた影男を睨む。

骸の軒太郎に続いて、魂の憑き姫から力を借りた呪われし狼少年の昂輝は、使命を双眸に燃やしながら、素詛英二の残留思念に向かって走り出した。

『これで終わらせませす。貴方を僕の呪いから救い出します。素詛のおじさん！』

「おもしろいね。僕を救うとは勘違いもいいところだ。そんなキミだから、不幸に落とすかいはありそうだよ」

素詛英二の影も走り出した。疾走に被る風呂敷の下で、男の表情が形見えた。

笑っている。

風呂敷に見えるデスマスクは笑っていた。

「おらあああああああ！」

『どりやあああああああ！』

赤い拳が振るわれる。

影の拳が振るわれる。

妖力に満ちた拳が、互いに迫る。

方や風呂敷を被った顔面に。

方や呪われた狼の顔面に。

そして激しくぶつかった。

昂輝が己に宿りし呪いと合いまみれる。

これからが本当の戦いだ。

恐らく素詛英二の思念である影男を激破できても、また次の呪いが発動するのだろう。

呪いの数は、昂輝の中で無数に眠る。その数は誰にも解らない。

戦いは永遠に続くかも知れない。

呪いは尽きることなく無限に続くかも知れない。

それでも昂輝は決意した。

拳を握り、眼前の怪異と殴りあいながら誓いを立てた。

決して負けないと。

無限に続く呪いだろうと、永遠の不幸だろうと、終わりなき戦いであるうとも、戦い続けると誓ったのだ。もがき続けねと決めたのだ。そう決意した拳を呪いの影目掛けて叩き込む。諦める事無く影男の拳を身に受ける。

そう決めた昂輝の姿を、ヴァルハラ探偵事務所の面々が、楽しそうに微笑みながら見ていた。

憑き姫、軒太郎、お砂。そしてイゴールが藪の中から薄汚れて戻ってくる。

五代昂輝の物語は、今始まったばかりだ。

目の前の怪異を打ち破り、尚も続くだろう。

ヴァルハラ探偵の面々と、しばらくは一緒に歩むだろう。

そう、この呪いは物語、昂輝少年の物語。

『砕け散れ、災いよ！』

「味わえ、不幸を！」

二つの拳が波動を放ち、互いを吹き飛ばす。

五色の鬼鎧の神通力と、呪いの影拳の威力は、互角の破壊力に窺えた。

呪いの影（四）

炎を纏いし鬼の籠手に殴り飛ばされた影男が、空中でクルリと回転すると、蜥蜴のように両手足で着地した。

人の動きを見失い、ただただ不気味な着地ホームである。見ているだけで鳥肌が立ちそうだ。

方や影で有りながら重量を備えた素詛英二の拳打を顔面に受けた昂輝は背中から倒れると、砂埃を上げながら地面を滑った。

四メートル、五メートルと滑って距離を開く。

『い、今の感覚は……』

背を地面に擦り付けた昂輝は、勢いそのままに後転を見せると直ぐに立ち上がった。そして影男を殴った自分の拳を、じっと眺めた。拳からは業火の色が噴出している。

「ほほ、あの鎧、影を殴れたか」

両手に在る妖刀を、黒いロングコートの中に収める軒太郎が、相打ちに距離を置く二人を見て言った。

殺気を赤いオーラに変えて、二つの刀身から揺らめかせていた双子妖刀イベナムが、大人しく黒コートの中へと消えて行く。

軒太郎には感じられた。

憑き姫が昂輝に与えた五色鬼の鎧から迸る上等を妖気の質と量を。

それは、今までの昂輝と異なる妖気。

五色鬼が昂輝との戦いで見せた銀鎧が放つ妖気よりも力強く、透き

通った妖力だった。

五色鬼に昂輝が加わることにより、新たな存在へと進化しているように感じられた。

これはこれで面白いと軒太郎が、口元に薄ら笑みを見せていた。相変わらず黒衣に変身した軒太郎は怪しさが充満している。

四つんばいだった影男が、ゆっくりと背を起こす。そのスローモーションのような動きの中に、己の怪しげな存在感を主張するような妖気が満ちていた。

頭から被った黒い布の下から昂輝を見ているのがわかる。

そして拳を見ていた昂輝も、鋭い眼光を影男に飛ばした。握った拳を更に強く握り締める。

右拳からは昂輝の闘志と情熱を示すような紅い炎が噴出していた。

左の拳からは、呪われし人生に不満を現すような紫色のオーラが煙のように空気を濁していた。

『なんだったんだ、今の感触は……』

影男を睨む昂輝が、今一度テレパシーで疑問を零す。影男を殴れたが、何か納得がいていない様子だ。

不満を狼面に表しながら、奥歯を強く噛む。

「こつちからも行かせてもらっよ、昂輝君！」

今度は、影男と化した素詛英二が叫んで走った。

疾走する薄黒い影は、頭に被った黒い布切れを激しく靡かせる。低い大勢から速度を増す走りが、瞬く間に距離を縮めた。

だが、地を蹴る足元からは、音は無い。脚は速く動いているが、氷

の上を滑るように迫ってくる。

そして、まだ三メートルはある距離から影男は妖拳を繰り出す。また腕が、ゴム人間の如く伸びて攻撃してきた。

しかし、伸び飛んできた伸縮自在の影拳を昂輝は、腰を屈めて見事に躲す。

狼の尖った耳の先を僅かに触れて、後方へと更に伸びていくと、弧を描き地面に音を響かせ激突した。

そして昂輝は、避けたと同時に前へとタツシュした。三メートルの距離が一瞬でなくなると、ブレーキを掛けるような踏み込みから、全身のバネを弾かせアッパーカットを繰り出す。

地面スレスレの低さから発射される炎の拳が、全力で打ち上げられた。

若さを勢いに代えた拳が、黒い風呂敷に隠れた顎先を狙う。

「ぬっ！」

『うりゃッ！』

パコーンツ、と、音がした。

昂輝の放ったアッパーカットが綺麗に決まる。影が被った黒い風呂敷の上から顎を力チ上げると、素詛英二の薄い体がフワリと浮き上がった。

浮いた影の足元と地面との間に、十センチほど幅が出来る。

浮き上がった足元の地面には、影は映っていない。当然かもしれない。影に影が無くとも可笑しくは無いだろう。

『ぐっ……、また……』

攻撃を決めた筈の昂輝が、不自然にも顔を顰めた。なにやら様子が可笑的い。

よろめきながら着地する影男には、大きな隙が数多く窺えたが追い討ちにすら行かない。

逆に攻撃を仕掛けたのは影男だった。届かぬ筈の間合い蹴り脚を伸ばして、昂輝の腹部を蹴り飛ばす。

鞭のようにしなやかなキックが、鉄のハンマーの如く重かった。

衝撃が昂輝の水月を貫通して背中へ貫けて行くと、胃散が喉元まで押し上がって来る。

あと少いで、無様にも吐くところだったが、それだけは堪えられた。

『ぐあっ！』

腹を蹴られた昂輝が倒れ込み、ボーリングの玉のように転がった。

そして元製薬会社の建物にぶつかって止まる。先ほど激突した同じ壁の同じ場所だ。

「何か様子が可笑的いわ？」

可愛い顔の眉間に、渋い皺を寄せながら憑き姫が呟いた。影男と殴り合いを開始した昂輝の動きが鈍いことを言っている。

自分が与えた鬼たちの能力で、確実に昂輝はパワーアップしている筈なのに、動きに切れがない。妖力も格段に上がり、影の体を攻撃できるようになったのに、何やら迷いのようなものが窺えた。

憑き姫は、そんな昂輝の様子が気に食わない。

壁に激突した昂輝が、背を壁に付けたまま起き上がる。その顔に、

苦痛が映っていた。

素詛英二は、影の体躯を大きく広げて笑い出す。左右に伸ばした両腕の動きが、アメリカ人のように大袈裟だった。

「あははははは。さあ、もっと苦しみなさい！ 今度は影の針で無数の激痛を味合わせてあげますから！」

歓喜するような声を上げながら影男は、薄暗い全身からシャドーニードルを発射した。鋭い針が昂輝を狙う。

咄嗟に昂輝は、壁沿いに右へと走り陰險な攻撃を躲した。だが、影男は影針の乱射止めない。右に走った昂輝を追いかけ、体の向きを変えながら攻撃を続ける。

尽きる事無く飛んでくる無数の影針で、昂輝が走る後ろの壁が、細かい穴を開けながらガラガラと音を立てて崩れて行く。

「いつまで逃げ続けられるかな！」

『とっつ！』

壁沿いを走り続けている昂輝の前方に、窓枠ごと抜け落ちた四角い穴が見えてきた。昂輝は迷いもなくそこに飛び込んで姿を隠す。

それでも壁に穴を開けながら影針を全身から連射させていた影男は、穴だらけの壁が倒壊して誇りを舞い上げたのを見てから攻撃を停止させた。

「逃げるだけでは飽き足らず、今度は隠れるですか。 。 ござかしい少年だ。このまちな恥だね」

元製薬会社の建物に開いた大穴に向かって誇る言葉を掛ける素詛英

二の残留思念。挑発の中に棘がある。

「出ておいで〜、うさぎちゃん〜」

己が開けた穴を眺めながら影男は、今ので昂輝を討ち取れたとは思っていない。

寧ろ、討ち取る積りなど無いのだ。

昂輝が死なないことは、呪いの一つである彼にとって、よく知れたこと。影男の目的は、昂輝に苦痛を与えること、不幸に追いやることなのだ。

その為に古の鬼たちの封印を解き放ち、町を襲わせようとしたのだ。何とも、えげつない。

呪いの影 (五)

「出てこない積りなら、こっちから行きますよ」

そう言うと影男は、悠々とした足取りで壁の穴に向かう。

途端、建物内の闇から何かが飛んできた。

それは拳銃の弾丸のように速いが、火薬を弾く音などは聞こえず、ただ風を抉る音だけが耳に届く。

鬼刻弾丸だ。

五色鬼の紅一点。狙撃鬼・鬼女の蘭鬼が使う術。

回転する鬼の角が、薄暗い向こうから飛んでくる。

影男が反応を見せたときには既に遅く、闇から放たれた鬼の術が、影の体に風穴を五つも開けていた。

ズブズブと貫通していく。

影男の片膝が僅かに曲がり、右へとバランスを崩す。

鬼刻弾丸が効いている様子だった。

続いて闇の中から昂輝が飛び出してくる。影男目指して全力で疾走する姿は、荒れ狂う猪のように猪突猛進に窺えた。そのまま右肩を突き立てるように影男に体当たりをぶちかます。

スピードの乗った衝撃に、影男の体が後方に飛んで地面を数回転がりやっと止まった。

五、六メートルは飛ばされただろうか。転がった跡に乾燥した砂埃が舞っていた。

『ぐううう……』

しかし攻撃をぶち当てた筈の昂輝も片膝を地に付けて表情を歪めていた。

昂輝の体に傷は見当たらない。昂輝の異変に憑き姫が怪訝な表情で首を傾げた。何故にと疑問を抱く。

「そろそろ気付いて貰えましたかな？」

ユラユラとした動きで立ち上がる影男の動作は、まるでゾンビ映画の怪物のようたで奇怪だった。

風呂敷で見えない表情が、声の感じから笑っているように聞き取れた。瘡に障る口調である。

鬼刻弾丸を受けて開いた風穴もいつの間にか塞がっていた。

『なんだ……、この感覚は……。とても不快で、とても不愉快で、嫌な気分が湧いてくる』

広げた両掌を見ながら狼面を濁らせ言う昂輝。その両掌にドブプリと油汗が滲んでいた。

影男を一撃殴るたびに伝わって来る不快な感覚。

此処最近、戦いの中で始めて感じるようになった、他者を攻撃するという実感。素手で殴るといふ感触。

鬼たちが相手であったが、その感覚は熱い闘志のようなものが感じられて、闘争心を満足させる不思議な感覚があった。

男としての狩猟本能が擽られ、一撃を浴びせるたびに、一撃を浴びるたびに、快感にもちかい想いを味わえた。例え相手が鬼だろうと、関係なくだ。
素晴らしい体験だった。

しかし、この影男を殴った感覚は、とても不快なものだった。まるで蛆が湧く犬の死体でも殴ったような不快を感覚。

悍ましく、汚らわしく、気持ちが不定愁訴に染まっていく。

一撃を重ねるたびに、その感覚は拳から流れ込んできて、少年の心を汚していくようだった。汗ばんだ掌を強く握り締める。

忌々しい輩を睨む昂輝が、その正体を悟る。

『そうか、貴方は呪いの塊だったのですよね……』

素詛英二の残留思念が答える。

「そつだよ。僕は呪いさ」

そつなのだ。

あれは呪いなのだ。

素詛英二の残像思念は、笑っている様子だった。己の存在理由を完璧に理解してもらえたことが嬉しいのだろうか。

「昂輝君。きみにとって私は、触れるのも悍ましい存在。触れても触れられても心が病んでいく。私と戦うことは、病原菌にふれるのとかわらない。接触した分だけ君の心は鬱蒼と病んでいく。不

幸を実感して行くのだよ」

素詛英二の述べたとおり、確かに触るたびに、触られるたびに心が鬱になっていく。そばに居るだけでも不幸が体内に流れ込んでくるような不快感を強く感じる。

しかも影男は幾ら攻撃を受けても傷が回復していた。

昂輝の鬼刻弾丸で開けられた胸の穴も塞がり、軒太郎に切断された手足も生え変わっている。

自分同様に無敵の不死なのだろうか、と思えた。

不死身とは此処まで厄介なのかと、己を柵にあげて煙たがる。

「この勝負、決着が付くのか？」

見ていた軒太郎が言った。

一見、不死対不死の戦い。

影男の狙いは、昂輝に永遠の苦痛を不幸として味あわせること。それ即ち、このまま永遠に戦い続ければよいのだ。最初から勝敗を決しようとは思っていない。

これでは、時間の無駄使いである。

軒太郎が、黒いロングコートの懐に右手をつっこみながら前に出た。黒コートの中では、人差し指がコルト・バイソンの引き金に引っかかっている。

「鬼共ならまだしも、やはり小年には、この化け物は荷が重いかな

」

その口調からして、痺れを切らした軒太郎が、決着をつける積りらしい。

軒太郎が本気を出せば、呪いの一つや二つ、どうにでもなるろ。

『まっってください、軒太郎さん!』

歩みだした軒太郎を、昂輝のテレパシーが止めた。

電波に気迫が籠っており、ほんの数日前までは、両親が死んだショックで己までもが自殺を考えていた子供の気迫とは思えなかった。否、子供と呼ぶには成長が著しく窺えた。もう子供ではない。その双眸は、まるで未成年の戦士が、勇ましくも荒々しい成人の儀式に挑戦するような瞳をしていた。

軒太郎が、それに気付く。

瞳の奥に芽生え始めた戦士としての炎に軒太郎だけであらず、憑き姫も気付いて口元を微笑ました。

憑き姫には、鬼の魂を纏った狼の少年が、死闘の中で輝いて見えていた。惚れてしまいそうである。

「そうか、すまん。野暮は無用だな」

軒太郎の口から珍しくも謝罪の言葉が出た。

その台詞にイゴールが驚いている。滅多に無いことだ。

『はい。すみません』

「二人でいちやっついてないで、私の相手をしてくださいよ!」

昂輝と軒太郎の会話に割り込んだ素詛英二が、影となった体で飛び掛る。空中から飛んでくる影男の両腕は、長い剣と変わり伸びていた。その両手で切りかかる。

『はっ！』

斬りかかる影の剣を昂輝は肘を横に振るい弾いて見せた。甲高い金属音と共に火花が散る。

そして流れ込んでくる不快感。

影の剣を弾いた肘から、どす黒く悍ましい泥水のような感覚が染み込んで来た。

『うりやああああ！』

だが昂輝は、その不快で悍ましい鬱を押し返すように気合の雄叫びをテレパシー変えながら、反撃に移る。

深緑の右脚が、疾風の如く跳ね上がった。

「はぐッ！」

影の剣を弾かれたまま空中に居た影男の脇腹に、ハイキックを叩きこまれた。

勇敢な想いを込めて繰り出したハイキックの着弾箇所から忌々しい感覚が伝わって来る。それでも昂輝は、鬱蒼とした精神攻撃を押し切るように、ハイキックを力一杯振り切った。

影男の体が、脚力に飛んで行くと、地面に落ちて転がった。

「『わおおおおおおおおおん！』」

狼のとうぼえだった。

狼の吼える声と、昂輝のテレパシーが重なり合っている。

天を向き、胸を張り、両手を広げ、股を開き、ずっしりと腰を落とす昂輝が、全身全霊を体に宿すため、魂を震わせ、野生を呼び戻し、情熱を上昇させて行く。

昂輝の周りに転がっている小石が、ふわりと浮き上がる。昂輝の周
辺の重力が、異常を示していた。
大地も怯えるように震えだす。昂輝を中心に、気の波が渦を巻く。

呪いの影 (六)

「一気に決める積りだわ」

昂輝が巻き起こす嵐のような風に、長く艶のある髪が乱れるのを片手で庇う憑き姫が、昂輝の高まる情熱的姿を見ると、思わず出た言葉の通りに悟る。昂輝が決着を望んでいるのが、術を施した彼女には、はつきりと判った。

鬼たちの五色鎧が、昂輝の思いに共鳴して妖気を吐き出している。

臙気に肉体を映す影が叫んだ。

「面白い！ 私を滅するつもりか！？」

立ち上がった影男が体を変化させる。背中かが膨れ上がると、その瘤は、複数の腕となって蠢いた。右左入り乱れ十本以上はありそうだ。

その腕が一斉に伸びると昂輝を捉えようと突き進む。

『蛇走り！』

迫る複数の腕が昂輝を狙う刹那、青鬼の得意だった術で、昂輝が右に走り身を躲す。その速度は、今までの昂輝よりも速く、走りぬけた後に残像を残していた。

術の主、蛇鬼よりも走る速度が鋭く鑑みえた。

『うおおおおおおお！』

猛るサイキックボイス。熱いテレパスに雄の魂が共鳴していた。

そして弧を描きながら地を蹴り影男に迫る昂輝が、右手に炎を集める。煉獄の炎だ。

「速い！ 速すぎるぞ昂輝君！！」

烈風の如く蛇走りが間合いを詰める。既に火炎を纏った昂輝の右腕が、届く距離だ。影の顔が、黒い布の下で引きつった。

「くっ！？」

呪いの影軀でも、殴られれば痛いのだろう。接近を許した昂輝に、腰が引けていた。

『不幸ごと、碎け散れ！』

力強い震脚の一步から、炎拳のストレードパンチが繰り出された。踏み込みに地が揺れて、一撃を放つために捻られた全身が風を唸らすと、スクリューのようにうずを巻く拳が炎を唸らせながら影男の顔面に減り込んだ。

「うぎゃああああ！」

拳圧に影の体が飛んで行く。その体は一瞬で赤々と燃え上がり、大きな火球となつて転がった。

昂輝の情熱が、呪いの体を火に包む。

燃えながら転がった影男が、跳ねるように真上に飛んだ。

全身を影の黒さから、業火の赤に変えている。

メラメラと燃え続ける炎の魔人へと容姿を変貌させ、複数の腕を奇怪に揺らして居た。

「己、勘違いするなよ五代昂輝！ 苦痛を与えるのは私の仕事だ。お前が私に苦痛を与えてどうする！！！」

勝手な言い分をほざく素詛英二を、昂輝は見上げながら睨んだ。鋭い牙の隙間から、熱い息が漏れていた。

効果を発揮している筈の炎の攻撃を取り込んで、火炎の怪物と化した素詛英二が、複数の拳を握り締めながら地上の昂輝に飛び掛る。待ち受ける昂輝は、右足を退脚として踏ん張り、再び燃え滾る右拳を頭の高さに振り被った。複数の拳と、一つの拳が、攻防に備える。

「ギタンギタンにしてやるぞ！」

『消し去ってやるぞ！』

燃え上がる全身から繰り出される複数の拳。左右のフック、下からのアッパー、頭上からチョッピングブロー。火炎の魔物は、外から大振りで昂輝を狙う。それに対して昂輝は、振り被った拳を真っ直ぐに打ち込む。互いの拳が相手を攻める。互いに防御はない。

「相打ちか！」

外野の軒太郎が、思わず叫んだ。

軒太郎の言う通り、二体の異形の攻撃は、ほぼ同時にヒットしていた。

素詛英二の拳が外から昂輝を包む様に幾つも突き刺さり、五代昂輝

のストレートが中央を突き破るように英二の体を捉えていた。

一瞬、二人が止まった。

刹那、二人の間から爆炎が吹き出て二人を包む。爆発の規模は、五色鬼を滅した昂輝の自爆キックと同じだった。派手に大きい。

廃墟の敷地内に轟音が響く。

その爆音は、ヴァルハラメンバーを待つ二人のタクシー運転手まで届いていた。

二人の中年運転手が、森の奥から聞こえてきた二度目の爆破音に肝を冷やしなから空を見上げる。

「どうなりました?」

イゴールが眼を凝らして言った。

暫くして舞い上がった炎と、硝煙が消えると、殴りあった二人の姿が霞みの中から姿を見せる。

まだ昂輝は、ファイヤーパンチを放った腕を伸ばしたままだった。

その先には、英二の姿がある。

燃えていた全身の炎は消えていたが、昂輝を襲った複数の腕は、焼け焦げた藁半紙の様に焼け焦げ崩れ落ちていた。

そして昂輝の拳が直撃した胸には、ぽっかりと大きな風穴が開いている。

人の頭が、すっぽり入る大きさの穴であった。

素詛英二は酷いダメージを受けているようすが、昂輝の方は無傷

に見える。狼の表情が、心強く窺えた。

「ぐううううううう……」

端々が焦げ付いた黒い覆面の下で、呪いの権化が屈辱の呻きを零す。その声を聞きながら、昂輝は拳を引いて、更に全身のバネを引くように攻撃態勢へと入る。燃え盛る炎の拳を背景に、昂輝の双眸が勇ましく煌いた。

「うあああああ！」

二発目の拳を仕掛けるにあたって昂輝が跳ねるように飛んで、高さを英二に合わせる。昂輝の方が若干上を位置取る。

そこから煉獄を想像させる火炎の拳が、体重と勢いを乗せて、全力で打ち下ろされた。

昂輝の拳が額を叩くと、赤い拳か前頭骨に減り込んだ。

「ふごお、つつ！」

舌を噛み切ったような声を溢した影男の額は、完全に陥没していた。打ち下ろしの衝撃に影の首が縮んで、空中からゆっくりと落ちて行く。

背中から落ちた素詛英二の残留思念が、ヒクヒクと痙攣している。それを眺めながら昂輝が着地した。

「勝ったのか　？」

昂輝が溢した疑問系の一言。

途端である。

倒れている英二が、蹴りを発射した。背を地に着け、首も上げずに、片足を槍のように伸ばして昂輝の腹部を蹴り上げた。

昂輝の体が、くの字に曲がり飛んで行く。その体を伸びた影の脚が、力任せに地面へと押し付けるように叩き付けた。そして、むかつく感情を込めてグリグリと数回踏みつけてから短く戻って行く。

「あら、あの呪い、まだ機能していますわ」

お砂が言いながら感心していた。出来の良い呪いだと言っている。

暫くして。

影の体が起き上がる。胸の穴が塞がっていた。

昂輝も直ぐに起きた。双眸に熱い炎が揺れている。

二人が睨み合う間で、空気が歪んでいた。

影の肩が、息を切らして揺れていた。影の黒さも薄くなっている。妖気の濃さも小さくなっていた。

「かなり、弱っているな」

「ええ、昂輝君の方が有利ですね」

軒太郎の見立てにお砂が同感する。

紅い袴を僅かに揺らして、憑き姫が一步前に出た。

凜としたクールビューティーな幼顔に美しい大きな瞳の奥で、彼女の意思を期待に代えた旭光が煌いていた。その光は、呪いを乗り越えようとしている少年の未来を見ている。まるで夜明けの空歩を見ているような、澄んだ眼差しだった。

『これで決めてやる』

昂輝が深く腰を落として勢いを全身に溜め込んだ。

黒いボディーが漆黒の深さを夜叉の如く深めると、闇が腰を伝わり、両腿を伝わり、足先に降りて行く。その暗闇のような妖力をエネルギーに変換すると、妖力に満ちた右脚から旋風が緑色に吹き出し、左足からは青いオーラが刃物のように鋭く飛び出す。

『行くぞ、これが最後だ！』

「くううう！」

昂輝が走った。蛇走りだ。

素詛英二の影は、綻びの激しい体を庇うように立っているのがやつとに窺えた。先程の蹴りで昂輝を踏みつけたのが、最後の力だった様子だ。

『とっつ！』

昂輝がジャンプした。

地獄の鬼たちを纏った昂輝の周りで緑風と火炎が渦巻いていた。

獣の瞳が大きく見開き、眼球に目標を映しこむなか、左掌を前に突き出した。

紫色の妖気を放つ腕の掌に、黒い穴が銃口のように開いて睨みつけ

ている。

『火炎大鬼刻弾丸!』

深紫の腕が大きく膨らむと、押し出されるように大きな弾丸が回転しながら発射された。

唸る巨大なコマ。

大地を貫き進む削岩機のドリル。

それらをイメージさせる大きな鬼刻弾丸が、素詛英二を襲う。

「きいいいえええええい!」

奇声を上げながら影男は、昂輝の発射した大型鬼刻弾丸を受け止めた。

すさまじい回転を見せる鬼の角を両手で受け止めて見せている。

ガリガリと音が響く。

黒い影の両手から、鉄を削るような音を鳴らしながら火花が散っていた。

ドリルの刃先は、まだ影軀には届いていない。影男が意地で防いでいる。

『これならどうだ!』

空から攻める昂輝が、影男が受け止めている大鬼刻弾丸の後ろを、押し込むように飛び蹴りで勢いを加えていく。

「否! 否! 否!」

飛び蹴りの勢いに押され大鬼刻弾丸の切っ先が、影の胸に突き刺さ

る。ズブズブと突き刺さって行く。影のボディーが紙切れのように散って落ちて行く。

『き、え、う、せ、ろーろーろー！！』

昂輝の飛び蹴りが更にドリルを押し込むと、影となった残留思念の胸板を削り取って行く。

しかし呪いである素詛英二も昂輝同様に、また不死身。

巨大ドリルで胸に穴を開けられようとも、恐らくは修復するだろう。先程がそうだったように。

だが、今回の攻撃は、様子が異なっていた。

胸を抉る大鬼刻弾丸が、呪いの妖力を削り取って行く。その光景は、目に見て解った。

殺伐としたドリルの回転力に妖力を削られるにつれて呪いの影が、外から薄らいでいく。

影が小さく縮み、黒さを失っていく。

まるでドリルの先に巻き取られるように、渦を巻きながら吸い込まれていた。

「バ、バカなっ！！」

その言葉を最後に、素詛英二の体が消えてなくなる。ドリルの中に吸い込まれた。

目標が消えたことで、勢いそのままドリルが地面に突き刺さり鈍い音を奏でると、今度はドリルが消えて昂輝が着地した。

「おわつたな」

「そうね」

軒太郎と憑き姫が、そう言った。

地に着地した昂輝が、姿勢を落とした体制で俯いていた。そしてテレパシーで小さく呟いた。

『おわつた……』

もう、呪いの気配は残っていない。
山奥の廃棄前に、漕げた空気だけが漂っていた。

始まりの騒動。

昂輝の完全勝利だ。

エピソード

僕は、電車に乗っていた。

荷物はサッカー部の頃に使っていた大き目のスポーツバック一つのみ。

残りはすべて置いて行くことにした。必要になったら取りにもどればいい。

向かえ合わせに四人が座れる座席の窓際に、座っていた。

とても窮屈である。

隣には、継ぎ接ぎだらけの筋肉巨体が座っているからだ。イゴールだ。

しかもイゴールは、黄色い声を響かせながらよく騒ぐ。とても落ち着きが無い怪人である。

僕は、電車に揺らされながら、窓の外を眺めていた。

窓の景色は、見知らぬ町の景色が続いていた。

僕の住んでいた町の電車と言えば、必ず山か海が見えたものだが、この電車から見える景色と言ったら、ゴチャゴチャとした雑貨ビルの鬱蒼とした壁や、広告の看板ばかりである。

田舎育ちの僕には、珍しい光景だったが、それも30分程見ていれば直ぐに厭きた。

僕の前で憑き姫が静かに本を読んでいる。

ピンク色に白いハートが幾つも飾られたブックカバーが本には被せてあるために、タイトルは解らない。

好奇心のままに、なんの本をよんでいるの　と、聞いてみたら。

「恋愛スプラッタ小説」と、彼女は答えた。それを聞いて、本の内容まで聞く気になれなくなった。これ以上は読書の邪魔はせまいと思う。

「よし、降りるよ、昂輝君」

「やっと到着です」

軒太郎さんが言うと、席をたった。それに続いてイゴールが元気に立ち上がった。憑き姫やお砂さんも大人しく電車を降りて行った。僕も四人の後を追う。

駅に降り立ち驚いた。

凄い人の多さだ。電車が出入りするホームの数も多い。これが都会の駅なのかと感心した。

人ごみのなかで改札口を目指して進む四人の後ろを僕は、はぐれまいと必死に付いていく。

憑き姫が時折振り向いては、僕がちゃんと付いてきているかを確認してくれていた。その何気ない気遣いが、人ごみに慣れない僕の思いを僅かだが安心させてくれる。

何回も階段を登り、幾つも降り、似た景色の通路を何度も進み、多くの人々とすれ違い、やっとのことで駅の外に出る。

たった一駅の大きさが、都会では迷路のように感じられた。

一人なら、確実に迷子になって、外には出れないだろう。

僕は、五色鬼たちと戦ったのと同じぐらいに疲れた。初体験である。

また、この町で多くの初体験と遭遇するのだろうと、期待を感じて

いた。

これは、冒険だ。

僕は、この町では、冒険者だ。

ちよつと無邪気に言つて見ました。

駅を出ると、また驚いた。

背高いビルに囲まれた大通り。

六斜線の道路には、多くの車がごつたかえしている。こんな数の車が走っている光景は、テレビでしか見たことがない。リアルで見ると、車が発する騒音と振動からストレスを感じ取れる。排気ガスが空気を濁しているのも直ぐに解つた。

しかし、それらすべての量に圧倒されてしまう。始めて目の当たりにするコンクリートジャングルに飲み込まれそうだった。

「昂輝君、こつちだ。行くよ」

「は、はい……」

スーツ姿の軒太郎さんが僕を呼ぶと歩き出す。他の三人が、それに続いて人ごみのなかを進んで行く。

これだけ人が多いと、イゴールの怪奇さすら薄らいでしまう。中にはイゴールよりも不自然な姿やファッションを着こなした風変わりな人も多く見られた。この町では、それらも珍しく無い様子だった。良く似た別の国に、入国してしまったのかと錯覚させる。それ程に、色々な個性が際立っている。思わず僕は、物珍しく見てしまう。

大きな駅前から三十分ぐらい歩いたところで、裏路地に進む。一気に人の姿が減るが、それでも僕が住んでいた温泉街のメイン通りよ

りも人が多かつたし、ビルの背丈も高かつた。裏路地といつても二車線ある。

四人が足を止めると僕の方へと振り返る。そして憑き姫が言った。

「ここよ」

六階か七階あるビルに挟まれた古いビルの前だった。

周りのビルは、近代的なコンクリート作りの大きなビルにも関わらず、四人が足を止めた先にあるビルは、レンガ造りの古めかしい三階立てのビルだった。赤茶色のレンガが周りのビルたちとは違って歴史深さを醸し出していた。

「ようこそ　ヴァルハラ探偵事務所へ」

スーツ姿に銀縁眼鏡を挿けた軒太郎さんが、セールスマンや銀行員が見せるような営業スマイルでそう言った。

黒衣ではなく、変身前の軒太郎さんは、いつもこんな感じである。まったくの別人だ。怖さや傲慢さを欠片も感じられない。多重人格なのだろうか？

「さあ、入りましょう」

憑き姫の言葉に、彼女以外が微笑んでいた。

お砂さんもイゴールも、僕を歓迎するように微笑んでいる。

イゴールの怪物並みの強面が見せる奇怪な笑顔にも随分と慣れてきていた。僕は、そんな自分に気付くと、自然と笑顔で返した。

レンガ造りのビルは、一階がガレージに成っている様子だ。シャツ

ターは閉まっている。

その脇に二階へと上がる階段への入り口が見えた。その脇に、空手道場の看板のような木製の厚く細長い板に、有限会社ヴァルハラ探偵事務所と墨字で書かれていた。文字の一つ一つが太く力強い一筆だった。結構、素晴らしい。

僕が呆然とビルを見上げていると軒太郎さんたちは、さっさと事務所階段を登っていく。

「行くよ」

いつまでも足を動かさない僕に気付いた憑き姫が、ちよこちよこ走りながら戻ってくる、僕の袖を摘んで引いた。それで僕も我に戻り、彼女に牽かれるまま階段を登る。

二階は事務所の様子だ。

広い部屋にはジム用の机が一つあり、その上にノートパソコンと煙草の吸殻が山になった灰皿が置かれていた。露骨にハードポイルドである。

他には、幾つもの書類が納められた棚が壁際に並び、接客用の応接セットが二組あった。

天井から大きなプロペラのような扇風機が、ゆっくりと回っている。これもハードポイルドには欠かせないのだろうと思えた。

事務所に置かれたすべての物が歴史深さを醸し出しており、中には高価そうなアンティークな物も少なくなかった。まるで古いイギリス映画に出てくる探偵事務所のような匂いが、事務所の中には漂っていた。

それらすべての合計が、こうでなくては探偵事務所と呼べないと述

べている。

確実に趣味の世界だ。狙っているのが良く悟れた。だが、徹底された拘りが、舐められない。口を開けてしまっほどに凄いと云えた。

僕が、予想以上に本格的な探偵事務所内の光景に気後れしていると、一人の男性が奥の別室から姿を現した。

「ほほう、キミがメールで報告があつた、新しいアルバイトのアシスタント君だね」

「は、はい！」

渋い男性の言葉に僕は、思わず大きな声で返事した。

男性の年は五十歳を越えていそうな、チョイ悪おやじ風の老紳士だった。

黒いスーツにノーネクタイ。綺麗に切りそろえられた角刈りのヘアには渋さを引き立てるように白髪が混ざっている。

とてもダンディーな風貌だったが、この老紳士も、やはりヴァルハラメンバーだと解らせる可笑しなポイントが一つあった。

左目に黒い眼帯を付けていた。

アイパッチである。

その黒い眼帯が、この人なりのキャラ立てなのだろうと感じられた。イゴールにキャラ負けしたくない思いのようなものが伝わって来る。

老紳士が軟らかい笑顔で右手を差し出す。

「私がヴァルハラ探偵事務所の所長、三外眼一郎だ。よろしく頼むよ、昂輝五代くん」

「五代昂輝です。こちらこそよろしくお願いします」

僕は、名前の間違いを何気なく訂正しながら、差し出された所長の右手を握り、握手を返す。

この人が、ヴァルハラ探偵事務所の創設者で、軒太郎さんの父親。恐らくは、何らかの妖術に長けているのだろうと予想できる程に存在感にはつきりとしていた。

それに握手した人差し指に嵌められたシルバーの指輪。大きく紅いルビーが飾られていが、それは軒太郎さんが五色鬼との戦いで僕に埋め込んだ宝石と類似していた。間違いない。

軒太郎さんと眼一郎さんは、親子だけあって、同じような術を使うのだろうか？

それも有り得ることだ。

そう考えながら僕が、握手している手を離そうと力を緩めた瞬間であった。眼一郎さんが、握手を続けている腕に力を入れる。所長の老いた皺のある手の中から、僕の手が潰れて碎ける鈍い音が、ゴキゴキと、バキバキと鳴り響いた。

「!?!」

突然のことに悲鳴すら出なかった。代わりに喉の奥に何かが詰まって止まる。

激痛に僕の両膝が崩れると、眼一郎さんは握りつぶした僕の手を放した。

僕の右手には、握りつぶした手形がはつきりと付いていた。手の甲

に指紋まで見て取れる。

恐らくは六十歳を越える老人の握力とは思えない。まるで万力だ。

「いきなり、なに……するんですか！」

前半部分、震えていた僕の声は、後半で怒鳴りに変わっていた。全身の毛穴から、脂汗が吹き出る。

僕は、崩れた体制を跳ね起こして局長に詰め寄った。

しかし冷静な表情で所長は、回復して行く僕の手を見て驚いていた。それがイラっとして僕は、回復を終了させた手を、怒りのままに強く握り締めた。

これから当分お世話になる相手とはいへ、これは余りにも失礼だ。

ここはビシツと言わなくては！！

「痛いじゃないですか！」

言ってから失敗したと思った。我ながら迫力もボキャブラも足りない抗議の一言だったからだ。

イゴールが笑っていた。お砂さんまでもが、クスリと笑い手で口元を隠していた。

情け無い……

慣れないことは控えようと反省した。

でも怒りが収まらない、眼一郎さんの片目を険悪に睨み返す。

一瞬だが、怒りのため狼に変身してしまうところだった。それは、グツと堪えられた。

「ほほう、これが話しにあった呪いの再生力か、実に面白いね。実

に珍しいよ」

笑いながら言う所長は、僕の肩を叩きながら気にするなと言葉を続けた。

気にしない訳が無い。

しかし

その喋りや笑顔が、不思議と僕の怒りを静めていく。直ぐにどうでも良くなった。

右手を潰され受けた激痛。屈辱的な怒りが消えて行く。

まるで催眠術でも掛けられたのかと思ったが、それすらどうでもよくなった。

不思議である。

今では僅かの怒りも残っていなかった。それどころか所長に対して友好的な想いが沸いてくる。明らかに騙されている。それすら許せた。

不思議である。本当に。

「息子よ、彼の面倒は、お前に任せるぞ。お前が連れてきたのだ、当然だろ」

「心得ていますよ、父さん」

「昂輝君。暫くは息子のアシスタントに励みながら探偵の仕事を覚えなさい」

「はい」

「キミが一端の探偵に成長したら、うちの社員として雇ってあげるよ」

「ありがとうございます」

社員か　それも悪くないかも。

「まあ、不死身だけでは探偵は務まらないからね。皆から色々な術を習って、自分なりのエージェントスタイルを確立しなさい」

「エージェントスタイル……ですか？」

そんなものが探偵家業に必要なのかと疑問に思い聞きなおした。

「そうだよ。探偵ってやつはね、個性がないと勤まらないものなのだよ。みんなと同じだと目立たないからね」

「そう言うものですか……」

「そう言うものだよ」

間違っている……、絶対にそんなことはない筈だ。

どうあれ、こうして僕の新しい人生が始まった。
住み慣れた町を離れて、新しい町でだ。
探偵見習いとしてだ。

僕は、自分で何処を目指して進んで行くのか判っていなかったが、若い頃は、そんなものだと思っ後々思う。

判っていること。それは、ここで呪いを解く鍵を身に付ける。その為に、町を出たのだ。奇怪な四人に付いてきたのだ。

ここが、僕が踊る新たなステージなのだ。

『 始まりの騒動』 完

第二章へ

Go!!

エピソード（後書き）

まだまだ続くよ^^

次回予告

律「ちよつとまったーーーーー!!」

憑「どうしたの？ 予告の人」

律「こらーーーーーあ!! 予告の人とか呼ぶな!」

憑「それにしても騒がしい人ね。何かあったの？ 話を聞いてあげるから言ってみなさい」

律「うわ……、すげー上から目線……」

憑「だって、ヒロインだもの」

律「うあゝ、自分からヒロイン宣言したよ……。否定は出来ないけど……」

憑「で、何かあったの？ 大きな声を出しちゃって?」

律「大変なのよ!？」

憑「何が大変なの?」

律「昂輝君が居なくなったのよ!？」

憑「へー」

律「最近、見かけないからさ、また引き籠もってるのかなと思って

家を訪ねたら、玄関に町を出ます、探さないでくださいって張り紙が貼ってあったのよ！」

憑「家出ね、きつと」

律「家出！　なんで家出なんて！」

憑「心当たりはいっぱいあるでしょ……」

律「わ、わたしの魅力がたりなかったから……かしら」

憑「予告の人のくせに、何をほざいている」

律「貴方ほどではないわ！」

憑「そんな口を叩いていいのかしら？」

律「何よ、その態度は……、さては昂輝君の居場所を知っているわね！？」

憑「ええ、知っていますとも」

律「どこよ、どこに隠しやがった！？」

憑「私の屋敷よ！」

律「屋敷！？」

憑「そうよ。お父様に許しをえて、同棲生活を始めたの。いつも二人きりでベットでねんねよ！」

律「なんて羨ましい！　じゃなくて何故にそんな嘘を!？」

憑「うそなんかじゃないわ!妄想よ!!!」

律「妄想かよ!」

憑「妄想の何が悪くて!？」

律「……わ、悪く無いわよ。私もたまにするから……」

憑「ふんだ」

律「お父様と言えば、最近私のお父さんも見ないわね……。まさか家出かしら……」

憑「言えない……。私の口からは、真実を語れない……」

眼「ところで二人とも、予告はどうしたのかい？」

律「うわ、新キャラ登場!？」

眼「予告をやらないのなら、私がやってしまっよ」

律「どうぞ。『予告の人』の称号をお譲りします」

眼「いやいや、それは要らないよ……」

憑「その称号と予告役は、セットです」

眼「じゃあ、私は予告を諦めるよ」

律「私も予告するのパスするわ。そんな称号要らないもの……」

憑「じゃあ、誰が予告するの?」

律&眼「……」

憑「……」

律「今回の予告は無しね……」

くじく

第二話 「ファンタジー」

黒馬が疾走していた。背には黒衣の男を乗せている。

否、黒衣ではない。黒い甲冑である。

ルネッサンス時代を思わせるデザインの黒い鎧に、黒鳥の羽が飾られた黒いマントを靡かせていた。腰には、高価そうな剣が下げられている。

馬も人も黒い。まるで黒い弾丸が走っているようだった。

黒騎士。ダークナイトだ。

辺りの様子も漆黒の闇夜だった。

葉を付けていない枯れ木の森を、真つ二つに分けた粗い道。上空には、火災で燃え上がった煙のような黒雲が、空を蹂躪するが如く覆い尽くし、禍々しく広がっていた。

その黒雲の内部で、雷音が閃光と共に轟き、ここが魔界なのかと錯覚させる程に景色を薄暗く染め替えていた。

いや、もしかしのならば、ここは魔界の地なのかもしれない。

漆黒の騎馬は、そのような恐ろしげな森を、轟く雷音に臆する事無く慣れた手綱捌きで先を目指す。

やがて騎馬は死者の森を駆け抜け、乾燥して地面が罅割れた荒野に飛び足した。その向こうに、目的地と思われる古城が聳えている。

西洋の城だ。

高い城壁に大きな門。その上にドラキュラ伯爵でも住んでいそうな

薄気味悪い城が建っている。要塞のような古城だった。

ここは日本ではない。

黒い騎馬は、城門の前に到着すると早馬を宥めるように停止させた。しかし馬の興奮は、直ぐに収まらない。黒鎧を纏った男は、手綱を起用に操りながら城門に向かって叫んだ。

「私だ、何をしている。早く開けんか！」

黒馬だけでなく、黒鎧の男も興奮している様子だった。なかなか開門されない城門に、幾度と無くどなっていた。

やがて重々しい音を唸らせながら、分厚い城門がゆっくりと開く。門を開けたのは、ボロ雑巾のような灰色ローブを被った者たちだった。三人でゼイゼイ息を切らしながら分厚い城門を押ししている。やっと開いたといった感じだった。

その者たちの顔は、頭から被った大き目のフードに隠れて良く見えない。

灰色ローブの三人は、体が不自由なのか、ぎこちない動きで後退りながら馬の為に道を空けた。

震えている。三人は、黒鎧の男に怯えている様子だ。フードで顔を隠し、視線を合わせようともしない。

黒鎧の男は、馬上からローブの者たちを一喝するように睨み付けながら馬を進めた。門をくぐり城壁の中へと進むと、黒馬からスルリと降りる。石造りの地面に男が着地すると、黒い鎧が鋼の音をガチヤリと鳴らした。

「この役立たずどもが」

愚痴を溢しながら男は一息つく。声の中には殺気が籠もっており、灰色ローブたちを更に怯えさせた。三人は、体を丸めながら物陰に逃げて行く。

そして黒鎧の男は肩まである黒髪を、皮手袋を嵌めたままの手で掻き揚げた。

すると長い黒髪の下から男の素顔が覗く。白人である。

顎はシャープで堀の深い顔付きき。眉毛が薄く、目つきが悪い。年の頃は三十歳ぐらいだろうか。誰が見ても善人には見えない意地悪そうな顔付きだった。全身から悪の臭いが漂っている。

男はブーツの踵を鳴らしながら古城の中へと進んで行く。

城の中は薄暗く、時折置かれたランタンや蠟燭の明かりが、冷たい石の壁をぼんやりと照らしていた。その薄気味悪さから魔女でも住んでいそうである。

古城の内部は、まるで迷路である。

細い廊下や螺旋の階段が幾度も続き、さながら侵入者を拒む迷路と言った感じであった。

戦乱の中世では、城は住居ではなく敵を向かい打つための城塞。侵入者を拒む為に、このような作りをしている城は珍しくもない。

メルヘン溢れるプリンセスが住むロマンチックな城よりも、このように戦略的工夫が施された殺伐とした城の方がリアルと言えるだろう。

しかし黒鎧の男は、複雑に入り組んだ迷路のような構造にも迷う事無く、先へ先へと歩いて行く。幾度も階段を登り、幾度も階段を降

る。降っている距離の方が長い様子だった。男は城の地下へと目指していた。
やがて螺旋状に回る長い階段を暫く進む。降った階段の先に、一つの鉄扉が姿を見せた。男は重い扉を軽々と片手で開けると、室内に入っていく。

「これはこれは、我が君主殿。良く参られた」

艶のある声だった。ねっとりとした口調に色気と怪しさが混合している。

如何わしい抑揚で語る声が聞こえてきたのは、石造りの部屋の奥からだった。

薄暗い部屋の先には祭壇が在り、蝋燭の明かりを吸い込んで光を映す水晶玉と、立派な角が生えた雄鹿の生首が捧げられていた。蝋燭の炎が震えるように揺らめいている。

黒鎧の男が部屋に入ると声を掛けてきたのは、その祭壇の前に立っていた人物であった。声からして女性だろう。
若くも無いが、年寄りの声でもなかった。

女は鮮血で染め上げたような真っ赤なローブを纏っていた。フードで顔は見えない。

しかし門番たちが身に纏っていたローブと比べて明らかに上物のローブであった。袖や襟に繊細な刺繍が施されている。
そしてフードの陰から美しい口紅と、金細工の首飾りが、魅惑的にチラチラと見えている。

「くだらぬ挨拶は余計だ、ベロニカ」

「公爵殿、挨拶は人付き合いの基本ですわよ」

「魔女ごときが、説教か！」

黒鎧の男が、いらつきを大声に代えた。ただでさえ悪党を思わせる表情が、更に善人顔から遠ざかる。眉間によせた皺の数が、傲慢さと強欲さを示しているようだった。

女は笑っている様子だった。指輪やブレスレットが煌く片手で口紅を隠して堪えた。

男は、その失笑に気付いている。本当に我慢しているのは、男の方だった。

強面に力を込めた男は、ズシズシと音を鳴らして部屋の中へと進んで行く。

「公爵殿、あまり興奮なされますと嫌われますよ」

「お前に言われなくても、既に嫌われているわ！ 私を好いている輩はこの世に存在せぬ」

「傲慢ですか！？」

「傲慢な訳ないわい！」

怒鳴り散らす男が腰にぶら下げた剣の柄に手を掛けると女は、スルスルとロープの裾を擦りながら後退して距離を取る。

フードの陰では、紅に飾られた口元が嘲笑うように形作っていた。

「もしよろしければ、人に好かれる秘薬を拵えて差し上げますわよ」

「要らんわ！ どうせまやかしの類だろ！」

「もちろん」

また女は薄く笑った。それを見て男は舌打ちを溢した。

この魔女は、男を小馬鹿にしているのは明白だった。しかし男は我慢した。本当は、今すぐ剣を引き抜き女の体に突き立てたい衝動を堪えていた。

屈辱の炎が瞳の奥で身を潜めている。いつの日か、この願いを叶えたいと密かに懇願していた。

そんな思いを押し殺しながら男が本題に入る。

「それより、ゲートの準備はどうなっておる」

「順調に準備は進んでおりますわ。あと三日程で開門の儀式も終了しますでしょう」

「そうか……」

男は握った剣の柄から手を離すと、力の入った表情を僅かに緩める。

「いいか、ベロニカ。この計画に二年の歳月と多額の資金が使われているのだ。今頃になってゲートが開きませんでは済まされないのだぞ」

消費したのは、資金や時間だけではない。多くの人間の命も注ぎ込まれた。計画の為に犠牲になったのだ。

しかし男は、その者たちの命よりも、己が消費させた時間や資金の方が重いと考えていた。男にとって他人の命は、虫けらと同価値なだろう。

「それは問題御座いませぬ。ゲートは確実に開きますわ。問題はその後で御座いましょう」

フードの隙間から男の表情を窺う女は、紅いローブを揺らしながら言った。自信のある声色である。

己の仕事に失敗なんぞ有り得ないと言いたげだった。

「そちらは問題ない。探索隊の選抜は、超一流の者たちを揃えてある。お前はゲートを開くことだけに集中していれば良いのだ」

「御意」

紅いローブの女が頭を下げると、黒い鎧の男は踵を返してマントを靡かせた。入ってきた鉄の扉を目指して歩き出す。

扉の前まで男が進むと、ピタリと歩みが止まった。

「良いかベロニカ。我々の目的は」

「心得ています」

男は半身だけ振り返ると、頭を下げたまま声を返した女を鋭い刃物のような瞳で睨み付けた。凍てつくような冷酷外道な眼差しが、女を威圧する。

そのドス黒い威圧感を感じながらも女は、フードの下で余裕に満ちた笑みを続けていた。

そして男が部屋を出て行き、鉄の扉が閉まる重たい音が響いた。暫くすると女は、下げた頭を上げる。

「ふふ、ゲートを開けるなんてお馬鹿さんな公爵坊ちやま。
でもいいは、あちらの世界も見てみたいし。協力差し上げましょう
ぞ、ふふふう」

冷たい石造りの地下室で紅いローブの女は、一人怪しく微笑んでいた。

砂壺荘

昂輝が目を覚ます。

まだ眠気で霞む視界に、瞼の陰が動いて見えた。その向こうには、見慣れない天井がぼんやりと映っている。

木製の古めかしい天井だ。所々に染みがある。その天井から傘を被った丸型蛍光灯が部屋の中を照らしていた。

昂輝の寝ていた直ぐ横には、窓ガラスがあつた。地味なカーテンで閉ざされているが、隙間から朝の日差しがこもれみのように入り込んできていた。

朝だ。電気は昨日の帰宅時から点けっぱなしだった。

布団も敷かず、何も掛けずに畳みの上に私服のまま寝てしまつたらしい。

「朝……か」

眼を擦りながら立ち上がった昂輝は、カーテンを両手で開けて外を眺める。

古めかしい木枠の窓の向こうに、住宅街の屋根が広がっていた。その住宅街の奥にはコンクリートのビルが並んで聳えている。あの辺にヴァルハラ探偵事務所も在る筈だ。

今一度眠たい眼を擦りながら昂輝は、踵を返す。そして今まで寝ていた部屋の中を見回した。

「そうか、今日からここが僕の部屋なんだよな」

畳み八畳のかび臭い部屋。一畳分の流しにコンロが一つ。トイレは共同。お風呂は無い。

昂輝は朝の日差しに部屋の中を照らす力が負けている電気を消すと、部屋の真ん中に胡坐を掻いた。

無駄な電力は節約した方が良いに決まっている。

部屋の中には昂輝が持ってきた大きめのスポーツバックが一つあるだけだ。それ以外には、まだ何も無い。

生活に必要な物は、おいおいそろえて行く積りだ。焦ることはない
と余裕に考えていた。

昂輝の私生活は、殆ど死んだ母に頼っていた。ろくに自分で食事を
作ったことも無ければ、掃除洗濯もしたことが無い。

一人暮らしがどれだけ大変かは、これから知ることになる。

「ふあ〜……」

大きな欠伸だった。

昨日、ヴァルハラ探偵事務所に到着してから歓迎会と称して宴会が
始まった。

未成年の憑き姫は、お酒を飲んでいなかったが、昂輝は散々飲ま
された。未成年だからと断ったが無視されて飲まされた。

正直なところ、お酒を飲むのは初めての経験だったが、悪い物と感
じなかった。とても楽しい気分になる。大人たちがお酒を止められ
ない理由が、昂輝にも理解できた。お酒は美味しいし、楽しい。

呪いの効果で昂輝の体は、アルコールなどで酔いにくい体質になっ

ている。おかけで美味しく飲めた。

かなり飲まされたが、二日酔いにもならなかった。呪いの再生力が、アルコールを異物と感知して処理してくれたからだろう。

宴会で、散々はしゃぎまわり疲れたが、四五時間寝たおかけで、随分と疲れは消えている。呪いの力で体力も直ぐに回復してしまうのだ。

呪われてからの昂輝は、二日三日は寝なくても問題無い体質になっている。寝るのは半分が気分の問題であった。呪いも悪いところだけではない。しかし眠れない夜を苦痛に感じるがよくある。

お砂曰く。

何故、夜に眠れないか。

何故、体力の回復が早いか。

その理由は、子作りに励めるように呪いが力を貸しているのではないか、と言っていた。

呪いの目的は、五代の血族を永遠に呪い続けること。子供を作らせ継続する為に、力を貸している。そうな……。

このアパートは、そのお砂が私有する物件である。

名前は『砂壺荘』と言う。

聞けば築三十年の木造二階建て。部屋の数は八部屋。一つは住み込みの大家の部屋らしい。

入居者は、僕を含めて五人。タオルでも買って、早めに挨拶周りをしなくてはと思う。

ご近所付き合いは、ちゃんとしなくては。田舎町で育った昂輝には、それが普通のことだった。最近では近所付き合いが薄いアパ

ートも多い。しかし昂輝は、アットホームなご近所付き合いを望んでいる。

お砂曰く、このアパートには昂輝の体内に潜む呪いに対しての防御結界が張られているらしい。ヴァルハラ探偵事務所にも同じものが張られているらしく、ここと事務所に居る間は、呪いの効果で不幸が起きることは軽減できるそうだ。

軒太郎がお砂の経営するアパートを昂輝に紹介したのは、それが理由だったらしい。

「そうだ……」

何も無い部屋の中央で胡坐を掻いていた昂輝が、Gパンのポケットから携帯電話を取り出した。時間を確認する。

「もう十一時か……。確か一時までに事務所へ顔を出せって言うってたっけな」

昨日の歓迎会の最後で、軒太郎が言っていたことを思い出す昂輝。この町にやって来たばかりだが、直ぐに仕事があるそうだ。昂輝は軒太郎のアシスタントとして依頼人に会いに行く予定である。

昂輝は、携帯をポケットに押し込むと立ち上がった。古い畳が僅かに沈む。

このアパートから事務所までは、徒歩で一時間程度の距離である。今日は歩いて行くが、しばらくしたらバイクでも買おうかと思う。そのぐらいの貯金はあった。

部屋を出るために扉を方と向かう昂輝。

古い木製の扉に時代を感じさせるドアノブ。その色あせたドアノブ

を捻って扉を押すが、なかなか扉は開かない。

「よっ！」

昂輝は声を出して扉に体重を掛けた。立て付けが悪いのか、やっと開いた扉の蝶番から酷い音が鳴った。これは早めに油を刺してやらなくてはと思う。

部屋を出るとゴミゴミした廊下が続いていた。各部屋の荷物やらゴミ袋などが置いてある。洗濯物を廊下に乾している就任も居た。しかも女性物だ……、セクシーなブラや大人っぽい下着が無防備に乾されている。

その奥に一階へ下りる階段があった。昂輝は、洗濯物に目をやらないように階段を目指した。まだまだ世間知らずの初心さが昂輝には残っている。

昂輝が目指す階段は、廊下の先で左に下りていく。

昂輝が階段の側まで来ると、下から誰かが登ってくる足音が聞こえてきた。ヒールの音だ。女性であろう。昂輝は階段を降らずに、上から階段の下を除きこむ。

「うん？」

「どうも……」

階段の下を除きこんだ昂輝と、下から上ってきた女性と目があった。思わず軽い挨拶をする昂輝。女性は、キョトンとした表情で昂輝の顔を凝視しながら足を止めた。

「あなた、だれサ？」

年の頃は二十台半ばだろうか。かなり短く切られたショートヘアを真っ赤に染めた褐色の肌をした女性だった。

細い眉毛に鋭い眼差し、口紅は白い。そして、このポロアパートには似合わないレディーススーツにスマートなパンツを履いていた。

女性は、自分の住むアパートに見知らぬ少年が居ることに不信感を抱いているようすだ。怪訝な眼差しで昂輝を見上げていた。

そして女は、昂輝から視線を外さずに一度止めた歩みを再会させる。階段を上りきると、昂輝の前で足を止めた。鋭い眼光で昂輝を睨む。まるで自分の縄張りに入ってきた余所者を威嚇しているようだった。美人な顔立ちだが、睨む眼差しは正直怖い。身長は、彼女の方が昂輝よりも僅かに高い。その高さから見下ろすような睨みは、氷で作られたナイフのようだった。

「ぼ、僕は七号室に引越してきました五代昂輝と申します！」

女性の凄みに押されて昂輝は、都会の女性は怖いと思いつつ自己紹介を述べると、深く頭を下げた。完全に腰が引けている。

「あら、七号室に引越してきたの？」

女性の声が明るくなったのを感じた昂輝は、彼女の機嫌を確認するように頭を上げた。

「私は五号室の赤股^{あかまた}_{ささえ}よ。よろしくね」

目の前で縮こまる少年が、新たな住居人だと分かった女性は、急に表情を替える。侵入者を威嚇する表情から、新人を歓迎するフレン

ドリーな笑顔に一瞬でチェンジしていた。
小動物のように怯えながら警戒していた昂輝も、その笑顔に気付き安堵した。明るい笑顔から怖い人では無い様子だと思う。

「すみません僕、これからバイト先に行かなくちゃならないので、挨拶は回りに改めていきますので、今日はこれで失礼します」

「いいわよ、気を使わなくても。同じ屋根の下で暮すんだから仲良くしましょうね」

昂輝が硬い笑みで言うと、赤股冴は温かい笑みで昂輝の肩を軽く叩き、そう答えた。

彼女が振舞う和やかな対応に、昂輝の緊張が解けていく。

「は、はい」

「じゃあね、僕。おやすみ」

そう言うと冴は、五号室へと入っていた。おやすみと言うのだから、これから寝るのだろう。ビシツとしたスーツを着ていたが、冴の仕事は水商売なのかと疑問に思った。

そして、彼女が部屋の中に消えるのを見送った昂輝は、別の疑問を抱く。

赤股冴なる女性が入っていた部屋は五号室。しかし女性物の下着が乾してある部屋は、六号室の前だ。

あの洗濯物は彼女のものでは無いらしい。

だとするなら、六号室にも女性が住んでいるのかと昂輝は思った。

もしまこれは、ハーレム設定。

「なんか、楽しいアパート暮らしになりそうだな」

そんな淡き期待を胸に抱く昂輝は、足取りも軽く一階に下りるとアパートの外へと出て行く。

アパートは、町を見渡せる高台のてっぺんに建っていた。風が気持ち良く、景色も良い。自然の緑よりも人工物のビルなどの姿が多い町だが、それでも上から見れば爽快に映る。

遙か向こうには水平線も見えた。海が見えるのも心が和む。

「ここから、新しい暮らしが始まるんだ」

パロラマのように広がる町並み。新しい暮らしのステージ眺める昂輝は、思いを声に出して現実を再確認した。

臉を閉じながら昂輝が、大きく深呼吸をして背筋を伸ばす。

生まれた町から厄介者として扱われ、逃げるように軒太郎と憑き姫に付いて来た。

素詛のおじさんは、本当に死んだのか。だとするのなら、殺したのは自分。

仕方なかった……。

そうかもしれない。しかし、そんな言い訳で葵さんや律子ちゃんが、許してくれるだろうか。

生まれ育った町を出たことより、そのことの方が心の前面に引つかかって離れない。大きな気掛かりと言えた。

彼女たちは、素祖の家は、あれからどうなったのだろうか。知りたいが、知るのも怖かった。

気持ちと暮らしが落ち着いたら確認しなくては と、昂輝は考えていた。

昂輝が遠くに広がる海を見ながら思いにふけていると、突然太く萎れた声が飛んできた。思わず身を強張らせる。

「ちよつと邪魔よ。人の家の前で突っ立てないでよ！」

男の声だ。昂輝は驚いて大きく瞳を見開いた。

「早く退きなさいよ！」

昂輝の眼前には、怪物が立っていた。

否、怪物ではなくて、オカマだ。

明らかに筋肉が、骨格が、加齢臭がゴツゴツした体型に、女性物のキラキラしたドレスを無理矢理纏ったオカマだった。

ナイロン製のカツラと思われる長い金髪の下には、禍々しい化粧が奇怪なほどに塗りたくられていた。

「あああ………」

強烈な精神的衝撃に、開いた口から魂の抜けた声を漏らす昂輝は、金縛りに遭ったかのように硬直して小刻みに震えていた。思わず瞳孔が開きばなしになってしまう。

後ろから見ようと、百メートル先から見ようと、女性と間違えることが出来ないぐらいのオカマだった。

人によってはゴリラと勘違いしても罪が無いほどの酷い容姿である。この女装だけで犯罪と言えた。何故に国家権力は、この怪物を放置しているのか不思議に思う。逮捕できなくても駆除はすべきだと懇願した。

「す、すみません……」

赤股冴とは異なる迫力に押され、昂輝は逃げるように道を空けた。すると怪物は、昂輝を睨みつけたまま横を過ぎると、アパートの中に入って行った。重々しい足音が階段を登って行く。その重低音が外に居る昂輝の耳にも届いた。

「ま、まさか、あの洗濯物は!？」

何かを悟った昂輝の周りで温度が二度下がる。

昂輝は突然気分が悪くなり、吐き気を感じた。眩暈も生じる。

昂輝が悟ったもの、それは、世の中そんなに甘くないと言うことであつた。

もしかこれも呪いの効果なのかと疑う。もしかではない、きっとそうだと確信した。

「都会って怖いな……」

恐るべき都会の真実。恐るべき己に掛けられた呪いの力。我が人生、やはり油断は禁物だ。

強いショックを感じながらも昂輝は、ヴァルハラ探偵事務所を目指

して坂道を下って行く。

少年は、一步一步を重たく感じていた。

こうして新たな町での一日がスタートしたのである。

探偵見習い

空を見上げれば、日差しが眼に痛い程に眩しかった。アスファルトから陽炎が揺らいで見える。とても暑い夏の昼下がりであった。

TシャツにGパン姿の昂輝は、履き慣れたスニーカーで、慣れない町並みを観察するように歩きながらヴァルハラ探偵事務所を目指していた。

住宅街を抜けて、オフィスビルやオシャレな店が軒を連ねる大通りへと出て行く。車の往来が激しく、歩道を行き来する人の数も多かった。

しばし足を止める昂輝。

「……」

自分が暮していた温泉街は、観光シーズン以外は静かな町であった。主に騒がしいのは、夏に訪れる海水浴の観光客たちである。しかしその観光客が落としてくれるお金が、町に住む人たちの貴重な収入源なのだ、感謝を述べても文句は言えない。

そしてこの町は、夏場に温泉街へと訪れるような人たちが暮す町だ。観光ではなく、ここに彼らの暮らしが詰まっている。この町並みを見ていれば、彼らが温泉街に癒しを求めにやって来たり、翅を伸ばすように遊びに来る理由が解ってきた。

なんとも騒がしい。

車の雑音や濁った空気が、着実にストレスを積み上げて行くのだと、僅かな観察から見て取れた。

町を行き来する人たちの表情は、昂輝の地元で見るとような笑顔は少なく、歩く速度も何かに急かされたように速いものだった。

昂輝は、暫く止めていた歩みを再開する。しかし、その昂輝を後ろから歩いてきた人々が抜き去って行く。昂輝と町の人々では、完全に歩く速度が違っていった。

昂輝が生きてきた人生の速度と、この町の人々が暮す速度の違いを、そこから実感した。

だが昂輝は、流れの違いを気にせずマイペースを維持して歩いて行く。

人は人、自分は自分なのだ。

この町の人々には、各自の暮らしがある。昂輝には、己が背負った呪い宿命がある。彼らにも各々が背負う何かがある筈だ。明らかに生きる目的が違うのだ。進む速度も暮す思いも異なってくる。

「歩くスピードも、そりゃあ、違うよな……」

そう呟いた昂輝を、後ろから抜き去ろうとしたサラリーマン風の中年が、不思議そうな眼差しでチラ見していった。

一瞬のこと、眼と眼が中年男性とあった。しかし中年男性は、昂輝を抜いてから振り返らなかつた。

昂輝は、その背中が遠くに進んで行くのをゆっくり歩きながら暫く追った。

やがて昂輝は、流れの邪魔にならないように歩道の端へ端へと動い

て行く。そこが自分にとって正しい時間の流れがあるように……。

砂壺荘を出てから一時間ぐらい歩いただろうか、昂輝は古風なビルの前に到着した。赤茶色のレンガが、明らかに周りのビル群とは異なって見えた。このビルだけが、時代遅れを窺わせる。

憑き姫や軒太郎が勤めているヴァルハラ探偵事務所が入っているビルである。

しかし、昂輝にとってこの三階建てのレトロなビルが、とても自分に合った建物に感じられた。

砂壺荘もそうだった。何故か落ち着く。

ここが自分の居場所なのかと運命的な気分を感じる。心が和むのだ。

ここまで歩いてくる間の騒がしさから開放されたのか、安堵の表情で昂輝は、古風なビルへと入っていた。

階段を登り二階の事務所へ向かう。階段もレンガ造りだ。

その階段を登ると二階の廊下に出た。事務所の他にも幾つかの部屋がある。その全てが三外家で使っているらしい。このビルも土地も全部が、ヴァルハラ探偵事務所の所長である三外眼一郎の私有物らしい。

詳しいことは、昨日来たばかりの昂輝もよく判らないが、軒太郎と眼一郎は、実の親子らしい。顔付きが、とても似ている。

ワックスで艶めく板張りの廊下を進み昂輝は、昭和初期の面影が映るアンティークな扉を軽くノックする。

中から「入りたまえ」と軒太郎の声が聞こえてきた。昂輝は真鍮のドアノブを捻り中へと入る。

「おはようございます」

「やあ、おはよう」

「おはよう昂輝君。ちょっと待っていてくれ」

昂輝が元気良く挨拶をすると、接客用のソファに並んで座っていた軒太郎と眼一郎の親子が、そう言った。

二人の向えには、見慣れない男性が一人座って居る。どうやら来客中のようなのだ。

そのお客がソファに腰掛けたまま昂輝の方を見たので、昂輝は小さく頭を下げて微笑んだ。軒太郎の営業スマイルを真似てみたのだ。慣れない営業スマイルが、若干固い。

事務所内には、他に憑き姫しか居なかった。彼女は別のソファに座って本を読んでいた。昂輝は少女の隣に座る。

「お客さんなんだ？」

憑き姫の隣に座った昂輝が、少女に小声で質問した。憑き姫は読んでいた本から視線を外すと質問に答える。

「ええ、そうよ。仕事の依頼よ」

「どんな仕事？ 受けるの受けないの？」

「さあ、それは所長が決めること。私たちは依頼が成立したら、それをこなすだけよ」

「そっか……」

探偵事務所に依頼人が訪れているといったシチュエーションに、
つつい興奮してしまつた昂輝だったが、憑き姫の冷めた回答に冷
静さを取り戻す。

そしてスーツ姿の三人を除き見るように、ソファアの背もたれに仰
け反つた。

昂輝の隣に居る憑き姫は、読書を再開する。

依頼人は男性だつた。年の頃は三十歳ぐらいだろうか。スーツを着
たインテリ風の男である。

表情は真面目そうでクールと呼ぶよりも冷たさを持っていた。

喋りかたも冷たい。仕事は完璧にこなしそうな人物だが、友たちと
しては付き合えそうにないタイプだつた。

もしかしたら憑き姫のように、クールデレかも知れないが、昂輝と
は同姓だ。デレを隠していても興味は無い。

そして、その人物を軒太郎は、いつもの営業スマイルで応対して居
た。

所長の眼一郎は、息子とお客の遣り取りを黙つて聞いているだけだ
つた。息子に全てを任せているといった様子だ。アイパッチの下で
余裕の表情を見せている。

昂輝が離れたソファアの陰から三人の話を盗み聞きしていると、話
が纏まつたのか依頼人が席を立つ。続いて軒太郎と眼一郎も席を立
ち、事務所の扉に向かって行く依頼人を見送つた。

「では、私はお屋敷に帰つて、主人に報告してまいります」

「はい、よろしくお伝えください。我々も準備が整いしだい、お伺

「いただきます」

「はい」

依頼の成立したようだ。

そう言った遣り取りを最後に交わすと、男は事務所を出て行った。依頼人の気配が消えるのを待って昂輝が立ち上がる。

「所長さん、軒太郎さん、仕事の依頼ですか？」

昂輝が依頼人との話を盗み聞きしていたのは、殆ど最後の方だけだった。その為、依頼内容がどんなものが分からない。

昂輝は、探偵の仕事と言うものに、かなりの興味を抱いているようすだ。

何故にそこまで興味を抱いたかと言えば、昨晚の歓迎会で酔っ払った眼一郎の武勇伝を聞かされた為である。

その内容がハードポイルド小説のようなクールでダンディーな内容だけであらず、推理小説顔負けの名推理を述べた内容からであった。

眼一郎の語り方も素晴らしかったせいもあつたが、昂輝は騙されるように探偵とゆう家業に憧れてしまったのだ。

しかしこの眼一郎の話が、一流作家たちの代表作から、所々を摘んでパクった内容だと気付くのに昂輝は、一年以上の時間を費やしてしまう。

「ああ、もちろん仕事の依頼さ」

眼一郎が自慢気な表情で昂輝に答えると、この時ばかりは、黒いアイパッチがクールに見えた。

この頃の昂輝は、まだまだ眼一郎を尊敬していたのである。

「父さん。とりあえずこの仕事は、私と憑き姫で調査してきます」

「ああ、まかせるよ。それに昂輝君も助手として連れて行きなさい。探偵業の勉強には、うってつけな依頼と言えるからね」

「ほ、本当ですか!」

眼一郎の言葉に昂輝は、両手を握り締めながら興奮した様子で声を上げる。その眼差しは夢見る少年の如くキラキラと輝いていた。鼻息も荒い。

「ああ、昂輝君、本当だとも。二人に付いて行き、勉強してきなさい」

アイパッチを付けた中年は、フレンドリーに微笑んでいた。すると軒太郎が昂輝に言う。

「まずは助手として覚えなくてはいけない仕事があるからね」

「はい、勉強させて貰います!」

若く元気な声が探偵事務所内に響いた。

「じゃあ、まずは初仕事を命ずるよ」

「な、なんででしょう!」

軒太郎の言葉に対して、更に興奮する昂輝。探偵見習いとして始めて覚える仕事の内容がどんなものか元気良く問う。

「そのジム机にタクシー会社の電話番号があるから、タクシーを一台よんでくれないか。それで依頼人の屋敷まで向かうから」

「はいー！」

昂輝は踊るようにジム机に向かった。そして机の上に在る受話器を勢い良く取ると、タクシー会社の番号を見て、ダイヤルを廻す。今時珍しいダイヤル式の黒電話を昂輝は、なんだか楽しそうに廻していた。

探偵として昂輝の初仕事は、タクシーを呼ぶことだった。次に昂輝が探偵としての覚えるべき仕事の内容は、タクシー運転手から領収書を貰うことである。

探偵業を覚えるとゆうより、社会人としての心得を教わっているようだったが、ついこの前まで学生だった昂輝にとっては、全ての仕事が新鮮に感じられていた。

こうして昂輝の探偵見習いのバイトがスタートしたのである。

探偵の仕事（一）

依頼人の男が事務所を出て行き、昂輝が呼んだタクシーが来るまでの間に、軒太郎が今回の依頼内容を憑き姫と軒太郎に話していた。

「今回の依頼者の名前は、東和栄光。世界的大企業、東和グループの会長です。先程こられた男性は、その東和栄光氏の秘書で奥村ヒロキ。今回の依頼は、東和会長直々の依頼らしいです」

「また、豪い大物が依頼人ね」

軒太郎の話聞き、憑き姫がポツリと言うと、横で昂輝はキョトンとしていた。

このインチキ臭い探偵事務所に、名の通った一流企業の大物が依頼を寄せて来るとは、信じがたかったからだ。

それだけヴァルハラ探偵事務所が、大物が訪れる程に名前が売れているのかと気付かされる。

正直なところ昂輝は、ヴァルハラ探偵事務所を、怪しい人々の集まり場だと勘違いしている節があった。

憑き姫、軒太郎、お砂姉さん、イゴール、誰一人として普通の常識から外れた存在であるからだ。強さも人格も可笑しい。並を大きく越えて、非常識の領域に突入している。

昂輝の驚きを余所に憑き姫が、軒太郎に質問をした。

「で、その大物の会長さんが、うちみたいなインチキ探偵事務所に、なんの依頼なの？」

やっぱりインチキ探偵なのかと憑き姫の台詞に、昂輝が眉を八の字に歪めて苦笑いを作る。

先程、ほんの僅かでも尊敬の念を抱いたことに昂輝は後悔してしま
う。

「詳しい話は、東和会長の屋敷で本人が話すそうです。ですが私は、
どんな依頼内容でも受ける積りですよ」

営業スマイルに力が入る軒太郎。

どうやら今回の依頼料は、かなりの高額報酬なのか、額面だけで断
る選択肢が軒太郎の中から消えうせた様子だ。

眼一郎も同意権なのか息子の言葉に、瞼を閉じて頷いていた。

この親子について昂輝は、お金の誘惑に弱いのだと感づく。

否、ただの強欲か守銭奴かと疑う。

「まあ、ちょこつと話を聞いたただけだから、まだなんとも言えない
が、恐らくは妖怪か何かが絡んだ依頼内容のようですからね」

几帳面にネクタイのずれを直しながら軒太郎が言った。やはりヴァ
ルハラ探偵事務所に来る依頼は、その手の類なのかと重いながらも
昂輝が聞き直した。

「妖怪……ですか、軒太郎さん」

「ああ、少なくとも怪異の類だよ」

「怪異？」

「東和邸の庭にね、巨大な門が出現したらしいのだよ」

「巨大な門？」

昂輝が軒太郎の話す言葉のポイントポイントを重複させる。一般的に会話では使わないような言葉だ。思わず昂輝は、一つ一つの単語の意味を深く聞き直してしまふ。

そして昂輝の疑問に続いて憑き姫が質問を始めた。今まで読んでいた本をテーブルに置いて、彼女もソファから立ち上がる。

「巨大な門って 地獄門かしら？」

「地獄門？」

昂輝にとつてまた聞きなれない単語だった。しかも地獄門とは、名前からして不吉である。昂輝が敏感に反応して表情を濁らし憑き姫を見下ろす。

「さあね、そんな大それた物が簡単に登場するとは思えないが……。まあ、あの秘書さんの話だと違うかと思うよ」

「なんだ……、詰まんない」

そう言い憑き姫は肩を落とす。彼女は大事を期待している様子だった。明らかにスリルを求めて此処に居ると思われる。

「秘書の話だと、巨大な門が見えているのが東和家直系の者たちのみらしいのだよ」

ここで眼一郎が口を挟んできた。ダンディーな口調で話します。

「そう、純粹な血族のみが見えているらしいのですよ。一家の長、

栄光氏に、婿を取った長女、それに長女の息子二人、それら四人には、庭に出現した門が見えているらしいのですよ。」

そう話した眼一郎に、昂輝が問う。

「他の人には……、あの秘書や使用人の人たちには見えていないのですか？」

「ああ、見えていない。故に最初、秘書の奥村も信じなかったらしい。一家揃つての狂言か何かだと思つたらしいのだよ」

そう言いながら眼一郎はソファーに座り長い脚を組む。そして片方しかない瞳で昂輝を見ながら話を続けた。

「そこで秘書奥村の提案で、別の家に暮している東和の家族を門のことは内緒で、実家である東和邸に集めたらしいのですよ。他の血族にも見えるかどうかってね」

「なるほど」

そう言い昂輝が掌に拳をポンと落とす。

「あのインテリ風の嫌味な秘書は、どう見ても超常現象やオカルトなんて信じていないタイプですしね。そこまでして判断しないと信用できなかつたんでしょ」

軒太郎の口調からして、あの秘書の奥村を好いていないのが良く分かった。交渉中には見せなかつたが、今、あの秘書のことを語る態度はかなり悪い。

「それで、実験はどうなったのですか？」

面白い実験だと昂輝は思った。

単純だが試す価値はあるだろう。

「長男に次男、その息子や孫が実家に到着して見せる反応に、秘書奥村もやつと信用したらしい。あの巨大な門は、直系の血族のみに見えているのだと、ね」

「他の家族にも見えたのですね」

「見えたらしいよ」

ざまあみろ、と言った感じで軒太郎が秘書を揶揄していた。

「大体の話は解りました。じゃあ、今回の仕事は、その門に関しての調査からスタートなんですね」

「昂輝君、素人なのに察しがいいね。将来は良い探偵になれるよ」

軟らかい笑みで眼一郎が昂輝を褒める。そのお世辞に昂輝が照れくさそうに頭を掻いていると、事務所の外から車のクラクションが一度鳴った。どうやら電話で呼んだタクシーが到着したようだ。

「じゃあ、早速、その巨大な門ってやつを拝みにいきますか。では父さん、行ってきます」

「ああ、いつてらっしやい」

そう言い眼一郎が息子を見送ると、軒太郎が鼻歌まじりで事務所を

出て行く。その後ろに憑き姫と昂輝が続いた。

タクシーが待つ外を目指して階段を降る三人。昂輝が軒太郎の背中を見ながら再び質問を始める。

「軒太郎さん……」

「なんだい？」

階段を降る速度も緩めずに、軒太郎が後ろをチラリと振り返った。昂輝は腕を組み、何やら考え込んでいる。

「巨大な門を拝むって　その門は、血族の人にはしか見えないんですよね？」

「そつらしいね」

「僕らにも見えるのですか？」

「そこは　気合で頑張ろうよ」

「気合ですか……」

軒太郎の無責任な台詞に昂輝が怪訝な表情を見せた。ただでさえ常識はずれの依頼なのに、仕事を受けるサイドの人間がこれでは心配になってくる。

しかし、いつもの暢気な表情で階段を降りビルの外に出た軒太郎は、昂輝の不安を余所にタクシーに乗り込んでいった。憑き姫もいつもと変わらずクールな表情で車に乗り込む。

「まあ、どうにかなるか。この人たちも常識からはずれた存在なんだし……」

そう独り言を呟き昂輝も車に乗り込んだ。

その発言が、呪われた自分の存在を棚に上げていた。しかし昂輝本人も気付いていない。笑止である。

三人がタクシーに乗り込むと、何故か助手席に乗り込んでいる軒太郎が目的地を運転手に告げた。

何故だか知らないが、軒太郎は車に乗るとき助手席に座る。昂輝は、それについて今度聞いてみようと思った。

そして三人を乗せたタクシーは、町外れに広がる高級住宅街の1/4を陣取る東和邸を目指して出発したのである。

探偵の仕事 (二)

三人がタクシーに乗り込んで、三十分ぐらいの時間が流れた頃、昼間から車の騒音が騒がしい町並みを抜けて、高級住宅が並ぶ町内へと入っていく。

この町でも上流階級の一家が過ごすエリアだ。昂輝がお世話になることになった、砂壺荘が在る住宅街に比べて、ひとつひとつの家が見た目からしても豪華な作りであるのが、一目で実感できた。

一家の主にとっては、それがステータスの一つだと理解出来ていても昂輝には、その建物すべてが見栄の塊のようにも窺えた。

窓の外を眺めながら昂輝は、自分も結婚して所帯を持てば、同じようにマイホームを 自分の城を持ちたいと想うようになるのかと考えていた。

しかし、その想いの先には呪いの交代が存在している。自分の子供に 愛した女性の子供に、自分と同じ不幸を継がせるのは忍びなかった。それが心に引っかかる。

そんな想いに瞳を曇らせながら窓の外を眺めている昂輝を、隣に座る憑き姫が静かに眺めていた。

昂輝は少女が己を見ていることに気付いていない。

その憑き姫が、何を想い昂輝を見ているのかは不明である。

更に車が住宅街を進むと、並ぶ住宅の豪華さが徐々にランクアップしていく。各家の庭の広さも大きくなっていく。植木の数が増え、プールの在る豪邸が増え始める。

土地不足で悩む都会の住宅事情を無視したような光景だった。窓の外を眺めながら昂輝は、ここは別の国かと錯覚してしまう。

そして豪華な景色が続く先に、この町一番と思える屋敷が見えてきた。

洋風の門の向こうに広がる巨大な庭。綺麗に手入れされた青い芝生が二百メートル程続き、その真ん中を、レンガ造りの道路が四階建ての洋館へと伸びていた。まるでイギリスの貴族が住んでいそうな景色であると昂輝は思う。他の豪邸と、明らかにランクが異なっていた。

ここが今回の依頼人、東和栄光の屋敷である。

三人を乗せたタクシーは、東和邸の門の前に止まった。

「あれですね……」

昂輝が呟く。

ゴルフ場のコースのような庭の真ん中に聳える黒い影。高さにして三階建てぐらいのビルと代わらない大きさ。ヴァルハラ探偵事務所があるビルと同格のサイズである。

門と言うよりも、真っ黒な壁か、鉄板の様に見えた。

昔の映画で見たモノリスが巨大化して庭先に突き刺さっているようにも表現できた。

この距離からでは、門なのか扉なのかも認識できない。殆ど漆黒の壁にしか見えなかった。

今回、問題になっている怪異の門。東和家の直系にしか見えな

いと言われていたが、昂輝にも見えていた。やはり軒太郎が述べていたとおり、靈感などが高い人間には、自然と見える様子だ。今の昂輝は、呪いの影響で靈感などが底上げされているため、黒い門がはつきり見えていた。

そして東和家の血筋は、靈感が高い一家なのであると昂輝は予想した。十分にありうることだ。

「おもったより小さいわね」

「そうだな」

やはり憑き姫と軒太郎の二人にも巨大な門は、見えているようだ。昂輝にすら見えるのだ、当然と言えよう。

「ちょっとまっててくれ」

そう言って軒太郎が助手席から降りて、東和邸の門の横に備えてあるインターホンへと歩いて行く。そして中と繋ぎを取るとタクシーへと戻ってきた。

東和家の門は、軒太郎がタクシーに乗り込むよりも早く自動で動いて、奥へ進む道を開く。モーター音と鉄の軋む鈍い音がタクシーの車内まで届いた。

「じゃあ、中まで頼むよ、運転手さん」

「はい」

タクシーが茶色いレンガの上を走り、広い庭の奥に在る屋敷を目指す。その途中で、巨大な門を横から見られる位置に来る。

巨大な門は、横から見ると一メートル程の厚みがあるのが分かった。そしてタクシーが横を過ぎ去り裏側を窺える所まで来て三人は、やっと理解した。

今まで自分たちが見ていたのは、巨大な門の裏側であったことに。

「なるほどね、確かに門だ」

軒太郎が言う通り、真っ黒な鉄板の裏側には、巨大な門だった。乾いた血のような赤茶色の扉が二枚付いている。両開きの扉だ。怪異の門は、東和家の屋敷を睨むように向いている。

「なんなんですか、あれは……」

怪異の巨大門を見ながら昂輝が思ったことを訊いてみた。

あれが巨大な門であり、普通の人には見えないのは理解できた。しかし、なんの理由で、何故に存在しているのかが検討も付かない。

「さあね。まあ、あれがなんにしる、それを調べに来たんだよ。我々はね」

「そうですね……」

やがてタクシーは、洋館の玄関先に到着する。玄関前に横付けされたタクシーから三人が降りると、黒いスーツを纏った白髪の老紳士が出迎えた。どうやら老人は、屋敷の執事らしい。

老いた執事は、三人を客人として丁寧に扱って屋敷へと招き入れる。

三人は、白髪の執事に案内されて屋敷の中に入っていた。老人の後ろにヴァルハラ探偵の三人が続く。

屋敷の中は、とても豪華な光景だった。廊下の隅々まで染み一つ無い真紅の絨毯が敷き詰められている。

所々の壁に掛けられた油絵の数々は、なんとなく何所かで見たとあるような作品が多く、あちらこちらに飾られた花瓶や大皿も無闇に高価そうであった。

そわそわしながら昂輝は執事の後から追うが、軒太郎と憑き姫の二人は、とても堂々としていた。

昂輝と違い、このような状況にも慣れている様子である。

堂々と歩く憑き姫を見ながら昂輝は、凜々しい少女だと感心していた。

昂輝の視線に気付いた憑き姫が、いつものように抑揚の少ない口調で声を掛けてきた。

「昂輝」

「な、なんだい。憑き姫……」

すっかり二人は呼び捨てで名前を呼び合えるようになっていた。最初の頃は違和感もあったが、今ではどちらも不自然を感じていない。自然に呼び、自然に受け止められる。

「もっと堂々と振舞いなさい」

「で、でも……」

「既に貴方もヴァルハラ探偵事務所の一員なのですから、この程度で怖気付いていられないわよ」

「そつだよ、昂輝君。もつと堂々としなさい」

「は、はあ……」

かつて住んでいた温泉街に在る高級ホテルよりも豪華な屋敷内に、思わず臆しまう昂輝に二人の先輩探偵が喝を入れるが、やはり昂輝は落ち着けない。これは性分だと己で考えていた。

やがて執事に案内されて大広間に通される三人。

パーティールームなのか、幾つかのテーブルや椅子の他にも、ゆつたりと大きなソファークラセットが置かれてある。そしてこの広間にも、異常に高価そうな美術品やアンティーク家具が並んでいた。天井からは煌びやかで巨大なシャンデリアがぶら下がり、美しく輝いている。

部屋の右側は、壁全体がガラス張りの大きな窓になっており、広い芝生の庭が一望できる。その庭の真ん中に、あの大きな扉が聳え建っていた。

広い部屋の中には、数人の人物が昂輝たちを待っていたかのように寛いでいた。その内の一人は見覚えがあった。ヴァルハラ探偵事務所へと依頼を持ち込んだ秘書の奥村だった。

奥村の横には、ソファに腰掛ける老人が座って居る。

白いスーツに白髪まじりの老人。顎鬚を蓄えているが、その髭にも白い物が混ざっていた。

顔は厳つい。

眉毛が威嚇的な角度に上がっていた。

東和栄光である。

探偵の仕事 (三)

東和栄光の他にも数人の男女がホールに居た。子供の姿もあつた。

私服の彼らとは一歩離れて壁際に、控えるように黒服を着たSPの姿も十人程窺えた。

三人が入ってきた部屋への入り口にもゴツツイ黒服が二人立っている。

「お呼びいただきましたまして、有り難う御座います。ヴァルハラ探偵事務所の三外軒太郎と申します。こちらの二人は、私めの助手、憑き姫と五代昂輝と申します」

「いいえ、私が寧ろ本体ですわ」

「あはは……」

礼儀正しく頭を下げながら言う軒太郎に対して憑き姫は、小さな胸を張りながら威張って言う。

昂輝は苦笑いで頭を軽く下げた。

「ほお、うぬらがオカルト探偵か」

ソファーに腰を下ろしていた東和栄光が、萎れた声で言った。声色の中に傲慢が籠もっている喋り方だった。

だが、その傲慢すら己の個性だと云う自信が態度に見て取れた。

しかし、嫌味を感じない。

故に違和感や悪意の無い不思議な傲慢さだった。これが一代で東和グループを大企業に成長させた人柄なのだろう。

「急に呼び出してすまなかつたね、探偵諸君。今日はたまたま家族の殆どが屋敷に集まっていたので」

「いえいえ、お気にせず。ちょうど私たちも前回の依頼が終了したばかりでしてね。次の依頼人を待たずに過ごせそう感謝しますよ」

銀縁眼鏡の下で笑みを作る軒太郎は、穏やかな口調で述べると紳士的に振舞う。

黒衣に変身する前の軒太郎は、本当に常識人だと昂輝は思った。しかし、一度黒衣の戦闘衣装に変身してしまうと、身形だけでなく性格も黒く変わってしまう。まるで無法者が変わってしまったのだ。どちらの軒太郎が本当の軒太郎なのか、昂輝は疑問に感じていた。もしか二重人格なのかとも思ってしまう。

「まずは自己紹介をしておこうか、なあ、奥村」

「はい」

東和栄光は、ホール内に居る家族たちの紹介を、秘書の奥村へと託す。すると奥村は、東和家の家族たちを上から紹介していく。その紹介順が、この家系の地位の高さを示していた。

「まずは当家の主、東和栄光様です」

そう言い奥村は、隣にあるソファに腰掛ける老人を紹介した。両掌を開いた両膝の上に置き、どっしりとソファに座っている東和栄光は、秘書の奥村が己を紹介すると、今一度「うむ」と喉を鳴

らすと小さく頭を縦に振るう。

気の強そうな白髪まじりの老人が見せる僅かな動きは、皺の数から予想できる年齢よりも力強く、堂々としていた。おそらくは当分床に伏せることは無いだろう。

「続いて此方のご夫婦が、長女の栄江様と、婿養子の陽史様です」

「よろしく、探偵さん」

奥村の紹介の後に女が挨拶代わりに言った。隣の男は軽く頭を下げただけである。

長女の栄江は、年の頃にして三十歳後半と言ったところだろうか。夫も同じぐらいの歳に見えた。

栄江は紅いレティースーツに肩まである髪にパーマを当てている。化粧は濃いだが、ケバさよりもセレブ感が高く、気の強そうな女性だった。

目つきの鋭さが父の東和栄光に良く似ている。それに反して婿養子の陽史は、地味なスーツに印象の薄い顔立ちをしており、完全に妻の陰に隠れてしまっていた。

更に奥村の紹介が続く。

「此方が栄江様の長男で、勝之様と、妹の理沙様です」

「ふつ。探偵って言うから、どんなのが来るかと思いきや、子供連れかよ」

「お兄様、お客様に失礼よ。ごめんなさい、探偵さん。兄の失礼を許してください」

「いえいえ、お嬢様。皮肉は職業柄、慣れていきますから」

皮肉を述べる勝之を、妹が窘める。慣れていると言い切る軒太郎同様に憑き姫も気に止めていない様子だ。否、寧ろ今の言葉を無視している。

東和栄光の孫に当たる勝之は、ノーネクタイにスーツをだらしなく着込みながらテーブル席に腰を下ろしていた。

妹の理沙は、同じテーブル席に付いていたが、兄とは異なり身だしなみは整っている。清楚な身形にお嬢様特有の空気を醸し出していた。性格も良さそうだった。

二人の兄弟は歳が離れていないのか、二十歳前後に窺えた。逆に妹の方が確りしているせいか、大人びて窺えた。ついでに言うなら結構美人である。

「本日、長男の栄翔様はアメリカへ出張中のために欠席となっておりますが、こちらが栄江様の弟君にあたる栄翔様の奥様で、聖子様です」

「どうも、長男栄翔の妻、聖子です」

そう奥村に紹介されたのは、三十歳ぐらいのすまし顔の女性だった。一人だけ和風の着物姿である。

「こちらは、私の息子で栄聖です」

聖子は自分の横に居た息子の紹介を奥村に任せる事無く自分で行なった。

年の頃は七歳か八歳ぐらいの少年である。

人見知りしているのか母の陰に隠れて、昂輝たちを除き見していた。まだまだ穢れを知らない純粹無垢といった表情を浮かべている。

「そして最後に、次男の栄進様です」

次男の栄進は、奥村に紹介されても何もリアクションを見せなかった。

まるで軒太郎たちには興味が無いと言った素振りでお高くとまっている。

年の頃は、姉の子供たちと代わらない歳に窺えた。黙ったままソファに座り、ティーカップで紅茶を啜っている。

パリッとした高級スーツを着込んでいるが、礼儀は心得ていない様子だ。

これで東和家の全員だった。

奥村が全員の自己紹介を終えると、ソファに腰を下ろしたまま東和栄光が、萎れたているが力強い声で話を切り出す。

「探偵諸君。今日キミたちを呼び出したのは、あれが何だか調べてもらいたいからだ」

栄光は窓の外の巨大な門を指差した。その仕草に釣られて部屋に居る多くの者が、見える見えないに関わらず窓の外を見た。

「秘書の奥村氏から、依頼の内容は窺っています」

「キミにもあれが、見えるのか？」

窓の外を見ながら答えた軒太郎に栄光が問う。

その問いに軒太郎の口元が微笑み、眼鏡のレンズをキラリと光らせる。

「ええ、もちろんですとも。我々三名にも見えていますとも。あれは門と表現するよりも扉と言ったほうがデザインの正しいかもしれません」

「ほお、見えているか」

栄光は感心している様子だった。

血の繋がった子供達にしか見えない巨大な門を、初めて赤の他人が見えると言っているのだ。僅かに安堵する。

巨大な門が庭に出現する以前の栄光は、幽霊、妖怪はもちろんのこと、オカルト話全般を信用していなかった。神や仏すら信じていない。

どんなに信用できる人物の話だろうと、自分の目で見て体験しない限り、物事を信じられない性分なのだ。

その為か、今回の騒動。庭に現れた巨大な門を目の当たりにして、その常識離れた現象に、自分の目すら疑ったのである。

ついに自分は、ボケてしまったのかと　そう思ったこともあったぐらいだ。

「で、あれは何だ？」

栄光は、まるで問いただすように軒太郎に訊いた。できることならば、直ぐにでも如何わしい異物を消し去ってくれと言いたげだった。

今まで心霊現象を信じてもいなかった老人にとって、己の屋敷に現れた異形の門は、巨大な粗大ゴミを不当投棄されたように感じている様子だった。

ただの目障りな物体でしかないのだ。

「まあ、我々も今到着したばかりですから、直ぐに依頼人が納得できる回答を出せません。

とりあえず庭に出てみて、近くで調べてみないと。先ずはそこからスタートですな。

事によつては、ご家族の皆様にも話をお聞きしないと、いけなくなるやもしれません」

「なぜ？」

一言そう発したのは、長女の栄江だった。豊満な胸の前で両手を組む姿は、熟女の色気を醸していた。成人を遂げた二人の子供が居る婦人とは思えないほどに、若く見える。

「あれが呪いの類ならば　　ですがね」

「呪い？」

「可能性ですよ」

軒太郎は可能性だけの話をしている。しかし東和の一族が表情を厳しく変えた。

昂輝もまた呪いに悩まされている一人。軒太郎が東和家に対してかけた鎌に、昂輝も反応を見せてしまう。

そして、心当たりでもあるのかと昂輝が、室内の様子を窺う。

「そうか……」

軒太郎の回答を聞いて、栄光が溜息を漏らした。しかし、一息つく
と、鋭い眼光を瞬時に取り戻す。

「あの門がなににせよ、とりあえず調査を始めてもらおうか、探偵
諸君」

「畏まりました」

当主の言葉に軒太郎が一礼して踵を返す。そして部屋を出て行く
としたところで、憑き姫が一步前に出た。その動きに気づいた昂輝
が足を止めたが、軒太郎は部屋を出て行く。

「最後に、これだけは言っとくわ」

そう言い憑き姫は、しなやかな動きで右手が前に伸ばす。綺麗な人
差し指が、右から左へと動いて、室内の全員を舐めるように指差し
た。

室内の空気が静まり返って緊張感が満ちていく。

そして切れ長で美しい眼差しの少女が、氷のように冷めた美声で、
こう言った。

「犯人は、この中に居ます！」

……

……

…

沈黙だった。

室内を沈黙が支配する。

視線は憑き姫が独り占めしていた。

「ママー」

子供の声だけが寂しく聞こえてきた。

気まずさを感じた憑き姫は、何も言わずに昂輝の横を過ぎて部屋を静かに出て行く。

自分の横を歩いて行く少女を見送った昂輝が、ふと視線を室内に戻した。

室内の人々と目が合う。

今まで凝視していた目標を失った者たちが、まるで何かの回答を求めるように 昂輝を見ていた。

「あは、あは、あははは………」

その視線に昂輝は苦笑いしか返せなかった。そして逃げるように部屋の外に出て行く。

探偵の仕事（四）

何食わぬ素振りで大広間を出て行った憑き姫の後ろを追って昂輝が廊下に出ると、にんまりと厭らしい笑みを浮かべる軒太郎が待っていた。

昂輝と軒太郎の視線が合う。

恐らくのところ軒太郎は、憑き姫がやらかすことを予想できていたのだろう。

否、知っていたに違いない。きっと前例があるのだろう。

故に昂輝を残して足早に部屋を出たのに違いない。今見せる軒太郎の不敵な笑みが、それを語っていた。

やられた　はめられた　と、思いながら肩を落とす昂輝であった。

その後ヴァルハラ探偵の三人は、まじかで巨大門を調べる為に屋敷の外を目指した。

紅い絨毯が敷き詰められた廊下を歩く三人の先頭には、老いた執事が先導している。道案内だ。

昂輝たち三人が、屋敷にタクシーで到着したばかり話だ。

三人が執事の老人に道案内されている最中、僅かながらだが、この執事と会話を交わしていた。

老執事の名前は、細川皆松。六十九歳。

東和栄光が事業に成功する前から栄光の会社に社員として勤めており、何故か今では屋敷の執事を勤めている。

その為この細川と言う老人は、東和栄光のことに關しては身内以上に存じた人物であった。

この度の事件に関しても、かなり心配している様子である。軒太郎は、今回の事件に関して情報を得るのに好都合な存在だと目を付けていた。

「憑き姫、あの家族をどう見た」

顔を真つ直ぐ前に向けたまま歩く軒太郎が、視線だけを斜め下に向けて訊いた。憑き姫も歩きながら視線を前方から逸らす事無く答える。

「金持ちそうね」

「そうじゃない」

思わず憑き姫の回答に昂輝がツツコミを入れようとしたが、流れる会話のようにスムーズなテンポで軒太郎がツツコミを入れる。慣れた日常会話のようだった。

そこから憑き姫と軒太郎の付き合いの長さを昂輝は感じ取った。

何故か昂輝の心中に、羨ましさにも似た嫉妬がわき上がる。

それと同時に、この二人は何時からの知り合いなのかと疑問に思った。

二人の歳は、十歳ぐらい離れているはずだ。軒太郎は二十代半ば、憑き姫は十四五歳のはずだ。もしかしたらもつと若いかもしれない。その年齢差から、さほど永い付き合いとは思えなかった。

そんな事を考える昂輝は、憑き姫のサラサラした艶の綺麗な長髪を眺めながら、白いワンピースの後ろに続く。

更に軒太郎が、パートナーに問う。

「あの一族に、そろって強い靈感が有るように見えたか？」

「無いわね」

憑き姫は囁くように答えた。

彼女の言葉に昂輝も、やはり　と、思った。

呪いの影響で得た霊力とはいえ、昂輝にも霊感的な力が芽生えていた。

あの巨大な門が見えるだけではなく、普段から自縛霊やら怪しいものが見えたり感じ取れるようになっていた。

強い妖力を秘めた妖怪魍魎魍魎の類ならば、離れていても気配を感じ取ることができるようになっていた。

もちろん相手が自ら気配を消していなければの話だ。

そして靈感の強い人間を見れば、一目でそのレベルを感じ取れる。

しかし、ヴァルハラ探偵のメンバーは、己の霊力の類を訓練から隠す技術を習得している為に、昂輝程度では彼らの力量を計ることはできない。

だが、東和一族の者たちは別だ。

皆が靈感なんて信じてもない素人。靈感を隠す隠さないの問題では無い人種。

そんな人々が、巨大門が見えていると云うから、てつきり靈感の強い一族かと思いきや　そうではない様子だ。

あの広間に居た人物　SPを含めて誰一人からも強い霊力は感じ取れなかった。

普通の人間には見えない霊的物体が見える特別な人物たちが、靈感の欠片も持ち合わせない。可笑しな話である。

靈感とは神秘的な世界の法則に過ぎないが、その怪異の法則からも外れている。

そう疑問に思いながら昂輝が先輩探偵の背中を見て歩いていると、二人は更に会話を続ける。

「じゃあ、何故にあの家族には巨大な門が見えていると思う？」

「貴方は、どう思うの？」

問う軒太郎に憑き姫が質問で返した。どうやら明確な回答に困った憑き姫が、逃げるように攻めに転じた様子だった。

昂輝も同じ疑問を抱いていた。だから何も問わずに二人の遣り取りを聞くことに徹する。

此処で素人に毛が生えた程度の昂輝が話しに参加しても時間の無駄だろうと分かっていたからだ。

このような時の昂輝は、いつも控えめである。

「一族のみに見えると言うことは」

そこまで述べて軒太郎は、言葉をもったいぶらせた。

昂輝が後ろから軒太郎の後頭部を凝視して、憑き姫が視線だけを斜め上に向けた。三人を先導している執事の爺さんが、一度だけ振り向き軒太郎の顔をチラリと見た。

皆が軒太郎の推理を聞いたがっている。

「一族のみに見えるってことは、あの一族のみに、あの扉を見せた
い者が居る可能性が高いってことじゃないかな」

「見せたい？」

昂輝が呟くように訊きなおした。

「そう、あの一族のみに扉の存在を示したいのだよ」

「何故に？」

「良い方向で取るならば。導き、道しるべ、先導、ヒント……
かな」

「良い方向で取る……。ならば、悪い方向で取ると？」

小首を横に傾げながら昂輝が質問した。

陰があれば、陽がある。

光があれば、影ができる。

裏があれば、表がある。

それが当然の理論だ。まず軒太郎は、前向きな意見を述べたのだろ
う。

そして昂輝に急かされ悪い方向とやらを語りはじめた。

「脅し、脅迫、威嚇、忠告」

そこまで軒太郎が言うと、三人の前を歩いていた執事が足を止めて
振り返った。老いた表情が緊張に固まっている。

瞳を大きく剥いた老紳士と軒太郎が見つめ合うと、止めを刺すよう
に軒太郎が言った。

「もしくは 宣戦布告」

その言葉を聞いた執事は、狼狽しながら前を向き直すと再び歩き出した。今までよりも若干だが足取りが速くなっていた。

明らかに何かを知っている。何かを隠している。それは探偵見習いの昂輝にも悟れた。

この老人は何かを知っている。間違いない。

だが、軒太郎と憑き姫は、焦りを滲ませる執事の背中を見詰めるだけで、問い詰めるどころか何も訊こうとしなかった。

二人が訊くタイミングを計っているのかと思つた昂輝は、出すぎた真似は控えようと言葉を飲み込む。

暫くして四人は屋敷の外に出て、問題と成っている巨大門の前へと歩いて行く。

足元には絨毯の如く芝生が広がっている。

夏の日差しを浴びて青々と育つた芝生の頭は、綺麗に刈り込まれ手入れが行き届いていた。

昂輝が振り返れば後方の屋敷の窓に、此方の様子を窺う東和家の人々の影が数体映って見えた。

やはり探偵らの調査とやらが気になるのであろう。此方を窺っている様子だ。

老いた執事の足取りは、軒太郎の言葉を聞いていらい、随分と重たくなっている。巨大門の前に到着した頃には、更に歳を取ってしまったように見えた。一段と老け込んでいる。

執事の爺さんに対して、逆に理由を聞かないのが苛めのように昂輝は思えてきた。

しかし、これが軒太郎の作戦なのだろう。追いつめてから吐かせる。そうすることでありっただけ情報を聞き出す積りなのだ。えげつない探偵の技術だ。

四人が巨大な門前に到着した。

怪異の巨門。

幻影の魔門。

冥界の霊門。

そのように例えるのが相応しい姿だった

四人のうち三人が、顎を上げて見上げる。

その瞳には巨大な門が映っているが、一人視線の高さを変えない老人には、三人と同じものが見えていない様子であった。

老いた執事は、ただ三人の探偵の顔を眺めるだけである。

見えていない者には、やはり信じがたいのだろう。三人の来訪者が幻を見上げているようにしか見えないのだ。

「ぼやけていますね」

「そうね」

昂輝の言葉に憑き姫が同意権だと返した。

三人が見上げる巨大な門は、昂輝が述べたとおり、若干ぼやけていた。

まるで蜃気楼に映るオワシスのように朧気である。

「どれどれ」

軒太郎が警戒心の少ない笑みで右手を伸ばした。指先が巨大門に近づくと、僅かな動作が生み出した空気の揺れに、巨大門の表面が揺れた。まるで水蒸気のように、触れようとした場所が形を崩す。

更に軒太郎は、扉の中に腕を突き刺すように伸ばした。腕は音も無く霧の中へと沈むように進んだ。何も感触は無いようだ。

軒太郎の大胆な行動に昂輝が表情を驚かせていた。

「霊体 エクトプラズムの類かな？」

霧の扉に腕を突っ込んだ軒太郎は、豪快にも大きく腕を回して掻き回すような仕草を取った後に腕をひっこ抜くと、そう言った。

銀縁眼鏡の下は満面の笑顔のままだ。

本当に恐れを知らない人だと、こればかりは昂輝も尊敬を越えて驚倒してしまっ。

「実在するが 実際しない」

ポツリと憑き姫が言う。

此処に在るが此処に無い と言うのだろうか？

言葉の意味が微妙で何が言いたいのか昂輝には悟りきれない。

「憑き姫。もうちょっと詳しく調べてもらえないか」

「ええ、いいわよ」

軒太郎の願いを聞き入れた憑き姫は、右掌内に赤い魔導書を召還す

る。

突如少女の手に、閃光と共に現れた分厚い書物を目の当たりにした執事の細川は、驚きに目を大きくさせていた。

続いて憑き姫は、手に在るカードファイルの中から怪しげなカードを一枚取り出す。手の目だ。

「手の目 ザ・エグザミネーションアイズ！」

憑き姫の可愛らしい掛け声と共にカードが輝き中から見窄らしい禿頭の座頭が姿を現す。

手の目の顔は、剛腕プロレスラーにアイアンクローを受けているようなクシャ顔で、盲目の瞳は深い皺の底に埋もれていた。口もへの字である。

そして手の目は、枯れ枝のような細い腕を前に突き出していた。その両掌にはキヨロリとした奇怪な瞳がギラ付いている。

まさに名前どおりの怪しげな風貌。明らかに妖怪か化け物の類だ。疑うよちが無い。

「ひいひい！」

憑き姫が魔導書を召還したとき以上に執事の老人は驚いた様子である。

そして驚きのあまり転倒しそうになるのをよろめきながらも踏み止まった。

恐怖に近い驚愕の表情で汗を流している老人。貧血を起こしそうにフラフラしている。心配になった昂輝が細川老人に駆け寄り腕を差し伸べ支えとなる。

老人は驚きながらも駆け寄った若者に視線を向けた。その眼差しは、

あれは何かと無言で質問しているようだった。

「大丈夫ですよ、細川さん。害はありませんから」

「は、はあ……」

若者にそう言われても怪異を目の当たりにした執事の細川は狼狽していた。

安心させようとした昴輝の言葉も効き目が少ない。老人の動揺は治まらない。

まあ無理は無いだろうと昴輝も思う。自分とて、ほんの少し前までは、幽霊とも妖怪とも縁がなかったのだ。気持ちは良く分かる。

自分が狼男に変身したときは、かなり驚いたものだ。

動揺、狼狽、混乱も起こしたことを思い出す。

昴輝が老いた執事の心配をしているなか、妖怪手の目を召還した憑き姫が、巨大門のスクランを開始する。

手の目の後方で同じポーズ取り、禿頭のお坊とリンクした憑き姫が集中に切れ長の両目を閉じると、妖怪の両掌に開く瞳から紅い光が放たれた。

赤い光は、まるでレーザー光線のように巨大門を素早くなぞり上げて行く。

その作業が終わるのを昴輝たちは、しばらくの間見守った。

スクランする目標がビルで例えるなら三階分の大きさもあるせいか、憑き姫と手の目の共同作業は梃子摺っている様子だった。時間が掛かっている。

軒太郎が腕時計に目をやると、かれこれ五分は過ぎているだろうか。

「まあ、気長に待とう」

そう言い軒太郎はネクタイのズレを締め直す。

探偵の仕事 (四) (後書き)

糖尿病が芳しく無いです……w

探偵の仕事 (五)

「お父様、あの探偵たち、使えるのかしら？」

そう言ったのは、東和家長女の栄江だった。

屋敷内のパーティールーム。壁一面に広がる大きなガラス窓の前に、東和の者たちが横一列に並びながら巨大門が在る庭を眺めていた。巨大門の前には、東和家の執事とヴァルハラ探偵の三人が小さく見える。

窓の外を眺める東和の眷族は、自分たちの方が偉いと言わんばかりの傲慢な姿勢で並んでいた。

自分たちは、貴族か財閥の血統、庶民とは流れる血が異なると思っているのが、立ち姿から滲み出ていた。

「探偵と看板を出していますが実のところは退魔師集団と噂される連中です」

実の父に問いかけた栄江の質問に答えたのは、一族の列から一步下がった場所に控えて立つ秘書の奥村だった。

本来娘に問われた筈の東和栄光は、杖を片手に真っ直ぐ窓の外を睨んでいる。

「退魔師……？」

「はい、退魔師で御座います」

「また、怪しげな連中を呼んだものね」

栄江は、巨大門の調査を始めたヴァルハラ探偵の様子を眺めながら奥村と話す。彼女の口調には、ヴァルハラ探偵への怪訝さが強く感じられた。

「ですが私には、見えないのですよ。皆様が見えていると仰っている門の姿が。 。
ならば私の役目は、怪しくとも事に似合った輩を連れてくるのが勤め。普通の探偵よりも、普通の霊媒師よりも、その二つがセットになっている者が居るのです。これを使わない手は無いかと思いましたがね」

自分が可笑しなことを述べていると自覚のある奥村は、少しばかり怒ったような表情で言うと、銀縁の眼鏡を指で直す。

東大卒で、筋金入りのエリートである奥村にとって、探偵に仕事の依頼を段取るだけでもあり得ないことなのに、その探偵がオカルト専門なのだ。正直なところ笑ってしまう。

「それにあの探偵。良い噂も悪い噂も多く聞く事務所のものでしてね」
「噂とな？」

奥村の言葉に東和栄光が反応を見せた。渋い声で訊き直す。

はい、噂です と言った奥村は、一呼吸間を空けてから話し出した。

「良い噂とは、まことしやかに語られている噂で、妖怪退治の武勇伝です」

「これは面白い。妖怪退治ときたか」

揶揄するように次男の栄進が口を挟む。

高級なスーツを着て、身だしなみも整っているが、表情は随分とやる気が少ない。けだるそうである。

「奥村さん。どのような武勇伝なの？」

栄江の娘で、栄光の孫にあたる理沙が、妖怪退治の武勇伝について興味を持ったのか奥村に訊いてきた。

一族の中でも一番礼儀正しい彼女だが、一族の中では一番オカルト話に興味を抱いている様子である。

理沙が子供の頃から、そのような怪奇話が好きなタイプであることを、家族の皆知っていた。

その理沙の隣では兄の勝之が、何を詰まらないことを聞いているのだと言いたげな表情で妹を見ていた。兄は妹と異なり、オカルト話どころかホラー映画にすら興味が無い。

兄の勝之が興味を持っているのは、スポーツカーと金髪女性のことばかりである。

「何でも鬼を倒したとか、悪霊を祓ったとか。武勇伝と言っても、眉唾物ばかり。まことしやかと述べたとおり、本当か嘘かも確認が取れません。

ですが、そのような噂でも評判として取れば、無いより有ったほうがいいでしょう」

「じゃあ、詳しい話は分からないのですね？」

「すみません、理沙お嬢様。少々調査不足でした……」

完璧主義者の奥村にしては、仕事が随分と雑であった。それだけ今回の事件を信じ切れていない証である。

いまだに奥村は、今回の事件そのものが東和一族の狂言嘘偽りと言う疑いが拭いきれていないのだろう。

「じゃあ、悪い噂とは？」

更に理沙が訊く。

「高額の依頼料です」

「高額？」

「一般市民から見ても水準ですので、皆様には問題ありません」

「そうなの？」

「はい、去年なくなられたペットのスザンヌ様が食べていた月の食費よりもお安いです」

ペットのスザンヌとは、長女の栄江が去年まで飼っていたポメラリアンであるが、齢十五歳で天に召されたのである。老衰による大往生であった。

「奥村！ スザンヌちゃんは、ペットじゃなくてよ、家族よ！」

スザンヌの名を聞き栄江が興奮したかのように声を荒立てる。

我が子のように育てた愛犬をペットと位置づけられたことが気に食

わなかつた様子だ。彼女に取ってスザン又は、三番目の子供と一緒なのだろう。

すみませんでしたと頭を下げて奥村が謝罪を述べる。

だがインテリ男は、心の奥で呆れていた。その思いを冷たい口ポツトのような表情には見せない。きつちりと隠す。

「おや、いつの間にか一人増えてないか？」

窓の外を眺めていた勝之が、巨大門の前で調査を行なっている探偵たちの人数が、いつの間にか一人増えたことに気付いた。憑き姫によって妖怪手の目が召還されたからだ。

屋敷内からは距離が離れているが為に、その怪しさまではつきりと伝わっていない様子だ。

ただ、いつの間にか人数が増えたようにしか見えていない。

「まあ、今回の騒動に関して、あの探偵事務所に全てを一任してある。

屋敷への出入りの自由。我々の身辺調査まで許可した」

今まで無言のまま外を眺めていた当主、東和栄光が話し出した。洪い声に、一代で財を成した大物の威厳が感じられる。

己の子供や孫たちとは重みが違った。

しかし、その威厳に抗うように栄進が父親に意見した。

「親父。屋敷の出入りはともかく、我々の身辺調査まで許可したって、なんだよそれ？」

そこまで探偵如きにくるちよろされたら、たまらないぜ。ウザイったらありやしねえ」

四十歳に近いはずの栄進の口調は、とても軽く感じられた。大人に成りきれない発言である。父と息子で器の違いが有り有りとは分かる。

「それが探偵サイドからの条件の一つでしてね」

外を眺める東和栄光に代わってまた、秘書の奥村が答えた。背の低い老人は、次男に視線すら向けない。

クスリと笑いながら勝之が嫌味のように言う。

「探偵の助手が言っていたとおり、案外と犯人はこの中に居るのかもな」

「な、なんだと！」

自分の周りをうるちよろされたくない栄進に対してのあてつけなのだろう。わざとからかっているだけかもしれない。勝之の態度も栄進とどっこいどっこいであった。

この二人は似たところがある。血が繋がっているのだ、当然だろう。しかし似ているのは、ろくでなしである部分ばかりだ。

育った環境が似ていたからだと、長男の嫁である聖子が二人の言い争いを見ながら考えていた。

完全に二人は、親の（祖父の）七光りに溺れきっているのが良く分かった。

自分の息子は、こっちはしまいと誓い、傍らに居る栄聖の頭を優しく撫でる聖子であった。

洪声が怒鳴る。

「止めんか、馬鹿者どもが」

冷めた怒りを込めて東和栄光が二人を止めると、栄進と勝之の二人は子供のようにそっぽを向いた。

弟と息子の情けなさに栄江が、人差し指と親指で眉間を摘みながら俯く。

若作りの厚い化粧だけでは、疲れから見せる皺を隠し切れなくなっていた。

「あら、理沙さん何処に行きますの？」

今まで喋る事無く見守っていた長男の嫁である聖子が、部屋を出て行くこととしていた理沙に気付いて小声で訊いた。

着物姿の聖子にトイレですと言って理沙は部屋を出て行く。しかし手には携帯電話が握られていることに聖子も気付いた。

「彼氏から電話でもきたのかしら」

聖子は呟きながら理沙が部屋を出て行くのを見送ると、理沙も年頃の娘だと思いながら、着物の襟を僅かに直した。

一方廊下に一人出た理沙は、手に在る携帯をいじり始めた。どうやら電話帳から相手の番号を探している様子だ。その間も辺りに人気が無いかを気にしている。

電話を掛けているところを誰にも聞かれたくないのだろう。警戒心から普段は姿勢が綺麗な彼女が、猫背になっていた。

理沙が携帯電話を耳に当ててから暫くすると、相手が電話に出た。

理沙は声を潜めながら、もしもと言う。その呼びかけに電話の相手が答えた。

「もしもし、北枕夢子ですが」

「北枕先生ですか!？」

「あら、その声は理沙さんね」

理沙が電話した相手は女性だった。

携帯電話越しに聞こえる声からして落ち着いた感じの若い女性である。喋り方からして年配でも若すぎる相手でも無い。

その女性を理沙は『先生』と呼んでいた。

「北枕先生!」

どうしたのと、電話の向こうで女が訊く。

「今屋敷に居るのですが、祖父が探偵を雇ったのです」

「あら、探偵。おもしろいわね」

「しかも普通の探偵ではなく、退魔師の探偵だとか……」

理沙の報告を聞いて、電話の向こうの相手は、僅かに黙り込む。

沈黙に理沙が、そわそわと焦りを見せた。足元をモジモジさせている。

「……もしかして、その探偵ってのは、ヴァルハラ探偵事務所かしら」

「ご存知なのですか、先生！」

声を潜めていた理沙が、思わず声のボリュームを上げてしまう。大きな声を発した己に気付き理沙は、狼狽しながら辺りを見回した。そして誰も居ないことを再確認すると、電話に耳をすませる。

「退魔師探偵と言えば、この辺じゃあヴァルハラと相場が決まっているからね」

そうなのですか と、理沙は電話に力少なく呟いた。

ここで始めて理沙は、奥村が言っていた良い噂と悪い噂を信用し始めた。あの噂は偽物ではないと。

「霊媒師を雇うことは想定していたけど、ヴァルハラ探偵を雇うとは 東和栄光も侮れないわね」

そう言う女性の声は、暗いものではなかった。寧ろ余裕が感じられる。

その声色を電話越しに聞く理沙は、僅かに落ち着きを取り戻しながら質問を続けた。

「あの探偵たち……有名なのですか、先生？」

「ええ、こつちの世界では嫌われ者よ」

「嫌われ者？」

「でも大丈夫よ、理沙さん。どちらにしても準備は万端。あなたは

本来の役目通り、そちらの監視を続けてくださいな」

「……はい、先生」

理沙は心配そうな顔で、電話に答えた。

大丈夫と言われても心配が拭いきれていない表情である。眉を顰めていた。

「あと数日で公爵様の準備も整います。今しばらくの辛抱ですわ」

「はい……」

「じゃあ、私は今の話を公爵様に話して、対策の打ち合わせをしますので、これで失礼します」

女はそう言うと、一方的に電話を切った。理沙は画面で通信が完全に切れたのを確認すると、携帯電話をパタリと閉める。

一人屋敷の廊下に立ち尽くす理沙は、姿勢を正すと大きく深呼吸した。

徐々に鼓動が落ち着いて行く。表情も穏やかになって行く。

そして気を取り直した理沙は、大広間へと戻っていた。

偽りの笑顔を仮面の様に被りながら。

探偵の仕事（六）

幾つかの書類が散らばった事務機の横で、椅子に腰掛けていた北枕夢子が、受話器を手にしている。

彼女は電話を終えると、ゆっくりとした動きで受話器を置いた。

何やら詰まらなそうな表情を見せている彼女は、机の上の書類を細い指で一枚弾く。

病院か何かの診察室のような場所である。

壁には白黒のレントゲン写真やCTスキャンの画像がモニターに映し出されていた。

机の上の書類は、どうやら患者のカルテらしい。それらが無造作に投げられ、無下に扱われている。

北枕夢子は、医師である。

そのような、医師である。

診察室だと思われる室内は、やたらと息苦しさを感じるほどに、荷物が多かった。

棚に収まりきらなくなった書類が、ダンボールに収められて、積み重なっている。

それらが息苦しさを視界から与えてきていた。

しかし彼女は、それについて気にしていない。寧ろ多少散らかっている方が落ち着くらしい。

彼女は膝上までの黒いスカートに白いYシャツを着ていた。その上に医者らしい白衣を羽織っている。

ブラウンの長い髪を後ろで纏め、凜とした表情には、雑な薄化粧をほどこしていた。

年齢は三十前ぐらいだろうか。あまりオシャレには興味が無いのが

一目で分かるタイプだった。
もっと化粧や身だしなみに気を使えば、そこそこの美人だろう。素材は良いのだから、実にもったいない。

椅子に腰掛けながら黒いタイツに包まれた長い足を組む北枕夢子は、背もたれに体重を掛けながら溜息を付く。
実にやる気が無さそうであった。

「めんどくさいわね、あの子。いちいち指示を出さないと何も出来ないのかしら」

先程までの電話相手を諷ると、北枕夢子は重い腰を上げる。
よっこらしよと、まるで年寄りのような掛け声を溢していた。
死語を使って表現したのならば、完全な親父ギャルである。

北枕夢子は、ドアの前までダラダラ歩いた後に、姿勢を正して気合を入れなおすと、ドアノブに手を掛けた。
ドアを開けて廊下に出ると、彼女は別人のように切りきりと歩きます。

薄暗い廊下だった。
看護婦や患者とすれ違う。

彼女が勤めているのは、この町の総合病院のひとつであった。彼女はエレベーターに乗ると、上の階に在る病棟へと目指した。
その階は、個室が並ぶ階である。曰く、金持ち病棟。一ヶ月も入院したのなら、軽く百万はくだらない病室ばかりだ。

北枕夢子は、病弱な金持ちたちが引き籠もるフロアーに在る一室の前に立つと、ドアをノックする。
しかし中から返事はない。

ドアには、面会謝絶の札が下がっていた。
彼女は、声が返ってこないことを知っていたかのように無言でドアを開けると、病室に入ってしまった。

部屋の中には白い半透明なカーテンに囲われたベッドが一台あり、中で誰かが横たわっているのが薄っすらと窺えた。

そのベッドの周りには、心拍数などを表示している物々しい機械が並び、幾つかの点滴や呼吸器のホースなどが、ベッドに寝る人物へと伸びていた。

明らかに重態。

面会謝絶にも納得できる装備だった。

ベッドの上の人物は、病室に人が入って来ても気付いていない。眠っているのか何も反応を見せなかった。

ただ、呼吸に合わせて胸を上下させているだけである。

北枕夢子が、そっとカーテンを開けてベッドの横に立った。

ベッドに寝ているのは男性である。

年の頃は三十後半。ボサボサの黒髪に武将髭を伸ばしたい放題に伸ばしていた。

呼吸器が無いと自力呼吸も出来ず、点滴からしか栄養補給が出来ないようすである。

意識不明　しかも長いこと床に臥せているようすだ。随分とやつれており、首は筋肉が衰えて細くなっている。

三十後半に見えるが、実年齢は、もっともっと若いのかもしれない。

北枕夢子は、そっと手を伸ばし、ベッドに横たわる男の頬に指を当

てる。彼女の顔は、薄っすらと微笑んでいた。優しい笑みではない、意味深げな怪しさが滲んでいた。

「公爵様、先程理沙さんから電話がありましたわぁ」

ベットの男に彼女が話しかけるが返事は返ってこない。ただ男は、寝息だけを静かに溢しながら、酸素を機械から頂いていた。

「ええ、心配は御座いませんとも、こちらの兵力も整っているの
しよ？」

そう言ってから彼女は黙ってベットの男を眺めていた。何も言わな
い。

しばしの沈黙の後、彼女が再び口を開く。

「やはり先陣は將軍に任せるのね、妥当だわ」

そしてまた黙る。

そして話し出す。

「ええ、私も新しい戦力を選別していますわぁ。使える素質の者が、
この病院には少なくてね。

アメリカの病院のように、死にそうな重症患者が、バンバンと運ば
れてこないのよね。ここまで来ると、平和も罪よね。詰まんないわ」

ベットの上の男と北枕夢子は、まるで会話をしている様子だった。

沈黙の後に彼女が話す、それを繰り返していた。

「まあ、ヴァルハラ探偵が出てきたのですから、こちらでも戦力を増
強しなくては行けないわ。

今居る四人だけじゃあ、心細いでしょう　公爵様も」

意識の無い男に向ける彼女の笑みは、心配そうなものではなかった。楽しんでる表情である。

「でも、後二日。その間に私はスカウトに励むわ。

公爵様も、そちらで戦力を生産しておいてくださいね。こうなれば一兵でも造兵しなくては。じゃあ、私は行くわね」

何度目かの沈黙の後、北枕夢子は、白衣を揺らしながら踵を返す。そして病室を出て行く際に、上半身だけで振り返ると、最後に言った。

「公爵様、最後に言っておくけど、これだけは警戒しなさい。あの女、ベロニカは、信用しちゃあダメ……」

そう言い正面を向きなおした彼女は、ドアを開けるが、なかなか外に出て行かない。俯いて立ち止まっている。何も声を発しない男の言葉でも聞いているかのようにだった。

「理由なんてないわあ。女の勘よ　」

そう囁くと彼女は病室を後にした。

室内には、男の機械による呼吸音だけが静かに流れていた。ただ、静かに　。

探偵の仕事（七）

妖怪手の目を使った診断が終わる。

憑き姫は、仕事を終えた禿頭の御坊を術で操るのを終了させた。妖怪手の目は、霧と変わって空気に解け消えて行く。

どうだったと、軒太郎が訊いた。昂輝と執事の細川老人も憑き姫の回答を待つように視線を向けている。

憑き姫は、先程までリンクしていた手の目と同じポーズを解くと、前に出していた両手を下げ、瞑っていた瞼をゆっくりと開いた。切れ長の美しい瞳は、眼前の巨大門を見詰めていた。

「この巨大門は、妄想の産物ね」

「妄想の産物？」

昂輝が不思議そうな表情で、憑き姫の言葉を、問うように反芻した。憑き姫がチラリと昂輝の顔に視線を移す。

「そう、誰かが空想したものを妖術か何かで構築した物ね」

「巨大門をイメージした輩と、術を掛けた輩が、別々に居ると」

そう軒太郎が言うと、視線を軒太郎に向けた憑き姫が、そうよと抑揚の無い口調で答えた。

「じゃあ、この扉を此処に映し出している犯人は、二人なのですね」

巨大な両開きの扉を見上げながら昂輝が言った。その仕草に釣られて憑き姫も巨大門を見上げる。

パッン！

軒太郎が両手を拝むように叩いて音を鳴らす。その音に三人が何事かと視線を集める。

「この扉を此処に投影している人物を犯人と呼ぶのが正しい言い方は 判らないが、少なくとも二人以上の複数の仕業。もしかしたら他人のイメージだけを勝手に使用した術師一人の単独犯かもしれない。

更に言うなら。ただの自然現象や偶然が重なっただけの事故かもしれない。

決め付けや思い込みは、良くないよ、昂輝君」

眼鏡のズレを人差し指一本で直しながら述べる軒太郎の言葉に昂輝は、なるほどと呟く。

軒太郎は、思い込みで様々の可能性を闇に包み込み、決め付けて捜査を行なってはならないと言いたいのだろう。

昂輝は思う。

我々は探偵なのだ。

捜査方針を誤り、真相に到達できなければ意味が無い。

それではミッションは失敗だ。

今現在、自分たちが依頼を受けた内容は、目の前の怪異たる巨大門が何かを突き止める事。

犯人が居るか居ないか、犯人が居るなら誰なのかを突き止めるのは、

次のステップなのだ。
事を焦ってはいけない。

「まずは情報収集が先決だ。様々な情報を集め上げ、積み上げ、事件の全体図を把握するのだよ。」

「どんなパズルもピースが揃ってなければ完成しないからね」

なるほど　と、また昂輝は呟いた。

更に軒太郎が自慢気な表情で語り続ける。

「探偵なんてものは、推理力がどんなに優れていても情報を集める能力が低ければ、なんの役にも立たないのだよ。」

優れた観察力。緻密な情報収集能力。地道な調査。

それらが集めたデータを材料に使い、長いキャリアを持つ一流宮大工が組み上げた伝統的仏閣の建物のように真相をイメージしていく。さすれば己のイメージと瓜二つの現実が眼前に現れるはずだ。

それが真実真相に近ければ近いほどに名探偵と呼べよう　「

軒太郎の述べていることは、筋が通っていた。理想的ではあるが、難事件に挑む探偵とは、そのような仕事なのかもしれない。

昂輝は、この人も探偵なんだと驚いた。

自慢気な口調で昂輝に語っていた軒太郎が、今度は憑き姫に話しかけた。

仕事の話に戻るらしい。

「憑き姫、この扉の向こうは、何処につながっているんだ？」

「恐らくは、誰かの深層心理　心に繋がっているは」

「では、この向こうに広がるものは？」

「恐らくは夢の世界　人によって異なるけど、心の色を映し出している世界が広がっているはず」

「なるほどね……」

軒太郎は難しい表情で顎を撫でた。

先程の名探偵の理想論を聞いたせいもあってか昂輝には、軒太郎の何気ない仕草までが探偵らしく見えてくる。不思議な物だ。しかし、それこそ思い込みなのかもしれない。

「此処から夢の主は分かるかい？」

「無理ね」

「では、いつぐらいに開く」

「この門のイメージは未完成。完成するのは約四十八時間後ぐらいかしら。開くとしたら、その後ね。正確には何とも言えないけど……」

未だに沈黙を続けながら聳え立つだけの巨大門が　開く。

即ち、何かが起きるなら二日後。

何が起きて、何が見れるのかは、　昂輝にも興味が有った。

しかし隣に立つ執事の細川は、緊迫した固い表情を見せていた。老いた口元に力が入っている。

「まあ、それだけ解れば十分か。あとは足を使って聞き込みや、目を使って調査するしかないか……」

「その辺の地道な仕事は、任せるわ」

やはり憑き姫は、それらの仕事は苦手なのかと昂輝は思った。探偵らしい仕事は、軒太郎の役目なのだろう。

「よし、私は先程の部屋に戻って、東和家の皆さんにあれこれ質問をしてくるよ。」

憑き姫は屋敷内を見て回ってくれ。他に靈的異常な物が無いかおね」

「ええ、分かったわ」

憑き姫は軒太郎の指示に頷いた。此処からは別々に分かれて調査を行なうらしい。

自分は何をしたらいいのか判らない昂輝が、軒太郎に指示を仰ぐ。

「軒太郎さん。僕はどうしたらいいのでしょうか？」

昂輝と軒太郎の視線が合う。

何故か軒太郎は動きを静止させ沈黙した。何かを考えている様子だ。昂輝はキョトンとしてしまう。

そして数秒後、若干の笑顔で軒太郎が話し出す。

昂輝には、その笑顔が何か嫌らしい物に感じられた。寒気を感じる。

「あゝ、昂輝君は……どうする？ 僕に付いてきて質問の話術を学ぶかい？」

そう言う軒太郎は、横目で憑き姫をチラ見した。

刹那。

軒太郎の言葉の後に、すぐさま憑き姫が言った。

「そ、それとも私と一緒に、屋敷内を調査して回る？」

「え……!？」

思わず可笑しな声を上げてしまう昂輝。

視線だけを横に逸らしながら言った憑き姫が、切れ長の潤んだ瞳を昂輝に向けた。頬も僅かに桜色だ。ドキッとしてしまう。

軒太郎も嫌らしいスマイルで、慌てる少年を面白そうに眺めている。

昂輝は、二人の言葉に心が迷う。激しく動揺してしまう。

この先、探偵業を続けて行くならば、技術を勉強する為に、先輩探偵の軒太郎に付いて行くのが正解だろう。

仕事を見て学び、訊いて学ばなくてはいけない。

だが！

憑き姫のお誘いも魅力的だった。

相手は幼いとは言え、クールな美少女。青春真っ盛りの少年昂輝十七歳には、天使のお誘いである。否、女神の誘いだ。

少年は、迷う。今年一番なぐらい迷ってしまっ。

「どうするんだい、昂輝君？」

昂輝が迷っていると、軒太郎が意地悪く訊いてきた。

「どうするの」

憑き姫も訊いて来る。

眉毛を八の字に寄せて憑き姫が昂輝を見ている。そして昂輝と視線が合うと、顎を僅かに引いて上目遣いに角度を変えた。まるで何かを懇願している眼差しだ。可愛い。反則だ。

そんな憑き姫の仕草を目の当たりにした昂輝の心に、銃声が幻聴となって轟き響き渡った。ピュアな昂輝の心を、スキューンと弾丸が貫いて行く。

軒太郎は薄っすらと笑っている。昂輝が置かれた状況を理解して、意地悪く振舞っているのだらう。そう言う男だ。

「ぼ、僕には決められません！ 軒太郎さんが決めてください」

「じとわるー！」

「えーーーーー！」

優柔不断な昂輝の言葉を軒太郎が力強く跳ね除けると、昂輝が思わず悲鳴のような声を上げた。

昂輝の顔からは、大漁の汗が流れ落ちている。本当に苦悩している

様子だ。

「いいから一緒に行こう」

俯いたまま近寄ってきた憑き姫が、昂輝の袖を人差し指と親指だけでつまんで言った。

引っ張る訳でもなく、軽く摘んだだけだ。声も小さかった。

背の低い憑き姫の表情は、俯いているせいもあってか、背の高い昂輝からは良く見えない。

どんな表情をしているのか昂輝には興味が有ったが、流石に覗き込むことは出来なかった。

「う、うん……」

勇気を振り絞ったかのような憑き姫の行動に、昂輝はどもりながらも一言で答えた。

照れくさい空気が流れる。

そして憑き姫は、摘んだ昂輝の袖を引っ張りながら歩き出した。進む先に当てがあるような素振りではなかった。

しかし昂輝は年下の少女に引っ張られるがままに付いて行く。今の昂輝には、それしか出来なかった。

「青春だね」

「そうですね」

二人の若者を見送るように背中を見ていた軒太郎が言うと、それに

細川老人が相槌を入れた。
老人は暖かい眼差しで若者を見送る。

「では、我々も屋敷内に戻りましょうか」

「はい、畏まりました」

軒太郎と執事の細川も踵を返して屋敷に向う。

軒太郎はプロだ。プロの探偵だ。

子供達のように無責任なままにイチャイチャしながら仕事は出来ない。

営業スマイルの下で軒太郎は、心の帯を締めなおす。

ここからが探偵としての腕の見せ所なのだ。

臆気な怪異、巨大門がそれぞれ四人の背後で聳えながら揺らめいていた。

この怪異事件を解決するのは、己だと軒太郎は考えていた。

ヴァルハラ探偵事務所を父より継ぐにあたって実績が、もっともつと欲しいのである。

今回の仕事を解決したのならば、東和家を通じて上流階級にも多くのお客を持てるかもしれない。

故に仕事は、今回の仕事だけはしくじれなかった。

すべては名声を高め、広げる為にだ。

陰謀の爍り

どんよりと曇った空。

空気はくすみ、どこことなく焦げ臭い。大地は干上がり罅割れ、草木は枯れ果てていた。

死んだ土地である。

土地だけではない。世界そのものが死にかけているようだった。何処を見ても不吉な景色である。

その世界の中心。威圧的に姿を見せる荒々しい古城。大岩の上に建築された城塞だった。

城の上空には、死肉を待ちわびている烏達が、黒い悪魔の如く群れを成して飛び交っていた。

烏達は、奇怪な声を上げて古城を見下ろす。

無骨な岩を積み重ねて作られた古城には、城外を遠くまで見通せるテラスがあった。飾り気の少ない石作りのテラスである。

そのテラスには、ワインのグラスを手に持つ黒衣の騎士が一人立って居た。

黒い長髪に堀の深い骨格。瞳は鋭く威嚇的。黒塗りの奇怪な甲冑。

黒鳥の羽で着飾れた黒マント。

そのような風貌の男が、ワイングラスを片手に死の大地を眺めているのだ。どちらかと言えば、悪役だろう存在感が滲み出ている。

彼が見ているのは、死の荒野の向こうに聳える巨大な門である。

そう、東和邸の庭に聳え建つ巨大門と同じ物が、同じように、この世界にも存在していた。

黒衣の男は、その巨大門を冷めた目つきで眺めては、時折グラスの

赤ワインを口へと運ぶ。

テラスの奥は応接間なのか幾つかの黒いソファアが、部屋の中央に設置されたテーブルを遠巻きに囲むように、あちらこちらに置かれていた。

テーブルの上には、三叉に分かれた蠟燭立てが置かれており、暗く薄気味悪い室内を三本のキャンドルライトで淡く照らし出している。流石に三本の蠟燭だけでは灯りが乏しい。壁に火の灯されたランタンが二つばかり掛けられていた。それでもまだ室内は薄暗い。

部屋の中はテーブルと幾つかのソファアの他に、これと違って目立った家具すらない。洒落つ気の一つも感じられない一室だった。しかし室内に、人の気配が感じられる。黒いソファアに、人影が二つあった。

城外を眺めていた黒鎧の男は踵を返すとテラスから薄暗い室内に戻る。そして、テーブルの上にワイングラスを置いてから、近くのソファアに腰を下ろした。両手を肘置きに降ろし、仰け反りながらダンディーに脚を組む。

「あと二日ですな、公爵」

ソファアに腰掛けていた人影が、黒衣の男に話しかけた。乾いた男性の声である。若い声色ではなかった。

「ああ、賢者殿……」

黒衣の公爵は、けだるい声で返事を返し、眼差しだけで男性の方を見る。

そこには黒いソファアにゆったりと腰掛けた緑色のローブ姿の老人

が居た。

老人が座るソファアの後方の壁際には、青白い表情のメイドが一人控えて立っていた。まるでマネキンの様に微動だにしない。

老人は頭からすっぽりとフードを被っており、キャンドルの灯りだけでは表情が見え難い。しかし白く長い髭がローブの外へと流れる小川ように露出しており、公爵に呼ばれたとおりの博学的な趣を感じさせていた。

そして老人の座っているソファアの横には樹木から作られた大きな杖が立てかけられていた。まるで魔法使いの杖である。

「將軍。出陣の準備は整っていますか？」

今度は公爵が、もう一人の人影に話しかけた。

別のソファアに腰を下ろしていた人影が、ゆらりと揺れると、ガチャリと甲冑の擦れる金属音が鳴る。大きな人影であった。

「おうよ。戦陣切つて突撃する準備は出来ているぜ。俺の準備も軍隊の準備も万全よ！」

声が大きく豪快な喋り方だった。ドスが利いている。

ソファアに腰掛ける男は、ズッシリとした体型に物々しい甲冑を身に付けていた。逞しいが筋肉質と言う程ではない。少々脂肪が多く、中年太りだろうか腹も若干出ていた。

だが、顔は四角くえらが張り七十年代のヤクザを想像させる角刈りであった。頬には鋭利な刃物による刀傷が刻まれていた。

ヤクザを想像させる　ではなく、ヤクザそのものに見える。一言で言えば、柄が悪い。

「將軍、賢者殿。二人には感謝していますよ。このような夢の世界を信用してくれて」

「信用するもしねえもねえだろう。本来病院のベットで動けもしない俺たちを、こんな愉快的な世界に連れてきてくれたんだからよ」

四角い顔が、悪どく微笑みながら自分の頭を掻いていた。その手には小指が足りない。

「左様。脊髄にまで癌細胞が転移してしまい、余命三ヶ月を言い渡された私が、こうして自力で歩き回れるのも貴公のおかげ」

ダークグリーンのフードの奥で老人の眼が、キラリと輝く。蠟燭の光を反射して光って見えた訳ではなかった。老人の双眸が悪魔の如く赤く光っているのだ。

この老人も悪党だと　光の色が表現していた。

「だがよ、公爵」

大股開きでソファアに座る將軍が、両手を胸の前で組んで背筋を伸ばし、姿勢を威圧的にも整え話し出す。
声に凄みが増していた。

「女医の報告だと、扉の向こうで探偵が何やら嗅ぎまわっているそうじゃねえか。しかも普通の探偵じゃなくて、オカルト専門の退魔師だとか……」

「問題はない。聞けば探偵の人数は、たかだか三人。こちらの戦力は、今でさえ十分整っている。

將軍が率いる千匹のオーク軍団。それに賢者殿が操る二十体のゴー

レム兵。これだけの戦力数を持つてすれば、探偵だろうと退魔師だろうと関係ない。圧倒的戦力で押しつぶせますよ。それに、いざとなれば我が部隊も出陣いたしますからね」

「そうだな、こちらは時間をかけて軍隊を造りだし編成したのだから……」

「おやおや将軍。極道にしては腰が引けてますな」

「なんだと、糞じじい！」

揶揄する賢者に将軍が感情を露にする。薄暗い室内にドスの利いた太声が響く。

将軍は、眉間に皺を寄せながら眼を剥き賢者を睨みつけていた。怒りの余りソファから腰が浮いている。

しかし、凄みの利いた将軍の威嚇に対して賢者は、微動だにもしていない。この老人も肝が据わった人物の様だ。

「今は仲間内でのいざごさは、よしましよ」

口元を微笑ませながら公爵が中に割って入る。

すると将軍は、ふんつと、鼻を鳴らしてそっぽ向く。強面だが、時折見せる仕草が子供っぽい。

僅かに冷静を取り戻した将軍が、浮かしていた腰を再びソファに腰を下ろすと、体重にソファの骨組みが音を軋ませた。

「万が一に備えて女医が、新戦力を選抜しているそうじゃないか？」

鋭い眼差しをフードで隠した賢者が、長く立派な白髭を撫でながら

訊いた。

「ええ、使える人物が居ればの話です。

しかし、作戦開始まで後二日です。今更の新戦力なんぞ当てにはできません」

「確かに」

公爵の言葉に賢者は萎れた声を返す。

そこに将軍が、とんでもないことを言い出した。

「じゃあよお。その探偵さんには、扉が開く前に退場してもらおうじゃないか」

「退場とは？」

公爵と賢者の視線が将軍に集まる。将軍はニタニタと笑っていた。

「扉が開かんことにゃあ、俺達は向こうの世界に手出しが出来ない。ならば、向こうの世界のルールで退場してもらおうじゃないか。なあ〜」

どうする積りだと公爵が訊く。

「公爵、俺の本職を忘れたのか？」

「いいや 覚えているぞ」

見た目どおりの極道である。

「力つてのは腕力だけじゃあねえんだよ。己が五体満足に動かなくつても、まだまだ俺の手足になってくれる若いもんは居るんだぜ。金だつて有る」

「そう言うことですか、貴方らしい」

公爵ではなく賢者が言った。

賢者の言葉には、若干の嘲りが感じられたが、今回は將軍も感情を荒立てる事無く無視を決め込んだ。

「じゃあ、俺は行くぜ。早速だが若いもんに指示をだしてくる」

そう言うと將軍は席を立ち、鎧と腰の剣を揺らしながら部屋を出て行つとする。すると部屋の出入り口で赤いローブの女性と鉢合わせした。ベロニカだ。

二人は足を止め向かい合つと、どちらも道を譲ろうとはしなかった。將軍が冷めた眼差しで見下ろすが、ベロニカはフードを被り表情を隠していた。二人の眼差しがぶつかり合うこともないし、険悪な空気が言つた訳でもない。將軍が浅く笑う。

「よう、ベロニカ嬢。ゲードの建築は順調か？」

「ええ、將軍。ちょっと休憩に来ましたは、無理しすぎても良い仕事は出来ませんから」

「そらいい。お茶でも飲んで寛いできな。俺は病院に戻るからよ」

「あら、珍しい。こちらに入り浸りの貴方が」

「ちとよ、俺もみんなの役に立ちたくてな」

そこまで言うと將軍は、ベロニカの肩を叩いて部屋を出て行く。そして代わりにベロニカが部屋に入ると、先程まで將軍が腰を下ろしていたソファアーに腰を降ろした。

ベロニカがソファアーに腰掛けてからしばらく経つと、部屋の隅に立っていたマネキンのようなメイドが、ティーカップに紅茶を注ぎ運んでくる。

メイドはベロニカに紅茶を差し出すと、そそくさと元居た壁際に戻って行った。

どうやら其処が彼女の定位置のようだ。

ベロニカは受け取った紅茶を一口啜ると、視線を公爵に向ける。公爵はワイングラス片手に疲れているのか瞼を閉じて上を向いていた。

「ねえ、公爵様。一つ質問をしても、よろしくって?」

「んん、なんだ?」

公爵はベロニカの呼びかけに瞼を開くと彼女の方を見た。何を質問するのかと興味を抱いた賢者もベロニカを見ている。

「なぜ貴方は、公爵と名乗ったの? 何故に王を名乗らないの?」

「そんなことか……」

つまらなそうに言葉を返した公爵は、再び瞳を閉じて上を向く。その仕草を見ていた賢者が、更に訊く。

「ベロニカ殿が言う通りだ。この世界は貴方の物。大地も空も草木から小石のすべてが貴方の心で作られている。この世界では貴方がキングだ。
なのにだ。何故に公爵と言う中途半端な称号で名乗るのだ。それに関してではベロニカ殿だけあらず、私も疑問に感じたことがある」
公爵は姿勢を変えずに口だけを動かす。

「この世界は、夢幻。私は、まがい物の世界で、まがい物の王に成りたくて、今回の事を起こした訳ではないのだよ」

「私の与えた世界だけでは、不満なのね」

「ああ、そうだとも。だからゲートを造らせているのだよ。だから賢者殿や將軍に、こちらの世界に参加してもらったのだよ」

「そんなに東和栄光が、憎いのかね？」

「……」

賢者の質問に公爵は答えなかった。沈黙だけが、室内に流れて行く。

極道コンビ (一)

町の空が黄昏に染まり始めた時間帯。東和邸の怪異巨大門は、オレンジ色の光を浴びても影を伸ばす事無く佇んでいた。

結局のところヴァルハラ探偵事務所の三人は、今日と言う日を東和邸で過ごした。

軒太郎は得意の話術を生かして東和家の眷族に執拗なまでの聞き込みを繰り返した結果、ほぼ全員に煙たがれた。

昂輝と憑き姫の二人は、庭や室内のありとあらゆる場所を散歩の様に歩き回り霊的異常ポイントが無いかを調べて回った。だが、これと言って大きな収穫は得られていない。ゼロに近い。

収穫らしい収穫と言えば、東和邸の調理場で、夕ご飯の準備をしていた住み込みの太つちよコックさんから、凄く美味しい料理を、毒見と称して摘み食いさせてもらったぐらいである。

その時の憑き姫は、もうちよっともうちゅっと、と言いながらもかなりの量を摘んでいた。憑き姫は小さな体格のわりには食いしん坊だと判明する。

昂輝にとつての成果は、そのぐらいであった。

そして事務所に残る軒太郎の父であり、ヴァルハラ探偵事務所所長である眼一郎から軒太郎の携帯電話に連絡が入り、一旦事務所に帰ってくるよう言われた。

どうやら軒太郎と眼一郎の二人は、お互いに連絡をちよくちよく取り合い、得たばかりの情報を交換していたらしい。

事務所に残る眼一郎が、わざわざ帰って来いと言っただ、電話では伝えづらい何かを掴んだのかもしれない。

軒太郎は、東和邸をぶらついていた若い二人を捕まえると、タクシ―を呼んで屋敷を出た。アイパッチの所長が待つヴァルハラ探偵事務所を目指す。

「軒太郎さん、東和家の人々から何か訊きだせましたか？」

「いや、何も」

タクシ―の後部座席から昂輝が問うと、助手席の軒太郎は正面を向いたまま答えた。軒太郎の表情は、後ろから見ても笑っているのが判る。また営業スマイルだ。

「東和家の人々はともかく、あの細川って言う執事の爺さん、何か知っていますよね。そんな顔でしたよね」

「ほお、昂輝君。君も気付いていたのかい。やるね」

「気付くも何も、あそこまで露骨に振舞えば、僕だったわかります」
「や」

「まあ、そうだね。鈍感君じゃなきゃあ、普通は気付くか」

「で、執事の爺さんからは、何か訊きだせましたか？」

「いいや」

「何にも訊き出せなかったのですか？」

「ああ、何も」

昂輝は、拍子抜けを感じた。そして疑惑のままに話を続ける。

「嘘ですよ。あの爺さんは、絶対に何か知っていますよ」

「だろっね」

「だろっねって……。何で何も引き出せなかったんですか？ そんなにあの爺さん、口が固いのですか？」

「いいや」

「じゃあ何故……」

「いやね、そもそも執事の爺さんに、何も訊いて無いんだよ」

「え！ 何故!？」

昂輝は素直に驚いた。普通訊くだろっつと、思う。驚く昂輝に軒太郎がチラリと振り返り言う。

「あの爺さんは、今回の事件に関して、確信的な何かを知っているんだよ」

「確信を知っている……。じゃあ、なおさら何故に訊かないのですか？」

「昂輝君、何を言っているんだね君は」

助手席の軒太郎が昂輝を軽侮したような口調で言っ、溜息を一つ落とす。そして呆れたような仕草で首を左右に振っている。

言われた昂輝も訳がわからずに、キョトンとしてしまう。その昂輝の顔を、横に座る憑き姫が斜め下から覗きこんでいた。

「あのね、昂輝君。初っ端から事件の真相を究明するような情報を得てごらん。それは推理小説を逆から読むようなものだよ。実に詰まらないと思わないか？」

「はあ………」

何を言い出すのかと昂輝が間の抜けた声で答えた。そして戸惑いながらも反論の言葉を返す。

「えっと、……ですが、僕らは探偵ですよ。早々に事件を解決できるなら問題は無いのではないのでしょうか？」

普通なぐらいもつともな意見である。本来ならグウの音もでない言葉だ。

しかし。

「そう言うことは、仕事で探偵を営んでいる輩がやれば良い事だ。僕はごめんだね。つまらん」

「え！ この人の探偵業って趣味か！」

「まあ、趣味の延長が仕事になったって感じかな」

「やっぱり仕事じゃんか！」

「仕方ないだろ。親が探偵で、事務所を息子に継がせたがっているのだからさ」

「仕方なくても仕事なんですよ！ 最速で事件を解決できるように努力しましょうよ。ましてや真相が目の前に転がって居たのだから！」

「まあ、興奮するなよ、若いの」

タクシーの中で一人大声を張る昂輝を軒太郎が笑顔で宥める。しかし、その笑顔は営業スマイルではない。完全に昂輝で遊び、楽しんでいる様子である。

軒太郎の悪戯つばい笑顔に気付いた昂輝も、遊ばれていることを悟り、冷静を取り戻そうと一息ついた。

余り長くは無いが、今までの付き合いから鑑みるかぎり、この三外軒太郎たる男は、普通では無いことを思い出す。まともな常識を翳して付き合っではいけない存在であった。

「でもね昂輝君。よく考えてごらん」

「何をですか？」

「今回事件はどちらに転んでも勝敗が決まるのは二日後」

「扉が……開く時ですか」

「そう。問題は、あの巨大門の中から何が飛び出してくるかだ」

「何が出てくるのですか？」

「判らない。しかし」

「しかし……？」

「しかしね、あの執事の爺さんは、おそらくそれを知っているのではないかと　僕は思っているんだよ」

「そうですか……」

昂輝は真っ直ぐ前を向いたまま、奥歯に何かが引っかかったような顔で考え込む。

そしてワントンポ置いて昂輝が

「じゃあ、なおさら訊けよ！」

と、ツッコミの様に声を荒立て言った。もっともな意見である。

「そうだね」

軒太郎の言葉に、反省の色は僅かにも感じられない。昂輝を適当にあしらったつもりなのだろう。

その言葉を最後に、タクシー内の会話が終了する。そしてタクシーは、沈黙を保ったまま暗くなり始めた街中を走って行く。

昂輝は思う。

このヘラヘラした男は、探偵とか退魔師とか名乗っているが、実の

ところは、ただの変わり者、変態変人の類なのだろうと。故に常識を持って付き合っても疲れるだけだと悟る。ついでに言うなら隣に座る白いワンピースの少女憑き姫も同類だ。可笑しな言動が多い。しかし彼女の場合は、可愛いから許せる。うん、かわいいからね……。昂輝がそんな考えにふけりながら黙り込む。

そして、そのまま三人の会話は、事務所前に到着するまで一言もなかった。

やがてタクシーは、ヴァルハラ探偵事務所に到着する。

タクシーが停車して、昂輝がふと横を窺うと、憑き姫は穏やかな表情で眠っていた。どうりで会話にも参加してこず、静かなわけだ。暢気なものである。

でも、可愛い。寝顔も可愛い。だから許せる。

そう思いながら昂輝は、憑き姫の肩を軽く揺する。

体も華奢で、肩も小さく、とても果敢無そうだった。

「憑き姫、事務所に付いたよ。ほら起きな、車から降りるよ」

刹那。

憑き姫が俊敏に動いた。

彼女の小さな頭が長い黒髪を靡かせて、肩を揺すっていた昂輝の腕に噛み付く。

「ぬお！」

ガブリと音がするほど噛み付いた憑き姫は、牙を昂輝の腕に食い込

ませたまま上目使いで昂輝を睨む。飢えた肉食獣の眼だった。

昂輝は何故にと心の中で呟くと、噛み付く彼女を振りほどく事無く、
どうどうと猛獣を宥めるように憑き姫を落ち着かせようと試みた。

結構痛い、噛み付いているのが美少女だと思つと乱暴に振りほど
いたり抵抗してみたりが出来なかった。故に痛みにも我慢できた。

そして暫くして憑き姫が、ハツとした表情を見せた後、そつと噛む
力を緩めて口を離す。まるでコマ送りのようだった。

噛んだ腕と、憑き姫の下唇の間で、唾液が糸を引く。それが官能的
で昂輝はドキツとしてしまう。

昂輝の腕には憑き姫の歯型が、くつきりはつきり残っていたが、呪
いの再生力で直ぐに消えて行く。

座席に座ったまま憑き姫は、両手をワンピースから伸びてた生膝の
上に置き、俯きながら昂輝をすまなそうにチラチラと視線だけを動
かして見ていた。

どうやら寝ぼけていたらしい。

そして呟く。

「お腹すいてたから……」

「あんなに摘み食いしたじゃん……」

「ごめんなさい……」

そして二人はタクシーから降りた。憑き姫は料金の支払いを済ませ

て、さつさと事務所の階段を登りだしていた軒太郎の後を追い、小走りで走って行く。

独り昂輝は、路上に立ち尽くしていた。そして軒太郎と憑き姫が階段の奥に見えなくなると、先程憑き姫に噛み付かれた自分の腕を見る。

そこには既に、彼女に刻まれた刻印のような歯形は残っていない。しかし、若干濡れている。

唾液だ。

憑き姫の……。

美少女の……。

なんだかドキドキしてきた昂輝。

今現在の自分の腕は、小学生で言えば、好きな女子生徒が教室に忘れていった縦笛のようなもの。しかも、今さつき使ったばかりの縦笛だ。ドキドキしない方が、男子として不健全と言えよう。

本能のまま自然に、少年の体が動き出す。

伝説の間接キス。そんな言葉が脳裏に過ぎる。

そして、ゆっくり口を開けて、己の腕に近づける昂輝。

これは変態行為！

そう心に天使の声が飛んでくる。しかし、そんなの幻聴。本能のままにと悪魔も囁く。

だが、昂輝の常識人らしい理性は瞬時に消し飛んで行く。美少女への欲望が勝る。

パクウゥ。

昂輝は己の腕を銜えこんだ。ついにやってしまった。

その時である！

「昂輝ゥ、早くおいで……」

そこに階段から憑き姫が降りてくる。

昂輝がなかなか登ってこない為、様子を見に来たようだ。自分の腕を銜えこむ昂輝と憑き姫の目が合う。二人とも瞳孔が小さく縮まり、まさに目を点にさせていた。

昂輝は自分の腕を銜えたまま硬直してしまっている。完全に時が止まっているようだ。

あちゃー、だから言わんこっちゃないと、天使の声が幻聴となって昂輝に聞こえていた。

悪魔の方は、軒太郎のように大笑っている。腹を抱えてだ。

夕日に染まる空から緩い風が吹きと、憑き姫の艶やかな黒髪と純白のワンピースを揺らした。

凄く気まずい。気まずいなんてもんじゃあなかった。
出来れば死にたいぐらいだった。しかし、それすら体内の呪いが許さない。

顔面が真っ赤になって、頭のとっぺん湯気が揺らめきながら登っていた。

ほんの少し前までの幸福な状況から、一気に地獄の底に落とされたかのような現在。これも呪いの仕業なのかと一瞬疑う。
だとするならば、地道で確実な攻撃である。強烈だ。

「な、何してるの？」

「ひよっとほなかが、すいへへ（ちよっとお腹が空いてて）」

「そ、そうなの……」

美味くは誤魔化せていない……。きつと。憑き姫の視線が冷たいほどに痛く鋭い。やはり誤魔化せていたら軌跡に近い。

昂輝はゆっくり自分の腕から口を離した。腕と唇の間で唾液の糸が引き、落ちて行く。汚い。

口が自由になつたが昂輝は何もいえなかった。言い訳がこれ以上思い浮かばない。静かなパニック状態だ。

そんな常態の昂輝を放置して踵を返した憑き姫は、黙って階段を登って行く。珍しく駆け足だった。

「タ、タイミング……最悪だ……」

やっと出た言葉か、それだった。

昂輝は、肩を落としてゆっくり憑き姫を追った。階段を登る脚が異常に重たく感じる。

もう言い訳はしない。すべてを忘れよう。無かった事にしよう。訊かれたら「なにそれ？」と、すつとぼけよう。

そのように昂輝は心に決める。

それが一番だと。

そして、もうちょっと大人に成ろうと誓った。

五代昂輝、十七歳。

もうじき十八歳に成る。

極道コンド (二)

昂輝たち三名が、丁度ヴァルハラ探偵事務所に到着したのと同時刻とある病院の病室前が、物々しいことになっていた。

否。

物々しい状況を遙かに通り越して、一般人から見て魔界のような光景と化していた。

廊下の壁際にズラリと並ぶ柄の悪い強面の面々。リーゼント、オールバック、金髪、スキンヘッド、パンチパーマ。顔面に派手な古傷が刻まれている者も少なくない。

どの角度から窺っても堅気ではなく、極道特有の緊迫感を放っていた。

並ぶと表現するよりも、屯しながら廊下を占領していると言った方が正確かもしれない。

若さと暇を持て余し、夜の街を無駄にふら付いているようなチンピラやチーマーのような不良小僧たちとは、格が違う迫力と威圧感。此処に並ぶ者たちは、暴力、脅迫、威嚇を飯の種に生活を築きあげているプロの極道たちであった。

年の頃は三十前後ぐらいの者が多い。恐らくは中堅のヤグサたち。彼ら極道が並ぶ前の病室には名札が着いていない。その為に名前から誰が入院している病室かは判らないが、この恐ろしい光景からして、どのような立場の人物が入院している部屋かは、容易く悟れる状況であった。

おそらく、そこそこの大物ヤクザだろう。

一般人の患者や見舞いに来た人たちが、躊躇しながらも恐る恐る彼らの前を通り抜けて行く。

看護師たちも同様だ、誰一人男たちとは目を合わせようとしない。その廊下だけが病院内で天外魔境と化している。

極道たちが廊下に控えていると、ガチャリと音を立てて扉が開いた。強面の視線が、一斉に扉へと集まる。

病室から出て来たのは男二人で、廊下に並ぶ者たちよりも、多少若く窺えた。

一人は七三に眼鏡を掛けた男であった。

ピシツとした白いスーツに青いワイシャツ。そしてワインレッドのネクタイ。何処かの銀行に勤めていそうな博学でインテリ風の顔をしているが、鷹の様に目が鋭い。正直なところ一般人には、明らかに近寄りがたい男であった。

もう一人は、インテリ風の男より頭一つ分ぐらい身長が高い。百九十センチはありそうだ。

短めの金髪に色眼鏡で瞳を隠しており、体格は細マッチョと言った感じだ。顔付きは顎先に向かってスマートな作りでカッコイイとも言え、ヤクザにしておくには、少々勿体無いルックスの持ち主だった。だが、やはり極道。長身の男からは、狂犬病に感染したシエパードに良く似た匂いが漂ってくる。

二人が病室から出てくると、壁際に並んでいた者たちが、一斉に前へと出て二人を囲む。

「高岡、おじきは何だった?」

一人の男が、部屋から出てきた眼鏡の男に太い声で訊いた。他の者たちの視線も、高岡と呼ばれた男に集まる。緊張感の中、強面が力みながら並んで、高岡の回答を待っていた。

「誰でもいいから、探偵事務所を襲撃しろ　だそつな」

「探偵事務所を襲撃？」

「鬼頭のおじきは、何を言い出す……」

高岡の言葉を聞いて、皆が何故にと言った顔をする。

此処に居る全員が、自分たちの主属する組事務所の上層幹部である鬼頭辰夫の下に付いている組織構成員であった。

鬼頭とは、現在奥の病室に入院している重症患者である。

彼ら強面の面々は、鬼頭の下に付いていると言っても中堅クラスの極道たちであった。彼らの下にも、更に若い連中が何人も付いているのだ。

鬼頭や彼らが属する組は、梟を牛耳り、稼ぎも莫大で名の知れた大組織である。

「何故に探偵なんか襲わにやあならんのだ？」

男の質問に高岡が答えた。

「その探偵事務所を潰した者に、おじきが席を譲るそつだ……」

高岡の言葉に病院の廊下がどつと湧いた。極道たちが、揃って声を上げる。だが、そのどよめきを消し去るように、高岡が続きを述べる。

「しかし、その探偵事務所つてのが……ヴァルハラなのですよ……」

「なっ！」

強面たちの表情が、驚愕へと染まる。予想していたのか、やはりと囁く者も居た。

その名を口に出した高岡も、冷静を崩さないように我慢しているのが窺え、憮然としているのは、高岡と一緒に病室を出てきた長身の金髪男だけであつた。彼だけが凜としており、他の者はざわめいている。

高岡たちを囲む極道の一人が、咳くように愚痴る。

「何故におじきは、今頃になってヴァルハラを……」

その男に続いて別の男が、まったくだと述べるが、今更だからじゃないのかと言う者も居た。ざわめきは、更に高まる。

溢れるざわめきの中、高岡が話の続きを再開させた。

「おじきの容態は、皆さんがご存知の通り重いです。担当医の診断と、本人の話では、もう現役復帰は難しいとのこと。復帰が叶っても車椅子生活だそうです。」

本人曰く、車椅子の極道なんぞ怖くは無いだろ、と仰ってました」

言う通りである。

車椅子では目線が低い。暴力も満足に震えない。残るのは、キャリアと威厳だけだ。

しかし。

看板を背負った親分が、車椅子で若いものに世話をさせていたら威厳も衰える。やはり駄目だ。

「じゃあ、おじきは……」

「はい、この期を最後に一線から退き隠居するそうです。事実上の引退宣言と取って良いとの事です」

鬼頭たる男は現役同時から守銭奴なところが窺えた。故に多額な貯えが有るのだらう。早めの隠居も理解できた。

そして引退の二ノ字を聞き、多くの者が目を剥く。ギラリと野獣の如く輝いた。ならば俺がと心で微笑み、チャンスだと目論む。だが、一瞬で諦める者も多かった。

出費と利益を頭の中の電卓で計算した際、相手がヴァルハラとなると、明らかに赤字となる。しかも大赤字だ。へたすりゃあ命を落としかねない。

「ですが、看板を譲るのに、おじき一人の意見で、ほれよ、とは行きません。おじきの背負う看板はそれ程に大きく偉大な物です。他の親分方にも同意が必要。

そこでおじきは、誰を幹部会に推薦するかを考え、わかり易い結果を上げた者を推薦することにしたそうです」

「それが、ヴァルハラ襲撃命令かよ……」

言った男を高岡が、鷹の如く鋭い眼光でチラリと見て言う。

「いいえ、襲撃命令ではありません。壊滅命令です。完全に潰せのことです。しかも二日以内にです」

その訂正が意味するところは。

「それは、組み同士の戦争に近いぞ……。血の雨が降るぞ……」

はい、と高岡は答える。彼も重々承知していた。

この町にヴァルハラ探偵事務所が事務所を構えて六年経つ。

当時の創立メンバー五名であった。現在七名。昂輝を入れれば八名。まだ憑き姫は加わっていない頃の話である。

ことが起きたのは、約五年前。

ヴァルハラが営業を開始して僅か一年目で、地元ヤクザと抗争が勃発する。その抗争で組を率いたのが現在病室で寝ている鬼頭辰夫であった。

何故に極道と探偵が抗争と呼ぶほどに揉めたかと言えば、面子と意地が絡み合った詰まらない理由であった。噂では鬼頭と眼一郎の間で女性の取り合いがあったとも噂されているが、真相は定かではない。

そして、理由が曖昧のまま勃発した抗争は、少数精鋭を自負するヴァルハラサイドが優勢のまま十七日目に終結したのである。

終結時には、鬼頭よりも上役の幹部とヴァルハラの所長である眼一郎が同じ席に着き、今後お互いのしのぎには関わらないと条約を結び、丸く収まったとされている。

だが、その条約が五年を過ぎて今、抗争の主役である鬼頭本人の引退話に並んで破られようとしていた。

所詮は口約束。当時鬼頭の上役だった幹部も老衰で死去しており、関係者である鬼頭もこのざまだ。いずれ破られても可笑しくない証

約に過ぎない。それに極道側からしてみれば、抗争に敗北寸前だった自分たちの面子を守る為に結ばれた緊急回避の約束事にすぎない。逃げているようなものだ。この条約自体が恥に近い。

鬼頭は、自分の引退をいいことに、過去を蒸し返してきたのだ。寧ろ自分の極道人生のケジメとして避けられなかったのかもしれない。しかし、高岡から鬼頭の意味を告げられた中堅ヤクザたちは乗り気ではない。

此処に居る多くの兵（じゅうもの）が、かつて鬼頭と共にヴァルハラを相手に戦った者たちだからだ。ヴァルハラ（ヴァルハラ）の怖さは、その身で味わい知っていた。ヴァルハラ（ヴァルハラ）の奴らが人知を超越した化け物だと、知っているからだ。

極道にとって面子は、大事なことも良く解る。ぶら下がっている餌の美味さも捨てがたい。だが。

相手が悪すぎであった。できれば一生、ヴァルハラ探偵事務所とは、事を構えたくないのが本心である。

中には友好関係を築きたいと思っている輩も居るぐらいだ。

高岡は腰が引けている者たちを見て、やはりと思う。高岡もまた、十代の新兵だったが抗争に参加していた。ヴァルハラ（ヴァルハラ）の恐ろしさをその目で拝んでいた。あれは化け物の集まりだと知っている。

鬼頭の後釜候補が報酬でもやはり、ヴァルハラ（ヴァルハラ）と事を構えるのはゴメンだと言う皆の気持ちだが、高岡にもひしひしと伝わって来る。

だが、念のため訊く高岡。

「どなたかおじきの意味を継いで、兵を率いる覚悟は御座いませんか……」

一端の極道連中が、喝上げられている中学生のように黙り立ち尽くす。看板は欲しいが、命も欲しいのだ。

毅然としているのは、高岡と隣の金髪だけである。

周りの強面を見回した後に高岡は溜息を溢した。そして言う。

「なら私がやります」

その言葉に強面たちの視線が高岡に集まった。本当に挑むのかと言いたげそうな顔である。しかし、止めようとするものは一人も居ない。

「坂東、お前も付き合おうよな」

高岡が隣の長身の顔を見上げて問うと、まわりの男たちの視線も同時に長身の男の顔へとスライドして行く。

当然だ　と凄みの利いた声で答える金髪男。黒眼鏡の隙間から、鋭い瞳が血走っているのが窺えた。

今まで黙ったまま静かに立ち尽くしていた長身の男だが、実のところは血気盛んな猛獣のような眼差しをグラスンで隠していただけのようだ。恐れる事無くやる気満々である。

「高岡、二人だけでやる積りか……？」

問う男の言葉には、自分は参加しないと云う意思が隠れていたが、

高岡は優しく察する。心で根性なしめがと小馬鹿にしながら。

そして高岡は、冷静な口調で質問に回答を返しながら、趣味の悪い赤色ネクタイのズレを片手で直した。

「まさか、皆さんに戦場へ立てとは言いません。しかし兵士を少しばかり貸してもらいます」

「そ、それはかまわん……」

「ああ、兵ぐらい出すわ……」

その言葉は自動的に高岡が、鬼頭の後釜候補に選抜されたことを意味していた。反対するものも居ない。

「向こうも少数精鋭なのです。此方も少数精鋭で仕掛けたいと思います。」

斉藤さん、貴方のところから芝克己を貸してください。

田中さんのところからは、鴉尾英太。

田島さんのところから真田兄弟。

大形さんのところからは神田淳、番場竜拳、半田正の三名を貸してください。

あとは 貝塚さんのところの金本哲司」

高岡を囲む男たちは、選抜された面々の名前を聞いて、生唾を飲みながら納得をする。

どの名前も武闘派で名前が売れている輩と、危なさで有名なルーキーばかりであった。確かに抗争時には大戦力となるだろう面々である。

名前を呼ばれた中堅ヤグサたちは、高岡の申し出を快く受け入れた。選抜された兵士の中には、自分たちでは扱いきれていない若者も居たからだ。ヴァルハラと戦い死んでも欲しくない。

特に鴉尾英太と神田淳たる男は、その部類である。

指きり魔、鴉尾英太。

直ぐに刃物をチラつかせる戯けだ。

古くから剣道を嗜む一家に生まれ、当人も幼少時代から剣道を学んでいた。それにも関わらず武士道を理解できずに外道に進んだ男。極道の中にありながらも外道が抜けきれず、直ぐに人の指を撥ねてしまう奇人である。

組の中でも嫌われ者で、厄介者だ。

神田淳も似たような者であり、二つ名を持っていた。

ガンマン。それが神田淳の二つ名だ。

ガンマンと言ってもモデルガンを集めたりサバイバルゲームが好きなのでもない。彼が好むのは、本物拳銃。偽物や改造拳銃ではない。

神田淳は、拳銃を撃つのが好きなのだ。しかも、人間を撃つのが大好きである。

しかしながら神田淳たるガンマンは、銃規制が厳しい日本で過ごしながらも銃を扱う腕が良い。ハンドガンからライフルまで何でも使いこなす。どこで学び練習したかは知れないが、百発百中なのだ。また、人間を撃つても殺さない。器用に急所を外すのだ。負傷を負わせる度合いすら操れる。

だから大きな事件として見られず、世間から見逃されることが多い。

高岡が名指しした他の面々も、極道に置いとくには勿体無い程の実力や才能を持っている輩ばかりであった。それを知っていれば、まさに少数精鋭のメンバーだと鑑みれた。

「わかった高岡、すぐに連絡してお前の下に付かせてやる」

「有り難う御座います」

高岡は年上の中堅ヤクザたちに頭を下げた。

そして病院の廊下で行なわれていた極道の会合が解散となり、各自強面たちがバラバラに病院を出て行った。

極道コンド (三)

随分と落ち込んだ様子の昂輝が、憑き姫に続いて探偵事務所に入ってきた。どんよりと曇った空気を背景に引き連れている。

「昂輝君、どうしたのかね？」

「いや、ちょっと」

事務所で三人の帰宅を待っていた眼一郎が、へこみきつた昂輝を見て、どうしたのかと思いついてみると昂輝は、素っ気無い言葉を廃人のように返すだけだった。そのまま斜め下に首を傾げながら絶望の荒野を彷徨うが如く歩みでふら付きながら応接セットのソファーを目指して進む。そして糸を斬られたマリオネットのように腰を落とした。

何やらショッキングなことでも有ったのだろうかと考えながら眼一郎は、灰色の少年見守っていた。

その眼一郎は、デスクとペアになっている社長椅子に腰掛けていた。黒いアイパッチに黒いスーツが遣り過ぎのセンスを浮き彫りにしていた。流石に室内で、黒い帽子までは被っていない。黒い帽子は入り口側の帽子掛けに掛かっている。

そして眼一郎の眼前のデスクには、何やら書類と走り書きのメモが重なっている。

積み重ねられた書類の高さは二十センチが二山にもわたり、すべてが今回の怪奇現象とも思える事件に関する資料であった。

内容は、東和家全員の生い立ちや学歴から始まり、使用人の情報。

東和栄光が仕切る会社の株数から、屋敷の総敷地面積に、屋敷を建てるのに携わった大工まで、集めるのが無意味と思われる情報まで色々と揃っていた。

その情報の高さがペーパーにして計四十センチと及んでいるのだ。これが、今日一日でヴァルハラ探偵事務所局長である三外眼一郎が集めた情報量だった。

軒太郎はテーブルを挟んで昂輝の向えに在るソファアに腰掛けており、憑き姫はいつものように、敷居が無く連なる隣の部屋に置かれた応接セットのソファアに腰掛けていた。早くも文庫サイズの書物を取り出し読み始めている。

「三人とも、お帰りですー」

突然子供のような無邪気で幼い声が飛んで来た。

事務所の奥に在る台所からイゴールちゃんがお盆に湯飲みとティーカップを載せてやって来る。

黄色い作業用の繋ぎに、腰にはフリルのあしらわれた白いエプロンを下げていた。可愛いクマさんのアップリケまで飾られていて実に可愛らしいが、それでもやはりイゴールの顔面は怖い。

イゴールは満面の笑みで憑き姫に紅茶を差し出し、男性三名には湯飲みを渡して、また奥へと、のしのしとした足取りで戻って行った。

普段のイゴールは、ヴァルハラ探偵事務所電話番号やお茶汲みのバイトを勤めている。

ついでに食事を作ることも多い。あの巨軀で、あの強面で、あの黄色い声で有りながら料理が美味しいのだ。奇跡と言っか、怪奇と言っか……。

軒太郎の鼻先には、事務所に帰ってきたときから肉を焼く良い匂いが届いていた。奥でイゴールが晩御飯の準備をしてくれているようだ。

「で、父さん。調べてもらっていた東和家の詳しい家族背景で、新たに解ったこととは、何なんですか？」

落ち込んでいる昂輝を無視して軒太郎が父親に話しかけた。

「軒太郎、お前が報告してきた家族構成の他にも、東和栄光には血筋を引く者がいたぞ。隠し子って奴だ」

眼一郎が何処で手に入れたか不明な情報を息子に伝えると、話を聴いた昂輝が不意に我を取り戻し、思ったことを素直に口に出した。

「あの爺さん、隠し子が居たんですね」

「そりゃあ大企業のドンだよ。女遊びなんて星の数ほど嗜んでいても不思議じゃないし、妾の数だって何ダース困っているか判ったもんじゃない。」

噂では東和栄光たる男。若い頃はかなりの女好きだったようだよ。ならば隠し子だって一人二人は居ても可笑しく無いだろう」

「で、隠し子は何人いたのですか、父さん？」

「解っただけで一人だ」

「思ったより少ないですね」

拍子抜けしたように軒太郎が言った。どうやらもっと多いと思って

いたようだ。眼一郎の前振りから昂輝もかなりの数の隠し子が居るのではと思ってしまうたぐらだった。

「まあ、解っているだけの人数なんだけどね」

人知れずもつと居るのかも知れない。ただ、見つからないだけやも。

「その隠し子とやらの身元は割れてますか、父さん？」

「ああ、きつちり掴んでいるとも、息子よ」

「流石だ、父さん」

昂輝も凄いと思った。どうやったかは不明だが、素晴らしい情報収集能力である。流石は探偵事務所の所長だと昂輝は尊敬の眼差しでアイパッチの中年を見詰める。

眼一郎は机の上のメモ用紙を手に取り、チラリ見しながら言った。

「隠し子の名前は東和竜栄。歳は三十五歳だ」

「東和の名を継いでいるのか？」

若干驚きの表情で軒太郎が言った。それでは隠し子ではない。認知されているのかと疑問を抱く。

眼一郎は、手にしたメモを机に落として答える。

「ああ、認知されている。既に隠してもいないね。一緒の屋敷に住んでいたぐらだから」

「一緒の屋敷に住んでいたって、じゃあ他の家族も完全に知っていたってことか」

「ああ、そうなるね。息子よ」

しかし、住んでいたでは、過去形である。

それに軒太郎が散々東和家の者に聞き込みを行なったが、そんな話は一言も出てこなかった。使用人からもだ。

どうやら隠し子である東和竜栄については、緘口令が敷かれていたと考えるべきだろう。身内に知れても、外部には知られたくないと言う事か、と昂輝も察した。

「なるほど……」

昂輝が声を深くして言った。

だからこそ、その人物がどんな人かが気になる様子だ。

そして昂輝が疑問を問いかけようと口を開いた瞬間、言葉が口から出るよりも僅かに早く軒太郎が同じ質問を父親に投げ掛ける。

「東和竜栄。どのような人物ですか、父さん？」

先を越された昂輝は言葉を飲み込んだ。

進行方向は同じなのだ。あとは任せる。

「それがね、色々調べてみたら興味深い人物でね、息子よ」

「興味深い？」

軒太郎と昂輝が、黒いスーツに黒いアイパッチの眼一郎を、話の続

きを待ちわびるように凝視する。
二人の好奇心を浴びながら眼一郎は、机の上から一枚の書類を取り出し読み始めた。

「東和竜栄、三十五歳」

それは先程聞いた。

「東和栄光が若い頃に困っていた妾の子供で、妾は竜栄を種産後直ぐに亡くなっている。もともと体が弱い女性だったらしいが、相当の美人だったようだ。名前は、片桐紀子」

眼一郎の話を聞いて、どのような美人だったのかをイメージする昂輝。

そこに。

「美人で病弱。つつい男心が揺れてしまう設定ね」

奥の間で本を読んでいる憑き姫が、ぼそりと言った。眩きにも近い声だったが、男性三人の潜在意識にグサリと刺さり、他人事にも拘らず罪悪感を与えた。見事な精神攻撃である。

「ごほん、竜栄の話に戻るが……」

咳払いを一つ溢して眼一郎が話を再会させた。

「竜栄の亡くなった母親には身寄りが無かったらしい。両親も彼女が成人を遂げた後に無くなっている」

「その片桐紀子は、何処で東和栄光と知り合ったのですか？」

昂輝が問う。良い質問である。

「片桐紀子は、歌手だったようだ。売れないね」

「歌手ですか」

昂輝が言う。

「売れない　ね」

遠くから憑き姫が、嫌味っぽく言った。ちゃんと昂輝の耳に入る。

「ああ、売れていないからキャバレーを回ることが多かったそう。東和栄光とは、何処で知り合ったかまでは判らなかつたが、二人が知り合ったのはそのぐらいの時期だと思われる。

後に片桐紀子は東和栄光がスポンサーになって、何枚かレコードを出しているんだ。もちろん売れてはいないがね。

そして営業費だけでなく生活費も東和栄光に世話となっている。だが、片桐紀子も四枚目のレコードを出した後、しばらくして引退しているんだ。

周りの人間は、歌の才能が無いことにやっと気付いたと言って、歌手としての人生を諦めたと思っていたようだ。真相は子供の妊娠だ。

東和栄光の出産記録から遡れば、彼女の引退した時期と一致している。まず間違いないだろう」

「なるほど、母親のことは解つたよ。で、母親の亡くなった後の栄の生い立ちは？」

「その後の竜栄は、東和栄光に引き取られ認知さ、本妻の兄弟たちと代わらない待遇で育てられたらしいが、やはり本妻には毛嫌いされ苛められていたと言われている。他の兄弟からもね。しかも妾の子だと言うことは、物心付く前から竜栄本人にも知らされていたらしい。」

この情報は、東和竜栄の高校時代のクラスメートから聞いた話だ。本人が隠す事無く愚痴っていたらしい」

凄い。三外眼一郎は、短時間の間に、東和竜栄の学友までに話を聞いているのだ。やはり探偵として一流なのかも知れない。

「それとクラスメートだった人物の話に寄れば、東和竜栄は、かなりの博学だったらしい。成績がずば抜けて高かったらしく、しかも性格が良かったようだ。人当たりが良く、誰にでも優しくかったと言われている」

隠し子として家族に辛く当たられる家庭環境の為か、他人の痛みが良く理解できる人格に育ったのだろう、と、軒太郎が言う。

過去に育った町の人間すべてに冷たい目で見られた経験のある昂輝には、そんな竜栄の気持ち若干だが理解できた。

他人に冷たくされれば、世間を怨む者も多いだろうが、逆の人間も多い。冷たくされたからこそ自分は他人に暖かく接しようと思う者も少なくないのだ。昂輝は後者である。

極道コンビ (四)

「しかしね、竜栄は、高校を卒業後、アメリカの大学に通い、生物学の勉強に励むのだが、その頃から悪い噂が立ち始めるのだよ」

アメリカに渡り、何かが狂い始めたのだろう。
否。狂い始めたから異国に渡ったのか。

「悪い噂とは何でか、父さん」

「オカルトチックな研究に没頭したらしいのだよ」

「オカルトですか……」

オカルト学と言えば、この事務所の人間に取っては普通のことだろうと昂輝は思う。

魂を捕獲して操る憑き姫。妖怪変化の死体から武具を造る軒太郎。呪いのスペシャリスト、お砂姉さん。明らかに人体改造を行なっている人造人間のイゴールちゃん。化け物揃いだ。

おそらくは今語る眼前の紳士、眼一郎も何らかの妖術奇術を操るのだらうと推測できた。ただのアイパッチを身に着けた変わり者の探偵でなからう。

「その研究とはなんだったのですか、父さん？」

眼一郎が、顎先を撫でながら答える。

「それがね、今一つ判らないのだよ。」

アメリカでの竜栄は、人とのコミュニケーションを拒絶していたよ

うでね。

ただ噂されているのが、ホムンクルスの研究だとか、死者再生だとか……。

それを裏付けるような痕跡が、竜栄が使っていた大学の研究室や自宅アパートから発見されて、一時期問題になったこともあるそうなの

「しかし父さん、どれも海外では禁術の類じゃないですか」

禁術と言う聞きなれない言葉に首を傾げる昂輝。

「そうなんだ、息子よ。わざわざ海外に出てまで研究する内容ではない。まだ中国なら解らんでもないがね」

「そうなんですか？」

昂輝が不思議そうに言った。

「ああ、キリスト教の多くが、死者の復活は神のみが成しえる奇跡と位置づけているし、ホムンクルスも同様だ。生物想像は、クローン技術でも海外では大きな問題だと禁止しているだろ」

「ああ、そうですね」

軒太郎の説明に昂輝は、何となく納得した。
文字通り禁術とは、禁断の術なのかと。

「それにだね、少年。その手のオカルト技術は、アメリカなんかよりも東洋の方が豊富だね。

西洋では、フランケンシュタインやゾンビ、ヴァンパイア程度しか存在しないし。技術と呼べるのもフランケンシュタイン博士の人造人間

のみだ」

軒太郎の説明にイゴールちゃんの強面を思い出す昂輝。

「それに比べ東洋には、中国の仙道に尸解仙をはじめとした不老不死の術が多い。ネクロマンサーとしての技術だってキョンシーを始めとして様々伝えられているし、日本にだって、それらの似たような術が多く流れてきているからね。僕や憑き姫を見ていれば解るだろう」

憑き姫は魂、軒太郎は屍。どちらも不死に繋がりがねない術だ。昂輝はなるほどと言葉を零す。

「それにだよ、昂輝君」

眼一郎が続く。

「残念なことに私は見ていないが、君の不老不死の呪いだって生物学を超越したオカルト最高峰の技術なんだからね」

確かに、そうだ。

「まあ、オカルト目線から攻めるなら、道筋を誤っている。おそらく東和竜栄は、科学の目線からホムンクルスの研究に目を向けたのでしょうね」

「おそらくは、そう推測できるだろうね。」

だが、東和竜栄は三十歳までアメリカに残り研究を続けていたのだが、五年前、日本に帰国して、再び東和家の屋敷に戻ったのだよ」

「ほほお、どうしてですか、父さん」

「そこからが一切情報が無い」

「あらら……」

昂輝と軒太郎が、盛り上がってきた話に落ちがなくて肩を落とす。

「此処からは推測なのだが、東和竜栄は、きっと東和邸でホームク
ロスの研究を続けていたと思うんだ」

眼一郎の推測は、もっともらしく聞こえた。

「確かに、それが自然ですね、父さん。研究を続けるための資金が、
自力で確保できなくなり、恥を忍んで父を頼った、ってところでし
ようかね」

ありえる推測だと昂輝も思った。
しかし。

「ですが、所長さん。僕と憑き姫で屋敷の殆どを見て回りましたが、
怪しげな研究室なんてありませんでしたよ？」

「昂輝君。東和邸に出向いた我々三人に、東和竜栄のことをつげな
かったんだ。寧ろ隠したんだ。きっと彼の研究室も、人目につき難
い所にあるか、既に処分されたかのどちらかだろう」

軒太郎の推理も尤もだと納得する昂輝。その可能性も否めない。

「ところで東和竜栄は、今何処に居るの。本人に会って訊いた方が

早いじゃない」

本を読みながら憑き姫が言う。三人の視線が隣の部屋の少女に集まった。確かに彼女の言う通りだ。それが一番早い。

軒太郎が父の方を向き直す。

「で、父さん。東和竜栄は、今いずこに？」

「所長さん。見つけているんですか、東和竜栄を？」

「ああ、二人とも心配しなくてもいいよ。きつちり見つけているとも。抜かりは無いよ」

凄い。この人は、やはり一流の探偵なのだと尊敬してしまう昂輝。素晴らしいを通り越して、怖いぐらい手回しが早い。早すぎる。

「東和竜栄は、双葉総合病院に入院していたよ」

「入院中ですか、父さん」

昂輝は良く知らなかったが、双葉総合病院とは、この町で一二を争う大きな病院の一つらしいと、あとから説明される。

「私もまだ本人とは会ってもいないし顔すら拝んでないんだがね。どうやら脳挫傷で意識不明になっているらしいのだよ。

病院に運び込まれたのが一ヶ月前ぐらいの話だ。

原因は事故。

何でもデパートのエスカレーターを踏み外して落ちたらしい。そして頭をゴンっと、ね」

眼一郎が、自分の後頭部を叩いた。

「間抜けな話ですね、父さん。それで意識不明だとは……」

まったくだと昂輝も思う。

「父さん。ですが、本当に事故だったんですか？」

何らかの策略ではないかと軒太郎が疑う。

軒太郎が疑うのも無理がない。隠し子とは言え、大金持ちの血族だ。認知されている以上は、遺産相続の対象となる筈。事故に見せかけて殺されかけたと考えるても可笑しくないだろうし、寧ろそれが自然な流れでは、と、昂輝は思えた。

「いや、これは完全に事故だ。良くあるテレビドラマのストーリーとは違うよ。」

竜栄が、降りのエスカレーター最上段から一人足を滑らせて、転げ落ちて行く瞬間を、多くの客や従業員が目撃しているし、警察から手に入れた検分を見ても可笑しな点は見当たらない。ましてや何者かが金や権力で圧力を掛け情報操作を行なった痕跡も窺えない。

東和竜栄が、何をしにデパートへと立ち寄ったか不明だが、間違いなく事故だ」

何を根拠に述べているかは不明だが、眼一郎の口調には自信が感じられた。

「所長さん。何故に誰かが圧力を掛けていないと解るのです」

昂輝が、素直な疑問を投げ掛ける。

「昂輝君。それはキャリアだよ。長い探偵家業で身に付けた経験が、それを悟らせるのだよ。念の為に入っておくが、探偵の勘とか言う曖昧な理屈ではないからね」

「そうなんですか……」

昂輝は眼一郎の自信に押し切られる。

「それに昂輝君。キミもあと五年ぐらい頑張れば、その辺の能力が何となく理解できるように成ってくるさ。なあ、息子よ」

「そうですね、父さん」

いきなり振られた軒太郎も同感する。

今一つ昂輝は納得できなかったが、先人である眼一郎の言葉を信じて時を待ってみようと考えた。ここは口を閉ざす。

軒太郎が腕を組みながら、ソファアの背もたれに体重を預けながら、悩むように話し出す。

「では、今回の事件で東和竜栄の犯行説は行き止まりですか……」

確かに、そう言うことになってしまふ。何か詰まらなさと昂輝も感じた。

しかしだ。この感情は探偵としては、どうなのかとも思う。真相を追求するには公平ではない。

「いや、まだ解らんぞ、息子よ。この事件は、意識が無いぐらいで白と見做すのは浅はか　かも、知れんぞ。」

「何せ普通の事件ではない」

確かに巨大門が始まりなのだ。この先、何が起きても可笑しくはない。意識不明でも突然動き出す可能性も十分ある。しかし、言い出せばきりが無い。可能性が無限に広がりすぎだ。

「そうですね、父さん」

軒太郎は組んでいた腕を解き、姿勢を前に戻した。

「まあ、東和竜栄に関しては、明日になったら私が病院に出向いて様子を窺ってくるよ。犯人とは限らないが、今回の事件に何かしら噛んでいる可能性は否めないからね」

そこまで眼一郎が言うと、事務所内に乾いた音が響き渡る。軒太郎が、さて、と言って、両掌を拝むように叩きながら音を放ったのだ。そしてソファから立ち上がる。

昂輝は、何が「さて」なのかと軒太郎を座ったまま見上げた。

昂輝の視線を受ける軒太郎が、座っていたソファを離れて壁際へと進んで行くと、寄りかかるとように壁に背を付けた。

眼一郎も社長椅子のローラーを使って横に滑って、ガラガラと音を鳴らす。

「そう言えば昂輝君は、不死身なんだよね」

昂輝に問う眼一郎。

昂輝がヴァルハラ探偵事務所に来たのは、昨日の話だ。眼一郎と

昂輝が会うのも昨日が初めてであった。故に昂輝が死ぬのも生き返るのも眼一郎は見たことがない。話に聞くのみだ。

「ええ、素晴らしい程に不死ですとも、父さん。

「ご自身で一度殺してみますか？」

「いや、またの機会にするよ。これから忙しくなりそうだからね」

「そうですか」

「でも、直ぐにでも見てみたい気分だよ、息子よ」

「ちよつと……所長さん……」

なんだ、この親子の会話は、と思いつながら昂輝は眼一郎の方を向く。眼一郎は窓の前に置かれていたデスクから離れて窓の横で社長椅子に座っている。

窓の外は、いつの間にか暗くなっていた。

報告を兼ねた三人の会話は、思ったよりも長い時間行われていたようだ。

「もう外が暗くなっていますね」

窓の外に視線を向けて昂輝が呟く。

おそらく昂輝は、この会話を楽しんでいたのだろう。

楽しい時間は、時の流れを忘れさせると言つが、まさに今がそれだ。そう感じ取った昂輝の顔から思わず力が緩み、自然と笑みが零れる。探偵も結構楽しいと思う。

事務所の奥からは、イゴールが料理する匂いが心地よく漂ってきていた。美味しそうな匂いだ。

悪くない。

不思議な人たちに囲まれての生活だが、悪くないと昂輝は思い始めていた。

今、この一時が平和で穏やかに感じる。

「そうそう、昂輝君」

「何ですか、所長さん？」

「そこ」

刹那である。

パリンとガラスが割れる小さな音が、はつきりと耳に届いた。

瞬間。眼一郎が座る椅子の横の窓ガラスに、小さな穴が開き、その穴の数メートル先に腰掛けている昂輝の額にも穴が開く。

昂輝の額に風穴を開けた小さな物体は、昂輝の後頭部を吹き飛ばして貫通して行った。

突然のことに昂輝は、血飛沫と肉片を散らしながら突き飛ばされるようにソファーへと倒れ込み、更に勢い余ってソファーから床の上へと転げ落ちた。周りが紅く染め上がる。

「危ないかもよ……」

遅い。言うのが遅かった。

「おいおい、本当に撃ってきましたよ、父さん」

「ああ、本気のようなね。私はてっきり、何かのジョークかと思っ
てたよ」

二人の親子は、窓の外から見えない位置に立ちながら、悶絶した昂
輝を見て言う。

ちなみに憑き姫が居る応接セットの位置は、窓の外から窺えない場
所にある。

憑き姫は、昂輝が狙撃されたにも関わらず、未だに本を読みふけっ
ていた。騒動に見向きもしない。

そう、昂輝はライフルで、狙撃されたのだ。

間違いない。

極道コンビ (五)

ヴァルハラ探偵が事務所を開く通りは、同じぐらいの背丈を持った雑貨ビルばかりが並んでいる。ちよつとした飲食店やショップも窺えるが、小企業の事務所の方が多く見当たる裏路地であつた。

もう少し駅前方面に進めば、居酒屋やスナックなどの看板も見えてくるため、人通りがまったく無い裏路地でもない。人影は疎らに窺える。

そのような裏路地に並ぶどの雑貨ビルも古めかしい構えが多く、そろそろ建物としての耐久基準的に、怪しいと思えるビルも結構見当たり、ゴチャゴチャした印象が強い。

そして向かいには、十五メートル程小道を挟んでヴァルハラ探偵事務所が在るレンガ造りのビルより多少新しい雑貨ビルが建っていた。一階は喫茶店、二階は会社事務所、三階はバレー教室だが、ここ数年どの階も人が出入りしていない。

全階のテナントが潰れて放置されたビルである。それでもヴァルハラ探偵事務所のビルより目新しく見えるビルであつた。

そのビルの二階。非常階段の踊場に、銃のスコープを覗き込む一つの人影があつた。

銃は市街戦に優れたMP4。スコープとサイレンサーが追加されている。アメリカのSWAT部隊が良く使うマシンガンだ。

非常階段に立つ男は、黒いパーカーのフードを頭からすっぽり被り、潜むように銃を構えていた。銃をすっかり手摺りに乗せて、ぶれを

なくすように固定している。

先程ヴァルハラ探偵事務所内に発砲して、昂輝の額を見事に貫いたのは、この男だった。

男の名前は、神田淳。

ガンマンの二つ名を持つ、悪党である。

「よっしゃ。先ずは一人消えた。

まあ、相手は七人だろ。俺のノルマは終了かな」

ビルの陰に潜む男は、独り言を漏らすも未だ、スコープ越しに事務所内を窺っていた。他の目標が姿を現せば容赦無く発砲する積りであった。

男は銃を撃つのが好きなのである。彼の口から出た言葉は天邪鬼と言えよう。引き金を引きたくて、口元が釣りあがる。

ノルマなんて、最初から関係ない。

百人撃ち殺していいなら、構う事無く撃ち殺すタイプであろう。ただの非道だ。

一方、突然の奇襲を受けたヴァルハラ探偵事務所内では、眼一郎が狙撃された窓の横に隠れながら、未だ社長椅子に腰掛け足を組んでいる。

余裕の表情だ。

軒太郎は、外から見え難い壁際に立ちっっていた。横には書類棚が在り、美味しいこと陰に成っている。

此方も父親同様に余裕なのか、いつもの営業スマイルを崩さない。

憑き姫は、騒動に気付いていながらも、自分には関係ないと言った

感じて本を読んでいた。胆が据わっているのか、他人事だと思っ
ているのか不明だが、実弾が撃ちこまれたのに冷静である。

そして頭を撃ち抜かれた昴輝は、既に傷が完治していた。ソファー
や床を赤く染めていた血痕や肉片も既に本体へと帰還を遂げており、
元の綺麗さを取り戻している。

眼一郎が驚いて居た。

「ほほう、これを凄いな。頭を撃ち抜かれたのにも関わらず、三十
秒も経たずに傷どころか飛び散った血飛沫まで消えてしまうのか」

「父さん。人狼化しているときの昴輝君は、もっと凄いですよ。再
生能力は更に早くなりますし、身体能力も倍増いたします。しかも、
リミピットチャンネルまで使ってきます」

「ほほう、リミピットチャンネルとは、それは興味深い」

床に転がっていた昴輝が、小さな呻きを溢しながら立ち上がるのと
すると、壁際に立つ軒太郎が静止した。

「昴輝君、暫し動かずじつとしてなさい」

「な、何が起きたんですか？」

言われた通り、床に伏せたまま昴輝が問う。突然のことに状況が理
解できていない様子だった。

昴輝が判っていることは、何かで頭を吹き飛ばされたことぐらいだ。
それが、狙撃だと言うことから把握できていない。訳が判らないま
ま、軒太郎の指示通り床に伏せ続けた。

軒太郎は、横にある書類棚の引き出しを開けると、中から拳銃を取り出す。

ベレッタM92。

イタリアの拳銃だ。

そして鉄黒いベレッタの銃口に筒のような黒いサイレンサーを指し込みクルクルと捻った。

外は暗くなつたと言っても、まだ人通りがチラチラと見られる時間である。相手の狙撃時も銃声は聴こえなかった。おそらくはサイレンサーを装備しているのだろう。軒太郎も、少しは静かに戦おうと心がけている様子だ。

「昂輝君」

「はい、なんでしょうか軒太郎さん」

話しかけられた昂輝は、床に倒れたまま軒太郎の方を窺おうとするが、テーブルとソファの間挟まるように倒れこんでいる彼には、軒太郎の姿は見えなかった。声が聞こえた方向に、首を僅かに傾げるだけである。

「私が合図したら、事務所を出て向かいのビルの非常階段を登りなさい。二階にキミの頭を吹き飛ばしたスナイパーが居るから、捕まえてきてね」

簡単に言うが、相手は銃で武装している。

しかし、今の昂輝は不死の怪物。難しい任務でもなかるう

「ス、スナイパーだったんですか!？」

日本では珍しいクラスに驚く昂輝。

「ああ、スナイピングって言う程の距離じゃあないけどね」

「解りました。ダッシュで捕まえます」

昂輝は、これは世の危機だと思い軒太郎の指示に従うことを決めた。流石都会。このような雑貨ビルの裏路地にも、野良スナイパーがうるついているのかと現代社会に危機感を抱く。完璧な誤解だ。勘違いをしている。

「ただし、狼に変身するのは禁止だ。相手は普通の人間だし、まだまだ人目に付く時間帯だからね。一般人に狼の姿を見られたら、それこそ大騒ぎになる。普段から気をつけるんだよ」

「はい、解りました」

「父さんは、合図と同時に、窓ガラスを開けてください。私がこれでスナイパーを釘付けにしますから、援護射撃の間に昂輝君は、手際良くスナイパーを捕まえたまえ」

そう言い軒太郎は、顔の高さにベレットを並べて、営業スマイルを一段と強くする。

眼一郎は、息子が浮かべる紛い物の笑みに、親指を上立てて答えた。昂輝も、はい、と若声を返す。

「行きますよ、Go!」

軒太郎の合図に合わせて昂輝が俊敏に立ち上がる。

驚いたのは向かいのビルで探偵事務所をスコープで覗いていた神田だった。先程撃ち殺した筈の男が動き出したのだから当然だ。

スコープから目を離し、信じがたい光景を肉眼で確認しようと窓を見る。

しかし、それがミスだった。

いきなり窓が開き、奥には拳銃を構えるスーツの男が現れたのだ。しかも男は、躊躇無くこちらに発砲してきた。

神田をMP4を胸に抱えて建物の陰へと、咄嗟に腰を落として隠れる。

反撃どころではない。

神田が隠れる周りでは、手摺りや壁に弾丸が食い込む音が幾度と響いた。

頭を抱えてしゃがんだ神田の上に、ボロボロとコンクリート片が落ちて来る。跳弾が音を響かせ飛び交う。

「畜生！　なんで探偵風情が拳銃を持っていやがるんだ。しかもサイレンサーまで装備してやがる。銃声が聴こえねえ！」

一方、スナイパーを捕まえようと探偵事務所を飛び出した昂輝は、板張りの廊下を駆け抜け、下へ降る階段がある曲がり角を曲がった。そして階段を上から見下ろした瞬間、見知らぬ男たちと鉢合わせする。

階段の中腹を駆け上がった最中の三人組。
探偵事務所に仕事を依頼しに来たお客さんにも見えなかった。
風貌はヤクザその者。

一瞬足が止まる昂輝。
しかし、男たちは止まらない。

先頭の男は、抜き身の日本刀を手に持ち、後ろの二人は何やら拳銃を手にして居る。

強面の瞳は血走り、こめかみに青筋を浮かばせて殺気立っていた。

突撃部隊である。

「えっ!？」

一瞬躊躇してしまう昂輝を余所に三人の男は、咆哮を上げて階段を駆け上る。

その光景は、まるで奈落の穴を競り上がってくる地獄の鬼共に見えた。

「死ねや、糞餓鬼が！」

日本刀を持った男は、階段を駆け上り昂輝の眼前に迫ると、怒号と共に日本刀で昂輝の腹部を狙う。体重を乗せて体当たりをする様に昂輝へと体を重ねて来た。

腹部にズブリとした感覚と共に激痛が走り向ける。

「うっ!」

昂輝の口から苦痛の声が小さく漏れた。
男の日本刀が腹部を貫き背中から切っ先を覗かせた。男は狂喜の表情で更に昂輝の体を押し、後ろの壁へと追いやる。
昂輝の腹を貫通した日本刀が、後ろの壁に、音を立てて突き刺さった。
串刺しの貼り付けだ。

「ひいひいひい。これで残るは五人だ！」

「ぐはあ……」

昂輝が血を吐き男の胸元を汚した。顔が青い。
男は昂輝の吐血を身に浴びても不敵に笑っていた。苦痛に歪む昂輝の表情を楽しむように顔を近づけて覗き込んで来る。

「痛いだろ、痛いよな」

昂輝は歯を食いしばりながら痛みを耐えるが、男の言葉には答えない。答えない代わりに、玉の汗を流しながら睨み返した。

「鴉尾、先に行くぜ！」

「おつよー！」

そう言い後ろの男たちが拳銃を片手に、二人の横を過ぎて板張りの廊下へと雪崩れ込んで行く。

「うがあああああああー！」

日本刀で昂輝の腹を串刺しにした男が、仲間に返事を返した際に、

昂輝が吼えた。腹を貫通した一刺しで男は、致命傷を与えたと油断していたのだ。

この程度で昂輝は、死なない。死ねない。

吼えた昂輝が、必死の表情で前に出た。

腹を貫通して後ろの壁に刺さっていた日本刀の先が壁から抜けると昂輝は、鴉尾の両肩をガツシリ掴み、力任せに後ろへ押しした。

鴉尾は、日本刀を両手でしっかり掴み離さないが、腹を貫かれても未だ力強く動く昂輝に驚愕して居るようだった。そのまま押される。

「川の……」

「糞餓鬼がッ！」

そして鴉尾が、階段を踏み外した。体制がグラリと傾く。

しかし、昂輝は鴉尾の捕まえた肩を話さなかった。

昂輝と鴉尾の二人は、揉み合うように階段を転げ落ちて行き、激しい音がレンガの壁に轟く。

極道コンビ (六)

先に起き上がったのは、昂輝だった。鴉尾は一人バツクドロップ状態でお尻を上に突き上げ、体を丸めながら白目をむいて痙攣している。

なんとも情け無い姿であった。

「なんなんだ、この人たちは……」

息を切らしながら立ち上がった昂輝の腹には、未だ日本刀が突き刺さっていた。触れれば痛みが走るが、昂輝は堪えて刀を引き抜こうと試みる。

なんとも言えない感覚だった。

両手でしっかりと刀を掴み、引き抜こうと力を籠めれば腹部に更なる激痛が走り、ダラリと血も流れ出る。

我慢の末、刀身は徐々に引き抜けていく。しかし傷口を進む鉄の感触が、背筋に悪寒を走らせた。実に嫌な感覚だ。

そして最後は、あっけなくも切っ先が、傷口から引っこ抜ける。まるでワインのコルクを抜いたようだった。

溜息をつく昂輝。

引き抜いた日本刀を、気絶している持ち主の脇にほおり捨てた。チャリンチャリンと刀身が床にぶつかり楽器の如く音を響かす。

化け物である自分には、普通の人間相手ならば必要ない武器だ。

鴉尾を見下ろしていた昂輝が、ハツとした表情で、自分に与えられた任務を思い出す。

「そつだ、スナイパー……」

腹を刺した男の登場で、すっかり忘れていた。任務を再開させる為に、ビルの外に飛び出す。

「あれか！」

昂輝がビルの外に出ると、軒太郎と謎のスナイパーが、路地をひとつ挟んで撃ち合っていた。

互いにサイレンサーを装備しているが為、銃声は響かず、すかした空気銃のような地味な音で銃撃戦を繰り返していた。弾丸が壁や手摺りに着弾する音の方が、まだ派手だ。

向かいのビルの二階非常階段で応戦しているスナイパーを見つけた昂輝は、忍ぶことなく走り出す。

狼に変身していない昂輝の速さは、普通の人間並みだが、サッカー部で鍛えた脚力の分だけ多少は速かった。若々しくも大股で、非常階段を駆け登って行く。

しかしながら昂輝は、軽率であった。非常階段は鉄製。ダンダンと階段を踏み蹴る音が辺りに響き、スナイパーの耳にも届いた。

「なに、いつの間に!？」

昂輝に気付いたスナイパーは、手摺りに身を隠しながら昂輝に銃口を変える。そして乱射した。

昂輝は両手を顔の前に並べて防御を築き前進を続ける。

腹部の刺し傷は既に完治していたが、盾にした腕、肩、腹、太股に、次々と銃弾が新たな穴を開けて血飛沫が散らす。

撃たれてから昂輝は反省した。

少しぐらいは忍んで近づけばよかったと。

だが、いつまでも反省に浸ってられない昂輝。腕の隙間から進行方向を確認して突き進む。

昂輝の全身からプスプスと肉が貫かれる惨い音が聴こえてくるが、既に痛いのか痛くないのかも判らなかった。そんなことを考えている余裕もなかった。

ただ、眼前の狙撃魔を取り押さえようと昂輝は必死になっていた。思わず気合が声になると、吼えるように叫んでしまう。

「うおおおおお！」

「なんだ、こいつ!？」

驚愕の表所を見せる神田。

自分が放つ弾丸を浴びながら死にもせず、倒れることもなく、怯みもしない昂輝を見て、恐怖しながら拳銃の引き金を引き続ける。そうすることしか神田にはできなかった。

だが、接近してくる昂輝を前に、神田の拳銃は、火花を散らして吼

えるのを止めてしまう。

「畜生！ 玉切れか！！」

こんな時にも思いながらも、予備のマガジンをベルトから引き抜く神田。

しかし遅い。

神田がマガジンを取り替えるよりも早く血塗れの昂輝が、神田の眼前に到着した。

神田は思う。

ヴァルハラ探偵事務所は、怪物のような連中が集まっていると聞いていたが、嘘である。

怪物のよう ではなく。怪物じゃないかと……。

そう思ってしまう神田は、恐怖のあまりマガジンの交換に梃子摺ってしまった。

その隙に昂輝はガードを解き、鮮血を飛ばしながら拳を振り被った。

そして、思いっきり振るう。

アッパーとフックの中間ぐらいの軌道で飛んで行く昂輝の鉄拳。数多くの弾丸を全身に受けた人物とは思えない勢いで打拳を放ち、神田の左顎を捕らえる。

ガゴンという音が響き、神田の視界が揺れながら白く染まった。拳撃の威力に黒いフードを被った神田の顔面が枝豆のように曲がっ

て弾かれる。

全力で昂輝が拳を振り切ると神田は、MP4を床に落として手摺りに背中を激突させ、大きくよろめく。しかも勢い余って手摺りを越えて、そのまま二階非常階段から下へと落ちて行った。

不味いと思った昂輝が慌てて手を伸ばし食い止めようとするが、間に合わなかった。

やはり神田は落ちて行く。

そして、一瞬の間を置き、ドサリと音が昂輝に届いた。

「やりすぎたか……」

そう言いながら手摺りから上半身を乗り出して、下を窺う昂輝。神田は横向きに倒れ口をパクパクさせていた。意識は有るようだ。死んでもいない。

ふと、昂輝が前を見れば、向かいのビルで軒太郎が親指を建てて、ウインクしていた。

ミッション完了のようだ。

ちなみに事務所内に突入した二人のヤクザは、イゴールちゃんの手により呆気無く取り押さえられていた。

昂輝が転落した神田の様子を心配しながら見入ると、イゴールがその二人を担いで階段を下りてくる。そして生ゴミでも捨てるようにビルの前に放置した。

ひとりは右頬が紫色に変色しながら腫れ上がり、もう一人は鼻が潰

れて陥没している。イゴールの剛拳が直撃したのだろう。もちろん二人とも意識は無い。失神している。

そんな様子を数人の通行人が横目に過ぎていく。早足だ。係わり合いになりたくないのだろう。目も合わせようしない。

探偵事務所の二階窓に片腕を掛けながら外に顔を出す眼一郎が言った。

「昂輝君、そんな連中は、ほっといていいから上に戻ってきなさい。そろそろ晩飯にしましょう。」

そいつらも、腹が減ったら勝手に帰るさ」

所長の無責任な発言に、本当にいいのだろうかと疑問を抱く昂輝だが、救急車を述べは面倒なことになると思い、従うことにした。

相手は拳銃を持ち出す異常者だ、相手にしない方が、きつといい。

それが、おそらく都会のルールなのかと、またまた誤解する。

「今日はイゴールちゃんが腕を振るったビーフシチューですよ。イゴールちゃんの料理は凄く美味しいんだから。によほほほほ」

そう言いイゴールもスカーフェイスを微笑ませる。

だが、怖い。

昂輝はイゴールの強面に、まだなれないでいた。引きつった愛想笑いを力なく返す。

そして昂輝は、負傷した見知らぬ四人を順に見回しながら、もう一度悩む。

本当に放置していいのだろうかと。

「まあ、いいか……」

自分でも何を心配しているのだろうと気付いた昂輝は、それでも後ろ髪を引かれる思いで、事務所に帰ろうとした。

やはり昂輝は、根が優しいのだろう。お人好しいえる。

昂輝が、向かいのビルから探偵事務所が在る赤レンガ造りのビルへと、ゆるり歩む。

イゴールは既にビル内に戻り階段を上り始めていた。

そして昂輝が路地を横断しようとした直後である。

路地の向こうから何かが飛んできた。空気が唸った。

赤くカリーリングされた四角い箱。

大きな鉄の箱だ。

日本のいたるところで見られるそれが、昂輝に向って飛んできた。

「えっ、うそ！」

素直に驚く昂輝。

飛んで来たそれは、本来なら飛ぶことがありえない物。

まだまだ十七年ちょっとしか生きていない昂輝だが、それが空を飛んで来る光景は見たことが無かった。

飛ぶ訳が無い。

空飛ぶ大箱が昂輝に迫る。

それとは ジューズの自動販売機だった。

「ぶっっ！」

飛来した自動販売機は、路上を横断しようとしていた昂輝に直撃すると、激しい重低音を轟かせながら少年を巻き込み転がった。

そして昂輝を四角い図形で下敷きにして、やっと止まる。

辺りの通行人たちも、何事かと足を止めて生唾を飲んだ。

辺りの空気が、啞然としている。

「な、なんでコーラの自販機が……」

自動販売機の下敷きになりながら昂輝が呟く。重みの性で大きな声も出ない。

しかも自動販売機の下から抜け出せずに昂輝は、路面に爪を立てて奮闘していた。

飛んできた自動販売機が元々設置されていた場所は、二十メートル先の駐車場前の壁際だった。

そこから飛んで来たのだ。

ありえない距離を飛んできたことになる。

そして元自動販売機が置かれていた側には、数人の男たちが立っていた。

高岡たちである。

自販機を昂輝目掛けて投げつけた怪力の持ち主は、未だ投擲直後のポーズで自販機の下敷きになっている昂輝を見ていた。

「ナイスショットだ。坂東」

高岡が言うと、瞳が隠れる漆黒のグラスンを掛けた金髪で長身の男は、ゆっくりと姿勢を直した。そしてダブダブの白いジャージに付いた汚れを掃う。

怪力を発揮して自動販売機を投げた坂東の他にも高岡の後ろには四人の強面が顔をそろえていた。

芝克己、金本哲司。それに真田兄弟。

しかし彼らは、坂東の怪力を目の当たりにしても当惑した様子は見せていない。見慣れている様子だ。

「ハジキだのワツパなど持ち出したわりには情けねえ結果じゃねえか」

高岡の後ろに立つ禿頭の男が言った。男には眉毛も無い。芝克己だ。

芝克の横に並ぶ男も無言で相槌を打つ。その肩には、自分の背丈に比べて若干長い、赤色の棒を背負っていた。まるで棒術つかいのようだ。金本哲司である。

「まったくだ。話にならん」

高岡がそう返しながら歩き始めると、他の五人も後に続く。

一番後ろに並ぶ巨漢の二人は真田兄弟である。

兄も巨漢でマツチヨだが、弟は更に巨漢であった。まるでプロレス

ラーのアンドレだ。日本人なのに顔もよく似ていた。悪魔巨人のよ
うな顔である。

極道コンビ (七)

「おやおや、アレは確か、坂東君に高岡君じゃないかな」

二階の窓から昂輝が潰される様子を楽しそうに見ていた眼一郎が、ヤクザたちに気付き暢気な口調で言った。

気付けば事務所にイゴールが戻ってきていた。可愛らしいクマのアップリケが刺繍されたフリルのエプロンを締め直して台所に入っていく。夕飯の準備に戻ったようだ。

柄悪く歩んだ六人のヤグサ連中がヴァルハラビルの前に到着した頃、先程まで眼一郎が顔を覗かせていた二階の事務所窓から今度は軒太郎が顔を出す。

ヤクザたちの視線が軒太郎に集まり、睨む様に威嚇した。

「おや、随分と懐かしい人が尋ねて来たね」

そう言い窓枠に片手を掛けた軒太郎が、二階だというのを無視して颯爽と窓から飛び降りた。音も僅かに、背広を靡かせ路上に着地する。

黒衣の外道に変身していなくても軒太郎の身体能力は随分と高いようだ。あの高さからダイブしても足を挫くどころかびくともしない。

そして、衝撃を殺す為に曲げた両膝を、ゆっくりと伸ばして姿勢を正す軒太郎は、いつもの営業スマイルのままネクタイのズレを直して喋りだす。

「何か用かな、お二人さん。まさかとは思うが、デートのお誘いじ

やあないよね。僕は君達と違って、同性愛者じゃあないからさ」

解り易く、有り触れた挑発だった。

軒太郎の台詞は、高岡と坂東の二人に向けられたもので、残りの四人を完全に無視していた。

眼中に入っていないのだ。

揶揄されるよりも、存在を完璧に無視されるほうが屈辱的だった。

それに気付いた他の四名は、更に表情を鬼へと変える。強面が軋轢を現す。

「三外、てめー」

顔見知りなのか、坂東が唸るような深声で、軒太郎のファミリーネームを口に出す。

再び眼一郎が二階窓から見下ろしていた。

黒いスーツに合わせた黒いパナマハットをアイパッチのオヤジは、いつのまにか被って気取り始めている。

未だ昂輝は自動販売機の下敷きになって動けない。傷は治っているが、人狼化していない為に、自動販売機を跳ね退けるだけのパワーが無いのだ。動けないまま様子を窺っている。

何事かと野次馬も増えてきていた。

自販機の投擲音が、近所に響いたせいだろう。

辺りにザワザワとした小声が飛び交う中、軒太郎と六人のヤクザが向かい合う。

殺気を纏った強面の六人と、笑顔の軒太郎。その間の空気が物騒なぐらいに歪みだす。ビリビリと電流が走り出す。

眼鏡のインテリ風ヤクザと、自販機を投げる程の怪力ヤクザは、少なくとも軒太郎と面識があるようだ。面識と表現するよりも、因縁と言い換えたほうが良いのかもしれない。それは、自販機に動きを封じられながら様子を窺う昂輝にも感じ取れた。

それにしても自販機は結構重い。売れていないジュースが沢山詰まっ
っているのだろうか。

冷たい眼差しの高岡。無言のままクールを気取る坂東。薄ら笑いを浮かべる芝克。岩の様な顔に眉を吊り上げる真田兄弟。鋭い眼で軒太郎を凝視する金本。

どの強面も軒太郎ひとりを睨みつけていた。

金本が片手に持つ長い赤棍棒で、突然ながら地面を力強く突いた。カッ、と木棒が地面を鳴らす。

威嚇と気迫が混ざり合った綺麗な響きだった。

木琴のような音が、古い雑貨ビルの並ぶ路地に響き渡り、ざわめく野次馬を黙らせた。可憐な一喝である。

そんななか、軒太郎と六人の間には、犬猿の如く軋轢を感じさせ、闘争への温度を増していく。

紛争の臭いが空気に広がり、危機たる感覚を周囲に知らしめていた。

周りの野次馬には、ヤクザ同士の喧嘩が始まるように見えていた。しかし片方は、堅気の探偵だ。極道同士の喧嘩でも抗争でもない。

だが、何故か皆が期待する。
何か心が熱くなることを見られるのではと期待する。
目が離せない。

既に何人かの男が路上には倒れているし、少年が一人巻き込まれて、自販機の下敷きになっている。そんな光景を見ていながらも救急車や警察を呼ぶ人間は一人も居ない。昂輝を自販機の下から助け出そうとする人すら居ないのだ。
皆が七人の高まる闘争心に石化されたかの如く動けずに居た。
いつ始まるのかと緊張の表情で見守る。

しかしながら軒太郎もヤクザたちも、誰一人として動かない。睨み合う中に静寂が流れていた。

昂輝は思う。

この間に誰か僕を助けてくれと……。だが、その願いは誰にも届かない。

そして威嚇的な静寂が時を支配するなか、沈黙を破りさる声か飛んできた。

渋い萎れた男の声。それでありながら威厳が満ち溢れた重みと凄みが太く混ざっていた。

軒太郎の声ではない。

六人のヤクザたちの声でもなかった。

もちろん昂輝や眼一郎のものでもない。

当然ながらイゴールは論外だ。あんなに可愛い声色ではない。

軒太郎が、首と腰を捻って自販機に潰されている昂輝のほうを向いた。しかし、地の低さに居る昂輝を見ていない。視線はもっと高かった。

ヤクザたちも同じほうを見ているようだ。昂輝は自販機が邪魔をして、同じ方角を窺えない。何が起きているのかとジタバタともがくのみだ。

先程の声が聴こえたほうから、カランコロンと下駄で歩む音が、昂輝の耳にも届いた。

誰かが近寄って来る。

そして間も無く昂輝の横を、下駄を履いた何者かが通り過ぎた。

地面を這うように自販機を背負う昂輝には、最初は下駄しか見えなかったが、過ぎてから背の低い人物だと解った。

声と後ろ身形からして老人だろう。

灰色の着物に黒い羽織を羽織っており、頭は坊主だ。後姿からは、隠居した商人の老人か、名人芸を見せる落語家にも窺えたが、矮躯にしては厚みを感じさせ、威厳のような重量感を背中で表現していた。両手は袖の中に隠れている。

もう一人、昂輝の横を続いて過ぎて、声を掛けてきた。

「兄ちゃん、そんなところで、そんなもんを布団代わりにして寝ていると、風邪引くぜえ」

頭の悪そうな軽い口調だった。

心配をしてくれたが助けてくれない男は、前を進む矮躯の老人を追

う。

男は痩せ型で背が高い。皺が寄った紺色のジャケットにパンツ。白いワイシャツも萎れておりだらしない。開いた胸元からは、金のネックレスが見えていた。

そして髪型は、気合の入ったパンチパーマ。痩せた顔には、カマキリの目に似た大きなサングラスを掛けている。

猫背で両手をポケットに突っ込みながら蟹股で歩く姿は、露骨なまでのチンピラだった。

「二代目。何かあったのかい？」

顔見知りなのか、太くも萎れた声で老人が、軒太郎に訊いた。

軒太郎を二代目と呼んでいる。

「若先生。何か揉め事ですかい？ なんならあっしが話をつけますぜえ」

軒太郎が老人に言葉を返すよりも早く、チャラチャラした口調でパンチパーマのチンピラが割り込むと、老人が垂れ目でありながら迫力の籠もった眼差しで、話の邪魔だとパンチパーマを睨んだ。

凄まれたパンチパーマは、出すぎたと悟り、猫背を更に丸めて身を引いた。

矮躯の老人も禿頭で敵つい顔のため極道に見えるし、パンチパーマの男は、もろにチンピラだ。

しかし、此方の味方のようだ。

その証拠に高岡と坂東の表情が一段と険しく変化する。

「出やがったな 極道コンビ」

眩く高岡の額から、汗が流れ落ちた。

武天老師（壱）

「功凧先生。北海道のお仕事は、解決したのですね」

軒太郎の問いに着物の老人は片眉を吊り上げ笑みを作ると、おうよ、と答えた。

後ろに立つパンチパーマは、ニタニタと薄笑いを大きめのサンングラスの下に浮かべている。

二人が醸し出す空気は、極道そのもの。一般人には近寄りがたい空間を作り出していた。

「仕事が終わって、今さつき帰って来たところだ。今回の依頼は骨も折れたし時間も掛かったわい」

それはご苦労様です、と軒太郎が素っ気無くも笑顔で返す。随分と親しげに会話をしていた。

それにしてもこの老人。喋り方から仕草のひとつひとつどれを取っても、堅気に思えない凄みを感じ取れた。

自販機の下で昂輝は、何者だろうと想像しながら、只者でない人物であることだけは察する。

温い微風の如く高岡の背後から芝克が耳元に強面を近づけ耳打ちするように話しかけて来た。

「あれが噂に名高いヴァルハラの極道コンビこと、武天老師の功凧時司と、弟子の赤股夏鱗か……」

鷹に似た鋭い視線を敵から逸らさない高岡は、振り向かず小声で、

そつだ、と一言だけ答えた。

その会話を耳にした真田兄弟たちが緊張に顔を引き締め、金本が使い慣れた愛用の赤長棒を強く握り締めた。握る手の甲に青筋が浮き立つ。

有名人なのだろう。極道側の全員が、この二人の名前と武勇を聞き及んでいるようだ。

人曰く、極道コンビ。

彼ら二人は、ヴァルハラ探偵事務所創設からの初期メンバー五人に数えられ、五年前のヤクザたちとの抗争では、ヴァルハラの名を探偵業務とは別方向へと有名にした張本人たちである。

現在の裏社会では、最強凶悪の地位まで誤名を高めている。

ヴァルハラ探偵にも多少のルールが存在する。

破つたとしても大袈裟な罰があるわけではないが、その内のひとつに、妖怪変化と関わりなく、魔術妖術を使わない一般人と戦う場合、常識外の術や変身の分類を禁止しているのだ。

プロのヤクザとしてヴァルハラメンバーからしてみれば、十分に一般人と見做される。

その為に五年前の抗争では、拳銃や刃物で武装した攻撃的な武闘派ヤクザ相手にヴァルハラメンバーは、一度たりとも魔術妖術の類を使用していない。

それでも圧倒的な戦力差を見せつけ、ヤクザたちを敗北寸前まで難なく追い込んだ。

そして。

変身しない。
術を使わない。

この条件の内で競うなら極道コンビの二人は、ヴァルハラ内でも抜きに出た存在である。

功風時司は、武天老師のあだ名を貰うだけあって武道武術の達人である。

赤股夏鱗はその達人の一番弟子だ。彼もまた武道武術に関しては超人級に達している。頭の悪いチンピラに見えるが、実は信じ難いほどに強い。

その為、魔術妖術なしでの戦いでは、ヴァルハラ内で一番二番を争う戦力なのは確実であった。

軒太郎が振るう武器の威力やイゴールの怪物的腕力を、彼ら極道コンビの超武術は、圧倒的に上回るのだ。

この二人が極道コンビと呼ばれるように成ったのは、五年前のヤクザとの抗争で、戦慄的功績を上げたことから被害者の極道衆が、極道を上回る極道と位置付け、敬意を評して呼び始めた通称である。それがヴァルハラ事務所内でも浸透して、今では彼ら二人を知る者すべてが口を揃えて極道コンビと呼ぶようになったのである。

もちろん極道コンビと呼ばれる要素の中で、今述べたこと以上に、彼らの顔が厳つい強面で、身形や容姿がヤクザそのものだという理由の方が大きな要因なのは、言うまでも無かるう。

功風時司氏は、ワシは堅気だ、と述べるが、どの角度から見ても堅気には見えない上に、職業が探偵だとも思えない。

更にこの二人は、師弟の間柄以外に仕事でもコンビを組んでいる。

しかも案外と仲が良いらしくプライベートでも一緒のことが多いようだ。
いつも一緒に居るのだ、コンビと言われるのに難色は見せていない。ただ、コンビの前に付く二文字が気に食わないようだ。

功風時司が四角い顎を摩りながら言う。

「二代目。この有様は、何事かね。楽しそうではあるが、これは禁を違えている」

ゆったりとした喋り方だった。

五年前にヤクザたちとの間で結ばれた休戦条約のことを述べているのだろう。

この土地で鎬を競う極道は、何があってもヴァルキラ探偵事務所とは揉め事を起こさない。それが約束であり違えてならない決まり事。それにも拘らず、数人の気絶したヤクザが横たわり、揉め事が起きた様子が窺える。

しかも空気には火薬の臭い混じり、少年ひとりが巻き込まれて自販機の下敷きになっているではないか。

「功風先生。何故か判りませんが、禁が解かれたようで」

「それは面白いでやんすね。愉快だ、愉快」

そう言い赤股は、大きなサングラスの下でへらへらと笑顔を作る。すべてのトラブルが、彼にとって祭り事なのだろう。いざこざを楽しんでいる様子だ。

軒太郎の顔にも、約束事が破られ困った色は窺えない。

ヤクザが六名。ヴァルハラが三名。

両者計九名が向かい合う。

野次馬たちの数も二十人近くに増えていた。

そんな中、最初に大きな動きに出たのはヤクザ側の一人、真田兄弟の兄である真田ヒロシだった。

着ていた上着を脱ぎ捨てながら、ひとり同等と前に歩み出る。

高岡たちは誰も止めない。

軒太郎に極道コンビ、それに野次馬たちが彼の行動を見守る。

上着を脱ぎ捨てると下は、黒いタンクトップ一枚。体軀は随分と立派だった。腕も太く、大胸筋は座布団の如く分厚い。

身長189センチ。体脂肪は、かなり少なそうだ。

上着を脱ぎ捨てたことで、鍛え抜かれた逆三角形の上半身が、一層逞しく見える。

「兄じゃ」

身長二メートルを超えるちゃんこ型の巨漢を有したアンドレ風の弟も、兄に遅れて前に出た。兄の斜め後ろに歩み立つ。

弟を無視して真田兄は、礼儀正しく話し出した。

「武天老師、功風時司先生。お初にお目にかかります。それにお弟子さんの赤股夏鱗殿も」

述べた真田兄は、押忍、と言って空手の立礼を小さくも力強く切る。この立礼ひとつで真田兄が、空手を使う有段者であることが周囲に

判明した。今時の不良でもこのような礼を行なわないだろう。やるとした空手家かバンカラの応援団ぐらいだ。

「なんだテメ〜。何か用かあ？」

赤股の態度は、チンピラそのものだった。恥ずかしいぐらいに柄が悪い。

「押忍。私の名前は真田ヒロシ。空手を嗜む極道であります。夢叶うならば、名声高い武天老師様とひとつ、手合わせ願いたい」

「おい！ くら！ チンピラ！ 老師の一番弟子を前に、何寝ぼけたことぬかしていやがるんだ。

まずは弟子を倒してからが礼儀ってもんだらう！」

捲し立てるパンチパーマのチンピラよりき、真田兄のほうは百倍礼儀正しく誰の目にも映っていた。

どちらが悪役と区別するなら、完全に真田兄がヒーローで、赤股夏鱗の方が悪役だ。

ヴァルハラ探偵には、何故にこのような人物が多いのだろうか。軒太郎にしても憑き姫にしても、姑息なところがちよくちよく窺える。

「黙れえ、夏鱗。この若いのはワシを指名しているんじゃない。引つ込んでいやがれ。

それに貴様は北海道でワシの分まで横取りして大暴れしたじゃろ。ここは素直に譲れや」

「いや、あれは、ほら……。分かりましたよ、老師。ちつ……」

功風老師が油を絞るように説諭すると弟子は、視線を逸らしながら

しどろもどろして言葉に詰まり、最後は舌打ちまで溢す。どうやら二人の間で話が纏まったようだ。

武天老師が下駄を鳴らして一人、ゆらりと前に歩み出た。

「兄じゃ……」

「お前は手を出すなよ」

「あ、ああ……」

兄の言葉に心配を顔に表す弟は、ゆっくりと巨体を後退させた。高岡たちの前まで戻る。

念願の対決が叶った真田兄は、期待に満ちた表情を引き締める。極道の顔から武道家の顔へと替わって、実に凛々しい。

「押忍！」

突然に真田兄が、空手家としての一喝を叫び、構えを見せた。ずっと空気が固くなる。

左足を震脚で前へと踏み込み、右足を退脚の支えとして後方に踏ん張る。

右拳を握り脇の下に引き込み、左手は掌を開いてやや前に出した。腰を落とし、背筋を正し、顎を引く。

安定された腰つきは、ガツシリとした固定砲台を連想させる。明らかに一撃必殺を狙った深い姿勢の構えであった。

「ほほう。破壊力に自信があるようじゃな」

「いかにも」

一瞬のこと、真田兄の両眼がキラリと光る。

「ぜい！」

力強い掛け声と同時に、正拳突きを自分の足元に打ち落とす真田兄。地鳴りが轟いた。

落とした正拳が、アスファルトに減り込んでいた。拳が一センチほど地中に沈んでいる。かなりの拳撃だ。

まさに砲弾。

見ている野次馬から驚きの歓声が上がった。その歓声を自信に満ちた表情で聴く真田兄は、元の固定砲台のような構えに戻る。

なるほど、と言いながら顎を撫でる功尻老。

「拳打の威力が自慢か」

「いかにも。この拳撃力が災いして、加減なしに生身の人間を心置きなく打つことが出来ない。それが悩みでした。だが今宵は解禁いたします」

「当然じゃな」

功風老は、右手で顎を摩りながら言うが、構えを取っていない。それどころか左手はまだ羽織の袖内に入れている。無防備にも程がある。

そのまま少ずつ固定砲台と化している真田兄に近づいていった。

下駄がアスファルトを擦る音が夜と変わった空に響くなか、野次馬たちが緊迫に息を呑んだ。

武天老師（貳）

自販機を投擲した坂東が怪力ならば、真田兄は怪拳の持ち主と呼べよう。

拳打の破壊力が並の空手家を遙かに越えていた。

「若いのが、極道のわりにはできるな。良い拳を持っているわい」

拳撃の威力は見ている野次馬たちにも理解できた。

まさに凶器。

真田兄が自慢げに振るった怪拳を顔面に受ければ、一発で顔が潰れ絶命するだろう。

腕で防御しても意味がないのも悟れた。おそらくガードの腕ごと碎かれる。

鬼の金棒で殴られるようなものだ。

功風老が、流派は何か、と問いかけた。真田兄は、凜とした表情で答える。その表情には、極道の色も臭いも感じられず、誠実なスポーツマンだった頃の眼差しに戻っていた。

「光臨館空手、二段。しかしながら極道に身を落とした際に、ケジメとして黒帯びは捨てております」

帯を捨てたが、魂は捨ててない。そんな瞳をしていた。

「潔いな」

言う功風老が少ずつ歩み、真田兄の蹴りの間合いに入った。相変わらず構えを作っていない。

しかし真田兄は動かない。蹴りの間合いは要らないのだ。

更に功風老人は歩む。

接近を続ける老体の行動に、野次馬たちが息を呑んだ。乾いた空気にピリピリした何かが無音で走る。

真田兄が狙うは、自慢の正拳突きのみ。

分かっている。

決着は一撃。一瞬だろう。

真田兄の怪拳は、それだけの破壊力がある。

実績もある。

光臨館空手トーナメントで、五人の骨をへし折り病居送りして

ひとりを殺している。観客の前で、だ。

それが理由で真田兄は、格闘技の世界を追われるように空手を止めた。

だが、日の当たる場所での武道は諦めたが、学んだ術を前向きに生かせる場所を見つけた。それが極道。夜の路上喧嘩だった。

そして時は夜。

そして此処は路上。

いつもと代わらない。

しかしながら武道から外れた真田兄ではあるが、昔から変わらないものが、もうひとつあった。

それは目標である。

武神のひとりと位置づけられる武天老師と拳を交える。空手を学びだした頃から懇願していた対戦であった。

それが、今叶う。

逸れた武術の技を磨く日々だったが、念願叶って目標の相手が眼前に居る。一対一の対戦相手として居るのだ。目標としていた巨人が、武天老師が 近づいてくる。

真田兄が、期待に大きく目を剥いた。限界まで見開き狙いを定めていた。

そしてついに、功風老人が、真田兄の拳打の間合いへと侵入した。

待ちかねた瞬間だ。

そこで真田兄が動く。

刹那の力みと同時に、真田兄の踏ん張る両足がアスファルトに減り込み陥没した。固定砲台が重量を増しながら重力を体内に吸い込むと、地鳴りを周囲に轟かせる。

「感謝！」

礼を尽くす言葉に続いて、固定砲台が正拳と言う弾丸を発射させ火を噴いた。

捻りの唸らす右拳が、正拳突きとなって姿勢の正しい老人の顔面を狙う。

だが功風老人は躲さない。避けない。正面から若者の正拳突きを受け止めた。

ガツンと音が鳴る。

真田兄の正拳と、功風老人の額が激突していた。禿頭の頭突きで正拳に対抗する武天老師。

刹那。衝撃に一方が弾き飛ばす。

飛んだのは、体躯の素晴らしい真田兄のほうだった。瞬時に野次馬たちが沸き上がる。

力まず踏み込まず繰り出された功風老人の頭突きは、当身と言うよりも、直立不動のまま顎を引いた形で俯いただけに見えた。

しかしながら真田兄は、その軽い動作の頭突きで、足場ごと後ろに吹き飛ばされたのだ。固定砲台は、二メートルほど後方に舞うと、よろめきながらも倒れる事無く両足で着地する。

この結末に野次馬たちがざわめき立つ。多くの者が吃驚していた。高岡たちも目を剥き唾然としている。

「兄じゃ！」

心配した弟が、慌てて声を掛けた。

しかし。

「だ、大丈夫だ……」

着地に成功した真田兄は、眉間や鼻上に皺を寄せながら目を細めて自分の太い首の延髄を両手で抱えるように押さえていた。蒼くなつた表情からは、ダラダラと汗が大漁に流れ落ちる。激突した右拳こそ無傷だが、吹き飛ばされた衝撃は、その拳から腕を伝い首に大きなダメージを与えたようだ。

「なんて素晴らしい技術だ……」

高岡の肩越しで見ていた芝克己が呟いた通りである。

功風老が見せた返し技は、力技でなく、合気道などで窺える相手の力を領したりするタイプの武道技術であった。

決められた動作しか行なわない約束稽古などでも形を成すのが難技である術を武天老師は、ランダムな動きが入り混じる実践の中で使つて見せたのである。

真田兄が正拳しか撃つてこないのは解っていたが、放つタイミングまでは不明である。しかしタイミングが計れていても、やはり実践的に実戦で扱うのは難しい技であることは変わらない。出来るとしたら、やはりそれは達人のみだろう。

「合気か……」

「あいき？」

二人の攻防を見ていた芝克己が呟くと、格闘技を知らない高岡が質問するように言葉を繰り返す。

「合気道の返し技には、自分の力の上に相手の力を上乗せして返す、神技の当身や投げ技が存在する。」

今のは自分の攻撃力こそ乗せていないが、あの爺さん、俯く程度の頭突きで真田のパンチ力を跳ね返したんだ。

それ即ち 真田は、破壊力がたつぷりある自分の正拳突きを、自分の体に全力で打ち込んだってことになる」

「自分で自分を殴ったってことか？」

「ああ、飛ばされたあの距離が真田のパンチ力そのものだ……」

なるほど、と言い高岡が視線を戦う二人に戻した。

「流石……武天老師……」

と言う真田兄は、僅か一撃の攻防で、息を切らせながら滝の如く汗を掻いていた。足取りも重く変わり疲労困憊なのが全身の僅かな動きから野次馬たち素人衆にも鑑みれた。

当然だろう。

手加減しなければ他人を滅してしまう自慢の怪拳を、己の身に始めて受けたのだ。

だが、この程度で懇願した武神との対決を終わらせたくなかった。

この程度で終われない。

勝ち負けではないのだ。

そもそも真田兄にしてみれば、鬼頭の命令や高岡の思惑なんぞ関係なかったのだ。

ヤクザとヴァルハラの間で結ばれた禁が破れたのだ。この期に武天老師と戦いたかっただけである。

そんな若者の思いを察するように功凧老が、渋く深い声で、静かに煽った。

「さあ、かかってこんか、若いの」

「まだまだ……」

苦虫を噛み潰したような表情で真田兄は、先程と同じ構えを作り成した。

今度は、摺り足で自分から前に攻め寄る。履いた靴の裏が路面を擦りジャリジャリとした音が鳴っていた。

正拳突きは自慢の技だが、空手の技は、そのみで有らず。他にも多くある。

真田兄は、正拳突きの破壊力のみが自慢ではない。黒帯級の中では、どの空手技も平均値以上に破壊力が高い。

男らしい真つ直ぐな戦法はここまでである。ここからは技を多彩に増やして、合気道の技を封じにかかる。技のバリエーションが増えれば、返し技のタイミングは取り難くなるだろう。真田兄は、そう考えた。

これが空手だと言わんばかりに、突きや蹴り、更に肘と膝も使って行く気だ。

武天老師（参）

間も無くして二人の制空権が重なり合う。

僅かな時間の間に、真田兄の呼吸は正常に整っていた。双眸に闘志も復活している。

否。

復活どころか更に強く、更に大きく、更に激しく燃え上がっていた。

しかしながら功凧老人は自ら動かない。にじり寄った真田兄を、今戦っていることを感じさせないほどに穏やかな眼差しで真つ直ぐ見詰めていた。

余裕の演出だろうか。

だが、油断を見せず真田兄は、警戒に気を配りながら遠慮無く間合いに侵入して行った。

弾！ と、空気が鳴った。

攻めの技を振るうのは若い方。音は真田兄の足元から飛び散った。強烈な脚撃が跳ねる。

「だあっ！」

奇声と共に真田兄の右蹴りが、空間を切り裂きながら老人の顎先を目掛けて急上昇する。

功凧老の垂れ目がギロリと下を見た。眼球だけが動く。

速く力強い蹴り足だが、達人が半歩後ろに身をずらし回避すると、眼前一センチの距離を天龍の如く登って行く。

避けられた。

鋭い爪先が風を斬る。

「ならば！」

躲された蹴り足を素早く地に戻す真田兄は、更なる攻撃態勢へと移行した。

「せいっ！」

真田兄が続いて放つは、左の鍵拳。力強い退脚の踏ん張りど太い腰の回転力が、振られた左の拳速を強打に替える。風が気合に唸って轟く。

「いい拳撃じゃあなあ〜」

達人が斜め前に進んで若者の懐に入り込むと、後頭部辺りで左鍵拳が空振る。

真田兄の心臓が、ドキリと弾む。功風老の余裕な表情が眼前にあった。

グラップルもヘッドバットも狙える超近距離。だが、その間合いに進入したにも関わらず功風老は、反撃の技を試みなかった。何を仕掛けても攻撃は成功しただろうに。

「ちっ！」

褪せる真田兄。今度は接近した達人の顎を狙って下突きを狙うが、達人は後ろに下がり難なく避ける。真田兄の拳は、空気を叩いただけだった。

ならばと、追い突き。
決るように飛んで行く真田兄の拳が、功凧老の頭部を追いかけて狙い打つ。

しかし 半身を右に返して躲す達人。

今度は右の下段廻し蹴り。
高密度の筋肉が引き締まり低い高さを飛んで行く。

だが 下段廻し蹴りの軌道に沿って矮軀を流して躲す達人。

当たらない、と心中で褪せる真田兄は、それでも攻め技を繰り返して出した。
放つ空手技と共に汗が飛ぶ。

「ふんっ！」

打ち下ろしの掌打突き。

首を傾げて避ける。

「とっっ！」

打ち上げの膝蹴り。

顎を引き躲す。

「にゃっ！」

中段左廻し蹴り。

達人は横に滑る。

「しゅっ、しゅっ、はっ！」

右正拳、左正拳、前蹴り。

右、左、後ろに躲す。

「どうしたあ若いの。当たらんのお〜」

コンビネーションすら通じない。当たりもしないし掠りもしない。技を出した分だけ躲される。繰り出した分だけ体力以上に自信が削られていく。

「ぬぬぬぬぬぬ……」

完全に遊ばれていた。

真田兄は、悔しそうに奥歯を噛む。

そして、途方もない実力差を痛感しつつあった。

それは、周りの人間にも悟られているだろう。

武天老師。

その称号が意味する階級は、これ程のものなのかと驚愕する。武神を舐めていた。神様を甘く見ていた。次元が違う。

「糞が！」

神を相手に汚い言葉と共に危険な空手技を放つ真田兄。

それは、金的。

武天老師の股間を狙って真田兄の掬い上げの蹴りが飛んで行く。

しかし功風老は、躲さず動かない。

掬い上げの蹴りが、功風老の股間前でピタリと止まった。

フエイント。

そこから攻撃が、突きに替わる。

目突きだ。

人差し指、中指、薬指の三本を立てた危険な突きが、老人の両眼を
目指して加速する。

真田兄は、神の両目を奪いたいのだ。指を三本立てれば、どれかが
確実に両目に滑り込む。

だが、老人は前に踏み込みながら目突きを躲す。真田兄の三本指が、
功風老の耳の横を過ぎて行った。

躲された。

フエイントを交えた起死回生の禁じ手も通じない。
再び超近距離の間合いで囁く老師。

「帯を捨てるには早すぎたな、若いの。」

極道なんぞから足を洗って、道場に戻るんじゃないあ。そして磨き直せ

や。

あと二十年たつたら、また手合わせしてやるわい」

そう言いながら功風老は、真田兄のバツクルを下手に鷲掴む。

真田兄は、汗だくの顔をキョトンとさせた。

そして功風老は、掬い上げるように自分より大きな体軀を有する勇ましい若者を、軽々と釣り上げる。

慌てて真田兄が右正拳突きを繰り出したが届かなかった。既に両脚は地を離れ、踏み込みも利かない右拳が、だらしなく伸びただけだった。

真田兄の体が、ふわりと宙を舞う。

下手投げでボールでも放り投げるような軌道で飛んで行く真田兄の体軀。

矮躯の老人は、まるで小型のブルドーザーか投擲機のような軌道で放り投げるモーションからは、力強さを感じられなかったが、それでも軽々と真田兄は夜空を舞っていた。技で投げたのか、力で投げたのか判らない。

観戦していた多くの者が驚きのあまり、心の中にドッキリマークを思い浮かべていた。表情が啞然としている。

舞う真田兄は、二メートルある巨漢の弟の頭上を越え、仲間の極道を越え、弧を描きながら飛んで行く。

五人が舞う仲間の背中を追って上空をなぞり後ろに踵を返すと、真田兄が後頭部から地に落ちた。

ゴワンと音が鳴る。

アスファルトに落ちた音ではない。

皆が耳を疑うなか、落ちた真田兄の体が後頭部から突き刺さるように逆立ちをして止まっていた。

「なに、今の音？」

自販機の下敷きで遠くがよく見えない昂輝が、誰でもよいから答えてくれと問う。

しかし昂輝の疑問は、周囲に無視された。

真田兄が後頭部から落ちた先は、鋼鉄で作られたマンホールの蓋の上だった。

真田兄はピクリとも動かない。結末を見ている者たちも動かなかった。そして誰一人動きを見せないなか、逆立ちしていた真田兄が、屍の如く横に体を倒す。

一瞬の沈黙。時間が静止していた。

日は沈んだとはいえ、まだ暖かい季節。だが、野次馬たちの背筋に寒気が走り、鳥肌が浮かぶ。

見ている者たちが、決着だと見て取った。

真田兄の敗北だ。

「兄じゃー！ー！」

アンドレ風の弟が、四人のヤクザを掻き分けながら絶叫を上げ、兄貴の側に駆け寄った。

だが、真田兄は鼻血を流しながら白目を剥いて気絶している。凜々しかった表情も勇ましかった闘志も消えうせ、哀れに横たわって居た。

弟は涙と鼻水を流しながら叫んで兄の体を大きく揺すったが、やはり返事は返ってこない。完全に意識は途切れている様子だ。

「武天老師、功風時司……。噂以上の達人だな」

仲の良い兄弟を眺めながら芝克が呟いた。

「さて、次はだれじゃあ？」

言うは噂の達人。

芝克も金本も気付いていた。

今の一戦で達人功風は、一度も左腕を羽織の袖から出していない。

右手の一掬いから繰り出した投げひとつで勝利したのだ。格の違いを思い知らされる。

武天老師は、やはり武神だと認識した。

それでも四人の極道は、威嚇的に功風老を睨んで凄んだ。

気後れした様子は微塵もない。

武天老師（四）

「一人じゃあ、敵わないな」

芝克の言葉に金本が無言で頷いた時である。

兄の敗北に泣き喚く弟が、今度は訳の分からない叫びを上げて走り出す。四人の間を再び掻き分け、兄の仇にドシンドシンと突進して行った。

その顔は悪鬼羅刹の如く。その巨体は猛獣魔獣の如く押し迫る。

「うがあああああ！」

「今度は御主か」

迫り来る鬼面の巨人に武天老師は、前回の対戦相手同様に構えも取らず待ち受ける。正面から受け止める積りなのか避けようとしない。そこに全身を肉弾に代えた真田弟が、全体重に助走を乗せてぶち当たった。そして巨漢で上から覆い被さる。

町をひと飲みする程に巨大な津波を連想させる強烈なぶちかましだった。

しかしながら達人は吹き飛ばない。揺るがない。動かない。微動すらもしない。

直立のまま僅かに右足一本を後ろに踏ん張っただけである。それだけで二メートルの体躯が繰り出す体当を止めて、覆い被さる巨漢の体重を支えたのである。

「止めたぞ……、あの爺さん……。テクニクだけじゃあなく、パ

ワーも備えているつてのかよ……」

芝克が素直に驚いた。

「ぐわわわああああ！」

真田弟が、また吼えた。

功凧老の肩上から巨大な両手を回して、着物の背中をガツシリと驚
掴む。相撲で言う、上手を取った常態に似ていた。

巨軀が矮軀を包み込むかの如く密着して、捻り潰そうとしていた。

「ほう、投げを狙うか」

覆い被さる肉の中で達人功凧が冷静に言った。

自由のままに掴ませ己に不利な体制をプレゼントしたにも関わらず
武天老師は、それでも振りほどこうとも逃げようともしなかった。

大男に身を委ねる。

「うがあああああ！」

真田弟が咆哮を上げた直後、巨人が体を逸らしながら捻って力む。
以外にも機敏な体捌きであった。

老師の述べたとおり投げを狙う真田弟。

払い腰。

柔道だ。

真田弟は、中学三年間を柔道部で過ごした。この体軀だ、練習試合
でも大会でも殆ど負けたことがない。

中学を卒業する際には、柔道部が強い高校や相撲部屋から多くのスカウトを受けたが、どの道にも進まなかった。理由は、ただ練習が嫌いだからだ。

痛いには耐えられたが、辛いのに耐えられない性分なのである。兎に角ランニングや地味な筋トレなどが大嫌いだった。

それに試合に勝っても嬉しいとは感じなかったのだ。

勝っても体躯が大きいから勝てたと言われて終わりなのである。そう言われて尚更練習をしなくなった。

そして気付けば高校にも行かずに、兄の後ろにくっついてヤクザになっただけだ。

ヤクザに成ると、この巨漢は素晴らしく役に立った。

何せこの魔人のような巨漢である。兄の後ろに立っているだけで威嚇や脅迫の役に立つ。それだけで金になるのだ、とても楽な仕事であった。

もちろん喧嘩ではエース級である。

「うおおおおおおお！」

真田弟の大きな尻が功爪老の胸の辺りに体当たると、極太の両手が矮躯を釣り上げようとす。

不器用そう見える真田弟だったが、払い腰のモーションは以外にも綺麗だった。中学時代、一番練習した投げ技であった。

しかし、真田弟のアクションは、そこで停止した。ピタリと止まる。

「ぐぐぐぐうう」

真田弟が、歯を食いしばる音が切なく響く。諦めず踏ん張りながらも何故に、と言いたげな表情をしていた。

投げられない。

まるで何万トンもある鉄球のように老師の矮躯は動かない。樹齡何百年の巨大な御神木を投げようと試みたわけではないのに動かない。

まるで氷山の一角だ。見えない海中に、何倍もの本体を隠しているように動かない。兔に角びくともしない。

「うがががああああ……」

真田弟は、困惑しながらも投げようと必死に踏ん張りつづけた。だが、もちろん動かない。

こんなことは始めての体験だった。今まで本気になって投げれない相手は居なかったに……。

同級生も、大会のライバルたちも、顧問の教員も投げ飛ばしてきた。ヤクザだってプロレスラーだって投げた。車だって転がした。なのに、たかだか矮躯で禿頭の老人一人すら投げれない。焦りよりも戸惑いよりも、疑問だけが脳内に広がる。

「お主は、その立派な体躯に頼りすぎじゃな。技が雑すぎる」

一見綺麗なホームに見えた払い腰だったが、武天老師にしてみれば、乱雑を部類らしい。

そう言いながら羽織の袖から左手を抜き出す功風老。両手を広げて大きな御尻を抱えるように手を広げて掴み込む。そこから腰を押しした。

「どっさりゃしょ　と」

途端、自分の何倍もある真田弟の体が持ち上がり後ろに放る。真田弟の両脚が天を向く。

裏投げ。

巨人が逆さまになり脳天から地に落ちた。受身は取れていない。否。

取らせないように功風老は投げたのだろう。

ドスンと鈍い音が辺りに響く。

その振動はアスファルトの表面を走り、未だ自販機の下敷きになっていた昂輝の体にも伝わった。

おそらくは二百キロはある巨人が、頭から路面に落ちたのだ、相当のダメージだろうと想像する昂輝。

これまた真田弟にしてみれば、初めての体験だった。

今まで自分の巨漢を此処まで綺麗に投げた相手は居なかった。しかも逆さまに脳天から落とす投げなんぞ信じられなかった。

衝撃に心と視界が激しく揺れた。

だが、倒れた真田弟が素早く立ち上がろうと体を返す。あの投げを受けて立てるとは、と昂輝が驚く。

あの巨漢は、ただ大きく産まれてきただけであらず、かなり丈夫に育ったらしい。まさに天性の才能だ。神から賜りし耐久性である。

「うがあああああ、兄じゃの仇いいいいいい！」

脳天から投げ落とされたショックよりも、兄を倒した怒りが上回っ

たのだろう。怪物のような形相で叫びながら立ち上がろうと素早く動く真田弟。

「お主、丈夫じゃのお」

しかしながら真田弟が片膝立ちになったところで功胤老が組み付いてきた。驚きの表情で大きな顔面が老人の方を向く。功胤老は無表情だった。呆れているようにも見うる。右手で左脇を刺し、左手で右外肘を強く引く。

はね腰。

達人の投げ技に、また巨体が宙に舞う。逆さまになって脳天から落ちて行く。

二度目の鈍い音。

てふう　と、真田弟の口から訳の判らない言葉が漏れ出る。しかし真田弟は懲りずに起きようとした。頭部から真っ赤な鮮血が流れ落ちて来る。両目も互い違いの方向を別々に向いていた。達人の投げは確実に効いている。

「ううううつがああ……」

真田弟がよるめきながら両膝立ちになったところに、これでもかと功胤老が組み付いた。

「やはりお主は、体に頼りすぎじゃな。その耐久力も天からの授かり物。磨かぬ天然。」

素材がよすぎるがあまり、技を極めんとする努力を怠りすぎじゃあ」

武天老師の言葉は真田弟に向けられたものだが、昂輝は今の自分にも重ねて聞いていた。

呪いの再生力に頼りきって戦っている自分と同じである　と。

功風時司が投げに移る。

体を捻りながら懐に潜り込んで行く速さは一瞬の瞬間移動。気が付けば真田弟の巨漢が跳ね上がった。

背負い投げ。

三度舞う巨人。

最後に功風老は、　哀れ、と呟き巨体を投げていた。

止めと思われた背負い投げの勢いや高さは、前に見せた二つの投げより数倍上回っていた。

今まで以上の破壊力を狙った投げ技により真田弟は、またもや脳天から逆さまに落とされる。

「きゃっ！」

余りにも豪快で無情な投げ技に、野次馬の女性が悲鳴を上げと、真田弟の大きな頭部が路面に減り込んでいた。

アスファルトを波打たせる衝撃が雑貨ビルの壁にぶつかり音を消す。そこで逆さまに突き刺さっていた真田弟の巨漢がソウアザラシの屍の如く横に倒れた。鬼面が白目を剥きながら静まり沈黙した。

アスファルトには、真田弟が作った丸い窪みが三つで出来ている。

頭を打ち付け出来たものとは思えないサイズであった。

今度は巨人も起き上がらない。時折ヒクヒクと痙攣しながら意識を失っている。

その姿は神話の中の英雄に討伐された醜悪な怪物のように見えた。首を斬り落とされれば、ゴリアテである。

「まあ、こんなもんかのお」

動かなくなつた真田弟を、短身で見下ろす功風老。

柔よく剛を制すそのものだったが、観戦していた野次馬たちは、戦慄的な矮躯の老人に圧倒されて声すら出せずに居た。啞然とした空気だけが路地に流れて行く。

真田兄弟。

敗北。

兄、空手。

弟、柔道。

共に、達人の投げ技の前に破れさる。

「そろそろ誰か、僕を助けてくれませんか……」

二戦目が終了して一息つくとき昂輝が助けを求めるが、やはり無視された。

ヤクザ vs ヴァルハラ の対立はまだまだ続く。

シックスメン（１）

「真田兄弟。噂ほどでもないな」

嘲る芝克がズボンのポケットから何か黒い物を二つ取り出すと、自分の両手の指に嵌め込みしっかりと握り締めた。これまた古風な武器である。

メリケンサックだ。

メリケンサックとは、四つの金具のリングを連ねて作られた拳撃用の武器で、それを指四本に通したのち掌内ですっかりと握り締め使用する凶器だ。

これを装着すれば、並みの拳骨でも百万人を殴り殺した狂人の鉄拳と代わりなくなる。

もちろん破壊力の話だ。

また、海外ではナックルダスターとも呼ばれている。

しかも芝克の黒いメリケンサックは拳先が鋭く磨かれており、刃物の如く残忍に輝いていた。

あんなもので殴られたのなら、肉が裂け、骨も断たれるだろう。堪ったもんじゃない。

鋭利なメリケンサックを握り締めた芝克の表情に、不気味な怪しさが更に増す。

「やっぱり雑魚どもが何人集まっても所詮は雑魚。そもそもこの町のヤクザ衆でヴァルハラと拳を交えられる人間なんぞ、そうそう居

る訳ねえ〜んだよ」

芝克の語りようは、自分はヴァルハラとまともに戦える僅かな人間の一人だと言いたげ口調だった。

その台詞に反応して金本が赤長棒を前に振って、棒先で路面を素早く叩いた。カンッと乾いた木製の音が、雑貨ビルが並ぶ裏路地に響く。

自分もその内の一人だと無言で主張している様子だった。

更に坂東もダブダブのジャージを上だけ脱ぎ捨て黒いタンクトップ姿を現した。その上半身は、真田兄のマッチョぶりよりも更に引き締まり、ダイヤモンド製の筋肉に見えた。

素晴らしい肉体美である。

この筋肉が自販機を二十メートルも投げ飛ばしたのだ。美しいが魔物の筋肉であろう。

芝克はインテリヤクザのほうを向き、まだ減らず口を叩き続ける。

「頭の可笑しい雑魚どもや真田兄弟じゃあ、まあ、こんなもんだろうさ。

やっぱり最初っから俺たち三人だけで乗り込めばよかったんだよ。

なあ、高岡」

沈黙を守る高岡は、眼鏡を中指一般で上げながら芝克の言葉を聞き流す。

だが、芝克の述べた通りだ。

指きり魔こと鴉尾英太。ガンマンこと神田淳。イゴールに呆気なくボコられた半田正と番場竜拳。それに先程まで戦い、健闘むなしく

敗れ去った真田兄弟。

先に戦った六人の極道を、芝克曰く、雑魚と言い切る。

高岡を除いた残りの三人は、別格らしい。

その事を高岡は解っていた。

「芝克。お前は喋りすぎだ」

言うは三人の中で一番の長身を有する坂東。

長身と言っても百九十センチは無い。それでも百八十センチ後半は有るだろう。

漆黒のサングラスに純黒のタンクトップを身に着けた青年は、短めの金髪を撫でる様にかき上げると前に歩き出した。サングラスの下には獰猛な双眸がばれる事無く隠れていた。

続いて黒革のベストの上に愛用の赤長棒を背負ったスキンヘッドの男も前が出る。

金本哲司。

黒革のスボン、黒革のロングブーツ、リストバンドも黒革だ。金本という無口な男は、どうやら革製の衣類が好きなようだ。

二人に遅れて芝克も鉄黒いメリケンサックを人差し指に引っ掛けクルクルと巧みに廻した後、感触を確かめるように握り直してから前に進んだ。

芝克の表情は、今残る四人の極道の中でもただ一人だけ、不敵に微笑んでいる。この男からは曲者特有の香りが、嫌らしいほどに全身から漂ってきていた。侮れない。

三人の極道が功叡老を目指して歩んで行く。

一歩一歩が力強く、勇ましく、進む姿が英雄の風情に似ていた。感じ取れるオーラが極道とは思えないほどに凛々しく頼もしい。その背中を戦力外の司令官的存在である高岡が見送った。

鷹のような眼光で三人を見送る高岡の目論見では、既に気絶している六人なんぞに大きな期待はしていなかった。

あの六人であわよくばヴァルハラの誰でもよいから一名でも狩れれば幸いだと思っていた程度である。大きな期待はしていなかった。案の定、結果は想定範囲内を出なかったのである。僅かな幸運もあり得なかった。

最初っから戦力と呼べる兵隊は、芝克の言った通り、この三人だけなのである。

ヴァルハラと戦える化け物は、現在入院している鬼頭を除けば、目の前の三人だけなのだ。

高岡は、それを知っていて今回の強行を買って出たのである。

敵わないとは考えていない。勝つ気で挑んでいるのだ。高岡の勝算は、この三匹の化け物たちに掛かっている。

極道の世界に暮す、三匹の魔人に。

三人が勝てば、高岡は幹部候補だ。大出世である。

そして東大卒のインテリ極道である高岡の計算高い頭脳は、この三人が勝利するとはじき出していた。

「先生。二人ならまだしもよ、この面子相手に三人同時はきつくねえ〜ですか？」

「私も夏鱗さんに同感ですよ、御老公。それに坂東は私の客です」

気付けば功風の後ろには、軒太郎と赤股夏鱗が立っていた。

グレイのビジネススーツに銀縁の眼鏡。その下には偽物のスマイルをいつもの通り浮かべる三外軒太郎。

眼鏡のレンズが電信柱に設置された街灯の光を反射して、悪そうに光っている。

やはりこの私立探偵の二代目は、何処となく信用できない如何わしさが感じられた。

その左横に並ぶは。

痩せた輪郭に気合の入ったパンチパーマ。大きめのサングラスを掛けて皺の寄った白いスーツをだらしなく着こなしている赤股夏鱗。

時代遅れのままに仁義が無さそうな極道もどきの男は、猫背に蟹股、両手をポケットに突っ込み顎をしゃくり上げている。

手足が細く、肉厚でない体型の為に気付き難いが、もしも猫背と蟹股を正して直立したのならば、身長百九十以上はある長身だろう。赤股と言う絵に描いたように柄の悪い男は、案外と長身だ。手足のリーチも長そうだった。真田弟ほどではないが、恵まれた体格いや、身長と言えよう。

そして二人の間前に、真田兄弟を余裕の攻防で投げ倒した矮躯の老人、武天老師こと功風時司が立って居る。

直ぐ横には巨漢の真田弟が、頭部と鼻から血を流して倒れていた。戦うには邪魔な障害物と化している。

ヴァルハラの名前の前に、高岡曰く化け物と呼ばれた極道三人が並んで立った。

各自が瞳から威嚇の光を色取り取りに放っている。その光景が野次

馬たちを興奮させた。

ヴァルハラ探偵事務所前で死屍累々の如く倒れているヤクザたち。そして数を増やして行く野次馬の中、シックスメンバトルが始まるうとしていた。

野次馬の多くが巻き添えの流れ弾を恐れて、雑貨ビルなどの物陰に隠れて見ていた。

素手の喧嘩でも何が起きるか解らない。

何故なら此処が、ヴァルハラビルの前だからだ。

殆どの野次馬たちは、ここがヴァルハラビルの前だと理解している様子だ。

そう、この古い雑貨ビルが軒を連ねる裏路地を通行するならば、知っておいたほうが良い知識である。

ここにヴァルハラ探偵事務所が在ることを。

この町では有名な危険区域だと言う事を。

坂東が漆黒のサングラス越しに軒太郎一人を睨みつけている。軒太郎は坂東に付き合い営業スマイルを侮辱の様に向けていた。この場では癪に障る笑みである。

坂東の額に見る見るうちに血管が浮き上がって行くのが、野次馬たちにもはっきりと見えた。

他の四名は誰を睨むといった訳もなく、ただただ軋轢を高めて行く。否、誰が誰を食らおうか迷っている様子にも窺えた。

どれもこれも一流シェフが創った豪華な料理に見えるのだらう。実に美味しそうなのだ。匂いで解る。

緊迫の温度が上昇するなか後方に控える知的だが非力な大将格の高岡が、抑揚薄く独り言を呟いていた。

「あの三人が、この時代にヤクザであってくれて俺はラッキーだぜ。実に運が良い。」

それにしても、三人が五年前にヤクザになっていたのなら、ヴァルハラとの抗争も、若干は変わっていたかもしれない。鬼頭のおじきも一人で頑張らずに済んだものを……。

さてさて、この戦い、三人に期待しているぜ」

そう呟き眼鏡の位置を少し上げる高岡は、懐から煙草を取り出して火を着けた。吸い込んだ煙を夜空に向けて吐き捨てる。煙は闇に混ざり静かに消えて行く。

周りの野次馬たちは、六人のうち誰から動くのかと息を呑んで見守って居た。中には瞬きを忘れているものも居る。不思議な緊張感が外野に流れて期待だけが盛り上がったといった。

昂輝も自販機の下で興味心身を見上げる。

昂輝には感じ取れていた。

功風老が放つ重く偉大な気配。

赤股夏鱗が醸し出す軽く鋭い殺意。

坂東の力強い野獣のような勇ましい闘志。

芝克の怪訝なまでの狂気な空気。

そして無言に潜む殺伐とした圧力を醸し出す金本の威圧。

どれもこれも先日故郷の山中に在る廃墟で戦った五色鬼たちのものを上回っていた。

それ即ち。

この六人は、地獄出身の鬼たちよりも怪物であることを意味していた。

凄くて怖い。

怖いが見たい。

「人間じゃない。化け物だ」

己を棚に上げて昂輝は、思ったことを素直に口に出した。

それだけ彼らの戦いが見てみたかったのである。知らず知らず期待が膨らむ。待ちきれない。

それにしても自分の上に乗る自販機が邪魔臭かった。

こっそり狼に変身して払いのけようかとも考えた。今なら誰も昂輝の異変には気付かないのではと、思う。

シックスメン (2)

「行くぜ、ヴアルハラ！」

猛り顔で述べたのは芝克だったが、我先に大きなアクションを見せたのは禿頭の金本であった。両手に握る赤長棒を横に振り被る。

金本は二メートル程の長さがある赤い木棒を、端ギリギリで持つてフルスイングした。

赤長棒が風を切る音が鳴る。

しかしながら金本の一振りには、仲間である坂東や芝克を巻き込む範囲の大振りだった。五人の猛者たちは金本の横振りを前後に飛んで回避した。

後方に飛んだ功風老が、昂輝の眼前に着地すると、古風な下駄の木音が可憐に響く。昂輝がそれに驚いていると、僅かに遅れて軒太郎が音も無く昂輝がおぶる自販機の上に着地した。音も無かったが振動も無かった。しかし昂輝は軒太郎に気付く。

他の者たちがどこに行ったのかは、地に伏せる昂輝からは窺えない。昂輝がポカンとしていると、初動で皆を散らした金本が赤長棒を矛の如く突き向けながら走ってきた。狙うは功風老。そのまま助走を乗せて棒先で突きを放つ。

「ほう、ワシを狙うか」

言うは功風時司。

武天老師を狙い撃つは芝克己。

赤長棒の突きが老人の顔面を容赦なく狙うが、無敗の老人は頭を低

く屈めて棒突きを躲した。的を外した棒先は、軒太郎が上に乗り、昂輝に乗っている自販機の面を鋭く突き、まるでビリヤードのキューがボールを突くように自販機を突き飛ばした。ガンと音が響くと軒太郎は真上に軽くジャンプして難を逃れる。

長いこと昂輝の上に居座っていた自販機が、赤長棒の突きを喰らいアスファルトの路面を滑るように飛んで行き、十五メートル程先で鈍い金属の擦り音を立てながら静止すると、真上に飛んでいた軒太郎が昂輝の背中に着地した。昂輝がグエと、醜い声を溢すが軒太郎はお構いなしに営業スマイルを崩さず沈着冷静を気取っていた。

更に続く金本のひとりアクション。

金本は赤長棒を西遊記で語られる斉天大聖孫悟空の如く巧みで可憐なまでに振り回す。

両手で回し、片手で回し、首や胴の周りで変幻自在に振り回しながらフェイントに加速を籠め、突然横振りの一打を放った。

先程の大振りのスイングとは異なりコンパクトで正確な一撃が、やはり功尻老を狙って繰り出された。両手でしっかりと握られた赤長棒が、全身の捻りにスピードを増し老人を打ち狙う。

棒術使いの金本は、武天老師に対戦相手を定めた様子だ。棒撃の速度に躊躇が窺えない。功尻老の頭部を横殴りにしようと飛んで行く。

「ぬう！」

渋く籠もった声が功尻老の口から吐き出されると同時に、金本の赤長棒の横振りを左腕と右掌で受け止める老師。赤長棒を受けた老人の腕と掌から骨と皮の惨い骨肉音が発しられたが、ダメージは無い。しかし金本の一振りで功尻老の矮躯が、力負けしたように横へと飛ばされた。

自販機を突き飛ばす棒術の一撃とは言え、功尻老が飛ばされる瞬間を見るのは初のことだった。昂輝や野次馬たちが、おーと、歓声を上げるなか、功尻老は下駄を鳴らしながら着地するとビルとビルとの間にある細い路地にバックステップで移動して行く。

功尻老の表情は、薄っすらと微笑んでいた。明らかに金本を誘っている。

金本は薄暗い小道に逃げ込んだ功尻老を直ぐに追って走っていた。ふたりの姿がビルの狭間に消えて行く。

「お前さんの相手は俺だぜ！」

金本が退いた後方から、メリケンサックを握り締めた芝克がファイティングポーズを取りながら軒太郎の前に走って来る。

周りの光にメリケンサックの刃が殺伐と輝く。

「ひゃっほおっ〜い！」

奇声を上げる芝克が軒太郎に向かって右ストレートパンチを大胆に放つと、拳を飾る鋭いメリケンサックがキラリと輝きながら閃光を走らせた。

芝克のパンチングモーションは、確実に武を心得た動作だった。拳を放つ姿が様になっている。

しかしながら軒太郎の営業スマイルは崩れない。

「おっと」

言うが早いか軒太郎が、自分の足元に這う昂輝を素早く抱え上げて盾に使う。相変わらずの外道行為に昂輝が困惑の表情で芝克のパンチに眼を瞑り両手で顔を庇う。軒太郎の行動に抗議を述べる暇すら

なかった。

だが芝克のストレートパンチは、昂輝の眼前でピタリと止まる。

「えっ!?!」

昂輝が声を漏らす刹那、何故か昂輝を肉盾に利用した軒太郎が、ふごとと、声を上げて飛んで行く。

驚いたのは昂輝であった。何が起きたのか理解が出来ない。後ろを振り返れば間合いを離れた軒太郎が、打撃でも受けたように口元を片手で押さえていた。

「なに!?!」

摩訶不思議な光景に昂輝が戸惑っていると、軒太郎が押さえていた口と元から片手を退けた。口元が若干切れている。赤く血が滲んでいた。

「坊主、危ないから端にどいてな!」

気取った台詞で昂輝に言う芝克。ちよっぴりかっこ良い。

しかしながら今度は何故か芝克が、突然ドガンと重い音を鳴らしながら真横に吹っ飛んで行く。

眼前の出来事に、再び戸惑う昂輝。

飛んだ芝克が、ヴァルハラビル一階ガレージのシャッターに肩から激突して止まった。ガシャンガシャンとけたたましい音を轟かせる芝克の姿勢が僅かに落ちる。

昂輝の目の前。芝克が消えた後ろには、裏拳を大外に振り向いた坂東が立っていた。サングラスを掛けているが、眼が血走っているの

が良く判る。

坂東の全身からは、獣以上の野生臭が放出されていた。物凄く雄臭い。

「芝克、間違えるなよ。三外の糞野朗は、俺の獲物だ！」

ドスの利いた極道の言葉に昂輝が当惑していると、坂東はゆるりと昂輝を払いのけて前方に立つ軒太郎の方へと歩いて行った。坂東の歩む姿はヤクザとは思えぬ程に凛々しい。

仲間に肩を殴られ飛ばされた芝克は、クールを気取りながらやれやれとアメリカンな仕草で呆れ顔を作って居た。若干殴られた肩が痛むのか、一度だけ摩る。

「なあ、メリケンサックのあんちゃんよ。あんたは俺と遊ぼうや。なあ」

シャツターを背に姿勢を正した芝克の前には、いつの間にか赤股夏鱗が猫背に蟹股で立っていた。

怪訝な空気がそこに満ちる。

パンチパーマに大きめのグラスンを掛けた赤股は、両手をズボンのポケットに入れたまま狂人の如く笑っていた。

芝克は顎をしゃくらせ赤股のサングラスを冷たく睨みつける。

「まあいいか、あんたでもよ」

言いながら前に歩む芝克。

「贅沢ぬかすねえ、生意気に」

そう返しながら赤股も前に出た。

ふたりの強面は、鼻が付きそうなくらい超接近すると、芝克が上から煽るように睨み、赤股が下から眼をくれる。まるでヤンキーの小競り合いだ。

先ずは眼力で押し合う勝負からスタートするふたり。両者の双眸から威嚇の凄みが放たれ火花を散らす。

しかしながらこれで、シックスメンが、誰と誰で戦うかが決まったことになる。

赤股夏鱗 vs 芝克己

功風時司 vs 金本哲司

三外軒太郎 vs 坂東修也

ショータイムである。

シックスメン (3)

突然勃発したヴァルハラと極道の紛争。多くの野次馬たちが集まり物陰から窺っていた。

路上には数人の強面たちが転がっているが、戦いは未だ続いている。警察も来ない。救急車も来ない。通報した者が居ないだろう。戦っている者たちも異常だが、見ている野次馬たちの常識も疑わしい。この周辺が非常識な気配に染まっていた。

ヴァルハラビル。

奇々怪々な者たちが集う赤茶色のレンガ造りのビルが醸し出す怪しげな妖気が、観戦している野次馬たちの心を、魂を、如何わしい領域へと導いているようだった。この古いビルは、そのような魔力が有るのだろうか。

「三外—————！」

怒号を上げるのは坂東修也。

短めの金髪に漆黒のサングラスで風を切りながらロダンの彫刻の如く芸術的な筋肉を奮わせ、三外軒太郎にむかって殴りかかって行く。その形相は、まるで金色の狼のようだった。

「修也は相変わらずだな。君は興奮しすぎだぞ」

「名前で呼ぶな！ 糞野郎！！」

握力を限界まで注ぎ込んだ拳骨を派手に振り被る坂東は、何やら因縁深い軒太郎へと全身全霊を込めて振り落とす。

身長は坂東の方が高い。百九十はあるだろう。その長身から打ち下ろされる狂拳が軒太郎の顔面を狙う。坂東の拳は野生的でパワフルな上に、尋常ではないほどのスピードも備えていた。流石の軒太郎も躲しきれずにガードを固める。

坂東は怪力だけでなく、体の動きもしなやかでスピーディーだった。確かに坂東は、アメリカのバスケット選手のようなスタイルをしている。だとするならば、敏捷性も優れているやもしれない。

「うらあああ！」

躲せぬと悟った軒太郎が顔面の前に両腕を交差させて坂東の強功を生身で受け止めると、ぬつと、くぐもった声を漏らす。

軒太郎の営業スマイルが僅かに崩れると共に、坂東の拳を受け止めた両腕が激しく軋む。

両方の腕が折れそうなほど重い外力が全身に押し掛かる。

拳撃の衝撃に耐え切れなくなった軒太郎が、大きく腰を落として後方に一步踏ん張りを入れた。背が反る。

「ううううらああああ！」

更に坂東は打ち込んだ拳を引かずに、上から体重を掛けるように押し込んで行く。力技でねじ伏せようとしている。

坂東の右拳が軒太郎の腕に減り込んでいくと、耐える腰が苦しそうに沈み、無理矢理にも継続していた営業スマイルの口元が引きつりを起こす。怪力の前に軒太郎の余裕が削られていく。

ヴァルハラルールで、妖怪や妖術を使わない普通の人間と戦う際には、ヴァルハラメンバーも妖術や変身の類を使用することが禁止となっている。

故に現在の軒太郎は、黒衣の姿に変身することも魔導の武具の使用を禁止されていた。生身の人間として、自販機を二十メートル投擲出切る怪力の坂東と渡り合わなくてはいけない。

しかしながら軒太郎は、変身せずとも坂東の繰り出したパンチを受け止め、怪力を利用した押しつぶし攻撃に耐えている。

となると、変身しなくとも軒太郎の筋力は、坂東の怪力に対抗できるだけのものを秘めていることになる。

変身しなくとも軒太郎は化け物並みに体を鍛えているのだろうと昂輝は思った。

そんな事を、道の真ん中で立ち尽くしながら考えていた昂輝に、頭上から眼一郎の声が降ってくる。名前を呼ばれて上を見上げる昂輝。

探偵事務所が在る二階の窓から上半身を覗かせる眼一郎は、黒いスーツに黒い帽子を被りながらダンディーな私立探偵を気取り、窓枠に肩肘を乗せて見下ろしていた。

「昂輝君、君はもういいからさ、野次馬に間切れながら観戦でもしてなさい。そんなところにボーと立って居ると、また巻き込まれるよ」

「で……ですが……」

何なのですが　か、言った自分でも判らない昂輝。

野良スナイパーだと思った男を退治した後、突然飛んできた自販機に憑かれて、やっと開放されたが、自分は何をしたら良いのか判ら

ないのだ。

唐突に端で見ていると言われても納得が行かなかった。自分も戦いたいような気が　する。

しかし、明らかにここで昂輝が参戦するのは場違いだ。空気が読めないと言ってもいいだろう行為である。既に昂輝を見ている者も居ない。自販機に憑かれる少年は、早くも過去の人だ。

「なんだか……寂しい……」

囁く昂輝は、欲求不満な表情を浮かべながらトボトボと歩いて群集の方へと向う。やたらと寂しい気分だ。詰まんない。

昂輝が野次馬たちの前に来ると、周りで大きく歓声が沸いた。昂輝の前に居る人たちの視線が上を向いていた。

昂輝が素早く踵を返して、同じ視線の先を見上げると、そこには宙を舞う軒太郎の姿があった。真上に十メートルほど飛んでいる。

否。飛ばされている。

その下にはアッパーカットを勝利のポーズの如く振り切った坂東が居た。突き上げる一撃が軒太郎を打ち上げたのだろう。常識を遥かに凌駕するパワーである。まさに怪力だ。

「相変わらず凄いね、君のパワーは　」

空中に舞う軒太郎が、苦笑いのようなスマイルで述べると、懐からサイレンサーが装着されたままのベレッタを抜き出す。

「えっ！　撃っちゃうの!？」

野次馬に混ざる昂輝が、後先考えていないだろう軒太郎の行動に驚き言葉を零す。

多くの人前だと言うのに軒太郎は、躊躇いも無く銃口を地上の坂東に向けるとトリガーを引いた。

夜空を背景に軒太郎の手元が、赤みかかったオレンジ色の火光を瞬かせた。鉛弾が籠もった音と共に発射される。

だが軒太郎の撃った弾丸は坂東に命中しない。躲さず避けもしなかった坂東の足元に減り込む。

銃撃されても微動だにしない坂東。肝が据わっている。

しかし一発外しても軒太郎の引き金を引く指は止まらない。降下しながら更に拳銃を撃ちまくる。

「テメーこそ、相変わらずじゃねえか。ハジキや刃物ばかり振り回したがる！ このチキン野郎が！」

弾丸が上空から降り注ぐなか坂東は、堂々とした態度で上を睨みながら猛るように軒太郎を嘲る。

そんな自信に満ちた坂東には、チキンと罵った男の弾丸なんぞ掠りもしなかった。理論的な根拠もなく弾丸が当たらないと思っっているようすだ。避けもしない。避けるのは弾丸の方だとサングラスの下の表情が述べていた。

坂東の俺理論は、男らしくてかつこ良かった。

見ている昂輝も瞬時に憧れる。

卑劣な軒太郎に憧れたことは僅かにもないが、始めて会った坂東に問答無用で直ぐさま惹かれていく。

外道で非道な軒太郎と比べること事態が間違えなのだが、坂東には、男が男の引き寄せる魅力が確実にある。もしも昂輝が坂東と仲良く付き合える関係ならば、兄貴と呼びたくなると思像していた。

「どうした、糞野郎！」

上を向く坂東が獣の如く叫ぶと、ベレッタのマガジン内に残る弾丸を撃ちつくした軒太郎が、坂東の上へと落ちて来る。

「もう一回、飛んで来いや、三外えええ！」

待っていましたと言わんばかりに台詞を歌舞いた坂東が、軽いジャンプの後に筋肉質な体躯を丸めて空中で回転する。

宙で丸まる坂東の頭部が下を向き、膝を丸める両脚が上を向いていた。

そう、坂東の両脚は、上空から落ちて来る軒太郎の方向を向いているのだ。

その体制から。

「ううりあああああああ！」

猛る咆哮と共に坂東が、降下して来た軒太郎目掛けて両脚蹴りを打ち込んだ。真上へのドロップキックだった。

営業スマイルを慌てさせながら両腕で素早くガードを築く軒太郎。その両腕の上に、下から突き上げるドロップキックの砲脚が直撃する。

「ふぐつ！」

真下から両脚で蹴られた軒太郎の口から掠れた声が漏れた刹那、一瞬軒太郎の体が消えて、気付けば遙か上空へと飛んでいた。

「た……たか……」

昂輝のそばに居る誰かが、見上げながら言った。

力強く強烈なドロップキックだった。

軒太郎の体が再び宙へと打ち上げられる。

まるで花開く前の打ち上げ花火のようだった。しかも今度は前回よりも高い。野次馬たちの歓声も前回より大きかった。

昂輝も啞然とするその高さは、周りの雑貨ビルよりも高く飛んでいた。地球の引力を無視して三十メートル以上は真上に打ち上げられているだろう。

見上げている多くの野次馬が、ポカーンと、口を開けていた。

夜空で風に流される軒太郎の体は、そのまま四階建てのヴァルハラビルの屋上へと墜落して姿を隠す。

上の方で、ドサリと音がしたのだけは地上まで届いた。

打ち上げ式のドロップキックを放った坂東は、片膝立ちの状態で屋上に消えた軒太郎を見送ると、立ち上がりながら視線を二階窓に在る眼一郎に向けた。

金髪の狼に睨まれた眼一郎は、安全な場所に居るせいか冷静である。アイパッチを掛けた顔は実に涼しい。

「所長、悪いが屋上に上がらせてもらっせ」

「ああ、どうぞどうぞ」

凜々しく猛る坂東に眼一郎は、他人事の如く言葉を返した。緊張感の欠片もない。現在戦争中なのに、わざわざ断りを入れる坂東も坂東だ。

そして坂東は、三人の極道がころがるヴァルハラビルの入り口をくぐり階段を上って姿を消した。

坂東の男らしい背中を昂輝は、多くの野次馬たちと一緒に見送る。

功凧と金本が細い路地に消え、軒太郎と坂東がヴァルハラビル内に消えると、路上に残った猛者は、赤股夏鱗と芝克己だけとなった。昂輝や野次馬たちの視線は、自然と残った二人の攻防へと向けられる。

シックスメン (4)

ヴァルハラビル前の路上に残る豪傑は二名。

パンチパーマに大きなサングラスをギラつかせるチンピラ風の男、
赤股夏鱗。

方や。両拳に鋭いメリケンサックを握り締めながらプロボクサーの
ような構えにテンポの良いステップを刻む男、芝克己。

二人の間には他人事のような不自然な軋轢が湧き上がっている。そ
れは薄ら笑いに殺気を秘めた不思議な威圧感だった。

そんな中でも赤股夏鱗は、未だ両手をズボンのポケットに突っ込ん
で威嚇の構えすら作っていない。

ふたりの眼前に存在する間合いは、距離にして約五メートル。互い
のリーチを考えれば、一步踏み込めば刹那に縮まる距離である。

即ち、赤股夏鱗の様に両手をポケットなどに入れては、瞬時に
始まる攻防の際に、妨げになること間違いない。間違えが起きても、
迂闊であったと言い逃れが出来る間合いではなかった。

ふたりの睨み合いを見ている昂輝には、その無防備な赤股の姿勢が、
余裕なのかと予測する。

ただのチンピラに窺える赤股もヴァルハラメンバーなのだ。恐ら
くは魔人並みの実力があるのだろうか。

「余裕じゃあねえかい、にーちゃんよ。俺風情では、構えすら要ら
ないかい。それとも両手をズボンに突っ込んだまま足技だけで戦う
積りなのかい？」

一瞬昂輝も芝克の言う通り、赤股は足技が得意なのかと思った。力量は不明なのだ。可能性は十分にある。

「言うね〜、あんちゃんも」

芝克の明らかな挑発に狂人の如くクレージーな笑みで答える赤股は、それでも両手をポケットから抜き出さない。猫背と蟹股で向かい合っ居る。

互いに余裕の態度で挑発し合うが、両者ともに相手の挑発には微々たりとも乗らないで、各々のペースを守っている。

昂輝には、ふたりのキャラが少々似ていると感じられた。他人を舐めた態度が良く似ている。

「まあ、いいか」

呆れ顔で溜息をついた芝克が、項垂れるように頭を下げると、不意をついたクイックジャブを放つ。

しかしながら芝克と赤股の距離は約五メートル。踏み込みのないジャブでは、幾ら速かろうと到底届く間合いでなかった。

だが、赤股のジャブのモーションに対して赤股は、瞬時に上半身を右に逸らして届いていない筈のパンチを躲すような動作を取った。

多くの見物人が心中で、何故にと思い、疑問の表情を素顔に出した。昂輝も同様である。

更に続く芝克の攻撃モーション。

約五メートルの距離を間に置きながらアッパーカットを可憐にスイ

ングした。
もちろん届く距離のスイングではない。

しかし　ただ離れた場所でのパンチに赤股は、再び体を後方に動かし回避行動と思われる仕草を見せた。

芝克のパンチが続く。

目標の存在しない空間に繰り出されるコンビネーションブローの数々。

フック、アッパー、ストレートにボディーブロー。その一つ一つの動作に対して赤股は、的確な体術で踊り続けた。もしも芝克のパンチが届いているのならば、的確なディフェンスと言えるだろう。

だが、現実には、どのパンチも届いていない。腕を伸ばし、拳を進めても三メートル以上は距離を残している。

周りで観戦している野次馬たちが、何をしているのかと、怪訝な顔をしている。

芝克のシャドーボクシングに、赤股が合わせるように回避のイメージトレーニングでもしているように窺えた。

両者共に、ただの道化に映る。

「ほほ、これでもポケットから手を出してはくれないかい」

シャドーパンチのラッシュを繰り返す芝克が、メリケンサックを拳速に霞ませて言う。

「面白いパンチを持っているじゃねうか、あんちゃんよ」

笑いながら答えた赤股もまた、見えないパンチを躲し続ける。

そつだ。昂輝は少し前のことを思い出す。

人でなしの軒太郎が芝克のストリートパンチを防ぐ為には昂輝の体を盾に使つた時。昂輝の眼前で芝克の拳は止まつたが、何故か不思議なことに昂輝の後方に隠れていた軒太郎を殴り飛ばしてつた。まるで拳の衝撃だけが昂輝を越えて、軒太郎に命中したようだつた。

もしも現在芝克が、あの時と同じパンチを繰り出しているのなら、赤股の行動も納得が行く。パンチパーマの男は、芝克が発射しているパンチの衝撃波が何かを回避しているのだらう。そして赤股には、見えない筈の攻撃方法が見えていることになる。

謎のパンチを繰り出し続ける芝克の表情が、急に真剣な色へと変わり、重々しい口調で語り始めた。

「俺はな、このパンチの為に夢を失つた。だから今度は、このパンチで富と名声を掴む積りだ。

その為に、お前ら悪名高きヴァルハラのは首は丁度いい獲物なんだよ。悪いがここは、黙つて俺にぶちのめされてくれや。なあ、パンチのに「ちゃんよ」

芝克が何を言いたいのか解らない部分もあるが、その台詞から解ることは、ヴァルハラメンバーを倒して名を上げたいと言つ事らしい。本気の様子だ。

「なるほど、あんちゃん。そのパンチの仕掛けが理解できたぜ」

踊るようには見えない拳を躲し続ける赤股が、笑いながら謎のパンチの種明かしを語り始める。

その間も両手はポケットに入つたままだ。

「サイコキネシスだな」

「サイコ……キネシス？」

野次馬のひとりが反芻した。

「だが、万能な超能力じゃないな。

サイコキネシスを使うのにパンチのモーションが必要な上に、衝撃波としてしか操作でない」

「ああ、正解だ。サイコキネシスだよ。にーちゃんの言う通り、跳び行くパンチ力としてしか能力を使用できない。

しかしだ。能力の使用法が固定されている分、破壊力に関しては極上よお。人間の頭蓋骨ならば軽々砕けるぜ」

述べる芝克は、自慢のサイコパンチを放ちながら微笑んでいた。不敵である。

赤股も対抗するように如何わしく微笑みながら解説を続けた。

「ほほう。じゃあ、そのメリケンサックは凶器と言うよりも超能力のブーストアイテムって訳か。そのアイテムで超能力を底上げしているな」

「さすがヴァルハラ。正解だ。

このメリケンサックの神秘的な力で、サイコキネシスの範囲を伸ばしている。

たまたまインターネットで購入してね。そこそこ高かったんだぜえ。だが能力は優れもんだ。奮発したかいがあったってもんよ」

作ったのは軒太郎である。
インターネットに流したのは眼一郎である。
そんな真実を芝克は知らない。

「御託はこれまでだ。行くぜ、俺様のサイキックナックル！」

遠距離攻撃可能なサイコキネシス。それが芝克の武器であり、ヴァルハラ討伐への自信であった。本来なら十分な武器である。しかし、対戦相手はヴァルハラメンバー。その程度で勝利を勝ち取れるほど甘い相手ではない。

「いかしたネーミングだな！」

そう言いながら今まで両手をポケットに入れながら回避を行っていた赤股が、封印を解き放つかの如く両手を引き出した。そして革の鞭を真似て疾風の速度で右手を振った。腕の一振りに風切り音が鳴り響く。

「なっ！」

叫びの声と同時に芝克が左肩を押さえると、表情が激痛の曇りに歪んだ。超能力攻撃を中断して後ろに一歩よろめく。

芝克と赤股との間合いは五メートル近く離れているのは変わらない。赤股が鞭の様に腕を振るっても伸びた訳ではない。手が届き、打撃が当たる距離でない。

だが、赤股の攻撃は命中した。

赤股もまた、芝克同様に、何らかの術か技を使用して目に見えない

遠距離攻撃を行なってきたのだ。何かは解らないが、それだけは間違いない。

昂輝の隣に居る野次馬のひとりが昂輝に問う。

「今、あのパンチパーマは何をしたんだ？ あんたには見えたか？
何をしたか？」

「いいえ……。僕にも何をしたか見えませんでした……」

昂輝と野次馬の男との会話の通り、赤股が何をしたのか見えている人物は此処には居なかった。

誰もが見ていて解っていることは、赤股が腕を鞭のように振るったことだけだった。謎の攻撃の正体は不明である。

「超能力か！？ ふたりとも超能力で戦っているのか！」

野次馬の中からそう声が飛ぶが、赤股が声の方を向いて否定した。

「まさか。俺をあんなサイキッカー崩れのボクサーと一緒にするなよ。今のは、列記とした武術だぜえ」

「どちらかと言えば、俺はボクサー崩れのサイキッカーだ」

赤股の台詞を否定する芝克。

些細なところに細かく拘っている。

「しかし、今のは確かに武術だな。超能力じゃあねえな」

芝克は未だ苦痛に表情を強張らせながら言つと、謎の攻撃を受けた

左肩の前で、親指と人差し指を使って何かを摘むような仕草をした。そして見えない針でも抜くような動作を見せる。否。

針を抜くような動作ではなく、本当に針を抜いたようだ。瞳を凝らして見てみれば、摘む芝克の指の間に、小さく細い針の姿が一本窺える。

「は、針だ……」

小さな鋭さに気付いた昂輝が言うと、僅かな銀色がキラリと光を反射した。

銀の針である。

「暗器だ！」

野次馬の誰かが、一般人では使用しないマニアックな単語を叫んだ。

「よくご存知でえ」

顎を上にしゅくらせながら赤股が言った。大きめのグラスサンが街灯の光を受けて鏡の如く光を返す。

流石は武天老師の一番弟子。暗器のひとつぐらいは巧みに扱える様子だ。

野次馬たちが群れを成してざわめく中で昂輝は、暗器と言う単語を聞いて、己の両腕を抱えるように両手で摩った。

自分の体内に埋め込まれている武具の数々を思い出しているようだ。

体内暗器。

昂輝の全身に仕込まれた物は、そう名付けられている。

「隠し千本だ。暗器の類だが、これもまた列記とした武術のひとつだぜ」

赤股が投げ放った針の長さ太さは、僅か五センチ程度の裁縫針と変わらないサイズ。重さにしても何ミリグラムの世界だ。

そんな物を、五メートルとは言え、投擲して人に刺すのは不可能に近い。

投げて刺すには軽すぎるし飛び道具としては安定感もない。これほど小さく軽い針では、細工なしに吹き矢でも飛ばして刺すのは難しいだろう。

百五十キロの剛速球を投げられる剛腕投手でも、投げる物が綿のようになんて軽くは、キャッチャーのミットまで届かない。

軽い物は投げてても武器として成立しないのだ。

しかし赤股は、それを難なく果たし武器として使用したのだ。

小針を一本投げて、人に刺す。それがどれ程に難しい技術なのかは、暗器を嗜む武術かなら理解できることだろう。マンガやアニメの様には行かないのだ。

芝克は暗器使いでないが、その難しさを理解していた。

そして、その技術の難易度よりも、もっと恐れていることが存在していた。

それは

投擲された針に、毒が仕込まれていないかである。

針などの超小型な刃物等を武器として使用されるさいに、もっとも恐れられているのが、刃先に毒を仕込まれることだ。

「パンチのにーちゃん。この針に、毒なんか塗ってないよな」

「塗ってるに決まってるだろお。塗ってないほうが失礼つてもんだぜえ」

笑顔で赤股は、素直に答えた。針には、しっかりと毒が塗ってあることを。

今までの邪悪な笑みが嘘なぐらい赤股の笑みは清々しい。青春真っ盛りの若手アイドルの如く清々しい。ある意味気持ちが悪い笑みだ。

そのような赤股を見て昂輝は、やはりこの人もヴァルハラの人メンバ―なのだと痛感した。軒太郎と同じ外道の血が流れているのだろう。きつとそうだ。間違いない。

「どんな毒なんだい」

銀の針を投げ捨てながら芝克が問うと、再び赤股は答えた。

「心配するな、あんちゃんよ。死ぬような毒じゃあねえよ。命を奪うほどの効果は無いんだ」

「じゃあ、何の毒なんだ……」

「それは戦っていれば徐々にわかるさ」

意味深げに言う赤股に芝克は、怪訝な表情を向けていた。

超能力をブーストする能力を秘めたメリケンサック握り締め直す芝克は、ボクシングのファイティングポーズを築くと再び攻撃的な双眸をパンチパーマのサングラスに向けた。効果の判らない毒に犯されながらも闘志を剥き出す。

「なんの毒か解らねえが。ならば毒が回る前に、にーちゃんを叩きのめしてやるぜ！」

単純な作戦だった。

毒が体内に回り、障害を発生させるよりも早く敵を倒せば良い、とだが、運動量が増えれば増えるほどに毒は血液に乗り、血管を伝わり全身に回って行く。動いた分だけ毒が回るスピードは速まってくのだ。

芝克の作戦は、生物と毒との関係を上回る速さで赤股を倒そうとしている。

無茶に思えるが、体内に毒の浸入を許した芝克には、それしかないと言えよう。

芝克の言葉に迷いはない。その台詞を聞いていた昂輝は、きっと自分も同じ作戦に出ただろうと思った。

難しいことが考え付かない男たちには、それが精一杯なのだ。

ストリートファイトが再開される。

闘争心が燃え上がるとメリケンサックが強く握られ、刻むフットワークにアスファルトが鳴る。

ファイティングポーズを取り直した芝克が、距離を残した間合いから超能力攻撃を撃ち放った。

「行くぜ、サイキックブロー！」

「バカめが！」

嘲笑いながら言う赤股。その顔面を狙って飛んで行く見えない超人拳。男意気が色無き闘志となって飛んで行く。

芝克己。

今年で年齢は二十二を数える。

極道に身を落としたのは二年前。二十歳の時である。それ以前の芝克は、真面目なスポーツマンであった。プロボクサーである。

ボクシング暦は、アマプロ合わせて五年。プロでの成績は、四戦三勝一敗三ＫＯ。引き分けは無い。判定までラウンドを重ねたこともないのだ。

しかしプロとしてリングに上がったのは、その四戦のみである。僅か四戦とは言え、四戦三ＫＯとなれば、立派なものである。

それだけの成績を上げておきながら芝克は四戦目を敗北したのちにプロを引退したのである。

否。

引退せざるおえなかったと言えよう。

引退の切っ掛けとなる第四戦。プロとしての初の敗北。過去三戦すべてでＫＯ勝利してきた期待の新人が、この試合でリングの上から消えたのだ。

その敗北で芝克は、プロとしての自信を失った訳ではない。その試合でボクシングが出来なくなるほどの致命的な負傷を追った訳でもない。ましてや対戦相手にトラウマのような恐怖心を植え付けられただけでもなかった。

芝克は、その試合でプロボクサーを越えてしまったのである。

故に反則負けとなった。

三戦三勝三KOと言うド派手な成績を看板に参戦した東日本新人王トーナメント。期待の新人ハードパンチャーは、トーナメントの第一試合にエントリーされた。

芝克の対戦相手は可憐なフットワークが売りのテクニシャンだった。新人とは思えないディフェンス技術を習得しており、案の定その二人の試合内容は、インファイターの芝克が、アウトボクサーの対戦相手を追い回す結果となっていた。

対戦相手を負い回しながらスタミナを消費していく芝克に、対戦相手が放つジャブや速いだけのポイントパンチだけが決まって行く。だが、芝克のパンチは一発もヒットしない。巧みに躲かれる。

明らかにどちらかがKOするような爽快な試合運びではない。対戦相手の術中に落ちた芝克が、手の平の上で踊らさせられているようだった。だからだとねちねちした展開が続く。

新人戦は四ラウンド。その四ラウンド目の残り一分前まで、そんな試合が続いていた。このまま時が進めば、間違いなく判定となる。そうなれば確実に芝克の判定負けになるだろう。

ダメージらしいダメージは受けていないが、数多くのパンチを浴びていた。ポイントで圧倒されている。

それでも芝克は、諦めなかった。

今までリングの上で、路上で、学校で、人生で、多くの対戦相手を叩きのめしてきた己のパンチを信じて、己のパンチ力を信じて芝克

はパンチを振るい続けていた。

パンチが空ぶる。当たらない。届かない。一発当たれば、逆転が有り得ると信じて、ただ繰り出し続けた。自分のパンチ力には、そう信じられるだけの実績があった。

この拳だけで生きてきたのだ。今更信じないと言った選択肢なんぞありえなかったのだ。

奇跡は、自力で掴み取る。

そして、残り時間十五秒で奇跡が起きた。芝克の繰り出した左のロングフックが、可憐なフットワークですべてのパンチを躲し続けてきた対戦相手をKOしたのである。

対戦相手の無傷で綺麗な顔が、バナナの如く半月に曲がった。

流石はハードパンチャーの逆転ブローである。

もちろん会場は、瞬時にどっと湧いた。大歓声である。

だが、会場を湧かしていた歓声が、少しずつざわめきが変わっていき。空気が澱んでいくのが感じられた。

理由は芝克にも理解できていた。しかし、理解に苦しむ。

ことの顛末に自分で驚き混乱していた。

それは。

最後に芝克が繰り出した左のロングフックは。対戦相手を一発でKOしたロングフックは。

対戦相手に命中していなかった。拳は、グローブは、対戦相手に届いていなかったのだ。

しかし対戦相手は錐揉みしながらリングに沈んだのだ。

会場の歓声が、どよめきに変わり、どよめきは、はっきりとした言葉となり始めた。

いかさま………？

八百長………？

やらせか………？

そのような言葉が会場のあちらこちらから聞こえ始めると、その言葉は一気に世界を包み込む。

それらの言葉は罵声と変わりリングに立つ芝克へと、津波となって押し寄せた。

飛んできたのは罵倒だけではない。ペットボトルや空き缶、丸められたパンフレットまで飛んできた。

会場は、初場所で横綱が負けたときより酷い有様である。

芝克己。

サイキックブローの開眼を遂げて、プロボクサーと呼ばれる人種を超越した瞬間であった。

最強の拳闘士誕生と言えよう。

しかしながら芝克の新必殺ブローは、傍から見ればプロレスのようなやらせに見えた。

当たっていないのに対戦相手が倒れたのだ。下手糞な八百長試合に映っても言い訳のしようがない。

こうして芝克はプロボクシング界を追われるように引退となった。新人王トーナメントで八百長試合を行なったのだ。ライセンス永久剥奪。事実上の追放である。

所属団体を換えても、戦う国を換えたとしても、八百長がばれたボクサーに、上げれるリングは存在しなくなる。それが常識的な道理だ。曲がることは、世界の片隅であろうと有り得ない。

だが、芝克己と言う男は、この程度で人生を諦めるようなネガティブな神経を持ち合わせた人物ではなかった。極太の精神力で、さまざま目標を改める。

それが、極道。新たに選んだ道である。

この世界で、この道で、このパンチを使い、富と名誉を掴もうと目論んでいるのだ。

表の世界で夢を掴めなかったのなら、裏の世界で掴むしかない。そう考えたのである。こうなったら、明るい暗いは関係ない。そう芝克は考えている。

芝克己とは、そう言う男なのである。

故に、毒を打ち込まれたぐらいで闘争を諦めない。動けるならば動けるだけ戦うのみだ。

それが芝克のやり方であり、生き方でもある。

シックスメン (6)

再開された赤股と芝克のファイト。

赤股の毒針を受けた芝克は、それでありながらも闘争を諦めずにサ
イキックブローを乱射していた。

二人の間合いは相変わらず五メートル。超能力に飛距離を伸ばす芝
克の間合いだ。

毒針の一撃をヒットさせた赤股は、その間合いで時間稼ぎでもして
いるように防御に徹していた。おそらくは撃ち込んだ毒が芝克を蝕
むのを待っているのだろう。

暗器に仕込まれた毒の使用。なんともヴァルハラメンバーらしい卑
怯な振る舞い。大勢の野次馬の前だろうと姑息なスタイルを改めな
い堂々とした外道ぶりが如何にもと昂輝に思えた。

まだ自己紹介も終えていないが事務所の先輩だ。この先この人と同
じ職場で動いて行くのだと思うと若干の不安を感じる。

外道な軒太郎よりも付き合にくい外道に思えたからだ。

そう思いながらも昂輝が野次馬に混ざり、二人の戦いを観戦してい
ると、向かいの野次馬の中から出てきた女性が、昂輝の方に手を振
りながら歩み寄ってきた。ヒールの音がコツコツと聴こえてくる。

キョトンとする昂輝。

女性は赤いレディーススーツに短いスカートを履いていた。そこか
ら黒いストッキングに包まれた美脚が伸びている。

シヨートヘアに小麦色の顔を微笑まし近寄る女性が、こんばんわ
と声を掛けてきた。

見覚えのある顔だった。

確か今朝、アパートの前で出会った女性だ。
名前は赤股冴　　と言った筈だ。

「確か名前は、五代昂輝君だったかしら」

赤股冴は、昂輝の名前をフルネームで覚えていた。慣れない土地に来て、始めて出合った美人の女性に名前を覚えてもらっていたことに昂輝は若干の嬉しさを感じていた。光栄である。

「貴方は赤股冴さん、　でしたよね」

「あら、ちゃんと名前を覚えていてくれたのね、嬉しいわ」

「うちらこそ」

昂輝も笑顔で答えた。

「ところで昂輝君は、こんなところで何しているの？」

「えっと、アレです」

そう言いながら昂輝は、冴が背を向ける二人の男たちを指差した。赤股と芝克の戦いを観戦しているのだ。ここに集まる野次馬全員が同じ目的で足を止めているであろう。

冴は、チラリと後ろを振り向くと、素に戻った顔を昂輝に戻した。表情が随分と呆れている感じに窺えた。

「もう男って、しょうがないわよね。暇さえあれば喧嘩よ。本当に馬鹿よね」

鼻で一息つく冴。

そう言われても、昂輝も男だ。気持ちが解る。呆れて語る冴に昂輝は苦笑いを返す。

昂輝にも激戦の経験がある。

故郷の温泉街で戦った、鬼たちや影男との一戦以来昂輝は、怪異なる者たちとの戦いに魅入られてしまっていた。

戦いが 楽しいのだ。

この十七年間生きてきた常識から異なる人や化け物たちの戦いに参加してみて、そのファイトに含まれていた興奮に酔いしれた昂輝は、完全に新環境へと飲み込まれていた。

常識外の力を有する者たちの戦いに、参加もしたいし観戦もしたい。知らず知らずに、そう心変わりしていた。

良い悪い。正義と悪。そのような道理を置いて、戦いと言うものに興奮してしまう。

戦いに取り憑かれているのだ。

その心境に昂輝は、きっちり気付いていた。

故に、ふたりの戦いを見て呆れる赤股冴の言葉が、自分の新しい思いを呆れているようで心苦しかった。

赤股冴の呆れ顔を見ながら困ったような苦笑いを返すしか出来なかったのだ。

そう感じながらも昂輝が、ふとしたことに気付く。

赤股冴　その名前。

「赤股つて名前は、今そこで戦っている！」

現在戦っている二人。

その一人の名前は、赤股夏鱗。

この女性の名前は、赤股冴。

同じ苗字。

珍しい苗字だ。赤の他人つてことはないだろう。

「そう、あの馬鹿っぽいパンチパーマは、恥ずかしいけど私の弟なのよね〜」

「お、弟さんなんですか！」

驚く昂輝。ぜんぜん似ていない。美女と野獣だ。同じ遺伝子から生まれて来たとは思えない。

きつと戸籍だけが一緒の兄弟なのではと想像する昂輝。

「恥ずかしいけど、事実なのよね。本当に残念だけは……」

不満げな表所で腕を組む冴。

確かに姉としての立場から見たらあの弟は残念と思える部類だろう。もしも昂輝に弟が居て、あれだったたら、かなりがっかりな現実である。弟として恥ずかしい生き物だ。

そう考えると、一人っ子で良かったと思えた。

「それにしても似ていませんね……」

と、思わず本音を語る昂輝に冴は、ありがとくと笑みながら答えた。

どうやら褒め言葉に取られたようだ。もちろん昂輝は褒めた訳でない。寧ろ哀れみの思いが多かった。

そしてふたりは並んで観戦に入る。

並んで気付く。若干だが身長は、冴の方が高いようだ。

観戦しながら隣に立つ冴に昂輝が訊いた。

「冴さんも、ヴァルハラの人なのですか？」

「まさか」

サラリと受け流すように否定する冴。

よくよく考えてみれば、ヴァルハラメンバーは、昂輝を除けば七人と聞いていた。

所長の三外眼一郎。その息子で二代目の軒太郎。それに憑き姫、イゴール、お砂姉さん。今日始めて出会い、現在ヤクザと交戦中のふたり、武天老師こと功風時司。その弟子で冴の弟、赤股夏鱗。

これで七名である。

冴を入れてしまうと八名になってしまう。冴の言う通り彼女はヴァルハラのメンバーでないのだろう。

だとするならば、彼女は案外と普通の女性なのかもしれない。

「それにしても夏鱗が梃子摺っているところを見ると、あのヤクザはけっこう強いようね」

冴の言葉からすると、弟の夏鱗は梃子摺っている様子だ。昂輝には、赤股夏鱗が余裕を振舞っているように窺えたが、それでもないらしい。余裕を演じていたらしいのだ。姉が暴露する。

「やはり毒針を撃ち込み、毒が回るのを待っているって戦法ですか……」

「あら、あの子が毒を？」

「ええ……」

昂輝の言葉が予想外だったのか姉の冴は、弟の行動に驚きを見せていた。驚きと言っても驚愕の部類ではない。呆れに近い。

「何か可笑しいのですか？」

冴の表情は、おかしいですとも言っているようだった。

「あの子は私と違って、毒なんか使わなくても強いだよ。逆に非効率な戦法よ」

「非効率？」

「あの子　夏鱗のパンチもキックも、早くて凄くて破壊力満点なのよ。何の毒を私の部屋から持ち出したか知らないけど、毒に頼るより生身の方が圧倒的に強い筈なのよ」

「毒を持ち出した？」

赤股夏鱗が、姉の部屋から毒を持ち出した？

即ち、毒の持ち主は赤股冴。昂輝の横に並ぶ女性と言うことになる。昂輝は、先程思い描いた冴への印象を改める。この女性もやはり普通ではないのかと。

そして新たに生まれる疑問。

素手の方が強力と云われた赤股夏鱗が、何故に毒などを使用したか。それ程までに芝克の振るう超能力攻撃が厄介なのか。

どのような考えを持って赤股夏鱗が毒を使用したか解らないが、何やら不吉なことを昂輝は予想していた。

きつとろくでもない真実が待っていていそうな気がしてならない。

何故なら、ここがヴァルハラ探偵事務所前であり、赤股夏鱗はヴァルハラメンバーだからである。それ以上の根拠はない。

シックスメン (7)

猛りながらも必殺のサイキックブローを繰り出す芝克が、拳の乱撃を続けていた。

赤股は回避に専念している。

唸る超人拳に宿りし熱いまでの男の思い。それは野心と欲望。ヴァルハラメンバーを討ち取って名を上げようと目論む極道の強欲。汗を散らす芝克の双眸には、燃え上がる炎の如く邪念が膨れ上がっていた。

その汚らわしい炎は、超能力を研ぎ澄ませ、使えば使うほどに大きく激しくなっていく。

それら煩惱の権化が大きくなるたびに芝克の自信も増して、勝利に近づいていると感じさせる。

超必殺技を撃つ為のゲージが溜まっていく感覚に似ていた。

もともと芝克は、鬼頭が命じたヴァルハラ探偵事務所の壊滅までは望んでいなかった。それが難しい目標だと理解していたからだ。

だが、高岡の先導に従ったのは、ヴァルハラメンバーをひとりでもいいから狩れば良しと考えていたからだ。

ヴァルハラの名を背負う怪物をひとりでひとり狩れば、それだけで十分に名が売れる筈だからだ。

この町では、大見得を切って闊歩できるようになる。まさに強者の証を得たことになるだろう。

それに組む仲間にも、坂東と金本の名前があつたせいもあつた。

あのふたりが、此方の仲間にいるならば、芝克が予想している以上の成果を上げられるやもしれないと考えたからである。

先に熨された連中とは格が違うのだ。別格と言えよう。

この戦いは、極道を極める為に絶好の機会と言えた。故に芝克は、私生活が爛れているこの頃であろうと、今日ばかりは全力で奮闘する積りである。

たまに本気を出すのに良い日である。

今宵死しても仕方がないと思える程に全力を尽くすつもりだ。

「ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！」

気合を籠めて繰り出されるサイキックブローの数々。

左ジャブ、左ジャブ、右フック、左アッパー、右ストレート、左ボディー。

バリエーション豊かに続く芝克の離れ撃ち。

しかし、芝克が左のロングフックを繰り出した瞬間、大きく体制を崩した。

踏み込んだ左脚の膝がガクリと曲がり、振った腕がヘナヘナと風を扇ぐ。腰はヘツプリ腰で、運動音痴な子供のようなだった。情けなくも映る。

何が起きたのかと拳を振るった本人も当惑していたが、見ていた者たちも間抜けな光景に啞然とした。毒が訊き始めたのかと皆が思う。

それが、明らかな隙と化する。

刹那 赤股がダツシュ。ここぞと攻め入った。

サングラスを光らせ芝克の間合い内へと踏み込んで行く。

速い。今まで以上に速い動きである。

一瞬で五メートルの距離を縮めた赤股が、大砲のような前蹴りを発

射した。空気を唸らせ脚が飛ぶ。体制を崩していた芝克は、前蹴りを躲すこともガードすることも叶わず、どてっ腹に直撃を許すと後方に、くの字の形で飛んで行った。その光景から蹴りの威力が、素人目にも鑑みれた。強烈な一撃なのだろうと。

初のヒットに野次馬たちが歓声を上げると、日が沈んだ路地に活気が湧いた。周囲の温度が一度増す。

勝負が動き出した。

「毒が利き始めたんだ！」

野次馬の一人が、そう叫んだ。昂輝も同感に思う。芝克の体内に、先程暗器の針で撃ち込まれた毒が回り始めたのだろう。

あれだけ激しく攻め立て、動き回ったのだ。毒が回り始めても可笑しくない。

「ぐぐぐぐう！」

前蹴りで飛ばされた芝克は、転倒こそは免れるが蹴りのダメージに顔を歪めていた。中腰で立ったまま強面を強張らせながら蹴られた腹を片手で押さえている。

喉の奥からは、苦痛の聲が濁りながら漏れ出て、額から流れた汗が頬を伝い顎先から一滴落ちて行く。

蹴りは利いている。

否。

もしやすると毒のダメージに顔を歪めているのかもしれない。

否。否。

もしかしたら両方かも知れない。

チャンスとばかりに赤股が攻め込んでいこうとした。下がった芝克を凶悪な笑みで追う。

この時ばかりは、大きなサングラスとパンチパーマが威圧的に凄んで見えた。

臭う悪念に、多くの野次馬たちが鳥肌を立てながら、背筋に寒いものを感ずる。

しかし芝克は素早く体制を立て直すと構えを作り直す。両手のメリケンサックを強く握った。

悪念邪念の類ならば芝克も負けていない様子である。さすがは豪傑な極道。

「ううりあああ！」

唸る芝克。

意識もしていないのに口から気合の怒号が吐かれる。そして駆け寄る赤股に、サイキックブローを撃つ。

シュツ、と風が鳴った。

超能力のジャブだ。

そのパンチを躲すために赤股は、足を止めてしまう。見えない程に速いジャブが、透明な弾丸と化して飛んで来るのを見えているかの如く赤股は回避した。上半身を右へと素早く振る。

迫り来る赤股の前進を静止させる為のジャブだったのだろう。牽制の一撃である。回避されたが目的は果たしていた。

またもや五メートル程の間合い。芝克の距離だ。

己の間合いを作りだし、防衛ラインを保つのが本当に旨い。戦略は徹底していた。

そして続く芝克のサイコキネシスパンチ。超能力が嵐と化す。

「ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！」

刻む鼻息と共に繰り出されるコンビネーション。

左ジャブ、左ジャブ、右フック、左アッパー、右ストレート、左ボディー。

先程と同じ組み立てである。

そして、左のロングフック。

だが、また芝克はそこで体制を大きく崩してしまう。まるでデジャブ。先程と変わらぬ流れであった。

膝が、腰が、腕が、体制が、無様な動きを晒していた。

またもや隙が生まれ、その隙に赤股が飛び蹴りで攻め込む。

やはり見逃さない。

飛翔するパンチパーマの男。

可憐なホームにしなやかな跳躍。空にある体は、綺麗な武を象っていた。

理想的な飛び蹴り。

武術に関して素人同然の野次馬たちにも赤股の技は、達人のそれに

見えた。

武天老師の一番弟子。

嘘ではないようだ。

今度の飛び蹴りは、芝克も防御に成功する。両腕を眼前でクロスさせるパンチパーマの飛び蹴りを受け止めた。

しかしながら芝克は、蹴りの威力に押されて五六歩後退する。

防御に成功しても、受け止めた攻撃は体重が乗った武人の飛び蹴りだ。かなり重く、並でない。

飛び蹴りから着地した赤股は、右足ひとつで立ち、左足は膝を突き上げるように曲げている。

両腕を大きく広げ、両手首から曲げられた指先は地を指していた。

中国拳法。鶴の構え。

外野が若干笑っている。

「なんだ……」

よろめきながら後退した芝克が、両目を見開き呟いた。

メリケンサックを握り締めた左拳を凝視する芝克。

肩で息を切らしているが、毒の影響ではないようだ。顔色は悪くない。

己の拳を見詰めている様子と、先程の体制を崩した様子から毒は、芝克の体力を奪っているのとは違う様子だった。

何か別の異変を芝克の体に 拳に 攻撃に、及ぼしている様子

であった。
それに芝克は戸惑っている。

シックスメン (8)

「夏鱗め 。 自分の弱点を克服する積りね」

「弱点？」

昂輝の隣で一緒に観戦していた冴が言った。

昂輝は何を言い出したのかと思えば彼女の方を見ると、冴は親指の爪を噛みながら厳しい表情で、柄の悪い実の弟を見ている。

赤い口紅と紅いマニキュアが大人っぽい爪を噛むといった仕草が子供っぽく見えた。とても我が儘そうな表情と仕草である。

「あの毒は、私が調合した毒なのよ」

何気なく始めた冴の告白に昂輝は、やはり毒を自分で作るのかと納得した。

そうでないのかと思っていたのだ。

どうあれヴァルハラに近い人間なのだ。毒の製造ぐらい己で行なうだろう。

この人も普通人ではないと思いつながら話を聞く昂輝は、如何わしいと考える思想を表情には出さなかった。

その辺のことは、軒太郎たちで慣れている。巧みに真意を隠し通す。

「材料は秘密だけだね。効力は記憶に障害を与える効果があるの」

「記憶に障害ですか？」

「そう、犯された毒の量にもよるけど、あの毒が脳へ到達すると、ある一定の記憶に障害を発生させるのよ。夏鱗は、その効果を恐れているから、私の部屋から盗み出して他人で実験しているのよ」

一定の記憶に障害とは、どのような記憶に障害を及ぼすのであろうか、その先が早く聞きたく昂輝が急かした。そこが肝心なのだ。

「どのような障害を与えるのですか？」

「あの毒は、脳の機関で海馬と呼ばれている箇所に障害を及ぼし、ある記憶を引き出すのを邪魔するの」

「ある記憶を引き出す邪魔って、どんな記憶の引き出しを邪魔すると言っているのですか？」

冴の口調からして、すべての記憶の引き出しを邪魔するのは違うようだ。

ある一定の記憶の邪魔。

「戦闘技術を海馬が引き出す邪魔をするの」

「せ、戦闘技術の使用を、邪魔するのですか……」

「そうなの」

芝克は、その効果のために、左のロングフックを繰り出そうとした瞬間に、体制を崩したのだ。

即ち。芝克は、毒の効果でロングフックを封じられたのか。そう昂輝は疑問した。

そうだとしたならば、不思議な毒である。

「恐らくあのヤクザは、何らかのパンチを忘れちゃったのね。そのパンチを打とうとした瞬間に体制を崩したのよ。

頭では解っていても体がパンチの打ち方を忘れている。

そんな感じかしら」

そんな感じって、どんな感じであろう。そう思いながら表情を啞然とさせる昂輝は、赤股冴の横顔を見ていた。

芝克の体は、左のロングフックを忘れたのだ。

記憶に左のロングフックと呼ばれる単語を覚えていても、それを打とうすると体がついていかない。体が左のロングフックを忘れているのだ。

海馬の接続を毒が妨害して、左のロングフックを崩すのだ。

「その技を練習する前の状態に戻っていると説明すれば、解り易いかしら」

「練習する前に……戻っている……」

「どんな素晴らしい記録を打ち出したことがあるスーパーアスリートでも始めて練習をした際は、素人と代わらなかつた筈よ。

棒高跳びだって、ホーガン投げの選手だって、野球の選手だって始めは素人。毎日の練習を重ねて体に技術を染み込ませるように刻んでいった筈よ。そうすることで時には無意識で練習した技術を振るうこともありうるようになる。」

夏鱗が使った毒はね。その積み重なるように体に覚えこませた記憶へのアクセスを妨害しているの」

「ひ、酷い……」

「まあ、打ち込まれた毒が針の先程度の量ならば、精々ひとつの技を使用不可能にするのがやっとぐらいかしらね」

冴の説明からすると芝克は、毒の効果で左のロングフックだけを忘れてしまったようだ。

踏み込みの深さ。相手との距離感。腰の捻り方や腕の振り方。重心移動。それらを忘れたのだろう。

幾度も繰り返し、汗と涙の結晶であるボクシングの技術の中から、左のロングフックを奪われたのだ。

運動能力への障害と述べるよりも、一部のスキルを封じる毒。なのだろう。

もしも、そのような効果を有した毒が存在するのならば。

それは。

冴の言う通りだ。

赤股夏鱗の弱点と呼べよう。

それよりも。

格闘技家全員の弱点と呼べるであろう最悪の毒である。

赤股夏鱗にとってこの毒は、師である武天老師から学び請けた宝とも呼べる武術を奪われるのだ。

泣くに泣けない話である。
冗談では済まない。

武術とは、永い年月を掛けて積み重ねれば積み重ねる程に極まってしまう。
行く。

研ぎ澄ませば更に鋭く切れ味を増して行く刃物と代わらない。

例えばジャブひとつでも極めれば必殺技と化す。更に積み重ねて行くことで、極みを超越して行くことだって可能だ。

武術には果てはない。無限に極められる。

武道武術は、そのようなものである。

信じる限り、限界は存在しない。

だが、この毒は、その極めた技を、ひとつずつ奪って行く。格闘技家にとって直接命を奪う毒よりも残酷な毒と呼べよう。

血と涙の結晶を。

青春を費やした努力の積み重ねを。

人生を賭けた全ての技術を。

奪い去るのだ。

消し去るのだ。

強奪するのだ。

洒落にもならない、とんでもない毒である。

格闘技家にとって猛毒だ。

この赤股沓という女は、なんとも酷い毒を作り出したものである。

「この前ね。夏鱗と兄弟喧嘩をしたのよ」

そう冴が言った。

昂輝は瞬時に思った。まさかと。

「その時にね、あの毒を使ったから。夏鱗の奴、効き目を他人で実験しているのよきつと。毒の効果を見極めて、対抗策を練る積りね」

「惨すぎます！」

昂輝の一言は、姉と弟のふたりに述べたものだ。

実の弟に惨い毒を使う姉も酷いが、他人で効果を試し対策を練る弟も酷い。流石はヴァルハラに身を寄せる人物だ。兄弟揃って外道そのままだと昂輝は思った。

弟が弟ならば、姉も姉である。

赤股冴。

ショートヘアーに褐色の肌が見せる麗しきフェイスに騙されてはいけない。

見た目は美人で常識人に窺えるが、中身を覗き見てみれば外道そのもの。

この時まだ昂輝は知らなかったが、この赤股冴たる女性は、この界限の裏社会では有名な闇医者で、『猛毒女医』の二つ名を持っているらしいのだ。

二つ名の意味合いは直ぐに悟れたが、闇とはいえ医者であることが以外であった。

闇医者とは案外と儲からないのかと思う昂輝。

理由は冴が、昂輝と同じボロアパート、砂壺荘に住んでいるからだ。

しかし、その疑問も直ぐに誤解だと解る事となる。

本宅は砂壺荘側の高級マンションに在る。

砂壺荘の一部屋は、毒物の倉庫として使用する為に借りているだけなのだ。

生きたイモリ、ムカデ、ミミズ。

本宅に置きたくない毒の材料も多いのだ。

シックスメン (9)

赤股夏鱗が腕を振るう。

しなやかな鞭の音が風を切ると、振られた赤股の掌内から隠し千本が飛んで行く。

銀色の輝きが閃光と成す。

赤股のモーションを見た芝克が、素早くガードを築いた。頭を下げ両腕を眼前に立てると顔面だけは毒針の脅威から守った。万が一にも瞳に刺さったら洒落にもならない。

「くっ！」

小さな苦痛が声として漏れると、ガードに使われた芝克の片腕に隠し千本が突き刺さっていた。刺さっている数は二本。

格闘技家から命よりも大切な武術の技を奪い去る毒が仕込まれた小針である。

「また……毒か！」

「もちろんだつぜー。あんちゃんよ！」

芝克が厳しい表情で刺さった毒針を引っこ抜くと地面に叩き付けるように投げ捨てた。

小さな針がアスファルトに軽く跳ねる。

「この毒は、俺の姉貴が拵えた自家製のオリジナルポイズンでな。俺たち格闘技家には厄介な毒でねえ」。武術に関しての技術を奪う

んだよ。

一針一技。

その針で奪える毒の量だ」

「俺のコンビネーションの最中、左ロングフックが打てなかったのは……その毒のせいってわけか」

「そうだけ。理解が早いじゃあねえか」

「猛毒女医もろくなもん作り出さないな」

「ほほう。姉貴を知っているのかい。極道のおんちゃんよ」

「ああ、兄弟揃って裏じゃあろくな噂はないから　な！」

強めた語尾と同時に芝克が攻撃を放つ。

ジャブ、ジャブと続いて右ストレートの筈だった。しかし芝克は三発目の右ストレートでバランスを崩す。

毒の影響だろう。

今度は右ストレートを失ったようだ。

だが、毒の効果に戸惑う事無く直ぐに攻撃を再開する芝克。

失ったものに未練を残さずに続けられる拳闘の攻撃は、迷いや困惑の欠片すらなかった。

「だから、何だっつてんだ。畜生が！」

左右のショートフックからの右ボディブロー。そして左のアップパーカット。

しかしながらその左アップパーで芝克は大きく体制を崩してしまふ。

先程撃ち込まれた二本の毒針が奪い去った拳闘技術は、右のストリートと左のアップercut。その二つだ。どちらも決まれば一撃で相手をKO可能なパンチである。そのフィニッシュブローと成り得る技を芝克は二つ奪われたのである。

「だ、か、ら、なんぼのもんじゃあい！
欲しけりゃあくれてやる！
奪いたければ、奪えばいい！
何が毒だ！ 何が毒針だ！
最後に勝つのは俺だ！！」

芝克の表情が鬼と化す。
殺気立った威圧的な闘志が、止まることなく乱打する。三つのパンチを奪われても闘争心は失われていない。
だが、サイキックブローの隙間を突いて飛んで来る赤股の毒針が、芝克の太股に突き刺さった。

「ぐう！」

苦悶の声が漏れるが振るう拳は止まらない。休まず続く。
しかし、続くが当たらない。
当たらないが、隙間を突いて飛んで来る毒針は、次々と芝克の体に突き刺さっていく。その数が増えていくと共に痛みが神経を伝い心を乱暴に犯していく。
そして突き刺さった毒針の数が増していくにつれて芝克の動きが可笑しくなっていた。

毒が利いている。

先程まで可憐なステップとテンポに乗せて繰り出されていた拳闘のモーションが、崩れる回数を増していた。毒の効果が芝克の拳闘キャリアを奪いながら素人へと巻き戻していく。

「うがああああああ！」

痛みのせい、屈辱のせい、悲しみのせい、芝克の口から咆哮が野生的に上がる。

もう既に何本の毒針が芝克の体に刺さっているのかわからない。間違いなく十本以上は突き立っている。

幾つの拳闘技術を奪われているのは芝克本人の動きから見て取れた。酔いどれの覚束無い動きと大差ない。

足は千鳥で、腰は砕けている。振るう腕も駄々をこねる子供のようだった。

動き全体からボクサーとしての技術が消えうせている。中学生の喧嘩と代わらない。

元プロボクザーで一流の喧嘩師とは思えない無様な光景だった。

しかし芝克の表情だけが鬼神の如く恐ろしく、瞳は鋭く釣りあがり赤く充血していた。牙を剥きながら開いた口からは、血に飢えた猛獣の様に涎が飛び散っている。

芝克は、人としての戦闘技術を失い、凶暴な野生児に戻っていた。これでは超能力を持ったきかん坊だ。

「もう、技術もへったくりもあるか！ 意地でも当ててやるぜ！ 超能力だけで勝ってやる！」

サイコキネシスだけでぶつとばしてやる！！」

怒号のポリウムで吼えたてる芝克は、ただ超能力を宿した拳の一打をヒットさせるのに夢中になっていた。敗北を悟っているのだろう。せめてもの一撃を懇願しているようだった。それだけが意地の元となる。乱れた拳を振るう理由となる。

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

大きなサングラスを掛けたパンチパーマの男は、野生に退化した無様な元ボクサーを笑いながら、サイコキネシスに換えられた拳骨を躲し続けていた。

この男が本当に武天老師の弟子としての格闘技術を有しているのならば、今の芝克を倒すのは容易いことだろう。少し前に見せたダッシュと同じスピードで間合いを詰めて、パンチでもキックでも決めてしまえば勝利は難無く掴めると考えた。芝克の力量は、それ程までに低下している。

しかし、赤股はそれをしない。

完全に弱者と化した芝克を侮辱しながら攻撃を躲し、徹底的にいびつている。そのことが形相を必死に代えている芝克にも感じ取れていた。

歯痒い効果を發揮する新種の毒と、屈辱的に振舞う対戦相手に、怒りの感情が満ちていく。

胃袋の中で発生した憤慨の念は量を増して上へ上へと昇って行き喉を過ぎて口から溢れ出た。

憤怒が言葉と化す。

「この糞野郎が……」

汗だくの芝克は汚い言葉で誘ると、荒れ狂いながら振り回していた拳を止めて、中腰の構えで赤股を睨んだ。

否。それを構えと呼ぶには、あまりにも隙だらけで浅はかな構えに窺えた。

もう、ボクシングのファイティングポーズすら消失してしまったらしい。

中腰で大きく股を開き、左手を前に、右腕は拳を握り締めて頭の高さに並んでいた。

素人の構えと呼ぶよりも酷い構えである。格闘技も何も知らないのにスーパーヒーローを気取っている戦隊シヨールのバイトのようだった。

プロボクシングの世界で、将来を期待され大型新人とまで呼ばれたことがある男の姿とは思えない。

武の理も、鬪の策も、何もない見せ掛けだけの構えである。

毒によりボクシングの技術をもぎ取られた芝克は、ここまで落ちてしまっているのかと昂輝は、哀れなものを眺めるように見守った。

「技術が無いなら気合を武器に換えるのみだ。全力のサイコキネシスを打ち込む！」

そう述べた芝克は、隙だらけの構えのまま気合を入れて振り上げた右拳に超能力パワーを注ぎ込んで行く。
空気が振動を開始する。

「うりいあああああ ああ ああ」

芝克の額に血管が浮き上がる。その血管は、稲妻の如く波打ちながら首へと下って行き、そのまま腕へと登って行く。やがて血管は右

拳へと到達して心臓の鼓動に合わせて膨れ上がった。
芝克の右腕から真紅のオーラが燃え上がる。
殺気と闘志がブレンドされた超能力の灯りだ。

霊能力や特別な能力を持っていない一般人である野次馬たちにも真紅の灯りは見えていた。

「男の意地が燃えている……」

眩くは昂輝。

そう見えた。

あの真紅のオーラは、芝克の意地と根性の結晶体。あの一撃で勝負を決すべき最後の攻撃。きっとそうであろう。

「最終兵器。一撃必殺のサイコキネシス・ビックバンブローで決めてやる！」

「ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ。

恥も外聞も投げ捨てたか 極道めが」

「ぬかせ、外道！」

「その技を放てば、間違いなく多くの野次馬共をまきこんじまうぞ」
赤股と芝克の会話が聴こえた数人の野次馬たちが、まさか、と言いたげな表情を作りながら逃げる準備に身構えた。
あのパンチは大爆破を起こす技なのかと予想する。

「勝手にただ見している野朗共に気なんか使ってられるか。こっち

とら敗北寸前の超ピンチなんだぜ」

「負ける時ぐらいは、かつこ良く生きるよな。ボケが」

「黙れ黙れ、腐れ外道！」

怒りに興奮した芝克の周りで空気が円常に弾けて広がった。殺気の混ざった突風が裏路地に吹き荒れて野次馬たちの髪や衣類を靡かせた。

二人の会話を聞いており、芝克がこれから繰り出そうとしている一撃が己等を巻き込む程の破壊力を秘めていると知っていたながらも、誰一人として逃げようとしなかった。例え己の身が巻き込まれようとも、この戦いの結末を見届けたいのだ。それ程の価値がある戦いなのだ。

昂輝が生唾を飲んだ。

野次馬たちは石化常態だと思わせるほどに動かない。見逃せないという思いが視線に宿る。

芝克己が、ラストアクションを仕掛けた。

「喰らいやがれ！ 究極パンチ！！」

芝克の拳から更に激しいエネルギーが弾ける。今度の突風は、野次馬たちの全身を叩き吹き飛ばそうとした。皆が顔を片腕で庇いながら一歩後ろに踏ん張りを入れる。

まだ、フィニッシュパンチを打っていないのに、前振りだけで嵐が吹き荒れたのだ。

皆が一撃必殺の破壊力に期待する。

「サイコキネシス・ビックバンプ」

パンッ、ダンッ、パコッ、と三度連なって音がした。

芝克が超能力を全開まで溜め込んだ必殺技を繰り出そうとした刹那であった。疾風よりも速い動きで飛び出した赤股が、芝克に三打を一瞬の間に打ち込んだのである。

初弾は喉仏への喉輪突き。二発目は水月への正拳突き。三打目は、下から上へと跳ねた綺麗な分脚であった。

芝克の喉には首を絞められたような紫色の痕が出来ており、みぞうちの辺りには、服が捻じれながら陥没して拳の痕跡が残っていた。そして足の甲で顎を蹴り上げられた芝克を、まるで天に輝く星の数々を数えるかのように上を向いたまま痙攣していた。

「終わった……？」

こと切れたのかと昂輝が思い、呟いた。

その時である。昂輝の頭の上に何か小さなものが降ってきた。

それは昂輝の頭部で跳ねると地面に転がった。

それを凝視する昂輝。

それは白かった。

芝克の前歯である。

上を向いたまま芝克の両膝が力無く曲がり、前のめりに崩れて行く。勝負有ったと皆が思った。

しかし、まだ終わっていないかった。

「な……んの、これしき」

芝克の左手が赤股の襟首を鷲掴みにする。右の拳は真紅のオーラを纏ったまま振り上げられている。

男の意地は、途絶えていなかった。

芝克が赤股のサングラスを霞んだ眼で睨みつける。

「もう……はずしゃあしねえぜえ……」

芝克の台詞と同時に、すつと赤股の右拳が芝克の胸の上に添えられた。

「それは、こつちの台詞だぜえ。あんちゃんよ」

「なっ！」

「弾！」

水の詰まったドラム缶を殴ったような音が轟いた。

赤股夏鱗が仕掛けたのは、寸勁である。

芝克の胸に添えられていた赤股の拳が、三センチ程減り込んでいた。完全に胸を押し潰し肋骨を粉碎している。

大きく眼を見開いた芝克は、時間が制止したかの如く動かないが、その鼻から血が流れ落ち、やがて口からも鮮血が溢れ出す。

寸勁とは、零距离から僅かな動作で強力な打撃を放つことが出来る高等技術の拳法である。

打撃技の最高位とも語られる寸勁は、流派門派によっては掌で打つこともあり、内気攻を使用する発勁の場合もあるとされている。

実にこの技術は極めれば掌や拳だけでなく、肘や膝、頭突きからでも使用出来るようになるらしく、現代の防具を身に付け竹刀で技を競い合う剣道でも、鏢迫り合いの隙について行なわれる例もある。

「畜生めが……」

吐血と共に吐いた言葉を最後に芝克は、白目を剥いて赤々と染まったアスファルトの上へと倒れこむ。

右手に宿していた執念の灯りは消えていた。

起死回生、逆転の大技は、不発に終わる。

勝負有りだ。

最後は赤股夏鱗が武人らしい繊細な闘技武術でとどめをさした。

シックスメン (10) (前書き)

鬱と体調不良が続き、二週間ほど床に伏せていました。
仕事以外は何もしない日々……。やっと少し良くなりました^^

芝克己が赤股夏鱗の足元に仰向けで倒れこむ。

赤股は大きなサングラスの下に笑みを作って見下ろしながら両手をズボンのホケットに突っ込んだ。口元がへらへらと笑っている。

二人の強面が勝負を決すると、それを見ていた昂輝が隣に立つ赤股夏鱗の姉、赤股冴に清々しい表情で話しかけた。

「弟さんは、見た目よりも優しい人なんですね」

目じりを和ませて言う少年に冴は、若干の驚きを顔に出して凝視する。

この少年は、何を言い出すのかと言いたげな眼差しであった。

ふと、気を取り直して問う冴。

「少年君。なんでそう思うのかしら？」

「何故って、最初から二人の戦いを見ていれば解るじゃないですか」

笑みで答える昂輝に、冴は小首を傾げた。

「勝負が始まってから弟さんは、いや、敵のヤクザが超能力パUNCHを撃ち始めてからでしょうか。飛び道具の流れ弾が外野の野次馬へと飛んでいかないように、ずっとその場を移動せずに躲し続けていたじゃないですか」

確かに昂輝の言う通りだった。

赤股夏鱗は、五メートルの距離の空間に突如発生する見えないパンチを殆どその場を動かさずに躲していた。

スリッピング、ウィーピングが殆どで、あとは小さなステッピングやスウエイイングのみである。大きな移動を有するフットワーク術はなく、ブロッキングやパリングなどのディフェンス術も一切なかった。

それが逆に難しい攻撃防御を選択しているように見て取れた。

そのような防御に拘っている赤股夏鱗を見て昂輝は思っていた。大きな移動で回避術を行わない理由は、流れ弾で野次馬を傷付けない為ではないのかと。そう感じていたのだ。

そして、昂輝が感じていた思いは、スキルイーターの格闘技家殺しの猛毒に追い詰められた芝克が、破れかぶれにも近い最終奥義を試みようとしたさいに確信に変わった。

サイコキネシスビックバンブロー。

あの攻撃は、明らかに広範囲に危害を及ぼす破壊力を孕んでいただろう。

故に回避不能。躲せない攻撃だったのだろう。

その攻撃力を感じ取った赤股は、余裕を捨ててすぐさま攻撃に転じたのである。

瞬速ダッシュからダッキング。接近後の迅速な三連攻撃。更にダメ押しの寸勁。

昂輝の目には、その猛攻が、周りの野次馬たちを窮地から救おうと

した行動に見えたのだ。
もしかしたら、そう見えたのは昂輝だけかもしれない……。
その事を昂輝は姉の冴に言って伝えた。

ふう……と、鼻で溜息を溢す赤股冴。
潤んだルージユが微笑みを浮かばせている。

「ねえ、少年君。なんで弟の夏鱗が、あんなダサダサのチンピラ風の格好をしていると思う？」

話が急に変わった。

冴の言葉に昂輝は趣味でないのかと思う。

「夏鱗の奴はね、姉の私が言うのもなんだけとき。実話ね、けっこうキリッとしたいい男なのよ」

「あのチンピラルックの人がですか……」

「あの大きなサングラスを取ってさ、パンチパーマを落とすとね、どこぞやの凛々しいスポーツマンがホストクラブで働いているみたいな感じになるのよ」

「まさか……」

俄かに信じられないと昂輝が溢す。

「あの風貌も、猫背も、蟹股も、口調も、怪しい笑みも、全部演技なのよ」

「演技？」

今度は昂輝が小首を傾げた。

「夏鱗はね、凜々しくて格好良いから昔から女の子にはモテモテだったのよ」

姉の言葉を聞き昂輝は、現在の弟を見て信じがたいと疑う。だが、スマートで背が高い。あの柄の悪さを修正したのならば確かにハンサムやもしれないとも思う。

「じゃあ、何故にあんな柄の悪い格好をしているのですか？」

「女の子にはモテる容姿だけだね、男から見るとムカツク容姿らしいのよ」

「何故にムカツクのですか？」

「さう、私は女の子だし」

「あー…」

昂輝の口から微妙な声が出た。

「それでね、子供の頃からよく不良に絡まれるのよ。それが嫌で格闘技を始めたんだけど、ぜんぜん状況は変わらないでね。結局絡まれるのが嫌で、異常なまでの身形になったって訳よ」

不良に絡まれたくないから極道を真似た。

冴の語るとおりあの態度が演技で、あの身形が偽装だと言うのなら

ば、中身のまともな人格者となる。
ならば一連の戦いの中で見せた赤股夏鱗の行動も納得がいかないこともない。

赤股夏鱗は、外見とは裏腹の人間であろう。

そのような会話を二人が行なっていると、野次馬たちの視線が二つに分かれてざわめいていた。

一方は雑貨ビル同士の間にある路地に向けられ、一方はヴァルハラビルの屋上を見上げていた。

二つに分かれた視線は、残る二つの激突を窺おうとしている。

それに気付いた昂輝も視線を向ける方角を迷わせ首を振る。続いてどちらの戦いを観戦しようかと悩んでいるのだ。

「それでは冴さん、失礼します」

そう言いながら一礼した昂輝は、とりあえず近いところで戦っている功凧老の方へと走った。

武装の心得

時間は少しばかり巻き戻る。

時は赤股夏鱗と芝克己の激突が続いている最中であつた。

武天老師こと功凧時司と棒術使い金本哲司が睨み合つて居る。

場所は直ぐ脇の路地であつた。

両手を着物の袖内に隠し俯きながら視線を禿頭の若者に向ける老人方や黒革の衣類に身を包む男は、片手に赤長棒を握り締めながら禿頭の老人に視線を飛ばす。

互いの眼差しは抜き身の日本刀。冷たく鋭い切っ先の如く危険だ。殺伐とした感覚が細い路地に満ちていく。

赤股たちが戦っている通りも裏道のサイズだが、此処は更に狭い。路地と表現するよりもビルとビルの隙間だ。

二つの雑貨ビルに挟まれたスペースは、狭いながらも上には果てがない。しかし、横は狭い。僅か三メートルほどの幅である。

二つの壁にはガスや水道などの配管が飛び出しており小さな窓や換気扇などが幾つか窺える。

金本が愛用の赤長棒をクルリと廻した。綺麗な円を描く。

壁との距離を測っている様子だ。

棒の先が壁に触れることはなかったが、可憐に棒術を披露するには随分と狭苦しく感じられた。

金本の表情が、機嫌の悪さを映し出す。
やはり此処は、持ち主の身長と変わらない長さの棒を振り回すのに都合が悪い。

明らかに功尻老の戦略である。

細い路地。狭い空間。障害物と化した二つの壁。

素手の功尻老が、長物を手にする金本を相手に戦うにあたっての作戦だ。地の利を味方に付けようとしている。

此処では金本の棒術も幾分かは制限されてしまう。

だが、金本は、それを理解しながらも此処への誘導を受け入れたのである。承知の上で、追いかけてきたのだ。

金本は、狭いと感じながらも誘い込まれるように浸入した細い路地から出て行くこととはしなかった。

理由は。

金本には愛用の赤長棒があるからだ。

それは武器だ。

武器だからだ。

刃物ほどに殺傷力はない。拳銃ほど無粋ではない。しかしながら武器であることは否定のしようがない。

武器だ。

功凧老は無手である。

素手の相手に対して金本は、恥ずかしげもなく武器を使用しようとしているのだ。

それに関しての引け目が、功凧老の誘導を容易く許したのである。此処で戦う理由と化す。

二つの壁が齎す狭さという不利。敵の有利。プレゼントである。

功凧老は、例え敵が武器を使用しようとも素手で戦うだろう。その身に刻み込んだ格闘術のみで戦うだろう。

例え対戦者が、刃物を手にしていようとも。

例え対戦者が、拳銃を手にしていようとも。

例え対戦者が、対戦車ライフルを手にしていようとも。

功凧老は無手を貫くだろう。

それが武天老師だ。

素手の達人だ。

金本は、功凧老を、そのような人物だと考えている。

そして。

真田兄弟との戦い方から察するに功風老の得意技は投げ技だろう。投げ技は、地面が固ければ固いほどに攻撃力を増すのが当然の理屈だ。

だからこれは、プレゼントなのだ。

金本は普段から思っていた。

プレゼント。

与えること。

それらは、愛用の棒が無ければ達人と成れない自分が、誰かと戦うに当たつての掟なのだ。

掟。

金本のルール。

それは、敵が武器を使うことを許す。

自分が赤長棒を操り戦うのだ。敵が、どのような武器を使用しても文句を付けない。付けられる訳がない。

だから功風老の誘導を許して此処へと入った。

ビルとビルの狭い場所。

壁も床も、すべてが武器である。功風老にとっては、この三つの平面は武器である。

壁を利用した立ち回りで戦えば、金本の棒術を妨げる盾として利用
できよう。
投げ技で床に叩きつけられれば、コンクリートをぶつけられたのと
変わらない。

普段は地面という平面のみが、功風老の武器なのだろう。しかし此
処では更に二つの平面が増える。功風老にとっては武器が増えたこ
とになる。

それを目論み功風老は、此処を選んだに間違いない。

静かに息を吐く金本。

これで同等だ。

赤長棒を武器に使う金本と、二枚の平面を武器として追加された功
風老が同等となる。

金本哲司。

これで同等に、心置きなく戦える。

鍛え身に付けた武術で相手をぶちのめせる。

棒と平面。二種類の道具が武器と化す。

功風時司 vs 金本哲司。

各自が同格の武器を手にしたところで開始となった。

幅の狭い路地で向かい合う禿頭のふたり。

路地の向こう側からは数人の野次馬たちが覗き見ている。

功風老と金本は構えも取らずに互いを睨んでいた。刺激的な視線がぶつかり合い弾け合う。

両者共に動かない。

暫しの間が流れるなか、金本の後方から歓声が聴こえてきた。赤股と芝克の戦いに、なんらかの進展があったのだらう。

その歓声が、燻っていた二人の闘魂に火を点けながら油を注ぐ。

「そろそろワシらも始めようか」

俯き加減の老人が萎れた渋い声で言うと、カランと下駄の音を鳴らして一歩前に出た。

それを見て若者は、手に持つ赤長棒を水平に傾けながら後方に一歩踏み込む。片方の棒先が、功風老へと向いている。

先に前へと出たのは功風老だったが、攻撃を繰り出したのは金本だった。

無音で赤長棒の先が、矛の如く突き進む。

その棒先の突きは、プロボクサーのジャブと変わらない速度で放たれて、功風老の顔面を狙って飛んで行く。

やはり初弾を撃ち込んだのは金本であった。赤長棒のリーチが有利を見せる。

だが、功風老は赤長棒による突きに対して頭を横に傾げるだけで、地味ながらも可憐に躲して見せた。まさしく達人の回避術。無駄のない最小限の動作である。

金本は赤い棒を突いた速度と変わらない速さで引き戻すと、更なる突きを連打した。まるで赤い弾丸を乱射させるマシンガンのようなだった。

棒先が熱い空気を貫通して穴を開けながら幾度も飛んで行く。連射される赤長棒の残像が、空気の穴のように見えていた。

功風老は、それでも棒術の乱突きをすべて回避する。体を横に向けて躲す。背を反らして躲す。腰を曲げて躲す。赤長棒がギリギリを過ぎて行く。

金本の乱打は一発も当たらないどころか掠りもしない。

頭を突いても……。

胸を突いても……。

腹を突いても……。

腕や脚を狙っても……。

掠りもしなかった。巧みに躲される。

武天老師が意図的に紙一重を演出していた。

幾ら突いても当たらない突き技から攻撃方法を変更する金本。突いていた赤長棒を横に振り被ると、功風老の足元を狙ってフルスイングする。

しかしながら横振りの一撃も当たらない。

功風老は前に出していた左足を僅かに浮かせて振られた棒を何事も無く躲して見せた。

足の裏と地面までの隙間は、僅かに十センチ程度であった。そこを赤長棒の一振りが過ぎて行く。

狙いを外しながら振りぬかれた赤長棒の先が壁に擦れて音を鳴らすと、流れるように軌道を変えた。今度は縦振りとなり上から功風老の禿頭を狙う。

「おっと」

声と共に功風老が一步だけ後方に下がると、老人の鼻先寸前を赤長棒が落ちていった。勢い余って功風老の足元の床を叩く。綺麗な木音が手狭な路地に響いた。

響いた音と共に跳ね返った赤長棒が金本の腰元に縮むように戻って行くと、休む事無く攻撃を続ける。

再び功風老の顔面を狙ってジャブの速度を有する棒突きを放つ。

「なんの」

渋い声を漏らし功風老が、顎を引きながら背を反らす。

僅か数センチぐらいの回避行動で出来た空間に、金本の棒先が侵入すると、的を外したことを瞬時に悟り更なる攻撃を放つ為に攻撃速度と同じ速度で引いて行く。

金本は、攻撃の手を休める積りが無かった。幾ら躲されようとも、まだまだ序の口である。

刹那。

功尻老がダツシュした。

突きを放った赤長棒の引きに合わせて功尻老が金本の懐へと滑り込んだのである。

まるで風の如く透明な瞬速の歩行は、履物である木製の下駄すら音を立てていなかった。

眼前に飛び込まれた金本も瞳を剥いて驚く。

赤長棒の突きの速度と引く速度は同じなのだ。その速度と同じ速度で功尻老は、金本の懐に潜り込んだのである。

それ即ち。

功尻老の瞬発力は、赤長棒の攻撃速度と同一となる。

アメリカの最強ボクサー候補で有名な元ヘビー級チャンピオン、マイク・タイソン。

ヘビー級ボクサーの中では小柄といわれているチャンピオンだったが、頂点を極めた自慢のパンチ力のほかに恐れられたのが爆発的な瞬発力である。

その瞬発力の凄さは相手のジャブを躲して、グローブを引くスピードと同じ速度で相手の懐に飛び込むとされていた。

そして自慢のハードパンチをバスターカの如く打ち込み、ガードの上からでも対戦者に強烈なダメージを注ぎ込む。

功尻老は、そのマイク・タイソンと同じ技術を赤長棒の突きに合わせ行なったのだ。

だが、金本の赤長棒は、ヘビー級ボクサーのジャブよりも三倍近く長い。腕一本と金本の赤長棒ではリーチが違いすぎる。それでありながらも功風老は、棒先が引く速度に合わせて金本の眼前に接近したのである。

一瞬で間合いを詰めるには距離が長すぎる。凄いとしか言いようが無かった。

流石は武天老師。

流石は達人の中の達人である。

功風老が見せた一瞬の接近術に金本も驚きこそしたが戸惑っては居なかった。冷静に次の一手を繰り出した。

引かれた赤い棒が今度は縦に回転した。棒の先が真下から功風老の顎を狙ってスピーディーに昇っていく。

功風老は上半身を右に反らして棒先のアッパーを避けた。

変則的な攻撃を躲された金本は、振るった赤長棒の勢いそのままに体を捻って功風老に背を見せる。

再び変則的な動きだった。

その直後、背を向ける金本の脇の下から弾丸の如く赤い棒先が飛び出て功風老の喉仏を狙う。

「ほう、意表を突く技だな」

言いながら功風老も体を捻りながら赤長棒の幻惑な一撃を躲して金本に背を向ける。

ふたりが背と背を向け合っていた。

狙いを外した赤長棒は、功風老の右肩の上あたりで止まっている。

金本が棒を引こうとしたが引けない。

功尻老が金本の赤長棒を背負うように両手でしっかりと捕らえていた。

そこでふたりの動きが止まる。

背を向け合うふたりは、鋭いまでの視線を後方の敵に向ける事無く正面を睨んでいた。

赤長棒を背負う功尻老。

赤長棒を脇の下に挟む金本。

金本の表情は生真面目ほどに引き締まっていたが、功尻老の口元は若干ながら微笑んでいる。相変わらぬヴァルハラスマイルだ。

背と背を向け合い、一本の棒を掴み合う両者。

この体制では可憐な棒術が使用できない金本の方が不利に窺えた。功尻老が自分の土俵へと金本を引きずり込んだといえよう。

「投げさせて貰うぜ、若いの」

言うや否や功尻老の全身に柔力が漲る。

赤長棒を脇の下に挟む金本の体が浮き上がり、両脚に履いた黒い革靴の底が地からフワリと離れた。

赤長棒を背負った功尻老が、赤長棒を人の腕に見立てて一本背負いを試みたのだ。

棒ごと背負われた金本は、カツオの一本釣りの如く宙を舞うが、それでも手を離すことはなかった。相棒である愛用の赤長棒を意地で

も離さない。

棒術使いの鏡である。

赤長棒は友達なのだ。愛する恋人とも言えよう。

寝るときは布団の中に連れ込む程に、何時も一緒である。

だが、このままでは相棒ごと背負われた一本背負いで頭から落とされてしまう。それは流石に不味い。

宙を舞う金本。功凧老は容赦無く持ち上げた金本を、地面目掛けて逆さまに投げ落とす。

赤長棒の長さが追加された変則の一般背負いの高さは二メートル以上になっている。このままアスファルトの地面に頭部から落とされたら強烈であろう。想像しただけでも頭が割れてしまいそうだ。

しかしながら赤長棒を脇に挟んだ金本は、冷静な表情のまま空中でクルリと回転して両脚から可憐に地面へと着地した。ダンツと黒革のブーツが音を響かす。

変則の一本背負いを免れた金本は、赤長棒の端を握り締めたまま正面の老人を睨んだ。功凧老も赤長棒の反対側端を握り締めたままだった。

赤長棒の端と端を掴んだふたりが、今度は向かい合わせて睨み合う。動かない。

「ほほう。今の投げを躲したか。やるのお、若いの」

功凧老の褒め言葉に強面を崩すことなく金本は、己の武器から手を

離せと言いたいのか、凄みを利かせて棒を引く。しかし功風も棒の端を両手で握り締めたまま離そうとしなかった。

禿頭の二人に力が入る。

金本のこめかみに血管が浮かび上がった。赤長棒を握る両腕も力みから膨れ上がっていた。

対して功風老は、涼しげな顔をして居る。

なのに振りほどけない。愛用の赤長棒を奪い返せない。

老体とは思えないほどのパワーだった。凄い握力である。

功風老の方が金本よりも体格が小さいが、赤長棒ごしに金本を一本背負いで投げたのだ。容易く振り解けないほどの腕力を備えていても不思議ではなかった。

そう悟る金本。

そう悟り武天老師を睨んだ。

老いたからといって技ばかりに頼っている訳ではない。老いたからこそパワーに拘っている様子である。

そのパワーが、死神の如く押し寄せる老いを、必死に跳ね返そうとしているのも悟れた。

どんな達人でも歳には勝てない。老いは免れない。死は避けられないことになっている。

人間である以上は、当然の理である。

大自然の意思とも取れる。

定めである。

だが、功風老のパワーは、筋肉は、肉体は、それを無理矢理にも逃れようとしている。

その思いが、端々を握り合う赤長棒を伝わって金本に感じられた。

ある意味で、とても潔いところが無い老人である。何処までも抗う積りなのだろう。

傲慢も達人級であった。

赤長棒の端々を握りながら睨み合う両者。両手で武器を握る金本の眼前で、左手で棒を握る功尻老が空いている右手を振り被った。

「床が駄目なら壁にでも叩きつけようかのお」

言うや否や功尻老は、上げた右掌を横から振るって赤長棒を叩いた。

刹那に伝わる衝撃。

老体の片腕一本で打ちこまれた掌打の重さとは思えない振動が金本の全身に到達する。衝撃に一瞬だが眩暈を起こす。

金本が奥歯を噛締めながら下半身で踏ん張るが棒より伝わった衝撃に若い体が横に弾き飛ばされる。

しかし、金本は赤長棒から両手を離さずに跳ね飛ばされる勢いを利用して鉄棒で逆上がりをするように赤長棒で回転した。そして、両脚から壁に着地する。

壁に立つ金本の体制は、腹が下で背が上を向いている。

まるで重力を無視した光景であった。

壁に着地した金本が、すぐさま視線を老人に向けて威嚇を視線に混ぜながら放った。

「ほほう、器用な」

功尻老が感心していると今度はビルの壁に斜めに立つ金本が、握り

締めている赤長棒に爪先で蹴りを入れた。壁に付いていた片足を跳ねさせ金本が赤長棒を蹴ると、蹴りの衝撃が棒を伝わり功凧老の体に流れ込む。その衝撃は老体を金本と同じように反対側の壁へと飛ばす。

「おつとつと」

余裕の声と共に功凧老は、着物を靡かせながら体を捻りあげると、金本と同じように壁に着地してみせる。棒は離していない。

だが、功凧老が壁へと着地するとほぼ同時に金本が次のアクションをアクロバティックに起こしていた。

軽やかに壁を蹴り、赤長棒に沿って側転を見せた。両脚をV字に広げて綺麗なホームから赤長棒の上に着地する金本。

側転で加速させた全体重を赤長棒に金本が乗せると、功凧老の両手に激しい重みが押し掛かる。

金本は武天老師が自分と同じように防御を取ることを予想していたのだろう。

赤長棒を握ったまま壁に着地した功凧老の体が、今度は金本の体重が押し掛かった赤長棒に引かれて地面に頭部から落ちて行く。

「なんのこれしき！」

功凧老の言葉に焦りが見えたが、表情は歓喜しているようにも見えた。この遣り取りを楽しんでいるのだろう。

頭から落ちて行く功凧老は、赤長棒を抱え込むように巻き込みながら前転して地面を転がった。

柔道の前回り受身である。

一方、功風老の前転で赤長棒が回転を起こし、金本は足元を滑らし転倒する。ゴロリと床を転がるが、金本は転がりながら赤長棒に手を伸ばしていた。ガツチリと赤長棒をキヤツチする。

地面を転がったふたりが瞬時に立ち上がる。その互いの手には赤長棒の両端が握り締められていた。

「御主も頑固じゃなあ。いい加減に棒をワシに遣せばいいのにお
ふざけた台詞を聞きながら金本は、目の前の老人を厳しく睨み付けた。」

この勝負、いつの間にか棒を取った方が勝ちのようになっていた。金本は当然に譲ることは無いだろうが、功風老も面白がって意地になっている様子であった。

功風老は左手だけで棒端を握っており、金本も同じ様に右手一本で棒端を握っている。

そのような状況下で不意に金本が、ズボンのポケットに左手を入れて何かを取り出した。どうやら車のエンジンを掛けるためのリモコンキーのようである。

それを功風老にも見えるように翳した。

「すまぬ……」

とても小さな声だった。

今まで一言も発していなかった金本が、消え去りそうな小声で呟くように囁いた。

そしてリモコンのボタンをひとつ押す。

「うおっ！」

金本がボタンを押すと、功尻老が握っていた棒の端側から炎が噴出す。功尻老は、驚きながらも素早く手を離して難を逃れた。危うかったが火傷はしていない。

こうして金本は愛用の赤長棒を独り占めするのに成功した。そして更にリモコンのボタンをもうひとつ押して、棒の反対側にも火を灯す。

赤長棒の両端からはメラメラと火の玉サイズの炎が燃え上がっていた。

金本は両端の炎を確認すると、リモコンをポケットに戻す。

「ほほう。これまた洒落た仕掛けを施してあるようじゃのお。

最近の若いもんは遊び心が豊富で面白い」

功尻老が赤長棒に灯された双子の炎を眺めながら楽しげに述べていると、金本は棒術に合わせて炎を舞わせた。

その様子は熱いほどに情熱的で、可憐なまでに神秘的なファイアーダンスだった。

赤長棒が凶器としての脅威を更に増していく。

炎の様子からしてガスではなく油の類だろうと窺えた。炎の揺らめきに味がある。

突然ながら金本が、赤長棒の先を地面に向けた。

炎を纏った棒先で地面をなぞりながら後退して行く金本。その足元に炎の文字が芸術的に書かれて行く。

「か・えん・そ……う……」

一字ずつ炎の文字を読み上げる功凧老は、興味深そうに顎を撫でていた。

全身を大胆に揺すりながらアスファルトに書く金本の火文字は、巨大な筆を振るって書く習字のようだった。力強く炎を操る。そして間も無く完成する炎の文面。改めて功凧老が、一気に読み上げた。

「火炎双魂棒術」

その名が炎を灯した赤長棒から繰り出される棒術の名前らしい。

「洒落たことを」

功凧老が蔑つい笑みで言うと、地面に引かれた炎の文字が上段から書き順に沿って消えて行く。アスファルトには薄っすらと黒い焦げ目が残っていたが、その上を歩んで金本が双火を纏った赤長棒を脇に挟みながら前に出た。

両端には炎が燃えており、双眸にも炎が燃えていた。どちらも熱い炎だ。

炎を使った金本のパフォーマンスが終了となり、二人の戦いが再開される。

今度の赤長棒は、見たままの脅威を纏っている。功凧老とて先程の様には容易く掴み取れないだろう。それどころか紙一重の回避すら危険である。当たらなくても掠る距離では炎が肌を焼きかねない。衣類に引火でもしたら火達磨に成りかねない。

「どれ、ここからが本番か」

言うは功風老。

表情が今日一番の険しさを見せ、真剣に引き締まっていた。

両手も着物の袖口から出ている。姿勢も緩い構えを作っていた。

その様子から余裕を捨て去っていることが金本にも悟れた。故に金本も今まで以上に気を引き締めて挑む積りであった。

ここからが真の勝負。

狭い路地のスペースが、ふたつの鬼火に灯されてオレンジ色に映し出される。

戦いの色が変わった。

赤股と芝克との勝敗が決着すると昂輝は、二人の猛者が消えた細い路地の入り口へと足を向寄せた。

ヴァルハラ関係者の戦いは良き参考になる。何ひとつとしても見逃したくないのが昂輝の本意あった。その思いが行動を早める。

路地の入り口は、既に数人の野次馬たちで混雑しあい奥を覗き見るのが難しく、人の壁が出来ていた。

あたりを見回す昂輝は、何か良い方法はないかと考える。そして、登れそうな雑貨ビルの壁が目に入った。

昂輝は仕方なく雑貨ビルの壁によじ登ることにした。丁度良く手や足をかける窪みがあり、それらを上手く使って二メートル程の高さを維持しながら野次馬たちの頭上を越えて狭い路地内を窺う。

赤い何かが舞っていた。

「炎……。火の玉？」

少々高い位置から無理矢理覗き込む昂輝の視界に入ってきたものは、薄暗い路地の中をかなりの速度で飛び交うふたつの火の玉であった。その炎は、お互いの距離を変えずに並走するが如く間を保って激しく動いている。

その火の玉の灯りに照らされてふたりの男が世話しなく動き回っていた。

目を細めながら暗がりを見く昂輝が、金本の赤長棒の両端が燃えて

いることに気付くまで数秒掛かった。

双子火の正体に気付いた昴輝が、呆れた表情を見せる。

また可笑しな強者が出てきたと感心すべきか困っている顔なのである。

やはりヴァルハラ探偵の周辺には、強者は強者でも風変わりな強者たちが集まってくるようだ。

そのような星のめぐり合わせばかりに思える。

昴輝が思いにふけるなか、金本の双炎を纏った赤長棒が武天老師を攻め立てていた。

ふたつの炎は、時には直線的に、時には円を描きながら回転したり、時には大きく弧を描きながら狭い空間を飛び交い、互に代わる代わる功尻老を攻め立て追い込む。

フェイントが効いており、とても多彩で変幻自在の動きに見えた。

だが、燃え盛る赤長棒に対し功尻老は、大胆で素早い動きを体術に表し確実に躲していく。

炎が右から攻め込むと見せかけて左から。左が来るかと思えば左から。真っ直ぐな突きに見せかけて下や上から二つ目の炎が飛んで来る。ひとつの炎を回避しても二つ目が直後に飛んで来る。躲した筈の炎が軌道を改め戻ってくる。

目が回りそうな程の連続攻撃を功尻老は躲しているが、見ている昴輝にはとても回避できそうに思えない。

金本の棒術も凄いが、それを見事に見切る功尻老の回避力も凄いと感心した。

しかしながら戦いの内容は、功風老が圧倒的に攻め込まれ不利に窺える。やはり赤長棒のリーチと二つの炎が厄介のようだ。そのぐらいは格闘術を知らない昂輝にも解った。

素手対武器。この差は大きい。

ちなみに金本が愛用している赤長棒は、インターネットで芝克のメリケンサックと一緒に購入した物であった。一緒に取り寄せることで郵送費を節約したのである。

この炎を吹く長棒は、超能力を倍増させる効果を秘めたメリケンサック同様に、三外軒太郎が作ったもので、それを眼一郎が小遣い稼ぎにこつそりとネットオークションに流したアイテムのひとつであった。

リモコンキーで炎が吹き出す仕組みについては金本も理解していない。だが、素晴らしいウエポンスタッフであることは理解していた。自分に似合った優れたものと、購入直後は感激までしていたぐらいである。

その相性がピッタリの赤長棒を巧みに操りながら攻め立てる金本。不思議な炎ふたつがヴァルハラのエージェントに襲い掛かる。

素人目にも功風老が不利に窺える状況で、金本が強い踏み込みから炎の突きを老人の腹部を狙って撃ち込んだ。功風老は、軽いバックジャンプで火炎突きの間合いから回避する。その低空ジャンプは空間を滑るように見えた。

刹那。

着地寸前の功風老が両脚を、右左と素早く小刻みに蹴り動かす。

ると履いていた両脚の下駄が足元から金本を狙って無音で鋭く飛んで行った。

飛ぶふたつの下駄は、正確に金本の顔面を狙っていた。

金本は眼前で赤長棒をバントトワラーのように回転させて盾を築くと二連で飛び来る下駄を撃墜してみせる。カコンカコンと、木と木が弾かれ合う音を奏でた。

しかし、撃墜されたふたつの下駄が地面に落ちるよりも早く、続いて功尻老自らが素足で跳ねて飛んできた。小さな老体が肉の弾の如く重みを感じさせる。

たった一步のジャンプで盾のように赤長棒を回転させている金本の前に強い震脚で着地した功尻老は、全身の筋肉に空気を吸い込みながら右拳を振るう。

金本には迫り来る武天老師が大きく膨らんだように見えたのだ。瞳を剥いて驚く。

ここに来て武天老師初の拳撃である。

握り拳がまるで石のようだった。丸々とした石である。

その石と見間違えるほどの拳骨が、回転させている金本の赤長棒のど真ん中を目掛けて真っ直ぐに圧力を込めて飛んで行く。

金本が回転させていた赤長棒を瞬時に止めて防御に身を固める。赤長棒を横一文字に構えて両手でしっかりと握り締め、腰を落としたから後方に退脚を踏ん張った。

功尻老の真っ直ぐな拳突きが、赤長棒を強打した。

ガンツと、石と木が激突し合うような音が鳴り響く。不思議な音だ

った。人の拳が奏でるような音とは思えない無骨な響きであった。だが、その打拳を赤長棒で受け止めた金本の全身に人間の一撃とは思えない衝撃が押し寄せる。まるでインド象の突進であった。

人外並みの衝撃に、金本の踏ん張りも虚しく体躯が弾かれる。赤長棒を横に構えたまま金本が後方に飛ばされた。退脚一本では堪えきれなかったのだ。

功風老の打拳を受けた赤長棒がグニヤリと撓って両端の炎も衝撃の勢いで消えてしまっていた。

狭い路地を覗き見ていた野次馬たちが、強打に沸いた。壁に上り観戦していた昂輝も凄いと口走る。

斜め上へと直線のラインで飛んで行く金本の体が、狭い路地を飛び出して、壁によじ登っていた昂輝の目線よりも多少上を過ぎて行った。昂輝が驚き目を丸くさせて、金本を見送る。

炎の灯りが消えた赤長棒の両端から煤ける黒い煙がふたつのブラックラインを空中に残して行く。そして黒革を纏った金本が野次馬たちの頭上を越えて、ヴァルハラビルの前に落ちて行った。

雑貨ビルの壁にしがみ付きながら昂輝が振り向くと、飛ばされた金本が落ちる直前に、空中で赤長棒を地面に突き立てクルリと舞ってから着地してみせた。可憐で見事である。

金本が赤長棒を片手に、杖をつく老人のような姿勢から禿頭をゆっくりと上げる。中腰から姿勢を正す。

金本の表情は凜とした眼差しで薄暗い路地を睨み付けていた。玉の

ような汗が頬を伝わって落ちて行く。若干だが息が荒くなっていた。両肩が揺れている。

しかし、瞳の奥の炎は消えていなかった。赤長棒の炎は消えたが闘志が消えることはない様子だ。

金本の闘志に陰りは僅かにも察しられない。

しばらくすると狭い路地を塞いでいた野次馬たちが左右に割れて、奥の暗がりから功凧老がゆっくりとした足取りでユラユラと出てきた。

飛ばした下駄をきちんと履いている。少し間があったのは下駄を拾って履いていたからだろう。

金本が再び黒革のズボンからリモコンキーを取り出すとボタンを押した。赤長棒の両端に炎が蘇る。

暗がりから出てきた功風老を睨み付ける金本の斜め後方には、パンチパーマに大きなサングラスを掛けた赤股夏鱗が、猫背に蟹股で立っていた。表情は奇人を演出するために狂気な笑みを見せていた。演技なのだ。なんとも大変な人である。

その足元に、先程敗れ去った芝克己がうつ伏せで倒れていた。赤股にコテンパにやられて意識はない。

しかし金本は、倒れている仲間に一度も視線を向けていない。仲間の勝敗に興味がない様子だ。

今、気に止めなくてはならない注目点では、眼前に居る脅威の達人。

武天老師。

ヴァルハラエージェント。

功風時司。

この老いた巨人を倒すことが、最優先の課題。目標である。

金本は双子火の灯された赤長棒片手にぶら下げて炎を揺らめかしていた。

外野からは「あの棍棒、きつと三節棍になって伸びるんだぜ」などと声が聞こえてくる。

昂輝もそう思った。きつと伸びるはず。

カランと下駄の音が鳴る。

「ワシに当て身を使わせるとは、たいした若造よのお。複数ならまだしも、たった一人にワシが当て身を放つことは珍しいのだぞ。自慢してもかまわんぐらいにのぉ」

そう言いながら功尻老の敵つい皺のある顔が若干緩む。金本の力量に歓喜している様子だ。

此処最近戦った有象無象とは訳が違う。骨がある。

極道コンビが今日この場に帰ってくる前の北海道での仕事は、正直ガツカリする内容だった。

いつもどおり赤股とコンビを組んで北海道まで乗り込んだ仕事内容はこうである。

なんとも健気な黒髪の乙女が依頼主だった。

彼女は北海道の大学に通う桃色で薔薇色のキャンバスライフを満喫していた二十一歳の青春まっさかりな三回生である。彼女が数日前から失踪している彼氏を探してくれと、わざわざ遠く離れた町のヴァルハラ探偵事務所に電話で依頼してきたのだ。

なぜに？ と、多くの人が疑問に抱くところだが、その辺の細

かな矛盾には海よりも広く悪魔よりもおらかな心で無視してもらいたい。

そして功尻老と赤股の二人が北海道まで出向いてみると、依頼内容には香ばしい匂いが漂っていた。

健気な黒髪の乙女が依頼主の依頼内容は、失踪した彼氏を捜索してほしいと探偵に依頼すべきまともな内容だったが、問題は失踪した彼氏とやらが普通でなかった。

なんとロシアマフィアの幹部の息子で、マフィア同士のいざこざに巻き込まれたて人質に取られている最中だと発覚したのであった。

その真実が解るがいやな功尻老と赤股の極道コンビは、正義感と破壊的欲求をメラメラと燃やしながら北海道にあるロシアマフィアの事務所に殴りこんだのである。

あとは二人の妖怪じみた武道の達人が、鉛の弾丸飛び交う異国人の縄張りで暴れまわって終わりである。

体格の良いロシア人マフィアも多かったが、殆どは赤股がぶちのめし、功尻老には獲物が殆ど回ってこなかったのである。しかもやっ和对戦した輩も口ほどにも無くあっさりと倒してしまい、不満と欲求が北海道の真冬に降り注ぐ雪の如く積ってしまい、それらを担いだままヴァルハラ事務所があるこの町に帰ってきたのである。

そして、返ってみれば事務所の前でこの騒ぎだ。しかも敵対心を燃やして突っかかってくる数人の極道の中には、マスタークラスの輩も混ざっているではないか。功尻老にしてみれば、北海道でのストレスを晴らすのに絶好の機会と言えた。

双子火を灯した棒術使いの金本は、功尻老の乾きを潤すにベストな存在であった。日が暮れた街中ですら堂々と赤長棒を片手に闊歩しているのだ。棒術の達人としての誇りもしっかりしている。

徐々に噛み応えある若造であった。歓喜に表情が緩んだとしてもしかたがない。

そして下駄を擦りながら前に歩み始めた武天老師。

顔の力が若干緩んで見えたが、両拳が強く握り締められていた。両拳が丸い漬物石の如くゴロリとしている。生き物の一部には思えな

い。

功風老の歩みに攻撃的な意思を感じ取った金本は赤長棒を構えると燃え盛る棒先の片方を地面に向けた。

そして荒々しくも大胆な動きを全身で振るいながら炎でアスファルトをなぞり後退して行く。

また、何やら炎で文字書き始めたようだ。書き殴られた炎の文字は全部で八文字。功風老が一気に読み上げた。野次馬たちの何人かも声を出して呼んでいた。

「火炎大車輪連続弾」

金本の前方の足元に書かれたのは、技の名前。炎の文字が燃え盛る前で金本が赤長棒を水車か風車を真似て激しく廻し始めた。

縦回転に廻る赤長棒は、下から上に、前から後ろに廻っている。正面に立つ功風老からは、炎が下から昇って行くように窺えた。

アスファルトに書かれた炎の文字同様に回りながら大車輪を描く炎が、路地の薄闇にくつきりと冴える。

これだけ見ていれば、とても綺麗なイルミネーションと代わらない美しさだった。

功風老の攻防で観戦している野次馬たちが、アスファルトに書かれた炎の文字と、金本が窺わせる赤長棒の動きから、火炎で作られた車輪弾を撃ち放つのではと連想して蜘蛛の子を散らすように功風老の後ろから逃げて行く。

火炎大車輪の直径は二メートル近くあるだろう。巻添えを食って、あのような非常識な代物を我が身に受けたくないのだ。

壁によじ登ったままだった昂輝も野次馬たちに混ざって避難した。

更に先を予想した野次馬たちがいた。それは金本の後方で観戦していた人々たちである。

彼らも戦うふたりの直線状から逃げて行く。

恐らくは放った炎の車輪が功尻老に回避されると、バックスピンの掛かって戻ってくるのではと予想したからだ。ゴルフのグリーン上で多く見られるあれである。

それを燃えながら回り続ける赤長棒の回転方向が知らしめていた。

そう皆が予想して安全な方向へと退避する中、金本が赤長棒を回転させたまま前へと歩み始めた。自分で書き記した炎の技名の上を歩もうとしている。

すると燃えながら回転する赤長棒の両端が、地面に炎で書かれた火炎大車輪連続弾の文字を削り取りながら弾き飛ばす。

先ずは一文字、炎の「弾」の字が形そのままに弾丸と成り飛んで行く。

なんとも不思議な光景であり、あり得ないほどに鮮やかな弾丸であった。

「なんと愉快！」

歓呼を上げながら功尻老は、蜥蜴のように身を屈めて飛び来る「弾」の字をくぐって躲す。

功尻老の背の上を炎の弾丸である「弾」の字が勢い良く滑空して行き、先程まで両者が戦っていた狭い路地の中で静かに形を崩して消

えて行く。最後は儚く見えて美しくも映った。

功凧老の後方から避難していた数人の野次馬たちは、狭い路地内で消え散った炎の文字を見てほっと胸を撫で下ろした。火炎の車輪は飛んで来なかつたが炎の文字は飛んできた。予想とは若干の違いがあつたが非難していて正解であると。

続いて金本の赤長棒が炎の文字を救い飛ばす。炎の「続」の文字が同じ様に飛んで行く。

功凧老が今度は高く上へと飛んで炎の文字弾を躲した。ゆうに二メートルほど功凧老は跳躍しているだろう。老人の跳躍力とは思えない。

その超人的老人の足元を「続」の字が過ぎて行った。前の火文字と同じ様に、奥の狭い路地で消えて散る。だが、空中に飛んだ功凧老を狙って金本は、炎の文字の「連」の字と「輪」の字を掬い上げ連続で撃ち放つ。

次々と飛び迫る火文字の炎弾。空中に飛んでしまった功凧老は回避が出来ない。

人間は空を飛べない生き物だ。鳥や昆虫のように翼をもたない。

故に頭を使い知恵を絞って飛行機を作り出した。そうすることで始めて大空を飛ぶことが叶つたのだ。

功凧老とて人間である。

妖怪じみた強さを身に付けても、達人と歌われようとも人間なのだ。それは普通人と代わらない。

だから方空中では向転換も回避行動も取れない。

空中では、重力に引かれて落ちるしかないのが人間の定めだ。ニコトンが見つけた重力の法則である。この理は、なかなか逆らえない。武天老師と呼ばれる功凧老とて例外ではない。

即ち　。飛び来る炎の文字は、「連」だろうと「輪」だろうと躲せない。空中では回避できない。ガードしかできないだろう。

だが、功凧老は、履いた下駄二足を連続で蹴り飛ばし飛び来る炎の文字ふたつを撃墜させて打ち消す。

下駄と火炎が激突して激しく火花を散らした。太鼓を叩いたような深い音が振動と鳴り二度広がった。

躲せない、避けられないのならば打ち落とす。攻めに転じたのである。的確な判断であった。

下駄との正面衝突により空中で儂く消えた炎の二文字。ぶつかり合った二足の下駄が音を鳴らしてアスファルトに落ちると同時に功凧老が素足で着地した。下駄はカランと木音を立てたが素足で着地した功凧老には音がなかった。

口元を釣り上げて微笑む功凧老が、着地に合わせて俊敏で迅速に前方へと走り出す。

ボクシングのインファイターが相手の懐へと飛び込む様に構えられた両拳が、皺が目立つ老面の下半分を隠しながら握られ二つ並んでいた。

まさにビーカブースタイルそのものだ。

接近を許せば石のような拳から、恐ろしいほどの強打が飛んで来るだろう。

金本も功凧老のパンチ力は、つい先程体験している。赤長棒でガ-

ドしたが数メートルも飛ばされたのだ。直撃だけは許されない。一発でも顔面に喰らったら鼻は潰れて顎は砕け散るだろうと想像できた。

あの老いた矮躯には、それほどの脅威が備わっている。

それは避けたいと金本は、接近戦を望んで突っ込んでくる功風老を目掛けて炎の文字弾を飛ばす為に赤長棒を回転させながら前に歩む。そして一歩ごとに次々と炎の文字を飛ばしていった。

迫り来る功風老を狙って「車」「大」「炎」「火」の順番で火炎の文字弾が路面から飛んで行く。

両拳を眼前にガードを築く功凧老を目掛けて次々と飛び来る炎の文字弾。轟々と四文字が飛び迫るが功凧老は真っ直ぐに突き進む。このままでは正面衝突の後に玉突き衝突だ。

「えい！」

渋い声が力強く唸ると、右から左へ上半身を揺すってから右の鍵拳が振るわれる。重い一撃が「車」の字を粉碎した。火の粉が矮躯を包むが、飛び散る花火の中から功凧老が飛び出てきた。

続いて「大」の字を下突きで破壊して、更に続く「炎」の字を手刀で切り裂く。真っ二つになった炎の文字の間を功凧老が、迫力を増した表情で突き進む。

古風な着物のあちらこちらが焦げ付き煙の尾を何本も靡かせていた。

「おおおりややや！」

そして最後の一字「火」の字の火炎弾を功凧老が両手で挟み込むように掴み取る。そのまま掴んだ「火」の字を盾代わりに金本目掛けて走って行った。炎の文字を金本に押し返す積りだ。

だが金本は、赤長棒を回転させて体を捻りながら振るわすと、先程まで廻し描いていた火炎の円輪を投げ撃つ。

「火」の文字を抱える功凧老と火炎の大車輪とがぶつかり合った。

業火を孕んだ熱風が膨張しながら周囲に広がり一瞬で「火」の文字は砕け散る。

金本の投げた火炎車輪弾は、まだ激しく回転していた。

火炎の大車輪が「火」の文字弾との破壊力の違いを見せつける。

しかし、激しく回転する火炎大車輪を功凧老が両手で鷲掴みにした。真似でウナギを縦に掴み取るようにだ。

だが、それでも火炎の大車輪は止まらない。速度を緩めず回転を続ける。

「そおおおおれ！」

回転から音を唸らす火炎の轟音よりも大きな声で功凧老が、全身を翻しながら火炎の大車輪を背中に背負った。炎の輪を背負い投げで投げる積りらしい。

見ている者たちが非常識な行動に驚く中で功凧老が、背負った火炎の大車輪を後方の地面に叩きつけた。炎の輪に対して見事なまでの投げ技だった。

背負い投げである。

炎の車輪が砕け散り、破片が周囲に跳ねた。まるで大輪の花が咲き誇ったようだった。豪快に見えたが儂くも美しい。

消え行く炎の中央に、功凧老が力強く立っていた。

だが、功凧老の着物は大きく焼け落ち、背中が見えるほどになっている。

全身から焦げ臭い煙を狼煙の如く何本も上げながら振り返る功凧

老。半開きの口からも薄っすらと煙が出ていた。

随分とボロボロに見えるが、火傷を負っている様子が見られない。火の粉を浴びた禿頭にも、焦げて大きな穴を開けた背中にも、炎の文字や火炎の大車輪を素手で掴んだ掌にも、火傷の痕跡は僅かにも見当たらなかった。

大阪商人の面の皮のように厚い皮膚である。人とは思えないほどに耐火性が備わっていた。

鍛え方では、あそこまで凄くなれるものかと功尻老を見ながら昂輝は思った。尊敬に値する。

振り返った功尻老に金本が飛び掛る。

金本は両端に炎を燃やした赤長棒を横に構えたまま体躯を捻らせる。と、背を向けた状態から逆手の棒突きを繰り出す。逆手の突きが功尻老の顔面を狙うが、背を反らして炎は躲された。

速い連続攻撃。直ぐに金本の二手目が続く。

正面を向き直すと同時に赤長棒の横振りの一打。しかしながら横から攻め行つた赤長棒も屈まれ容易く避けられる。功尻老の頭上を空振る炎の赤長棒。

だが、金本の攻撃は止まらない。

屈んだ功尻老に、間を与える事無くローキックを叩き込む。

ガンッ。

と、籠もつた音が鳴った。

屈んでいた功風老が、襲い掛かったローキックに肘鉄を立てて防御したのだ。肘の角が楔のように金本の脛に減り込んでいる。

金本が顔を顰めながらよろめき後退しようとした。しかし屈んで肘を立てていた功風老が跳ねると、ざらざらと乾燥した掌が金本の眼前に近づいてくる。

捕まれる！

金本が心中で叫ぶと、功風老の片手は顔の横を過ぎて行った。風が鼓膜を揺する。

刹那に金本は奥襟を捕まれると思った。

奥襟とは柔道などという首の後ろにある襟部分のことである。

だが、功風が掴みに行ったのは奥襟でなかった。もう少し手前のものである。金本の片耳である。

握りこむように左耳を驚掴みにされる。

金本は不意な激痛に顔面を歪めながらも赤長棒で功風老の片足を払おうとした。しかし、金本の赤長よりも早く功風老の足が黒革のブーツを払った。

相撲の蹴手繰り（けてぐり）によく似ていた。

内から外に左足が払われると同時に掴まれた右耳が真下へと引き落とされる。金本の体が腰から捻られ斜めになって倒れて行く。そして左肩から地面へと強烈に激突した。受身は欠片も取れていない。

傍から見ても痛々しい転び方であった。

金本が倒れると、今度は左耳を上から掴み取る功風老。そのまま釣り上げるように右耳を引っ張った。

すると金本の体が起き上がりこぶしの如く軽々と起き上がる。

自分の力で起き上がったというよりも、功風老の不思議な柔術で不自然にもスムーズに起こされたイメージが強い。

「ほれほれ、どうした」

言うが功風。

起き上がった金本の右足の外側に、己の右足を揃えるように並べた。それで金本の右の足首と膝が見事に固定されてしまう。

功風老は左手で金本の右耳を摘んでいる。そして右腕の肘が、金本の鎖骨上辺り、横腹に添えられた。

また、耳を引っ張つての投げ技である。

金本の体が功風老の肘を軸にシーソーを起こす。不思議と抵抗ができない。

そして空中で回転した金本の体が、禿頭のとっぺんからアスファルトに落とされた。まっさかさまといえた。ゴンン、と音が鳴る。

頭を激突させた金本と投げ落とした功風老が、トランプのキングやクイーンの絵柄の様に逆さまで向かい合っていた。

この一撃を喰つてもまだ、金本の意識は途切れていない様子である。その証拠に握った赤長棒を放していない。赤長棒が支えとなって逆さまになっても立っているのだ。

逆さまの常態から金本が蹴りを繰り出す。だが廻し受けで容易く弾かれる。
無理な体勢からの蹴りを捌かれて金本がバランスを崩す。

金本の体躯が倒れそうになると、功凧老が両腕を伸ばして支えとなる。そのまま金本の片足を膝から折り曲げ足首を決めた。もしもグランド常態ならば逆アキレス腱固めと呼ばれるサブミッションである。それをスタンディングで決めてきたのだ。だが、その関節技でギブアップを取ろうとしている様子には見えない。

「もう一丁、飛んでみようか。なあ、若いの」

功凧老が体をずらして横に回ると、足首を決めた状態から金本の膝裏に肩を差し込んだ。そして腹筋に力を込めながら勢い良く背を丸めた。

片足を掴んだバージョンの一本背負いだ。

投げ技に背を丸めた功凧の上を金本の体が起き上がるように跳ね起きながら動いてく。このまま投げ技が決まれば、金本は顔面から地面に叩き付けられることになるだろう。

それはゴメンだと金本が、赤長棒を路面に突き立て受身に代えようとした。

「あまいのお」

背を丸めて顔は見えないが、禿頭の陰から声が聴こえた。

その声とほぼ同時に、投げ技に体を丸めていた功凧老が金本をほおり投げるように手を放した後、受身を取ろうとした赤長棒の先に足から滑り込む。

路面を滑る功凧老の左脚が下で、右脚が上を向いていた。体軀が斜めになったスライディングだった。

そして功凧老の両脚が赤長棒に絡みつく。

下の右足の甲がフツクの如く赤長棒に引っ掛けられ、右足の裏が赤長棒に食いつく様に押し付けられた。

またもや梃子の原理で力が働く。

投げ技に飛んでいた金本の体が、受身を取ろうとした赤長棒に生まれた新たな力の流れに加速して行く。転倒を避けるために付こうとした腕を払われたのと一緒に倒れる。

赤長棒を抱えたまま金本が、再び禿頭のとっぺんからアスファルトに叩きつけられた。そして倒れこむ。

「ほほう、なんともしつこい」

言いながら功凧老が起き上がると僅かに遅れて、三度投げ倒された金本がヨロヨロと立ち上がる。

いつの間にか灯火の消えた相棒を杖代わりに使っていた。まさに金本を誠実に支える女房のような赤長棒である。

金本は禿頭から流した大量の血液で強面を赤く染めていた。しかし眼光は豪傑の輝きを放ち続けていた。

体力気力ともに限界が近いと察するに容易かったが、戦う闘志だけは無限大に感じ取れる。

この無言の男は、死ぬまで闘争を諦めないのだろう。意地でも敗北を受け入れないタイプだと窺えた。

それを察した功凧老が、呆れ顔に顎をしゃくらせながら鼻で溜息を

吹く。

そして丸い顎を撫でながら述べた。

「うむ。決して諦めない貴君の男気に対して褒美を与えようじゃあねえか」

言う功凧老は、まるで幼稚園の運動会で、駆けっこのスタートラインに立ち、走り出すぞと構えを取る幼児のようなレベルの低いポーズを取って見せた。

武天老師と呼ばれる達人が見せるには、あまりにも素人臭い構えである。

「この投げ技は、滅多に見せない大技でのお。使うのも久々のことだ」

「あの構え。老師、まさかそのような技を披露する積りですか！？」

赤股が驚きながらも丁寧な口調でそう言った。

驚きのあまり、いつもの柄悪い演技を忘れている様子だ。自である真面目な口調がつついっつい出ってしまったらしい。

武天老師の一番弟子である赤股が素で驚く投げ技とは、どのようなものなのかと皆が期待して凝視する。

「あの投げ技は、酷いんだよな。俺もあれを喰らって始めて喧嘩に負けたんだもんな……」

どうやら赤股もこの技で功凧老に負けたようだ。

その言葉に更なる期待を抱く昂輝。他の野次馬たちも一緒であった。

金本が杖にしていた赤長棒を踊るように振り回すと、最後に脇の下へと挟み構えを作る。最後の力を振り絞って功風老を迎え撃つつもりらしい。

「行くぞ、若いの」

功風老の言葉に金本は答えない。

「よおーい、どんツ！」

功風老がスタートを切った。幼稚な掛け声だったが走り出した功風老のスピードは弾丸なみの速さである。疾風の如く金本に向って突き進む。

風が轟き、空気が流れを生み出す。

金本が俊足で迫り来る武天老師にカウンターの赤長棒を合わせるが、難なく躲された。しかし躲した功風老は、そのまま金本の横を烈風に姿を変えて通り過ぎて行く。強風そのものと化していた。

通り過ぎる刹那。ダンツ、と音が轟いたが二人の様子は何事も無いように窺えた。

赤長棒を空振りさせた常態で動かない金本。

赤長棒を躲して金本の横を走り抜けた功風老。

五メートルほど距離を置いて背を向け合うふたりは僅かにも動かない。固まったように真っ直ぐ前を向いている。

「お、おい、あれ……」

野次馬の誰かが言った。

「あの若い方のうしろ……」

野次馬の言葉に昂輝も何かと金本の背中を窺うが、これといって異常は見当たらない。

「床、地面だよ……」

視線を金本の後方にある地面へと変える昂輝。そこには多様な異常が出来ていた。

昂輝もギョツ、とした。

金本の後方の地面には、人型の窪みがはっきりと出来ていた。大の字である。右手と思われる部分には赤長棒と思われる真っ直ぐな窪みもあった。

金本が叩きつけられた跡である。

叩きつけられた後、投げ技の反動で、叩きつけられる前の構えへと瞬時に戻ったのだらう。そして路面に投げ技を受けた痕跡だけがのこっているのだ。刹那に聴こえた轟きは、目にも止まらない投げ技を喰らった音だったのだらう。

いったいどのような投げ技を武天老師が繰り出したのか昂輝や野次馬たちには見えもしなかった。

「勝負有りだな」

赤股が言うと、白目を向いた金本の構えが力無く崩れて倒れこむ。意識を失い倒れこんだが、最後の最後まで赤長棒は握ったままだった。

た。

功風時司 vs 金本哲司

武天老師の必殺の投げ技で、勝負が決しられた。

勝者。功風老。

また一人、ヤクザが倒れた。

野次馬たちが見ている安全地域よりも一步前で観戦していた高岡が、また一人の仲間が倒れて行く姿を見て眉毛を釣り上げた。口元をヒク付かせながら舌打ちを鳴らす。鷹のような鋭い視線に憤怒と不満が映る。

ヴァルハラ探偵事務所襲撃にあたって高岡が集めた九人の内、八人までが見事に返り討ちあっている。

実力のレベルは様々だったが、狂犬に近いまでの猛者どもがこの様である。誰一人としてヴァルハラ首を取るどころか刺し違えることすら叶わなかった。

極道の面子も糞もない。

計算高い高岡としては、誤算にも程がある。ここまで戦力差が現れるとは予想にもしていなかった。

最初に睨けた鴉尾、神田、半田、番場の四名には、最初から期待をしていなかった。

真田兄弟には運が良ければ程度の期待を抱き、芝克や金本には大きなまでの期待を寄せていたのだが。

まさかここまでヴァルハラ極道コンビが強者だとは思ひもしなかった。誤算を通り越して愚算であった。

高岡が相手の戦力を誤った結果である。これは自分のミスである。自分の未熟さに腹が立つ。

残るはヴァルハラビルの屋上に落ちた三外軒太郎を追いかけてビル内に入っていた坂東修也ひとりだけである。

芝克や金本が激しい戦いを繰り広げている最中も時折だがビルの屋上から殺伐とした発砲音や衝撃的な轟音が聴こえていた。あのふたりが戦っている戦争音なのだろう。

しかし、今は騒がしい音は届いてこない。既に勝負は決しられているやも知れない。それだけ時間は経っている。

煙草を銜えた高岡が、黒髪のオールバックを片手で撫でながら上を見上げた。

高岡は思う。

おそらく坂東は軒太郎を討ち取ることは出来ないだろう。

そう予想していた。

そのように予想する理由は、決して坂東が軒太郎より弱いからではない。どちらが強いとか弱いとかではないのだ。

このふたりの勝負は、いつも決着が着かないのだ。そういう運命なのだ。

否。

軒太郎が仕組んだといえよう運命なのだ。

高岡の視線が、地上から見える屋上の更なる向こうを見ていた。虚空を眺めるように、遙か遠くの夜空を見ている。

何かを思い出している様子だ。銜えた煙草が、風に吹かれて燃え縮む。

鷹のような眼差しから憤怒が和らいでいた。

功凧老と金本の戦いが決着を遂げて、野次馬たちと一緒にヴァルハラメンバーも一息ついていた。その時間は一分となかったである

う。突然上空から鉄が軋む音とコンクリートが砕ける破壊音が鳴り響く。

突如のことで、多くの者たちが驚き身を丸めた。それから音の正体を確かめようと上を窺う。

昂輝も周りの者たちとほぼ同時に上を見た。

上を見ると人影が宙に見えた。

壊れたビルの手摺りとコンクリート片が、人影と一緒に振ってくる。上を見上げていた野次馬たち数人が、自分たちの頭上に落ちてこようとしている落下物から必死に逃げて行った。間もなくして野次馬たちが退避した何もない空間に、手摺りやコンクリートと一緒に人が落ちてワンバウンドした。そして仰向けに倒れたまま動かない。

落ちてきたのは三外軒太郎である。

着地に成功したとか、受身が取れているといった次元ではない。本当に落下してアスファルトに激突したのである。

飛び降り自殺した人間のようなだった。地面に激突する刹那、女性が短い悲鳴を上げたくらいである。

三階建てのビルの屋上から落ちたのだ。普通ならば即死であろう。

だが、落ちてきたのは三外軒太郎。妖怪変化に限りなく近い人間である。周りの人々がざわめくなか軒太郎は、ヨロヨロと両手を付いて起き上がるようにしていた。生きている。

ビルの三階四階程度の高さから落ちたくらいでは死なない様子だ。しかも動ける様子だ。さすが変人である。

しかし、よろめきながら両手を付く軒太郎の身なりは随分とボロボロだった。

着ているグレーのスーツは、あちらこちらが破けて誇りまみれである。掛けている黒縁の眼鏡はフレームが曲がりレンズにも曇が走っていた。いつも几帳面に分けられている黒髪 of 七三も、誇りまみれで乱れまくっている。まさにボロ雑巾そのものである。

「やあ、皆さん……」

片膝立ちになった軒太郎が、昂輝や極道コンビ、それに大勢の野次馬たちの視線に気付くと片手を上げて、いつもの営業スマイルを作りながら挨拶を返す。

皆の注目を浴びていることに気付いて思わず出た言葉であった。

直後である。

「おおおおおおおおおらららあああああ！」

上空から咆哮と共に坂東が降ってきた。

エルボードロップのポーズをとって体制が斜めである。

なんとも殺る気と死ぬ気が混沌としたデットリーダイブであった。

豪快さにも限度を考えるべきだと瞬時に昂輝が思った。

坂東の声に軒太郎が反応を見せる前に、坂東のエルボードロップが綺麗に命中した。

重い音が周囲に響き、アスファルトが波打つ。振動が皆の足裏に感じられた。

坂東の肘が軒太郎の延髄に減り込み、加速された体重と重力の勢いそのままに軒太郎の頭部をエルボーで押しつぶしながら地面に叩きつけていた。エルボーと地面に挟み込まれた軒太郎の顔面が、アルファルトに減り込んでいる。

誰の目にも、容赦のない強烈な一撃に見て取れた。

寝そべっていた坂東が起き上がるが、エルボードロップを喰らった軒太郎は、土下座をしながら洗面器に顔を沈めているように顔をアスファルト内に減り込ませている。ピクリとも動かない。死んだかと思う。

否。普通なら死んでいる。

プロレスのリングで、トップロープ最上段からダイブしたエルボードロップでも並の人間が喰らえば絶命しかねない技だが、坂東が敢行したエルボードロップは三階建てのビルの屋上からのダイブだ。普通の人間が喰らう喰らわないの問題以前に、喰らったほうだけじゃなく、エルボードロップでダイブしたほうも死んでしまうはずだ。ベチャリとクチャリとなるはずである。

だが。

「おらあ、起きろや、三外！」

「いたたた。ちょっと痛すぎだよ、修也君」

「俺を、名前で呼ぶな！！！」

自分の足元で顔面をアスファルトに減り込ませていた軒太郎を引きずり起こす坂東。乱れた七三の髪を鷲掴みにして乱暴に引っ張り上げる。

軒太郎の顔は、超ダイブからのエルボードロップを喰らっても営業スマイルを保っていた。

軒太郎は引き釣り上げられる直前に、自分の顔で作ったデスマスク

の窪みから、壊れた眼鏡を拾い上げて掛けなおそうとしたが、流石にレンズは両方とも木っ端微塵に碎け散り、黒縁フレームは折れて掛けられる常態ではなかった。

眼鏡を諦めたのか、ポイッと捨てる軒太郎。

あれは、小学三年生の二学期だった。

俺はクラスの中でも浮いていた。

目付きが悪い。態度が悪い。素行も悪かった。

俺は、子供の頃からそうだった。反抗期が早かったのだ。今でも続いているが。

悪^{ワル}だった。

子供の頃からそうである。

友達と呼べる相手は、ヤクザになった今でもつるんでいる高岡ぐら
いだった。

高岡とは同い年だ。

クラスは違うが、小中学校と同じ学び舎にかよっていた。俺は高校
に行かなかつたが、奴は高校を出て大学まで行きやがった。

なのに今は俺と同じ極道である。

学生時代は同じクラスに一度もなれなかつたが、念願かって今で
は同じ『組』に居る。

高岡とは家が近所で小さな頃から二人で悪さばかりしていた。

あいつが知恵を絞り、乱暴なことは俺がやった。体力も根性も俺が
上だった。喧嘩は俺の方が十倍強かった。頭はあいつの方が十倍賢
かったが。

今でも関係は似たようなものだ。

二学期に入って直ぐのことだった。
俺の居るクラスに、転校生がやって来た。

女の子だった。

かなり美人な女の子であった。世に言う美少女ってやつだ。

まだ、八歳だった俺が、始めて美少女と認める程に彼女は美しく可愛かった。

今でも思い出せるほどに、彼女の可愛らしさは記憶に焼きついた。

周りのクラスメイトたちも同感のようだった。

担任の先生に呼ばれて教室に彼女が入って来た時、皆がどよめいたから間違いないだろう。男子たちだけじゃなく女子たちもどよめいていた。

それ程に、彼女は可愛かった。

桁がひとつ違っていのだろう。

転校生の彼女は、微笑んでいた。

生意気なところや嫌味な仕草のない笑みで、転校生でありながら堂々と振舞い、とても高感度が高かったのだ。
和む空気を持った、不思議な転校生であった。

教卓の横、黒板の前に立つ彼女は、整った顔を笑顔で輝かせていた。艶が綺麗な黒髪は腰まで長く、前髪は額の前で七三に分けられている。眉はクッキリとしており友好的な印象を与えるカーブを描いている。鼻はスツと細く、顔全体をスマートに見せていた。唇はほん

のり潤んでいる。

一つ一つのパーツがバランス良く配置されており、人の良さそうに微笑んでいる軟らかい両目を黒縁の眼鏡で縁取っていた。

少々眼鏡が野暮ったくも感じられたが、その眼鏡が彼女を勉学に真面目なお嬢様にも感じさせて、清楚で純朴なイメージを引き立たせていた。

やたらと眩しい。

体のラインは細く窺えたが、背筋を伸ばして真っ直ぐに立つ姿は、やたらと健康的に見えた。

身長はクラスの女子たちに比べて少し高い方だろうか。全校朝会で体育館に並べは、女子の列では後ろのほうになるだろう。

俺も背が高い。

男子の列では、後ろから二番目だ。全校朝会では、彼女の側に立つやもしれないと思った。

実際に全校朝会で彼女は、俺の直ぐ側だった。彼女が俺よりも一歩前に立っていた。斜め前である。彼女の後姿を直ぐ側で眺められて嬉しかったことを覚えている。俺は全校朝会中、ずっと彼女の黒髪を見詰めていた。

彼女は不思議だった。

彼女の全身から、どのような癖を持った人間でも柔軟に理解してくれるような暖かさが感じられる。

優しい姉や理想的な母のような存在感が、さらに彼女を美しく映し出していた。

そこらに居る普通の女子たちとは、何もかもが違っていた。理想的美少女である。

先生に言われて彼女が自ら自己紹介を始めた。

まずは黒板にチョークで名前を書き始める。

名前を白い文字で書き終えた彼女が振り返り、自分の名前を言いながら挨拶をした。

透明度の高い湧き水のように透き通った声だった。今までクラスの女子相手に思ったことはないが、可愛い女の子は、声も可愛く聞こえるのだと思えた。声優のような美声である。

「始めまして。隣町から転校してきた三外のり子です。よろしくお願ひします」

それが彼女の名前だった。

彼女は自己紹介を述べると、礼儀正しく頭を下げた。ただの一礼が、やたらと可憐に見えた。気品が窺える。やはり美少女は何かが普通と違った。

違った……。

そして、その出会いが、俺の初恋だった。一目惚れってやつだ。

八歳の俺が恋だの愛だのを語るとは、当時の俺も考えもしなかったが、恋ってやつは突然やつてくるものらしい。突然すぎて、その時すぐには一目惚れと認識できずに俺は、黒板の前に立つ転校生を、ほおけた顔で凝視していた。

その日から俺の頭の中は、彼女のことですばいになった。寝ていても夢の中で彼女のことを見ていた。

学校で見る彼女の姿が、仕草が、微笑が、夢の中で幾度も繰り返されるのだ。鮮明に。

恋する力は凄いものだと言は知った。

そして、恋破れて生まれ出る不のエネルギーも凄いものだと、それから暫くして俺は知ることになる。

三外のり子……。

知らなかったこととは言え、恐ろしい出来事だった。美しい理想が、数週間後には現実を目の当たりにして崩れ去る。

俺のピュアな心に巨大な傷を刻み込む。

真っ赤に焼けた刀で何度も切りつけられた感じだった。

そう、俺の初恋相手は、幼い頃から妖怪退治を営んでいた三外軒太郎である。

奴なのである。

一生の不覚であった。

否。

未代までの不覚と言えよう。

今思い出しても自害したくなる。死んでも死にきれない屈辱であった。思い出すと今でも眩暈を起こす。

ああ、眩暈が……。

三外軒太郎。

あの野朗は仕事の都合で、偽名と女装で正体を偽り潜入して来たのだ。

なんでも俺の居る小学校に、女生徒ばかりを狙う妖怪が出没するらしく、それを誘い出す為の女装だったらしいのだが。

俺は、その妖怪を釣るための餌に、思わず食いついてしまったらしい。
恐らく妖怪用の餌に食いついた人間の少年は、俺だけじゃなかった
だろう。

しかしながら……。

本当に今思い出しても、死にたくなる。

いや、あの時に俺は死んでしまったのかもしれない。俺の人生は終了していたのかもしれない。

二度と恋なんぞしないと幼心に誓いを立てた。八歳の少年時代にだ。

それが……俺の黒歴史のスタートだった。

そこから戦いが始まったのだろう。

三外軒太郎との……。

偶然のようだ。

「ズルイって、何がですか？」

昂輝が問うと、禿頭の老人が少年の顔をチラリと見た。功風老は、昂輝の質問に答ええない。老人の視線からは、この少年が何者かと疑問の意が伝わる。

己と極道コンビの二人が初対面だと思い出した昂輝が、改めて礼儀をわきまえた。

「お初にお目にかかります。僕は今日からヴァルハラ探偵事務所でアルバイトを始めた五代昂輝と申します」

「ああ、君が五代君かね。アルバイトで新人が来ることは眼一郎から電話で聞いたよ」

そう言った功風老は、若干垂れた瞼を大きく開いて昂輝の全身を編めるように観察した。ごつい手で顎を撫でている。

「思ったより華奢だねえ」

「そうですね、師匠」

師の言葉に赤股も相槌を打つ。

二人が眼一郎から電話で聞いていた内容は、新しいアルバイトの少年が来るから彼に武道武術を伝授してほしいとのこと。期待の新人と聞いていた。

だが、二人が昂輝を隣にして第一印象は、一言で表せば平凡の一言だった。

電話での話しのように期待できる印象は少なかった。とつても期待の星や、磨けば輝くダイヤの原石とは思えなかった。なのである。

それは置いといて、昂輝の質問に功凧老が答える。

「君も駆け出しとはいえヴァルハラ人間ならば、ヴァルハラールの中に、妖術魔術を使わない相手には、こちらも術を使つてはならないってのがあるのを知っているよね」

「はい、存じています」

「二代目は、今の喧嘩でね、その禁を破って戦っているんだよ」

「本当ですか？」

老師の言葉を聞きながら戦う軒太郎を見るが、何かの妖術を駆使しているように見えない。と言うよりも、一方的に攻められているように窺える。

「二代目の影術を見たことあるかね、君は？」

「軒太郎さんの影術と言えば、見たことあります」

自分が使用した武具の回収や、倒した妖怪の遺体をしまいこむ為に使っていたタールのような影。見たことがある。恐らくあの術のことを功凧老は言っているのだろう。

しかしながら、軒太郎がああ術を使っているようには見えないし、今の状況で使うような性能の術とは思えない。

昂輝は疑問に眉を寄せた。

その昂輝の表情を見ながら功凧老が愉快そうに微笑を見せた。昂輝のことを若いな、とでも言いたげな顔だった。

そして仕方ないなと解説をはじめ。

「二代目のやつは、夜で薄暗いことを良いことにね、攻撃を喰らうインパクトポイントに影に発生させて衝撃を吸収させているのだよ。拳や蹴りを喰らう瞬間。それから降って来たエルボーを喰らう瞬間。多くの衝撃を影がクッションになって吸収しているのだよ」

見ている気付かなかったが、やはり軒太郎だと思う昂輝。インチキが染み付いている。

今度は赤股が語る。

「恐らくは、相手の金髪マッチョマンも気付いているぜ。殴った感触が可笑しかろうからなあ。

あの兄ちゃんも分かっている殴りつづけているようだぜ」

影の中に空間を築き様々な物を収納する妖術。坂東は、軒太郎を殴ぐったり蹴る際に、影の中に手足を突っ込んでいることになる。ならば違和感にも気付いて当然だろうと思う。

しかし坂東は、影術に己の攻撃が妨害されていても、言葉では反論を返さなかった。

それでもただ暴力で対抗している。

軒太郎が使用する摩訶不思議なディフェンスにも戸惑っていない様子だ。と言うよりも慣れてるようにも窺える。

金髪を両手でかき上げた坂東が、血走った眼を夜空に向けて熱い息を漏らすように吐いた。

熱すぎる闘志が陽炎と化して揺らいでいた。周囲の空気が殺気に歪んでいる。

坂東が抱く軒太郎への怒りが、そこから感じられた。

何故にここまでの憤怒を坂東が軒太郎に抱くのか理由が分からない昂輝は、二人の間に存在すると思われる因縁の深さを想像しきれないでいた。

「ううううらあああ！」

唸る野獣の如し飛び出した坂東が、片足を上げて蹴りを放つ。蟹股から繰り出されるは893キック。坂東の踵が軒太郎の顔面に迫ると、軒太郎が素早くガードを築く。躲せない。

刹那である。

ダンプカーが人でも撥ねたような轟音が上がった。

「ぐうぐう！」

眼前に交差させた軒太郎の両腕の上に蹴りつけられる坂東の893キック。クロスガードの下から軒太郎の苦声が漏れ聞こえる。

「うらああああ！」

坂東が蹴りに体重を掛けると軒太郎が衝撃に背を仰け反らせる。背骨が折れそんなくらい反っていた。

「ケツ！」

坂東が一言吐き捨てるのと両拳を強く握った。893キックを耐え凌いだ軒太郎に続く坂東の拳。勇ましい両拳が連続で打ち込まれる。顔面だろつとボディーだろつとガードの上からであるつと、容赦なく打ち込む坂東の鉄拳が怒音を響かせていた。

あまりにも一方的な戦いだつた。

坂東が一方的に暴力を振り、ただ軒太郎はその暴力に耐えている様子だつた。

何故に軒太郎は、反撃に転じないのか不思議に見える。殴られながらも軒太郎が何かを喋りだす。

「坂東君、そろそろ叩くのを止めてくれないかな。僕はいつも謝っているじゃないか」

「黙れ外道。貴様の心のこもっていない謝罪なんぞ聞き厭きるほど聞いたわ！」

坂東の怒声と同時に繰り出したサイドキックが軒太郎の脇腹にヒットする。ボロボロになった軒太郎の体が横に飛ばされアルファルトに転がった。

「もう、修也君は執念深いな。過ぎ去ったことは忘れようよ」

「だまれ、だまれ、ペテン師！」

転がった軒太郎が起き上がりながら言うと、怒鳴り散らしながら追い討ちを狙って駆け寄ってくる。

「駄々っ子も程ほどにしてくれよ……修也君！」

坂東が追い討ちに拳を振り上げながら近寄ろうとした刹那、軒太郎の懐からキラリと閃光が走る。

それは刃物の一閃。日本刀の輝きだった。

その閃光が坂東の鼻先で止まると、怒る坂東の動きもピタリと止まる。

拳を振り上げたままであった。

「妖刀イベナムの一本だ……」

昂輝が言った。

見間違えることはない程に刀身から赤い妖気を放つ刀は、双子妖刀イベナムの一本である。

軒太郎がヴァルハラ禁を堂々と破った瞬間であった。

妖術魔術を使わない相手に、術を使ったのだ。

軒太郎が引き抜き坂東の鼻先に向けた日本刀は、事務所ないから持ち出したベレッタのような普通の武器ではない。殺伐とした赤い妖気を放出させながら生き血を求める妖刀そのもの。

その切れ味は魑魅魍魎ならばもちろんのこと、鬼や悪魔の類とて切り刻む残酷な鋭利さを有した霊界の二振り。人間相手ならばかすり傷一つで魂を焼き尽くすことが出来る魔剣同様だ。武器として人間に使用するのには卑怯と言える代物である。霊力の低い人間ならば触れただけで気を失うことだろう。

そのような妖刀を、片割れとはいえ抜き出したのだ。ヴァルハラ禁を破ったといわれようと仕方あるまい。

妖刀の使用。それだけではなかった。

昂輝が唾を飲んで喉を鳴らした後に、軒太郎を見て言う。

「軒太郎さんの髪の毛、伸びてますね……」

「ああ、そのようだね」

功凧老が、顎を摩りながら昂輝に答える。

昂輝が言う通り、軒太郎の黒髪が伸び始めていた。いつもの戦闘スタイルに、黒衣の姿に変身を始めている。

昂輝には人狼への変身を禁じといて己は戦闘モードへと変身しようとしているのだ。

ずるい思う昂輝。

こんなことならば、自動販売機に押しつぶされていた時ぐらいは変身して逃ればよかったと思う昂輝であった。

しかしながら軒太郎の変身は、髪が伸びたところで停止する。

髪の色は銀髪に変わらず、いつもの黒コートとバンガロンハットも身に付けていない。

妖刀イベナム一本を使用するだけならば、この程度の変身で良いよ
うだ。

周りの野次馬たちは、軒太郎の髪が伸びたことに驚いている者も居たが、変貌を眼前にしても坂東は驚いていない様子であった。

それどころが、軒太郎の変化を今まで以上に憎々しい形相で睨み付けていた。

感情が泡立ち沸騰している。

「舐めるな、糞が！」

坂東が鼻先に突き付けられた妖刀に右手を伸ばす。怪訝な妖気を放出している素手で掴み取ったのだ。シュツと熱しられた鉄板の上に生肉でも置いたような音が一瞬すると、あたりに肉の焼ける美味しそうな匂いが漂う。

イベナムを握り締めた坂東の掌内から煙が上がっていた。

「うらやあああああ！」

妖刀を片手で握り締めた坂東が大きく吼えた。気合と共に妖刀ごと軒太郎を引き寄せる。軒太郎の伸びた黒髪が腰の辺りでサラリと揺れた。

「信じられない！」

驚きを述べたのは、昂輝の斜め後ろに立つ長身の赤股夏鱗だった。大きなサングラスに視線は隠れているが、表情は異常な光景を目の当たりにした驚愕のものだった。

血に飢えた妖気を放つ妖刀イベナムの片割れを素手で握り締め、あまつさえ引き寄せるといふ強行に度肝をぬかれている様子だ。

その横では流石の武天老師も目を剥きながら驚きを表している。

しかしながら弟子ほどの驚きの顔ではなかった。どちらかといえば、サーカスで珍しい芸を見た子供のような表情に近い。まだ片手で顎を撫でている。

赤股が驚くのも無理がない。

普通ならば、イベナムを握り締めた手が腐れ落ちても可笑しくない程の魔力を秘めているのに、そのまま刀の持ち主ごと引き寄せるなんて並みの人間の出来る芸当ではない。この坂東という極道からは、

微塵の妖力も霊力も感じ取れない。そのような人間が何故にそこま
で出来るのか疑問を抱く。

功風老が言う。

「なんとも常識外れの根性だ。流石は二代目を愛した男だけはある
な。あれだけの根性がそなわっていれば、彼の拳は霊体でも殴り飛
ばせる」

功風老の解説からして坂東の気合が、霊力をどうにか出来るレベル
まで達したらしい。

赤股の述べる通り非常識といえようが、ヴァルハラ探偵事務所を
囲む人間たちならば、それすら有りでないのかと昂輝は思った。も
う驚くのすらめんどくさい。

しかし、老師の述べた「二代目を愛した男」と云うフレーズが解説
に混ざっていたことに幼年は首を傾げた。意味が分からない。

「らあああああ！」

妖刀の刀身を握り締めた坂東が、力任せに引き寄せる。刀身を握っ
た右手が金髪の手よりも高く上げられると、軒太郎が引き寄せられ
る。

そこに坂東のボディブローが炸裂した。軒太郎の腹部で、車の工
アバックが膨らんだような音が轟く。

軒太郎の体が曲がりながら跳ね上がる。

長い髪が空中で乱れるが、握ったイベナムの柄を放そうとしない。
刀身を握る坂東もだ。

更に坂東の廻し蹴りが唸る。

風が鳴った。

木製の太いバットでも振り回したような蹴りだった。

宙に体が跳ね上がったも妖刀から手を放さない軒太郎の顔面に坂東の廻し蹴りがヒットする。

軒太郎のすかした表情が、グニヤリと曲がって見えた。

素人のキックと一目で分かる蹴りだが、とにかく力強い一撃だった。野生のパワーを感じる。

その廻し蹴りを空中でもろに受けた軒太郎は、ついに妖刀から手を放して飛んで行った。

妖刀の一本は、刀身を握る坂東の手に残る。まだ放さない。

振り切られる坂東のハイキックを直撃して飛んで行く軒太郎を、野次馬たちが顎を上げて見送る。

皆が上を向いて軒太郎の姿を視線で追っていた。同じ動きで首を振る。

飛んだ軒太郎は野次馬たちの頭上を越えて、先程まで功凧老と金本が戦っていた狭い路地へと飛んで行く。

野次馬たちが振り返り直ぐに軒太郎の姿を追うが、軒太郎の体は闇の中に落下して姿を隠す。地面に落ちた鈍い音だけが届いた。着地に失敗した音だろう。

妖刀の刀身を掴んだままの坂東が狭い路地に向って歩き出すと、野次馬たちが左右に割れて道を開けた。

道を譲った野次馬たちは口と鼻を手で押さえていた。異臭が届いたのだ。吐き気も伴う。

坂東が放つ熱い闘志が熱気と、イベナムの妖気が混ざり合い空気を濁し、そこに妖刀の刀身を握り締めた素手から漏れ出た腐敗臭が加わっているようだった。

完全なる悪臭である。

多く者が、今まで体験したことのない刺激臭だった。

口や鼻を押さえただけで済まず眉間に皺を寄せながら双眸を細めていた。

背中を丸めている者も居る。

坂東が狭い路地に踏み込もうとすると、暗い路地の奥で赤い光が陽炎の如く揺らぎながら浮かび上がる。

軒太郎が双子妖刀イベナムの片割れを抜き出した様子だ。ぼんやりとした赤い光の向こうに軒太郎のシルエットが怪しく佇んでいた。薄闇の中で軒太郎の長髪が熱風に煽られ涼しげに靡く。

「ッ!？」

足を止めた坂東が、一瞬だが怒りを忘れて驚きの表情を見せた。

「て、てめー……」

しかし直ぐに憤怒の表情に戻って小声で罵倒する。

狭い路地内で軒太郎のシルエットは、片腕を肩の高さで真っ直ぐ伸ばし、手に持つイベナムの片割れを坂東に向けていた。体は斜め横を向き、足を真っ直ぐに、背筋を真っ直ぐに伸ばし、姿勢正しく立っている。そして長髪を靡かせているのだ。

「てめーって奴は……。どこまでも俺を愚弄する訳だな。糞が！」

貧弱な愚痴は、徐々に力強い罵倒に変わり、最後は吐き捨てる罵詈雑言と化していた。

坂東がダツシュした。刀身を握ったイベナムを振り被っている。

「死ねッ！！」

軒太郎のシルエットに駆け寄った坂東が、逆さまに持ったイベナムを振り下ろす。すると軒太郎がイベナムの片割れを横に構えて一撃を受け止めた。

耳に痛い音が響く。

双子の妖刀がぶつかり合い赤い妖気を火花に換えて激しく散らした。赤い発光が、狭い路地の薄闇を一瞬だけ照らし出す。

「死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！！！！」

率直な思いを怒鳴りながらイベナムを振るい続ける坂東。幾度も幾度も闇雲に振るうが、すべての乱打を軒太郎が同じイベナムで受け止める。

そして軒太郎が坂東の怒りの攻撃を受け止めるたびに赤い妖気が弾け合い路地内をフラッシュで照らしていた。

刀身を持つ坂東の攻撃は、乱雑で力任せに刀を振り回すだけの強行だったが、それを凌ぐ軒太郎の方は、明らかに武術を心得た防御法

であった。乱暴な攻撃を鮮やかに受け流す。

赤い火花散る路地内を窺う野次馬の一人が言った。

「おい……、髪の毛長い男の方……」

野次馬の言葉を耳にしながら昂輝も可笑しな違和感に目を凝らし続けていた。

妖刀同士がぶつかって放つ火花に映る軒太郎のシルエットが不自然だった。今までと別物に見える……のだ。

細いのだ。

軒太郎のボディーラインが細く見えるのだ。

元々の軒太郎は、細い方だ。筋肉はあるが贅肉が殆どない。マラソンランナーのようなアスリートタイプの体型をしている。その体型をいつもはビジネススーツで隠しているのだ。

だが、赤いフラッシュに映る軒太郎のボディーラインは、それよりも明らかに細く見えるのだ。

身長は変わっていない。全身が不思議と華奢になったように感じられた。

頭が若干だか小さくなったような気がする。

首も細いような気がする。

肩幅が狭くなったような気がする。

イベナムを操る両腕も細くなったような気がする。

ウエストも絞られたように見える。

なのにお尻は不思議と引き締まったイメージを感じる。

全身のパーツが細くなったのに、太股は何かが違う。筋肉質な太股と述べるよりも、ムッチリした感じだ。

胸の筋肉もそうだ。

大胸筋が厚くなったなって膨らんだようだが、何故か動きに合わせて上下に揺れている。筋肉というより脂肪の塊に見える。

攻防に弾ける閃光が、軒太郎のシルエットを照らすたびに、そう見えるのだ。

これでは、まるで。

「女……？」

野次馬の一人が呟いた。

そうだ。これではまるで女性の体型だ。

「女だ!!」

今度は誰かが叫んだ。

そうだ。完全に女性だ。

昂輝も同感である。

「軒太郎さんが……、女性に……」

予想外の光景に啞然とする昂輝。異変に気付いた他の野次馬たちも同じ様に啞然としていた。

坂東と戦っているのは、黒い長髪の女性だった。間違いない。

しかも、結構な美人に窺える。長い黒髪の大人の女性だった。

「死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！！」

猛り吼える坂東は、軒太郎の変貌に気付いているようだが攻撃の手を緩めない。寧ろ、攻撃の速度も激しさも越して行く。

まるで、眼前の女性に忘れられない恨みと怒りを抱いているようだった。

憤怒の業火は大きくなる一方である。

火花散る路地。

妖刀を逆手に握った坂東の乱打を、女性の姿に変身した軒太郎が体術剣術を駆使して回避防御を繰り返す。

女性に姿を変えた軒太郎のディフェンスは、可憐なものだった。男の時とは違い、力強さや強引な動きがなくなり、代わりに流れるせらぎの如く優雅である。

戦闘スタイルまでもが女性剣士に変貌していた。

軒太郎の変身は、変化した姿によって戦闘スタイルまでが変わり、性格までもが変わってしまったのかと昂輝は思った。

黒いバンガロンハットに黒いロングコートの姿。あの黒衣の姿が軒太郎を凶悪な人格に変えているのでは、と昂輝は考えた。

真相は分からないが、今度訊いてみようと思う昂輝。

昂輝は疑問に思ったことは、訊いてみようと思うタイプである。だが、ちよくちよく訊こうと思っていたことを忘れてしまうことも少なくなかった。

一方、狭い路地内では坂東の乱打が続いていた。

一方的に攻撃を仕掛ける坂東に、女軒太郎が述べる。

「修也君、いい加減にしてくださいな。貴方がどんなに頑張っても、どんなに殺気立っても、私を傷つけられないですよ」

躲しながら言う女軒太郎。顔が優しく微笑んでいる。

名前で呼ぶなど、また坂東が吼えた。そしてまた吼える。

「ぬかせ!!」

女軒太郎の吼える坂東。吼えても攻撃は止まらない。

「ぬかすも何も。それでは、証明して見せますか？」

「なにを!？」

女軒太郎が言うと、今まで坂東の攻撃を受けていた妖刀が力無く下を向く。突然防御を捨てたのである。そこに坂東の逆さまの妖刀が振り下ろされた。

軒太郎の額を狙った真っ直ぐな攻撃だったが、女軒太郎は躲さなかった。

だが、坂東の攻撃がピタリと停止する。逆さまにも垂れた妖刀の柄巻きが、美しい顔の前で止まっている。

寸止めである。

刀を下げた軒太郎は、しなやかなボディラインを真っ直ぐに伸ばして佇んでいるだけである。

坂東は狂犬のような表情で全身を震わせながら、妖刀を振り下ろし、寸止めたままの体制で硬直していた。

その様子を路地の入り口から見ている昴輝や野次馬たちが、揃って何故にと言いたげな表情で事を見ていた。

何故に坂東修也は、無防備を見せた女軒太郎に対して一撃を加えなかったのか？

無防備な相手を攻撃できない？

女性を攻撃できない？

それらが極道のポリシーなのか？

はたまた男のプライドなのか？

理由は分からないが、とにかく坂東は寸前で攻撃を止めた。

「やはりそうか……。坂東、お前にはそいつを殺せないか」

そう言いながら姿を現したのは高岡だった。

ポマードでオールバック気味に固められた七三の髪を軽く撫でながら野次馬たちの間から出てくると、懐に片手を突っ込む。

背広の中からオートマチックの拳銃を抜き出した高岡が、昂輝の横を過ぎて行った。

ついに策士自らが動いた。

「高岡……」

妖刀を振り下ろした構えを崩し、坂東が体を横にして後ろを振り返る。

「やはり坂東、お前には三外軒太郎は殺せないか」

高岡が再度言う。

その声は、蛇が体の上を這うように寒気が走る声であった。冷酷で無慈悲な声色だ。

「高岡、てめー……」

坂東が仲間である高岡に凄んだ。
女軒太郎を無視して、二人の男が睨み合う。
獅子と鷹の睨み合いだった。

「おやおや、高岡さんは気付いていましたか」

言うは女軒太郎。
微笑んでいた。

「気付くも何も、随分昔からな」

「何が言いたい、高岡……」

奥歯に力を込めながら言う坂東が、完全に女軒太郎に背を向けて高岡を睨む。

「俺が、三外軒太郎を殺せないだと。舐めんよ。

ためーは俺が、この腐れ外道より弱いとでも言いやがるのか!？」

「ちがうな、坂東」

「何が違う!？」

「お前が三外軒太郎を殺せないのではない……」。

お前は、三外のり子を殺せないって言っているんだよ」

「!？」

「はっきり言えば、お前は初恋の相手である、その女を殺せないっ

「言っているんだよ」

「なんだと!!」

高岡の台詞を聞いて坂東が吼えるように怒鳴った。威嚇する獅子の顔だった。

また、いつの間にか昂輝の後ろに極道コンビが立っていた。そして功風老が昂輝に耳打ちをする。

近くの野次馬が、それに耳を寄せていた。

「あの坂東たる極道、少年時代に軒太郎が変装していた女装姿に恋をしたらしいぞお。」

向こうさんは、本当に女だと思っていたらしいがな。

あの二人の因縁は、十年以上前から続いているらしいと、昔聞いたわあい」

楽しみに語る功風老。

昂輝は功風老の言葉に納得した。

確かに二人の戦いには何やらの因縁深さが所々で窺えた。

しかし、その因縁が、恋の話だとは予想外のストーリーである。

しかも相手は坂東と軒太郎。変装した姿の相手に恋をしたとはいえ、男同士だ。思わず昂輝の方が混乱してしまふ。

坂東が高岡を怒鳴りつける背を見て、女軒太郎がはつきりとした笑みを見せる。

「坂東、お前はまだその女を愛しているんだよ。殺せる訳がない。

ましてや男の姿の頃ならまだしも、女の成りに変わった三外を、お前ではもう殺せやしない」

「俺が三外を愛しているだど!？」

ふざけんな、高岡!」

「ふざけているのはお前だ、坂東!」

怒鳴る坂東に高岡が怒鳴り返した。

鷹のように勇ましく、蛇のように冷酷に窺えた高岡が、始めて感情を荒立てる。火山の如く憤怒を噴火させた。

高岡の意見に昂輝も同感する。ふざけているのは男を愛した男の坂東ではないかと。

「ならばだ! ならば何故に攻撃を止めた! 刀を寸前で止めた!

!」

「ぬぬ……」

坂東が言葉を詰まらせる。反論に迷っている。

「答えてみよ、坂東! 俺に分かるように、俺が納得できるような答えを言ってみろ!

出来ることなら四百字詰め原稿用紙三枚分で答えてみる!」

高岡が回答の方法を難しくする。無駄にハードルが上がった。ふざけて言っている様子ではない。大真面目に言っている真剣な表情だった。

だが、高岡の言葉は真実だ。

坂東は、寸前で攻撃を止めた。間違いなく女軒太郎の頭を力子割れる筈だったのにだ。

殺る気がないと意見されても仕方がない。

カチャリと音を鳴らして拳銃を構える高岡。

片手で持たれた黒い拳銃の銃口が、前を狙う。

女軒太郎を狙っているのだろうか、対角線に坂東も居る。

「お前が、その三外を殺せないならば、俺が殺るのみだ。
俺が代わりに玉を取ってやる」

冷静に戻った坂東が、拳銃を片手に鷹のような眼差しで女軒太郎を狙う。

空気そのものが緊張していた。寒い何かを感じられる。

正体は高岡の殺気だ。

昂輝や野次馬たちにも、ひしひしと伝わって来るほどに冷たい。

この男、本気である。

しかしながら普通の拳銃では、軒太郎の玉を取れるとは思えない。

昂輝じゃなくとも、今までの攻防を見ていれば分かることだ。

拳銃では無理である。

天文学的数値の間違いが発生しなければ、ただの鉛玉では不可能だろう。

それに今の軒太郎は女性だ。残念ながら玉は一つもない。

……たぶん。

坂東が顎をしゃくらせながら一步前にでる。

高岡越しに見える坂東の表情が、猛獣そのものに見えて数人の野次馬たちが怯えたように身を震わす。

だが、それでも誰一人として逃げ出しはしない。
ここまでの連戦を観戦していたので、最後の最後を見逃すことは出
来ないだろう。

「高岡」

ドスの効いた太声だった。

坂東が、握り締めていた妖刀を路地の隅に投げ捨てる。

甲高い金属音を幾度か響かせ双子妖刀の片割れが転がった。

やっと妖刀の刀身から手を放した。しかし、坂東の掌内から肉の焼
ける臭いと灰色の煙が漂っていた。

路地の隅に転がった妖刀は、まだ赤い妖気を放出している。

「ざけんな、高岡。こいつは俺の獲物だ！ 横取りは許さねえ！！」

「ふっ」

高岡が頭を傾けながら鼻で笑った。

視線が目の前の仲間を馬鹿にしている。

お前には無理だと語っていた。

「チャンスがあっても、一太刀も入れられない男がよく言う。

ふざけているのはお前じゃないか。

獲物を横取りされるのが嫌な訳でなく、女を横取りされるのが嫌な
んだろう」

「貴様！」

拳銃を構える高岡。

女軒太郎に背を向ける坂東。

二人の男の前に佇む軒太郎。

その三者の光景は、女を殺そうとしている男の前に、女を守ろうとしている男が立ちはだかつているような光景だった。高岡の言うとおりの状況にも見える。

確実にストーリーの展開が狂い始めていた。

そして、更に話を狂わせる言葉が高岡から放たれる。

蛇の殺気と鷹の眼差しを持った男が、ボソリと呟いた。

小さな声だったが、野次馬たちの最前列に立つ昂輝や数人の外野には聞き取れた。

その言葉とは　。

「俺の気持ちも知らないで……」

そう言ったのだ。高岡は　。

そして語り続ける高岡。

「俺の方が……」。

俺の方が、ずっと前から愛していたんだ……」

「？」

何を言い出すのかと、力の入った表情を緩めながら傾げる坂東。野次馬たちもキョトンとした。

周りの温度が一瞬変わった。

体感温度が不思議な温度を捉える。
暑いようで寒い感覚。

そんな中、構えていた拳銃を下げた高岡が、感情を露にして大きな声をだした。同じような台詞を、今度は大声で繰り返す。

「俺の方が、ずっと前から好きだったんだよ！」

「ええーーーーー！」

高岡の告白に、外野が裏返った声を上げる。

昂輝も声を裏返した。

赤股夏鱗も同じように声を上げた。

笑っているのは功風老だけである。

昂輝たちは気付かなかったが、ヴァルハラビルの二階窓から窺っていた眼一郎も笑っていた。腹を抱えて大笑いしている。

「た、高岡……お前……」

驚きである。

坂東までもが肩を落としてキョトンとしていた。凄みが消えている。

「お前までもが、この女の魔力に魅入られていたのか……」

「ちがう……」

坂東の言葉に高村が小さく呟きながら首を振る。
否定した。

何が違うというのか、皆が思った。

「ちがうんだ、坂東……」

「何がだ、何がちがうと……」

坂東の声が震えていた。

高岡の声も震えていた。

高岡は、顔を斜めに向けながら鷹のような視線を路地の隅に落とす。眉毛がハの字になっている。

なんとも困ったような表情に見えた。見方によっては照れているようだった。

「何がちがうんだ……」

もう一度問う坂東。

その坂東に高村が、僅かに間を置いてから答えを返した。
この場に居る全員が耳をすましていた。

「俺が好きなのは……。俺がずっと好きだったのは、……お前だよ、
坂東」

「！？！？！？！？」

「俺は、坂東修也が好きなんだ！」

「ええ――――」

――――「――――」

昂輝や野次馬たちが、再び裏返った声を上げて叫んだ。裏返りすぎ

て、表に戻りそうなぐらいの大声だ。

それは驚きを超越して、驚愕な告白だった。

時を越えて新たなトライアングル誕生である。

そのトライアングルの形は、歪だったが新時代を表していた。

これが新しい世界。

新世界への一歩である。

軒太郎、坂東、そして高岡の三人が、その新世界に踏み込んだ。

「た……高岡……。お前、なに言い出しているんだよ……」

啞然とした表情で言う坂東。明らかに戸惑っていた。

先程まで狂人の様に猛り憤怒していた男とは別人である。

幼馴染とも云える悪友の言葉に思考を止めてしまっていた。凄みも怖さも消えていた。

昂輝や野次馬たちも硬直していた。口を開けて目を点にさせている。周囲の空間すべてが氷河期を迎えたように凍りつき、絶対零度の驚愕に包み込まれていた。先程までの煮え滾るほどの熱々の空気が僅かにも残っていない。

その状況を作り出した張本人である高岡が話し出す。

鷹を思わせる高岡の眼差しが、今ではあどけなく見えた。優しいのである。

「坂東、何故に俺が、幼少時代からお前とつるんでいたと思う。

性格も趣味も学力も体力も家柄も異なる俺が、お前と一緒に悪さに励んでいたと思う？」

「高岡……」

つるむ理由。

坂東は、そんなこと考えたことがなかった。そのぐらい二人の付き合いは永い。

「わざわざ一流大学を出て、弁護士の資格まで取った俺が、何故に

お前とヤクザをやっているか分かるか？
こんな糞貯めみたいな町で、極道をやっているか分かるか！？」

「た、楽しいから……？」

「そんな訳ないだろ！」

高岡が怒鳴る。

そして二十年以上思い続けていたことをぶちまけた。

「俺はお前が好きだから！」

俺はお前を愛しているから！

だからお前が極道を進むと言っなら、俺がお前を全力でサポートしてやる！ 日本一の極道にしてやる！ 絶対にだ！！」

「た、高岡……」

呆然とした表情で愛の告白を、幼馴染の同性に言われた坂東は、ゆつくりとした足取りで歩き出す。
そして高岡の前で止まった。

「高岡……」

向かい合う二人の男。

幼馴染と向かい合った坂東の顔が、優しく微笑んだ。軟らかく暖かい微笑みだった。

そして胸を開いて大きく両手を広げる。まるで俺の胸に飛び込んで来いと言っているようなポーズだった。

愛の告白を述べた高岡が、坂東の笑顔を見て緊張を緩める。ほっとした表情を見せた。

己の思いが、伝わったと感じたのである。

「高岡……」

そう言い坂東の方から高岡に抱きつく。男らしい太腕で引き寄せる。二人の幼馴染が男同士の体を密着させた。抱き合う。頬と頬を付けて抱擁していた。

刹那である。

高岡を包み込んだ坂東の両腕に怪力が注ぎこまれた。

坂東の顔は穏やかなままだった。太いマッスルアームが高岡の体を嵌め上げる。

物凄い音だった。

突如のベアハッグにゴキゴキゴキと骨が碎ける音が響く。

高岡の肋骨か背骨が碎けて行く音だろう。音を耳にした者たちに鳥肌が立つ。

「!!!!!!?」

高岡が苦悶の表情で悲鳴を上げようとしたが、肺が押しつぶされて絶叫すら声に出来なかった。喉の奥から空気だけが漏れ出るばかりだ。もがけど愛する男の腕の中から逃げることも出来ない。

坂東が高岡を締め上げた時間は、ほんの数秒だった。三秒にも満たないだろう。

だが、その数秒で高岡の意識は激痛に埋もれて消え去っていた。気絶している。

高岡は愛した男の胸の中で、糸の切れたマリオネットのように力無く全身を預けていた。白目で涎を垂らす。

「高岡すまねえ……」

坂東はそう言いながら気絶した幼馴染を狭い路地の隅に降ろす。ピルの壁に寄り掛けるように座らせた。

坂東の表情は優しかった。

高岡を座らせた坂東が立ち上がると、再び凄みを持った表情で女軒太郎を睨んだ。

また獣臭が漂いはじめる。

雄の匂いだ。そう思えば悪くない。

「三外、遊びはそろそろ終わろうや。お前も本気を出しやがれ。長年の因縁、ここらで決着を付けようや。なあ」

坂東が指の関節をポキポキ鳴らす。丁寧に両手すべての間接を鳴らしていた。

「因縁も何も、これもあれも修也君の勘違い。独りよがりのいちやもんじゃあないですか」

「まだ、ぬかすか」

口元に手を当てた女軒太郎が、顔を横に向けながらクスリと笑った。仕草が女性らしい。長い髪がサラリと流れるように揺れた。

「勘違いと言うば、お前も勘違いするなよ、三外。

さっき俺が刀を止めたのは、女のお前を傷つけられないからじゃあ

ねえ。俺は、武器でお前をやっつけたくなかったただけだ。素手でぶちのめしてえ！

素手なら女だろうと何だろうと、殴れるし蹴れる！！」

坂東が眼前で右拳を強く握る。

「なるほど。修也君と結婚する人は、ドメスティックバイオレンスに悩まされそうだね」

「それが、俺の愛の形だ！！」

回答を返した坂東が走り出す。拳を振り上げ女軒太郎に攻め込んだ。バトルの再開である。

今宵ヴァルハラ探偵事務所に攻め込んできた九人の極道最後の一人が坂東修也。魔人極道がラストファイトに全力を尽くす。ついにこれがクライマックスである。

今度の攻撃は止まらなかった。止まるどころの話でない。迷い無く全力で打ち下ろされた。

逆さに握られた妖刀の時の様に、寸前で止まらなかったのだ。

坂東の拳が女軒太郎の美貌に叩き込まれた。鼻の真上である。女性の悲鳴と同時に生々しくも鈍く固い音が空気に響く。

二メートルの跳躍に四メートルの高さを得た坂東の鉄拳が、降下速度に体重と怪力を乗せて叩き込まれる。

更に坂東が拳を腕ごと力強く振り抜くと、拳打を顔面に喰らった女軒太郎が、長い黒髪を乱らせ地面に後頭部を激突させた。

また固く鈍い音が響く。先程の生音とは質が異なっていた。空気から耳に届かず、地面に広がり足から伝わって来る。どちらも聞き心地の良い音でない。

小さなコンクリート片が辺りに飛び散る。コンクリートの地面が陥没して、女軒太郎の後頭部が僅かに減り込んでいた。

それでも勢いの収まらない鉄拳の衝撃は、スマートな女軒太郎の女体を跳ね上げさせ両脚を上弾ませる。

後頭部を付けたまま女体が逆さまになっていた。そして、後ろに跳ねるように二三度転がりうつ伏せなってやっと止まる。

倒れて動かない女軒太郎が、今の一撃で、ボロ雑巾の如くみすぼらしくなっていた。

動かない。女軒太郎はピクリとも動かなくなる。

殴れる。

女だろうが、美人だろうが、初恋の相手だろうが、関係無く殴れる。坂東の言ったとおりである。

ただ、妖刀での攻撃を躊躇して、攻撃の手を止めたのだ。素手なら殴れるのだ。

今殴った。全力で思いつきり。

そう昂輝が思った瞬間に、坂東が再びジャンプをした。追い討ちであろつ。

先程のジャンプよりも高い。三メートルの高さは跳躍していた。

「死ねええええええ！」

短めの金髪を振り乱しながら跳躍した坂東が、うつ伏せに倒れている女軒太郎の背中目掛けて急降下していく。右膝が曲げられ、尖った鈍器と化していた。

ニードロップが女軒太郎の背中を狙う。

「ぐえ！」

まるで蛙のような醜い声だった。

マッチョマンの全体重が、鋭い右膝の先端に集まり突き刺さる。ダイビングニードロップが女軒太郎に命中すると、女体が跳ねるよう反った。女の両手両脚も、ピッと伸びて跳ねていた。

二発の強打を見て昂輝が言った。自分の後方に立つ極道コンビに向けてだ。

「物凄い攻撃ですが、どうせ軒太郎さんの影術で威力を軽減されているのですよね？」

女軒太郎が見せるリアクションは、わざと派手に見せている演出で、悪ふざけだと昂輝は思ったのだ。

いつもの軒太郎を知っていれば、そう思うだろう。

しかしながら昂輝に答えた功凧老の言葉は、若干の違いを語っていた。

「ああ、確かに二代目は、影術でダメージを軽減している。半分近くは軽減しているかのぉ。

しかしな、あの様子は紛いではないな。見たままのダメージを受けているぞぉ」

「見たまま……。」

あの派手なりアクションは、軒太郎さんの悪ふざけじゃあないのですか!？」

「ああ、違うな。

あの若いものの破壊力は、半分しのも普通じゃあねえみたいだな。たった半分で、あれだけの破壊力があるようだ。流石の二代目もきつかるうてえ。

なにせあの若いの、妖刀から妖力を吸収しているからのぉ」

「人間が妖力を吸収?」

「ああ、凄い若者よのぉ。普通の人間ならぶっ倒れているぞぉ」

「パワーアップしているのですか?」

「ああ、少し前より強くなっていやがる。数段なあ」

「数段ですか……」

「ああ、二代目も今頃ビクリしているんじゃないかなあ。見ているこっちはおもしろいこったがぁ」

顎を撫でながら言う功風老。

しかしながら声色から余裕が窺える。余裕の正体は昂輝にも悟れていた。

その気になれば、軒太郎にはまだまだ奥の手が幾つもある筈だ。数々の自作武具だってそうだし黒衣の姿に変身したのならば、もっと強くなる筈である。変身してしまえば、更に戦闘力がアップするのだ。

例えば坂東が超人でもあっても、妖刀の妖力を吸収したとしても、坂東が軒太郎を凌駕するとは思えなかった。

「おおおおおおおららら！」

女軒太郎の黒髪と腰のベルトを掴んで坂東が女体を持ち上げる。そして真上に放り投げた。

ほうり投げられた女軒太郎が、コントロールを失った飛行機のようにクルクルと回りながら落ちて来る。長い黒髪を振り乱し、両手両脚が無造作に振り回されていた。

そして、落ちて来る女軒太郎に坂東が廻し蹴りを合わせる。

タイミングが完璧だった。ボレーキックが見事にジャストミートした。腹部を蹴られた女軒太郎が、弾丸の如く真横に飛んで行く。

「わあっ！」

複数の声が上がった。

蹴られた女軒太郎が飛んで行く先は、昂輝や野次馬たちが居る方向

であった。

飛んで来る女体に危機迫る声を上げたのは野次馬たちである。必死に逃げ出す。極道コンビの二人は素早く宙に飛んで回避するが、昂輝や数人の野次馬たちは逃げ遅れて女体の衝突を受けてしまう。

まるでボウリングの白いピンのように弾き飛ばされた。

昂輝を含めて十人以上が転倒したのでストライクだろう。

女軒太郎は昂輝や野次馬の壁を薙ぎ倒しながら貫くと、ヴァルハラビルの前に転がった。

「修也くううんんんんん」

倒れていた女軒太郎が、太い声を唸らせながら立ち上がる。長い黒髪が表情を怪奇に隠している。モデル並みのスタイルが震えていた。薄ら怖い。震えに不気味な殺気がこびり付き、ただれるように落ちて行く。

「三外、やっと殺る気になってきたかあああああ！」

女体に撥ねられ地を這う野次馬たちを長い脚で跨ぎながら進む坂東。双眸を血走らせながら微笑んでいた。

「修也くううんんんんん」

いい加減にしないと、私も怒りますよお

スタイルは女性のものだったが、声が男の太いものだった。長い黒髪の間から、怨霊にも似た眼差しが覗き見ていた。怒っているような眼でない。もっと寒く怖い眼である。

そして、女軒太郎の足元で真っ黒な影が、煮え滾るタールのようにポコポコと泡立ち始めた。

あの影術だ。

武器を隠し、魑魅魍魎の死体を回収する漆黒の影術だ。

怪異を目の当たりにした野次馬たちが、ざわめいた。術を見せる事に昂輝が素直に驚く。

「軒太郎さんが……変身……するの!?」

小声で昂輝が言うと、漆黒の影が、生物の様に動き出した。女軒太郎の両脚を、急速成長を始めた無数の蔓のように登っていた。あっという間に女軒太郎の全身を包み込む。

野次馬たちのざわめきが増した。ざわめきの中に好奇心が聞き取れる。

何が始まるんだ、どうなったんだ、などと言葉が聞こえてきた。

そんな中、女軒太郎を包んだ漆黒の影が、流れ落とされるタールの如く剥がれ落ちて行く。

漆黒の内部から姿を見せたのは、男の姿であった。男に戻った軒太郎である。

しかし、その姿は営業スマイルでもなく、白いYシャツにネクタイを締めたサラリーマン風でなかった。

変わっている。変身しているのだ。

長い黒髪は灰色に変化しており、黒いテンガロンハットを被ってい

る。衣類は黒いスーツに変わり、上に黒いロングコートを羽織っていた。履物は黒いブーツに変わり、首には純白のスカーフを巻いている。スカーフ以外は黒一色である。ベルトもネクタイも黒い。表情から心も魂も黒く変わったのが悟れるほどの悪党顔だった。面相が外道である。

今までとは別人であった。

黒髪の女性の時ともちがった。三つ目の姿である。

野次馬たちが言葉を失い、呆然としていた。

いったいこの男は、幾つの姿を持っているのかと思っていた。

「せ、戦闘スタイルに変身した……。軒太郎さんは本気だ……」

立ち上がりながら昂輝が零す。

表情が啞然としていた。変身した姿に驚いた訳でない。一般人相手に変身して本気を出す大人気なさに驚いていたのだ。

そこまでするのかと思う。

それと、変身した姿を野次馬に見られても良いものなのかも驚いていた。昂輝に狼になるなど言ったのは軒太郎本人なのにと……。

軒太郎が黒衣に変身するには理由がある。
一言で述べれば戦闘力のアップが目的である。

しかしながら軒太郎は、怪しげな黒衣の姿に変身しなくとも十分に強い人間だ。
身体能力は超人と言えよう。霊力も高いし妖術も多数扱える。それだけで魔人と呼べる。

だが、それだけでは並みの魑魅魍魎と変わらない。どっこいどっこいの強さにしか過ぎない。
ヴァルハラのエージェントならば、それだけでは足りないのだ。更に強くなければならない。

軒太郎が黒衣の姿に変身する理由は、自分で作り出した武具を複数操る為なのだ。

軒太郎が作り出す武具は、妖怪変化などの骸を素材に使用して生み出されるオカルト兵器である。その威力は普通の人間ならば勿論のこと、神や悪魔の類にまで有効な代物なのだ。
普段は目に見えない存在すら死滅可能な武具である。

軒太郎は、そのような武具を作り出す一流の技術を備えている。
しかし、作れるのと扱えるのでは話がちがう。

軒太郎が作る武具の中には、使用した人物の肉体や精神、時には魂までも蝕む武具があるのだ。強い武具ほど、その可能性が高くなる。

軒太郎は、そのペナルティーを緩和させるために黒衣の姿に変身す

るのである。この黒衣への変身術は、容姿を変貌させると同時に人格も変えてしまう。

武具が及ぼす怪異の影響を肉体や精神が影響を受けないように、そもそも的人格を前もって外道に落とすのである。

汚れた水に汚れた水を混ぜても汚さが変わらないように、前もって術者のステータスを魔導に落としておくことで、武具のペナルティを免れようという発想の術なのだ。

元を質せば外法の類である。

故に人格が非道に変わってしまうのだ。それに関しては、本人は気にしていない。それよりも開放された思いの方が大きいようだ。

「坂東うううううううううう」

地獄の底から聞こえてくるような声だった。

猫背で俯いた軒太郎が漆黒のテンガロンハットと灰色の長髪で顔を隠している。その下から怪奇を声が響いていた。

初めて軒太郎が、坂東を名前で呼ばずに苗字で呼んだ。そこから冗談が終了したことが悟れる。

「やっと、その糞みたいな姿になりやがったな、三外」

「お前が、させたんだ。お前が、変えたのだ」

坂東の言葉に答える軒太郎が、ゆっくりと背筋を伸ばして顎をしゃくらせる。しかし、首が据わっていないく、頭がだらしなく横に倒れていた。見下す視線が、忌々しく飛んで来る。

顔を見せた軒太郎は、まるで妖怪のような表情をしていた。

右に傾いた頭のせいか、長い髪が右目に掛かり隠している。半開きの口からは妖気が蜃気楼と変わって揺らいでいた。顔は白い。

窺える左目は血走りギラ付かせ、瞳孔が閉じている。

殺人鬼の眼差しである。

罪の無い百人の市民を、百通りの方法で惨殺した連続殺人犯が存在したのならば、今の軒太郎と同じ目を、同じ表情をしていたと思えるインパクトがあった。
初見で悪党だと分かる。

「坂東うううううううう。」

分かっているよな、お前なら。付き合いは長いもんな。覚悟はいいよな。」

「ぬかせ、外道。お前をぶち殺す覚悟は十年以上に決まってるぜ。いいや、誓っているだな、この場合。」

坂東も負けずに威嚇を返す。猛る殺気が鋭く尖っていた。

二人がお互いに向って歩き出す。まだ十メートルは距離があった。その間の空気が熱を孕んで揺らめき始める。

それは赤股夏鱗 vs 芝克己戦でも、功尻時司 vs 金本哲司線でも見られた熱くも不思議な光景だったが、三外軒太郎と坂東修也のそれは、二組の見せたものより凄く感じられた。

怖いのである。

殺伐としているのである。

近寄りがたいのであった。

軒太郎が黒いロングコートの懐に手を入れた。早速武器を漁っている。黒衣の変身は、そのためなのだ。武器を使うのは当然であろう。

昂輝の側に駆け寄る赤股が言う。

「若先生が武器を使うぞ。少年、次第によっては野次馬たちを避難させなければならぬぞ。本格的に巻き添えを喰う輩が出かねない。下手すれば大怪我だ。死人が出てても可笑しくない」

大きなサングラスが昂輝の顔に近寄り言った。その声色は真剣であった。緊張感が察しられる。

功胤老も顎を撫でながら渋い顔で頷いていた。

赤股の表情からは、極道の芝克己と戦っていた奇人のイメージが消えていた。身形はチンピラだが、中身が常識人に窺える。

真面目に野次馬たちの危険を心配している様子だ。

見た目と異なり優しい人間なのだろう。

「よし、これを使おう」

赤股の心配をよそに黒衣の軒太郎が懐から武器を取り出した。

それは二つのメリケンサックだった。

白い牙が幾つも付いたギザギザのメリケンサックだ。

牙はホウジロザメの物らしい。大き目の牙が七八本縦横に並んで付いている。

軒太郎は、その白く危険そうなメリケンサックを両手に握り締めた。

魔導凶器装着完了である。

凶暴そうなメリケンサック。昂輝も初めて見る武器だった。

しかし、何所かで見たとのことのある武器だ。

否。何所かではない。ついさっきだ。ついさっき見たメリケンサックによく似ていた。

「あれは……」

イメージが重なる。

あれはサイキックボクサー芝克己が振るっていた鋭利なメリケンサックに似ているのだ。

軒太郎の手元でギザギザ刃が、キラリと光った。

「あの武器、さっき赤股さんと戦っていたヤクザが持っていた物に似ていませんか……」

「ああ、似ているな」

昂輝が言うと赤股が頷きながら答えた。

確かに似ている。しかし、芝克己が使用していたメリケンサックより全体的に大きい。それに痛々しい。似ているが別物である。

「ああ、これか」

昂輝の声が軒太郎の耳にも届いたらしく、一度昂輝を見た後に軒太郎が、握ったメリケンサックを眺めながら語り始める。

「そう言えば、あのヤクザ者。数年前に失くしたコレの試作品を持っていたな」

「試作品……？」

単語を反芻する昂輝。緊張しながらも疑問に首を傾げていた。

どうやら芝克がネットに手に入れた軒太郎製のメリケンサックは、現在軒太郎が持っているサメ牙メリケンサックの試作品らしい。だとするならば、軒太郎が装備するメリケンサックの能力は。

殺意溢れる眼差しを坂東に戻す軒太郎。

瞳の動きからギロリと音が鳴りそうだった。

「さああてえ〜。

坂東、ボロボロにしてやるぜ！」

面妖を更にあくどくさせた軒太郎が、サメ牙メリケンサックを握り締めながらポクサーのようなファイティングポーズを取った。ステップに黒衣を揺らす。

見せる構えが芝克の構えに良く似ていた。素人目には大差なく窺える。ポクサーの構えだ。

武器だけでなくファイティングポーズすら似ているのだ。

やはり攻撃方法はサイコネシス攻撃でないのかと思う昂輝。

「ペッ！」

坂東が歩みながら地面に唾を吐いた。柄の悪い仕草の後に走り出す。

しかし無言だ。今まで見たいに叫んだりしない。猛り狂いながら突っ込んでいかない。

冷静で静かなダッシュだった。

坂東が一気に間合いを詰めようと試みる。

速い。

今まで以上に速い。

観戦している者たちに、数倍の速さでないかと錯覚させる程に速かった。無言が錯覚を与えているのだ。

シックスメン (25) (前書き)

ヤクザとの対決、なが！w

飛び掛る坂東に、防御らしい構えはなかった。攻撃的意思を滾らせ真っ直ぐに突き進む。

先に拳を振るつたのは軒太郎だった。

互いの間には三メートル以上の距離が存在していたが、かまわずサメ牙のメリケンサックを振るう軒太郎。純白の象牙を思わせる鋭利な武器が、無人の空間を切り刻む。

刹那。軒太郎がブローの技名を口走った。

「シャークナツクル！」

何所かで耳にしたような厨二臭い技名である。

振るわれたサメ牙のメリケンサックから、青いオーラが大きな波の弾丸と化して飛んで行く。

そのオーラが戦いを観戦している野次馬たちにも見えた。

靈感の欠片も持ち合わせていない普通の一般人にもはっきりと見えるのだ。青いオーラは巨大なサメの頭部である。

ジョーズ。ホオジロザメ頭部だ。

大きく口を開けて坂東に襲い掛かった。

「舐めるな！ 糞つたれが！」

罵倒と共に放たれる坂東のストレートパンチ。

全身の筋肉が柔軟に捻られ破壊力と変わっていく。生まれ出た破壊

力は、見事なまでに捻り放たれた拳に伝わっていく。

捻りの加わったストレートパンチの拳は、親指側が下を向いていた。そのまま飛び来たオーラのホオジロザメと正面衝突して空気を響かす。坂東の拳が青いサメの鼻っ面を殴りつけていた。

拳撃がサメの鼻を潰して手首まで減り込むと、風船が割れるような派手な音を鳴らしてオーラのサメが砕け取る。辺りに青い風が飛び散った。

「ぜえああああ！」

オーラのサメを蹴散らした坂東が、更に前進を続行した。力強い進行である。

またもや防御の素振りが無い。

やはりこの男、攻撃こそが防御なのだろう。

その坂東が、軒太郎の眼前に接近する。もう拳で殴れる間合いだ。坂東の距離である。

坂東が、握った拳を振り被った。

剛腕の筋肉が鋼を真似る。

「ダッ！」

気合が坂東の強面に野獣のような皺を寄せる。野生的であり、威嚇的な表情だった。

そして、振り上げられた拳が、打ち下ろされた。

まるで卓袱台でも叩くように打ち下ろされる坂東のトライビリが軒太郎を狙い撃つ。

上から攻め来る坂東に対して軒太郎が、深々と体を沈める。黒衣がしゃがんだ。回避行動ではない。

「ならば、これでどうだ！」

しゃがんだ軒太郎が拳を突き上げた。上から拳を落としてくる坂東よりもワントンポ早い。スピードが速い訳でない。タイミングが先手を得ていた。

「シャークアッパー！」

軒太郎も攻撃を防御に使う。

両脚の脚力が大地を蹴り、全身のバネが上へと弾ける。右アッパーを全身で突き上げる軒太郎。ロケットを思わせるアッパーカットが坂東の顎先を狙っていた。

そしてサメ牙のメリケンサックから再び放たれるハウジロザメが真上へと飛んで行く。青いオーラが巨大ザメとなって坂東の体を跳ね飛ばす。

「ぐはッ！」

顎にヒットしたと述べるよりも、坂東が前面にサメ肌を喰らったように窺えた。

青いサメが昇り竜の如く尾を靡かせながら夜空に消えて行く。青いサメに弾き飛ばされた坂東が後方に激しくよろめく。倒れない

が間合いを離す。

「シャークナックル！」

更に繰り出す軒太郎の鯨拳。

青いオーラが空飛ぶサメとなって泳ぎ迫る。

見たまま飛翔鯨だ。

「二度目はねえ〜ぞ！」

攻め来るサメにフックを合わせる坂東。超人の拳がサメの頬を殴った。

坂東の一撃で、ホオジロザメが泳ぐ方向を変えた。後ろを向いて軒太郎の方へと帰っていく。

「飛び道具返しだ！　すげえ！！！」

野次馬の誰かが叫んだ。

術を繰り出した筈の軒太郎にオーラのサメが襲い掛かった。

しかし。

「なんのこれしき！」

今度は軒太郎のフックがサメの頬を同じく殴りつけた。またもや泳ぐ方向を変えるオーラのサメ。当初の敵を思い出したのか坂東を襲う。

しかし……。

「うりゃ！」

またまた坂東のフックがサメの頬を殴って向きを変える。軒太郎の元に逃げ帰るオーラのサメ。だが、追い返されるように軒太郎のフックを喰らい向きを変えた。

このやり取りが、合計七回繰り返される。

オーラで作られたオウジロザメの弾丸は、七発目の強打を喰らうと、涙を流しながら淡く消えて行く。

飛び道具返しと、投げ返しが許されるのは七回までである。

世界の英雄たちの戦いに、古くから伝わる特別ルールであった。あのオーラのサメは、そのルールに縛られているようだ。

「ちっ」

舌打ちを鳴らす軒太郎が、ボクシングの構えを解いた。両腕を下げる。

坂東も一息つけている様子だ。攻めてこない。

ギザギザのメリケンサックを見ながら不機嫌そうに軒太郎が述べる。

「試作品の頃よりは使えるが、やっぱり俺には合わない武器だ。

この手の武器は、塩臭い海の男が使えるばい。俺のようなシティーボーイにゃあ、むいてないな」

喋りながらサメ牙のメリケンサックを両手から外す軒太郎。外したメリケンサックを黒いロングコートの中に戻すと別の武器を物色しはじめた。

シックスメン (25) (後書き)

ネタが古い。

今時の若者には分からないかな…… W

「よし、君に決めた！」

黒コートの中を漁っていた手が止まると、元気良く軒太郎が言う。そして次なる武器を引き出そうとしていた。

「確か、ハゲのヤクザも俺が作った試作品をもっていたな」

赤長棒。

功尻老と戦い破れた中本が持っていた武器。

両端から火を噴く赤い棍棒。あれのことだろう。

メリケンサック同様に、あの赤長棒も軒太郎が作った武器の試作品の様子だ。

そして、武器として完成された赤長棒をコートの中から引き出す軒太郎。黒コートの胸元が大きく膨れ上がる。

「そ〜れえ〜」

陽気な掛け声と共に引き抜かれる魔道武器。

野次馬たちの歓声が上がる。

黒コートから引き抜かれた武器は巨大だった。

大きい。

とても黒コートの中に納まる筈のないサイズの武器だった。

「な、なんです……、あれ……」

言ったのは昂輝だった。呆然とした表情である。他の野次馬たちも似たような顔をしていた。

近未来からやって来た猫型ロボットのポケットを思い浮かばせる機能を持った黒コートの懐から出てきたのは、巨大な棍棒だった。三十センチ程の棒の両端にドラム缶サイズの円柱が突いている。

色が赤い。

それだけが金本の赤長棒と類似していた。

それ以外は試作品の面影すら残していなかった。

誰の目にも一目で判る程に別物である。

何よりも武器と呼べる大きさでない。重すぎでバランスも悪いように見える。

昂輝には、人の力で扱えるとは思えなかった。

寧ろ、学校のグラウンドに置いてあるローラーが二つ並んでいるように見えた。

昂輝もサッカー部時代に何度か牽いた思い出がある。

あれは、常識の範囲なら武器と呼べない。

その巨大棍棒を片手で軒太郎が軽々と持ち上げて肩に背負った。

顎をしゃくらせ見下すような眼差しで坂東を見ていた。忌々しい態度である。

「さてさて、何人が立っていられるかな」

言う軒太郎が、背負った巨大棍棒の片端を地面に落とす。大きな音と振動が突かれた地面から周囲に広がった。

赤長棒と違い木音でなく、鉄の音である。

途端である。

巨大棍棒から周囲に熱風が飛び散った。灼熱の温度が周囲に広がる。

「うわッ！」

「きゃッ！」

思わず声を上げる人々。

白目を剥いて数人の人間が倒れこむ。気を失った様子だ。

気を失わなかった者たちは、辛そうな顔付きで両耳を両手で押さえ
ていた。

昂輝もだ。

平然と立って居るのは極道コンビの二人と坂東のみである。

野次馬の四割近くが倒れていた。女性陣は、ほぼ壊滅である。

「な、なんだ！ 耳の奥が痛い!？」

鼓膜が痛いのだ。苦痛の表情で昂輝が冷や汗を流している。

巨大棍棒が地面を突くことで発生した熱風が、何故か鼓膜を攻め立
てたのである。

原理は解らないが、あの武器には、そのような能力が有るのだろう。
試作品の赤長棒も熱を操った。おそらくは、あの巨大棍棒も熱を操
り人体に障害を与えるのだろう。

辺りを見回しながら功凧老が言った。野次馬たち全員にだ。

「おい、あんたら。続きが見たかったら倒れている連中を引っ張っ
て物陰に隠れる。」

これ以上巻き沿いを喰いたかねえだろ」

功風老の助言を聞いた野次馬たちが、近くに倒れている人々を引っ張りビルなどの物陰へと運んで行く。そして隠れながら続きを窺う。昂輝も見知らぬサラリーマン風男性を引っ張りヴァルハラビルの入り口へと避難した。

そこには、先程昂輝と一緒に階段から転げ落ちたヤクザ者が一人倒れていた。その他にもイゴールに撰関されて追い出された二人も横たわっていた。三人とも意識はない。

「よし、目障りな邪魔者が消えたから、思いつきりやり合おうじゃあないか。なあ、坂東」

「ほざけ、糞野郎。その武器で俺を倒せると思っているのか」

「どうだろうな。お前はタフだからな。だが、試す価値はあるだろう」

「べっ」

坂東が、顔を横にして唾を吐く。そして走り出す。

「相変わらず真っ直ぐだな」

言いながら軒太郎が巨大棍棒を横に振り被る。獣の如く真っ直ぐに走り寄る坂東に、熱風を揺らしながら一撃を振る。

「おうらあああああああああああああああああ！」

咆哮を上げる坂東に、横振りの巨大棍棒が迫る。それでも坂東は、迷う事無く真っ直ぐ走った。スピードを僅かにも落とさない。寧ろ加速させていた。

大きな音が轟く。

鉄と肉が激突した音だ。

生命と鉱物が衝突した音である。

坂東がアメフトの選手を真似て肩から巨大棍棒とぶつかり合ったのだ。

恐ろしいまでの気合である。男の意地である。根性と勇気の量が常人と桁が違っていた。

しかしながら一撃の激突に勝利したのは、魔導武器の巨大棍棒であった。

周囲に熱風を吹き嵐ながら振り切られ、坂東の体躯を打ち返す。

坂東の肉体が赤い炎を燃やしながらかんで行った。

斜め四十五度にだ。距離も長い。

ホームランである。

燃える体。

火球と化した坂東が、背中から地に落ちる。一度跳ねて回転すると、綺麗に両脚で着地した。すっと立つ。

着地した坂東が、背筋を伸ばして胸を張る。きりつと立つが、全身が赤々と燃えていた。火達磨である。

しかしながら全身を焦がす炎を無視していた。焼ける熱さも痛みも感じていないように窺える。

「うううううおおおおおおおおおおお！」

燃える坂東が身を丸めて喉の奥から獣声を唸らせる。低い声が徐々に大きく変わる。

「ダツア！！！！」

溜め込んだパワーを弾かせるように気合を放つ坂東。丸めていた全身を広げながら胸を突き出して背を大きく反らした。天に吼えた。

気合の一喝に全身を焦がしていた炎が吹き飛ぶ。坂東が爆発して火花が散った。

途端に走り出す坂東。

先程、巨大棍棒で打ち返されたことすら忘れ去り真っ直ぐに走り猛る。獣の咆哮を上げていた。

「学習能力のない奴め！」

言いながら巨大棍棒を頭より高く翳す軒太郎。両手で巨大棍棒をクルクルと廻し始めた。
軒太郎の顔は、テンガロンハットの下で怪しく笑っていた。口元の端が釣りあがっている。

「だが、その愚かさは、キライじゃない！」

頭上で回転させていた巨大棍棒を、ゴルフのスイングに似たモーシヨンで振るう。

地面すれすれの位置を巨大棍棒の端面が過ぎると、赤く火花をちらす熱の塊が生まれ出て、地を滑りながら坂東目掛けて進んで行く。

「喰らえ、熱風拳！」

どうやら赤い火花のウェーブは、そのような名前の技らしい。

「こんな小細工が効くか！」

走る坂東に、地面を削りながら迫る熱風拳。坂東は進行を邪魔しようとしている軒太郎の妖術に、上から拳を落として押しつぶす。

「邪魔だ！」

気合の一発だった。

拳で打たれた熱風拳が砕けて消える。
そしてまた坂東が前進を再開させた。

「これならば！」

熱風拳を打ち消された軒太郎が、再び巨大棍棒をスイングさせた。また熱風拳を繰り出す様子だ。

だが、今度は少し違う。巨大棍棒の片端で熱風拳を作り出すと、反対の片端で熱風拳に二つ目の熱風拳を重ね合わせる。

「ダブル熱風拳！」

熱風拳に熱風拳を重ね合わせたダブル熱風拳は、見たままに二倍の大きさを有していた。更に巨大化した熱風拳が坂東に滑り迫る。

荒れ狂う炎の津波、ダブル熱風拳。それを見た坂東がジャンプした。しかし、ジャンプが低い。ダブル熱風拳を飛び越えられる高さではなかった。

避けきれない。間違いなく巻き込まれる。

飛んだ坂東を見て瞬時に悟る昂輝。

あの跳躍は回避行動ではない。攻撃への跳躍。勢いを武器に変換するつもりだ。そう予想した。

「なんどやっても無駄だ！ そんな小細工が効くと思つなよ！」

飛んだ坂東が、降下速度を加えてダブル熱風拳に、拳を振り上げながら飛び込んでいく。

やはり拳で打ち消す積りだ。

「パワー弾空だー！」

なんか効いたことある技名だと思しながらも坂東の攻撃から目を放せない昂輝。

昂輝と同じようなことを思う人々の前で坂東が、拳一つでダブル熱

風拳を消し潰す。

熱風の嵐が轟いた。

そして勢いそのままに走り続ける坂東。

「またせたな〜！」

ついに軒太郎の眼前に舞い戻った坂東。双眸を赤く血走らせながら口だけで笑っていた。

だが、軒太郎は返事をせず、体を廻して背を見せる。巨大棍棒を全身のバネを使つて振り被っていた。

「三外、お前は、その棍棒の痛さをしらんだろ！」

坂東の会話を無視して巨大棍棒を振り被った軒太郎が、今一度坂東を打ち払おうと攻撃を振るう。

風が熱を孕む。

横振りの巨大棍棒が坂東に迫る刹那、素早くコンパクトな右フックを打ち出す坂東。

その拳が赤く燃えていた。

巨大棍棒が放つ妖気と同じ炎を宿していた。

「ぐがあッ！」

スピーディーなフックが軒太郎の顔面を捉えた。

醜い声を吐く軒太郎。

途端、二人の間で熱風が爆発して吹き荒れる。灼熱の嵐が巻き起り、軒太郎だけを遠くに飛ばす。

「ぐはああああ……」

爆発した坂東のフックに打ち飛ばされた軒太郎がアスファルトの上を転がった。その近くに巨大棍棒が落ちて来る。遅れてテンガロンハットがポトリと落ちた。

倒れた軒太郎が、ゆらゆらと立ち上がろうとしていた。

テンガロンハットを拾い上げ頭に被り直す。

黒いロングコートから薄っすらと煙を上げていた。

「凄いですね先生」

「ああ、並みの人間風情の出来る芸当じゃあねえなあ」

赤股の言葉にそう返した功風老。

武天老師と、その弟子が、坂東を見て驚いている様子だった。

この二人が驚いたと言っただから、坂東は普通でないのだろう。

「ど、どう言っことですか？」

問う昂輝に素直に答える功風老。

「あのヤクザ者、二代目が武器から放つ妖力を拳の中に吸収してお返しとばかりに打ち返してやがるんだ」

「打ち返す!？」

「おうよ。」

あれじゃあ立派な妖術の部類だが……」

「だが？」

語る功風老は、齒切れが悪い。なにやら腑に落ちないことでもあるようだ。

ゴツゴツした手で四角い顎を撫でながら話を続けた。

「だがのお。あのヤグザ者から妖力も霊力も感じない。それに妖術を使用した素振りも見受けられんのじゃ」

「と、言いますと？」

「何故にあのようなことが出来るのか、理屈が解らんのだあ」

「なるほど……」

その言葉を溢して坂東の方を見直す昂輝。

妖術だろうと魔術だろうと、使うには原理が存在して法則があるらしい。坂東は、それを無視して軒太郎の術を吸収して返しているよ
うなのだ。

妖術魔術事態が非常識な存在にも拘らず、その非常識なサイドに生きる住人にまで非常識と言わせているのである。
やはりこの男は可笑しいのだ。

更に語る功風老。

「昔から怪力を扱うとは聞いていたが、数年前にあのヤグザ者を見たときには、あのようなことは出来なんだぞあ」

と、言うことは、坂東が今見せている技は、この数年で会得した術だと言うことだ。

対軒太郎用に習得してきたと言うのだろうか？

昂輝は一瞬そのように考えたが、今までの坂東を鑑みる限り、そのようなことをわざわざ習得してくるタイプには思えなかった。

小細工を労する柄ではない。

勝つために妖術魔術の類を持ち出すどころか、武道武術すら引つ張り出さない男であろう。

そのような、真つ直ぐな男だ。

真つ直ぐすぎて不器用な男の筈である。

僅かな時間で、それが悟れる。

誰にでも簡単に悟られるタイプだ。

ならば。

「偶然の産物……」

「可能性はあるな。あのヤクザ者ならばな」

二人の意見が可能性だけならばと一致する。

坂東修也。

その可能性が正しければ、本格的に無茶苦茶な人間である。軒太郎と対立関係になるのも理解できた。

類が類を呼ぶ。

変人が変人を呼び寄せたのだ。

昂輝は自分を棚に上げて、そう考えていた。

幾度目の仕切り直しだろうか。

爆発する拳で軒太郎に強烈な一撃をお見舞いした坂東が、巨人のよ
うな足取りで、堂々と進行を始める。

坂東の体からは、薄っすらと煙が上がっていた。

軒太郎の体からもだ。

両者の体軀から激戦の灼熱が燻り煙を上げているのだ。

「ペッ！」

坂東が唾を吐く。

坂東の進行は力強くも穏やかな足並みだった。

それをテンガロンハットの唾越しに睨む軒太郎が、ゆっくりと右手
を黒コートの懐に滑り込ませる。

まるで懐に忍ばせた拳銃にでも手を伸ばしたようである。

本日三つ目の魔導武器を弄っているのだろう。

軒太郎の口元が、一瞬だがニヤリと笑った。それに合わせてピタリ
と手の動きが止まる。

目的の武具でも探り当てたのだろうか。

「妖気を吸収するならば、吸収されない道具を使うまでだ」

軒太郎が言いながら黒コートの懐から右手を引き抜くと、何やら小
さな物を、人差し指と親指で摘んでいた。

小さくて卵形の赤い塊。大きさは男性の親指より少し大きい程度で
ある。

それが不気味に、赤く光っていた。

魔石のルビーである。

「あれは……」

見ていた昂輝が呟く。

見覚えがある宝石だった。

「あれは、五色鬼との戦いで僕が使った宝石……。ヘルハウンドの細胞が封印されている……」

それだけではない。多次元に移動できる魔女の宝石もルビーであった。

今、軒太郎が黒コートの中か摘み出したルビーは、そのどちらかの可能性がある。

もしかしたら、そのどちらとも異なる能力を秘め赤石かもしれない。どちらにしてもだ。町の宝石店に売られている普通のルビーとは別物の筈。魔石には違いない。危険な宝石である。

怪しげな赤光を放つルビーを摘み上げる軒太郎が、自分の顔の横に並べる。

赤い光が軒太郎の半面を奇怪に照らしていた。

「これで最後にする」

軒太郎の言葉に歩みながら睨む視線を返す坂東。

軒太郎が何をほざこうが無視して進む。

「そろそろ夜も遅くなってきた。明日も仕事があるんでね。何時ま

でも旧友と遊んでも居られないんだよ」

「社会人ってのは、辛いな」

軒太郎の言葉の後に、茶化すように言ったのは功凧老である。悪ふざけの発言に、皺の深い顔が微笑んでいた。悪戯好きの悪餓鬼が見せる表情であった。

「御託は聞き厭きた。俺もそろそろ終わりにしようと思っていたところだ。奇遇だな」

言いながら坂東が足を止めた。距離は軽いダツシユで直ぐに縮まる間合いだった。

「ああ~~~~ん」

坂東を眼前に、軒太郎が上を向いて口を大きく開けた。そして摘み上げたルビーを口の中へと落とす。ゴクリと喉を鳴らして軒太郎が魔石を飲み込んだ。

「飲んだ！」

思わず叫んだのは昂輝である。

軒太郎はルビーの中に封印されている何かと同化する積りらしい。きつとそうである。

「昂輝君は良き実験台だったよ。サンプルのヘルハウンドと上手い具合に融合してくれたからね。素晴らしいデータが取れたよ」

やはりそうだ。間違いない。
軒太郎は何かと同化する積りだ。

昂輝は、自分が実験台でデータを取られていたことよりも、軒太郎
自らが魔石に封印されている何かと融合しようとしていることの方
が驚きだった。

自分には呪いの再生能力があったから良いが、生身の軒太郎にあれ
が耐えられるのだろうかと思う。
思うだけで、心配は抱いていない。

「ああ…… あああああ…… あああああああああ」

暫くすると、両腕を抱え込みながら軒太郎が震えだす。内股で震え
る体を丸めていく。

変化が始まったのだろうか。

融合が始まったのだろうか。

野次馬たちが、物陰からどうなるのかと見守っていた。

「ううがあああああああああ！」

吼える軒太郎。

顔から大量の汗を流していた。嗚咽しそうなのか大きく口を開けて
いた。

体が見る見ると変化していく。

腕が太くなっていく。

脚が、腿が、太くなっていく。

胸板が筋肉で盛り上がる。

両手の爪が、猛禽類の如く野生的で凶暴そうな角度に尖っていった。

顔は堀が深くなり顎の鰓が張る。

骨格が変わっていくのだ。

更に肌の色が変わり始める。

人より若干白く感じられた肌色が、黒く染まっていく。まるで鋼の黒である。硬そうである。

怪物に変わっていく。

見る見る変わっていく。

そして極めつけの変化が始まった。

身長が伸びはじめる。

身長が伸びたと表現するよりも、体躯が巨大化を開始したと言えた。みるみる巨大化していく。

あっと言う間に四五メートルの巨体と化す。

シャツは破れ、ズボンも破れて落ちていく。黒いロングコートだけが巨大化に合わせてサイズを変化させていた。一緒に大きくなったのだ。

「これは……」

巨大化した軒太郎を見上げながら言う昂輝。
表情が露骨に驚きを表していた。

「これは、黒鬼の鉾鬼……」

昂輝がかつて戦った巨大鬼の名前を呼ぶとほぼ同時に、軒太郎の額から二本の角が生え伸びた。

昂輝が言うとおり、眼前の軒太郎が変化した姿は、五色鬼の一匹と瓜二つであった。

違うのは一緒に巨大化した黒いロングコートを羽織っているくらいだ。

あと、よく見れば、小さなテングロンハットをちょこんと頭にかぶっている。

雑貨ビルが軒を連ねる裏路地に、突如現れた巨大な黒鬼。

野次馬たちが啞然としながら見上げていた。

悲鳴を上げる者すらいない。驚愕のあまり声すら出ない。

「馬鹿息子めが。派手に遊びすぎだ」

ビルの窓に片肘を掛けた眼一郎が、巨大化した息子を見ながら溜息をついていた。

これではヴァルハラ的一般人相手に変身禁止のルールも台無しである。

「これで行くぞ、坂東。文句はあるまい！」

「上等だ、三外！」

上から見下ろす鬼軒太郎を下から睨み上げる坂東。
軒太郎の変化を目の当たりにしても、巨大な黒鬼の登場を目の当たりにしても、坂東は腰が引けていなかった。
堂々と振舞っている。

「がああああああ！」

咆哮を上げながら軒太郎が拳を振り上げた。両手のだ。
そして坂東目掛けて振り下ろす。二つの巨大ハンマーが坂東に迫る。

「だあああああああ！」

坂東が落ちて来る鬼の拳を両手で受け止めた。
重みに腰が沈みながらも蟹股で耐える。両脚が、足首の辺りまでアスファルトに減り込む。

「どうした、三外！ でかいわりには非力だな！」

「うがああああああああああ！」

巨人のパワーを受け止めて見せた坂東が、軒太郎を罵っていた。
だが、表情に余裕は見取れない。罵りながらも必死なのが悟れる。
力だけなら五分の様子だ。
流星は怪力超人坂東修也である。巨漢の鬼と化した軒太郎と正面から渡り合っていた。

巨大な黒鬼と化した軒太郎が、振り下ろした二つの拳の隙間から顔を覗かせる坂東を睨みつけていた。
見下ろす鬼の軒太郎。

握りこまれた岩のような鬼拳は坂東の頭より大きかった。
それを見事に受け止めた坂東は、怪力に全身の筋肉を震わせていた。
良くぞ受け止められたものだ。感心してしまう。

「見事だな、流石は坂東。 では、これならば！」

黒鬼の軒太郎が言うや否や右の蹴り足を繰り出した。黒い中足（爪先の裏側）が、両手で神輿でも担ぐように堪えていた坂東のガラ空きの腹部を蹴り上げる。

坂東のストマックに特大の蹴りが突き刺さる。

蹴られた坂東の体が後ろへと滑るように飛んで行く。

だが、両脚で踏ん張り堪えていた。踏ん張った両足がアスファルトを削り取り二つのラインを粗く掘作る。

十メートルちよつとは飛ばされただろうか。坂東が苦痛に顔を顰めていた。

流石に巨鬼の蹴りは堪えたらしい。

後方に飛ばされた坂東を、今度は鬼軒太郎が追った。

巨軀が低い姿勢からダッシュする。

今宵、軒太郎から追撃に出るのは始めてのことだろう。

そこから決着を望む軒太郎の意思が感じ取れた。鬼と化してまで坂東を退けたいのだろう。

そして、坂東の目の前に迫った鬼軒太郎が腰を捻って右拳を後方に下手で振り被る。

狙いは大振りのアッパーカットだろう。大きなモーションから悟れた。

素人の昂輝にも解った。

全身をスイングさせて全力の拳を、アッパー気味にぶち込む積りなのだろう。

強打を狙っている。

あれほどの大型な拳だ。打ち込まれる衝撃と重さは何トンの破壊力になるのだろうと戦慄しながら想像する昂輝。

そして、想像が少年の記憶を呼び戻す。

昂輝は体験済みだ。

あれと同じ拳を、あれと同じ蹴りを、あれと同じ鬼の強打を、何度も何度も受けている。

そう、昂輝は、あの黒鬼と一度戦っているのだ。

四メートル以上の身長を有する凶暴凶悪の黒鬼鉦鬼、土台鬼の鉦鬼と戦っているのだ。

昂輝の戦慄を余所に、振られた拳がアッパーという技となり坂東に迫る。

褪せる坂東が両腕を縦に並べて肉厚の盾を築いた。二本のマッスルアームが防壁と化す。

黒鬼の巨拳を受け止める体制が出来た。これで見事凌ぐ積り。

しかし。

振られた鬼軒太郎のアップercuttが防御を固めた坂東の眼前で空振る。

巨大な拳が夏の暑い空気を煽って温い風だけを坂東に届けた。狙いを外した大きな拳が、勢いを緩める事無く天を打つ。

防御に全身の筋肉を硬直させていた坂東が、鬼軒太郎の空振りにキョトンとしていた。防御の力みが、思わず緩む。

盾にしようと並べた剛腕の隙間から窺う坂東。

アップercuttを空振った大きな背中が見えた。黒いロングコートの裾が靡いている。

何故に空振り！？

坂東の脳裏に疑問が過ぎった瞬間のことである。

ガードに並べた腕の隙間から見える光景。巨大な何かが迫って来た。

激突。

突如の衝撃が全身に響く。

視界が激しく揺れて、内臓がシェイクされた。

全身の隅々までにダメージが広がる。

刹那に見えた何かは、大きな足の裏だった。

それが、ガードに並べた腕の上から激突してきたのだ。

防御の盾は存在していたが、防御は成立していなかった。

アッパーの空振りに気を取られて、筋肉の力みを緩めてしまったからだ。

力んでいない体に、衝撃が直撃してしまったのである。こうなると、並べていた剛腕二本なんぞ飾りにすぎない。

衝撃の正体は、鬼軒太郎の後ろ廻し蹴りだった。下から掬い上げるような後ろ廻し蹴りである。

防御の為に眼前に並べられた太い腕が視界を狭めていた。それが軒太郎のフェイントを成功させた要因である。

坂東的には、思いもしない意を付かれた状況であった。

フェイントからの後ろ廻し蹴りを直撃させた鬼軒太郎は、インパクトの瞬間に、足の指を丸めてフックを作る。その指を坂東の腹部に引っ掛け、後ろ廻し蹴りの勢いを上へと向けた。体躯を引っ掛けられた坂東が、上へと飛んで行った。

更に鬼軒太郎が巨大な体を捻らせながら、空中に浮かされた坂東の高さを確認した。

「高さ八メートルほどか。丁度いい高さだ！」

言いながらも更に体制を捻らす鬼軒太郎が、背中からジャンプした。右の爪先で地を蹴る。そして両脚を伸ばしながら股を大胆に開いて飛ぶ。

「レッグトマホーク！」

巨軀にスピンを加えながら放つ大技は、大車輪キックであった。巨体にも関わらず可憐なホームである。

地を蹴って巨軀を浮かせた右の爪先が、半円を描きながら脚撃と化して宙を舞う坂東を狙う。

巨漢舞う蹴り技は、言うがまま脚の戦斧に見えた。

「ぎいぐう！」

鬼軒太郎の大車輪キックが坂東を捉えた。

ダイナミックな蹴り足が、坂東の背中を轢き撥ねる。戦斧がザクリと背中に減り込んでいた。

坂東の体が斜め下に加速して墜落する。

地面に惨くも激突した。

肉が跳ねる。

坂東がアスファルトに弾むなか、鬼軒太郎が尻餅を付くように着地した。

そして直ぐに起き上がった。

だが、攻撃を成功させた鬼軒太郎よりも先に、攻撃を身に受けた坂東の方が先に立ち上がった。いた。

仁王立ちで、遅れて起きた鬼軒太郎を睨み付ける。

しかし坂東は、鼻や口から赤い血を流し溢していた。鮮血が顎から零れて分厚い大胸筋肉を染め上げている。

気合で毅然と振舞うが、確実にダメージを背負っているのが窺えた。隠しきれてない。

「呆れるほどのタフネスだな、坂東」

「生まれつき野生的だね」

化け物同士が言い合い睨み合う。

「ドデカイかりに、たいしたことないな、三外」

坂東が嘲る刹那。軒太郎が仕掛けた。

巨体が俊敏なまでのステップで間合いを瞬時に詰め、フッラッ
シュの如き速さのジャブを打ち放つ。

黒い閃光だった。

巨拳が斜め上から坂東の頭を捉えて弾く。そして素早く引かれた。
大型のジャブを顔面に受けた坂東が、上半身を一撃のショックに反
らして揺れた。

軒太郎のジャブが速すぎて、躲すも防ぐも叶わなかった。

更に続く軒太郎のジャブ。

黒い閃光が、連続で放たれる。

そのすべてが坂東の顔面を捉えて幾度も揺らした。

坂東が、やつとのこと防御に両腕を上げた時には、連続のジャブを
四発も顔面に受けていた。

五発目のジャブが、防御に使った両腕を叩く。両腕に痺れが電撃の
如く走った。

ガードに成功しても重すぎるジャブだった。

坂東が頭部を庇う様にガードを築くと、鬼軒太郎の攻撃手段が変更
させた。

連打のジャブが止まり、ローキックを繰り返す。

「ギィー！」

鬼軒太郎の振るった極太の脛が、坂東の脚を横から打ち叩く。脚を攻めたと見るよりも、大雑把に下半身を攻めた感じに見えた。

だが、そのローキックは、子供が遊びでサッカーボールを蹴るような貧弱なものでなかった。

ローキックを繰り返すのに膝関節を腰の高さまで上げて、更に膝よりも脛を高く上げる。その高さから斜めに振り落とすように打ち込む、角度の厳しいローキックだった。

脚を完全に破壊させる為に工夫された格闘技のローキックである。訓練されたローキックである。

打ち下ろしのローキックを下半身に受けた坂東が、顔を歪ませながら姿勢を崩す。

脚に受けた衝撃が、横に抜けていかず真下に抜けて行く。相手を転ばす為の衝撃でなく、肉に響き、骨に轟く衝撃だった。

坂東がローキックにバランスを崩した際に、鬼軒太郎が姿勢を変える。

両脚を横に揃えて大きく開く、そこから腰を落として構えを築いた。

空手の構えだ。

騎馬立ちである。

そこから胸を開いて両腕を左右に広げた。両手の形は広げられ掌が上を向いている。

「相撲？」

昂輝が言った。

鬼軒太郎が見せる開かれたポーズが、まるで横綱の土俵入りで見せるワンシーンに重なったのであろう。

だが、それはチョップ。ふたつの手刀である。

そして鬼軒太郎が、両腕の手刀で坂東の太首を挟むように狙う。同時に繰り出す。

「ぐ。ぶッ！」

坂東の首が二つの水平チョップに挟まれるように打たれた。モンゴリアンチョップである。

首がちゃん切れそうだった。

「とっっ！」

続いて鬼軒太郎の頭突きが落ちて来る。

弩級の鬼頭が、急降下してくる。

ヘッドバットだ。

鬼軒太郎の角と角の間にある額が坂東の脳天を、杭で打つように強く打つ。

頭突きの重みに首が縮まった。

続いて鬼軒太郎の右膝が動く。

横膝蹴りが坂東の頭部を打った。ゴンと硬い音が脳内に響いて、首が横に曲がる。

折れそうに首の骨が軋んだ。

続いて鬼軒太郎の左手が振るわれる。

肘を曲げて尺骨を鈍器に変えて打ち込んでくる。重い打撃が、今度は左から坂東の首筋に叩き込まれ頭部を揺らした。

首に積み重ねられる蓄積ダメージ。

上から、右から、左からと頭部を強打された坂東が、混沌と意識を揺らしていた。

超人てき身体能力を秘めている坂東ですら気絶寸前に追い込まれる。首が弱れば弱る程に頭部を支えきれずになり、衝撃に脳が揺らされるのだ。

そして、ぐらつく坂東の眼前で、前屈立ちの構えを築く鬼軒太郎が、握った右拳を腰に添えて狙いをじっくりと定める。

距離は零。超近距離。

この間合いで巨鬼が正拳突きを狙っていた。全力の一撃をお見舞いできる危険な距離数だった。

おそらく今の坂東では、これほどまでにじっくりと時間をかけ姿勢を整えた攻撃すら躲す余裕はないだろう。視界はドロドロに歪んで見えていないに等しいのだ。

「せいっ！」

深々と腰を落とされた万全なまでの正拳突きが放たれた。

案の定、朦朧とする坂東には躲せない。巨大な正拳突きを、顔面から胸にかけて直撃してしまう。

ついに坂東の体躯が、捻りの加わった衝撃に撥ねられ転倒する。後頭部をアスファルトに打ちつけ跳ね上がると、今度は地面の上を、ゴロゴロと転がっていた。

坂東が転がっていた先は、あの細く狭い路地である。

あの路地の薄暗い闇が、本日幾度目だろうか、人の姿を包んで隠した。

鬼軒太郎がゆっくりとした歩みで坂東を追っていく。

街灯の光が届かない幅狭い路地の方へと進んでいった。

一步一步の重みにアスファルトが窪む。

昂輝には狭い路地の奥で、ゆらゆらと立ち上がる黒い塊が窺えた。

坂東の影だろう。まだ生きている様子だ。

鬼軒太郎も見えている様子である。極太の右腕をグルグルまわして片の関節を解していた。

鬼面が余裕に緩んでいた。

昂輝の記憶に残る鉾鬼の表情は、いつも怒り狂う獣の様だった。そこが鬼軒太郎とは同じ巨軀でも感じが違うところだろう。

「それにしても、なかなかの体術すな、先生」

チンピラを演じる赤股夏鱗が、隣に並ぶ老師に話しかけた。功風老が、片手で顎を撫でながら答える。

「ああ、まったくじゃな。あれで見よう見まねだというのだから、たいしたものよのう」

「見よう見まね……?」

老師の言葉に不思議な表情で問う昂輝。

今見せた鬼軒太郎の攻撃のことを言っているのだろうが、あれ程の打撃技を見よう見まねと言う意味が察しられなかった。どう言うことなのかと首を傾げた。

「そうじゃよ若いの。あれで二代目は格闘技の素人だ。正しく述べれば、二代目は素手の技を習ったことが無いのだよ」

「習ったことが無い?」

「そうじゃあ。ワシが教えたこともないし、何処かの道場で習ったとも聞いていない。」

二代目はな、ワシや弟子の夏鱗の戦う姿を見て覚えたのだよ」

「それ即ち、見よう見まねってこった」

「そうなんですか!？」

ふざけ加減の赤股。その言葉に驚く昂輝。

あれだけ整った打撃技の数々が、何も指導を受けていない技術だと思えなかった。

まっとうな武道の先生に付いて、とことん練習を積んだものに見えるが、どうやらそうでないようだ。

見て覚えた技を、独自に稽古したものようだった。

「実に勿体無い逸材だよ。ちゃんと稽古を付けてやれば、もっと磨かれるものを……」

「若先生は、稽古とかトレーニングの地味さが嫌いな様子ですからね。ひひひ」

下品に笑う赤股。

我流の技にしては立派だが、功尻老や赤股夏鱗のような超一流が見れば、粗さが容易く悟られてしまうレベルのようだ。

昂輝には、どこがどう異なるのか、どう粗いのが解らない。一緒に見えてしまう。

しかも、一人稽古すらしていない技のようだ。

軒太郎の才能が高いということは、よく理解できた。

見ただけで覚える。

練習をしなくても使える。

実戦で利用できる。
まさに天才なのだろう。

だ　　が　　。

それよりも昂輝が恐ろしいと想像しているのは、その打撃技を振るう軒太郎ではなく、その打撃技を振るう鉾鬼の巨躯であった。あの巨大鬼が武術を使用することが驚愕の脅威に感じていた。四メートルの巨人が、並みのサイズの人間と同じ様に武術を振るうことが恐ろしいのだ。

昂輝は黒鬼の鉾鬼と戦っている。

戦い　　、その巨体とパワーに押し切られ、何度も殺されている。数え切れないほど殺されたのだ。

しかもである。ただ殺された訳ではない。その死にかたは、ミンチである。潰され、引き千切られ、そして一度は食われている。徹底的に殺されたのだ。

一日で死んだ回数は、その日が一番多かった。

その戦慄的戦力を有する巨体を手に入れたのが軒太郎なのだ。知能が高く、作戦を立て、戦法を工夫して、フェイントまで仕掛けてくる。

そのような巨人が、真似事レベルとはいえ、マーシャルアーツを使用してくるのだ。恐ろしくない訳がない。脅威である。

間違いない今この黒鬼は、昂輝が故郷の大塚邸で戦った黒鬼よりも数段強くなっている筈だ。

もしかしたら数段では済まないかもしれない。数倍かもしれない。昂輝が知るその過去から計れる現実が驚愕だった。昂輝の想像が正しければ、恐ろしい真実である。

そして、もう一つの驚愕は、その黒鬼のパワーとスキルの合体攻撃を全身で浴びながらも立ち上がってく坂東の方であった。喰らったのは一発二発でない。

起き上がって来たのは一回二回でない。

鉦鬼に昂輝は、パワーだけで何度も殺された。

しかし坂東は、鬼軒太郎の力と技が合い一つとなった攻撃を受けながらも立ち上がって来るのである。

昂輝のように死なずにだ。

坂東は、人狼化した昂輝よりも強いということになる。

その戦力査定も昂輝を凹ませた。

軒太郎の体内暗器や憑き姫のカード支援がなければ勝てないことになる。

もちろん死が勝敗の判定基準ならば、昂輝には敗北はない。ないが、勝てなければ負けているのと一緒にである。

そのようなことを考えてしまった昂輝は、ならば金本や芝克には勝てるのだろうかと思った。

空想の中で二人と戦ってしまうが、直ぐに無駄なことだと思い空想を中断させた。そして歩く鬼軒太郎の大きな背中を視線で追う。

薄い暗く狭苦しい路地に転がりながら入り込んだ坂東が、闇に溶けながら立ち上がる。

闇に溶けていながらもシルエットに存在感が満ちていた。狭い路地から気合と殺気が流れ出てくる。

気合も殺気も交じり合っていない。個々の個性を主張していた。

巨体を揺らしながら路地の入り口に立つ鬼軒太郎。巨体が壁となり、野次馬たちが路地内を覗き込もうとするのを妨害していた。まるで坂東の姿を隠すように聳える。

軒太郎も主役の一人だが、今はとても視界の邪魔である。

「やっと引きずり出せたか」

軒太郎が言った。

鬼の視線が狭い路地の闇を睨んでいる。

何やら坂東に異変があった様子だ。

しかし、何を意味しているのかは、路地内を窺えない昂輝や野次馬たちには解らなかった。

好奇心に多くの者たちが、巨躯の隙間から様子を窺おうと体を揺らす。それでなかなか坂東の様子は窺えない。

その時である。

『ゲウルルルルルル！』

「えっ」

昂輝が驚きの声を上げた。キョトンとする。
狭い路地の奥から聞こえてきたのは、紛れもなく獣声。喉を鳴らす
野獣の唸り。

しかもそれは……。

「馬鹿な！」

赤股も驚きに大声を上げる。

「あれは、リミピットチャンネル！」

功皿老ですら驚き目を剥きながら言った。顎を撫でていた手の動き
が固まる。

野次馬の多くが事の次第を理解できていなかった。ただ、聴こえて
きた獣声に動揺しているだけである。

モノマネにしてはリアルに聴こえた。まさかと思う。

昂輝も驚いていた。

あれに覚えがあるからだ。獣声の方ではない。極道コンビが聴いて
驚くりミピットチャンネルの方である。

「如何にもリミピットチャンネルですよ」

ヴァルハラビルの二階窓から上半身を覗かせるロマンスグレイの眼
一郎が呟く。誰に聞こえる距離でない。

黒いジャケットに黒いハットを被る眼一郎の表情が、ダンディーに
微笑んでいた。アイパッチで飾られた笑顔が愉快に浸っている。

リミピットチャンネル。

それは、昂輝が人狼化したさいに使うテレパシーの会話術。心に直接語りかける神秘の能力である。

それを薄暗い路地の奥に立つ坂東が、獣声に換えて放出しているのだ。

リミピットチャンネルの範囲に居る野次馬たち全員に獣声は届いていた。

多くの心の鍵を外して扉を開く。

リミピットチャンネルとは、心と心の交信。相手の意思にチャンネルを合わせて思いを送る。

大きな点でテレパシーと違うところは、言葉を伝えるのではなく、意思を伝えるところにある。

日本語だろうと英語だろうと関係なく思いを伝えるのだ。相手に言葉の壁を越えて意思が通じる。言葉が翻訳されると云えば近いやもしれない。

便利な能力に聞こえるが、使い勝手が優れている分だけ燃費が悪い能力である。体力気力を大きく消費してしまう。

普通の人間が、複数の人間が持つチャンネルに対して同時に周波数を合わせるのは難しい。

チャンネル数が増えれば使うエネルギーも増える。

体調を壊したり、時には生死にも関わる。

何よりも精神が病む。

その声が超能力の類だと気付く者は居なかった。てっきり普通の声だと思い聞いている。

ただでさえ路地の奥が窺えないのだ。オカルトの素人には訳も理解出来まい。

昂輝とて己で使い、リミピットチャンネルの知識と経験があったから気づけたのだ。そうでなければ心に届く声と鼓膜に届く声の違いは悟れなかっただろう。だから驚けたのだ。

そして、狭い路地を巨体で塞ぐ軒太郎にだけ状況が完璧に把握出来ていた。

『グウルルルルウウウ』

リミピットチャンネルを唸らす坂東。

鬼の視力を得た軒太郎に見えるのは、薄暗い空間で立つ坂東の姿。その双眸が怪奇にも赤く光っていた。

獣の眼差しても光でもない。

あの怪奇な光はもののけの光。妖怪の眼光。

「残りカスの妖怪風情が。流石は野生の進化系。しぶとさだけは超一流だな」

鬼の軒太郎が言うが、意味がまったく分からない。

坂東が放つ異能力の声を聴きながら昂輝が首を傾げる。だが、何となく予想が付く。

これが坂東の正体。

坂東の怪力の秘密だろう。

「さてさて我が息子よ。幼少時代の後始末、どうかたをつける」

アイパッチの眼一郎には、巨躯の鬼軒太郎が隠す路地の奥が見えて
いるような言い方であった。

眼一郎は、すべての事情を理解しているようだ。

そして、実の息子のことにも関わらず、他人事のように笑っていた。

鬼熊

突然大きな爆発音が轟く。だが、爆発は起きていない。しかし同時に、鬼軒太郎の巨躯が後方に吹き飛んだ。

くの字に飛んだ巨大鬼が背中から転倒して、今度は大の字になる。その大の字の上に乗っかる黒い影。

黒い影は、鬼軒太郎の幾つにも割れた腹筋の上に片膝立ちで背を丸めて屈んで居た。

そして、ゆっくりと立ち上がった。

「あれは……」

見ている者たちが似たような言葉を溢していた。

おそらく影の正体は坂東だろう。

しかしながら全身が変貌していた。変身しているのだ。

頭部は熊。

全身には硬そうな黒い剛毛を生やしているが、マッチョマンそのままの逆三角形。

両手両脚は野球のグローブを付けた様に大きくなり、指先からは鋭い爪が覗いていた。

見たまま、熊男である。

「あれは、僕と同じ……」

昂輝が言った。

変身した坂東は、確かに昂輝が狼へと変身した姿に類似していた。

ライカンスロープ。ワーベア！

「あの若造、憑かれているのか」

驚きながらも顎を撫でる功尻老が言った。

直ぐに横に立つ赤股が師に問う。

「先生、あれは何ですか？」

「知らん。だが、気配からして憑き物だ」

「憑き物……。狐などの、あれですかい？」

「ああ、おそらくは動物霊のたぐいじゃあねえかな」

功尻老の答えは、曖昧だった。詳しくは解らないらしい。すると後方から幼い声が飛んできた。三人が振り返る。

「あれは、動物霊じゃないは」

憑き姫である。

「憑き姫……」

昂輝の呼びかけを無視しながら三人の横を過ぎて前に進む憑き姫。白いワンピースが風もないのに揺れていた。

昂輝が憑き姫に訊く。

「じゃあ、あれは何だって言うんだ？」

「あれは動物霊に近いけど、もっと進化した存在。妖怪に変化した怪物よ。」

「いいえ、怪物と区別するよりも鬼と別けたほうが的確かしら」

「鬼……」

憑き姫の説明を聞いた昴輝が視線を坂東に戻す。熊男に変身した坂東の額を凝視したが、鬼の角は見当たらない。あれが鬼だとするならば、角の無い鬼である。

「鬼熊よ」

「鬼熊？」

それが変身した坂東に憑いている妖怪変化の名前らしい。

『ガアルルルルルルルルルル！』

巨大鬼を一撃の体当たりで転倒させた坂東が、その巨体を足蹴にしながら咆哮をリミピットチャンネルで吼え鳴らす。

鬼熊。

それは天保十二年に刊行された絵本百物語に描かれている妖怪の一匹である。

姿は熊のように巨体で、人間と変わらない悠長な二足歩行で歩き回

るとされている。

そして夜になると人里に降りてきて牛や馬などの大きな家畜を襲って山に持ち帰るといわれている妖怪であり、時には酒屋を襲って酒を飲みつくすともある。

基本的には熊が百年生きて妖怪化したと、よくあるパターンで言い伝えられているが、真相は定かではない。

この鬼熊たる妖怪は、意外と全国の多くで目撃され言い伝えられているが、一番有名なのは長野県でうる。

また北海道などでは立ち上がる熊を見ると、それが鬼熊に変化されるとも言われている。

ちなみに鬼熊と言えば、大正十五年に千葉県で起きた殺人事件の犯人である岩淵熊次郎が、鬼熊と呼ばれて大きく報道されたが、絵巻百物語に描かれている鬼熊とは関係ない話であった。

そして憑き姫曰く、目の前で猛り吼えている坂東は、この妖怪変化鬼熊に憑れているらしい。

坂東の間離れした怪力や身体能力、それに妖力を吸収してしまう能力すべてが、この鬼熊の影響らしい。

「僕に掛けられた呪いとは、別物なのか……」

「さあ、昂輝に掛けられた呪いの正体が完全に解明されていない異常は、勝手なことは言えないけど、少々異なるようね」

言いながら憑き姫が、手の中に赤い本を召還する。妖怪達の魂をカード内に封印したコレクションを纏めた本である。

「妖怪の登場なんだから、私が戦っても問題ないわよね」

鷹揚の少ない口調で喋る憑き姫が、クリアファイルの中から一枚のカードを引き抜いた。
茨巫女のカードである。

なるほど、と昂輝が納得した。

事は既に喧嘩の枠をはみ出したらしい。

妖怪の登場。

もうこれは、妖怪変化退治。

男同士の喧嘩を超えて害虫駆除。

憑き姫を加えたヴァルハラの仕事。

「引っ込んでろ、憑き姫！」

叫んだのは、大の字で横たわり腹部に坂東を乗せたままの鬼軒太郎であった。

叫ぶと同時に両拳を握り締め、腹部に乗った坂東を双拳で打ち挟む。そしてグリツと拳を捻って磨り潰すと熊男を横に投げ捨てた。坂東は転がりビルの壁に激突して止まる。壁には亀裂が走った。
黒鬼の巨体が起き上がる。

『グウルルルルル』

喉を鳴らしながら坂東も立ち上がった。

獣と化した口元からネバついた唾液を垂らしている。

「憑き姫も極道コンビも見てもらいたい。

坂東の内に取り付いた妖怪を引きずり出すのに苦労したんだ。これは俺の獲物だ」

立ち上がった巨大鬼が怒鳴るように述べると、功凧老が憑き姫の肩を後ろから叩いた。

「だ、そうな。

どうだい姫様よ。ここは大人しく見て居てくれないか。水を差すのは野暮つてもんよ。なあ」

萎れた声で諭されると憑き姫は、渋々だがカードをクリアファイルに戻した。そして赤い本も霧のように消えていく。

「勝手にしたらいいわ……」

冷たい視線を鋭く向ける憑き姫。しかし、それを見て昂輝がぼつとする。

やはり決着は軒太郎が付けるべきだろうと昂輝も思う。

昂輝に憑き姫、それに極道コンビの面々が横に並んで同胞の戦いを見守る。

黒鬼 vs 鬼熊。

戦いは化け物同士の様相に変わった。

鬼熊と変化した坂東はリミピットチャンネルからは野獣の声しか発しない。おそらくは意識を鬼熊に乗っ取られたのだろう。

軒太郎は、この状況を狙っていたのだろう。

坂東の肉体を追い詰めることで、彼の中に潜む鬼熊を焦らせた。焦らせることで宿主を守ろうと寄生虫のような鬼熊が、坂東の肉体に更なる怪力妖力を与えた。

その結果が、坂東の精神を鬼熊が飲み込んでしまった。そんなところだろうか。

功凧老が、前を向いたまま問う。

「鬼熊を内に潜ませたままあの男を倒しても、鬼熊の奴は出てこない。退治できない。」

そうなんだろ、お姫様よ」

「ええ、あの男と一緒に殺すならまだしも、宿主を生かしたまま憑き物を落とすならば、それなりの方法をとらなくてはダメよ。」

軒太郎には、その術が、あれしかなかったのよ。私やお砂ねいさん
にお願いすれば、もっと楽に事は運んだのに」

そう憑き姫は言うが、軒太郎にも考えがあったのだろう。決着は自分で付けたかったのだと思う。

大きなサングラスのずれを直しながら赤股が喋りだした。

口調はチンピラ風である。

「二代目も慈悲深いねえ」。

旧友の身を案じて、ここまで粘ったんだ。

自分がピンチにもかかわらず、相手が死なない程度に手加減を繰り返し、友の中に潜む魔物を引きずり出す。泣けるねえ」。

そう思わないかい、少年よお」

そのように赤股が述べるが、昂輝は思わない。

何故ならば、その為に自分は盾にも使われたのだ。

それにジェラシーを感じる。

軒太郎にも、坂東にもだ。

欲を述べれば極道コンビのふたりにもだ。

そのジェラシーの正体は　　。

強さへの憧れ。

軒太郎が強いのは、短い付き合いだが理解していた。

極道コンビの強さも一目で理解できた。

その強さに強く憧れる。いつか己も追いつきたいと思う。

ヴァルハラ探偵事務所に来たのも、呪いを解くだけでない。強くなる為だ。

軒太郎も極道コンビも、その憧れの目標であり参考である。

しかしだ。

坂東は違う。

彼は目標でもない。

突如現れた敵である。

しかもその敵は、己と同じアニマルチェンジャーである。

自分と同じ様に半獣に変化して、自分と同じ様にリミピットチャンネルを使う。

武術も知らず、気合と根性だけで戦う。自分と変わらない。

そして、自分と同じ様に、内側に魔を秘めている。

なのにだ。

なのに自分より強い。

それが昂輝の中に嫉妬を生み出した。今まで感じたことの無い思いを生み出した。

熊男に変身した坂東は、狼男に変身している時の昂輝よりも強い。

そのことが一瞬で悟れた。

たった一発の体当たりで、あの鉾鬼の巨体を倒したのだ。大の字にさせたのだ。

それは、昂輝には出来なかったこと。昂輝が人狼と化しても、あれ程のパワーを備えていない。

それが悔しいのだ。

自分たちが望んで手にした能力でないにしろ。否。寧ろ、自分たちが望まずに手にした能力だからこそ、その差が気に食わない。昂輝は、自分に備わる死なないと言う能力を、ただ負けない能力と思っている。

彼は、負けない能力よりも勝てる能力を欲しているのだ。

傍から見れば、贅沢な欲求である。

そう考えながら昂輝は、鬼たちの戦いを見続けるのであった。

昂輝の憧れと嫉妬の思いを受けながら軒太郎と坂東が激突を繰り返す。

先に動いたのは坂東。

両手のベアークローを翳して襲い掛かる。

その突進に巨体の軒太郎がカウンターの蹴りを繰り返す。大きな爪先が真っ直ぐに人熊を狙った。

しかしながらカウンターを狙った蹴りは空を蹴る。外れた。

真っ直ぐ突き進んできた坂東が、直角に曲がって躲したのだ。

そしてまた直角に角度を変えて軒太郎の足元を疾走して過ぎて行く。

「痛ッ！」

鬼軒太郎が一声を上げた。

繰り返した蹴り脚とは逆の脚から鮮血が飛び散った。

鬼熊の鍵爪が、脛脛に一撃を刻んで行ったのだ。肉がザックリと抉られている。

鬼軒太郎の左脹脛から鮮血が噴出した。巨漢が大きく揺れる。

坂東がUターンして戻って来た。今度はジャンプして背後から襲い掛かる。

しかし鬼軒太郎が、体を捻り振り返ると同時に大振りのバックスピ
ンナックルを振るう。

棍棒のような一撃だった。黒い裏拳が鬼熊を弾き飛ばす。

黒鬼の裏拳を空中で喰らった坂東が、真横に飛ばされビルの壁に激突して止まった。ビル全体が激しく揺れて、坂東の背中がコンクリートに減り込み三メートル程の高さで停まっていた。

「だあああああ！」

すぐさま追撃を行なう軒太郎。走りながら拳を振り上げ全力のストリートパンチを、壁に減り込む坂東に叩き込んだ。巨拳を受けた坂東が、完全に壁を突き破りビル内に消えて行く。

壁には大きな穴が開いていた。穴の向こうは空きテナントである。坂東の姿を探す軒太郎が穴を覗き込んだが、鬼熊の姿は見当たらない。

「！ッ」

穴を覗き見る軒太郎の足元で、ビルのガラスが音を響かせ割れ吹き飛ばす。背を丸め両腕で顔を庇った坂東が飛び出てきた。

突如足元に飛び出て来た坂東に視線を落とす軒太郎。下を見るや否や坂東が頭から跳ねてくる。ロケットのような頭突きが鬼軒太郎の顎をかち上げた。

「ガッ！」

眩暈。

鉾鬼の巨体が後方に仰け反りながらよろめいく。

『ガオオオオオオオオ！』

咆哮と共に跳ねる坂東。飛んではからベアークローを鋭利に光らせた。だが、飛んだ坂東が打ち落とされる。鬼軒太郎のジャブが瞬時に放たれ坂東を打ち落とすのだ。

『グウルルルルルル！』

喉を唸らせながら着地する坂東が、獣の眼差しで軒太郎の鬼面を見上げた。

「ふっ！」

鼻で息を吐きながら軒太郎がダッキングで攻め入る。背を丸めてコンパクトな構えから左ジャブを繰り出した。大きな黒拳が空気を切り裂く。シュツと音が鳴る。

しかし瞬速の打拳は躲された。

素早く横に動く坂東。

一発のジャブは躲されたが、更にジャブを連続させる軒太郎。マシンガンの如く連打を繰り返す。

「躲している！ あの巨人のパンチを躲している！」

右や左、時にはしゃがみ、時には下がる坂東。

昂輝が驚いた通り、連続で撃ち込まれるジャブを坂東は素早い体捌きで躲していく。

「これならどうだ！」

猛りながら放たれる軒太郎の右ローキック。下段蹴りが唸る。

だが、その蹴りも当たらない。坂東が軒太郎の右足をバク転しながら飛び越える。

下がった坂東を追う軒太郎がダツシュした。坂東も地を蹴り前に跳ねる。

二鬼が正面から打ち合う。

軒太郎が右フックを振るい、坂東も爪を立てながら右腕を振るった。打拳と鍵爪がぶつかった。

「ギャ！」

悲鳴を上げたのは軒太郎である。

振るった右拳から赤々とした血が飛び散った。

それだけじゃない。鮮血の他にも鬼軒太郎の太い指が二本ほど地面に転がる。小指と薬指だ。

「ぐううううううううううう！」

顔面に力の入った皺を寄せる軒太郎が、二本の指を切断された手を逆の手で包みながら後退して行く。

「の、軒太郎さんよりも……、鬼熊に変身した、あの男の方が強いのか!？」

戦いを見ていた昂輝が、力少ない声で言った。僅かな攻防だったが、軒太郎の方が押されているのは明白だった。

だが、溢した昂輝の言葉に、隣に立っていた憑き姫が、そんな訳ないでしょ　と小声で囁く。

昂輝が隣の憑き姫を見ると、彼女はいつも通りのクールな表情をしていた。極道コンビも余裕な態度で事を眺めている。

「まあ、こんなもんだらう」

言ったのは鬼軒太郎である。

「初めて使ったわりには、上々の成果だ」

そう言いながら姿勢をただす軒太郎。傷ついた指を押さえながら背筋を伸ばした。

そして、見る見るうちに軒太郎の全身に亀裂が走る。まるで罅割れた陶器だ。

「なに!？」

「変身を解くのよ」

昂輝の疑問に憑き姫が答えた。

多くの人々が見ている目前で、黒鬼の巨体が、崩壊する石造のように崩れ落ちていく。崩れた鬼の破片は、地に跳ねると陽炎の如く消

えて行く。

鉦鬼の巨躯が、跡形も無く消え去った。

そして、巨鬼の消えた場所には、黒衣の軒太郎が佇んでいた。鉦鬼に変身する際に破れた衣類が修復されている。いつもの禍々しい軒太郎の姿である。切断された二本の指もくっ付いている。

「普段の姿に戻って、あの熊男に勝てるのかな……」

誰に述べたわけではない昂輝の質問に、しょうがないと言いたげな顔で憑き姫が付き合う。

「軒太郎はね、あの黒鬼なんかより強いよ。わざわざ自分よりも弱い姿に変身している理由は無いでしょ」

「鉦鬼が……、軒太郎さんよりも弱い……」

「とうぜんよ。あの黒鬼なんか、我々ヴァルハラの一流エージェン
トに比べたら、ただの小鬼。」

そこからでこそそと悪戯している妖怪変化の変わらないわ」

「そつだよ、少年君」

憑き姫の台詞に赤股がふざけた口調で相槌を入れる。

更に憑き姫が言う。

「貴方の故郷でも言ったでしょ。あの灰工場で」

「なにを……？」

五色鬼と対決した元製薬会社の研究施設での事を言っているのだろうが、憑き姫の言葉の真意が昂輝には分からなかった。首を傾げるばかりである。

「鬼たちと貴方が戦わなくても、私たちヴァルハラが誰か一人でも出て行けば、容易く葬れるって、ね」

そんな事を聞いた記憶がない昂輝が、そうだったかなと頬をかいた。

まあ、どちらにしる、鬼に変身していない方が軒太郎は強いのだと言いたいのだろう。

黒鬼に変身した理由は、あくまでも鬼熊を引きずり出すための手段でしか過ぎなかったのだろう。

憑き姫の説明から昂輝も、それを理解した。……つもりだ。

『ガアルルルルルルル！！！』

大きく口を開けた坂東が、顔を突き出し獰猛に吼えた。

鬼から軒太郎の姿に戻ったことで、己の敵がかつて自分を退治しようとした宿敵だと気付いたのだろう。

『貴様ダツタカ。ワシノ眠リヲ妨ゲタノハ！』

人語である。鬼熊が片言だが言葉を喋ったのである。

「久々だね、熊さんよ」

テンガロンハットの唾を摘みながら言う軒太郎。目線は隠れているが口元が笑っていた。

『貴様ノセイデ、ワシハ腕一本ニツタノダゾ。ココマデ再生スル
ノニ、ドレ程ノ時ヲ費ヤシタカ!』

「妖怪変化には、たいした時間の流れではないだろう。
こっちは曲がりなりにも人間なんだ、待ちくたびれたのは、こっち
だ」

『又カセ、小僧!』

「その小僧も今では立派な大人だ。
今宵お前を退治して、自分の不始末に決着を付けてやる」

軒太郎の全身から。真っ黒なオーラが吹き出た。
漆黒のオーラからは殺気と述べるよりも、殺意が感じられる。

鬼熊 2

坂東修也が、まだ小学三年生の頃。彼の通う小学校の周辺では怪事件が続いていた。

多くの子供たちが、謎の動物に襲われたのである。しかも殆どが女の子ばかりであった。

坂東が住んでいた町は、決して都会ではなかったが、田舎と呼ぶほどの町でもなかった。

川も有り、海も有り、緑も多かったが、それ以上にコンクリートのビルやアスファルトの国道も多かった。山は少ない。平地が多かった。

故に子供を襲うほどの動物が現れるような町でもなかった。

そのような町で事件がおきた。

死者こそ出ていないが、多くの子供たちが手足を噛まれ大怪我を負わされたのである。

子供達を襲った動物は、目撃証言から犬程度の大きさでならず。人よりも大きな巨漢であったのだ。大型の獣である。

山の少ないこの町で、それ程の大きさの動物が出現して、ましてや子供とは言え人を襲うなんぞあり得ないと思われた。

故に最初は、子供達の狂言だとも思われた。

警察を中心として、多くの大人たちが事件の解決に力を入れた。

子供を襲った獣を捜索したり、子供たちを守る為、警戒に励んだ。

マスコミたちもニュースに取り上げ世間を騒がせた。

しかし、大人たちの奮闘を嘲笑うかの如く事件は続き、多くの子供たちが幾度も獣に襲われ大怪我を負わされ続けたのである。

事件は月に二三人の子供が襲われ、半年近く続いた。

大型の獣が、それだけの月日を捕まらずに事件を繰り返すこと事態が疑問に思われ、警察サイドでも動物の犯行に見せかけた変質者の仕業だと考えはじめた。捜査方針が大きく変更となる。

獣を真似たと思われた犯行は、子供を喰らうために襲うのではなく、襲うために襲っている様子であった。子供たちを傷つけ楽しんでいくのだ。

犯人は、もちろん鬼熊である。

当時の鬼熊は、まだ少年だった坂東には憑いておらず、人間の姿に変化しながら社会に溶け込んでいた。

そして、衝動に駆られると女の子を物色して、自分好みの子供に悪戯目的で近寄り、襲うのであった。

襲うと述べても、ただ手足に噛み付くだけの悪さである。決して血肉を欲している訳でない。ただ噛み付きたいだけなのだ。

しかしながら、噛み付かれる子供の方はたまらない。相手は熊なのだ、鋭利な牙を持っている。子供の柔肌では容易く傷つき大怪我となる。

そして、この事件の真相に誰よりも早く気付き行動を起こしたのが、当時まだヴァルハラ探偵事務所を始める前の三外眼一郎であった。

当時の眼一郎は、金持ちをターゲットにした妖怪退治屋を営んでい

た。

妖怪や悪霊に悩む金持ちに取り入り、退治することで収入を得ていたのである。

その頃から眼一郎は、オカルト業界で『一つ目の対魔師』と呼ばれ、名が売れていた。

今回も眼一郎は、被害者である子供の両親に取り入り、仕事を成立させていた。被害者の子供の中に、富豪の娘が居たのだ。

眼一郎は、その娘の敵討ちと親を垂らしこみ、高額収入を得ようとしていた。

富豪の親も、最初は眼一郎を怪訝に思い相手にしなかったが、長引く怪事件への苛立ちと、増え続ける被害者の子供達を思い、眼一郎の申し出を受ける事にした。

自分の娘が負った心と体の傷。

同じような傷を刻まれる被害者の子供たちを、これ以上見るのが辛くなったようだ。富豪は金で解決できるなら安い買い物だと判断したのかもしれない。

契約が成立すると眼一郎は、迅速に調査を始めた。

そして犯人の目星が付くと、軒太郎を女装させて小学校に侵入させたのである。

鬼熊が人間に変化して、その小学校で用務員を勤めていたのである。

これが軒太郎の退治屋としての初仕事だった。

軒太郎は女装で鬼熊を誘い出すのに成功した。

ロリコン熊のお眼鏡にかなったのだ。

そこまでは良かった。

だが、軒太郎は初仕事をしくじったのである。
鬼熊を追い詰めておきながら取り逃がしてしまう。

鬼熊と正面から戦い、戦力で圧倒して、退治したと思われたが、全身を砕から滅しかけた鬼熊が、腕一本とならながらも逃走をはかり、たまたま通りかかった坂東少年に取り憑いてしまったのである。まだまだ経験が浅かった軒太郎には、予想外の展開であった。

瀕死の鬼熊は、必死に逃げ込んだ坂東の心の奥深くまでに潜り込み、一流の払い屋でも手の出し難い底まで行ってしまったのである。へ々に鬼熊を払えば、憑かれた坂東少年の精神まで傷つけかねない常態となってしまうたのである。

結果、仕事は失敗。

しかし坂東は鬼熊の怪力を手に入れ、同時に失恋から軒太郎を怨む事となった。

そして時は流れる。

軒太郎は、タイミングを計っていたのである。

鬼熊が完治して、坂東の殻から頭を出すこの日を。

今の今まで。

シックスメン (34)

「二代目も、そろそろ決めるつもりだなあ」

顎を撫でながら言う功風老。

老師の言うとおりだった。睨み合う軒太郎と鬼熊が、全身から放出する殺気をぶつけ合っていた。ゆらりとした動きで軒太郎の右腕が黒コートの中に滑り込む。

「新たな武器を……」

「ええ、そうよ。決着が付けられる武器を選んでいるのよ」

昂輝の言葉を憑き姫が確定させた。

懐の中を漁っていた軒太郎の右手が、ゆっくりと姿を現す。拳が握られている。何か小さな物を握り締めている。

「断言しよう」

握り締めた右拳を前に突き出し喋りはじめる軒太郎。テンガロンハットの鍔越しに片目が光っていた。

「今宵の対決。使用する最後の武器だ」

そう言いながら軒太郎が、握られた拳を開いた。賞内で、何かがキラリと輝く。

「宝石……」

また宝石である。

黒鬼の鉱鬼に変身したのと同じような宝石である。しかし、軒太郎の掌の上にある宝石は複数個だった。

ルビー、サファイヤ、エメラルド、アメジスト、オニキス。宝石の数は、全部で五つ。

「あれは、まるで……」

昂輝が額から冷や汗を流しながら言った。軒太郎の掌上に、視線が釘付けになっている。

「そう、五色鬼ね」

再び憑き姫が昂輝の言葉を確定させた。昂輝も間違いないと思う。

軒太郎が持っている五つの宝石は、五色鬼の死体から作り上げた物。

「先程使った物は、試作品でね。自分の身を使って確認がとれた」

向かい合う鬼熊が、軒太郎の話に首を傾げた。

軒太郎が話を続ける。

「さっきの変身は、お前さんを引き出すだけの変身じゃあなくってね。

変身が体や精神に、どの程度の害や負担を与えるか、どのぐらいの力が与えられるか、どのぐらいの制限時間があるか。調査だよ、確認だよ。

まあ、とりあえずそんなところかな」

軒太郎の右手が閉じる。五つの宝石を握り締める。

また赤股がふざけてみせた。

「新しい刀の試し切りだねえ」

「試し切り……」

昂輝が眉毛を潜めて赤股を見た。

「そうだよ、少年君。若先生の悪い癖だ。いやいや、悪くはないのかなあ。」

まあ、癖なんだよ」

「癖ですか……。どう言うことです、赤股さん？」

「若先生は、新しい武器を拵えるとね、次の戦いで直ぐに新作を使いたがる節がある。」

しかも、作品の仕上がりが早い」

「じゃあ、五色鬼たちの死体から作り出した宝石で……。五体分の宝石を作ったと……。」

最初に見せた黒鬼の宝石は、試作品……」

「そうなるねえ。」

今度は宝石五個だ。何をするつもりかなあ。」

ワクワクするねえ。」

赤股の抑揚が弾んでいた。大きなサングラスの下で表情がはしゃいでいる。

憑き姫が続く。

「自分で作って、自分で使う。それが軒太郎の趣味なのよ。その趣味を成立させる為に妖怪を退治して、死体を手に入れる。そして、作る。」

そして、その武器で次の妖怪を狩る」

「エンドレスな……趣味」

「それが二代目のライフワークってやつじゃなあ」

功風老が顎を撫でながら言う。

まだ撫でている。と言うか、ずっと撫でている。撫ですぎて擦り切れないのかと昂輝が思う。

『グウルルルルルル！』

鬼熊が腰を落として飛びかかるうと身構える。

それを見て軒太郎が右手を上振り上げた。顔も上を見る。

「魔石五つ分、流石の俺も長くは耐えられないだろうな。おそろく十分。いや、七分……。ん〜、流石に大きく出すぎだな。やっぱ五分！」

上を向いた軒太郎の表情が怪しく微笑む。

そして天に向けた拳の手首が曲がって下を向く。次に掌がゆっくりと開いた。五本の指が小指から一本ずつ開いて行く。指が一つ開くたびに魔石が一つずつ落ちていった。

魔石が落ちて行く先では軒太郎が大口を開けて待ち構えていた。また石を飲み込むつもりだ。

宝石が飴玉のように、一つまた一つと口の中にドロップしていく。

『ガアルルルルルル！』

最後の一つが掌から零れ落ちると同時に、鬼熊が軒太郎目掛けて走り出した。頭から突っ込んで行く。鍵爪のスパイクが、アスファルトを抉り取りながら熊の巨漢を突進させた。

五つの宝石がすべて軒太郎の口の中に消え、喉をゴクゴクと鳴らして飲み込んでいく。そこに獣が激突した。

体当たりに音が弾む。

軒太郎の体が、黒い塊となって後方に飛んで行った。

跳ね飛ばされた軒太郎が、物凄いスピードでヴァルハラビルの壁に激突する。

激突の衝撃にアスファルトが揺れるがヴァルハラビルはびくともしていない。

今までの戦いで、双方どちらかが壁に衝突したのならば、壁は罅割れ、時には大穴を開けていたのだが、赤レンガで造られた古めかしいビルの壁は、僅かにも傷ついていなかった。

壁に激突した軒太郎は、一度尻を地に着けたが、壁にもたれ掛かりながらも立ち上がる。

不敵にも笑っていた。

「くっくっくっ。」

さあ、変身するぞ、鬼どものパワーで！」

立ち上がった軒太郎の体から色様々なオーラが吹き上がる。

右手から赤いオーラ。左手からは紫のオーラ。

右足からは緑のオーラが噴出し、左足からは青いオーラを噴出して

いる。

そして胸からは真つ黒な煙のようなオーラを上げていた。五色のオーラに包まれる軒太郎が、テンガロンハットを被った頭部だけを覗かせて笑っていた。

昂輝が驚き「ま、まさか……」と、呟いた。

今見えている状況を昂輝は信じたくなかった。腰の高さで両手を強く握り締めている。

「これは……何故ッ！」

チラリと昂輝の表情を見上げた憑き姫が言う。

「そうよ。この変身は」

「僕の変身と同じ変身をするつもりなのか！」

五色のオーラに包まれる軒太郎を凝視しながら昂輝が吐き捨てるように行った。何やら悔しさにも似た感情が窺える。

「それは、あなたの勘違いよ」

「勘違い……」

昂輝が憑き姫を見る。憑き姫も昂輝を見ていた。目が合う。

「あれは、私の力。私が与えた力。私が使ったカードの力。貴方の力ではないわ」

確かにその通りだった。あれで戦ったのは昂輝本人だったが、あれ

は憑き姫の術だ。自分ひとりの力ではない。

昂輝が見せる驚愕の表情を余所に、憑き姫が話を続ける。憑き姫の視線は軒太郎に戻っていた。昂輝も戻す。

「私は魂を操る」

憑き姫の話す内容が変わった。昂輝の視線が、自分より身長の高い憑き姫に、再び落ちた。

「軒太郎は魔導武器を操る。妖怪の骸から作りだした武器を、ね」

「何が言いたいの、憑き姫……？」

「いつも半々。山分け」

「山分けって……」

昂輝が不安げな表情を見せた。

「魂と骸。それは元々一つだったもの。」

私と軒太郎は、その片方ずつを使うが、元は一つ。器と中身。」

「コン……ガイ……」

「私に出来る事は、軒太郎に出来てもおかしくないことなのよ」

「おなじこと……。やっぱり……」

軒太郎の体から噴出し全身を覆い隠していた五色の煙が消えていく。

そして姿を現した軒太郎の姿は、昂輝と素詛英二の影が戦った時の姿と類似していた。

五色の甲冑を纏った常態。テングロンハットを被った頭部だけが見えており、灰色の長い髪だけが靡いていた。

こまかなディテールこそ違いが見えたが、ほぼ同じ姿である。

だとするならば、今の軒太郎は、あの時の昂輝と同じである筈だ。人狼の身体能力の上に、地獄の鬼たち五匹分の能力と強さを着込んだ常態。かなりのパワーを得た常態。

腕を広げ自分の両手を見る軒太郎。薄ら笑いを溢しながら話しはじめる。

「これはいい。なかなかいい。試作品を一つ使った時と段違いのパワーだ。

身に纏っただけで解る。感じる。実感できる。

これはいい〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

軒太郎は笑っていた。怪しくも楽しそうに笑っていた。感情が笑い声に出ている。

三外軒太郎。五色鬼モードである。

「この武装。制限時間が短い。さっさと蹴りを付けさせてもらうぞ、おあ〜にい〜ぐう〜まあ〜」

今度は軒太郎から仕掛けた。鬼熊目掛けて走り出す。

『ガアルツ!』

走り出した軒太郎を見て鬼熊が一声獣らしい声を上げてから走り出す。迎え打つための真っ直ぐなダッシュだった。

「単細胞めが、正面から来るか。芸がない!」

真っ直ぐ走っていた軒太郎が、言いながら姿勢を低くして走り続ける。

忍者走りから叫ぶ。

「蛇走り!」

その一声と共に軒太郎の走る速度が加速した。幻惑な残像を残しながら進むコースを湾曲させて鬼熊の横を過ぎていく。走るスピードは、圧倒的に軒太郎の方が上回っていた。

『速イイ!』

足を止めた鬼熊が、首と胴を右に捻りながら蛇走りに加速した軒太郎を視線で追った。だが、疾走する軒太郎の姿は直ぐに鬼熊の視界から後方に消えて行く。

『コツチカ!?!』

首と胴を逆に捻り反対側を向く鬼熊。そして直ぐに軒太郎を視界に捉える。

否。

軒太郎の体の一部を捉えたただけだった。しかも眼前でだ。

「喰らいな、ロリコン熊さんよ」

鬼熊の鼻先に、軒太郎の右足が迫っていた。上段の蹴り脚である。

『ガルツ！』

緑色の右脚が鬼熊の鼻を力一杯蹴り付けられ鬼熊の巨体が半円を描きながらアスファルトに叩きつけられる。後頭部が地面に減り込み下半身が跳ね上がった。

「素晴らしいスピードだ。素晴らしいパワーだ。素晴らしい変身だ」
軒太郎が振り切った右足を地に戻しながら、全身を回転させた勢いに酔いしれながら言った。
視線が昂輝に向いていた。
少年に言ったのだ。

「軒太郎さん……」

昂輝の視線に力がこもっていた。

軒太郎の言葉の意味。

それは、あてつけである。

この玩具はお前一人の物でならず。楽しむ権利は自分にもある。そう言いたいのだろう。

今までの流れから昂輝にも理解できた。

『ガアルルルルル！』

鬼熊がヘッドスピンドで跳ね起きる。立ち上がった眼前には軒太郎が立っていた。目と鼻の先である。

胸を張り合わせて二匹の鬼が向かい合う。

『ガッ！』

鬼熊が剛腕を横に振るう。鍵爪が空気を切り裂きながら軒太郎の唯一素肌が覗かしている頭部を狙った。

が、当たらない。

「おっと」

『グッ！』

軒太郎が体を屈めて攻撃を躲した。避けただけじゃない。回避と同時反撃も放っていた。

軒太郎の右拳が脇腹を殴りつけていた。鬼熊の体躯が横に撓る。

痛みに耐えた鬼熊が、バランスを建て直すと今度は上から爪を振り下ろす。

しかし、その腕を廻し受けで横に払いのける軒太郎。そして熊面にフックを叩き込んだ。

『ガッ！』

鬼熊が一步後退。下げた脚で踏み止まる。

だが、すぐさま軒太郎の攻撃が続く。

左右の拳が二度繰り出される。

ワンツーパンチが、剛毛の生えた胸を連続で叩いた。そして顔面に左ジャブ。

更に拳はボディーブローに変わり三度叩いた。

見事な拳闘技である。

鬼熊がダメージに腹を押さえて背を丸める。

続く軒太郎の攻撃。

膝蹴り。

ニーリフトが鬼熊の顔面を蹴り上げた。背が仰け反り熊の頭が上を向く。

軒太郎の前蹴り。

ヒット。

トーキックで腹を蹴られた鬼熊がよろめきながら二歩後退した。腹と口を庇うように押さえていた。

「もうちょっと上なら水月だったなあ」

「若先生は攻撃が雑ですな、老師」

「まったくだあ」

「少年君、キミもそうは思わんかね。いひいひい」

赤股にいきなり振られて戸惑う昴輝だったが、何となく思いついた言葉を返す。

「もうちよつと……って、どのくらい……ですか？」

ニタリと笑い赤股が答える。

「一センチと七ミリ上だよ」

「アホウ、馬鹿弟子が。一センチと八ミリだよ」

「師匠、こまけえ」

どっちもどっちである。

下がった鬼熊目掛けて軒太郎が軽いジャンプをした。拳を頭の高さまで振り被っている。その拳が赤々と燃えていた。

「燃え尽きる！ 火炎なんとか拳！」

技の名前を忘れたらしい。しかし火炎の術は発動していた。

炎の拳が鬼熊の頬を捉えると爆発する。ガソリンに火が引火して大きな炎を上げたような爆熱だった。

炎が鬼熊の上半身を包んだ。

『ギイアアアアアアア！』

炎の中からリミピットチャンネルの悲鳴があがる。爆炎が消えると上半身を燃やした鬼熊が現れる。燃えながらバツクして行く。

「軒太郎さん！」

昂輝が叫んだ。

「なんだ、少年!？」

軒太郎が攻撃を中断して返事を返す。凜々しく直立しながら顔だけを昂輝の方に向けていた。

「技の名前が違います。その技には、拳の字は入っていません！」

「あれえ〜、そうだったけ？」

「その技の名前は火炎鬼砲です！」

「あー、それぞれ、それだあ〜」

「それぞれって……」

「今度からそう言うってから技を放つわあ〜」

暢気に答える軒太郎。

昂輝が肩を落としていた。呆れていた。

『オノレエエエエエエエエ！』

リミピットチャンネルで、憤怒の咆哮が上がった。

鬼熊が胸を張り気合で全身に引火した炎を噴き散らす。

火の粉が可憐に舞う中、荒く息を弾ます鬼熊が立っていた。

『ゼエ、ゼエ……』

酷い様である。炎を消した鬼熊の姿は哀れな成りに変貌していた。

全身から防具の如く生えていた剛毛がいたるところ焼けており、赤茶色に焦げた火傷の跡が惨たらしい。まるでアニマルゾンビである。

だが、鬼熊も妖怪である。火傷が徐々に消えていく。

昂輝ほどの速さではないが傷が再生している。焦げた剛毛も生え代わり始めていた。

鬼熊の双眸に闘争心が殺気立つ。

『オノレ退魔師メガ！』

背を反らしながら大きく息を吸い込みはじめる鬼熊。吸い込んだ空気で腹と胸が、はち切れんばかりに膨らんでいく。

『コレデモ喰ライヤガレ！』

鬼熊が顔を突き出す。大きく口を開き、吸い込んだ空気を一気に吐き出した。喉の奥から真っ白に着色された息が噴射される。

『胃酸放射攻撃!』

扇状に広がる胃酸の霧が軒太郎を包んだ。

胃酸の中で両腕を使い軒太郎は、素早く顔を隠し庇った。

周囲を白く染めながら広がった胃酸は、直ぐに治まり消えていく。顔を隠し続けている軒太郎の姿が現れる。

辺りからは、焦げ臭くも酸っぱい臭いが漂っていた。

軒太郎の立つ周りのアスファルトから白い煙がユラユラと上がっている。五色鬼のバトルスーツからもた。

「効かないな」

胃酸の霧を浴びたが軒太郎にダメージはない様子である。

顔を庇っていた両腕を下げると、誇る言葉を零す。口元が不敵に釣り上がって嘲笑う。

『ナラバ、ナラバ、コレナラバ!』

今度は体を丸めながら力を溜める鬼熊。力んだ剛腕から青白い電撃がバチバチと音を立てて放出される。その電撃が、やがて全身を包む。

『ライトニング電撃甲冑超突進!』

青白い電撃を纏った鬼熊が、軒太郎目掛けて突進して行く。右肩を突き出しぶちかます作戦だろう。

だが。

「甘いぞ、ロリックマ」

猛突進してくる鬼熊に向けて左手を翳す軒太郎。紫色の掌から突起物が覗いていた。

「なんとか弾丸！」

「鬼刻弾丸です！」

間髪入れずに飛ぶ昂輝のツッコミ。

それに遅れて軒太郎の左掌から尖った角が弾丸とかわり連射された。弾丸は電撃を垂れ流しながら走って来ていた鬼熊にすべて命中して、突進を止めた。

『ウギヤツ！』

悲鳴を上げる鬼熊。それでも弾丸の連射は収まらずに、何発も鬼熊へとヒットしていく。しかし針金の如く硬い剛毛が数発の角弾丸を弾き火花を散らす。

だが炎に剛毛を焼かれて地肌を露出している部分がある。そこに鋭い弾丸が抉り突き刺さり鬼熊に悲鳴を上げさせた。

『グウガアアアアアアッ！』

鬼熊が火花を散らしながら押し戻されるように後退して行った。続く追い討ち、鬼刻弾丸の連射は止まらない。鬼熊を追い詰め苦しめる。

『グガアグガアグガアガアガアアアアアアアア！』

徐々に鬼熊の悲鳴が大きくなっていた。

電撃を帯びた体当たりが不発に終わると、放出していた電撃も消えていく。

後退した鬼熊を見て満足げに笑う軒太郎が、やっと撃ち方を止めた。紫色の腕を下げる。

『グウグウグウグウウウウ……』

何発もの弾丸を受けた鬼熊の体に、惨い弾痕が幾つも刻まれていた。全身の火傷と弾痕が痛々しい。赤い血が流れ落ちていく。

鬼熊の表情が弱気となっている。ジリジリと少しずつだが逃げるように後退を始めていた。

「おやおや、また逃げるか、熊さんよ」

『逃ゲルガ、何が悪い！』

恥ずかしげもなく述べる鬼熊。

だが鬼熊は、戦士でも何でも無い。ただの野生から進化した妖怪にしか過ぎない。

野生の世界では、己よりも強い存在が現れたら逃げるが常識。情けないことだが恥ずかしいことではない。正しい生存術である。

『ガルウ！』

ついに鬼熊が敵に背を向け逃げ出した。全力で走り逃走をはかる。

「逃げた!？」

坂東の意識があつたのならあり得ない光景だろう。あの男なら逃げると言う選択肢を選ばないと昂輝は思った。

「逃げるか」

しかしながら軒太郎は、逃走を快く許さなかつた。追う。

「蛇走り！」

残像を連ねて走り出す軒太郎。一瞬で逃げる鬼熊を追いぬき正面に回りこんだ。

そして振り向きざまに蹴りを出す。

『ギイヤ!』

綺麗な上段廻し蹴りが命中した。

軒太郎の右足の甲が見事に鬼熊の突き出た獣口を蹴り付けた。

鬼熊の視界が派手にぶれる。

蹴られた鬼熊は、きりもみしながら地面に倒れるとゴロゴロと転がった。

逃走失敗。

『ハア、ハア、ハア……』

鬼熊は、寝そべりながら息を切らしていた。立ち上がるうと両手を付いて力む。しかし腕に力が入らない。震えるばかりだ。

口から血と一緒に大きな牙が一本ポロリと落ちた。

『ダメダ……、敵ワナイ……、逃ゲレモシナイ……。ウグウグウ』

心の中で呟いた積もりの言葉が、思わずリミピットチャンネルで垂れ流しとなる。

軒太郎がゆっくりとした歩みで寝そべる鬼熊に接近して行く。

「永かったぞ。幼少から、ずっとだ。今宵、決着だ！」

言いながら倒れている鬼熊の眼前に右手を伸ばす軒太郎。顔が悪党の如く笑っていた。

『イアガ！』

アイアンクロー。

軒太郎が鬼熊の顔面を鷲掴みにして引つ張り上げた。そのまま片腕一本で鬼熊の巨体を自分の頭より高く吊り上げた。鬼熊が力無くブラリと揺れる。

そろそろタイムリミット。止めの時間。

鬼熊の腹部に軒太郎が左掌を添える。

「火炎大！」

軒太郎が技の名前を途中まで言うと、昂輝がつっこむ準備に身構えた。

「鬼刻弾丸！」

「あっている！」

技名を間違えずに述べた軒太郎に、やけくそのつつこみを飛ばす。

一方、正しい技名を述べた軒太郎の左腕が大きく膨らんでいた。そして轟音と共に炎を纏った巨大な弾丸を発射させた。顔面を掴んでいた軒太郎が手を離す。ドリルのように回転しながら巨大弾丸が鬼熊の腹を抉りながら空中に飛ばした。

鬼熊は、巨大ドリルに抉られながら五メートルほどの高さで固定されている。

『ウガアガガガッガッガッアガガッツッ！』

鬼熊のリミピットチャンネルまでもが振動に震えていた。突き上げてくるドリルの衝撃に鬼熊は必死に耐えていた。

「あれは……」

昂輝は知っている。

この後に繋がるコンボ技を。

巨大ドリルの後部を蹴り押し更に押し込む。

そして削岩機のような巨大ドリルの攻撃に耐えられなくなると、巨大ドリルに吸い込まれ絶望のままに消滅していく。

素詛英二の影のように、だ。

「昂輝君、僕は同じことはしないよ」

昂輝の方をチラリと見て言う軒太郎。

「……心を読まれた？」

昂輝が呆然と呟く。すると軒太郎が空中で囚われている鬼熊目掛けで飛んだ。体を捻り飛び後ろ廻し蹴りを放つ。緑色の右足から緑色のオーラが渦巻いていた。

「鬼門咆哮！」

「如何にも！ 鬼門咆哮脚！」

鬼門咆哮の破壊力が蹴り技となり巨大ドリルの尻を蹴り上げた。緑風に唸る蹴りが、回転する巨大ドリルに更なる威力を注ぎ込んだ。ドリルの回転速度が更に増す。

巨大ドリルに挟られた鬼熊の体が振動にぶれて見える。二重に見えた。

否。

二重でない。振動に揺れる姿が二つあった。鬼熊と坂東の姿である。

「確かに同じことは、していないわね」

クールに言う憑き姫。

憑き姫の言うとおりだった。軒太郎は昂輝と別のことをしている。昂輝は素詛英二の思念を巨大ドリルに吸い込み滅した。あの時と様子が異なっている。

軒太郎は違うことをしようとしていた。

鬼熊と坂東を分離させて、鬼熊だけを滅ぼそうとしている。

軒太郎は予想していたのだろう。

この五色鬼のバトルスーツは、それが出来ることを。

『ガアルルルルルルル！』

畜生、畜生、畜生メガアアアアア！』

鬼熊の姿だけが巨大ドリルの中へと吸い込まれ始めた。無念の文句を叫ぶ鬼熊が、それでも抵抗していた。だが、抵抗は無駄に終わりそうである。

「畜生は、お前さんだろう」

地面に着地する軒太郎が言った。鬼熊に背を向けている。

『イイイイイヤヤアアアアア！』

絶望の悲鳴と共に鬼熊だけが巨大ドリル内に消えていく。

鬼熊が吸い込まれると巨大ドリルも消えた。坂東一人が空中から開放されて地に落ちる。

「ううううう……」

地に倒れて動かない坂東が、小さく呻く。意識は無い様子だ。あちらこちらに火傷が痛々しいが、生きている。

「梃子摺らせやがって、ロリゲマが」

長年にわたって続いていたミッションが、今終了した。

軒太郎が纏っていた五色鬼の防具も溶ける様に消えていく。下から

いつもの黒衣が現れた。

「お、おわったんだ……」

眩くは、昂輝。

こうして突然ヤクザたちにより勃発したヴァルハラ事務所襲撃事件は幕を閉じたのである。

結果は、ヴァルハラエージェントの圧勝。極道サイドの完敗であった。

功風老を先頭にヴァルハラビルに入って行くメンバー。最後に昂輝が、倒れているヤクザたちを一瞥してからビルに入る。やがて野次馬たちもちりぢりに消えて行く。

それから暫くして、夜の街に救急車のサイレンが鳴り響いた。野次馬の誰かが呼んだのだろう。

探偵事務所の晩餐

ヤクザとの戦いが終わり事務所内に戻ったヴァルハラメンバー。事務所の台所からはイゴールが準備している夕食の香しい匂いが漂ってきていた。

あの怪物じみた大男が調理しているとは思えない香りである。

きゅるるるるう〜。

昂輝の腹がなる。

不死身でも腹は減るらしい。

飢え死にこそ無いとは思うが、ちゃんと空腹感に襲われる。

これも昂輝の中に潜む複数の呪いが苦痛を与えようとしているのかもしれない。

「ふう……」

昂輝が溜息を零す。

ヴァルハラエージェントの面々は、各自様々の場所に腰を下ろして寛いでいた。誰一人の顔からも戦いからの疲労は見当たらない。

憑き姫は、奥の部屋のソファに腰掛け何やら本を読んでいる。そこが彼女の定位置なのだろう。事務所に居るときは、そこで本を読んでいることが多い。

昂輝は、黙って憑き姫の向かいに座っていた。

眼一郎は、所長と看板が置かれた机とセットの社長椅子に座りながら手にした書類を眺めていた。仕事熱心である。

後ろの窓ガラスは銃撃戦の際に割れてしまい、ダンボールとガムテープで塞いである。明日の朝、業者を呼んで直してもらおうそうなの。

極道コンビの二人は、眼一郎の前に置かれた応接セットのソファーに向かい合うように座っている。赤股の隣に軒太郎も座っていた。

功風老は腕を組みながら厳つい顔で目を瞑り、何やら瞑想に耽っている。

軒太郎と赤股の二人は、賑やかな話題に盛り上がっている。盛り上がっていると言っても、赤股が一方的に話して軒太郎が聞き役に回っていた。話の内容は、北海道での仕事のことだ。赤股が何人倒したとか、どう倒したかの自慢話ばかりである。

昂輝も最初のうちは赤股の自慢話を興味深く聞いていたが、話が続いているうちに同じ内容を繰り返しはじめたので、聞くのを止めた。営業スマイル満開の軒太郎が、辛抱強く赤股のリピートトークを聞いてあげていた。

昂輝が向かいに座る憑き姫に、小声で訊いてみる。

「憑き姫。赤股さんって、いつもあんな感じで話すの？」

「ええ、リピート魔人よ。お酒が入ると、もっと酷いわ」

「そ、そうなんだ……。気をつけるよ」

事務所内に赤股のはしゃぐ声が広がる中、奥の台所からフリルの付いたエプロン姿のイゴールが現れる。

「はい、皆さん、夕ご飯ですよ」

可愛らしい幼女の声と共に剛腕で運ばれてくる料理の数々。大きな皿に盛られた山のようなパスタ。ナポリタンである。そのパスタの上には草鞋サイズの厚いハンバーグがドデンと乗っかっていた。

インパクトの強さに啞然とする昂輝。なんともシヨッキングな料理である。

そのような料理が盛られた皿をイゴールは、各自一人一人の前に皿ずつ置いて行く。どうやらこれで一人分らしい。もちろん憑き姫や昂輝の前にも同じ大盛りパスタハンバーグが置かれる。

明らかに三人前はある。昂輝は戸惑っているが憑き姫は平然としていた。

更にイゴールは各自の前に、どんぶりに注がれた豚汁を配っていた。

昂輝がどんぶりの豚汁を覗き込む。

「……………」

声が出ない昂輝。具沢山の豚汁だ。

牛蒡、蒟蒻、大根、豚肉、その上には薬味の葱がパラパラと。否。なみなみと……………」

汁の水面よりも具が氷山の一角の如く迫り出している。しかも豚肉の量が、他の具よりも多いように見える。

「こ、これで一人前ですか……………」

若干引きつった顔と声で昂輝が問うと、男性陣が嫌らしく微笑んだ。

「とうぜんだよ昂輝君。このぐらい男なら容易く食べなくては、ねえ」

意地悪げに軒太郎が言うと、極道コンビも悪ふざけに続く。

「そつだぞ少年君。食える時に食っとけよ。この家業、仕事がなく
なると、一日三食なんて食えなくなるもんだせえ」

「そつじゃぞお、若いの。酷い時は、一月三食になりかねないから
のお」

「一ヶ月で、三食のみつて……。そ、そんな冗談を……。皆さん、
からかわないでくださいよ。あははは……」

力薄く笑う昂輝。ただの脅しだと思う。

眼一郎が、手にしていた書類を机の上に投げて話に加わる。

「昂輝君。冗談じゃないよ。探偵なんて、毎日仕事があるわけじゃ
あないからね。」

依頼人が来ないことには、マンマの食いパグレだよ」

「父さん、あの時は、お客が日照りの如く来なくて辛かったですよ
ね……」

軒太郎が虚空を見ながら言う。表情がしんみりしていた。

眼一郎も悲しそうな眼差しで遠くを見ながら言葉を返した。

「ああ……、魔の三ヶ月の話だね……」

三外親子の会話に、男性陣四人が下を向いて暗黒のような空気を漂わせ始めた。室内が陰気な空気で重くなる。

「魔の三ヶ月って、何があったのだろうか……」

昂輝の言葉に答える者は居なかった。憑き姫も視線を昂輝に合わせようとしない。顔を不自然に横へと向けていた。

「魔の三ヶ月って……。いったい何が……」

訊かなくても何となく理由は想像できたが故に、ここはそっとしておこうと昂輝は思う。

さぞかしひもじい体験を味わったのだろう。

「はいはい、その話は終わりだよ」

暗い空気を抜つようにイゴールの乙女チックな黄色い声が飛んで来る。最後に自分の分の食事を持って台所から出て来た。

「皆さん、暗い話は御法度です。ご飯は明るいトークをしながら食べましょうねえ」

イゴールの明るい意見に、昂輝が気の効いた答えを返さんと視線を向ける。しかし目に入った異常に思わず「デカっ！」と、驚きの声を上げた。

イゴールの右手には、皆と同じ Pasta ハンバーグが盛られた皿が持たれているのだが、皿が一回り大きい。

もちろん盛りられたパスタも超大盛りと成っている。上に乗せられた草鞋ハンバーグも三枚であった。

左手に持たれたどんぶりも、特注の大型どんぶりである。頭に被れば鼻まで隠れてしまうサイズであった。

イゴールは、それを昂輝と憑き姫がいるテーブルに置くと、昂輝の隣に腰を下ろした。イゴールの体重に、ソファァーが壊れそうなくらい沈む。昂輝も思わずバランスを崩してよろめく。

眼一郎が明るい声で言う。

「そうだな、暗い話は禁物だ。ディナーは明るく楽しく頂こう」

「そうですね、父さん」

合掌しながら眼一郎が音頭を取った。

「それでは、頂きます！」

「」「」「頂きます」「」「」

眼一郎に続いて全員が合掌しながら声を合わせる。昂輝も慌てて皆を真似た。

「ご飯を食べれることに感謝する。」

「どうやらこれも、ヴァルハラールの一つらしい。」

その後、楽しい食事と会話に探偵事務所内は、活気付いた。昂輝もおおいに笑い、楽しい食事となる。

やはり一人で食べる食事よりも、大勢で食べる食事の方が美味しく感じる。

まだ、知り合って数日であるが、ヴァルハラメンバーから不思議な温かみを感じていた。

両親が自殺して、故郷の人々から厄介者扱いされた。

すべては呪いのせいだが、此処の人たちと一緒にいると、その辛さが和らぐ。不思議であった。

そういえばお砂さんが、ヴァルハラ事務所と砂壺荘には、呪いの災いを押さえる結界が張られていると言っていた。

昂輝は、その効果なのかなと思った。

いや、違う。

この楽しさは、もっと別のものだ。

結界とか呪いとかは、関係ない。

きっとそうだと、昂輝は思い微笑む。

楽しく食卓が続いていた。皆が喋りながら食事を続ける。

昂輝も食べては喋り、喋っては食べた。

食事は長く時間が掛かっていた。何せ量が多い。食べるのに時間が掛かる。

ふと、昂輝の視線に憑き姫の様子が目に入る。

昂輝と向かい合い静かに食事を取る憑き姫を、昂輝が不思議そうに見た。

「ところで、憑き姫」

しばらくして昂輝は疑問に抱いたことを本人に訊いてみた。

「なに？」

「憑き姫は、そんなに食べれるの……」

大盛りパスタに草鞋ハンバーグ。それにどんぶりいっぱい豚汁。とてもじゃないが、小柄な少女が食べれる量とは思えない。

昂輝ですら妊婦のような腹になっているが、まだ食べ終わっていない。

「食べるわよ」

「本当に……？」

「うん」

そう話しながら憑き姫は食事を続けるが、他の面々が食事を終わってもまだ食べていた。半分以上が残っている。

昂輝もやっとの思いで全てを食べ終える。

不老不死でアルコールの分解スピードが速い特別な体でも、食事が入る胃の大きさは人並みだ。消化が速い訳でもない。

「ふう〜……、食った食った」

腹がはち切れそうである。

もしかしたら胃が破けているが、再生しているだけかもしれない。

お腹が苦しい。

とてもじゃないが、この量を自分よりも小柄な憑き姫が食べれるとは考えられない。無理だと思う。

案の定であった。

憑き姫のパスタもハンバーグも半分ぐらい残っている。豚汁もだ。憑き姫の表情からしてこれ以上食べれそうにも見えない。

「ほ、本当に食べれるの……」

また同じことを問う昂輝。

すると憑き姫は、「うん」と一言返す。

そしてテーブルの下からプラスチックのタッパを取り出し食べかけのパスタとハンバーグを移し替えはじめた。

「お持ち帰りかよ！」

昂輝が景気良くつつこむ。

すると憑き姫は、更にテーブルの下から水筒を取り出して、中に豚汁を移し替え始めた。

「豚汁もかよ！」

こうして探偵たちの食卓が終了した。

「「「「「ご馳走様でした」「」「」「」

最後に皆で合掌して言う。

これもヴァルハラールの一つである。

適合者

時は夜である。

薄暗い廊下を女性が歩いていった。コツリコツリとハイヒールの音がコンクリート作りの床を鳴らす。

白いハイヒールの踵が奏でるテンポはわりと速い。

早足で歩く彼女は、急いでいるのではなく、いらつきから歩みが速くなっている様子だ。

此処は、深夜の総合病院である。

既に消灯時間が過ぎており、灯りいえば非常灯と、天井にある複数の小さなライトが、ぼんやりとしているだけだった。なんとも寂しく薄気味悪い。

女性は、白衣であった。

彼女の名前は、北枕夢子。この病院に勤めている女医である。

先程まで彼女は、大勢の急患に慌ただしい夜を送っていた。いらついた表情に片眉が釣りあがっている。

現在は仕事も落ち着き休憩時間となっている。

向っている先は、病棟であった。

やがて白衣の女医は、とある病室の前に立つ。ネームプレートに、「鬼頭」と書かれている。

「入るわよ」

中から返事は無い。

女医はノックもせず病室の扉を開けた。ツカツカとハイヒールを鳴らしながら病室に入って行く。

部屋の中は個室であった。

電動ベットがあり、その横にテレビある。その向こうに窓があった。夜の景色が黒々と見えていた。

ベットの背もたれが起きており、寄り掛かるように男性が横になっている。

寝ていない。起きている。首だけを曲げて窓の外を眺めていた。

鬼頭本人である。

個室の入り口横には、三人のヤクザ者が椅子に腰掛けながら眠っている。

壁や仲間の体に寄り掛かり三人とも熟睡していた。

男が女医の方を向いた。

「やっぱりお前か」

四角い顔の強面。ヘアースタイルは気合の入ったパンチパーマ。恰幅がよい。右頬には、刃物で出来た傷があった。歳は六十ぐらいに見える。

下半身にはシートが掛けられているが両手は上に出ている。その拳は大きく岩のように硬そうだ。

一目で喧嘩が強そうだと判る。

「私に来るの、予想できたの？」

「ボディーガードのそいつらが、いきなり軒をかき始めたからよお、

そうじゃねえかと思っただぜ」

「こんな脇役に、聞かせるような会話をしに来たわけじゃあないからね」

「でえ、何しに来た」

「報告よ」

「報告　。外のか、内のか？」

「外だよ」

「悪いニュースか、良いニュースか？」

「悪いニュースと、微妙に良いニュースよ」

「じゃあ、どちらから聞かせてくれる？」

「根掘り葉掘りね。ちょっと、くどいわ」

「よく言われる　。だが、慎重と言い換えてもらえねえか」

「雑な程に怖い顔しているのに、細かいわよ。似合わない。もっと、イメージ通りに大雑把に振舞いなさいよ」

「イメージと違うから、極道で成り上がれたんだぜえ」

「あらあら、そうですか　」

「北枕先生よ」

鬼頭の口調に、凄みが走る。声色が変わった。女医を脅す。

「極道を舐めてもいいが、俺を舐めるのはいけないぜ。

あんまり口が過ぎるとよ、その白衣を剥ぎ取って、オXコに腕を突っ込んで、子宮を引っ張り出してから、発情したドーベルマンに犯させて、犬だか人だか分からない生き物を、三度孕ませるぞ」

北枕夢子が、鬼頭の強面を見ながらキョトンとする。怯えた様子はない。

そして、少しして微笑む。

「脅しが長いわよ」

今度は鬼頭が微笑んだ。

「けつ。さすがは化け物だな。人間相手に通じる脅しも、効きやしないか」

「失礼ね。まだ人間の積りなんだけど」

「失礼は、お互い様だ。ドクター」

「ふんっだ」

女医が可愛らしくそっぽを向いた。少々年齢に合わない仕草だった。北枕夢子の外見は、二十代半ばに窺えた。しかし実年齢は不明である。彼女は年齢を語らない。いつも隠す。

「でえ、先生よお。報告ってなんだ？」

「まずは悪いニュースよ」

「なんでもいい、早く聞かせろい」

「はいはい、せっかちな」

「早やあくー！」

「報告しまゝす。悪いニュースってのは、あんたが差し向けた手下共は全員やられたわよ」

「全員？ 高岡に坂東か？」

おそらく二人が自分の命令に従い、ヴァルハラ討伐に出陣するだろ
うとは鬼頭にも予想できていた。しかし、手下に誰を使うまでは予
想していなかった。

「そう、九人。確か、鴉尾英太、神田淳、番場竜拳、芝克己、金本
哲司、真田兄弟、 だったかしら」

「すげーな、フルネームで覚えているのか……」

「そこらの極道とは、学が違うのよ」

「でえ、全員壊滅か」

「ええ、壊滅。しかもヴァルハラ探偵の連中を、一人も狩れなかつ
たわよ」

「そうか……。あの二人には期待していたが、なんとも情けないな」
鬼頭は高岡と坂東の二人に日頃から目を掛けていた。あの二人は他の極道たちと違うからだ。一本筋が入っている。

「まあ、あんたらヤクザの目論見が費えようと私には関係ないけど、私にまで面倒掛けさせないでよね」

「面倒？ いったいお前に何の面倒が掛かったって言うんだ？」

「その九人が、さっき此処に運ばれて来たのよ。救急車でぞろぞろとよ。」

この町には闇医者だって居るんだから、そっち行きなさいよ。ヤクザが殺し合いに負けて、堂々と民間の病院に運ばれて来るなんて事よ」

「……ちげえねえ」

強面がバツの悪そうな顔をする。それから訊いた。

「良いニュースってのは、なんだ？」

「違う、違う」

「何が違う？」

「微妙に良いニュースよ」

「いいからとつとと話せ」

「はいはい。その九人の中に、適合者が居たわ」

「本当か！」

鬼頭が驚く。今までに無い反応であった。

「ええ。公爵、東和竜栄の夢に波長が合う者」

「誰だ！ 高岡か！？ 坂東か！？」

「鴉尾英太と神田淳の二人よ」

昂輝に倒された変人二人。指斬り魔とガンマンである。

「ときお……に、かんだ……だと」

「ええ、そうよ」

「誰だ、それ？」

「……」

鬼頭は、どうせ仲間になるならば、極道コンピューター高岡か、怪力超人の坂東を期待した。せめてサイキックボクサーの芝克か、赤長棒の金本だろうと思った。百歩譲っても真田兄弟だろう。それが、よりにもよって、あの変人二人とは。 。 がっかりである。

「親分さん、警沢はダメよ。適合者は貴重よ」

「そうだな、捨て駒でも駒は駒だな」

「うわあ、酷いわね。貴方の子分でしょ」

「同じ組に居るだけだ。」

あいつらを組に置いといても、鉄砲玉ぐらいにしか使えない」

「鉄砲玉　　ねえ。本当に捨て駒程度の戦力なの」

「戦力も、人格も、ゴミだ」

「あらあら、低評価ね。どちらにしても適合者を見つけたのだから公爵に報告しに行くわ。」

貴方から見た彼ら二人の話もしておくわ」

「なんだ、まだ話してなかったのか？」

「公爵の病室は、この奥よ。貴方の病室が通り道だったから、先に寄っただけ」

「そうかい。俺はてつきり俺に惚れているから先に報告しに来たのかと思っただぜ」

「ゴリラみたいな顔して、私を口説いているの。歳を考えなさい」

「厳しいな、先生は」

「まあ、そう言うことだから、私は行くわ」

「あいよ、おやすみ」

「お・や・す・み」

そう言い女医は病室を出て行った。

やがて鬼頭も電動ベットの背もたれを戻して眠りに付いた。
夢の世界に入っていく。

少年の未来

探偵事務所での食事が終わる。

ヴァルハラメンバーは、膨れたお腹が落ち着くまで、まったりとしていた。何気ない会話が繰り返り広げられる。

ふと、昂輝が質問を投げかける。

今日の朝から気になっていたことだ。

「そういえば、お砂さんを今日一日見ませんでした。今日はお休みですか？」

誰に訊いた訳ではない。誰か答えてくれると思い訊いてみた。

今居ないお砂を加えれば、ヴァルハラメンバーが全員揃う。しかし昂輝は朝から彼女の姿を見ていない。

昂輝の疑問に、社長椅子にふんずりかえって居た眼一郎が答えた。

「ああ、今日はお休みだよ」

続いて軒太郎が話す。

「お砂ねえさんは、我々と違って探偵業が副業なんでね、日頃から事務所に屯している訳じゃあないんだよ」

「副業　ですか？」

「お砂ねえさんの本業は、不動産屋だよ」

「不動産屋ですか」

「社長だよ」

「社長ですか!？」

驚き反芻する昂輝。

少し意外だと思う。あんなに優美でおっとりした女性が不動産屋の社長とは、ビックリだった。

軒太郎が言う。

「お砂ねえさんは、この辺の大地主でね。

昂輝君が住むことになった砂壺荘の土地だって彼女の私有地だよ。

このビルだって昔、お父さんがお砂ねえさんから譲り受けた物件だよ」

「凄いですね……」

「元々がお嬢様だからね」

あの気品と優雅さは、令嬢の貫禄だったのかと悟る昂輝。

言われてみて、お砂へのイメージが確定して行く。お金持ちなのだと納得する。

赤股が笑いながら言う。

「お上品で、美人で、色っぽくって、ムチムチのポインポインで、お金持ち。文句の付け所が無いのに、何でいまだに結婚できないのやら」

「赤股君。それを本人の前で言ったら砂に埋められるよ。昂輝君も気を付けるといい」

眼一郎が昂輝と赤股に注意を促す。どうやらお砂に対して「結婚出来ない」と言う話題は禁句らしい。

昂輝も何故に結婚できないのか疑問に思ったが、所長の警告を守ろうと心に決める。

故郷の大塚邸で見たお砂の戦いっぷりからして、怒らせるのは危険だと察する。

二人に警告を述べた眼一郎が、話題を変える。今度は昂輝に関係した話であった。

「ところで功風爺さん」

「なんだ？」

「折り入ってお願いがあるんだが、いいかな？」

「ん？」

「昂輝君の事なんだがね」

「僕の事ですか……？」

キョトンとする昂輝を余所に話を進める眼一郎。

「すまないのだけど、彼に武術の基礎を教えてやってはくれないか？」

「武道を叩き込めと？」

「ぼ、僕にですか……？」

昂輝は戸惑いながらも所長を凝視した。眼一郎は黒いアイパッチを付けた顔で微笑んでいる。そして話を功風老に向ける。

「叩き込むまでいなくてもけっこうだ。ただ、基本ほ教えてやってくれ。弟子とか師弟とか言わなくてもいい。勿論指導料として月謝を事務所から払うよ」

「ほほ、それなら構わんが」

「ですが、基本だけですかい、所長さん？」

武天老師の一番弟子が問う。

昂輝も同じ質問を行ないたかった。何故に基本だけなのだろうと……。

赤股の質問に眼一郎が答える。

「私はね、昂輝君を一端の探偵に育てたいのだよ。この事務所のエージェントとしてね」

「眼一郎。やけにこの少年を買っているな」

「ああ、彼は面白いからね。

狼に変身して不死身。呪いの効果で滑稽なほど不幸だ。見ていて愉快そうだ。実にユニークだよ」

眼一郎は笑顔で酷いことを言っている。息子の軒太郎も、うんうん

と、頷いていた。

この親子は、昂輝で遊んでいる。

「できれば手元に置いておきたい。他所に取られるには勿体無いからね」

買われているのか、遊ばれているのか、微妙に感じる昂輝。ジョークだと受け取りながらも表情が引きつっていた。

更に眼一郎が語り続ける。

「うちの事務所には超一流の武道家が二人もいる。三人も要らないよ。」

それよりも、もっとメンバーの個性を分散させて、バリエーション豊かな仕事に対応できるようにしたいのだよ」

「なるほどのお」

腕を組んでソファアの背もたれに寄り掛かっていた功風老が、こくりこくりと頷いた。

赤股も「それは面白い」と言っている。

「格闘技家、武器使い、カード使い、爆弾使い、人体改造、それにウルフチャンジャーの不老不死。」

所長として鼻が高い。個性溢れるメンバーを雇えてうれしいよ。

しかしだ。死なない狼男だけではパンチが弱い。事実、他のメンバーに比べて実力も低い。

彼の死なない能力は負けない能力でしかないからね」

昂輝の不老不死に対して眼一郎は、そう述べた。昂輝の考えと一緒に

である。

「だからと言って、ただ武術を習得して強くなったのでは極道コンビと変わらないじゃないか。強さのジャンルが狭すぎる」

「じゃあ、お主は、この少年をどうしたいのだ？」

「老師の言うとおりです父さん」

「じゃあ所長さんは、この少年君をどうしたいのですかい？」

功風、軒太郎、赤股が、順に問う。昂輝も同じように問いたかった。

「武道家でも、武器使いでも、カード使いでも、爆弾使いでも、人造人間でもない、新たな強さ。新たな個性が、彼に欲しいのだよ」

「ようするに父さんは、防御の不老不死に、新たな攻撃力が欲しい」と

「そんなところだ、息子よ」

「攻撃パターンの個性ですか……」

昂輝の答えに「そうだよ」と眼一郎が相槌を入れる。

個性。

確かに昂輝の攻撃パターンは、呪いの不老不死に頼りきった、死ななければ負けないと言っただけの物だ。

単純な人海戦略にも近い戦術しかとれない。死んでも生き返り、何

度でも立ち向かうだけである。

それ以外の戦術といえば。
憑き姫の力を借りて変身する五色鬼の力。

軒太郎から借りた武器をイゴールに移植してもらった体内暗器。

どれもこれも使うのは自分、戦うのは自分だが、自分ひとりの力ではない。借り物だ。

個性。

自力の強さ。

今、昂輝に足りないものは、確かにそれらかもしれない。

自分に足りないものは、オリジナルの攻撃術かもしれない。

「まあ、この世界に足を踏み入れて間もない。彼が自分の個性を見つけて、磨き上げるのを急がせても仕方が無い。ゆっくり見守る意味もかねて、まずは戦いの基礎から教わるのがいいかと思ってね」

なるほど　と、心中で納得する昂輝。

「それでワシに指導せと」

「ああ、どうかね功風じいさん？」

若干悩んだ顔を見せる功風老。表情が渋い。

「お願いします！」

突然昂輝がソファァーから立ち上がり頭を深く下げて声を張り上げる。

事務所内に昂輝の決意が広がった。

「ほほう。少年は、本当に探偵になりたいのか？」

顎を撫でながら昂輝を見上げる功凧老が言った。昂輝の覚悟を察しながらも確認を取る。

「はい！」

一流の探偵。ヴァルハラエージェント。それらに成りたいと述べるよりも昂輝は、ただ強くなりたかった。肉体的にも、精神的にも。誰にも負けない強さ、自分に負けない強さ、己の中に潜む呪いにも負けない強さが欲しかった。真剣な眼差しのまま頭を下げ続ける。

「よかろう。引き受ける」

「本当ですか！」

頭を上げた昂輝が、満面の笑みで歓喜した。眼一郎も、ほっと胸を撫で下ろした。

「ただしだ」

功凧老が条件を加える。

「教えるのは武術の基本ぐらいだ。本格的には教えない。精々空手と柔道の基礎でいどだぞ。それに月謝はちゃんと頂く」

「有り難う御座います！」

また頭を下げる昂輝。

「あと、普段は弟子の夏鱗が指導する。ワシが自ら指導するのは、たまにだけだ。文句はあるめいなあ」

「ありません！」

と、昂輝が元気に答えるが、赤股は「ズルっ！」と声を上げていた。しかし断る気配は無い。

こうして昂輝が強者を目指すための第一歩が始まるうとしていた。今後昂輝が、どのような個性を見つけ出し強くなって行くかは、この段階では本人を含めてヴァルハラメンバーにも分からなかった。

だが、これはこれで面白いと他の者たちは思っていた。

よちよち歩きの未完成品が、どのようになるか楽しみである。

少年の未来。少年の成長。それらを面白半分で皆が期待した。

「さてさて、どうなるのかしら」

一人静かに本を飲んでいた憑き姫が小声で呟いた。男たちに耳に届いていない。

少年には、無限の可能性が秘められている。

誰にでもだ。

昂輝にもだ。

君にもだ。

少女の現在

「じゃあ、二人とも気を付けて帰るんだよ」

「はい、軒太郎さん。おやすみなさいです」

「おやすみ〜」

昂輝と憑き姫の二人は、軒太郎に見送られながら事務所を出てビルの階段を下って行く。

憑き姫の手には、スーパーのレジ袋に入れられた夕食の残りが下げられていた。肩には豚汁の入った水筒も下げられている。

本当に持ち帰るらしい。

二人が赤茶色のレンガで作られた古いビルを出て行くと、辺りはすっかり暗くなっていた。裏路地には人が疎らに歩いている。

ほんの二時間前までは、ヴァルハラエージェントとヤクザたちが戦っていたとは思えないほど静かである。

しかし、戦闘の痕跡は複数残っていた。

路地の隅に倒れている自販機。アスファルトに刻まれた幾つもの傷人型の窪み。

それらが残っているが、歩く人々は気に止めていない様子である。

時間は二十二時ぐらいだ。憑き姫は眠たそうな目をしている。

十一十二歳程度の子供ならば、そろそろ寝ていても可笑しくない時間帯である。

憑き姫の歩みに力が無い。眠たそうだ。

昂輝は所長の眼一郎に言いつけられて、憑き姫を家まで送ることになった。他のメンバーは、事務所で酒を飲むらしい。

昂輝にとっては、年の離れた大人たちと酒を飲むより憑き姫を家まで送って行ったほうが、楽しい任務である。

昂輝も憑き姫を送ったら、砂壺荘に帰るつもりだ。

話によれば、憑き姫の住んでいるマンションは、砂壺荘の方角にあるらしい。徒歩だと十分程度の遠回りでも済むらしい。

昂輝と憑き姫は、横に並んで夜道を歩いた。

夜風が涼しい。

憑き姫は、あまり話さない。いつもだ。

人見知りしている訳で無さそう。人と会話するのが得意でない様子である。

歩く二人に沈黙が流れる。

しかし沈黙の中に苦痛は感じられない。心地よい静けさのような沈黙である。

憑き姫の醸し出す沈黙は、慣れてしまえば、そんな感じである。

だが、いつまでも黙っているのは、昂輝の男の威厳のようなものが許さなかった。

隣に乙女が居るのだ。幼くても美人だ。可愛い。それなのに何も話さないのは、ある意味男性として失礼といえよう。

そんな気を利かせて昂輝の方から会話を始めた。

「ねえ、憑き姫」

「なに？」

「ねえ、憑き姫」

「なに？」

昂輝の呼びかけに憑き姫は、真つ直ぐ前を向いたまま答える。歩みも止めない。

昂輝は、以前疑問に思ったことを彼女に訊いてみる。

「憑き姫は何で、ヴァルハラ探偵事務所働いているの？」

「……」

眠たいのもあってか憑き姫は答えない。黙ったまま歩く。

「憑き姫の歳からして、今は小学生の高学年か、中学生になっただくらいだよな？ 学校は行っているの？」

「学校は行ってないよ」

あまり驚かない昂輝。憑き姫なら、それもアリかと思っていたからだ。

まるで彼女は、アニメかマンガの中から出てきたような美少女キャラだからである。このような子は、普通居ない。

「なんで？」

「私、飛び級だったの。アメリカで、十歳の時に大学を卒業したわ」

「て、天才！」

「そう、世に言う天才児よ」

「凄いな……」

「大学卒業して、大学院に行くのを進められたけど、日本に帰ってきたの」

「なんでだい？」

「オカルト。カードで魔物の魂を操る術を習得して、そっちの方が楽しかったから」

「な、なるほどね……」

嘘っぽい。

嘘っぽいが、とりあえず信じようと思う。

それにヴァルハラ探偵事務所に居る理由は語っていない。何か怪しい。もっと別の理由がありそうだ。

そして暫く経つと、大きなマンションの前で憑き姫が立ち止まった。三十階建てぐらいだろうか。部屋数が幾つあるかは、一目で分からないほど大きい。明らかに高級マンションだ。

彼女は、此処が住まいだと言う。

「じゃあ」

憑き姫が昂輝に軽く手を振ると、マンションの入り口へと歩いて行く。

昂輝も「また明日」と言っつて手を振った。

憑き姫がマンションの入り口奥に消えて行くのを昂輝は確認すると踵を解した。聳えるマンションに背を向けると夜道を歩き出す。

「ん、こつちじゃないな……」

昂輝は少し歩いたところで、進んでいる方向が砂壺荘の方角と違うことに気付き進む方向を改める。なれない町だ、こんなこともあるだろうとマンションの方角に戻って行く。

「あれ……?」

二十メートルほどの距離にマンションの入り口が見えてくると、そこに見慣れた少女の姿を見つける。白いワンピースの少女。憑き姫だ。

彼女がマンションの入り口から出てくるところだった。憑き姫の方は、引き返してきた昂輝には気付いていない様子である。そのまま昂輝が居る方角とは逆の方へと歩き出した。とりあえず追う昂輝。

「どつしたんだろう……」

疑問に思う昂輝は、気付かれないように後をつける。何故かこそこそとしてしまった。

「どつに行くのかな?」

憑き姫の後を追いながら昂輝は、疑問に自答を考え始めた。

探偵事務所に忘れ物でもしたのかと思っただが、進む方角は事務所の方角とも違った。別の道に進んで行く。

ちよつとコンビにまで？

それもピンと来ない。

声を掛けようかとも考えたが、何故か躊躇する。

ほんの三分ぐらい歩いただろうか、先程の大きなマンションの裏側だ。

そこに二階建てアパートが建っている。昭和に建てられたような古びたアパートであった。憑き姫は、そのアパートの階段を登って行く。

「なんであんなところに……」

憑き姫の後を付けていた昂輝は、そう呟きながら電信柱の陰に隠れていた。階段を登った憑き姫が良く見える距離だった。

憑き姫は二階に並ぶ一室の前に立つ。薄汚れたドアの前だ。

そのドアの部屋には電気が点いていた。窓から明かりが見えている。そして憑き姫は、白いワンピースの胸元から、ネックレスのように下げられた紐をたくし上げると、部屋の鍵を取り出した。

「鍵っ子……？」

ドアの鍵を開けて中に入っていく憑き姫は、小さな声でただいまと言っていた。静かな夜のため、その声が隠れ見えている昂輝の場所まで届いた。

憑き姫が部屋に入っていくと、昂輝は階段を忍び足で駆け上り、その部屋の前に潜むようにしゃがみ込んだ。盗人のように耳を澄ます。中からは憑き姫の声が聞こえてくる。更にもう一人の声も聞こえて来た。

室内には憑き姫の他にも、もう一人誰か居る。昂輝の心中に、誰なのだろうと好奇心が沸き上がった。心臓が高鳴る。

「気分はどう？ お薬はちゃんと飲んだ？」

「ああ、ちゃんと飲んだよ……」

男性の声である。

年配だろうか、随分と元気がない声質だった。弱々しい。話の内容からして病人のようだ。

「お父さん、お腹は空いてない？ 勤め先から賄いの残りを貰ってきたの。スパゲティーとハンバーグよ。豚汁もあるの。お腹が空いているのなら、直ぐに暖め直すわ」

「いつもすまないねえ、お父さんがこんな体のばかりに……」

「お父さん、それは言わない約束でしょ……」

憑き姫の口調は、随分と優しくそうな喋り方だった。いつものクールな口調とは正反対である。優しさと思いやりが満ちている。

それ以上に昂輝を驚かせたのは、憑き姫が話している相手が父親らしいことだった。

だが、よくよく考えてみれば不思議なことではない。
憑き姫に両親が居ても不思議な話ではない。寧ろ居て当然である。

「……」

何故か昂輝は、罪悪感に胸が痛くなる。自分は何をやっているのだらうと後悔した。

音を立てないように昂輝は後退して行った。アパートの階段を降りて行く。

憑き姫にもプライドがあるのだらう。気高い少女だ。

わざわざ高級マンションに住んでいると嘘を付き、真実を偽った。あんなに幼いのにヴァルハラ探偵事務所働いている理由も嘘ぽい飛び級しているとは思えない。病気の父が居ることも内緒にした。

まだ知り合って日が浅い昂輝に、話してくれなくても可笑しくないことである。

昂輝は思う。

憑き姫が隠したのだから、自分が暴くようなことをやらなくても良いだらう。そっとしておこう。いずれ、もっともっと親しくなれば本当のことも話してくれるはずだと考えた。

古びたアパートの前から去ろうとする昂輝。自分が住む砂壺荘の方へと歩き出す。

ちなみに、憑き姫の住むアパートよりも、砂壺荘の方が古くてみすぼらしい。

もう一度振り返る昂輝。アパートの裏手から明かりのついている二

階の窓を見上げた。

直後である。

一室の窓がガラリと開いた。

中から洗濯物を乾そうとしている憑き姫が顔を出す。

路上の昂輝は、偶然にも電信柱に設置された電灯の真下に居た。スポットライトのように照らされている。

路上の昂輝と、窓から顔を出す憑き姫の視線が合う。

固まる二人。時間が止まった。

憑き姫の可愛い顔が、引きつりながら硬直している。昂輝も似たようなものだ。

いたたまれなくなり昂輝がゆっくりと顔を反らす。

憑き姫は、ゆっくりと窓を閉めた。続いてカーテン閉めたが、彼女のシルエットは窓の前から動かない。

昂輝が家路を急いだ。

明日も仕事である。

巨大門事件を解決しなくては。

二日目の朝（前）

早朝　　五時二十七分。

以外に東和勝之の朝は早かった。寝巻き姿でベットから出ると、茶髪の頭を片手で掻いた。

まだ眠いのか、大きな欠伸で口を開きながら、壁にある時計を見た。

「ちつ、まだ五時半かよ……。もう一度、寝直すか……」

そう言いながらカーテンの閉められた窓から差し込む朝日に瞳を細めた。

「まぶし……」

東和勝之。

年齢は今年で二十五歳になるが、ろくでなしを絵に描いたような生き方を歩んでいた。

母は東和栄光の長女である東和栄江である。

三つ下の妹である理沙は、彼と違って真面目で優秀である。出気が良い。

勝之は、東和家に寄り掛かるように生きてきた。

大学は一浪の末に、何とか入学した。京大である。入学できたのは、学力よりも財力の方が大きかった。裏口入学である。

大学の方は、四年間遊んでいたが何とか卒業できた。殆ど裏金で単位を取った。ワイロを使うのは得意である。

彼は、お金を稼ぐのは苦手だが、使うのは得意であった。

卒業後は、祖父の会社に入社した。勿論、それ以外の就職活動は行なっていない。

そして直ぐにアメリカのニュージャーシー支部に転勤。自分から望んだ。

東和勝之は、賢い人間ではなかったが、英語だけは達人であった。小さい頃から英才教育された結果である。

だが、東和勝之が英語を得意とする理由は、別にあった。それは、彼の女性の好みに大いに関係している。

彼は、金髪の白人女性が好みなのである。アメリカ版プレイボーイのカバーガールのような女性が大好きなのだ。

彼が自分の好みに気付いたのは小学四年生の時である。

祖父の客人で屋敷にやって来た、ハリウッドのセレブ女優を生で見て以来であった。

誘惑的な眼差しと、情熱的な赤いルーージュ。

金髪に白い肌。

ボツ、キュン、ボンなセクシーボディ。

幼心が興奮しまくり止らなかった。否。たまらなかった。

その時から外人女性と付き合う為に、それだけの為に必死で英語を勉強した。

性欲から来る情熱とは凄いパワーである。

幼少の頃から言動が荒んでおり、祖父に期待もされていなかった男が、英語だけは猛勉強したのだ。

高校生の夏休みには、アメリカにホームステイを行い、アメリカの風習も学んだ。その時に、アメリカ美人の口説き方も教わった。

金髪女性とイチヤイチャする準備を、計画的に進めたのである。

そして祖父の会社に入社してから直ぐにアメリカの支部への転勤願いを出し、念願叶ってニュージャージー支部に転勤が決まったのである。

一族全員が驚いた。

身内の中でも一二を争うろくでなしの勝之が、ついに仕事へと目覚めて真面目になったのかと。

無論それが誤解だと全員が認識を直ぐに改める。

やはり勝之はろくでなしだと再認識する。

勝之はアメリカに渡ってから一年で会社に出社しなくなった。

家族親戚の目が届かないことを良いことに、現地の金髪美女と夜な夜な遊びまわり、墮落を全力で満喫していたのである。

そんな怠惰の日々は、勿論の如くすぐさま東和栄光の耳に入り、日本へと強制送還されたのである。

それから厳重な監視下で、重役でありながら会議にも主席擦る事無く、日本の本社ビルの窓際に座り続けていた。

親戚一同からは、ダメ人間の烙印を押されているが、本人はさほど気に止めていない。

仕事はきっちり五時まで。

時計の針が五時を差したら直ぐに退社して行く。アフターファイブに専念しているのだ。

期待もされていない。仕事もしていないに等しい。

それでも一日八時間の拘束で、人が羨む程の手取りをもらえるのだ。本人は満足していた。

東和勝之たる男には、それ以上の欲も野心もない。まさに、東和グループに寄り掛かった人生そのものである。

「……ううん？」

寝ぼけ眼を擦りながら歩き出す東和勝之。締められたカーテンの間から零れる朝日に誘われて行く。そしてカーテンに両手を伸ばし、一気に左右へと開けた。
ガラガラとカーテンレールが鳴って開く。

最初は朝日に目を細めていた勝之だが、見えてきた景色に驚く。

「えっ!？」

外を見て声を詰まらせ驚いた勝之は、その異常な光景に愕然としながら震えた。

いまいち状況を理解しきれないのか、暫く立ち尽くしたまま固まる。思考が停止していた。

「……な、なんだよ……これは……!？」

慌てた足取りで踵を返した勝之は、寝巻きのまま部屋を駆け回る。何をどうしたら良いのか判らない。

とりあえず衣類を着替えた。
スーツ姿に着替え終わると、駆け足で自室を飛び出して行った。自分ひとりでは答えが出ない。家族を探して廊下を走った。

二日目の朝（中）

赤い絨毯が敷き詰められた屋敷の廊下を勝之は走った。動転した表情を、一滴の汗がつつたつて落ちて行く。スーツの下ではボタンを掛け違えた白いワイシャツが靡いていた。

先ず勝之は、理沙の部屋を訪ねたが部屋に妹は居なかった。次に父と母の部屋を訪ねるがやはり両親も居なかった。

「こんな時に何処行きやがった！ まだ朝だぞ！」

三人とも早朝から何処に消えたかと狼狽して愚痴を零す。そして、答えを求めるように再び走り出す。

暫くして一人のメイドと出くわした。若いメイドである。勝之に対してメイドは、礼を弁え深々と頭を下げた。慌てて足を止める勝之。メイドに乱暴な口調で問う。

「おい、親父やお袋は何処に行った!？」

「は、はい……?」

何事かと戸惑うメイドは、キョトンとした表情で身を強張らせる。興奮した勝之に怯えていた。

勝之の両手が華奢なメイドの両肩を荒々しく掴んで揺さぶる。メイドは更に怯えて言葉を返せない。

「皆だ！ 誰でもいいから、皆何処に行った!？ 爺さんは!？ 細川は何処だ!？」

「み、皆様なら、二階のパーティールームに集まっていたが…」

震えながら答えるメイド。

広い庭が見渡せるパーティールーム。昨日探偵と面会した部屋である。

勝之は、怯えるメイドを解放した後、パーティールームを目指して走り出した。

パーティールームには直ぐ到着した。入り口の扉は開いている。

勝之が中に駆け込むと、昨日から帰宅していた家族の面々が、庭が一望できる大きな窓の前に並んでいた。秘書の奥村、執事の細川もいる。それと数人のSPたち。

早朝にも関わらず全員の身形が整っている。

動転して靴下を片方履いていないのは、勝之ぐらいであった。女性はきちんと化粧もしていた。

勝之が部屋に駆け込む。息が切れている。

「遅いわよ、勝之」

嗜めるように言ったのは母親の栄江だった。出気の悪い息子の為か、早朝の為か、栄江は機嫌が悪そうであった。

「ど、どうなってるんだ、お袋……」

言いながら勝之は、横一列に並ぶ一族の端に加わる。

「どうなっているも、こうなっているもないだろ。見たままだ……」

勝之の質問に答えたのは、叔父の栄進だった。視線は外を向いている。勝之も前を向いた。一族の視線が庭に向く。そこに聳えるのは巨大な門。

の、筈だったが。

「見たままもなにもねえだろ。昨日と違うじゃねえか！」

東和一族のみに見える巨大門は、前日までと変わっていた。変貌している。

否。巨大門は変わっていない。

「あれは、城壁だろ……」

巨大門の両脇に伸びる石造りの壁。勝之の言うとおり城壁である。城壁は、岩を切り開いて作られた巨大ブロック状の物を積み重ねて築かれていた。それが巨大門を中心に百メートルほど両サイドに伸びており、その先で霧の様に消えて途切れていた。巨大門は、巨大城壁へと変貌して東和邸の前に立ち並んでいる。まるで、難攻不落と歌われたトロイの城壁であった。

「奥村……。探偵に連絡を入れたか」

当主である東和栄光の言葉に秘書の奥村が、「既に」と答えた。東和の一族は緊迫の表情で外を見ているが、奥村は冷静を保っている。彼には見えないのだ。怪異の建造物が。

「先程迎いの車も出しました故、暫くもしたのならば到着するかと」

「そうか……」

流石の東和栄光も緊張を隠せていない。皺の多い顔が緊張に力んでいた。

それを勝之がチラリと確認すると、愚痴を怒鳴らせる。

「どうなってるんだ、これは呪いか！ 祟りか！ なんなんだよ！？」

我慢しきれず大きな声で怒鳴り問う勝之。だが、全員が無視するよ
うに答えない。執事の細川が宥めようと勝之の側に立つ。

「やっぱり、あいつの仕業か……」

「馬鹿いわないでよ、栄進。あいつは今病院よ。意識不明よ、そんな訳が無いじゃない！」

弟の言葉に栄江がヒステリックに答えた。苦虫を噛み潰したような顔を見せていた。

二人のやり取りを見て勝之が首を傾げる。

叔父の栄進が言っている『あいつ』とは、おそらく竜栄のことだろう。

勝之は知っている。

竜栄が、母や叔父の栄江と腹違いであることは知っている。隠しもしない真実である。そして病院に意識不明で入院していることも知っていた。

いっそのまま死ねば良いと思っている。そうならば祖父の遺産が

少しは踏めるってものだ。あの男に対しては、その程度にしか考えていない。

しかし今現在のこの状況では聞き捨てなら無い台詞であった。叔父の栄進を睨みながら訊く勝之。心の腐った瞳に脅しが混ざっている。年上であり、叔父に向けるような視線でない。

「栄進叔父さんよ、テーマ何か知っているな!？」

「俺は関係ない!」

栄進が甥の質問に、威嚇を思わせる強い声を上げた。

「じゃあ、あれは何だ! 何なんだ!」

二日目の朝（後）

外の城壁を指差しながら怒鳴る勝之。完全に上下関係を見捨てた。

そこに東和栄光の一喝が炸裂する。

「黙らんか！」

「ッ！」

「!?!」

訳も分からず言い争う二人が息を飲んで言葉を失う。そして互いにそっぽを向いた。

「答えは探偵が調べ上げる。真実を知る為に、あのような輩を雇ったのだ！」

そのとおりだと勝之も思った。しかし未知への不安の方が膨らんでいく。恐怖までは行かないが、何か怖いのだ。本能が何かを恐れていた。

「ちっ、冗談じゃあねえや……」

愚痴を溢しながら勝之が列を離れて部屋を出て行くこととする。出入り口に向う勝之に、妹の理沙が声を掛けた。

「兄さん、何処に行くの？」

不安気に問う妹に兄は振り返らないで言った。

「俺は出て行くよ。こんな屋敷に居られるか、薄気味悪い！」

確かにだ。勝之の台詞を聞いて栄進も同感した。隙を見て自分も出て行こうと企む。だが、今ではない。大人らしいタイミングがあるはずだ。それを図ろうと思う。

「兄さん、ちょっとまってよ！」

「五月蠅い！」

妹の制止を無視して勝之は部屋を出て行った。

止めようとした理沙の肩を父の陽史が掴んだ。理沙が振り返ると陽史は気の弱そうな表情で首を左右に振った。止めても無駄だと言っている。

「こんな異常な出来事に付き合ってられるか……。俺はオカルトなんて興味ないんだ。関わりあうのもゴメンだ。やりたい奴らだけでやればいい！」

怒鳴り散らしながら廊下を進む勝之。一步一步が廊下を踏みつけるように重い音を鳴らしていた。すれ違う使用人たちが怯えながら廊下の隅に逃げ寄る。

勝之には、何も理解できなかつた。

何が起きているのか。

何が始まるうとしてしているのか。

誰の仕業なのか。

誰が何を知っているのか。

何一つ解らなかった。

この事件は、関わらないほうが懸命だと本能が指示を飛ばしてくる。逃げよう。

逃げるんだ。

そう指示を出してくる。

勝之は、自分の直感に従おうと決めた。それが一番だと思う。

そして屋敷を出て行く為に身支度を整えようと自室を目指す。とりあえずは多少の着替えと貴重品を持ち出せば良いだろう。後は屋敷を出てからゆっくり考えれば良い。

「ん？」

自室を目指して早歩きで進んでいた勝之の足が止まった。まだ自室までは距離がある。

「なんだあれ？」

足を止めた勝之が、小声で呟く。周りには誰も見当たらない。静かである。

猫背で廊下の中央を凝視する勝之。廊下の床を見ていた。何か落ちている。

「ハンカチ……か？」

廊下の中央。赤い絨毯の上に、それは落ちていた。

普通のハンカチより大きい布切れ。四角い布切れ。

色は漆黒のようなブラック。

五十センチ四方ぐらいの大きさである。

それはまるで、床に四角い穴が開いているようにも見えた。

「何で、布が……」

そう言いながら落ちている黒い布切れに手を伸ばし拾い上げようとする。

しかし手が途中で止まる。

不吉な予感が寒気となって背筋に走った。

この漆黒の布切れは、拾わないほうが正しいと何かが告げてくる。

災いの臭いがする。

勝之は中腰で腕を伸ばした形で少し悩んだ。

だが。少しずつだが腕が布切れに誘き寄せられるように近づいて行く。まるで自分の意思とは別に、体が勝手に動いて行くようだった。

「えッ!」

そして黒い布に指先が触れようとした瞬間であった。予想していなかった突然のハプニング。

漆黒の表面から真っ黒な腕が伸び出てくる。黒い手は、瞬時に勝之の手首を掴んだ。

「~~~~~!!」

突然手首を掴まれ声にならない悲鳴を上げる勝之。
生暖かい不気味な感触が伝わって来る。幻ではない。
その生暖かい感触が、恐怖に変わる。
戦慄が勝之を支配した。

「iiiiiiiiiiiiii!」

恐怖が勝之の声と顔に表れる。真っ青になり血が引いていく。
必死に黒い手を振り解こうとしたが、黒い手は、手錠のようにガツ
チリと掴み離れることはなかった。それどころか勝之の体を引っ張
ってくる。人間の力とは比べ物にならない怪力。
まるで漆黒の四角い穴に勝之を引きずり込もうとしているようだっ
た。

「ああああああああ!」

恐怖の悲鳴が一段階上がる。ガクガクと全身を震わせながら叫ぶ。
恐怖に慄くヘルプの声だった。
だが、助けが現れるよりも早く勝之の体が、四角い穴の中に引きず
り込まれた。

勝之の体が刹那に消える。廊下には、黒い布切れだけが残った。

場所は変わって、勝之が消えた廊下に面した一室の室内。そこはS
Pの休憩室だった。

「おい、今何か聞こえなかったか?」

「そうか?」

休憩室には二人の黒服が、ソファーに座りながらコーヒーを飲んでいた。一人はまだ眠そうな顔をしている。

「念の為に、ちょっと見てくるか」

「そうだな」

「今屋敷内で、巨大な門が見える見えないで騒いでいる真っ最中だ。念を入れといて損はないだろ」

「まったくだ」

「しかしオカルトとは、なんとも馬鹿げた話だよな」

「まあ、そう言うな」

言いながら二人は立ち上がりコーヒーカップをテーブルに置いた。それからスーツの下に隠してある二段式警防をチェックして、ホルスターの止め具を外した。万が一に備える。二人が警戒しながら廊下に出て行く。

「勝之様でしたか」

二人が廊下に出て行くと、そこには勝之がたっていた。二人のSPに背を向けている勝之が、チラリと肩越しに後ろを振り返る。目が死んでいた。

そしてまた前を向きなおした。

何やら様子が可笑しい。勝之は、まるで夢遊病者のように立っていた。

「勝之様、何かありましたか？」

S Pの一人が訊いてみた。

「……………」

勝之は答えない。背を向けたままだ。

「勝之……様……？」

沈黙が三人の間で暫し流れた。

「……………なに？」

勝之がやっと答えた。しかしながら、やはり様子が可笑しい。生気が感じられない。

「大丈夫ですか？ ご気分でも悪いんですか？」

勝之は歩き出しながら答える。

「いや、まだ眠いだけだ。部屋に帰って寝直すよ」

「そうですね……………」

勝之の答えを聞いて二人のS Pは、呆れたような溜息をついた。

「眠いだよさ」

「お坊ちやまは暢気でいいな」

小声で言うとSPの二人は休憩室に戻っていた。勝之はふらふらとした歩みで自室を目指す。その手には真っ黒な布切れが握られていた。

勝之が密かに邪悪な笑みを作った。

「やっぱり屋敷を出て行くのは止めよう。楽しくなるはこれからだ。自分が何をすべきか判ってきたよ。そう、判ってきたよ」

勝之は握った漆黒の布切れを、スーツの内ポケットに入れた。そして怪しく笑い出す。

「クククククククク」

再確認とオプシヨン（前）

「いったいなんですか……。この黒い壁？」

前方に聳え立つ黒い壁を見上げる五人。呆然と言ったのはお砂である。

鍔の大きな白い帽子を風に飛ばされないように両手で押さえながら彼女は真つ黒な壁を見上げていた。純白の衣類と長い髪が風に靡いている。

「若先生が話していたのと、随分サイズがちがってないですかあ？
まるで別物じゃないっすか……」

「ああ、僕もびっくりだよ」

軒太郎と赤股が、そのような会話を交わしながら黒い壁を見上げている。

黒い壁とは、城壁に変貌した巨大門の裏側であった。巨大門が見える者たちには、その裏側はただの黒い壁にしか見えないのである。

「一大事と聞いて駆けつけてみたけど。これは随分とふざけた常態ね」

憑き姫も見上げながら言う。その横に黒い怪異を見上げる功凧老が立って居た。

今日この場に居るのは、軒太郎、憑き姫、お砂、それに極道コンビの五名である。

所長の眼一郎、昂輝、イゴールの三名は居ない。

眼一郎に関しては、単独で情報収集することとで一人別行動をとっていた。いつものことらしい。

昂輝とイゴールは、遅れて屋敷に来る予定となっていた。念のため昂輝に体内暗器を移植している最中である。

憑き姫の最初の話では、巨大門が具現化するのとは明日と述べていた為、前もって昂輝に戦闘力を備えさせようとして、なっただのである。

この事件、何が起こるか分からない。ヤクザの襲撃すらあったのだ。如何なる可能性にも対処できるよう備えとて損はないだろう。

昂輝への体内暗器装備は、眼一郎の指示であった。

五人の探偵だけがリムジンの迎いで東和邸に来ていた。そしてリムジンを降りたところで、五人揃って怪異の黒い壁を見上げていたのである。

「皆様、東和栄光様がお待ちですので速やかに移動を願います」

探偵たちを迎いに来た若い執事が、そう言うと五人を先導するように黒い壁の方角に歩き出す。屋敷は黒い壁の向こうである。探偵たちには、黒い壁が邪魔して屋敷は僅かにも見えなかった。

五人は若い執事を追うように歩き出す。

黒い壁に向って歩く若い執事。彼は黒い壁が見えていない。黒い壁に向って歩いている訳でない。屋敷に向って歩いている積りであった。

その彼が黒い壁に突き当たる。執事の体は壁に衝突することなく、吸い込まれるように闇に消えていった。探偵たちの若い執事を見失う。

「実体は無いのか」

「ええ、門の頃からそうです」

闇に消えた執事を見て功凧老が言うと、軒太郎が過去の状態を説明する。

しかしながら探偵全員が、黒い壁の前で足を止めた。先に進むのを躊躇する。

「皆様、どうかなさいましたか？」

闇の中から若い執事の声が聞こえてきた。足を止めた客人たちに気付き声を掛けてきたのである。

若い執事が、何故に立ち止まるのかと疑問に思い首を傾げていた。だが、探偵五人には、その仕草すら見えていない。

「大丈夫よ。実体は無いわ。害も無いわよ」

「そうね」

お砂が最初に歩き出すと、後に憑き姫が進んだ。二人の女性が壁の闇に入って行く。男たちは、ギョツとした表情で見守った。たいしたものだと感じてしまう。

「女は凄いな……。さあ、我々も進もうや」

「そうですね、老師……」

女性二人に遅れまいと功凧老が闇へと進んだ。少し遅れて軒太郎と赤股が続く。

闇の中を歩く探偵たち。暫くすると闇を抜けた。男三人が闇から出ると、明るい世界で女たちが此方を向いて待っていた。

「凄いですわ……」

お砂と憑き姫は、上を向いていた。驚きの言葉をお砂が漏らした。それに誘われ男性たちも振り返り頭上を見る。

そこには城壁が聳っていた。中世に建造された防御壁。黒い壁の正面。

大きい。 巨大。 鉄壁。 そのような印象を感じた。

「憑き姫。 どうして成長しているのですか、この怪異の代物は？」

天を見上げていた軒太郎が視線を落として憑き姫に訊く。憑き姫は直ぐに答えなかった。冷めた表情で考え込んでいる。

そこに再び若い執事の声が飛んできた。

「ごほん。 皆様、お急ぎを」

若い執事は、自分の任された緊急指令を完了させようと五人を急かす。

怪異が見えていない若い執事には、五人が呆けて空を眺めているようにしか見えないのだ。急いでくれと云っているのに急いでくれないことが腹立たしい。

「若いのが、そう急かすな」

功風老の返事と共に五人が振り返り屋敷の方へと歩き出した。若い

執事も溜息と共に踵を返した。客人を先導する。その光景を屋敷の三階から東和家の人々が眺めていた。

「どうやらオカルト探偵が到着したようだな」

窓から家族と共に様子を窺っていた栄進が、皮肉を声のトーンに混ぜて言った。オカルト探偵と言うフレーズが彼なりの侮辱のようだ。栄進もまた、巨大門が見えていなければヴァルハラ探偵なんぞ詐欺師集団としか思わなかったであろう。今でも眉唾だと思っている。

「ですが、そのオカルト探偵さんが、頼みの綱なんでしょう」

長男の嫁、聖子が言う。

夫が居ないのに着物姿の嫁は堂々と述べた。

嫁の立場で東和家に入ってきた人物でありながら、直系の者たちに混ざりながらも引けを取っていない。一本筋の通った和服美女である。

しかしながら彼女は怪異なる巨大門……否　巨大城壁の姿が見えていない。それなのに彼女が今回の怪事件を信用したのは、幼い息子栄聖が、問題の巨大門が見えると言って怯えたからである。可愛い息子の言葉だけは何よりも信じられた。

暫く経つと五人の探偵が、東和家の人々が待つパーティールームに入ってくる。

東和家の面々が探偵たちを不審者でも見るような眼差しで迎え入れた。

「栄光様、ヴァルハラ探偵の皆様をお連れしました」

若い執事は頭を下げながら言うと、すぐさま部屋を出て行く。彼の仕事はここまでの様子だ。

「すまないな、探偵諸君。早朝から呼び出したりして」

東和栄光が渋声で詫びを入れるが頭を下げない。とても無礼を詫びている態度でなかった。口先だけの謝罪のようだ。

「いえいえ、どうやら状況の展開に皆様驚きの様子で」

そう軒太郎が述べている最中に、栄江と栄進の兄弟が、探偵の人数が増えていることに怪訝な表情を見せる。何故人数が増えたのか訊きたそうな顔であるが、父の会話を邪魔できない様子だ。

「到着早々悪いが、あれは何だ、探偵？」

「あれ　ですか？」

東和栄光の言葉に窓の外の怪異を指差す軒太郎。とぼけた仕草である。

「それ以外に何がある。今現在で解っていることを報告してもらおうか」

軒太郎に質問を投げかけながら東和栄光は、ソファーに腰を下ろした。

ズシリと尻に体重を掛けながら蟹股で座り、正面に両手を乗せた杖を突く。そして功尻老にも負けない厳つい顔で軒太郎の営業スマイルを睨み付けた。納得の行かない答えでは、怒鳴りつけられそうな気迫を醸し出していた。

「憑き姫、あれに関して報告して挙げなさい」

軒太郎が横に立つ憑き姫に話を振った。憑き姫が抑揚の無い口調で説明を始める。

「あれは夢の産物。想像力を元に作られた幻」

「お嬢さん、言っている意味が分からんな。ワシらにも理解できるように説明願えないかね」

東和栄光の言葉を見無視する憑き姫。自分のペースで説明を続ける。

「今は一定の靈感を持ち合わせて人物と、例外的人物にしか見えな
いが、具現が終了したのならば、それ以外の一般人にも見えるよう
になるわ」

「み、見えるように成るのですか……」

驚き声を漏らしたのは、老執事の細川皆松であった。その声に東和の人々が視線を向けると、照れたのか細川は咳払いを一つして俯く。立場を弁えて気配を消す老執事。

突然ながら栄江が怒鳴りだす。

「冗談じゃあないわよ！ あんな物が屋敷の前に建っているのを世間様に見られたら東和家の恥だわ！」

栄進が続く。

「確かに姉さんの言うとおりで。マスコミに知られたら大騒ぎだぞ！」

興奮する二人を無視して憑き姫が更に語る。

「見えるだけじゃなく、触れるようになるわ。きっと」

「触れる……だと」

言った栄進の顔が青ざめる。

憑き姫の話に探偵以外が緊張を露にしていた。

「最終的に具現化するんだ、触れて当然だわなあ。逆に触れなければ、がっかりだあ」

赤股が声を潜めず笑いながら言う。

その言葉に東和家の人々が不快な眼差しを向けた。そこから緊張感の満ちていた室内に殺伐とした思念も混じり始め。

東和栄光がソファーに腰掛けながら眉間と口元に力を込めていた。厳しい顔で瞼を閉じて何かを考えているようだった。

栄江に栄進の表情も厳しい。顰めた表情が父親に良く似ていた。やはり親子である。

再確認とオプシヨン（中）

「さてさて皆様」

軒太郎が営業スマイルを輝かせながら喋りだす。胸の前で手もみをしていた。

「少しばかり話題を変えさせてもらいます。今度は私からの質問なのですが？」

「何かね？」

瞼を閉じていた東和栄光が、目を開き答える。

「再確認です」

「再確認とは？」

「契約の再確認です」

「依頼料に不満でも？」

ソファーに座る主人の横で、スーツ姿の秘書が問う。

七三の黒髪に眼鏡を掛けたインテリ風の男。奥村である。歳の頃は三十ぐらいだろうか、他人に興味がないような冷たい表情である。エリートの奥村が、金の話をはじめた軒太郎を下賤な者と判断したのか、軽蔑の眼差しで見っていた。

「いえいえ、依頼料には満足しています。不満は欠片も御座いません」

「では、なんだ？」

渋い声で東和栄光が問い直す。

「このたびの依頼は、我々ヴァルハラ探偵を『探偵』としてお雇いですか？」

「何が言いたい『探偵』くん」

東和栄光が珍しく地人を茶化した。あまり無いことだ。

「なるほど、『探偵』としてお雇いですか」

「三外さん。それが如何なさいましたか？」

奥村が問う。

「ならば我々の仕事は、あくまでも調査。真実の究明と報告。それが『探偵』の仕事と成り、我々への依頼と受け止めてもよろしいのですな」

「……おい、ちょっとまってよ！」

大声を上げて栄進が一步前に入る。

「それは、お前らが、あの訳の分からない門だか壁だかをどうにかしてくれるって訳じゃあないのか!？」

「依頼に含まれていませんな」

軒太郎の返事に合わせて憑き姫が頷いている。
東和家の人々が焦りを見せていた。

「おいおい、お前らオカルトのスペシャリストなんだろ！ オカルト事件を解決するのが仕事なんだろ！？」

「如何にもそうですが？」

営業スマイルで、とぼけたように答える軒太郎。後ろではお砂も笑顔を見せている。赤股に関しては口を押さえて笑っていた。
ヴァルハラ探偵の者たちには、なにやら可笑しいことらしい。

「あなた方は、大きな勘違いをしています」

軒太郎が言った。

「勘違い……？」

「『探偵』は真実を究明して依頼人に報告します。犯人が存在する事件ならば、犯行を暴き上げ犯人を見つけ出します。

しかしです。

犯人を捕まえるのも、裁くのも『探偵』の仕事ではありません。ましてや犯人を倒すなんてことは行ないません」

確かに、そうである。軒太郎の述べたとおりだ。

「外に広がる怪異の真相を究明しますが、解決は我々の仕事でない

事を、お早めに理解していただきたい。

犯人は見つけ出します。動機も暴きます。ただし捕まえませんし、あなた方の身も守りません」

「あんたらの身を守るのは、屋敷中にうろついている黒服SP共の仕事だろうしなあ」

そう言うと子悪党風に笑う赤股。

部屋の入り口や壁際に立つ数人のSPたちの顔に緊張から力が入る。

東和栄光が、突然杖で床を強く突いた。ドンつと音が室内に響く。

威嚇の次に御老体が洪声で話し出した。七十歳の老人とは思えない眼力で軒太郎を睨む。

「御主が言いたいのは、オプションの勧めか？」

「察していただけましたか」

軒太郎の営業スマイルが一段と輝いた。

「ならば依頼料を二倍に跳ね上げよう。それですべてを丸く治められるのかね？」

「我々ヴァルハラ探偵のエージェントは、そこらの探偵とは違います。料金次第では討伐も引き受けます」

軒太郎の言葉に僅かな間があった。わざとらしい間である。その意味を東和栄光が直ぐに察する。

「よかろう、三倍だ。依頼料を三倍出そう。これで文句ないだろう」

「心遣い、感謝いたします」

そう言つて満足気に微笑む軒太郎が頭を下げた。

「さ、三倍……」

二人の会話に秘書の奥村が口元を引きつらせた。

彼だけは、ヴァルハラ探偵事務所に支払われる報酬の量を知っているからだ。三倍になったことで金額の多さに驚いているのだろつ。怪しげな探偵に払われる依頼料でないと彼は思っていた。実々自分の年収の数倍である。シヨックだった。

「では、最後に確認を行ないます」

「うむ」

軒太郎がスーツの襟を整えながら最後の確認を始めた。

「怪異の討伐に関しては契約書が存在しません。オカルトの話なので裁判になつても時間の無駄　と、なります。この辺はご理解ください。」

だからと言つて我々ヴァルハラ探偵は適当な仕事は行いません。口約束でも契約はお守りします」

「当然だ」

「犯人は捕まえます。ですが事によっては殺害する場合もございます。これに関しても黙認願います。」

それと戦闘に発展した場合は、依頼人である皆様の安全を優先しま

すが、巻き込まれて怪我や死傷なさいましても我々では一切の責任は取りかねますのでご注意くださいませ」

赤股の言葉が思い出された。東和家を守るのはSPの仕事である。

「やばくなったら、自分の身は自分で守れってことか……」

栄進が軒太郎を睨みながら言うが、とても弱腰である。

「皆様の身を守ると言うオプションも御座いますが、如何なさいます?」

「分かった。四倍出そう」

軒太郎の進めに東和栄光が、更に依頼料を引き上げる。躊躇がない。東和栄光にしてみれば、この程度の金額で解決できるのならば安い問題なのだろう。

「有り難う御座います。流石は東和家の当主殿。太っ腹だ」

「お世辞は要らんわ」

本当にお世辞は要らないといった表情である。東和栄光たる老人は、その程度で惑わされるほど小者でない。

再び確認に戻る軒太郎。

「こちらのオプション対象は、『東和』の名を持つ人々だけでよろしいでしょうか? この金額的では、守れる人数に限界御座います

ゆえ」

「ああ、それでかまわん」

東和栄光の返答に、秘書奥村が主をチラリと横目で見た。己が人数に含まれて居ないことに不満を感じている様子だった。

「ただし　だ」

今度は東和栄光の方から条件を突きつける。眼差しが真剣だ。

「なんでしよう?」

「ワシの家族が誰か一人でも傷ついたら、このオプションは無効とするぞ」

「死亡程度でご勘弁を。何せ人数が多すぎます。

それと、此方の敷地内のみ警護とさせていただきます。

ダメと仰るのならば、こちらのオプション自体無効とさせてもらいます」

強気に出る軒太郎に、東和栄光が暫く考えた末に、孫の栄聖を見て決意する。

「よかろう。それで頼む」

一代で大企業を育て上げた豪傑でも、幼い孫には甘いようだ。穢れをまだ知らない無垢な栄聖だけは守りたい様子である。

パンツ、と音が響く。

軒太郎が両掌を拝むように叩いて音を鳴らした。

「交渉成立です。これより我々ヴァルハラ探偵事務所のエージェン
トは、探偵としての依頼のほかに、犯人討伐と、依頼人の身柄安全
を踏まえて、今回の事件解決に取り組みます」

軒太郎の台詞が言い終わると同時に、ヴァルハラメンバー全員が不
気味な笑みを見せた。

その薄気味悪い微笑を見た東和家の人々が、逆に表情を青ざめる。
自分たち一族が、現在とんでもない事件に巻き込まれていることを、
その笑みから再確認した。

再確認とオプシヨン（後）

「確か、三外軒太郎君といったかな？」

「これはこれは驚きました。私如きの名前をフルネームで覚えてらっしゃるとわ」

片目を瞑りながら軒太郎のフルネームを述べる洪声の富豪は、侮れないほどに記憶力が優れていた。

軒太郎がフルネームを名乗ったのは一度だけだ。わざとらしく驚く。

「物覚えは幼少時代から自信があつてのお」

「それだけじゃあないでしょう、東和栄光殿。

東和グループの会長と言えば、裏社会でも計算高さが評判です」

軒太郎に続いて、斜め後ろに立つ赤股が、ふざけた口調で嘲言った。

「あくどいつてな。ヒヒヒヒ」

「父を侮辱するか、このチンピラ！」

「止めんか栄進！」

父を馬鹿にされた息子が拳を握りながら怒鳴り声を上げて、赤股の方へと興奮そのままに進んで行く。

だが、侮辱された本人が、すぐさま息子を止めた。東和栄光の一声は、一瞬で息子の行動を制止させてしまうほどの気迫があった。栄進が固まりながらも赤股を睨んでいた。

「今はワシと、その若頭とで話している最中だ。邪魔をするな」

「……くうう」

栄進が一步下がった。感情を堪える。

「三外軒太郎君。息子の無礼を許してくれ」

「いえいえ、東和栄光殿。こちらこそ仲間の無礼をお許しあれ」

両者で謝罪を交わすが、どちらの態度も忌々しかった。謝罪に心が籠もっていない。

「三外君。君をオカルトのスペシャリストとして雇い入れたのだ。専門家として是非ともの確なアドバイスが欲しい」

「アドバイスですか？」

緊張の薄れた表情を横に傾ける軒太郎。質問の内容を待つ。

「私はこう見えても家族思いでね。例え愚かな息子や馬鹿な孫でも可愛いのだよ。繋がれし血縁を無視できないものだ」

「肉親は、大切な存在。当然です」

軒太郎の顔が優しく微笑む。本物の笑みなのか、偽りの笑みなのか判断がつかない。

「この怪事件を眼前に我ら東和の一族は、どうしたらいい？」

この館に止まりお前たちに守られた方が安全か？
それとも館を離れて身を隠した方が安全かね？」

父の質問を聞き子供たち孫たちが気付く。

そのとおりだ。

屋敷の前に聳え出た怪異の門に、正面から付き合う理由などなかったのである。屋敷を出て何処かに身を隠せば良い。

「後者は懸命でないですね」

軒太郎が首を左右に振りながら答えた。

「何故にだ。探偵？」

「まだ分からないことが多いからです」

「分からない事とは、何かね？」

「怪異の正体。犯人。動機。狙い。目的が欠片も判明していません。正直なところ、皆様東和の人々が狙われているかも分からない。

あの門が皆様に見えるのも、ただの偶然やもしれません。ここに表れたのも偶然やもしれません。

何も分かっていないのですよ」

「なるほど……」

東和栄光の一言は、溜息のようだった。

「では、まだ何も見当がついていないのですか？」

訊いたのは長男の嫁である聖子夫人だった。横には幼い息子の栄聖が、隠れる様にくっ付いていた。今にも泣きそうな顔である。

「いえいえ、色々不審なポイントは察知しています」

「どこだね？」

「此方の人々は、幾つか我々探偵に隠し事をお持ちのようで……」

「隠し事……」

反芻した言葉に孫娘の理沙が肩を竦めた。上品な顔の眉に皺を寄せ
る。

彼女は、隠し事を秘めている一人である。

東和の人々を一瞥した後に軒太郎が言う。

「先ずは、東和家にもう一人の血族がいらっしやいますね。名前は
竜栄」

「ほほう、調べ上げたか。臭くても探偵か」

何が臭いかよく判らないが、東和栄光が探偵たちを見る目が少し変
わる。秘書の奥村も、軒太郎の口から竜栄の名前が出てきたことに
驚いていた。

「それに執事の細川さん。貴方も何か知っていますね」

「わ、わたしは！」

慌てた老執事が両手を顔の前で振りながら狼狽する。

「細川。お前、何か知っているのか？」

老執事は主に問われて更に慌てる。額から汗が玉のように噴出した。

「いえ、東和氏よ。おそらく細川さんが知っていることは、貴方も知っていることです」

「私が知っていることだと!？」

「否。貴方が隠している事といえばよろしいでしょうかね」

「ぬぬう……」

黙り込む二人の老人。奥村は俯きながら全身で落ち着かない心を表現していた。もじもじしている。

「あの子は確か……。今、病院に入院しているわよね。意識不明で……。
もしかして今回の事件は、あの子の仕業なの!？」

グラマーな胸を抱えるように腕を組みながら立っていた栄江が、不機嫌な口調で言った。腹違いの弟を、毛嫌いしているのが口調から完璧に察しられる。

「さあ、事件に直接関与しているかは不明ですが、彼に関して何か隠していませんか？ おふた方？」

軒太郎の言う二人とは、東和栄光と細川皆松のことである。

「竜栄は、今、意識不明だぞ……」

堂々とした態度であったが、東和栄光の視線は、誰とも合わせようとしていなかった。質問から逃れようと視線を逸らしている。

「外の怪異が、呪いや魔術の類ならば、意識が有るか無いかは問題ではありません。生きている必要性すら御座いませんから」

軒太郎に続いて憑き姫がボソリと言った。

「今のところ、その竜栄って人が、一番怪しいわよ」

憑き姫の意見を聞いた理沙が、全力で少女を睨む。凄みに欠けるが、敵意は十分感じられた。

探偵五名が、その殺気に気付く。お砂が横目でチラリと理沙を確認した。

「分かった。竜栄に関して話そう……。あやつ秘密すべてを……」

言う東和栄光から豪傑のオーラが消えていく。ただの父親に戻った瞬間だろう。歳相応の小柄な老人と化した。

「お、親父……。竜栄の秘密も何も、あいつはただの隠し子だ。認知された妻の子なだけだ。そんなこと家族全員が知っているぜ」

栄進が喋り終わると東和栄光がゆっくりとソファから腰を上げた。立ち上がると部屋の出口に向かって歩きだす。

「お前たちは、ここで待つてなさい。探偵諸君は、私について来なさい。細川も来なさい」

「はい、旦那様……」

「お父さん！」

栄江と栄進が、それぞれ不満の声を上げたが後は追わない。父の背中を見送るように部屋に残った。

執事の細川は、何かを観念した表情で、長年使えてきた主に続く。

軒太郎が仲間に指示を出す。

「憑き姫は私と一緒に来てください。三人は、ここでお待ちを。何かありましたら直ぐに連絡をください」

「わかりましたわ」と、お砂が明るい笑顔で答えた。憑き姫は、「仕方ないわね。一緒に行つてあげる」と言つて軒太郎の横に並んで東和栄光を追う。

東和栄光は、黒服のSPたちの同行も許さず、四人だけでどこかに行つてしまった。

「ちつ。なんだつて言つんだ……」

一つ愚痴を言つた栄進が、先程まで父親が座つていたソファアに腰を投げるように落とした。

その他の面々も、それぞれ適当な席に腰を下ろして寛ぐ。

怪異の城壁が一望できるパーティールームから緊張感が薄らぐ。一気に空気が軽くなった。

そこから東和栄光一人が作り出していた緊張感の量が悟れた。

「凄い老人だな……」

赤股が、気だるそうに呟いた。

夢の中の白昼夢 (前)

「随分と形がなってきたじゃあねえかあ」

黒々とした雲には、脅しのような稲妻が鳴り響いている。干上がった大地には、枯れ果てた木々が奇怪な姿を晒しながら所々に佇んでいた。

死に絶えた世界である。

その世界の中心に在る古城。

岩のブロックで作られた城塞である。しかしながら城塞は、古城と表現されるように古い。随分と痛んでいた。

城の上空には、黒々とした空にも負けないほどの黒鳥たちが、五月蠅く鳴きながら滑空していた。

「ベロニカ嬢の話だと、早ければ明日の昼頃には完成するそうな」

「遅くても夜つてことか」

「そうなるでしょうな」

死に絶えた大地に聳え建つ巨大な城壁を、古城のテラスから眺める二人の男。

一人は中世の甲冑を身に纏った体格の良い男である。腹回りが広く見えるが体格はがっしりと頑丈そうであった。声も野太い。

その男の横に立つ男は、自分の身長と変わらない長さの木の杖を突いていた。

杖を持つ男は、頭からすっぽりと緑色のローブを被り全身どころか顔まで隠している。しかし白く長い髭だけが緑のローブ内から胸元

に流れる滝のように垂れ下がっていた。

まるで二人は、ナイトとウィザードである。

二人の男の背丈は、さほど変わらない。横幅は鎧の男の方が広い。ローブの男は枯れ木のように細いが少しばかり背が高い。

鎧の男の口調は、随分と歌舞いたものだが、ローブの男の喋り方は、随分と紳士的な敬語であった。

二人の個性は対極に感じられた。

テラスに立つ二人は同じ方向を見ている。その先には、東和邸の庭に現れた巨大な城壁が、瓜二つの景色となって聳えていた。

「ところで將軍殿、聞きましたよ」

「もう賢者の耳にも入ったか……」

「ええ、入りました」

緑色のローブの下で賢者が微笑むと、少しばかり白い髭が揺れた。

「貴方が動かした子分さんたちが、一晩で返り討ちとか」

「恥ずかしい話だが、本当の話だ」

そう言いながら照れくさそうに角刈りの頭を掻く將軍。四角い強面が、赤くなり緩む。

「ですが無理して探偵なんぞを排除しなくても良かったのではないのでしょうか？」

「まあ、そうだがな」

「別に探偵がうるちよろしても、我々の計画には無害。表の世界で何が起きようと関係ない話です」

「これは癖みたいなものだ。性分だな」

「性分とは？」

「目障りな八工は、早めに叩き落す。それが極道で生き残るコツの一つでな」

「難しい世界ですな。普通に生きてきた私には理解できませんよ」

「ぬかせ、偽善者。俺だってお前の書くような本は、ちんぷんかんぷんだぜえ」

「それは仕方ないですよ。評論家の本なんて、興味の無い人には、訳の分からない戯言ですからな。ましてや私の分野は特例ですから……」

「そうらしいな。その特例のせいで、本も売れなかつたんだろ」

「よくござんじですな」

「ああ、ドクターから聞いたよ」

「あの女医ですか……」

北枕夢子のことであろう。

「まあ、どうでもいい話だわな」

「ですな……」

賢者の声は弱かった。

「まあ、探偵を襲わせたのは、俺個人の因縁もあってな」

遠くに聳える幻影の城壁を見ながら喋る將軍の瞳は、遙か昔を思い出すかのような眼差しだった。

「因縁ですか？」

しんみりと語った將軍に、賢者が訊いた。

「ああ、うろついていたのがヴァルハラ探偵事務所ってのが、問題よ」

「随分と立派な名前を付けた探偵事務所ですな。で、その探偵事務所と、どのような因縁があったのですか？」

興味深そうに賢者は訊いた。

賢者が生きてきた人生の中で、探偵なんて無縁だった。將軍のように暴力を糧に生きてもこなかった。普通に生きてきたのだ。Vシネマも見たことがない。だからこそ將軍の話は気になった。

「ヴァルハラ探偵の所長ってやつが、昔の知人でな。若い頃に、好いた女を取り合ったことがあってよ」

「恋敵ですか」

「ああ、初恋の相手だったよ。俺も初心な若僧だった。

結局俺は、その女以上の女に出会えなくて、この歳まで独り身だった訳よ……」

はつきりと述べなかったが、失恋したらいい。

ここで気恥ずかしくなった將軍が話しをすり替える。

「あんたはどうなんだい、賢者さんよお。結婚しているのかい？」

「はい……」

賢者が俯いた。被ったフードが更に顔を隠す。どつと空気が重くなったことから流石の將軍も質問を誤ったと気付く。

「妻は、二十年前に他界しました。　癌でね」

「ガン……。確かあんたも……」

賢者を見る將軍の眉間に皺が寄る。極道一筋に歩んできた男でも、慈悲の心はあるようだ。悪いことを訊いたと反省する。

二人の会話が途切れた。

今の二人は五体満足に動かせない病人である。本来ならば総合病院の病室で寝たきりの常態だ。

特に賢者の本体は、かなりの重体と聞いている。余命僅か。長くは

もたないらしい。

夢の中の白昼夢 (中)

將軍と賢者の二人が、黙ったまま幻影の城壁を眺める。上空からは、烏の鳴き声が五月蠅く響いてきていた。

暫くすると、突然背後から男の声が飛んで来る。知った声であった。

「おはよう御座います」

二人が振り返ると男が三人立っていた。一人は、公爵である。いつもの黒衣の鎧を身に付け覇気のない表情をしていた。後の二人には見覚えがない。

「あう、公爵じゃあねえか」

挨拶代わりに將軍が言う。随分と雑な礼儀であった。そして將軍が、後方の二人をいぶかしげに睨んだ。

一人は厚手の革鎧を身に纏い、腰に短めの矢が詰まった筒を下げている。背中には、その矢を発射させるクロスボウを背負っていた。狙撃者のなりである。

もう一人は道着に袴姿で、頭には深々と傘を被っていた。そして腰には武士を表す二本差しをぶら下げている。素浪人の風貌である。この男一人だけが和風テイストであった。

「おはよう御座います、公爵殿」

公爵の登場に挨拶を返す賢者が、後方に連れられる二人を見て述べ

た。

「もしやすると、そちらが新人の二人ですか？」

新戦力の追加があることは賢者も昨晚のうちに聞いていた。勿論將軍も聞いている。夜の病室に北枕夢子が報告に来たからだ。

將軍は二人の顔に見覚えがあつた。

「お前ら、確かうちの組の　、佐藤と鈴木だったか」

「「違います！」」

黒衣の後ろに立つ二人が揃ってつつこむ。タイミングが練習したかのようにピッタリだった。

賢者が顔を横に逸らして密かに笑っている。小さな笑い声がローブの中から微かに漏れ出ていた。それが腹ただしいのか新人二名が賢者を睨み目付きを鋭くさせる。

「「ほんッ」

公爵が咳払いの後に、新たなる夢の住人二名を紹介する。

「彼らが新しい仲間の『侍』と『狩人』です」

「サムライだと、そいつがそんなキャラかよ。

それに狩人……。あれか、八時丁度のおく、あずさに乗っておつてえく、つて、やつか。ふざけんじゃあねえぞ！」

露骨なまでに不愉快な表情で怒鳴る將軍。怒る理由が理解できない。

ふざけているのは明らかに將軍の方に見えたが、二人は兄貴分の將軍に反論できなかった。ここでも極道の掟は生きている。上下関係は、絶対的に厳しい。

彼ら二人の正体は、指きり魔こと鴉尾英太と、ガンマン神田淳である。

現在二人は將軍らが入院している病院に、同じ様に入院していた。

入院しているといっても、將軍や賢者程の重症でない。

鴉尾は、首を捻挫。神田は、全身打撲。両者共に全治二ヶ月程度である。

女医の診断では、精密検査を合わせても一週間で退院できるとのことらしい。さほど悪い容体ではない。

溜息の後に賢者が、冷めた口調で喋り始める。

「新戦力の参加。しかし、あまり期待できないと女医から聞いていましたが、本人等を前にしてはつきりと解りましたよ」

「何が解ったってんだい？」

將軍がにやけながら問う。訊かずとも答えは解っている様子だったが、意地悪く訊いているのだ。

「ぬぬっ……」

侍と狩人の二人は、眉間に皺を寄せながら賢者を睨みつけていた。

將軍は、二人の殺気に気付いて楽しんでいるのだろう。

「將軍殿と同じヤクザ者ならば、少しは腕が立つと思ったのですが、

所詮はチンピラ止まりの方々。將軍殿と一緒にして考えたのが間違いでした。

これでは將軍殿に失礼です。やはり小者は小者。こちらの世界でも小者程度ですな。目を見れば解ります」

「なんだと！ この糞爺！！」

怒鳴り声を張り上げたのは侍の方だった。だが、素早くアクションを起こしたのは狩人の方である。

敏捷に公爵の横をすり抜け賢者の眼前に走る。その拳は強く握り締められたまま高く振り上げられていた。

狩人の攻撃的な行動を見て將軍が口笛を楽しそうに吹いた。

公爵は溜息をつくと下を向いて呆れる。狩人の強行を誰も止めようとしたかった。

「愚かな」

賢者が小声で呟く。その頃には拳を振り上げた狩人が眼前に迫っていた。あとは拳を振るえば殴れる距離である。

「やっちまえ！」

侍が応援の激を飛ばす。

その声に答えるように無言で口を尖らせた狩人が全力の一撃を振るうと、皮手袋を嵌めた拳が賢者の顔面に迫る。

「えいつ！」

力のある声だった。

賢者が右手に持った長い木の杖を前に傾けると、触れてもいないのに狩人の動きがピタリと止まる。

拳は賢者に届いていない。そのままの姿勢で狩人は石化した石造のようにならなくなった。歯を食いしばり痙攣している。

夢の中の白昼夢 (後)

「良い機会だ。二人とも賢者殿にレクチャーしてもらおうといい」

公爵がそう言うと、賢者は傾けた杖を今度は頭よりも高く翳す。その動きに合わせて硬直している狩人の体が宙に浮き上がった。まるで念力である。

狩人は引き攣った顔面に汗を噴出し、不自由に怯えた目で老人を見下ろす。

後方では侍が、何が起きているのか理解できずに驚愕に目を剥いていた。額から汗が流れる。

触れもせず杖の動きだけで狩人を浮かせた賢者が、静かに喋り始める。公爵の言うとおりにレクチャーを開始する。

「この世界で強さの基本となるものは、精神力である。それがすべての源と成ります。

精神力と言っても根性や我慢強さだけでない。想像力、発想力、集中力、直感力、そういった思考力が大きな力になる。

この世界はね。馬鹿より頭の良い人間の方が強くなるのです」

そう述べた後に賢者は、翳した杖を後方に振るう。その動きで宙に浮いていた狩人の体が賢者と將軍の頭上を越えて、テラスの外へと投げ捨てられる。

「うわわわあああああっ！」

狩人は体の自由を取り戻し、悲鳴を上げながら降下していく。

落ちる先は古城の中庭。高さは四階建てのビルに匹敵する。人間が落下したのならば十分に死ねる高さであった。

「ぐへっ！」

奇怪な声と共に、ドサリと生々しい音が響いた。落とされた狩人が、石畳の床に激突した音である。

「こ、この野郎……」

震えながらも立ち上がるうとする狩人。無傷でないが生きている。鼻や口から血が流れ出ていたが死んでいない。

「ちくしょう……、血が出ていやがる……」

昨日の夜、探偵事務所を襲撃した際に、拳銃で撃たれても平気な少年に殴られ二階の非常階段から転落した。おかげで全身打撲に成り病院のベット上に居る。

あの時は、その転落で動くことも出来なくなった。痛みのみあまり気絶してしまった。

しかし、今はどうだろう。

今の転落は、その時の倍の高さがあった。それなのに動ける。立ち上げられる。

「それに、信じる力も大切だ」

賢者の声が頭上から聞こえてきた。

狩人が上を向くと賢者の姿が近づいてきていた。浮いている。浮き

ながらゆっくりと降下して来る。
やがて地面に、何の衝撃も無く着地した。

「この世界は夢の世界。肉体を失った心の世界。精神力がすべての力となる。」

私のように普段はしががない大学教授でもね。知恵を縛り強くなろうと想像に全力を尽くせば、君らのように腕力自慢の輩にも難無く勝ててしまうのだよ」

「説明ありがとうよ、大先生さんよ……」

賢者が語っている間に狩人は、クロスボウに矢をセットして弓の弦を巻き上げていた。撃つ準備が整う。

「死ねっ！」

撃った。

クロスボウを瞬時に構えた狩人が、寸分の狂いもなく賢者の心臓を狙い撃つ。

「まだ解らんか……」

クロスボウから発射された矢が、賢者の胸元でピタリと止まった。狩人が殴りかかった時と同じである。

「何故当たらねえっ！」

「まだ解らないかね。やはり小者だね」

賢者が誇ると同時に、空中に止まる矢が赤く燃え上がる。一瞬で消

廃墟のような古城の中庭に、狩人の笑い声が響く。
その姿を頭上のテラスから將軍が、片肘を手摺りに置いて見下ろしていた。四角い顔が不敵に笑っている。
その瞳の奥に、計算高い極道の野心が見え隠れしていた。
何かを企んでいる瞳である。
それが何かは、まだ誰にも分らない。

昂輝とイゴールちゃん

午前十時。

「はあ〜い、これで終了ですよ〜」

ヴアルハラ探偵事務所の一室。そこは窓の一つもない地下室であった。

居るのは昂輝とイゴールの二人だけである。

壁は赤レンガが剥き出しで、その壁に沿って幾つかの棚が置かれている。棚の上には、何やら色々な物が乱雑に収納されていた。どれもこれも埃っぴい。

部屋の広さは二十畳ぐらいあるだろうか、天井には幾つもの配管が走っていた。空気は冷たく湿っぴい。

唯一の出入り口と思われるドアは、分厚い鉄製で作られている。まるで戦車の装甲版のように物々しい。

その地下室に、イゴールの乙女チックな可愛らしい声が響く。

「今、手足のロープを解きますねえ〜」

「有り難う御座います、イゴールちゃん」

「いえいえ〜」

随分と殺伐としていた地下室の中央には、病院にあるような鉄パイ

布で組まれたベットが置かれており、その上に手足をベットの端々にロープで縛り付けられた昂輝が横たわって居た。ベットの四方に、撮影用のライトが置かれ、影を少なく昂輝を照らしている。

昂輝はトランクスしか履いておらず、胸には五色の宝石が怪しく輝いていた。

「よいちよ、よいちよ、と」

ベットの横には、メスなどの手術道具を手にするイゴールが、昂輝を見下ろす形で立っている。怪物にも劣らない醜悪で傷だらけな怪人が、満面の笑みを見せながら昂輝を拘束するロープをメスで切っていく。

イゴールが昂輝を拘束していたロープを解くと、昂輝は縛られていた手首を摩りながらベットから降りた。

昂輝はベットの横に在る椅子に掛けておいた衣類を手に取ると、Gパンから履き始めた。

「昂輝君、これが今回の携帯電話ね。どの操作で、どの武器が使用できるかは、携帯内のメモに書いてあるから使う前に、ちゃんと読んでいてね」

昂輝はイゴールから携帯を受け取ると「はい、分かりました」と答えながら、早速携帯電話のメモ機能をチェックし始める。

「それにしても今回は、軒太郎さんもケチりまはたねえ。前回に比べて魔導器の数を減らしちゃいましたし」

メモを見ながら昂輝が、己に内臓された魔道暗器の種類を云う。

「え〜と、カマイタチの鎌と、五色鬼の魔石セット一組。それに指鉄砲の弾丸四発。神通針棒二本ですか。あと、小型爆弾二個」

「前回の移植に比べて魔石の数が減ってますね。それに火取り魔の皮もないし。新しく搭載したのは指鉄砲と五色鬼の魔石だけですね」

確かにイゴールの言うとおりだ。五色鬼との決闘時に借りた武具が幾つか足りない。

だが、増えた物もある。

「五色鬼の魔石が、ケルベロスたちの代わりですね。それに指鉄砲は、新しい暗器ですね」

イゴールと会話しながら昂輝は、新しい体内暗器の指鉄砲覧を読む。

「え〜と、指鉄砲の使い方は……」。

まず携帯でロツクを解除して……、肘を相手に向ける、と」

「両腕の二の腕に、小型の拳銃を仕込んであるのですよお〜」。

有効射程距離が十五メートルってところですから、近接戦闘のサポート程度の武器ですね」

「なるほど」

「体内に仕込めるような小型の銃は限られてきますからね。

二発式二十二口径ハイスタンダードデリンジャーを改造して電子器具と一緒に埋め込みました。射程距離、命中精度、貫通力などは期待できませんが、弾丸は霊力を持っていますから、化け物にも有効

な武器ですよ。

もちろん人間相手にも殺傷力は十分ですよ。」

一通り説明書を読み終えた昂輝が、今回の体内暗器に、お砂ねえさんの自爆爆弾が無いことに気付き理由を訊いてみる。
その件に関してイゴールが、すぐさま答えた。

「あれは、超決戦兵器ですので、普段の持ち歩きは禁止です。私生活で爆弾抱えながら街中を歩かせられませんからね。万が一に、勝手に爆発して一般市民を巻き込むわけにも行きませんから」

「勝手に爆発って……？」

昂輝は爆発物の危険性を知らない。キョトンとした表情で問う。

「お砂姉さんの魔力で加工されているから普段は衝撃に強く勝手に爆発しませんが、お砂姉さんの魔力が切れたら、普通の二トログリセリンと変わりありませんよ。ちよつとした衝撃で爆発するのです」

昂輝が顔を青ざめながら、それは危険ですと呟く。

思わず街中で大爆発を起こす自分を想像してしまつたらしい。

ちよつとした衝撃で爆発する可能性があることを知らなかったのだ。爆弾の扱いが慎重に行なわなくてはならないと知り驚く。

「爆弾って、怖いですね……」

「昂輝君も、これから色々な武器や兵器の勉強を行なうべきですね。我々ヴァルハラ探偵のエージェントならば戦闘の知識は大切です。知識は武器になります。」

格闘の知識、 武具の知識、 兵器の知識、 妖術の知識。すべてが必要

ですよ。基本ぐらい直ぐに学ぶべきですう」

「はい……」

強面から出る可愛らしい声に諭された昴輝は、確かに、と思いながらGパンのポケットに携帯を入れた。

「ところで足に仕込まれた小型爆弾って、これは大丈夫なのですか？ 勝手に爆発しませんか？

それに新しい暗器ですよ。零距离爆弾って書かれていますが、どう使うのですか？」

「あゝ、それね。私からのサービスですよ」

イゴールのスカーフェイスがニツコリ笑う。

「闇ルートで手に入れた新型の爆弾なの。誤爆しにくく加工されているから安心していいよ。

でも爆発の威力が少ないから埋め込んだ爪先が吹き飛ぶ程度だよ。使う時は、携帯で安全装置を解除してから相手の顔を蹴るか足を踏みつけるかして爆発させてね。魔力の無い爆弾だから、妖怪変化には効かないけど」

対人用の武器らしい。

「なるほど」

そう言いながら靴を履いた昴輝が爪先で床をコツコツと蹴った。若干だが足の裏に異物が入った違和感を気にする。

体内暗器が埋め込まれた痛みは、お砂姉さんの催眠術で抑えられている。しかしながら体内の異物の感触は残ってしまい、まったく気にならないわけではなかった。

お砂姉さんの催眠術も、時間と共に効果が消えて行くらしく、三日四日に一度は掛けなおしてもらわないと、激痛に襲われるとのことらしい。

催眠術の掛けなおしを忘れてたら、ヤバイことになるそうだと昂輝は肝に銘じる。

「じゃあ昂輝君。私たちも東和邸に向いますかあ〜」

「そうしましょう。色々な勉強は、この事件を解決してからですね」
イゴールが鉄の扉を、片手で軽々と開けると、その奥にある階段を上がって行く。遅れて地下室を出た昂輝が鉄の扉を閉めようとしたがビクともしない。ビククリするほどに重い。

「重ッ！ う、動かない……。」

昂輝は後ろを振り向き階段を上がって行く筋肉怪物の背中を見て、己とのパワーの違いを痛感した。
そして狼男に変身する。筋肉が盛り上がって体格が一回り大きくなった。

変身した昂輝が鉄の扉を両手で押した。

「よいしょっ……と」

重々しい音を響かせ地下室の扉が閉じられた。

昂輝は人の姿に戻るとイゴールを追って階段を駆け上る。

イゴールの声は可愛いが、見てくれ通りの怪物なのだと再認識する
昂輝であった。

この後二人は、タクシーで東和邸に向う。

魂無きホムンクルス（一）

軒太郎たちは、老執事の細川が運転するカートに乗って、森の中をゆったりとした速度で走っていた。ゴルフ場などで見られる屋付きの小型のカートである。

森の中といっても地面は、カート一台分が走れる幅に舗装されていた。

流石は富豪の私有地。森が在り道は舗装されているとは普通でない。

「何処まで行くのですか？」

助手席に座る軒太郎が尋ねた。カートの後部座席には、憑き姫と東和栄光が座って居る。

屋敷を出て、かれこれ十分ぐらいカートに揺られているだろうか。カートはゆるゆると森の中を走り続けているだけであった。

「到着したら、全部説明する」

五分前と同じ返事を東和栄光が返した。

カートを運転する細川は、一言も発していない。

訊いてもまともな返答が帰ってこないだろうと思う軒太郎は、詰まらなそうに溜息をついて首を傾げた。諦めて過ぎ行く景色を黙って眺める。

それから更に五分ぐらい過ぎただろうか、それにしても広い敷地だと軒太郎が考えていると、カートが森を抜けて広場に出た。周りは木々に囲まれた広場である。

その広場の中央に、コンクリートのビルが建っていた。

大きな建物であった。四角い箱である。

「ここは……？」ビルは三階建てぐらいだろうか。窓が一つも無い為に、外からは正確に何階建てか判断がつかない。ビルの壁には配管や換気扇が幾つか窺えるだけである。色彩の無い殺風景な印象が強い建物だ。

四人が乗ったカートは、ビルの入り口前まで走ると停車する。

観音開きの扉は木製だが、分厚く丈夫そうに見えた。錆びた鎖と大きな南京錠で閉鎖されている。

「ここは、竜栄の研究所だ」

カートから降りた東和栄光が、そう言いながらコンクリートのビルを見上げた。

軒太郎たち三人もカートから降りる。

「細川、鍵を開けてくれ」

「はい、旦那様……」

細川老人の声は震えていた。何かに怯えた素振りである。

しかし、主に命じられるまま老執事は、震える手で懐から古い鍵の束を取り出し南京錠を外した。

老執事の額に、汗が浮かび上がっているのに軒太郎も気付く。

続いて細川は、木製扉の鍵穴に鍵を突っ込みクルリと捻る。軒太郎たちの所まで鍵が開く音が聴こえて来た。

執事の細川は、扉を開くと中に入って行く。足取りは重そうだ。

中からは、機械が響かす細かな震動音が聴こえて来る。

一人中に入った細川は、室内の電灯を点けると外の三人に「どうぞ」と言つて礼儀正しく招きいれた。

軒太郎と憑き姫は、招かれるままに中に入ると辺りを見回す。薄暗いが広い建物の様子だ。

天井は高い。おそらく二階分の高さがありそうだ。

一階には色々な大型機械が幾つも並んでいる。どの機械も電源が入つていた。動いている。

研究所の主が入院して留守であつても設備は起動させたままらしい。その動き続ける一つ一つの大型機械から出た配線や配管が、肩を寄せるように隣に並ぶ機械から機械へと繋がり連結されている。

更に機械たちの頭部から出た配管配線が壁や天井の中に伸びていた。工場と述べるよりも発電所のような設備であつた。

ここにある機械が、何であるかは分からないが、機械たちが生み出した何かは、上の階に供給されている様子である。

「この施設は、生きていますね？」

「ああ、竜栄の奴が入院する前そのままな。止めていない……」

東和栄光の喋りは歯切れが悪かつた。「止めていない」と言うよりも「止められない」と言いだけであつた。

「まあ、上に行こう。研究室はそこにある」

杖を突きながら東和栄光が、機械と機械の間にあるスペースを進ん

で行く。軒太郎たちが老人の後を追うと、暫くして階段が見えてきた。螺旋階段である。

東和栄光は、振り返る事無く螺旋階段を登って行く。

「随分と大掛かりな施設ね」

螺旋階段を登りながら辺りを見回す憑き姫が、軒太郎に言った。

「ああ、かなりの動力だ。

これだけの動力源となると、それ相応の資金が必要だろうね」

「資金は、ワシが面倒を見ていた」

一度足を止めた東和栄光が、肩越しに振り返り疑問に答える。

「竜栄さんは、一人で研究を行なっていたのですか？

助手やアシスタントなどは居なかったのですか？」

「ああ、一人だ。一人で研究していた。

此処に並ぶ機械のメンテナンスや必要な機材の搬入は、業者を雇いやらせていたが、研究自体は一人でやっていた様子だ」

「一体何の研究を？」

真つ当な研究じゃあないだろう。

大体の見当は付いていたが、それでも軒太郎はわざとらしく訊いてみた。

ホムンクルス。錬金術。どちらも今の時代では、オカルトその物だ。実在するなら禁忌な科学。

「探偵、己の目で見て確かめてくれ……」

曖昧な返答を返す東和栄光は、再び階段を登り始めた。

螺旋階段は、天井の中へと続いて行く。やがて上の階に到着すると、短い廊下に出た。扉が三つ程在るだけで殺風景な廊下である。

「ここだ。ここが研究室だ」

一番奥の扉の前に立つ東和栄光は、そう述べたが扉のノブには手を伸ばさない。脇に逸れて前を譲った。

軒太郎と憑き姫が、扉の前に並んで立つ。二人はじっと扉を見つめた。

「憑き姫」

「酷い気配ね……」

「臭いもキツイな」

営業スマイルのまま厳しく扉を睨みつける軒太郎。憑き姫も抑揚少なく答えたが、視線は鋭く変わっていた。

「私から行く」

そう言いながら軒太郎が懐からコルトパイソンを引き抜く。銀色に輝く拳銃を見て細川が、ビククリしたのか一步距離を離れた。

「東和殿の細川さんは、下がって行ってください」

右手に拳銃を握り締めた軒太郎が依頼人に言うと、ゆっくりドアノブに左手を伸ばした。気付けばいつの間にか憑き姫も赤い本を召還していた。

二人の若者が戦闘態勢に入ったと解ると、二人の老人は螺旋階段の側まで後退して行く。拳銃を抜き出した軒太郎からただ事でないと悟る。

軒太郎がドアノブを捻るとカチャリと音がなった。僅かに開いたドアの隙間から見えない妖気が流れ出てくる。それと悪臭。

「なんだ、この臭いは……」

十メートルほど離れていた東和栄光たちの場所まで、悪臭が届く。生臭いヘドロのような悪臭に体切れなくなった細川が、眉毛を八字に歪めながら両手で口と鼻を押さえた。

「さてさて、何が潜んでいるのやら」

わくわくした表情で軒太郎が、拳銃を構えて研究室の扉を勢い良く開いた。

研究室内に圧縮されるように充滿していた腐臭が、雪崩れのように一気に流れ出てくる。

「ううう！」

眉間に皺を寄せる老人二人。気を抜いたら吐きそうである。廊下に広がった悪臭が、行き場を求めるように螺旋階段を下って行く。

「酷い妖気。気までが腐敗を始めているわ」

冷めた瞳で暗い室内を睨む憑き姫が言った。

軒太郎は営業スマイルを崩していない。この状況を楽しんでいる様子だ。

「これは何の気配だい、憑き姫？」

「恐らくは黄泉の物」

「死者か？」

「いいえ、物よ」

者でなく、物らしい。

「まあいい、中に入るぞ。この目で確かめようじゃないか」

わくわくした表情で軒太郎が、拳銃を構えて研究室に入っていた。後に憑き姫も続く。

魂無きホムンクルス (二)

両手でしっかりとコルトパイソンを握る軒太郎。35・7口径の銃口を下に向けて、やや腰を落とした態勢で身構えていた。その陰に隠れるように憑き姫が室内に入った。完全に軒太郎を盾に使っている。

電気が点いていない為、薄暗い室内。廊下から入る明かりに出入り口の形と二人の影が床に映る。

軒太郎が警戒する中、あとから室内に入った憑き姫が、入り口の横にあった電気のスイッチを入れた。

チカチカと瞬いた後に天井の蛍光灯が室内を照らし出す。

「カプセルか？」

二十メートル四方ぐらいの広い部屋である。やはり窓は無い。右側の壁に換気扇が幾つか設置されているが、その羽は回転していない。

部屋の中には、鉄で出来た棺桶のようなものが三列になって並んでいた。

一列七個。全部で二十一個並んでいる。蓋の上には白いカラーで番号がふられていた。部屋の奥から1から21である。

更に部屋の置くには、何やら記号や方程式がびっしりと書き込まれたホワイトボードと、本やらファイルやらが積み重ねられた机が一つ置かれていた。机の前で、椅子が横倒しになっている。

この部屋の壁や天井も、配管や配線がいたるところにむき出しとなっており、幾つかの操作盤が所々の壁に覗えた。

居心地の悪い室内である。何よりも悪臭に空気が澱んでいるのが不快であった。

「まるで何かの工場ね」

軒太郎の陰から周りを窺う憑き姫が室内の感想を述べると、軒太郎がゆっくりと前進して室内に並ぶ鉄の棺桶に近づく。

「中身は何だ？」

鉄の棺桶には、床から幾つものパイプや配線が伸びて脇から接続されている。

蓋は幾つもの太いボルトでしっかりと閉じられていた。開けようと思うならば、道具を使って手作業でボルトを外さなければならぬそうだ。時間が掛かりそうである。

そして蓋の番号の上あたりにガラス製の小さな覗き窓が一つ付いている。

そこからぼんやりとした弱い光が、青白く漏れていた。日焼けサロソなどで見られる人工の紫外線ライトの光である。

その小さなガラス窓から、棺桶の中を覗き見る軒太郎。中から漏れ出る青白い光が、近づけた軒太郎の顔を不気味に照らしていた。

「ほほう、予想よりも優作だねえ」

「え、本当に？」

軒太郎に続いて憑き姫も長い黒髪をかき上げながら小窓を覗き込んだ。

「本当ね。思ったよりちゃんとしているわ」

覗き込むと直ぐに、透明な液体に浸かった人間の顔が見えた。髪の毛は生えていない。眉毛もだ。随分と痩せこけた不健康そうな顔は、骨と皮だけの人間をモデルに作られた蠟人形のような。歳は成人ぐらいの年齢に見えたが、性別が判断つかない。それ程までに痩せこけている。

「これが、竜栄氏が研究していたホムンクルス？」

「だとするならば、けっこう完成度が高いわね。まるで生きているみたい」

「憑き姫。動くと思うか、これ？」

「中身は空よ。動いたとしても」

軒太郎が訊くが、憑き姫はそれ以上答えない。その代わりに憑き姫は、軒太郎が見ている鉄の棺桶とは別の棺桶に視線を向けた。

「軒太郎、あれ」

「ん？」

憑き姫が見ているのは、部屋の奥に在る別の棺桶。軒太郎に呼びかけながら小さな指で、それを指していた。軒太郎も視線を指先の棺桶に変えた。

「ひとつ開いているね」

「ええ。あれが悪臭の原因じゃあないの」

「みただいだね」

憑き姫が指差していた鉄の棺桶は、蓋が外れて床に落ちていた。蓋の番号が見えないが、二番の筈である。

電源が落ちているのか、他の棺桶の様に青白い光を放っていない。二人の位置からでは、中身が入っているのかも解らなかった。

確認の為に軒太郎が先頭になって部屋の中を進んで行く。二人は一つだけ蓋の無い棺桶に近づいて行った。

「中身は、空か」

棺桶の間を縫って蓋の開いた箱に接近した二人は、棺桶の中を上から覗き見た。

中には透明な液体が半分ほど入っていたが、水面は静かで揺れてもいない。ホムンクルスと思われる物体は入っていない。

「さて、憑き姫」

「なに？」

「これをどう思う。」

この箱は、最初っから空だったか？

それとも何らかの理由で、空になったのか？

「本人に訊いてみたら？」

そのように憑き姫が答えると、彼女の視線が素早く動いた。何かの気配を感じ取ったのだらう、鋭い視線が部屋の入り口側にあった鉄の棺桶に向けられる。

「思ったより動けるみたいだね」

「魂が無いから、気配が感じづらくて私には合わない相手ね」

あとは軒太郎に任せると言っているだらう。

「ああ、解ったよ」

そう返事を返した軒太郎は、嫌そうでもない。寧ろ望んでいる様子だった。

コソリ……。

二人が見る先で、何かが動いた。何かが確かに潜んでいる。黒い何かが棺桶を盾に隠れていた。

魂無きホムンクルス (三)

憑き姫曰く、あの何かには、魂が無いらしい。

憑き姫の趣味は、怪異の魂をコレクションすることである。故に、魂を持たない者に興味が微々たりとも湧かないのである。殺る気も起さない。

だが、軒太郎は別である。

彼は怪異の骸から武器を作り出すのが趣味のひとつである。

魂と骸の収集では、真逆の物を収集しているといえよう。

故にあれが何かは判断つかないが、その骸に少しは興味があつた。

それに男心を形成する成分表には、闘争心というものが多く含まれている事が多々ある。

軒太郎という男は、その多数派に含まれる男であつた。

その本能が、この場での戦闘を快く受け入れさせたのであろう。

「さてさて、どの程度か楽しみだ」

そう言つてコルトパイソンの銃口を、何かが潜む方向に翳す軒太郎。僅かに窺える何かに向けて拳銃の引き金を引いた。

「ギャインッ！」

銃声がコンクリート作りの室内に響き渡ると同時に、棺桶の陰に隠れていた何かが殴られた野犬のような叫び声を上げてのたうち回る。弾丸が命中したようだ。

「さあ、顔を見せな。作り物よ」

銃を構えたまま様子を窺う軒太郎。憑き姫は警戒こそ欠かしていないが興味の無さそうな表情で軒太郎の後ろに隠れて様子を窺う。

暫く経つと、弾丸を受けた何かが苦痛に耐える呻きを上げながら棺桶の陰から立ち上がった。

弾丸は肩に掠っただろう。肉が抉れたように裂けている。

立ち上がった何かは、人型である　　が。

「あらら、なんとも醜悪な」

「腐っているわ」

軒太郎が残念だと意見しながら脱力を見せる。

憑き姫の言う通り、姿を現した何かは腐っていた。

棺桶の中に眠る者たちと変わらない坊主で全裸の何かは、肌の色が黒紫に変色して腐敗を始めているのが直ぐに解った。所々の肉が爛れている。

「これは、ホムンクルスか？　体のあちらこちらに何やら機械が付いているぞ？」

確かに腐り始めている何かの胸には、ピースメーカーのような機械が埋め込まれていた。

更に喉仏や脇の下辺りからは人工的なホースが複数飛び出しており、こめかみの辺りかはコネクターが付いた赤や青などの配線が垂れ下がっている。

錬金術師が作り出したホムンクルスと述べるよりも、マッドサイエ

ンテイストが作り出した人造人間かサイボーグのように窺えた。

「これはイゴールちゃん分野ね」

「そのようだ。あとでイゴールちゃんに、この施設を見てもらおう。私たちが見て回るよりの確な調査が出来るだろうさ」

そう言い終わるとトリガーを引く。

コルトパイソンが二回目の咆哮を叫ぶと、弾丸が何かの額を見事に打ち抜いた。一撃必殺である。

額に小さな弾痕が開くと、後頭部が炸裂して後方の壁を赤く染め上げる。

色彩に欠けるコンクリートの壁が、鮮やかに塗り替えられると腐敗を始めても歩き回っていた何かは機能を停止させて倒れこんだ。

軒太郎は拳銃を構えたまま、倒れた何かに近づく。

直ぐ側まで歩み寄ると、数秒見下ろしながら動き出さないのを確認してからしゃがみこんで自分が打ち抜いた何かの頭を銃口で突っついた。

「戦闘力は、Dランクのゾンビ程度。頭部を破壊されれば活動機能を失うところからして脳から生命維持の指令が送られていると推測。これがホムンクスルか、それとも人間の死体から作り出された人造人間かは不明だが、構造は人工器具を追加することでほぼ人間と准じる機能を有していると推測される。

まあ、こんなところかな」

軒太郎の分析に続いて憑き姫も意見を淡々と述べ始める。

「でも、魂を持っていない。機械と一緒に動いていたのは脳が生命維持をシステムの計算に計算していただけ。思想や感情は持っていないわ。」

これは、生きているが死んでいる物。」

その証拠に、経験不足の脳だけでは生命維持の情報処理速度が間に合わず肉体が腐敗を始めているわ。」

本当に下等ゾンビのレベルね」

憑き姫の話聞きながら軒太郎は、銀色の拳銃を懐のホルスターに差し込む。憑き姫の片手からは、いつの間にか赤い本が消えていた。

「この調査はイゴールちゃんに任せましょう」

「そうね」

「でも、何故に一つだけ蓋が開いていたのかな？」

「戸締りが不十分だった、……とか？」

憑き姫の適当な返答に、まあいかと軒太郎も適当に流した。

二発の弾丸を無駄に使った気もするが、棺桶の中身が動くと解っただけでも十分な成果といえよう。

そして部屋を出て行く二人。廊下では東和栄光と執事の細川が並んで待って居た。

二発の銃声に怯えたのか、細川の方は震えていたが、東和栄光は先程以上に表情を険しくしていた。

「探偵。何があった？」

尋ねる依頼人に軒太郎が満面の営業スマイルとアメリカ人の如くオ
ーバーなアクションを踏まえて答えた。

「中に入ったのは、二十一個の生命維持カプセルですね」

「そうじゃない！ あの銃声は何かと訊いているのだ！」

「ああ、そちらですか」

「当たり前だ。ふざけているのか……」

「いやね、ただカプセルの中身の一つが、ふらふらと出歩いていた
ので機能を停止させただけですよ」

「あれが、動いていたのか！」

二人の老人が目を剥いて驚きを表す。あれが動くことを知らなかつ
た素振りであった。

「ええ、動いていましたとも。それが何か？」

「ワシが数ヶ月前に訊いた話では、あれが動くほど研究は進んでい
ないと言っていた」

「竜栄氏が、ですか？」

「ああ、そつだ……」

「ならば、それから研究が進展したか、真実を貴方に伏せていたか
のどちらかでしょうな」

どちらが正しい真実かを知っているは竜栄本人だけだろう。もしかしたら、両方とも真実かも知れない。

「そうか……」

厳しい表情を俯かせる東和栄光。何かを我慢しているのか、小さな肩が力みに震えていた。そして暫く考え込むように黙っていたが、突然二人を睨みつけながら質問を飛ばす。

「で、探偵諸君。研究室内の様子を見て回って、どう思った」

「ん〜、なんとも言えませんが、なんとも怪しげな研究に窥えますな。

詳しいことは、うちのエージェントの中に、この手の専門化が居ますので、彼に見てもらって報告書を製作いたします。今頃此方に向っている筈です」

「そうか、解った。

ならば今見たものを踏まえて、もう一つだけ見てもらいたいものがある。

あとで君らから云って、その専門家とやらにも見てもらいたい物だ……」

なんでしようと軒太郎が問うが、返事も無く黙ったまま東和栄光は螺旋階段を降りて行く。そのまま再び機械の間を抜けて行き、この研究所から出て行った。

探偵二人は、まだ何か面白いものがあるのかと考えながらも老人の後に続く。

研究所を出た東和栄光は、コンクリートの壁をそうように建物の裏手に進んで行く。人が何度も往来していたのだろうか、四人が歩く足元の土は踏み固められていた。

第二研究所でもあるのかな　と、軒太郎が予想を口にしながら歩いてみると、コンクリートの建物の裏手に平屋建てのプレハブ小屋が建てられているのが見えてくる。軒太郎の予想が的中した様子だった。

横二十メートル、縦四十メートルぐらいだろうか。小屋と呼ぶにはそこそこ大きい。

魂無きホムンクルス（四）

此処が倉庫でなく、研究室の一つだと思えたのは、コンクリートの研究所から出た複数の配管が、導かれるようにプレハブ小屋にも伸びていたからである。

このプレハブ小屋の中にも、コンクリートの研究施設一階で絶えず生み出されるエネルギー源を必要としている何かがあるのだろう。

「それにしても東和竜栄たる人物は、雰囲気作りにそつが無い御方のようで」

プレハブ小屋に窓はあるが、全てのガラスが黒く塗りつぶされて怪しさを倍増させていた。

軒太郎は、その光景を見て毒づいたのだろう。

こんなところに人が通り掛かるとは思えない為に、窓を塗りつぶしている理由は、室内を覗かれないように塗りつぶしている訳でなく、太陽光を避けている為だろうと推測できた。

コンクリートの施設にも窓がないのは、それが理由と思える。

推測でしかないが、生命維持カプセル内で寝ているあの何かは、紫外線が必要だが、太陽光に含まれる別の要素が苦手なのだろう。

「細川」

「はい……」

再び鍵の束を取り出した細川が、プレハブ小屋の鍵を開けて中の電気を付けに行く。今度は東和栄光も二人の探偵も、細川の招きを待

たずの中へと入って行った。
細川が電気のスイッチを入れると、プレハブ内を複数の蛍光灯が安
つぱい光で周囲を照らし出す。

そこに見えてきたのは。

「大きな水槽ね」

照明が点灯してから直ぐに視界へと入ってきたのは、プールのように大きな水槽である。寧ろ此処には、この巨大水槽しかない。幅は広いが深さは二メートル程の水槽に見て取れた。

その水槽の周りには足場が組まれており、上から覗き込めるようになっていた。この巨大水槽からも、先程の研究室で見た鋼鉄のカプセル同様の青白い光が輝いている。

このプレハブは、この巨大水槽を包む様に建てられている様子だ。

「どれどれ、中身はなんですかねえ」

階段を駆け登り足場に入った軒太郎が、興味深そうに水槽を覗き込む。

遅れて足場に上った憑き姫も同様に水槽の中を覗き込むが、東和栄光と細川の二人は下で待っていた。

上から見ると巨大水槽は、本当にプールのようなだった。

紫外線ライトに照らされ水槽内の液体が青く光っており、その液体の中に、人間として有り得ないサイズの大きさを有した人型が沈んでいた。

「これは随分と大きな物を作っているようで……」

呆れたのか軒太郎の語尾から力が抜けていく。
憑き姫も何も言わずに水槽内を見詰めているだけであった。

此処は、巨人製造施設である。

水槽に沈む人型は、身長五メートル程の巨人であった。
やはり髪の毛も眉毛も生えていない。股間も幼児のようにツルンツルンであったが、大きく立派な男性生殖器が付いていることから舐めて掛かれなかった。

「大きい……」

小声を発したのは憑き姫であるが、視線が不謹慎なポイントに向けられていた。

彼女の頬が初心な桜色に染まり、照れた視線が人生の経験不足から泳いでいた。

まだまだ乙女である証拠だろう。

巨大な人型は、若干痩せてはいるが、体格骨格は丈夫そうに窺える。
顔は醜悪で、鬼に似ていた。

五色鬼の一匹、黒鬼の鉷鬼に似ていないこともない。

「これは、なんですか？」

水槽の中を見下ろしながら軒太郎が、下に居る二人の老人に問う。
憑き姫がチラリと振り返り下の二人を見ると、上を見る東和栄光と目が合った。

執事の細川は、俯いたままである。

「ワシも知らん……。
竜栄に問いたただいたこともあったが、あやつは何も答えない。
何故にこんな物を作っているのか、どうやって作っていたかもワシ
は解らん」

東和栄光が嘘を言っているとは思えなかった。おそらく真実を語っ
ているのだろう。

「だが……」

少しの間を空けて語りだす東和栄光。声のトーンが一段と重くなっ
ていた。

「だが、竜栄のやつは、それをこつ呼んでいた……」

探偵二人が完全に踵を返して、重々しく語る老人を見下ろした。東
和栄光も視線を逸らさず力強い凜とした眼差しを探偵たちに向けて
いた。

「これは、『ゴリアテ』だと……」

「わおつ、そう来たか」

軒太郎は思った。

やはり東和竜栄たる人物は、演出に凝るタイプの人物だと。

愚鈍な協力者

時間軸は少しばかり巻き戻り、軒太郎や東和栄光等四人がカートに乗って竜栄の研究室に向おうとしているシーン。

執事の細川がカートを運転しながら屋敷の裏手で待つ三人を迎いに来た。

三人の待つ前にカードが到着すると、軒太郎が我先に助手席へと乗り込む。遅れて小柄な二人が後部座席に乗り込むと、カートはゆっくりと走り出した。

その光景を屋敷の三階窓から見下ろす影が一つ。

シルエットは女性。

赤いカーテンに半身を隠した彼女が、怪訝な表情で森の中へと走って行くカートを見送った。

東和栄光の孫娘であり東和栄江の娘、東和理沙である。

彼女の表情は、やたらと不安気に歪んでいた。

東和栄光が探偵を引き連れてパーティールームを出た後、彼女も部屋を出て、人目を盗むように祖父の後を追ったのである。挙動不審な動きだったが、彼女の行動を怪しむ者は一人も居ない。SPたちも彼女が部屋を出て行っても声を掛けなかった。

彼女は一族の中でも影が薄い。

ろくでなしの兄や叔父のように手間の掛からない普通の娘であった。

母のように、注目を浴びるほどケバくもない。

叔母である聖子のように、淑やかであつても存在感を有してなかつた。

個性の少ない女性だった。

その為か、パーティールームを黙って出て行つても殆どの者が、彼女の行動に気が付かなかつた。普段から興味を持たれていないのだろう。

四人が乗るカートが、完全に森の中へと見えなくなると理沙は、携帯電話を取り出し辺りを見回す。

一頻り人の気配が無いことを確認すると、電話を掛ける。

コール音が暫く続くと、理沙がそわそわと身を揺らす。

「先生……」

心細そうに理沙が呟いた時、相手が電話に出た。

もしもと返す声は、女性のものだった。

「先生！」

やっと相手が出たことに安心したのか理沙の声が高く跳ねる。

電話の相手は、女医の北枕夢子であった。

「どうしたの、理沙さん？」

不機嫌なのか、女医の声から苛立ちが感じられた。

いつもの事だ。理沙が彼女に電話を掛けると、いつも機嫌の悪そうな声が帰ってくる。

彼女だけでない。

学校でもそうである。

家族ですら理沙と話す時は、不機嫌そうに相手をする。彼女のビクビクとした仕草が、無意識のうちに他人を不快にすることが多いのであろう。

世に言われるイジメられやすいタイプなのだ。

友達も居ないに等しい。

だが、叔父の竜栄だけは違った。彼だけが理沙に優しく接してくれたのだ。

彼女は、竜栄だけが、自分を理解してくれている唯一の見方だと思っっている。

だから、竜栄の役に立ちたいのだ。

「先生……。祖父が探偵を連れて竜栄叔父様の研究所に向いました。……ど、どうしましょう」

電話の向こうから溜息が聞こえた。

「どうしましょうも、こうしましょうもないでしょう。貴方にどうにか出来るの？」

「で、出来ませんが……」

女医の言うとおりである。理沙には何も出来ない。どうしたら良いのかも判断つかない。彼女は、自分が愚鈍だと心得ている。だから助けを求めて北枕夢子に電話をしたのだ。

「まあいいわよ。ほっときなさい」

「えっ……」

あまりにも投げやりな言い方だった。

そんな事で良いのかと理沙は当惑させた、更に不安へと誘う。

「ほつといて良いのですか……」

「ええ、いいわよ」

「で、でも……」

女医の返答に危機的感覚がまったくない。それにすら戸惑う理沙は、納得行くまで質問を続けた。

「でも、このままでは叔父様の研究がばれてしまっし、ホムンクルスの体が処分された……」

それでは叔父の竜栄が、必死に取り組んできた研究すべてが台無しになってしまいかねない。それではあんまりだ。

困惑の声で尋ねる理沙に女医は、カラツとした声色で答える。

「いいのよ、あんな物」

「あ、あんな物って……」

扱いが雑である。

「もしも、あそこのホムンクルスたちが処分されてもね、予備は私
が押さえてあるから心配無用よ」

「予備があるのですか!？」

理沙は知らなかった。予備の存在を。

「ええ、そうよ。」

もともと研究に行き詰っていた竜栄に古の研究資料を提供したのは
私よ。予備の管理ぐらい私でも出来るわ」

「そうだったのですか……」

理沙は、それすら知らなかった。

「まあ、研究所を探偵たちが見て回っても、いきなり電源を落とす
たり、カプセル内のホムンクルスを処分することはないでしょう。
最低限、20番から22番までの三体が明日まで無事なら作戦は問
題無く継続できるわよ」

研究室の生命維持カプセルの数は、全部で二十一個の筈。22番と
は、裏のプレハブ小屋を数えているのだろう。あのプレハブ小屋事
態が生命維持カプセルその物なのだ。

「……はい」

理沙は不安気に返事をしたが、何故に20番から22番のカプセル
が大事なのか知らなかった。

だが、その中に入っている三体のホムンクルスが、今回の計画のキ
ーになるのであろうと悟る。

幾ら愚鈍な彼女でも、その程度なら自力で考えられた。

「まあ、そんな訳だから、貴方は何も心配要らないわ。黙って屋敷内の監視を続けてちょうだい。

作戦が順調に進めば、貴方の愛しい叔父様は、五体満足に帰ってくるから」

「……はい」

そう、理沙にとって竜栄は、愛しき相手である。この感情が、恋心であることも理解していた。

理解しているからこそ、何も出来ない己の愚鈍さが悲しいのである。

「じゃあ電話切るわよ。作戦も大詰めに近づいて、私も忙しいから。じゃあね」

そう言つて北枕夢子は、一方的に電話を切った。理沙の耳に添えられた携帯電話からツーツーと寂しげな音声が続いてくる。

「竜栄叔父様……」

携帯電話を持ったままの右腕をダラリと下げた理沙は、愛しき親戚の名前を呟く。

そして、ホームクルスの生産研究所が隠れている森の方角を、心細そうな眼差しで暫くの間見詰めていた。

探偵集合

昂輝とイゴールの二人が東和邸にタクシーで駆けつける。

タクシーから降りた二人が、東和邸の正門前で上を見上げて啞然と
していた。

「なんですか、この大きな黒は……」

「さあ……」

一度東和邸に足を運んだ事のある昂輝なら解ると思ひ、目の前に聳
え立つ巨大な黒い壁の正体を訊くイゴール。

だが、質問された昂輝も目を丸くさせており、回答に悩む。

昨日訪れた時に見た巨大門の裏側は、黒く四角い物だったが、今見
えている物は、完全に昨日見た物とは異なっていた。

違いすぎる。

形が違いすぎる。

大きくなっている。

完全に別物である。

黒い壁が、横一線に東和邸の庭を区切っていた。
これではまるで、巨大な城壁だと思ふ。

「と……とりあえずは、中の人と連絡を付けましょう」

戸惑いながらも冷静に振舞おうと昂輝が、正門の柱に備えられたインターホンを押した。

中から警備員の声が聞こえてくると昂輝は、用件を伝える。

その間もイゴールは、口を半開きにして黒い壁を見上げていた。

暫くすると若い執事が、黒い巨壁を突っ切り二人を迎いに来た。正門の柵越しにイゴールの風貌を見て驚いていたが、イゴールも執事が黒壁の中から歩いて出てきたことに驚いている様子だった。

若い執事に招かれ昂輝とイゴールの二人が、先に訪れていたヴァルハラ事務所の探偵たちと合流する。

此処まで来る途中に勿論ながら昂輝たちも幻の城壁内を突っ切つて来たのだが、イゴールは最初の戸惑い状態とは裏腹に、城壁の外へと出た頃には子供の如くはしゃいでいた。不思議な暗闇を随分と堪能した様子だった。

その興奮が収まらないままパーティールームで待つ三人の探偵と合流して、巨大城壁の感想をワイワイと話し始めた。まるで遠足帰りの子供である。

昂輝が辺りを見回すと、パーティールームに居るのは数人のSPの男たちだけで、東和家の面々は一人も居なかった。それに軒太郎と憑き姫も居ない。

SPたちは、はじゃぐイゴールを見て不思議な珍獣でも見るような眼差しを向けていた。

「お砂姉さん」

「なあに、昂輝君？」

「軒太郎さんと憑き姫は、どこに行ったのですか？」

「二人なら」

お砂が答えようとした時である。パーティーの扉を開けて軒太郎と憑き姫の二人が帰って来た。

東和栄光は居なかったが執事の細川が同伴している。

「やあ、昂輝君にイゴールちゃん。ふたりも到着したね。これでヴアルハラ探偵事務所のスペシャルエージェントが大集合だ」

そう言いながら皆の輪に加わる二人。文字道理に七人の探偵が輪を作って並んだ。

昂輝は自分もスペシャルエージェントのメンバーに数えられたのが嬉しいのか、表情がパツと明るく輝く。

「若先生。で、東和栄光が見せたかった物は、なんだったんですかい？」

口火を切ったのは赤股夏鱗。

昂輝とイゴールの二人は、状況が分からないまま質問された軒太郎の様子を窺う。

「ああ、面白い物が見れたよ」

「面白い物ですかい？」

「ああ、東和竜栄の研究所だ」

「秘密の研究つてやつだな」

四角い顎を撫でながら功尻老が言うと、昂輝とイゴールにも話の内容が想像でき始めた。

「噂どおりのホムンクルス研究でしたよ。しかも完成度が高かったよ、かなりね。」

我々が訪れたら、意図的なものとは思えないが、一体ほっつき歩いていたくらいだからね」

「本当ですか」。歩くホムンクルスですか」

広いパーティールームにイゴールの可愛らしい声が楽しげに響く。

「その研究所の調査だが、イゴールちゃんに任せるよ。お砂姉さんと組んで、詳しく調べて来てくれ。場所に関しては、その細川さんが案内してくれますから」

探偵たちの視線が入り口側に立つ老執事に向けられると、細川が礼儀正しく頭を下げた。

「了解しました」

元気な幼児のように無邪気な返事を上げるイゴールちゃん。お砂も軟らかい笑顔で指示に頷く。

更に軒太郎は極道コンビにも次なる指示を述べる。

「極道コンビのおふた方は、双葉総合病院に行ってもらえますか。そこに東和竜栄が入院しているそうですから、様子を見てきて貰いたいのですよ」

「双葉総合病院ならば、ここからさほど遠くないな」

功風老の言う通り東和邸から病院までは、車で十分程度の距離である。

よし分つたと述べた功風老は、即座に部屋を出て行く。その後を赤股が蟹股歩きで追って行った。

「私と憑き姫の二人は、もう少し屋敷の敷地内を調べて回るから、昂輝君はこの部屋に残って、外の様子を監視しててください」

「一人で、ですか。分りました」

「外のアレに異変が少しでもあつたら、携帯電話で連絡ください。細かくですよ」

「了解しました！」

背筋を伸ばしながら軍人を真似て敬礼をする昂輝。初の単独任務が、随分と楽な内容だと安堵した。

「おそらく外のアレは、時間が経つと姿が変貌して行くはずよ。その姿からアレが何を狙っているのか推測できるわ」

「推測できれば、対策も組みやすいからね」

憑き姫の言葉の後に、軒太郎が営業スマイルで監視の目的を述べる。この人は、楽しみながらも先の成り行きを考えている様子であった。ただの快樂主義者でもないのが良く分る。

「では、行きましようか憑き姫」

「ええ」

軒太郎に返事を返しながら憑き姫の視線が昂輝に向けられる。その視線に気付いた昂輝が、何となく微笑むと、照れくさそうに憑き姫は顔を逸らす。

「では、私たちも行きますわ。東和竜栄の研究室とやらに」

「やつほーい。行きましょー、行きましょー」

相当イゴールは、竜栄のホムンクルス研究に興味を抱いている様子であった。

傷だらけのモンスターがスキップで部屋を出て行く。ルンルン気分が全身から伝わって来る。

それをお砂と細川の二人がマイペースな速度で歩いて追う。

軒太郎と憑き姫の二人も部屋を出て行った。

パーティールームには、昂輝の他に二人のSPが残った。

SPたちの視線は、まるで昂輝を監視しているように感じられた。男たち視線が凄く気になる。

流石は一流のSPたち。視線からプロの威圧感が伝わって来る。普

通にしているのかもしれないが、鋭く睨みつけているように感じられた。

プレッシャーを視線から感じ取った昂輝は、いたたまれなくなり窓の外に向きを変えてSPたちの眼差しから逃れる。それでも背中に刺さる視線が気になってしまい、気が休まらない。

「……………」

一人で居るのが辛くなってきた。プレッシャーがしんどい。

この任務は、思ったよりも辛い…………と、昂輝は思い始めた。

傀儡の新郎新婦 (一)

極道コンビの二人は、直ぐに東和邸を車で出発して、竜栄が意識不明で入院している双葉総合病院に向った。

車は東和家が用意してくれた。運転手は若い執事が勤めている。その若い執事が、竜栄の病室まで案内してくれるらしい。

三人が乗る車が、病院のロビー前に到着した。駐車場は、この奥に在る。

「さてさて、やっこさんの面でも拝みに行くか」

そう言いながら車から降りた功尻老は、自動ドアを潜って一人先へと闊歩して行く。若い二人を待つ気配が欠片もない。

続いて車を降りようとする赤股が、運転席の若い執事に言う。

「あなたは車を駐車場に止めたら、そこで待っている。ここから先は、俺らだけで十分だ」

「しかし……、私の言い付けられたのは、竜栄様が入院している病室までの案内です。車を止めてきますので、暫しお待ちを」

「いってことよ。お前さんは、ゆっくり俺らの帰りを待っていないって」

「ですが……」

若い執事が食い下がり言葉を続けようとした瞬間、赤股が勢いよく車のドアを閉めた。振動で車ごと大きく揺れる。彼の話を聞く気が無い様子だ。

すでに功風老の姿は、車内の執事から見えない。赤股の姿も自動ドアを潜り病院内に消えて行った。

「チンピラ共が……」

若い執事が、軽蔑の愚痴を車内で溢した。

彼は竜栄の病室まで案内するのが自分の仕事だと言ったが、実のところそうでない。本当の目的は二人の監視であった。可笑しな探偵を信用しきっていない栄江の支持である。

二人を追おうと若い執事は、慌てて車を駐車場に向わせたが、今日に限って駐車場は混雑していた。入り口の発券機横に満車の赤い文字が点燈している。

有料の発券機前に数台の車が並んで空を待っていた。

「糞ッ！」

若い執事は、苦虫でも噛み潰したような表情で車のハンドルを平手で叩いた。

一方極道コンビは、病院に入るとすぐさま受付を目指す。

竜栄の病室が何号室だか知らなかった為、家族だと嘘をついて訊きだしに行ったのだ。

ヤクザのような二人を見て、受付の看護婦が怪しそうに二人を見ていたが、竜栄の病室を教えてくれた。

極道コンビはエレベーターに乗って四階を目指す。

413号室。個室だろう。そこが竜栄の病室らしい。

四階に到着した極道コンビが、降りたエレベーター前で立ち止まっていた。

二人とも表情が厳しい。

「なあ、夏鱗」

「なんですかい、師匠」

「この病院……、どう思う？」

「とても臭いですねえ。陰謀の香りがプンプン漂ってイヤす」

「なんとも怪しすぎる。霊体の一つも漂ってない。そこが陰謀臭い。何者かが己の気配を消したいがあまり、低級霊の気配まで一緒に消してやがる」

「そうですね。この病院に入ってから見た霊体の数は、たったの二体。そのどちらも悪霊かする寸前の中級以上の霊体。病院にも関わらず、空気のように薄い霊体の数々が見受けられやせんねえ」

赤股の意見を聞き終わると、功尻老が下駄を鳴らしながら歩き出す。

「これも、東和竜栄の仕業でしょうかねえ」

「さあのおう。聞けばホムンクルスに手を出す程の輩だ。魔導魔術に手を染めていても可笑しくない人物だろう」

「自分の気配を隠す為に、術を施した……。これなら確かに病院外

からは探知できやせんねえ」

「中に入ったら、直ぐに感づかれるがぁのお」

二人は話している間に413号室の前に到着する。

四階に到着したから此処まで、他の入院患者や看護婦たちにも出会わなかった。ナースステーションの横も通り過ぎたが、人の気配は感じられなかった。まるでこのフロアー全体が無人のようだった。

功風老が、ごつつい手で扉をスライドさせた。病室内から闇が流れ出てくる。

室内は、カーテンがすべて閉じられ薄暗かった。その病室の中央に半透明のカーテンに囲まれたベットが一つ在る。ベットの横には、何やら治療器具らしき機械が動いていた。

二人が中に入って行くと、赤股が片手でカーテンをずらしてベットを覗き見た。

「こいつが、東和竜栄ですかい。思ったよりも普通ですな。面会謝絶の意識不明にやあ見えませんねえ」

髪の毛は短めに刈り込まれており、武将髭を生やして若干痩せていたが、穏やかな表情で眠っていた。

点滴を受け、酸素呼吸器を装着しているが、一ヶ月以上意識不明で入院している患者とは思えない程の肌艶である。

「カルテ上で意識不明でも、精神が死んでないんだ。身体の衰えも緩やかなんだろっ」

「病は気からってやつですな」

「こいつは死ぬ気がないんだよ。生きようと気を張ってやがる」

「ですがあ……」

赤股が不思議そうに首を傾げる。

「こいつからは妖力の欠片も感じられないっす。この病院内に広がる結界を拵えた人物とは思えやせんねえ」

「 同感だ」

洪声で答えた功凧老が踵を返す。そのまま病室の出口に向って歩き出した。赤股もカーテンを捲っていた手を離すと、老師の背中を追う。

「これだけじゃあ竜栄が、白か黒か判断できないのお」

「ですが、この病院は、何か可笑しいですねえ」

「可笑しいからと言って、事件に絡んでいるとは断定できんぞ」

「そうスねえ」

極道コンビが会話を交わしながら竜栄の病室から出た瞬間、二人を異変が包み込む。

一瞬で廊下に並ぶ窓ガラスが黒く染まった。外が漆黒の闇に包まれ景色を帰る。廊下が薄暗くなり、二人の頭上の蛍光灯以外が光を失う。

「これは……」

「暗夜結界だな……」

二人は背と背を合わせて身構える。闇に薄らぐ廊を左右別々に警戒した。

「て、ことは、此処に居る輩は、あいつか」

「でしょうねえ。我々二人をこつもあつさり結界に誘いこむのですから……」

廊下の左右は暗く、奥が見えない。

その片方、功風老が警戒していた廊下の奥から足音が聴こえてくる。カツカツとハイヒールで歩く、踵の響きであった。

「やっぱりお前さんかい……」

功風老が言うや否や、暗闇の廊下から女性のシルエットが浮かび上がる。白衣を羽織った女性であった。

サングラスを外しながら赤股も振り返り、功風老の同じ方向を睨み付けた。ヘラヘラした演技が消えて、本来生真面目な筈の性格が、真剣身を増した表情に蘇る。
ヴァルハラビル前でのヤクザたちとの攻防では、微塵も見せなかった顔付きであった。

「お久しぶりね、極道コンビお二人さん」

「美藤傀儡……」

暗闇から姿を現した白衣の女に、そう返す赤股。
その名を聞いて女が微笑む。

「此処では北枕夢子って名乗っている。どう、可愛い名前でしょ」

「相変わらず悪趣味なネーミングセンスだ。お前さんらしいのお」

北枕夢子は 否、美藤傀儡は、功尻老の悪態を聞いても笑顔を崩さない。ヴァルハラ探偵の強豪二人を目の前にして、余裕すら感じさせた。

功尻老の方も余裕が態度から感じられたが、赤股の方に限っては、それ程でもない。女と己の力量を比べた限り、勝利が困難であることを心得ている様子であった。

それ程までに、美藤傀儡たる女は、実力者なのだろう。

事実、赤股は、美藤傀儡に一度敗北している。

同等に戦ったが、最後は尻尾を巻いて逃げたのである。

傀儡の新郎新婦 (二)

「お前さんが、この町に帰って来たのも二年ぶりかのお。今まで、何処で何をしいやがった」

両腕を軽く組みながら楽な姿勢で立つ女医が、顎をしゃくらせながら功尻の質問に答えた。

「中東の紛争地帯に行つてたわ」

「戦争ごつこでも楽しんでたか？」

「まさか。今更並みの人間が相手じゃあ、遊びにもならないわよ」

「だろうな」

美藤傀儡と功尻老の会話に緊張の空気は感じられない。だからといって友好的関係にも感じられない。

その二人の会話を赤股が身構えながら窺っていた。

この女は、明らかに敵である。

「医学を追求していたのよ。もちろん人助けのためじゃないわよ。医者なんて、本当につまらない仕事よね。他人の命なんて救って、何が楽しいのか理解できないわ。馬鹿馬鹿しったらありゃしない。今だって勤務時間外だから、目の前で死にかけた人間が居ようと関係ないですもの。助けてあげる義理もないしさ。

医者なんてただの仕事。ただの隠れ蓑よ。見つかつちやつたけどね」

女医が無責任で身勝手なことをダラダラと語る。
医師の言葉とは思えない。患者が聞いたら幻滅するのは間違いない
だろう。

「ならば、何故に中東なんぞに行つて医学なんぞ学んでいた？」

「解剖よ、解剖」

解剖。その単語を聞いて功尻老の表情が厳しく変わった。視線が鋭
い睨みを利かせる。

「戦地だとね、生きた人間も、死んだ人間も、容易く手に入るのよ。
内臓だろうと、脳味噌だろうと、そりやもう弄くり放題。」

先進国じゃあ密かに取り組まなくてはならない事でも、堂々とやれ
たわ。死体の処分も楽しね。

人体の神秘を知識として獲得するのに、チャンスが石コロのように
ゴロゴロ落ちていっているのよ。お蔭でね、医大で学べるような人体学が、
たったの一年程度で殆ど習得できたわ」

満足気に微笑む美藤傀儡。その笑みが腹正しいのか、極道コンビの
額に血管が浮かび上がる。怒りで眉間に皺が寄り、苛立ちに奥歯を
強く噛んだ。

それでも功尻老は、冷静な口調で話を続ける。

「で、人形使いのお前が、医学なんぞ学んでなんになる。いいこと
でもあるのか？」

そう。美藤傀儡は、名前から察しられる通り、人形使いの魔導
士だ。

その人形使いが、何故に医学を学ぶか赤股も疑問に思う。

「あるわよ。こうして不況の日本に帰国しても、直ぐに職にありつけたわ。」

何せ私は、その赤股君のお姉さんと違って無免許医じゃあないからね。」

「なめてるのか……」

実の姉を馬鹿にされた赤股が凄んだ声を唸らせる。

美藤傀儡の発言に怒りを感じるが、その理由は姉を馬鹿にされたからではない。姉を通して自分を馬鹿にされたのが屈辱なのだ。実のところ夏鱗も、姉の牙が嫌いである。心から嫌いである。

「人間をばらして、何を学んだ。人形使い」

それが聞きたいのだ。功凧老が問う。

その質問に妖怪を思わせる怪奇な笑みで答える美藤傀儡。表情が不気味な怪人と化すと、周囲の温度が冷え込んで行く。

「私の生き人形たちは、今まで外見だけがリアルだったわ。その完成度は、生きた人間とも死んだ人間とも見間違えられる程に素晴らしい代物よ。芸術性も最高レベルに到達していると自負していたわ。そして、操り人形としては最強。モビルスーツ以上の強さよ」

声の抑揚が下がる。

「でもね……」

美藤傀儡の顔から笑みが消えて行く。代わりに不気味な影を落とす。まるで幽霊のような気配を流し始め、恨めしさが表情に浮かびだす。

「でもね、幾ら外見を極めようとも、妖力を大量に流し込もうとも、所詮はただの傀儡……。戦闘力で遅れを生じるわ。魔法魔術を極めた術者たちに敵わない。パーフェクトと言えないわ。不完全なのよ。それが気に入らないのよ」

「ちっ……」

話の最中に赤股が舌打ちを零した。

その不完全と表現する人形に赤股は遅れを取ったのだ。彼もまた納得が行かない。

「そこで私は、次のステップを目指したのよ」

「それが医学か」

「そうよ、医学よ。」

人間の構造を参考に、人形の内部を作り上げることかを思いついたのよ。外面だけでなく、内側も作り上げることで完璧を目指すことにしたのよ」

美藤傀儡が語り終わると、彼女の背後から足音が聞こえ始める。

コツコツと鳴る廊下。複数の足音だ。

その足音はやがて人掛けに替わり、二つのシルエットを映し出す。

傀儡。

生き人形。

「そして、この二体が、試行錯誤を重ねて作り上げた新型の生き人

形たち」

親指で後方に立つ影二つを指差す。その影二つが、主の両サイドを過ぎて前に出る。

傀儡の新郎新婦 (三)

男女の人形である。

人形の顔は、生きた人間の如くりアルに作りこまれていた。無表情で虚ろな眼差しに、ふっくらとした唇が、本当に生きているような完成度である。

しかし、一目で人形とも解る。

歩き方に違和感が溢れており、血の通っていない傀儡の動きだった。その二体の生き人形は、清楚な純白を纏っていた。白いタキシードと、白いウエディングドレスである。

新郎新婦の生き人形だ。

「こらまた、悪趣味な洋服を誂えたおつて」

「実は言つと、結婚願望が強いんじゃないですか……この人」

赤股が小声で耳打ちすると、功尻老が「ちげえねえ〜」と悪ガキのような笑みで答えた。

しかし、二人のやり取りは美藤に届いていない。女医は淡々と自慢話を続ける。

「内部を細かく作り上げることで、私の生き人形は更に強くなったわ。究極に近づいたと言えるわ。以前とは比べ物にならないほどに戦闘能力が向上したのよ。パワー、スピード、耐久力、柔軟性、すべてがアップしたわ！」

自分の台詞に酔いしれている美藤傀儡が、歡喜の言葉と共に大きく両目を見開く。そして台詞をすべて言い終わった頃に、二体の純白傀儡が身構えるように腰を落とし戦闘態勢を取る。

刹那。

ダンツと音が鳴った。

廊下の空気が弾けて窓ガラスが振動に震える。

その音の直後に新婦の人形が、ウエディングドレスのスカートを靡かせながら後方に吹き飛ばされた。美藤傀儡の横を吹き飛び闇に倒れこむ。

「ッ!？」

驚く美藤がすぐさま振り返り、後方に倒れた新婦の人形を視線で追った。

更に風が唸った。

疾風が新郎を真横に吹き飛ばし窓ガラスを頭から突き破る。割れたガラス片と共に新郎が建物の外へと追いやる。

「貴様ツ！」

美藤が正面を向き直すと、新郎新婦の生き人形が立っていた場所には、赤股夏鱗が立っていた。

彼が、一瞬で二体の傀儡を打ちのめしたのである。

ダッシュからのストレートパンチで新婦の人形を殴り飛ばし、間髪

要れずにハイキックを繰り出し新郎の人形を窓の外へと蹴り飛ばしたのだ。

一連の攻撃に、二秒と掛かっていない。まさに瞬激だった。

赤股が掌と拳を打ち合わせと、気合の入った音が廊下の間に響いて消えて行く。

「完璧に近づいたのは、あんたのお人形さんだけじゃあねえぜ、美藤のおばちゃんよ。俺だって昔とは違う。強くなってるぜ！」

顔面に何本もの血管を浮かばせながら仁王立ちで人形使いを睨む赤股夏鱗。

彼もまた、この二年間で完璧に近づいた存在である。

美藤傀儡にリベンジを切望しながら、この日が来るのを、日々過酷な修行に励みながら待っていたのだ。

「夏鱗。お人形が二体ならば、一人で十分だろう？」

「余裕です。百体でも千体でも問題ないっす」

「あら、随分と強くなったよようね……」

美藤も驚いていた。

だが、冷静である。

パワーアップした筈の生き人形が、こつも容易く吹き飛ばされるとは考えてもいなかった。

しかし、彼女の後方でウエディングドレスを着た生き人形がゆつくりと立ち上がり、両腕をブラブラさせながら歩き出す。壊れたところは無いようだ。

そして割れた窓枠に人形の手が掛かり、落ちた筈の新婦人形も這い上がって来た。

こちらにも壊れた様子は見当たらない。

殴られた顔も、蹴り飛ばされた頭にも傷一つない。かなり丈夫なようだ。

「夏鱗、修行の成果を見せたれえ！」

師匠の激が飛ぶ。

赤股は、拳を握り締めた両腕を、顎の前で交差させる。そして素早く十字を切った。

「押忍ッ！」

気合を示す掛け声が、返事と変わる。

赤股夏鱗の闘志が、薄暗い廊下に響いて空気を熱く揺らした。

「面白いわね、坊や。また、返り討ちにしてあげるわ」

自信に満ちた表情で赤股を睨みつける美藤傀儡。

自分の人形たちは、こんなもんじゃあないぞと瞳が述べていた。

黒い呪い 再び (1)

東和邸のパーティールーム。

壁一面がガラス張りとなつている窓の前で佇む呪われた少年。五代昂輝。

彼が見詰める窓ガラスの向こうには、幻影の城壁が聳えていた。

パーティールームの出入り口には、黒服のSP二人が昂輝を監視するように立っている。昂輝は、その視線と目が合わないようにと二人に背を向けて、ただ只管に窓の外を眺めていた。

「退屈だ……」

ヴァルハラ探偵のメンバーが部屋を出て行って、かれこれ三十分ほど経っていた。

昂輝は軒太郎に命じられた通り、巨大門から巨大城壁へと変貌した非科学的な怪異を眺めていたが、これと言って様子は変らない。憑き姫が言っていたような変化は見られない。

「まあ、まだ三十分しか経っていないからな」

ジーンズのポケットから携帯電話を取り出し時間を確かめながら咳く。

つつい出してしまう独り言。

やはり詰まらない。

一人は、退屈だ。

自分も誰かとペアを組んで調査活動に励みたかった。出来ることなら憑き姫と……。

まあ、探偵と成ってまだ二日目。誰と組んでも役に立たないこと間違えないだろう。

探偵家業が、そんなに甘いものだとは思っていない。ましてやオカルト探偵事務所だ。一人前になれるのは、何年も先の話だろう。もしかしたら何十年かもしれない。

「何十年か……」

自分が探偵として一人前になっている頃には、自分の中に潜む一族の呪いは解けているのだろうか……。

窓ガラスの外に広がる怪異の景色を眺めながら己の呪われた未来を案ずる昂輝。

しかしながら想像だけが先走る。

悩めど悩めど結論は、勿論でない。考えれば考えるほどに、悪いイメージだけが固まって行く。

「こんなことじゃあ……駄目だ……」

俯きながら呟く昂輝。

ネガティブに考えては、いけない。

何故、家を出た。

何故、町を出た。

何故、此処に来た。

自分は救われるために、此処に来たのだ。探偵になろうと歩み始めたのだ。呪いを解くために来たのだ。

生きるために、否。

未来のために、否。

夢を叶えるために、否。

幸せになるために、否。

全てだ。

そうだ、全てを手に入れるために来たのだ。

そのために来たのだ。

強くなり、呪いを解き、幸せになり、全てを手に入れるために、自分一人で掴めるだけの幸せを、自分で守れる限りの幸福を築き上げるために、大切なものを見つけ出し、守りきるために。

そのために呪いを解かなくては。

先ずは、そこからだ。

「僕は、貪欲だな……」

自分の正直な意見だった。

生きたいのだ。生きるからには幸福に成りたい。
人間ならば、そう望むことが普通だろう。当然のことだろう。

「おい、お前」

「えっ……？」

突然後ろから声を掛けられる。若い男の声だった。昂輝が驚き瞬時に振り返る。

そこには、黒いジャケットをだらしなく着込んだ男が立っていた。

「あなたは……、確か……東和勝之……さん」

キョトンとしてしまう昂輝。

振り返った先には、東和勝之が立っていた。

黒いジャケットの下には白いワイシャツを着ていた。しかし、裾はズボンの外に出ており、胸元のボタンは嵌められていない。開いたワイシャツの胸元からは、銀のネックレスがチラついていた。

まるでチンピラである。

鼻屑目に表現したとしても、売れないホストと言った感じであった。同じような黒のスーツを着ているSPたちとは、印象がかなり違った。

ピシッと黒のスーツを着込んだSP二人が、室内に入って来た勝之を見て呆気に囚われている。

何かが違うのだ。

早朝この部屋で、屋敷を出て行く出て行かないで騒いでいた人物と、どこかが異なっただけに見えていた。

あの時の彼は、とても小さく見えた。人間としてちっぽけな存在に見えていたのだが……。

だが、今室内に入ってきた勝之は、何かが違うて見えた。二人のS Pは、何かが違うことだけは分っていた。しかし、その何か、何であるかまで分からない。その疑問に戸惑う。

「おい、探偵の小僧。こんなところで何しているんだ。とつと事件を解決しろよな」

根性が曲がりきった笑みで昂輝に話しかける勝之。両手をズボンのポケットに突っ込みチンピラを気取っているようだった。赤股の歩きかたに良く似ている。

黒い呪い 再び (2)

頂垂れながらダラダラと歩く勝之が、昂輝の前に立つ。
後ろの方では、SPの二人が不思議そうに此方を見ていた。

「お前によお、言いたいことがあるんだが、聞いてもらえるか？」

「な、なんででしょうか？」

唐突の質問に戸惑う昂輝。

勝之が世間を舐めたような笑みで昂輝の顔を覗きこんで来る。

「あれだよ、あれ。あれは、なんだ？」

言いながら昂輝の後ろを指差す勝之。恐らく庭に聳える幻の城壁のことを訊いているのだろうが、昂輝にも良く分らない。

今現在でヴァルハラ探偵の人々でも、あれが何であるか断言できるものは居ないだろう。

「僕にも、さっぱりです……」

そう答えるしか出来なかった。

勝之が指差す先を見るため昂輝が振り返る。
あれが何か。それは昂輝の方が訊きたかった。

直後、勝之が拳を握り振り被った。

「えっ!？」

その動きに感づいた昂輝が咄嗟に前を見る。そこに勝之の貧そうな拳が飛んで来た。非力に見えたが、以外にもスピードは速い。

「ブウゴツ！」

突然のことに飛んできた拳を顔面の中央で受け止める昂輝。クチャリと鼻の軟骨が潰れる音がSPたちの耳まで届く。拳は貧弱に見えたが、喰らってみると以外にも重い一撃だった。

殴られた昂輝は鼻を押さえながら後ろに下がり、背中をガラス窓に勢い良くぶつける。

「勝之様！？」

SPの一人が強行に打って出た勝之の名前叫びながら駆け寄ってくる。もう一人のSPも遅れて相棒の後ろを追った。

しかし、駆け寄るSPたちを無視して勝之が、二発目の拳を振る。左のボディブローが、ガラス窓を背にする昂輝の腹筋に叩き込まれた。

「ウグツ！」

続いて右フックが昂輝の頬を叩く。

「ひゃはははは！」

楽しげに笑う勝之。

「ああ〜ん？」

笑いが止まる。

更なる四発目の拳を打ち込もうと左手を振り被ったところで駆け寄って来たSPが、その細腕を掴んで止めた。

「勝之様！ いきなり何をなさいますか！？」

当然の疑問を大きな声で問うSP。

同じ質問を昂輝もしたかったが、殴られた顔を押さえながら痛みに俯いていた。

「いたたあ……」

潰れた鼻の軟骨は直ぐに修復されたが、殴られれば痛いのだ。不死身でも痛覚は普通にある。

「はなせよお」

SPの質問に、答える事無く力任せに掴まれた腕を振り払うとする勝之。

その腕力は、思った以上に強く、日頃から体を鍛えている筈のSPを容易く振り払う。

勢い良く振り払われたSPが心の中で、そんな馬鹿など、驚いていた。

この貧弱なボンボンに、自分がこうも容易く振り解かれるとは思っても見なかったからだ。信じ難いことである。

「おいおいおい、どう言うことだあ。使用人の分際で、俺に手を出すなんて上等じゃあねえか。身分の違いを弁えてもらわねえ」とよお〜」

勝之の目は血走っていた。

指の関節をポキポキと鳴らした後に、今度は自分の腕を掴んだSPに向って拳を振り上げる。

「ちよつと、勝之様……」

完全なテレホンパンチ。

予備動作が大きすぎて、拳を振るうタイミングもコースも見え見えだった。SPは避ける為とはいえ、本能的にファイティングポーズを取ってしまう。

男は、SPの傍らプロのキックボクサーでもあった。故に、勝之のような素人のパンチを喰らう訳がない。

だが、勝之の狂気な行動がディフェンスを取らせたのだ。

そして繰り出される勝之のパンチ。

速い。

大きなモーションから発射されたパンチだった。

しかし、動き全体が急に加速して、プロの動体視力ですら捕らえられないほどの速度と化す。

ボゴンっ！

広いパーティールームに、無骨で生々しい音が響いた。

プロのキックボクサーである筈のSPの男が、喰らう訳がない筈の素人パンチを受けていた。

勝之の繰り出した拳が、SPの胸に減り込み肋骨を砕く。

「う……………うう……………」

そんな馬鹿なと言いたかったが、まったく声が出ない。息すら出来なくなった。

後ろによるめき歩くSPの胸に、拳サイズの陥没した跡が残っていた。陥没した凹みに、ネクタイとワイシャツが一緒に減り込んでいる。

「な……………あ……………」

殴られたSPが、涎を垂らしながら尻餅を付く。

何が起きたか分らない。SPの男が状況を脳内で整理しながら、窪んだ自分の胸元を見る。

その視界に割り込んでくる黒い物体。それが男の顎を蹴り上げた。

勝之の蹴りである。

視界が激しく揺れた後、高い天井が見えた。上を向いているらしい。徐々に天井に黒い霧が掛かり始め視界が失われて行った。その蹴りで男の意識は、暗い闇の中に消えて行く。

やがてSPの男は、意識を失い大の字になって倒れた。

黒い呪い 再び (3)

「じゃあああああああ！」

勝之が吸血鬼のように牙を剥いて威嚇する。SPの男が思わず体をビクつかせると、勝之が爪を立てて飛び掛って来た。

咄嗟に両拳を構えるSP。

彼もまた、若い頃からボクシングを嗜んでいた。数年前までプロボクサーでもあった。

高校の頃はインターハイにも出場するほどの実力者だったが、プロの新人王トーナメントで八百長を行なったとしてプロボクシングの業界を、事実上追放されている。

もちろん八百長は事実ではない。それまで八百長を仕組んだことは一度もなかった。

真剣にチャンピオンを目指し、真面目にボクシングに取り組んでいたのだ。

しかし、その試合で不思議な事件が起きてしまう。

対戦相手が繰り出した空振りの左のロングフックに、何故かKOされたのである。

その出来事が八百長と言われ、プロボクサーとしての未来を失う。

悲劇的格闘技経験者は、獣の様に飛び掛って来た勝之の顔面目掛けて、鋭く速い左ジャブを狙い澄まして放つ。

素人が決して躲すことも防ぐことも出来る筈がないシャブ。本物のパンチだ。

シュツ、と風が鳴る。

まるでフラッシュの如くスピーディーなジャブだった。だが勝之は、瞬時に身を屈めて一流のジャブを回避した。有り得ないことである。

「馬鹿な!?!」

金持ちの七光りでしかない、馬鹿で愚かで屑のような男が自分のジヤブに反応できる筈がない。そうSPが思った時には、勝之がSPの懐に入り込んでいた。

「貰ったぜ!」

SPの懐に飛び込んだ勝之が、腹部を五本の指で鷲掴みにした。そして、物凄い握力で腹筋を握り締める。

「いいいいいい!!」

歯を食いしばりながら悲鳴を上げるSP。苦痛に歪む顔から脂汗が大量に噴出した。

腹にワニが食い付いて来たような激痛である。

「放せッ!」

勝之を跳ね退けようとパンチを繰り出すが、拳にスピードが乗っていない。

大の男を、まるで雑巾でも投げつけるように壁へ叩き付ける勝之。SPの男が壁に激突して室内を大きく揺らす。天井のシャンデリアがカタカタと揺れていた。壁に叩きつけられた男は、白目を剥いて倒れこむ。

格闘技経験者のSP二人が、子供扱いだった。

「くっくっくっくっ」

勝之が不敵に笑いながら振り返ると、反対側のガラス窓の前に昂輝が唾然としながら立っていた。

昂輝も何が起きているのか理解できずに困っていた。分っていることは、勝之が狂ったということぐらいである。

「いやね、今日の朝さあ。こんな物を拾ったんだよ」

そう言いながら勝之が、ジャケットの懐から黒い風呂敷を取り出し広げてみせる。

その黒い風呂敷を見て昂輝が双眸を大きく見開いた。

「そ、それは……。冗談でしょ……」

見覚えのある黒い布切れ。嫌な記憶が蘇ってくる。

昂輝の顔が青ざめて行くなか、勝之が黒い風呂敷を頭に被る。

その姿は、呪いに蝕まれた素詛の叔父さんに似ていた。あの時の素詛英二に姿が重なる。

「お前さんなら、この姿が意味するところが解るだろう。解らない訳がないよなあ。なっ、なっ、なあ」

黒い風呂敷の下で勝之の顔が嘲笑っている。表情こそ見えないが間違いないだろう。

東和勝之を睨みながら昂輝が怖い声で唸った。

「呪い……かつ！」

大正解。

「イエース。そう、呪いでーす。カースでーす!!！」

傀儡の新郎新婦 (四)

拳打に風が唸り、脚激に空気が切り裂かれる。

昼間なのに薄暗い廊下。そこで攻防を繰り返す三体の人影。

一つは白いスーツと青いワイシャツを靡かせるパンチパーマのチンピラ。

ヴァルハラ探偵のエージェント。極道コンビの若い方、赤股夏鱗。

残りの二つは人の形をしているが人であらず。純白の結婚披露宴衣装の新郎新婦。魔力で操られた傀儡の戦闘人形。

操るは、少し離れた場所から飛び交う三体の影を見守る白衣の女医、美藤傀儡。

戦う影を見守る人物が、もう一人。

美藤傀儡とは、反対側の廊下に立つ着物姿の老人。禿頭で矮躯。しかし表情は厳つい。

赤股と同じくヴァルハラのエージェント。極道コンビの老いた方。功風時司。

またの名を武天老師。

ダンッ！

赤股が強い踏み込みから全身を捻らせハイキックを放つ。鋭い蹴足が新婦の頭部を狙うが、大きなバックステップで間合いから逃げて行く。

だが、下がった新婦の代わりに新郎が横から攻め込んで来た。動きがパントマイムで見られるロボットダンスのようにカクカクとして

いる。

人形たちの攻撃は独特だった。動きも人外のものだったが、特徴的なのは手の形である。

人間のファイターのように拳を握るでもなく、獣のように爪を立てて引掻いて来るでもなかった。五指を立てて、真っ直ぐに突いてくるのである。時には刀で切り付けるように振るうこともあった。

空気を貫き新郎のニードルハンドが赤股の顔面を狙って来る。右、左、右、左、フェイントからの左。しかし一発も当たらない。赤股が巧みに攻撃を躲す。更に反撃。

「ぜえああ！」

右のショートアップパー。
ガツンと音を立てて新郎の顎を捕らえた拳が大きく振り切られた。衝撃に新郎の顔が上を向く。

だが、新郎の人形は動きを止めない。顔が上を向いたまま攻撃の手を休めない。

「ちっ。視界は持たないか」

人形の猛攻を躲しながら別の攻撃手段を考える赤股。
視線が人形の両脚に向けられた。

そして、撃つ。

連続して繰り出される赤股の下段足刀二発。右の脚弾が新郎人形の両膝を順番に打ち抜くと、両膝が正常な関節とは逆の向きに曲がってしまう。

フラフラと下がる新郎人形。両膝が有り得ない向きに曲がっているが、それでもバランスを取って立っていた。

好機。

そう思った赤股が追い討ちを加えようと一步前に出た刹那、新郎人形の両膝が正常な方角にカクリと戻った。そしてカウンターの突きを狙って来る。

赤股は追い討ちを止めて反撃の突きを回避した。

「視界もない。関節もない。やはり人形か……。何が人体を真似て作っただ。医学の欠片も見受けられないぞ」

愚痴る赤股。

二年前に戦った美藤の人形も同じような物だった。変わってないように感じられる。

ゆらりと歩く新婦人形が、新郎人形の横に並ぶように立つ。

そして同じタイミングで赤股に襲い掛かって来た。身を低く屈め超低空の高さである。

「二体同時は、ちと不味い」

赤股は一瞬悩んだ。新郎新婦のどちらから打ち落とすべきか。

結論。横振りの下段廻し蹴り。

二体とも巻き込む積もりの大きな振りの蹴りだった。一体に躲されても一体ぐらいは巻き込めるだろうと願う。

随分と適当な攻撃方法だったが、赤股の期待を無視して二体の生き人形は両方とも下段廻し蹴りを躲して左右に飛んだ。

「ちっ！」

左右に飛んだ新郎新婦が壁を蹴る。新婦が右で、新郎が左であった。二体の人形が三角飛びで襲い掛かる。

新婦の双功の貫手。新婦の飛び膝蹴り。

だが、どちらも不発。

赤股が僅かに身を引き回避した。続いてひっそりと反撃の手を伸ばす。

赤股が新郎新婦の脇の下に片手ずつを忍び込ませ、背中を触る。そして一気に二体の人形を挟み込むように叩きつけた。新郎新婦が抱き合うようにぶつかり合う。

更に。

「功風流、虎激双掌拳！」

どこかの格闘ゲームで見られるような波動を飛ばす手の形。まるで咆哮を上げる虎の口形を真似たような双掌打が、抱き合う新婚の人形を打ち飛ばす。

ゴロゴロと転がった二体の傀儡が、美藤の足元で止まった。

「やるじゃない」

「まだまだ、これからだよ」

「それは、こっちも同じよ」

美藤が怪しく笑う。

その足元から人形たちが立ち上がって来る。

二体の人形は無表情。赤股の攻撃を受けてもダメージが有るのかわいのか表情から読み取れない。

人間と戦うのとは、色々と事情が違う。実に戦い難いと思う。

傀儡の新郎新婦 (五)

新郎新婦の純白衣装が、徐々に薄汚れ始めていた。

僅かな攻防で、有効打を浴びせたのは赤股のみ。

美藤製作の傀儡人形二体は、攻めるに攻めたが不甲斐無い結果と成っている。

二対一だが、総合の戦闘力では赤股の方が上を行っていた。

美藤が不満気に言う。

「なかなかやるじゃない。二年間の修行は嘘じゃあないような。そうになると、こっちの兵力も増やしてあげないと失礼かしら」

二年前もそうだった。

赤股が一体の傀儡人形と戦っていると、新手の人形を加戦させて来た。美藤傀儡の基本的戦略は、いつもそうである。最後は数で押し来るのだ。

「勝手にしやがれ。こっちとらあゝ、それも予想済みだ。十体でも二十体でも、なんだったら百体でも増やしやがれよ。こっちは構わないぜえ！」

「あああら、それじゃあただの人海戦術みたいで芸がないじゃない。こっち見えても私は芸術家よ。もっと美しく策を練るわよ」

「言ってる」

呆れてしまう。芸術家が格闘家と戦っているのだ。滑稽と言えよう。

水泳と剣道が試合を行なうのと同じである。本来ならば、格闘技家である赤股が遅れを取ってはならないのだ。

二年前のように情けない結末は避けたいが、二年前と同じ戦術を取られても、実力で乗り越える自身はあった。

ゴンツん。

「ん？」

何か硬い物が床に落ちるような音。

ゴンツん。

まただ。また音が鳴った。

赤股が音の聴こえた場所を視線で探る。恐らく音を立てたのは新婦の生き人形だろう。

ゴンツん、ゴンツ、ゴンツ。

更に続く奇怪な音、三回。

音はウエディングドレスのスカート内から聴こえて来ている様子。赤股の視線が下を凝視する。

「なんだあ……」

新婦のスカートが、モソモソと揺れていた。スカートの中で何か動いている。

そして、白いドレスの裾が僅かに捲れ上がると、小柄な人形が這いずりながら姿を現す。

赤股の背後で見ていた功凧老が、ドレスの中から出てきた小型の人形を見て、顔を顰めながら声を発する。露骨に嫌な表情だった。

「こりやまた、更に悪趣味な……」

新婦人形のスカート内から這い出てきた物は、幼児の人形である。否。幼児と述べるよりも胎児にも近い、不気味で生々しい人形であった。

しかも一体でない。二体三体と続いて出てくるのではないか。その数、全部で五体。

「人形が人形を生みやがったぞ……」

「しかも五体ですよ……。五つ子かよ……」

「こりやあ、今流行りの出来ちゃった婚ってやつだな」

人形の出産光景を目の当たりにして、流石の極道コンビも引いていた。だが、まだまだ冗談を飛ばす余裕はあるようだ。

「どうかしら。面白いでしょう。」

ただ戦力を増加するよりも芸術的でしょう。」

不気味だが、面白い発想であるかもしれない。

しかし、これが芸術的かどうかは、疑問に思う極道コンビ。

女の考えることは怖いなあと、思う男二人であった。

現れた五体の赤ちゃん人形が、ハイハイしながら両親の前に横一列に並んだ。

本来なら微笑ましい一家の集合風景だが、人形たちが見せる光景は、とても不気味で醜怪であった。

「新手の人形を増やすのは構わんが、これは無いだろう……」

構えの中に怪訝な警戒心を露にする赤股が、新たに登場した赤ちゃん人形五体を見下ろすと、目が合う。

人形たちは視力で物を探知していない筈。視線を赤股に向けているのは心理戦を考えてのことだろう。

だが、立ち合う赤股は気に食わない。

心理的攻撃に、人形とて赤ちゃん坊を道具として使うことが気に食わない。

それ以上に気に食わないは、人形とは言え赤ちゃん坊を前線に立たせ、あまつさえ赤ちゃん坊が両親の前に立つと言うホーメーションが更に腹ただしかった。

親ならば子の前に立つのが当然の筈。そこが一番、腹が立つ。

やはり美藤傀儡たる女は、外道非道よりも屑である。

突如前線に並ぶ赤ちゃん坊たちの口が腹話術人形の如く縦に開いた。

「光ッ!？」

開いた口の中で何かが発光し始める。
攻撃の予感。

刹那。放たれる怪光線。

突然赤子人形たちの口から五本のレーザービームが赤股を狙って発射された。

「砲台かよ!!」

光よりも速く動いた赤股が、下から斜めに飛んで来た光学兵器の一斉放射を回避すると、功尻老の頭上で天井に穴が開く音と焼け付く臭いが降って来る。

天井の穴五つを見上げる極道コンビが思わず同じような意見を零す。

「何が医学だ……。どんどんと人体からかけ離れて行くじゃあねえ
くか……」

「まったくです。医学的に考えても人間は、ビームを吐きませんか
らね」

二人が、そんな事を述べていると、赤子人形の口内が再び輝き始める。

第二波発射準備完了。

「来る!!」

赤子人形たちがレーザーを発射させようと赤股の方を見ている。咄嗟に姿勢を斜め横にずらした赤股。体制もやや低く取った。

赤子人形から赤股への延長線には、功尻老の姿があった。赤子人形がレーザーを放ち赤股が回避したのならば。

そして赤ん坊たちの攻撃ターン。

ピーーーーー。

レーザービームが発射された。

赤股が五本の怪光線を避ける。

功尻老も、慌ててビームを回避した。

「夏鱗、てめー！ わざとだろう！？」

「まさか。偶然ですよ、師匠。……ちっ」

笑顔で答える赤股だったが、最後に舌打ちを入れていた。確信犯だろう。見事なまでのわざとである。

第三波の攻撃に備える赤子人形たちの口内が光り始めた。途端、前に跳ね出る赤股。一步の跳躍で、赤子人形たちの頭上を取った。上から降下して攻める積りらしい。

赤股を追って赤子人形たちが背を反らし首を限界まで曲げて上を見る。

だが、人形たちが怪光線を発射させるよりも早く、空中で回転した

赤股が、長い脚で天井を蹴り勢い良く降って来る。

「ふんッ！」

二体の赤子人形を鷲掴みにした赤股が、勢いと体重を乗せて押し潰した。赤股の掌内で人形二体が潰れて碎け散ると、床の上を人形の壊れたブーツが転がった。

赤子人形二体が破壊された。しかし、兄弟が壊されても気にも留めない表情の赤子人形三体が、自分たちの間にしゃがむ赤股を狙ってレーザービームを発射させた。

「あたらねえ〜なあ〜」

レーザー光線をスルリと躲す赤股。

怪光線が交差して火花を散らした。薄闇に覆われていた廊下全体が一瞬明るく照らされる。眩しさに功尻老が目を細めた。

光のラインをすり抜けるように立ち回る赤股が、蹴り技を三発連続して繰り出す。

「せい！ せい！ やあっ！」

脚激と共に気合の掛け声が呻ると、次々と赤子人形を破壊して行く。一体を踏み潰し、二体を蹴り飛ばした。

傀儡の新郎新婦 (六)

踏み潰された人形の部品が床に散らばる中、蹴られた一体が壁に激突して砕け散る。もう一体の蹴られた人形は天井に激突すると穴を開けて姿を隠した。天井内に見えなくなったが、開いた天井の穴から粉碎音と共に幾つかの破片が落ちて来る。恐らく完全に破壊されたのだろう。

あつと言う間に、五体の赤子人形が赤股の手により解体された。それでも赤股は止まらずに、攻撃の目標を新郎新婦人形に変更してダッシュした。一気に勝負を決する積りだろう。

「あらら、なんて素早いのかしら。レーザーを躲しちゃったわ。でも、これならどうかしら。地の利を使用させてもらうわ」

新郎新婦の後方で美藤が言うや否や二体の人形が口を縦に開く。口内の奥から赤子人形と同じような光を放ち始める。否。光力が赤子のより強い。

「またか！」

既に怪光線が発射される寸前だった。

光すら避けることができる赤股でも、怪光線の発射より早く人形に接近するのは不可能な距離。足を止めて防御に回ることを選択する。

赤股が右にも左にも回避できるように身構えると二体の人形たちが攻撃を放つ。

大きな光の球体が、新郎新婦人形の眼前で膨らんだ。一気に周囲の空気が乾燥して行くのが感じられた。そこから赤子人形より火力が

高いことが予想できた。

「ちと、やばそうだな……」

若干引きつった顔で述べた赤股が、拝むように両掌を叩いて合わせる。

そこに浴びせ放たれる人形たちの怪光線。今度は注射タイプのレーザービームでなく、放射タイプの攻撃だった。

一瞬で赤股の全身を光が包み込む。

赤股だけでない。後方で見えていた功風老ごと廊下全体を隙間無く焼いて行く。

火力の範囲の広さに逃げ場が完全に無かった。美藤の言う地の利とは、このことだろう。

放射された怪光線が、廊下の壁や床、それに天井と焼き尽くした。

吐き出された破壊光が消えると、焼け焦げた廊下に赤股と功風老が立っていた。二人とも外見が変わっている。

しかし、その皮膚は焼け焦げてはいない。焼け落ちたのは赤股の衣服のみである。

全裸となった赤股は、怪奇な風貌で立って居た。

全身鱗を纏ったトカゲ人間のようだった。赤股を、赤や緑に艶めく鱗が包んでいるのだ。

更に後方の功風老は、石造のように変わっていた。

メデューサに睨まれ石化してしまった人間である。服を着たまま石になっていた。

「あらあら、可笑しいわね。後ろの糞爺なら別だけど、これだけの火力ならば赤股の坊やぐらい丸焦げに出来た筈なんだけとなく。やつぱり坊やも腕を上げているのね」

大火力の怪光線を放った人形の後ろで美藤が溜息混じりで言った。

功風老の石化が解けて行く。

「思わず変身しちまったな。夏鱗よ、変身させる前に人形の口ぐらい塞いで見せるよ。この未熟者が」

「すみません、師匠。この際です、この姿のまま一気に片付けますよ」

全身に爬虫類の鱗を纏った赤股が、流れるような動きで手足を動かして、それでありながら一つ一つの止めは力強い不思議な演武を見せ始める。

今まで使っていた武術とは別の流派に窺える。空手とは明らかに違った。

まるで中国拳法。

流れる動きに合わせて全身の鱗の上を乾いた空気が滑って行く。

「あら、動きも変わったわ。ちょっと不味そうね……」

美藤も気付く。

赤股の変化は戦闘スタイルだけでなく、戦闘力全体がアップしていることに。

鱗姿に変身することで明らかにパワーアップしていた。

「ワシの功風流は、体術だけでなく気の操作で肉体おも変化させる気術がある。

人によってその外見や性能は変わってくるが、ワシは石化、赤股は爬虫類化って訳だ。

この変身で赤股は、肉体の変化に合わせて使う武術も変えてくるって戦法よ。

今見せている拳法は、功風流であらず。中国拳法の蛇拳。スネーキーモンキーってやつだなあ」

ポンッと掌を叩く美藤。

「あゝあゝ、ジャッキーのアレね」

知っているだけで歳がばれそうな会話であった。

「素晴らし演武だけど、いつまでも観賞してられないわ」

美藤の言葉と共に人形たちは、赤股の演舞を無視して二発目の光砲攻撃の準備に入った。口の奥が熱く輝き始める。

「何発も放たせる積りはねえよ！」

赤股が身を屈めて走る。

速い。

しかし可笑しな動きである。まるで焦げた廊下の上を蛇の如くうねうねと移動するような走り方だった。それでいて速い前進なのであ

る。

発射寸前の人形たちが俯いて、地を滑り込む赤股に狙いを定める。だが、人形たちが怪光線を発射させるよりも早く赤股が跳ね上がり人形たちの顎を両手の掌打で力手上げた。ガツと音が鳴り、人形の口が強制的に閉められる。

怪光線発射失敗。

歪に閉じた口の隙間から怪光線が漏れて天井を黄色く染め上げた。

更に続く赤股の攻撃が二体の体に連続で打ち込まれる。その拳の形は蛇を真似た貫手。突き刺すように乱打しては人形たちを躍らせた。純白の新郎新婦衣装の下で何かが碎ける鈍い音が聴こえ始めた。その破壊音のみが打撃が有効かどうかの判断となる。

衝撃に踊る人形が、それでも反撃を放つ。

二体の手刀が赤股の顔面を狙って鋭く撃ち抜かれるが、スルリと流れる動きで回避される。しゃがんだ赤股の頭上で人形たちの腕が交差した。

「よつと、ふたり仲良く飛んでみるか」

タイミング良く人形たちの手首を掴み取る赤股が、交差した腕を軸に肩の上に乗せて固定した。

一本背負いの型。

二体を同時投げる積りだろう。

「どりゃー！」

人形たちを引き寄せると腰を叩きつけ、その上に乗せてから跳ね上げる。

強引にも浮き上がる二体の生き人形が一本背負いの勢いに飛んで行く。

宙を舞い背から落ちる二体の人形。

生物では発しない音を鳴らして転がると即座に立ち上がる。

しかし、新郎人形の肩に後ろから石のようなごっつい手が乗せられた。肩が握り潰れるほど驚掴む。

「ちつとはワシとも遊んでくれよ」

功風時司、参戦。

新郎人形が、振り向きざまの逆水平チョップを振り回す。

だが、功風老は回避する訳でもなく、防御する訳でもなく、一歩前進して新郎人形に抱きつくように密着した。

それで新郎人形は上半身を捻っての逆水平チョップを振り切れなくなる。

功風老の短いが太い腕が新郎人形の脇の下から伸びて喉仏を驚掴む。

そして逆の手が背後に回り純白のベルトを掴んだ。

投げ技を披露する積りだろう。

新郎人形の体を勢い良く持ち上げて背を反らすと同時に臍にちからを込めた。

人形が老体の腹の上で跳ねる。

裏投げである。

投げを繰り出した功凧老が体を捻ると、投げられた新郎人形が後頭部から落とされる。

人間ならば、この一撃で意識を失うのは間違いないだろうと思える高さや角度の投げだった。

新郎人形が廊下の床に後頭部を強打させると、激しい衝撃が廊下に轟く。

「ちょっと師匠。それは俺の獲物ツスよ。勝手に取らないでくださいよ」

新婦人形と交戦中の赤股が、余裕の口調で言う。

「見ていたら、我慢が出来なくなつての。あんな光線を浴びたら仕方あるめい」

「ちつ。いい歳してムラムラきてんじゃあねえよ」

傀儡の新郎新婦 (七)

裏投げを受けた新郎人形が立ち上がった眼前には、既に功風老が立ち上がり、攻撃的な深い構えを築いていた。

功風老が完全に有利な間合い。

何を仕掛けても先手が取れる間合い。

何を撃つても命中間違いない間合い。

腰に岩石のような拳が添えられている。その拳が立ち上がったばかりでバランスが不十分な新郎人形の顔面に打ち込まれた。

「ふんッ！」

強烈な正拳突きに新郎人形が吹っ飛ぶ。撃たれた人形の顔面が拳型に陥没して亀裂が無数に走る。だが、粉砕までは届いていない。

「思ったよりも硬いじゃあねえかあ」

正拳を打ち抜いた功風老が、人形たちの強度に歓心していた。

新郎人形が飛んだ先では赤股と新婦人形が戦っていた。このままでは激突が免れない。

そして激突。

しかし、飛んで来た新郎人形に巻き込まれ転倒したのは新婦人形だけであった。赤股は難を逃れている。

「だあくかあくらあく、これは俺の獲物ツス！」

飛んで来た人形を避けた赤股は、そのままの勢いで壁を蹴り上に跳ねると、更に天井を蹴り勢いを加速させて、重なり倒れる人形の上へと膝から落ちて行く。

ダイビングニードロップ命中。

上になっていた新郎人形の背中から砕ける音が響くと、下になっていて新婦人形が振動に揺れる。

「どりゃ！」

赤股の追い討ち。

二体の人形に跨ったまま拳を落としていく。

右の拳が新婦人形の頭部を潰すように叩くと、続いて左の拳が新郎人形の頭部を叩く。

完璧なまでのマウントポジションである。

次々と拳の雨が降って行く。

結界に包まれた薄暗い廊下に激音が連続で響く。

その物々しい音が、決着の近さを予想させたが、以外にも新郎新婦人形は粘りを見せる。八本の手足を床に付いてブリッジの体制を取った。

揺れる人形の上で赤股が振り落とされまいと必死にバランスを保つ。

「もうちよつとで頭を破壊できると思ったのに、まだ動けるか、糞人形どもが！」

赤股の愚痴を無視してブリッジした人形たちが、その姿勢のまま力タカタと走り出す。そして壁を直角に登り始めた。

そこまで来ると赤股は、自分から人形たちの背中から飛び降りる。すると新郎新婦人形が壁を蹴り、絡み合うように回転しながら飛んで来た。

「ちよございな！」

人形たちのスクリューアタックを躲す赤股。それと同時に蛇拳の構えから貫手を繰り出す。

ヒット。

貫手は着地した新郎人形の右頭部にザクリと突き刺さった。

人間ならば明らかに致命傷。しかし、人形は止まらない。

人形たちは密着常態から体を振るい手刀と蹴りを順々に繰り出す。新郎が蹴りで新婦が手刀である。

だが、赤股も素早い動きから肘と膝を振るい人形たちの攻撃を的確に打ち落とす。

肘鉄で新婦の振るった腕を砕き、膝蹴りで新郎の脛をへし折った。

人形たちの折られた手足から木片が宙に舞う。

それでも抱き合ったまま攻防を続ける新郎新婦の生き人形。

もう既に、二体の人形はボロボロである。

続く赤股の攻撃。

足刀が新婦の右膝を砕いた。

続いて上段の前蹴りが新郎の顎を砕く。

続いて貫手が新婦の腹部に突き刺さる。

止まらない猛攻。

膝蹴り、正拳突き、肘打ち、上段廻し蹴り、踵落とし、裏拳、鉈蹴り、一本拳。面白いくらいに赤股の攻撃が、抱き合う新郎新婦人形にヒットしていく。

「どおおおおおりやややああああ！」

そして、これが最後だと言わんばかりに力んだ赤股が、全力の後ろ廻し蹴りで二体の人形を蹴り飛ばした。

赤股の脚力に吹き飛ばす人形。スローモーションのように舞う人形たちの破片。

これで勝負が付いたと思えた。

しかし、五メートル程後方に飛ばされたが人形たちは倒れない。ボロボロになった作り物の体で踏み止まる。

「ん？」

首を捻る赤股。

完全に崩れ落ちる寸前の人形たちが、体のあちらこちらから破片やらを落としながら立っている。

全身には亀裂が何本も走っていた。

その亀裂の隙間から、危険な光が漏れるように輝き始める。

「ちっ、自爆！」

人形たちが最後に何を仕掛けようとしているか瞬時に悟った赤股が、鱗姿の全身を丸めて小さな構えを作る。相手の攻撃を体で受け止めることを前提に考えた構えであった。

功尻老も全身を石に変えて同じ様な防御を築く。

刹那、人形たちが強い破壊光線を体内から膨らませて大爆発を起こす。

一瞬で薄暗い廊下が純白に染まり、破壊光が世界を包み込む。空間が無に近づいた。

静まり返る世界。

やがて世界を包んだ破壊光が薄らいで行くと、そこには無傷の赤股と功尻老しか立っていなかった。

薄暗かった廊下も日の光を取り戻している。

暗夜結界が解けたようだ。

焼けた筈の廊下も割れた窓ガラスも元通りに戻っていた。壊れたものは何もない。赤股の衣類だけがボロボロである。

「糞、逃げたか……」

赤股が言ったとおり美藤傀儡の姿は無かった。

リベンジはお預けとなる。

黒い呪い 再び（４）

東和邸三階パーティールーム。

室内には四人の人物が居た。しかし、立っているのは二人のみ。

二人の男が威嚇的に向かい合い、二人の黒服が気を失い床に倒れていた。

睨み合うは探偵見習いの五代昂輝。

片や、この館の主である東和栄光の孫息子、東和勝之。

その勝之は、黒く大きな布を被っていた。

倒れている屈強なSPたちを伸したのは、信じがたいが、この奇怪な成りをした痩せ男であった。

パーティールーム内には怪しげな空気が充満して澱んでいた。

勝之は布を被りながらもヘラヘラ笑い。昂輝の方は、緊張に表情を硬くしている。

膨らんだ軋轢が一気に弾ける。

途端、漆黒の風呂敷を頭に被った東和勝之が昂輝に向かって走り出す。とても低い姿勢で、赤い絨毯の上を滑るような走り方だった。

「少年ボーイ！ 覚悟はいいか！？」

「なんの覚悟ですか！？」

質問に質問を返す昂輝が、大きなガラス窓の前で身構えた。左手に携帯電話が握られている。

躊躇う昂輝。

腕の中に仕込まれたカマイタチの爪を出そうかと思っただが、よくよく考えて武装を取りやめるて、携帯電話をGパンのポケットに押し込む。

眼前に迫る東和勝之は、自分の呪いに犯されているが、まだ生きている。まだ掬えるかもしれない。

故郷で戦った素詛の叔父さんは、既に肉体を失い影の体と化していた。とてもじゃないが掬えるとは微塵も思わなかった。第一印象で諦めていた。

だが、目の前に迫る東和勝之は、救える可能性が高い。そのような存在に対して暗器を使用して戦う訳には行かないと考えたのである。

傷付けたり殺す訳には行かない。何せ依頼人の家族だ。

「何、ぼあ〜としてやがる!」

低い姿勢で走り込んで来た勝之が、昂輝の足元で体を捻りスピンさせて伸び上がってくる。そして振るわれる右の裏拳。

スピーディーなバックスピナックルが、斜め下から掬い上げられる軌道で昂輝の顎先を狙う。

躲せない、昂輝が心中で叫んだ瞬間、拳の甲が顎を撥ね上げる。

「!ッ」

昂輝の口の中で歯と歯がぶつかり合う音が響く。視界が衝撃によって白く染まった。

やはり勝之の身体能力は、人間の限界に近づいている。否。もしかしたら人間の限界なんて、とうに超えているかもしれない。

昂輝の白く染まった視界が元に戻るよりも早く、勝之の二発目が昂輝の腹に打ち込まれる。蹴りである。

乱雑だが速く重いトーキックだった。

「うがあっ!」

昂輝の体が後方に飛ばされ巨大なガラス窓に激突した。窓は分厚い防弾ガラスで出来ている為、この程度の衝撃では割れることがなかった。

だが、ガラス窓を背にした昂輝に勝之は、滅多打ちの拳を無茶苦茶に打ち込んで行く。

「オラ、オラ、オラ、オラー。どうした、どうした。反撃はないのかあ」

鼻、頬、胸、腹、次々と昂輝の体に勝之の拳が減り込んでいった。昂輝がやっとの思いでガードを築くが、勝之は腕の隙間からパンチを打ち込む。隙間が見つからない時は、かまわずガードの腕を叩いた。

昂輝は、ただ丸まるだけである。

「止めてください、勝之さん!」

「なんで？ どうして？」

猛打を味わいながら、やっとのことで昂輝が抵抗の言葉を発するが、勝之はとぼけた返事で無視を決め込む。
振るう拳は一向に止まらない。

無抵抗の昂輝を殴り続けながら勝之が饒舌に語る。

「止めてくれも何もないだろう手前よ。俺はアレだぞアレ。お前を苦しめる為の呪いだぞ。そんな俺がお前を殴って何が悪い。普通のことを普通にやっているだけじゃあねえよかよ。我がままほざいでないでよ、早く死ねよ、直ぐ死ねよ、さっさと死ねよ。な、な、なあゝ」

もっとも意見だが、身勝手万点の言い分である。

「それによ。この力はスゲーいいぜ。最高だぜ。昔アメリカで吸ったコカインやマリファナ以上にハイになれる。すっげーぜえー。癖になっちまう。

こんなスゲー力を頂いたんだ、お前の呪いも満更悪くないよな。そうは思わないか。

感激のあまり、手前をたつぶりどつぶりきっちり感謝のお返しをしてやるぜ。期待してくれよ。喜んでくれよ。喜びすぎて死んでくれよ。なっ、なっ、なっあゝ」

『何を勝手なことばかり！』

「なんだ……、テレパシー？」

リミピットチャンネル。

突然脳内に届いた声に勝之が驚き攻撃の手を緩めた。その隙をついて横に走り出す昂輝。その姿はいつの間にか狼男に変身していた。

「へえ、狼男に成れるんだ。おもしろいじゃないか、それいいな。俺も出来るかな。まあ、出来なくともいいや。今は満足感で溢れているからねえ」

横に走った狼の昂輝を追う勝之。舌を噛まないのが不思議なぐらいよく喋っていた。

昂輝は変身することで身体能力を何倍にも変化させ、超人の域に到達できる。

しかし、それを追う勝之も遅れを取っていない。ほぼ同じ速度で昂輝に続く。

黒い呪い 再び (5)

ふたりが広いパーティールーム内を人間とは思えない速度で走り回る。

昂輝が履いているスニーカーの爪先が破けて狼の爪が突き出していた。その爪がスパイクとなり赤い絨毯を傷つける。

勝之は必死に逃げ回る昂輝を追って、黒い残像を靡かせ駆けていた。頑張るがなかなか追いつけない。足の速さは五分五分のようだ。

パーティールーム内を逃げ惑いながら策を練る昂輝。ここはどのように行動するのが最善か悩む。

このまま走って室内を出て軒太郎や憑き姫を探して助けを求めるか。それも悪くない。何も独りで呪いの相手を行なう理由は無いのだから。

「それはダメだよ。もしも外に逃げ出したら、俺は関係ない人も襲っちゃうよ。殺しちゃうよ。バラバラにしちゃうよ。大災害だね！」

勝之の言葉に驚く昂輝。心を読まれたのかと戸惑う。

「そう、心を読んだのさ。何故そんなことが出切るかは俺にも解らないが、何故か出切るって訳よ。

流石は手前を苦しめる為に頂いた呪いの力って感じだろう。おもしろいよなあ」

心を読まれた？

室外への逃走は禁止？

ならばここで立ち向かうしかないか。

だが、普通に戦ったら勝之の体を傷付けてしまう。下手をしたなら殺してしまうかもしれない。

自分とはまったく関係ない他人が、自分のせいで傷付くのは堪えられない。辛いのだ。

「へえ、そうなんだ。善人と言うよりお人好しだな。偽善だよ偽善。俺なら平気で他人を犠牲に出来るけどよ」

また心を読まれた。

今回の呪いは、心を読む能力を備えている様子。今更そんなことで驚いてられない。

だが、やり難い。これでは作戦を幾ら立てても無駄となる。

「そうさ、無駄になるさ」

心を読まれているってことは、僕が憑き姫に行為を抱いていることもばれているってことだろうか。

「憑き姫って、あのワンプの少女か？」

その通り、可愛いよね。

「うわ、こいつロリコンだ！」

否。そんな事はない！

「てか、手前。そんな事は口に出して会話しろよ！」
なるほど！

心の中でそう叫んだ昴輝が突然立ち止まり後ろを振り向く。そして自分に迫る勝之の顔面を目掛けて掌を伸ばした。咄嗟に躲す勝之。

「そう来たか！」

勝之が昴輝の横を猛スピードで過ぎて行くと、間合いを取って振り返る。

『今のタイミングでも読まれたか……』

「危ねえな。いい作戦だよ、それ。
瞬時に思いついたことを、そく実行。心を読んだ相手に判断や対策を考える余裕を与えないか。
しかも狙いを頭に被った黒い布とはね」

『やはりその黒い布切れが本体ですか』

「それはどうかな。試して確かめてみな」

呪いに感染した東和勝之と素詛英二の類似点は幾つかある。その中でも頭に被った黒い風呂敷は特徴的だった。如何にも弱点と書いてありそうだった。

勝之が言うとおり試してみる価値が、あると思えた。

『その頭の風呂敷を奪い取れば、少しは話が進展しそうな気がしましてね』

「なるほどねえ。それで足を止めて向かい合う気に成ったってわけかい」

昂輝がひとつ頷く。

昂輝の思いついた作戦は、単純であった。

考えてから動いても全て読まれて対処されてしまう。だから考えるのを止めたのである。

頭の風呂敷を奪い取ると目標を立てて行動し、後は動いてから考えれば良い。そう作戦を立てたのである。

『単純故に有効じゃあないでしょうか？』

「そう思うなら、くだらねえ事を考えてねえで、掛かって来いよ。ほらほらよお」

勝之が、黒い風呂敷の下で薄ら笑いを浮かべて昂輝を挑発する。その挑発に乗るように昂輝が飛び掛った。

『行きます！』

真っ直ぐに跳ねた昂輝が両腕を伸ばして勝之の顔を隠す黒い風呂敷を狙う。

「シンプルだな。考えたとおりに真っ直ぐ来たか！」

勝之が横蹴りを突き出し昂輝の胸を蹴飛ばし突進を止めた。だが、諦めずに腕を伸ばし黒い風呂敷を狙う昂輝。

「おっと、根性あるねえ」

横にステップした勝之が昂輝の手を躲す。そして昂輝の脇の下を潜るよう大振りのフックを超速度で忍び込ませる。

『はあぐうっ！』

大振りのフックが胸を叩くと、続いて脇腹にブローが打ち込まれた。痛みに昂輝がバランスを崩して前に躓く。

だが、倒れずに踏ん張り、体の向きを勝之に向けた。更に床を強く蹴る。

アマレス風のタックル。

勝之の腰を狙ってダッシュした。

「はいはい、読まれてますよお」

頭から突っ込んで来た昂輝の後頭部を打ち下ろしのフックで殴りつける勝之。続いてコンビネーションで繰り出すアッパーカット。

下を向いていた昂輝の顔面にアッパーが減り込むと、背筋を伸ばすように体躯が浮き上がった。

悔しい。全部読まれている。

『ちくしょっ……』

黒い呪い 再び (6)

ならばと、昂輝が体を左右に振って動きにフェイントを加え始めた。しかし、それも無駄になる。

昂輝が幻惑な動きから一步前に出た瞬間に、勝之の蹴りが昂輝の腹に命中した。

踏み出す瞬間まで読まれていた。

「何をやっても無駄だよ。考える前に動こうと心掛けても、動く前に手前は必ず心で囁く。嘘がつけない間抜けめ。不器用すぎるんだよ」

『それでも、諦めない!』

言葉通り気合を込めて前に出る昂輝。

策は無駄。小細工も無駄。ならば真っ直ぐ攻める。そう考えた昂輝が、再び両手を伸ばして飛び掛る。

「正直すぎるんだよ」

言いながら横に体を反らして躲す勝之。回避と同時に膝を立てて昂輝の腹部を蹴り上げた。

二リフトと昂輝の体がくの字に曲がった。

「ほほ、喰らいながらも掴みに来るか」

勝之が昂輝の次の行動を先に述べた。少し遅れて昂輝が勝之の腰に抱きついた。

止められる。しかたなくその場から室内に向って怒鳴り始めた。

「なんじゃあ、この有様は!?!」

「おやおや、じいちゃん。あんまり怒鳴ると血管が切れてポツクリバツタリ行つちまうぜ。寧ろ行つてしまえば遺産が貰えるから俺としてはラッキーでハッピーなんだけどな」

「その声……。貴様、勝之か!?!」

黒い風呂敷を被り狼男を小脇で締め上げる男に向って老人が怒鳴つた。

東和栄光は、パーティールームで勝之が暴れていると警備室から連絡を貰い飛んできたのである。

しかし、駆けつけてみれば黒い風呂敷の怪人と狼男が戦っているではないか。あまりの非現実的な光景に現状が把握できずに混乱してしまう。

「勝之、何だ、そのなりは……」

間違いないだろう。認めたくないが、あの怪人のひとは孫息子だ。黒い風呂敷を被った勝之の顔が祖父の方を向く。

「いいだろう、この力、パワー。スゲー気分がいいぜ、超人になるつてのわよ。悪くない。悪くないぜ。呪いってのも考え方次第だな」

「呪い……だと?」

首を傾げた後に室内を見回す東和栄光。床に転がる二人のSPを見て眉間に深い皺を寄せてから孫に視線を戻す。

「お前がやったのか……」

「そうだぜ、スゲーだろ。感激するだろ。」

ひとりじゃ何も出来ないと思っていた馬鹿で愚かな孫息子がボディーガードをコテンパに申しちまったんだぜ。スゲーだろ。喜ばしいだろ。俺様の成長を喜んでくれよ。もっと、もっと喜んでくれよ。なっ、なっ、なっあゝ」

「何を馬鹿なことを、気でも狂ろうたか……」

勝之を睨む東和栄光。可愛い孫を見る目でない。そこに軒太郎が割ってはいる。

「皆さん、お退きになってください」

そう言いながら黒服を掻き分け前に出てくる。隣には憑き姫が付いていた。

二人とも表情が真剣である。憑き姫に関しては、既に赤い本を片手に開いていた。

「おやおや、なんだか怖いのが二人も現れたか……。ちょっとばかり追いかけてこが長すぎたかな」

そう言うと勝之は、頭部を締め上げていた昂輝を力任せに投げ飛ばす。

投げられた昂輝がパーティールームの入り口横の壁に激突して床に

落ちた。

リミピットチャンネルで呻きながら立ち上がる。

昂輝の頭部がリアルな狼の為、驚いて見入っているSPが何人か居た。

『軒太郎さん、彼が呪いに飲み込まれました!』

「ああ、見れば分るよ昂輝君。此処は我々に任せて君は黙ってなさい」

自信に満ちた表情で軒太郎が室内に進む。

憑き姫が茨巫女を召還して巫女服姿に変身する。軒太郎も黒いタールのような影を足元から纏い黒衣の戦闘衣装に変わった。

二人の変身を目の当たりにして外野が一層ざわめく。流石の東和栄光も呆気に取られていた。

「おいおい、ちょっとキツそうだな。分るよ、俺にも分るよ、あんならの強さがさあ〜。」

逃げ腰の勝之が、両掌をヒラヒラさせて後退る。

「まあいいさ、チャンスは幾らでもある。ここは一旦退却しますかあ〜。無理は禁物つてのが俺の流儀だ」

そう言うつと勝之が床に沈んで行く。

もちろん床には穴すらない。まるで影の中に落ちて行くようにも見ええた。

「床に沈んだ……」

呆然とした口調で誰かが言った。皆が我が目を疑う。

「誰でもいい、数人でチームを組んで下の階を見に行つて来い！」

「はい！」

SPの中でも階級が上そうに見える男が指示を飛ばすと四人のSPが階段を目指して走り出す。

「無駄だろうね」

変身を解いて、いつものスーツ姿に戻った軒太郎が言った。
憑き姫と昂輝も変身を解いている。

「何故だ、探偵。何が無駄なのだ……」

東和栄光の問いかけに答える軒太郎。その説明によると、勝之は床をすり抜けたのではなく、別の時空に逃げたとの事らしい。
恐らく屋敷内からは出ていないが、屋敷内何処を探しても勝之を見つけ出すことは不可能だろうとも憑き姫が説明する。

「どうして勝之が、あのようなことが出来る。何故だ、説明せい！」

怒鳴るように問う東和栄光。

もう、自分の持つ知識では答えを想像すら出来ない様子であった。
その問いに軒太郎が答える。

「詳しい原因は分かりませんが、恐らくは外のアレに關係しているの
でしょう」

そう述べてから外の城壁を指差す。

「ズルイ！」

思わずツッコミを飛ばす昂輝。

軒太郎は、昂輝の呪いに巻き込まれて変貌してしまった勝之の原因を、すべて外の怪異現象に擦り付けようとしていった。

だが、軒太郎が指差す外の景色に視線を向けた東和栄光の表情が、更に青くなっていった。

咳くように言う。

「なんじゃあ、あれは……」

東和栄光の表情を見て軒太郎も自分が指差した方向に視線を向けた。昂輝と憑き姫も外を見る。

「あらら、随分成長したね」

「そうですね、憑き姫……」

怪異が見える全員が啞然とする。

外の城壁の向こうに、更なる建物が浮かび上がり始めていた。

それは城である。

城と言ってもメルヘンチックな物でなく、もっと殺伐とした作りであった。

まさに城塞。

戦争による防衛を優先させた外見の城だった。

「まだ、完成には程遠いわ。中身まで完成してないと思うわよ」

一人冷静に述べる憑き姫。

「あれは扉でもなく、城壁でもなく、城塞だったのか……」

東和栄光が、発する声は小さく震えていた。

事件が次のステージにスポットライトを当て始める。

城

東和邸の庭に現れた巨大門は、探偵が登場してから二日目早朝をもつて城壁と変貌した。

巨大門を中心に左右に伸びる百メートル程の石壁。その城壁が再び進化成長するかの如く増築される。更に増えた三枚の壁とで正方形を造りだし庭の中心を囲み上げたのが昼前。

しかし異変は止まらない。

正方形に囲まれた中央に、新たな怪異、城が出現したのである。

さほど大きな城でないが、間違いなく城塞の類である。

敵勢力から戦略を受けた際に防衛することを目的とされた造りなのである。それ即ち城塞。

怪異は城塞へとグレードアップして行ったのだ。

城塞は臆気な半透明だが、十分な威圧感を備えていた。それは戦争での有効性が臭わせる威嚇。城の持つ存在感は、殺伐としていた。

城の城壁には新たな門が追加されていた。最初から見えていたのと同じサイズの門が、城壁の裏に構えられている。

同じデザインの門である。

初期は二つ目の門が、裏門とは思えなかった。どちらとも正門に窺えた。双子門だ。

城のどちらが正面かも判らない。その為、怪異が見える者たちは、東和邸と向かい合っている方を正面と思い込んだ。

しかしながら、どちらとも正面といった訳はない筈だ。

何事にも表と裏がある。陰と陽は常に背中合わせな存在だ。似ていても別物である。

軒太郎は気になった。単身で調査に乗り出す。

脚を使い、目を凝らして調べて見れば、東和邸に向いている巨大門の方が裏口だと判明した。

反対側門の頭上の岩には、馬と剣が象られた紋章が窺えたからである。

軒太郎が怪異の城を調査して解ったことは、この程度しかない。

否。調査とも呼べないレベルの話であった。

触れないのだ。入れないのだ。調べられないのだ。

この程度しか判らなかつた。

ヴァルハラ探偵を後々継ぐ筈の二代目として、情けなかつた。

若干凹む。

面白そうなことを発見できなかったことが悔やまれる。こんなことではいけない。楽しくない。

まだ城は、謎のベールに包まれたままである。

やがて日が沈み始めた。

城の周りを何週歩いただろうか。今日の調査はここまでだ。
軒太郎は、皆が待つ東和邸に歩みを向ける。

愉快的なストーリーを期待しながら。

まとめ（巻）

日が落ち、夜が来る。

時刻は二十一時を少し過ぎた頃。

ヴァルハラ探偵事務所のメンバーは、東和邸に留まって居た。

呪いに感染した東和勝之が他の時空に逃亡してから暫くの間、ヴァルハラ探偵の面々や黒服のSP達の手によって、屋敷中をくまなく搜索したが、やはり勝之の姿は見つかることはなかった。

幸いにも東和家の人々は、勝之の呪いが外の怪異な城塞のせいだと勘違いしているらしく、怒りの矛先が昂輝や探偵事務所に向くことはなかった。

そして門から城壁へ、城壁から城塞へと成長するように変貌した庭先の怪異は、憑き姫の見立てから明日の昼頃に、全てを実体化させると予想された。

その危機的状况に怯えた東和家から申し出がありヴァルハラメンバーは、屋敷内に待機して明日に備えることになった。

与えられた部屋は三部屋。

男女に分かれての仮眠室を一部屋ずつ与えられる他に、もう一部屋を作戦会議室として開放された。

会議室は屋敷の四階。窓からは庭の怪異建造物が見えていた。

元々が客間なのだろう。来客に対して見栄を張る為の高価なアンティーク家具や貴重な美術品の数々が、さぞ当たり前前の日常風景の如く並んでいた。

昂輝にとって息苦しい程に豪華な部屋である。

唯一この室内で空気を間違えている物と言えば、会議用のアイテムとして運び込まれた大きなホワイトボードだけであった。

そして、食事を終えたヴァルハラ探偵の面々が、作戦会議室の円卓を囲む。

軒太郎に憑き姫。イゴールにお砂姉さん。極道コンビの功凧老に赤股夏鱗。それに狼少年の五代昂輝。更にヴァルハラ探偵事務所の所長である三外眼一郎の姿もあった。

ヴァルハラ探偵事務所のエージェントが全員集合していた。

「では、本日の収穫を皆で整理でもしようか」

言い出したのは探偵事務所の所長、三外眼一郎。

円卓の椅子に座る眼一郎のファッションは、黒いスーツに黒いハット、それに黒いアイパッチを付けている。これが眼一郎のお決まりファッションである。

その眼一郎が、自分の後ろに在るホワイトボードを親指で指差しながら話を進めた。

「え、まずは、今日一日で解った事と、進展があつた内容だが…」

ホワイトボードの中央には、黒いペンで書かれた城塞という文字が、赤丸で囲まれていた。

その下に並ぶ人物名。

東和竜栄。美藤傀儡。鬼頭順平。少し離れて東和勝之の名前が書いてある。

「さてさて、今回怪しいとして名前が上がった連中だ。

もう皆が知っていると思うが、双葉総合病院で今日、極道コンビのふたりが美藤傀儡と遭遇した。

残念ながら取り逃がしてしまっただけ。まあ、それは仕方がない。それに、たまたま遭遇しただけで、あの女が今回の事件に関係しているかどうかは不明のままだ」

昂輝が手を上げる。

「何かね、昂輝君？」

「美藤傀儡とは、何者なんですか？」

「君は知らなくて当然だったね。

美藤傀儡と言う女はね、人形使いの妖術士だ。自分で作り上げたりアルな人形に、仮初の魂を与えて操り悪さをする。

表社会に顔を出すことは少ないが、操り人形を使って殺人依頼などを受けて生業にしている。まあ、殺し屋に近いね。そんな奴だ。

うちとは古くからイザコザが堪えなくてね。何度か、彼女の暗殺相手からディフェンスの依頼を受けたことがあってね。

一度や二度じゃあないんだけど、なかなか本人との決着が付かない。まあ腐れ縁だ」

「なるほど……」

「まあ、その美藤傀儡が、二年ぶりぐらいに姿を現したのだよ。しかもだ。東和竜栄の病室の前で」

軒太郎が、何故に美藤は医者に化けていたのかと問うと、眼一郎が推測で答えた。

「おそらくは東和竜栄に接触するためだろう。それに鬼頭が同じ病院に入院していたよ。交通事故らしい」

その名を聞いて昂輝が、ホワイトボードに書かれて鬼頭順平の名前を凝視した。

昨晚のヤクザ襲撃事件。その際に仕掛けてきたヤクザたちの親分であることは、昂輝も聞かされていた。

功風老が洪声で、偶然にしては出来すぎだと述べていた。探偵見習いの昂輝ですらそう思う。

「同じ病院に、三人も怪しい人物が固まって居るんだ。臭くない訳がないわな」

言うは赤股夏鱗。

彼は病院で美藤傀儡と一戦を交えていた。人形の自爆攻撃で衣類一着を失ったが怪我は一つもない。

椅子の脇に置いてあった黒いアタッシユケースから書類と写真を取り出した眼一郎が円卓の上に投げる。

写真は、三十後半の女性であった。見た事が無い女性である。

「この女性は？」

写真を見ながら赤股が問うと、軒太郎が書類の方を手にしながら疑問に答えた。

「北枕夢子？」

書類にはそう書かれていた。履歴書らしい。履歴書には同じ顔の女性の写真が貼られていた。

「美藤傀儡があの病院で語っていた偽名だ」

「顔が別人じゃねえか」

写真を覗き込む功凧老が言った。確かに美藤傀儡とは別人の顔であった。似てもいない。

「まったくの別人だが、偽名を語る美藤傀儡と接触のあった病院関係者全員には、その写真の顔に見えていたらしい」

軒太郎が履歴書をテーブルに戻すと、説明している眼一郎に視線を変えた。

眼一郎は、ひとり説明を続ける。

「念の為に、その北枕夢子について調べてみたら、履歴書に書かれた住まいの住所は存在していたよ。北枕夢子の名前で借りられていたが、一ヶ月ぐらい前から彼女が帰ってきた様子はなかったよ。ポストに溜まった郵便物や隣の部屋の住人の証言での推測だがね」

軒太郎が訊く。

「その北枕夢子たる人物は、実在の人物なのですか？」

「ああ、そうだよ。列記とした女医だ。

もともと一ヶ月前までは山田夢子と言う名前だけどね。苗字は一ヶ月前に役所で解明手続きがされている。おそらくその頃には美藤傀儡と入れ替わっていたと思われるね」

本物の北枕夢子はどうなったかと昂輝が思ったところで、心を読んだように眼一郎が語り始める。

「警視庁の知り合いに協力してもらって身元不明の遺体の中に、この写真の女性がいないか調べてもらったんだよ」

そう言いながらテーブル上の写真を指差す。

「いたんですね、お父さん」

「ああ、いたよ。一ヶ月前に飛び降り自殺した身元女性の顔と似ているらしい」

「本当に自殺なのやら……」

判りきったような疑問を述べながら椅子に仰け反り上を向く赤股。いつもならヘラヘラしている表情に影が掛かっていた。大きなサングラスに隠れている双眸が、寂しさに細くなる。

誰に向けた訳でないが疑問を問いかける昂輝。

「今回の事件。巨大門が結果的にお城にまで変化しただけ、結局は誰の仕業なのでしょうか？」

「それに目的」

続いて憑き姫が囁いた。

そう、目的も不明のままだ。

眼一郎以外の全員が各々悩むポーズを見せる。判らないことがまだ

まだ多い。

「ところでイゴールちゃん」

「はい、なんですか、所長さん」

突然話しかけられたイゴールが可愛らしい声で返事をする。

「東和竜栄の研究室の方は、どうでしたか。何でもいいので報告を願います」

「あゝ、ホムンクルスのことですね。あれは随分と不安定な出来でしたが、それでも現代のクローン技術からしてみれば、なかなかの力作品かと思われませうよ」

まとめ (式)

「研究の出来が良いと？」

意外だと言いたげな顔である。

「はい、科学的にもなかなかだと思いますよ。でも神に近づくにはまだまだですね。そうなるかと駄作ですね」

「もうちょっと判り易く説明してくれないか、イゴールちゃん」

太い人差し指を顎に当ててから考えるイゴール。言葉を選んでいる様子だ。そしてある程度纏まったのか話始める。

「データの言っちゃえばいいのかな」

「ああ、その方がいいかもな」

「じゃあ、まず。竜栄ちゃんは研究日誌を残していなかったのが正確なことは断片的メモでしか判らないのですが、あのホムンクルスを育て始めたのは約一年前だと思います。試験管の中で人間の雄蕊と雌蕊をちよめちよめするところからスタートさせて、一年かけてあそこまで育てた模様ですね」。

育成用のカプセル内にユニケルも顔負けの精力剤が供給されていて、適度の紫外線も与えていたようですね。理屈的には生物を育てるのに必要なものが用意されていた様子ですが、本当にあの施設だけでホムンクルスが製造できるかどうかと言いますと、イゴールちゃん的には無理だと思いますね。でも、かなり資金はつき込まれています

長々と語ったが数字らしい数字は無かった。データらしい説明ではない。

「無理なのか。でも、事実成功しているじゃねえか？」

赤股が不思議そうな顔で訊き直す。

「はい。おそらく育成開始段階で、何か秘密の作業を行い、ホームクルスに何らかの手を加えている可能性が高いのですよ。それが何かはイゴールちゃんにも判んないですが、それで安定を獲得したと思われまーす」

謎のウイंकをするイゴール。

「研究日誌とかは、なかったのかい？」

「はい、無かったです」

明るく元気良く答えたイゴールに続いて、同伴していたお砂が話し始める。

「どうやら東和竜栄は、意識不明で入院する寸前に、研究日誌をはじめとする研究データの殆どを処分してしまった様子で。空の棚が幾つかありましたわ。あとで細川氏に訊いてみたら、その棚には、色々とファイルなどが詰まっていたそうです。それと廊下に置いてあったダンボールの山も無くなっていましたそうです」

「何者かが持ち去ったか？」

昂輝がそう言うと、それは無いだろうと軒太郎が否定する。

東和家のセキユリテイからして誰にも見られず大量の資料を持ち出すのは難しいだろう。

そのような話は聞き込みで得ていない。

「研究室の裏手に、小さな焼却炉がありましたから、おそらくそこで処分したのでしょう」

お砂が焼却炉の存在を報告する。

「じゃあそこで、竜栄自らが資料を処分したのか……。でも、何でだよ？」

赤股の言うとおりだ。昂輝も同じ疑問を抱く。

東和竜栄が何故に研究資料を消去する理由があるのだろうか。

「東和竜栄のエスカレーター転落が事故だとすると、タイミングが良すぎるね。だとするならば答えは単純だ」

「単純ですか、所長さん」

「ああ、単純だとも昂輝君。東和竜栄は、自分が当分帰ってこれないことを予知して、研究データを誰にも見せないようにしたか」

「見せたくなかったか？」

「もう、研究データが要らなくなったかのどちらかのだろうね。もしかしたら両方かも知れないよ」

「なるほど……。それだとやはり、事故もわざと」

「まあ、推測の域は出ないね。このまま話し合っても無駄だ。下手な思い込みを我々内で抱いてしまう。ここらで推測レベルの話は止めておこうか」

「はい……」

確かに下手な思い込みを昂輝は抱く寸前だった。

思い込みは答えを誤らせる元になる。ミスリードを誘う推理小説のトラップと同じだ。

ピースのそろってないパズルを組み立てて、イラストの全貌が大体解ってきたとしても、最後のピースを嵌められなければ、真の姿は永遠に判らない。

推測で、完成した姿を想像するしかできない。
完成したイラストは、予想とまったく違うイラストになる可能性もある。最後のピースに全ての答えが書かれている可能性だってあるのだ。

例えば 。

ネコのイラストが描かれたパズルの最後のピースに、このイラストのネコはネコじゃないと文章で書いてあれば、そのパズルのイラストは、最後の最後にネコのイラストでなくなってしまう。

「イゴールちゃん。君の見立てでいいからホムンクルスの事を教えてくれないか」

「はい、いいですよ」

元気に答えたイゴールが、この後長々とホムンクルスについて説明してくれた。

まずホムンクルスは、ピースメーカーなどの人工腎臓を移植することで、本来持つてなかった人間の機能を補っているらしい。

カプセル内の液体を栄養源に成長を続けているらしいが、短期間で成長させたが為に、寿命も短いと思われること。

おそらく殆どのホムンクルスが成長期は終わっているらしく、あとは老い始めるのではないかとイゴールは予想していた。しかも一年以内には全て老死するだろうとのことだ。

あと、カプセル内から出て直ぐ歩けるように、カプセル内で育てられている頃から体に電流を流して筋肉の収縮運動をさせていたらしく、カプセルから出てモノロノ口程度ならば歩ける筋力が備わっているそうだ。

深夜の通販番組で見られる低周波治療器と原理は同じらしい。

カプセル内から出て、カプセル内の液体を啜っている程度で、一週間は生きられるだけの肉体を有しているらしいが、脳の方が、啜ると言う事すら考え付くか怪しい程度とのこと。もしも啜るが出来ても、会話が出る程の脳味噌は確実にないとの事だ。動物以下らしい。

軒太郎と憑き姫が研究室に出向いた際に、一匹のホムンクルスがカプセル内から出て歩いていたが、おそらくは事故だと思われる。しかも、二番のカプセルに入っていたと思われるホムンクルスは、二十一体のホムンクルスたちの中でも出来の良いホムンクルスらしいのだ。

イゴール曰く、番号が若くなれば成る程に完成度が高いらしい。

そしてプレハブ小屋で育てられていた大型ホムンクルスのゴリアテもまた、完成度が高いらしい。

イゴールは、あのゴリアテが動き回るのが見たいらしく興奮しながら話していた。

笑いながら話すイゴールを横目に赤股が質問を投げかける。

「でもよ、ホムンクルスとしての出来が良くてもよ、所詮は生ゴミだろ。知力も無い、体力も無い、顔がいい訳でもないだろう。おまけに腎臓まで作り物だ。移植にも使えないだろう」

「確かにそうですね。わざわざ意識不明になってまで研究の成果を隠した東和竜栄の意図が判りませんね……」

そう述べた軒太郎も悩んでいる様子であった。

東和竜栄と美藤傀儡が、何かしら関係しているとしても、
どうなる。

竜栄の造ったホムンクルスを美藤が人形として操るのか。そんなことをしても逆に弱くなってしまふ。それは軒太郎だけでなく、昂輝以外のメンバーには容易く予想できた。

あの二人がつるんでもお互いに利益が無いように思えた。

それに鬼頭順平。ヤクザ者が絡んでくる理由は尚更無い。

あるとしたら美藤同様に鬼頭にも、ヴァルハラ探偵と揉める理由があるぐらいだ。

眼一郎との軋轢である。

まとめ（参）

皆が悩むなか、眼一郎が話を変える。

「変貌した城を見てから調べたんだが、ちょっと皆に見てもらいたい物があるんだよ」

そう言いながらアタツシユケースから一冊の本を取り出し円卓の中央に置く。

小説のようだ。

然程古い本でもない。日本語でタイトルが書いてある。表紙絵はない。

「悪夢城の公爵……」

昂輝がタイトルを読み上げた。

「これまたヤバイ物を出してきたな」

功風老の台詞に首を傾げる昂輝。悪夢城 『城』というキーワードが一致しているが、あの怪異の城が、この悪夢城だというのが。

「流石は功風老、知っていますか」

「ああよ。ワシでも知っているんだ、お砂や二代目も知っているんだろっ」

「はい」

お砂が笑顔で答えた。知っているらしい。

「有名な魔導書ですからね」

功凧老が驚いたのは、城というキーワードに引っかかったからで無い様子だ。この本が魔導書だから。

「「魔導書？」」

昂輝と赤股がハモる。

すると眼一郎が説明を始めた。

「この本の初版が発売されたのは二十二前。再販はされていない。刷られた数は一万部。正直売れなかったらしい。」

作者の名前は、小田良子。残念ながら五年前に四十五歳で亡くなられている。体が弱く急性腎炎だったらしい」

眼一郎の話聞いていても、なんだか普通に感じられた。作者が短命で不幸だと思うが、それだけでこの本が魔導書と呼ばれる理由にはならない筈だと思う。

眼一郎の説明が続く。

「本の内容はファンタジー小説。ヒロインの少女が夜寝るたびに、知らない世界に飛ばされて、気付くと城の前に立っているとところから始まるんだ。少女は警戒しながらも城に入っていく。」

その城の名前が悪夢城。主の名前がナイトメア公爵。金髪の色男だ」

「露骨に如何わしい奴だな」

赤股が茶化すが眼一郎は構わず話を続けた。

「それからなんやかんやあって、結局毎晩夢の世界で悪夢城の主、ナイトメア公爵と恋愛話を続けると云った内容なのだが、中盤からナイトメア公爵の言動が可笑しくなり始めて、やっとヒロインの少女も何か可笑しいと気が付くのだよ。

ナイトメア公爵の目的は、少女の魂を生きたまま抜き取り幽閉することだった。ナイトメア公爵は、以前から同じような手口で数多くの少女をたぶらかしては、魂を幽閉してコレクションとしていたのだよ」

良くある良くあると、また赤股が茶化すが、イゴールはワクワクと瞳を輝かせながら話を聞いていた。

魂といえば憑き姫と連想した昂輝が隣に座る少女をチラ見した。

「私は殺してからよ」

視線に気付いた憑き姫がナイトメア公爵との違いを冷たく呟いた。ちよつと引く昂輝。

「ヒロインの少女は、ひよんなことからナイトメア公爵の目的に付き城を逃げ出し現実世界に戻るのだが、夜が来るたび、眠るたびにヒロインの少女は悪夢城の前に立ち、城内に招かれる。

だが、ヒロインの少女は、この悪夢から助かる方法を知る。以前、魂を抜かれる前に事故で死んでしまった少女の幽霊と出会い、助かる方法を教えて貰うのだよ。

正門から逃げずに裏門から逃げれば、もう二度と夢の世界には戻っ

てこないってね。

ナイトメア公爵が必死に妨害したが、結局ヒロインの少女は、裏門からの脱出に成功する。それでハッピーエンドだ」

眼一郎がストーリーのダイジェストを話し終わると、昂輝が当然の疑問を投げかけた。

「話の内容は解りましたが、それで何故その本が魔導書なんですか。普通の小説じゃないですか」

「それがね、この小説読んだ少女が次々と意識不明に追い込まれるのだよ。この本を読んだ晩にね」

「よくある話ですな」

昂輝の言うとおり、マンネリな話である。

「結局、事件が解決するまでに寝たまま意識不明になった少女の数は百人近くいたといわれているが、細かいことは不明だ」

「解決したって。誰が解決したのですか？」

「それも不明だよ。ある日突然、寝たまま意識不明になった少女たちが一斉に目覚めたらしい。真相はすべてが闇の中……夢の中かな」

「なるほど、それで魔導書」

「この事件は作者である小田良子氏の耳にも当然ながら入ったらしく、小田氏はこの事件をきっかけにペンを持つことを辞めたらしい。本の再販すら断り続けたらしく、以後この本が新しく刷られること

はなかつたらしいよ」

「じゃあ、この本にはもう魔力も何も無いのですね」

「ああ、この本にね」

意味深な言い方であった。

「この本が、いまだに魔導書と呼ばれる理由が、もう一つあるのだよ」

「もう一つですか……」

「この本の未読書品には、同じ能力が残っていると云われていてね。未読書品を少女が読むと、悪夢城に引き寄せられると云われているのだよ。そのせいで、いまだにレア本さ。読書済みの本ですら一冊き千萬はするのだよ」

「これが、き千萬円ですか！」

円卓の上に置かれた本を見ながら昂輝が声を裏返す。

「これは、偽物だよ。コピー品。三千円で買ったのさ」

「ええ……」

昂輝が眼一郎の顔を見ながら嫌な声を上げる。心の中で、せこいと呟く。

「まあ偽物だが、忠実にコピーされているよ。」

しおりが挟まっ

ているページを見てくれ」

眼一郎に言われて軒太郎が手を伸ばすと、本をテーブルに置いたままページを捲った。皆が覗き込む。

開かれた本の左ページは、一ページ分全部が挿絵となっていた。

「この城は……」

「小田良子氏は、絵の才能もあつたらしくてね。挿絵はすべて彼女が書いたものだ」

なかなか上手な城の挿絵である。しかも東和邸の庭に現れた城に良く似ていた。瓜二つでないが、良く似ている。

「この悪夢城の公爵って話は、作者である小田氏の幼少時代に見た夢がモデルとされているらしいのだよ。その為、悪夢城は存在してナイトメア公爵も夢の世界に実在しているのではと言い伝えられてね」

「それが、今回現実世界に現れたと……。所長さんは、そう考えているのですか？」

「ああ、まだ推測のレベルですがね」

「しかし父さん。父さんが、こうして我々に話すということは、何か確信に近づく情報を得たということですよ。ただ挿絵が似ているだけじゃあないですよね」

軒太郎の口調からして、父の眼一郎は、そのような性格なのだろう。

「何を掴んだのですか、お父さん？」

もったいぶるように話し出す眼一郎。黒い帽子をわざとらしく深く被り直す。

「小田良子氏は、小説家を引退した後にアメリカ人男性と結婚して娘を一人儲ける。しかしながら数年で離婚。娘は小田良子氏に引き取られ日本で育てられたんだ。彼女が病気で亡くなったあとは祖父夫婦に引き取られる。」

その娘の名前は、ベロニカ小田。十七歳の現役高校生だ」

「ベロニカ小田。名前は父に合わせ欧米風だったんですね。そのベロニカさんが、何か関係あるのですか、この事件に」

「彼女も現在意識不明になっている」

眼一郎の言葉に全員が、まさかといった顔をする。そして、そのまさかであった。

「東和竜栄や鬼頭が入院している病院に、彼女も入院しているのだよ。一ヶ月前からね」

偶然にしては重なりすぎだ。ここまで重なると、もう偶然では片付けられない。必然というやつだ。

「これでまた一人、怪しい人物が増えた訳だ」

まとめ（四）

眼一郎は、椅子から立ち上がると背後にあったホワイトボードにベロニカ小田と名前を書き上げる。

四人目の注意人物。

ベロニカ小田。

それは十七歳の高校生。 昂輝と変わらない年齢だ。

「まあ今回の事件に、この四名が関わっているかどうかは不明だが、もしも美藤と鬼頭の二人が絡んでいたのならば、あの二人だけは我々の敵になるだろう。事件に関係あるなし問わずに」

出遭ったら即座対決。 そのような軋轢をぶつけ合う関係なのだろう。 それでありながら昂輝以外が余裕の表情ですまし顔を作った。 来るなら来いとも思っているのだろう。 負ける気もないのだろう。

「すべてが判るのは、明日って訳ですね、父さん」

「ああ、そうだな」

「でも」

ここまであまり声すら出さなかった憑き姫が喋りだす。 涼しげな美声に全員が少女を見た。 彼女の言葉はいつも視線を集める。 昂輝も彼女が何を言い出すのか注目する。

「あの城が完成したらどうするの？」

どうするのだろう。昂輝も思った。

戦うのだろうか？

戦う？

何と？

美藤傀儡とか？

鬼頭順平とか？

東和竜栄とか？

彼のホムンクルスとか？

悪夢城とか？

ナイトメア公爵とか？

何とだ？

昂輝が頭の中で疑問を掻き混ぜていると眼一郎が屈託のない笑顔で断言する。

あの城が完成したのならば。この疑問の後に何が繋がるのだろうか。

「もちろん調査するのだよ！」

「ちよ、調査……」

呆気にとられる昂輝。思わず魯鈍な声を発してしまい、表情から力が剥げ落ちる。

質問した憑き姫よりも昂輝の方が、眼一郎の回答にはっきりとした反応を見せた。

昂輝の間抜け面に対して自信に溢れる独眼をランランとさせながら眼一郎が述べる。

「当然じゃないか、我々は探偵だ。事件を調査して真相を明確にする。それが探偵の仕事じゃないか、昂輝君。それ以外に探偵が何をするのだ？」

「そうだ、我々は探偵である。」

格闘技の達人が居たり、妖術士が居たり、呪われていたりしても探偵なのだ。乙女声を出すモンスターが居ても、探偵なのだ。

このメンバーに囲まれていると、ちよくちよく現実を忘れてしまう。自分が勤め始めた職業を忘れてしまう。

「我々の受けた依頼は、東和家の人々を守る事と、怪異の正体を突き止める事。そして、その正体次第では、まだまだ稼げる」

「ああ、なるほど……」

昂輝も解ってきた。この段階まで来てやっと、敵を倒すという依頼を受けることで、更にぼったくる積りなのだ。

戦うのはそれからということなのだろう。

稼ぎ方が狡賢い。

「イゴールちゃん」

その狡賢い親玉が怪物の名をダンディーボイスで呼ぶと、怪物がお花でも咲き誇りそんな声で返事をする。

「なんででしょうか、所長さん？」

「明日は君にも暴れてもらう機会が来るかも知れない。久しぶりにアレの準備を頼むよ」

「本当ですかー！」

イゴールの強面が眩しく輝いた。

アレとは何のことだろう。

昂輝にも興味深く好奇心を煽られる話の内容だったが、アレとはきつとろくでもない物だろうと容易く予想できた。

「わーい、わーい」

椅子から立ち上がったイゴールが子供のようには跳ね回った。全力で喜んでいるのが判る。

傷だらけのボディが可愛らしいポーズからジャンプするたびに、震度が室内のアンティーク家具を激しく揺らしていた。椅子から伝わる振動が、着席中のお尻を叩いて止まない。

「アレって何？」

膨らむ好奇心に我慢出来なくなった昂輝が隣に座る憑き姫に訊いた。

すると憑き姫は歡喜に跳ね回るイゴールを眺めながらめんどくさそうに答えた。

「せむし男よ」

「せむし男？」

想像する昂輝。頭の中に空想から浮き上がった奇怪な人物の全体図が画かれる。

思いついたのはフランケンシュタイン博士の助手。猫背で背中が膨らんだ奇怪な姿勢。醜悪な顔の中年執事。あのキャラのことだろうかと昂輝が悩む。

「イゴールちゃんが所有する戦闘用ボディーのひとつよ」

「戦闘用ボディーって……」

苦笑う昂輝が頬を掻く。

所有するひとつということとは、他にも幾つかのボディーが存在することになる。

疑問。

所有ボディーとは体のことなのだろうか。

イゴールは幾つもの体を持っている。
持っている、どうなる。人間の体は一人につき一体。意味が判らない。

訊いてみよう。

そう考えた昴輝が疑問を始めようとした瞬間、イゴールの乙女ボイスに邪魔された。

「じゃあ、イゴールちゃんは、一回お家に帰りまーす。帰って『せむし男』のメンテナンスしてきますねー。明日が楽しみでーす。ワクワクだねー」

「ああ、そうしてくれ」

眼一郎の言葉よりも早くスキップで部屋を出て行くイゴール。直ぐに怪物が踏み鳴らす床の音は遠のいて行く。

昴輝は質問のタイミングを完全に見失ってしまう。

イゴールが居なくなると眼一郎の言葉が昴輝に軌道を変えた。

「昴輝君、君は明日、お砂さんとイゴールちゃんに付きなさい。スリーマンセルだ」

「え、何故ですか所長さん？」

お砂姉さんも悪くないが、出来れば憑き姫と一緒に居たいと思う昴輝が理由を訊くと、何故か憑き姫が席から立ち上がる。憑き姫は小さな背中を昴輝に向けた。

眼一郎が理由を返す。

「東和勝之だよ。彼が現れてもお砂さんが一緒ならば一安心だろう。君も」

呪いとの決着。

それも昂輝にはあった。ちょっと忘れていた。

「なるほど……」

憑き姫の背中を見ながら昂輝が不満気な声色を返事に代えた。

お砂は呪いのスペシャリストだ。解くのも掛けるのも得意である。

昂輝は眼一郎の指示を素直に受け入れるしか出来なかった。確かにベストな判断であるのは間違いない。納得できる。

上手く行けば、勝之を呪いから救い出せるかもしれない。

だが！

しかしだ！

昂輝の中の思春期が、憑き姫の背中を見詰めながら名残惜しいと血の涙を流していた。

今日は何故か憑き姫と一緒に居られる時間が少なかった。明日も同じような一日になりそうで寂しい。

青春の貴重なページが、ただただ無駄に過ぎていくのが勿体無かった。無念が積もる。

「じゃあ、皆。今日はこれで解散だ。各自たっぷりと仮眠を取ってくれ。明日はハードになるやもしれないからね。

昂輝君、君はそのまま城を監視していてくれ。寝なくても大丈夫なんだろう」

「はい、了解しました所長さん」

眼一郎の述べたとおりだ。昂輝は不死身の呪いの力で眠らなくても体力が回復する。眠くもなるが、眠らなくても平気であった。

実家に引き籠もっている頃に実験してみたが、三日は寝なくても平気だった。しかし四日目、あまりにも暇だったので思わず寝てしまふ。それで実験を止めた。

昂輝を以外のメンバーが、男女左右に分かれて扉の中に消えて行く。憑き姫はおやすみも言わずに女部屋に進んで行った。何か怒っている様子である。

昂輝は憑き姫の長い黒髪が揺れる後姿を落莫に見送った。

せめて気の利いた言葉でも掛けられればと思ったが、それすら未熟な彼には難しい。憑き姫の姿が部屋の奥に消えるまでには考えつかなかった。

女部屋の扉が閉まる音を聴くと、我ながら情けないと落胆の溜息が溢してしまふ昂輝。

溜息の中に青春のほろ苦さが混じっていた。

こうして少年の青春は、明日へと続く。

最後の夜明け (前)

外はまだ薄暗い。

そこは何処であろうか。何かの施設の様子だ。建物内である。

鉄筋コンクリート建ての広い廊下。天所も高い、幅も広い。タンクローリーですら悠々と走れる広さの廊下が長く続いていた。

しかし、暗い。先が見えない。広いが明かりが乏しい。窓も無い。故に地上なのか地下なのかも判断が付かない。

景色も殺風景だった。人気も無い。これといって何かが在るわけでもない。

たまたに鉄の扉が見えるだけだ。

そのたまに見える扉のひとつが開いている。奥には降りる階段が覗き見える。

扉を開けて、締める事無く階段を降ったと思える人物が、階段の中段辺りに居た。

女性のような。

白衣を纏っている。

美藤傀儡だ。

女医に化けていた美藤傀儡は、未だ北枕夢子のカードを首からぶら下げて、白衣のままだった。

姿を改めるのは何時でもよい。暫くは、このままでも構わない。どうせ人目の付かない場所に居たからだ。

ハイヒールの踵を鳴らしながらコンクリートに囲まれた階段を下って行く美藤。

空気がひんやりと湿っぽい。更に地下へと向っている。

階段を下り地下室を目指す美藤は、赤股との対戦を思い出していた。人形の運動能力を向上させるために、人形の関節部から筋肉組織を複雑に作り上げたが、実力を上げた赤股に敵わなかった。あの男は確実に強くなっていた。

それに引き換え己の新型生き人形は、思ったよりも戦闘力を向上させてなかった。まったくではないが、伸びが少ない。

だが、搭載したギミックが光学光線砲のみ。生き人形たちが本来の強さを発揮するためには、もっとギミックを搭載してしまえば良い。それだけで強くなる。

しかし武装の数が強さに繋がるのは確かだが、それでは人体構造を取り入れたのが無駄に成りかねない。バランスが難しそうだ。今後の課題である。

だが今は。

それよりも明日だ。明日が楽しみだ。

現在進行している悪巧み。

ヴァルハラ探偵が絡んでくるのは、この町で計画を進める以上は想定しなくてはいけない相手だった。

あいつらには何の関係もない作戦であるが、面白半分で近づいてく

るだろう。そのような連中である。そして案の定だった。

まあ、問題は無い。計画のコースを若干変える。寧ろヴァルハラ探偵を利用できる。あいつらにも役に立ってもらおうと美藤は考えていた。

他の連中と同じように、自分の掌上で踊ってもらおうと企む。

階段を下り終わった美藤が地下室に到着した。部屋には扉が無く、階段から直通していた。

十五畳ぐらいだろうか。四面コンクリートの壁に囲まれた部屋である。天井に蛍光灯が設置され、物置ぐらいには使えそうなスペースである。

しかし邪魔臭そうな荷物は何も無い。ただ、壁には幾つもの絵が貼られていた。スケッチブックに描かれたものが、無造作に何枚も貼られているだけである。

部屋の隅には机がひとつあり、ひとりの女性が此方に座りながら背を向けて、モクモクと何かを描いている。

肩まである艶々の髪。どこにでも居る専業主婦を思わせるような後姿であった。服装が地味である。

美藤が部屋を見回す。

壁に貼られた絵の数々は、すべてが鉛筆画であった。なかなかの力作ばかり。しかし、どの絵も同じ物を画いたようだった。

西洋の城の絵である。

様々な方向、様々な角度、様々な距離から描かれた城は、小田良子を書いた小説に載っていた挿絵の城である。写生の技法がそのまま

だ。

そして絵の数々は、外部から城を描くだけでなく、更に城内のすべての部屋から廊下の隅まで描かれていた。まるで城の設定資料である。

枚数も多い。百枚以上有りそうだ。

「どうですか、小田さん。作業は進んでいますか？」

室内を見回しながら女性に近づく美藤。小田と呼ばれた女性は、振り向くことも絵を描く手も止めずに挨拶を返した。

「あら、北枕先生。こんな時間にどうしたの？」

女の声が何やら可笑しい。まるでスピーカーから流したラジオの声である。

喋りかたも抑揚が落ち着いており、歳を取っているのか若いのかも判り難い。

「ちょっと病院を追い出されてね、暇だからこつちを見に来たの。で、作業は進んでいるの？」

再び様子を訊く。

「あらあら、相変わらず騒動が堪えない様子ですね。貴方は昔からそうでしたものね」

「はいはい、説教の積り、小田さん。それより進んでいるの？」

「説教だなんて。私のような女が貴方に説教をできる身分じゃ

あないことぐらい、貴方もわかってるでしょ」

話しながらも絵を描き続ける小田は、一度も振り返り美藤と顔を合わせようとしない。しかも、作業は進んでいるかと訊く美藤の質問を三度無視した。

「優等生が何言っちゃてるんだか……」

美藤がふてくされたような顔をする。

絵を描いていた小田の手が止まる。描いていたスケッチブックを切り取ると、机の横に置いた。そこには既に描き終えられた絵が数枚重ねられている。

「ねえ、北枕先生。お暇ならば、この絵を空いている壁に貼ってください。私は作業を止めたくないのです。それにもう、歩き回ることにすら辛いのですよ」

そう言うと小田は、再びスケッチブックに絵を描き始める。

美藤はやる気無さそうに机の上の絵を手にとると、壁際へ向って歩き出す。空いているスペースを探した。

「それでも随分と作業が進んでいるようですね。あと何枚ぐらい描いたら終わりなの？」

美藤が絵を貼りながら訊くと、小田が四度目にして答えを返す。

「そうですね。あと二十枚ぐらいかしら。それで最後よ。完成するわ」

「二十枚か。明日の昼ぐらいね」

「ええ、そうよ。今、ラストスパートをかけているわ。城さえ完成してしまえば私の役目は終わり。あとは男たちの仕事よ」

「でも、貴方は戦いを見られない。私もだけど」

「構わないわよ。彼らが目的を果たしてくれると信じているし。彼らの強さも夢の中で見てきたわ。私はこんな体でも夢の中には入りできる体質だから」

「きつとやってくれると信じているのね」

「だから協力したのよ。ただ只管に絵を描き続けた」

「必死ね」

「……」

その一言に嫌味な笑みを混ぜる美藤。絵を描く小田の手が一瞬止まったが、直ぐに動き出す。

暫し沈黙が流れた。

黙り込んだまま作業を続ける小田。

しばらくして美藤がすべての絵を貼り終わると、再び話しかける。

「貴方も、そろそろ限界でしょう？」

「……ええ。魂が随分と磨耗してしまったわ。もう夢の中にも入れない。最後の一枚を描き終わったら、私は消えるでしょうね。私に

は、後の結果がどうなるかもわからない……。でも信じているわ。
北枕先生にも感謝しているわよ。この体を与えてくれたのだから

最後の夜明け（後）

「気にしないで。ギブ・アンド・テイクよ。この計画もすべて、貴方が居なければ何も始まらなかったのですもの」

「そう、私が居なければ……」

微笑む美藤。対称的小田は声色を曇らせた。

「あら、気にして居るの。でもね、貴方の夢が、誰かの夢になったのよ。もういいじゃない。

それに貴方が夢を見なくても、あいつは何所かできっと復活していたわ。あいつは、貴方だけの中だけに潜んでいる訳ではないのだから。

でも、もしかしたら、これで終わりになるかもしれないわよ、小田良子さん」

「そうね。これで娘を救えるやもしれない」

「きつと東和勝之たちが、娘さんを助けしてくれるわよ。貴方が娘さんの名前を語って、夢の中に入ったんでしょ」

「私の顔と娘の顔は似ていますからね。それに夢の中では本名を名乗れない。娘の名前を使うのが丁度良かったのよ。三人は、事情も知っていますから娘を救い出してくれる筈」

夢の中では本名を名乗れないに、本名で呼ばれることも無い。だから皆が渾名で呼び合う。偽名を使う。

竜栄は公爵、鬼頭が將軍といったぐあいにな乗っているように、小

田良子は娘の名前であるベロニカを名乗ったのだ。

小田が鉛筆を置いた。そして椅子から立ち上がると踵を返して美藤と向き合う。

その顔に輝く瞳はガラス玉。顔色も無表情で、髪の毛はナイロン製である。

生き人形だ。

美藤が作った生き人形の体である。

「この体を動かすのに私は、自分の魂を削る必要があった。死者である私が、娘を救うために絵を描くには、筆を握る体が、なんとしても必要だった。

私は悪霊でも怨霊でもない。他人に乗り移るなんて芸当も適わない。だからこの体を貸してくれた貴方には、感謝しているわ」

「こちらこそ、いいデータが取れたわ。死者の魂を人形の中に魂魄する技術は、まだまだ研究段階だったのよ。空の人形に仮初の魂を植え込むのと訳が違うからね。死者の魂を長時間、この世に留めるのは至難なのよ」

「じゃあ、今回の私は、少しは技術向上の役に立てたのね」

「ええ、有効に使わせてもらったわよ」

生き人形が重そうな足取りで美藤の横を過ぎて行く。階段を目指している様子だ。

美藤の視線が小田の生き人形を追う。

「どこに行くの？」

「外よ。もう少しで夜明けでしょ」

美藤が腕時計を見た。確かにそろそろ夜明けだろう。太陽が昇り始める時間だ。

「ちよつと太陽を見てくるわ」

「何故？」

訊いてから美藤は、ポンスと掌を叩いた。

「あゝ、今日が最後だから、見納めの朝日でも眺めに行くのね」

随分と無神経な発言であったが、言われた小田は気にしていない様子だった。

小田良子と美藤傀儡は古い付き合いである。

二十二年前の少女連続意識不明事件の際に、小田は美藤と知り合った。事件を解決したメンバーに美藤も加わっていたのだ。

小田の人形が、部屋の出入り口前で一度振り返る。

「あの世界には、太陽が無いのよ。ただ黒い雲が天を覆いつくしているだけ。」

私はあの世界に目を当ててみたいの。青い空を広げてみたいの。だから最後に描く絵は、太陽が見える青空にしようと思っているのよ。幾ら夢の世界でも、太陽が昇らないなんて寂しいじゃない」

「最後の作品が、太陽の昇った青空？」

「ええ、そう。ダメかしら？」

「ダメとは言わないけど、ロマンチストね。まあ、好きにしたらいいわ。」

あつちの世界の空が、青かろうが黒かろうが私が見ることはないのだからね。ご自由にどうぞ」

どうでもよいといった顔で腕を組む美藤が、地味な服を着た生き人形を見送る。小田良子の魂が入った人形は、歩くのも辛そうに見えた。それでも階段を老人のように登って行く。

上へ、上へと希望を求めているようにも見えた。

朝日を求めて　。

最後の絵を描く為に　。

武流（前）

早朝。

ついに来る三日目の朝である。

昂輝は一晩中怪異の幻影城を監視していたが、これといって大きな異変は見られなかった。

ただ、辺りが朧気に明るくなり始める頃には、城の姿は随分と存在感を増しているようら感じられた。明らかに具現化に近づいているのが見て取れる。

窓から外を眺めていると、別のことにも気付く。

どうやら東和邸は、多少の高台に建てられているようだ。窓から窺える町の様子は、薄闇にビルの頭が並んで見える。

更にその向こうには海が見え、水平線が昇り来ようとしている太陽に赤く染まっていた。

今が夜明けの瞬間だった。

日が昇ると同時にガチャリと扉が開く音が聴こえた。男部屋から極道コンビの二人がノシノシと出て来る。

二人とも道着である。

功凧老は矮躯でありながら全身の線が太く、厳つい表情と禿頭が古びた道着に良く似合っていた。まさに武人の成りである。

一方赤股は、体躯のラインは細いが背が高く手足が長い。武士らしく道着に正装しているが、眠たげな表情にはいつもの大きなサングラスを掛けていた。髪型もヤクザを思わせるパンチパーマだ。

とてもではないが、この人が武術の達人には見えない。
しかし、途轍もなく強いのを昂輝は目の当たりにしている。

「よお〜う、狼少年。監視役ご苦労様だったな。何か変わったこと
はないかい？」

早朝だというのに功凧老のテンションはいつもと変わらない。余裕
の洪さを作り出している。
赤股は眠たそうに頭を擦る。蟹股で歩む姿からやる気が感じられな
い。

「おはよう御座います。お二人とも朝が早いですね」

「おうよ。それが体育会系つてもんだぜえ。お前さんも学生時代に
サッカー部だったんだろ。朝練とかやらなかったのか？」

「はい、サッカー部時代は、朝練をやっていました」

高校を中退するちょっと前まで部活に励んでいたのは確かであるが
……。もう、スポーツマンらしいことは何もしていない。
数ヶ月前の話だが、今となっては懐かしい思い出だ。

「では、早速やろうぞい」

何を言いたいのか理解できない昂輝は軽く首を傾げた。何を始めよ
うというのか、疑問に呆けてしまう。

その昂輝の顔へ、赤股が脅すように顔を近づけて来る。

「わかってねーなー、坊やよお〜。朝稽古をするって言うってんだよ。
朝稽古」

「稽古ですか、流石ですね。朝から凄いい」

「手前は馬鹿か！ 手前もやるんだよ、朝稽古を！！」

「あゝ、なるほど」

やっと理解する昂輝。

自分も功風老の弟子として武術を習うのだった。忘れていた。

「すつとぼけやがって、餓鬼が」

顔を近付けていた赤股が蟹股をドスドスさせながら離れて行った。少し距離を取ると踵を返す。

そし前に左足を一步踏み出し、続いて腰を落す。表情が引き締まる。前屈立ち。

空手の中でもポピラーな構えであるが、その姿が凜々しい。チンピラの雰囲気が消え失せ、武が形を成していた。

「先ずは、俺を真似ろ」

「は、はい……」

赤股の言う通りに構えを真似る昂輝。その昂輝の横に功風老が歩み寄る。

功風老の接近に緊張を増す。

「違う」

功風老が昂輝の方に手を添える。軽く乗せられた手が50キロの鉄アレーかと思えるほどに押し掛かる。ぐっと昂輝の腰が重みに沈む。

「そつだ、その高さが基本じゃ。覚えておけ」

「は……はい……」

「そして、打ち」

赤股が右正拳突きをひとつ放つ。鋭く速い一撃が空気を叩いて音を響かす。まるで音速の壁を叩いたように綺麗な拳音だった。

「凄い……」

赤股の素振りを見て生唾を呑む昂輝。

速さ、捻り具合、止めの力強さ、一つ一つの総合が、芸実的に見えた。その完成度の素晴らしさは、素人でも一目で判った。

チンピラに見えるが、やはりこの人も凄い人なのだと考えを改める。

「感心してねーでよ、お前も真似て撃て」

「はい！」

元気に声を張り上げると、昂輝も右正拳突きを真似て繰り出した。だが、しっくりしない一発となる。

自分でも可笑しいのは分かったが、何が赤股と違うかが判らない。正拳を放った形で止まり首を僅かに傾げた。

その瞬間、功尻老の指導が声と手で飛んで来た。

ドンッ、ドンッ、ビシッ、ビシッ、バン、バン。

「腹を引っ込めろ、背筋を晴れ、胸を突き出せ、顎を引け、肘を伸ばせ、手首はこうだ！」

指導されたポイントに功尻老の拳が当たる。全部で六箇所。まるで鉄棒で叩かれたような痛みが走った。

厳しい。

痛くて厳しい。

「その形を忘れるなよ。もう一発行くぞ」

再び赤股が見本の正拳突きを放つ。鮮やかである。

今度は昂輝が正拳突きを再び放った。無様である。

間髪入れずに功尻老の指導の拳打が昂輝の六箇所を連続して叩いた。容易くは上手く行かないものである。

武流（中）

「なつてねえ〜な〜、坊や。どんどん行くからな」

正拳突きの練習が続くなか、昂輝が一発撃つたびに功風老に可笑しな場所を叩かれた。

それでも最初の五分ぐらいは、正拳突きを放つたびに五六発は指導の拳を受けていたが、十分二十分と経つにつれて指導の拳も減っていた。一時間もすると、たまに殴られる程度に成長していた。

「まあ、今日はこんなところにしておくか。なあ、赤股よ」

「押忍、老師」

「あ……、あ……りかとうございませ……」

疲労困憊となった昂輝が前のめりに倒れこんだ。汗だくの顔を頼から絨毯に擦り付けて息を整える。

腕の筋肉が破裂しそうなぐらい膨らんで、脚の筋肉がガラスの棒のように折れそうで怖い。

しかしながら昂輝と同じ回数だけ正拳突きの素振りを行なった赤股は、息を切らずどころか汗一つ掻いていない。

「いいかい、坊や。先ずは自主練だ。毎日この正拳突きの練習をやるんだ。一日千回、右と左で二千回だぞ」

「に、二千回!」

「そうだ、それを一週間続ける。一週間たったら、どんな具合かチャレンジする。怠けていれば直ぐに判るし、進歩してなくてもダメだぞ」

「正拳突きの練習だけを一週間ですか……」

「おうよ。まずは基本からみっちりだ。毎日の正拳突き二千回が、基礎体力も作り上げるし空手の基本になる。それが真っ当に出来なきゃあ、次の段階になんて進めねえぞ」

「は、はい……」

今にも野垂れ死にしそうな声で昂輝が返事を返す。

ものの一分の休憩。

そしてムクリと立ち上がる昂輝。それを見ていた極道コンビが驚きに目を剥く。

昂輝が眉毛を凜々しい角度に釣り上げると二人に言う。

「よし、じゃあ、他の人たちが来るまで僕は、正拳突きの練習をしていますね！」

言い終わると昂輝はひとり勝手に正拳突きの練習を始める。極道コンビのふたりは、何が起きたのかと昂輝を凝視する。昂輝はまだまだ未熟な拳激を繰り返す。

功凧老と赤股が顔を見合わせる。それから赤股が昂輝に訊くように言った。

「お、おい、坊や。そんなに無理しなくてもいいぞ」

「気にしないでください。これも呪いの影響です」

「呪い……。不老不死の呪いか？」

「はい！」

昂輝は正拳突きを練習を繰り返しながら答える。

「僕の呪いは、僕を苦しめる為に、僕の体を修復してくれます。僕が稽古で苦しむのなら、疲労を回復してくれるのですよ。だから、稽古が辛ければ辛いほどに僕に稽古をさせようと疲労を回復させるんですよ」

「な、なんだよ。その呪いの理屈は……」

呆れた声で赤股が言った。ある意味では羨ましくも思っていた。

「なるほどのお。こりゃあ、成長も早いかもしれないぞ、赤股」

「ですね。便利な体だ……」

「まあ、いい。わしらも朝稽古の続きをするぞ」

「はい、老師」

極道コンビも朝稽古の続きを開始する。

正拳突きだけを繰り返す昂輝と異なり、極道コンビは様々な拳技脚

技の素振りを始めた。本格的な空手である。

功風老が打撃を繰り返しながら昂輝に話しかけてくる。

「少年。稽古を続けながら聞いてくれや」

「はい、なんででしょうがぁ」

早くも昂輝の息は上がり始めていた。

「功風流は、元を質せば空手と柔道のふたつから来ている。ワシは元々柔道家でのお。喧嘩に勝ちたくて空手も始めたのじゃあよ。」

だから、流派としての歴史は浅い。

基本は空手と柔道だが、柔術や合気道などにもある技も取り入れている。そっちの赤股に関しては、中国拳法の蛇拳まで習いやがった」

「中国拳法。……蛇拳ですか……」

「そっじゃあ。更に暗器もだ」

「暗器……」

隠し武器。自分と同じだ。

昂輝の場合は体内暗器だが。

「ワシはお前に空手と柔道の基本から極意まで指南するが、お前は
お前なりに武を改良してもかまわん」

「……我流を……進めと？」

「そうは言っていない。まあ、最低限基本を極めてからの話しだがのお」

言っていることが判らない。理解できない。違いが判らないのだ。

昂輝は、正拳突きを繰り返しながら只管に悩んだ。

「まあ、まだ分からんわのお」

「分かりません」

「時期に分かってくる。それが五年先か、十年先かは分からんがな」

「そんなに……」

「俺は十年かかったぜ」

「十年！」

「武術とは、そう言ったもんだ。一年二年で習得できる格闘技は、ただのスポーツでしかない。それ以上を極めんとするならば、最低五年だわい。五年目が入り口じゃ」

「……はい」

武流（後）

師の言葉を聞き流しながら独り稽古を続ける赤間が、鋭い横蹴りの足刀を突き出す。ピンっと横に伸ばされた蹴り脚が筋力だけで角度を上げて行く。

股関節が全開まで広げられると足刀が真上を向いていた。

そして一度蹴り脚を引いてから、もう一度天を狙って足刀を放つ。

垂直に伸びる脚。

あのような位置に敵が居ることは、まずないだろう。あの蹴りが戦いの中で役に立つとは思えなかった。

無意味に近い蹴り技である。曲芸の類だ。

「ただの、少年。これだけは覚えておけよ。功風流は、スポーツではない。チャンピオンベルトを締めるためのものでもない。喧嘩に勝つためでも、人を殺すための流派でもねえ〜んだよ」

疑問が過ぎる。

では、何のための武術？

その思いは疲労から声にはならなかった。

「怪異を退治するための武術だ。対人間用格闘技でなく、対魔物用格闘技だあ」

対魔物用の格闘技。

「功風流とはのお、対魔格闘術だあ」

なんじゃそりゃ！

その驚きも疲労から声にはならなかった。
そろそろ正拳突き連続もきつくなってきた。

だが、気付く。

赤股が先程見せた天を蹴る足刀。あれを人間相手に戦っている最中は、まず使うことのない技であろう蹴り。しかし、黒鬼鉦鬼のような巨軀を有した怪物が相手ならば、使う可能性高いだろう。人外が繰り出す上からの攻撃に対抗できる。

「いいかい少年よ。それとこれだけは忘れるでないぞお」

何を？

「功風の弟子に成る以上は」

成る以上は？

「ワシよりも強くなれ。いいな」

そんな無茶な！

「それが最低限の目標じゃあ」

功風老は、昂輝と話している間も数々の技を繰り出している。それなのに息の一つも上がってない。赤股も同様である。

話の内容にも驚いたが、老人の体力でないと昂輝は素直に驚いていた。

「ワシの壁は、低くはないぞ、少年」

四角い顔が厳つく笑った。

どのような心境なのであろう。

師匠を弟子が越える。否、越える。

赤股は師を越えたのだろうか。自分は越えられるのだろうか。他の
武術家たちは、どうなのだろう。

師を越えるが、最低限の目標。

武の目標。

強くなる為の目標。

功凧老が素振りの構えを解く。

「よし、ふたりとも。今日の朝稽古はこの辺で終わるぞ。皆が起き
始めたわい」

功凧老がそう言った直後に、男部屋からいつもの黒服に正装した眼
一郎が姿を現した。それから間も無く女部屋からお砂姉さんが姿を
現す。

「三人ともおはよう。朝稽古かい。朝から頑張るねえ」

「所長さん、おはよう御座います」

息を整えた昂輝が眼一郎に挨拶を返した。

後にチラリと老師を見る昂輝。

功凧老は、ふたりが起きたのに気付いていたのかと不思議に感じた。
稽古の拳脚を振るいながら、昂輝と話しながら、それでありながら

周囲の様子に、隣の部屋の様子に耳をすましていたのだろうか。もしそうならば、それはそれで凄く芸当である。それとも漫画などでよく見られる『気』を感じ取ったってやつだろうか。

極道コンビは道着から私服に着替える為に寝室に戻って行く。

自分の衣類を摘まんで臭いを嗅ぐ昂輝。

「体がべと付くな……」

「シャワーでも浴びてきたらどうかしら。各寝室にバスルームがある筈よ」

「そうですね。じゃあ、ちょっとシャワーでも浴びて来ますね」

「いつてらっしやい」

お砂が見送りの言葉を掛けるとほぼ同時に、女性部屋の扉が開き、眠たそうな眼を擦る憑き姫が姿を表した。

「昂輝、何処行くの？」

朝の挨拶もなしに問う憑き姫に昂輝は清々しい笑みで答えた。

「おはよう、憑き姫。朝稽古で汗をかいたから、ちょっとシャワーを浴びに」

「シャワー……？」

「うん、そつだよ」

「私も一緒に、浴びようかな」

「マジッ!？」

横を向きながら照れくさそうに言う憑き姫の頬が桜色に染まっていた。

見事な演技である。

しかし、あまり女性とも話したことがない昂輝には、その演技が真実に見えた。容易く騙され動転する。

「嘘よ。お馬鹿さん」

「っ!」

演技を止めた憑き姫の眼差しは、氷のように冷ややかであった。からかわれたと気付いた昂輝が口を大きく開けたまま固まった。脳天から稲妻に撃たれたようにショックを受けている。

昂輝に背を向けた憑き姫は窓際に向って外を眺める。

シヨックのあまり肩を落としながらフラフラと歩き出した昂輝は、掻いた汗を流す為にシャワールームを目指す。

こうして、怪異事件三日目の朝が始まった。

部隊編成

夢の世界にも朝が訪れる。しかしいつもながら薄暗い。太陽が雲に隠れているのだ。

太陽だけではない。空全体が、どんよりと曇った雲に覆われている。空気も若干冷たい。

この世界はいつもこうだ。

この夢の世界は、東和竜栄の心から出来ている。意識不明で病院のベットに植物人間常態と成り横たわりながらも、心の力を振り絞り絞り整形させているのだ。

いわば此処は、東和竜栄の心の中その物である。

その夢の中心に位置するのが、東和竜栄たちが控えている古城である。

木製の城門は、大きい痛みが激しく、所々に刀傷が痛々しく刻まれている。古城を囲む岩の城壁は、あたら此方に輝が走り崩れ落ちそうな場所も窺えた。

城その物も、所々の壁に穴が開いている。上空には烏が五月蠅く鳴きながら飛んでいた。

古城は東和竜栄の荒んだ心を表現するように荒れていた。

父、東和栄光の事。

母、片桐紀子の事。

妾の子として育てられた幼少期。

アメリカでの学生時代。

そして、ホムンクルスの研究。

それらが及ばした東和竜栄の人生観が、この荒れた古城を中心に形を成したものである。

普通の景色ではない。花咲く物も色づく物も何も無い。

古城のテラスに立つ東和栄光。

黒衣の黒い鎧。黒鳥の羽が飾られた黒いマント。ウエーブの掛かった長い黒髪。黒騎士の成りで立つ男は、この世界では公爵と名乗っている。

この世界では、本名を名乗れない。

誰が決めたか不明だが、この世界ではそれがルールであった。

故に東和竜栄は『公爵』と名乗り、鬼頭順平は『將軍』と名乗っていた。後から加わった指きり魔の鴉尾とガンマンの神田は、『侍』と『狩人』と名乗っている。

新メンバーの鴉尾こと侍が、ひとりテラスに立つ公爵の背後に歩み寄る。

公爵は侍の接近に気付いている様子だが、振り返らずに外の景色を眺めていた。

外の景色は変わりつつある。

古城の前には一回り大きな城塞が聳え立っていた。距離にして三百メートルほど離れているが、城塞の放つ重圧は威嚇に気配で近く感じられた。

「大将よお。何を見ているんだい？」

なんともチンピラばい口調である。

茶色い着物に、色褪せた黒い袴。腰には二本刺しをぶら下げ、乱雑な鬘を結っていた。

指きり魔の鵝尾であった。

この世界では、侍を名乗っている。

背後から歩み寄った侍が、公爵の横に並んで同じ方向を見た。

侍が前方に広がる景色を見て、ほおくと、感心でもしているような声を吐いて腕を組む。

古城と城塞の間に並ぶ人の列。碁盤の目に合わせて並ぶように几帳面に整列していた。その正方形の隊列が三編成分並んでいた。人数にしてみれば、凄い数である。

侍が目を凝らして見てみると、その隊列は人間のものではなかった。全員二本足で立つ豚である。

茶色い皮膚に雑な革鎧を纏った豚の隊列であった。

「豚が立って並んでやがる……」

「あれは豚と呼ばず、オークと呼ぶのだよ」

「オーク……。なんだそりゃあ？」

「正確にはパペットオーク。泥で造った下等魔法生物だ。君の親分が兵士として造り出した捨て駒だ」

「泥人形の捨て駒。 てっぼう玉ってことか」

「なるほど。ヤクザらしい表現だ」

「それにしても凄い数を造ったもんだな、全部で何匹いるんだ。百や二百じゃあないよな」

「三千匹だ」

「わお……三千とは随分と拵えたもんだな。

泥が材料とはいえ、あれだけの数を造るとなると、何日かかったことやら、へたすりゃあ一ヶ月ぐらい掛かっているんじゃないか」

「いや、意外に時間は掛かってない。一体目のオークを造った後は、そのオークが二体目を造る。そして増えたオークたちで、どんどんと生産を上げて行くんだ」

「わお、便利な生産方法だな。それで兵力が増量できるんだ」

「君は自分の兵を作らないのか。狩人は、賢者にくつついてゴレムの作り方を学んでいたぞ」

「俺はいいや」

「暢気だな。出陣は今日の昼だぞ。もう時間は無い。君にも攻撃に加わってもらうんだ。己の部隊なくして大丈夫か？」

「俺は子分とかは持たない主義でね。自分の腕っ節だけで暴れまわりたいんだよ。子分とか部下とかに戦わせて功績を上げるのは好きじゃあねえや」

侍が不信な表情で微笑む。

自分で敵を倒し、相手の指を勲章代わりに斬り落とす。それが楽し

いのだと思いながら腰の刀に肘を掛けた。

チラリとだが初めて公爵が侍の方を見た。

「一騎当千を自負するならば、それでも構わない。しかし、城攻めには参加してもらおうぞ。その為に、この世界への出入りを許可したのだからな」

「怖い声で言わなくてもよ、ちゃんと参加するぜ。あんたが嫌でも俺は参加する積りで此処に来たんだよ。」

あつちの世界で糞餓鬼と刺し違えちまってよ、階段から転落。首を痛めて動くのも難儀ときたもんだ。我ながらなさけねえ失態よ」

愚痴りながらテラスの手摺りを蹴りつける侍。表情が心底腐りきった悪党如く畜生色に染まっていた。相当不愉快なだろう。

公爵が横目で荒れる侍の仕草を見て屑人間めが、と呟く。

その小声は上空で泣き叫ぶ鳥たちの鳴き声に掻き消されて侍には届かない。

公爵の眼差しは、下等生物でも見下すような色を見せていた。

音が鳴る。

突然古城の正門が動き出した。木製の大門が重々しい低音を響かせ開き始める。

「なんだあゝ？」

開門の音に気付いた侍が、テラスから上半身を乗り出し下を窺う。

開いた正門から巨大な人型が出てきた。
賢者が造り出した岩の巨人兵、ゴーレムである。

「わお、こりやまたドデカイもんを造ったな」

巨大なゴーレムは、人間とゴリラの中間ぐらいの体型をしていた。
マツチヨで腕も脚も太い。

ぞろぞろと正門を出て行くゴーレム兵。その数は二十体。

重い地鳴りを轟かせて歩くゴーレム兵たちが、オーク兵の後方へと
控えるように並んだ。

少し遅れてもう一体のゴーレムが正門から姿を現す。

しかし、そのゴーレムだけが他のゴーレムと違って岩肌の上に金色
の甲冑を纏っていた。

「金ピカ……かよ」

その金甲冑のゴーレムの左肩には、岩巨人兵団を指揮する主が乗っ
て居た。

魔法使いの杖を片手に緑色のフード付ローブと灰色の長い髭を摩か
せている気高き老紳士。

賢者である。

更に遅れてもう一体のゴーレムが出てきた。

賢者が乗るゴーレムのように甲冑こそ身に付けていないが、岩肌が
赤く塗られており、片手には大きな弓を持ち、背中には丸太サイズの
の矢が詰まった矢筒を背負っていた。

「ありやあゝ、狩人じゃあねえか……」

侍の言う通り、赤い弓兵ゴーレムの肩には、狩人の姿があった。

「なるほどね。狩人は、ゴーレムに巨大な弓矢を装備させたのか」

「みてえくだな……」

「侍、君同様に彼もあまり時間が無かったが、少しは知恵を絞ったようだね。」

君のように、生身一つで戦う気がないようだ」

公爵の台詞には、侍を馬鹿にでもしているような感じが含まれていた。

それは侍にも感じ取れたが、ここは怒りを我慢する。

感情に任せて公爵に斬りかかりたかったが、ここは夢の世界。こいつの世界なのだと心で叫びぐつと堪えた。

これから始まるうとしていているドンチャン騒ぎを台無しには出来ない。

「ちっ……」

忌々しいと舌打つ。

「おい、公爵様よ。あんたは編成とやらに参加しなくてもいいのかい。兵士は居るのかい？」

「ああ、心配無用。居るとも」

公爵が答えた瞬間である。ふたりの後方にある室内から、複数の人間が踵を鳴らす音が同時に響く。踵の音には鎧を着込んだ金属音が混ざっていた。

「なっ！」

突然の響きに驚いた侍が機敏に踵を返すと、後方の室内には、いつのまにか複数の黒騎士たちが鯨詰めのように整列していた。

「何だ、こいつら！」

「私の部隊だ」

「ダ、ダークナイト……」

どや顔の公爵が自慢気に喋り始める。

「兵数は五十騎。將軍のオーク兵とは異なり、質を追求したエリート兵士たちだ。彼ら一騎が、オーク兵百匹分に匹敵する。即ち此処に居る黒騎士たちだけで、オーク兵五千匹分。

私がこの世界に一番乗りしたのでね、兵力を強化する時間が一番多かったのだよ」

「そ、そうですかい……。そりゃあ凄いわ……」

呆れた意思を告げる言葉の中に、圧倒された感情も混ざっていた。

「これ程の兵力を揃えなきゃあならないほど、あの城に住む輩は強いのかい、公爵さんよ……」

「さあ、どうだろう」

「どうだろうって……。分からないのかよ？」

「分からん」

え〜〜〜〜、と心中で呆れる侍の態度から力が抜け落ちる。

「分からないで、これだけの兵隊を揃えたのかよ……」

「ああ、如何にも。例え相手の戦力が不明でも、戦わねばならない以上は全力を尽くすのが当然だろう」

「まあ、そうだが……」

「いずれにせよ我々の目的は、悪夢城の占拠。城主ナイトメア公爵の首。まずはそれが最優先。失敗は永久の敗北。ここで全力を尽くさなければ、いつ全力を尽くすというのだ」

「気合が入ってるねえ……」

今一度踵を返した侍が、視線を悪夢城に戻した。

戦いの時は近い。

悪夢城が具現化するの、本日の昼頃。

ベロニカ曰く、合図は晴天とのこと。

あのドス黒く曇った雲が晴れて、青々とした晴天を覗かせる。それが戦いの合図らしい。

「青空か……。心が晴れるのだろうか……」

言いながら公爵が空を見上げた。この暗雲は彼の心そのものだ。

釣られて侍も見上げる。

戦いの合図は、晴天。

ベロニカの言葉を思い出した者たちが空を見上げる。

將軍、賢者、狩人と、別々の場所で待機して居る者たちが、偶然にも仕草を合わせた。

決戦の時は近い。

皆が青空を待ちわびる。

渦巻く空（前）

朝食を終えたヴァルハラ探偵事務所の一行が、軒太郎を先頭に庭へと出て行く。

芝生の上を歩き怪異の城を目指すは六人。フルメンバーではない。イゴールと眼一郎の姿がなかった。

イゴールは昨晚のうちにボディーメンテナンスの為に一旦帰宅している。

眼一郎はいつもながらの別行動であった。屋敷内に残って東和栄光の側にいる。

「ふう〜、食った食った〜」

爪楊枝を銜えた赤股が満足そうな表情で膨れた腹を叩く。

今日の朝食は東和家の住み込みで働いているコックさんが作ってくれたご馳走であった。

一般市民からしてみれば、これが朝食の豪華さかと思えるほどの料理が並べられ皆を驚かせた。

昂輝も富豪な朝食に圧倒されたが、沢山食べた。

憑き姫も満足気な表情でお腹を撫でている。

明らかに全員が食べすぎに見えた。ほどほどに済ませていたのはお砂姉さんぐらいだろう。

一言。朝から満足である。

メンバーが広い庭に出ると、いきなり強い風に煽られた。

お砂が唾の大きな白い帽子を飛ばされまいと両手で押さえ、長い髪と白いスカートが風に靡く。
そんな仕草ですら上品に見えた。

その強風に煽られた憑き姫がよろめきながら昂輝の腰にしがみ付いてきた。軽い体では辛かったのだろう。

「大丈夫、憑き姫？」

「……うん」

小さく頷いた憑き姫は、乱れた黒髪を撫でながら昂輝から離れた。昂輝はちよつとだけ幸せを感じる。

四角い顎を撫でながら空を見上げる功凧老。

「荒れそうじゃあおう」

空はとても曇っていた。雨が降りそうだ。風も強い。

「そうですね、師匠……」

赤股も空を見上げる。

渦巻く空は、黒雲に占領されはじめていた。
昂輝がひとりで朝日を迎えた時には、ここまで荒れた天候でなかった。

三人で朝稽古に励んでいる最中に崩れて始めたのだろう。
黒雲が幻の城塞を底気味悪く演出していた。

「こりゃあ、一雨降りそうじゃわい」

「そうですね、師匠。出来ることなら降る前に仕事を片付けたいところですね」

赤股が無茶を言う。

ちやっちやっとな事件を片付けたいのは分かるが、肝心の幻城は具現化していない。触れるも叶わない。

「あとのぐらいで具現化するんだい、憑き姫」

軒太郎の質問に憑き姫は、強風を避けるように昂輝の陰に隠れながら小さな声でもうちよつとよ、と答えた。

盾に使われている昂輝は、それでも憑き姫の役に立っているのが嬉しいのか、強風に向って胸を凜々しく張っている。

「お、イゴールちゃんのお出ました」

軒太郎の言葉に昂輝が視線で探る。

すると幻影の城を迂回するように一代のトラックが走ってきた。

四トンのトラックである。荷台にはブルーシートで覆われた大きな積荷を載せていた。

運転席にハンドルを握るイゴールの姿が窺える。

やがてトラックは芝生の上を容赦無く乗り上げヴァルハラメンバーの前に停車した。運転席からオレンジ色の繫ぎを着たイゴールが降り出る。

「皆さん、おはようございます」

「やあ、イゴールちゃんおはよう」

乙女チックな黄色い声で皆と挨拶を交わすイゴールは、朝からハイテンションであった。強面に合わない眩い笑みを元気いっぱい振り撒く。

「イゴールちゃん、この荷物はなんですか？」

トラックの荷台に詰められた荷物を見ながら昂輝が訊くと、もったいぶりながらもイゴールがブルーシートの中身を教えてくれた。

「これが私の戦闘用ボディ、『せむし男バージョン108』ですの〜」

はしゃぎながら言ったイゴールが、荷を止めていたロープを外して一気にブルーシートを捲り上げる。

ブルーシートの下から現れたのは身を丸めた大男の姿だった。

「なんです……」

呆気に囚われる昂輝。目が点になる。

でかい。そして、怪奇。

トラックの荷台には膝を抱えるように座る大男は、微動だにも動かない。まるで電源の入っていないロボットのようである。

その姿は昂輝が驚いたように、普通では表現できない醜悪な姿であった。

身を丸めて座っている為に確かな身長は分からないが、ゆうに二メートル半はありそうだった。

頭の大きさは並みの人間の胴体ぐらいはあるだろう。

堀の深い顔は傷だらけの継ぎ接ぎだらけ、両目は望遠鏡の先のような丸レンズで、口は太い糸でジグザクに縫い合わされている。

体はドラム缶を横に三つ程並べたサイズだろうか、やたらと曲がった猫背中が盛り上がっている。

その大きな体躯に合わない細さの手足が付いていた。明らかにアンバランスである。

衣類は超特大サイズのジャケットに地味なスボン。どちらもボロボロだ。

革靴を履いているが、これまた特大サイズである。

何よりも殺伐なのは、両腕の武装。

右手の五指は恐ろしい鍵爪となっていた。左腕は肘の先からガトリング砲になっているのだ。

両手共に殺る気マンマンである。

渦巻く空（後）

イゴールがニッコリと笑う。

「へへ〜ん、凄いでしょ〜う」

「ああ、凄いな。これは……」

それ以上の言葉は昂輝から出なかった。あまりにも異常なバトルス
ーツに言葉を失う。

しかしながら戦闘用ボディーのせむし男を見ていた昂輝も気付いた
ことがある。

疑問。

イゴールは、これに乗り込むのだろうか？

確かにせむし男のサイズは巨大だ。人が乗り込めそうなサイズでは
ある。

しかしイゴールちゃんも巨体だ。二メートル近くの身長があるイゴ
ールが乗り込めるとは思えなかった。

「イゴールちゃんは、これに乗り込むの？」

「はいです。乗り込みますよ。乗り込んでワイワイ頑張りま〜す」

「どうやって乗り込むの？」

「脳殻を移動させるんですよ」

「脳殻？」

ふたりの会話に軒太郎が加わる。

「あゝ、昂輝くんはイゴールちゃんの本体を見たことないんだっけ」

「本体……ですか？」

「イゴールちゃん、説明するより脳殻の移動を見せてあげたらどうかな。そっちの方が解り易いでしょう」

「はい、いいですよあゝ」

軒太郎の提案に快く応えたイゴールが、トラックの荷台に飛び乗って、体育座りのせむし男の前に正座をしてかしくまる。

「何をするんですか、イゴールちゃんは？」

「まあ、黙って見てなさい」

「はい……」

昂輝が言われた通り黙って様子を窺っていると、正座をしたイゴールの全身から力が向け落ちる。

そしてイゴールの脳天が、パカリと音を立てて開いた。

「開いた！？」

仰天である。

開いた脳天から何か針金のような物が数本飛び出してきた。カタカタと動いている。

「あれは、メデイカルスパイダーの脚……？」

昂輝が述べたとおり開いた頭から出て来た物は、若干太いかもしれないが、治療や手術の時にイゴールのサポートをしているメデイカルスパイダーの脚に似ていた。

「何か出てくる……」

開いた頭から何かが出てこようとしていた。蜘蛛の脚が銀色の塊を引っ張り出そうとしている。

「あれがイゴールちゃんの本体である脳殻だ。しかも自足歩行が可能な優れたものだよ」

軒太郎が言っている最中、イゴールの頭部から銀色に艶めく金属製のケースが出てくる。

その形は脳の形に類似していた。

あの蜘蛛の脚が付いた銀のケース内には、間違いなくイゴールの脳が収納されているのだろう。

「あれが、脳殻。……イゴールちゃんの本体ですか」

そうだよ、と軒太郎が頷いた。

八本の脚がカタカタと動きながら銀色の脳殻ケースを運んで行く。イゴールの体から降りると今度はせむし男の巨軀を登って頭を屈指

す。
そして蜘蛛の脚を起用に使い脳天の蓋をパカリと開けると中へと入って行った。

「中に入った……」

脳殻のケースがせむし男の頭部にインすると、最後に蜘蛛の脚一本で蓋を閉める。

皆の視線がトラックの荷台に座るせむし男のボディーに集まっていた。
た。

昂輝もどうなるのかと興味深く注目する。

「起動確認ヲ行ナイマス。15秒ホド、才待チクダサイ」

機械的な女性の声だった。普段のイゴールちゃんの喋り方とは違っていたが、声質が似ていた。

「生命維持システム異常無シ。運動用人工筋肉システム異常無シ。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚サポートプログラム異常無シ。戦闘用サポートムログラム異常無シ。システムオールグリーン。起動確認終了。

戦闘用武装ボディーセムシ男バージョン108起動開始」

望遠鏡のような双眼が赤く輝くと、座っていたせむし男が立ち上がる。立ち上がると一層大きく見えた。

「大きい……」

昂輝が呟くと、せむし男が此方を見下ろす。無表情だ。

「どうぞですか。凄いでしょ〜」

いつもの無邪気な声がキンキンに響いた。イゴールの乙女ボイスである。

しかしながらせむし男の口は太糸で縫い合わされており動いていない。喋れる状況でない。

声は胸の中央に埋め込まれたスピーカーから聴こえて来ていた。

「よいしょ〜っ」

トラックの荷台から軽々と飛び降りるせむし男。

巨体のわりには身軽であった。着地でも音を立てない。

「久々に大暴れするですよ〜」

調子に乗ったイゴールが右腕の鍵爪を威嚇的に動かす。

同時に歓喜の声を上げるが、せむし男の表情は怖いまま動いていない。

どうやら感情に合わせて表情を作ることとは出来ないようだ。

「これである城に乗り込む準備は万端となった訳だ！」

気合を込めた台詞の後に赤股が、掌を拳で叩いた。

その横で功尻老が不敵な笑みを浮かべながら四角い顎を撫でて居た。

極道コンビからやる気が伝わって来る。

お砂の清楚で美しい微笑からも、期待に満ちたものが伝わって来る。軒太郎の営業スマイルからも如何わしい眼の輝きが見えている。

強風を避けて昂輝の陰に隠れている憑き姫にも、静かな風貌に待ち

きれない感情が漏れ出ていた。

全員が、暴れたくて仕方ないのだろう。それが昂輝に伝わって来る。

「皆さん、気合が入ってきましたね」

自然と昂輝にも気合があふれてきた。

携帯電話を操作して、わざとらしく鎌鼬の爪を一度出しては直ぐに収納する。

シャキン、と鋭利な音が鳴った。

昂輝も待ちきれない。

眼前に聳える幻影の城が、具現化する瞬間が待ちきれなかった。

興奮が徐々に大きく膨らんで行くのが自分でも分かった。

自分が闘争を求めているのが分かる。

ヴァルハラメンバーの気性が感染してしまったのだろうか。昔の自分は、ここまで荒い性格ではなかったと思う。

もで、これはこれで良い。

これからの人生は、これで良い筈だと昂輝は思った。

闘争心が、好奇心が、愛が、生きるエネルギーになる。

一族に掛けられた無限の呪いを乗り越えて行く活力となる筈だ。

そして自分を磨き上げて、呪いを完全消去するのだ。

だから、戦うのだ。

「待ち遠しいねえ。なあ、昂輝君」

「はい」

軒太郎に心中を読まれたようだ。

「あとは具現化完了を待つだけですわね」

「お砂姉さんも、待ちきれませんか？」

「うふふふふう」

昂輝が訊くとお砂は軟らかい笑みの口元だけを片手で隠した。
凶星のようだ。

皆が皆、刺激を求めて城塞を見上げる。

城は臙気な部分が随分と減っていた。具現化が近いのだろう。

その上空で、ドス黒く変わり始めた雲が、世紀末のように渦を巻き始めていた。

威圧感、不気味度、怪しさが増している。

「あそこが、この事件の最終ステージ……」

昂輝が呟くと、側に立つ憑き姫が昂輝の横顔を見上げた。
綺麗な顔つきだが、相変わらず表情が薄い。

そして時は過ぎていく。戦いへと続く為に。

幻の具現化

ぼつりぼつりと雨が降り始めた。やがて雨は強くなって行く。東和邸の敷地だけでなく、土砂降りの雨が町全体を激しく叩いた。このままでは町が水没するのではないかと思えるほどの豪雨である。東和栄光が寂しそうに呟いた。

「降って来たのお……」

降る雨の濃さが、カーテンを作り視界を阻む。

降る雨の音が、五月蠅く周囲の気配を掻き消す。

降る雨の量が、個々を孤立させて行く。

降る雨の存在が、東和栄光の心を曇らせていた。

「ふうう……」

溜息を零す禿頭の老人。

経済界の巨人とまで呼ばれた男が、今はやたらと小さく見えた。

かつて大きく見えた背中も、身長百五十八センチという数字通りの大きさに今は見えていた。

急に老け込んだようにも感じられる。

その背中を少し離れた場所から、息子や娘、それに孫たちが心配そうに窺っていた。

「ふうう……」

また溜息である。

東和栄光は窓際に立ち外を眺めていた。

雨の降る景色には、徐々にはっきりとし始めた幻影の城が聳えている。その足元には黒い傘をさす人影が幾つか窺える。

黒い傘が四つに白い傘が一つ。それに傘に入ることが出来ない大きな化け物の姿が一つ。

「私は君の探偵事務所を、正直嘗めていたやもしれない……」

東和栄光が呟いた。

隣には黒服黒帽子に黒いアイパッチを付けた中年男性が立っていた。ヴァルハラ探偵事務所の所長、三外眼一郎である。

大きな窓のあるパーティールームには、東和家の人々が揃っていた。それに二十人程の黒服SPたちも居る。

東和勝之の事件以来、黒服の人数も増えている。一段と警備が厳しくなっていた。

軒太郎たちが始めて東和栄光とこの部屋で話した時は、黒服たちの数は十人居るか居ないかぐらいだったが、今は倍の人数である。

部屋を出ても廊下や階段などいたるところに黒服達が立っていた。

屋敷内だけではない。野外にもドーベルマンを連れた黒服たちが何組も巡回している。

賊の入り込む隙間は僅かにもない。

しかし、これだけの厳重警備であっても東和勝之の行方は不明のままだった。

あれ以来姿を現していない。

「嘗めていたと言いますと、何をですか？」

眼一郎が片目で厳つい老人を見ながら訊き直す。

「私は幽霊や宇宙人やらをまったく信じていない訳ではなくてね……」

そうだろう。でなければ、息子が取り組むホムンクルスの研究に資金協力をしていないだろう。

「怪異なんぞ見たことはない。だから完全に信じている訳でもない。ただ、己が体験していないからと言って、不思議を否定するタイプでなくってね」

東和栄光が静かに語る。視線は雨の向こうを凝視していた。目に寂しさが映る。

「どちらかというと、体験していないからこそ体験してみたいし、不思議だから真実を解明してみたい。未知だからこそ、興味を抱くのだ」

一代で財を成す豪の者のなかには、現実的な事柄しか信じない者も多いだろう。分かり易く述べれば金しか信じない者たちだ。しかし、まったくの逆も多い。

ロマンを求めるタイプの富豪。夢が現実離れしているからこそ富も巨大に膨れ上がるタイプもいる。もちろん、その両方の考えを持つ者もいる。

この東和栄光たる敵つい富豪は、どちらかといえば後者であろう。

「君ら探偵を屋敷に呼んでから、あの幻の城以外に異常なものを見た。孫の勝之の怪人化もそうだが、あのフランケンシュタイン博士が作った怪物のような男。それに狼に変身する少年。

どれもこれもオカルトと括るよりも明白な怪異だ。普通ではない」

「お気に召しましたか？」

どや顔の眼一郎。

「ああ、この歳で出会ったのが残念なぐらいだ。もっと若い頃に出会って要れば、ワシの人生ももっと刺激的だったろうにの。実にほしいことだよ……」

「今からでもどうですか、我々と仲良くしましょう。私としても経営が難しい探偵業に、パトロンが付いてくれるとありがたいයිですのでからね」

「ふう、正直な男じゃな」

「よく言われます。そのせいで敵も多い」

二人が笑う。

しかし直ぐに東和栄光の視線が変わり、話す声も変わる。

「ところで眼一郎殿は、この一件についてどう考えている。やはりすべては竜栄の仕業か……」

「さあ、今現在では確かなことは言えませんが。推測で述べてよろしければ、竜栄氏が絡んでいる可能性は低くないでしょう」

「やはりか……」

普段は傲慢なほどの自信に溢れている東和栄光が、暗く俯く。

「探偵、聞いてくれるか……」

「何でしょうか？」

「私は出来の悪い勝之やマッドサイエンティストと化した竜栄を割愛した訳ではないのじゃよ。今でも他の子のように可愛い。出来が悪かったからこそ、普通でなかったからこそ、尚に可愛いのかも知れぬ」

「私にも子が居ます。お気持ちはお察しできますとも」

そう言い窓の外に見える黒傘の一つを見詰める眼一郎。親はどのような子でも可愛いのだろう。

「だから頼む。竜栄を……、勝之を……、無事にワシの元に帰してくれ。……頼む」

眼一郎の方を向いた矮躯の老人が、深く頭を下げた。

周りで見えていた東和家の一同が驚いている。

あのプライドが高く、強情で頑固な父が、祖父が、たかがオカルト

探偵ごときに頭を下げているのだ。しかも心からである。

東和栄光が頭を下げるなど、始めて見る光景だった。

「お父様……」

栄江と栄進が驚いていた。秘書の奥村と執事の細川もだ。一族の長、その東和栄光の秘められた愛情を今思い出す。

家族愛。

随分と懐かしい響きだと切なく思う。

「やめてください東和さん。頭を上げて」

眼一郎が困った顔をする。

「……ッ」

ひとり強く奥歯を噛むのは北枕夢子と密かに内通している理沙であった。

手に持ったレースのハンカチを握り締める。自分は何をしているのだろうと考え俯く。情けなくなる。

時はもうじき十一時を過ぎようとしていた。

外の豪雨はやみそうにない。激しい雨音がガラス越しに聴こえてくるなか、長女栄江の婿養子である陽史が何かに気付いて窓の外を指差した。

「あれは、……なんでしょうか？」

陽史の仕草に皆が視線を窓の外へと向けると、雨の中に大きなシルエットが映っていた。

「お城……ですか……？」

執事の細川が表情を引きつらせた。確かにシルエットは城に見える。

「本当に、あつたのか……」

秘書の奥村も全身を硬直させながら驚いていた。窓の外を見る黒服連中もざわめき始める。

見え始めたのだ。

今まで東和家の血族と、霊力を持ったヴァルハラメンバーにしか見えていなかった幻影の城が、ついに一般人たちにも見え始めたのだ。

それ、即ち。

「具現化したわよ」

雨降る中、外で待機していた憑き姫が言った。

「おっ、ついにか。さんざん待たせやがったよ」

「まったくくじやわい」

「わーい、わーい。やっとですのー。やっと暴れられますのー」

「さてさて皆さん、気張って行きましょうか」

「はい、軒太郎さん」

「うふふふ」

凜とした表情に重なる不敵な笑みが、ヴァルハラメンバーの怪しさを強める。

昂輝ですらその怪しさが馴染んでいた。

ヴァルハラメンバーが同時に一步前に出た。

その時である。

メンバーがさす傘に当たっていた雨の大粒が緩くなる。

小雨となったことに気付いた昂輝が傘を退けて空を見上げると、直ぐに小雨すらなくなる。青い空が見えた。

「雨が止みましたね」

「いいや、どうだろう」

軒太郎が傘を置むと、右を示すように指す。

「あれは……」

軒太郎が傘で指す方向を昂輝を見ると、そこには土砂降りの雨が降っていた。

一本線を引いた向こう側は、まるで別の世界のようにだった。

此方が映画館の客席で、向こうがシネマのスクリーンである。

「いったいどうなっているのですか？」

「あさね。まったくもって不思議だが、城の周辺だけ雨が降っていない様子だ」

憑き姫が昂輝の袖を引いた。

「今更この程度の不思議、どってことないわ。行きましょう」

「うん。そうだね、憑き姫。行こうか」

昂輝は笑顔で答えた。

極道コンビがさしていた傘を投げ捨てる。昂輝も真似て傘を投げる。憑き姫もポイツと捨てた。軒太郎は傘を地面に突き刺して放置する。お砂姉さんだけは、白い傘が自前なのか投げ捨てる事無くイゴールちゃんが乗って来たトラックの運転席にしまう。

「さて、行きましょうか」

仕切り直す軒太郎に返事を返す代わりに皆が前と歩き出す。

昂輝は何も訊かなかった。

作戦なんかない筈だ。

目指すは城の後門。

そこから正々堂々と乗り込む積りだ。

もう昂輝には理解できていた。
この人たちは、そういう人たちである。

いざ、幻影の城へ。

いざ、戦おう。

いざ、いざ。

いざ。

攻城戦（一）

「晴天だ……」

呟くように言ったのは、指きり魔の鴉尾こと侍だった。

軍馬に跨る五人が横一線に並んでいた。

右から侍、次に將軍、真ん中が公爵、続いて賢者、一番左が狩人である。

「私の空に、晴天が……」

公爵だけが黒馬に跨っている。

その公爵の姿は黒一色。

ウェーブのかかった長い髪も黒。物々しい甲冑も黒。背負うマントも黒。剣を納めている鞘も黒。いつもは持っていなかったカイトシールドも黒い。

まさに黒騎士である。

「あれが、ベロニカ嬢が言っていた戦いの合図だな。女だてらに粹な真似を」

將軍も騎士のなりをしていた。

公爵よりも一回り大きな体格に、茶色く色褪せた甲冑。片手に持ったハルバードを肩に担いでいる。

威嚇的なパンチパーマはヘルムに隠れているが、熟練した極道の眼差しは、ヘルムの隙間から鋭く光を放っていた。

総合するに、貴族の称号で威張り散らしているようなナイトでなく、戦場で磨き上げられた殺戮上等なベテランナイトに窺えた。將軍を名乗るだけのことはある。

「あの晴天を演出するが為に、ベロニカ嬢は最後の力を振り絞ったのでしょうね」

長い木の杖を持ちながら馬に跨る賢者が、黒雲にぽっかりと開いた空を見上げて言った。

緑色のローブを頭からすっぽりと被り、長い髭をフードの前からぶら下げている。

晴天から差し込んだ光が賢者のフード内を照らしていた。

「……」

賢者の隣で軍馬に跨る狩人が、日光が差し込んだ賢者の顔を覗き見ていた。

初めて見る賢者の表情。否、顔そのもの。

一度は賢者にしてやられた狩人だが、恥じる事無く賢者からゴールム作りを教わることにした。

勝つために学ぶ。

そして学んだ相手に勝つ。

それが狩人ことガンマン神田のやり方である。

そのような手口を彼は恥じるどころか進んでやるタイプであった。

しかしながらゴーレム作りを賢者から習っているさいに狩人が、彼の顔を見ることはなかった。

正確に表現するのならば、いつも頭から被ったフードで顔を隠しており、見えるのは口元と長い髭ばかりなのだ。

意図して表情を隠している様子なのである。

その為狩人は、今始めて賢者の顔を見たのであった。

その顔は、随分とやつれていた。

頬がこけている。目の下に黒いくまが出来ており、眼球がくぼんでいる様子だった。皺も多い。

随分と老けて見えたが、瞳は鋭く知的で紳士的な顔立ちであった。將軍とは別の強さを感じさせている。

將軍が跨る軍馬が、息を荒立てながら前足の蹄で土を掻く。乗り手に似たのか馬も気が荒いようだ。

「あの女もきつちり自分の役目を果たしたことだし、今度は俺たち男衆が気合を入れる番って訳だ。女ばかりにいい格好させてられかわな」

「合戦の始まりですな」

「お二人には期待していますよ、將軍殿に賢者殿」

「ちっ、俺たちはおまけか」

侍がふてくされた。可愛くはない。

言葉に出さなかったが狩人もすねている様子だった。やはりこちらも可愛くはない。

「なんにしてもだ。戦いの始まりだ。約束通り戦陣は俺が勤めさせてもらうぜ、公爵。賢者さんもよ、文句はあるめいな！」

「うむ、話し合いで決まったことですからね。先行はお任せします。同意です」

「オーク兵三千匹を引き連れ、是非に悪夢城の正門を打ち破ってください。期待していますよ、将軍」

「おうよ！」

将軍の瞳が鋼のヘルムの下で脅嚇に染まる。本職の中でも上級の色を見せていた。

鴉尾や神田は勿論のこと、坂東や高村よりも格段の威圧感を備えている。

「流石は将軍。期待が出来る」

公爵の台詞に成算が窺えた通り、極道で成り上がっただけの男であると周囲の者たちが納得していた。

非道たる集団的暴力の指揮能力だけならば、この男は確実に一流に属するだろう。

黒雲渦巻く空が割れて晴天が光を導く。

この夢の世界を形勢するは黒騎士の公爵なれど、作り上げたのはベロニカと名乗った小説家の靈魂だった。その幽霊小説家の些細な戯れが、この世界に晴天を造り出した。

暖かい光が、これから合戦の場となる悪夢城を天から照らしたすなわか将軍がひとり列を外れて栗毛の軍馬を走り出させる。

「野朗共、準備は出来ているだろうな！」

三千のオーク兵が將軍の言葉に野生的な咆哮を上げ、手に持つ武器や盾を叩いてけたたましい金属音を鳴らす。

熱り立つて居る。耳障りな音と猛獣の奇声が鳴動と変わり大地を揺らしていた。

將軍の馬がオーク兵三千の最前列で停止した。馬上の將軍は、ハルバードを片手に切っ先を悪夢城に向けた。

「作戦はひとつ、城門の破壊だ。城壁ごとぶち壊す勢いで、いてもうたれや」

大きく息を吸いこむと胸を膨らました將軍が、ありったけの気迫を込めて吼えた。

「突撃！」

將軍の突撃号令にオーク兵が一斉に走り出す。碁盤の升目の如く綺麗に配列されていた陣形が崩れて血気盛んな順に悪魔城を目指す。

城攻めの始まりである。

攻城戦 (二)

突撃に地が揺れる。

オークたちの雄叫びに空気が熱くなる。

殺気だけが豚面を凶暴化させていた。

これでは訓練された軍団とは呼べない。ただの人海戦術の津波。ただの蛮族の襲撃。

豚で出来た茶色い土泥の波が正門前に押し寄せるようなものだ。

「おい、何か打ち上がったぞ？」

賢者の横に居る狩人が遠くを見ながら言った。彼は目が良い。視線は悪夢城の上空を見ていた。

「あれは何だ？」

確かに黒い物体が連続して幾つも真上へと打ち上げられて行く。かなりの数である。

そして一定の高さまで上がった複数の物体は、オークの群れ目掛けて急降下して行く。

防衛。

「ぶひいひいひいひいひいひい！！！！」

突然オーク兵の群れのあちらこちらから断末魔の悲鳴が上がった。上空から降ってきた黒い物体にオークたちが次々と押しつぶされて行く。

地響きと悲鳴が周囲に広がりながら混ざり合う。

「城からの砲撃かよ。ちゃんと防衛能力を備えているようだな」

狩人が感心しながら述べている最中にも城からの砲撃は続く。

飛んで来たのは黒い鉄球。大きさは、押しつぶしたオークよりも一回り大きいぐらいであった。

だが、オークたちの進行は止まらない。

何が飛んでこようと、仲間たちがぺしゃんこに潰されようとも、臆する事無く突撃を続けた。

しかし、突然ながら地に落ちた鉄球が形を変えて動き出す。

鉄球を避けて通ろうとしたオークたちの頭が幾つか空に飛んで、汚い血飛沫を散らしていた。

鉄球が変えた姿は、巨大なヤシガニ。黒い鉄球を貝殻代わりに背負っていた。

そして、大きな鋏でオークの首を挟んでは引っこ抜くように切り落として行く。

更に悪夢城の城壁から、ボトリボトリと黒鉄球が落ちて来てはヤシガニに変形するとオークたちに向かって突進して行く。

鉄球が重いのか足は遅い。

正面からぶつかり合う二種類の怪物軍団。

オーク兵と鉄球ヤシガニが激突する。

パワーで押し負けたオークたちが轢き潰されたり撥ね飛ばされて行く。

数ではオークたちの方が圧倒的であったが、戦闘力では鉄球ヤシガニの方が強力であった。

オークたちの持つ粗悪な武器では、黒く硬いヤシガニの甲羅に対してなかなか歯が立たない。だが、鉄球ヤシガニの鍔はオークが着込んだ鎧を難なく貫き無残な姿に変えていく。

所詮は泥や枯れ木で作られたパットオークでは、こんなこともあろうかと準備されていたガーディアンモンスター鉄球ヤシガニには敵わない様子であった。

戦力の差が浮き彫りと成り始める。

「何をやってやがる野郎共。大筒だ。大筒兵に任せろ！」

「ぶひい、ぶひい！」

馬上から将軍が指示を飛ばすと、鉄球ヤシガニの周辺からオーク兵が引いていく。代わりに大きな筒を肩に背負ったオークが前に出てきた。

「バズーカか、さすが親分だ。備えがいいぜ！」

大筒を担いだ兵士たちを見て狩人が褒めちぎる。

そこに侍が反論を入れた。

「だがよ。空から降ってきてても壊れない鋼鉄のモンスターが、バズーカ砲で吹き飛ばせるのか？」

「侍、お前はやっぱり勉強不足だ。腕っ節に自信があるからってワッパを振り回して特攻しか考えないからよ、そんな意見しか出な

いんだぜ」

「何が言いたい、こんにゃろっ……」

「ひとり殺すならばポン刀で十分だ。十人殺すならばポン刀に血油がこびり付いて難儀になる」

日本刀とは、切れ味では世界中の刃物の中で一番に近い。

しかしそれも最初のみである。人を斬れば血油が付く。血油は素人が思っている以上に日本刀の切れ味を妨げて行く。

時代劇で見られる百人斬りを本当に行なうには、最低でも十本の刀が必要となってくる。

だが、兵器は別である。

拳銃や機関銃は、たった一丁で何百人も殺害が可能だ。もちろん玉の数だけだが。

侍こと指きり魔の鴉尾は、刀使い。

狩人ことガンマン神田は、拳銃使い。

侍は刀一本で戦うが、狩人は違う。様々な殺戮兵器駆使して戦う。

鴉尾を人殺し屋と呼ぶならば、神田は戦争屋である。

そして神田は、この世界のルールを鴉尾異常に理解していた。

「まあ、普通のバズーカならば効かないだろうな。だが、あのバズーカの弾丸はちと違う」

「何が違うんだ……？」

「魔法だよ」

「ま、ほう？」

「そう、弾丸に魔力を注ぎ込んである。だから効くんだよ。相手が魔法世界の住人ならば特にだ」

「へ………」

松明を持ったオーク兵が、大筒の後部から出ていた導火線に点火すると、戦場のいたるところで火薬の炸裂音が響き渡る。

大筒が火を噴いた。

鉄球ヤシガニが大筒の火力に、次々と吹き飛ばされて行った。

鉄球部分は硬いがヤシガニ本体に大筒の魔法砲弾を打ち込まれると流石に破壊されて行く。

「なあ、効いているだろう」

「だな………」

大砲部隊の手柄を自分の手柄の様に語る狩人。

だが、まだまだ鉄球ヤシガニは全滅した訳でない。オークたちとの交戦を続ける。

戦力は五分と五分。若干オーク兵たちが優勢に窺えた。

その時である。

「じゃあ、あれはどうするんだ、お前ならよ？」

言う侍が、いやらしい表情で悪夢城を指差した。

悪魔城の上空には、幾つもの鉄球が再び打ち上げられていた。

鉄球ヤシガニの第二波。

見上げる狩人が不敵に笑う。

「おもしろい。今度は俺が相手をしてやるよ。公爵、助太刀はOKだよな？」

「私は一行に構わない」

「よし、決まりだ。行ってくるぜ！」

馬を走らした狩人が、自分で作り上げた赤いゴーレムの横に陣取と、ゴーレムの瞳が赤く光って動き出す。

「一発行くぜ、レッド」

ゴーレムが右手で背中の矢筒から丸太のような矢を引き抜くと、弓に添えて弦を引き始めた。

どうやら赤いゴーレムは、狩人の意思通りにコントロールできるようだ。

狙いを定める矢には隙間が無いほどの五方星札が貼り付けられている。魔法の矢なのである。

打ち上げられたヤシガニ鉄球が上昇限に達する頃、レッドゴーレムが矢を放つ。空気を貫きながら、弧を描くことなく真っ直ぐに飛ぶ極太の魔矢が、降下を始めようとしている鉄球の群れに飛び込んで行く。

だが、矢が貫き破壊できた鉄球は、僅か三体。まだ三十から四十体

の鉄球が残っていた。

「ぱあくと、弾ける！」

狩人が言うや否や、鉄球の群れに浸入した魔矢が黄色く光った。そして五法星札から無数の閃光が四方八方に発射される。

誘導機能が搭載されたレーザー光線が、ヤシガニ鉄球を撃ち貫き爆破して行く。

「すげー、やるな……」

悪夢城の上空が、爆発した炎で赤く染まった。

爆炎が轟く。

やがて爆音と爆風が順番に公爵たちのところまで届く。

ヤシガニ鉄球の援軍が、たった一発の矢により阻止される。

攻城戦 (三)

「派手なまねしやがって！」

赤く燃え上がり黒煙を散らす空を將軍が見上げていると、撃墜された鉄球ヤシガニの破片が燃えながらバラバラ降って来る。まるで火の雨だ。

馬上から空を見上げていた將軍に敵が迫る。一匹の鉄球ヤシガニが鉄を広げて襲い掛かった。

「じゃまだ、鬱陶しい！」

己に迫る敵に気付いた將軍が、ハルバードを縦に振り下ろした。

鳴り響く鋼の破壊音。

ハルバードの一撃が襲い掛かった鉄球ヤシガニ斬り砕く。將軍の振るったハルバードの斧激は、まさに『斬り』と『砕く』であった。

桃太郎の桃の様にぱかりと割れた鉄球ヤシガニが、次の瞬間衝撃波で吹き飛んで木っ端微塵と化す。凄まじい一振りであった。

「うざったい甲殻類めが。ラーメンの出汁にされたくなければ引込んでやがれ！」

凶悪な視線を悪夢城の正門に戻す將軍が、ハルバードを片手で軽々と振り回しながら大声で檄を飛ばした。

気合の言葉が何処までも轟く。

「野朗共、ぐずぐずしていると新米に手柄を持っていかれるぞ。とつと敵を蹴散らし城門を打ち破ったれや！」

新米とは狩人のことだろう。

奮起したオーク兵たちが恐れる事無く前進する。残った鉄球ヤシガニに群がり数でものをいわせて押しつぶしていった。

ついにオークの波が鉄球ヤシガニの防衛線を突破して城門に辿り着いた。

そして、十メートル程の大きく長い丸太を二十匹がかりで抱えた部隊がオークの群れの中から登場する。

丸太で城門を釣鐘のように叩いて破壊する積りなのだろう。二十匹が息を合わせて突進して行く。

だが。

「ここは我が主の城。勝手に城門を傷付けられては困りますポ！」

何処からともなくキンキンの甲高い声が聞こえてきた。

それとほぼ同時に無数の武器が城門の上部から下に向かって順々に生えるが如く飛び出してくる。

「なんだ!？」

流石に将軍も驚いた。

ソード、ブレード、レイピア、サーベル、シミター、メイス、モーニングスター、スピア、ハルバード、アックス。様々な切っ先を持った武器が城門を守る様に突き出した。

まるで刃の壁。

その生え出る武器の波は止まる事無く城門を過ぎて地面にまで及んで広がって行く。

「ぎいややや!!」

上がる悲鳴の数々。オークたちが血を噴いた。

地面から生え出ながら広がった武器の刃が、丸太を抱えたオーク兵をはじめとした五十匹ぐらいを、股間から無残にも串刺しにしていたのだ。

悪夢城の門前が、生え出た無数の切っ先によって武器畑と化する。

串刺しにされたオークたちの中には息絶えず呻きを溢している者も居た。

無残で残酷な景色である。

そして暫く経つと生え出た武器が地面に戻って行き、串刺しにされたオーク兵がパタパタと倒れて行く。

威嚇の如く飛び出ていた城門の刃も黒い鋼の中へと消えていった。

突然の謎めく攻撃に二の足を踏むオーク兵たち。残った鉄球ヤシガ二と交戦しているオーク兵意外は今の攻撃に沈黙してしまう。

「なにもんじゃい。隠れてねえ〜で出てきやがれ！」

無数の切っ先に威圧され興奮が冷めてしまったオーク兵たちに代わって、馬上の将軍が気迫溢れる蛮声を怒鳴らせた。

「よかろうポ。及びとあらば、即登場ポ」

甲高い奇声と共に表れる人影。それは五メートル以上ある城壁を飛び越えて鉄の城門前に降り立った。

「ポポポポポオオオー」

豚の屍と共に横たわる城門破壊用丸太。その上に着地した人影は、声だけでなく姿形も怪奇で可笑しな風貌をしていた。

「何か可笑しな輩が現れたな……」

「そのようすな、公爵殿。あれはなんでしょう……」

遠くの馬上から見ていた公爵と賢者も呆れ顔を見せる。

二人を呆れさせた人影は、銀色鱗のスケールメールを纏っていた。腰ベルトの左右には一本ずつのサーベルが煌びやかな鞘に収まりぶら下がっている。

その鱗鎧から伸び出ている両腕は細く長いだけでなく、黒くヒラヒラとした蝙蝠のような翼手が生えていた。

おそらくはこの翼手を羽ばたかせて城壁を越えてきたのだらう。

そして両脚は鳥のものである。鷹のような鋭い爪で、がっちり丸太を銜え込んで立っていた。

何よりも可笑しいのは頭部であった。

首から上が白みかかった茶色い鳩なのである。

つばらな丸い瞳に小さな嘴。怪奇な胴体に比べて可愛らしい表情であった。

戦場の鳥人間である。

キンキン声が響く。

「我が武器庫砦のハルパスと申すポ。訳有つてこの悪夢城の正門を警護しておりますポ。あなた方が何者かは存じませんが、我が預かりし門を破壊されると申すならば、招かれざる来訪者と見做して排除いたしまするポ」

語尾が可笑しいが人語を話していた。

攻城戦（四）

公爵が黒い髪をかき上げながら関心気な顔をした。横で馬を並べる賢者がそれに気付いて声を掛ける。

「公爵殿は、あの化け物をご存知で？」

「名前だけならば、書物で読んだことがある」

「書物とな？」

「ソロモンですよ。ソロモンの霊七十二人の一人、ハルパス。またはハルファスとも呼ばれている地獄の伯爵で、武器で溢れかえっている砦に住んでいるとされる魔人です」

「ソロモンとは、また古めかしい伝説が出てきましたな。流石は夢の世界、面白いものが様々見られて愉快なことだ」

「あれが本物のソロモンの霊かは分かりませんが、そう語るだけの存在なのかも知れません。事実、一瞬で城門前のオークたちを退けた」

「なるほど。確かに、この世界では本名を名乗れない。ならば、おそらくは語りでしょう。恐れるに足らん敵。將軍に任せておけば問題は無いでしょう」

賢者はあれが偽者だと言っている。

「あれもまた、夢に迷い込んだ何者……。その可能性も高いやもし

れないか」

「ここは白昼夢。何が出てこようと我ら同盟者が蹴散らして見せませよ」

「だと、よろしいのだがね」

「まあ、オークの数が随分と減ってきたようですし、正門の破壊は私がやりましょう」

「もう貴方自らが出ますか、賢者殿」

「ええ、私には兵糧攻めをやっている暇はないものでね」

そう述べた賢者が左手に持った木の杖を空に翳す。すると横一列に並んで待機していたゴーレム軍団二十機が、のしのと前進を開始する。

身長三メートル、横幅はアメフト選手の肩幅を連想させる程に広い。何トンあるかも計りきれない体重に地面が減り込み巨大な足跡を残す。

ゴーレム兵の足取りは遅いが、足並みが揃っていた。同時に踏み出す一步一步に地が揺れて、放置されたオークの屍がゆるりと弾む。

「ちっ、賢者の野郎が動き出したか……」

揺れる大地に気付いた将軍が後方を振り返って舌打ちを溢した。そして引き締まった強面で前を向き直すとハルパスを睨む。

「この鳥野朗、焼き鳥にしてやるわい！」

怒声と共に軍馬の腹を蹴った将軍が、ハルバードをランスの如く突き出し突進して行く。

「まずは串刺しだ！」

体制を低くして軍馬を走らせる将軍の横に、同じ速度で何かが並走した。

横を見て確認する将軍。

それは馬を乗り捨てた侍の姿だった。

「手前は」

侍はポニーテールのような鬚と色褪せた黒い袴を靡かせながら、軍馬と同じ速度で走っていた。

侍がチラリと将軍を見てから言う。表情が自信に満ちている。

「親分、ここは俺に任せてもらえないですか。相手が一騎当千ならば、此方も一騎当千でタイマンですよ。そのほうが、花があって面白いでしょう」

将軍は少し悩む。

確かに鴉尾こと侍は、並みの人間よりは強い。しかし、坂東たちに比べれば雑魚だ。正直、強さという面だけでなく、人間性も信用ならない。

だが、ここは夢の世界。事は変化するかもしれない。強さに目覚め

る可能性が十分ある。

將軍が姿勢を戻して軍馬の手綱を引き寄せた。速度が落ちる。

「おもしれえ、やってみる」

「へい！」

返事の後には走る速度を上げた侍が、一気にハルパスに向って直進して行く。腰の刀に手を添えていた。

「豚野朗共、そのけそこのけ俺様を通る。轢き殺されたくなければ、とつと道をあけやがれ！」

猛る侍の台詞と突進に気付いたオーク兵たちが、左右に分かれて道をあける。

モーゼが海を割って道を切り開いたように、侍とハルパスとの間に綺麗な道が出来上がった。

左右のオークたちに見送られながら駆け抜けて行く侍の表情は、真剣さの中に外道の微笑みを含んでいた。

武器庫砦のハルパスが赤くつぶらな瞳で侍を睨む。

「ポツポツポー、貴方がお相手ですかポ？」

「そういう訳だからよ、切り刻んで空揚げにしてやるぜ、鳩野朗！」

「その敵意、上等ですポ。返り討ちにしてあげまするっポ！」

ハルパスが腰のサーベルを二本同時に引き抜いた。若干の湾曲を見

せる刀身二本が熱い空気をX字に切り裂く。

「ぬかせや、鳩ポツポが！」

「侮辱はゆるさないっポ。罰として、我が剣術の餌食にしてやるっポ！」

大きく胸を開きながら両腕の翼手とサーベルを広げた豪胆な構えを見せるハルパス。

その構えを見て侍が、見せ掛けでないことに気付く。

僅かに押した腰の高さ。脱力に曲げられた両膝。正中腺に沿っての重心。間違いなく長い年月の間、修行された構えであった。

「二刀流か！？」

「否っポ。我は二刀流であらずポ」

ふっ、と鼻で笑うハルパスがサーベルの一本を逆手に持ち替えて、足元の丸太に突き刺した。

つばらな光が妖力に赤く輝く。

「我は億刀流ポ！」

ハルパスが乗る丸太からトゲトゲしく飛び出る無数の武器。丸太が一瞬で剣や刀によって針鼠のように変わる。

そして生え出た刃物が怒涛と化して大地に広がりながら走り来る侍目掛けて進んで行く。

「また、それか！」

攻城戦 (五)

低い姿勢で快走する侍。左手は日本刀の鞘を固定して、左手で束巻きししっかりと握る。

ハルパスの放った切っ先の波が迫るが侍は刀を抜かない。驀進に間合いを溜める。

「おや、居合い抜きポっね」

「如何にも。知っているか、鳩ポツポ」

「実戦で見るのは初めてですが、姿勢から読み取れましたポ。実に興味深いっポ」

鞘を握る左手の親指一本が、鏢を押して僅かに刀を抜く。銀光に煌く刀の鎧が殺意を放つ。

そして、走るのをやめた侍がクラウチカグスタートの如く低い姿勢で地を滑った。履いた草鞋から砂埃が舞い上がるが、助走の勢いは止まらない。

「そのくだらない技。俺様の必殺居合いで薙ぎ払ってやるぜ！」

言葉同様に、自信に満ちた笑み。台詞に嘘はない。

生え迫る無数の切っ先に、侍が居合い抜きの一撃を繰り出した。瞬間の一刀が黄色い光を撃ち放つ。

「必殺、廃字刀苦羅々・閃光烈斬！」

居合い抜きに振られた逆袈裟斬りの剣筋にそって飛び行く黄色い閃光。レーザー光線の斬激が生え出た無数の武器を薙ぎ払って行く。

「どつだ！」

カマイタチに根元から斬り裂かれて倒れて行く稲穂のようだった。居合いのレーザーに斬られた武器の断面は、高熱で焼き切られたように赤く爛れている。

「なんとつポ！」

己の技を打ち破りながら迫る斬激レーザーを避けるためにハルパスが宙に跳んだ。両手にサーベルを持ったまま翼手を広げて空を舞う。

空を自由に飛びまわるハルパスを見上げる侍が、刀の刃を反しながら垂直ジャンプで逃がすまいと高さを合わせる。

「空中に飛べば逃げられると思うなよ、鳩野朗が！」

「ポツポ！」

空中で攻防。

今度の先手は侍だった。

「喰らえ、追加閃光烈斬！」

侍が振るう水平斬りの剣筋に輝くレーザーの攻撃。高熱のレーザー斬激がハルパスに襲い掛かる。

「ポツポ！」

ハルパスが必死に回避を試みる。大きく広げた翼手を力強く扇ぎ、更に高く空へと舞い上がる。高度上げたハルパスの足元を居合いのレーザーが音も無く過ぎ去って行く。

難を逃れたハルパスが下を見る。

「なかなかやりますっポ。しかし、それでは我に勝てませんポ」

「ぬかせや、鳩野朗。それで逃げ切れると思うなよ！」

背中から降下を始めた侍が、刀を両手で握り締めながら振り被った。狙った獲物は逃さない。そのような鋭い眼差しである。

侍の攻撃が続く。

「これで決めてやるぜ。三連閃光烈斬！」

空中でありながらも豪然たる縦振りの剣技が、三発目の必殺レーザー光線を繰り出した。

「なんのなんのっポ！」

これ以上の回避は不可能と悟ったハルパスは、両手に持ったサーベルを体の前で交差させた。

妖力につぶらな瞳が輝いている。またもや妖術を使うのだろう。

「我が召還できるのは武器だけでないっポ！」

言葉の後に何枚もの盾がハルパスの眼前に現れる。

その盾もまた様々であった。

タワーシールド、カイトシールド、ドームシールド、バックラー、ナイトシールド。まだまだ名前の知れない種類の盾もある。なんともバリエーション豊であった。同じ形を見せる盾は一枚もない。

「これで、どうだっポ！」

盾一枚では防ぎきれないと読んだのだろう。召還された複数の盾が重なり合いハルパスの姿を覆い隠す。

その盾の表面をレーザー斬激が火花を散らしながら撫でた。赤い一文字が刻まれる。

「ちっ、盾かよ……」

三発目のレーザー光線が数枚の盾を焼き斬る。だが、レーザー光線がハルパスまでは到達しない。完璧に防がれた。盾の隙間からハルパスの鳩面が覗く。

「ほしかったポねー。ポツポツポツ」

「にやろっ……。鳩の分際で！」

嘲笑うハルパス。鳩の赤くつぶらな瞳が、侍の悔しさを煽って怒りに変えていく。

ハルパスが妖術で召還した盾を消して、今度は自分の周りに複数の武器を召還した。すべての武器の切っ先が、地上に着地した侍の方

を向いている。

「今度はこっちの番ですポ」

上空からの攻撃に優位を感じたハルパスが不敵に微笑む。

その瞬間であった。

空気が呻って震えた。その轟きが殺気を秘めながら猛スピードでハルパスに迫る。

「なんだッポ！」

ハルパスが気付いた時には遅かった。己の背後から迫る丸太サイズの弓矢。

狩人が操るレッドゴーレムの攻撃である。

巨大な弓が、弩級の矢を打ち出してハルパスを打ち落とそうとしているのだ。

完全に不意を付かれていた。ハルパスの焦りが全身から見取れた。

「ポポポポポオーー！！！」

大味な不意打ちに驚きながらも回避を試みるハルパス。しかし体を捻りギリギリに躲そうとするのがやっとである。

「ポオオオオオオオ！」

空中でガツリと音が鳴った。

ハルパスが弩級の矢を避けようとしたが避けきれずに攻撃を喰らっ

た音である。

攻城戦（六）

「よっしやー、ヒットだぜ！」

片手の拳を握り締めて狩人が、小さくガッツポーズを取った。無邪気である。

「ポオオーーーーー！」

直撃こそは免れたが、丸太のような矢が背中をかすめたハルパスは、バイクにでも跳ね飛ばされた小学生の如く錐揉みしながら墜落して行く。

そしてハルパスは、悪夢城の壁に激突してから地面に落ちた。

「ポ……ポツポ……ポポオ……ポオ……」

ピクついている。まだ、ハルパスは生きているようだ。

吼える侍。

「おいごらあ、狩人。テメー、なに人の獲物を横取りしてやがるんだあ、ああー！」

赤いゴーレムの横で軍馬に跨る狩人が悪びれた様子もなく平然と応える。

「馬鹿言っちゃあ困るぜ、侍君よあ。体育館裏で喧嘩しているガキじゃあねえくんだ。ここは戦場だぜ。戦場じゃあ、横取りも糞もねえんだよ」

武道家崩れの鴉尾と、戦争屋もどきの神田。

一対一を好む侍。多数対多数を好む狩人。戦いに関しての二人の考え方の違いがはっきりと現れる。寧ろ、この状況ならば、狩人の主張のほうが正論かもしれない。

他人事のように将軍が笑いながら言う。

「こりゃあ、おもしろいわ。侍、ぼやぼやしていると、横から手柄を全部奪われるぞ」

そう言い豪快に笑った。

「けっ、畜生めが」

納得いかない表情で刀を強く握り締める侍。柄巻きが握力にギョツと音を立てる。

「ポ……ポポポ……。おのれ……。おのれっポ……」

銀色に輝いていた鱗鎧もポロポロに成り、みすばらしい姿に変わったハルパスが、翼手の腕を壁に付きながらもよるよると立ち上がる。小さな嘴の隙間からドス黒い血が流れ落ちた。内臓を損傷した様子だ。

だが、ハルパスのつぶらな瞳には、まだまだ闘志の炎が地獄の業火を思わせるほどに燃え上がっていた。

「おのれっポ。この武器庫砦のハルパスを愚弄しおつてポ」

ふらつきながらも執念で立ち上がるハルパス。

そのハルパスに大きな影が掛かった。

「ポ？」

何事かと振り返るハルパスの視界に岩で出来た巨人の姿が入ってくる。

岩巨人は、黄金の鎧を纏っていた。

その三メートルある岩巨人を見上げれば、肩に一人の老人が長い白髭を靡かせながら立って居る。

手の込んだ刺繍が惜しげもなく施された立派で豪華な緑色のロープ。そのロープのフード内から鋭く冷たい眼光が、傷付いたハルパスを冷酷に見下ろしていた。

賢者である。

「ポ……ポポポ……」

ハルパスと賢者の眼差しが合う。

恐怖。

絶対零度の中でも行動可能な黒い悪魔のような達眼が、圧倒的勢いでハルパスの視線を押し切り心中に液体窒素のような殺意を流し込む。

凍り付くはハルパス。

もう、言葉すら漏らせない。

冷えて行く体温。

血液が極寒の温度まで下がり、小刻みな震えが脊髄から全身に広がって行く。

先程までの興奮が凍結してしまっていた。

眼力だけでハルパスは、賢者の前に敗れ去ってしまう。

「……ポ」

敗北。

それにハルパスが気付いた瞬間、戦意と自尊心が心中で凍りついた薔薇のように脆くもバラバラに砕け落ちて行く。
もしも心がバナナであれば、釘が打てただろう。

「君の負けです。敗北を受け入れなさい」

念を押す一言。

賢者の抑揚の少ない喋り方に続いて金色のゴーレムが片脚を大きく振り上げる。

「エンドです」

「ポオ……」

蹴り脚がハルパスを狙っていた。

賢者が木の杖をハルパスに軽く向ける仕草を取る。踏み潰せという合図だろう。

そして強烈なストンピングがハルパスの上半身に踏み降ろされる。グシャリと水っぽい音と共に血の花が咲き広がった。

「あ、あつけねえ……」

金鎧を纏ったゴーレムにハルパスが踏み潰されるのを見ていた侍が、全身を脱力させながら呟いた。顔や姿勢に緊張感の欠片も残っていない。

がっかりである。

もう、横取りされた怒りも冷めていた。それどころか若干ながらハルパスに同情していた。刀を鞘に戻す。

賢者が率いるゴーレム兵団が、オーク兵よりも前に立つ。

「將軍殿、城門の破壊は、貴方のオーク兵では難儀と見ました故に、私のゴーレム兵が打ち破ります。異存はないですよな」

僅かに拗ねた顔をする將軍。

「まあ、しゃあねえな。こっちの兵にはまだ役目がある。城の中を制圧するのにあんたのゴーレムじゃあ、人並みサイズの通路は狭くて歩き回れないしなあ」。

城門の破壊はしかたねえ、譲るわい」

「適材適所ですな。流石は極道の長、柔軟な考えをお持ちで助かります」

「ふっ、ぬかせや、インテリ爺が」

ドスンドスンと大地を踏み鳴らしながら金のゴーレムが両脇二体の
ゴーレムを引き連れ前が出る。

三体が正門の前に立った。

この三体のみで巨大門を破壊突破する積りなのだろう。

攻城戦（七）

「少々乱暴にいかせて貰います。行け、ゴーレム！」

賢者が肩に乗るゴールドゴーレムの左右に控えていたノーマルゴーレム二体が巨大門に向って走り出す。

勢いを乗せて肩から突っ込んだ。全体重を乗せたタツクルである。

鉄と岩がぶつかり合う物々しい音が轟く。

二体のダイナミックタツクルに城門が揺れて、更に城壁ごと大きく揺れる。

「おお、こりやすげー。ナイスな体当たりだ。両国でもこんないいあたりは、なかなか見られねえぜ」

ゴーレムのタツクルに侍が腕を組みながら感心して見学していた。

賢者が杖の先を巨大門に向ける。

「もう一度いきなさい」

賢者の命令に従い間合いを取り直す二体のゴーレム。

助走の距離を作り上げると二体は再び全体重を突進で倍増させ肩から突っ込んで行く。

先程よりも激しい音が轟く。

二回目のタツクルのほうで、前回のタツクルよりも威力が大きいように窺えた。

体当たりを喰らわせた二体のゴーレムの全身に亀裂が走る。
だが、ダブルタックルをお見舞いされた巨大門もぐらりと揺れた。
二体のゴーレムが砕け落ちると同時に二枚の城門も倒れて行く。
門とゴーレム、相打ちである。

「まあ、こんなものでしょう」「ゴールドゴーレムの肩の上で溜息を
付く賢者。

しかし、落ち込んだ表情ではない。寧ろ溜息の中に勝利の余韻が混
ざっていた。

「お見事だな、賢者さんよ。あとは俺様のオーク兵に任せな。城内
をあっさりと制圧してやるわい」

「なんのなんの、私も参りますよ」

賢者の金ゴーレムがのしのしと前進して門を潜る。その横をオーク
兵たちが駆け足で抜けてついていた。

倒れた城門二枚がオーク兵やゴーレムたちに踏み潰されて行く。

「ここは……」

賢者が城門を潜り城内前の中庭に入ると、その不思議な景色に驚き
と戸惑いの声を溢した。

賢者が見たものは、あまりにも広い中庭である。

悪夢城の外見は、百メートル四方の城門に囲まれた威圧的な城の筈
であったが、門を潜ってみると城本体までの距離が二百メートル以

上あるのだ。

外から見た様子と明らかに可笑しな距離感であった。

そして、その広い庭にはレンガ造りの道が城まで一本続いているだけで、あとは絨毯のような芝生と大小様々な植木が窺えるだけである。

手入れされた綺麗で長閑な庭だが、その奥には殺伐と佇む悪夢城が今まで通り聳えていた。

それだけは変わらないが、心なしか悪夢城も大きくなったような気がする。

軍馬に跨った将軍が賢者の乗るゴーレムの横に並ぶ。将軍もまた驚いた表情を見せていた。

賢者に問う将軍。

「なんだこれはよ。なあ、賢者さんよ、解り易く説明してくれねえか？」

「これは空間が歪んで敷地が巨大化していますな……。あと、城も……」

「確かに大きくなっている。なんでだ。意味が解らねえぞ？」

「意味も理屈もありませんよ。ただ、外から見た景色と、中に入ってから景色が違うだけです」

「やっば、わかんねえは」

「解らないのならば、考えないでください。その方が容易いでしょう。さあ、オークたちを使って城を制圧に向ってください。私もゴーレムを進行させて援護いたしますから」

理屈で現状を説明が不可能と悟った賢者があっさりと開き直る。将軍も賢者に習った。開き直りを受け入れる。

「ああ、わかったよ。何も考えずに城を目指すぜ。行けー、オーク兵！！」

将軍の号令にオークたちが遠く離れた城を目指して走り出す。

だが、新たなる障害が彼らの前に現れる。

いたるところで突然ながら大地が盛り上がり、そこから土を突き破り巨大な蔓が伸び上がった。

あちらこちらで大地を緑の蔓が突き破り、ドーンドーンともった音を轟かせていた。

広がった庭全体が、巨大蔓植物の密林と化す。

一本であれば童话ジャックと豆の木に出てくる豆の木のようなものである。異なるのは、生き物の如くクネクネと動き回っている姿と数だけであった。

ざわめくオークたちが眼前を阻む巨大蔓のジャングルに進行を静止させた。

近づけば蔓に絡みとられて絞め殺されるのが、容易くイメージ出来たからだ。

しかし、この蔓の間を抜けて進まなければ、目的地である悪夢城に辿り着けない。

城の制圧。ナイトメア公爵の討伐どころではない。

解っているが、足が前に出ないオーク兵たち。

巨大蔓の踊る姿に躊躇い植えつけられる。

「ちっ、怖気付いたか……」

蔓の密林を前に足を止めたオーク軍団を見て将軍が、苦虫でも噛み潰したような悔しい顔をした。

空想の産物であるパペットオークだが、死にたくないという感情を持っている。

将軍はオークたちに己で考えて行動が取れるようにと、人間が持つ感情を幾つか与えた。

本来ならば警戒心を与えたつもりだったが、それが恐怖心に成長してしまつたらしい。

無能に感情を与えるという作業は、やはり難しいようだ。そこに将軍が気付く。

「今度は何だ!？」

オーク兵に混ざつて先陣を切っていた侍も足を止めていた。

そして思わず叫んだ侍の質問に賢者か答えを返す。

「異常成長を起こした蔓植物のようですな」

「そんなの見れば分る!」

じゃあ訊くなよと、遠くで狩人が茶化しているが、本人の耳まで届いていない。

軍馬上から将軍が、大声で侍に向って命令を飛ばす。

「おい、侍。さっき見せたレーザーの抜刀術で、あのクネクネした豆の木を全部薙ぎ払え。そのぐらい簡単だろ！」

「OK、親分。あんな化け物植物、俺様の廃字刀苦羅々で一発だぜ！」

侍の威嚇的な眼光が凄み宿して蔓を睨む。

「廃字刀苦羅々・閃光烈斬！」

将軍の命令に従い姿勢を低くする侍が、居合い抜刀の一撃を繰り出した。キラリと輝く瞬速の刀身が光速からの閃光を撃ち放つ。

横一文字の太刀筋からレーザー光線が蔓の壁を焼き斬りながら倒しに行く。

バタバタと倒れる緑の蔓。

しかしすべてではない。倒れた蔓の向こうには、更に蔓の木が踊っていた。

「まだまだ！」

横に振るった刀の刃を反す。

「廃字刀苦羅々・追加閃光烈斬！」

二発目のレーザーが、一発目の太刀筋とは逆の方から蔓の森を撫でる。

しかし、何本かの蔓が倒れたが、その奥から新たな蔓が姿を現す。

「ならば、三連閃光烈斬だ！」

侍が三度目のレーザーを繰り出し伐採するなか、将軍が呟いた。

「こりゃあ、きりがねえな……」

将軍の述べた通り倒れた蔓の向こうに更なる蔓が続いていた。

将軍の言葉は、諦めの言葉ではない。呆れただけである。

「おーい、誰かよ、火炎放射器とか持ってねえか？」

無茶を言う将軍。

だが、その無茶に賢者が応える。

「将軍殿、よくぞ訊いてくれました。こんなこともあるのかと、私のゴーレム兵二十体のうち五体には、火炎放射器が装備されているですよ」

「え、マジ。……案外、訊いてみるもんだな。なあ、侍」

「ですな。ほんに準備がいい爺ですよ、あいつ」

前に出た五体のゴーレム兵が、両掌から炎を放出し始める。

十本の火炎が蔓の森を炙りながら焼いて行く。

巨大豆の木の森が、瞬く間に炎に包まれた。
まさにインフェルノだ。

「賢者のゴーレムは万能だな……」

珍しく将軍が、他人を褒めていた。

「まったくですね、親分。あれなら一家に一台は欲しいですね」

腕を組みながら感心している侍が言うと、遠くで狩人が、別にいらねえよと、つつこみを入れていた。

ナイトメア (前)

薄暗い謁見室。

大理石で出来た冷たい床の中央を赤い絨毯が、観音開きの扉から二十メートル程離れた背もたれの高い金塗りの玉座まで続いていた。

天井には煌びやかなクリスタルを飾った大きなシャンデリアが百本近くの蝋燭を燃やしながら吊るされている。

しかしながら、それ程の数の灯火だけでは広い謁見室のすべてを照らしきれしていない。

謁見室内は若干暗いのであるが、それとは裏腹に、室内には黄色い賑やかな声が聞こえていた。

官能を擽る女性の桃声。ひとりふたりではない。

玉座に座る若い金髪の男を、数人の美女たちが囲んでいた。

男は赤いズボンを履いているが上半身は裸であった。年齢は二十歳ぐらいだろうか。それなりに若いようだ。

その男を数人の女性が囲んでいた。

男一人に対して女性人の人数は八人。

しかし八人の女性全員が、肌の露出が激しい服を身に纏い、玉座の男を誘惑するような甘え方で寄り添っていた。

すべての女性が、艶のある女体が男の肌に密着することを気にしていない。寧ろ自分から男に擦り付け媚びている様子だった。

男の気を引こうと、とろけるような動きで蠢く。

色々な手段で男を誘惑する女たち。

首に腕を回しながら男の膝に据わる金髪の美女。左右から腕に絡みつく二人の美女。斜め後ろから豊満な乳を男の肩に乗せる巨乳美女。床に寝そべりながら男の脚に頬ずりスレンダーな美女。年齢も様々。人種も様々。個々の魅力も様々に窺える。

玉座の男が時折美女たちの乳や尻をツルリと撫でたりムニユリと揉んだりすると、触られた女が嬉しそうに「キャン」とか「アハン」とか声を出す。高揚がエロチックな声色である。

中には触られても何も反応を見せずに、男の耳元にプルンとした唇を近づけ小声で何かを囁くだけの大人な態度を見せる女性も居たが、怒っている訳ではない様子だ。こちらも寧ろ喜んでいるように窺える。

ハーレムと呼ぶには八人では美女の数が少ないが、それでも男ならば一度は夢にも見るハーレムな光景であろう。

プチハーレムである。

玉座の周囲には目に見えない桃色のハートが沢山飛んでいるようだった。

八人の美女にちやほやと囲まれている金髪の男が、押し付けられる艶々の美乳に赤面しながらだらしなく鼻の下を緩めていた。

確実にプチハーレムを満喫している様子である。

「えへ、えへへへ〜」

顔面の筋肉を失ったような表情でスケベな声を漏らす金髪の男。

玉座の脇に立つ一人の女性が、片手に持ったフルーツの盛り合わせ皿の中から、ウサギ型に切られたリングをフォークに刺して男の口

元に差し出す。

「はあゝい、ナイトメア公爵さまあゝん、ああゝゝんしてえゝ。お口を開けてくださいましゝ」

「うむう、ああゝゝん」

ナイトメア公爵と呼ばれた男は、美女の言うがままに口を大きく開けてリンゴを頬張った。幸せそうにリンゴを味わう。

男がスケベ面でリンゴをムシャムシャ食べながら隣の美女の胸をモミモミしていると、突然大きな音が轟き、それに伴い城全体が軽く揺れた。天井のシャンデリアが僅か揺れる。

「何かしら……?」

美女の一人が揺れるシャンデリアを見ながら男の腕に強く抱きついた。大きな胸が二人の間で形を潰す。

美女たちが何事かと辺りは見回している。不安気に眉を顰めている者も少なくない。

戸惑う美女たちを余所に男は、先程までのスケベ面から真面目な顔に変わっていた。

きりっとした切れ長の瞳。少し高めの形良い鼻。引き締まった口元。凜とした表情を取り戻した金髪の男は、けっこうな美青年でハンサムである。

男が美女たちを振り払い玉座から立ち上がる。

「何事だ、グスタフ？」

真つ直ぐとした視線で赤い絨毯の先にある観音開きの扉を睨みながら男は問いかけた。

しかし、男が睨む方とは別の方角から声が帰って来る。

「門前に、アポ無しの客人が来ている様子デス……。現在、武器庫砦のハルパス様が用件を伺いに行っておりますデス」

男の問いに答えたのは、部屋の隅に立っていたスーツ姿の老人であった。

執事なのだろうか、物腰が東和邸の老執事である細川に似ていた。だが、顔は別人である。頭は白髪を後ろで縛り、同じく白髪の短めな髭を蓄えていた。堀も深く、痩せたゴリラのような顔である。体格も細マツチ系であった。

「そうか……」

男が詰まらなそうな声を出して玉座に腰を戻した。

「しかしながら、ハルパス様では、お手に余る来客の様子デス。先程の振動は、正門を突破された音のようデス」

ナイトメア（中）

「城門が破られた、　　だと？」

「如何にもデス」

グスタフの返事に怒りの表情を作るナイトメア公爵。己の城塞を傷付けられたことが腹正しい様子だ。

ナイトメア公爵を囲んでいた美女たちが、彼の憤怒を察して周囲から一歩ずつ下がる。

それでもすまし顔のグスタフが抑揚の無い口調で、淡々と話を続ける。

「ハルパス様の安否は不明ですが、恐らくは敵将に討ち取られた様子でありますデス」

「ほほう、あの武装マニアがやられたか」

「はいでありますデス」

グスタフが老いた細ゴリラ面で相槌に頷く。

城外で兵の編成があつたことは数日前からグスタフが報告していたが、ナイトメア公爵はプチハーレムでイチャイチャするのが忙しくてグスタフの報告を聞いていなかったたのである。記憶に残らないほどに無視していた。

玉座の肘掛に付いた右手で頬を支えながらナイトメア公爵が、クスタフに敵戦力はいかほどなのかと問うと、外での戦闘を窺っていた

のかグスタフが、敵総戦力を的確に答える。

「泥で拵えられたパペットオーク兵が約三千匹。三メートル級のストーンゴーレムが二十一体。内二体は正門破壊の際に崩れ落ちています。」

それと後方には騎馬兵が約五十騎。その中に敵大将が居る様子でありますデス」

「数は揃っているようだ。この夢の牙城に攻め入るだけの準備をしていたわけだ」

「はいでありますデス」

「こちらのガーディアンクラブボールはどうしているのだ？」

「ほぼ壊滅でありますデス。現在は城前の庭にてジャックビーンズウォールが食い止めていますが、そう永くは持たないでしょうデス。ゴーレムが装備しております火炎放射器で焼き討ちにあっておりますデス」

若干の驚きを顔に出すナイトメア公爵。

「火炎放射器とな。随分と準備が良い連中のようにだな」

「はいでありますデス」

クールな表情でナイトメア公爵が片眉を吊り上げた。

「では、此方もそれ相当の戦力をぶつけてやらなくては失礼やも知らん。なあ、グスタフよ」

「左様かと　　デス」

その気になったナイトメア公爵が勢い良く玉座から立ち上がり、凜とした声を張り上げ人を呼ぶ。

「グスタフ、ここに残りの四天王三名を直ぐに呼べ！」

「はいでありますデス」

グスタフが頭を下げて返事を返した刹那、赤い絨毯の先にある観音開きの扉が勢い良く開いた。
ダンっ、と音が鳴る。

扉が開き謁見室に飛び込んできたのは、光と影と声であつた。

謁見室に甲高くも舌足らずの美声が響き渡る。

大理石の壁や床が洞窟の様に、その声を共鳴させて普通以上に響かせていた。

「ナイトメア公爵様、心配無用でありますニヤア。我らが四天王の三名は、既に控えてありますニヤア」

変な語尾が付いているが若い女の声であつた。

その珍声と共に開いた扉から眩い光が差し込み、長い人影が三本ほど謁見室内の赤絨毯の上に伸びて来る。

眩い光に美女たちが目を細めたが、ナイトメア公爵は顔色一つ変えない。

「いつもやる気のないお前らが、随分と張り切っている様子だな」
上半身裸のナイトメア公爵が、胸元で両手を組みながら不敵な笑みを見せた。

三人が横一列に並びなが謁見室の中へと入って来ると、暫くして後ろの観音開きの扉が勝手に閉じる。小さな音をパタリと鳴した。

表れた三名は、武器庫砦のハルパス同様に奇怪な姿をしていた。人型を保ってはいるが、特撮ヒーローの敵役のような怪人である。

ニヤアと語尾を付けて喋った女を真ん中に、その右は太った半魚人で、左はのっぽで痩せた螻蛄男であった。

彼らが悪夢城の四天王である。

もう一人は、先に打ち破れた武器庫砦のハルパスであったが、それも既に過去の話となっていた。

この城には、真つ当な知能を有した人間は少ない。殆どの使用人が造られた人形メイドである。

ましてや戦闘力を備えた住人は、更に絞られてくる。

だが、ここは夢の中。

想像力が豊かな人間ならば、生身の肉体が弱くても現実を無視して強くなれる世界である。

彼ら四天王は、そういった面々であった。

外見だけ見れば人間でないが、中身は人の魂である。

三名の怪人が玉座の前に立つナイトメア公爵の前で片膝を付いて礼儀を質す。主に対して頭を下げる。そして各自が順番に名乗った。

「四天王の一角、誘惑のメニヤース、ここに惨状しましたニヤア」

「同じく四天王、渦巻く海のリヴァイアサン、ここに惨状でありますギョ」

「そして四天王最強の男、蠍螂王のキングマンティス、ここに登場つかまつりましたゲマ」

誘惑のメニヤースと名乗った女は、歳の頃にして十代後半ぐらいだろうか。

眼は切れ長で生意気そうな表情をしている。

あまり長くはない黒髪で両耳を隠しているが、頭部にネコミミが生えていた。

身形は洋風の城内に合わない現代風で、臍の見える短いTシャツに際どい切れ目のデニムのポットパンツをサスペンダーで肩から釣っている。

そのホットパンツの尻部分には穴が開いており、黒いネコの尻尾が伸び出て、クネクネと振られていた。

スレンダーで引き締まったポディーラインは少し小麦色に焼けている。

カルフォルニアの海岸沿いをジョギングしている女性のような健康美的な特徴を見せていた。

続いて渦巻く海のリヴァイアサンと名乗った男は、少々太った半漁人であった。

深海魚の提灯鮫鰐のような顔。大きな口にはキザキザの鋸牙が生え並んでいる。目は離れており小さい。

そして青い鱗が並んだ体は肥満体なのかポッコリとお腹が出ており、両手の指の間には水掻きが付いていた。

靴は履いていない。腰には昆布で出来た蓑で股間を隠しているだけで、衣類と呼べる物は身に付けていない。手には三叉のトライデントを持っていた。

七つの大罪に数えられる悪魔の名を語っているが、ただ醜いだけの半漁人とも取れる。

それと彼の周りは何故かしめっぽく塩臭い空気が漂っていた。

そして三番目の怪人。

己から四天王最強と名乗った螭螂王のキングマンティスは、名前の通り螭螂男である。

身長は百九十センチぐらい有るだろうが、体のラインは針金の如く細い。

肌は緑色。顔は逆三角形で瞳がギョロリと大きい。

五指はあるがトライビリの辺りから螭螂のような長い鎌が生えている。

衣類は黒いタンクトップにボクサーパンツ。手にはバンテージが巻

かかれており、靴は赤いリングシューズである。
さらに赤いヘッドギア。
まさに螻蛄ボクサーである。

「良く参ったな、四天王どもよ」

三名の怪人を前にナイトメア公爵が、どや顔を見せた。

頭を上げる四天王三名。

メニヤースは自信に溢れかえった笑みを見せ、キングマンティスは
堅物のように表情を変えない。

リヴァイアサンの魚面からは表情が読み取れなかった。

一人一人の個性はバラバラのようだ。

ナイトメア（後）

血気盛んな口調でキングマンティスが口火を切った。

「ナイトメア公爵様、我に納めるようご命令くださいゲマ。我らが主の城に攻め入る無礼者は、このキングマンティスが無残なまでに切り裂いて見せますゲマ」

そう言つて手から生えている鎌を舐めるキングマンティスの蠅螂のような逆三角形顔が不敵に笑う。瞳が三日月型に細まっていた。

「否々、我らが主、ナイトメア公爵様、大掃除の大役は、このリヴァイアサンに、お任せ、あれギョ。ナイトメア公爵様が、満足いただけるような、あっぱれな結果を、齎して見せますギョ」

大きな口からネバ付いた涎を垂らしながら述べる半漁人。途切れ途切れの口調だが、内容は力強く自信を醸し出していた。

「いいえニヤア。外の輩を蹴散らすのは、このメニヤースの役目ですニヤア。敵将の首を跳ね飛ばして、生首に引っこ抜いた肝を添えて持つてきますニヤア。是非とも出陣の命を私にニヤア」

四天王の三人が鼻息を粗くして懇願する。

その光景を楽しげに見守る城の当主。後ろに控えていたハーレムの美女八人も、四天王の頼もしい言葉を聞いて安堵したのか表情の硬さが大分取れていた。

「三人とも威勢がいいな。しかし敵は、あのハルパスを蹴散らしたのだぞ。お前ら一人一人で行って勝てるのか？」

「何を仰いますニヤア。ハルパスなんぞ我らが四天王の中でも一番の小者ですニヤア」

「如何にもギョ。あのような雑魚と、超大魚である我を、一緒に、されては、困りますギョ」

「その通りですゲマ。ナイトメア公爵はご存知でないかも知れませんが、四天王最強であるこのキンググマンティスとハルパスでは、大人と子供以上の力差が有りますゲマ」

「それを言うならば、私の方がハルパスよりも百倍強いニヤア」

「それならば、俺の方が、千倍、強いギョ」

「ぬかせゲマ。俺なんか万倍強いゲマ！」

「ニヤニヤア！ ならば私は一兆倍強いニヤア！」

「い、一兆……。そ、それならば、俺は、一億倍、強いギョ」

「下がってるニヤア！」

「そうゲマか、あつてねえ？」

「こ、こいつも馬鹿ニヤア！？」

グスタフが、ゴホンと大きな咳払いを一つ鳴らす。

その咳払いで我を取り乱していた四天王三名が、ハツとした表情で正気を取り戻す。そして真顔に戻る。

ナイトメア公爵も若干だが機嫌を損ねてしまっている。それが声色に見え隠れしていた。

「いいかお前たちよ、これ以上我が城を何処の馬の骨かも解らん輩に汚されてはかなわん。誰でもいい、いいや、全員でいい、早い者勝ちだ、とつとと侵入者どもを叩き出して来い」

言い終わると同時に何かを思いついたのか、ナイトメア公爵が掌に槌拳を落とす。

「そうだ、こうしよう。見事敵将の首を抱えて、この謁見室に持ち帰ったものには褒美を与えよう。願いは思いのままだ。面白いだろ！」

名案だろうと言いたげな顔で声を弾ますナイトメア公爵であったが、四天王の三人は逆にキョトンと固まってしまふ。

そして暫くしてからメニヤースが主の機嫌を取ろうとわざとらしく感激し始める。

「そ、それは名案でありますニヤア。我々三人もやる気が倍増するというものですニヤア！」

「そうだろう、そうだろう」

メニヤースのヨイシヨに満足気な顔で頷くナイトメア公爵。

その様子に周りで見ていた美女たちも安心したのか表情を和らげる。

ナイトメア公爵が、ピシッと指を指す。

「さあ、行け！ 我が悪夢城の四天王たちよ。そして我輩に勝利の祝杯を挙げさせる！」

「ハハハニヤア！」ギョー！「ゲマ！」

深々と頭を下げた四天王が、一步下がってから頭を上げる。そして踵を返して赤絨毯の上を引き返して行く。

ナイトメア公爵は、四天王たちが退室するよりも早く玉座に腰を降ろすと、美女一人を乱暴に引き寄せ自分の膝の上に乗せた。再び美女たちと戯れる。

四天王三名が観音扉の向こうへと消えて行くと、美女たちと戯れていたナイトメア公爵がグスタフに話しかけた。表情は真面目である。

「なあ、グスタフよ」

「何でありましょうかデス」

「あの三名で、今回の戦いは事足りるか？」

「どうでありますよう」

言葉を濁すグスタフ。本音を言っていないのは明白であった。

「正直に述べて構わんぞ。事と次第によっては、お前にも激しい運動を命ずるやもしれんからな。

今のうちにはつきり述べておけ」

鼻で溜息を付いたグスタフが、暫くしてから話し出す。

「では、はつきり言いままして、彼ら三名では今回の戦いを制圧するのは困難化と思われませすデス」

「ほほう、百人将軍と呼ばれた男の目には、そう映るか」

「はいでありますデス」

「ならば、あの三名が破れたら直ぐに、お前が動き出せ」

主の言葉に対して珍しくグスタフが迅速な返事を返さない。

不審に思ったナイトメア公爵が、遠目ながらグスタフの老ゴリラ面を覗き込む。

グスタフは渋く眉間に皺を寄せていた。

「どうした、グスタフ？」

「恐らくは私めが出て行けば、敵の殆どを壊滅できませすデス。

しかし、敵将の一人に、私めでは敵わぬ強者が存在していますデス」

「ほほう、グスタフのくせに弱気な発言だな」

「申し訳ありませんデス……」

少し考え込むナイトメア公爵。

やがて考えが纏まったのか話し出す。しかし何かを躊躇しているようでもあった。

「……ならば、地下室の二人を此処に呼べ」

「タイガーとウルフをですかデス!？」

グスタフが驚いていた。急に表情が豊かになる。

「そつだ、あの引き籠もり共に今回は働いてもらおう」

「また厳しい報酬をせがまれますぞデス。今度は地下室だけでは済まずに上の階もくれと言われかねませんデス」

「かまわん、くれてやるさ」

そう述べたナイトメア公爵の口元が斜めに曲がっていた。

「よいのですか……デス」

「グスタフ、お前が心配することではない。いいからさっさと呼びに行け」

「は、はいでありますデス」

納得の行かない表情であったが主人の命ずるままに行動を起こすグスタフ。謁見室を後にして地下へと目指す。

美女の一人がナイトメア公爵に猫撫で声で訊く。

「ナイトメア公爵様、タイガーとウルフって誰なの？」

「ああ、あいつらか……」

返答に躊躇するナイトメア公爵の胸元での字を書く美女。乳首を

細く綺麗な指先でクリクリしていた。
ナイトメア公爵が赤面しながら話し出す。

「あ、あいつらはメチャクチャに強いのだが、欲深くてな。毎回毎回仕事を命ずると、高額報酬を求めてくる」

「高額？ 例えばあ〜？」

「今までに地下庭園をくれてやった。時には女を求めてくることもある」

「あら、まあ〜」

女と聞いて美女たちの態度も微妙に変わる。強張る者、驚く者、何かを期待する者、悩む者。色々な想像が思い描かれている様子だった。

「まあいい。グスタフが敵わぬ以上はタイガーとウルフに報酬を払ってでも動いてもらうのも仕方あるまい」

そう言いナイトメア公爵が、諦めたかのような溜息を溢す。深い溜息だった。

四天王の密談

四天王の三名が、悪夢城内の廊下を早足で歩いていた。

しかし、三人とも同じ場所を指しているのだが、その方向は敵軍勢が攻め込んでいる正門側でなく、何故か城の裏門方面であった。背後から騒がしい戦乱音が彼ら三名にも届いていた。

怯えたような緊張感を表情に出している三名。

三名の真ん中で先頭を歩くメニヤースが、ふと、振り返ると他の二名と視線があつた。

「まったく冗談じゃあないニヤア。なんで私たちが軍隊と戦わなくちやあならないのニヤア」

「ま、まったくギョ。そもそも、あのハルパスさんが、敵わなかった連中に、ぼ、僕らが、敵うわけないんだギョ」

「十人二十人ならば私たちでも捌けるけれども、千人二千人の兵隊となると無理ニヤア。ましては敵将はハルパス先輩より強いときているニヤア」

「そうだゲマ。俺なんかハルパスの兄貴にジャンケンですら勝ったこと無いんだゲマよ」

「じゃあ、あんたは何で四天王最強とか何時もほざいているのニヤア」

「ほら、俺の螻蛄みたいな外見が強そうだから、その方がキャラ立つんじゃないかってハルパスの兄貴が言ってくれたからさ、じゃあ

そおしようゲマかな〜と、思つてゲマ……」

「あ〜、なるほどニヤア。ナイトメア公爵様の趣味に合わせた訳ニヤア」

「そうゲマ。ナイトメア公爵様は、厨二病臭いの大好きゲマからね〜」

「私たちのヘンテコな語尾だつて、ナイトメア公爵様の趣味にあわせたものだしニヤア……」

「し、四天王結成だつてギョ。ぼ、僕らじゃあ無理つて言つたにギョ。ハルパスさんが、そういえばこの城に何時までも残れるつて言うから、し、仕方なく結成したんけどキョ」

「そつだニヤア。戦いはハルパスさんが一人で蹴りを付けてくれるつて言うから私だつて乗つたのにニヤア」

「そのハルパスの兄貴が負けたからには、もう俺たちは逃げ出すしかないゲマよ」

「幸い敵は、正門からしか攻めて来ていないニヤア。こつなつたら裏門から現実世界に逃げ帰るしかないニヤア」

「一度裏門から現実世界に出てしまえば、二度と夢の世界に戻れないゲマけど、死ぬよりはましゲマ」

「そこが、心残りギョ。この世界は、い〜ごち良かったからギョ……」

「そこが名残惜しいニヤア……」

どうやら四天王の三名は、しぶしぶながらも悪夢城から逃げ出す算段の様子である。

敵兵の居ない後門を目指す。

逃亡者と侵入者（其の一）

敵前逃亡の為に城の厨房へと訪れる四天王の三名。

「こいつら、この騒ぎのなかでも普段通りの仕事をしてやがるニヤア。まったく暢気ニヤア」

厨房では感情を持たないマネキンのようなメイドたちが昼食の準備をしていた。敵の手が迫っていても彼らロボットのような召使たちには関係ない様子だ。命じられたままの仕事しか出来ないのだろう。

「所詮は造られた存在ゲマ。我々と違って魂を持ってないゲマからねえ」

「戦場では恐れを知らない鉄砲玉として使えるけどニヤア。本当に哀れな連中ニヤア」

「も、文句も、言わないから、便利ギョ」

「そうだニヤア。確かに便利ニヤア」

「ところでお前らは木偶を何体もっているゲマ?」

「私は百五十体ぐらいかニヤア」

「ぼ、僕は、ク、クロコダイルジャイアントを、十五体ほどギョ」

「俺の方はカマキリライダーズが三十騎ゲマ」

「これだけ居れば、万が一にも後門に伏兵が控えて居てもどうにかなりそうだニヤア」

そう話しながら厨房の勝手口から裏庭に出て行く四天王三名。そして広い庭を駆け足で走って行く。目指すは裏門、距離は二百メートルほど離れている。

「ギョ？」

何かに気付いたリヴァイアサンが走る速度を緩めた。

「うすのろ、何しているニヤア。とっとと走って逃げるニヤアよ」

「メ、メニヤース、あれギョ」

三人が立ち止まるとリヴァイアサンが鱗のある指で裏門の方を指差した。

指の指す先を、目を細めながら確認するメニヤースとキングマンテイス。

「誰か居るゲマ？」

「本当ニヤア……」

「敵ゲマかな？」

「ギョギョギョ……」

三人が見つけた人影は此方に向って歩いてくる。その数は七つ。男だけではない。女や子供の姿も見える。一番目立って見えるのは

二メートル以上も身長がある猫背の大男だった。

「なんだ、七人ゲマ。怖そうな大男も居るけど、まだ許容範囲内ゲマ。我々だけでも蹴散らせる人数ゲマよ」

「ラッキーニヤア。あれなら私たちが戦わなくても木偶をぶつけてやれば、どうにでもなるニヤア」

「あ、あの大男は、ぼ、僕のクロコダイルジャイアントと、サイズが、変わらないギョ。も、問題ないギョ。こっちは十体もいるんだギョ」

「よし、ここは四天王らしく胸を張って堂々と行こうニヤア」

「そうゲマね。この世界ともお別れゲマから、最後まで派手に行くゲマか」

「そうニヤン、そうニヤン。胸を張って行くニヤン」

三人の態度が、ナイトメア公爵の謁見室で演じていた傲慢なものに戻った。相手が少数だと思いついて侮っている。

やがて裏門から中に浸入してきた謎の七名と四天王三名が、両者ともに百メートルずつ進み中庭の中央で向かい合う。

胸を張る四天王三名と同様に謎の侵入者七名も堂々としていた。

銀縁メガネの下に嘘くさい笑みを浮かべるスーツの男。

長い黒髪に白いワンピースを着た背の低い少女。

身長二メートルを超える怪物のようなせむし男。

パンチパーマに大きなサングラスを掛けたチンピラ風の男。
顴の大きな白い帽子を被った清楚な女性。

矮躯で着物姿の蔵つい老人。

そして影の薄い普通の少年。

七人七色の個性を持っていた。

「なんだあ、手前らあゝよあゝ？」

チンピラ風の男が凄んだ声で問う。なんとも頭の悪そうな口調であった。

「侵入者の癖に態度が大きいゲマね。貴様らこそ何者ゲマ」

「軒太郎さん、このヘンテコな妖怪は……？」

「さあ、何でしょうね。見た目からして人間には見えませんが、妖怪や悪魔の類でもなさそうですね」

グレイのビジネススーツに営業スマイルを浮かべた男が、そう答えた。目は細く微笑んでいるが、口元が笑っていない。疑問に首を軽く傾げていた。

「半漁人に猫娘、それに螻蛄男ね」

「そうだね、憑き姫」

見たままを言う背の低い少女に、隣に並んでいた少年が愛想笑いと共に相槌を入れる。

禿頭の老人が四角い顎をゴツゴツとした掌で投げながら四天王たち

に話しかける。

「おい、化け物ども。ここがあれか、えくと、なんとか城……なんだったかのお」

「師匠、ナイトメア城っすよ」

チンヒラ風の男が禿頭の老人に顔を寄せて耳打ちする。

「違いますよ、赤股さん。悪魔城ですよ」

鍔の大きな白い帽子を被った女性が、白いスカートを風に靡かせながら間違いを正すが、それも間違えていた。

「改めて問いますが、ここは悪魔城でしょうかね？」

営業スマイルで男が問うと、四天王たちが凄みながら受け応える。

「ここが悪魔城だしたら、なんだっていうゲマ？」

「そ、そうだギョ。ここが、何処だろうと、貴様らには、関係無いギョ」

「招待状は持っているかニヤア。持っていないならば不法侵入ニヤア。今ここで私たちにぶちのめされても文句は言えないニヤア」

「こ、殺すギョ」

ニヤリと笑うメニヤース。侵入者七名のうち数名も何故か不敵に笑っていた。

逃亡者と侵入者（其の二）

「三対七だが、ここは夢の世界ゲマ。長年住んでいる我ら四天王の方が、確実に有利ゲマ」

「そ、そうだギョ。この世界の、ルールも、ぼ、僕たちの方が、熟知しているギョ」

二人が小声で会話をしていたが、その声は七名にもしつかりと届いていた。

チンピラ風の男が言いながら一人で前に出る。

「へえ、あんたら強いのか。そりゃあいいや、じゃあちよつとよ、俺と遊んでみないか？」

チンピラ風の男の挑発に釣られてキングマンティスが一人で前に出た。

「上等ゲマ。バラバラに切り刻んでやるゲマよ」

「タイムンっていいよなあ。たまんねえよなあ。ぞくぞくするぜえ」

パンチパーマに大きめのサングラス。白いスーツに青いYシャツ。ネクタイは付けていない。

猫背で蟹股あるきの男は、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま嫌らしく笑っている。

ヴァルハラ探偵事務所の調査員、赤股夏鱗である。

片や、螻螂と人間が合成された怪人。身形は赤いヘッドギアにボクサーパンツ。手には鎌が生えているがバンテージも巻いている。靴はリングシューズ。

わざとらしい威嚇を演出する為に奇人の如く手から生えている鎌を舐めていた。

自称悪夢城四天王は最強の男、螻螂王のキングマンティスである。

「じゃあ、一丁やりますか。なあ、螻螂のあんちゃんよ」

「チンピラ如きが舐めた口を叩いてんじゃあねえゲマよ」

構えを作って二人が向かい合う。

くしくも二人とも同じ構え。ボクシングを連想させるファイティンポーズ。

「ほほう、ボクシングをやれるゲマか？」

「そつちこそ」

凄みながらも微笑む二人。両者の間で闘志の波がぶつかりあって混ざり合う。

鋭い殺気が対戦相手の隙を狙い合っていた。

「キングマンティスく、私たちは急いでるニヤア。さっさと決めてしまってくれニヤア。あんまり時間が無いのを忘れないでくれニヤア」

「ああ、解っているゲマ。一ラウンドだ。三分以内にOKしてみせるゲマ」

「ほほう、三分かよ。俺としてはもっともっと長い時間戦って、楽しみたいんだけどよぉ〜」

「残念ゲマ。此方にも都合つてもものがあるゲマ」

「じゃあ、とつとと始めますか、ってね」

赤股から仕掛ける。前に出た。

腰を屈めて低い大勢で一氣に間合いを詰めて行く。まるで氷の上を滑って行くようなスムーズなフットワークだった。

「遅いゲマ、甘いゲマ、とろいゲマ。カウンターで切り刻んでやるゲマ！」

振り上げた右腕の鎌を、赤股の脳天目掛けて振り下ろすキングマンティス。

しかし、鎌の切っ先が赤股の頭に突き刺さると思われた刹那、赤股の動き全体が数十倍の速さに加速する。

「ゲマツ!?!」

一瞬だった。

何か硬い物が折れる音が響く。

その音の直後に二人の動きが静止した。観戦している者たちも動きを止めて見守る。

メニヤースやリヴァイアサンには、何が起きたのか解らなかった。

するとメニヤースとリヴァイアサンとの間に何かが落ちて来た。そ

れはグサリと音を立てて地面に刺さる。

「ニヤア!？」

「こ、これは、キングマンティスの、鎌……ギョ」

二人の間の地面に突き刺さっていたのは、折れた蠃螂の鎌であった。しばらく二人が鎌を凝視したあと、視線をゆっくりキングマンティスの方に戻す。

「ギョ、ギョ、ギョ……」

キングマンティスは立っていた。

しかし、鎌の折れた右腕が複雑な形に変形しながら背中に巻きつくが如くへばり付いていた。

不自然な光景に喉を鳴らし唾を飲み込むメニヤース。リヴァイアサンは滝のように冷や汗を流していた。

「キ、キングマンティス……大丈夫かニヤア？」

そのような訳はないだろう。だが、訊かずには居られなかったのである。

メニヤースが啞然とした表情で声を掛けるが、キングマンティスは反応を返さない。

やがて右足が脹脛の辺りから突然ポツキリと折れ曲がり横へと体を転倒させる。

ゴン、と頭部を地面にぶつける鈍い音が聴こえた。

倒れたにも拘らず受身を一切とらなかつたことから、立った状態で既に意識を失っていたのだろう。

否、死亡の恐れも感じられる倒れかただった。

目を丸くして呆然と立ち尽くすメニヤースとリヴァイアサン。

「な、なにが、起こったギョ……？」

「わ、解んないニヤア……」

倒れたキングマンティスは、僅かに痙攣していた。

だが、折れた右腕や右足の他に、顎が砕かれていた。胸にも幾つかの陥没した痕が残っている。

生きてはいるが再起不能だろう。絶命寸前に窺える。

「昂輝君、君には見えませんでしたかね？」

「いいえ、殆ど見えませんでしたよ、軒太郎さん。僕に見えたのは、赤股さんが一瞬で数発のパンチを振るった後に、最後はローキックを打ったことぐらいです。パンチを何発撃ったのか、ぜんぜん解りませんでした。

もしも僕があのカマキリ怪人だったとしたら、一発も躲せなかったでしょう。彼同様に反応すら出来なかったと思います」

謎の七人の中で、少年だけが難しい顔を見せていた。他の六人からは余裕が窺える。

「不甲斐無い新弟子に、ワシが説明してやろう」

そう言つて禿頭の老人が解説を始めた。敵味方関係無く、老人の話に耳を貸す。

「先ずは振り下ろされた鎌に一発の左鍵拳で叩き折る。続いて右鍵拳で相手の右腕を吹き飛ばし粉碎。

砕かれた右腕が勢いのまま奴の体に巻き付くまでの間に左右の脇腹にある電光と章門と呼ばれる急所に下突きを一つずつ。

更に正中腺に沿って下から二発の中段突きで関元と水月を叩き、肘鉄で下昆ごと顎を砕く。

そして念を入れた下段廻し蹴りを承山に一発。勢いで骨ごと行っちまったようだがな」

幾つか解らない単語があつたが、恐らくは全て急所の呼び名なのであろう。解つたのは、一般的に鳩尾と呼ばれている水月だけであつた。

どちらにしてもキングマンティスは赤股に、一瞬で七発のパンチと一発のキックを浴びせられて絶命寸前まで追い込まれたことになる。

これで格の違いが判明した。

この敵は強すぎると四天王の二名は認識する。

「こ、こいつら、ムチャクチャ強いギョ……」

「じよ、じょうだんじゃあないニヤア……」

冷や汗を流しながら後退りする四天王の二人。情けない程に、声も体も震えていた。

逃亡者と侵入者（其の三）

オロオロと振舞うリヴァイアサンがメニャースの腕に縋りつく。

「メ、メ、メニャース……」

メニャースの細い二の腕を掴む水掻きの付いた両掌から震えが伝わって来る。

半漁人は、完全に怯えていた。

「メ、め、メ、め、メニャースうー。ど、ど、ど、どうするのギョ。ぼ、僕たち殺されちゃうのギョ!？」

「落ち着くニャア。腕を引っ張らないでニャア。しかもヌルっとしているニャア!」

縋る仲間を力任せに振り払うメニャース。

表情からして彼女も怯えている様子だったが、その恐怖を必死に隠していた。

歯を食いしばり眉間に皺を寄せながら目を吊り上げ威嚇で誤魔化す。しかし、顔だけでなく全身から冷や汗を滲ませていた。

「こ、こうなつたら木偶戦ニャア、リヴァイアサン。数でものをいわせるニャア。

私のキャットバロンと貴方のクロコダイルジャイアントで、袋にしてやるのニャア」

「わ、わかったよ、メニャース」

怯えが消えない素振りであったがリヴァイアサンは、両腕を振り上げ両掌を開く。そして大きく息を吸い込んだ後に、両手で足元の地面を叩いた。

その衝撃が地面に広がる代わりに、リヴァイアサンの周辺に幾つもの魔方陣が浮かび上がって輝いた。

「いでよ、クロコダイルジャイアント！……ギョ」

召還魔法である。

輝く魔法陣の数は全部で十五。

その一つ一つから浮かび上がってくる巨大な怪物たち。

でっぷりとした巨体は二メートル以上で二足歩行。頭部は鰐ワニだが二本の腕には盾と斧を装備している。全身を包むコスチュームは、アフリカの原住民風であった。

「ワニーン！」

突如表れた鰐の部族戦士たちが吼えながらリヴァイアサンを守るようにフォーメーションを組んで身構える。

続いてメニヤースの番である。天を指差し木偶を召還した。

「来たれ、私の親衛隊共、猫男爵部隊！」

メニヤースが叫ぶと空から何かが次々と降ってくる。

それは膝を抱えるように丸まった人型。クルクルと回転しながら降下してくると、音も立てずに着地する。

その数は物凄い数であった。あつというまにメニヤースの後方が、降って来た者たちで多い尽くされる。

そして全員が着地し終わると、同じタイミングで立ち上がった。

立ち上がった人型百五十体は、頭部が猫で体が人間のものだった。全員が全員ともタキシードを着ており、シルクハットを被っていた。手にはステッキを持っている。見ての通りのジェントルメンであった。

「ほほお、こりゃあ凄い数じゃわい」

顎を撫でながら功風老が囁く。

その表情は驚いているようであり、喜んでいるようでもあった。

総勢百五十体の猫紳士。

その中に混じるは巨漢の鰐部族戦士。

メニヤースとリヴァイアサンも身構える。

敵は、僅か七名。

本来ならば数でものをいわせれば勝てる戦力差。

だが、それでもメニヤースの緊張は和らがない。

ハルパス程ではないが、キングマンティスも弱くない。そうでありながら予想以上の秒殺。圧倒された。

メニヤースは、敵の実力を無限大と計る。勝てない相手と判断したのだ。

彼女としては懸命な評価だと感じていた。

「リ、リヴァイアサン……」

「な、なに、メニヤース」

小声でリヴァイアサンに話しかけるメニヤース。その表情は難さの中にずる賢さを秘めていた。

「あの七人に木偶どもを全部ぶつけるニヤア。混戦が始まったら私たちは隙について裏門めがけてダッシュだニヤア」

「に、逃げるギョね」

「そうニヤア。最初から私たちの目的は戦火に巻き込まれたこの城からの逃走ニヤア。」

最初の計画通り、逃げるニヤアよ」

「う、うん、解ったギョ」

そう応えたりヴァイアサンだが、何やら納得の行かない顔で暫し沈黙すると、俯き加減でメニヤースに質問した。

「キ、キングマンティスは、どうするギョ。お、置いていっちゃうギョか？」

「う……」

横転したまま痙攣するキングマンティスを見ながらメニヤースが悩む。

まだ生きている。

連れて行けるであろうか、と。

「……キングマンティスは、私が連れて行くニヤア。スピードだけ

なら私にも自信があるニャア。リヴァイアサンは、出来るだけ私たちを援護してくれニャア」

「わ、わかったギョ」

「じゃあ、木偶をぶつけるニャア！」

「ギョギョ！」

二人の眼光にうわべだけのヤル気が映る。

そして。

「「全員突撃ニャア！」ギョ！」

一斉に動き出すキャットバロンとクロコダイルジャイアント。

猫男爵の半数は天高く跳躍し、残りの半分は鱈部族戦士と一緒に全速力で前進して行く。

地上と空からの一斉攻撃である。

「やっと開始か。待ちくたびれたわい」

「さてさて、一丁暴れますか。先生」

赤股は右肩を解すように肩を回し、功尻老は指の関節をポキポキと鳴らしていた。

「ちよつと待ったー！ー！」

極道コンビの二人が前に歩き出すと、後方から可愛らしい子供の声

が止めに入った。

「ふたりとも待つでーす！」

「どうした、イゴールちゃん？」

百の敵が迫っているというのに振り返る極道コンビ。余裕が態度から悟れる。

そして、二人を制止させたのは戦闘用ボディーせむし男に脳殻を移動させたマッドサイエントのイゴール。

今は背を丸めているが、姿勢を正して直立したのならば三メートルに達する骨格。右手は鋭い鍵爪が伸びた五指。左手は大型口径のガトリング砲と化している。

そのガトリング砲から連なる弾丸の葉莢が背中に担がれた二つのドラム缶に繋がっていた。

「お二人は暴れすぎです。昨日の事務所前でも病院内でも暴れたじゃないですか。それに赤股君は、今カマキリマンをやっつけたじゃないですか。ズルイですよ。」

今度はイゴールちゃんの番なんです。この連中を解体するのはイゴールちゃんなんですー！」

可愛らしい声で駄々をこねる怪物せむし男。

太紐で縫い合わされた口は動いていない。可愛い声は胸のスピーカーから発せられていた。

「あれはぜえ〜〜んぶう〜〜、イゴールちゃんのものでーす。」

イゴールちゃんが全部バラバラにしちゃうんでーす」

無邪気な声に、微笑まぬ怪面。

双眸は双眼鏡のレンズの様である。

その瞳が赤く、紅く、強く、怖く、輝く。

怪奇、巨大せむし男。

「まあ、ごもつともだぁ」

溜息をつく功凧老。

素直に諦めた極道コンビがイゴールに道を開けた。左右に動く。

「まあ、今回は譲るぜ、イゴールちゃんよ。好きなだけ暴れて来いや」

これから始まる超殺戯劇を想像して赤股もにやけていた。

「ルンルンルーン」

極道コンビの間を進み前に出る鼻歌まじりのせむし男イゴールちゃん。

鍵爪を鋭利な音を立てて蠢かせながら逆腕のガトリング砲を敵に向けた。

砲身が音を鳴らしながら回転を始める。

戦闘準備完了。

戦闘開始。

「イゴールちゃん、いつかママーーーす
WWW
」

地下に巣くう者たち（前編）

レンガの壁に石造りの階段が緩やかな螺旋を描きながら斜めに下っている。

ただ、暗い闇が続いていた。

片手にランタンをぶら下げた老紳士が一人階段を下って行く。

黒いスーツに正装さられた老紳士の顔をランタンの光がぼんやりと染め照らす。皺の多くなつた堀深い顔はゴリラに良く似ていた。悪夢城の執事、グスタフである。

目指す元地下庭園。

城の当主ナイトメア公爵二世に命じられて、地下エリアを自由に使う二人の魔人を訪ねるところであった。

正直なところ、グスタフの表情は芳しくない。

自分の提案とはいふものの、あの二人に戦闘依頼を申し込むのに気が進まないのだ。

しかしながら敵の戦力は強大。夢ではない、それが現実。

有象無象の集団ならば、かつて百人將軍と恐れられた己一人でどうにでもなるう。だが、敵将の中に自分の力量よりも数段上の強者が混ざっている。

その一人がグスタフでは排除しきれない。

故に頼りたくない相手とはいえ、あの二人に戦闘依頼を申し込みに行くところなのだ。

あの二人とは、タイガーとウルフ。

またの名を、前門の狼と後門の虎。

彼ら二人は、そのように呼ばれたことがある極上の強者。

どちらもグスタフより遥かに強い。

その戦力を木偶に換算するのならば、千や二千ではきかないだろう。
一人当たり億数の兵力と同じ。

否。

二人揃うならば、足し算では計算できずに掛け算を超えるだろう。

恐らくは、無限の兵数と五分。

それ即ち、無敵である。

グスタフが重い足取りで暗い階段を下っていると、遙か地下方面から光が見え始める。

光が四角い形を作っていた。地下庭園への入り口である。

地下庭園。

かつてはグスタフが、先代ナイトメア公爵より分け与えられていたエリア。

手塩にかけた日本庭園が広がっていた自慢の空間。

天井には人工太陽を備え、自然界の力を具現化させた庭石を並べ、松などが芸術的に枝木を伸ばし、穢れなき水が流れるせせらぎ造り、その風情が流れ込む池には日本美の錦鯉が数多く泳いでいた。

作り上げるのに十年の月日を費やした。
夢の力を使っても、それだけ掛かったのだ。

それを。

それをタイガーとウルフの二人にグスタフは奪われたのだ。

まだ先代のナイトメア公爵がご存命の頃、この悪夢城に攻め込んできた人間たちがいた。

今回の侵略とは違い、何千もの兵を率いていない。たった四人の侵略者。

グスタフは、その四人から悪夢城を守る為に戦ったが、力及ばなかった。

だが、タイガーとウルフは、その敵からナイトメア公爵と幼かった殿下をお守りになったのだ。

四人の侵入者が悪夢城を去り、また平和がこの世界に戻ってくると、先代ナイトメア公爵はタイガーとウルフの働きに感激し、二人が望む褒美を与えようと質問したのである。

そして二人は、その褒美にグスタフの地下庭園を奪い取ったのである。

グスタフへの嫌がらせで地下庭園を奪ったのではない。

彼ら二人は密室の広い閉鎖空間と、庭園の天井に浮かぶ人工太陽が欲しかったのである。

暖かい日差しと誰にも見られることなくトレーニングに励めるジムが欲しかったのだ。

彼ら二人はグスタフ同様に、肉体を無くしている。もう、この世界でしか生きられない魂のみ存在。それでも体を鍛え、技を磨きたいと執着している悪霊。

戦う姿を人に見せない。

己の技は、必殺。

相手を必ず殺す、秘密の殺法だと考えている古い考え方の武術家である。

その技を磨くのに、地下庭園は具合がよかったのだ。ただ、それだけなのだ。

グスタフが階段を下り終わる。二十メートル程先に入り口の明かりが見えていた。人工太陽の光であろつ。

ここが悪夢城の最下層。

かつてはグスタフの地下庭園が広がっていたエリア。

グスタフが光に向って歩き出す。

扉は無い。

五年程前に壊れて以来、修理されていなかった。それどころか扉本体が何処かに紛失している。

やがてグスタフが入り口を潜り室内に入った。

天井から降り注ぐ永遠の輝きが、室内すべてを照らし出していた。しかし、その光景は、グスタフが手塩にかけた地下庭園の面影を、微塵も残していない。

荒れている。

荒れているが、廃墟ではない。

寧ろ廃墟の方が、グスタフにとってはなんぼかましだっただろう。

もしも、タイガーとウルフから地下エリアを取り返せれば、また庭園を復活出来ただろう。

だが、目の前に広がる光景は、廃墟よりも酷かった。

ジャングルなのだ。

鬱蒼と多い茂る亜熱帯植物の密林が、室内を多い尽くしていた。

空にはカラフルな怪鳥が飛び交い、蔓の巻きついた木々には擬態する爬虫類の姿が窺える。

土はじめつき、日の届かない影には苔が生え、大きなモスキートが飛んでいる。

止めとばかりに成長した食虫植物がグスタフの鬱を倍層させて苦しめる。

別世界だ。

地下に巣くう者たち (後編)

密林化した空間を大きく見回してグスタフは思う。

これでは無理でだ、と。

「ふうう……」

心から悲しみを表す溜息が、切なくも零れ出る。無念が色濃く窺えた。

ここにかつてのような日本庭園を復活させるのは不可能だ。間違いない。

僅か十年の間に、環境そのものが別世界へと変貌していた。土も空気も温度も、すべてが絶望的だった。

俯いたグスタフが親指と人差し指で眉間を摘まんで喉を低く呻らせた。

ここまで変わってしまったえば、流石のグスタフでも諦めが付く。否。諦めなら十何年も前に付いていた。

ただ、庭園の名残を見せる大きな置石などの姿が、密林の隙間に見え隠れして、否応無しにも心残りを誘う。

気分を入れ替えたグスタフが、凜とした眼差しで亜熱帯のジャングルを見詰める。

眼前の密林には細い獣道が一本窺えるが、それは昔のせせらぎ跡だとグスタフは知っていた。水は枯れ風情の痕跡すら残していない。

ジャングル内に足を進ませたくないグスタフは、扉が紛失した地下の出入り口から声を張る。

「ダイガー殿、ウルフ殿、いらっしやいますかデス」

返事は無い。

代わりにジャングルから極楽鳥の奇声だけが鳴り響く。

もう一度声を張るグスタフ。同じ様に二人の名を呼んだ。すると今度は人間の声が帰って来た。

「これはこれは百人將軍。貴公が地下に舞戻るとは珍しや。また、部屋を掃除しろとのいちゃもんか？」

男の声だが老いている。太く深い声だった。渋い。

「そうではないデス。この地下が片付くとは、はなから思ってもいないデス」

誰でも同意見を述べるだろう。

「では、何用じゃ」

別の声だ。

また老体の皺声だったが、先の声より更に老け込んでいる。若干甲高い老婆のものだ。

グスタフが堀の深い眼差しを細めた。

密林の向こうで何かが僅かに動いたような気がした。

「悪夢城当主、ナイトメア公爵二世様からの依頼を、お二人へ伝えに参りましたデス」

「依頼とな？」

「おやおや、ぼっちまが、この婆や爺に何用じゃて？」

言った後に老婆は、ひっひっひつと奇怪な笑い声を上げていた。

「今現在、悪夢城に千を超える軍勢が攻め込んでいますデス。その撃退を二人お願いしたいとのことデス」

「千の軍勢とな。その程度の数ならば、百人將軍、貴様一人でゆうに事足りるではないかえ？」

老婆の声にグスタフは、それが叶わぬと答えた後に、理由を淡々と述べ始めた。

「敵将の中に、私めを上回る猛将が一人居りますデス。

それと未確認情報で私めもまだ詳細を把握しておりませんが、裏門にも伏兵が現れたもようで、現在四天王の内三名が応戦中とのこと。裏門の敵は少数精鋭の奇襲部隊と推測されますが、その中にも達人級の武芸者が居るとの報告が上がっておりますデス。

もはや、私め一人では事足りぬ状況下でありますデス」

「ほほう、それはそれは面白い」

そう言って愉快に笑い出す爺声。

己の非力さを己で暴露したとはいえ、老人の一言は屈辱であった。

更に話し続ける爺声。

「だがのお、百人將軍。我ら夫婦を動かすということは、それ相当の報酬を支払う準備できているのかえ？」

「それに関しては、心配無用でありますデス」

やはりと思うグスタフが、ジャングルに身を隠す存在に対して、気配だけを頼りに睨みつけながら答える。

「ナイトメア公爵は、報酬は望みのままにと仰っておりますデス」

「ほほう、ぼっちゃんも太っ腹なことだ。先代に似たのかのお」

「ワシら夫婦はがめついぞ」

笑う老夫婦。

この二人が貪欲なことはグスタフも心得ていた。他者の弱みに付け込んで、骨までしゃぶりつく手口は嫌悪感をいやおうにも感じさせる。

「ナイトメア公爵様は、それでも是非と……デス」

不本意ながら頭を下げるグスタフ。その姿は、主に忠誠を尽くす執事の鑑であった。

「よいよい、百人將軍、頭を上げい。御主の忠義に免じて、その依頼を受けてやるわい。だが、頂く物はキッチリ頂くがお。

まあ、この爺と婆に任せておけい。貴様は大船に乗った積りで居れば良いて」

「ひゃひゃひゃ、まったくじ、まったくじ」

グスタフにとっては泥舟だ。安心なんぞ微塵にも感じられない。この戦いに勝っても負けても悲劇は起こるだろう。最悪だけは避けたいものである。

「では、おふた方、私めは一足先に戦場へと向います故、失礼しますデス」

「御主も出るのかえ？」

「当然ですデス。おふた方も速やかに地上へ……」

述べたグスタフは、返事を待たずに踵を返した。すぐさま降りてきた階段を早足で上り始める。

グスタフの姿が見えなくなると老夫婦はジャングル内で愚痴を述べ始めた。

「相変わらずせっかちじゃな、あの男はあ」

「所詮は軍人上り、堅物が板に付いているわい」

そう言つて老夫婦は、また笑う。

その会話と笑い声は、階段を登るグスタフにまで届いていた。眉間に皺を寄せながら口をへの字に曲げる。

「干物妖怪どもが……」

小声で本音を零す。
だが、今は古くからの人間関係で揉めている場合ではない。自分の感情をグスタフは再び押し殺した。

忠義。

その言葉が心を静める。

あの二人ならば、己が叶えられない主の願いを、確実に叶えてくれるだろう。

それだけは確実にだと考えることが、唯一の救いであった。

冷たい階段に革靴の足音が響く。

左手にぶら下げたランタンが周囲を淡く照らす中、グスタフは地上を指す。

双眸を鋭い。執事の眼光では無い。

それは、戦士の瞳。

徐に上着の内側へと手を滑り込ませる。

そして流れる動きで大きなナイフを抜き出した。

刃渡り約七十八センチ。重さ約三キロ。

銀色に光を反射させる刀身はブーメランの如く途中から手前に曲がっている。

ククリだ。

しかも大きい。差し詰めジャイアントククリなのだろう。

ククリとは、ネパールのグルガ族が元祖のナイフである。

刀身が片刃で湾曲しているのが大きな特徴であり、殺傷的なイメージを他者に与える刃物だ。

現在ではインド軍の公式採用ナイフとして有名となっている。また、イギリス軍のグルガ部隊が使用していることでも有名だ。

グスタフが斜めにククリを振り下ろした。残光が闇を両断する。

「ふうう……」

深い溜息が零れた。

「運命はまた、私めに、このナイフを降らせるのか……。私めを軍人に引き戻すか……。デス」

寂しそうに語る声。しかしグスタフの瞳は、殺戮に濁った英雄軍人特有の双眸だった。

瞳が放つ輝きは、殺した敵兵の魂分だけ輝いている。まるで勲章だ。

夢の世界では、生きている人間は本名を使えない。それがルールだ。故に皆が偽名を名乗る。

しかしグスタフの名前は、本名である。

グスタフ・ケッセルリンク大将。

元ドイツ将校。

1942年、戦死。

当時、五十五歳であった。

スタリーリンググランド攻防戦にも匹敵する激戦を繰り広げたと記録されているヴェリーキエ・ルーキの戦いが、彼の最後の戦場であった。

彼は、そこで准将から二階級特進して大将となる。

それがグスタフに取って、人としての最後の名誉だった。

後に、この世界へと落ちる。

現在は、執事を務める幽鬼。

死者である。

指きり魔

「指きりげんまん嘘ついたら針千のくます、指きった」

「お父さん約束だよ！」

「ああ、英太。約束だ」

指きりの約束。

父は俺と大切な約束をする時は、必ずこれをやった。

色々な約束を父と交わした。

大切な約束だったが、どんな約束だったかは殆ど覚えていない。

大概が父と子の間で結ばれるたわいも無いことだったと思う。

動物園に連れて行ってってくれるとか、運動会に参加してってくれるとか、

誕生日にねだったプレゼントを贈ってくれるとかだったと思う。

どこの家でも見られる光景だ。

俺と父が指きりを交わすときは、約束事を絶対に守られた。父は絶対に守れる約束以外は、指きりをしなかったからだ。

だから俺も、父と指きりをする時は、絶対に約束を守る為に努力を絶やさなかった。

毎朝素振りの稽古をする。テストで七十点以上をキープする。剣道のちびっこ大会で、必ず三位以内に入る。全部守った。

父と指きりで約束をしたからだ。

他にも沢山の約束を指きりで交わしたが、このぐらいしか覚えていない。

だが、指きりをしたのに、一つだけ守られなかった約束がある。その約束だけは、十年たっても忘れられない。父が俺との指きりを守らなかつたのは、それが最初で最後だった。

俺が小学生六年の時だ。

その日は大雨が降っていた。

体育館の窓から外を眺めても、激しい豪雨で町は曇って見えていた。その雨が俺を不安にさせていたことも覚えていて。嫌な予感がしていた……。

剣道大会小学生の部決勝トーナメント直前。俺はずっと窓の外を見ていた。

前日、父と指きりをしたのだ。

大会初日を順調に勝ち上がった俺はベストナインに入り、大会二日目の決勝トーナメント第三試合に決まっていた。

父は仕事を休んで応援に来てくれる筈だった。そういう約束で、指きりを交わしたのだ。

だが、二日目の朝に電話があり、父は会社に出社して行った。

試合までには会場に行くからと父は、申し訳なさそうな顔をして言った。

俺は父を疑う事無く信じていた。

指きりをしたのだ。

父は、指きりを破ったことがない。

だから俺は、父を信じた。

しかし父は、俺の試合が始まって会場には到着しなかった。それどころか大会が終わっても会場には姿を現さなかった。

俺は一回戦で負けた。

ショックだった。

試合に負けたことよりも、父が俺との約束を破ったことの方がショックだった。

交通事故だった。

会社から剣道大会の会場まで来る途中に、雨でスリップした大型トレーラーに巻き込まれて死んだらしい。ほぼ即しと聞いていた。

横転したトレーラーの荷台に、乗用車ごと潰されたのだ。

その日以来、色々なことが変わった。

一家の大黒柱を失ったのだ、当然ともいえようと。とにかく酷かった。

母は酒で寂しさを紛らわせる毎日が続き、やがてアル中になった。祖母は息子の死を受け入れられず、現実逃避。一気にボケて徘徊するようになった。

家の中でまともだったのは、俺と祖父の二人だけとなったが、それも直ぐに崩れる。祖父が祖母を刺して無理心中をはかった。

前々から祖父は、祖母の変わりように嘆いていた。それが理由だろう。

そうそう、祖父が祖母を刺したといったが、正確には斬ったといったほうが正しい。

祖父も剣道をやっていた。昔は真剣を振り回して稽古をしていたらしい。その腕前で、長年連れ添った妻を斬ったのだ。

真剣の達人クラスになると、斬られた相手は痛みを感じる間もなく絶命することもあるというが、祖父がそれだけの腕を持っており、祖母がそうであつたかは解らない。

ボケる前までは優しい人だったら、そうであつてもらいたい思つた時期もある。

悲惨な家庭環境だつたが、母が車に轢かれて死んでくれた時に、その家庭も終焉を迎えてくれた。

俺一人になつたのだ、もう家庭とは呼べないだろう。

しかし、困つたのは金だつた。

母が車に轢かれたのだが、賠償金を相手からぼつたくなかつた。

母は泥酔状態で、アル中との医者診断も出ていた為、警察に自殺と判断されたのだ。

実についていない。

高校にも行けなかつた。

だから俺は、金の為に何でもやった。

何でもといつても、基本的には悪いことばかりをやつたのだ。

真面目に働くよりも、悪いことの方が金になる。犯罪の方が割がいいのだ。

しかも犯罪は、捕まらなければ罪に問われない。

実に良い。

だから俺は、ヤクザになった。

極道の道を選んだのだ。

そんな俺が『指きり魔』と呼ばれるようになったのには、それ相応の理由が勿論ある。

俺は、約束を破る奴が許せない。掟を破るのは、特にだ。

ヤクザ社会でも御法度を違えた者には罰が与えられる。

その罰を自分で払える根性が備わった奴らばかりだったら、俺が指きり魔なんて呼ばれるように成ることはなかっただろう。

重大なミスを犯す者。極道から足を洗おうと考えている者。そんな連中がやらなければならぬ儀式が『えんこをつめる』だ。

解り易く言えば、自分の小指を自分で切り落とす。小指を詰めるだ。これで落とし前が付く。

だが、小指を詰めるのにヒビリ、逃げ出す阿呆も中にはいる。

俺は、そいつらを捕まえて小指を持ち帰るのが仕事だった。

極道の中でも、皆が嫌がる役割だ。

仲間だった連中を捕まえて、無理矢理指を切り落として帰ってくるのだ。仲間にも嫌われた。

昔の侍が切腹をする際に首をはねる役割を、介錯人と呼ぶ。

この役割も嫌われ、人に恨みを買うという。

昔の時代劇で、『子ずれ狼』ってあっただろ。

あの主人公の侍も、介錯人だったらしい。

その頃の怨み辛みで介錯人をやめた後も命を狙われるってストーリーだった。

そう、俺もあの侍と一緒になんだろうな。

きっと仲間に怨まれているんだろうな。

まあ、いいけどよ。

ただ俺は、約束を破った奴の指を斬るだけだ。

それも楽しいしよ。

それよりもよ、あの巨大蔓を突破して城内に侵入したはいいが、中は迷路だな。

一緒に突入したオーク共も、これじゃあ迷いまくっているだろうさ。ナイトメア公爵って奴の首を切り落してやろうと我先に突入してみたが、こりゃあまいったぜ。

ん？

誰か居る。

通路の奥。暗闇に紛れて誰か居る。

黒いスーツに白髪のアールバック。

召使か？

それにしても怖い顔をしていやがるな。

「私めの名前はグスタフ。この城で執事を務めている者であります

デス」

「執事だと」

「はいでありますデス」

何が執事だ。良く見りゃあ片手にデカイナイフをぶら下げていやがるじゃねえか。

それにあの双眸。鋭い。

人殺しの目じゃあねえか。しかも一人二人を殺した目じゃあねえぞ。ありゃあ、相当の数を殺してきてやがる。

「是非とも貴公に私めのお相手をしてもらいたいデス」

「おもしれえ〜。丁度道に迷って退屈していたところだ。暇潰しと言っちゃあなんだが、お前さんに道案内でも頼もうか。ギタンギタンに伸した後によ」

「面白いデス。もしも私めを打ち負かしたら、その願い聞き入れますデス」

「本当か？」

「二言は御座いませんデス」

「よし、約束だ。俺が勝つたら道案内をもらえぜ」

流石に指きりをしてくれる状況じゃあねえよな。

それは諦めよう。

「これ、まじりますよー！」

「じゃあー！」

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手（前編）

「おいおい何だありゃあ、俺らの他にも戦っている連中がいるじゃあねえか」

馬鹿正直に城内へと突入しなかった狩人は、自作のレッドゴーレムを引き連れ城の裏手に足を伸ばして居た。

意外とビンゴだった。

タキシードを着た猫人間たちと、片手がガトリング砲になっている巨大な怪人が戦っている現場に遭遇。

猫人間の他にも鱈人間も居る。どうやら猫人間の見方らしいのが戦いの流れから解った。

一体の敵に対して懸命に飛び掛る百を越える亜種の群れ。だが、戦況は猫人間と鱈人間組の方が不利に窺える。

ガトリング砲の銃声が鳴り響き、空になった葉莢が地に散らばる。硝煙が空気を濁し、呻る弾丸が次々と敵を打ち抜いて撃破すると、惨たらしい肉片と化して転がるように崩れ落ちる。

巨漢を有する鱈人間ですらガトリング砲の弾丸を二三発喰らっただけで原型が解らない程にグシャグシャになる。

せむし男の左剛腕に装備されたガトリング砲の破壊力と連射精度は十分すぎる程に殺傷力が高かった。

スピードを生かしせむし男の背後に回り込む数体の猫人間。しかし、せむし男はガトリング砲を乱射しながら真上にジャンプする。高さは十メートル。連射を続けるガトリング砲の銃口が足元を狙い銃弾

の雨霰を闇雲に降らせた。

脳天から大口径の銃弾で打ち抜かれた猫人間は体ごと木っ端微塵に砕けて一匹の生き物とは思えない数の死体数に分裂する。

鰐人間も似たようなものだ。上半身が無くなって無残にも横たわっている。

地上に着地したせむし男は、尚もガトリング砲を笑いながら乱射していた。

せむし男と猫人間&鰐人間の戦闘が開始された凡そ五分ぐらいだろうか。狩人が銃声に誘われて、この場を覗き見ていたのと時間にして変わらないだろう。

僅か五分で勝負は決しられた。

戦況は、せむし男の圧勝。

周囲に散らばる無数の残骸。流れ溜まる血の海。空気に漂う硝煙と死臭。その真ん中に立ち尽くすはせむし男ただ一人。敵は死屍累々。

「こりゃあ、すげえ化け物が居やがった。よし、あれは俺がぶち殺そう」

そう考え狩人が物陰から出て行こうと一歩前に踏み出した時、他にも人影があることに気付く。

「状況を把握せずに出て行くのは愚行だな」

もう少し様子を窺うことにした。

「す、凄いですね……。これがイゴールちゃんの本気ですか……」

「驚いたかな、昂輝君」

グレーのスーツを着た男が銀縁眼鏡を片手で直しながら受け答える。
「んー、本来ならイゴールちゃん本人から訊いたほうが筋つてもんたんだが。まあ本人も事を隠しているところかべらべら話して回っているぐらいだから、僕が語っても問題ないだろう」

「よろしくお願いします」

この際だからと昂輝も頭を下げる。

「昂輝君は『フランケンシュタイン あるいは現代のプロメテウス』という小説を知っているかな？」

「小説……。フランケンシュタインの名前ぐらいなら知っています
が」

「まあ、一般的ならば、その程度だろうね」

「すみません……」

謝るようなことではないかが、思わず謝ってしまった昂輝。

「まあ、順に沿って話してあげるよ」

それを皮切りに軒太郎の長話が始まった。
雄弁にうちんくを語りだす。

「フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウスって小説は、1818年イギリスの女性小説家メアリー・ジェリー（匿名）が書いた小説でね。この小説は当時から好評でね。世界各地で翻訳されて出版されることと成った大ヒット作。それに関しては日本も変わらないうらなうだろ。」

そして次代を経ても摸倣されたストーリーの作品が、小説だけでなく舞台や映画などでも多く作られて、今じゃあ原型の話から極度に外れた作品も多々ある。そのせいで、一般人には、登場する怪物自体の名前がフランケンシュタインだと誤解されていることも少なくないよね」

「はい、僕も原作は知りませんし、少し前までそうでした」

「まあ、それはいいとして。小説の内容をダイジェストに説明するところだ。」

スイスの若き天才科学者ヴィクトル・フランケンシュタインは、男女の性行為が行なわれなくても、子供を授かれる研究を行なっていた。最初は怪物を作るために研究を開始した訳ではなかったのだが、研究の段階で死体を繋ぎ合せて人間を作り出す方向へと変化していった感じかな。

子供を作り出したかったが、子供の死体は手に入り難い。だからとりあえずあえず大人の死体で研究を続けたのだよ。

何せ子供は死なずに成長するが、大人はけっこう死んでくれるからね。死体の調達率が大きく異なる。

まあ、1818年の人間が考えたことだ。当時の発想だと、クロールン技術どころか人工授精の発想すら無かったんだろっね。

ある物を繋ぎ合せて作る。当時としては鬼才的発想だろうさ。事実、小説は受けた」

そういう時代だったのだからと昂輝も納得した。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手 (中編)

「そして、フランケンシュタイン博士の実験は、失敗続きの連続の中、何の前触れも無くある日突如に花開いた。

本当に突然だったらしい。いきなり繋ぎ合わせた死体が動き出したんだよ。作った本人も驚いて研究室を裸足で逃げ出したくらいだからね」

繋ぎ合せたとはいえ死体。それを動かそうと研究していたのに、突如動き出せば本人も驚くものなのかと昂輝は悩んだ。

そこはつつこまずに軒太郎の話を黙って聞き続ける。

「まあ、逃げた博士が翌日の朝、研究室に戻ってみると怪物の姿はなかったらしい。怪物は何処かに行ってしまったのだよ。

ただ、問題だったのは、その怪物が並みの人間よりも強靱で生命力に溢れていたこと。そして、それ以上に問題だったのは 否、悲劇だったのは、怪物が普通の人間よりも心が優しかったことだな」

「心が、優しい……」

「そう、ピュアだったんだよ。

しかし外見は怪物だ。何せ死体を繋ぎ合せて作り上げられた人造人間だからね」

ピュアな心にモンスターの外見。今のイゴールと変わらない。

「だが、外見で人を判断するのが人間の性。勝手にほつつき歩いた怪物は、当然の如く人々に忌み嫌われ恐れられ、結果的に攻撃の対象となる。」

そんな日々が続けば清らかな心を持つて産まれてきた聖人だった恨みを抱くつてもんだ。案の定、怪物は人間を怨んだ。しかも、たった一人の人間を集中的に怨んだ。己の産みの親であるフランケンシュタイン博士をね」

「その怪物が、イゴールちゃんだと……」

「まさか」。今話したのはメアリー・シェリーが書いたゴシップ小説の登場人物の話だ。実在する人物の話でも、現実に起きた事件の話でもない。空想の世界の話だよ」

では、あれは、と思いながら昂輝はイゴールを見る。

「だがね。世の中は広い。馬鹿は多い。その小説を読んで、怪物を実現させようと考えた愚か者がいた」

確かに愚かしい。

「しかも、その愚か者は怪物を開発して軍用に使用しようと目論んだ。しかし愚か者は、馬鹿だが天才だった。フランケンシュタイン博士の如くね。」

更に、その発想に対して金を出す愚かな国も手伝って研究は成功する事無く脈々と続けられたんだよ」

成功しない研究を継続し続けたということだろう。

「愚かな国って？」

昂輝が愚国名を問う。

「ヒットラー率いる第三帝国。ドイツだよ」

「ドイツのマッドサイエンス。イゴールちゃんは、その天才博士の成れの果てですか……」

「いや、それも違うんだ。当たっているのはイゴールが天才と同じところかな」

まだ、話は続くらしい。

「イゴールちゃんはね、そのドイツ人博士の身の回りの面倒を見ていた使用人であり、研究の助けを務めていた助手だったのだよ」

「助手、ですか」

「当時のイゴールちゃんは、身体障害者でね。」

猫背で背中が膨らみ、歩き方もぎこちない。顔も頭蓋骨からずれが生じて醜く、言語障害から喋り方も可笑しかった。更に愚鈍でね、自分で物事を判断ができない、他人に命令されないと仕事もまま成らなかつたらしい。

しかし、身体障害者の中には、生まれ付いてのペナルティーと引き換えに、神から素晴らしいギフトを授かるものが居る」

「イゴールちゃんも、何か凄い力を生まれ付き持っていたのですか？」

「そう、一部の能力が以上に発達したてた。その能力は、まさに天才のレベル」

「天才レベル……」

人と会話をする際に出てしまう昂輝の癖。相手の言った言葉を反芻する。この癖に本人は気付いていない。

「イゴールちゃんはね、天才だったが、そのジャンルは記憶力に關してだけなんだ。瞬間記憶能力者って知っているかい」

浅い知識だが昂輝も瞬間記憶能力者について少し知っていた。

「瞬間記憶能力者。一目見ただけで、景色や文章を暗記してしまい、忘れることが無い特殊能力者ですよ。探偵マンガで見たことがあります」

「そう、それだったのだよ」

「その瞬間記憶能力がイゴールちゃんに備わっていたとして、今の話にどう関係して来るのですか？」

「当時のイゴールちゃんは、今とは異なる性格だね」

昔は違った性格。

昔。

古い話。

確かに話の内容にヒットラーやドイツ軍が関わって来る以上、今の話は第二次世界大戦頃の話なのだろう。そうなれば1939年から1945年の話だ。七十年ぐらい昔の話となる。

軒太郎の語りようだと、イゴールちゃんは仕事を持ち働いている様子。成人していても可笑しくない年齢だろう。ならばイゴールちゃんの年齢は、最低でも八十歳には達している可能性がある。下手をしたら百歳に達していても可笑しくないことになる。

しかし、百歳の老人が、ガトリング砲を片手で撃ちまくる芸当が出来るとは思えない。

年齢計算に大きな疑問が昂輝に湧いた。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手 (後編)

「イゴールちゃんが、そのドイツ人博士に使っていた頃の年齢は、四十後半だったらしい。」

妻子は無く独身で、身内は零。イゴールちゃんは捨て子で、両親の顔すら知らないと言っていたよ。

生まれ落ちた頃から、見ただけで解る身体障害者。親に捨てられた理由も本人は納得している」

「酷いですね。どんな子供でも、自分が愛した人の子供なのに……」

暗い顔の昂輝とは正反対に、語る軒太郎は平然としていた。

だからといって、軒太郎に慈悲の心が欠けている訳ではない。初めてイゴールの素性を聞いたときには、当たり前のように同情を感じていた。

「まあ、それは置いておいて。」

当時のイゴールちゃんは、自分の身体的マイナスを怨み、その改善を願った。その目的を達成する為にイゴールちゃんはね、ドイツ人博士に自分から近寄って行ったのだよ。彼の研究を横から、かすめる為にね」

「かすめる為？」

昂輝の反芻が出た。

その癖が語り続ける軒太郎の饒舌に油を注ぐ。

「そう、かすめ取る為。人造人間製作研究の成果を盗むってことね」

「データ泥棒ってことですか……」

「そうそう」

銀縁眼鏡の下で少し垂れた目を細めながら笑う軒太郎。その微笑を見ながら昂輝は思う。

確かにイゴールちゃんの瞬間記憶能力は、そういった行為に適している。

チラリでも研究データが記載された書類を見てしまえば、いとも簡単に研究成果を盗み出したことになる。

「やはりデータを盗む理由は……。あれですよね」

昂輝にも目的が、容易く想像できた。

「察しがいいね、昂輝君。それだよ。イゴールちゃんは、その研究が成功すれば、自分の醜い体も人並みの体に交換できると信じていたのだよ」

やはりである。それしか無いだろう。

イゴールは物事の判断が一人で出来ない人間。幾ら記憶力が天才レベルであっても、研究などは出来ない。だから他人にやらせて自分は結果だけを盗もうと考えたのだろう。

「幸いにも当時の殆ど人間が瞬間記憶能力については知らなかった。その為イゴールちゃんは、余計なことはかり覚えている無能な身体障害者としか見られていなかった。それが偶然にも良い隠れ蓑となったのだよ。」

研究成果を記載されたデータは、盗み放題だったらしい。何せ掃除をするふりをして研究室に入り、ファイルを持ち出さなくても、チラミで盗み出したのと一緒なんだからね。」

ドイツ人博士も周りの関係者も、完全に油断したということだろう。人間は、外見に騙され易い。それに、瞬間記憶能力なんて知らなかつたんだろう。

「そして使用人の仕事を地味にこなしながら、研究データを盗み見る毎日が続いたらしい。

時には嫌な仕事も行ったらしいよ。研究材料となる人間の死体を運んだり管理したり。酷い時には調達にも駆り出された、とか」

「死体の調達ですか……」

「まあ、時代は第二次世界大戦中。戦場に足を伸ばせば、それも難しくない時代背景ではあったらうがね。

でも、イゴールちゃんにとっては、一番辛かったのは苛めだったらしい」

「イジメ……」

複数の人間が集まれば、必ず起きる上下の関係。それが引き起こす人間の罪。苛め。

どんなに平和な世界を作ろうとしても消える事無く発生するのが苛めだ。

昂輝も苛め事態が、人間の性だと思っている。

中退するまで通っていた高校でも苛めは存在していた。自殺や大きな事件に発展するほどの苛めではなかったと思う。でも、確実に存

在していた。

「イゴールちゃんは、じつと耐えた。どんなに罵倒されても、どんなに馬鹿にされても、愚鈍、身体障害者、気持ち悪い、何を言われなくても耐えた。時には暴力を受けることもあつたらしい。それでも、どんな扱いをされても、ただ耐えたらしい。ただ、ただ、実験が成功するのを待ったらしい」

今こうしてイゴールが、せむし男で暴れていたのだ、念願は叶ったのだらう。研究は成功したのだらう。

しかし。

「そして、実験は成功した。それどころか実用化寸前まで研究は進められた」

そうだろうと頷く昂輝。

しかし、そのような研究が成功しとは、現代科学でも聞いたことが無い。

「だが、時代が今一步で邪魔をするんだな、これが」

「邪魔……？」

「研究所がある町を戦火が襲ったんだよ。

その戦闘で研究室は、重要軍事施設と判断され戦車による砲撃と、戦闘機による空爆を激しく受けたのだ。

研究所は全壊。ドイツ人博士は死亡。研究所に居たその他の研究員や関係者も死亡。研究成果もろともすべてが炎に焼かれながら瓦礫に埋もれて消失してしまった」

「イゴールちゃんは、どうなったのですか!？」

「イゴールちゃんは運が良くてね。たまたま死体調達の為に町を離れており危機を逃れたそうなの」

「なるほど、それでイゴールちゃんは後日自分で研究成果を利用して、今の体を手に入れたのですね」

チツチツと、人差し指を立てながら横に振る軒太郎。

「それがそう簡単に物事は旨くいかなかったんだな」

「え？」

「実用可能な研究データはイゴールちゃんの頭の中にあっただが、人造人間を製造する施設がなかった。

死体を繋ぎ合せて超人を作るといっても、それ相当の施設や電力、それに特殊な薬品なども大量に必要となった。

ただの身体障害者で愚鈍なイゴールちゃんには、それらが準備出来なかった、しかも時代は戦乱の真っ最中だったしね。尚難しい」

「あゝ、なるほど」

「そこでイゴールちゃんは、再び他人を頼った」

自分に足りないもの、出来ないことは、他人に任せる。それが当時のイゴールが得意とした生存術だったのだらうと昂輝は思った。

「そして知り合った人物と一緒に日本に渡ったのだよ」

ドイツから始まった話に、祖国日本の名が上がり昂輝も少し驚く。そして知り合った人物の名が気になった。やはり時代の年数からして、ヴァルハラ探偵事務所でも老齡者の功胤老か所長の眼一郎でないかと予想する。

「知り合った人物は、やはり」

昂輝がみなまで言う前に、軒太郎が素早く答えた。

「美藤傀儡だよ」

「えッ！」

予想外の名前に驚く昂輝。

生き人形を操る女魔導士。

昂輝は会ったことも見たこともないが、美藤傀儡に関して良い印象は抱いていない。

そして、疑問。

ヴァルハラ探偵事務所と因縁が濃い人物が、何故に昔のイゴールと繋がるのか昂輝は素直に驚いて理由を問う。

「まあ、昔の話だからね。どこで誰が誰と知り合いであっても可笑しくないだろう」

「それはそうですが……」

「何よりもイゴールは人造人間の体が欲しかったんだろうし、美藤

傀儡は研究データが欲しかった。両者の利害が一致したのだ、問題なかるう。

そして、施設や資金は美藤が揃えて、イゴールは人造人間の体を手に入れた。一方、その技術は美藤の手にも渡った」

難しい表情を見せる昂輝。

「イゴールちゃんに、そんな過去があったのですね……」

昂輝を見ながらの太郎が、またもや笑った。

「しかしだ。これで話は終わらない」

「まだ、話が続くのですか！」

「ここからは、イゴールちゃんと我々が知り合うなれそめだ」

「そっちですか……」

ここまで聞いたのだ、最後まで話を聞き遂げようと昂輝も腹を括った。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手 (続編)

「イゴールちゃんは美藤の協力を得て、ついに人造人間の体と、それを製造管理出来る施設を手に入れ、外見をのぞけば問題の少ない新人類に進化したのだがね」

新人類。

問題の少ない、て事は、あの人造人間の体には問題が多少はあると言っことだろう。

軒太郎は、その問題点を避けて話を続ける。

「何せ百歳を越える年齢だ、脳に問題が発生し始めたのだよ。脳の老化だ」

「脳の老化……ですか」

「ひらたく言って、ボケだよ」

「ボケ……」

キョトンとする昂輝。

「幾ら肉体が不死に近くても、脳は自前だからね。それにイゴールちゃんの瞬間記憶能力が、脳の老化を急激に早めた。

あれだよ、パソコンのハードディスクがいっぱいになるのと一緒だ。瞬間記憶能力の影響で、脳が記憶できる限界を超えてしまった状態でね。

その結果が、古い記憶が新しい記憶に押されて消え始めたのだよ」

心太のようだと思う昂輝。
空想の中で、心太がにゅると押し出されるイメージを思い浮かべた。

「人間の脳をパソコンのハードディスクに置き換えると、その記憶量は約十七・五テラバイトと言われているのだがね。

計算方法は、脳が持つ神経細胞数が約百四十億。一個の細胞が別細胞にシグナルを伝達する為のシナプス連結数は平均千個とされている。

これを元に学習可能記憶箇所は、百四十億×千個で十四兆箇所となるとして、一箇所のデータ量を約十ビットとして考えれば、一ビットが八バイトなので、更に八倍。よって十七・五テラバイトとなる訳だ」

無表情で昂輝が、何を仰っているか理解できません、と呟く。

「まあ、人間の脳がそれ程の記憶量を可能とするのだが、イゴールちゃんは更に数倍の記憶量を可能としていただろう。

しかし、限界が来るのは並みの人間と変わらない筈だ。歳を取れば物忘れも激しくなるしボケも進むさ」

脳だけでも歳は取る。

それは、イゴールちゃんが手に入れた人造人間製造技術では克服できないジャンル。

「イゴールちゃんは、その物忘れ現象に、老化に恐怖を感じたのだよ。このままではすべてを忘れてしまう。研究成果を忘れてしまう、とね」

「そこでまた他人を頼った、訳ですな」

恐らくは同じパターンだろうと昂輝は予想した。それが当たる。

「正解。しかしその頃には美藤と決別していたイゴールちゃんは、どこで知ったかは知らないが、私の父、眼一郎を頼って来たのだよ。それが十五年前の話だ」

「十五年前……」

「父はイゴールちゃんの話聞いて、幾つかの対処方法を提案した。流石に愚鈍なイゴールちゃんでも、今回はやはり父の提案の中から最善と思われる方法を選択して、実行したのだよ」

「どんな手段だったのですか？」

「お砂ねえさんが、ある術をかけた」

「妖術ですか、それとも呪いの術ですか？」

「記憶消去の術さ。一般的な使い方は、目撃者の記憶を消したりして、証拠隠滅をはかるための古術だ。」

その術でイゴールちゃんは、不執拗な記憶のみを消そうと目論んだ。溜め息一つ分の間を開けた後に軒太郎は、困ったような顔をして言った。

「だが、術は失敗」

「えー！」

「まだまだお砂姉さんも駆け出しの新米呪術師だったからね。お砂姉さんも憑き姫同様に、幼少時代から天才少女と言われていたが、まだ力不足な面もあったってことさ。しかたないよ」

「そ、そうですね。しかたないですよね」

失敗してどうなったのだろうと考える昂輝が、同情の汗を流す。

「まあ、消したかった要らない記憶は見事に消えたんだけどね、一緒に大人としての自覚まで思わず消えて、予想外なことに幼児返りまで起こしちゃったんだよ。あははははー」

笑っている。悪びれた様子もなく笑っている。

「じゃ、じゃあ、イゴールちゃんが子供のような無邪気なのは、術の失敗のせいなのですね」

「まあ、そうだが、これで良かったのかもしれないよ。不幸な幼少期を忘れて、もう一度人生をやり直しているのだからさ」

考え方によっては、そうだ。

捨て子で身体障害者だった幼少期の記憶は、殆ど術で失っているらしい。

だとするならば、あの無邪気さは素だ。子供からやり直しているのだ。

きっと幸せなのかもしれない。

事実、絶えることない笑顔を振りまいている。

ここで昂輝が気付く。軒太郎が最初に言っていたこと。イゴールちゃんには戦っている自覚が無い。その言葉を。

「なるとぼ、それで戦っているつもりがイゴールちゃんには無いと言っているのですね」

「そうだよ。幼稚園児がサッカーや野球、それにヒーローごっこをやって、戦っていると自覚するよりも、遊んでいるという実感の方が多いだろう、普通はさ」

「そうですね」

「まあ、イゴールちゃんへの幼児化に対して一番責任を感じているのが、術を施したお砂姉さんの方だ。

責任感故に十五年たってもイゴールちゃんの面倒を熱心に見ている。実の姉のようにね」

お砂姉さんとイゴールちゃんは、ツーマンセルを組んでいる。その理由が、過去の話が原因だったとは思いつかなかった。

「でも、十五年前のことなら、幼児返りしたイゴールちゃんだって大人に成長していると言うか、元に戻っていても良い年数がたったのでは？」

「いや、昂輝君。イゴールちゃんは大人としての自覚すべてを失い幼児返りを起こしたのだよ。簡単言うと、人間としての本能に近い部分を失った。成長期を終えた大人が、それらを再び学習して身に付けるのは困難だ。

モラルが悪い大人は、モラルの悪い生活を続けるだろう。それに似ている」

「それだとイゴールちゃんは、永遠に子供のままなのですか……」

「ああ、多分。もう大人に戻ることはないだろうね。それはこの十五年間が照明している」

その言葉を最後に軒太郎の話が終了した。それが何となく昂輝に悟れた。

その時イゴールが軒太郎たちに声を飛ばす。胸のスピーカーから無邪気な声が発しられ、皆がそちらを見た。

「ねーねー、皆。こいつら捕まえちゃったけど、どうしましょうか？」

せむし男の右手が鎌爪で傷付けないように、旨いこと半漁人の頭を驚掴んでいる。

大きな掌に頭部を握られる半漁人。

じめじめした体には力が入っておらず、首一本でぶら下がるように手足をダラリと揺らしている。気を失っているのだろう。

その横には半死常態のキングマンティスを背負ったまま恐怖にへたれこむメニヤースの姿があった。

彼らの木偶がせむし男と交戦している間に仲間を背負って逃げる積りが、あまりの銃弾の激しさに逃走のタイミングを失ってしまったようだ。

拳句、イゴールに発見されて追い詰められている。

「にやにやにやあ……」

掠れるハスキーボイス。震える小麦色の肌。ペタリと折れ伏せている猫耳。

陽炎を銃身全体から放つガトリング砲を、鼻先五センチ前で付きつられるメニャースは、完全に戦意も逃走の気力も失っていた。観念しているようだが死への恐怖は克服できていない。

「ねー、こいつらもグシャグシャに吹き飛ばしてもいいんですよね
」

イゴールの声は楽しげに弾んでいた。そこにお砂姉さんが優雅に近づき静止を促す。

「まちなさい、イゴールちゃん。功風さんに、前に言われたでしょ。無抵抗の者を殺しちゃあ駄目だって」

かつてその台詞を述べた功風老が続く。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手（完結編）

「そうだぞ、イゴール。戦う意思が無い奴をあやめちゃならねえ。仮にもヴァルハラ探偵のエージェントは武俠派だあ。仲間を庇っているような輩を撃っちゃあならんわな」

功風老の言いたいことが昂輝は解った。

あのメニヤースと名乗る女怪人は、瀕死の仲間を背負っている。恐らくは仲間の治療を優先して、背負った彼を連れ出そうとしていたのだろう。

武俠とは、勇気と正義を重んじるモラルの高い武芸者のことだ。そのような人種にとって義は宝だ。

仲間を庇っている者を攻撃する非道はできない。義に反する。

「じゃあ、この人たちはどうしますの？」

可愛らしく首を傾げながら問いかけるせむし男。

ガトリング砲の銃口を、モーター音と共に回転させながら鍵爪で掴んだ半漁人の頭を小刻みに震う。

軒太郎が会話の輪に入る。

「イゴールちゃん、まあまあ待ってくださいな。

その人たちは、どうやらこの城の住人のようだ。ならば丁度良いではないか、是非とも訊きたいことがある。色々よね」

軒太郎が微笑むと、銀縁眼鏡が怪しく輝いた。

脅しと取れる言い回しだ。

軒太郎の後で昂輝が、ポンと掌を槌打つ。

流石は軒太郎。彼女は捕虜だ。彼女からこの世界や城の情報を引き出そうという魂胆なのだろう。

「にやにやにやにやー……。にや、にやんでも言うつから命だけは助けてくださいニヤア。痛いことはしないでニヤア……」

怯えるメニャースは、早くも吐く気が満々の様子だ。訊かれたことはすべて喋ってしまいそうな勢いで慄然している。

「我々に今足りないもの戦力です」

軒太郎の突然ながらの言葉。

戦力不足。

昂輝には、またもや意味が解らなかった。

ちよくちよく軒太郎は、このように遠まわしな物言いを好む。今度は何事かと昂輝が訊いた。

「戦力ならば十分以上にあるじゃないですか、皆さんの実力は千人力でしょ。さつきだつて螻蛄男を赤股さんが秒殺したし、イゴールちゃん一人で百を超える怪人たちを蹴散らしたじゃないですか」

昂輝の述べたとおりである。イゴールも相槌を打ちながら半漁人を揺さぶる。

「時に情報は、百万の兵よりも強力な武器となる。敵の数を知り、敵地の地形を知り、敵の実力や弱点を知る。それらの情報があるな

いでは勝敗に関わることが多い。
何事にも、備えあれば憂いなし、だよ」

「あゝ、そういうことですか」

意外に慎重なのかと驚きながらも感心した。

「偶然にも我々は、この城に詳しくそうな人物と遭遇した」

軒太郎の視線がメニヤースを優しく見守る。

その視線に対して猫女は困惑していた。

「更に幸運なことに、その人物は我々に友好的で、何でも訊いてくれと言っているのだよ。これ程の好機はないじゃないか」

オペラ歌手のようにオーバーアクションで喋る軒太郎。とても機嫌が良さそうだ。

気が付けばメニヤースをヴァルハラ探偵の七名が取り囲んでいた。

功凧老が顎を撫でながら言う。

「何が出てくるか解らないまま敵陣に突っ込むってのも粹で面白くないんだが、今回の仕事はあくまで情報収集だ。つまらんことに敵の壊滅でもないしのお」

「そつスねえ、師匠。ここは真面目に仕事でもしやしょうか、今何が起きているかの調査をよお」

言いながら赤股が強面をメニヤースの顔面に近づけた。

猫背でガニ股のチンピラに猫女は怯えて身を縮める。

「赤股さん、レディーに対して怖い顔を近づけたらダメよ。彼女、怯えているじゃないですか」

優雅な口調でお砂姉さんが述べると、ヘラヘラ笑いながら赤股が体を戻す。

続いてメニヤースを真っ直ぐに見詰める憑き姫が、冷たい口調で語りかけた。

「何でも話してくれるって言ってたけど、こっちも仕事だから一応はやらなきゃならない事があるの」

「にやにやあ………?」

「そうですね、憑き姫の言うとおれだ。じゃあ皆さん一斉に」

何をするのか解らないといった表情をする昂輝に憑き姫が気付いて声を掛ける。

「変身するのよ」

「変身?」

昂輝が首を傾げていると、皆が次々と変身を始めた。

お砂の長く艶のある黒髪が灰色に変わる。

赤股の肌が七色の鱗と変わり、功凧老の肌も岩その物に変化した。

憑き姫が茨巫女のカードを使い巫女服を纏うと、軒太郎の影が足元

から体に登って行き黒衣の別人へと変貌させた。
一人遅れて昴輝も、訳も判らないまま狼の姿に変身する。

奇々怪々。

ヴァルハラメンバーが全員揃って怪人の如き風方にチェンジすると、七人に囲まれて居たメニヤースは驚愕しながら戦慄に身を震わせていた。

「にやにやにやー。ニヤンですかー、この人たちはー！ー！」

メニヤースの驚きようは凄なものだった。それを見てこれが狙いなのかと昴輝も悟る。

「ひー、化け物ニヤア、怪物ニヤア、妖怪ニヤア、変人ニヤアー！」

それにしても酷い言いようである。自分を柵に置いといて他人をゲテモノ扱いしていた。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手（終結編）

大分離れた物陰から一連の様子を窺っていた狩人。悪夢城の外壁の一つだ。

彼もまた変身した七人の群像に驚いていた。

「あいつら……確か……、オヤジから壊滅命令が下った探偵事務所の連中じゃねえか……」

間違いない。探偵事務所襲撃前に高岡から貰った写真。それに映っていた面々だ。

「なんであいつらがここに……。しかも変身しやがったぞ。どいつもこいつも普通じゃあねえぞ」

狩人は視力がとても良い。日本の視力検査では2.0までしか計測されないが、恐らくは5.0ぐらいはあるだろうと自分では思っていた。

その自慢の視力が怪奇な変身を捉えた七人の円内に、見覚えのある女の顔を発見する。

「ありゃあ……、あの女は、紅いローブの女に似ているな。まてよ、てっことは、あの猫女がベロニカの娘か！
いや、ベロニカ本人か！」

物陰に全身を隠した狩人は、両腕を組んで考え込む。

「なんで囚われの身のベロニカが、化け物探偵たちと一緒に居るんだよ。可笑しいだろ。」

それにだ、あの狼に変身した小僧は、確か俺が頭を撃ち貫いた餓鬼の筈。あいつのせいで、あいつに殴られて、非常階段から転落したせいで、俺は病院送りになったんだぞ。なんで糞餓鬼は生きている。納得いかねーぞ、おい！」

狩人の脳裏に攻撃的な闘志が禍々しい炎となって燃え上がる。

仕掛けるか、と威勢の良い言葉が過ぎた。

「いや、まて俺……」

だが、その考えは直ぐに改められた。
今ではない。このタイミングではない。

ヤクザ仲間ガンマンと呼ばれる神田淳は、愚かにも熱くなりやすいタイプだが、賢くも冷め易いタイプでもある。

「懸命なのは、援軍を求めるのが一番だろう。ここは先ず、將軍に報告か……」

手柄は欲しいが、先走っては探偵事務所襲撃時の二の舞になりかねない。

しかも相手は七人だ。戦術的には人数が分散したさいに襲うのが最善。出来ることならば単独行動をとっている一人を後ろから襲いたいものだ。

狩人は、そのてのことが恥も外聞もなく出来る人間だ。

スナイピングでこっそり狙撃できればそれに越したことはないと考えていた。

「よし、ここは一度引こう」

最良である。

そう独り言を呟き狩人は、レッドゴーレムを連れて城正面側を目指した。

戦いは続いている。

戦火の激音は、此処まで届いていた。

軍勢と軍勢が激突し合う激音。パペットオークの叫び声。ゴーレムが起こすし地響き。時折起こる爆音の轟き。

悪夢城前面では、侵略者の猛攻が続いている様子だった。

ヴァルハラメンバーも悪夢城を目指そうと向きを変える。

しかし軒太郎が、イゴールだけを静止させた。

「イゴールちゃんは、ここに残ってもらおう」

黒衣に変身した軒太郎が微笑みの失われたクールな口調で言うと、当然ながらイゴールが理由を訊いた。

「なんでですー。なんでイゴールちゃんだけ仲間はずれなのー」

「そのせむし男のボディーは大きすぎる。おそらく城内では小回りがきかないだろう。城内に侵入しても移動にすら困るだろうさ。

そうでしょ、猫娘さん？」

急に話を振られてメニャースは、何度も首を縦に振りながら素直に答えた。

「う、うん。うんうんうんニャア。城の中は第一階層が迷路になっているニャア。細い廊下が入り組んでいて、その巨体では歩くのもままならない場所が多いニャア。おそらく第二階層に登る階段にすら行き着けないニャア」

軒太郎の予想が当たる。

悪夢城がメルヘンを求めた貴族たちの社交場でなく、混沌とした戦乱に対抗する為に建てられ城塞。

領地防衛の拠点として実用されたものならば、城内が防衛の為に迷路のような工夫が施されていても不思議でない。歴史上、そのような城塞は珍しくない建物だ。

「とりあえずイゴールちゃんは、その螻蛄男と半漁人を監視しながら此処に残ってください」

命令とも取れる軒太郎の言いように、納得が行かないといった態度のイゴールは「えー、ブーブーブー」と言葉を返す。完全にふてくされている。

功風老がせむし男の尻を平手で叩いた。パチンと音が鳴る。

「イゴール、若先生はお前さんに大切な仕事を任せているんだぜ」

「大切な仕事？」

「そうだぞ、イゴール。若先生は、お前に特別任務を任せただ。それは、我々の撤退する為の重要な道筋の確保防衛役だ。俺たちが、どんだけ城の中で情報を集めてきても、その出口が塞がっていたら帰ることもできねえだろ。」

お前は、その大事な帰還路を守る特別使命を命じられたんだぜー」
美味しいことを言う功凧老に、感心しているのは昂輝の方であった。しかしイゴールは、だまされませんからねー、とプリプリ怒る。やっぱり子供の脳でも今のこじ付けは通用しないようだ。

「うほんっ」

口元を片手で押さえたお砂姉さんが、はっきりとした咳払いを一つ鳴らした。

その上品な咳払いにイゴールの態度が急変する。

凍りついたように強面を硬直させてビクリと体を震わせた。それは、怯えや恐れとも見て取れた。

「イゴールちゃん、何時も私が言っているでしょ。お仕事時には、我がままを言ったら駄目だと」

日傘を差したまま述べるお砂が、小首を横に傾げながら太陽のように輝いた笑顔を見せた。

まるで母親が子供に言い聞かせるような口調だったが、言葉の裏側に静かな殺気が混じっているのが本能に鋭く突き刺さる。

それが、実に物恐ろしい。

イゴールがしょぼんと肩を落とす。お砂の一言で諦めたようだ。お砂の笑顔に潜む酷烈な威圧感。泣く子も黙る程に効果的だった。更にお砂が笑顔で話を紡ぐ。

「それと待っている間にイゴールちゃんは、その蠅螂男さんを治療してあげてください。イゴールちゃんは、将来立派なお医者さんになるのが夢なのでしょう。でしたら好機ですよ。傷付いている人を見捨てたら駄目」

終始笑顔を絶やさないお砂に、子供のような無邪気さを取り戻したイゴールが元気に答えた。

「はいですー。わかりましたー」

駄々をこね、恐れに固まり、今度は無邪気に笑う。イゴールの変わりようを昂輝は見て不思議に感じた。自分も子供の頃は、こうだったのだろうか。

イゴール。

変わっている。

解体屋であり、探偵事務所のお茶酌みのアルバイトでもあるイゴールの将来の夢が、医師だということにも複雑な感情を抱く。思い出せば先程軒太郎が、イゴールは医者でもあるとも言っていた。

「大人になれない子供が、将来の夢を持っているのか……」

昂輝の横に立つ憑き姫が、袖を摘まんで軽く引く。

「なんだい、憑き姫？」

「イゴールちゃんは、医学の知識も持っているし、それを使いこなす技量も備えているわ。愚鈍だったのも過去の話よ。でもね、医師免許は持っていないの」

「医者免許がない……」

ふと、赤股冴を思い出す。
彼女は闇医者。無免許医だ。

ヴィクトル・フランケンシュタインの助手（最終編）

医師免許。そのような合法的な資格が、不死身の人造人間であるイゴールに発行されるとは思えない。

それどころか今のイゴールに人間としての証明書が与えられるかも疑問だ。

イゴールは、人造人間だ。人造人間は死者でもある。

呟く昂輝。

「だから、医者になるのが夢なのかな……」

だから、その言葉の意味が昂輝にも良く判らなかった。

その一言を最後に昂輝は、自分が抱いたイゴールへの疑問を締め括る。

「では行こうか、ミス・キャットウーマン」

そう言いながら黒衣の軒太郎が冷徹な動きでメニヤースの腕を握り無理矢理にも引っ張った。

「え、ええー、私も城に行くのかニヤー！」

冗談でないと軒太郎の手を振り払おうとするが、メニヤースの抵抗は非力すぎた。ドンドンと引きずられて行く。

「当然でしょう。訊きたいことは山ほどあるが、時間が無さそうだしそれに同行を願えれば道案内にもなる。何せ城の第一階層は、狭苦しくもただっ広い迷宮なのだから。リアルタイムで尋ねたほうがこと

は進み易い。効率的だ」

「いやニヤー、いやニヤー。私はまだ死にたくないニヤー。帰るニヤー、元の世界に帰るニヤー！」

諦めが付かずに暴れるメニヤースを引つ張る軒太郎を先頭に歩き出す探偵メンバー。

猫人間や鰐人間の残骸が散らばる裏庭にイゴールと二名の四天王を残して先を目指す。

「いやニヤー。たーすーけーてーニヤアー！」

「大丈夫だ。身の安全は保障してやる。逆に暴れていると、要らぬ怪我をするぞ」

「ニヤアー！」

こうしてメニヤースは、軒太郎に連れて行かれる。

ひとり残されたイゴールは、何処からともなくメデイカルスパイダーを数匹出すと、お砂に言われたと通りにキングマンティスの治療を鼻歌まじりで開始した。

歌いだすせむし男。

可笑しな歌だった。音程もムチャクチャである。

「イゴールちゃの名医になるんだ」。

えらいー、えらいー、お医者様になるんだ。

お金がなくても治療もするしー、貧乏人だつてー看病するんだー。
名医になるんだー。

あの子の病気も、この子の怪我も、全部全部名医が治すんだー。

目の見えないあの子が言ったー、イゴールちゃんは天才だつてー。

目の見えないあの子が言ったー、イゴールちゃんなら皆を救えるー。

目の見えないあの子と約束したんだ、イゴールちゃんがその目を治すー。

治せなかったら新しい目を作って交換したらいいじゃんかー。あつたまいいー。

目の見えないあの子と約束したんだ、イゴールちゃんが……」

唐突に可笑しな歌詞の歌が止まる。

「あの子つて、誰だつたけ……」

思い出せない。

約束をした筈だけと思いつけない。

小さい頃の約束だ。

その約束を忘れてしまつことが、何よりも怖かったような気がするのに、思い出せない。

だから、三外眼一郎氏に解決を相談したのだ。

だから、お砂姉さんに無理を言っただけを術をかけてもらったのだ。反対するお砂姉さんの意見を押し切ったまで。

それなのに思い出せない。

確か、治せないなら新しい瞳を作って交換してあげれば良いと思っていた。　　ような気がする。

でも、思い出せない。

大切な思い出で、大切な約束だった筈なのに……。

もう、思い出せない。

あの子って、誰だったかも。

「まあいいかー」

明るく笑いながら言った。

そして、また歌いだす。

「イゴールちゃんは、名医になるんだー、あの子と約束したんだもん」

治療を施すイゴールは、歌の歌詞を理解しないまま歌い続けた。

これ以上、何かを忘れない為に。

『ヴィクトル・フランケンシュタインの助手』

完。

指きり魔と百人将軍の対決 (上)

悪夢城第一階層迷宮エリア。

その迷宮内の通路は、分厚い石造り。時に横幅が狭く、時には無駄に広くもある。場所によっては天井が極端に低い場所もあれば、意味もなく上ったり下ったりする階段が配置されていた。少し彷徨っただけで方向感覚が麻痺して来る作意的な作りである。

そして、トラップの数々。

落とし穴から始まり、壁や天井から飛び出る槍の罠。転がってくる巨大な鉄球。振り子の如く左右に動くギロチン。扉ノブの死角に仕込まれた毒針。

まさにファンタジーの迷宮ダンジョンだ。

更にダンジョンには敵モンスターが徘徊していた。

中身が空っぽな鎧の兵士、リビングアーマー。石像のふりをして居るガーゴイル。ネバネバ液体のモンスター、スライム。他にも名前も解らないようなモンスターたちが、侵入してきたパペットオーク兵を待ち受けていた。

迷宮は、侵入者と防衛者の死骸で徐々に汚れ始めていた。

そんな中、迷宮内の一部で剣を交える二つの影が、火花を散らしながら戦って居た。

暗い通路に、日本刀とククリがぶつかり合う音と閃光が弾け飛ぶ。

「君の剣技の弱点は、心得ておりますデス」

「ぐぐぐぐううう……」

鏢迫り合いに切っ先を擦らせる両者。

少々埃ぼく薄汚れた着物に茶色い袴を身に付けた二本差しの素浪人風の男、侍こと鴉尾英太。

その日本刀を八十センチ程のナイフで対抗しているのが、白髪のオールバックに黒いスーツ姿の老執事だった。

百人将軍グスタフである。

石で作られた壁や床には焼き切られたような傷が幾つも走っていた。狙いを外した侍のレーザー剣技の痕跡だ。

「武器庫砦のハルパス様との戦い、遠目ながら窺っていましたが、なんとも個性的な剣技でしたが、子供騙しデス」

「なんだとう！」

各自の刃を重ねて押し合う二人。

力の中に潜まれた技術のやり取り。

体の掛け方、バランスの取り方、引くタイミング、受け流す角度。ただの鏢迫り合いだが多くの剣術体術の攻防を多彩に繰り広げている。

両者の力量は一流の水準に達していた。

だが、一歩先に出ているのは白髪の執事だった。

グスタフの優勢。押されているのは侍。戦いの流れが劣勢へと傾き始めているのが侍にも自覚できていた。

「畜生が！」

罵声と共に刀を押しつけてグスタフを突き飛ばす侍。しかしグスタフは弾かれても間合いを離そうとしない。すぐさま侍の眼前に張り付くように戻る。

そしてまた刀とククリが激突し合う。

「しつこい爺だな！」

「貴方の剣技、閃光烈斬ともうしましたかなデス。

その剣技は、剣先から高熱の光線を発射して相手を焼き斬る技デス」

確かにそうだ。

侍は刀でククリを受け止めながら奥歯を強く噛む。そして捻り出すように声を返した。

「何が言いたい、糞爺！」

「弱点デス」

鋭い双眸が、侍の眼前に近づく。

侍がグスタフの眼光を睨み返すが、眼力ですら老執事の方が上に感じられた。

「弱点だと……」

「自分でも気付いたのでは、この状況が不利だと、私めが取る戦法

が、とても御自分に不都合だとデス」

この局面で侍は、自分が使う剣術の弱点を思い知らされていた。その弱点をグスタフが語る。

「術の熱光線は、刀身の先からしか出ないのデス。ただの剣の延長デス。刀が長くなったにしかすぎませんデス。

そしてあの技は、敵の意表を付く為に、わざわざ居合い抜き術から繰り出す。初弾の一振りを遠間合いから決めるために、居合い抜きをフェイクに使っているのデス。

居合いの間合いに飛び込まなければ、一撃必殺の抜刀術を喰らわないと考える相手の心理を利用して、遠距離攻撃の熱光線を見事に決める。バツサリ と、デス」

「それがどうした!」

思わず声を荒立てる侍。凄んでみたが、グスタフの述べた通りだ。当たっている。

手口がばれてしまえば対策の打ちようもある技だ。同じ罠に引っかかる間抜けは少ないだろう。

しかし、この対処法はありえない。

「だから私めは、コバンザメの如く張り付いているのデスよ。

更に私めのククリは貴方の刀よりも間合いを詰めるのに適した長さデス」

侍とグスタフの戦いは、この迷宮内通路で出遭った直後から、こうだった。

侍が居合い抜きに身を沈めた瞬間、グスタフが飛び込んだ。その飛び込んだグスタフに侍が居合いの抜刀を繰り出した、どんぴしゃりのタイミングだった。居合いの間合いとしても完璧だった。

しかし、閃光烈斬の間合いには近すぎたのだ。

熱光線が剣先から発射されたが、焼き斬ったのは壁の一部だけだった。

グスタフのククリが日本刀を寸前で受け止めたのである。

そこからはグスタフが間合いを離す事無く張り付くように戦い、侍をジリジリと追い詰めていた。

密着状態に近い超接近戦だ。剣で戦う間合いでない。

だが、グスタフの攻撃だけが仕掛けられてくる。

それは、素手の攻撃。

日本刀とククリは鏝迫り合いに重なり合っている。その攻防の中でグスタフだけが、拳や肘、それに蹴り技を繰り出してくるのだ。

侍は、その当て身から顔や急所を庇うのがやっとだった。

胸を拳で突かれ、肘や膝が容赦無く手足に打ち込まれる。

有効であり、確実にダメージを蓄積させる打撃だった。

一撃一撃に侍の表情が歪む。

まるで鉄の硬さと鉛の重さを備えた当て身だった。

もしかしたら服の下に金属製のプロテクターを着けているのかも知られない。

いや、きつと装備しているのだろう。

「日本の時代劇で見られるような一対一の決闘だとしたなら有効だろうが、ここは戦場デス。仕掛けがばれた手品では、何人も強者を倒せませんよデス」

「畜生……、糞畜生が……、ド糞の畜生が！」

徐々に大きくなるが痛罵。

見苦しさを晒す侍に、更なる当て身が次々と浴びせられる。

グスタフの攻撃は、罵声では相手を倒せないと訴えてるようだった。肉体的ダメージの他に、敗北感も積み重なって行く。

しかし、侍は、往生際が悪い男だ。自分からは容易く負けを認めない。

心が折れなければ、負けではない。

心が折れた瞬間に、人間は真の負け犬になりさがる。

侍は、そう信じていた。

若干の違いこそあるが、交通事故で死んだ父の言葉だ。

「諦めるか！」

吼える侍の体に、連続してグスタフの拳が減り込んだ。

連打に押されて一気に壁際まで追い詰められる。

鏢迫り合いで閃光烈斬どころか刀までも封じられた侍。更に圧倒される至近距離からの当て身技。

攻撃を浴びながらも侍は、この局面を打開できる策を閃いていた

あとは実行するタイミング。

どこでどう仕掛けるか。

チャンスは一度だろう。

眼前の強者グスタフが、何度も意を突かせてくれる筈がない。

侍の後方に在る石壁に、刀の鞘が当たる。それが逃げ道のないことを侍に知らせた。

仕掛けるならば、今かも知れない。

打撃を浴び続けた侍には、反撃の体力すら僅かだった。

「調子に乗りやがって、糞爺が……」

グスタフは右手を中心にククリを操り鏢迫り合いを行なっている。

そして、拳打を繰り出す時だけ左手を離す。

攻撃に使われる左拳は、侍が顔面を注意深く庇う為に、必ずボディ
ーしか狙ってこない。

侍もボディーだからこそ打たせていた。

秘策を実行するチャンスを作り出す為にだ。

だが、あと何発も耐えられないだろう。

次の拳が飛んできたら作戦を実行するつもりだ。
体力が限界なのだ。

その時は、直ぐに訪れた。

グスタフの膝蹴りが侍の太腿を蹴り上げると、続いて左手がククリから離れて素早く握り締められる。そして握られた拳が瞬時に侍の脇腹を叩いた。

「チャンス！」

拳を受けながらも起死回生の反撃に移る侍は、脇差しに手を伸ばした。

二本差しの小刀を握り姿勢を落とす。

小太刀での抜刀。

この接近状態でも相手を斬れる唯一の間合い。

狙いは、グスタフの右腹部。

左拳を繰り出したが故にグスタフの右脇腹は、がら空きとなっていた。

大きな隙である。

「死ねい！」

「甘いデス」

ククリを持つ右腕から肘が落ちて来た。その肘が、小太刀を鞘から抜ききる前に柄を叩いて止めてしまう。それでもククリは大刀を逃がしていない。

失敗である。秘策が不発となった。

グスタフは、小太刀の攻撃を最初から読んでいたのだろう。

百戦錬磨。戦場でのキャリアと、今まで殺害してきた敵の数が違う。読み合いの深さが違った。

「残念でしたね。その程度の愚策は、想定済みです」

真面目な表情で述べたグスタフには、侍を侮辱する意図が無かった。ただ、素直に結果だけを述べたのだ。

「むかつくぜ、糞じ……」

侍がすべてを言い終わる前に、グスタフの肘鉄が横から飛んで来た。その肘が、秘策に打って出る為に防御を疎かにした侍の顎を横殴る。

ガゴンと、籠もった音が響く。

顎先へのクリーンヒットに脳が小刻みに降られる。揺れた脳が頭蓋骨の内側に幾度かぶつかり身体機能に重大なダメージを振りまいた。

先ずは眩暈。

視界が溶けて混ざり合うチョコと生クリームのようにトロトロと歪み口から吐き出されそうだった。

続いて下半身の力が抜けて両膝が砕けたように曲がってしまう。力が入らないのだ。

「ぐう……！」

尻餅を付きそうになる侍は、根性で持ちこたえる。意地だ。

しかし現状は無防備状態で敵前に居る。勝敗は付いたようなものだ。

「終わりデス」

冷静な表情に感情の感じられない一言。

グスタフが大きくククリを振り被り、僅かな躊躇いも無く振り下ろす。

止めの一撃であった。

指きり魔と百人將軍の対決（中）

「まだだ！」

姿勢が崩れ落ちていた侍が、最後の力を振り絞って跳ね上がった。振り下ろされようとしていたククリに肩から突っ込む。鋭利な刃が左肩に減り込んだ。

「なんとデス！」

目を剥いて驚くグスタフ。

侍がまだ動けることにも驚いていたが、それ以上に捨て身の戦法をとってきたことが予想外だった。

ククリは侍の左肩に減り込んでいたが、鎖骨までは到達していない。殺傷が浅い。

「斬っ！」

小太刀による二度目の居合い抜き。今回は切っ先が鞘から引き抜かれ、更にグスタフの右腕を肘の辺りから斬り落した。

「ぬぬぬぬぬっ！」

石床に転がる右腕。ククリは侍の肩に減り込んだまま残っている。

よるめき下がるグスタフに、勝ち誇った笑みを向ける侍は、冷や汗を流していたが満足気な表情であった。

「爺さんよ、あんたが指南してくれたんだぜ。間合いを取ることが不利に繋がるならば、密着すればいいってな。へへへ」

苦しげにも笑う侍は、肩に減り込んでいたククリを引き剥き床に投げ捨てた。

持参の武器が、グスタフの僅か前に突き刺さる。

右腕を切り落されたグスタフは、苦痛に表情を濁らせながら両膝を地面に付いていた。

形勢逆転である。

「お見事デス。斬激の一振りに対して、インパクトのタイミングを早めることで軽減する。また、密着常態の為、ナイフを引かせなくもしていた。引く力が加わらなければ、刃物の殺傷性は激減するデスね」

刃物は引く力で切れ味を増す。

例えるならば、鋸は引かなければ木材を切断できない。原理は、それと一緒に一緒だ。

「肉を切らせて骨を絶つ。日本に古くから伝わる武士の技だ」

「武士の技デスか……。やりおるデス」

侍が大刀と小太刀を鞘に戻すと姿勢を落とす。居合い抜き、抜刀術の構え。

「爺さん、あんたとの戦いは、すげー勉強になったぜ」

「若い剣士よ、それは良かったデス……」

刹那。

いきなりグスタフが眼前の床に突き刺さるククリに手を伸ばした。まだ戦う積りらしい。

「ぎいあ！」

しかし、疾風の如く速い侍の居合い抜きが放たれる。

俊足の切っ先から黄色い熱光線が発射されて、ククリを握ろうとしたグスタフの指を焼き斬った。

右腕の他に、四本の指が転がった。

指きり魔、健在。

「往生際が悪いぜ、爺さんよ。指を四本も貰っちゃまったぜえ。もう、諦めな」

「私めは、これでも元軍人デス。敵前で敗北を認めるほど無様な真似はできないデス」

「あっぱれな糞爺だ。軍人つてのも侮れねえなあ」

言いながら刀を鞘に戻す侍は、再び居合いの姿勢を取り直す。

「止めだよ」

寒気が走るほどに小さな声に殺意が宿る。

今の侍こと指きり魔鴉尾の顔は、ヤクザのものでなかった。それは、武士の顔である。凜と引き締まっていた。

その顔をグスタフが、真っ直ぐに見詰め返す。

決着が近いが、グスタフの視線には諦めの色は見えない。降伏。その二文字を認めないと語っているようだった。

そして。

「廃字刀苦羅々・閃光烈斬！」

居合い抜きから繰り出される黄色い熱光線が、斜め下から斜め上へとグスタフの体をなぞる。

「ぐふうう……」

グスタフの胸に刻まれた逆袈裟斬りの刀傷から鮮血が飛び散った。

更に。

「止めだ、追加閃光烈斬！」

切っ先を返した太刀筋から放たれる閃光が、再び袈裟斬りでグスタフの傷口をなぞる。

同じ場所を二度斬った。

「っ……」

グスタフの上半身が、袈裟斬りのラインから斜めにずれて床に落ちた。その上に下半身が倒れこむ。

百人将軍グスタフ、絶命。

アメリカの将軍。ダグラス・マッカーサーの名言。

老兵は、ただ消え去るのみというが、元ドイツの将軍であるグスタフ・ケッセルリンクは、老いても戦い続けた。そして戦死。

暫くするとグスタフの死体が、血痕すら残さず消えて行く。まるで霧の如く。

ただ消え去る。

そこだけが類似した。

「ふう……」

溜息を溢しながら壁に寄り掛かる侍。

老戦士に勝つたは良いが、体のあちらこちらが打撲に痛む。ダメージを受けすぎた。

「少し休むか……」

侍が独り言を呟く。

すると、通路の奥から足音が近づいて来るのに気付いた。カッン、カッンと音がする。

通路の向こうは暗くて見えない。

だが、間違いなく人が近づいて来ていた。

「新手か……」

オーク兵ならば味方だが、それが敵モンスターならば厄介だ。警戒しながら暗闇を覗む。

足音からして二人。

やがて暗闇に浮かび上がる影は、やはり二つ。オークのように太くないシルエット。やはり敵の可能性が高い。

「ダメージが残っているが、やれるか……」

苦笑を浮かべる侍の言葉に、暗闇から迫るふたつの影が受け答えた。

老いた男の声だ。

「随分とお疲れのようですが、今度は私めらの相手をいたしてもらいますデス」

続くのも老いた男の声。

「今度は、二対一。覚悟ねがいますデス」

似た声である。二人の声に聞き覚えがあった。

それはさっきまで戦っていた老執事と同じ声質の物だった。

「どつなつてやがる……」

表れたのはグスタフだった。しかも、瓜二つの二人が同時にだ。

「糞爺、まさか三つ子とか落ちはないだろうな……」

侍の表情に、納得が行かない思いと疲労の曇りが混ざり合っていた。

「否々、これが私めの特殊能力デス」

涼しそうに語るは右のグスタフ。

「特殊能力だと……」

続いて語るは左のグスタフ。

「そう、百人将軍と呼ばれた私めの能力は、分身を百体作り出すことデス」

今度は右のグスタフ。

「しかし百人に分裂すると、一人一人の強さは百分の一になってしまうのデス」

代わって左のグスタフ。

「だが、分裂した分身が一人死ぬと、その力は残りの九十九人に振り分けられるのデス」

次に右のグスタフ。

「いずれ一人に戻った際は、百人いた頃の百倍の強さになっているのデス」

最後は左のグスタフ。

「まあ、元に戻っただけデスが」

「けっ、じゃあ手前に勝つには、あと九十九人斬ればいいってことか。上等だ、やってやるよ！」

「威勢が良いデスね。しかし今回は二人。しかも先程の私目よりも若干強くなっている私めデス。普通に考えれば、傷付いている貴方に勝算はございませんデス」

グスタフの顔に余裕の笑みは無い。堅物の如く真面目な表情だった。

「巨大なお世話だ！」

やけくそ感が見える侍だったが、逃げる素振りは見せていない。最後まで戦い抜く意気込みが感じられた。

「その闘志に敬意を評して、今度はネチネチといびらず、一太刀で息の根を止めてあげますデス」

侍とグスタフの再戦が始まるうとしていた。

だが、今回は二対一。

「上等だ！」

先に仕掛けたのは侍。

黄色い熱光線が、居合い技で飛んで行く。

また暗い迷宮の通路に刀とナイフが火花を散らす。フラッシュと金属音が弾け飛ぶ。

しかし、その騒々しさも直ぐに治まった。

勝負が決しられたようだ。

闇が静けさを取り戻す。

勝ったのは、語らずとも解ること。

九十九人になった、百人將軍である。

指きり魔と百人将軍の対決 (後)

悪夢城第一階層迷宮エリアに、大きな地鳴りが幾度も轟く。軍馬を捨て城内に突入した将軍が、ダンジョン内のモンスターたちを蹴散らす攻撃音である。

将軍が振るうハルバードの一振りには、敵を打ち砕く衝撃波と変わり跡形もなくモンスターを吹き飛ばす。

その衝撃音が迷宮内の空気を揺らし、壁や床を揺らして遠くまで響かせていた。

「ちっ、なんだ、この迷宮は！」

怒鳴る将軍に後ろから飛び掛るリビンググアーマー。しかし不意はつかれていない。振り向きざまにハルバードを繰り出しリビンググアーマーを木っ端微塵に破壊してしまう。

砕かれたリビンググアーマーが粉々になって通路の奥まで飛んで行った。

「進めど進めど雑魚ばかりじゃあねえか。何時になったら上の階に進めんだ！」

愚痴を怒鳴らす将軍は、見事なまでに迷宮の罠に囚われていた。方向音痴な彼は、先程から同じ場所をグルグル回っているのだが、本人はその事実気付いていない。

「おっ、居た居た。やっと見つけましたよ、将軍」

後方から狩人の声が飛んで来た。振り返る強面。意味もなくハルバ

ードで床を叩く。

「あゝ、なんだ。何か用か、狩人」

迷宮に迷っていたことで將軍は、相当イラついている様子だった。不機嫌さがヘルムの下に満ちている。

將軍が狩人の方を見ると、狩人は可笑しな物を引き連れていた。

大きな顔に小さな足が生えた物。右手に足が生えた物。脚に足が生えた物。訳の解らない物に足が生えた物。

類似しているのはカラーリングが全部赤いという点だけである。バラバラに分裂して移動している狩人のレッドゴーレムのような。

「將軍、面白い情報を持ってきやしたぜ」

慇懃に笑う狩人に、將軍の怒りが若干さがる。

この手の奴が、このような如何わしい表情を見せる際に、油断してはならない事を將軍は重々心得ていた。味方であつてもだ。

極道ならば、このような時にこそ警戒心を強めなくてはならない。

「情報だあゝ。吉報か？」

「さあ、取り方次第では吉報やも」

「いいから、早く言え」

少し溜めを作ってから報告を述べる狩人。

その言葉に城軍は瞳を大きく見開いた。

「ヴァルハラ探偵の連中が七名、この世界にきています」

「なんだと!」

将軍が狩人に詰め寄り襟首を掴んで乱暴に引き寄せた。
将軍は、明らかに激昂していた。

「七名だと、じゃあ眼一郎も来ているのか!？」

「眼一郎……?」

誰だか解らないと言いたげな顔で狩人が訊き直した。

「三外眼一郎だ。ヴァルハラ探偵事務所の所長だ!」

「い、いいえ。あの黒服の所長は来ていません。息子の方は居ましたが」

それを聞くと将軍は、急に詰まらなそうな顔に変わり、狩人を腕力から投げるように解放する。

「け、なんだそりゃ。じゃあ、七名ってあと一人は誰だ?」

「よく解りませんが、最近入ったと思われる小僧です」

数日前からヴァルハラ探偵にアルバイトとして来ていた五代昂輝の存在を彼らは知らなかったのだ。

「小僧?」

「しかしながら化け物です。俺が銃で頭を吹き飛ばした筈なのに生きてやがる……」

「なるほど、ヴァルハラらしいのが増えたって訳か」

それだけ言うと將軍は歩き出す。

「どうしますか、將軍」

「好きにしろ」

「はあ……。好きにですか……」

明らかに興味が無いといった態度の將軍に、狩人は気の抜けた言葉を返す。

「あいつらが、どこから入ってきたか知らんが、ほっとけ。心配なら俺じゃあなく、公爵か賢者にでも報告するんだな。俺はとりあえず上を目指すからよ」

「は、はあ……」

狩人に見れば、拍子抜けもいいところだ。もっと將軍は、ヴァルハラ探偵に執着していると思ったのが、そうでない様子である。

ならば、少々角度を変えて揺さぶってみる。

「それと、ヴァルハラ探偵とベロニカ嬢の娘が一緒に居ました。おそらくはグル。内通者かも」

「それも俺には関係ないわ。それこそ公爵に報告してやれ。ベロニカ嬢との約束は、公爵の約束だ」

「はあ……」

またもや的外れだ。

「ならば私もヴァルハラにむかつきを感じています。私なりに報復しても構いませんね」

「ああ、勝手にしな。俺にも俺の仕事がある。お前にはお前の仕事があるだろ。その辺のケジメは自分で示せ」

「うっす」

狩人の仕事。

それは敵の排除。悪夢城の占拠だ。
ヴァルハラ探偵が敵として現れたのならば排除するのみ。

都合がいい。

この期に、あの小僧を今度こそ蜂の巣にしてやる。

そう思い狩人は、再び慇懃な笑みを作り出す。

將軍は一人で先に進んで行く。

その背中を見送った狩人も別の通路に向かって歩き出した。

狩人と別れた將軍がしばらく歩いていると、壁に寄り掛かるように

腰を下ろしている人影を見つける。

激しい戦いでも行なった痕跡だるか、壁や床にはレーザーか何かで焼き切られたような傷が複数刻まれていた。

「これは、あいつのレーザー光線か？」

壁の傷を見た後に、壁に寄り掛かりながら座る人影の方へと向って歩いて行く。

やがて闇が薄らぎ見えてきたのは傷付いた侍の姿だった。

「おう、お前、大丈夫か？」

項垂れて顔を隠す侍は、ピクリとも動かない。座る侍の下には、大量の血痕が水溜りの如く広がっていた。侍の喉がザツクリと切られている。

「死んでるか」

ハルバードの先で侍の骸を突きながら言う將軍の表情は、ただ落胆しているだけのようだった。

子分である侍の死に、悲しみどころか同情すら感じていない様子だ。將軍は侍の横にしゃがみ込むと、死体の髪を鷲掴みにして死面を拝む。

顔は青白い。僅かに見せる白目に、半開きの口からは吐血の後を残していた。

計っていないが、見た目からして脈は無さそうだ。完全に事切れているだろう。

「まあ、こいつの実力ならば、ここまでだろう」

立ち上がる将軍は、更に独り言を続けた。

「自分の力量も考えずに粹がるからだ。その辺の浅はかさは父親譲りだな」

将軍こと鬼頭順平は、鴉尾英太の父親を知っていた。

それはバブル時代の昔話。

「お前の親父も馬鹿だったよ。堅気のくせして、地上げ屋に食って掛かるんだ。素直に土地を売っとけば、ダンプカーに潰されないで済んだものを」

鬼頭がまだ若い時代。彼はヤクザ社会で押し上がるかと必死だった。当時の鬼頭は、出世する為に普通の連中を遙かに上回る上納金を組に差し出していた。もちろん否合法的に稼いだ金だ。

そんな鬼頭が組に任されていた仕事は、地上げであった。

大抵の場合、ちよつと脅してやれば適当な金額で立ち退いてくれる友好的な一般市民が多かった。

しかしながら世の中には、力量も弁えず、頑固に抵抗を見せた馬鹿野郎たちも少なくなかった。

そいつも、そんなタイプの人間だった。

その男の名前を鬼頭は、今でも覚えている。とても珍しい名前だったからだ。

鴉尾大輔。

普通のサラリーマンで、妻子を持っていたらしい。

古い家で三世帯同居。

その土地が、たまたまマンション建築予定地に被った。そいつにとって不運の始まりである。

土地買取りの交渉に立ったのは、もちろん若き日の鬼頭。

鬼頭も鬼ではない。最初は、それなりの立ち退き料を支払う予定だった。

だが、それでは鬼頭が儲からない。

だから鬼頭は、立ち退き料の四割をピンハネすることに決めた。

多くの住人を少し脅せば了承してくれ、鬼頭は大いに潤った。

すべては極道として成り上がる為だ。住人たちには、我慢してもらえない。

しかし、数人ほど脅しに屈しない馬鹿野郎共がいやがった。

あとは、そいつらが立ち退けばマンション建築の工事が始まる予定となっていた。

だが、その馬鹿野郎共は、鬼頭がピンハネした金額では、頑として首を縦に振らなかったのだ。

ある日の話だ。

鬼頭は事務所のソファに座りながら、立ち退きに応じない住民たちのリストを眺めていた。

鬼頭は考えた。

友好的に接して理解が得られないならば、見せしめが必要だと。見せしめに誰かを病院送りにしてやろうと考えたのだ。

その時、たまたま目に付いた名前が鴉尾だった。選んだ理由は、ただ珍しい名前だったにすぎない。

そして、血気盛んで馬鹿な子分に命じて、ダンプカーをぶつけさせた。

だが、鬼頭も予想しなかった事態が発生する。子分である男が、勢い余って鴉尾を殺してしまったのだ。

流石は血気盛んな馬鹿である。アクセルを強く踏みすぎたのだろう。

しかし、結果は上々。

その事故を切っ掛けに、立ち退きを拒否していた住人全員が素直に立ち退いてくれた。

鬼頭は刑務所に入った馬鹿と、死んでくれた馬鹿に感謝した。

それから十年以上たって、鴉尾と名乗る若造が自分の事務所に来た時には、流石に笑ってしまったものだ。笑いが止まらずに、涙が出たぐらいだ。

父親だけでなく、息子の馬鹿さに笑ってしまった。

その馬鹿息子も、こうして鬼頭の為に死んでいった。

過去の真相も、現在の真相も、なんの真相も知らないままにだ。

思わず大声で笑い出しそうなのを堪える鬼頭は、眼前に飛び出して来たガーゴイルをハルバードの一撃で打ち砕き、再び先を急ぐ。

「さてさて、世の中は馬鹿ばかりだ。そんな馬鹿どもは、俺の復讐の為に利用されていればいい」

緩んでいた將軍の顔が、強面に戻る。

「まっているよ、眼一郎。この城を乗っ取ったら、今度は手前だ。今度こそぶっ殺してやるぜ」

太い声で凄みながら將軍は、迷宮の奥へと消えて行く。

時折、モンスターどもを蹴散らす轟音を響かせながら。

偵察と書いて、敵の戦闘力を計ると読む その一

悪夢城第二階層、住居エリア。

悪夢城の一階は、防衛の為に迷路と化しているが、二階からは通常の住まいスペースが設けられていた。それでも若干は不思議な作りが多く、初見で案内人無しに進めば迷ってしまいそんな特殊な構造である。

侵入者である人間で、この住居エリアに一番乗りできたのはヴァルハラ探偵事務所の三外軒太郎、憑き姫、五代昂輝の三名だった。

彼ら三名が此処まで速やかにこれたのも、捕虜であり協力者であるメニヤースの案内があったからだ。

彼らヴァルハラ探偵の三名が此処まで来る間に、メニヤースから夢の世界や悪夢城について色々訊き出した。

まずは夢の世界の仕組みについてだ。

この夢の世界は、自然に出来上がった異次元のようなものらしい。誰かが作り上げた空間とは違うらしいのだ。大自然の産物と述べたほうが正しいらしい。

この世界をアナザースペースと呼ぶらしい。

このような異次元的な空間が、世界各地に幾つかあるらしいのだが、ここは日本に存在するアナザースペースは、ここの一つらしかないとのことだ。

そして、世界各地に存在するアナザースペースを昔から管理しているのが、一般的に魔族と呼ばれている人間とは異なる種族で、この日本のアナザースペースを預かっているのがナイトメア公爵と名乗る魔族である。

魔族が何者なのか。

その疑問に対して軒太郎が推測したところ、日本で言えば妖怪や鬼の類ではないかと説明していた。

妖怪の類が空間の狭間に巣くうのはよくある話である。

他の国にあるアナザースペースをどのような者たちが管理しているかまでは、メニヤースも知らない。

興味を持ったことも無いので、誰かに訊いたこともないらしい。

ただ、各アナザースペースを管理する者たちには、特殊な能力が備わっているのだと聞かされていた。

その能力というのが、夢を叶える力だ。

夢を叶える力とは、他人の想像力を倍増させる力で、その特殊な力もアナザースペース内では使用できない能力らしい。

メニヤースを始めとした四天王全員は、この世界の管理者であるナイトメア公爵に、その夢を叶える力を分け与えられ、並の人間を超える身体能力や木偶兵士を造り操る力を授かったらしい。

しかし、代償としてナイトメア公爵に忠誠を誓い、その証として喋りの最後に可笑しな語尾を付けられた。

メニヤースならばニヤア。リヴァイアサンはギョ。キングマンティスはゲマ、と云った具合にだ。

一度契約した事柄をなかなか掃き出来ないように、この語尾も一度付くと外せない。

こっぴどかしいが、我慢するしかないのだ。

彼らの外見が禍々しいのもナイトメア公爵の趣味に配慮して自ら変化させている。決して自分たちの趣味ではないらしい。

次にメニヤースの説明では、アナザースペースに入れる人間も、本来ならば限られているらしい。

猫も杓子も入ってこれる訳ではないとのこと。

まずはアナザースペースの管理者に招かれた者たち。要するにナイトメア公爵に出入りを許可された者である。

メニヤースたちは、それに属するらしい。

ナイトメア公爵は、その選別に特殊な本を読んだ者たちと設定している様子で、かつて書かれた魔導書『悪夢城の公爵』を切符代わりに使っているのだ。

メニヤースも初めてこの世界に来た時は、その本を読んだ晩のことである。

その本を読んだからといって、誰でも出入りが許可される訳でもないようだ。素質と呼ばれるものが必要となってくる。その素質も持っているか否かは、殆ど運に近いとのことだ。

そして、この世界には肉体を持ち込めないのが常識である。

よって生きている人間は、幽体離脱状態でしかアナザースペースに入れない。

メニヤースもまた、双葉病院に意識不明で入院している。もう半年以上前からのことだ。一度も体には帰ってないらしい。この世界は、この世界で楽しいらしいのだ。

この悪夢城には、肉体を失った幽霊のような人たちも何人か居るらしい。

肉体を失っている為、元の世界に返れない。その辺のことは殆どの人が吹っ切れているらしい。この世界に腰を据える覚悟が出来ているようだ。

また、魂だけの存在は、この世界で本名を失い、偽名でしか名乗れなくなるらしい。

死者は別だ。本名を名乗れる。

メニヤースも本名でないとのことだ。本名を自分から口に出そうとしても息が詰まって声にならなくなる。そして本名で呼ばれると寒気が走るらしい。

その為に、肉体を失った死者たち以外は偽名で呼び合う。本名を使用しているのは、死者たちだけだ。

続いてメニヤースは、この世界での死について話し出す。

この世界では、魂だけの存在の人間も、肉体ごと入って来た人間だろうと死は平等に迎えるらしい。老衰や病死は無いが、事故や他者から暴力を受ければ死ぬことがあるらしい。

この世界にも死の災いは存在する。

魂の破壊。

それは、リンカネーションすら許されない完全なる無への墜落。地獄すら天国すら関係のない、無、闇、透明への没落。死後どこに行くかは、メニヤースにも解らない。

その辺のルールが存在する理由もメニヤースには解らないことらしい。

あるものは仕方ない程度にしか考えていない。

この猫女は、かなり暢気で大雑把な性格のようだ。

「では、何故に僕たちは、生身でこの世界に入ってこれたのですか？」

メニヤースに昂輝が訊く。

「私にもはつきりした理由は解らないニヤア。でね、貴方たちの靈力が相当強いから、それらがバリアーの働きおして守っているのじやあないのかニヤア？」

答えるメニヤースも適当なことを述べていた。

事實はどうあれ、彼らヴァルハラ探偵のメンバーが、生身でアナザースペースに浸入して来ているのが現実である。

メニヤース曰く。

過去にも同じ様な前例があったらしい。メニヤースがこの世界に来る大分前の話で、まだ先代のナイトメア公爵の話だ。

生身でこの世界に侵入してきた敵と、一戦交えたらしい。

これまた詳しい話をメニヤースは知らないらしい。

この城が城塞かされたのも、その戦いが教訓となったからと聞かされていた。

「では、質問を変えよう」

この世界のことをアナザースペースと呼ぶことは解った軒太郎が、別の質問を訊き始める。

「悪夢城。次にこの城について知っている限りを話してくれ」

完全に逃走を諦めたメニヤースは、軒太郎に腕を掴まれたまま質問に答える。

悪夢城について語りだすメニヤース。

まずは当主のナイトメア公爵について話し始めた。

現在この悪夢城を納めているナイトメア公爵は二代目らしい。先代は数年前に他界したのだが、詳しい理由についてはメニヤースも知らない。

また、先代の話題は城内でもタブーとなっており、語る者すら居ないらしい。

ここまで黙って聞いていた昂輝も、メニヤースがけっこう情報を持っていると認識しはじめた。

そんな目でメニヤースを昂輝が見ていることも知らずに語り続ける猫娘は、忠誠を誓った己の主を躊躇いもなく売りまくる。

ナイトメア公爵の容姿は、年の頃二十歳半ば、金髪の色男でハンサ

ムらしいのだが、嫌味なところがメニャースのタイプじゃあないらしい。

異性として付き合うのはパスと言い切っている。

その他に悪夢城に住んでいる人間は二十人程度。内、戦闘力を備えているのは四天王の他には執事長のグスタフぐらいだと説明する。

「あ、他にもまだ居るニャア……」

思い出したように喋りだすメニャース。

それは。

タイガーとウルフ。

この城の地下には魔人が二人巣くっているらしく、その二人を皆がタイガーとウルフと呼んでいる。

死者の魂だ。正式な名前は知らないらしい。

彼ら魔人たちは、悪夢城の地下から出てこないらしく、メニャースも話ばかりで本人らを見たこともない。

この城内で一番強くて怖いのは、執事のグスタフだとメニャースは思っていたが、そのグスタフですらタイガーとウルフの実力に関しては認めているとのことだ。

グスタフ曰く、タイガーとウルフが、この悪夢城の住人で最強らしい。

「そんな魔人が居るなら、先に地下を探索すべきだったかな」

真面目な表情で軽いジョークを述べる軒太郎。

変身前の軒太郎ならば微笑みながら述べるが、黒衣に変身してから軒太郎はフレンドリーに笑わない。それが逆に怖い。

笑っても奇怪に狂人の如く笑うばかりだ。それはそれで本当に怖い笑みである。

「どうするの」

誰とも視線を合わせようとしない憑き姫が、冷たい声質で問う。

答えるは軒太郎。

「まずは現状の把握だ。この城で、この世界で何が起きているかを把握する」

こくり、と頷く憑き姫。

「我々ヴァルハラ探偵への今回の依頼は、真相の報告。東和栄光氏に、何が起きているかの報告でしかない」

腕を引かれるメニヤースが不思議そうな顔で軒太郎の顔を覗きこむ。

現在ヴァルハラ探偵のエージェントは二手に分かれて調査に励んでいた。

軒太郎をリーダーとした憑き姫と昂輝のグループが城内の偵察。お砂姉さんをリーダーとした功凧と赤股のグループは、城の前方で騒いでいる輩の偵察に向っている。

どちらのチームもあくまで偵察である。

偵察なのだ

。

偵察と書いて、敵の戦闘力を計ると読む その二

悪夢城の正面中庭。

賢者率いるゴーレム兵団に焼き払われた巨大な豆の木が、未だ燻りながら横たわっている。

すべての鉄球ヤシガニが打ち倒され無残な鉄屑と化して転がっていた。

その他にもオークたちの屍が多数放置されている。魂が無い木偶の骸にも関わらず生々しい血臭を周囲に放っていた。

中庭に残っている兵力は僅かであった。

僅かなオーク兵がちらほら見うるだけだ。

「こりやまた、派手にやりあったようじゃのお」

「そのようですね、老師」

登場するのはヴァルハラ探偵のエージェントが三名。

功風時司、赤股夏鱗、そしてお砂。三人とも今は変身を解いている。死体を避けながら歩き、辺りを見回す。

「それにしても何が起きているのじゃ、此処では？」

「戦争　じゃねえの？」

煙り燻る戦場の跡を見回す功風老が、問いながら辺りを見ます。

その問いに答えたのがお砂だった。

赤股の回答は無視された。

「功風老師、それを調べに私たちは来たのですよ」

「ちげえ〜ねえ〜。じゃあ、何が起きているかは当事者に訊くのが一番だわな」

ゴツゴツとした顎をゴツゴツとした手で撫でる功風老が、複数の人影を見つける。

逆光を浴びる人影は十八体。やたらと巨大な人影だった。

「巨人兵でしょうかね？」

赤間が、その複数の人影を見て言った。

遠目に見ても解る巨体は、おおそ身長三メートル。体重はトンで計測されるだろう体格。

その人影もヴァルハラ探偵の三名に気付いたのか、此方に向かって歩き出す。

その時である。

三人の後から近づいて来たオーク兵二匹が、武器を片手に声を掛けて来る。

「ぶひい〜、テメーらは何物デブ？」

「敵か、味方か、どっちデブ？」

オーク兵の一匹が後方から赤股の肩に手を伸ばした。

「うるせえ〜よ、デブ共」

後ろを振り向かず言う赤間だが、スナップを効かせた素早い裏拳を一発放つ。

バチン、と音が鳴る。

「ぶひい！」

オークの悲鳴と共に豚面の潰れた鼻が、更に潰れて鼻血を散らす。打たれたオークは、その一発で白目を剥くと、棒を倒したように後ろに倒れた。

「貴様　　、何するデブ！」

仲間をやられたオーク兵が激昂しながら剣を振り上げる。

「だからよ、うるせってばよ」

今度は振り返る赤股が、その勢いのままに強烈なパンチを振るった。まるで野球のピッチャーが剛速球を投げたような豪快なモーションだった。

バゴン、と凄い音である。

「ぶひい！」

またも潰れる豚面の豚鼻。今度は鼻だけでなく顔面まで陥没してオーク兵は飛んで行った。

転がるオーク兵が鉄球ヤシガニの残骸にぶつかり止るのを確認した赤股は、唾を吐き捨て踵を返す。

お砂が言う。

「あれは、ゴーレムね」

「古くから使われる木偶人形の元祖的存在の、あれですねぇ。時代遅れ過ぎて初めて見ますよ」

嘲笑いながら赤股が言った。

美藤傀儡と戦っている赤股にしてみれば、確かにゴーレムでは時代遅れも良いところなのだろう。

功尻老は、懐かしい骨董品でも見るような眼差しでゴーレムたちを眺めていた。

ヴァルハラ探偵の三名も、此方に向ってくるゴーレムたちの方角へと歩み始めた。

「ゴーレムの肩に、人が乗ってますね」

十八体居るゴーレムの一体はボディのカラーがゴールドである。その金色のゴーレムの肩には人が一人乗っていた。

緑色のローブに頭からフードをすっぽりと被り、片手には大樹の根で作られた長い杖を突いている。

見た目からして魔法使いの成りだ。長い白髭が靡いている。

「何が起きているのかは、あのお方に訊いて見ましょう」

丁寧な口調で述べるお砂が、につこりと笑いながら差した日傘を優雅に廻す。戦場に立ちながらも閑雅である。

両者が互いに急接近を許しあう。

三名が横に並んだ数メートル前に、ゴーレム兵団が聳え立った。

両者の間に、若干の威嚇と警戒の空気が流れて澱む。

見下ろすは、ゴールドゴーレムの肩に立つ賢者の眼光。冷たい殺気と知的な威圧感が籠もっていた。

「また、新手か。城内に突入した將軍たちは、何をしているのやら。こうして敵を討ち逃すとは使えない」

「こんにちは。少々お話を窺いたいのですが」

礼儀正しい口調でお砂が喋りだすと、ゴーレム二体が急に動き出す。その巨体でありながら高々とジャンプして、お砂目掛けて急降下して来た。巨漢で押しつぶす積りらしい。

しかし、言葉を止めたが冷静な表情で上を見上げるお砂は、二つの巨体が降ってこようともしない。

代わりに極道コンビのふたりが宙に跳ねた。そして、空中で蹴りを放つ。

「ぜいっ」

「よっつ」

ふたりの飛び廻し蹴りに二体のゴーレムが、左右に勢い良く蹴り飛ばされた。

蹴られたゴーレムが地に落ちて地鳴りを轟かせる。

「ほほう、これは豪傑な」

白く長い髭を撫でる賢者が、極道コンビの廻し蹴りを見て感心の言葉を漏らす。

着地した極道コンビが凜とした姿勢で立ちながらゴールドゴーレムの肩に立つ魔法使いを睨み付けた。

「なんて失礼な爺でしょうね、師匠」

「まったくだな。いきなり女に飛び掛るなんぞ変態の執行だわな。恥知らずもいいところだ」

「同じ糞爺の師匠ですら、そこまで変態じゃないつてのによ」

「赤股、手前、喧嘩売ってるのか？」

「何を仰いますか、師匠。俺は師匠を尊敬してますぜえ」

「嘘付け……」

蹴り飛ばされた二体のゴーレムがゆっくりと立ち上がる。その様子を横目で確認した賢者が、鋭い視線を極道コンビに戻した。

「貴公らが何者かは解らんが、我々の目的を邪魔するならば配所します」

「あー、話が通じそうにないな、こりゃあ」

「そうみたいですな、師匠」

功風老の言葉に答えた赤股が、サングラスの下でニヤリと笑う。
都合が良い。

この勘違いのお蔭でストレス解消が出来そうだ。
赤股は誤解を解く気が僅かにも無い。双葉総合病院で、美藤傀儡と
の一戦。ただただストレスを溜めただけだった。
そのストレスが、ここで解消できそうである。

「なあ、赤股。敵の数は十六体だ。ここは平等に半分ずつで分けあ
うわねえか」

「違いますよ老師、敵の数は十八体ですよ。ふたりで分けたら八体
ずつになりますよ」

「うし、それで決まりだあ」

「それなら九体ずつでしょ。
数も数えられない、簡単な割り算も出来ない、ふたりとも武術に励
む前に、小学校から通いなおしたほうがよろしいかと思えますよ」

にっこりと優しい笑みで言うお砂の言葉を無視して極道コンビのふ
たりが前に進む。
赤股は指の関節をポキポキ鳴らしながら歩み、功風老は右腕の肩関
節を解しながら歩んで行く。

「かなり腕の立つ方々のようですが、私が作り上げたゴーレムを十
八体相手にどこまで戦えるか、試させてもらいます。このゴーレム
兵団は、強力ですよ」

賢者が言つと、ゴールドゴーレムだけが後退して残りのノーマルゴーレムたちが前に出る。十七体のゴーレムが扇形で極道コンビの前に並ぶ。

「おふた方、解っていますよね。我々の仕事は偵察ですよ」

「心得てますとも、お砂姉さん。これは敵の戦闘力を把握するための調査です」

「理解なさっているならけっこうですが」

「まあ、お前さんは少し見ていてくれや、お砂」

「まったく仕方の無い殿方だこと」

そついい後方に身を引くお砂。

極道コンビが十七体のゴーレムと向かい合う。

偵察と書いて、敵の戦闘力を計ると読む その三

「まずは軽く力量を窺いましょうか」

賢者の台詞と共に二体のゴーレムが極道コンビの前に立つ。初戦は一对一、否、二対二を申し込んでいるようだ。

「面白い。ほれ、先の手を譲ろう。かかってまいれ」

そう言いながら功尻老が、指先だけで手招きを見せる。実に傲慢で自信に満ちた表情。

挑発なのだろうが、ゴーレムたちは容易く乗ってこない。寧ろ岩面は無表情。感情は無さそうだ。

「ほらほら、かかって来いよ。先手を譲ってるんだ、遠慮するな」

更に今度は赤股の挑発。

先手を譲られたゴーレム二体は、言われたとおり遠慮せずに岩拳を握り締めると高々に振り上げた。

仕掛ける積りだ。

極道コンビのふたりは、そのアクションを見上げもせず薄い笑みを浮かべて待ち受ける。

赤股に関しては、何時ものように両手をズボンのポケットにつっこんだままである。

余裕の態度。

しかしながら闘志がふたりの両肩から陽炎の如く臙気が上がっていた。

「叩き潰してあげなさい」

賢者が命令を下した。

二体のゴーレムは、主の命令を忠実に実行する。

拳を振り上げ全身を伸ばし勢いを溜める。そして、落石を連想させるような巨大な拳をふたりの脳天目掛けて振り下ろす。

振り切られるゴーレムの槌拳はハンマーその物。

しかし極道コンビのふたりは体を横に捌いて難なく躲す。

師弟の眼前を空振った槌拳が過ぎ去り大地を叩いた。

陥没する地面。

広がる振動。

そこからゴーレムが持ちえる破壊力の大きさが鑑みれた。丸く陥没した地面がそれをまじまじと物語っている。

しかしながら。

「当たらなければ、どんな破壊力も意味が無いわな」

ムラマサブレード、グングニルの槍、エクスカリバー。どんな伝説の武器であろうと、敵に命中しなければ話にもならない。

功風老の言う通りだ。無意味の一言で解決される。

「何言ってるんですか、師匠。そんなことは子供だって承知ですよ」
拳を強く握る極道コンビ。
ゆっくりと流れるように腕を振り上げた。

そして、反撃。

極道コンビのふたりが、自分に槌拳を落としてきたゴーレムの手首を狙って同じ様に槌拳を振り落とす。

物凄い音がふたつ鳴る。

まるで鉄のハンマーを岩石の上に振るい落としたような硬音。

ゴーレムと比較して明らかに小さなふたりの拳が、太い石像の腕を容易く砕き折っていた。

リスト部分から折れたゴーレムの拳が、強く握られたまま地面を転がる。

更に次の行動を速やかに取る極道コンビのふたり。

オークの血が染込んだ湿った土を蹴り、ゴーレムたちの懐に飛び込む。

「反応が遅いのお〜」

ゴーレムたちは、その速度に反応できずに難無く超接近を許した。

「さて、今度の調査は耐久力のチェックだぜえ」

功凧老と赤股が、反撃のメインディッシュを仕掛けようと体制を各自築く。

打撃技のモーション。

今度の極道コンビはバラバラの攻撃を繰り返す。

赤股はゴーレムの懐に入り込むと先ず、下段横蹴りの足刀でゴーレムの左膝を打つ。

それは重量を秘めた長槍の如く素晴らしい蹴り技だった。

足刀がプロテクターののような膝の皿を砕くと関節部分にまで大きな亀裂を走らせた。

砕かれたジョイント部分から小石が落ちる。

明らかな粉碎。

「脆いなあ」

槌拳を打ち下ろす為に前へと一歩踏み込んでいた左足を砕かれたゴーレムは、バランスを崩して体躯を揺らす。

そのまま前のめりに倒れそうになった。

そこに赤股の追打。

全身の筋肉を伸ばすように放たれたアッパーカット気味の掌打が、倒れかけたゴーレムの顔面を支えるように突き上げた。

倒れかけたゴーレムの体が少し跳ねる。

それでも打たれたゴーレムの顔面は無傷だが、不思議なことにゴーレムの後頭部が砕けて飛び散った。

衝撃の貫通である。

「するりとな」

赤股が軽やかなフットワークで倒れこんで来るゴーレムの巨軀から逃れるように横に流れ出た。

「今までの経験だと、この手の木偶人形は決まって同じだ。頭を砕かれた程度で、戦闘不能にはならねえ」

赤股の言う通りだった。

前のめりに倒れそうになったゴーレムは、残された一本の腕で体を支える。

片腕片足、それに頭部の損壊。それでもゴーレムは機能を完全には失っていない。

だが、そこに赤股の追い討ちが連続で叩き込まれた。

狙うは横から。

打たれるは脇腹。

連続の拳撃に、時折混ざる脚撃。

それは、まるで削岩機のドリルの如くけたたましい激音を呻らせゴーレムの脇腹に連続で打ち込まれる。

飛び散る岩石の破片と物々しい破壊音。

ものの三秒もせずにゴーレムは、上半身と下半身が切り離される。

「ざっと、こんなもんかな」

流石の巨大木偶兵士でも、頭部を失い、胴体を打ち砕かれながら分離させられれば機能を停止するようだ。ピクリとも動かなくなつた。

ゴーレム兵が、破壊された芸術的の如く横たわる。

一方、功風老の方は、赤股よりも速やかにゴーレムを機能停止までに追い込んでいた。

赤股とほぼ同時にゴーレムの懐に飛び込んだ功風は、いきなり拳を一つ打ち上げて岩面を叩くと、拳力だけでゴーレムの姿勢を仰け反らせた。

まるで巨体が起き上がりこぶしのようだった。

そしてゴーレムの右足を外側から下駄を履いた足で横に払う。

力みの感じられない軽い足払いに見えたが、足を払われたゴーレムの方は、わざとらしくも大袈裟に体を浮かせた。

ゴーレムは、両脚を真横に向けながら、空中に横たわるように浮き上がったのである。

まるで誰も居ない方向にドロップキックを自ら撃つたような体制だった。

力技ではないだろう。これもまた達人の秘儀。

流石は達人と呼ばれるだけある武人の足払いであった。小技一つに關しても並とは異なる。

そして、ふんわりと浮いた岩の巨体が、ゆっくりと重力に引かれて降下を始めと、次のアクションに移る武天老師。

「重いのをくれてやる」

言いながらゴーレムの体の上から両掌を重ねる功風老は、そのまま涼しい表情でゴーレムの巨漢を地面に押し付けるように叩きつけた。

「双掌墜落衝ってんだ」

技の名前だろうか、功風老が呟いた。

しかし、その声もゴーレムが叩きつけられる重低音に埋もれる。地が揺れて、土に染込んだオークの鮮血が浮き上がるように弾んだ。それと一緒にゴーレムの体がバラバラになる。

バラバラといってもガラスが割れて木っ端微塵に碎けるようなバラバラでない。

関節と呼べる関節から手足だけであらず、頭までもがはずれてもげるようにバラバラとなったのだ。

子供に乱暴されて、壊れた超合金の玩具のように五体が解れた。

これが人間だったら残酷な光景だろう。

「ぬう！」

目を剥いて驚くは、賢者ひとり。

胴体からはずれたゴーレムの頭部や手足が弾んで転がった。

転がった丸い頭部が動きを無くした頃に、赤股が相手にしていたゴーレムの解体が終了する。

各自が相手にしていたゴーレムを撃破すると、極道コンビのふたりは残りのゴーレムの方に体を向ける。

ノーマルゴーレムの残機数、十五体。

「遅いぞ、夏鱗。そんなロボットを壊すのに何秒かかっていやがる」

「良く噛んで味わってたんですよ」

「言い訳がましいのお。口だけは相変わらずだわい」

「師匠こそ早すぎると女性に嫌われますよ」

「早漏扱いするな、下品だぞ。お砂だつて居るのを忘れるな」

後ろを僅かに振り返る赤股。

お砂がいつものように微笑んでいる。

でも、いつもと若干違うような気がする赤股は、無言のまま前を向き直した。

背中に生暖かい殺気を感じたまま。

「まあ、これは調査なのですから、速い遅いは関係ないでしょう、師匠」

「馬鹿野郎が。情報収集だからこそ迅速さが要求されるんだ。いつも眼一郎が言ってるだろう、情報は生き物だよ。新鮮さが大事なんだぜえ」

確かにヴァルハラ探偵事務所の所長である三外眼一郎の言葉だ。

一瞬拗ねた表情を見せた赤股が気を取り直して話を続ける。

「厳しいお言葉ですね、師匠。ならばここからは、早い者勝ちにしますかい？」

「そう来たか、上等だあ。その案、呑んだ！」

極道コンビが強面を見合ってから如何わしく笑った。子供の笑みである。

その笑みを見たお砂だけが大人の表情で微笑みながら溜息を付いた。

「この殿方は……」

お砂のぼやきは男たちに届かない。

「よいドンッ、で、行きますよ」

「ちょっと待て、一、二の、三にしようぜ」

「それだったら、三、二、一の方がいいなあ」

「じゃあ、三、二、一、零でだ」

「零は要ねっスよ」

「零は要るだろ、普通」

どうでもよいことを話し合つふたりに痺れを切らすお砂が口を挟む。

「お二人さん、いいから早くして」

お砂が陽だまりのような暖かい笑みで言うと、極道コンビの背筋に寒いものが走った。

「はい……」

返事を返すや否や、功風老が地を蹴った。

一番近くに居たゴーレムの眼前まで跳ね上がると、強烈な鉄拳を顔面に打ち込んだのだ。

老師の一撃が、無情にもゴーレムの頭部を打ち砕く。

更に頭部を無くしたゴーレムの体に空手チョップを打ち下ろしながら降下し行く。

何もできないままゴーレムは真つ二つに両断されガラガラと音を奏でた。

着地した功風老の前で、岩の体が二つに割れて左右に崩れ落ちる。

「ずっけー、師匠。俺にもやらせるー！」

愚痴りながらも笑う赤股が続いて岩巨人に飛び掛る。

ノーマルゴーレムの残機、あと一四体。

このふたりに掛かれば壊滅まで、さほど時間も掛からないだろう。

謁見室の乱戦 (巻)

謁見室に到着した軒太郎一行。

アンテイクな観音開きの扉を昂輝が開き、四人で中に入って行く。

「さてさて、ナイトメア公爵とやらを探して此処まで来たが、何処に行ったのやら、此処には居ないな」

「可笑しいニヤア。いつもならプチハーレムで脳味噌の緩い尻軽女どもと此処でイチャイチャしてるんだけどニヤア」

恋人でもないのに手を繋ぐふたりが言った。

メニヤースの説明ならば、いつも此処でナイトメア公爵は、美女たちと戯れているとののだが、その姿は見当たらない。

軒太郎は、悪夢城の幻影が東和邸の正面に突然ながら出現したことについて、城の主であるナイトメア公爵に直接問いただそうと謁見を求めて此処までやって来たのだが、肝心のナイトメア公爵の姿は無かった。

それにメニヤースの説明に混じっていたプチハーレムの美女たちも居なかった。

思春期まっしぐらの昂輝には、一度ぐらいハーレムという桃色風景を見てみたいと興味を抱いて謁見室にやってきたのにガツカリであった。

謁見室の中央で立ち尽くしながら室内を見回す三人とメニヤース。

全面が大理石。壁際に、パルテノン神殿にあるような太い柱が二十本ほど並んでいた。

床には細かな金刺繍が施された赤い絨毯が背もたれの高い玉座にまで続いている。

天井には豪華なシャンデリアが蠟燭の光を鮮やかに色づけ散らしていた。お蔭で謁見室内は、ほどほどに明るい。

四人が入って来た観音扉の入り口の他に入り口は、玉座側にもうひとつある。

おそらくは謁見の際に、そこから城の主が入場してくるのだろう。

「いませんね、誰も」

キヨロキヨロと見回す昂輝が、緊張感の無い顔で言った。

メニヤースに見せ付けてやるために一度は狼に変身した昂輝だが、リミピットチャンネルで話すのも煩わしいと、何気ないタイミングで人の姿に戻っていた。

「ここにナイトメア公爵が、居ないとなると」

一度言葉切る軒太郎は、テンガロンハットから伸びる灰色の長髪を揺らしながら体を振るい、顔を突き出すように玉座を睨む。

そしてまた言葉を続ける。

「別の輩に訊くしかない」

怪しくも見開く軒太郎の瞳。口元が僅かに笑っている。

昂輝とメニヤースが気付けば、巫女服の憑き姫も玉座を冷めた視線

で静かに見詰めていた。

緊張のあまり猫耳を臥せるメニヤース。

静まり返る謁見室内。

開いたままの扉の向こうから戦いの激音が僅かに流れ込んできた。

なにかいるのか、と昂輝が問おうとした刹那。言葉よりも早く玉座の裏から人影が出て来た。

白髪のオールバック。黒いスーツに蝶ネクタイ姿の老紳士。

堀が深く眉毛が薄い顔には、生傷のような皺が年輪の如く幾つも刻まれていた。

年の頃は六十ぐらいだろうか、もう少し歳を取っているやもしれない。

白人だ。

「執事……さん？」

その姿を見て昂輝は、執事にしては威圧感が強い人だと思った。

物腰が東和邸で見た数人の使用人に良く似ていたが、一本筋の通った厳しさのようなものが異常なまでに感じられる。

それが戦闘力だと気付くのに、昂輝は少し時間が掛かった。

「グ、グスタフ……ニヤア……」

メニヤースの小声は震えていた。

軒太郎に手を掴まれて居なければ、すぐにでも逃げ出しそうな素振りである。

逃げれない代わりにメニヤースは、黒衣の背後に全身を震わせなが

冷たく睨みつけるグスタフの視線に怯えるメニヤース。

いつの間にかヴァルハラ探偵の四人と打ち解けた感があつて、落ち着きを取り戻していた彼女だが、ここに来てのグスタフ登場に再び怯え繰り返し、己の立場を思い出す。

その怯え方は、借りてきた子猫のようだった。

そう、本来ならば、彼女は借りてきた子猫と同じ立場なのだ。

「あのお爺さん、可笑しいわ」

突然ながら憑き姫がはつきりとした美声で呟いた。

グスタフに警戒しながらも三人が、憑き姫の方を見る。

「何を言い出すニヤア、この子は？」

「何がだい、憑き姫？」

可笑しいと述べる理由を訊く昂輝に憑き姫はゆっくりと言葉を返す。

「あのお爺さん、魂が複数あるわ」

「複数？」

「寧ろ分裂……。そうだが、一つの魂が分かれたような感じ」

解らないと首を傾げる昂輝とメニヤースだったが、軒太郎だけが口元の右端を釣り上げ怪しく笑う。

憑き姫の言いたいことが理解できている様子だった。

もう一度訊く昂輝。

「憑き姫、解り易く説明してくれないか？」

チラリと一瞬だけ昂輝の顔を見上げた憑き姫が、淡々とした口調で話し出す。

「この謁見室に入ってからずっと気になっていたの、同じオーラを感じさせる複数の魂に。在り得ないことなの」

「魂？」

憑き姫は魂を様々な方法で感じ取ることが出来る。

魂さえ持ち合わせた存在ならば、十キロぐらい離れていても感知できるのだ。それが強い魂や妖怪変化の物ならば尚容易い。

その憑き姫が感じ取った異常と、姿を現したグスタフの存在。

「だって、この謁見室の柱の陰には、複数の気配が潜んでいるの」

その言葉に昂輝とメニヤースが忙しくなく左右に首を振る。

「ひ、潜んでいる……、何がニヤア？」

メニヤースの質問を無視して語り続ける憑き姫。

昂輝も憑き姫の話を優先させて聞く。

「魂の形は一人ひとり異なる形。例え双子だって同じ形はありえない。指紋やDNAと一緒になの。」

なのに潜んでいるすべての魂が同じ形をしているの。ありえないわ」

陰気な薄笑いを含んで軒太郎が言う。

「そんな訳で、とつくの昔にばれているんだ。大人数で隠れてないで出て来いよ」

大理石の柱陰に隠れている輩を挑発する軒太郎が黒いロングコートの中に片手を忍び込ませコルトパイソンに指を掛けた。

敵が複数だと聞いた昂輝も戦闘を予感して狼男の姿に変化する。

そして携帯電話を握ると拳の間から三本ずつのカマイタチブレードを飛び出させて更に警戒を強める。

玉座前に立つグスタフが話し出す。

「メニヤース殿、主から力を授かったにも関わらず、主を裏切ることは大罪デス。心得ておりますでしょうねデス」

話が逸れた。

しかしメニヤースは、律儀に言い訳を返す。

「グ、グスタフさん、これには深い深い事情があるニヤア」

「それとメイドロボたちから四天王の方々が、勝手口から裏門を目指して逃走をはかるうしていたとの報告も上がってきていますデス」

「そ、それも誤解ニヤア。あのポンコツどもの話なんか信じちゃあ駄目ニヤア！」

「メニヤース殿、今回の件に関してはナイトメア公爵様に報告するまでもなく、死刑デス」

「し、死刑！」

いきなりの判決に、眼を涙ぐませるメニヤースが、更に身を震わす。ふたりのやり取りに軒太郎が口を挟んだ。

「安心しろ猫娘。我々ヴァルハラ探偵事務所は情報提供者の安全もきっちり守る。」

このアナザースペースからの脱出までは俺が責任を持って守ってやる。約束だ」

「ほ、本当かニヤア！」

「ああ、だから俺の側を離れるな」

「はいニヤア！」

希望である。

今の軒太郎はメニヤースにとって、黒衣でありながらも白馬に乗った純白の王子様のように映った。

「さて」

軒太郎が懐から銀色に光を反射させて輝くコルトパイソンを抜き出した。重くも殺伐とした銃口がグスタフを狙う。

「爺さん、あんたが殺る気ならば構わんが、俺らはナイトメア公爵とやらに会って話しを訊きたいだけなんだがな」

友好的態度の台詞だったが、銃口を人に向けた状況で語る台詞ではないだろう。

昂輝は軒太郎の言葉に偽りを感じ取る。

昂輝ですら感じ取れたのだ、銃口を向けられているグスタフとて同感だろう。

「黙れ、侵略者。貴様らにナイトメア公爵様を引き合わせる義務は私にはないデス。ただ、貴様ら侵略者を排除するのみデス」

柱の陰からぞろぞろと現れる人影。その数は二十人以上居るだろうか、三十人までは居ない。

その人間の姿はすべてが同じ黒いスーツに白髪のアールバック。顔はグスタフと瓜二つ。

「同じ顔だ……」

「グスタフがいっぱいニヤア……」

いきなり軒太郎がコルトパイソンの引き金を引いた。銃声が大理石の部屋に反響して轟く。

玉座前のグスタフに向かって発砲したのだ。

「ふっん、デス！」

素早く懐から大きなナイフを抜き出したグスタフが、刀身の横を盾に使い銃弾を見事に防いだ。

弾かれた銃弾が大理石の柱に当たる。

「ほほう、銃弾を防ぐほどの反射神経を持ち合わせているか」

「これもまた主から授かった力の一つです」

「良い主を持ったようだな」

「今度は此方からも行かせて貰いますです」

グスタフ全員が、懐からククリを引き抜いた。構えを取る。

「いざ、参りますです！」

一斉に走り出す複数のグスタフたち。四方八方から四人に襲い掛かった。

謁見室での乱戦が開始となる。

中庭の激戦 (一)

素早く走りながら功胤老が言う。

「これは意外と洒落たことをやりおるわい。火炎放射器とはビックリじゃて」

何体ものゴーレムが朽ち果てる中庭に、いたる所で火の手が上がっていた。

オークの死体だけでなく、大地すらもが燃え上がっている。

原因は、極道コンビと激戦を繰り広げているノーマルゴーレムの生き残りである。

だがその数は、僅か二体。十五体が既に撃沈していた。しかも一体は左腕一本である。右腕は赤股に叩き折られたのだ。

その二体のゴーレムが、腕を突き出し手の甲から火炎の柱を飛ばしているのだが、その三本の火炎を極道コンビのふたりが左右に疾風の如き速さで走り回り避けていた。

ふたりが火炎攻撃を避ければ避ける程に、辺りの惨状は業火に包まれ広がって行く。

「炎はいけませんわ……」

そう呟きながら距離を置くのは、観戦していたお砂であった。

彼女は砂を操る妖術が得意だ。

しかし、その砂は普通の砂ではない。ニトログリスリンを含ませた珪藻土である。世に有名なダイナマイトの火薬だ。

それを武器として扱うが故に彼女は炎を苦手にしていた。引火でもしたら大惨事であろう。

そして大地を焦がす炎の壁が、彼女を男どもの戦いから遠ざけた。メラメラと灼熱に陽炎を揺らす向こうでは男たちが戦いを繰り広げている。

お砂は黙ってその戦いを眺めていた。

そこに表れるオーク兵の一団。

「ぶひいゝ。なんでこんなところに女が居るデブか？」

「本当だデブー」

「しかも美人で巨乳デブよ」

「ラッキーデブー」

十匹ぐらいで表れたオークの一団は、野蛮な野党と代わらない集団だった。

卑猥な会話と下品な笑い声を上げて近寄って来たオーク兵たちが、美女を逃がすまいと取り囲み、ジリジリと間合いを詰めて行く。

「あらまあ、嫌だわ」

己のピンチを理解しているのかしていないのか不明だが、暢気なお砂は頬に片手を添えながら小首を傾げた。

徐々に詰め寄るオーク兵。

お砂が差した日傘をクルリと廻した。

そして見る見る色を変えていくお砂の黒髪。

漆黒でありながら艶やかな長髪が、上から下へと灰色に染まって行く。

変身である。お砂の戦闘ホームだ。

「ぶひい？」

オーク兵の一団も、お砂の変化に気付くと足を止めて様子を窺った。何が起きているのか理解できずに思考が停止した感じである。

そして更にオーク兵たちを不思議がらせる光景が起きる。

お砂の白いスカートの中から灰色の何かが一匹パタパタと羽ばたき出て来た。

「蝶……デブ」

蝶である。

最初は一匹だったが徐々に数を増す。やがて蝶はわらわらと止まる事無くスカートの中から現れた。

その蝶は群れとなり周囲に広がりオーク兵たちを包んで舞い続ける。

オーク兵たちは、手品師のショーが始まるのを待っている愚民の如き表情で、自分らの周りを飛び交う蝶の群れを眺めていた。

純朴な子供のような表情である。

「私は、ヘルシー志向ですから、鶏肉しか食しませんの。豚肉はごめん遊ばせ」

言うや否やお砂が満面の相貌で微笑んだ。
その瞬間である。オーク兵の周りを優雅に飛び回っていた灰色の蝶
たちが、次々と爆発を起こして爆炎を散らし始めた。
爆音が空気を揺らす。

「ぶひひひー！」

連続で爆発して行く蝶の爆熱に焼かれたオーク兵たちが、悲鳴を上
げた後に丸焦げとなって倒れて行く。

その悲鳴も殆どが爆音に埋もれて虚しく消え散る。

ことは、一刹那の刻だった。

直ぐに周囲は静けさを取り戻す。

自爆した蝶の硝煙が収まると、そこには火傷まみれで倒れるオーク
兵が、焦げ臭い煙を上げながら倒れているだけだった。

壊滅である。

一匹たりともオーク兵は動かない。

豚の丸焼きだ。周囲に美味しそうな匂いが漂った。

「さて、殿方の様子は」と

幾つもの外敵を爆死させたにも関わらず涼しげな顔色で炎の向こう
を覗き見るお砂が白い日傘をクルリと廻した。

灰色に変わった長髪が、再び美しい黒髪に戻って行く。

そのままお砂は笑顔で仲間の戦いを見守った。

中庭の激戦 (二)

連続の爆音に気付いた極道コンビのふたりが一瞬足を止めて後方に視線を向けた。

「今のはお砂姉さんの自爆蝶ですよね」

「何かとやり合っているのか？」

炎の壁に遮られはつきりとは見えないが、炎の向こうにただすむ姿はお砂ひとりであった。差した白い日傘が見える。

敵の影はひとつたりとも見当たらない。既に決着が付いたのだろうとふたりは察する。

お砂の実力に関しては重々承知していた。

戦ったことはないが、おそらくのところ赤股よりも強いだろう。赤股自信も己の能力ではお砂に接近することすら難しいと考えていた。幾らイメージ内で戦略を練っても勝てるイメージが湧いてこないのだ。

相性の差もあるが、敵に回したく女性である。

「おっと、危ねえ〜」

飛び来る火柱が、停止していた極道コンビを狙う。ふたりは慌てて跳ねのいた。左右別々の方向に走る。

「そろそろ火遊びにも厭きたわい。決着を付けてやろうかのお」

「賛成です、師匠」

横に並んで立つゴーレムの右と左から挟み込むように接近する極道コンビ。

ふたりは巧みに体を振って火炎放射器の攻撃を掻い潜る。功風老が右のゴーレム。赤股が片腕の左のゴーレムにだ。

「それ！」

「おらよっと！」

功風老は二本の火柱の間をつつきりゴーレムの懐にジャンプひとつで飛び込んだ。

そして繰り出される武天老師の剛拳。

強烈なパンチがゴーレムの岩胸を砕いて巨漢を後方に押し飛ばす。

一方の赤股は、師匠と同じ様に火柱を避けて進むと、ゴーレムの足元から全身を捻らせた重い後ろ廻し蹴りを突き上げる。

赤股の右踵がゴーレムの岩胸を砕くと、人間とは思えない脚力で岩巨人を後方に弾き飛ばした。

極道コンビの攻撃を喰らった二体のゴーレムが背と背をぶつけて止まる。

バランスを崩すが両者ともに倒れない。

そこに赤股がダメ押しの連続攻撃を叩き込み一体のゴーレムを粉々に砕いて見せる。

まるで大型機関銃のような乱打であった。

更にもう一体のゴーレムを功風老が、軽々と一本背負いで投げつけてしまう。
地面に叩きつけられたゴーレムは己の体重の重さでバラバラに砕け散る。

これでノーマルゴーレム十七体すべてが破壊された。

残るは、賢者が肩に乗る金ゴーレム一体である。

「雑魚の始末は付きましたね、師匠」

「ああ、そうじゃな」

「残るは」

砕け散ったゴーレムの残骸の上に立つ極道コンビが、金色ゴーレムの肩の上に立つ賢者を睨んだ。

長い白髭を風に靡かせながら極道コンビを見下ろす賢者の眼差しは、死神の如く冷たくも無慈悲に感じられた。
心が乾燥しきった双眸だ。

「なんともお強い方々だ。私のゴーレム兵団をここまで完璧に解体してしまうとは」

弱気な発言にも取れるが、賢者の態度に弱気なところは僅かにも見当たらない。

寧ろ強気なほどに背筋を伸ばして起立していた。

「だが、これで少しは私の苦勞が報われる。あなた方のような

脳細胞まで筋肉で出来上がっている愚かな体育会系に感謝する日が訪れるとは思いませんでしたよ」

「何が言いたい、魔法使いさんよ！」

赤股がゴーレムの残骸を蹴飛ばしながら怒鳴った。賢者の挑発にわざとらしく乗る。

実際のところ赤股は冷静だった。チンピラ風を演じているにしか過ぎない。本当は、冷静そのものなのだ。

元々赤股は、真面目な好青年である。猫背でもなければ蟹股でもない。もちろんチンピラでもない。

何故にサングラスを掛けパンチパーマで強面ぶっているかといえば、そっち系の人間が、容易く喧嘩を売ってこないようにする為だ。

赤股はパンチパーマを辞めて、普通のなりに戻れば、かなりの美男子である。しかも性格も良い。物凄く異性にもてるのだ。

しかし、その分、同性には凄く嫌われる。

女性にもてることへの嫉妬とかではない。否、少しはそれもあるだろうが、それ以上の理由が存在していた。

それは。

ただ、生理的にむかつくのだ。

殆どの同性に、意味もなく嫌われ、柄の悪い連中には直ぐに喧嘩を売られる。

その為に、己からたちの悪いチンピラを演じているのだ。

ちなみに赤股は、高校時代は体育会系であったが、大学は京大を優秀な成績で卒業している。

美男子で、運動神経も良く、学もある。パーフェクトに近い。その辺が、やはり同性としてむかつく要因の一つなのだろう。

「おい、おっさんよ、舐めた口きいてやがると、x xの穴から片足つつこんで 玉を五六回連続でけつとばしてキンキンいわしてやるぞ、ゴラァ！」

中庭の激戦 (三)

このキャラを始めて、もう四年なる。

赤股のチンピラ口調も随分と板に付いた。

演技を始めた当初は、言葉使いもぎごちなかった為、なんちゃってチンピラ臭がぶんぶんしていたものだが、長い間、私生活でも別人格を演じていれば、けっこう物になるものだ。赤股は、その辺の努力を惜しまない。

その涙隄しい努力も、同性から嫌われる要素だろう。

兎に角、むかつくのだ。

「愚かな体育会系であろうと、この戦場では優秀なウォリアー。知能が低いからといって侮れば足元を掬われる。

この黄金ゴーレムは、そんな輩を倒す為の特別製。作り上げるのにも普通のゴーレムの数十倍の時間が費やされています。

その時間と努力が、無駄にならなかったことに感謝します。あなた方の存在にね」

「わかってるじゃねえか、爺よあ〜」

兵扱つわものいされて、機嫌を良くする赤股。

そこに賢者の質問が飛んで来た。

「君は、勇気をどう考えているかね？」

「勇気？」

唐突な質問だった。

「そつだ勇気だ。勇者が秘める底力ともいえる、あれだよ」

「何が言いたい、ボケ」

「私はね、勇気とは愚か者の象徴だと考えている。

そつだろつ、そつは思わんか。思えないか、君は愚かな勇者のようだからな」

「なんだと、おい！」

まだ、嘲り続ける賢者。

「感情的になるな、愚かな勇者」

赤股が憤怒を演じながら一歩前に出た。

しかし賢者は、しつこくも語り続ける。

案外とお喋りのようだ。

「勇気とは時に人間に奇跡の力を与えてくれる。

バンジージャンプで高いところから飛び降りる勇気。

通りすがりの男性が、チンピラに絡まれている女性を助けるシーン。箱の中身が何かも判らないのに、すんなりと手をつっこめるアイドル歌手。

百人の不良少年に、たった一人で立ち向かって行く一匹狼の空手少

年。

「これらがどれもこれも勇気だと、君には思えるかな？」

「ああ、そりゃ、全部勇気だろう。ちがうか？」

「ここで功風老が言葉を挟んで来た。」

「なるほどな。お前さんが言いたいことが判ったよ」

「流石は年の功。わかりましたか、ご老体」

「お前さんは、若い頃から机に噛り付いていたエリート系だろう？」

「過去のことです。否定はしません」

「まあ、いいわい。お前さんが言いたいのは、こうだろう」

顎を撫でながら功風老が続きを話した。

「お前さんの言うところの勇者ってやつは、空想力の欠落した人間を指しているのだろう」

「実に察しが良い」

「バンジージャンプで高いところから飛び降りた際、綱は切れないものと決めつけ設備のチェックをしない。」

「自分は強い男だと勘違いして、女を助ける為にチンピラと戦い、負けるとは思わない。」

「謎の箱の中に、指ぐらひは簡単に食いちぎれる小型の猛獣が入っているとは考えず、テレビだと思って舐めてかかる小娘。」

不良少年なんぞ群れを成さなければひとりでも出来ないと浅はかに敵戦力を計る一匹狼の強い空手少年」

「師匠、何が云いたいんスか？」

「これらはどれもこれも勇敢に見えるが、取り方によってはただの愚か者。

解り易く言えば、結末を想像できない、様々な結果を想像できない輩。

あんたは、それが云いたいのだろう」

「年の功ですな」

「よつするにだ、勇氣を持っている多くの人間が、同時に想像力が欠落している可能性が高いってことだ」

「それならなんとなく解るっス」

「喧嘩相手を木刀で殴る勇氣。戦国時代ならばいいが、一步間違えれば人だつて死ぬ。そして殴ってから死ぬとは思わなかったか言ひ出す愚か者も少なくない。

犯罪をやらかす少年少女の中に、しばしば見られるタイプだ」

「鉄砲玉みたいな連中ですね。自分が上にいいように利用されているのも気付かずに突つ走り、数年臭い飯を食ってきたら幹部に成れると信じ込んでいるような奴。

実際はただの捨て駒なのによ」

「そつ、それだ」

ここで極道コンビのふたりが、金ゴーレムの肩に乗る賢者を睨んだ。

「て、ことわだ。魔法使いの爺さんは、俺らがその類だといいたいのか、ゴラァ！」

「違うのかね？」

「違うわいボケっ！」

赤股が激昂しながら唾を飛ばして吼えた。

それを功風老が宥める。

明らかに赤股は、顔面を真っ赤に染め上げ冷静さを失っているように映った。

だが、これがすべて演技。

実のところ赤股は、冷静そのものだ。

功風老も解っていて弟子の演技に乗っている。

これもすべて作戦だ。

しかし、小細工と見て取れる心理作戦を労するだけあって、極道コンビは眼前の怪しい魔法使い風の男、賢者を警戒しているのだ。

おそらくは、今までとは段違いの強敵であろう。

ふたりがかりならば確実に倒せる敵だが、相手が強者だと解っていれば尚のこと、ふたりがかりは有り得ない。

一対一。

武道家のふたりには譲れない条件だ。

だからこそ、武道家として全力を尽くす為に、したこしょうも大事な戦術として策している。

中庭の激戦（四）

三人の周囲では、未だ炎が燃え上がっている。その光景は、まるで炎の壁で作られた闘技場だった。

高い位置から見下す賢者が述べる。

「堅苦しい顔を並べて、いつまでも男が三人そろって話していても仕方ないでしょう。そろそろ戦いを始めますか」

「ああ、そうじゃのお」

「上等だ、そのインテリぶったお上品な口を、二度と叩けないように、すべての歯をへし折ってやるぜ」

「君は、勇ましいな。はっはっはあ」

すかした笑い声を上げながら賢者の体が足元からゴーレムゴーレムの体内に沈んでいく。融合して、一つに成ろうとしていた。

「ほほう、ゴーレムと一体化するか。これで本体を弱点として狙えないのお。抜け目がないわい」

「関係無いっすよ。あの成金ゴーレムごとぶっ壊してやりますからよ」

傲慢な賢者の声。

「これが、勇気を上回る想像力の戦い方です」

赤股が体制を低くして身構える。

賢者の姿を飲み込んだゴルドも、超重量の巨体をゆっくりと動かしながら前進を開始した。

スローモーションのようなゴレムの動きを見た赤間だが鼻で笑った後に、お先に、と師匠に呟いた。

「おう、先を譲ろう」

珍しくも功尻老は、弟子に獲物を譲る。

「ただしじゃ、双葉総合病院でのような不甲斐無い結末は許さんぞ」

「承知！」

弾丸の如く飛び出す赤股。その足元の土が抉れて後方に飛んだ。

武天老師は、顎を撫でながら弟子の成長度合いを観察することにした。

赤股夏鱗 vs 賢者のゴルドゴレム。

一瞬でゴルドゴレムの足元に滑り込む赤股。スピードで段違いであった。

まさに亀と兎ほどの差がある。

「幾ら煌びやかに着飾っても、圧倒的な速度の違い。それで有りながら、我が一撃の重さは、五分五分！」

右足の退脚が地面に突き刺さり衝撃が足元から跳ね上がるように赤股の体を駆け上って行く。その衝撃は破壊力に変化して拳に宿るとゴールドゴーレムの鳩尾に昇竜の如く叩き込まれる。

釣鐘を生肉の塊で叩いたような音が響いた。

赤股の打拳の一撃に、ゴールドゴーレムの巨漢が浮き上がると、地面から両足の裏が三十センチほど離れる。

だが、会心の一撃と思えた強打を喰らいながらもゴールドゴーレムの体には、今までのノーマルゴーレムのような破壊現象は起きなかった。

亀裂どころか僅かな罅割れも無い。

硬い。

「強度は、今までと違うか」

拳に感じ取った硬さは、過去の数倍である。

「どンドン行くぜッ！」

浮き上がったゴールドゴーレムの両脚が地に落ちるよりも早く、更なる攻撃を打ち上げる赤股。

無数の拳が残像を映し出して乱打する。

細かい打撃音がゴールドゴーレムの体を浮き上がらせて行く。

「凄いな、体育会系の純朴とは」

空中で乱打に揺らめくゴールドゴーレムの体内から聞こえてくる賢

者の言葉。

打たれ続けながらも余裕が悟れる。

賢者のお喋りが、まだ続く。

「スピード、ストレングス、タイミング、ジャッジメント、スキル、そしてスピリット。どれもこれも一流なのだろう。

それだけの能力を身に付けるのに、どれ程の人生を君が費やしてきたか、私にも幾分かは察しられるところだ」

「な、に、が、い、い、た、い！」

連続の拳激を止めることなく尋ねる赤股が、更に繰り出す技の速度を極める。

「君は勇敢すぎで、想像力に欠けている」

また勇気と想像力の話が出た。

「そこまで積み重ねた超人級の力量が、私なんぞに遅れを取る事を思いも描かない。傲慢だ」

昇拳に打たれ続けるゴールドゴーレムが、打たれ続けながらもゆっくりと右剛腕を横に伸ばした。

大きな掌が小指から順々に握られて行く。

「今も放ち続ける拳のように、その暴力で積み重ねてきた愚かな傲慢を、我が人生で培った人々を救う知識が打ち砕いてやる！」

反撃。

黄金の突風と化して振るわれる巨兵の剛腕。

その一振りには、大地に足を付けておらず、踏ん張りも効かない状態でありながらも、赤股の拳技と変わらない速度を生み出していた。

「がつ！」

ゴールドゴーレムの巨拳が赤股の頭部を横殴る。

響く振動。

ぶれる視界。

鼓膜に届く激音。

衝撃に赤股の体が横向きに回転しながら転がった。

両脚が天を向き頭が地にぶつける。

続いて回転してきた足が地にぶつかる。

また体が回転して頭を地にぶつける。

それを繰り返しながら飛んで行く。

回転を繰り返す赤股が、炎の壁を突っ切ってノーマルゴーレムの残骸に激突して止まる。

人間が、このような回転で飛んで行くとは思えないほどの勢いであった。

「ぐうぐううう……。こんちくしょう、騙された……。あの野郎、速いじゃねえか」

くぐもった声を漏らす赤股。

中庭の激戦 (五)

四つんばいの赤股。

「不覚……」

パンチパーマと着ていたジャケットが泥で黒々と汚れ、履いていた筈の革靴は両方と脱げていた。

片方の靴は、赤股が転がった途中に落ちているが、もう一足は見当たらない。何処か遠くに飛んで行ったのだろう。

「ぶつ殺すッ！」

憤怒を噴火させながら瞬時に立ち上がる赤股の外見は、赤く艶めいた肌色に変わっていた。

赤股の戦闘ホーム。

瞳の網膜が、人間の形でないものに変わっていた。

皮膚が猛毒を秘めた爬虫類の鱗と化している。

もう、その姿は、人でない。邪神だ。

赤鱗の怪物と変貌した赤股が、自分が先程まで攻めに転じていた場所を睨みつけながら中国拳法の構えを見せる。

蛇拳の構え。

しかしそこにはゴールドのビッグボディーは見当たらない。

視界から消えたゴーレム。

右にも居ない。左にも居ない。

思わず戸惑いを口に出す赤股。

「どこだ！」

「上ですよ」

賢者の声と共に黄金の巨体が降ってくる。

咄嗟の判断で横に跳ね飛ぶ赤股。

赤股が激突したノーマルゴーレムの残骸を、黄金ゴーレムが踏み潰した。

そして、飛び散るゴーレムの破片。

その破片に続いてゴールドゴーレムが赤股を追った。

巨体が猛スピードで走り出す。

「そんな馬鹿な！」

驚く赤股。黄金の巨体が自分で弾き飛ばした破に追いつき手で払い落とすと、赤股に追いついた。

赤鱗の怪物に変身した赤股は、鱗の耐久力だけでなく、超人的身体能力を更に高めている。

それが功風流の変身術。

しかし、パワーアップした赤股を追うのは、賢者が操る黄金の巨人兵。

その能力は、腕力だけでなく、体速でも赤股に脅威を与える。

「馬鹿げていると思うかね。信じたくないかね。こんな巨体の兵器が、ナチュラルに鍛え上げた己に対抗できることが、我慢できないかね。君と同じスピードで動くのが納得いかないかね。それこそが、驕りなのだよ」

己に追いついたゴールドゴーレムに、赤股が蹴りを繰り返す。

まるで鞭の蹴り。

しなりが風切り音を鳴らす、急激なバックステップでゴールドゴーレムは長い蹴り足の間合いから逃れる。

そしてまた前に跳ね入る。

「速い！」

刹那に間合いを詰めたゴールドゴーレムが、黄金の右手で下突きを放った。

ボディーブローともアッパーカットとも呼べぬ巨大パンチが、蹴りを空ぶった赤股の上半身を襲った。

躲せない。

辛うじてガードは間に合ったが、破壊力が体を貫く。

赤股の体が強大な衝撃に、再び撥ねられた。

だが、今度は回転もしなければ転倒もしない。両脚で着地すると数

メートル滑って止まる。

「俺の蹴りを躲したな。即ち、変身した俺の蹴りは喰らいたくないわけだ」

赤股の述べた通り、変身後の蹴り技は速さも力強さも増している。蹴りの威力は確実に破壊力を増していた。

例えるならば、鋸からチェーンソーに武器を持ち替えたくらいに戦力を増している。

即ち。

ここが、ゴールドゴーレムが持つ耐久力の限界なのだろう。

更に襲い来る黄金の拳。横振りの右ロングフック。

胸と顎先が地面に付きそうなくらいに伏せる赤股の頭上を過ぎる剛腕。

ゴールドゴーレムの攻撃が過ぎた直後に赤股が跳躍を見せる。岩巨人の眼前まで跳ねると足刀を発射した。

だが、素早い回避を取るゴーレム。まるでプロボクサーのように上半身を左に傾け赤股の突き蹴りを躲して、更に動きに合わせた反撃の右フックを撃つ。

赤股は空中で体を仰け反らせながら捻ると、宙を舞う体操選手のようにゴーレムの拳を躲した。

着地すると同時に前に出る赤股と、その脳天に拳を叩き落そうと試みる賢者のゴーレム。

上から迫る巨大な拳を、しなりを効かせた蛇拳の捌きで受け流す。そして体ごと伸び出る牙型の拳でゴールドマスクを狙うが届かない。上半身を引いて躲される。

赤股の回避と攻撃が一体化した攻め。ゴールドゴーレムも同じ術を使う。

赤股が狙った蛇拳の直突きを躲した動きから膝蹴りを突き出すゴールドゴーレム。

上半身を引いた梃子の動きで下半身を攻めに使ったのだ。

破壊力に満ちた膝蹴り。

赤股は避けも逃げもせず正面が横振りの肘で対抗する。

正面から激突する技と技。

ぶつかり合う肘と膝。

その衝撃に弾け合う両者が後ろに弾ける。

体のサイズを無視してパワーは互角。

後方に弾けたゴールドゴーレムが右足で踏ん張り体を止める。

空に弾けた赤股は着地すると、追加のバックステップで距離を作った。

間を置く両者。

呼吸を忘れるほどの激しい攻防だったが、距離からして仕切りなおしの間合いだ。

両者が、一息付く。

「なんだ、こいつは……」

動きはボクサーの真似事程度。しかし攻撃は、速く、鋭く、重くて力強い。思いつきりも良い。

まるで、とてつもなく強い素人のようだ。

「驚きましたか、愚かしい勇者よ。」

貴方が愚民を演じて敵の隙を誘うごさかしい戦略も、無駄に終わりましたね。見事な演技でしたよ。下手なアクション俳優も顔負けだ」

「気付いていたか……」

「私は、頭が良いものでね。それに騙されるのが嫌いだ。嫌いだからこそ、念には念を入れて警戒する。想定外なんぞ許せない。」

どんな局面だろうと、如何なる状況だろうと、最善の道を選択できるよう、ありとあらゆる可能性を想像する。だから何が起きてても危機を脱しられる。

どのような苦難も乗り越えられる。

どのような敵にも勝ってこれた。

これは、勇気ではない。

気高い知恵の終結。

愚かな勇気ではないのだ！」

強がって述べた賢者だが、己の言葉に偽りがあることを知っていた。

勝てないものもある。

乗り越えられないものもある。

それは存在する。

それは、人間の寿命。

アナザースペースの外に在る賢者の本体は、現在死にかけている。

余命三ヶ月。

ガンなのだ。

「 傲慢だな」

赤股が呟いた。

傲慢と傲慢の対決である。

己らが信じる力で、己の道を突き進もうとしていた。

睨み合う二匹のモンスター。

レッドリザードマンとゴールドゴーレム。

しかし、そこに割ってはいる達人。

「またれよ、両者」

「師匠、邪魔をしないでください」

「ご老体、順番を待たれよ。この若造をミンチにしたら、貴公のお相手を約束すゆえ」

「いやのお、待つ気も無い。約束をする気もないわい。だがのお、邪魔をするきは満々だ」

「師匠……」

赤股が困った顔をする。

「ふざけてらっしゃるのかね？」

「否、大真面目じゃわい」

ふたりの間に割って入った功風老の肌色が、ざらざらとした灰色に変身して行く。まるで岩のように粗い。いや、岩その物である。

「弟子に華を持たせるのはやめじゃ。やっぱりお前さんは、わしがぶちのめす。その方が世の為になりそうじゃ」

「ちよつと師匠」

「だまれや、へっばご弟子が」

激戦を冷ますように、話が拗れだす。

気付けば周囲を包んでいた炎の壁も小さくなり、煙を燻らせる程度となっていた。

功風老が、拳で拳を叩く。

「さて、選手交代じゃ」

問答無用のようだ。

赤股が頂垂れた。

謁見室の乱戦 (式)

謁見室。

こちらでは複数による激しい戦いが立ち回られていた。

『この執事さん、強くなっていますか!?!』

狼男に変身した昂輝のリミピットチャンネルが謁見室内に広がる。

「ああ、人数が減るにつれて、個々が強くなって行くようだな」

四人のグスタフを前に妖双刀のイベナムを振るう軒太郎が、漆黒の衣装と灰色の長髪を靡かせながら言葉を返す。

どうやら軒太郎も昂輝と同じ疑問を感じ取っていた様子だ。

憑き姫に飛び掛かったグスタフ三人が、巫女服から生え出ている黒い茨蔓に弾き飛ばされた。

先程からグスタフたちが幾度も攻撃を試みるが、茨巫女の棘蔓が築く鉄壁の自動防御を突破できずに居た。

一方の昂輝は、軒太郎や憑き姫の戦い方とは異なり、グスタフたちが繰り出すククリの刃を全身で受けながらも反撃の爪を振るっていた。

しかし、技の巧みさが違った。

時には喉仏を搔っ切られ、時には心臓を貫かれる。だが、昂輝は死なない。

それが呪いの力。

不幸を継続させようとする悪意の結晶。

グスタフは驚きを表すが攻撃の手は休めない。また、昂輝の頭部を深く切りつけた。

「何処を斬っても再生するとは、なんとも奇怪デス。この少年は、不死身デスカ……」

何をしても死なない昂輝にグスタフも最初は戸惑いを見せていたが、直ぐに冷静を取り戻して攻撃を繰り返した。

「ならば、殺し続けるのみデス！」

流星は執念の元軍人。

相手が不死身であろうと、相手が己より強者であろうと、容易くは諦めない。三人の侵入者に攻め込んでいく。

現役の軍人時代からそうだ。

勝利に対してプライドが高いドイツ軍人なのだ。

続く謁見室内の激戦。

三人の戦力は、二十人ほど居たグスタフたちを短時間で半分に減らしていた。

殆どは軒太郎がグスタフたちを斬り捨てている。

憑き姫は鉄壁の茨鞭で防御に専念しながらメニヤースを背後に置い

ている。憑き姫ひとりで彼女を守っていた。

一番役に立っていないのが、やはり昂輝である。

昂輝はふたりしか倒していない。

だが、グスタフたちに三十回以上は斬り殺されていた。

そして、半数近くに減ったグスタフたち。

それでもまだ十人以上は居るだろう。

しかし、凶器を手にした老執事の動きは、仲間を減らすにつれてレベルアップしていた。

スピードやパワーは勿論のこと、反射神経や技の切れなども確実に向上しているのが感じられた。判断力すら増しているのではないかと思えた。

強くなって行く攻撃や防御の質が、対戦するヴァルハラメンバーを徐々に苦しめていた。

直立のまま黒い茨を操る憑き姫が気付いた点を述べる。

「このお爺ちゃんたち、ひとり倒されるたびに、その魂が分散されて、他のお爺ちゃんたちの魂と融合して行くわ」

『分散されて……融合?』

昂輝がリミピットチャンネルで反芻したところにグスタフのククリが振り下ろされる。

その一撃に対して、腕を盾代わりに防御した昂輝の狼面が苦痛に歪んだ。

昂輝の腕にククリの刃が減り込んで、骨まで達している。

軒太郎が二刀を振り、背を向けながら話に加わる。

「なるほど、この執事は魂を分離させて分身を作り出している訳か。そして、分裂した分身が倒されるたびに、また一つに戻って行っ
るのだな」

「そう、分裂した数だけ分身は弱いけど、ひとつに戻るたびに、元の強さに戻って行くわ」

『て、ことは、この人を倒せば倒すほどに強くなるってことですか
』

昂輝が驚きを述べた瞬間、グスタフのククリが頭に振り落とされた。

「キャンッ!」

狼の口から可愛らしい子犬のような悲鳴が上がる。やはり痛みは相当なのだろう。

ザツクリと減り込む刀身。

それを切っ掛けにふたりのグスタフが昂輝の胸と背中を切りつける。弱いのにベラベラと話に参加するから隙が生まれるのだ。

メニャースも昂輝が即死攻撃を身に受けるたびに、どきまきしていた。

衝撃的光景に彼女はなかなか慣れないようだ。

「こ、この狼少年、化け物ニャア……」

メニヤースは憑き姫の陰にへたり込みながら震えていた。ひとり戦いには参加していない。

そんな中、また軒太郎がグスタフをひとり仕留めた。

ククリを持っていた右手を斬り落とすと、二刀をハサミのように使い器用に首を刎ね落とした。

頭が花瓶のように転がると、グスタフの体が膝から崩れてから霧と化して消えて行く。

だが、仲間のひとりが無残な最期を遂げようとも他のグスタフは眉ひとつ動かさなかった。

寧ろ、それを励みに強くなつて行く。

霧のように消滅していくグスタフの死体を見ながら喋る軒太郎が、二本の妖刀から紫色の妖気を散らして他のグスタフを牽制した。その威嚇に隙がない。グスタフたちの動きが一瞬止まる。

「倒せば倒すほどに強くなるのは困るが、だからといって倒さん訳にも行かない」

軒太郎の言うとおりである。

これは戦いなのだ。敵を倒さなければ勝利は有り得ない。

「そう、倒せばいずれひとりに魂も纏まるわ。その時が、決着ね。彼の魂を、私が封印するわ」

『そうだね、戦うしかないんだ！』

昂輝がリミピットチャンネルで意気込んだ瞬間、今度は喉と腹を同

時に斬り付けられる。

それを見た憑き姫が、視線を余所に向けて溜息を付いた。小声で情けないと呟いていた。

ヴァルハラ探偵の三人とグスタフたちが謁見室で混戦を繰り広げていると、更に室内に飛び込んでくる人影があった。

それは複数。

昂輝たちが気付けば、グスタフたちの数が増えていた。他のグスタフたちが援軍としてやってきたのだ。

「また増えたわ」

「ウザいな」

『そ、そうですね』

おそらくは謁見室まで侵入してきた三人の強さを考えて、城内に散っていた他のグスタフたちの戦力を集中させる作戦なのだろう。グスタフは己一人で、ここを防衛する積りなのだろう。

それだけ彼ら三名の強さを認めたことになる。

そして、そろそろと謁見室に駆け込んで来るグスタフたち。その数は既に、五十人を越えている。

あつと言つ間に、四人はグスタフたちの群れに囲まれた。

謁見室内は、随分と狭苦しい状況になっていた。

謁見室の乱戦（参）

霧のように消滅していくグスタフの死体を見ながら喋る軒太郎が、二本の妖刀から紫色の妖気を散らして他のグスタフを牽制した。その威嚇に隙がない。グスタフたちの動きが一瞬止まる。

「倒せば倒すほどに強くなるのは困るが、だからといって倒さん訳にも行かない」

軒太郎の言うとおりである。

これは戦いなのだ。敵を倒さなければ勝利は有り得ない。

「そう、倒せばいずれひとりに魂も纏まるわ。その時が、決着ね。彼の魂を、私が封印するわ」

『そうだね、戦うしかないんだ！』

昂輝がリミピットチャンネルで意気込んだ瞬間、今度は喉と腹を同時に斬り付けられる。

それを見た憑き姫が、視線を余所に向けて溜息を付いた。小声で情けないと呟いていた。

ヴァルハラ探偵の三人とグスタフたちが謁見室で混戦を繰り広げていると、更に室内に飛び込んでくる人影があった。

それは複数。

昂輝たちが気付けば、グスタフたちの数が増えていた。

他のグスタフたちが援軍としてやってきたのだ。

「また増えたわ」

「ウザいな」

『そ、そうですね』

おそらくは謁見室まで侵入してきた三人の強さを考えて、城内に散っていた他のグスタフたちの戦力を集中させる作戦なのだろう。

グスタフは己一人で、ここを防衛する積りなのだろう。それだけ彼ら三名の強さを認めたことになる。

そして、そろそろと謁見室に駆け込んで来るグスタフたち。

その数は既に、五十人を越えている。

あっと言う間に、四人はグスタフたちの群れに囲まれた。

謁見室内は、随分と狭苦しい状況になっていた。

ヴァルハラメンバーを囲む複数のグスタフたち。

昂輝、軒太郎、憑き姫の三人は、中心にメニヤースを置いて円陣を築いて防御に撤する。

グスタフたちは、いつでも、どこからでも飛びかかれる体制で侵入者の隙を窺っていた。

「私がやるわ」

凜とした態度で憑き姫が呟いた。

そして、片手にある赤い魔導書を開いてカードホルダーから一枚のカードを取り出す。
引き剥かれたカードからは怪しげな緑色のオーラが陽炎の如く揺らめき立っていた。

それが普通のカードでないと悟ったグスタフたちは、何を仕掛けてくるのかと少女に警戒心を集中させる。

「大足 ザ・スタンピート」

憑き姫は、魔法の呪文と共にカードを宙に投げた。

カードは宙で回転しながら黒煙は浮き出し、その黒煙は天井へと昇って行く。

あっという間に黒煙は天井を覆いつくし、煌びやかなシャンデリアまでも包み込んだ。

まるで魔界の空の如く禍々しい黒雲である。

「この雲は、なんデス！」

驚くグスタフたちも、漆黒に包まれた天井を見上げていた。

「ニヤニヤニヤニヤー……」

『何が起きるのですか!?!』

「大足を使うか。まあ、黙って見ている」

猫娘と狼少年が、口をポカンと開けながら天井を見上げていた。

少女の幼顔が凜と引き締まる。

その直後であった。

突然、黒雲の中から巨大な人間の生足が踏み降ろされる。ドスンと地鳴りを轟かせてグスタフふたりを踏み潰した。

「グエツ！」

潰されたグスタフふたりが惨くも赤い花を鮮やかに散らしてペシヤンコになる。

『なんて大きな足……！』

逞しい男の足である。

脹脛が、鍛え抜かれたサッカー選手のようにガッチリしていた。

男であろうと思われるのは、その足の脛には荒々しい脛毛が生え並んでいたからである。
少しだけ毛深い。

「デカイ足ニヤー！？」

「な、なんデスカ!？」

巨大な足は、グスタフを踏み潰した後に、また黒雲の中に昇って消えて行く。

ざわめくグスタフたち。

踏み潰されたグスタフふたりは、一撃で絶命したらしく、霧と変わる。

そしてまた、別の場所から巨大な足が出現してストーンピングをグスタフの脳天に踏み落とした。

謁見室に轟く地団駄の衝撃。

ストーンピングをグスタフ目掛けて繰り出した大足は、獲物を踏み潰すと黒雲の中に戻って行き、また別の場所から表れ踵を落とす。

大足は、それを繰り返して次々とグスタフたちを煎餅のように潰して回る。

謁見室の乱戦 (四)

イベタムを黒コート内に戻した軒太郎が憑き姫の小さな肩を叩いて声を掛ける。

「ごくろうだつたな、憑き姫」

その言葉に憑き姫が軒太郎の顔を見上げた。

「あとは俺が片付ける。お前は引っ込んでいていいぞ」

そう述べながらコート内からショットガンを引き抜いた軒太郎は、銃口をグスタフたちに向けて構えた。

ひとり前に歩み出る。

「さあ、爺さん、ここからは男同士で正々堂々と一騎打ちと洒落込まないか？」

「……面白いデス。お受けしましょうデス」「……」

五人のグスタフが同じ台詞を同時に返した。

そして横一列に並び構えを取る。

五人は体を横に並べ、左手を腰に添え、右手でククリを突き出した。フェンシングの構えに似ている。

グスタフの返答に機嫌を良くしたのか、軒太郎が顎を引きながら怪しく微笑む。

笑っているが瞳には強い殺意が青く光っていた。

「軒太郎」

後ろから憑き姫が声を掛けて来た。上半身と首だけを捻り振り返る。

「なんだ、憑き姫？」

「気をつけてね」

珍しく憑き姫が軒太郎の心配をしているのかと昂輝は思った。

軒太郎が前を向き直した。

「畜生が……。とんでもないことになったな……」

愚痴のような言葉を吐く軒太郎の表情は、先程までと打って変わって機嫌が悪くなっていた。若干の緊張も見られる。

狼の顔でキョトンとしていた昂輝も視線をグスタフたちに戻した。

『あれ？』

グスタフたちの方を見てある事に気付いた。

『一、二、三、四、五……六、七……？』

ふたり増えている。

否。

『執事さんが増えてるんじゃないやなくて、変なのがが増えてる……』
昂輝の言う通りだった。

グスタフ五人の両脇に、変な格好の者が増えていた。
それは、虎と狼の毛皮を頭から被った小柄なふたり。

グスタフたちも気付く。

「お、お前たちが、何故デス……？」

頭部が付いた虎の敷き革を頭から被った小柄な人物。

もうひとり狼の敷き革を同じように頭から被っている。

虎の毛皮の下は、薄汚れてポロポロなチャイナドレス。

狼の毛皮の下は、同じく汚れてポロポロになった人民服である。

顔は見えないが、姿勢はふたりとも老人のようだ。猫背である。

衣類の隙間から見える腕や首筋は皺だらけで枯れ木のように細い。

虎が老婆で、狼が老漢である。

ふたりとも怪人に見えた。

タイガーとウルフ。登場。

突如登場したふたりの怪人が、グスタフに話しかけた。

「百人將軍殿、随分と梃子摺っているようじゃのお」

「なんだったら、ワシらが手伝ってやるうかえ？」

「タイガー殿、ウルフ殿……。ここはけっこうデス」

五人のグスタフたちが緊張にうるたえていた。拳動が不審となる。

「そう言うな、百人將軍よ」

その言葉を最後に周囲の時間が一瞬止まった。

空気が凍てつきながら時計の針を逆回転させて行くように周辺の空間が歪んで見えた。

ふたりの存在が錯覚を生み出しているのだろう。

刹那。

ガンツと岩が砕かれるような音が二つ鳴る。

「鉄山靠！」

蟹股で中腰のタイガーとウルフが踏み込みの一步で床を踏み抜く。

大理石が抉れて飛び散った。

その震脚でふたりの矮躯が背中からグスタフに打ち当たる。

背中を使った体当たりのような当て身であった。

数ある中国拳法の中でも超接近戦の間合いでは最強と言われている

八極拳。

その大技、鉄山靠が炸裂した。

「フグッ！」「」「」

左右から繰り出された八極拳の重撃が五人のグスタフたちを挟み込む。

五人がサンドイッチにされて押し潰された。

逃げ場のない二つの衝撃がグスタフの体内で激突して全身の骨に軋みを与える。

五人が白目を向いた。

内臓が圧縮されて血液が毛穴から噴出しそうだった。

「ひっひっひっい」

その場に重なるように崩れ落ちる五人のグスタフを見てタイガーとウルフのふたりが非礼な笑い声を上げていた。

衝撃的な技の凄さに啞然とする昂輝とメニヤース。

倒れたグスタフ四人が霧となって消えると真ん中のひとりに纏まって行く。

だが、最後に残ったグスタフも、虫の息だ。動けそうにない。うつ伏せに倒れたまま口から血の混ざった涎を溢していた。

「おのれ、妖怪変化が……。裏切るかデス」

『あ、あれが、この城最強のふたり。タイガーとウルフ……。仲間をやっつけちゃいましたよ……』

「にゃんにゃんだー、こいつらわ……」

呆然とする昂輝だったが、憑き姫と軒太郎のふたりは、緊張を緩めない眼光を双眸から放っていた。

「このふたり、かなり出切るな……」

軒太郎の呟きには、いつもの不敵なまでの自信が感じられなかった。

「妖怪かと思っただけど、人間だわ。人間の霊体よ……」

軒太郎と憑き姫から、完全に余裕の色が失われていた。

その様子に昂輝も気付く。

怪物の登場なのだと悟る。

中庭の激戦 (六)

戦いのシーンは、再び中庭に戻る。

聳えるように立つのは賢者が誇る究極の巨人兵、黄金のゴーレム。

対するは、不甲斐無い一番弟子と選手交代した武の巨人。武天老師こと功風時司。

その肌は地蔵の如く粗い石。生きた石像である。

黄金の巨漢と岩肌の矮躯な老人。

向かい合う生ける鉱石のふたりが睨み合う。

功風老が石に変化した顎をゴリゴリと撫でた。

「老いぼれは、老いぼれ同士で、大人しく茶でも飲んでるのがお似合いなんだが、どうもいけねえ。」

歳を取れば取るほど焦りが生まれちまう。のんびりできねえ〜んだわ。

老い先が短いと知れば知るほど、もっと技を磨きたく焦ってしまっのじゃ。

もつともつと強くなりてえ〜のに、時間が足りねえ〜。

解るだろ、あんたなら」

「貪欲ですな」

「ちげえ〜ねえ〜」

上目遣いで厭らしく笑う功風老。

「では、時間が勿体無いのは同感の様子。早速勝負を決しましょうか」

「だな、あなたには時間がワシ以上に無いようだしのお」

「悟られましたか……」

その一言に、ゴーレムの神々しい黄金の巨体が、一瞬小さく感じられた。

「さっき見たお前さんの顔に、濃い死相が浮かんでたわい。病だろう。それもかなりの死病だな」

「フードで隠していた積りですが、見事な眼力です。医者もビックリなほどの診断だ」

「格闘技家を、ただの暴力主義者だとも勘違いしてるんじゃないかねえか。」

「武術つてのは、人体の破壊術。だが、人体の構造を極めていなければ効率の良い破壊もこなせない。」

ゆえに、人体構造も知識として極める。

その辺の藪医者よりは、人の体については詳しくなる。

全身を見れば、何処の骨格がいかれているか。顔を見れば、どの内臓がいかれているかも解ってくる。歩き方を見れば、どのぐらいの寿命かも予想が付いてくる。

それが武術だ。」

「陰と陽ですか、武術と医学が……」

「まあ、おしゃべりはこのぐらいで、行くぞ、若造！」
身構える功凧老。

黄金の拳を振り上げるゴーレム。

「私を捕まえて若造とは、貴公は幾つだ！」

ゴールドゴーレムのストレートパンチ。長身を生かした撃ち降ろしの拳に巨漢の体重が加わる。

しかし、その剛拳を横に逸れて容易く躲す功凧老が、回避にあわせて腰を落とした構えを築く。
空手の構えだ。

「今年で丁度、百八歳になるわい」

ジョークではない、実年齢である。

しかし、百八という数字が、きりの良い数かは不明である。

そして、百八歳の達人が放つ正拳突き。

躲したゴーレムの黄金拳に対して横から石拳を打ち込む。

響く打撃音。

腕に伝わる衝撃。

拳を振り下ろしたゴールドゴーレムが大きくバランスを崩す。

「ほおう、腕を砕けなかったか」

直ぐに体制を取り戻したゴーレムが、今度は左のローキックを繰り出した。

爪先が地面スレスレの高さで飛んで来る。

「武道家の真似事が、いい加減にせい！」

蟹股で腰を落とした功風老が、右肘を曲げて突き出す。その肘でゴーレムの蹴りを串刺すように受け止めた。

巨漢の蹴りを肘一つで受け止めた矮躯の老人。

だが、揺るがない。

トンを越える一撃を身一つで防いだが、微動だにもしなかった。

蹴り足を戻すゴーレム。

「ずぶの素人が、武術の真似事を使うのが気に食わないですか？」

「如何にも癢に触る。見苦しさが鼻に付く」

功風老は、太い眉に力を入れて、当然だと言わんばかりに述べた。

「心狭い。もっと磊落な方かと思いましたが」

「場合にもよるわい。貴様とて同じだろう。低俗で頭の緩そうな輩が、一端の専門家気取りで頭の良さそうな発言を鼻高々に講釈していれば、癢に触るだろう」

「それは、ありますな」

「理解してくれるか、流石は大人じゃわい」

「ではひとつ、達人殿の抗議を聞かせてもらいたい」

「なんじゃ？」

「何故に、その矮躯でありながら、我が巨漢ゴーレムの攻撃を受け止められるのですか。武術とは、何故にそこまで出切るのですか？」

「姿勢だ」

「姿勢……ですか？」

「関節の固定と筋肉の硬直から正しい姿勢を作り出すことによって大地と一体化を志す。さすれば防御側の体重を遥かに上回る打撃ですら体で受け止められるようになる。まさに防御の極みだ。更にワシの場合は、この岩肌に変身することで肉体の強度の他に、体重も倍増されているからのお。その姿勢は山と同級。デイダラボツチのキックですら揺るがない富士山と同じよ」

「なるほど、富士山ですか。どおりでゴーレムの攻撃でもビクともしない訳ですか」

「解つたら、その武道の真似事をやめて、もつとお前さんらしい攻撃に変えて仕掛けてきやがれ。隠しているんだろ、必殺技を」

「気付いていましたか、流石は百戦錬磨の達人。侮れませんな」

「お世辞はもう厭きた。とつと掛かってこんかい」

「せつかちな」

「我がまま御免！」

顔の前で、両拳を交差させた功風老が十字を切る。

中庭の激戦 (七)

ゴールドゴーレムが、指先を伸ばして両腕を前に突き出す。十指すべてが功風老を狙っている。

「ならば攻撃方法を変更しましょう。打撃を主とした攻撃では、貴方のような究極の達人には及ばない。重々理解しましたよ。ここからは、ゴールドゴーレムのメイン兵器を披露いたす」

「そうこなくつちゃのお」

「喰らえ、フィンガーマサイル！」

ゴーレムの十指が同時に発射された。

横に走って回避した功風老の居た場所に、バズーカ砲でも集中砲火したような爆炎が上がる。

爆風が地面を乱雑に抉ってクレーターを掘り散らす。

避けた功風老を追って、今度はゴーレムの瞳が黄色く光る。

「今度はこれです。洗視力ビーム！」

いきなりゴーレムの双眸から発射されたレーザービームが功風老を襲う。

しかし、光の攻撃を屈んで躲した武術の達人が前に飛んだ。並び飛ぶ回光線を掻い潜りゴーレムの胸板目掛けてジャンピングストリートを叩き込もうと飛び進む。

「洒落てやがるぜ、ビームと来たか」

嬉しそうな表情でジャンピングパンチを仕掛ける功尻老の狙う先が、突如形を変える。

黄金の胸板がパカリと開いて中から上下に並んだ二つのローラーが表れたのだ。

生皮などを挟んで平たく伸ばすローラーである。

「うそん！ ローラー！？ 挟まれちゃう！！」

ローラーに挟まれればスルメの如く薄っぺらになめさせられるだろう。

「地獄ローラーです。その短い腕を巻き込んで、薄っぺらに引き伸ばしてさしあげますよ！！」

「なんの！！」

直前、空中で体を回転させた功尻老が、両脚をローラーに向けて飛んで行く。

そして両脚のキックでローラーの上下段を同時に蹴って跳ね返る。履いた下駄が音を鳴らして危機を回避した。

難を逃れた功尻老が地上に着地する。

「予想外だ、いいぞ、それだ、そんな感じが面白い！」

「喜んでもらえましたか、達人殿」

拳を握った右腕を突き出すゴールドゴーレム。拳先が功凧老を狙っていた。

「行け！ ゴールドロケットナックル！！」

ゴーレムの右腕が、肘の辺りから分離してロケットのように発射された。

轟音と共に襲い来る必勝の拳をバックステップで躲す功凧老。避けられたロケットナックルは地面に減り込みながら突き刺さる。

「腕は二本ありますよ。もう一発は躲せますかな！？」

発射される左のロケットナックル。

しかし功凧老は、右に発して難無く必殺の飛拳を回避する。

「まだまだ。ゴールドウィング！」

ゴールドゴーレムの背中から、ジェットエンジンのような物が付いた悪魔の翼が生え出ると、エンジン音を轟かせながら巨漢が飛び上がる。

「今度は躲せますかな。ロケットキック発射！」

空中に飛び上がったゴーレムが、右足を膝の辺りから切り離して発射させた。

上空から迫る飛び蹴りを前に飛んで躲す功凧老。それを狙ってゴーレムは、左の足を同じ様に発射させる。だが、やはりロケットキックは避けられた。

「おいおい、手足が無くなって、それじゃあ達磨だな」

敵を見上げる功風老が、嘲笑うように言った。確かにゴールドゴーレムは、四肢を失い甲羅に閉じこもった亀のようになっている。

「この私の状況を見て、その程度しか思いつきませんか。やはりあなた方は、想像力が貧相だ」

「また、その話かよ」

観戦していた赤股が、お砂の傍らで呟いた。

お砂は、赤股の悪態を空耳のように聞き流してニコニコと微笑んでいる。

「今度の攻撃は、確実に躲けませんよ」

空中を飛ぶゴールドゴーレム内から聞こえて来る賢者の声は、表情こそ窺えないが、悪巧みに笑っているよう感じられた。

ゴーレムの腹が観音開きに開いた。中からヘリコプターの羽が付いた金の球体がひとつ飛び出て来る。

その球体は、パタパタと羽音を鳴らしながらゆっくりと功風老の頭上で停止した。

「なんだい、こりゃあ?」

見上げる功風老に、賢者が答える。

「ゴールドリーダーです。この攻撃、もう回避不可能です」

賢者が述べるや否や、羽を回転させていた球体が、電撃を四方に放った。空中を走った電撃は、功凧老を襲って狙いを外した筈の黄金の手足に向う。

ゴレムの手足は、功凧老を囲むように四方に突き刺さっていた。それに走った稲妻が電撃の鳥籠を作り出していた。

「しまった、畏か！」

「その通りです。先程までの攻撃は、下作り。これが真の狙いです」電撃に囲まれながら、キョロキョロと辺りを見回す功凧老だが、逃げ出す隙間はないようだ。高圧電流の牢獄である。

「御老体、電子レンジの原理をご存知かな？」

「まさか……」

「筋骨を硬直させて、極みの姿勢を築こうとも、この科学の攻撃は、武術で凌げませんよ」

「まじいくな、こりゃあ……」

「死ねい！ ファイナルエクスキューションナーオープン！！」

囚われの功凧老を、全方面から電撃が襲う。

「うぎいあああああああ、あ、あ、あ……！！」

「困った御老体だ。素直に死んではくれないか。ならば」
厭きれ返った賢者が、次なる攻撃の準備に取り掛かる。
四肢をなくしても宙に浮遊して居るゴールドゴーレム。その無くしたパーツ部分に破壊された筈のノーマルゴーレムの残骸から手足が飛んで行き合体する。
無くなった四肢が岩の手足で補われた。

「黄金のパーツに比べて強度などが劣りますが、まあ致し方ないでしょう」

言いながら地面に着地するゴーレムは、ノシノシと歩みながら功叡老が閉じ込められながら苦しむ電撃の檻に近づいて行く。
そして電撃を浴びながらも檻の中に入って行った。
ゴーレムには電撃が効いていない様子だ。

「このゴーレムは耐電装備が完璧だね。原理は簡単だ。表面加工から大地へとアースを取ってある。生物でないのね、電熱で溶解しない限りダメージは来ないのだよ。もちろんゴーレム内の私にも完璧な防御が施されていますからね」

「ば、万全じゃあねえか……」

「さて、どうやって止めを刺してあげましょうか。殴りがいいか、踏み潰すがいいか、はたまた締め殺すも悪くない。もっと残酷に引き千切って差し上げましょうか？」

ふざけた台詞を並べながら近づいて来るゴーレムを、苦痛の表情で睨みつけるのがやっとな功叡老は、電撃に硬直する全身の筋肉を震

わせながら、気合で空手の構えである前屈立ちを築く。

この危機たる状況下でありながらも、全身全霊を集中させて、巨大な敵を迎え撃つ積りらしい。

豪傑の意気込みが双眸で燃えている。

その炎の温度は、浴びせられている電撃よりも熱い。

「まだ、構えを作れますか。流石は武術の達人だ。最後まで武を崩すことはないのですね」

「あたぼうよ……」

「武人は武人らしく死ぬ積りですね。けっこうです。その願い、叶えて差し上げましょう」

黄金のゴーレムが、高々と岩の拳を振り上げる。

「一撃で始末を付けます。まだ、貴方のお弟子さんも残っていますのでね。あっさりと終わりにしますよ」

観戦していた赤股が述べる。

「こりゃあ、まずいな……」

「そうですの?」

お砂が細い首を横に傾げた。

「ああ、電撃は、やっぱりマズイ」

「そうですね?」

ただ質問を繰り返したお砂の表情は、いつもと変わらずに優しく微笑んでいた。

まるで功風老の危機を理解していない様子である。

赤股が説明を始める。

「電撃つてやつは、筋肉を硬直させる。もともと筋肉てやつは、電気信号で動いているとも言われているからな。だから少量の電気が流れ込んできても勝手に筋肉は収縮運動を行なってしまふ。

心臓が止まったとき、電気ショックで蘇生を試みるように、死んだ肉体でも電気を流せば収縮運動を起こす。

切り落したゴリラの腕に電気を流せば、野生のパワーのままに手が握り締められる。その握力で人間の手ぐらいなら簡単に潰されてしまふほどにだ」

お砂が、「まあ」と声を出しながら驚いて開いた口元を手で隠す。それから赤股に質問をした。

「それと今の状況が、どう関係しますの?」

当然の疑問であった。

赤股が答える。

「武道つてやつは、当て身をヒットさせる瞬間だけ力みが存在すればいいんだ。拳が放つ瞬間は脱力のままに、ふあくと、繰り出し、当たった瞬間だけ全身を硬直させる。

そのタイミングだけで絶大な破壊力を生み出せる。

達人になればなるほど、それは極まる。
だが、その逆はあまり良くない。

攻撃を出す前から全身を力ませていれば、ぎこちない物になる。それは、まさに素人の攻撃だ。

この理屈は防御にも通ずるところがある」

赤股は、苦々しい顔で説明を終える。

「では、電撃を耐え凌げている功風先生でも、今は素人同然の動きしか出来ないか？」

「その通りです……」

そのことに賢者も気付いているのだろうと赤股は思った。だからこそ、ああもゆうゆうと接近して行ったのだろう。

「しかたない、助太刀に入るか」

そう言いながら赤股が前に出ようとした瞬間、お砂が静止を促す。

「まあ、赤股さん。そんなに急がなくても大丈夫よ」

横に立つお砂の笑顔を見る赤股。お砂は涼しげな表情で微笑んでいた。

「大丈夫ですよ」

大丈夫だと繰り返すお砂。その言葉に動きを止める赤股。

「ほ、本当ですか？」

「赤股君、私が今まで冗談でも嘘を付いたことがありますか？」

無い。

無いのである。

お砂は、誰を相手にしても嘘を付かない。

「そうですか、まだ大丈夫なのですね……」

お砂が言うのだ、確かだろうと思う赤股は、視線を戦う二人に戻した。

お砂は無条件で信用できる。

何故ならば、この魑魅魍魎百鬼夜行が渦巻く非常識な業界に赤股が踏み込んで以来、数々の強者化け物を見てきたが、その中でもトツブクラスの實力と信頼を持ち合わせているのがお砂である。

彼女は、探偵事務所でも一番信用できる存在だ。所長の眼一郎よりも信頼が高い。そして、赤股より強い。

その彼女が、助太刀無用と述べているのだ。それ即ち、功風老が勝利すると予言しているのと同じである。確定な未来予知である。

「これで決着です！」

振り上げたゴーレムの拳を打ち落とす賢者。電撃に身動きが鈍って

いる功風老の脳天を狙う。

「ぬうおおおお！」

呻る功風老は、岩石の一撃から身を守ろうと両腕を頭の上で交差させた。

そこに攻撃が落ちる。

岩の拳と岩の腕が激突し合う。

ガンつと鈍い音が放電音を切り裂いて赤股とお砂の耳にまで届く。

「ほらね。功風先生ならまだまだ頑張れる」

お砂がニコリと笑いながら言った。

なんとも暖かい笑顔である。

しかし、ゴーレムの重拳を両腕で受け止めた功風老の姿勢が僅かに沈む。

功風老が足が履いていた下駄ごと地面に減り込んでいた。足首までが埋もれている。

「まだ防御が出来ますか」

やっとであることは賢者にも悟れる。

回避は出来ないが防御ならできる程度だと見て取れた。

ならばと。

「では、これなら！」

賢者の台詞に合わせて片足を後方に振り上げるゴーレムは、勢いを溜めた蹴りを繰り出そうとしていた。

中庭の激戦（九）

サッカーボールを蹴るような全力のキックが爪先から飛んで行く。頭を覆っていた功風老の両手が眼前に移動すると、二本の腕が縦に並んで盾となった。

防御が間に合う。

そこに地面を擦りそうになり土埃を舞い上げたゴーレムの蹴りが激突した。

ガツリと鈍い音が響き弾ける。

しかし、びくとも動かない功風老。

まるで岩。

まさに岩。

やはり岩である。

岩の肌を持つ矮躯の老人は、海中に本体を隠した冰山の一角を思い浮かばせるほどヘビー級に感じられた。

「なんとも頑丈な。ならばもう一発だ！」

再び後方へと蹴り足を振り上げたゴーレムが、二発目のサッカーボールキックを狙う。

「幾度まで、耐えられるかな!？」

電撃に動きを束縛されている功風老を目掛けて容赦無く続くゴーレムのキック。弩級の二発目が迫る。

だが、今度は功風老も動きを見せた。

両腕を並べた上半身の防御は変わらないが、蟹股で踏ん張っていた下半身の姿勢を変える。

右足一本を後方に動かし退脚の支えを築いた。

そして、ゴーレムの爪先が功風老の両腕に激突する瞬間、功風老は姿勢を半歩前に押し込むように踏み込んだ。

「ふおおおおおおおー！ー！」

激突の刹那、矮躯の功風老は岩の如くそのままに、巨漢のゴーレムが後方へと吹き飛んでいた。

驚愕を吼えたのは賢者であった。

その驚きの音声と共に跳ばされたゴーレムが背中から地面に倒れる。

赤股も、ポカンとした表情で言葉を漏らす。

「合気かよ……。この土壇場で、邪魔くさい電撃で筋肉を硬直させていながらも、あそこまで見事な合気技を見せるとは……。流星は武天老師だぜえ」

「合気とは、合気道の技ですか？」

「ええ、そうですよ、お砂姉さん。合気道です」

再び赤股の解説が始まった。

「合気道。格闘技の中でも神秘に近い不思議な技が多い武術ですが、その使い手曰く、合気道の技は物理的法則そのものらしい。人間の運動力や地球が備えている重力を、力の流れとして読み取り武に組み込む。それにより使い手が持つ筋力を上回る力を実現する。今の蹴りだって、打ったゴーレムの方が吹っ飛んだでしょう。あれは、合気道の技が、キックの勢いを流れに変えて相手に戻したのですよ。ゴーレムは、自分自身に蹴りを打ち込んだことになる」

「言っている意味が解らないですわ」

お砂が年甲斐も無く可愛らしい仕草で小首を傾げたながら人差し指を顎先に添える。

「やはり武道の経験が無い人には、合気道の説明が困難ですわあ。どう説明していいのやら……」

説明方法に悩む赤股だが、お砂の方も、あまり興味が無い様子だ。視線を電撃の鳥籠へと戻す。

「合気道のご説明は、またの機会でかまいませんわ。今は功凧先生の戦いを観戦しましょう」

「そうですね……」

赤股の声色は、奥歯に何か引つかかった感じであったが、不満気なままに視線を戦う両者に向ける。

ゆっくりと起き上がるゴーレムの体内から賢者が語る。

「合気道ですか、初めて体験します。無論、私の場合は、暴力のやり取りすら初めてですがね。まさか、このような野蛮な行為を私が行なう日が来るとは、つい最近までは想像もしていませんでした。人生何があるか分かりませんか」

起き上がったゴーレムが、両拳を顔の前に並べてステップを刻む。跳ねる巨漢。

賢者の声色に凄みが混ざる。

「ですが、合気道の技はいただけません。聞けば相手の攻撃力を利用して技へと使用するとか。

電撃のせいで、自分から攻撃に転じられない故、相手の攻撃を利用するとはけしからんですな。

しかし、武道の素人である私とて、存じています。合気道の技が高等技術であることを。この状況下で使用は更なる苦難の筈。いつまで凌ぎ続けられますか、な！」

ジャンプ。

そして、高々に跳躍したゴーレムが、片足を突き出した綺麗な飛び蹴りで振って来る。

退脚を踏んだままの功風老は、先程と同じように両腕で受け止める。そしてゴーレムの巨体を弾き飛ばした。

二度目の合気。

巨漢のパワーに追加される高さからの降下体重。それは、素人の飛び蹴りを超破壊力の砲撃弾丸に代えていたが、武神の如き達人の合気技に弾き返さる。

鮮やかな弧を描き飛んで行く巨漢。ダウンするのは賢者のゴーレム。しかし、ブレイクダンスのように回転しながらゴーレムは俊敏に起き上がった。

そして、めげる事無く攻撃を続ける。

「不思議で不愉快だ。だが、これならば！」

弾丸の如きダッシュで間合いを詰め直すゴーレムが、スピードを重視させた左ジャブを繰り出した。

しかし、フェイク。

瞬速のシャブは功凧老の顔面を狙うが、直前で引き戻される。そこから左フックに変化した。

功凧老の右からゴーレムの左フックが迫る。

だが、微動だにも反応を見せない功凧老。顔の直ぐ横までゴーレムの拳が迫るが反応を見せない。

電撃を浴びながら真つ直ぐ前を睨んでいた。

そして、フックがヒットするやと思えた瞬間、その拳は引き戻される。

拳は着弾しない。

否。させなかったのだ。

再びフェイントである。

拳を引いたゴーレムが、体を回転させる。背を見せるスピンの振り向きざまに勢いを増した裏拳が風を切り、鋭いカーブを描き飛んで来る。

バックスピナツクルである。

「やっと、本物が来たか」

呟く音量で囁いた功風老が、飛んで来る裏拳に対してガードを解いて両手を伸ばす。

キャッチ。

功風老がゴーレムの裏拳を両手で捕まえると同時に手首を大きなバンプでも捻るようにねじった。

「なあ!？」

短期間に体感する三度目の神秘に賢者が声を荒げる。

功風老の合気技。

裏拳を捻り上げられたゴーレムが、背中から地面に倒れこむと、更に後転を繰り返して転がっていた。

転がるゴーレムが、突然垂直に飛び上がる。背中に付いた蝙蝠の羽を広げながらジェットエンジンを呻らす。

賢者が宙に退避した。

「電撃に拘束されていないながらも、そこまで出来ますか!？」

言いながらも空中に止まる賢者がゴーレムの両腕を前に伸ばした。

「やはり飛び道具が決着の鍵。私には幾つもの武器がある！」

伸ばした双拳が肘の辺りから回転を始めて目標を狙う。

「スクリューロケットナックルです。先程は金の腕で強度も高かったが、今度は石の腕。強度が下がる。即ち威力も下がる。

しかし、下がった攻撃力を回転でカバー。しかも、今回は両手による二発同時発射です」

律儀に攻撃方法を語る賢者だったが、一度言葉を止めて一呼吸間を置く。

そして、一層力強く台詞を繋げた。

「更にです！」

ゴールドゴーレムの両目が黄色く光る。

殺気や気迫で光った訳でない。

「更に、両眼からのビーム攻撃を加えます。

この三発同時攻撃ならば、合気道の神技でも凌げまい！？」

両腕のロケットナックル二発に加えて、両目からの洗視力ビームを放つ積りらしい。

「面白い」

洪声で呟く功凧老が、袴の裾を手で払うと地面に正座した。

背筋をピンと伸ばして両手を腿の上に置く。視線は真剣な眼差しで

何を見る訳でもなく真っ直ぐ前を向いていた。

「観念でもしましたか？」

「いいや、あれは大東流……」

賢者の言葉を否定したのは赤股であった。

中庭の激戦 (十)

大東流合気柔術。

塩田剛三が看板を掲げた道養神館合気道と並んで有名な合気道の流派。

大東流の武田惣角といえ、会津の天狗と呼ばれ、剣術と柔術に関しては達人と呼ばれた人物である。

現代の達人と呼ばれた塩田剛三と並び、武田惣角もまた、多くの他流試合リートフایتを行い、幾つもの信じがたい逸話を残した武人であった。名実共に、疑いようのない達人のひとりである。

その武田惣角が広めた大東流合気柔道。現在では日本だけでなく、海外にも幾つもの道場を構えるほどの大きな流派へと成長している。

そして、大東流合気柔術には流派としての特徴的な技法がある。それが正座をした状態からの組み手である。

正座した状態で向かい合い、そこから技を競い合う。打撃は勿論、掴みも狙う。

上級者は、その攻防を全て合気の技で切り返す。

手刀を落とされても正座のまま受け流し、正座したまま関節を決め、正座をしたまま投げ飛ばし、正座をしたまま動きを封じ、正座をしたまま相手をひれ伏す。

如何なる攻撃であろうと、正座のまま対処してしまうのである。

この大東流が誇る正座状態での技法に関しては、生前の塩田剛三も一目置くところがあると語っていた。それだけ完成度が高い。

大東流の正座とは、一つの構えと同じなのである。

その構えと進化した大東流の正座技。それと同じことを、電流の牢獄に囚われている不自由な達人が、上空からと飛び道具で攻撃しようとしている黄金の岩巨人相手に行なおうとしていた。

「飛んで来る双拳に対しては解る。だが、ビームは無理だろう。合気の技で、熱光線は捌けないだろうぜ、普通……」

赤股の言う通りだ。合気道では光を捌けない。

しかし、正座を決め込んだ達人、功風時司は、その至難を行なって見せようと神経を集中させているようであった。

「飛来してくる二つの拳を受け流し、光の攻撃を捌くというのは不可能です」
か。笑止。不可能です」

合気道の技が、素人では理解しきれない秘技であろうとも、光学兵器の類を対処できる筈もない。

そのぐらいは常識的に理解できる。
武術が、格闘技が、そのような科学的な攻撃を想定して培われて来た代物でないことは確かだ。

しかし、相手は達人級の怪物。

侮りは禁物。

ここまでの攻防を見るからに、可能性が零という訳ではないのだ。何を仕出かすか未知数。

賢者は攻撃の狙いを定めながら、更なる慎重に注意を配る。

万が一は、あつてはならない。

失敗は、敗北は、許されない。

何があつても勝利して、悪夢城を侵略しなくてはならない。

ここで、躓けないのだ。

「念には念を入れますか」

攻撃プランの変更と追加。

ダブルスクリューロケットナックルに洗視力ビームの同時発射を加え、更に左右のロケットキックも発射させる。

そして手足の発射後は、本体も急降下させて頭から突撃。後に、首だけを分離させて胴体に仕込んだ自爆装置を起動。

ゴルドゴーレムは失われるが、ここで全力を出し尽くす。

まだ、蛇男と純白の女が残っているが、この石の老体を今のうちに撃破しなくては、もう二度とチャンスは巡って来ないだろう。

胴体の自爆後は頭部だけで飛行して、逃げるように悪夢城内に退避。城内に突入した仲間たちと合流。

これで一先ず身の安全は確保できるだろう。

プラン確定。

「いざ、決着を付けましょう。御老体！」

「ちんたらしてねえ〜で、とつとつ仕掛けてこい。若造が！」

正座のまま姿勢を正す功凧老は、上空のゴーレムに視線すら向けずに俯いたままドスの効いた言葉を返す。視線は、地面に揺らめく小さな炎を睨んでいた。

「傲慢。その勇ましい根性ごと打ち砕いてしんぜよう。発射！」

発射音を轟かせて撃ち放たれる四つの砲弾。回転する二つの拳と同時に、踵で狙う二つの足が飛んで行く。

その攻撃に加えて両目が眩く輝きビームを撃った。

正座の功凧老に迫る計五つの攻撃。

だが、次なる刹那、五蓮の攻撃を繰り出した賢者だけであらず、観戦していた赤股も驚きの出来ことが起きる。

「甘い！」

電撃を浴びながらも正座の姿勢でゴーレムの総攻撃を待ち受けていた功凧老が、正座の姿勢を僅かにも崩さず無音のまま真上へと飛び上がった。

その光景は、まるでオナラで跳ね上がったようにも見えた。

「躲すだど！？」

驚く賢者。

ゴーレムが繰り出した五つの攻撃は、直前まで功凧老が正座をして

いたポイントを激しく決る。

「あれは、波紋の呼吸法が作り出す特殊な跳躍術！」

述べたのは赤股だ。

その赤股にお砂が、波紋の呼吸法とは何かと問う。

「古来から続くと言われる特殊な健康術。チベットの人里離れた山奥で、一部の人々が脈々と教え伝えているといわれる特殊な呼吸法です。」

呼吸のテンポをコントロールして、体内の生命力を向上させる。毒素を浄化して、魔すら払うと云われています。

その特殊な呼吸法をマスターすると、老化を遅らせ寿命すら伸ばすとか……」

「あらまあ」

のほほんと感心するお砂に赤股が話を続ける。

「更に、波紋の呼吸法は、戦闘技術に取り込むことが可能で、その効果で幾つもの不思議な体術を使いこなせるようになるらしい」

「例えばあ？」

「波紋は電流にも似ているらしく、スタンガンのようににも使用できたり、功胤老が今見せたように座ったままの跳躍や、水面を沈むことなく走ったりもできるとか……。あと、ゾンビやヴァンパイアにも有効と聞きます……」

「まあまあ、とても素敵ですわね」

どの辺を素敵だとお砂が述べているのかは不明であるが、波紋の呼吸法を利用して跳躍を見せた功風老は、垂直に高々と撃ちあがり、電撃の檻を作り出していた小型ヘリコプターの上へでる。功風老が、電撃の束縛を脱出した。

「馬鹿な。しかし、プランの変更は無い！」

ゴーレムの背中に装着してあるジェットエンジンを唸らせる賢者は、自分の高さで代わらない位置にまで到達した功風老目掛けて頭からつつこんで行く。予定のままに、ぶち当たる積りだ。そして、自爆攻撃を狙うのだから。

「来るか！」

正座を解き、四肢を広げて大きく構えを見せる功風老。

空中にありながらも大胆な柔道の構えで、突進してくるゴルドゴレムのフライングヘッドアタックを受け止めようと待ち構えていた。

「碎け散れえええええ。妖怪爺iiiiiiii！」

「ありがとうよ。ナイスな褒め言葉だ！」

二人が激突した。

しかし、正面からゴーレムの頭突きを受け止めた功風老が、直後に体を後方に捻った。

巨大な頭を両手で驚掴んでの払い腰だ。

ここで、柔道の投げ技が炸裂する。

「ぜえええええああああ！」

洪声を唸らせながら巨体を空中投げに振り回す功風老。二人の体が回転して急降下を始める。

ゴルドゴーレムが下。功風老が、頭部に乗るような形で上となっていた。

「馬鹿な、墜落して行く!？」

賢者は必死に体制を立て直そうとするが、上手く行かない。羽を広げ、背中のジェットエンジンを全開で噴射させても墜落状態から脱出できない。

中庭の激戦（ファイナル）

「おのれえい！」

頭部に功風老が組み付いている為、自爆攻撃も出来ない賢者が歯痒さを口に出す。

自爆用の爆弾は胴体に仕込まれており、本体である賢者自体は頭部と同化しているのである。

今ここで、首から切り離して分離しても意味がない。寧ろ無意味にボディーを失うのは、反撃の可能性を無くすことになってしまう。

賢者が迷っている間にも降下速度がグングンと速くなる。

それは、落ちて行く中で感じられる程にありありとした加速。明らかに異常である。

「なんだ、この墜落のスピードは！？」

ゴールドゴーレムの体重に、功風老の投げ技が生み出した速度が加わっただけでないだろう。

それだけで生じる速さではない。

「ワシはな、体を石化かせて強度を高めるだけでなく、体重も増やせるだぜえ。しかもトン単位でな」

「それでは、この加速の原因は！」

「そう、ワシの体重増加が原因だ。

いまのワシは、お前さんのゴーレムよりも体重が重い。倍以上にな

あ
」

猛スピードで降下する両者。

下になっているゴーレムの体に浮遊していたゴルドリーダーが衝突して粉碎する。これにより、電撃の檻が消滅した。

「ほれ、頭から叩きつけてやる」

ゴーレムの頭部にのしかかる状態でしがみ付いている功風老が、口元を小僧のように微笑ませ言った。

そして間も無くして地面に激突する。

轟く墜落音。

ゴルドゴーレムの頭部が地面に減り込むと、隕石が垂直に飛来したような大きなクレーターを作る。

そして生まれでる衝撃が、地震の如く地面を揺らして広がって行く
と、近くに転がっていたノーマルゴーレムの残骸やオークの亡骸を、
床下から蹴飛ばしたように跳ね上げた。

お砂と赤股も地中からの衝撃に、揃って体を浮かせる。

「おおう、こりゃあすげえ」

赤股が驚きの言葉を口にするが、その声すら衝撃音に押しつぶされて消えて行く。

その衝撃は地面を走りぬけ遠く離れている悪夢城すら震わせていた。

やがて振動が収まり激戦を繰り広げていた中庭に静けさが蘇る。

中庭の中央に出来た大きなクレーターの真ん中には、ゴールドゴレムが後頭部を地面に埋めながら横たわり、その顔面には、空からの払い腰を決めた功凧老が横たわるように覆い被さっていた。

「ぐううううう……」

消え去りそうな小声で唸る賢者。

黄金の体には、細かな輝が幾つも走っていた。

「勝負なりのようじゃな」

そう言いながら、ゴレムの顔面に横たわっている功凧老が、特殊な握り方で拳を築くと高々と振り上げた。

中指の第二関節を突起物のように突き出した不自然な握り。

一本拳と呼ばれる拳の作りかただ。

その一本拳を振り下ろす功凧老。

「せい！」

一本拳の中指第二関節が、ゴレムの眉間を突くように叩いた。

スピード、パワー、タイミング共に程々の勢い。力みの少ない流れある一打である。

しかし、その一撃でゴールドゴレムの罅割れた頭部が木っ端微塵に砕け散る。

まるで丹念に積み上げた積み木の塔を、下から爆破したかのように綺麗に崩れ落ちた。

素材が黄金である為に、なんとも美しい崩壊光景であった。キラキ

ラしていた。

功風老の言うとおりに、勝負ありだろう。

そして功風老は、崩れ落ちた黄金の山を見ながら再び構えを築くと腰を落とす。

攻撃の構えだ。

空手の前屈立ちからの正拳突きを狙った構え。

右手が脇腹の辺りまで引かれている。しかし、正拳を握っていない。手は開かれ掌が上を向いている。

貫手を狙っている。

だが、功風老の視線は朴訥なままに黄金の山を見据えていた。

「ふんっ！」

そして、一步前に踏み込み黄金の山目掛けて打ち込まれる達人の貫手が、ザクリと音を立てて黄金の山に突き刺さる。鋭い一撃で、功風老の右腕が肘の辺りまで埋もれた。

「うし、掴んだ」

その言葉の後に引き抜かれる功風老の右腕には、ボロボロと化した賢者の姿があった。

緑のローブはボロ雑巾のようにスタスタとなり、かつてはフードで隠れていた素顔も血みどろの形で露にしていた。

「うう……う……あ……」

怯える小動物の如く震える賢者は、功凧老に襟首を捕まれ力無く項垂れていた。自分の力で立っている素振りではなく、功凧老に釣り上げられているといった様子である。

もう、反撃の体力も気力も残っていない。

もう、声も出ない。

「終わりみたいですな」

声を掛けながらお砂と赤股が近寄ってくる。

ポロポロの賢者を釣り上げたまま功凧老が言う。

「お前さんには、色々と訊きたいことがある。勝負に負けたんだ、綺麗に答えてもらうぞえ」

「な……なんだと……」

虫の息で答える賢者の血みどろの顔を、近寄ってきたお砂が不思議そうな表情で覗き込んだ。

「あらあ、貴方は……」

何かに気付いたようだ。

「確か、双葉総合病院の院長さん」

「院長!？」

お砂の言葉に極道コンビのふたりも驚いた。

闇の壁（前）

悪夢城、城内。

そこは、広い廊下であった。

縦横二十メートル程あるだろうか、四方が石造りの壁である。

巨大な岩を斬り運んで来たのだろう。その岩を幾つも組み並べて廊下は続いていた。

床も壁も天井も、石作りである。

冷たい石たちが、空気までも冷ややかに染めていた。

そして、薄暗い。

壁に幾つもの蝋燭が火を揺らしていたが、廊下の広さに見合っていない。なかった。

まるで四角いトンネルのような廊下が、闇の奥まで続いている。

その闇を指して廊下の先へと目指す一行が居た。

ザックザックと足音に甲冑の鋼音が重なり合う。

一団を引き連れるは、堂々とした足取りで進む黒衣の男。

黒い長髪、黒いマント、黒い鎧、そして黒い鞘に収まる長剣。

悪夢城攻略の総指揮をとる公爵である。

彼の後方には、黒騎士の親衛隊が五十人ついて来ていた。

馬には乗っていない。城外で下馬して来た。

この巨大通路に辿り着くまでに、モンスター蠢くダンジョンを突破してきたのだが、襲い来る様々なモンスターは、すべて彼ら黒騎士たちが排除して来た。グスタフの分身数人とも遭遇したが、彼ら黒騎士軍団の敵ではなかった。

更に公爵の横には、茶色い躲鎧に身を守った弓兵が一人ついていた。狩人である。

狩人のレッドゴーレムは、バラバラに分裂した状態に手足を生やしてついでに歩いてきた。

見た目はへんてこりんな小人か、けつたいな妖精にも見える。だが、合体を遂げれば、ちゃんとしたゴーレムに成るのだ。

「なあ、公爵様よお」

狩人が、前を進む公爵に声を掛ける。しかし公爵は、何も反応を見せずに先を歩む。

無視されている様子だったが、狩人は気にも止めずに話しかけ続けた。

「いったいよ、この奥に何があるんだい？」

狩人の質問を無視する公爵。

流石に狩人も腹が立ったのか、横を向いて舌打ちを聴こえるように鳴らした。

狩人は思う。

やはり、この男とは馬が合わない。
賢者ともだ。

自分のボスである将軍が、このふたりと同盟を結んで行動を起こしているから、自分もこうしているが、本当だったら容赦無くどついているところだ。

気に食わない野郎である。

そもそも将軍が、何故に公爵や賢者をつるんでいるのかが分からない。

それどころか、何故にこの悪夢城に攻め込んでいるのかも分からない。

分からないが、何らかの利益がある筈だ。

狩人は、その理由すら聞かされていなかった。

勿論自分から訊いたこともある。

将軍や賢者にも質問したが、最終的な目的まで教えてくれなかった。

だが、将軍曰く、味方になり功績を上げれば自分にも十分な報酬が払われると言っていた。

それは、現金を上回る程に素晴らしい代物と聞かされていた。

それが、如何なるものかは教えてもらっていない。

しかし、報酬の内容には興味がある。

この夢の世界を体感したのならば、誰もが同じような考えを抱くだろう。

狩人は、そこに釣られたのだ。

一行が暫く歩いていると、大きな廊下の奥から闇が迫ってくる。否、近づいて来るのではなく、一行が闇に接近してきているのだ。

闇の壁だ。

広い廊下を行き止まりに変える闇の壁。

立ち止まった公爵が、眉間に皺を寄せながら闇に向って右手を伸ばした。

「糞……」

下品な言葉を呟きながら闇を撫でる公爵。その様子を見ていた狩人も、不思議そうな顔をしながら闇に近づき手を伸ばす。

「なんだ、この壁？」

闇には感触があった。

漆黒の壁である。

しかし、感触は存在するが、温度を感じ取れない。冷たくも暖かくも感じない。

不思議な感触である。無の感触と云えば良いだろうか。

「ベロニカ……。あの女の仕業だな」

「ベロニカがどうした？」

赤いローブの女を思い出しながら狩人は質問してみた。

すると今まで狩人を無視していた公爵が、急に雄弁と化する。

「我々が見て触れているこの悪夢城は、ベロニカの記憶から出来上

がつている」

「はあ？」

「我々が最初に待機していた古城は、私の心から作られた世界だが、この悪夢城は別の世界に存在している。

ベロニカの役目は私の古城から、この悪夢城に道を繋げること。その方法が特殊だな」

公爵の話に黙って聞いている狩人は、その間も片手で闇の壁を撫でていた。

「ベロニカの特殊な能力で、彼女の記憶から写生された悪夢城の記憶を私の心に書き写すことでふたつの世界を一時的に統一させている」

「へえ」

公爵の言っている意味が今一飲み込めていなかった狩人だが、とりあえずの反応を一言で返してみた。
その返事の後には公爵は話を続ける。

「ここに闇が存在して、道が途切れているってことは、あの女が私の心に写生したはずの記憶を移していないってことだ」

「ミスったて、ことか？」

「もしくは、裏切ったか」

何時ぞや美藤傀儡が云っていた。ベロニカを信用してはいけないと。

公爵は、その言葉を思い出していた。

闇の壁（後）

「でもよ〜、公爵さんよ〜」

ダラリとした狩人の口調。公爵は不快感を我慢しながらも狩人の言葉に耳を傾ける。

公爵は、この手の喋り方が嫌いである。生きることに対して不真面目に感じるのだ。

「ベロニカがあんたらに協力する条件ってやつが、娘の奪還なんだから?」

「奪還と述べるよりも、悪夢城内から連れ出すだな」

そうである。

確かにベロニカが公爵たちに加担した理由は、悪夢城内に止まる実の娘を連れ出すことだ。

公爵は、古城と悪夢城が重なり合い繋がれば、そのような約束は後回しだと考えていた。

悪夢城さえ占拠してしまえば、小娘の一人や二人を夢の世界から締め出すのは簡単なことだと、甘い考えであった。

約束を違える積りはなかったが、ベロニカがこのようなマネを仕組んでくるとは予想外であった。

「くだらん手間を……。ベロニカめ」

愚痴りながら漆黒を叩く公爵。眉間に苛立ちの皺を強く寄せた。

そこに狩人が、卑怯者を連想させる笑みを浮かべながら提案を述べる。

「なあ、公爵さんよ。なんだつたらベロニカ嬢の娘の確保、俺が引き受けようか？」

「

狩人の申し出を聞き、そういえばと思い出す。

狩人が公爵の一団と合流したさいに、ベロニカの娘がどうのこうのと述べていたことを。

相性が合わぬと感じていた相手の言葉ゆえに、完全に無視していたのだ。

「俺がよ、ベロニカの娘をとっ捕まえて来てやるって言うてるんだよ」

少し考え込む公爵。結論は数秒で纏まる。ここは、この下衆に任せるか。

「ならば貴方に任せる。ベロニカの娘を確保して、速やかに古城に連行しろ。古城内に入れば外の世界に居る女医と連絡が取れる。あとは女医からベロニカ嬢に、娘の確保に成功したことを告げてもらう」

そうなれば、この闇の壁も消え去り、目的の部屋へと到達できるだろう。

「よっしゃ、そうと決まればベロニカのこと俺様に任せておけ」

ここでちよつとは点数を稼いでおきたいのが狩人の魂胆である。大将の見ていないところで幾ら敵を倒しても功績は上がらない。ただでさえ馬が合わないのだ、それではノーポイントに成りかねない。彼なりの分かり易い自己アピールの積りである。

しかし公爵が、狩人を睨みながら意見を付け加える。

「だが、時間をせかさせてもらうぞ。ことは迅速に進めたい。私の親衛隊を十人ばかり連れて行け。確かベロニカの娘は例の探偵たちと行動を共にしているのだろ」

招かれざるゲスト。

あの探偵たちは、無駄に邪魔である。

「なんだ、兵を貸してくれるのか。捨て駒に使っちまうぞ？」

狩人が腐った魂を映し出したような顔で微笑む。

「かまわん。所詮は木偶だ」

木偶であるが、将軍が造ったパペットオークのよりも遙かに強い。この黒騎士ひとりで、賢者のストーンゴーレムと五分五分以上に渡り合える戦闘力を秘めている。それにこの黒騎士たちは、知能も高い。その気になれば、彼らだけでベロニカの娘を確保しに行かせてもいいぐらいなのだ。

だが、まだ自分の周囲に戦力を控えさせておきたい。悪夢城の占拠が完全に終わっていないのだ。使える駒は、クズでも上手く使わなくてはならない。

「じゃあ、ちよっくら行つてくらあ〜」

そう言いながら背を向けた狩人が、片手をゆらゆらと振りながら十人の黒騎士を連れて廊下を引き返して行く。その後ろを分裂しているレッドゴーレムがテクテクと付いて行った。

「ふっ」と、鼻で笑う公爵が呟いた。

「捨て駒か……。私にしてみれば、貴様らクズども全員が捨て駒だ。すべてを踏み台にして、私は天を目指してやる」

黒い壁を見上げながら公爵が、奇人の如く瞼を限界まで見開いた。双眸に悪しき魂の濁りが燃え上がる。

「私は、絶対の無限を手に入れる！」

そして、高々に笑い出す公爵の欲望が、暗く広い廊下に響き渡った。トンルネのような廊下を振り返る狩人。元居た暗闇を見ながら頬を人差し指一本で掻いた。

「どうでもいいけど、声がここまで届いているぞ、公爵……。あいっ、インテリぶってるけど、かなり馬鹿だな……」

しかし。

「天を目指す？ 絶対の無限？」

呆れ顔だった狩人の表情が、再び卑怯者の表情に戻る。

「今回の騒動が決着したら、けっこういいもの物得そうだな。楽しみだわあ。ヒイヒイヒイヒイ」

今度は狩人の卑劣な笑い声が、薄暗い廊下の闇に混ざり合いながら小さく響いた。

真の魔人（ショック）

虎と狼の毛皮に薄汚れた人民服とチャイナドレス。怪奇な風貌のタイガーとウルフ。足元には瀕死のグスタフがひとり伏せている。

ぐらりと謁見室そのものが激しく揺れた。室内で混戦を中断して睨み合っていた者たちが動きを固める。突然の大揺れに身構えた。

「おやゝ、地震かのおゝ？」

暢気な口調である。パラパラと埃を降らせる天井を凝視しながらウルフが言う。シャンデリアが揺れている。

「懐かしいわね。この世界に落ちて数十年、初めての地震じゃのお」

「そうか、それで懐かしく思えたんじゃない」

狼の毛皮を頭から被った老夫が上を向き、狼頭の被り物から老面が僅かに窺えた。

昂輝が同じ狼顔で覗き見る。

狼の毛皮の下に隠れていた老人の素顔は、随分と痩せこけた皺だらけのものだった。

乾燥しきつた肌に刻まれる深い皺は、砂漠の枯れはてた大地の如く罅割れが繋がりあっていた。

唇も皺だらけだ。前歯が殆ど無いのか、皺だらけの唇が窪みで見え

る。脛も窪み頬骨がはつきりと形を成している。鼻は低い。目は細い。首も細い。衣類の隙間から鎖骨が見える程に痩せている。

身長は百五十センチぐらいだろうか、とても小柄である。

虎の毛皮を被った老婆であるタイガーも、似たような体格である。とてもこの二人が一瞬の一撃で、グスタフ五人分を倒してしまったとは思えない。

しかし、事実は見たままである。先程昂輝は、攻撃力満点の大技を目の当たりにしていた。

昂輝は狼の視線を、側に立つ軒太郎に向けた。緊張している。

深く被ったテンガロンハットの日除けの下から光らせる鷹のような眼差し。クールに静まり返った表情。

いつものような邪悪な闘志が窺えない。挑発的な発言も飛び出さない。

眼前の老夫婦に対して、警戒を集中させているようだった。

「にやにやにやにや……」

メニヤースも軒太郎の緊迫を察したのか、怯えた素振りを強めている。

小麦色に日焼けした肌を震わせながら、軒太郎の黒コートにしがみ付いていた。

怪人夫婦ふたりが、ひれ伏しているグスタフに話しかけた。

「のう、百人将軍。あの連中を撃退すれば、いいのかえ？」

「黒装束の殺し屋に、狼男、それに子鬼巫女が揃っているぞ。この世界の住人と違って、おふざけで仮装しておるのは違うわいな。あれは、間違いなく生身の怪物たちじゃ」

老婆には、ヴァルハラ探偵三名を怪物と見抜いた。だが、その後に老夫が否定を述べる。

「怪物ではあるが、化け物と肩を並べられるのは、ひとりだけじゃ。否、否、あやつだけが、化け物で怪物なのだろうて」

「あなた、久々の化け物退治になりそうじゃのお」

「じゃのう」

ウルフとタイガーは、楽しそうに語り、そして怪しく笑った。

続いて憑き姫が口を開いた。すべての視線が、幼い少女に集まる。

「ばれている。軒太郎、どうする」

「倒せない敵ではないが、言いようが侮辱的だ。

しかし、ここで俺が挑発に乗って前に出れば、この猫娘を守る者が居なくなる。二対二で戦えば、協力者を守りきれなくなる。幾ら俺でもお荷物を抱えながら、あのふたりと戦うは無理だろう」

軒太郎は、戦力と攻防の推測を話しているのだろう。その中には、協力者であるメニヤースの安全確保が盛り込まれている様子だが、昂輝という名の戦力が僅かにも加算されていなかった。

そのことに気付く本人は、仕方ないかと思いつつも己の不甲斐無さ

に気を落とす。

ふらりとウルフとタイガーが前に歩み出た。

「おのれえ……」

ふたりの間で這いつくばるグスタフが怨念の籠った声で唸る。

魔人ふたりの視線がグスタフを見下ろした。まるで虫けらでも見るような眼差しである。

「安心せい、百人将軍。この度の依頼は、きちんと果たしてやるわい」

「そうともじゃ。わしら夫婦は、約束は守るわい」

獣の毛皮を頭から被り怪奇さを誇張させているが、所詮は老人。枯れ木のような細い体に、水気を失った非力そうな体重。

しかし、彼らが一歩前に進んだ瞬間に、信じられないほどの威圧感が昂輝の全身を叩いた。

『な、なんだ……。今の感じは……』

魔人の放つ圧力に昂輝が硬直していると、その横から巫女服の憑き姫が前に出た。

「私がやる。軒太郎は、その人を守っていて。巻き込まれて怪我をしないように」

「ああ、わかった」

憑き姫の指示に従う軒太郎は、猫娘を背に隠しながら部屋の隅へと後退して行く。

『つ、憑き姫がやるって……、ひとりでかい!?!』

ひとり取り残されていた昂輝が、リミピットチャンネルで言いながら駆け足で憑き姫の横に並ぶ。

「当然よ」

冷静に答える憑き姫。心配気な顔を深める昂輝。

『ぼ、僕も戦うよ!』

「邪魔」

『えっ!?!? すげーショック!?!』

真の魔人（ロリコン）

憑き姫の一言に精神ダメージを受ける狼少年昂輝。周囲の空気をメルトダウンさせる。

その後方でメニヤースが、不安に潤む瞳を凝らす。若い二人を見守りながら軒太郎に訊く。

「あの子で、大丈夫にゃのか……。あのグスタフを一瞬でやつつけた妖怪老夫婦にゃあよ。本当にあの子で勝てるにゃあか……？」

「心配無用だ。あんな小さな餓鬼だが、超人強者が集う我々のヴァルハラ探偵事務所の中で、戦闘力だけならば最強を誇っている。あいつは異常に強いんだ」

軒太郎の口調に嫉妬深さが混じっていた。

しかし、メニヤースは素直に驚く。

「強い！ 最強！？ あんな小さな子供がにゃあ！！」

裏庭で始めて出会った怪物たちを思い出すメニヤース。

同胞であるキングマンティスを瞬殺したカンフー使いのチンピラよりも、己たちの木偶兵士を壊滅させたフランケンのもンスター男よりも、この少女の方が強いのかと疑問に思う。

グスタフたちとの戦いで軒太郎の実力も並でないことは、メニヤースも思い知っている。

そして、大きな足を操り、グスタフたちを踏み潰しまくった憑き姫

の実力も本物であろう。

だが、それでも、最強とは、云い過ぎだと思つ。信じがたい。

一方ウルフとタイガーの歩みが止まる。若い二人と向き合う。四人の間には、十五メートルほどの距離がある。

ウルフが昂輝に向つて声を掛けた。

「御主は何故に引かぬか。黒装束の取つた選択は正しいぞい」

『正しい？』

「そうじゃあ、戦いに巻き込まれないように退避しおつたわい。これから行なわれる戦いは、御主の力量を遥かに上回る激しきものじゃ。」

あの黒装束と比べても段違いで格下の御主が立つ場ではないぞい。死にとうなければ、柱の陰に隠れている。ワシらとて無慈悲な大人ではないわい。

戦う意思のない者まで、命は取らんわい」

呆然とした表情でウルフの言葉を聞いていた昂輝だったが、長々とした台詞が終わる頃には狼面が凜々しさを取り戻していた。目力の籠つた眼光でウルフを睨む。

『御老人。親切な忠告ですが、今は聞けません』

更に続く昂輝の言葉を、今度はウルフとタイガーのふたりが、若干の驚きを見せる表情で昂輝の狼面を見ていた。

「僕は弱小な男ですが、今は引けません。あなた方の強さも理解している積りです。僕よりも憑き姫の方が数倍強いのも理解しています」

憑き姫も横目で昂輝を見ている。

『それでも、女の子ひとりを戦わせておいて、自分は安全な物陰で見ているなんて、僕には絶対に出来ません！』

ウルフの声色が鋭利に尖る。

「坊主、娘の前だからとて、調子の良い格好を振舞っていると、大怪我するぞい。ヘタをするれば死んじまうぞい。」

ワシは、その気のある者に対して手加減を施さない主義じゃ。きっちり締めてやる。その覚悟共々木っ端微塵にするぞい」

脅している。

声色に偽りは無い。

狼の毛皮の下からウルフの双眸が殺伐と光る。殺気が殺人レーザービームの如く放たれ昂輝の瞳を貫き脳内に危険信号を響かせる。

昂輝の背中に冷たい寒気が走り、全身から冷や汗がどっと沸き出た。

しかし、昂輝の眼差しは力を失わず、根性を示すかのように、その場に踏ん張った。脅しに屈しない。

昂輝を横目で見ていた憑き姫の視線が正面に戻る。その憑き姫の頬

が桃色に染まっていた。

「素敵な見栄っ張りじゃわい。昔のあんたも、あんなことをワシに言ってくれたのお」

「そんな記憶、ワシにはないぞい」

タイガーの言葉にそっぽを向くウルフ。

「ひいひいひい。ボケたか、爺さん。それともテレたかえ？」

「覚えていないが、そんなことが本当にあったのなら、若さ故の過ちじゃ」

「相変わらず素直じゃあないのお」

一連の様子を謁見室の隅から見ていた軒太郎とメニヤースが、口元を手で隠しながらお互いの顔を近づけて、こそこそと話す。まるで噂話をひそひそと繰り広げる近所の主婦仲間のようになだ。

「あの爺さんツンデレにゃあ。完璧なツンデレにゃあよ」

「ああ、間違いない。ツンデレだな。キモイぐらいのツンデレだな」

「これはバカッブル同士の戦いになるにゃあ」

「おいおい、憑き姫と昂輝はバカッブルどころか恋人同士じゃあないぞ」

「あ、そうにゃのか。そうだよな、あの少年が、あの子と付き合っ

ていたら犯罪だにゃあ。歳が離れすぎだにゃあ。小学生と付き合っ
ちゃあだめだにゃあ」

「だが、あの餓鬼はロリコンだ！」

「やっぱりかにゃあ。ロリコンにゃのね。変態さんにゃのね」

「ああ、昂輝は変態だ！」

軒太郎とメニヤースの中で、昂輝は変態だとキャラ設定が確定する。

真の魔人（チェンジ）

「昂輝が、その程度で死なないのは分かっているけど」
「
咳くように言う憑き姫。」

「安心せい。胸骨を砕いたが、内臓は傷付けておらんわい。暫くは動けんだろうが、死にはせんて」

弾む口調でウルフが述べ終わったころ、白目を向いて倒れていた昂輝が、ゆっくりとした動きで起き上がろうと両手を付いた。驚いたのはウルフである。

「ほお、これはたまげたわい。胸骨を砕かれても動けるか、狼少年」

ウルフは昂輝がリジエネレーターだと知らない。

ウルフの眼前に立ち上がった昂輝。二人の間には一メートル程度しか距離が無い。仕掛ければどちらでも届く間合いである。

リーチ差では、鎌鼬の爪を両拳から伸ばしている昂輝の方が有利であろう。

しかしスピードではウルフが圧倒しているのが現状。

この距離でありながらも不利なのは昂輝の方だ。それが明確だった。だが、既にウルフから受けた棒拳の傷は癒えていた。砕かれた胸骨は完全に完治している。

それがTシャツに隠れてウルフには見えていなかった。

「狼少年。君の粘りに敬意を評して、講義の延長を認めてやろう。しかもじゃ、次は先手を譲ろう。好きに打ち込んでもいいぞい」

サービスの具合が、余裕の量と実力の違いを知らしめる。

「貴方は魔人。お言葉に甘えます……」

リミピットチャンネルで言いながら構えを築く。

左手を緩く前に出し、右手を力強く腰の高さに曲げた。右足が前で、左足が退脚で体を支える。

ありきたりな空手の構え。素人くさい。

「空手をかじっているな。だが、まだまだ未熟。その姿勢の完成度から繰り出せる拳脚の部類は多くなろう。精々は、正拳突きと前蹴りていどかのう。廻し蹴りを繰り出すにはやや姿勢が高い」

ウルフは拳法の達人として磨き上げてきた眼力で、昂輝が狙える技を読み当てる。

昂輝は正拳を狙っていた。

正拳と述べても鍵爪付の鋭利な代物。当たれば絶命を与えられる。

昨日一晩、寝ることも無く徹底的に練習した技である。まさに一夜漬けの技だが、今の昂輝に武術の技と呼べるものは、この正拳突きしかない。

『打ち込みます。正拳突きを』

正拳突きを打ち込もうと昂輝が全身を力ませる。狙いはウルフの顔面。鍵爪が刺されれば死んでしまふ。しかし、昂輝は遠慮を考えなかった。

『えやッ！』

繰り出される右の正拳が、腰元から三十センチほど進んだところで、ウルフが昂輝のスピードを上回る速さで攻撃を放つ。

見事なタイミングでのカウンター！

ウルフの右手が斜め下から掬い上げられる軌道で跳ね上がった。拳の形は、鶴の嘴を連想させる特殊なもの。その鶴拳打が昂輝の喉に突き刺さるとクルリと回りながら決る。

『キャン！』

負け犬のような情けない悲鳴を上げながら昂輝が、狼口から長い舌と涎を散らして後ろに尻餅を付いた。そして、喉に打ち込まれた激痛にのたうちまわる。

「動きが読まれすぎてているのに、意地を張って敢行するからじゃ。武を志すならば、もっと賢く成れ」

すぐさま跳ね起きる昂輝が、その勢いのままに再攻撃に移る。

大振りの左フック。

鍵爪が空を切り裂きながら飛んで行くが、狙ったウルフの顔面に到着するよりも早く反撃が打ち込まれた。

『ぐへえ！』

ウルフが枯れ枝のように細い足で前蹴りを繰り返して昂輝の突進を止めていた。

老人の前蹴りは、まるで鉄の塊をぶつけられたように重かった。

これだけの重みを、小柄な老人が生み出せるとは、とても思えなかった。

更に後退する昂輝。一旦の間合いを作る。

やはり勝てる気がしない。

憑き姫の前だからといって、格好付けたことを少々悔いる。

『ならばここで五色鬼の宝石を使うしかないか……』

今回は、あまり時間が無かった為、多くの体内暗器は装備していない。

最終兵器のひとつである自爆用の爆弾は、内蔵されていない。

今回の最終兵器と呼べるのは、五色鬼の宝石である。

しかし、一度きりの変身だ。よく考えて使わなくてはいけない。

昂輝が左手で自分の胸を鷲掴む。そこにはTシャツ越しに宝石のひとつが感じられた。

コロリとした感触。五色鬼、鬼結びの龍鬼の赤い宝石。他にも四色の宝石が胸元に植え込まれている。

『使つか……』

昂輝の中で決意が決まる。ここが使い時だと。

「ちょっと待って」

その時である。後方から憑き姫の静止が掛けられた。振り返る昂輝。

「だからここは私が戦うの」

『憑き姫………』

昂輝が心配そうに言った。

「ありがとう。守ってくれて」

守りきれていない。でも、感謝された。嬉しい。

「でも、昂輝じゃあかなわない。やっぱり私が戦うわ。だから」
だから……。その言葉の続きを待つように昂輝が憑き姫の美面を見詰める。

「退いてて。邪魔」

『邪魔ですか!』

「邪魔です」

『はうう………』

昂輝の心がポッキリと折れた。

夢遊病患者のようなフラフラとした危なげな足取りで後退して行く。先程までの威勢が嘘のようだ。完全に凹んでいた。

心中には、情けないと自分を攻め立てる言葉だけが、梅雨時の雨水のように降り溜まって行く。

その溜まり水が、昂輝の足取りを重たくする。

『わかったよ、憑き姫。交代するよ』

昂輝が諦める。

魔人退治を断念した。

そして昂輝が憑き姫の横を通り過ぎようとした瞬間、憑き姫が片手を上げた。掌を昂輝に向ける。

「タッチ」

憑き姫の一言。ハイタッチを求めているようだ。視線は照れくさそうに昂輝から外れていた。

戸惑う昂輝。

しかし、可愛い。

純粹に、そう思えた。

そのなんとも言えない憑き姫の仕草が昂輝の心を和ませ笑顔を誘う。心中に重たく溜まった梅雨の雨水が枯れて行く。気持ち癒えて行

く。

昂輝は笑顔で憑き姫の掌を叩いた。
パンチと乾いた音が、二人の間で鳴った。
若さが漲る爽快な音であった。

その音を聴きながら昂輝は誓う。

まだ自分は弱い。

彼女の方が圧倒的に強い。

でも、いつかは自分も強くなって見せると。

彼女と肩を並べられる程に強くなると。

同じ方向を見ながら歩んで行けるようになる。

しかし今は、その時ではないのだと。

ゆえに強くなろうと。

だから誓う。

もっと己を鍛え、強くなろうと。

昂輝と憑き姫の様子を見ていた老夫婦が動きを見せる。
いつの間にかタイガーが夫の横に並んで立っていた。

「さてさて、茶番はおわりかのお」

「出てきたわい、真の魔人が」

「あの娘は危険じゃわい」

「お嬢さん、悪いがワシらは年寄りだ。公平でないが、二人で掛かせて貰うぞい」

怪奇な老人二人を冷たく見詰める憑き姫。

長く艶のある髪と同じように両手を下げ直立している。

まるで巫女服を着せられた日本人形のような。美しい。

左手に持った魔導書と左手のカードだけが、赤い陽炎を揺らしていた。

「構わない。二対一でも、百対一でも一緒」

その台詞に這いつくばるグスタフが喉を唸らす。ぐうの音もでない。

一方老人ふたりは感謝しているようだ。

「遠慮無く行かせてもらうわい。小娘だろうと魔人は魔人。真の魔人じゃわい。殺すどころか滅する覚悟が無ければ太刀打ちできそうにないからのお」

「講義も御託も不要よ。全力で掛かってきて」

憑き姫の方が、上から目線である。己の強さを自覚しているのだから。

真の魔人（カード）

「「では、参る」」

怪人の老夫婦が台詞を合わせて走り出した。

背を丸め低くした姿勢で、怪奇な走り方であった。

しかしながら速い。一瞬で憑き姫との間合いを削って行く。

だが、憑き姫は接近戦を許したくないのか、手に有るカードを投げて呪文を唱えた。

「乳母が火 ザ・ファイアーブレス！」

憑き姫の眼前に召喚された妖怪は、バレーボールほどの火球であった。中央には皺くちやの老婆の顔が浮き出ている。

その老婆の口が、ひよつとこのように尖って炎を吐いた。

「妖怪を操るかえ！」

火球の老婆が吹き吐いた炎は扇型に広がりウルフとタイガーの行く手を阻む。

「とっッ！」

「せいッ！」

高々と跳躍を見せる老夫婦が、炎を飛び越え空中から憑き姫に飛びかかるうと試みる。

しかし、すぐさま憑き姫は、二枚目のガードを引き剥くと呪文を唱

えた。

「不知火 ザ・ファイアーボルト！」

老婆の火球体が萎むように消えて無くなると、代わりに手元のカードが輝き光の中から炎が呻り出る。

長い蛇のような火炎の槍が唸りながらウルフを目掛けて飛んで行った。

「きい！ 躲せぬか！」

宙に跳ねたが故に回避が取れないウルフは、体の前で細い両腕を交差させて、盾がわりに炎の槍を受け止めた。

「熱いぞ！」

防御に成功したウルフに大きなダメージは無いが、炎槍の勢いに押されるように後方へと弾き飛ばされる。

残ったタイガーだけが、空中から憑き姫に襲い掛かった。老人とは思えない綺麗な飛び蹴りで飛来して行く。

「ちよえええええ！ 槍龍脚！！！」

怪婆タイガーの飛び蹴り。蹴り足の先が、空気を切り裂くのが見える。

しかし憑き姫は、小さな体を横に動かし難無く躲す。空気すら揺れない不思議な動きであった。

飛び蹴りを躲されたタイガーは、着地に体を丸めていたが、跳ね上

がるように背筋を伸ばすと同時に右腕を振り回しながら裏拳を放つ。

『速い!』

裏拳のスピードに驚く昂輝。だが、その裏拳すら躲した憑き姫の動きにも驚いていた。どちらも速いのだ。

更に続くタイガーの攻撃。

縦拳による直突き。

「龍虎相拳!」

両拳から繰り出される上下の拳打。

「天地二極砲!」

一度横を向いてからの肘鉄と鍵拳による二連撃。

「動門鉄火!」

下段の足刀。

「朴歩脚!」

一度背を見せたからの後ろ蹴り。

「退馬後脚!」

振り返り際に掬い上げる掌打。

「轉身半烈風！」

両腕を左右に広げ落とす槌拳。

「十字交激！」

跳ねながらの廻し蹴り。

「飛燕旋風脚！」

連続で繰り出される拳法の攻撃。

多彩でありながら巧み。

変幻自在でありながら変則的。

複雑でありながら鋭い。

どれもこれも流れの中に極めし技術が満ち溢れていた。

しかしながら、何一つ当たらない。

憑き姫の体術が見事に躲す。

「なんとという体術だ。拳法でも古武術でも空手でもない。ましてやボクシングですらない。如何わしい妖術でもない。これは何じゃ！」

多彩な拳法で攻め立てるタイガーが、不思議な憑き姫のフットワークに驚きのまま質問を飛ばしていた。

「我流よ。だから無形。あなた方のような武術とは別の戦術」

タイガーの質問に答えながら猛攻を避ける憑き姫が、更なるガード

を引き剥く。

「折りたたみ入道 ザ・ストロングアタック！」

呪文と共に、憑き姫とタイガーの間でカードが輝く。思わず一步後退するタイガー。

二人の間に木製の葛籠が一つ現れた。

「なんじゃ、この箱は？」

身構えながらも不審な箱を警戒するタイガーが、一步前に踏み込んだ。

すると葛籠の蓋が開いて中から袈裟を掛けたマッチョな坊主が飛び出してきた。

「ななっ！」

禿げ上がった頭に敵つくも紫色の顔。首は筋肉で太く、肩も筋肉で盛り上がっていた。腕はサッカー選手の太股の如く太い。

しかし飛び出して来た入道の下半身は、折りたたまれた厚手の和紙であった。

折りたたみ入道は、まるでビックリ箱から飛び出してきたピエロのようにタイガーを驚かせて飛び掛る。

「うきゃー！」

驚きに不意を疲れたタイガーは、折りたたみ入道のタックルをまともに受けてしまう。

まるでアメフト選手のタックルである。

タイガーの細い腰にタツクルを決めた折りたたみ入道は、背中に腕を回してかっしりと両手でクラツチを組む。

そして、タイガーを押し切り憑き姫からグングンと引き離して行く。

「己っ！ 妖怪坊主が！」

怪僧の怪力に押し戻されるタイガーが、密着していた折りたたみ入道の下顎に掌打を入れる。

その一打で折りたたみ入道の力が緩むと、続いて喉仏に貫手を突き刺す。

更に鳩尾への膝蹴り。

深く減り込む蹴りでしがみ付いていた折りたたみ入道が引き剥がされた。

「人妻に抱きつくとは破廉恥じゃぞい」

一旦後退するタイガー。

苦痛に表情を歪める折りたたみ入道は、伸びきった下半身を折りたたみながら縮めると葛籠の中に戻っていた。そして蓋を閉めると葛籠ごと消えて行く。

マッチな入道に引き離されたタイガーと、炎の攻撃に弾き飛ばされたウルフが合流する。

思ったよりも強烈なタツクルにタイガーは息を切らしていた。ウルフも炎の攻撃に、若干衣装を焦がしている。

僅かだがふたりともダメージを負った様子である。

「あの本の中から札を出して、妖物を呼び出すようじゃのう」

「しかも、かなり体術を心得ておる」

「やつかいな鬼姫じゃ」

「普通の拳法だけでは、太刀打ちできんのお」

ふたりは横に並びながら憑き姫の攻略について話し合っていた。その口調には、まだまだ余裕が感じられる。拳法で攻め立てる他にも、まだ攻撃の手段があるようだ。

「久々に仙術を使うか、なあ婆さん」

「そうじゃのう。仙術と拳法の融合技。仙術拳法を使うかのう」

ふたりの魔人は、そう述べると大きく股を開いて腰を落とす。そして肘を曲げて肩の上あたりで両掌を見せる。

「仙術拳法って、なにニヤア？」

「仙道の多くに、カンフーのような体術が含まれていることは珍しくない。多分それらだろう」

メニヤースの質問に軒太郎が淡々と答える。

突然である。ウルフとタイガーが、奇声に喉を鳴らす。

「「「「「おおおおおおおお」

息抜きだ。

拳法はもちろん、空手などでも見られる呼吸法。
気を引き締めると同時に精神をリラックスさせる技法である。

タイガーの周辺で、空気がバチバチと音を鳴らし始めた。静電気を集めているようだ。

一方のウルフの周辺では、空気が薄暗く澱み濁って行く。気付けば何処から現れたのか、おどろおどろしい霊魂のようなものがウルフの周りに集まり始める。

「悪霊集結暗術！」

「電光雷撃操法！」

タイガーの周りでは激しい電撃が火花を散らし、ウルフの周囲では悪霊の霊魂が飛び交っていた。

これが、仙術。

ふたりの必勝スタイルである。

真の魔人（スピリット）

冷たくも澄んだ双眸で老夫婦を見詰める憑き姫が、殺意や敵意などの抑揚が感じられない口調で述べる。

「ちょっとは本気を出す気になったのね」

しかし、言霊の如く挑戦的な念が宿っていた。

謁見室の空気が冷えて行く。明らかに室温が低下して、各自が吐く息が白く変わっていた。

まるで真冬の野外のようだ。薄着のメニヤースは寒さから身を縮めて震えていた。

部屋の温度を下げている原因は、明らかにウルフが発動させている術が原因だと思えた。

「なにが夢の世界じゃ」

小言を溢すはウルフ。

老人の周囲ではおどろおどろしい霊魂が薄い光の尾を靡かせ飛び回っている。

よく見れば、霊魂は人の頭部のようだ。顔がある。

その顔は不健康そうにやつれた病人のようなものから、ゾンビ映画の亡者を思わせるドロドロしたもと多種多彩。中には白骨化した顔も浮かんでいた。

それらが群れを成している。

ウルフは己の周囲に飛び交う靈魂を眺めながら物悲しそうに言う。

「夢の世界でありながら魂を朽ちらせ自我を失った哀れな人魂じゃ。己の意思を失い、思考を失い、人であったことすら忘れている。

欠落した人格から残された無念な思いが小悪なものとなり、ただ怨み、ただ妬み、ただ憎しみ、ただ殺意を抱く。優しさ、労わり、愛情。善人の心は微塵も残っていない。

それで有りながら他者に危害を加える力すら持たず、誰にも気付かれる事無く漂い続ける。行き場も無く、何処にも行けず、同じ場所を意味無く目的も無く回り続ける。天国の門も地獄の門も開かない。情けなくて悪霊とも怨霊とも呼べぬ魂の残り粕じゃわい」

語るウルフも、その横で話を聞きながら稲妻を全身から迸らせているタイガーも、飛び交う靈魂の群れを見て悲しそうな視線を泳がせていた。

このふたりには、他者を哀れむ心が残っている。

思った以上に悪人ではないようだ。

今度は憑き姫が語りだす。

「その残り粕に、力を注いで操っているのね。

先ずは己から放たれる特殊な生命力を餌に悪霊にもなりきれない静寂な靈魂をおびき寄せ群れを作る。

そして集まった弱々しい靈魂を別の靈魂と融合させて、欠けている部分を補い少しずつ形を整えそれらしく練り上げ、出来合いの悪霊を拵えたわけね。

恨み、妬み、憎しみ、個々の怨念も組み合わせ次第で一端の悪霊化する」

作られた悪霊。

合体靈魂。

これが仙術なのかと昂輝もウルフの頭上を眺めた。

述べ終わった憑き姫にウルフが朗笑を浮かべながら言葉を返す。

「本当に出来のええ子じゃわい。流石は妖怪の魂を操る鬼姫。一目見ただけで、術の仕組みが悟れたか」

憑き姫は、当然といった自信満々の態度である。

「外道禁術では、基本的な術だわ。ただ、お爺ちゃんの特異体質を餌にして、効率よく大量の屑靈魂を瞬時に集め寄せる技術は眼を引くところがあるわ。」

それだけは、並みの術禁導師でも至難。オリジナルの術ね」

「童のころから困った体質での〜。妖物に好かれるでの〜」

「気持ちはお察しできるわ。私も一緒なもの。小さな頃から妖怪変化に好かれるの。今でもね」

謁見室の隅から憑き姫を見詰める昂輝が話を聞きながら思う。

憑き姫は、小さな頃から妖怪変化と接していたのか……。

おそらく憑き姫の子供とは思えない桁外れ強さは、そんな幼い時代から積み上げてきた経験の為だろう。

昂輝が想像する異常の怪異を経験してきたのかもしれない。

妖怪に好かれる体質。

それが、彼女を普通の少女時代を奪ってきたのだろう。
なんだか可愛そうに思える。

そのような思いで憑き姫を見詰めていると、彼女と視線があった。
戦いの中、首だけを横に向けて昂輝の方を憑き姫が見ている。

「え………？」

気付けば憑き姫だけでない。

ウルフとタイガーも昂輝を見ていた。軒太郎とメニヤースも昂輝を見ていた。グスタフまでもだ。

全員が、昂輝を見ていた。

何事かと戸惑う昂輝。

冷やかな視線。

何故か視線に痛さを感じる。
いたたまれない。

「なるほどの〜。妖物に好かれるか………」

「幼いのに可愛そうじゃわい………」

「しかも、堂々としたロリコンの妖怪だしニヤア」

ウルフとタイガーの言葉に哀れみが溢れていた。

メニヤースの言葉には憎悪すら感じられた。

昂輝も皆の冷たい視線が意味するものを察する。
脱力が全身を流れ落ちて行った。

『うわ〜……。僕も、そこらへんに飛んでいる即席融合の悪霊と一緒にされてるー。すげー、がっかり……。』

狼男の外見が、そのミスリードを誘っているのだろうが、ロリコンとの誤解は払拭できそうにない。

昂輝が、大きな溜息をついた。

真の魔人（ウィークポイント）

ひとりバチバチと放電音を奏でるタイガー。

隣で合成悪霊を渦巻かせ冷気を放出するウルフとは異なり、激しい電撃で空気を暖めていた。

その放電が、ウルフと憑き姫が会話を続けている間にも大きく激しさを増していた。

周囲の静電気を、ドンドンと集めている様子である。

「ふたりとも、もういらんお喋りは止めていいぞい。ワシの準備も終わったわい」

『準備……？』

「分かっていて憑き姫は、あの爺の会話に付き合っていたんだよ」

軒太郎が、そう述べた。

メニヤースと昂輝は、意味が掴めずに悩んだ顔をする。

「本当に気の効いた鬼姫じゃわい。婆さんの電光雷撃操法は、周囲から静電気を集めて体内に蓄える必要がある。それには時間が暫しかかるのでお。いつもワシの悪霊集結暗術で注意を誘い時間を稼ぐんじゃ」

『憑き姫は、それが分かかっていて話に付き合っていた……』

余裕の表れなのだろうか。なめているからだろうか。

否。どちらでもないだろう。

おそらくは、強者である自信なのだろう。

ヴァルハラ探偵事務所のメンバーは、人を超越した強さを備えている。憑き姫もだ。

その強者である自信が、眼前の怪人よりも己の方が圧倒していると自覚できるのだろう。

「その余裕が、きっと徒となるぞい」

タイガーの体から放たれる電撃が、一層激しさを増す。すると猫背に丸々タイガーの体が風船のように浮き上がった。

「浮いたニャア……」

「磁力の反発力を利用した浮遊術だ」

「磁力の反発ニャア？」

小首を傾げるメニャースが、軒太郎に問う。

「でも、あの婆さんは、静電気でバチバチになってるんじゃないののか。静電気って、反発じゃなくて吸い付くもんじゃあニャいのか。ほら、下敷きに髪の毛がくつつくみたいニャア」

「あの婆さんが静電気を集めたのは、それを基礎エネルギーとして使う為だ。全身から放たれている電撃は、体内で発電されたもんだよ」

「発電ニャア」

先程よりも深く首を傾げるメニャース。眉毛を八の字にして悩んでいる。

「分かり易く言えば、静電気はガソリンだ。そのガソリンで体内にあるエンジンを回転させて、更に強い電力を発電したって訳だ」

「静電気を高圧電流に変えたのニャア」

「そんな感じだ」

「人間発電所だニャア」

「ああ、ブルーノ・サンマルチノだな」

『だれですか、それ……』

電撃を散らすタイガーは、一メートルほど浮遊しながら揺れていた。ウルフとタイガーが、一度眼を合わせる。

「爺さん、行きますか」

「そうじゃのう」

ウルフとタイガーが両掌を広げながら前に出して砲撃術を狙う。

「接近戦を挑んでも見事な体術で逃げられてしまうからのぉ。今度は遠距離戦で対抗してみるぞい」

「砲術じゃ。キツイのを食らわしてやるわい」

浮遊するタイガーの両掌が黄色く輝く。そして電撃の槍を二本放った。

一瞬の電光が憑き姫に迫る。

『憑き姫ッ！』

慌てた昂輝が思わず大きな声を上げる。

しかし、憑き姫に迫る電撃は、寸前の所で弾け散った。まるで見えない壁に激突した感じである。

「なんじゃ、ワシの電撃砲が!？」

「バリアーかえ？」

憑き姫の周囲で弾かれた電撃の破片が、陸に打ち上げられた小魚のように跳ねていた。

「長話に付き合って、電撃の充電をただ許していたと思って。下準備を行なったのは私も一緒」

「下準備とな」

「私もカードを使わせてもらったわ」

ちやかりしている。

昂輝がいつのまにと思っていると、憑き姫の周りに巨大に獣の姿が浮き上がってくる。

四本足の獣形妖怪だ。

ライオンの如く巨大な体。ゴワゴワした毛並みは青黒い。額から背中へと黄色いモヒカンのような毛が生えており、そのライオンがフサフサの尻尾まで続いていた。

尻尾は胴体よりやや小さいぐらいでかなり大きい。

獣の顔は狸と鼬の間ぐらいだろうか。瞳が真紅に光を放っている。口の隙間からは、野性的で獰猛そうな牙が煌めいていた。

尻尾を含めた全長は、三メートルに達していそうだ。

それは、今まで妖術で姿を隠していたのだろう。我が子を小脇に隠すように横たわり憑き姫を守っていた。

「雷獣よ」

「ほほう、日本の妖怪か。イカヅチを操る妖怪と聞いておる。婆さんの雷撃も、その獣妖怪に防がれたかえ」

「イカヅチにはイカヅチかえ。嫌らしいことじゃわい」

伏せていた雷獣が、のそりと立ち上がる。そして、野生的に牙を向いてふたりを威嚇した。

「だが、此方にはワシも居る事を忘れるでないぞ。雷撃が効かなくとも、ワシの合成悪霊は弾けまいて！」

今度はウルフの両掌から靈魂を圧縮させた黒い弾丸を放つ。弾丸は大きな口を開けた悪霊の頭部。ふたつの頭が噛み付こうと雷獣に迫る。

「それも予想済み」

淡々とした口調の憑き姫。

悪霊の弾丸が雷獣を襲うが、またしても寸前で見えない何かに弾かれる。

「私が密かに召喚した妖怪は、一体じゃないわ」

「もう一体居るのかえ！」

「いいえ、今日は特別。ふたりとも出てきていいわよ」

姿を透明化かせて悪霊の弾丸を弾き飛ばした存在が、憑き姫の呼びかけに姿を現す。

「「ぶるるるるるうう」」

荒々しい獣の唸りであった。

しかし姿を現したのは二体の人型。身長は二メートル以上あるだろうが。プロレスラーのように筋肉モリモリだが全身にカーペットのような栗毛の短髪が生えていた。両手には、棘の付いた刺股を持っている。そして片方の頭部はミノタウルスのような牛で、もう片方はナイトメアのような馬のものであった。

『ミノタウルスに、ナイトメア……』

「ちがうわ。馬頭鬼ウマノコと牛頭鬼ウシノコよ」

地獄の門番である。

「なるほどのお。合成とはいえ悪霊の類。地獄の番人には歯が立たぬかあ……」

閻魔大王の配下。地獄の鬼である。罪深き死者には、めっぽう強いのだろう。

「見事じゃわい。ワシらの術に対して絶対的に有効な妖怪を呼び寄せおったのかえ」

弱点を突かれたのにふたりの老人たちは、まだ薄気味悪く笑っていた。

このふたりにもまだ余裕があるのだろう。

「お嬢ちゃんや。ワシらもお前さんの召喚術を体験して気付いた点があるわい」

真っ直ぐウルフを見る憑き姫。静かに老人の言葉を聞く。

「召喚した妖怪は、一つの攻撃を放つと直ぐに消えるじゃろ」

確かにそうである。

憑き姫の召喚する妖怪は、一つの妖術を繰り返すと直ぐに消えてしまふ。

おそらくは、一体を長時間召喚できないのだろう。

「その三体の妖怪も、何か一つ攻撃を繰り返せば、直ぐに消えてしまふのじゃないかえ」

「それに、あまり耐久力もないようじゃ」

「ひっひっひっ」と、乾いた声で揶揄するように笑うふたり。

確かに先程召喚された折りたたみ入道は、幾つかの攻撃を喰らうと消えてしまった。

相手の術の弱点に気付いたのは、憑き姫だけでないようだ。双方とも気付いている。

「それが弱点だと思うなら、試してみればいいわ」

相変わらず憑き姫は、凜とした冷静な表情で言葉を返す。強気を崩さない。

「鬼姫や、そのぶつちよう面が可愛くないのお」

ウルフとタイガーは、ならば試してやろうと前に進んだ。

それに合わせて憑き姫が先に召喚した雷獣を先頭に、牛頭鬼と馬頭鬼も前が出る。

真の魔人（ソング）

「この三匹、近くで見ると大きいのお」

「牛に馬に狸。なんともバラエティーにとんでおるわい」

老夫婦が足を止めると、三匹の妖怪も足を止めた。

馬頭鬼と牛頭鬼が刺股を構えて腰を落とす。雷獣も頭を低くして威嚇に牙を向いていた。

馬頭鬼が喋りだす。

「ぶうるるう」。貴様らは死者の身分で肉体を有しているとは罪深い。自然の断りに反している」

「なにを言っておるかえ。これは、この世界を預かる悪魔の仕業。ワシらに罪はないわい」

今度は牛頭鬼が話し出す。

「言い訳とは見苦しい。死者の分際で言い逃れとは。そのような執行、ワシら鬼衆が許して、閻魔大王様が許さねー」

馬頭鬼と牛頭鬼が声を揃える。

「それ即ち。ワシらも許さねー！」

「許せないならば、いかがする？」

開き直り揶揄するタイガーの言葉に鬼二匹が鼻息を荒げて恫喝する。

「その矛盾な魂と肉体を、完膚なきまで砕いてしんぜよう！」

「断る！」

「断るな！！！」

老夫婦の反論に、二匹の鬼が怒鳴った。

「それにしても牛馬でも喋れるとは、妖怪変化とは便利じゃのお」

「だがのお。粹がつて見せても、貴様ら召喚妖怪が戦える時間は僅か。その悪条件でワシらと戦えるかえ」

「そうじゃて。ワシらはほんの一時の間、貴様らの攻撃を逃げ回ればいいだけじゃ。それだけで勝てる」

「貴様らに勝ち目は無いぞ」

そのような恥策を取る気はふたりにはない。しかし、挑発をかねて口に出したのだ。

馬頭鬼と牛頭鬼がクスクスと笑い出す。

「所詮は死者の靈魂が考えること、レベルが低いな。なあ、牛頭鬼」

「まったくだな、馬頭鬼」

「この死者どもは、ワシらを舐めただけでなく、我らが主まで舐め

ていやがる」

「なんとも愚かだな」

二匹の鬼が後ろを振り返り憑き姫を見た。
雷獣一匹が威嚇に専念している。

「姫様。例の術をお願いしやす！」

「ええ、その積り」

『例の術？』

昂輝がリミピットチャンネルで疑問に抱いたことを垂れ流す。
すると、めつきりテリーマンと化していた軒太郎が解説を始めた。

「先程言われた憑き姫の召喚術の弱点は、その通りだ。あいつの召喚術は、僅かな攻防を繰り返すだけで霊力を失い消えてしまう。だが、その欠点を補う術が二つある」

『二つ……ですか？』

ひとつは召喚した妖怪と一体化する術だろう。

現在憑き姫が着ている黒茨を出す巫女服も、茨巫女と呼ばれる召喚妖怪だ。

それに以前昂輝が着込んだ五色鬼もそうだ。合体することで制限時間が圧倒的に延びている。

軒太郎の言いようでは、もう一つ手段があるようだ。

憑き姫が魔導書からカードを一枚抜き出した。
更に召喚妖怪を増やすのだろう。それが欠点を補う術になるのだら
うかと昂輝が怪訝に見守る。

「七人岬 ザ・カースバンド」

憑き姫が呪文を唱えながらカードを投げると、光の中から顔色の悪
い七人の行者が現れる。

今度は悪霊怨霊の類の妖怪だ。

頭には傘を被り片手に錫杖を持っていた。

七人のうち三人は女性のような。髪の長さや華奢な体型で判る。若
そうだ。

七人岬は、憑き姫の後ろで不気味に並び立ち尽くす。

「皆、準備して」

振り返る事無く七人岬に指示を飛ばす憑き姫。すると七人は、足元
に在る自分の影へと腕を突っ込んでかき回す。

「あの亡者ども、何をやっておるのじゃ？」

「さあ〜のお〜」

七人岬の不審な行動を見守るウルフとタイガー。

どうやら七人岬は何かを探しているようだ。

やがて目的の物を探し当てた順に、影の中から様々な物を引っ張り
出し始めた。

女亡者三人はスタンド付マイクを影から引き出すと、自分の前に立

てる。

『マ、マイク……。何故？』

更に男の七人岬も影の中から次々とアイテムを引つ張り出す。ギター、エレキベース、電子ピアノ。それにドラムセット。

『な、なんで楽器を……。てか、バンド……』

気付けば憑き姫もマイクを持っていた。

『憑き姫がボーカル！？』

軒太郎が昂輝の肩を叩く。目を瞑り眉間に皺を寄せていた。

「憑き姫が歌うのだよ。そうすることで召喚妖怪に無線で妖力を送り込む。それで召喚妖怪は、圧倒的に戦闘時間が延びる」

『うわゝ、なんだか分かんないけど、歌うのね……。』

馬頭鬼と牛頭鬼が刺股を持つ手に力を込める。

「姫様の準備が出来たようだし、そろそろ戦うか、なあ牛頭鬼」

「そつだな馬頭鬼。七人岬の演奏が始まったら戦闘開始だぜ」

ぶるるるるる、と鼻息を鳴らす地獄の番人。

憑き姫が口元に両手でしっかりと持ったマイクを近づけると大きく深呼吸をした。

そして。

マイクに向かって可愛く叫ぶ。

《皆、抱きしめて！ 銀河の果てまで！！》

七人岬の演奏が始まった。

女亡者三人は、素朴なダンスと共にコーラスを歌う。

《デンデンデデエ、デエデエンデルとうるいやく、デンデンデデエ、デエデエンデルとうるいやく、デウデウデンデン、でえーん、デデンデッデ》

憑き姫が曲に合わせキャピキャピとしたアイドルのような振り付けを踊る。いつものクールさが嘘のようだ。

《水面が揺らぐ、風の輪が広がる》

『か、かわいい！』

あまりのギャップに唖然としていた昂輝の顔が徐々に緩みだす。その表情は歓喜であった。

「よし、行くぞ馬頭鬼！」

「おうよ、馬頭鬼！ 雷獣も気張って行けやー！」

「がるるー！」

三匹の妖怪が一斉飛び掛る。

《触れ合った指先の青い電流ゆゑ》

歌いながら憑き姫は、クネクネダンスを踊っていた。

「面白いわい。返り討ちにしてやるぞい！」

ウルフとタイガーも地を蹴り前に飛び出す。電撃を弾かせ合成悪霊を唸らせていた。

五つの力が激しくぶつかった。

「喰らえい、電撃連射弾！」

タイガーが牛頭鬼を狙って電撃の矢を連射するが、素早く動いた雷獣が盾となって攻撃を防いだ。

「おのれえゝ、狸妖怪め！」

《見つめ合うだけでゝ、孤独な加速度がゝ》

「そのトラ婆さんは、雷獣に任せた。馬頭鬼、ワシらはふたりで才カミ爺さんを蹴散らすぞ！」

「おうよ、牛頭鬼！」

「面白い！ きやがれ畜生鬼共！！！」

刺股を振り回す鬼二匹に対して上等を決め込む怪老人は、素手で刺股を受け流す。

《一瞬に碎け散る、貴方が好きよ》

「喰らえい！ 悪霊誘導弾！！」

ウルフの背後から四方八方に飛び散る悪霊の砲弾が、派手なカーブを描いて飛んで行く。その弾丸が正面からだけでなく、横や後ろからと馬頭鬼牛頭鬼を襲う。

無茶苦茶に飛び迫る亡者の誘導弾を鬼たちは、時には敏捷に回避したり刺股で打ち落としたりと見事に防ぐ。

《透明な真珠のように宙に舞う涙》

「何が雷獣じゃ。たかが電撃が効かない程度でワシと同等だと思っなかれ！」

言いながら多彩な拳脚を繰り出すウルフ。しかし雷銃も前足をバタつけながら対抗していた。

「短い足を器用に使いおって、じれったい！」

《悲劇だって構わない、貴方と生きたい》

デエデエデエッ

キ

キキキキキキキキ

キ

キキキキキキキキ

キ キ

ララララララララ

ララララララララララ

ラ

ラ

ラ ラ

ッ!

『キラッ! ……て』

昂輝を無視して歌も戦闘も続く。

《流星にまたがって、急降下 a h a h 》

「これならばどうじゃ!!」

タイガーが全身に靡かす電撃を一度体内に押し込める。派手な放電音が一瞬収まったかと思うと、爆発したかのように再び荒れ放つ。

「行くぞ! 電光石火残像拳!!」

《濃紺の〜星空みたいに〜》

まるでタイガーの動きはイカツチそのものと化す。

光の速度で雷獣の横に回りこむと脇腹に直突きを叩き込む。そして、雷獣の背中を飛び越え反対側に回り込むと逆の横腹に横蹴りの足刀

を打ち込んだ。スピードが今までと桁違いである。キャン、と叫びよるめく雷獣。

「電気エネルギーを糧に、一時的だがスピードを上げたようだな」と、軒太郎が解説付く。

《私たち花火みたい、心が光の矢を放つ》

「これならどうじゃ！ 連射悪霊弾無限！！」

ありつただけの合成悪霊を乱射するウルフ。それを凌ぐ牛頭鬼と馬頭鬼は刺股を扇風機の如く回転させて打ち落としていた。

《デンデンデデエ、デエデエンデルとうるいやく、デンデンデデエ、デエデエンデルとうるいやく、デウデウデンデン、でえーん、デデンデッデ》

「馬頭鬼、思った以上にやるぞ、こいつら」

「畜生めが、雷獣もおされていやがる」

「があるるるううー！」

後ろに跳ねて後退する鬼たち。それに気付いた雷獣も逃げるように二匹の元まで引き下がる。

《デレレレーン、ららあん、ららららあん、デレレレーン、ららあん、ららららあん、デウデウデンデン、でえーん、デデンデッデ》

「牛頭鬼、こうなったら例の作戦で行くぞ！」

「がってんだ、馬頭鬼！」

牛頭鬼が猛牛のように走り出した。その陰に隠れるように馬頭鬼も続く。

《会話など、なすしに、内側に潜って》

『うわ、二番にはいったよ！』

「ちょっと痛いニヤア」

意外と冷静なメニヤースであった。

「ほほう、一直線に仕掛けて来るか。面白い。婆さん、こっちも同じで行くぞい！」

「あいよ、あんた」

ウルフが走り出すと、その陰に隠れる様にタイガーが続く。牛頭鬼と馬頭鬼を真似ている。

《考えが読み取れる、不思議な夜》

『ジェットスクリームアタックだ！』

縦に並んで突撃しあう二組。

激突しあう寸前で、先に攻撃を仕掛けたのは牛頭鬼の刺股だった。武器のリーチが突き技で先を取る。

「ぜい！」

だが、牛頭鬼の刺股をウルフは槌拳で叩き落す。大理石の床に刺股がぶつかり金属音を響き渡す。

《貴方の名、呪文みたいに無限のリピート》

「とっ！」

「とちや！」

牛頭鬼の頭上を飛び越え馬頭鬼が前に出る。

それと殆ど同時に、ウルフの頭上を飛び越えタイガーが攻め出た。

《憎らしくて手の甲に、爪をたててみる》

二人の頭上で馬頭鬼とタイガーが激突した。空中戦である。

デエデエデデッ

キ

キキキキキキキキ

キ

キキキキキキキキ

キ

キ

ララララララララ

ララララララララララ

ラ

ラ

ララ

ッ!

『きらっ!』

憑き姫の振り付けを真似る昂輝。

「この少年もウザイニヤア……」

冷たい視線を昂輝に向けるメニヤース。軒太郎は眉間を指で摘まんだまま俯いていた。

《身体ごと透き通り、絵のように漂う u h u h》

「馬頭、あんたは悪霊に強いが電撃はどうなんじゃ」

怪しく笑うタイガーに馬頭鬼が刺股を突き立てる。しかし、タイガーは電撃を纏った掌打を刺股に叩き込んだ。鉄製の刺股を伝わり電撃が馬頭鬼に流れ込む。

「ぎいあぁー」

《けし粒の生命でも、私たち瞬いてる》

悲鳴を上げながら馬頭鬼が墜落していくと、その陰から今度は雷獣が跳ねて来る。タイガーに噛み付こうと大きく口を開けていた。

「お前さんの相手は、ワシじゃないて」

言いながら降下していくタイガーと入れ替わってウルフが跳ねて来る。

《魂に銀河 雪崩れてく》

「狸妖怪、御主は電撃に強いが、悪霊に対してはどうじゃ」

薄笑いに口元を釣り上げるウルフが、右手の掌を雷獣の開いた口の前に向けていた。

《流星にまたがって、あなたに急上昇 oh oh》

「喰らえや、外道悪霊弾！」

「きゃいいいいん！」

口の中に砲撃術を喰らった雷獣が吹き飛ばされた。

致命傷に近いかなりのダメージを負う。

口から煙を上げながら四本足で着地すると、大量の鮮血を吐き散らしながらよろめいた。

電撃にやられた馬頭鬼は相棒の肩を借りて立ち上がると、ふたりで逃げるように後退して行く。

《濃紺の星空に、私たち花火みたい》

しかし今回ばかりはウルフとタイガーも間を取らない。好機と察して一気に三匹の妖怪を攻め立てる。深追う。

「ありつたけの合成悪霊を叩き込んでやるわい。悪霊誘導弾無限！」

《心が光の矢を放つ》

前方面から襲い掛かる悪霊の誘導弾。逃げる隙間もない程の数である。

「これは、ひとりでは凌げるか……」

馬頭鬼に肩を貸したまま冷や汗を流す牛頭鬼。

雷獣もきよきよと首を振って焦りを露にしていた。危機であることは間違いない。

「いいや、お前さんにも防がせないよ。電光石火残像拳十倍！」

《けし粒の生命でも、私たち瞬いてる》

超速度のタイガーが、悪霊弾の隙間を縫って牛頭鬼に迫る。牛頭鬼が気付いた時には右横にタイガーが立っていた。

「貴様は、光か！」

《魂に銀河 雪崩れてく》

右から攻撃。飛び来る拳法。

こめかみ、背中、脇腹、太股、膝、脛。一瞬で数打の激痛が迸る。

「ぎいえええええ！」

《魂に銀河 雪崩てくう》

牛頭鬼が悲鳴を上げた。そこに悪霊弾が無数迫る。タイガーは再び光の速さで悪霊弾を掻い潜ると亭主の元へと戻った。

《デエンデェ〜ん、デエンデェ〜ん、デエンデェ〜ん》

そして、三匹の召喚妖怪は、無数の爆撃を浴びて爆炎に包まれる。

《デッデン、デッデー……デンデン》

ラストの決めポーズを取る憑き姫。

七人岬の演奏が終わる。

爆炎も収まり謁見室に静けさが舞戻った。

悪霊弾の爆撃後には、消し炭のようになった三体の屍が転がっていた。た。

それもやがて霧となって消えて行く。

『つ、憑き姫さん……。ど、どうでもいいけど、味方の妖怪……。三匹ともやられちゃったよ……。』

「ごめんなさい。つい歌に夢中になって、彼らの戦いを援護する

の忘れていたわ」

歌い終わった憑き姫は、いつも通りのクールな彼女に戻っていた。淡々と間抜けな言い訳を並べる。

『歌うのに夢中になっていたのか……。じゃあ、しょうがないよね。うん、しょうがない』

「「しょうがない！」」

軒太郎とメニヤースが、同時にツッコミを入れた。

真の魔人（ナイン）

七人岬が楽器やスタンドマイクもろとも消えて行く。
憑き姫が召喚していた妖怪すべてが居なくなった。

「さて、お嬢さんや、次はどうするかね？」

「また新たな妖怪を召喚して、歌でもうたうかえ、歌姫や」

ウルフとタイガーの口調には、明らかな揶揄が込められている。
しかしながら憑き姫は、露骨な挑発に乗らない。感情を崩さない。
そして、無言のまま次なるカードを取り出す。

「九尾の狐 ザ・ナインテールクイーン！」

眩く輝くカード。

謁見室内の空気が一瞬で変わる。

光の中から大量の妖気が溢れ出し謁見室内に広がって行く。タイガーが呼び寄せた悪霊の冷気も飲み込んで行った。

そして光の中から現れるは妖狐の最高位、九尾の狐。大妖怪である。

狐の妖怪は、美しい女性の姿をしていた。

戦国時代の奥方を連想させる外見。

鮮やかで豪華な着物に、床まで届く長い黒髪。
シャープな美面に切れ長の眼。

スラリと通った華に細く誘惑な唇。

大人の落ち着きを見せる彼女の背後には、塵気楼に映る幻覚のような透けた九本の尻尾が揺らいでいる。白く暖かそうな毛並みであった。

すべてが妖艶である。

「九尾の狐とはまた、随分と大物妖怪を召喚しおったな」

「こりゃあ、厄介じゃぞ」

老夫婦の表情が険しくなる。

昂輝が強烈な妖気と美しい容姿に見とれてしまう。クールで落ち着いた美しさが、何処となく憑き姫に似ていると考えていた。

憑き姫が、呆けている昂輝を見ながら九尾の狐を指差し言った。

「母です」

『マジ！』

「嘘」

『やっぱり………』

真顔で昂輝をからかった憑き姫は、再び老夫婦の方を向きなおす。そして歩き出すと九尾の狐と重なり合うように融合する。

憑き姫と九尾の美女が合体した。

見た目は巫女服を着た憑き姫と変わらない。ただ彼女のお尻の辺りから大きく長い狐の尻尾が九本扇型に靡いていた。

「憑き姫の必勝戦闘モードだ」

軒太郎が静かに呟いた。

憑き姫最強戦闘ホーム。

妖怪との融合。

それがもうひとつの召喚妖怪の戦闘力を延長させる術。

今現在の憑き姫は、茨巫女と九尾の狐を同時に着込んでいた。

妖狐の尻尾も揺れていたが、黒い茨も蠢いている。

「目に映るはひとりの鬼姫じゃが、中身は一人と二匹の妖怪の集結体。事実上は三対二というわけかえ……」

「先の三対二とは、訳が違う。今まで異常にやっかいになったわい……」

真の魔人（マツチレス）

黒茨と九尾を揺らす憑き姫を警戒しながら会話を続けていた老夫婦が姿勢を変える。

タイガーは体を低く落とし電撃音を鳴らしている。ウルフは再び弱霊を集めて合成悪霊を作り出していた。僅かな間で準備は整う。

「一気に行くぞい」

「あいよ、あんた」

言葉の後に視線で示し合うと、前を向いたタイガーが突然攻め出る。

「電光石火残像拳！」

真っ直ぐに進み憑き姫との間合いを縮めたタイガーであったが、拳法の届かない距離で足を止めた。

そして。

「雷光太陽拳！！」

刹那の強光。

電撃の眩さを越えた痛い光が謁見室を白く染め上げる。

昂輝、メニヤース、グスタフの三名は、悲鳴を上げて両目を押さえた。視力が光に痛められる。

軒太郎はテンガロンハットの鍔で視線を隠して難を回避していた。

目眩ましを策すると知っていたのだろう、ウルフも被った毛皮で防御していた。

そしてウルフは前方に立つ妻を迂回させる軌道で悪霊誘導弾を複数放つ。

一方、眼前でフラッシュを浴びた憑き姫は、目を閉じたまま棒立ちしていた。

慌てていない。冷静である。

視力を奪われたかは不明であった。

状況がどうあれ迫り来る悪霊の弾丸。

しかし、茨鞭と九尾が自動的に動いて功弾を叩き落としてく。

ウルフがダツシュ、タイガーに追いつくと夫婦揃って前に飛んだ。

夫婦同時の拳脚乱武。

軟硬様々な拳法を多彩に繰り出す。

極上の技拳。

互いにスピードやタイミングを変えたりして巧みなで難度の高いフエイントを作り上げていた。

長年連れ添った老夫婦ならでわである。まさに阿吽の呼吸。

だが、それでも憑き姫は、我流の体術とやらで躲していく。目を閉じたままだ。

九尾の狐と融合したことで、更に身体能力が向上しているのだろう。躲す体術が、前よりも数段速くなっている。

当たらないが諦めないふたり。

ウルフとタイガーは拳脚を撃ち込みながらも立ち位置をずらして行く。
ウルフが右にずれて行き、タイガーが左に動く。
老夫婦が憑き姫を挟み込むようにポジションを移す。

左右からの攻撃を躲し続ける憑き姫が口を開く。

「目を封じても無駄。挟み込んでも無駄。拳法も無駄。仙術も無駄。お爺ちゃん、お婆ちゃん、無駄な努力よ」

「黙れい、鬼姫！」

タイガーが声を荒立てるのを合図に、ふたりがかりの大技を繰り出す。

「鉄山靠！」

肩からの当て身技で憑き姫を挟み込もうと八極拳を仕掛ける老夫婦。

「なっ!?!」

だが、突進の背中二つを、憑き姫は両腕を開いて片手ずつで止めてしまう。

「ば、ばかな……」

啞然と呟くは、目眩ましから視力を回復させたばかりのグスタフだった。

自分たち五人が同時に喰らい地に伏せる結果となった強烈な大技を、

小娘一人が細腕だけで止めてしまう。有り得ないと驚き、その光景が信じられないのだろう。

「「退馬後脚！」」

背中を押さえられたふたりは、その体制のまま同じ蹴り技を同じタイミングで繰り出した。

踵で掬い上げるような後ろ蹴りである。

躲す憑き姫。

「な、なんなんだ……。あの小娘は……」

またもや啞然と驚いて声を溢したのはグスタフだった。

憑き姫は、下から襲い来た二つの踵を、ただ躲すだけでなく。その踵を踏み台にして立っていた。

もちろん昂輝やメニヤースも驚いている。

昂輝は何故にあれほどの体術を習得しているか訊きたかったが、驚きの連続のあまりに声が出なかつたのである。

「愚か、宙に出るとわ！」

憑き姫が立つ脚を引いた老夫婦は、振り向きざまに攻撃を狙う。空では移動が叶わない。回避が出来ない。可能はガードのみ。ふたりは、しめしめと、上段の裏拳と廻し蹴りを打ち込む。

しかし、またもや攻撃が空振った。

まるで、そこには無い立体映像を攻め立てた感じである。不思議と拳脚はすり抜けた。

「だから無駄」

空振った老夫婦の間に、先程と変わらないように憑き姫は立っていた。

もう、瞳は開いている。

馬鹿など、驚きながらもふたりは次に動く。

ウルフが伸ばした拳が、憑き姫の頬に添えられる。

零距离打撃。ここまでくれば躲せない筈の寸勁が狙える。

タイガーの伸ばした手が、憑き姫の二の腕を掴んでいた。

電撃仙道。放電術で高圧電流を確実に流し込める。

ここに来ての好機。

不自然。

信じられないとふたりが状況を疑う。

あまりにもわざとらしいチャンスであった。疑うも当然だろう。

しかし、ふたりの行動は選択の余地がなかった。攻撃を実行するしかない。

「寸勁！」

「電撃放電！」

ふたりが拳術と仙術を同時に放った。

「「!？」」

絶対命中の攻撃の筈が、憑き姫を捉えない。
それ以上の最悪が老夫婦を襲う。

ウルフの寸勁は何故か妻の頭を弾き、タイガーの電撃は夫の体を焦がしていた。

憑き姫の腕ではなく、タイガーはウルフの腕を掴んでいた。

「な、に、があ……、起きた……」

全身から焦げ臭い煙を上げるウルフの腕をタイガーが、打撃に仰け反りながらも掴んでいる。

謎の同士討ち。

そして、夫婦揃って膝から崩れ落ちた。仲良く横たわる。
憑き姫が、それを見下ろしながら立っていた。

「仙術も拳法も無駄だって云ったでしょ」

昂輝たちにも何が起きたのかわからない。

確かにウルフの拳は憑き姫のこめかみに添えられていた。タイガーの手は、間違いなく憑き姫の二の腕を掴んでいた。

だが、次の瞬間には、憑き姫は一步後ろに下がっており、夫婦が同士討ちしていたのだ。

訳が分からない。

この状況下でグスタフは思う。

あの妖怪老夫婦が敵わないのだ。はなから自分が、あの連中に太刀打ちできる可能性は無かったのだらうと。

まだ、倒れた老夫婦を見下ろす憑き姫が言った。

「ねえ、死んだふりで逆転のチャンスを狙うのは、仙術なの拳法なの。どつた？」

『死んだふり？』

昂輝のリミピットチャンネルに合わせて老夫婦がゆっくりと立ち上がる。

「やれやれ、ばれとつたかい」

「まったく隙の欠片もない娘じゃわい」

ぼやくウルフとタイガーは、そのまま敵に背を向けたままグスタフの前へと移動して行く。そして床に伏せる執事の前に立つと、こう切り出した。

「すまんの百人将軍。こりゃあ駄目だわい」

「わしら夫婦でも、あれはどつにもならん」

「屈辱だが、負けを認めざるおえんわい」

「貴様ら……」

悔しそうに牙を剥くのはグスタフの方だった。ウルフとタイガーは、落胆の色を見せてわいるが、さほど悔しそうでもない。

「こんな老体では、ピチピチの可愛い子ちゃんには敵わんて」

「そうじゃ、そうじゃ。あと八十歳若ければのおく、いや、せめて六十歳かのお」

若い頃の肉体と体力。長年培った老人としての経験。その両方が、同時に備わっていれば勝てるかもと、述べているのだろう。

だが、それは難しい。

人とは、若いが経験不足であり、その経験を埋めた分だけ若さを削るものだ。

それこそ人生の歩みだろう。

「ならば、その願い。叶えてしんぜようか。ウルフとタイガーよ」

突如、謁見室に響き渡る若い男の声。

声色自体が、癩に障るほどに如何わしい。

皆の視線が、玉座の後方に在る出入り口に集まる。

そこには、上半身裸で、後ろに美女たちをはべらかせた金髪の男が立っていた。

声の主は、この若者だろう。

「わ、若様……」

「グスタフ、殿下と呼べ！」

ナイトメア公爵登場。

真の魔人（デビル）

謁見室の入り口に立つナイトメア公爵は、敷居を跨いだが室内に深く立ち入らない。

ハーレムの美女たちは、通路から覗き込んでいるだけで、決して室内には入ろうと考えていない様子だった。

ナイトメア公爵はチャラチャラとした素振りだったが、警戒を粗末に行なっていた。

その気になればウルフやタイガーを越えて憑き姫が襲いかかれる間合いだと心得ている様子であった。

「なあ、ウルフにタイガーよ。貴様らがこの城に招かれた真の理由を覚えているか？」

「なんだったかのぉ、古い話で忘れてしもうたわい」

嘘である。ウルフの口調に揶揄が感じられる。

やっと体力が回復したのか、玉座に寄り掛かりながらグスタフが立ち上がる。

そして、老夫婦を睨みながら喋りだす。

「ほ、本来ならば……、私が若様に戦術兵法を伝授して、貴様ら夫婦が拳法仙術を指南する。その筈が……」

「何を身勝手なことを言う、百人将軍」

「それは、先代の当主が勝手に考えたこと」

「そうじゃ、そうじゃ。命を落としたワシらの魂を、引きずり込むように城内に閉じ込めといて何をぬかす」

「ワシら夫婦は、そのような依頼を受けた覚えすらないわい」

事実である。

老夫婦の言い分に、偽りはない。

今度は、見下すような視線のナイトメア公爵が語る。

「父上は、私に立派な魔族に成長してもらいたかったただけだ。貴様らの同意を求めるよりも早く、この城に招いたのは失礼だったやもしれない。その辺は、許せ」

謝罪を述べるが上からの言いようである。

「我々魔族の生まれは、種族が遺伝して行く強力な能力を秘めている。身体能力も魔力も、並の人間を遥かに凌駕する。しかし、人間は弱い生き物でありながら魔族の強さを越えてくる。父は、それを恐れて息子の私に訓練を義務つけた」

グスタフ、ウルフ、タイガー、三人の老人が、悪夢城に招かれたのは、それが理由であった。

グスタフは、それを了承したがタイガーとウルフは断りながらも城に止まった。

この城に居れば、成仏がなくなる。

分かり易く言えば、天国にも行けないが、地獄にも落ちない。

死した夫婦は、死後の世界を恐れて、悪夢城に止まったのだ。

幸いにも先代のナイトメア公爵には、ふたりを城に招き入れる力を備えていたが、追いつき出す力までは備えていなかったのだ。

そして、追いつき出す気もなかった。客人として引き止め続けたのである。

言うはタイガー。

「ワシら夫婦は、グスタフとは違うわい。軍人でもなければ殺人鬼でもないぞい。」

貴様らは、悪魔に、血のにじむような思いを乗り越え習得した術を、欲の為に指南する積りはないわい」

続くはウルフ。

「例え、如何なる望みを叶えてもらおうとも、悪魔に加担はできん。そこまで落ちる積りはないわい」

「ぐうう……」

強く奥歯を噛むグスタフ。

グスタフは、先代ナイトメア公爵が提示した条件を飲み、願いを叶えてもらう代償として、跡取りとなる若君に忠誠を誓うと同時に、戦術や兵法を伝授した。

更に、体術の類を指南する筈だったウルフとタイガーが申し出を断ると、代わりに武術の類も教えている。

老夫婦から見れば、グスタフは、悪魔に魂を売った人間なのである。

外道なのだ。

夫婦がグスタフを嫌う理由が、それであった。

「まあいいさ、そんなことは過ぎた過去だ。私とて、もうお前たちから何かを学ぼうともおもっていない。そんな歳でもないしな」

ならば、何故に、この場に足を運んだか。

老夫婦は、そのように思いながら若い悪魔を見ていた。

「それにしても、この悪夢城最強と言われている達人ふたりが揃って戦っても敵わない強者が、あんな小さな小娘だとは、なんともビツクリな話だな。この場に参上して驚いたぜ」

憑き姫の冷たい視線と、ナイトメア公爵の蔑視が合う。

「なんともクールな小娘だな。あと五年もしたら、えらい美人に育ちそうだ」

ナイトメア公爵の後方で、ハーレムの美女たちがこそそこそと何かを話している。

「どうだ、娘。この悪夢城で暮さぬか。後々は私のハーレムに加えてやるぞ。報酬に、どんな願いでも叶えてやる」

「断るわ」

即答。

憑き姫の口調は、ナイトメア公爵の申し出に、興味の欠片もないと訴えていた。

「そうか、実に勿体無いな。悪い条件じゃあないと言うのに。富も、名誉も、永遠も、すべてが約束されるのだから」

「望みも、願いも、誰かに叶えて貰ったら、なんの価値もなくなるわ」

そうである。

幼くても憑き姫は、そのことを心得ている。

ナイトメア公爵の後ろで、柔肌を露出しながら悪魔に依存して生きている愚かな女たちとは違うのだ。

憑き姫は、強い。

それは、人並みはずれた戦闘力が強いだけではない。

彼女は、心が強いのだ。

意思が強いのだ。

妖怪の魂を操るだけあって、己の魂も磨き上げられているのだ。

スピリットから、強者なのだ。

真の魔人（カントラクト）

「まあいいさ、五年も待ちたくないし、女には不自由もしていない。それよりも」

話題を最初に戻すナイトメア公爵は、両腕を広げてオーバーに喋る。

「ウルフにタイガー、どうか、今からでも遅くわない。我輩に忠誠を尽くすきはないか。忠誠と述べてもやることは今までと変わらない。ただ侵略者が現れるたびに排除してくれればよい。それ以外の仕事は言いつけぬ」

「その代償として、ワシらに若さをくれるというのかえ」

「如何にも。この悪夢城内限定の若さだが、どうせ成仏も輪廻も考えていない貴様なら関係あるまい。この城から出て行く気もないのだろう。それならば若い肉体を有したほうが、楽しかろう」

少しの間、考え込むウルフ。細い両腕を組んで首を捻りながら唸って悩む。

結論を夫に任せるようにタイガーは横で黙っていた。

そして、暫くするとウルフが口を開いた。

「確かに公爵の言う通りじゃ。しかし、忠誠を誓うのは癪じゃわい。それに、悪魔の力で若返っても、城内に使えている連中のようにけつたいな姿に変えられてしまうのじゃ。あれはあかんわい」

昂輝がメニヤースを視線だけで追う。

確かにけつたいな姿である。

「あと、変な語尾もつけられてしまつしのお」

四天王を鑑みれば分かるが、確かに可笑しな姿や語尾を強制されている。

メニヤースはニヤア。リヴァイアサンはギョ。キングマンティスはゲマだった。ゲマに関しては、特に意味が分からない。昂輝もあのようなキャラ付けは御免だと思う。

「まあ、その辺は趣味の世界だ。強制的ではない」

サラリと述べるナイトメア公爵。

ただの嫌がらせかと昂輝は思っていたが、そうではないようだ。

「そういえば、グスタフの語尾が、たまに消えているニヤア？」

遠くで隠れていたメニヤース問う。

確か、グスタフの語尾はデスの筈である。

その疑問にグスタフ本人が答えた。

「私は、先代の力で願いを叶えて貰っているのデス。先代の契約には、語尾を付けるはなかった。

若様は、まだまだ願いを叶える能力が熟練されてらっしゃらない。

その為に、語尾が付いてしまつのデス」

「変な容姿は趣味で、変な語尾はミスだったのニヤア……」

「普段の私は、若様の趣味に合わせて語尾を付けているだけデス。その気になれば語尾を省ける」

「まあ、細かなことは気に止めるな、メニヤース。
なんとも忠誠心溢れる当主思いの執事ではないか」

気障な口調で言うナイトメア公爵は、己の未熟さを気に止めていない様子であった。

ふと、何かに気付くナイトメア公爵。

眉間に皺を寄せて目を細めると、首を突き出しながら遠くを凝視する。

「ところでメニヤース。何故に貴様は、そこで侵入者と一緒に隠れているのだ？」

「にやにや……。にやんと言いますが、いろいろありましてニヤア……」

罰の悪そうな顔でメニヤースは、軒太郎が羽織る黒コートの陰に隠れた。息を止めて気配を消す。

グスタフが、四天王たちが裏切り逃亡をはろうとしていると、報告しようとした時、ワントンプ早くウルフが喋りだす。

「今は、あの猫娘はどうでもいいわい。まずはワシらとの話が先じやて」

「では、どうする。我輩の配下に加わるかウルフよ」

「良かろう。公爵に忠義を誓おう。この城を攻めてくる輩はワシらが撃退してやるわい。」

ただしじゃ、ワシは可笑しな語尾は御免じゃぞお。けつたいな仮装もする気はないぞ」

ウルフが強い口調で言った。

「良かるう。ただし、木偶を操る能力や、特殊能力を与えることは出来なくなるが、構わんな。若さと身体能力の向上しか約束できんぞ」

「それだけで十分じゃわい」

「そもそも特殊能力を与えたりすると、その歪で容姿が変わったり語尾がついてしまうのだよ。悪魔が願いを叶えてやるのにも、それなりの技術がいるってことさ」

その点では、先代は完璧だったとグスタフは心中で思う。

グスタフは、先代から願いを叶えてもらい、跡取りを守る為に特殊能力を与えられたのだ。

今思えば、変な容姿や語尾が付かなくて幸せだったと安堵する。

「まあいい、契約は成立だ。ウルフ、タイガー、我が期待に応えてくれよ」

ナイトメア公爵は、言いながら両腕を前に出す。掌が上を向いていた。その掌内からドロドロとしたヘドロのような液体があふれ出した。

「これが魔の水。悪魔霊水。人を外道に導く邪悪な聖水だ」

「な、なんと怪しげな……」

黒々としたドロドロの液体は、大理石の床を這って老夫婦を目指して流れて行く。

まるで邪悪な意思を持った生物のように動いていた。

「怯える必要はないぞ。それが貴様らを包めば儀式が終わる。次に目を覚ましたときには、すべてが終わり、新たな肉体と、新たな力が宿っていようぞ」

「うわわわわわ……」

黒いへドロがふたりの足を登って全身を包んで行く。見る見るうちに老夫婦がへドロに飲み込まれる。

真の魔人（グロウヤンガー）

「なんと見ても、気持ち悪いニャア……」

メニャースは、自分が悪魔に魂を売り渡した時のことを思い出していた。

父はアメリカ人で、ワシントンに在る大手出版社で働いていた。母は小説家である。

ふたりが何処で知り合い、どのような恋に落ちて結婚したかは知らない。興味が無かったので訊いたことがない。そして、何故離婚したかも知らない。

母が五年前に死去してிரらい一人で暮していた。母が残してくれた一戸建てでだ。

近所に祖父と祖母も住んでいたし、母の遺産と父の仕送りもあったので、ひとりでも十分に暮らせていた。

高校にも通っていた。

だが、母の遺品を整理していたある日、それを見つけてしまう。昔、母が書いた小説。

『悪夢城の公爵』

初版であった。

その晩を境にメニャースは、この世界に入り浸るようになった。

この世界は、とても面白かった。

居心地が良かったのだ。

勉強もあまり出来ない。学力は、赤点ギリギリ。追試にならないように猛勉強して、それだ。

運動神経も乏しい。水泳の授業で、二十五メートルも泳げない。百メートルを走れば嘔吐してしまう。

何よりも、クラスメートの女の子とは、話が合わなかった。

幼少時代をアメリカで過ごした彼女には、日本の『空気を読む』という意味合いが理解できなかったのだ。アメリカには、そのような言葉はない。

だから、学生生活は、とても苦痛だった。

それが原因で、不登校から引き籠もりと成る。

そして、引き籠りは更に悪化し、夢の世界に落ちた。

ここには、自分と同じような人々が多かった。

だから自分を理解してくれる人も多かった。

そのような人たちを、自分も理解できた。

城主のナイトメア公爵は、彼女を歓迎してくれた。

そして暫く経つと、この城に永住を申し出てくれた。

彼女は、迷わず申し出を受け入れた。

だが、条件があった。

それが、城主に忠誠を誓うこと。

ハーレムに入るか、兵士になるか。

そして、忠誠の証に魂を売ることであった。

悩んだが、結局彼女は申し出を飲んだ。

兵士になった。

戦うのは苦手だったが、特別な能力、強靱な身体能力が素晴らしかった。

兵士になっても気分は頗る良かった。

そう、魂を売ったのだ。

心の隙間を、悪魔に突かれたのだ。

だが、いざ戦いが始まると、心の弱さが露見してしまう。足が竦み、逃げたくなった。だから逃げた。

そして今、眼前でふたりの老夫婦が魂を売り渡そうとしている。

若さを取り戻す為に。

ただ、幼い少女に勝利したいがためにだ。

ハルパス、リヴァイアサン、キングマンティス。彼ら三人が同じように、ヘドロに包まれる光景をメニャースは見守ったことがある。だから知っていた。この後、ヘドロが流れ落ちると、その下には変身を遂げた姿が現れることを。

皆が見守るなか、黒々としたヘドロが老夫婦から流れ落ちて行く。異変は、直ぐに鑑みれた。

先にヘドロがすべて流れ落ちたのは、ウルフの方だった。ドロドロの液体は、床に広がると消えてなくなる。

「こ、これは……」

己の両手を見るウルフ。

「皺がない……。肉付いている、艶がある……」

ウルフの容姿が完全に変わっていた。

怪しげな狼の毛皮を被っていない。服装は、黒の学生服に替わっている。

身長が伸びている。

背筋を伸ばして凜と立っている。

年齢は十七、八。表情は若々しい。

何処にでも居そうな高校生に見える。

完全に若返っていた。

「こ、これが、若さ……」

ウルフが呆然としてしていると、続いてタイガーのヘドロが流れ落ちて行く。

ヘドロの下からひとりの美女が現れた。

その容姿に皆が驚く。

ウルフも若返った妻を呆然と見詰めていた。

「凄いつちゃ。肌がスベスベだつちゃ……」

へドロの中から現れた美女は、若返ったウルフと変わらない年頃に窺えた。

しかし、明らかに異変がある。

腰まである長い髪は、艶めく緑色。

顔は釣り目で美しいが、耳の先が尖がっている。

ウルフ同様に、被った虎皮は身に付けていないが、頭に鬼の角が二本生えていた。

衣装は虎皮のビキニとロングブーツである。

通路に隠れているハーレムの美女たち以上に露出が多くセクシーであった。

若い頃のタイガーにそっくりだが、根本的な部分が異なっている。

タイガーが、自分の身形を見回し大きな声を上げる。

悲鳴にも、怒号にも聞こえた。

「な、なんだっちゃ、このかつこうわー！」

恥ずかしさよりも怒りの方が大きいらしい。暫くして状況を飲み込めたのか、ギロリと契約主を睨みつける。

厭らしい表情で笑うナイトメア公爵が、ふざけたことを言い始めた。

「あ、そうそう。忘れていた、変な格好と語尾の件だけど、その条件をだしたのは、確かウルフだけだったよな。タイガーは一言も言っていないよな。」

ナイトメア公爵の表情は、してやったりと微笑んでいる。

皆が、先程までの会話を思い出す。

確かにそうだったかもしれない。

ウルフは拒否を強く意見していたが、タイガーは交渉をただ横で聞いていただけで、自分の条件を出していなかったかもしれない。悪魔に隙を突かれた形となる。

「だ、騙したつちゃね！」

「あはははー。まあ、怒るなよ、タイガー。その分だけ、木偶を操る能力や特殊能力が、そなたには備わったからよ。ただ若くなっただけじゃあないからよ」

「要らない気遣いだつちゃ！」

激昂するタイガーが電撃を放出しながら浮かび上がる。足が地を離れた。

本人は意識していない様子だ。浮遊術も使っていない。

「お前、浮いているぞ……」

「あ、本当つちゃ……」

ウルフに指摘されて自分が自然に浮き上がったことにタイガーも気付いた。

「本当だつちゃ。自然に飛んでいるつちゃ」

高く飛び上がるタイガー。自由に室内を飛び回ると、天井からぶら下がるシャンデリアをグルグルと回った後に、地上に戻ってきた。

「凄いつちゃ。自由自在だつちゃ。まるで鳥と同じぐらいに飛びまわれるつちゃ」

与えられた能力にタイガーは、驚きながらも満足している様子だった。

先程までの怒りも冷めている。否、忘れていただけかもしれない。

「満足したか？」

「ふん、だつちゃ」

そっぽを向くタイガー！

自慢げに微笑むナイトメア公爵が、契約の最後の仕上げを施す。

「ウルフとタイガーよ。ふたりには、我に忠義を誓った証として、今の名前を奪わせてもらう」

「名前を、奪う？」

「貴様らに、新しい名前をくれてやる。ありがたく受け取れ。古い呼び名は、もう口に出らんぞ」

この世界で魂を売ったものは、名前を奪われる。

そして、新たな名前与えられる。

本名も、過去の偽名も使えなくなる。

それが、最後の仕上げである。

まさか。

昂輝は思う。

軒太郎やメニヤースも察したらしい。
更なる罨を。

ナイトメア公爵が、いっそう如何わしく笑いながら名付ける。

「今日から貴様らの名前は、当瑠あたると羅夢らむだ！」

やっぱり〜、と、皆が心中で呟いた。

新生魔人夫婦、当瑠と羅夢、誕生。

「なんじゃい、その名前は！」

「ふざけるのもいい加減にするっちゃ！」

怒鳴る夫婦。

若返ったふたりの声は耳に響く。

実に、うるせいやつらである。

真の魔人（リターンマッチ）

「まあまあ、若夫婦よ、そう激昂するなよ。望み通り若返ったんだ、思う存分若さを暴力に代えて暴れまわってみたらどうだ。それがしたかったんだろ」

「まあ、そうだが」

「まあ、好きにしたらいい、私は自室に戻って彼女たちとイチャイチャしているからよ」

親指で背後の女たちを指差したナイトメア公爵は、卑猥な笑みを浮かべる。

「とつとと侵入者を撃退してくれよ。城内が騒がしくって仕方がない、落ち着いて女とイチャイチャもできないからよ」

この夢魔は、女とイチャイチャすることしか頭がないのだろうかと思っ

そしてナイトメア公爵は、踵を返して女たちが待つ通路へと歩んで行った。

しかし何かを思い出したように振り返る。

「グスタフ、いつまで休んでいる。行くぞ」

「は、はいデス……」

玉座に凭れ掛かるグスタフは、力少なく返事を返す。

「なんだ、歩けないのか、歳を取ったな、お前も。女たち、誰かグスタフに肩を貸してやれ」

ナイトメア公爵が女たちに指示を飛ばすと、ふたりの女がグスタフに駆け寄り肩を貸す。

「じゃあ、当溜に羅夢、あとの掃除を頼んだぞ」

その言葉を最後にナイトメア公爵は、謁見室を退出していった。あとにグスタフやハーレムの女たちが続く。

しばらくして。

「で、続き、やる？」

ここまでのやり取りを黙って聞いていた憑き姫が久々に口を開いた。九尾と黒茨が彼女の周りで踊っている。

「どうやら待たせたようだ。詫びを述べよう、すまんな」

「それにしても律儀な娘っ子だっちゃ」

「まったくだ、敵のパワーアップを待っていてくれるとわの」

「で、続き、やる？」

「ああ、やるとも」

「その為の若返りだっちゃ」

ゆるりと前に出る老夫婦。

否、若夫婦。

対するは、茨を纏う九尾の巫女、憑き姫。

まるで王者の如く凜とした態度で待ち受ける。

またもやウルフ改め当瑠の上空で、弱小霊体が渦を巻きながら集結を始める。

今度の霊体の数は、先程の数より多かった。謁見室の天井を黒雲の如く埋め尽くして、部屋を照らしていたシャンデリアおも覆い隠す程である。

『若返りのパワーアップが、集める靈魂の量を増しているのか……』

上空を見上げながら昂輝が言うと、渦巻く弱小霊体が当瑠に次々と落ちて行く。まるで取り憑くように体内に吸い込まれる。

体内で霊体を合成して弾丸を捏ね上げているのだろう。

「どんなに若返ったところで私から見れば貴方たちは老人。

先人を労わり敬意を評して接するは、当然の当然。

さあ、若返ったのだから今度こそ全力でかかってきたらいいわ。あ
いかわらずの二対一で結構よ。弱いんだから」

「うわ、台詞の前半と後半とで、敬意の評し方に大きな差がある
っちゃ……」

「だな……」

「うちのパワーアップに脅威を感じていないようっちゃね」

タイガー改め羅夢の怒りが、小馬鹿に嘲る台詞を聞いて温度を上げる。

羅夢の全身から若さと一緒に電撃が弾け出る。

「御託も永かったから、ちよつくら事の運びを早めるか。どうやら排除しなくてはならない侵入者は、他にも多く居るようだし」

「だっっちゃね」

「行くぞ、羅夢！」

「わかったっっちゃ、ダーリン！」

威勢良く飛び出そうと身を屈めた若夫婦が、羅夢の一言に動きを静止させる。

そして、ゆっくりと首だけを曲げて顔を見合わせるふたり。

「今、ダーリンって呼んだか……？」

「うんだっっちゃ……。今、ダーリンをダーリンと呼んだっっちゃ……」

聞き間違いでない。

言った本人も恥ずかしさに赤面している。

「ダ、ダーリンって……。それも、契約の束縛、語尾の呪い……か」

「若さの代償とはいえ、怖いっっちゃ……」

怖いと言うか、恥ずかしい。

それはさて置き、気分を改めて。

「行くぞ、羅夢！」

「わかったちや、ダーリン！」

大理石を蹴りふたりが同時に飛び出す。
憑き姫は、棒立ちのまま受けて立つ。

先ずは当溜の中段足刀。

シューズを履いた蹴りが、背低い憑き姫の喉を狙っていた。

明らかに老体だった頃よりも攻撃が力強く感じられた。脚速も増している。

それを確定させたのが憑き姫のディフェンス方法だった。

先程までは我流の体術とやらで避けまわっていたのに、今回は避けずに防御したのであった。

揺らいでいた九尾の内二本が眼前で交差して、当溜の足刀を受け止めたのである。

「おや、躲さないのか？ それとも躲なかったのかな？」

「……」

回答を返さない憑き姫。

その憑き姫の真横に閃光が猛スピードで回り込む。

羅夢である。

左腕を右に振り被り手刀を構えていた。

「若さつて凄いったや。電光石火残像拳を使つてもいないのに、これだけの体運びが可能になっているちゃ！」

羅夢は、己の若さから生みだされた速度に驚きながらも攻撃を放つ。断頭を狙う逆水平の手刀が、電撃を帯び光の尾を引く。

「私も本気」

薙ぎの手刀に対して憑き姫は、またもや体術を使わずにディフェンスを取る。

「ぎっ！」

羅夢がくの字になって飛ばされた。

雷撃を帯びた手刀が憑き姫に到達するよりも早く、九尾の一本が羅夢の腹部にヒットする。

薙ぎ払われる形となったのは、羅夢の方だった。

羅夢は地に転がらずに空中を回転して宙に止まる。

連れが弾かれたのを無視して当瑠が攻撃を続ける。拳脚の連打だ。

「せやせやせやせやっ！」

正拳、手刀、回し蹴り、前蹴り、足刀が、上中下段を問わずに打ち込まれる。

しかし、そのすべてが九尾の数々に妨害される。憑き姫に、若返つた当瑠の技が通じない。

だが、まったくの脅威でない訳でもなさそうだ。憑き姫は九尾を操り攻撃を凌いでいるが、少しずつ後退を余儀なくされていた。

「武術に関してはダーリンの方がうちより上だったちゃ。流石の鬼姫も敵しいつちゃね」

言いながら宙を舞う羅夢は、当瑠の背後に回り込む。そして上空から両手を突き出した。

「ならばうちは、仙術で援護射撃だつちゃ」

当瑠の頭上を越えて後方から雷撃で雷砲射撃を開始する羅夢。憑き姫は、地上からの拳法と上空からの雷撃砲によって苦しめられる。ジリジリと後退する歩数が増えていく。

先程までの攻撃方法とたいして変わらない戦法だったが、若返りが齎した能力の底上げは、明確に現れていた。

受けるより躲すは難しい防御法。

もう憑き姫には、ふたりの攻撃を体術で躲す余裕は無い様子である。

「随分きつくなってきたんじゃないのか？」

「そう見える」

「ならば、これならどうだ」

当瑠が攻撃の拳を休めて数歩下がる。

そのまま片膝を付いて掌を地面に合わせた。

「老体だと使うのがしんどくて、滅多に使わなかった合成悪霊の上級術だったが、今ならば容易く使いこなせる気がするわい」

「ダーリン、あれを使うのけ」

「ん？」

憑き姫の足元が波打つ。まるで蒴蒹の上に立っているようだ。

憑き姫が何事かと足元に視線を落とす。すると彼女の足元には無念と怨念溢れる無数の顔が現れ嘆いて居た。

さしずめ顔面柄の絨毯である。

「キモイ……ニヤア……」

遠くから見ていたメニヤースが素直な感想を述べた。

そのキモイ顔面たちが、徐々に合体を始めた。

隣の顔と顔が合体して大きくなる。更に大きくなった顔面同士で合体を繰り返しては顔面積を広げていく。

やがて悪霊顔面は、巨大な一つと化す。

真の魔人（ブラスト）

床に広がる巨大な悪霊顔面。

憑き姫は、その顔面の低い鼻の部分に立っていた。

昂輝が嫌な予感に煽られながら言葉を漏らした。

『なんだ、あの顔面は……』

その声が当溜に届く。

「決まっているじゃないか、いつだってワシが捏ね上げる合成靈魂は、弾丸だ！」

『だ、弾丸！？』

そうである。当溜がタイガー時代から操る靈魂は、飛び道具の弾丸役としてしか使っていない。

故に、大小関わらず当溜の作り出す悪霊怨霊の類はすべて弾丸なのである。

怨念を爆発力に代用したミサイルなのだ。

『あ、あれが弾丸だとするならば、核弾頭級だ……』

「核は反対ニヤア……」

『あの位置から撃ち上げる積りか……、憑き姫を狙って……』

狙うも何も憑き姫は、その弾丸の真上に立っている。

躲す躲さないの次元ではない。

あの位置から悪霊弾丸を発射したら、爆風だけで謁見室が地獄と化しそうであった。

昂輝たちも巻き込まれるが、撃った当瑠たちも巻き込まれるのは間違いないだろう。

「弩級を撃ち込んでやるわい！」

本気で撃ち上げる積りだ。

謁見室内に地鳴りが響く。まるで打ち上げロケットの発射寸前の地鳴りである。

床に広がる悪霊弾丸の顔面が、迫り出すように盛り上がって震えていた。双眸を剥き出しに、危機迫る恐怖の表情だ。

「ちっ、この部屋ごと吹き飛ばす気だ」

舌打ちしながら黒コートを脱いだ軒太郎が、メニヤースを抱き寄せ頭からすっぽりと被った。彼女を隠すように守る。

軒太郎の黒コートは、絶滅した幽霊一族の髪の毛を縫い合わせて出来ている。衝撃と対火能力に優れた一品なのだ。

メニヤースは頬を桃色に染めて目を丸くさせていた。

父以外の男性にハグされた経験が無い。かなり照れている。

この危機に対しても冷静な憑き姫が、揺れる巨大顔面の上で、当瑠に問いかけた。

「貴方たちは、大丈夫なの？」

「当然だ。自分の術に巻き込まれて自爆するほど間抜けではない。それよりも自分の心配をするんだな、鬼姫や」

足元の巨大顔面が、火傷で水膨れしたかのように膨れ上がっていく。爆発寸前だ。

それを見た当瑠と羅夢が身を寄せ合って、両手で印を組む。

すると当瑠が身に纏う衣類の裾から何枚ものお札が這出て重なり合っていく。お札は半球のドーム型シエルターを築いてふたりを覆い隠した。

これが二人の対処法なのだろう。

これで爆発に備えていないのは、目標とされている憑き姫と、例外の昂輝だけである。

呪いの再生能力を持つ昂輝は問題なかるう。死んでも死なない。

だが、憑き姫は違う。冷静な態度から、何らかの対処法を備えていることは間違いないだろうが、いまだに防御の姿勢を取るところか素振りすら見せていない。

「弾丸なのに撃たずに爆発するのね」

冷静に分析する憑き姫。

その周囲の温度が上昇を始めた。

膨れ上がった巨大悪霊弾の顔に亀裂が幾つも広がる。その亀裂から漆黒の妖気が閃光の如く走る。

とても強い妖気であった。

「これは不味いな……。ちょっと少年、こっちに来い」

軒太郎が顔を顰めながら昂輝を呼び寄せた。何かと思いながらも昂輝は軒太郎の側へと駆け寄る。

「ちよつと盾になれ」

『えっ！？』

そう言い軒太郎は昂輝のベルトを掴むと自分たちの前に立たせた。それだけ爆破の威力が高いと予想したのだろう。

『盾つて、人を防御壁扱いしないでくださいよ！』

「黙れ」

昂輝の抗議は、たったの一言で却下される。

軒太郎は身を丸めたままコート内に姿を隠した。

今はメニヤースも居る。ここは彼女を守ることが優先だと昂輝も諦めた。

しかたがないと。

そして、巨大悪霊弾が撃ち上げられることも無く爆発した。

巨大な顔面に似合った、大爆発である。

爆風と爆炎が嵐と化して謁見室内を駆け巡る。

轟音響く室内。

狭い空間での爆発は、更に威力を増幅させる。

ダイナマイト一本が、狭い空間で反響し合えば十本分にも威力を増

すことがある。その現象が、今起きていた。

轟く爆破エネルギーは堅い大理石に反響して、その破壊力を倍増させていた。

行き場を見失った爆破エネルギーが、二つしかないで入り口から押し出されるように逃げて行く。

そして爆風が、廊下を竜巻のように駆け抜け城内に広がった。

自室に帰ろうとしていたナイトメア公爵一行の元まで爆風が届く。

突風程度の威力を失っていたが、女たちは髪を靡かせながら悲鳴を上げていた。

中には思わず転倒してしまった女もいた。

「なんだ、今のは？」

言うナイトメア公爵は、最初だけ驚いていたが、直ぐに冷静を装いながら老執事に訊く。

「おそらくはタイガーの 否、当瑠殿の仙術かと思われますデス。風の中に合成された悪霊の妖気が混じっていましたデスから」

「ほほう、ならば良い報告が聞けそうだな」

満足げに述べるナイトメア公爵。

老執事は、ただ黙って頭を下げた。それならば良いが思いながら。

真の魔人（キャツスル）

グスタフの表情に懸念が浮き上がっていることに気付いたナイトメア公爵が、珍しくも威厳を感じさせる態度で召使と向かい合う。嘘と思えるほどに凜々しい。

「わ、若様……」

思わず言葉をどもらせるグスタフ。このような主の表情を見るのは、先代のナイトメア公爵が他界したとき以来であった。

ナイトメア公爵は、背筋を伸ばして両手を胸の前で組んでいた。先程までの不貞な態度とは正反対である。

「なあ、グスタフ。一体全体、城内で何が起きているのだ？」

今頃になって暢気な質問であったが、問う側の表情は真剣のようであり、訊かれた側も驚いていた。ただただ破廉恥な私生活を送っているだけのドスケベ若旦那とは別人である。

「グスタフ、詳しく報告しろ」

「はいデス」

美女の肩を借りて立っていたグスタフが、それを振り払うと自力で直立した。当主に礼儀を質す姿勢である。

「現在の戦況は、悪夢城サイドの劣勢でありますデス。」

城門正面から攻め込んで来た軍隊は、ガーディアンクラブボールを壊滅させ、続いてジャックビーンズウォールを撃破、更に四天王の一人、武器庫砦のハルパス様を打ち破り城内に侵入、第一階層のラビリンス内を複数が突破、ラビリンス内のモンスターたちは殆ど壊滅状態と思われますデス」

「ハルパス以外の四天王はどうした？ さっきメニヤースが敵と一緒にいたようだが」

「他の三名は、裏門から浸入してきた伏兵と交戦。キングマンティス様とリヴァイアサン様は、そやつらに敗れたもよう。メニヤースに関しては、こちら側を裏切り敵に付いた模様デス」

「裏切った……。ちっ、あのメス猫が、ふざけおつて！」

「しかしながら正面から攻め入ってきた軍隊と、裏門から浸入してきた数人の敵は、どうやら味方でないようすデス」

「別々の敵だと？」

「如何にもデス。それを確定させたのが、中庭での戦闘でありますデス。」

裏門から浸入して来た内の三名とゴーレム十数体とが交戦。この戦闘によりゴーレムは壊滅、更に中庭に残る軍隊は多くの数を減らした模様デス」

「裏門から浸入して来たという連中は、こちらの味方なのか？」

「そうではない様子でありますデス。」

先程謁見室でタイガー……当瑠殿と羅夢殿と戦っていた連中が、そ

の裏門から浸入して来た連中でありませぬ故」

「敵は、二組居るといふことか？」

嫌そうな顔をするナイトメア公爵。

「はいでありますデス」

「両軍の目的はなんだ、何故に悪夢城に攻め込んで来た？」

「不明でありますが、第一階層を突破した一軍は、第二階層の住居スペースを素通りして、第三階層にある若様の書斎を目指しておりますデス」

「書斎を目指しているだと？」

首を傾げる。

「当瑠殿と羅夢殿が第二階層に足止めできたのは、裏門からの侵入者のみでありますデス。しかしながら第三階層に進んだ敵軍も、大通路の途中で進行を停止させておりますデス」

「止まっているとな。何故そのような中途半端なところで止まっている？」

また首を傾げる。

「不明でありますが、書斎手前で動きを止めておりますデス。何か問題が発生した様子デス。」

それと、おそろくのところ軍隊の目的は、書斎に置かれている若様の私物が目的かと」

「余の私物が目的だと？」

「おそらくは、悪夢城の権利書かと……デス」

ただの推測であるが。

「おいおい、ちょっと待てよグスタフ。侵入者はすべて人間だろう。そのくらい俺だって気配で解る。人間風情が悪魔の権利書を手にしても使えないぞ。例えば俺を殺しても、それは変わらない」

「ですが敵は、この城の向かいに古城を築いております。もしやすると悪魔の眷族やもデス」

「ハーフ……」

「可能性は有りますデス。もしくは特異体質、人間でありながら悪夢を自在に操る術を心得ているのやもデス」

「どちらの可能性があったとしてもだ、何故に人間が、この悪夢城を欲する。」

俺を殺して城の権利書を得て、悪夢城を自在に操れても仮想の世界しか作れないぞ。死後の世界の紛い物だ。それなら奴らにも作れるのだろ」

その通りだ。古城がそれである。

「この悪夢城は、そもそもが冥界への関所の一つ。死者の魂が、通

り抜けるだけの片道にしか過ぎん。

精々この城を手に入れて出来る事は、死後幽霊となりたい者たちに、冥界への脇道を作り出してやることぐらいだ。あとは生幽を招き入れること。

成仏を拒否して者、生きたまま生を拒んだ者への宿泊を許可することぐらいだ。

そんな能力が欲しいというのか？」

悪夢城の能力。

それは、今ナイトメア公爵が述べた通りである。

メニヤースたちのような生幽を、城内に留める能力。

当瑠や羅夢、それにグスタフのような死者の魂を、冥界に送る事無く現世に留める能力。

このふたつである。

しかし、その能力は、悪夢城に留めるだけである。決して城外には出れない。

下界には、行けない。

幽霊のまま、この城から出て行けないのだ。

悪夢城内限定の地縛霊しか作り出せない。

そのような能力を得たいために、悪夢城に軍勢を率いて攻め込んで来たのかとナイトメア公爵が首を傾げる。

「まあ、分かった。正面から軍隊を率いて来た連中の目的は、それでいいだろう。」

裏門から浸入して来た連中の目的は、一体なんだ？」

「不明でありますデス」

敵軍と対立して、悪夢城の者とも対立している。

ナイトメア公爵とグスタフは、その連中も、目的は一緒なのではと
考えていた。可能性は否めない。

立ち止まり向かい合いながら話していた一行であったが、ナイトメ
ア公爵だけが踵を返して歩き出す。

遅れまいと女たちも足を進めようとしたが、それをナイトメア公爵
がついて来るなど言葉で止めた。グスタフにも来るなど声を掛ける。
困惑の仕草で立ち尽くす美女たち。グスタフも戸惑っていた。

「女たちよ、グスタフを連れて医務室に行け。敵軍は住居スペース
を素通りして俺の書斎を目指しているのならば、ドクターマキも無
事やもしれぬ。治療を求めよ」

「わ、若様はどうなされるのデスか？」

歩みを止めて首だけでチラリと振り返るナイトメア公爵。不敵に微
笑んでいる。

「決まっているでわないか、当主自らが挨拶に行くんだよ。かつて
に人の書斎を荒らされて溜まるか」

ナイトメア公爵が応えるのと同時に、上半身裸の彼の背中に大きく
奇怪な翼が生え出る。

巨大な蝙蝠の羽。

悪魔の魔翼である。

デビルウィングだ。

大蝙蝠の羽には、幾つもの瞳が瞼を剥いてギョロギョロと周囲を窺っていた。

「いかん！ 皆、目を伏せるデス！」

魔翼を見たグスタフが声を荒立て視線を伏せる。

グスタフは、隣に立つ女の目を掌で隠したが、数人の女たちが指示を聞かずにナイトメア公爵の魔翼を凝視していた。

視線を逸らさなかつた女たちがバタバタと倒れて行く。

倒れた女たちは白目を向いて、口からは泡を吐いていた。中には失禁している女もいた。

「どいつもこいつも悪魔を舐めやがって」

そう言い残すとナイトメア公爵は、早足で助走を付けると、魔翼を広げて飛び立つ。直ぐ続く廊下を滑空して行った。

生粋の魔族は、直ぐに闇に溶けて見えなくなる。

グスタフたちは廊下に取り残され、闇の向こうを見送った。

ナイトメア公爵、出陣。

憑き物屋 (1)

憑き物被い。

日本だけでなく似たような事柄を商売として行なっている者は、世界中に多い。

それは、被い屋とも呼ばれる。

ボランティアも多いだろうが、エクソシストもこの部類やもしれないだろう。

世界各地とところ変われども、霊と呼ばれるものに憑かれて苦しんでいる者は少なくない。

性別、年齢、人種、育ち、土地柄、主教、信仰、貧富の差は関係ない。

人は憑かれる生き物である。

生きているからこそ、憑かれるやもしれない。

狐憑き、怨霊、悪霊、悪魔憑き、それは様々だ。

時には神に憑かれて崇られる者も居る。

その憑かれた人物が、決して悪いこと、罪深きこと、罰当たりなことをしていないなくても、それは人に憑き、人を苦しめる。

もちろん悪党が、罪を犯し、罰当たりな行為を働き、結果憑かれることも珍しくない話だ。

前者も後者も、訳なく憑かれる。

また、訳あつて憑かれる。

どちらにしても人は、人生観に関わらず憑かれる。

人でない、この世の者でない輩に　。

それを大雑把に、悪い物と呼ぶ。

具体的に何かと表現しない。

それが、この世の理で確定できない存在だからだろう。

しかし、救いはある。

それらの悩みを解決するのが、憑き物祓いだ。

救い人。

坊主、御者、尼、神父、道士、時には仙人までもが、これを儀式として行なう。

そして、憑かれた人を救う。

だが、他人の不幸は金になる。それもまた、この世の理。そこから商売が発生する。

故に憑き物祓いは、金になる。しかも大金に換わる。

大金を生む訳。

理由は簡単である。

この世は悪党ほど金を稼ぐ。汚い金を稼ぐ。

そして、汚い金を稼ぐのが得意な輩に限ってよく眠るのだ。

枕を高くして寝むれないはずの外道が、罪を感じる事無く熟睡するのだ。

不道理であるが事実。

だが、ふとした切っ掛けから、安眠が妨害を受け始めることがある。

悪党にも眠れない夜が来ることがある。

それが、ただの体調不良だったり、ただの飲みすぎだったりする。

ただの悩み事の深さから熟睡を妨げられただけかもしれない。

ただの勘違いかもしれない。

しかし、そのような夜が続くと、悪党とて悩み始める。ノイローゼ、鬱病、精神的病を発病する。

医者に掛かってみるが、治らない。

原因がはっきりと分からない。

それらが永く続くと多くの者が、そこに行き着く。

何かに　。

憑かれた　と。

どこでどう勘違いしたのか、悪い物に憑かれた、祟られたと勘違いを始めてしまう。

迷信めいたことを信じない輩ですら、そこに行き着いてしまうこと

が多々ある。

自分の問題を、他人のせいにしたいのだ。何か別の物のせいにしたいのだ。

それが、超常現象の類でも構わない。霊のせいでも構わないのだ。

寧ろそれらの方が、都合が良いのやも知れない。

自分で解決できないことを、何かとほうもない存在のせいにしてしまう方が、言い訳になる。

責任転嫁の矛先としては、都合が良いのだ。

すると登場するのが、決まってお被い屋だ。霊能力者である。

だが、多くは偽物。

報酬を求めるかわりに悪い物を落とす。

それが、本物の悪い物であろうと無かろうと、きつちり落としたように見せる。存在しないものすら被ってしまふ。

否、存在しないから容易く落とせて仕舞う。

落ちていなくても落ちたと語る。

それで、救われる者も多いのが事実である。

偽物でも人を救えることもあるのだ。

嘘も時には薬となる。

そして、報酬を受け取り帰っていく。

本物の悪い物が落ちていなくても、もう安心です、悪い物は落ちました、と言って帰っていく。

偽物の手口は、いつの時代も似たり寄ったりである。

後日、治まる事無く怪異が続いて依頼人が、苦情の連絡をよこしても、それらの偽者の被い屋は、それを再相談として受け取り交渉に臨むのだ。

そして、それが本物の悪い物と知ったとき、これは私では手強すぎる、などと言い本物の被い屋を紹介するのだ。

選交代。

偽も物の被い屋が、本物の被い屋に仕事を斡旋することも、どの時代でも良くある話である。

その本物の被い屋のひとつが、代々憑き物被いを生業としている憑き姫の家系であった。

十七代目孤独流被い屋、憑き物屋姫七。

それが憑き姫の本名と、代々受け継いできた肩書きである。

憑き物屋の姫子。

短縮して憑き姫である。

そして、彼女が十七代目を父親から受け継ぎ、憑き姫と呼ばれるようになったのが、五年前の話である。

当時、憑き姫は現役の高校生。

まだ、華も恥らう十七歳の乙女であった。

憑き物屋 (2)

孤独流憑き物被いの歴史は、独立した一族のみで受け継がれてきた被い屋としては案外と永い。

十七代目。それが歴史の永さを示している。

このような如何わしい仕事を、代々続けている家系も珍しいだろう。初代から数えて十七代目にして約五百年の歴史がある。

日本はまだ永正の時代。初代は青森県北半島の恐山でイタコを営んでいた男が立ち上げる。

男の名は、京兵。親の顔も知らずに育った根無し草であった。

当時二十三歳。各地を放浪しながら盗みを働く小悪党。まだ霊媒師を営んでいないころの話。

当時のことを、生きる為にはそれしかなかったと、後日の京兵は述べている。

だが、彼が逃走にも近い放浪生活が続けるなかで、たまたま立ち寄った青森で運命が一変することとなる。

それは、とある人物との出会いである。

それは、恐山で修行に励むイタコのひとり。後の妻と成る女であった。

女の名前は楓。

視力を病んであり、自分の掌すら霞んで見える悪眼であった。

まったく見えないわけではないが、外を一人で出歩くにも杖が必要なほどである。

しかしながら彼女は、視力が病んでいる代わりに、普通人には少ないセンスを備えていた。

霊感である。

目は見えないが、心の目で見えるものがあつた。

それは、ぼんやりとしか見えない人の輪郭に、寄り添うように浮かび上がる異怪の存在。

それが、守護霊であつたり背後霊であつたり、時には悪い憑き物であつたり、様々であつた。

しかも楓は、見えるだけでなく、その霊たちを己の中に落として、ものを語ることが出来たのである。

イタコとしての定番的な能力であつたが、楓は何でも己の中に落とせた。

イタコとしては、天才であつたのだ。

しかし、己の中に落とせたが、受け入れたものを出すことは出来なかつた。

だから師と仰ぐ先生などに、落としてもらう。

被い屋からみても楓は優れたイタコだったため、大変重宝された。だから金も稼げた。目を病んでいても暮らしは人並みに過ごせた。

そんなイタコの楓と、小悪党の京兵が知り合つたのは、本当に偶然であつた。

長旅に疲れて、路銀も乏しくなっていた京兵が、突然の雨に打たれて逃げ込んだ小さな御堂。

ほんの雨宿りの積りだったが、そこに先客がひとり居た。それが、近所に住む楓だった。

ふたりは雨宿りの間、気さくな会話を楽しむ。若いふたりは、とても話が合った。

楓は目の病を隠さず話、仕事もイタコだと正直に話した。大抵の輩は、この話を聞くと逃げて行く。

目が病んでいるだけで避けられる時代で、更に靈感の強いイタコと聞くと、大半の者が気味悪がるのだ。

楓は美しい女性でもなかった。顔だけを述べるならば、けっして美しいとはいえない。だからといって見れない酷さでもない。

痩せこけており肌は病弱のように白い。幸薄く見える外見。傍から見ても控えめのタイプだ。

しかし、京兵は、それらを気には止めなかった。

だが、京兵は、楓に本当のことを語らなかった。自分が盗人で役人から追われている小悪党だということを隠した。京兵は口が達しやで、根っからの嘘つきなのだ。

それでもふたりは、とても気が合った。

おそらく楓には、すべてお見通しだったのかもしれない。

気付いたころには京兵が楓の家に入りこむようになっており、夜はねんごろの中となっていた。

やがてふたりは、安酒で杯を交わし、形ばかりの祝言を挙げると夫婦となった。

しかし京兵は、仕事もせずただ寝て過ごすばかり。盗みをしなくなったが、仕事もしなかった。楓がイタコで稼ぐ金だけで、ふたりはひっそりと暮らしていた。それで、どちらも文句を言わなかった。ふたりは、それで幸せだったのだ。

だが、不幸は突然訪れる。

楓がイタコの工作中、お祓いに失敗して、己に落とした悪霊に祟り殺されたのである。

死因は心臓麻痺だが、当時の者たちには祟りに見えたのだ。

この事件で妻を失った京兵の生活は一変すると思われた。皆がそう思った。

京兵は仕事をしていない。楓の紐のようなものだ。だから近所の者たち全員が、どうなるかと心配した。

しかし、驚くべきことが京兵の身に起きる。

京兵が妻の急死に号泣しながら終えた葬式の次の晩。強兵が目を覚ますと目が見えなくなっていた。

否、まったく見えないわけではない。光は見える。人の輪郭ぐらいも分かる。だが、すべてが霞んで見えるのだ。

死んだ妻と同じ病である。眼病だった。

この日から京兵の生活は変わった。

目が見えなくなったが、別の物が見え始めたのだ。霊の姿である。死んだ妻と同じ瞳となったのだ。

不思議であった。

京兵は、これは死んだ妻からの贈り物と考えた。前向きに考えたのである。

自分が死に、残された夫が、食うに困らないよう、生活の糧となるように自分の瞳を夫にくれたのだと。

京兵は、この不思議をそう取ったのだ。

京兵は視力を失ったが妻を怨まなかった。寧ろ感謝した。

それから数日して、視力が悪い生活にもなれると、妻が通っていた被い屋に弟子入りする。イタコとしての修行を始めたのである。

真面目に修行に励んだこともあってか、それから十年後、京兵は一流のイタコでありながら一流の被い屋となっていた。

しかも特殊な被い方を行なう被い屋として独立していた。

普通は霊媒師がイタコに霊を落としてから霊媒師が除霊する。

しかし、京兵は若干違っていた。

イタコである自分の身に憑き物を落としてから家に持ち帰り、時間をかけて憑き物を自分で落とすといった、ひとり二役の除霊技法を編み出したのである。

これをもって京兵は、孤独流被い屋の看板を掲げ、憑き物屋京兵を名乗ったのである。

ひとりで落として、ひとりで被う。だから孤独流らしい。珍しい徐霊方法である。

そして商売は、上々に繁盛した。

盲目の霊媒師が、悪霊を持ち帰り徐霊する。

真面目に励んだ京兵の努力もあつてか、評判は青森から江戸を通り越し、京の都まで轟く事となる。

かつて彼が、こそ泥として村々を荒らしまわった小悪党だと思つて者すら居なくなつていた。もちろん同一人物だと気付く者すら居なかつた。

顔付きまでもが別人と化していたのである。

後日、親しい友人の話によると京兵は、酒によつと独り言を呟くことが多かつたらしい。

決まつて部屋の隅に向つて杯を向け、呟くのだと。

その独り言は、どうやら死んだ妻、楓と語り合つているように聞かえたらしい。

友人曰く、きつと京兵には死んだ妻が見えていたのだからと。

そして、死んだ妻は、ずっと夫を心配に思い見守つていたのだからと。

眼病の霊能力者であつた夫婦を思えば、ありうることだと周囲は思つていた。

そして、京兵の死後、孤独流被い屋の看板は、弟子で養子の仁平に受け継がれ、これより憑き物屋は、血筋で受け継がれる事となる。

憑き物屋 (3)

孤独流二代目、憑き物屋仁兵。この男が後々の憑き物屋家に大きな貢献を及ぼす。

彼について多くを語る必要は無いだろう。

人生観や性格。彼を語るのに、それらは意味がない。

彼について語るべき事は、僅かにふたつで十分である。

一つ目は、被い屋としての実力である。

それも僅かな言葉で済むだろう。

仁兵は先代の弟子の中で、養子として名を受け継ぐだけのずばぬけた靈感と才能を持ち合わせたい。

そして語るべき二つ目は、そのずばぬけた靈感と才能が、見事なまでに子供たちに受け継がれたことである。

彼が憑き物家に大きな貢献を残したのは、それである。靈感の強いDNAである。

そのDNAは、一代二代で止まる事無く、十七代目を継いだ憑き姫まで濃厚に遺伝していた。

まさに、仁平あつての憑き物家とも言えよう。

しかしながら、この憑き物家にも問題が存在した。

それは、職業柄での悩みである。

霊を己の身に落としてから一人で被う。この特殊な霊媒方法が、精神肉体ともに想像以上の負担となる。

よって孤独流を継いだ者は、短命で他界してしまう。六代目までは、四十歳まで生きたものが居ないのだ。早い者は、三十歳を迎える前に亡くなる。

その問題点を打開したのが七代目の林香であった。

彼女が孤独流を父から受け継いだのが、十五歳の時である。六代目の父が徐霊に失敗して急死した為である。

彼女は自分が代を引き継いだ事により、徐霊方法を改善しようと研究を重ね、改善に成功を遂げる。

その新しい徐霊方法というのが、己に霊を落とすのではなく、身代わりの物に落とすであった。

別の者でなく、別の物に落とすのだ。

孤独流の特徴は、徐霊対象の悪い物を持ち帰って、確実に落とすことである。

別の者に落として持ち帰っては、イタコに落としてから徐霊師が祓うのと代わらなくなってしまう。

だから彼女は、木彫りの仏に落として悪い物を持ち帰る術を編み出したのだ。

林香は幼い頃から手先がとても器用だった。

趣味は木彫りである。

彼女が作った木彫りは、今にも動き出しそうなくらい見事な出来だった。それだけ彼女が魂を込めて作っていたのだろう。

その木彫りの仏を、イタコの代わりに使ったのだ。

己が作った仏像限定の術だったが、これが美味くいったのだ。

これより孤独流の徐霊方法は、手作りの仏像に落とす技法と変わる。

そして憑き物家の寿命は、人並みに延びた。

それどころか百歳を越える超人的寿命を持つ者すら現れる次第である。

そして十一代目後継者、刀賢の時代で新たな徐霊技法が編み出される。

それは木彫りの仏でなく、自分で打った刀に悪い物を落とすである。落とす先の対象を変えることに成功したのだ。

刀賢たる男も手先が器用であった。

霊媒師としての修行だけでなく、刀鍛冶としての修行も積んでいたのだ。

そのふたつの修行が合間見合って、孤独流を更なる高みに導く。

刀賢の徐霊法は、とても強行なものであった。

まずは自分で打った刀に悪い物を落とす。その悪い物を持ち帰るが徐霊しないのである。

これで妖刀が完成する。

そして更なる自作刀に別の悪い物を落とすとして持ち帰るのだ。

二箇所から持ち帰られた悪い物。当然ながら妖刀は二本になる。

その二本の妖刀。強い方の妖刀で、弱い方を斬る。こうして強い妖刀だけが残る。

しかしながらこれでは徐霊とは呼べない。

弱い方の憑き物は、存在もろとも無に滅せられる。

まさに強行。

否、凶行。

罰当たりにも魂を粗末に扱いすぎである。だが、術は恐ろしく強く成長して行った。

刀に落とした霊の強い方だけを残すのだ。妖刀はどんどん強力な妖刀だけが残っていた。

故に、天才の血筋を強く継ぐ憑き物家の人間以外妖刀に触れることすら出来なくなっていた。

残った片方の妖刀は、人に対しても悪い物に対しても強力な兵器となっていた。

これによって孤独流は霊媒師の枠を飛び越えて、霊殺師と化す。

そして、代は継ぎに継がれて十五代目。

後継者の名前は、一馬。

彼が孤独流を受け継ぐ頃には、流派の目的が捻じ曲がっていた。変わっていないのは、悪い物を持ち帰る事だけであった。

孤独流は、妖刀を作り出す魔導鍛冶屋と化していたのだ。もう霊媒師でなく、退魔師。被うではなく倒すといった感じである。

弱らせてから持ち帰るのだ。

幸いにも孤独流の作り出す妖刀は、憑き物屋の血筋にしか扱えない。いかに霊能力が強くとも他人では扱えない。

この特徴が故に、妖刀が世間に出回ることにはなかった。殺人兵器として扱われることはなかった。

しかし一族の目的が捻じ曲がったと表現した理由は、そこではなかった。

一族の目的が、妖刀収集へと変貌していたのだ。

十五代目一馬が代を引き継いだ際に、数代に渡って集め作った妖刀の数は五十本を越えていた。

しかもその五十本とは、出来の良い妖刀だけを厳選して残した代物である。

その妖刀に封じられた悪い物は、霊だけでなく妖怪などの類も多くなっていた。

寧ろ妖怪を封じた妖刀ばかりを残しているといっても良いだろう。

強い妖怪を封じた妖刀のほうが、強力な妖刀が生み出されるからだ。

こうして十五代に渡り切磋琢磨進化を続けてきた孤独流被い屋にも後継者問題が訪れる。

長を決めなくてはならない一族には、珍しくない問題であったが、憑き物家も例外でない。

進化した孤独流の特徴は妖刀使い。それが故に、憑き物家の特別な血筋しか妖刀が扱えない。

その一族に子が生まれなくなった。

分家も戦争で死に絶え、養子では解決できない状態だった。

これが後継者不足を齎したのであった。

十五代目の一馬には、子供が一人しか居ない。

後の十六代目となる憑き姫の父親なのだが、この男が色々と問題を抱えていた。

名前は、地他也。

この地他也、幼少の頃から体が弱く小さい。

妖刀どころか刀を振って戦う体力が無かったのだ。

しかも病弱で直ぐに寝込む。

更に臆病で根性が無いとまでおまげが付いていた。

とても対魔師にむいていない男だったのだ。

それでも十六代目孤独流を継いだには継いだが名ばかりで、まっとうに徐霊の仕事を受けた事がない。

拳句の果てには、病弱なため床に伏せることが多く、それ以外の仕事にも就いていなかった。

稼ぎの無い極潰しの駄目男だったのだ。

先代が他界してからの地他也の収入源は、代々受け継いできた妖刀の数々を売って生計を立てていた。

骨董の日本刀は、良い値段で売れるのだ。

一本売れば、一ヶ月は優に暮せるほどの額になる。

しかし妖刀のままでは世に出せない。悪い物を抜いてから出ないと

売れない。

ここで地他也も憑き物屋家の血筋を発揮する。

外で悪い物や妖怪変化と戦えないが、家で妖物を移すぐらいの才能は持ち合わせていた。

地他也は、妖刀からカードに悪い物を移す術を編み出したのである。このカードというのが察しの通りで、現在憑き姫が使用している妖怪カードである。

そして代は、十七代目憑き姫に受け継がれた。

父が造り出した妖怪カードと共に。

最後の術（前編）

謁見室だけでなく悪夢城全体を大きく揺らした大爆発。

弱小霊体を合成させた巨大爆弾。

引き起こした大爆発。

仙術とは思えない程の破壊力が竜巻となって部屋の中央で暴れ狂い消えて行く。

まさに威力は超攻撃魔法のレベルであった。

謁見室内の荒れようは、戦争後の廃墟同然。
酷い荒れようである。

煌びやかなシャンデリアは木っ端微塵に姿を消し、威厳ある玉座は高かった背もたれが砕けて、ただの粗い岩の塊と化している。

大理石の柱は一本残らずへし折れて、艶やかだった純白の床も砂漠のように変わっていた。

あちらこちらの壁に穴が開き、天井も崩れて落ちてきそうである。

『ひ、酷いです……よ、軒太郎さん』

軒太郎に盾として使われた昂輝が丸焦げのまま立ち尽くしていた。肌は焼け焦げ肉が抉れて肋骨が痛々しくも露出している。右腕は千切れかけて皮一枚でぶら下がっていた。潰れた両目から煙が上がっている。

狼男のゾンビに間違えられそうな外見であった。

昂輝がぐえつと言って、狼口から携帯電話を吐き出す。

体内暗器用の携帯電話である。これを無くしたら昂輝の戦闘力は激減してしまう。肉体よりも守らなくてはならないアイテムである。ただし携帯電話は血塗れ。とても汚いが防水機能が付いているから無事だろう。

「すまん」

珍しくも謝罪を述べる軒太郎だが、次の瞬間には舐めた真意を言い出す。

「どれ程の爆発が来るか分からなかったからな。そんな時、目の前に良い壁があつて、ついつい手が伸びたつて訳だ」

『訳だつて……、ひでえ……』

「もしも霊毛コートだけで防げなかったら困るからな。こつちには守らなければならぬ協力者が居る。しかたないと思つてくれ」

言いながら軒太郎は、被つた黒コートをはぐり自分の横で身を丸めているメニヤースを見た。

彼女はネコミミを伏せて爆破の衝撃に震えていた。怯えているが無傷のようだ。

安堵の後に軒太郎は、昂輝を無視して荒れ果てた謁見室の中央へと視線を移す。

謁見室内には灰色の粉塵がまだまだ多く舞っていた。かなりの量が視界を妨害している。

しかし、軒太郎やメニヤースが凝視して状況を窺っているうちに粉塵は収まっていく。

それと同時に昂輝の傷も回復して眼球の形を取り戻し始めた。徐々に視力が蘇る。

『憑き姫は大丈夫!?!』

視界を取り戻した昂輝が、まだぼやける景色に向ってリミピットチヤンネルで叫ぶ。

特大の靈魂爆弾を足元で浴びたはずの憑き姫が心配で仕方ない。

しかし 返答は無い。

「やったけ?」

なまった一言。声の主は羅夢である。

「今ので勝負が付くほど甘い敵じゃあなかつ。しかし、あの爆破を足元で喰らえば、さすがの九尾とて無傷とは思えん」

「そう願いたいっちなね……」

ふたりを守っていたドーム型のシェルターが崩れる。パラパラと御札が剥がれ落ちて行く。

姿を現す当瑠と羅夢。

粉塵の中を睨む当瑠と羅夢が、更なる攻撃を加えようと身構える。

廃墟と化した謁見室内の天井で再び弱小靈魂が合成されてるなか、羅夢は全身に静電気を集めて充電を施していた。

昂輝たちが見守り、魔人夫婦が睨みつける間に、粉塵の中から金色の球体が薄っすらと姿を表し始めた。

見事な球体である。

九尾の尻尾を丸めた憑き姫だろうが、その金色の毛並みには焦げ一つない。綺麗でふかふかとした毛並みを保っている。

「予想の内にはあったが、やはり無傷か……」

苦虫を噛み潰したような表情で呟く当瑠とは別に、無残な火傷を回復させつつある昂輝は安堵に胸を撫でていた。

まだ憑き姫の姿は見えないが、おそらくはあの九尾の球体の中で無事なのだろう。

九尾の球体は、各自の思惑を余所に、フワフワと宙に浮いていた。

「今度はウチが全力で行くっちゃ」

「いや、ふたりで行こう。近接攻撃の大技を、同時にかましてやる」

チラリと亭主を見た羅夢が、全身に電撃を走らせる。放電音が威嚇的に響く。

「じゃあ、ウチは電光石火残像拳千倍で、高速の一撃を食らわせてやるっちゃ」

「ならワシは、魑魅魍魎豪傑拳激熱だ」

当瑠の両拳に、禍々しい怨霊の顔が浮かび上がる狂拳が形作られる。その怨霊拳は、徐々に大きくなり人の頭程に巨大化した。

ふたりが狙う攻撃は、接近戦でのみ使用できる大技故に威力は絶大。そのような奥義を同時に打ち込めば、あの金色の防壁も打ち破れるとふたりは目論んだ。

これぞ最後の一撃。

この攻撃が効果を成さなければ、もう勝機は無いだろう。ふたりはそう考えていた。

これが効かなければ降参である。

「準備はいいか、行くぞ!？」

一度、生唾を飲んだ当瑠が、妻に言う。

「OKっちゃ!」

夫に声を掛けられ応える羅夢も、頷いたあとに生唾を飲んだ。

これが最後だと夫婦で意識する。

準備を終えたふたりが前に踏み出そうとした瞬間であった。金色の球体が大きく膨れ上がる。

「なっ!？」

攻撃に出ようとした魔人夫婦が、警戒の為か反射的に攻撃を中断し

てしまった。

動き出す怪球。

膨れ上がるように大きく成って行く金色の球体は、そうであらず。

そう見えるだけ。

ただ九尾の尻尾が球体を築く力を緩め、蕾が開花するように開いて見せているだけである。

九尾の隙間から憑き姫の姿が露になる。

『憑き姫……』

やはり無傷。

茨が踊る巫女服を揺らしている。

さらに開いた九尾の隙間から、大量の妖気がドライアイスの冷煙のように流れ出て地面を這って広がって行く。

「なんだ、この妖気は……!?!」

言いながら異常を察する当瑠が、無意識の内に一步後方へとたじろく。

羅夢に関しては、飛べることを良いことに空中に舞い上がって距離を取った。逃げる様だ。

ふたりが警戒を深めた理由は、いつまでもなく金色球体の中から流れ出てきた妖気のせいである。

その異常な妖気の質に昂輝も驚く。素人にも解る異常な妖気だった。

『寒いような……、熱いような……』

皮膚に感じる妖気の風が寒さと暑さを伝えてくる。

まるで溶けかけた氷の塊で全身をしつこく撫でられているような感覚であった。

いくなれば不快感。

全身の肌には鳥肌が立ち寒気を感じるが、内臓の奥が煮えあがるようにムカムカしてくる。

時折だが背筋に微量の電気が流れ込む。

妖気そのものが毒に感じられた。

「一体、にゃんにゃのニヤア……」

誰に向けて言った訳ではないメニヤースの質問に、軒太郎が真顔で答える。

「憑き姫の最強ホーム、九尾召喚融合の完成形。そもそも九尾との融合も、この強術を実行させる為の下準備のようなものだ」

『下準備……』

昂輝が癖で反芻する。

「そつだ……」

ゆっくりとした速度で広がって行く九尾が、八部咲きから満開へと花開く。

「なんじゃあ……これは……」

完全に開ききつた金色の九尾が扇型で踊っていた。

まるで孔雀のように広げられた尻尾の一本一本には、奇怪な姿を見せる妖怪変化たちが、氷柱に閉じ込められた人柱の如く浮き上がっている。

「妖怪……け？」

怪奇な面々。

金毛尻尾一本に一体の妖怪。

それは人型でこそあるが、明らかな人外。

一つ目で大柄の僧侶。

和服を着た頭の大きな老人。

鼻の高い赤面天狗。

超肥満体の人型怪異狸おやじ。

白い着物に血の通っていないかと思えるほど純白な顔をした女性。

白髪にミイラかと思えるほど枯れた干物老人。

トックリを持った体格の良い赤鬼。

おかつぱ頭の子供たちの姿もふたつあった。

『なんですか、あの妖怪たちは……』

昂輝の言う通り、妖怪である。

それらが一本一本の尻尾に、人柱の如く掘り込まれているようだった。

全員が、まるで眠っているように目を閉じている。

毒々しい不快な妖気は、あれらが溢しているのだろう。

「ううう……」

小さく唸る当瑠と羅夢。

そのふたりを詰めたい眼差しで見詰める憑き姫。

一言も発していないが、脅しの言葉で脅威を与えられているような威圧感を魔人夫婦は感じていた。

妖怪の姿を載せた九尾。

その憑き姫の姿を見たときから昂輝も動けなくなっていた。

指一本動けない。

金縛りだ。

リミピットチャンネルだからこそ意思を述べられるが、口では言葉を語れないほどに全身の筋肉が硬直していた。

「ここまで怪物だったか……」

「違うつちゃ。あれは魔神だつちゃ。怪物でなく神だつちゃ……」

「とんでもない者と戦っているのか、ワシらわ……」

完全なる過ちを悟る。

その悟りは後悔やと変わるのも、もう直ぐのことだろう。

緊張の面持ちで軒太郎が述べる。

「あれが、十二長老九尾十結集術。

憑き姫がヴアルハラ探偵事務所最強の称号を有する最大の理由だ」

扇形に揺れ開く金色の九尾上で、今まで眠るように瞼を閉じていた九体の妖怪が、一斉に瞳を見開いた。

「ぐあっ!?!」

刹那に広がる衝撃に空気が軋む。

圧倒的な妖気。

それだけで攻撃。

まるで爆風。

魔人夫婦が吹き飛ばされまいと踏ん張る。

昂輝は驚きながら転として、軒太郎がメニャースを抱えるように支える。

憑き姫の静かな声だけが、嵐のような九種の妖気に掻き消されることなく聴こえて来た。

「孤独流袂い屋最新最終奥義。十二長老九尾十結集術。発動」

この戦いで、この術が、最後の術となる。

最後の術（中編）

様々な妖気の色が、謁見室内で響き合いながら重複して膨らんで行く。

やがてそれは室内の隅々まで行き渡ると、微塵の隙間も残す事無く空間を支配していった。

「これは、結界か!？」

周囲に広がった気配から、自分たちが結界内に閉じ込められたことを悟る当瑠が、突風の如く押し寄せる妖気の波に耐え忍ぶ。

「元々は九尾事態が、この術の下準備」

語りだす軒太郎に、昂輝とメニヤースの視線が集まる。

「憑き姫のカードが召喚する妖怪と融合する術は、普段は精々五体が限度。それ以上の重複融合は、肉体に極度の負担を及ぼす」

軒太郎の言う通りである。

昂輝もカードから召喚された五色鬼と同化した経験がある。その際の負担は、呪いの再生力がなければ耐えられないレベルではなかった。カードに封印されている妖怪の妖力が、融合者の肉体と精神力を、極端なパワーで蝕むのだ。

だが、現在の憑き姫は、全部で十体の妖怪と同時同化を行なっている。巫女服の茨巫女を加えれば、更に計十一体となる。

幾ら憑き姫が天才的霊能力者であろうと、十二三歳の少女が耐えられる融合数とは思えない。

その疑問を、続く軒太郎の解説が解き明かす。

「本来ならば、憑き姫が同時に召喚出来るカードの数は七から八が限度。さらに融合となると五体がやっただろう。それ以上は肉体も精神も持たない」

「でも、今は十一体と同時融合しているニャア」

メニャースの言葉に昂輝もコクリコクリと頷く。

「その負担を解決させているのが九尾の狐。あの狐の尻尾に召喚妖怪を振り分けることによって、本体に掛かるはずの負担を大幅に軽減しているのだ。コンセントの蛸足のように、ただ接合部分を増やして強引に融合数を増やしている訳でもない」

しかし、解説を語る軒太郎の口ぶりが、やたらと歯切れが悪い。何かを躊躇しているような口調であった。それを察した昂輝が、思い切って訊いてみる。

「軒太郎さん。まだ何かあるんですか？」

「あの術は、強力且つ最強……故に問題点も多い」

「問題点……ですか……」

「普段から憑き姫に対して俺や父からは、己の生命の危機以外は、あの術を使うなと釘を刺していたのだが……」

「生命の危機以外って、この戦いで憑き姫は常に有利を保っていた

「じゃないですか！」

有利。それも圧倒的有利に窺えた。
それにも関わらず憑き姫は、最強の術を敢行する。

これでは 暴挙だ。

何故にと困惑する昂輝の背後で、不満気な表情の軒太郎が呟く。

「何を背景で見たかは知らんが、甘いんだよ」

『甘い……？』

「起きるぞ、バタフライエフェクトが」

昂輝たちが話している間にも、十二長老九尾十結集術が巻き起こす
竜巻が魔人夫婦を吹き飛ばそうと暴れ狂っていた。

「何が始まるか解らんが、このまま引き下がれるか！」

「そうだったちゃ！ せめて小娘に一撃でも叩き込むちゃよ！」

ふたりはまだ戦闘を放棄していない。

諦めていない。負けると察しながらも闘争本能を滾らせていた。
押し寄せる妖気の津波に耐え凌ぎながらも前に進んで行く。

達人としての、仙人としての、超人としての意地や誇りが、そうさ
せるのだらう。

「諦めて、お爺ちゃんたち。今、すべてを楽にしてあげるから」

抑揚のない憑き姫の言葉と同時に、九尾の一つに浮かび上がる一つ目の坊主が、着込んだ黄色い袈裟の前で拜むように印を組む。

すると今まで吹き荒れていた突風が更に強くなり、渦巻いていた竜巻がはつきりと見える形となって暴れ狂う。

その竜巻の数は一本二本ではなく、十本近くが憑き姫を守るようにうねり踊っていた。

「ぬぬぬ、もう近寄るも敵わないのか……」

「悔しいっちゃ！」

突風と悔しさに目を細める魔人夫婦は、竜巻に吹き飛ばされまいと耐えるのみであった。

『なんて風だ！ 僕らまで吹き飛ばす気か！？』

「あれは見上げ入道だ。けっこつ有名な妖怪で、見上げると見上げる程に巨大化して行くと云われている。それと風を巧みに操る術が得意だそうな！」

自分とメニヤースが吹き飛ばされまいと耐えながらも、わざわざ必死の形相で軒太郎が解説を述べる。

更に九尾に刻まれた女妖怪が、優しい口付けを捧げるかのように尖らせると小雪雜じりの冷氣を吹き付ける。

その冷たい吐息は、やがて吹雪と化して魔人夫婦を襲った。

「今度は吹雪か！」

「さ、寒いつちゃ!」

吐く息が白くなって後方へと飛んで行く。

髪の毛が凍てつき肌から血の気と温もりが消えて行く。

見る見るうちに室内の温度が下がり氷点下の極寒と変化した。

「寒いニヤーー! 死んじゃうニヤーー!!」

露出度の高いメニヤースには極寒地獄なのたろう。

デニムのポットパンツに臍の見えるTシャツでは軽装すぎる。

あまりにも五月蠅くメニヤースが喚くので、軒太郎が再び黒コートを脱いで彼女に掻けてやると猫娘は静かになった。

『それにしても寒すぎる……』

昂輝も爆発により衣類が股間を隠す程度にしか残っていない為、かなり寒いがここは我慢して戦況を見守る。

「何が奥義だ! ただワシらを突風と吹雪でじわじわといびっているだけではないか!」

『確かに……』

昂輝も同感する。そう見える。

「奥義なんていっても、対したことがないつちゃね!」

強がり又叫ぶ敵夫婦。

しかし、ふたりの体力は、地味であるが確実に削られている。近寄れず、反撃も叶わず、結界により逃げるも叶わない。完全になぶり殺しである。

「本当の攻撃は、これから」

憑き姫の呟くような声は、吹雪の中でも皆に届いた。

そして九尾に浮かぶ妖怪の一匹、頭の大きな老人の双眸が真っ赤に輝く。

それと同じ輝きが憑き姫や九尾からぼんやりと放たれる。

「なんだ、今度は何を！」

赤い輝きと共に、荒れ果てた謁見室内に異変が起こり始める。

壁や床に走っていた罅割れが合わさり隙間を無くし始めると、飛び散っていたシャンデリアの破片が宙を舞いながら天井に集まって行く。

更に崩れた筈の玉座に破片が転がり戻り形を復元して行く。

同じ様に崩れた大理石の柱も見えない力によって自動修復を始めていた。

焼け焦げていた赤い絨毯も、見る見るうちに穴が塞がり焦げ目が消えて、新品の如く鮮やかな色を取り戻していった。

『じ、これは……』

昂輝にも異変が起きていた。
爆破で受けた傷は既にいえていたが、身に付けていたボロボロの服
までも修復を始めたのである。

幾ら呪いの再生力があっても、その効果は肉体のみ。衣類が直るこ
とはない筈。

そして昂輝が、完全に修復された衣類から謁見室の光景に視線を戻
した頃には、室内は綺麗になっていた。

始めてこの部屋に訪れた時と変わらない豪華な謁見室に戻っている。

「これが孤独流被い屋最新最終奥義。十二長老九尾十結集術よ」

突風も吹雪も止んでいた。

憑き姫が呟く一言だけが室内に透き通る。
そこには、ふたりの姿が無くなっていた。

『消えている……。あの夫婦が、居ない……。』

魔人夫婦が、影も形も残さず消えていた。

最後の術（後編）

ここは何処だろう。

懐かしい。

私の目の前に、若い男たちが集まっていた。どの顔にも見覚えがある。皆が心配気な表情で私を見ていた。

ここは、確か私の屋敷。洛陽に在った、屋敷だ。

中華民族伝統的な古風な屋敷。我が虎狼子一族が代々引き継いできた邸宅である。

「師匠、どうかお気を落とさずに……」

私の前に集まる男たちの一人が、頭を下げた状態で言った。私を心配しての一言だった。

私は屋敷の門前に立っていた。

門外に立つ彼らたちよりも、階段三段分高い位置に立って、彼らの心配に歪む表情を見下ろしていた。

思い出した。

覚えている。

忘れられる訳がない。

あの日の事を。

私が、私たちが、我々夫婦が、魔導に落ちた日だ。

否。

我ら夫婦が、魔導を進もうと、心に決めた日だ。

我らにとって、最悪の日。

一番悲しかった日である。

この日のことだけは、例え死んでも忘れられないだろう。

例え生まれ変わっても覚えていいるだろう。

その悲しみの記憶が、魂に刻まれたのだから……。

「師匠、我々はこれで失礼しますが、どうか落ち込まずに……」

無理だ。

「我々ではたいしてお力に慣れません……、申し訳ありません」

そうだ、彼らは何の役に立たない。

私以上に役に立たない。

役に立たなかつた。

彼らは私の弟子であつた。私が会得した中国拳法の数々を伝授してきた。

政治家、軍人、役人、教師、芸術家、医者、様々な職業に付いた者

たちだ。社会的地位のある連中だった。

私は、そんな輩から金を取って武術を指南していた。上流階級の連中を相手にした武学指南師であった。

そうだ、それが遙か昔の、まだ若かった頃の私の仕事だった。

「では、失礼します……」

彼らは一礼の後に踵を返して歩き出す。その非力な背中を、ただ暫く見送った。

「ふう……」

溜息に不幸が感じられた。私も踵を返して屋敷を目指す。

門を離れ屋敷に向うまでの中庭をゆっくりと歩む。

門から屋敷まで石畳が真っ直ぐに伸びているだけで、他に目立つものもない。

赤土むき出しの庭だ。

ここで先程見送った彼らに武術を指南していた。

ここで、この何も無い庭先で……。

そうだ、まだ私が仙術に手を出す前の事だ。

私は薄暗い屋敷内を静かに進んで行く。足が重い。

天井の隅の方で名もない霊が、こちらを見ている。

一匹二匹ではない。かなりの数が居る。いつもの数倍は居るだろう

か。

嫌な目付きだ。

白く濁った視線で、何か不思議なものを見るような眼差しだ。

私には昔から見える。あの世のものが。

私には聞こえる。死者の虚しい声が。

私には感じられる。成仏できない哀れな存在が。

忌々しい。

なのに、何故にだ。

何故に、私には見えなかったのだ。今も見えない。

何故に、感じられなかったのだ。何故にだ。

他の死者を見聞きできるのに。

何故……。

私が懐かしい屋敷内を進んで行く。目的の部屋を目指して。

懐かしい廊下を進み、懐かしいあの部屋へ。

すべては過去の話だ……。

私たちが、この日を境に、この屋敷を離れて以来、私がここに足を運ぶのは、
久しい。

一室の前で足が止まる。閉められた襖の向こうから女性の噺り泣き

が聴こえてくる。

悲しみが涙と一緒に落ちて行くのが察しられる泣き声だった。

妻だ……。

ここは、娘の部屋である。

ここまで来るまで歩みが重たく感じたが、襖を開けようと伸ばした手は、もっともっと重たく感じられた。やっとの思いで襖を開ける。

広い室内には天井付きの大きなベットが在り、娘が布団を掻けて眠っている。

ベットの横には椅子に座る妻が俯きながら涙を溢して肩を震わせていた。

その啜り泣きが不幸を臭わせ哀れな霊体を集めていた。部屋の天井には、弱小霊体がびっしりと集まり隙間を埋め尽くしていた。

この霊体たちは、娘の不幸を察して集まってきた穢れだ。他人の不幸に共鳴しているのだ。

娘は病気なのだ。

大病である。

もう助からない。

医者に言われた。

医者曰く、今日を越えられないだろうと。

だから医者も帰した。先程の弟子と一緒にだ。

今晚は、家族三人で過ごしたい。

私は妻の啜り泣きを聴きながらベットの側に歩み寄る。

娘はベットに横たわり布団を胸まで掛けられていた。
僅かにも動かない。

顔は真つ白だ。

苦しんでいる様子はないが、生きているようにも見えない。

死んでいる。 のか。

妻が泣き止まない理由が分かった。

僅か数分だ。私が弟子や医者を見送りに離れた数分で、娘は息を引き取ったのだ。

「何故だ……」

自分の声に怨念を感じる。

私は必死に周囲を見回していた。
探しているのだ。

娘の霊を 。

「何処に居る!?!」

部屋中を見回す私。しかし目に入るのは他者の霊のみ。娘の魂は見当たらない。

視界が滲み出す。

泣いている。

私は泣いていたのか 。

泣くほど願っているのに見当たらない。娘の霊が見当たらない。

興味の欠片も抱けない他者の霊は見えるのに、大事な娘が死んだのに、その魂を見ることがすら出来ないのか。

「娘が……、行ってしまいました……」

泣きながら語る妻に、声すら返せない。

「娘は、ここに居ますか？ 私たちを見守っていますか？」

答えられない。

私が天より授かった異能は、やはり役にも立たない。ただの無能より意地が悪い。酷い。

願っているものは見えないのに、願ってもいないものばかりが見えてしまう。

見たくない残留ばかり見えて、娘の魂を見ることがすら出来ない。無情だ。

気付けば妻の泣き顔が、私を凝視していた。悲しすぎる顔だ。

妻は私の表情から察し取ったらしい。私が娘の魂を見つけれないで居ることを気付いたらしい。

気付いて更に泣き出す。布団に顔を埋めて泣き声を高める。

この日を境に私は屋敷を捨てて山に籠ったのだ。

妻は私に黙って付いてきた。不満を口に出す事はなかった。彼女は私に付いてくる意外の道を思いつかなかったのだらう。

そして私は妻と一緒に、仙道という魔導を歩みだす。冥界に落ちた娘の魂に触れ合う為に、霊術を学んだのだ。百年も掛けてだ。

「その未来、やり直してあげる」

! ? 。

知らない声だ。

女 、少女の声。

娘の声じゃない。娘の声には、太陽のような暖かさと輝きがあった。しかし聴こえて来た声には抑揚が感じられない。暗い声でないが、明るい声でもない。冷たい声だが、とても美しい声だった。思いたせないが、以前聞いたことがある。それが、どのぐらい昔なのか思い出せない。

私は声の主を探した。

いつの間にか部屋が真っ暗に成っていた。暗闇に娘の亡骸を抱えたベットが浮かび、妻が泣いている景色だけが誇張されていた。

ここは何処だ。娘の部屋なのか？

声の主は誰だ？

「貴方の回答次第では、私が誰だか知る機会は一生涯ないわ」

「何を言っているのだ……？」

声は漆黒の遙か向こうから聞こえてくる。

どのくらい遠くから聞こえてくるのか分からない程に、遠く彼方が

ら聞こえて来ている。まるで百年以上未来からの問いかけに聞こえた。

「貴方の悲しみを書き換えてあげる。その不幸は私が背負ってあげる」

「何を言っている。私の不幸をキミが背負うだと……」

「そう、だから貴方は道を踏み外したら駄目」

「道……だと？」

「貴方は道を誤ってはならない。このまま貴方が進む道は、道の裏側。その道を進まなければ、貴方は私が誰なのかも知らないで済む」

「知らないで済んだら 何が変わる。何が」

「娘さんが死なないわ」

言葉の途中で闇の声が割り込み言った。

馬鹿な……。

死んだ者が生き返るか。

否。

否、否、否。

否、否、否、否、否、否、否。

否だ！

それを可能にさせるために私は仙道に走るのだ。

死者と触れ合う術を極めんとする為の誓い。

その為に家名も捨てて妻とふたり百年の苦惱を歩むのだ。

歩む……？

歩んだ……？

記憶が混乱している。

過去と未来が混ざり合って現在を惑わしているようだ。不満と矛盾が判断できない。

「貴方はどうせ選べない。だから未来は改善される。奥さんに薬を渡したわ。娘さんの病は、それで治る」

百年後の新薬ならば、娘は容易く助かったらうと、以前ドクターマキから聞いたことがある。

「あなた！！」

突然妻が声を上げた。私は驚きながらも振り返ると、遠く離れた屋敷の玄関先に慌てる妻の姿があった。

「あなた、娘が！」

妻の声も表情も明るい。

娘がどうしたというのだ。今、娘は大病に苦しめられて生死の境を

彷徨っている筈。

まさか……。

私は振り返った直後に走り出していた。その私に妻が更に叫ぶ。

「娘が目を覚ましましたわ！」

涙に汚れた妻の顔が笑っていた。

娘は意識不明。医者曰く、もう意識を取り戻すことすらないだろうと述べていた。

そこまで弱っていた筈。

走り出した私を追って、帰宅しようとしていた弟子や医者までもが走り出した。

私たちは妻と一緒に娘の部屋を目指す。

いつもなら苛立ちを感じさせる浮遊霊の類が一匹も見当たらなかった。

我々は娘の部屋になだれ込む。

「奇跡だ……」

私の背後で医者である弟子の一人が呟いた。

「お父様」

ベッドに上半身を起こした娘が座るような姿勢で笑っていた。

もう助からないと医者に言わせた娘が、にこやかに笑っているのだ。とても健康そうに見える。つい先程まで死にかけていたとは思えな

い。

病み上がりなのか力少ない笑みだったが、まるで野に咲くコスモスのような暖かい笑みであった。

笑っているのだ。希望の如く。

「奇跡だ……」

誰かが呟いた。いや、私が呟いたのかも知れない。それすら判断できない程、私は嬉しかったのだろう。

未来が変わるのだ。

明るく。

歓喜のままに。

憑き姫の進む道（前編）

啞然とする昂輝。

謁見室の破壊が完全に修復され、気付けば一瞬で姿を消していた二名の敵。

逃げた訳でも隠れた訳でもないだろう。

幾ら光の如く攻撃を仕掛けてきたふたりの魔人であろうと、不自然に姿を眩ますのは無理であろう。

まさに消えたのだ。

それ以外に表現のしようがなかった。

まるで最初から、居なかったように消えたのだ。

消えた敵。完璧に修復された謁見室。中央に立ち尽くす憑き姫。

静かな室内とは別に、城内から継続して続いている戦闘の衝撃音が、僅かに届いてくる。

ここでの戦闘が、まるで無かったことに静まり返っていた。

『憑き姫……』

昂輝がリミピットチャンネルで眩きながら近寄ろうとした時であった。憑き姫が全身から閃光を眩く放ち変身を解く。

光の後には靡いていた九本の尻尾が消えて、身形も巫女服から私服のワンピースに変わっていた。

再び近寄ろうと前に出た直後、突如憑き姫を囲むように黒い影が地

面から吹き上がった。

それは十本の柱の如く伸びると、やがて人型に変わり憑き姫を包囲する。

静けさを取り戻した筈の室内に、澱んだ妖気が満ち溢れた。想像を絶する妖力である。

『あれは、さっきまで九尾に象られていた九体の妖怪!?!』

それだけではない。九尾の狐も輪に混ざっている。

後頭部が異様に大きな老人。

行者姿の天狗。

一つ目の巨漢怪僧。

九尾を靡かす美女。

とっくりを片手に持ったマッチョな赤鬼。

純白の着物にミンクのコートを羽織った色白の女性。

白髪で枯れ木のように乾いた老人。

ぽっころりと腹の出た狸顔の中年オヤジ。

そして、おかつぱ頭のふたりの童子。

昂輝が述べた通り、先程まで憑き姫と同化していた妖怪カードの面々であった。

妖怪たちに囲まれる憑き姫は、俯きながらゆっくりとした動きで両膝を地面に付けた。そのまま正座の姿勢を取る。十体の妖怪たちは、その憑き姫を上から見下ろしていた。まるで一人の小学生を、寄って鷹って複数の教師たちが説教しているような光景だった。

妖怪たちの隙間から窺える憑き姫の表情は、今にも泣き出しそうな弱々しい顔であり、昂輝が初めて見る態度であった。

『憑き姫！』

その様子に心配を誘われた昂輝が、声を荒立て前に出ようとした。危機たるものを感じたのだ。

しかし、白髪の老妖が振り返り、枯れ木のような面相に大きく剥き開いた相貌で昂輝を一瞥する。

その一睨みで昂輝の動きが止まった。

『ぐう……う……う……』

体が動かない。一步も前に進めない。それどころか指一本動かないのだ。

『か、金……縛……』

金縛りである。

何かの妖術を使われたにしては一瞬すぎた。これこそ妖力の差なのだろう。

リミピットチャンネルすら美味しく使えなくなる。

昂輝はあれらと争っても、百パーセント勝てないだろうと、瞬時です。自覚してしまう。

戦わずして敗北感に打ちひしがれる昂輝を無視して軒太郎が喋りだす。

「かつて存在した妖怪たちの巨大組織、日本妖怪連合を束ねていた十二匹の大妖怪たちだ」

「妖怪連合……。妖怪変化が組織を築いていたと言うかニヤア？」

「ああ、妖怪とて生きていかななくてはならない。その妖怪たちが現代社会に溶け込みながらも姿を隠して生きて行けるように手助けすることを目的として組織された団体が、妖怪連合だ」

「あの妖怪たちは、その組織のボスたちニヤのね」

「そうだ。妖怪連合には十二長老と呼ばれる十二匹の大妖怪が、各支部を分けて仕切っていた」

軒太郎が語る十二長老。

その力量は、自分が受けた金縛りや、室内に充満する妖圧で悟れた。あれらは間違いなく大妖怪のレベルである。

大でわなく、超を付けても良いランクかも知れない。

「一番長老、ぬらりひょん。

二番長老、大天狗。

三番長老、九尾の狐。

四番長老、見上げ入道。

五番長老、雪女。

六番長老、井戸仙人。

七番長老、隠神刑部狸。

八番長老、酒天童子。

九番十番長老、前鬼と後鬼。

十一番長老、海坊主。

そして、名前だけしか記載されていない謎の妖怪、十二番長老、山田太郎。

これら十二匹の妖怪で、妖怪連合十二長老だ」

オカルトや妖怪関係に対して素人である昂輝やメニヤースでも聞いたことがある妖怪の名前が連なっていた。

「十二長老って言うけど、あそこには十匹しか居ないニヤア」

メニヤースが訊いた通り、妖怪の姿は十体である。

十二長老と呼ぶには、二体たりないのだ。

「十一番長老の海坊主は、体が巨大だと聞く。この部屋に入りきらないサイズなんだろう。それと海から陸に上がってこれないともな。十二番長老に関しては、すべてが謎だ。

憑き姫も十二番長老のカードは持っていない」

あの妖怪たちのことが大体解ったところで昂輝たちは、この様子を見守ることにした。視線を部屋中央に向ける。

憑き姫の進む道（後編）

昂輝たち人間の視線を無視しながら話し出す妖怪たち。憑き姫を見下ろしながら説教の如く厳しい口調であった。

「姫君、心得を忘れてしまい。我らを、この術を使う意味を
ぬらりひよんの言葉に続く刑部狸。」

「何故に、あの程度の人間を助ける。救う価値があったとは思えん
が」

「同感じゃ。ワシにも理解が及ばぬ」

井戸仙人が頷きながら述べた。

他の長老たちも同じようだ。各々の深さで頷いていた。

続いて雪女が言う。

「姫君は、優しすぎます。たかが外道を歩んだ老人たちを正す為に
次元を超えらるとは、あなた様の運命を無駄にしすぎですわ」

雪女は、まるで高貴な者に使っている女中の如き口調であった。憑
き姫を心配しているようだ。

今度は九尾の狐が、雪女と同じように敬意を表した口調で話します。

「例え人間であろうと、例え妖怪であろうと、訳隔てない思いやり
を心中にお持ちだからこそ、我々十二長老は、こうして力を貸して

いるのでは。今更意見するような内容じゃあなくてよ」

「おれたちゃあ、決めたはずだぜえ。この姫君を、我らが最高位に向いいれるとよ。違ったか、各々方!？」

威勢の良い口調で酒天童子が声を荒立てた。拳の関節を、威嚇のようにゴキゴキと鳴らす。

威嚇に怯えた訳ではないが、その言葉に他の長老たちが黙り込む。

だが、その沈黙は数秒も持たない。ぬらりひよんが口を出す。

「我ら妖怪変化は、生き残らなければならぬ。今や絶滅の危機に瀕している。人間は強すぎる。我ら幻の如き種では、現代を生き残れない。我々妖怪変化全体に、改革を齎す存在が必要だ。それを打開してくれる存在こそが、姫君、貴方だ」

「だから我々は、こうしてカードを仲介して力を貸してきたのよ」

後鬼が可愛らしい声色で呟くように言った。

続いて前鬼が言う。

「でも、その代償は……。タイムリミットも近い」

「解っているわ……」

俯きながらも小さな声で憑き姫が応えた。

完全に落ち込んだ小学生だ。

まるで元気が無い。

いつもの冷静でありながら強気でぶてぶてしい態度が微塵もない。

本当にこれが憑き姫なのかと昂輝は己の目を疑った。

ぬらりひよんが顎を摩りながら言う。

「我々の世界は次元の向こう側に在る。姫君とは別の次元並列だ。その差を超えて、我々は救いを求めた。

我々が、姫君の希望にそって力を貸せば貸すほど、姫君の存在は、時空を超えてこちら側に具現化していく。

まだ、姫君の姿は我々の次元で具現化すらしていないが、それも時間の問題だとワシは考えておる。

いずれ姫君は、こちらの世界で力を失い、失われた力は、我々の世界で形を成し始めるだろう。

これもまた、新たな輪廻転生」

「その傾向は、既に現れ始めている……」

そう呟いたのは軒太郎だった。

軒太郎の呟きが妖怪たちには届かなかったのか、ぬらりひよんは話を続ける。

「いずれその体も心も萎みきるだろう。存在までもが萎みきる。だが恐れるな。その分は、私たちの世界で生まれ変わる。

ただし　だ」

そこまで言うとならりひよんの表情が、恐ろしげな怪物のものと化す。他の九匹の妖怪もである。

まさに妖怪そのもの。善悪関係なく、女子供すら食い殺してしまいそうな表情だった。

「生まれ変わった貴方様は、我らの救世者。妖怪の救世者は、妖怪であるべき。それを重々忘れることなかれ」

その言葉を最後にぬらりひょんをはじめする十匹の妖怪たちは、姿を現した時と同じように漆黒の煙に変化して、床の中に消え始める。最後に前鬼だろうと思われる少年の声が聞こえた。

「我らの姫君。待っています。サイバージェンスーパーセントの向こう側で」

その言葉を最後に黒煙は、すべて消えうせた。謁見室内から悍ましい妖気がすべて消えて無くなる。

『憑き姫！』

昂輝の金縛りが解けた。赤絨毯の上で正座を続ける憑き姫の元に走る。

『憑き姫、大丈夫かい！？』

問うが返事は無い。

昂輝が駆け寄ったところで、正座したままの憑き姫が横向きに倒れそうになる。

咄嗟に昂輝が腕を伸ばして華奢な体を受け止めた。

憑き姫は、昂輝の腕の中でぐったりとしている。意識が無い。

昂輝は憑き姫のとても軽い体を支えながら違和感を感じる。

『つ、憑き姫……、これは……』

軽すぎる。

幾ら憑き姫が華奢でも軽すぎる。

『小さくなっている！？ 憑き姫の体が小さくなっている！？』

驚きのあまり眼を擦る昂輝。

しかし、見間違っても錯覚でもない。

眠るように瞳を閉じている憑き姫の体は、ちじんでいた。表情も幼く変わっている。

時間を巻き戻したように、子供となっている。

十二三歳に見えた憑き姫の容姿が、一段と幼くなり、十歳以下に見えた。

『これは一体何が……』

「孤独流被い屋最新最終奥義の代償だ」

いつの間にか軒太郎が、憑き姫を抱える昂輝の背後に立っていた。メニヤースは謁見室の入り口側に立って此方を窺っている。

昂輝は振り返り軒太郎の顔を見上げてから訊く。

『代償って、どういうことですか？』

「あの奥義は、別次元に存在する十二長老たちの妖力と妖術を引き出す術だ。そのエネルギー数は光の速さを超えて、時間すらも追い越し遡る。SF風に言えばタイムマシンの原理に似ている術だ」

『時を巻き戻すタイムマシン……』

馬鹿な、と一瞬疑った。

「過去に帰って、何かを変えれば、現代でも何かが変わる。連鎖的にだ」

『それが、バタフライエフェクト……』

そのぐらい昂輝も知っていた。

この原理は映画で見たことがある。
今の時代、難しい話でもなかるう。

「憑き姫はバタフライエフェクトすらも計算に入れて奥義たる術を使ったのだ。

敵が消えたのも、破壊されたはずの部屋が修復されたのも、過去を
変化させたが故だ」

『憑き姫が、過去に戻って何かをしてきたのですか……』

「おそらくは……な」

憑き姫が過去に戻り、あの魔人夫婦に何をしたのかわ不明だが、それによってここでの戦闘事態が無かったことになったのだらう。

『でも、何故に憑き姫がこんな風に……。代償ってなんですか？』

更に幼くなった憑き姫に視線を落とす昂輝に、軒太郎が応える。

「憑き姫と十二長老の間で結ばれた契約がある」

昂輝が怪訝な表情で再び軒太郎の顔を見上げる。

「あの十二長老って奴らは、我々と別の世界の住人だ。並列時空。我々の世界と瓜二つだが、微妙に異なる世界と言えよいだらうか」

ふたつの分かれ道がある。

もしも右の道を選択して進んだ場合、左に進む自分は存在しない。それが普通の常識である。

しかし、この場合の並列時空とは、その左に進んだかもしれない自分を指している。

未来とは、幾つもの選択の繰り返しで、本来ならば一本の道と成っている。それが人生であり、人の一生である。

並列時空の別世界は、そのもしかに進んだ世界だ。無いはずの有り得ない未来である。

あの十二長老たちは、この世界に存在しない。それらの並列時空の存在であった。

「憑き姫は、あの術を使うたびに、存在そのものを徐々に消すられ、あいつらの世界へと引き込まれていく」

『存在を引き込まれる……。それで幼児化、体が小さくなって……』

「ああ、そうだ」

そして軒太郎は過去を語りだす。

「元々俺と憑き姫が知り合ったのは、五年ぐらい前のことだ。当時

の憑き姫は十七歳だった」

『十七歳!?!』

自分と同じ年の数字に驚く。しかもそれが五年前だと聞けば尚のことだ。

昂輝が憑き姫と知り合って、まだ二週間もたっていないが、その頃から憑き姫の外見は十二三に窺えた。とてもじゃないが十七歳に見えるなかった。

そして更に憑き姫は年齢を引き下げている。

「憑き姫が、この術を控えないかぎり、年齢と一緒に存在そのものが別次元に飛び越えて行く。

もしやすると、術を使わなくても、いずれは……。これは、もう止まらない。止められない」

『じゃあ、いずれ憑き姫は……』

この世界から消えて居なくなる?

「おそらく……、いつかは、この世界から消えて、向こう側の住人になるだろう。

しかも時空列を飛び超えた拍子に、人ではなく妖怪と変化してしまっただろう」

『そんな……』

確かにぬらりひょんも同じことを述べていた。

「こいつは、そういう術に手を出したのだ……」

不幸かな。

それが、憑き姫が進みだしてしまった道である。

その道の果ては、別の世界。別の存在に生まれ変わる。

それ即ち、すべてとの別れである。

どのような術にしても、万能は有り得ない。

憑き姫は、自分の過去を変えられない。

もう、引き返せないのだ。

これが、彼女の運命なのだ。

定めである。

権利書 (前)

中庭での戦いを終えた極道コンビとお砂の一行は、負傷して自力で立つこともできない賢者を連れて悪夢城の入り口を目指していた。歩く体力も残っていない賢者を赤股が背負っていた。

時折、爆発音が轟く。

野外に残っていたパペットオークたちは、お砂が操る自爆蝶によって丸焼きにされ近寄ることも敵わず、友軍の大將格を連れた彼らを、物陰に隠れながら歯痒く見送るしかなかった。

「それにしても驚いた……」

赤股の背中におぶられた賢者が、血みどろの顔を穏やかに緩めながら口を開く。

「負傷して歩くことすら叶わないが、口だけは十分に利ける様子であった。」

「まさか噂に名高い砂築不動産の美人若社長が、悪名高きヴァルハラ探偵事務所の調査員だったとは……。素直に驚いたよ」

「趣味の一つですわ」

お砂は日傘で紫外線を防いだ顔に優しい笑みを浮かべながら受け応えた。

そして日傘をクルリと廻して話を続ける。

「うちの会社は優秀な社員が揃っていますから、私のような道楽社

長は、大きな契約のとき意外に出番はないのですよ」

「それで探偵を嗜んでいると……。しかも妖術まで使って……」

「妖術は、我家に代々伝わる本業の一つですわ」

「こいつんちゃく、元々が呪い屋だ」

ここで功風老が口を挟むと賢者は、呪い屋とは何かと、どちらに訊いたのか微妙な間合いで問う。

その問いに答えたのは、お砂のほうだった。

「うちの本業は、元々が不動産業でなくて、呪いを解く陰陽師だったのです」

「陰陽師……。随分と眉唾なことを家業にですか？」

「そりゃあ、医学を学び進んだ総合病院の院長様にゃあ、眉唾に移るだろうよ」

賢者を背負った赤股が、皮肉ぽく言った。

そうである。今、負傷して背負われている賢者は、現実世界で双葉総合病院の院長を務めている男である。

深々と被ったローブのフードがはだけることにより素顔をさらけ出し、正体が発覚したのだ。

顔を知っていたのはお砂である。賢者のほうもお砂を知っていた。

親しい仲ではないが、以前二三度ぐらい知人のパーティーで顔を合わせたことがあった。

しかし、今のお砂は髪色を灰色に変えている上に距離が離れていた為、賢者も直ぐに気付かなかったのである。

更に、この世界に知人が居るとは予想すらしていなかったのも手伝ったのだらう。

賢者の本名は、双葉堅信。年齢は六十五歳に成る。

彼が院長を勤める双葉総合病院は、先代によって戦後間もなくに設立された施設を彼が引き継ぎ経営を成長させてきた病院である。

地域密着型を心がけた良心的なスタッフが揃っており評判も上々であった。

一方お砂が経営する砂築不動産も、双葉総合病院周辺に多くの私有地を管理する大地主の会社であった。

そしてお砂の家系は、元陰陽師だったところに土地などに付く悪霊や呪いを払い、更にその土地を格安で買い取ることで大地主となった一族である。

こうして悪い噂が立っていた土地は砂築不動産によって寝かされ、十年二十年経ってほとぼりが冷めたところに売買されたり貸し出されたりするのであった。

お砂と双葉堅信は、この町では顔が広いが、輪の外に出してしまえば然程の有名人でもなかった。

故に東和栄光ほどの日本経済や政治分野まで影響を与える大物までなると、その顔どころか存在すら知られていないのが現実である。

「なるほど、土地売買の裏側に、なんとも不思議な事実があったと

はね
」

賢者はお砂の説明を聞いて納得している様子だった。しかし、この怪しい話も数年前、否、一年前までならば信じもしなかつただろう。

今こうして夢の世界で戦っているが、ちょっと前までは幽霊すら信じていない堅物の医学者だったからである。

「こつちのことは話したんだ、今度はお前さんらのことを聞かせてくれねえか。東和竜栄のことか」

更に禿頭の老人から予想外の人物名前が飛び足し賢者を驚かせる事となる。

「美藤傀儡とかのことをよ」

「ぬっ！」

焦りを隠すように静める賢者は、暫し表情を硬くしていたが、何かを観念して緊張を緩める。

「そこまで知っていましたか……」

「東和竜栄、鬼頭順平、美藤傀儡、それとお前さん。この四名で何を企んでいやがる？」

「悪名が高くても、流石は探偵だ。我々四人のことを察していましたか」

「お前さんは、あの美藤傀儡って女が何者か知っているのか？」

功風老は、美藤の名を汚いものでも語るように言葉にした。太い眉を片方吊り上げ眉間に深い皺を寄せている。

「正義感の欠片も無い人物だとは心得ている。そもそも我々に、木偶を造らせ操る術を教えたのは彼女だ。我々が木偶を操れるのは夢の中だけだがね」

美藤傀儡は、例外的に現実世界でも生き人形を自在に操れる。

「今回の事件、志望者はやはり、美藤ですか？」

思わず素の敬語を出してしまった赤股が、背負った賢者に顔を向けて訊いた。

赤股は、あの人形師に幾度か痛い目を見ている。因縁の相手として気に成るのだろう。

「さあ、私は詳しくは訊いていない。あまり追求をしなかったからね……」

赤股に背負われている賢者は、俯き加減で溜息を付いた。

溜息の中には、不自然な後悔が混ざっているのを赤股は背中で感じ取る。

「私は、美藤傀儡と東和竜栄が組んだ後に加わったメンバーだ。

今回の計画、リーダーは東和竜栄だが、計画自体を設計したのは美藤傀儡のほうだと思う。」

そして私の役割は、美藤傀儡が見つけてきた夢の世界に入れる適合者を病院で管理することだ」

一般人が夢の世界に入ると、意識不明の状態に陥る。その間、肉体の安全を病院で管理するのだ。

まさに賢者は、その役割が自在な立場になる人物だった。

東和栄光、鬼頭順平、鴉尾栄太、神田淳の四名は、双葉総合病院に入院している。

更に美藤傀儡から頼まれ、味方でないがベロニカ小田という少女を病院で預かっていた。

小田良子の娘で悪夢城の住人であるメニヤースのことだ。

ここまで説明されれば推測が確信へと判明できた。

双葉総合病院は、彼らの肉体を預かる隠れ蓑として利用されていたのだろう。

「お前さんの役割はわかった。で、肝心の計画とやらは、何なんだろう？」

功凧老が真相を急かす。

それに対して賢者は、思いのほか素直に暴露する。
やはり観念しているのだろう。

「不老不死の研究だ。それが最終目標にある」

不老不死。

馬鹿げた話である。

そのような生命の理を無視した存在が、万有には有り得ない。功凧老もお砂も、それを重々心得ていた。

だが、多くの人間は、その非常識な魅力にひきつけられて大自然に抵抗を試みる。

時代や人種ともに関わらず、多くの異人たちが挑戦を試みて敗れ去ってきた。

未だ医学は、その夢に抗っている。

「最終目的ってことは、今回の騒動事態、まだ事の始まりなのか？」

お砂の質問に賢者は、良いところに気付いたと述べる。

「そうだ、今回の悪夢城攻略作戦は、これだけでは不老不死を達成できない」

「はあ？ なら何故に戦争ごっこを始めた？」

極道コンビが周囲を窺う。あたりで戦火が黒い煙を幾つも上げていた。

「我々が攻め込んだ理由は、悪夢城の城主が有する権利書を奪取することであった」

「権利書だと？」

功凧老が顎を撫でながら語尾を延ばす。

権利書（後）

「悪夢城の権利書と聞いている。最初は私も何故にと思ったよ」

「権利書なんぞ紙切れだろ。何に使う。裁判でも起こす積りか？」

功凧老が嘲笑いながら言った。

権利書に対して、その程度の使い道しか思いつかなかったのだ。

「いや、権利書自体に様々な魔術が記載されているらしいのだ」

「城の権利書というより、魔法書なのですな」

お砂が権利書に興味を抱いた様子である。

ここで積極的に食い付く。

「おそらくは、そのような感じなのだろう」

「では、権利書の内容をご存知？」

「内容は、夢の世界を構築する為の方法と、木偶人形の製作及び操作法、それと霊体の通行許可が自由になる術が記載されていると聞いている」

賢者曰く、前のふたつは、不完全であるがコピーが完了しているとのことだ。

東和竜栄が造り出した古城の世界や、軍を率いた者たちが使った木偶の兵士は、それらの術を摸倣したものとのことだった。

美藤傀儡は、夢の世界で木偶人形を操る術を改良して、自分の生き人形を操る術を強化したらしい。

だが、どちらの術もコピーとして不十分だった。更に三つ目の術に関しては、コピーすら成功していないとのこと。

今回の悪夢城攻略作戦は、コピーでなく、権利書の原本を手に入れるのが目的であった。

「そして我々は、三つ目の術である霊体の通行許可書を利用して、一時的な寿命の継続を狙っている」

「東和邸の研究所で管理育成されていたホムンクルス、あれをお使いになるのですね」

お砂の言葉に頷く賢者。

「悪夢城の役割とは、この世とあの世の道中にある関所のようなものらしい。この霊体の許可書があれば、肉体と別れた魂を、別の器に移すことが可能となる。

その器は、美藤傀儡が作った生き人形や、植物人間と化した者たちの肉体でもよいのだが、その場合は、魂が体に定着せずに短期間で魂が朽ちて行くのだよ。何せ、本物の自分の体でないからね」

「じゃあ、あのホムンクルスたちは……」

「そうだよ。我々の細胞やDNAを素体に作られた我々専用の器だ。あれならば魂の磨耗を回避して、永い時間を掛けてでも不老不死の研究が可能になる」

今回の作戦は、時間稼ぎを狙った計画の一旦に過ぎないのだと賢者

は語る。

「ふう〜……」

「なるほどのお」

極道コンビが詰まらなそうに相槌を入れた。

彼らは不老不死に対して憧れを抱いていない。それどころか信じてもない。不老不死を願うこと事態が、愚かな行為だとも考えていた。

「ですが、貴方のような一病院の院長であり、人々の命を預かる医師が、ヤクザや得体の知れない魔術師と手を組んで、このような戦争まがいの侵略行為に出るとは、如何なものでしょうか。医師たる人物が行なう所業とは思えません」

お砂の言う通りであった。

医師が戦争に加担すること事態が平和的でない上に、その首謀者のひとりとして行動を起こすのは道徳から随分と反している。

これは明らかかな戦争行為。医師としての後方支援や衛生兵ならば分かるが、指揮官として賢者は前線に立っていたのだ。二十体の巨大ゴーレムを引き連れてだ。

これは医師としての誇りを自ら汚している。

「私も医師だ。貴方の言いたいことも分かる。医師ならば患者を救いたいと願う正義感は、僅かなりにも有しているものだ。

だがね、この計画が前進したのならば、人類は新たな高みに到達できる。進化とも呼べよう。人類は、如何なる病にも折れる事無く生きていける。永遠にだ。例えば手段が眉唾な妖術を元にしても、

その程度の矛盾は後で説明してしまえばよい」

難しい問題は後回しにして、今は結果を優先したいらしい。そのよ
うな口調であった。

その真意について賢者が語る。

「私は医者であるが、今は患者でもある。ガンなのだよ。深刻な末
期ガンだね。

全身のあちらこちらにガン細胞が転移している。もう助からない。
余命一年あるかないかだ……」

賢者の口調は、医学者の口調でも死を宣告された患者の口調でもな
かった。それは、医学の限界を知り、己の進む道を改めてしまった
人間の口調だった。

魔道に落ちてしまった男の意思が伝わって来る。

「それで事を急いでいるって訳かい」

「ああ……」

賢者が医師としての誇りを捨ててまで兵士を率いた必死の思いが、
ここに来て三人に悟れた。

だが、三人は納得していない。

賢者の言葉は、明らかな言い訳である。そう取れた。

やがて四人は悪夢城の入り口に到着する。

城内からは、戦闘の音が流れ出てくる。剣や鎧が奏でる戦闘音であ
った。

「では、ワシらも中に進むか」

「はい」

功風老にお砂が応えると、一行は順々に入城していった。それをオーク兵の残党が見送る。

奇襲誘拐 (一)

眠るように気を失っている憑き姫を、昂輝が優しくお姫様だつこで抱え上げる。

術の影響で憑き姫の体軀は、一層幼くも小さくなつてしまつていた。とても軽い。

一人だけ時間を巻き戻してしまつた少女を抱えながら昂輝は、綺麗な顔を見下ろす。

異性を抱えるという初めての体験。憑き姫の矮軀から伝わつて来る滑々した温もりを感じ取り昂輝は初々しく緊張していた。

輪郭がふくよかになり一段と幼い顔に変わつてしまつたが、眠る少女の顔は、やはり美しい。

狼少年は、じつくりと見とれていた。緊張も徐々に緩み、表情がだらしなく崩れる。

「昂輝君、とりあえず憑き姫は君に任せる。意識が戻るまで君が守れ」

後ろから軒太郎に声を掛けられた昂輝は、緩みきつた狼面を悟られまいと顔面の筋肉を引き締めなおしてから、はい、と返事をしてから振り返つた。

軒太郎は漆黒の身形のままクールに振舞っているが、隣に立っている臍の見えるタンクトップに際どいジーンズのポットパンツを履いた小麦色の猫娘は、昂輝を揶揄するような笑みを浮かべていた。

三人が向かい合い輪を築く。

「本来ならば、当主のナイトメア公爵とやらに謁見を求めたが、憑き姫がやりすぎた。我々の調査はここで一旦中断にして、外の世界に帰還しようと思う」

異存は無いと昂輝が頷いたが、メニヤースが焦った表情で意見を述べる。

「ちょっと待って下さいニヤア。私はどうなるニヤア。ちゃんと情報提供に協力したのだから、外の世界まで連れて行ってくれるニヤアよね」

「当然だ。我々ヴァルハラ探偵は、嘘は付くが約束はきっちり守る」

「そ、それを聞いて安心したニヤア。外までの警護もよろしくニヤア」

嘘は付くが約束は守ると述べた軒太郎の台詞に首を傾げる昂輝は、この言葉で安心できるメニヤースの思考も怪しいレベルだと苦笑いを浮かべる。

しかし軒太郎が釘を刺す。

「だが、これだけは言っておくぞ」

「何ニヤア？」

「我々が出て行くゲートは裏門だ。行き先は東和邸の庭先。このゲートから一度でも外に出てしまえば、二度とこの夢の世界には入っ

てこれなくなる」

「もう、戻ってこれないってことかニヤア」

「そつだ」

「気にしないニヤア。私はもうこの世界に未練は無いニヤア」

そう述べるメニヤースは、最後にニツコリと満面の笑みを輝かせる。その笑みから未練がないと語る言葉が本意なのだろうと察しられた。メニヤースにしてみれば、今回の事件が、この世界から離れる為の良い切っ掛けであると考えていた。

メニヤースの本名はベロニカ小田。アメリカ人の父と、日本人の母の間に生まれたハーフである。

外見は、一目でハーフと解る容姿をしていた。

髪は金髪で、肌も白い。瞳の感じも日本人とは異なっていたが、アメリカ人から見ても国籍が不明な混種に見えたのである。

十二歳まではアメリカのボストンで暮っていたが、両親の離婚に伴い日本に定住を決めた。

言葉に関しては問題がなかった。

英語と日本語がどちらとも喋れた。

外では英語が標準語であったが、家の中では母に合わせて日本語で喋っていたからだ。

その母も、五年前に亡くなった。

しかし彼女は、祖父たちと暮らすことを決め、日本に残った。父の

居るボストンには帰らなかった。

理由は、母が離婚を決めた事情と一緒にある。

父は、日頃から暴力を振るう男だったのである。

だから彼女は、日本の方が安全だと考えたのである。

だが、彼女にとって日本の暮らしは、案外と苦痛が多かった。

日本特有の当たり障りの無い振る舞いが、彼女には難しかったのだ。ただでさえ金髪のハーフという外見が、彼女を目立たせ苛めの対象に上げた。

輪を掛けて彼女は、勉強が苦手だった。頭が悪いと蔑まれ馬鹿にされた。

悪い要素は重なり重なって、どんどん彼女を孤立へと追い込み、結果的に不登校と成る。

そんな時、母の遺品から、あの本を見つけたのである。

『悪夢城の公爵』

母が父と知り合う前に書いたという小説だった。

彼女は、その本が魔導書と呼ばれる危険な代物と化していることを知らなかった。

何気なく自室に持ち込み、ベッドの上で熟読してしまったのだ。そして、夢の世界に落ちた。

城主のナイトメア公爵は、ナルシストぽかったが、案外と紳士的でフレンドリーな一面を持っていた。

突然表れたベロニカを快く受け入れてくれたのだ。

ナイトメア公爵は、案外と善人だった。それどころか、彼の取り巻きであるハーレムの美女たちも気さくな人が多かった。

その他の住人たちも似たような感じである。善人と言い切れないが、悪人とも言い切れない人物が多かったのだ。

夢の世界は、予想以上に心地良い世界だった。

悪夢城ではゲストとして扱われ、お姫様が暮しているような豪華な部屋を与えられた。

ドレスサールームの扉を開けてみれば、華やかなドレスが詰まっており、煌びやかな宝石も選び放題だった。

朝食や昼食は、黙っていても美味しい食事が運ばれてきて、夜になると毎日パーティーが開かれた。

辛い現実社会に比べたら、まさに夢の世界と思えた。

やがてナイトメア公爵に、ハーレムに誘われたが断った。代わりに兵士として、この世界に残る契約をした。それが、この世界に定住する為の条件であった。

そして、超人的な力を授けられた。

現実世界での自分が、意識不明で入院していることも知らされていなかった。祖父や祖母が心配していることも聞かされていた。しかし、この世界は魅力的だった。帰る気が湧かなかったのである。

正直、楽しかったのである。

だが、何事にも潮時がある。
戦士として契約を結んだが、実のところ戦いも戦争も考えられなかった。

暴力が嫌いなのだ。父を思い出す。

もう一年経つ。これ以上は、祖父たちに心配も掛けられまい。それに、おそろくのところ高校も中退が決まっただろう。

だから、新しい道を進もうと思う。

裏門から出て行けば、この世界には二度と戻れないと軒太郎が言っていた。

意志の弱い自分には、そのぐらいの強制が丁度良い。

この世界には二度と戻らないと決めて、心配を掛け続けた祖父たちにも恩返しをしなくてはいけない。

何よりも、外の世界で、やってみたい事が出来た。その道を進んでみたいのだ。

メニヤースが軒太郎に言う。

「じゃあ、帰ろうニヤア」

明るい笑みだった。憑き姫をだっこしている昂輝が、メニヤースのあどけない笑みに首を傾げた。今までの怯えてばかりのイメージと違ったからだ。

「昂輝君、憑き姫はキミに任せる。目が覚めるまで頼むぞ」

『はい』

昂輝が力強く返事を返した。

「先ずは、お砂ねえさんや極道コンビと合流を試みる。出会えなかったら仕方が無いので裏門を目指してイゴールと合流する。あの三人ならば、合流が叶わなくても、各々の判断で帰還ぐらいできるだろう」

軒太郎の言う通りだ。あの三人の強さは昂輝と比べても桁違いのランクである。探偵としても普通じゃない。その時その時に対応して個人的に判断が出来る大人だ。

昂輝風情が心配を巡らせることではないだろう。

やがて憑き姫をだっこした昂輝を最後に三人が謁見室を退室しようとした時である。玉座の後方にある出入り口から複数の足音が飛び込んでくる。分厚い革製のブーツの足音に重なって甲冑が奏でる金属音が耳障りに混ざっていた。

『何っ！』

瞬時に振り返る昂輝が見たものは、剣を翳した黒鎧の騎士たちであった。五人居る。

「敵の木偶ニヤア！」

黒騎士を敵の木偶兵士だと見破ったメニヤースが叫ぶ。

その間にも五人の黒騎士は、駆け足で昂輝に迫る。

五人のうち三人が地上から昂輝に切りかかり、残りの二人が三メートル程の高さまでジャンプして襲い掛かって来た。

奇襲である。

昂輝は抱えた憑き姫を守る為に、敵に対して背を向けて身を丸めた。

自分が斬られるのは構わないが、憑き姫には傷一つ付けてはならない。

そう思い奥歯を強く噛みながら斬激に身構える。

だが、黒騎士たちの剣が昂輝の背中に届くことはなかった。代わりに、けたたましい複数の金属音が鳴り響いた。

昂輝が振り返る。

「軒太郎さん……」

そこには二本の妖刀を握り締めた軒太郎が立っていた。

彼が黒騎士たちの攻撃を弾き返したのだ。

十メートル程後退した黒騎士たちが威嚇的に剣を構えている。

「この木偶どもは、今までのモンスターと出来が違うぞ。あのグスタフとか言う老執事よりも強い」

一瞬の攻防で相手の戦力を測った軒太郎。

その両手では、妖刀イベタムが紫色の妖気を噴出しながら生き血を求めていた。

漆黒のテンガロンハットの唾下からは、変身した軒太郎の冷たい眼差しが冷酷な光を放ちながらも五人の黒騎士を睨みつけていた。

「昂輝君、この木偶騎士は俺が片付ける。メニヤースと憑き姫を頼む」

『はい』

昂輝の返事を聞いた軒太郎が、ゆっくりとした足取りで前に出た。軒太郎の放つ分厚い氷のような妖気が、黒騎士たちを一步後退させた。

それを見て昂輝は、この戦闘に何の問題ないだろうと予想した。

おそらくは、軒太郎も同じように考えていただろう。

いつも通りの勝利が約束されていると思っていた。

その余裕の考えが誤算を呼ぶ。

敵を侮り、痛い目を呼び寄せる。

奇襲誘拐 (二)

玉座の後方、城主が謁見室に入場してくる通路から室内を窺う狩人が、顔半分を覗かせて居た。

黒衣の男が二刀流を振るい、公爵から借り受けた黒騎士五人と戦っている光景が覗き見える。

「五対一なのに互角かよ……」

狩人は臭い顔をして呟く。その後方に、巨大な筈の体を分裂させて着いてきているレッドゴーレムのパーツが、白雪姫の小人のように並んで控えていた。

現在の狩人が任されている任務は、戦う男たちの後ろで見守っているベロニカの娘の身柄を確保することである。

無理して敵を討伐することではない。
今は隙を狙っているのだ。

謁見室内では、刀と剣が火花を散らしていた。

昂輝は眠り続ける憑き姫を抱えたままメニヤースを背に隠しながら後退して行く。

幸いであると、軒太郎と昂輝は思っていた。

敵が此方の殲滅を狙うよりも軒太郎一人に集中攻撃を仕掛けていることにだ。

ここで昂輝たちを狙われては厄介だと思っていたからだ。

「命無き道化の傀儡に興味を持ってぬが、害を齎すならば容赦無く滅してやる」

双子の妖刀を振るう軒太郎の冷たい台詞には、絶対勝利を確信しているような自信が溢れるほどに満ちていた。

五人の敵に囲まれながらもすべての攻撃を弾き返す。

「陽動は美味くいつている。あいつらは俺の目的には気付きもしていない。ちょうしこいて戦ってやがるぜ。隙は直ぐに生まれる。チャンスは俺のものだぜ」

狩人が予想した通りであった。

次の攻防で、軒太郎が黒騎士たちを壊滅状態に追い込むのであったが、それが大きな隙を作り出すことになる。

ダンツ、と床を蹴る音と共に軒太郎の背後に居た黒騎士が斬りかかる。

「後ろからとは、騎士にあるまじき」

台詞が言い切られる前に対処が先んじる。

風が鳴った。

振り向きざまの水平斬り。狙いは黒騎士の首。喉。

しかし、斬り込んで来た黒騎士は腰を落として軒太郎の刀を躲かしてみせる。

空振り。

「躲した！」

躲されるとは思わなかった昂輝が大きな声を上げた。

「いいや、躲せていない！」

軒太郎の強い否定。

妖刀は二本。

横振りの斬刀と躲されたが、二激目の突きが来る。

ザクリと切っ先が、黒騎士の顔面を串刺しにする。ヘルムの間隙から刺さった妖刀が、後頭部へと貫通していた。

更に軒太郎は刀の柄を手首で捻り残酷に決る。

刀身が突き刺さったままの傷口から出血が飛び散った。

だが、黒騎士の動きは止まらない。

開いている片手で妖刀を握り締める。それを合図に、残りの四人も斬りかかった。

「ほう、人体の構造を無視しているか。美藤の傀儡とよく似ている」

冷静な口調であった。

突き刺さった妖刀を放棄して真上へとジャンプする軒太郎。

ジャンプした軒太郎の足元を黒騎士たちの剣がかすめて過ぎる。

跳躍は高い。

二十メートル程ある天井にまで達していた。

軒太郎は残った妖刀を天井に突き刺しぶら下がる。

攻撃を躲された黒騎士たちが軒太郎を追って視線を見上げる。頭に妖刀を突き刺したままの騎士も見上げていた。

「銃は剣より強し、だったな」

天井にぶら下がりながら懐からMP-4を抜き出し銃口を下に向けた。

軒太郎が躊躇せずにドリガーを引くと、ファンタジー世界の王城に銃声が轟いた。

まさに弾丸の雨が降り注ぐ。

勿論、弾丸は普通の代物とは違う。

弾丸は黒騎士たちの甲冑を貫き筋骨に減り込んで行く。火花と一緒に血飛沫が飛ぶと、五人の姿勢が崩れた。

しかし倒れない。

軒太郎は、咆哮を続けていたマシンガンを鎮めると、下の様子を窺った。

硝煙が火薬の臭いを漂わせる中、黒鎧の隙間からダラダラと鮮血を流す黒騎士たちは、銃撃に一度は膝を付く。

だが、直ぐに姿勢を戻した。

『効いてないのか？』

対怪物用のマシンガンが吐き出した、ありったけの弾丸を浴びたのに黒騎士たちが倒れもしない事に、昂輝が素直に驚いた。

黒騎士たちは、早く降りて来いと軒太郎を見上げ直す。

マシンガンの弾丸を、ものもしない黒騎士たち。

やはり分身する老執事よりも強いのだろうかと昂輝が息を呑むなか、自信ある表情を曇らせない軒太郎が天井から語る。

「弾丸が特別でね。もしも美藤傀儡と対戦する機会が訪れたなら使おうと思って作った装備でね」

マシンガンの弾丸を撃ちつくした軒太郎が妖刀の柄を握った片腕一本で逆上がりをする。と両脚で天井を蹴り、突き刺さった刀身を引き抜いた。

クルクルと体を回転させる軒太郎が天井から落ちて来ると、音も立てずに黒騎士たちの中心に着地する。

黒いロングコートが空気を孕み膨らんだ後、ゆっくりと沈んで行く。皆が固まり動かない。

時間にして数秒だったが、黒騎士たちも再攻撃を仕掛けない。

しばらくの沈黙。

後に黒騎士たちが歪な動きで痙攣を始めた。
まるで油の切れた人形のようなだった。全身の関節から錆び付いた金属音が聴こえてきそうだった。

『何が起きている！』

驚き役を素直に果たす昂輝だったが、瞬間的に軒太郎の勝利を感じ取っていた。

そして黒騎士たちに更なる異変が起きる。

健康な人間と思えるような木偶の表情から水分が失われしほみ始めると、ミイラのように干からびて行く。それと同時に銃弾を浴びた鎧の穴から木の枝がニヨキニヨキと生え出て来た。

『木の枝だ……』

木の枝を次々と数を増やして鎧の隙間という隙間から枝を増やし、最終的には五人の姿を、鎧を着た樹木へと変えていた。

MP-4を黒コート内に仕舞いこみながら軒太郎が言う。

「奴らに撃ち込んだ弾丸は、吸血樹と呼ばれる妖木の種で出来ていてね。赤い鮮血を吸ってしまえば一瞬で成長を始めてしまう。例えば飯初の人間でも体内に入ってしまったえば見ての通りだ」

五人の黒騎士だった物の中央で、不気味に軒太郎が笑いながら肩を揺らすと、刺さった妖刀の一本を引き剥いた。

奇襲誘拐 (三)

人木と化した黒騎士たち。鎧の隙間から生え出るのは人の手足でなく、奇怪な木の枝であった。

葉の一つも生えていない枯れ木である。

それで有りながら未だカクカクと動こうとしていた。

「ほほう、木偶とは想像された生身の肉体を持つ操り人形と思ったが、見た目よりも根性が入った作り物だな。全身を吸血樹に侵食されていながらも、まだ動くとは」

しかし勝負は付いている。動けなければ、生きていようが死んでいようが負けは負けだ。

戦闘不能。勝負有りと昂輝も思った。

だが。

物陰で微笑む狩人。

「上出来だ。隙を生み出し、敵を中央に置ければ上等」

右手を握り締めた狩人が、親指一本を立てた。

「ポーン」

ふざけた口調で爆破ボタンを押すように親指を曲げる。

刹那に人木と化した筈の黒騎士たちが、黄色い閃光を放ち出す。

「自爆か！」

四方を囲まれる軒太郎が、自分の身を案ずるよりも視線を昂輝たちの方へ走らせた。

「女たちを守れ！」

『はい！』

その言葉しか間にあわなかった。五体の黒騎士が爆発する。

昂輝も自爆攻撃を察して憑き姫とメニヤースを庇う様に背を向けた。本日二度目の盾と成る。

爆発と共に木片に混じり金属片が無数飛び散り部屋中の壁や床に突き刺さった。

『がはっ！』

飛んで来た木片が昂輝の背中にも数本突き刺さる。傷は肺や内臓にまで達した。

『軒太郎さん……』

耳鳴りがする。鼓膜が破れたのだらう。

それも直ぐに治まる。もう再生したのだらう。

それよりも軒太郎の身が心配だった。

自分は呪いの再生能力があるから心配ない。

だが、軒太郎は生身だ。

あの黒コートが耐火性と衝撃に強い防具だといえ、五体の自爆攻撃を中央で受けたのだ。流石に心配に成る。

周囲は硝煙が煙幕の如く立ち込め視界を奪っていた。その灰色の煙のなかに、ユラリと人影が動く。

「これで討ち取ったとは思っちゃいないぜ」

通路に隠れていた狩人が、やっと謁見室内に足を踏み入れた。

その前に集結を始めるゴーレムのパーツたち。肩車をするように積み重なって合体を繰り返して行く。

やがて赤い岩巨人と化す。頭が謁見室の天井に当りそうだった。

「レッドゴーレム。ドガンとぶち込んでやれ！」

赤い岩巨人が大きな弓と引き丸太のような矢を構えた。

矢の側面には、多くの札が貼り付けてある。

城門突破の際に、空から援護しようとして飛んで来た何十体もの鉄球やシガニを、たった一撃で撃墜した、あの魔矢である。

レッドゴーレムが弩級の弓を放としているなか、硝煙が薄らぎ軒太郎の姿が現れた。

昂輝たちに背を向け、狩人たちの方を向いている。

「やっぱり生きてたか、化け物が……」

呟く狩人。

しかし、ゴーレムの後ろで狩人は、嫌らしい笑みを作っていた。

「だが、まったく効いて無い訳でもないか」

黒いテングロンハットで表情を隠す軒太郎は、猫背の体制で両手をダラリと下げている。

その両腕には、幾本かの木片や金属片が痛々しく突き刺さっている。

「流石に至近距離での爆破に挟まれれば、霊毛コートでも耐えられんか……」

脇腹にも木片が一本刺さっていた。

「こんなカスに痛手を喰らうとは、俺も落ちたもんだな」

テングロンハットの鍔陰から軒太郎が睨みつける。

「そのデカぶつで、今度は射抜く積りか」

「おうよ、射抜くどころか木っ端微塵だぜ。降参するなら命は助けてやる。その代わり、後ろの猫娘を頂くぜ。その人のかーさんってやつから頼まれていてね」

「かーさん……？」

メニヤースが首を傾げた。

「最初は誘拐する積りだったが、思ったよりも作戦が順調に進んだんでプラン変更だ。堂々と身柄を確保することにした」

「事が順調だあ」

忌々しさが伝わる。

「そつだよ。あの坂東や高岡が玉とれなかった相手を俺一人で、ここまで追い込んでるんだ。それを、それをだ、ここは譲って女の身柄だけで許してやるつてんだ。俺に感謝してもらいたいぐらいなんだぜ」

「なんでお前が坂東を知ってる。……誰だ、お前？」

言い終わると後ろを振り返る軒太郎。昂輝に意見を求めているが、昂輝も知らないと言首を左右に振った。

「おいおい、誰つて、俺だよ。この世界だと本名を名乗れないが、むら、俺、俺だよ。覚えてないのか？」

「昂輝君、覚えているか？」

『覚えているも覚えていないも、そんな人は知りません。僕はこの町に来てまだ四日目ですか』

「ひでー、こいつら完全に俺のこと忘れてやがる……」

奇襲誘拐 (四)

ヴァルハラ探偵事務所襲撃事件。

その火蓋を切った一発の弾丸。

窓際に立つ昂輝の頭部を狙撃したのが、この男だった。

仲間内でガンマンとも呼ばれている拳銃マニア。極道に落ちる前は、自衛隊に勤めていた男だ。

ただ拳銃を撃ちたいと懇願して自衛隊に入隊した男は、当然ながら天職とならず数年で退職してしまう。

だが、拳銃を撃ちたい。人を撃ちたいと言う願いは諦めきれず、裏サイトを渡りに渡り闇ルートで拳銃を購入し始める。

そして、数度にわたり拳銃を購入している間に、売人と仲が良くなりヤクザ構成員となった。

しかし、徐々にヤクザ社会でつま弾きになって行く。

理由は、人を撃ちたいと願う行動が、過激すぎたからだ。

もしも日本のヤクザたちが、Vシネマのようにバイオレンスな連中ばかりだったら良かったのだが、現実はそのままで過激ではない。

ヤクザとて、穏便に金が稼げれば問題がないのだろう。

縄張り争いで斬った張ったは、過去の話だ。

現代ヤクザには、一流大学を卒業した幹部も少なくない。
今や任侠道とは、ビジネスなのだ。

故に神田のような危険な思想を持っている人物は、当然ながら邪魔になる。

だが、そのような神田にも転機が訪れた。それが今回の事件である。
ヴァルハラ探偵事務所襲撃から始まったこの事件だが、病院に運ばれてから良かった。

謎の女医に話を持ちかけられた時は、信じもしなかったが、古城に連れてこられてからは考えを改める。

ここが人生の転機。チャンスと察する。

それでも不満はあった。

ここには拳銃が無い。

夢の世界では、拳銃を想像できないのだ。それがルールらしい。

しかし、弓は使える。拳銃の無い時代は、弓を使って狩りをしていったのだ。少し原始的に戻っただけだ。

それに爆発する札もあれば、ビームを出す術もある。ゴーレムもある。拳銃の代わりになる玩具は揃っていた。

これは、原始時代には無い玩具だ。使えるし面白い。

だからこの世界が気に入っていた。ここでなら楽しく狩りが出来る。

故に、戦果を挙げなくては成らない。公爵に將軍、それに賢者の野郎に氣に入られて完璧な仲間として迎え入れなければ成らない。

今は、明らかに試されている。

まだ完全に信用もされていない。

だから、作戦事態の全貌を知らされていない。

あの三人と同格に扱われなくても、仲間としての信用を獲得しなくては成らない。

そこが、肝心である。

信用有る完璧な仲間と認められれば、きっと現実では手に入れられない程の報酬が手に入るだろう。

それは、金ではない。

力だ。

弓よりも強い力。

銃よりも強い力。

想像を超える摩訶不思議な力だ。

それが欲しいのだ。

その為にも。

「ちっ、まあいい。俺のことを覚えてなかるうが、覚えていようが、

俺のやるべき事はただ一つ」

すべきこと理解している。

信用とは、実績の積み重ね。小さな実績を積み重ねることだ。

昔、銃の売人に幾度となく近づき、信用を獲得したように、今回も同じことを繰り返すだけである。

軒太郎が問う。

「ただ一つとは？」

黒コートの袖から血がダラダラと流れ落ちるが、軒太郎は平然と振舞う。

出血の量からして傷は深そうであった。木片が杭の如く両腕に突き切っているのだ、かなり戦況に影響するだろう。

問いに答える狩人。

「ここでテメーら全員を、ぶち殺す。そのねーちゃん以外はなあ」

『誘拐じゃなかったけ？』

「プランは変更されたんだよ」

狩人が、目を剥いて笑う。

本当に皆殺しを狙っている殺人鬼の表情であった。殺意と狂気の二つが、オーラと成って揺れている。

赤岩の巨人が、巨大な弓を更に引いた。弓と蔓が軋んで脅迫的な音を鳴らす。

「俺のレットゴーレムが放つ弩級の一撃は、絶対に躲せないぜ！」

躲せる訳が無い。

距離が近いからでは無い。

弩級の矢が、巨大だからでは無い。

躲せないのは、隙間なく閃光の矢を無数放つからだ。

弩級の弓には、びっしりと閃光魔弾の札が巻きつけられている。それが無数に飛び散る。

しかも目標物のみを狙ってだ。

攻撃対象外と設定されたメニヤースだけでは被害を及ばさない。

ホーミング機能。なんとも便利な武器だった。

絶対に外さない魔弾。

狩人の理想的な玩具である。

テングロンハットの唾を摘んだ軒太郎が、視線を隠しながら言う。

「躲す必要は、皆無だ」

顔は見えないが自信有りげに述べる軒太郎。

その足元で黒い影が生き物のように動き出した。波打つ黒影が大きく広がりながら前に伸びて行く。

「じゃあ、どうするよ、にーちゃん!？」

「決まっているだろう」

軒太郎が傷付いた右腕を上げて天に向ける。
そして、ゆっくりと振り下ろしながら狩人を指差すと、力強く言った。

「正面から、叩き潰す！」

言葉に合わせて広がった黒影から何かが浮上を始めた。

「何か出てきたー！ 大きいニヤア！」

浮上してくる大物に皆が注目する。

それは、巨大な鉄巨人。

「こりゃあ……、まさかゴーレムか……」

『あの影には、あんなサイズの物まで入るのか……』

皆が驚いている間に、人型の巨人が全貌を露にする。

岩でなく明らかに鉄で出来た概観は、八十年代の超合金ロボットを連想させる四角いボディー。

全身が緑である。

胴体に手足、頭部までもが四角い。

その四角い頭には、牛の角に似た物が、左右の耳の辺りから三日月

のように生えていた。

重量感だけならば、狩人のレッドゴーレムより多く見えた。
超ヘビー級である。

「けっ、何かと思えばゴーレムかよ。目には目を、歯には歯を、ゴーレムにはゴーレムってか。でけー口叩いたわりには、在り来たりだな。ゴーレム対決でもやりたいのか？」

凡俗と揶揄する狩人を無視して軒太郎は、懐に手を入れ銀色の拳銃を抜く。

M1911コルトガバメントである。

再び拳銃の姿を見た狩人が、素早くレッドゴーレムの陰に隠れた。

「ゴーレム対決？ 何を馬鹿なことを言っている。ゴーレム同士で戦う訳がなかるう。

俺は美藤傀儡とは違う。人形ごっここの趣味持ち合わせていない。俺が作る物は、俺が影に忍ばせる物は、いつだって武具のみだ」

そう言いながら軒太郎もゴーレムの後方に回り込む。

昂輝は思う。

確かにそうだ。

軒太郎は、妖怪変化の死体から武器を作り出し、その武具で戦うのが戦法。

否。

戦法を通り越して、趣味の範疇だろう。

ならばこそ、あのグリーンゴーレムは武器の筈。武器ならば、あのゴーレムを使って戦うは筈だ。

なのにな。

軒太郎は、ゴーレム同士で戦わないと言っている。ならば、どう戦うのだろう。疑問が残る。

「まあ、関係無いぜ。テメーがどう言おうが俺はお前らをぶっ殺して、その女を連れて行く。それだけだ」

そうである。

レッドゴーレムが放つクラスターアローは、例えゴーレムの壁が登場したところで状況は変わらない。

盾には使えない。ホーミング機能の為、閃光の矢が回りこんで来る。結局は、蜂の巣になる。

「そのゴーレムごと穴だらけにしてやるぜ！」

「だからな、これはゴーレムじゃない」

コルトガバメントの安全装置を外した軒太郎が、グリーンゴーレムの背中に銃口を向けた。

「ゴーレムじゃあなければ、なんだって言うんだ、あー。スーパー戦隊の合体ロボかあ」

「だから、ロボットでもねえよ」

『ロボットじゃない？』

「そもそも人型である理由すらない」

「人型じゃあなくていいとニヤア」

メニヤースも不思議そうな顔で首を傾げる。

「これは、立派な武器だ。兵器なんだよ」

そう言いながら軒太郎が、銃口をゴーレムの背中に押し当てる。すると銃口が、カチャリと音を立てて突き刺さった。

ガタガタと揺れだすグリーンゴーレム。

「ん……、何が始まる……」

箱型のボディであるグリーンゴーレムの正面部分が、次々と蓋を開けたように開きだした。

「おいおい……、マジかよ……」

様子を窺っていた狩人の顔色が青ざめて行く。しかし、ゴーレムの後方から見ている昂輝やメニヤースたちには、何が起きているか分らなかった。

グリーンゴーレムの正面から見た状況は、胸や腹が観音開きにオー

ブンして、更に手足の部分も外壁が開いていた。

開いた中から見えるグリーンゴーレムの内部。

手足の部分からは複数の銃口が何百と覗き見え、胸や腹の部分からは、大小様々のミサイルが頭を見せていた。

「それ……ゴーレムじゃあねえーじゃんか……」

「だから言っているだろ、これはゴーレムじゃあないし、ましてやロボットでもない。これは、武器庫だ」

「ぶ、武器庫……」

「しかも武器庫内からの一斉発射一斉発砲可能なシステム設備を備えている。

それ即ち、たった一人の人間が、引き金ひとつで百以上の集中攻撃が可能な武器である。

これは、立派な、俺自作の兵器だ。

武器の名は、マグナギガス。

システムの名は、エンド・オブ・ザ・ワールド！」

危機を感じ取る狩人。

明らかに敵の方が、火力で勝っているのが分った。

しかも圧倒的に……。

「やべー！ 撃って！ レッドゴーレム！」

狩人の命令にレッドゴーレムが弩級の矢を放つ。

軒太郎もグリーンゴーレムの背中に接続させたコルトガバメントの引き金引いた。

弩級の矢が飛ぶと同時に複数の発射発砲音が轟いた。

弾丸やミサイルの数々が一瞬で弩級の矢を飲み込むと、続いてレツドゴーレムまで飲み込んだ。

謁見室内が轟きの振動に激しく揺れて、爆音と爆炎に包み込まれる。

『くう……』

「ニヤアアアア！」

昂輝が身を被せて憑き姫とメニヤースを庇う。

狩人がゴーレムごと爆炎に飲まれて行く。

それでも攻撃は止まらない。さらに謁見室の壁すら破壊して進んで行った。

まさに世界の終わりのような攻撃だった。

撤退

城内が激しく揺れて波打つ。

均等に組まれた岩のブロックがずれて天井や壁に隙間を作ると、パラパラと埃雑じりの屑を降らせた。

悪夢城の壁を内側から次々と破壊して貫いて行く弾丸弾頭の数々が、最後の壁を吹き飛ばして大穴を開ける。

城外に開かれた穴から破壊目標を失った弾頭弾丸が、横向きに打ち上げられた花火のように飛んで行く。

轟音。

「あれは、若の魔導ミサイルじゃあねえか？」

「ああ、間違い無いっすね。ありゃ、若先生の大技、エンド・オブ・ザ・ワールドですね」

「ミ、ミサイルだと……」

極道コンビとお砂、それに賢者の一行が大きな窓から外を覗き見ると、下の階の壁を突き破った弾丸弾頭の数々が、当ても無く飛んで行く光景が見えた。

「この世界ではミサイルどころが、拳銃の一つも想像製作できない筈だ。それなのに何故！」

赤股におぶられた賢者が驚きの表情で訊くが、ヴァルハラ探偵のエンジニアント三人は、それを無視して会話を進める。

「てことは、ワシらは若を追い抜いて、上の階まで進みすぎたようじゃな」

「そのようですね、功風先生。とりあえずは合流が目的なので、下に引き返しますか？」

「そうだな、お砂。ここは一先ずも戻るとするか」

そう言うと三人は、来た道を引き返す。

自分の足で歩いていない賢者は、ただ従い連れられるだけであった。無視されたのがショックだったの、若干すねた様子である。

赤股が笑いながら言う。

「若先生も、相当イラついてたんですね」

「だろうなあ。あの緑牛を使うぐらいだ、かなりの糞野郎と戦ってたんじゃないのか」

功風老も、笑いながら応えた。

「何せエンド・オブ・ザ・ワールドに使用されているミサイルも拳銃も、すべて妖怪変化の死体から作り上げた魔具。それを一瞬で数百もぶっぱなすんですからね、相当のコストが掛かっている筈ですよ」

「強敵を打ちのめすだけならば、もっと強力でコストの低い武器が

幾らでもある。それをわざわざ派手にぶつ殺すんだ、ただのストレス解消的攻撃だわな」

軒太郎の噂を語る極道コンビは、随分と機嫌が良さそうだった。

功風老は四角い顎を撫でながら厭らしく微笑み、赤股はグラサンの下で両目を三日月形に湾曲させている。

おそらく軒太郎の攻撃を正面から喰らった狩人は、肉片の一つも残さず木っ端微塵になったのだろう。

惨たらしい最後である。

極道コンビは、何処の誰が軒太郎の逆鱗に触れたかは解らないが、おそらくのところ、エンド・オブ・ザ・ワールドを喰らうだけの下種だと理解できていたのだろう。

軒太郎が狩人に対して、そこまでの怒りを感じた理由は幾つかあった。

一つ目は、奇襲。二つ目は、捨て駒の自爆。三つ目は、女を浚おうとした事。四つ目は、一度たりとも己が前に出ずに戦っていた事である。

この四つの総数が、軒太郎の怒りゲージをマックスまで引き上げた。

まあ、何より怒りに油を注いだのは、この四つよりも、五つ目の自分が負傷した事であるが。

コツコツと蓄えた物を、豪快なまでにいっきに使う。一見ただの無

駄使いに窺えるが、これがなんとも気持ちが良い。

無駄使いは、その量が多ければ多いほど爽快感が高まる。

ストレスが一気に解消される。

エンド・オブ・ザ・ワールドを撃ち終えた軒太郎が、武器庫であるマグナギガスを影の中に沈めながら溜息を付いた。

「ふう〜、久々にやってしまった。すっきりするが、後悔も残るな。ストレスは解消されたが、虚しさが残ってしまう……」

軒太郎の言葉が終わる頃には、グリーンゴーレムの姿は完全に影の中に消えていた。

踵を返す軒太郎が、昂輝たちに言う。

「帰るぞ。極道コンビやお砂姉さんと合流を目指す」

『そんなことよりも軒太郎さん、傷は大丈夫ですか？』

「そうニヤア、血が沢山出ているニヤア！」

二人に促され袖から流れ出る鮮血を見た軒太郎が、二度目の溜息を溢してから答える。

「大丈夫だ。このぐらいの傷ならば、コートの魔力で一日か二日で完治する」

『その黒コートには、治癒機能まで付いているのですか……』

「万能だろう。俺が作った魔具の中でも自信作の一つだからな」

昂輝とメニヤースの二人が、それいいな、と言った目付きで黒コートを見ていた。

「そんな事よりも、早く撤退するぞ。何か嫌な予感がする……」

『嫌な予感……ですか？』

狼の顔が不安に濁る。

しかし軒太郎は、何も答えず謁見室を出て行った。その後ろを慌ててメニヤースが追った。

昂輝は抱える憑き姫の寝顔を一度だけ見下ろしてから軒太郎たちの後を追う。

二人の公爵（一）

母が歌手だったことは聞いていた。

綺麗で、優しく、頑張り屋で、思いやりのある女性だとも聞いていた。

母が歌っていた歌も聴いたことがある。

母のレコードを父が持っていたのだ。それを聴かされたことがある。演歌だった。

とても美しい歌声だったことを、子供ながらに強く思った。

レコードのジャケットには、着物姿の母が笑顔で佇んでいた。

それだけが母の思い出である。

私を産んで直ぐに亡くなったと聞かされていた。

私は養子として東和の家に迎え入れられたが、歓迎したものは誰も居なかった。

皆が私を毛嫌いした。

義理の母も、義理の兄も、義理の姉も、私を忌み嫌った。

使用人たちすらも、義理の母を恐れて私を避けた。必要以上に私とは言葉を交わさなかった。

いつも孤独だった。

自分が妾の子であることを聞かされていたから、幼少時代から事情は理解できていた。本来ならば、ここに居てはいけない存在だとも。

だから屋敷内をあまりで歩くこともなく、ただただ自室に閉じこもって勉強に励んだ。

それ以外に、することが思いつかなかった。

そのかいもあつてか大学にも入れた。アメリカの有名な大学である。

そこで美藤傀儡と名乗る女性と出会った。人形遣いの魔導士である。

第一印象は、ただ怪しいだけの女だった。

彼女は何故か、私の研究室に、度々も訪ねてきた。

彼女の持ち込む話は、どれもこれも眉唾ものばかりであった。

そのうちに、得体の知れない物を持ち込み始める。

召使の如く動く人型人形。ピン詰めの生きた妖精。表情を変える油絵の美女。喋る本。マンドラゴラと呼ばれる植物。

すべてが童話に出てくるような物ばかりであったが、手品のトリックとして片付けられない物ばかりを見せられた。

そして、彼女は自分に仲間になれと言うのだ。

私に、ホムンクルスの研究をしると言うのだ。

私は、即決で引き受けた。

現代化学からは考えられない技術を元に作られた旧世界の呪い（まじない）。錬金術の産物。人造人間の原点。

それを自分に研究させ、完成させると言うのだ。

魅力的だった。

今まで自分が学んできたことが、すべて覆せるような気がしたからだ。

会ったこともない亡き母。厳格な父。私を忌み嫌う義理の家族たち。己で己の人生を否定し続けた過去。

すべてが。

すべてが塗り替えられるような気がした。

そして、計画は年月を費やしここまで来た。

まさか自分が、中世の軍隊を率いて戦場に立つとは思ひもしなかった。

美藤傀儡。双葉堅信。鬼頭順平。それにあのヤクザふたり。仲間と呼べる存在ではない。同盟に近い。その程度の縁だ。

我々の目的は、この悪夢城の占拠。三枚の契約書を手に入れること。
このステップは、必ずクリアしなくてはならないミッション。

真の目的は、そこから始まる。この向こうに在る。

まだ、スタート地点に立ったばかりだ。

なのに……。

「忌々しい闇だな……」

眼前を妨げる闇の壁が、廊下を塞いでいる。

目的地は、この向こう。僅か先の書斎。

ナイトメア公爵の書斎。

「何故、それ以上進まない？」

突然の質問に公爵と親衛隊が振り返る。

後ろには巨大な蝙蝠の羽を広げた金髪の男が立っていた。

「貴様が、ナイトメア公爵だな」

初見で解った。

「如何にも、私が当主のナイトメアだ」

「二代目の悪魔か」

黒騎士たちが二つに分かれて道を開ける。
二人の公爵が、直線状で向かい合う。

「貴様らが、これ以上進まない理由は理解できているぞ」

「ほう」

「この世界は、我が一族の創造の結晶。我らナイトメア一族が招き入れた者意外は、この世界を認知できない。裏口から浸入意外はな」

「流石は当主。仕組みを良く理解している」

「お前らが裏口から侵入しなかった理由は、一つだ。この世界から何かを持ち出したいからだ。裏口から入った者は、紙切れ一枚も、この世界から持ち出せない」

「そうだ。だから正面から攻めた」

「しかし、正面から入るには、我が一族の招きが必要。それ無しには、この世界を見ることすら出来ない。そこに広がるのは、ただの闇だ」

「その通り。だから私は作った。自分でね。そして、自分で作った夢の世界と、この夢の世界を繋げたのだよ」

「でも、見えないんだろ。この先が」

ナイトメア公爵が、嫌らしく微笑む。

「我ら一族の世界を、誰かの記憶にたよって摸倣し、映像化した物を重ね上げている訳だろ」

「そこまで見抜いたか。満更の馬鹿ってわけでもないようだな」

「人のことを愚弄している場合か、お前は。見えないんだろ、この先が。目的地がよ」

「御名答」

「残念だったな。うる覚えの記憶を頼りにした末路だ。記憶の持ち主でなく、愚かな自分を怨め」

「問題は無い。直ぐに解決できる。その前に、お前を殺してやる。遅かれ早かれ、成さねば成らない目的の一つでね」

「上等だ。虫けら以下の人間。人知を超越した魔族の力、たっぷり見せてやる」

「ぬかせ、下族。何が魔族だ。貴様ら一族が、元は人間だってことぐらい調べが付いている」

「!?!」

「顔色が変わったな、魔族」

「貴様、その事を何処で……」

「美藤傀儡。知っているだろう」

「あの女か……。魔女めが……」

ナイトメア公爵の顔から余裕が消えると、背中から生えた蝙蝠の羽に無数の瞳が見開かれる。

「魔眼か」

赤く光る羽の瞳。

「効かない。無駄だ。その術の対策は、とっくに打ってある。美藤傀儡と仲間の三人が、昔、その術に苦しめられたそうじゃないか。キミの父が使った魔眼の術にだ」

「同じ手は、二度も通じないか……」

「人間は、学習する生き物でな。日々、進化を続けている。貴様ら魔族のように、夢の世界で、のうのうと生きては居ないんでね」

「糞野郎が……」

強く拳を握り締めたナイトメア公爵が、愚痴を零す。

黒騎士たちに、公爵が一言だけ指示を出す。

「殺せ」

二人の黒騎士が、腰にぶら下げた剣を引き抜くと、ナイトメア公爵の前で振り上げた。

「魔術の通じない悪魔なんぞ、人以下。虫けらと呼んだ人間以下だ」
そう言うと踵を返す公爵。闇の壁を再び見上げる。

黒騎士ふたりが、ナイトメア公爵に剣を振り下ろした。

二人の公爵（二）

ゴンツ、ガンツ……ドサ、ドザ。

「ん？」

背を向けた公爵の耳に、不自然な音が届く。

人が倒れる音が二度したのだ。しかも甲冑を着込んだ重い音だった。ゆっくりと振り返る公爵の目に、無様に倒れる黒騎士ふたりの姿が映った。

「なんだと……」

両膝を石畳に付け、お尻を突き出すように前のめりに倒れている黒騎士たち。二人とも同じポーズである。

そして、ナイトメア公爵が立っていた場所には二本の剣が突き刺さっており、その一歩後ろに、無傷のナイトメア公爵が不敵な笑みで立っていた。

「詠唱は聴こえなかった。魔力も感じなかった……」

「当然だ。魔術も魔力も使っていないからな」

「ならば」

公爵は言うど、両手でチヨキを作り蟹のように構える。それから手

首だけを曲げて四指でナイトメア公爵を指差した。

その合図に合わせて行動を起こす四人の黒騎士。左右に分かれた列から二人ずつが剣を抜くと飛び掛る。

「二人で駄目なら四人か。まだ試すか」

同時に斬りかかる四人の刃が、様々な剣筋で襲い掛かる。

しかし、ナイトメア公爵は焦りも見せない。冷静を通り越した余裕の笑みで剣を躲して行った。

次々と剣を躲すナイトメア公爵の動きは、せせらぎを流れる木の葉のようであった。

まるで蝙蝠の羽を生やした蝶である。

「そのフットワーク……。格闘技。ボクシングか？」

だが、拳は構えていない。両腕をダラリと下げてユラユラと躲す。

「その質問に、我が自らの行動で答えてしんぜよう」

反撃に転ずるナイトメア公爵。右足が地面から跳ね上がる。

まるで鞭。

柔軟に撓った前蹴りが、黒騎士の顎を蹴り上げると、瞬時に地面へと戻る。

黒騎士が被っていたヘルムだけが飛んで行き、三メートル以上ある

天井に激突してから落ちて来る。

蹴られた黒騎士は、フラリとよるめくと膝から崩れ落ち、前に伸ばされた二人と同じポーズで倒れこんだ。

「キツク？」

ボクシングではない。

「なるほど。魔術だけでなく、空手も使えるのか。否、中国拳法か。
。悪魔を侮っていたよ」

公爵が関心する間にも、ナイトメア公爵の反撃が続く。

次々と地面から跳ね上がるナイトメア公爵の爪先が、残りの三人にも炸裂する。

一人の顎、一人の鳩尾、一人の股間にヒットする。
スピーディーだが重い脚激に三人が、順々と膝から崩れて倒れこむ。
無様なポーズが増えて行く。

お尻を突き上げ床にキスをする六人の黒騎士たちは、ピクリとも動かない。

完全にKOされている。

「一撃か。思った以上の腕前だな」

「時に悪魔は、人間にしてやられる事がある。それが策略であったり、ただの悪知恵だったりとするのだが。一番の屈辱は、腕力で負

かされることだ」

「それで格闘技を、ですか？」

「魔力を封じられれば、悪魔とて非力な一人。そう思われるのが、たまらなく屈辱でな」

「悪魔も大変ですな。ですが、この状況をどうやって脱出しますか？」

公爵が周りを見渡す。そこに映るは四十人の黒騎士。公爵の木偶たちである。

四十対一。

例えナイトメア公爵の格闘技が強くても、この不利は変わらない。

「脱出だと？ 戯けが。我は、お前ら全員を退治しにきたのだぞ。引く気は微塵もないわ」

「強気な」

公爵の視線が鋭く引き締まる。

そして、四十人の黒騎士たちが、全員揃って剣を抜いた。

鞘から切っ先が引き抜かれる殺伐とした雑音が広い廊下に鳴り響く。

「一対四十。くだらん。人間が作りし木偶の騎士なんぞ、物の数にも入らんわ。纏めて退治してやるぜ」

「
か
か
れ
！」

二人の公爵 (三)

公爵の命令に合わせて一斉に斬りかかる四十の黒騎士たち。しかし今度は、それよりも一步早くナイトメア公爵前に出た。

前ダツシユ。

「ひゃっほーい！」

ナイトメア公爵の右足が横から振り上がる。

上段回し蹴り。

また鞭の如く撓る蹴りだった。

爪先が速度に霞んで消えると、黒騎士の頭を蹴りつける。脛が左頭部に減り込みヘルムの形が歪に変わる。

「回れ！」

回った。

蹴られた黒騎士の体躯が、臍を中心に大回転する。

人間風車である。

そして頭から派手に落ちて倒れこむ。

なんとも豪快な一撃だったが、恐怖と言う感情をインプットされていない黒騎士たちは、それでも怯まず前に進む。

迎え撃つナイトメア公爵が、体を反転させると背を見せた状態から後ろ蹴りを繰り出す。

突風を孕みながら呻る後ろ中段廻し蹴りが、黒騎士の腹部に減り込むと甲冑を纏った体軀を吹き飛ばす。

「飛んでけ〜」

飛ぶ黒騎士。後ろから行進していた数体の黒騎士たちをボーリングのピンのように跳ね飛ばし壁に激突する。

「続いて、は！」

股関節を柔軟に広げて左足を天高く振り上げたナイトメア公爵が、高角度からの踵落としを狙う。

「ネリチャギーーーー！」

踵落としが黒騎士の脳天に炸裂すると、ヘルムと一緒に首が沈む。

更にナイトメア公爵は、踵を引つ掛けたまま黒騎士の頭部を地面目掛けて引き落とすと、顔面を叩き付けるように後頭部を踏みつけた。

続いてナイトメア公爵は、全身をツイストさせながら姿勢を低くする。その体制から地面ギリギリの高さで右足を伸ばし蹴りを振り回した。

砂塵を舞い上げ繰り出される水面蹴り。

滑る一脚が、作物を刈り取る大鎌の如く黒騎士たちの足を次々に薙ぎ払った。

舞う三人の黒騎士。

「派手だな……」

感心するように呟くは公爵。まだ、表情に余裕が見られる。

三人の黒騎士たちが回転しながら宙を舞うと、横頭部から床に落ちた。

ゴキ、ゴギイ、ボギツ。

三者の首から鈍い音が鳴り響く。

「とっつー！」

ジャンプ。

倒れこんだ黒騎士たちを飛び越えたナイトメア公爵が、複眼に飾られた蝙蝠の翼で羽ばたき、空中から足刀を連射した。

蹴りの空爆である。

次々と顔面を脚激で射抜かれていく黒騎士たち。

鼻が潰れて鮮血が飛び散り、顎が碎けて歯も飛び散る。

バタバタと崩れ落ちる黒騎士たちの顔面は、ハンマーで殴られたように陥没していた。

「強い。当主自らが最強とは……」

城外城内で出くわした多くの敵。

鉄球のヤシガニ、巨大植物、鳩の怪人、リビングアーマー、ガーゴイル、そして分裂する執事。

様々の敵と出くわしたが、すべて友軍によって排除できた。分裂する執事は、かなりの強敵だったが、それでも黒騎士たちで排除できた。

自分が作った黒騎士の木偶は、間違いなく最強の木偶。

一体一体が、賢者のゴーレムよりも強いと評価していた。

だが、その黒騎士たちをナイトメア公爵は、軽々と蹴り倒して行く。

この現実から察して解ることは、ただ一つ。

「やばいな……。想像以上にナイトメア公爵が、……強い。困ったな」

公爵がナイトメア公爵の力量を推測している間も黒騎士たちが倒されて行く。

黒騎士たちは反撃どころではなかった。

翼を持ったナイトメア公爵の攻撃が、上空から一方的に降ってくる。

「人型である以上、上空からの攻撃に弱い。だろー？」

「確かに、防ぐも躲すも難しいか」

「蹴りはいい、蹴り技いい！ 凄くいいだろう！」

蹴りながら興奮度を上昇させるナイトメア公爵が、饒舌に語り続ける。

「数多くある武術の中には、蹴り技が複数ある。空手、キックボクシング、ムエタイ、中国拳法、テコンドー。それらの蹴りと呼べる蹴り技だけを寄せ集めて作り上げた我オリジナルの拳法。否。脚法！」

空中から地面に降りたナイトメア公爵は、尚も語りながら多彩な蹴り技を繰り出し続ける。

「愉快だろう。痛快だろう。悪魔貴族である我が下族の民を足蹴しながら打ち倒して行く。我は可憐だが、撃たれる下郎は惨めで無様だ。種の違い、格の違い、気高さが違う。故に、これほど愉快な戦い方はないだろう」

豪快な後ろ回し蹴り。

それが最後の一振りとなり、踵で頭を蹴られた黒騎士が壁に激突して崩れ落ちる。

壊滅。

今のが最後の一人であった。

黒騎士たち四十騎が壊滅するのに、十分と掛からなかった。

大きく蝙蝠の翼を広げるナイトメア公爵が凜々しく立ちながら上半身裸の胸元で腕を組む。顎を突き出しながら言う。

「どうするよ、偽公爵様。頼もしかった護衛の騎士が居なくなっただぜ」

「確かに困った。彼ら黒騎士たちを作り上げるのに、それなりの時間を費やしたのだがね……。まさかここまで子供扱いされるとは思わなかったよ」

困ったと述べる公爵だったが、その表情に偽りが濃くも深く映っていた。

まだ何かある。

間違いないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349h/>

魂/骸

2011年12月25日01時50分発行